現代日本文學全集



集集語記道集集凡んら枕砂具彼る他葉日輪船々子グ

萩原蘿月校（3）
萩原蘿月校訂（近刊）
久松潜一校訂（近刊）
宮地直一校訂（近刊）
萩原蘿月校訂（3）
島崎藤村編（1）
島崎藤村編（1）
二葉亭主人著（1）
夏目漱石著（2）
夏目漱石著（2）
夏目漱石著（3）
石川啄木著（2）
石川啄木著（1）
島崎藤村著（2）
北原白秋著（2）
佐藤春夫著（1）
横光利一著（1）
葉山嘉樹著（1）
葉山嘉樹著（2）
バアネット著（2）
若松賤子譯（ジャック、ロンドン著）
堺利彦譯（3）

改造社　芝區下町
振替東京二〇四八

婦人の地
哀
ト論文
ル實際知
工業
商業
帝國
說要
經濟
化小
本
ル（下巻
ル（上巻
國
實
唯物

正宗白鳥集

杉浦非水装幀

正宗白鳥集

改造社版



正宗白鳥氏の近影（洋行直前帝國ホテルにて）

「正宗白鳥集」目次

The Imperial Hotel
of Tokyo

自作を読直して回顧すると、人間は、少くも文学芸術の方面では、進歩発展は甚だ遅々たるもので、修養の効果の微弱であることが察せられる。自分について感じるばかりでなく、他の作家についてもそう感ぜられないことはない。

正宗白鳥

塵埃

「原稿出切り」と二面の編輯者は叫んで、兩手を伸し息を吐き、やがてゆらりゆらりと、ストーブの側へ寄つた。炎々たる火焰の惡どく暑くるしいストーブを煙で取卷いて、破れ椅子に坐してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの。議會の問題や情夫殺しの消息、明日の雜報の註釋說明批評で賑つてゐる。

「築島君、その女は美人かね」編輯の岸上が一座の中へ割り込んで問を發した。

「實際いゝ女ですよ、靑ざめて沈んでる所は可憐です、僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるもの宜しく刑一等を減ずべしだ」三面の外勤築島は、煤けた顏に愛嬌笑ひをして表情的に云ふ。

「そんなのろい男は、殺されたくても、女の方で御免蒙るさ」

「先づ何であらうと、僕は天命を保つて、十分に面白い目を送りたい、いくら色男になつても、出刃庖丁でずばりとやられちや駄目だからね」硬派の大澤が立ちかゝつた。

「安心し給へ、見渡したところ、一座中そんな心配のありさうな人はないから。まあお互ひに銀座のほこりを每日吸つて、ほこりの中の黴菌に生血が吸はれつちまふまで生きてるのさ、つまり天壽を保つ者は濟し崩しに枯れて行くんだよ。しかしね、稚い木が風に折られてるのを見ると、多少風情があるが、蟲に喰はれた枯木を見ると淺間しくなる。こんな枯木的人間が到る處にあるぢやないか」

「岸上流の哲學か」と大澤は時計を見て、緣の剝げた山高を被り、「どりや枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行かうか」と、戶口へ行つた。

「枯木でも風が當りや鳴るんだ、大枝なんか、つまり悲鳴を揚げてるのさ」

一座はそれ〴〵自分の席へ歸つて、編輯局は暫らく靜かになつた。予は北側の机で、窓硝子の壞れから吹き込む銳い風に、脊筋を揉まれながら、小野道吉君と差向ひで、校正に從事して局外から編輯の光景を窺つてゐる。南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取りかゝる迄の糊口のためにと、或人の周旋でこの社の校正掛となつたのだが、何時の間にやら、もう三ケ月になつた。こんな下らない仕事を男子が勤めてゐて濟るものかと思ひながら、詮方なさの一日逃れで、驚天動地の抱負を胸裡に潛め、鐵啞鈴で鍛へた手に禿筆を握つて、死灰の文字をほじくつてゐるのだ。で、校正刷の堆積が一先づ片付くと、予は机に肱を突いて、外ながら外交記者の雜話澤山の太平樂に耳を傾け、あの人達は、每日內閣や議會に出入し、天下の名士と席を同じうして語り、酒酌みかはして懇談する身でありながら、何故立身榮達の道を開かず、ストーブで炙つた食パンを食つて、鬢髮徒らに白霜を加ふるに至つたのであらう。明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であつて、今こそ破れ布子で髮蓬々としてゐるが、明年を思ひ明後年を考へれば、想像の絲は己れを中心に、幾百の豐かなる繪畫や小說を織り出す、艷麗な景も浮べば、勇壯な潮も湧く。今二三日で四十歲になる、五十歲になると云ひながら、腰辨の身を哀れとも感ぜず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の氣が知れぬ。予は若しも四十幾歲まで、この籐椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦卷く編輯局の塵埃を吸

はねばならぬと、天命の定まつてゐるとすれば、未練はない、今日此處で舌を嚙んで死んで見せる。食パンの味ひは一度で澤山だ、三百六十五日晝の辨當にして味ふ必要はあるまい。自分の一生が食パンだとすれば、二三年經驗すれば足つてゐる、何も五十迄も六十迄も食パン生涯を續けるにも及ぶまい。

かく思ひながら小野君を見ると、小野君は雁首のへこんだ眞鍮の煙管で臭い煙草を吸ひながら、社内の騷ぎも耳に入らぬやうに、ぼんやり窓を眺めてゐる。まだ染々話もせぬが、頭が胡麻鹽になるまで三十幾年この社に勤勞してゐるので、この社創立以來社で育ち社で老いた三人の一人であるさうだ。

「どうです、小野さん、今夜はかねての約束を實行して、何處かで一杯やらうぢやありませんか」と予は小聲で云つた。今日は月給日なれば、どうせ一杯やらずにはゐられぬので、一人よりは二人の方が興が多いから、仲間に引込まうとした。小野君はにやり〱笑つて、暫らく考へてゐたが、「さうですねえ、一度だけお附合しませうか、何處か安直な處で」と、やうやく同意らしい返事をする。

やがて編輯員は一人減り二人減り、六時になると、夜勤の津崎が懷手で、のそり〱と入つて來て、肥滿な呑氣な顏を電氣の光にさらし、けたゝましく嚏をして、「畜生、風を引きさうだぞ」と云ひながら、袂から瓶詰を出して、「今夜は一人で忘年會だ、給仕、鰯でも買つて來て呉れ」

「又電報を間違へて睨まれんやうにし給へ」と、岸上は歸り支度で二版の大刷を見ながら云つた。

「なあに勤める所は屹度勤めるさ、これでもね、雪が降らうが、風が吹かうが、子の刻までは關所を預かつて、勤勞無二の僕だからこそ、忝けなくも年末賞與大枚十圓を頂戴したのぢやないか、爲すべきものは忠義だね」と笑ひながらいつたが、急に悄氣て、「しかしね、岸上君、今年は僕もつく〲歲晩の感を起したよ」

「さうか、君の感慨なら、先づ冷酒の飲むべからざる所以か、前借の愼むべき所以ぐらゐだらう」

「いや僕は眞面目に感じたのだ。もう夜勤も二年だが、得た所は、體量が一貫目ばかり衰へて近眼が數度を加へた位だ。實は今日晝寢から起きて考へたね、十兩の恩賜は有難いが、今年になつて、風邪に罹ること七度、下痢をすること三度だよ、何のことはない、肉を殺ぎ血を絞つた結果だと思へば、あの僅かな金に恨がある」

「でも君は肥つてるから、自分で自分の身を食つても食ひでがすらあ、はゝゝ」岸上は靴の音高く階子段を駈け下つた。津崎は今日は珍らしく、不平を並べたい風で、校正の席へ來て、皺くちやの大刷をのばし、目を顰めて點檢せる小野君の側へ立ち、

「小野さん、もう四五日しかありませんね」

「さうですねえ、又一つ歲を取りますよ」

「小野さんは月日を超脫してるから羨ましい、僕も去年までは自分の歲を忘れてゐたんだが、この暮は妙に氣になる」

津崎といふ男、常に給仕を相手に、シャツ一枚になつて相撲を取り、或は冷酒を呷つて都々一を唄つたりするので、社中第一の氣樂者と思つてゐたのに、今夜は魔がさしたやうに哀れつぽいことを云ふのを、予は不思議がつてゐた。

「なあに歲を取るのが氣になる間が結構でさあ」

小野君は氣のない調子であつたが、役目を濟ますと、予を促して、早速社を退いて、銀座の賑かな通へ出た。星は氷のやうに燦いて、風

はなくとも、皮膚の罅間に觸れる空氣は針のやうだが、街上は暮の忙しさを集めて活氣に滿ちてゐる。で、小野君が垢染みた襟巻に首を埋めて、元氣なくしよんぼりと立つてゐるのは、如何にも見すぼらしく、場所違ひの氣味がする。

予は福神漬を買つて、「何處へ行かう」と訊いたが、小野君は頻りに「安直の處」を繰返すのみである。予は京橋附近で飲食したことはないので、牛屋へでも一寸氣臆れがして入りかねる。いつそお馴染の本郷にしようと、電車に乘つた。予は菊坂の豆腐屋の二階を借りて自炊して、電車で通つてゐるが、小野君は小石川諏訪町から徒歩で京橋へ行くので、嵐か大雪でもなければ嘗てこの文明の恩澤に浴したことはないのである。

本郷三丁目の停留場から一町許りして、色の褪せた紺暖簾に「蛇の目鮨」と白く染め出した家がある。狹くはあり、綺麗でもないが、予が自炊の面倒な時に駈け込む、筋向ひの縄暖簾に比べれば疊に坐るだけでも勝つてゐる。殊に此處のみは、滅多に學生に犯されないのが有難い。本郷一面西洋料理といひ、ビヤホールといひ、大學や高等學校の學生が、月末に郵便局から引出した金で、贅をやる處のみだが、此處は暖簾の汚れてるお蔭か、お客は大抵予等と同類で、塵埃の中から搜し出した金を使ふのだ。

予は火鉢を眞中に、小野君と差向ひで坐つて、獨斷で、かき卵、ヌタ、甘煮などを命じた。小野君は乾からびた手の甲を火鉢の上でこすつてゐるが、食パン生涯の結果か、顔に汁氣がなく、目はどんよりして、何處を見てゐるのか分らない。

「僕にはまだ分りませんが、新聞の仕事も思つた程いゝものでもありませんね」と、予は默つてゐるのも氣が詰るから、強ひて話の緒を開いた。

「さうですとも、何をやつてもねえ」と、小野君も言譯丈の返事をして、氣乘りがしない。又二人は默つてゐる。外は俥の掛聲、下駄の音、威勢よく叫ぶ聲、非常の騷ぎであるが、小野君は社に居ると同じく、四面の騷ぎは耳に入らぬやうで、煙草すら吸はない。神經は無くなつたのであらうか感覺は消滅したのであらうか。これではパンとビフテキと、酒と茶との區別もないのであらう、二十年も坐らされたきり、一つ處にぢつとしてゐるのも無理はない。生れて以來、蓆は厭だ、絹布團に坐りたいと、假初にも思つたことはないと見える。

「でも貴方はよく長く社に辛抱してゐますね」

「へゝゝ、まあ仕方がありませんのさ」

女中が霜脹れの手で、膳を突き付けるやうに並べて、銚子からは湯氣が立つてゐる。予が滿滿とついだのを、小野君は一口に飲み干したが、流石にこれにまで無神經ではないと見え、急に人相が變つて來る。二杯三杯と、予もいゝ氣持になつたが、小野君は木彫の像に魂が入つたやうに、筋肉がゆるやかに動き出した。

「貴方は隨分いけるやうですね」

「まあ好きな方ですよ、矢張酒といふ奴あ甘いもんだ」と、餘瀝を舐めて、疊の上に置いた杯を眺め、背を丸くしてぐつたりしてゐる。

「そりや結構だ、私なぞは酒がそんなに甘いつていふ譯ぢやないんだが、獨り身で、外に樂みもないから、仕方なしに飲むんです」

「しかし仕方なしにでも飲める方が、呑みたくても飲めんよりや結構でさあ、はゝゝ、いや全く貴方が羨ましい」

「僕が羨ましいつて云ふんですか」

「私は惡い癖があつてね、酒を飲むと、若い人が羨ましくなつたり、自分の身が哀れつぽくなつて仕様がないんですよ、平生は何の氣なしに聞いたり見たりしたことが、急にむら〳〵と思

出されるんでしてな」

「さうですか、ぢや一つその思出した所を承りたいもんだ」

予はこの木像が何を思つてるかと、一方ならず面白くなつて、矢鱈にお酌をした。

「なあに私達の思つてることはね、皆な下らないことでさあ、よく原稿にある文句だが、碌々として老いるつていふのは先づ私達の事でせう、一體碌々といふ文字は、先生方はどんな意味で遣つてるんか知りませんがね、私は『碌々』の中にはいろんなつらい思ひが打込まれてるんだと獨り定めにしてるんです、碌々として老いるつて、決して呑氣にぼんやりして老いるんぢやないと、ぐたりと垂れてる首を振つたが、急に反身になつて、「はゝゝゝゝ、まあ人間は若い間若い間、さ、差上げませう」と、聲も艶を持つて、今迄の小野君の喉から出たとは思へない。

「貴方は馬鹿に長くお勤めなすつたんだから、新聞生活はよく御存じでせう、これで精勤すれば有望なものですかね」

「さあ、それですよ、全體世の中に職務を忠實に盡してりや、それで自然に立身するつていふことはあるんですかね」

「無論あるでせう、又さうなくちやならん譯だ、僕はまだ世間の經驗に乏しいけれど、よく雜誌なんかの成功談に出てるぢやありませんか」

「はゝ、雜誌や新聞に虚言がないものならばねえ、いや活字の誤植よりや、書く人が腹の中の誤植を正す方がいゝのさ」

「何しろ校正掛は張合のない仕事だ、僕も早くどうかしなくちや」

「さ、私も昔は度々さう思ひましたがね、思つてる間に、ずん／＼月日は立つてしまふ、しかし、まだどうかしようと思つてる間は頼もしいが、私達はどうかなるだらうで日を送るんですよ」

「だがその方が氣樂でいゝかも知れん」

「まあね、初めの間は波の中でぼちや／＼やつてまさあ、それが次第に大きな波が幾度も幾度も押かぶせて來りや、どうせ叶はないから勝手にしろと、流され放題に目を瞑るやうになります、社でも、隨分波が立つんですが、私達のやうに拔手の切れない者は、其度にぎよつとして、手足が萎けて了ふ。萎けた擧句が碌々として老いるんですよ」

窪んだ目縁がほんのりと紅くなつて、眠つてゐた目が燦く。

それから暫らくは無言で、肴をつゝき杯を干してゐた。紺暖簾が寒い風にゆらめいては、隙間から人影が絶えずちらつく。室内には自分等の外に、片隅に外套を著て鳥打帽を被つたまゝ、風呂敷包を側に置いて、忙しさうに飯を食つてる男があつたが、箸を置くと、直ぐ勘定を濟ませて、目をぎよろつかせ、あたふたと出て行つた。

予は勢のよい血汐が全身に漲つて壓へ切れぬやうで、處もかまはず「玉郎酒酣」を歌ふ。小野君はくづれかゝつた膝に兩手をくの字なりに突いて、謠曲を低い聲で謠ふ。節まはしが玄人ぶつてる。

「貴方は謠曲を稽古したのですか」と、予は驚いた。

「四五年前に一寸やつたことがありますよ」

「綽々として餘裕ありですね、貴方にそんな風流の嗜みがあらうとは豫想外だ」

「なあに風流だなんて、そんな氣樂な量見で始めたんぢやないのですよ、私にやね、津崎君のやうに大びらで不平を云ふ元氣はなし、さうかつて、外の人のいやなことは自分にもいやだし、どうかして鬱憤を晴らして、苦勞を忘れようと思つてね、會計の竹山君の後へ喰付いて、素人謠曲の組へ入つたんですよ、長屋で謠曲な

んで、佐野常世の成れの果か、一寸洒落てまさあね、はゝゝゝ」

「ぢやあお能も見にお出でですね」

「どう致して、お能拜見どころの騷ぎですか、まあ聞いて下さい」と小野君は居住ひを直して、「素人組の連中は、今月は梅若、來月は寶生と、見て廻つて色んな批評があります、私はそんな眞似は出來ないから、まあ『能樂』つていふ雜誌を社から貰つて、それを讀むのがせめてもの慰めだつたんでさあ。所がその雜誌さへ社に沒收されることになつて、私の手には落ちぬやうになつたのです。それが社の規則だから仕方がない、社の方ぢや屑屋へ賣つても、一錢か二錢だらうが、私に取つちや、大變な樂みで、月々心待ちにしたんですがね。朝に一城を奪はれ、夕に一國を奪はる、拙い譬だが、弱い者はますます權力を剝がれてしまふんだ。そこで私あ、すつかり斷念しました、謠曲も止めて、夕食でも濟むと茶を飲んで、ころりと横になつて、天井の蜘蛛の巣でも見てるんです」

平生表情に缺けてる小野君の顏も、憂色を帶びて來る。

「たつて雜誌一册位、譯を云へば呉れんこともないでせう」

「いや、それを主張する丈の元氣があればいゝんですがね。何時かも、物價は高くなる、子供は殖える、困り切つた擧句、五重の塔から飛下りる氣になつて增給を願ひ出たんです、すると今ので不服ならお止めになつても差支へはないと嚴命が下るんです、丸で雷に打たれた氣でさあ、つまり私のやうな無能な者は、社でも必要でなければ、世間にだつて不用な者だ。生きてる丈が有難いお慈悲だと思ひ返してるんですよ」

へゝゝゝゝと淒く笑つて、「や、斯うしちやゐられない。子供に春着一枚も造つてやらないで、親爺が酒を飲んでもゐられまい、さ、歸りませう」と、よろ／＼と立ちかゝつた。

予は勘定を引受けて、外へ出た。小野君は「濟みませんなあ」と數十度も云つて予に別れてとぼ／＼と小石川の方へ行く。予は暫らくその後姿を見送つたが、小野君は荷車にぶつつかつて、頻りに詫をしてゐた。

その翌日、出社すると、小野君は元の石地藏で、何處を風が吹いてるかと、冷然としてゐる。築島や大澤は相變らず、パンを嚙つて氣焰を吐いてゐる。予も亦一日を校正に過さねばならぬ、己れには將來があると、心で慰めたがら。

私は「評論」など執筆しながら、刻々に自己の心に浮ぶ思ひをそのまゝに書流すことの困難にたび／＼氣づいてゐる。私は政治についてはさして興味を有してゐないから、自己の政治觀を存分に發表するのを憚る恐れはないが、文學藝術や、道德や、その他人生生存上のいろ／＼な問題について、自己の所感を思ふ存分に吐出すことをいつも躊躇してゐる。言論の絕對的自由はどんな國でもどんな社會ででも許されないに極つてゐるが、傍から妨害されなくつても、當人自身が周圍と妥協し讓步すべく餘儀なくされる。赤裸々で銀座通りを步くことは出來ない。他の評論家諸氏はさういふことを全く感じないのであらうか。爲政者の壓迫のために自由に言論し得られない憾みがあるだけで、自己自らおのれの言論を束縛して、直截におのが思ひを云ひ切れないと氣づくことがないのであらうか……私は今度も時評の筆を動かしながら、本當の「私評論」の六ケしさをつく／＼感じた。

（「文藝評論」の「斷片語」より）

玉突屋

「二本歸り三つ！」と、ボーイは蟲の喰つた出つ齒を出して大聲で叫んだ。彼れは薄い座蒲團の上に几帳面に坐つて、兩方の袖を搔き合せてゐる。年齡は十五六で、顏は靑くて脹れて、髮の毛は薄い。

背廣を着たでつぷり肥つた男は、臺にすり寄つて身を屈め、鳥差しが鳥を狙ふやうな態度で、キューを突出した。

「三つ！」と、ボーイは袖口から細い棒を出して、ゲーム盤を動かし、横を向いて欠伸をした。

向うの一臺は突手もなく、四つの玉が侘しげに片隅に抱き合つてゐて、瓦斯の光は鈍いが、手前の一臺は明るい光の下に、紅白の玉が追ひつ追はれつ縦横無盡にころがつてゐる。ストーブを後にキューを逆に突いて、帶を緩くだらしなくしたまゝ立つてる角帽の青年は「又やられさうだな」と呟いて、相手の突振を見てゐたが、急に後を顧みて、「中原、後で君ともう一度やらう」と力んで云つた。柱にもたれてワッフルを抓んでゐた中原は、時計を見て、「もう十二時ぢやないか、明日にしよう」と落着いた聲で云ふ。

「いや、明日は芝へ行つて、あの話を定めて來なくちやならん」

「なに、芝の方は急がなくてもいゝさ」

「だつて早く定めなければ氣になつてならん、相手が愚圖だから」

「急勝ちだね」と、中原はゲーム盤を見て、「栗山さん、今日は全勝ですね」

「へゝゝ」と、栗山はキューを扱いてゐたが、コツッと音がして、手玉は外れたので、「こりやどうした」と、禿頭をつるりと撫でて、厭な笑ひをして、ストーブの側へ來た。

「さあ一キューで取り切るか」と、角帽は勢よく立上り、チョークをギシ〳〵付けながら玉臺を見て、チェッと舌打して「厭な玉だね」と、首を二三度捻り、「から行つてから來るか」と、臺の上に乗り上つて、邪慳にキューを出した。兵兒帶がだらりと垂れる。

「二つ」と、氣拔けのした聲でボーイが呼ぶ。

「おい五だぜ、確かり見とれ、ゲーム取りならゲーム取りらしくするんだぜ」と横目でじろりとボーイを見た。

「五つ」とボーイは數へ直して、目をぱつちり開けたが、次第に上目蓋が垂れて來る。生欠伸が喉を突いて來るのを漸く嚙み殺したが、涙が目に浮ぶ。

角帽は眉を顰め、口を捻り、首を動かし、襟を弛くボタンの取れたシャツの廣く出てるのも關はず、熱心に突いてゐる。栗山は葉卷の先を爪でつゝきながら、「玉は今時分からよく突ける、不思議なものだ、世間がしいんとして來るとキューも冴えて來る」と、ストーブに顏がほてつてゐる。

「ぢや、今夜は徹夜して突きますか」と、角帽はクションの方向を目で計つてゐる。ボーイは氣遣はしさうに栗山の顏を見てゐたが、栗山は「へゝゝゝ、徹夜も面白いな、明日は日曜だし」と、惡くすると徹夜案が成立しさうなので、幽かに溜息をついた。で、坐り直して、足の痺れを撫り、ぺこ〳〵の腹に力を入れ、「二つ」「三つ」と付元氣で叫んだが、頭は次第に下つてぼうつとする、と、身體が地べたからするする〳〵と

引上げられるやうな氣になり、そのまゝ遠い處へ持つて行かれさうになつたが、ガチャッと音がしたので目を細く開けて、「三つ」と夢心地で叫んだ。十二時が打つた。

栗山は火の熱で汗ばんだ手に白粉を振りかけ、立變つてキューを執り、「早いものだ、もう十二時だ、家に居りや、とても今時分まで起きてられやしない」

「中原、昨夜の今時分はどうだい」と、角帽は意味ありげににや／＼と笑つてゐる。

「フゝン」と、中原はコークスを指先で抓んで、ストーブへ投げ込み、「お蔭で今日は二時頃まで寢てしまつた」

「起きては玉を突き、飲んぢや寢てりや、それで偉くは來るんだが、どうもかう玉突屋にばかり日參してても困るよ」

「いゝぢやないか、學問で喰へなきやキューボーイになるさ、その方が洒落てるぜ、フッ／＼フッ」

「それも呑氣でいゝね、しかし何時までもこんなことをして遊んでもゐられまいよ」

「良心が咎めるか、君やそんな事をちよい／＼考へ出すから酒も玉も上達しないんだよ」

「さうだね、少くとも君を鐵で負かす程にならなくちや癪に觸らあ」と、ワッフルの殘りをむしや／＼平らげた。

「勝負有」とボーイは三人の顏を順々に見たが、北風が玻璃窓に吹きつけるので、音を聞いただけで首をすくめて、兩手を前垂の下へ入れて背を丸くした。

「さあ、も一度」と、角帽は目を光らせて、玉を並べる。

ボーイは恨めしげな顏付をして、「栗山さん、も一ゲーム如何です」と哀れな聲で云つた。

「もう遲いから止さうか」と、栗山は迷つてゐる。

「一時前か」と、ボーイは獨言のやうに云つたが、角帽は帶を締め直して威勢よく、

「なあに、まだ十二時を十五分過ぎたばかりさ、十分もあればゲームになりますよ」と促すので、栗山は時計を見て、「今二十分だね、おや、やるかな」とキューを執つて、「どうです、十位下げますかね」

「なあに大丈夫、今度負けたら玉はお止めだ」

「いや君の止める／＼も當てにやならんよ」と、中原は腰を掛けたまゝ足拍子を取つてゐる。

ボーイはゲーム盤を直して、「二つ」「三つ」「五つ」と數へ出したが、少し當りが途切れると、前に霞みさうになる。眠りをまぎらしたくも、單歌も歌へず、足も動かせず、手も動かぬ。で、詮方なしに齒を喰ひしばり目を見詰め心を凝らしてゐると、かつとした目眩しい光が前に擴がつて、青い臺と白い玉と紅い玉とが、浪の上にでも漂うてゐるかの如く見える。しかし無意識に「二つ」「三つ」と叫んでゐたが、やがて口も目も緩んで、心がとろ／＼になり、自分の故郷で弟を連れて繡眼兒捕りに行つてゐる氣になつた。枝の上に綠の羽を重ね合つて、一處にピー／＼鳴いてゐる。で、黐竿を持つて近寄らうとしたが、身體が縛られてるやうで近づけぬ。矢鱈に藻搔いてると、ズドンと音がして、鳥は飛んでしまつた。

「おい吉公」と角帽は怒鳴つて、「居睡りなんかしないでゲームを取れ、今までよく數へなかつたんだらう、聲がしなかつた」

「いえ、數へてゐたんです」と、出鱈目に數を取つて、「十八ゲーム」

「ふゝん、いよ／＼取切るか」と、角帽はにこにこして臺を廻つてゐる。

「さあ、それが濟んだら、おれが最後の一撃を與へて歸ることにしよう、もうそろ／＼眠くなつた」と、中原は欠伸をした。

夜番の拍子木が地の底からのやうに幽かに聞える。

ボーイは百年も千年も「二つ」「三つ」と繰返し繰返し叫ばねば、打倒れて熟眠は出來ぬ運を背負つてるやうに感じて、涙聲で「當りゲーム」

淡島寒月氏

「中央公論」の六月號に、生方敏郎氏と内田魯庵氏とが、この頃逝去した淡島寒月氏について語つてゐる。寒月といふ人は明治最初の西鶴本の蒐集家で、紅葉も露伴も氏の藏書を借覽して、元祿文學を學んだのだといふことは、私も學生時代から知つてゐたが、氏に關して、その他のことは何も知らなかつた。まだ生きてゐるのかしら、もう疾つくに死んでゐるのではないかと思つたこともあつた。

それで、私は今度、生方内田兩氏の追憶記によつて、はじめて趣味の人淡島寒月の一生について、いくらか知ることを得たのだが、私が面白く感じたのは、七十近くまでの長い生涯を、殆んど何等の金取仕事をしないで過す人が、今日の時世にでも、まだ隨分存在してゐるといふことである。江戸時代には、父祖の遺産などを手頼りにして、貧弱な風流を樂んで一生を過した人が多かつた。（それは壓制政治の下で、自由に自己の天分を發揮し得なかつたのでもあつたらうが）いくら昔の世でも、白癡か病人でない限りは、何もしないで日を送る譯には行かないから、狂歌や俳諧を學ぶとか、書畫をいぢるとか、和蘭の骨董でも集めるとか、何かの道樂をはじめなければならなかつたのであらう。酒色の慾に沈湎するよりも上品で高雅でいゝのであらうが、私は江戸時代の風流人に對しては、ちつとも敬意が寄せられない。

私はトルストイのことを書いた後だつたので、淡島寒月とトルストイの二人を對照させて考へた。トルストイは豐富なる資産を有してゐるに關はらず、自ら好んで、焦慮煩悶して、八十餘年の間悠然として南山を望んだことは一度もなかつた。「カリフのアブツラマンは、その一生の中に、十四日の幸福な日があつたと云ふが、私には乾度それだけの日もなかつたに違ひない」と、彼れはゴルキーとチエホフとに向つて云つてゐる。

寒月のやうな一生を過す人もあり、トルストイのやうに一生を過す人もある。キリストをもマリアをも閑餘のオモチャとして扱つてゐた江戸の通人の目には、トルストイの如きは、血迷つた新五左衛門で、話せない奴として映つたであらう。私などは、二人のうちのどちらのやうにして晩年を過したらいゝかと今考へたが、どちらにもなれさうでない。

（「文藝評論」より）

何處へ

（一）

可愛い目元をほんのり酒に染めた女が高くさし掛けた傘の下に入つて、菅沼健次は敷石傳ひに門口へ來た。

「ぢや明後日、屹度ですよ」と、女中は笑顏で覗き込み、艶氣を含んだ低い聲で云つた。

「むゝん」と健次は女の顏をも見ず、引たくるやうに傘を取つて、さつさと急ぎ足で歩き出したが、五六間も歩んで我知らず振返ると、「鳥」と行書で書いた濕つた軒燈の下に彼女がぼんやり立つてゐる。

健次は何の譯もなく微笑する。女も微笑して、胸を突出して會釋する。

それも一瞬間で、健次は傘を肩にかけ、側目も振らず上野の廣小路へ出て、道を山下の方へ取る。

昨日の天長節に降り通した雨は、今日も一日絶間なく、濕つぽい夜風が冷たく顏に吹き當る。往來の人々は皆傘を斜めに膝を曲げて、ちよこちよこと小股に急いでゐる。健次も膝から下はびしよ濡れになつたが、敢てそれを氣に留めるでもなく、只いゝ氣持で、口の內で小唄か何か呟いて、沈んだ空へ酒臭い息を吐きながら、根岸の近くまで來ると、横合から底の深い大きな蝙蝠傘が、不意に健次の蛇の目にぶつ付かる。チェッと舌打して避けようとする機會に、蝙蝠傘の男が聲をかけて、

「やあ君」と立留つた。

健次は少し驚いて、

「やあ君か、何處へ行つた」

「君の家さ、今夜は雨だから、屹度ゐるだらうと思つたのに、何處を浮れてた、いゝ顏つきをしてるぢやないか」

「そりや氣の毒だつたね、これから僕の家へ行かうぢやないか」

「いや、もう遲いからよさう」と、蝙蝠傘の男は長い身體を屈めて、下駄屋の時計をのぞいて見て、「もう彼此九時だね」と一寸考へ、「實は君に少しお賴みがあるんだが……此處で話してもいゝが、どうだ其邊の珈琲店へでも寄つて見れんか」と、首をまはして周圍を捜す。

「ぢや、さうしよう、この先きにいゝ家がある」と、健次は先きに立つて、半町ばかり泥濘の中を通つて、擦玻璃に一品亭とある小さい西洋料理店へ行つた。

客は一人もゐない。白布で蔽うたテーブルの上に火鉢を置いて、籐椅子が四五脚周圍に不秩序に置かれてある。健次は火鉢の火を搔き廻して、

「君は馬鹿に寒さうぢやないか、さあ當り給へ」

と云つて、巻煙草に火を付けて、反身で椅子に寄つかゝり、頻りに瞬をしながら仰向いて煙草を吸ふ。

今迄板の間に腰掛け、左右の袖を搔き合はせて居眠りをしてゐた小娘が、高い足駄を引摺つて、

「お誂へは」と寢呆聲で聞く。

「寒いから日本酒がいゝだらう、料理は何がいい、ビフテキにでもするか」と、骨太い手を火鉢の上に翳しぽかんとしてゐる相手の顏を見て、默諾を得て、健次は小娘に命じた。

この丈高き男は織田常吉と云ひ、健次が昔

の同窓の友で、今は私立學校に英語の教師を勤め、傍ら飜譯などをしてゐる。年齢は健次より僅か一つ上だが、健次の小柄で若く見えるのに反して、格段に老けて見える。丈の高さのみならず、それに釣合ふ程に肉付きもよく、見た所魁偉なる人物であるが、何處となく身體にゆるみがある。鹽氣が足らぬ。顏は平たく目は細く、耳は福々と垂れてゐる。

「君は相變らず氣樂さうだね、殊に今日は愉快な顏をしてるぢやないか」と、織田は健次を見て、ゆつたりした聲で云ふ。

「はゝゝ、さう見えるかな、これで二三日打續けだよ、まあ社の方が暇つぶしで、遊ぶ方が本職のやうなものだ、しかし本職となると、遊ぶ方法に苦心する。如何にして遊ぶべきかが、僕の當面の問題である」と、陽氣な聲で、一寸桂田博士の假聲を使ひ、顏に愛嬌を湛へて微笑微笑する。

「まあ遊べる間は遊ぶがいゝやね、しかし今もね、君の母堂と話して來たんだが、健次も此頃は酒好きになつて困ると云つてたよ、祖父さんのやうにならなきやいゝがと云つてゐられた」

「さうか、僕の母方の祖父は、大酒呑みで終ひには狂人になつて死んだんだからね、それに僕の顏が次第に祖父に似て來るさうだから、母は心配してるだらう」

「何、さうでもないらしい、只早く嫁を貰ひたいやうな話をしてゐた、僕にもいゝのを見つけて呉れつて、本氣で云つてゐられたよ、親は有難いものだね」

「さうかね」と、健次は嘲るやうに云つて、「君も精々美人を搜して呉れ給へな」

「そんな氣があるんなら周旋しよう、しかし何だよ」と云ひかけた所へ、小娘が銚子を持つて來ると、織田はポカンとして、前の話の緒を忘れてしまひ、健次の矢繼早にさす盃を三四杯引受けた。

「で、君、僕に用事と言つて何だい」と、健次は強い調子で押付けるやうに云ふと、織田は、「何、急な事でもないんだがね」と、前に自分が頼みがあると云つた癖に、その用談を避けるやうにして、ビフテキの小さい切れをもぐ〳〵させながら、顏を顰め、「非常に堅い」と呟き、暫らく無言の後、「僕も弱つたぜ、親爺の病氣がます〳〵よくないんで、入院させなくちやならんのだ、まだ確定はしないが、どうも胃癌らしい」

と、フォークとナイフとを持つたまゝ、仰向いて云つたが、顏にも言葉にも弱つてる樣子は見えず、例の通りポカンとしてゐる。

「さうかい、そりや困つたね」と、健次は少しも手を付けぬ皿を見詰めたなりで、氣のない聲で云ひ、心でも左程同情してる風はない。織田は相手に頓着なく、悠長な聲で、

「妻は身が重いし、母はあの通りの無精者で、一日煙草ばかり吸つてて役にや立たず、妹は學校へ行つたきりで、遲くまで歸つて來んから、何もかも僕一人でやらなくちやならんのでね、本當に困るよ、それでこの四五日は學校も缺勤ばかりしてる」

「ぢや妹を學校へやつて、君は缺勤して家の世話をしてるんだね、しかし病人の看護なんか君の適任ぢやないね」

「だつて仕方がないさ、どうも一家の主人となると面倒なものだ、今に君も結婚すると困るぜ、何だのかだのと、そりや五月蠅くつてね、それに子供なんか出來なきやいゝんだが」

「そいつあ當然だから仕方がないさ、しかし僕だつたら、家が五月蠅けりや一日外へ出てゐらあ、女房の産の世話から借金の言譯まで亭主がしなくつたつていゝ」

「さうもいかんよ、君、それに僕の月給が安いから、平生だつて内職をしなくちや引足らんの

に、病人が出來ちや災難だ、だから此頃は酒どころぢやない、煙草も止めてしまつた」と、少し萎れた。その樣子を見ると、健次は急に不憫になり、

「だが君は感心だよ、家庭のために犧牲になるから」と云つて、後を見て、「もう一本」と叫んだ。

「僕はもういゝよ、遲くなると家で心配するから、そろ〳〵歸らなくちや」

「まあいゝさ、久振りだから、も少し話をしようぢやないか」と、健次は少しも手を付けぬ皿を押しのけ、煙草を銜へたまゝ腕組して、半ば目を閉ぢ、降りしきる雨の音やら、幽かに響く俥の掛聲やら、前を通つてる按摩の震へ聲に耳を傾け、森とした淋しい空氣に心が吸込まれ、快活な色も顏から失せかゝつて來たが、コトンと銚子の音がするので、振返つてパッと目を開けた。惡夢から醒めたやうに、鋭く四圍を見まはし、やがて眉をぴりゝとさせ、二本の指で熱さうに銚子の首を持つて、

「さあ受け給へ」と、無造作に相手の盃へどぶどぶと注ぎ、「そして肝心の用事は何だい」と問ふと、織田は言憎さうに暫らく口籠り、

「少し無理なお願ひだがね」と、盃を持つては置き〳〵して、「又原稿の事さ」と、氣の毒さうに云ふ。

「うん原稿の周旋か、僕が引受けてどうかしよう」と、健次は快く首づく。織田はやうやく安心したらしく、甘さうに盃を呑み干して健次に差し、

「實際忙しい間に書いたので、よくはなからうがね、それでも殴り書きぢやないんだ、會話にや格別苦心して、一機軸を出したつもりだから、まあ讀んで呉れ給へ、物はゴルキーの小說だ」

「さうか、いゝだらう」と、健次は輕く答へて、物が何であれ、譯筆が何であれ、そんな事は身を入れて聞かうともせぬ。

「それからね、少し無理だが原稿料を早く貰つて呉れまいか、月初めから一文無しだから、それに……」

と、健次の煙草を一本取つて、指先きで揉みながら、何をか訴へんとする。それと見て健次は頭から打消し、

「よし〳〵、それも僕が受合つた、引替へに貰つてやらう」

と話を轉じ、「で、君は此頃箕浦に會つたか」と何時も長々と聞かされる無味の生活談や金錢論は避けようとする。

「うん昨日見舞ひに來て呉れたがね、會ふと例の通り大きな人生問題を論じてる。讀書も盛にやつてるやうだし、此頃は長い論文も書いてるさうだ、いづれ君の所へでも持込むだらう、しかしね、僕が云ふんだが、箕浦なんかは己惚が過ぎる、人生がどうの宇宙がかうのと、人間が御託を並べるのは、身の程知らずの極だ、獨身で親爺の脛でも嚙つてる間は、そんな事を道樂にしてゐられようがね、家庭でも造つて、一人前の人間になると、そんな事は馬鹿々々しくて問題にもならんさ」

と、多少の活氣を帶びて論ずる。健次は微紅の艶々した頰に靨を見せ、切れの長い目尻に皺を寄せ、

「はゝゝ、珍らしく君の名論を聞くね、しかし箕浦はコツ〳〵根氣よく學問を續けてるし、文章も上手になつたぢやないか、感心だよ」

「今に肺病か腦病になるのが落ちだ」と、織田は澄ましてゐる。

「いや博士ぐらゐにやなれらあ」と、健次は皮肉に云つて、「だが箕浦は君の妹に惚れてるよ」と、少し乘出して、聲を低くする。

「馬鹿なことを」と、織田は締りのない大口を開

けて、ハツ〳〵と笑ふ。

「うんにや惚れてる、君の目にやどうだか、僕には一目瞭然よ」

「さうか知らん」

「さうだとも、それにね君の妹のラブしてる男がある」

「え、本當かい君、虚言だらう、君はよく色んなことを云つて、僕を調戲ふからいかんよ、若し本當なら相手が誰れだか聞かせて呉れ給へ、僕も一家の主人だから、妹の身の上についても責任があるんだもの、間違ひのないやうに警戒しなくちやならん」

「いくら警戒したつて駄目さ、歳頃の女が色氣づくのは當然ぢやないか、で、若し相手が分つたらどうする、妹を柱にでも縛りつけるかい」

「君、そんな馬鹿な眞似をするものか、僕は何さ、向うが相當の男だつたら正式の結婚さすし、不相當の男だつたら思ひ切らせる」

「成程譯の分つた兄樣だ、何處の親だつてそれと同樣の事を申します」

「だつて主人の義務としてそれが當然ぢやないか、君ならどうする」

「僕なら放任しとかあ」

「馬鹿な、君も箕浦流の空論家だね」

「ふゝん、僕と箕浦とは一荷にならんぜ、向う樣は本をどつさり抱いてるから貫目があらあね」

「君は氣樂な事ばかり云つてるが、僕は何時も確信してる、人間は要するに僕のやうにならにや虚言だ、遲かれ疾かれ君なども同じ道へ落ちて來るんだ」

健次はぞつと寒氣がして、思はず手を火鉢に翳し、織田の顏を見詰め、

「お互ひに君の道連れになつて、テク〳〵歩きで、電信柱でも數へて行くんだね、大通りの左側を歩いてりや、自然に日本橋へ出られる」

「君、戯言は止して、今の話の相手は誰れだい、一體向うの男は妹を思つてるんかい」

「さあ、どうだかね、よく知らんよ」

「誰れだらう」と、頰杖ついて、眞面目に考へてゐる。

健次は人差指でテーブルを打ちながら、「先あ左程にも思やせぬ」と小聲で唄つてゐたが、急に何をか感じて、額に皺を寄せ、邪慳に煙草の吸口を噛み出した。

織田は思ひ倦んで面を上げ、「君は不斷に煙草を吸つてる、毒だよ」

「毒だつていゝさ」と、健次は吸殼を吐き出し、「僕は阿片を吸つて見たくてならん、あれを吸ふと、身體がとろけちやつて、金鵄勳章も壽命も入らなくなるさうだ、阿片だ〳〵、あれに限る」

と、獨りで合點してゐる。それが戯語とも思へず、眞から感じてるやうなので、織田は細い目を丸くして、

「よくそんな下らぬ事を眞面目で考へてるね、阿片でなくつたつて、快味を感ずるものは幾らもあるぢやないか」

「さうかね、僕はこれ程煙草を吸つてても、眞に甘いと思つたことは一度もないよ、酒だつてさうだ、ビフテキだつてさうだ、一寸舌の先で甘いと思つても、染々と五體がとろける程快味を感じたことがない。どうも物足らんね、それで何時も思ふんだ、何處か世界の隅つこに最上の珍味が潛んでるに違ひない、僕はそいつを搜し出したい、で、今もそれを考へてたんだが、或はその珍味が阿片ぢやないか知らん、阿片を吸ひ出すと、何にも代へられんちふぢやないか」

「馬鹿な」と、織田は一口に斥けて、「まだ甘い料理を食はんから、そんな事が云つてられるんだ、櫻木の鳥なんか食べてて甘い物がないなんて廣言する權利はないよ」と、天麩羅鰻椀盛

などの名代の家を數へ上げ、諄々とその說明をし、「近々長篇を譯して仕舞つたら、藏田屋でも奢るよ」

健次は苦笑して、「何れ御馳走にならうよ」と立上り、「もう十時だ、行かうか」と、勘定を濟ませて外へ出た。雨は稍々小降りになつたが、道は暗く風は冷たく、健次は來る時の元氣に引變へ、傘を雨手で持つて、ぶる〳〵と慄へたが、織田は前と同じく泰然自若、急かず騷がず、長靴を踏占め〳〵電車道へ向ふ。

（二）

健次の家は御行の松を右手に見て、暗闇には危險な道を一町ばかり入つた曲り角にある。土藏付で、狹いながらも庭もあり周圍を高い板塀で取りかこみ、可成りの物持の住宅と見られるが、その實屋根も壞れ柱も傾き、大雨には臺所で傘をさゝねばならぬ有樣。本當なら隅から隅まで大修繕を施さねばならぬので、近所の差配なども見兼ねて、賴まれもせぬに家屋敷を檢分して、「早く手をお入れなさらなくちや御損ですぜ、何なら私がお引受けして、見積りを立てて見ませう」と注意するが、健次の父は、「近々どうかしよう」と云つて、別に心に掛ける風はない。健次は早くから、「こんな陰氣な古びた家はうり拂つて、山の手へでも引越した方がよからう」と勸め、母は全然同意して、せめて此家を修繕して他人に貸し、自分達は小ぢんまりした借家に住まつた方が幾らいゝか知れぬ、第一こんな廣い家にゐては、世間から有福に見られて、何かと取上げられる金高も多くて不經濟ではあるしと說くが、穩かな父もこればかりは頑として聞入れぬ。おれは此家で息を引取るつもりで越して來たのだから、決して他へは移轉せぬ。それに借家は厭だと云ふ。彼れには借家住ひは不見識だといふ氣があるのだ。

菅沼家は微祿ではあつたが、旗下の家柄。健次の父は十四五の頃、維新の渦中に浮沈して、多少の辛苦を嘗めた。その後も生活には懈んで、遂に四國九州の郵便局にも二三年づつ勤め、今は多少榮達して會計檢査院に奉職してゐるが、五十五歲の老朽で、地位も安固ではなく、長官のお慈悲の下に脈をつないでゐる。俸給も左程多くはない。それに健次の下に女の子が二人、支出は容易ではないが、彼れはあまりくよ〳〵苦に病む風はなく、每晚の晚酌二合に陶然として太平樂を並べる、健次は一人前の男になつたし、娘は二人とも容色はよし、おれはまだ〳〵お墓へ入る心配はなし、これからがおれの世の中だ、健次に嫁を貰つてやり、姉娘でも片付けたら、おれは第一に役所を止めて隱居をする、恩給も下るし心掛りはないから、うんと好きな事をして遊べるんだが、おれは物見遊山はせん、差詰馬術の稽古がしたいな、今體子供の時から馬が好きで、馬術の達人になるつもりだつたが、世が變つて算盤ばかり持つて來た。しかしこれからやる、自分の慾といつては外に何もないが、一つ馬だけは買つて見たいと、この老人は馬の話になると夢中になつて來る。

先祖に馬術の名人があつたとかで、その祕傳の卷物が桐の箱に入つて、土藏に保存されてゐる。これと一領の甲冑と一口の無銘の刀劒とが一家の寶物、老人の自慢の種だ。冑は疎らに星のついてる古色蒼然たるもので、鎌倉時代の作、刀は國弘の作だらうと云ふ。そして老人は每年元日には此等の寶物を床の間に飾り、家族を集めて禮拜し、三方ケ原合戰以來の祖先の武勇を談じ、この冑や刀に籠つてる精神を忘れてはならぬと說き聞かせ、獨りで喜んでゐる。

健次は少年時代に此等の武具に興味を感じて、父の留守中竊かに土藏へ忍び込み、漆の剝げた鎧櫃を開けて、昔の戰爭を連想し、或は

兩腕に力瘤を出して冑を持ちまはつて悅しがつてゐた。殊に刀が大好きで、恐々拔きはなち、歯を喰締り瞳を据ゑて、その冴えた光を見詰めては感に打たれることが多い。刀は武士の魂だとは父からも屢々敎へられ、自分でもこの家傳の寳刀を見る毎に、義の爲には死を厭はぬ、如何なる苦痛をも忍ぶ、辱しめらるれば死すなどの感じが、その明晃々たる切尖から彼れの腸に染み込むやうであつた。性質は父とは餘程違つて癇が強く、母の故郷、彼れの生地たる丸龜の尋常小學に學んだ頃も、試驗の成績が他に劣ると口惜しくて夜も眠れぬといふ程であつたが、東京の學校へ通ふこととなつては、殊にこの考へがひどい。その爲に學課の復習を勵むのみならず、身體の訓練をもつとめた。瘦つぽちと嘲られるのも無念である、年嵩の學生に腕づくで意地められるのもつらいし、腕力を養ひ筋肉も發達させねばならぬと、寒中シャツ一枚で木刀を揮つたこともある。力試しだといつて二人の妹を笊に入れて擔ひ、引くりかへつて傷をつけたこともある、母からは惡戯が過ぎると叱られたが、彼れには惡戯でも慰みでもないのだ。幼い心にも自分の脆弱な體質が情なく、行く先々が案じられてゐたので、外目には滑稽とも見える體格修養も、自分には最も眞面目な行爲であつたのだ。しかし生來の體質は變りやうがない。それで度々母に向つて、

「何故僕をこんな小ぽけな身體に生みつけたんです」

と詰り、涙をこぼしたことさへあつた。その癖友達の間へ出ると、「瘦せてでもおれは强いぞ」と力んで、喧嘩をしかけられて逃げることはない。或日も餓鬼大將に嬲られた時、ナイフで切りつけて、相手を驚かしたこともある。

歳を取るに從つて、戶外遊戲は止めて、勉强部屋へ閉籠り、課業外の雜書をも涉獵るやうになり、最早體質の苦勞はしなくなつた。で、中學から高等學校と順序を踏んで進んだが、一家の財政からいふと、それだけでも容易ではなく、とても大學を卒業する望みはなかつた。しかるに健次が他の學生と對等の交際もして、別に見すぼらしくもなく、文科の英文學を終へることの出來たのは、一に桂田文學博士の助力に依るのだ。桂田家と菅沼家とは昔から緣故の深い上、博士が健次の學才を認めたためである。

大學三年の生活、健次の頭腦は非常の變化を來した。元法科へ入りたい氣もあつたのを、桂田との關係から文科と定つたので、入學後も心は迷ふ。自分の素質から云つても學者で安んじてゐられさうぢやない。多量の書物を讀んで一生を終る、下らないぢやないか、それよりも政治家にでも實業家にでもなつて、自分の考へが具體的に目の前に現はれるを見、生きた人間生きた事件の動搖起伏に接する方が面白くはないかと思ふこともあつたが、さりとて斷じて一を去つて他に就く氣にもなれぬ。それに課業として學ぶ哲學の問題、外國の詩歌小說、新刊の雜誌雜著、皆過敏な神經を刺激して、妄想は留め度がない。制服制帽を着け、博士夫人恩賜の紅梅を散らした水色の風呂敷包を抱き、兩手をポッケットに入れ、大學の裏門から上野を拔けて、根岸の古屋へ歸る間、彼れは妄想の道を辿つてゐたのだ。單調の道には飽いてしまつた。しかし彼れは一度も泣言を云つたことはない。人生の寂寞とかを文章にして雜誌へ寄稿したこともない。同窓の冥想家からは淺薄と云はれる程あつて、飛花落葉に對して、深沈な感に耽り、自然の默示に打たれるでもなく、友人にでも遇へば、急に沈んだ心も浮立つて快活に談笑し警句百出諧謔縱橫。クラスの集會に缺席すると、「菅沼はどうした」と、衆口一致して遺憾の聲を發する程であつた。テニスもやる、玉突

もやる、彼れはクラスの快男子として通つてゐた。そして二年目の試驗前、制服を囚衣の如く感じ、引脱いで自由の身とならんとしたが、博士夫妻の強硬な反對に會ひ、その時は恩人に背く程の勇氣もなく、ぐづ／＼で卒業まで我慢したものの、成績は圖拔けてよくはなく、博士夫妻の期待に背いた。彼れの弱い身體は長年月の學校生活に倦み疲れ、最早席順の高下を爭ふの根氣もなく、虚榮心も失せ、他の連中が卒業試驗の準備に夜を徹してゐる間に、獨り球戲場にゲームを爭ひ、或は牛屋の二階で女中に圍繞されてゐた。櫻木に出入し始めたのも此頃からである。卒業後は博士の推薦で、中學教師となつたが、これは三月ばかりで辭職、今日まで一年あまり雜誌記者を勤めてゐる。

（三）

大抵の家は戸を鎖し、暗闇の森閑とした道を、健次は雜念に煩はされ、俯首いてコツ／＼辿つてゐる。彼れは七歳で先祖以來のこの都へ歸つてより二十七歳の今まで殆んど一日もこの道を踏まぬことなく、目を瞑つてても、路次の隅々まで間違へる氣遣ひはない。

そしてこの界隈の見る物聞く物に飽き／＼してゐる。父は交番の角まで來ると肩の荷が下りるやうな氣がすると云ふが、健次は此處まで歸ると、足が澁つて後へ引きかへしたくなる。彼れは今織田に別れ、その長靴の重い音の次第に消ゆるを聞きながら、「阿片を呑みたい」を繰返した。他人が甘さうに吸ふのを見て羨ましく、煙草を吸ひ習つたが、自分には左程の甘味もない。阿片々々、自分が内々求めてたものはあれだ、阿片さへ吸へばこの世からなる極樂淨土へ行けるのだ。アルコールランプに點火し、長椅子に身を埋め、長い煙管で匂ひを呼び、沈睡に陷る支那人は、祖先の詩人が夢想した無何有の境に遊んでゐるのだ。阿片を嗅ぎに支那へ行く。迦南の樂土は其處にありと思はれる。

教師の職は蓄音器か鸚鵡の役廻りだと感じて、否應なしに辭職し、もつと活氣のあり動きのある役をと志し、現在の職を求めたが、これも此頃は厭で／＼溜らぬ。どうせ長くは續きはしない。いつそ向うから不勉強の爲め免職と來ると、新なる地が開けさうだが、當分そんな運も向いて來さうでない。だから明日は桂田を訪ねて「現代の思潮」とか何とかの問題で、的の字づくめの談話を筆記して來なくちやならん。

雨はしと／＼と飽きもせずに降つてゐる。電燈の輝いてる或別莊の犬は今夜も飽きもせずに生命限り吠え立ててゐる。

健次は睡い目をして元氣のない欠伸をした。

先々月の初め、殘暑のまだ酷しい時分、西日の當る桂田の書齋で、長々しい文學論、獨逸語やラテン語交りの味のない只六ケ敷い議論を筆記させられ、浴衣の着流しであつたから、汗に漬つて弱つたことがあつたが、その時下座敷から柔かいピアノの音が洩れ聞え、博士の頑固な言葉を追ひのけては、健次の耳に忍び込み、腸まで盪かさうとした。そして彼れの筆記はしどろもどろに亂れ、聞違へ書誤りの夥しかつたのを、そのまゝ雜誌に掲げて博士の怒りに觸れたが、あの時ほど博士が憎い顏して激しい言葉を吐いたことはない。で、後々までも健次の耳には、その音樂が染みついて、踏慣いた道を歩んでる時など、耳の底でぴん／＼鳴り響いて、心に異樣な感じが起る。

ピアノの主の博士夫人も美しい、櫻木のお雪も美しい、織田の妹も醜くはない、紅葉や緑雨の小說の主人公の如く、女が生命の凡てなら、憧憬れたり煩悶えたり若い盛りの今時分、さぞ戀に忙しいことであらうが。

「しかし自分は箕浦ぢやない」と、自分の胸に答へた。その聲は他を嘲つた自尊心から出たのであらうが、絶望の調も交つてゐる。で、彼れは煙草を銜へ袂からマッチ箱を取出したが、マッチは一本もないので、舌打して箱を投げつけ、傘を持直してさつさと歩き出した。目の前には自分の家の軒燈が、今にも消えさうに微かに光つてゐる。

彼れは雨にふやけた潜戸を兩手で開け、成るべく音のせぬやうに敷石を傳ひ、玄關の隅へ傘を投げ出すと、母は雨戸を開けて釣ランプを差出し、

「おや衣服がびしよ濡れぢやないか、この冷えるのにそんなに濡れちやつては身體に毒ですよ」

と、氣遣はしさうに健次を見詰めてゐる。

「今日は早く歸る筈でしたが、又友人に誘はれて遅くなりました、明日は屹度早く歸ります」

と、言はれぬ前に言譯しながら、足袋を脫いで、爪先で臺所へ歩いて行き、足を濯いだ後、そつと柄杓から口うつしに冷水を呑んだ。臺所には盥を据ゑ、柱を傳つた雨の雫がぼたりぼたり落ちてゐる。

健次は長火鉢の前へ戻つて、着物を脫いで母の手から掻卷を取り、酒氣の名殘で温かい肌にふはりと纏ひ、菊を染め出した八ツ橋の略帶を柔かく締めて胡坐を掻き、「皆なもう寢たんですか」と、隣室の父の高鼾を聞いてゐる。

「あ、もう二時間も前から寢てらあね、それにお父さんは風邪氣だといつてね、お夕飯が濟むと直ぐにお休みさ」と母は戸締りをして火鉢の側へ戻り、「お前、織田さんがお出でたよ、何か用事がおありのやうで、大分待つてゐなすつたがね」

「いや、織田にや途中で會ひました、親爺が病氣だとか云つてた」

「さうだつてねえ、餘程お惡いんだつてねえ」と眉を顰め、「織田さんも大抵ぢやあるまいよ、稼人はあの方一人で、それで病人なんか出來てはね、……でも感心な人さ、一生懸命に働いてゐなさる」

「何、あの男は他人が思ふ程苦にしちやゐないさ、呑氣な人間ですもの」

「さうでもあるまいよ、厄介者が多いんだから、浮の空ぢやゐられないさ、お前だつて今の間はどんなにしててもよからうがね、もうそろ〳〵先々の事も考へなければね、お父さんも口ばかりは元氣がよくても、何時までもお役所通ひも出來まいし、織田さんのやうにお前が家の心棒になつてお呉れでなくちや」と、何につけてもお定りの御敎訓が始まりかけたので、

「ですがね、お母さん、織田の大木なら心棒にでも大黑柱にでもなるでせうが、私のやうな痩せつぽちぢやお役に立ちませんよ」と、健次は如何にも無邪氣さうに笑つた。母も釣込まれて青い顏に笑ひを浮べ、

「馬鹿お云ひでない」と云つたが、話は巧く外れて、「さう云へばねお前、家の冑は大變いゝ物で世間に類が少いんだとさ、今日古物陳列會とかへ出すとね、誰れだか目の利く方が見て、大變褒めてゐなすつたつて、だからお父さんも、あれ程世間へ出すのを厭がつてた癖に、今日は歸るとその話ばかりして、大喜びで被入しやるんだよ、賣つたらば大變なお金になるんだらうね、あんな薄汚い冑だけど」

「さうでせう、今は物好きな人間が多いから、……買手があつたら早く賣つたらいゝでせう」

「でもね、お父さんは饑ゑ死しても、先祖の寶だから人手にや渡さないつて、獨りで力んでるんだから」

「まあお父さんはあれが生命よりも大事なんだからいゝさ」と、欠伸をして、「今にお父さんの

望みが屆いて、馬でも買つたら、あの甲や冑を着て刀を差して、この汚い家から手綱を執つて妖怪退治にでも出て行くでせう、さうなるとお父さん萬歳だが、何年先きのことかなあ」

老母は險のある目で健次を見て「お父さんやお前は何故さう呑氣なんだらう、私一人にやきもきさせといてさ」と、長煙管をポンと邪慳に叩くので、健次は片膝立てて逃支度をし、

「呑氣なものですか、お父さんは馬を買ひたくつて、腰辨當で齷齪してるんだし、私だつて、胸に苦勞の絶えたことはありやしない」と、眞面目か戲言か分らぬ云ひやうをしたが、急に生眞面目になり、「一昨日の晩にね、お母さん、私は廣小路でお父さんに會つたんですよ、向うでは氣が付かなかつたやうだが、私が後から見てると、あの蝙蝠傘を突いて、馬丁と何だか話をしてる。話の筋は分らなかつたが、柳の木に軍人か誰れかの馬が繋いであつて、お父さんがその馬から目を離さずに見惚れてるんです。凡そ十分間もして、お父さんは名殘惜しさうに振返り〳〵して歸つて行つたが、私はそれをぢつと見ててね、その時ばかりはお父さんに早く馬を買つて上げたいと思ひましたよ」と云つて、立上つた。

母は呆れた風で見上げて、

「直ぐお寢みかい」

「いや少し勉強してから寢ませう、明日は八時に起して下さい」

と、書齋へ入ると、母は追駈けて來て、マッチを擦つて手づからランプを點火し、

「お前、二圓ばかり持つてゐないかい、千代の月謝だの何だので、私の手元に大變不自由してるから」

と、低い聲で歎願する。健次は無言で、蟇口からぐちや〳〵の札を手渡して机に向つた。

書齋は土藏側の八疊の室、家中で最も醜くない部屋だが、それでも疊は茶色をして處々擦りむけ、壁には斑點が出來てゐる。小形の本箱が二つ並んで、健次が中學時代からの教課書や愛讀書が、ぎつしり詰込まれ、プルタークの英雄傳樗牛全集透谷全集などの背皮の金字が微かに見える、しかし此等の書物は微曇りの玻璃戸から引出されたことなく、机の上には新しい經濟書が置かれてゐる。

健次は二三の郵便物を手に取つたが、一つは箕浦からで、二三日中に會談したい、云ひたい事が山ほどあると書き、尚それだけでは飽氣ないと見え、今月の諸雜誌を讀み、何れも輕浮なる文字の多きを悲しむ、我々は滔々たる弊風に感染せず、徒らに虚名を求めずして眞面目なる研究を續けたしと書き添へてある。又一つは織田の妹からの手紙で、「秋の日」だの「望の夜」だのの五六首の歌を認めて、雜誌へ出して呉れと切望してゐる。健次は二つの手紙を抽斗へ入れ、書物を擴げて二三枚讀んでゐたが、やがて投げ出して濃い眉をぴりゝとさせた。「箕浦の所謂眞面目なる研究は五年前に過ぎ去つたのだ」と、兩手で頭を抱いて目を瞑つた。すると歸宅の途中と同じい雜念が湧き上つて留め度がない。天井には鼠が暴れまはつて、時々チュッ〳〵と鳴聲がする。一家四人はすや〳〵と眠つてゐるが、毎夜その寢息を聞くぐらゐ彼れに取つて厭な氣のすることはない。人中へ出てる時には心が動搖して紛れてゐるが、獨り默然と靜かな部屋に坐つてゐると、心が自分の一身の上に凝り固まつて、その日常の行爲の下らないこと、將來の頼むに足らぬこと、假面を脱いだ自己がまざ〳〵と浮び、終には自分の肉體までも醜く淺間しく思はれて溜らなくなる。その時こんな下らない人間を手頼りにしてゐる家族の寢息が忍びやかに聞えると、急に憐れに心細く、果ては萎れてしまふ。

健次は昨夜と同じ考へを經驗し、心細くなつ

て疲れて、遂にボンヤリ倦れて、眠る氣ではなくても自然に瞑つてしまふ。
雨滴は同じ音を繰返し、鼠も倦みもせずに騒いでゐる。

（四）

翌朝目の醒めた頃は、目伏しい日光がカッと照り渡り、半身を蒲團の上に持上げると頭がぐら〳〵する。健次は手を伸して縁側の障子を開けた。葉の細い花の小さい黄白の野菊の間に突立つた物干竿には、シャツや足袋がぶら下つて、水氣が盛んに舞ひ上つてゐる、父も妹も出掛けたと見え、家內はひつそりして只母の洗濯の音が聞える。

健次は勇ましく跳ね起きて、直樣身支度をし、獨りで食事をしてゐると、母は濡手を拭ひ〳〵茶の間へ入り、

「今日は直ぐに社へお出でかい」

「いえ、一寸桂田の家へ寄つて行きます」

「え、先生のお宅へ、ぢや先生にも奥樣にもよろしく云つてお呉れよ、ほんとに暫らく御無沙汰して申譯がないんだが、變にお思ひなさらぬやうにね、お前も先生の奥樣の御機嫌を損ねんやうに氣をおつけよ、これまでだつてお世話にばかりなつたのだし、これからもどうせあの方にお手頼り申さにやならんのだしね、だからお前麁相の事を云つちやならないよ」

と、柔しく幼兒にでも說聞かすやうに云ふ。

健次は「え丶」と氣のない返事をして茶漬を搔き込み、「ね、お母さん、私は當分社の近くへ下宿したいと思ひます、家からぢや社へ遠くつて、此頃のやうに忙しくちや、少し不便でもあるし、それに年內に著作をしたいんです」と、平生よりも落着いて穩かに云ふ。

「えッ、下宿するつて」と、母は襷のまゝ、長火鉢に寄りかゝつたなり、健次の顏を見て驚いてゐる。「だつてお前、下宿すりや物がかゝる許りぢやないか」

「何、下宿料なんか廉いものでさあ、それに私に少し考へがあるから、さう云ふことに定めさせて下さい」

「まあお父さんに聞いて御覽な、私にやお前の云ふことが分らないよ、學校へ通つてる時とは異つて、もう一家の主人となる身分でさ、家を出て下宿するつて一體どうしたんでせう」と、向きになつて責める。

「その代り暮にや少し金を造つて、妹に春衣位買つてやります」と、健次は宥めるやうに云つたが、母は容易に落ちぬらしく、額に青筋を立てて少し慳貪に、

「春衣どころぢやないよ、暮にはお前を當てにしてるんだから、一人で浮々遊んでられちや困らあね、それに下宿なんかして、無駄なお錢を使ふつていふ方があるもんぢやない、まあお父さんを御覽なさい、今朝も加減が惡いのに早くから出て被入しやつたのに、お前は每日々々お酒を呑んぢや遲く歸るしさ、三十近くもなつて、何故から考へがないんだらう」と、鐵瓶をこすり〳〵、目に皺を寄せてゐる。

「私だつて考へてるさ」と、健次は小聲で云つて、母を相手に理窟を云ふ氣もなかつたが、自分に似てると云はれる母の顏の、年齡よりも老けて、淋しく沈んだ間に、神經の鋭く動くを見て、何となく氣の毒になり、

「ですがねお母さん、私は家へ歸ると氣が滅入つて仕方がないんです、一時間もぢつとして書物を見ちやゐられんのです、何だかから穴の中へでも入つてるやうで、氣が落着かなくなるし、黴臭い臭ひがして息がつまります、お父さんは住み馴れてるから、此家が一番いゝと云ふんだけど、私にや一日居りや一日壽命が縮まる氣がする。去年まではさうでもなかつたが、此頃は

殊にひどいんです、だから下宿でもしたら、少しは氣分が直るかと思つて、昨夜獨りで定めたんです」と、健次は今も鬱陶しい毒氣が壁の隅から噴き出て、自分を壓迫する如く感じた。

「それがお前の我儘だよ」と、一口にはね付けて、「家が汚くつて厭なら厭で、お前が自分で修繕でもする氣にならなくちや」

「だつてこんな家を手入れしたつて駄目さ、しかしお父さんが好きなんだから仕方がない、私だけ何處かへ逃げ出すんさ」

と、健次は母に何を云つても無駄だ、自分で無言實行すればよいと思つて口を噤み、母が何か云ひかけるのを冷かに見て、新聞をポッケットに捻込み、中折を被つて急いで外戸へ出た。「模範的學生」「實業雜誌」の記事、經濟論から運動界の消息まで、何物をか捜し求むる如く、殘る隈なく目を通し、漸く讀み終つた時分、彼れは千駄木の桂田家の玄關に立つてゐた。

（五）

博士はフロックコートを着て椅子に腰掛け、新着の外國雜誌を讀んでゐたが、健次を見ると、「さあ掛け給へ、今日は筆記に來たのかね、約束をして置いたんだが、急に用事が出來てね、これから文部省へ行かにやならんから、又明日か明後日に來て呉れ給へ、しかしまだ少し間があるから、まあ腰をお掛け、今もこの雜誌を讀んでてね、西洋の學者の研究心に感服してたんだ」と鈍い目を向けた。

「さうでせうね、どうしても西洋の學者は違つてるでせう」と、健次は相槌を打つて、來る度に嵩張つてる書棚を顧みた。

「どうです、此頃は何を研究してるかね」と、博士はお定りの問を發する。

「何もやつちやゐません」

「そりやいかん、社の方も怠けるといふぢやないか、それについて君に忠告しようと思つてたんだが、實は先日編輯長が來てね、君が此頃は怠けて困るといふ話だ、一體私は青年が新聞や雜誌に關係することは初めから好まないから、君にも懇々注意したので、矢張眞面目に教育事業に從事するやうに望んだんだが、君が是非やりたいつて、矢も盾も溜らん有樣だから紹介はしたけれど、竊かに氣づかつてた、雜誌記者なんか私立學校出の者位が適任で、君などは不適任なんだからね、しかし編輯長の話によると、初めの間は大變熱心に働いて隨分役に立つといふから、多少安心もした譯だが、さう早く厭になつちや困るね」

「そりや初めの間は珍らしくつて譯もなく面白いから、氣乘りがして働けるんです、知らん人と懇意になつたり、有名な博士なんかに會ふのを悦しがつたんですけど、今ぢやもう好奇心がなくなりました、戀女房だつて一年も添つてりや鼻につきますからね」

「君は年々眞面目でなくなる、學校時代とは人間が違つてしまつた」と、博士は締りのない顎を撫め、小さい耳朶を掻きながら、「君に比べると箕浦は感心だ、以前は遲鈍な男だと思つてたが、此頃は忠實に勉強してる、度々私の所へ質問を持つて來るが、中々研究心に富んでる」

「さうでせう、箕浦君には僕も感心してます、あの人は書物を積み重ねりや天國へ屆くと思つて、迷はないで書物の塔を築いてるんですからね、しかし私には紙の哲學は退屈でたまりません」と、健次は脣のあたりに微笑を堪へ、パッチリした澄んだ目には、博士の胸の底の紙魚の跡まで映つてゐる。

博士はます〳〵苦い顏をして、「どうも君は眞面目でない、今から讀書を卑しむやうぢや、

人間は餘計の見込がないと斷言出來る、これから國家に盡さうといふ青年が、こんな浮薄な根性を持つてゝどうします、碌に讀書もせんで書物を輕んじたり、人間の義務を滿足に盡しもしないで、世の中を攻撃したり、大間違ひの話ぢやないか、しかしこれも今の雜誌や文學が作つた惡結果の一つだらう。どうも輕佻だ、浮薄だ。過渡期には免れんことだが、武士道の精神も衰へるし、新倫理觀が青年の間に缺乏してゐるから、こんな歎かはしい現象が起る。して見ると私なども進んで積極的に救濟策を講ぜねばなるまい、元來通俗的の片々たる議論を世間に發表することは好ましからんので、成るべくは精力を自分の事業に集中して、自分の新哲學を組織したいのであるが、今の青年の通弊を見ると　どうも社會の爲國家の爲に默々に附してゐられん、私も當面の問題について飽くまで意見を發表したければなるまい」と、演説調で云つた、それが如何にも眞面目で心底から憂世の情が溢れてゐるので、健次は氣の毒になり、

「ぢや私の雜誌へも、そのお考へを書いて頂けますまいか、私共は人生の經驗にも乏しいんですから、先生方の御意見を伺ふと非常に爲になります」と、穩かに殊勝らしく云ふと、博士は頭を軟げに頻りに首肯き、

「つまり何さ、君などはまだ〳〵讀書が足らんし世間で苦勞をしないから、空論に迷はされるんさ」と時計を見て、「ぢや二三日中に筆記に來て下さい、少し纏つた考へを述べよう、それには私が十年程前に書いた、東西倫理思潮を參考にするから、君も一應目を通して貰ひたい、多少今とは考へが違はんでもないが、大體はあれでいゝ」

と、ひよつくり立つて書架を搜し出した。博士は漸く四十を過ぎたばかり、教授の中では幅の利く方ではなけれど、有名な讀書家で、語學は英獨佛に熟達してゐる。一生學問しに生れて來た人といふべく、遊戲と云へば五目並べすら知らぬ。眼の艶氣がなく力もなく、ドンヨリしてゐるのは、多年の讀書に疲勞した結果かとも思はれる程で、卒業後も地位を爭はず榮華を望まず、親讓りの可成の財産あれば生活の上に憂ひはなく、只書籍の中に身を埋め、結婚も三十五六の時、親戚の强固なる勸告で漸く決行した位。日常自分の學問で凡ての社會を指導し得らると確信し、青年にも親切である温和な良紳士だ。

健次は今書架の前に立つた、胴の長く足の短い博士の後姿を見て、その十年一日の如く迷ふことなく書物に耽溺する一生を羨ましく又不思議に思つてゐると、博士は厚さ一寸程の假綴の四六版を引出して、指先で表紙の埃を彈きながら机の上に置き、

「この中の要點は一々原書から直接に引照したのだから、自分でも確かだと信じてる、兎に角一應讀んで下さい、君も必ず益する所があるに違ひない」と、處々開けては二三行小聲で讀み、頻りに首肯いてゐる。

かくて博士は十年前の己れを回顧し、健次は博士の舊著を無理强ひに讀まされる苦痛を豫想して、暫らく無言でゐる。錆びた日光はカーテンの間から洩れて、青い机の上に細く一線を劃してゐる。昨日に變つてポカ〳〵と温かく、健次は締め切つた居間に息の詰るやうに感じた。

「貴下、まだお出掛けになりませんの」と、細君が不意に戸を開けて、半身を現はしたので、博士は漸く氣がつき、「ぢや二三日内に」と、健次に云棄てて、手袋を握つたまゝ階下へ下りた。

（六）

健次は細君に添うて博士を玄關に見送り、そ

の俥の後から自分も歸らうとしたが、强ひて引留められて元の書齋へ舞戻り、母の傳言を慇懃に述べた。

細君は眉を顰め袖を動かして、「まあ、ひどい煙だこと」と、カーテンを手繰つて窓を開けた。烟は渦を卷いて風のない空へ流れて出る。

「で、奥さん何か御用ですか」と、健次は浮腰になつて問うた。

「別に用事といふ程でもないだけど、一寸お話したいと思つて、貴下お急ぎなの」と、上目蓋を上げて健次を見た。

「えゝ、もう社へ行かなければ」と、力なく云つて、見るともなく細君の油氣もない頭の髮から、爪先の汚れた足袋まで見下した。洗ひざらしの地味な銘仙か何かを着て、只菊模樣の襦袢の襟に艶があるばかり、健次は蓆で包んだ美人像を連想した。

「では、何時かの西洋小說の續きは聞かして頂けんのですね、私あの女の行方が聞きたくてならないんだけど」

「いや、もうあんな馬鹿々々しい話をする氣にやなりません、女は虎列剌か何かで死んぢまつたとしとけば、それで直ぐ結果が付いてしまふんです」

「それぢや酷いわ、あんたに苦勞しちやつて、これからと云ふ所で死んぢまつては、……あの續きは屹度面白いに違ひない」

「そりや小說家が有りつ丈の拵へ事を書き並べて長くするから、矢鱈に面倒になるんですが、世の中の事はさう誂へ向きに出來てやしないでせう、假りに女と男と日比谷公園で出會はうと約束してても、その晩女が電車に轢かれて死ぬるか、男がペストに罹るか分つたもんぢやない」

と、投げつけるやうに云つてヘツ〳〵と笑ふ。

細君は頭を簪で搔きながら淋しく笑ふ。

「貴下は何故そんなに暢氣なんだらう。私はね、堪らない程哀れな小說か芝居が見たくつてならないんですが、西洋にはそんな小說はないんでせうかねえ」

「そりや幾らもあるでせう、先生は日本の小說はお嫌ひだが、西洋のものはお讀みのやうだから、聞かせてお貰ひなすつたらいゝでせう」

「だけど先生に話して頂くと、ちつとも面白くないんですわ、悲しいことでも凄いことでも、御當人がちつともお感じなさらんのだもの」

「そんな事を感じてた日にや大學者にやなれんでせう」

健次は椅子を離れて窓側へ寄りかゝり、消え消えした空氣に觸れ、窓前の青桐の葉の黃ばんで中にはもうぼろ〳〵に朽ちかゝつてるのを見て、暫らく默つてゐたが、

「奥さん、もう葉が枯れて來ましたね、この前伺つた時にや、まだ青々してたのに」と、何をか感じた風で向き直つて、「秋になつたせゐか、この書齋も寂として靜かですね、此處で先生は何にも不滿を抱かないで、一心に不朽の事業をして居られるんだ、葉が枯れても落ちても、そんな事にやお構ひなしで、本ばかり見て被入しやる。僕等も矢張先生の後を追つて、當てにならん不朽の事業でも企てるのが本當なんですね」

「そりや私にや分らないけど、男と生れたら誰れだつて世間に尊敬される身分にならなきや虛言なんでせう、貴下は一度も將來の事をお話しなさらんから分らないけど、全體どうなさるの、今日はそれを聞きたいのよ」

「聞いてどうなさるんです」

「少し私に考へがあつて」と、目に媚を呈した。

「將來のことつて何も纏つた考へはありません、只今日社へ行つて鎌田の拙い原稿を賣付けようと思つてるばかりで、跡は何が何やら眞暗闇です」

「織田さんといへば、あの方もお困りのやうねえ、二三日前にも、もつとお金の取れる仕事はないかつて頼みに入らしつたが、全くお困りのやうね、だから先生も大變同情なすつて、是非相當な職を見つけてやりたいと云つて被入しやる。同じ樣に學校を卒業なすつても、貴下と織田さんとは丸で反對ぢやありませんか、顏つきを見てもお話を聞いてても分りますわ、織田さんは何故あゝ元氣がないんでせう、全くいたいたしいわ」

「しかしね、奧さん、織田は貴女方が思つていらつしやる程くよ〳〵してやしませんよ、あの男は自身の書いたものは一度だつて拙いと思つたことはないんです……で、私の將來を聞いてどうなさるんです」

「私此頃氣がくさ〳〵しちやつて、いろんな事が考へられるのよ、……何しろこんな小人數の家に用事もなくつてぢつとしてるんだから、氣が滅入つちまふ筈でさあね、でね、色んなことを考へてね、つまり貴下を立派にして見たくなつたの、私にや子供はなし、また此からも出來つこはないでせう、だから私は歲を取つて、何も樂みがないやうな氣がしてならんから、貴下を自分の子と思つて、世の中へ立派な人間として働かせて見たくなつたの」

「立派な人間てどうするんです」

「そりや一口にや云へないけど、洋行して大學者になるとか、大發明をするとか、そりや貴下の腕次第で、男は何でも出來るぢやありませんか。お金のことなら、私がどうにでもするから、家のことは心配しないで、目的を立てて一心に勉強する氣にお成りなさいな」

「ですが此迄お世話になつたのに、此上御厄介になつちや濟みませんもの、それに先生だつて御承知なさらないでせう」

「いゝえ、先生には私から巧く云へば大丈夫、只貴下が先生の前で眞面目な口さへ利いてゐれば、それで澤山なのよ」と、細君は右の手を机に置き、左の手で袖口を抓んで、側の椅子に腰を掛けてる健次の顏を覗くやうにして云ふ。健次は細君がその品のある顏に巧みに彫り込んである長い睫毛、黑い瞳、青くぼかした白目に艶を含んで自分を見るを見馴れてゐる。

「貴女は何故そんなことを思ひついたんです」

「だつて私は女だから、自分で世間へ出て働きも何も出來やしないでせう、せめて男の子が一人あれば、私の手で理想的に育て上げれば面白いでせうけれどね」

「ぢや貴女は子供が欲しいんですか」

「えゝ、そりや欲しいわ、初めの間は子供なんか、さぞ五月蠅からうと思つてたけど、今ぢや欲しくつてなりませんわ、音樂を習つたり、いろんな事をして來たけれど、矢張駄目ね、此頃は何つてことはない、厭あになるんですよ、子供でもなくちや、一生はどんなに淋しいでせう」

「貴女も淋しいんですか」と、不思議さうに見て、「僅かな壽命だけれど、人間は何かで誤魔化されなくちや日が送れないんですね、酒で誤魔化したり戀で誤魔化したり書物で誤魔化したり、子供に綺麗な着物を着せて飛んだり跳ねたりさせて慰みにしなけりや、人間は毎日泣面をしてゐなくちやならん、私の母だつて私を玩具にしてるんです、貴女だつて玩具が要るんでせう」

「だつて貴下、自分の子を十分に教育して、思ふやうに立派な人間に仕立てれば、どんなに樂みでせう」

「しかし貴女にや子供は出來んから、私を子供代りにしようと云ふですか、急に老人になつたんですね」

「私も老込んだでせう」と、神經がピリ、と動

いた。もう藻搔いても匐ひ上ることの出來ぬ谷に落ちた氣がした。

健次が家族の如く屢々出入し初めたのは四五年の昔だが、その頃は寳石入の指環を光らせ、博士の細君仲間では珍らしくはしやいで、來る人々を攫へては、音樂の話や小說の話に夢中になり、健次などが小說の話から戀の話に移り、こそ〳〵と無遠慮に女の品定めなどをすると、「いやね菅沼さん」と云つて眉を顰めながらも、心では悅しがつて、顏一杯に艶々しい色が漂ふ。健次は何時もこの快活な美人が敎授の細君たるがために、花々しく交際社會へ出る機會のないのを遺憾としてゐた。で、細君は暇な身體だから年中飾裝をして、狹い社交の範圍内では羽振りを利かせて、園遊會などに招待されると、主人を促して出掛けぬことはなく、新婚當時は夏冬の休暇に必ず溫泉か海濱へ旅行したが、そんな時には自分で服裝を凝らすのみならず、博士の髮の刈り振りから手袋の色合まで八釜しく干涉する。汽車も一等でなくては承知しなかつたものだが、この一二年以來はその態度が急に變つて、頭髮も丸髷に結つたかと思ふと、手づくねの束ね髮で平氣でゐたり、古代模樣の品のいゝ丸帶を締めてたかと思ふと、唐縮緬の艶のない腹合帶に代へたり、家にゐてもこつてり白粉をつけてるかと思ふと、戶外へ出る時でも素面で氣にもしないことがある。

そして細君には寵兒が一人缺くべからざるものになつてゐて、健次の目にはそれが誰れであるかよく分つてゐる。博士の殊に親しくしてゐる四五人の學生は、常にその家へ出入し、細君の發起で晩餐に招かれることもあるが、その中で殊に細君の寵を辱うする者が一人ある。それが箕浦であることもあれば、健次自身であることもある。で、その寵兒となると、芝居のお伴も仰せ付かる、矢鱈に物を呉れたがる。一寸訪問しても、側を離さないで、頻りに話をしかける。

健次は差し込む日光を遮けて椅子を後へうつし、兩手で頭をかゝへ、少し身を反らせて欠伸をして、

「奥さん、それ程靑年がお好きなら、箕浦でも保護して洋行でもさせておやんなすつたらいゝでせう、あの男には先生も望を囑していらつしやるんだから、丁度適任ぢやありませんか」

「ぢや貴下は如何もする氣はないの、何故さう意氣地がなくなつたのです、この春お母さんがお出でなすつた時も、此頃は醉つぱらつて歸つて仕方がないつて心配していらつしやつたが、どうしてそんなにおなりなすつたの、今日も大層元氣がないぢやありませんか」

「急に眠くつて仕方がないんです」と、又欠伸をして、「それに今朝から、母と先生とそれから貴女とに小言ばかり云はれて、意氣銷沈した所です、結婚しろ、眞面目になれ、勉强せい、と此頃お題目のやうに私の四方に聞えるんでうんざりしてゐます、だから私は下宿屋へ逃げつちまふつもりです、もう此家へも滅多にお伺ひしません」

と、健次は立上つて、風呂敷包を持つたまゝ室内を行戻りした。

「家へ來ないつて、何か外にいゝ事が出來たのですか」

「さうでもないけれど、もう此迄の友人や長く交際つてる人にはあき〳〵しました、これから新奇に事を始めなくちや自分の身が腐つてしまひます」

「だから私が云つてる通り、新奇に何か目醒しい仕事をお始めなさいな、男なら何でも出來るぢやありませんか、御自分の名を世間に歌はせようと、人の上に立つて自分の威光を見せようと、男にや世間が廣いぢやありませんか」

「それで貴女は私が苦しんで仕事をして、世間に知られるのを御自分の慰みにしようといふんですか」

「そりや樂みでさあね、これまで家の者のやうにしてるんだし、私は貴下が好きでならないんですもの」と口元に力を入れて幼兒を綾すやうに云つた。

健次は長椅子に身を埋め、微笑して、「僕はね奧さん、誰れにも好かれたくも同情されたくもないんです、貴女がいくら同情して下すつたつて、私と貴女とは霞を隔ててお話するんです、現在の親だつて自分の子を解し得ないで、勝手に自分の頭で拵へ上げて喜んだり悲しんだりしてる、つまり人間は自分一人だ、自分と他人との間には越えることの出來ん深い溝渠が横はつてるんです、箕浦だつて織田だつて、要するに私からは赤の他人で、互ひに本性を包んで交際つてるんです」

「貴下、今日は、どうかなすつたの、いやに理窟ばかり云つて。……ですけど人の本性が分らなけりや分らないで、それでいゝぢやありませんか、好かれたら好かれたで、それ以上穿鑿するにや及ばないわ」

と、今日は常の如く無駄話に笑ひ興ずることもなく、二人で默つて相手を見てゐたが、書生が戸を開けて、「箕浦さんがお出でになつた」と知らせたので、健次は急に細君に挨拶して、歸りかけた。

「貴下、下宿屋へ何時お移りなさるの」と細君は階子段で尋ねた。

「まだ分りません」

「私遊びに行きますよ」

（七）

社の階子段は社員の多年の足の力で凹んで、砂埃がその中に溜つてゐる。健次はそれを一つ一つ踏み上る毎に、夕暮の果てのない旅路を辿るごとく感ずるのだが、たま〳〵編輯の相談會だとか、自分の月給の前借の談判だとか、多少でも波瀾があると、少しは活氣がついて二階へ駈け上る。今日は織田の原稿を賣付ける役目を帯びてゐるので、編輯長の年中變らぬ顏を見るにも張合ひがあつたが、さて說き付けて見ると、彼れは頑として聞かぬ。さう幾月も續いて同じ人の舊稿は出せぬといふ。大威張りで受合つたものを拒絶されては顏が立たぬと思つたが、強請する譯にも行かず、少し萎れて社を出た。

彼れは何時ものやうにガッカリして電車に乘つたが、織田の方も棄て置けぬので廻り道をして麹町のその家を訪ねた。家族に會つては面倒だから、勝手口から便所の側を通つて座敷の縁側へ出ると、織田は既に夕闇の迫つてるのにランプも點火ず、障子を開けて机に向ひ何やら書いてゐた。

「おい君、原稿は駄目だぜ」と突如に云ふと、織田は頭を持上げて「やあ」と云つたきり、じろじろ健次の顏を見て、「駄目かい、何故だ、困るねえ」と、むく〳〵と身を起して、縁側へ出た。

「まあ心配し給ふな、おれがどうかする、まだ十や二十の金にや不自由しないよ」

「當てにしてたのに困るねえ」

「今に僕がどうかしてやらう、これから何處かへ出掛けないか」

「僕は出られりやしない、留守番がないから」

「病人はどうだ」と、健次は今思出したやうに小聲で聞く。

「別に變りはない、まあ上り給へ、今君のシスターが見舞ひに來て呉れて、僕の妹と何處かへ出て行つた」

「さうか、彼女も此頃は浮れ歩いてやがる」

織田はランプを點火て、薄い座蒲團を出した、健次は靴を穿いたまゝ、縁側から寢そべつて、室

内を見まはした。狹くはあり裝飾もないが、彼れの家ほど見つともなくはない。床の隅には新聞や原稿紙の側に、ナポレオンの小さい石膏が置いてある。これは織田が學校時代に五圓で買つたものだ。

「君の家も陰氣だね」

「うゝん」と氣のない返事をして、織田は書いてしまつた原稿の枚數を數へてゐたが、襖一重の隣室にはコホン〳〵咳をして、それから呟く聲がする。

健次は厭な顏をして起直つて、小さい聲で、

「僕はもう歸らう、細君にも會はないから、よろしく云つて呉れ給へ」と石段に立つと、

「まあ待つて呉れ給へ、君に話がある」

「だつて、此處で話なんかしちや惡いんぢやないか」

「何、構やしないが、君が遠慮するなら、一寸其邊を散歩しながら話さう」

と、織田は帽子も被らずに小さい庭下駄を引掛けて外へ出て、直ぐ近くの九段坂の方へ向つた。

「桂田さんがね」と、織田は兩手を懷内に入れて、健次を下目に見て、「君何だよ、あの人が僕に同情して、遠からず僕にいゝ職を周旋してやると云つてたよ」

「さうかい、ぢや僕も君の原稿に苦勞しなくともよくなるね、で、僕に話といつて何だい、金なら明日までに必ず拵へてやる」

「それも是非賴んどくが、實は妹の事で話したいと思つて」

「何だ妹のことだつて、シスターを誰れかに遣るんか」

「まあそんなものだ、でね、一言で言ふと、あれを君が貰つて呉れんか」

と、織田は事もなげに云つて、無論健次も左程反對もすまいと思つてゐる。

「僕にかい」と、健次は冷笑した。

「昨夜君の注意で少し氣がゝりになつたから、歸つて妻に訊くと、妻が、そりや屹度菅沼さんだらう、あの方なら丁度相當だから、早く定めてしまふがいゝつて云ふんだ、僕も同意だから一つ君承知して呉れないか」

「そりや細君の見當違ひだぜ、多分何だらう、シスターが邪魔臭いから、早く追片付けたいんだらう」

「いや、そればかりぢやない、僕も早く定めて妹の身に間違ひのないやうにしたいんだ、世間に惡い噂でも立つと困るからね、あれについちや、僕も責任を感じてるんだからね」

「ぢや僕をシスターの防腐劑とするんだな」と、面白さうに笑つたが、織田は飽くまで眞面目で、

「打明けて云へば、さうして貰ふと僕も大いに助かるんだ、今ぢや實際弱つてる、彼奴にや金がかゝつてねえ」と、平生の癖で粘り强く一つ事を繰返し出すので、健次は弱つたが、頭から反對も出來ず、

「僕よりか箕浦にやり給へな、君はあの男を嫌つてるが、情合もあるし人間がゼントルだからいゝぢやないか」

「いや箕浦にや困るよ、あゝいつた詩人肌の男は僕は蟲が好かん、花の散るのを蝶々だと思つたり、木の葉が落ちるのを見て、萬物凋落の秋が來たといつて涙を流す奴には信用して妹を託するに足らんと思ふ」

「そりや尤もだ、君は箕浦を評する時には妙に名言を吐く、平生は平凡な涙臭い事ばかり云つてるのに。しかし君の妹は箕浦には釣合つた縁ぢやないか」

「いかんよあの男は……それに箕浦ぢや妹は制馭して行けやしない」

「君にも手綱は取れんだらう」と、健次は眠りの

足らぬ目をこすつた。身體は倦くて持て餘すやうである。

空は晴れて、空氣は肌に快く、周圍は人出も多くて騷がしいが、二人は元氣なく刻み足に歩いてゐた。

「やあ、今日もやつてるな」と、織田は向うを見たので、健次も目を向けると、坂の中途に一團の群衆の中から、演說めいた聲が聞える。

「何だいありや、廣告屋か」

「救世軍だよ」

「さうか」と、健次は別に氣にも留めなかつたが、自然に側へ近づいたので、立留つて、人垣の間からのぞくと、木綿の紋付を着た二十前後の青年二人と、黑い袴をつけた若い女とが立つてゐて、その一人が今演說の最中である。左の手を腰に當て右の手を動かし、色の黑い角張つた顏を少し仰向け、

「今私が申上げた通り貴下方も罪の人です、早く悔い改めなければ誠の人間にはなれません、つまり罪惡のある人だから」

と、ゴツ／＼した調子で、甘味も辛味もない言葉を吃り／＼叫んでゐるが、滿身に力を籠めてゐるため、顏は少し赤くなり、額には汗さへ浮んでゐる。

「あの男は何を云つてるんだらう、何の事やら分りやしない」と、健次の側の老人が笑つて去つた。

「馬鹿ッ」と何處からか聲がする。

子供が二三人前へ進んで、口を開けて不思議さうに見つめてゐるのみで、外の者は皆冷笑してゐる、通りがかりに物好きに足を留めて、「何だ耶蘇か、喧嘩かと思つたのに」と、失望して行く者もある、誰れも眞面目に聞く人もないのだが、かの青年は聲を張り肩を怒らせて、

「皆樣懺悔なさい、神樣にお縋りなさい、日本國の興廢は軍人や政治家によつて決するのでありません、神樣の道を世間に行ふか行はぬかによつて定まるのであります」と說く。

健次は甲去り乙來る間に、知らず／＼前に進んで、その演說振りを見つめてゐたが、織田は後から肩を叩いて、「おい君、行かうぢやないか」と聲をかける。

「まあ待て、も少し聞いて行け」

「何が面白いんだ、こんなものが」

と織田が云つたが、健次は何も答へず、目を傳道者から離さない。そしてかの青年は話を續けて今日の社會の淫風や飲酒の害を堅苦しい拙い言葉で述べ立ててゐると、誰れの惡戲か、小石が彼れの肩を掠めて健次の前に落ちた、健次は思はず後退りしたが、かの傳道者は微塵も動かず泰然として說を進める。

かくて凡そ二十分もして、健次は書物を女の手から貰つて群集を分けて出た。

「君は何故あれが面白い」と、織田は長く待たされたので恨めしさうな顏をする。

「面白いぢやないか、彼奴は地球のどん底の眞理を自分の口から傳へてると確信してる。あの顏付を見給へ。自分の力で聽衆を皆神樣にして見せる位の意氣込みだ。人間はあゝならなくちや駄目だ」

「何にも感心しない君が、何故今夜に限つてあんな下らないものに感心する？」

「さうさ、僕は救世軍にでも入りたいな。心にも無いことを書いて、讀者の御機嫌を取る雜誌稼業よりや、あの方が面白いに違ひない、あの男は欠伸をしないで日を送つてるんだ、生きてらあ」

「はゝ」と織田は大口開けて勢無く笑つて、

「僕は青年が淺薄な說教なんかして日を送るのが不憫になる」

「しかし淺薄や深刻は本當は問題ぢやないんだね、打たれようが罵られようが、自分のしてる

事が何であらうと關ふものか、もつと刺激の強い空氣を吸はにや駄目だ」と、健次は歎息する如く云つたが、織田のぼんやりした顔を見上げると、急に「ぢや此處で別れよう」と、早口に云つて輕く會釋し九段の坂を下りた。で、「まだ話があるんだ」と、織田が呼留めた時は、もう人影に隱れてゐた。

（八）

まだ月初めであれば、健次も五六枚の紙幣はポッケットに潛ませてゐるので「櫻木」へでも行かうかと思つたが、お雪の顔も、もう見飽いて鼻につく。型に取つた定り文句を並べるか、キャッ〱と騷ぐ外には能がなく、頭から足の裏まで何處を押したつて、碌な音一つ吐き出さぬ癖に、二三日續いて足を向けると、此方に思し召しでもあるやうに自分定めに自惚れたがる女中共を相手にして、拜顔料を差出すのも馬鹿馬鹿しいと今夜は思ひ留まつた。で、彼れは西洋料理店でウヰスキーを傾け、二三品の洋食を食ひ、それから氣まぐれに神田の西洋書店へ立寄つた。何か自分を刺激して、新しい生命を惹起すものはないかと、新着の文學政治宗教から工業や鑛物の書類まで、殘る隈なく覗いたが、どれにも自分を魅するやうな破天荒の文字が潛んでる氣もする。で、あれか此れかと撰擇を重ねた擧句、遂に或露國革命家の自傳と、偶然目についた棚の隅の或冒險家の北極紀行とを購つた。書物を抱へて上野で電車を下りたが、醉ひはまだ醒めず、家へ歸るのも厭であれば、ふらふら公園を歩いて銅像の側のベンチに腰を掛けた。後へもたれて目を瞑つてると居睡りをしさうで、足元に力がなく、身ぐるみ地の中へ吸ひ込まれさうな氣がする。電車の音も遠い世界で響いてゐる如く、自分は此のまゝ動けなくなるやうに感ぜられる。身をベンチの背に投げ出し、帽子の落ちさうなのも關はず、心を夢現の境に迷はせてゐたが、書物が膝から辷り落ちるので、パッチリ目を開くと、木の葉が額に觸れ、埃を含まぬ澄んだ空氣が身に染み、自分の周圍のみは薄暗いが、空には星が多く、目の下には燈火が煌いてゐる。四五間前には黒い人影が二つ、深沈に話をしてゐたが、やがて暗闇の中に消えてしまつた。

彼れは孤獨の感に堪へぬ、淋しく心細くてならぬ。少年時代に自分より強い奴、脊の高い奴にぶつ付かつて喧嘩をしてゐた頃は、身體中に生命が滿ちて、張合のある日を送つてゐたのだ。近松や透谷の作を讀んで泣き、華々しいナポレオンの生涯に胸を躍らせた時分は、星は優しい音樂を奏し、鳥は愛の歌でも讀んでゐたのだ。しかし不幸にも世が變つた。何が動機か幾つの歳にか、自分にも更に分らぬが、星も音樂を止め鳥も歌を止め、先祖傳來の星冑も白金作りの太刀も、威光が失せて、自分には古道具屋の賣物と變らなくなつた。今から思ふと、子供の折によく自分に喧嘩を吹きかけた隣の鐵藏なんかが懷かしい。彼奴のお蔭でどの位元氣よく力んでゐたことか。今の自分はどちらかと云へば愛されて日を送つてゐる。箕浦も織田も桂田も、いやそれ許りぢやない、桂田夫人にも織田の妹にも櫻木のお雪にも愛せられてこそゐれ、さして嫌はれてはゐない。何處にも鐵藏が居ないのだ。「愛せらるゝは幸なり、愛する者も幸なり」聖人だの詩人だのは勝手な定義を云つてやがる。少くもおれにや適用出來ぬことだ。愛せられゝば愛せられる程、自分には寂しくて力が拔けて孤獨の感に堪へぬ。いつそのこと、四方から自分を憎んで攻めて來れば、少しは張合が出來て面白いが、撫でられて舐められて、そして生命のない生涯、それが何にならう。「迫害される者は幸なり」つていふ此奴は

當つてる言葉だ。苦しめられようと泣かされようと、傷を受けて倒れようと、生命に滿ちた生涯、自分はそれが欲しいのだ。

健次は立上るのも物憂さうに、から考へてゐる中に、酒が醒めて夜風が冷くなつた。彼れは主義に醉へず讀書に醉へず、酒に醉へず、女に醉へず、己れの才智にも醉へぬ身を、獨りで哀れに感じた。自分で自分の身が不憫になつて睫毛に一點の涙を湛へた。

靜かな風が足許の落葉を吹きころがし、樹上よりも二片三片頭を掠めて飛ぶ。

巡査が横目で健次を見返りながら、悠然として歩いてゐる。

健次は無意識にベンチを離れ、帽子を被り直して、暗闇の道を辿つて新坂へ出た。

「結婚？」と、思はず口へ出したが、その瞬間口元に皮肉な笑ひを洩らした。

「ノンセンス！」結婚して家庭を造る、開闢以來億萬人の人間が爲古したことだ、桂田の家庭織田の家庭、家庭の實例はもう見飽いてゐる」と胸の底から答へる。

（九）

翌日は日曜であれば、一家は遲くまで眠り、九時頃に茶の間に揃つて朝食の膳についた。近來健次が家族と一緒に食事をするのは、殆んど日曜の朝のみである。年齡の割合に老人めいてもゐないが髯には白髮の多く、上目蓋のたるんでる父と、肉付のよく目と口には品のある姉娘の千代と健次によく似て小柄で愛嬌のある末娘の光とが健次を挾んで坐り、母は下女兼帶で甲斐々々しく立働いてゐる。

父は出勤時刻にせかれぬ爲、役所の話などをして、ゆる／＼飯を食ひ、皆なの顏を見て、獨りでほく／＼喜んでゐたが、もう膳を離れて煙草を吸ひながら新聞を讀んでる健次に向つて、

「何か面白いことがあるかい、何とか中將の姦通事件はどうなつた」

「今日は何も出てゐませんよ」

「どうも軍人が腐敗しちや困るな、武士道の精神が衰へるとそんなことが出來て來るんさ。今の中に社會に士氣を鼓吹しなければ、日本の國家も將來が案じられるて」と、父は鼻水を膝に落して、「今ぢや學校教育も柔弱に傾いてるからよくない、それに家庭で小さい時分から武士の魂を叩き込まんから、堅固な人間が出來ないんだ、東京でも今は素町人ばかり跋扈するから、風儀が紊れるのさ」と、口には慷慨めいたことを云つたが、顏は如何にも呑氣で、此まで苦勞を重ねて來た影は何處にもない　そして素町人呼はりはこの人の口癖で、自分でもそれが愉快でならぬと見える。

「素町人でも何でも早くお金持になることさ」と、母は横合から癇走つた聲を發した。

「本當だわ、お金がある方がいゝわ」と、お光は一も二もなく母に加勢する。

「せめて男爵にでもなれるといゝけど、昔は旗下だつて武士だつて詰らないわね」

と、姉娘は眞面目に感じた。で、暫らく父子で、武士の魂だの素町人根性だのと言合つて、果ては無邪氣に笑つた。

笑つてしまつて、膳が片付くと、姉娘は今迄默つてゐた兄に向つて、

「兄さん、今日は上野で音樂會があつて、ソロの上手な西洋人が出るんですつてね、新聞にや出てゐなくつて」

「さうだね、出てるかも知れんよ」

「兄さんも聞きに被入しやいな、屹度面白いわ」

「私も行きたいと云ふんだらう、兄さんにお構ひなしで一人で何處へでもお出でなさい」

「そりや一人だつていゝけど、……」

「切符を買つて呉れだらう、そりや眞平御免だ」

「酷いわ兄さんは、自分一人で勝手に遊んでて、何一つ私の頼みを聞いて呉れたことはないんだもの」

「本當だわ、ねえ姉さん」と、妹娘も相槌を打つ。

「織田さんとこの兄さんは、そりや妹思ひよ、お花平生だつて何だの彼だのと世話を燒いて、見にでも音樂會にでも、屹度連れて行くんだわ。だから幾ら兄さんが學問が出來たつて、人間として織田さんの方がえらいのね」

「チェッ、生意氣云つてらあ」と、健次は横を向いて、今日は如何にして暮らすべきかと考へてゐる。

「兄さんは何故音樂が嫌ひなんだらう、文學士の方は皆音樂や芝居が好きだのに、兄さんばかりは、ちつとも趣味がないのね、音樂ぐらゐ研究なさればいゝに」

「だからお前は箕浦の女房にでもなつて、年中キユー〳〵ピン〳〵騷げばいゝ、彼奴とお前とはよく似合つてらあ、おれはもうお前のぺちやぺちや音樂だけでうんざりしてゐる」

姉娘は少し顏を赤くして横を向いて、口を噤んだ。

父は健次の卷煙草を取つて火をつけ、二人の話を面白さうに聞いて、微笑々々してゐたが、二人が默つてしまふと、

「どうもおれには分らない、學問をした男が、音曲に夢中になるなんて餘程變だ、健次にはおれが昔から武士の精神を敎へ込んでるから、そんな柔弱な氣風に染まないんだらう」と、自分で首肯いてゐる。

「そんな武士の精神なんか下らないわ、お父さんは何ぞといふと兄さんの贔屓ばかりして厭になつちまふ」

「はゝゝ、そんな事を云ふものぢやない。兄さんは菅沼家には大事な寶だ、うんと勉強して立派な人間になつて貰はにや、おれが御先祖に申譯がないぢやないか、だから傍から邪魔をしないで、思ふ存分にやらせなくちや……今の間貧乏がつらからうと、それが何だ、貧乏を苦にして見苦しい根性になるのは、それが素町人だ。度々話して聞せたが、菅沼家は代々高潔な考へを以て忠孝と武勇を勵んだ家柄で、系圖に少しの疵もないんだ。だから健次もよく心得て、名譽を世界に傳へるやうにせねばならん」

健次は平生父から小言を聞くことなく、他人の前ででも自分の自慢をされるのを厭に感じてゐたので、今も自分が大英雄にでもなるやうに期待する口振を聞くと、急に不快になり、新聞を押しのけて、ふいと自分の部屋へ逃げた。

「お父さんは兄さんばかり大事にするから我儘になるんだわ、學士にまでなつてて、親や妹の世話が出來なくちや駄目ですよ、お父さんももうお役所なんか止して大威張で兄さんに養つてお貰ひなさればいゝのに、……本當につまらないわ、外へ出てはお酒を飲んで、何か話でもすると、惡口ばかり云つて、あれぢや何時まで立つても立派な人間になれやしないわ、え、そりやなれないに定つてるわ」と、姉娘はさも口惜しさうに云ふ。

父はハッ〳〵と笑つて、「まあ默つて見て居れ、お前達にや分るまいが、おれにや健次の氣性はよく分つてる、今に何か爲出かすに違ひないからよく見て居れ、男の腹の中は女にや知れんものだ、學士になつた位で、ハイカラでもつけたり、妹に花簪なんか買つてやつて喜んでるやうな健次ぢやない」

「お父さんは兄さんを買被つてるんですよ、だから老人には何も分らないんだわ、今に後悔することが屹度あると私思ふわ」

「はゝゝゝ、下らないことを云ふもんぢやない、お前らは今に健次の妹だと云はれて名譽に思ふ時が來る」

「私、ちつとも兄さんなんか當てにしちやゐないわ、何であんな人」

と、新聞を引寄せて續き物に目をつけ、熱心に讀み出した。妹娘は緣側へ出て猫の頭を撫でながら唱歌を唄つてゐる。

健次は障子を締め切り、机に向つて正坐し、「革命家の自傳」を開いた。心を凝らし素早く走り讀みしてゐたが、著者が貴族の家に生れ幼時より宮中に出入する敍述を讀み終ると、書物を伏せて仰向けに寢た。自分とは緣の遠い境遇の異つた人の閱歷が如何程の興味があらうぞと失望した。そして机から書物を引下して、只氣まぐれに處々拔讀すると、農夫に伍して革命を說いたり、國を脫走して他國に流浪するあたり、さも面白さうに書いてあるが、最早健次にはそれが光のない艷の失せた文字と見え、少時父から彰義隊や白虎隊の話を聞いた時ほどにも、胸も躍らず血も湧かず、目を瞑つて心の動くに任せてゐると、自分の左右前後には火花も散らず、鯨波も聞えず、只銀座には埃が立つて、うじよ〳〵と人の歩いてる樣が頭の中に浮んで來る。

で、彼れは緣側の障子を開けて、庭を見ると、父は日曜毎の役目を怠らず、草履を穿いて掃除をしてゐる。昨日と同じく空は冴え風もなく、日は生溫かく照つて、竹箒持つた老人の影のみが緩く動いてゐる。健次は欠伸をして、又書物を枕に寢ころび、兩手を投げ出して、うと〳〵してゐたが、暫らくすると妹共の騷ぐ音がして、終ひには英語の朗讀が聞える、學校の懇親會で、織田の妹と二人で朗讀するといふ英文の對話を諳誦してゐるのであらう、太くて甘つたれた聲で、如何にも陽氣さうに讀んでゐる。

健次は心がむしやくしやして、俄かに起上り、帽子を被り出支度をして、玄關まで出かけたが、又引返して何氣なく妹の部屋へ侵入すると、妹は彼れを見上げて、ぱつたり朗讀を止めた。

「おい、一寸見せろ」と、健次は妹の手から洋紙を取上げて見ると、「二人の不幸なる娘」と題して、その會話が書いてある。

「今お稽古してるんだから、兄さんは彼室へ行つていらつしやい」と、妹は健次の手から洋紙を奪ひ返した。

「おれが茲で直してやるから、讀んで見ろ」と、健次は帽子を被つたなり坐り込んだ。

「兄さんは直ぐ冷かすから厭だけど」と否んだが、漸く納得して、自分の分だけを拾つて讀んだ。筋は幼馴染の二少女が、一人は東北一人は九州と十年も離れてゐた後、或處で思ひがけなく巡り合ひ、その間の境涯の辛酸を語り合ふ哀れな物語。發音の法則は滅茶々々だがよく諳記してゐて、目を細め言葉の調子も哀れげに、表情澤山で朗讀し、「この次には二人とも、もつと幸福な人間に生れて來ませう」と、淚で別れる所で、會話が終ると、

「上手でせう」と、千代は兄を見て、息をついた。中々得意らしい。

「うん巧い、よく覺えられたね」

「もつとお稽古しなければ不安心だわ、織田さんに負けちや厭だから」

「あの女も稽古してるんか」

「え、そりやしてるわ、外の人も一生懸命ですもの、私今日も午後から織田さんとこへ行つてよ」

「病人のある家へ行つたつて駄目ぢやないか、まさかあの家で、芝居の眞似なんかも出來まいし」

「一緒に外の家へ行くんだわ」

「箕浦の家へでも行くんだらう」

「行つたつていゝでせう、惡くつて」と、わざと拗ねて見せる。

「惡いと云やあしないよ、毎日でも遊びに行くがいゝ、あの男なら親切に發音も直して呉れるし、音樂の議論ぐらゐ聞かせて呉れらあ、……それからお前、織田へ行くんなら、これを持つてつて呉れ」と、健次は今思出した如く、書齋から紙入を持つて來て、紙幣を反古紙にくるんで妹に渡し、「これだけ織田にやるんだ」

妹は不審さうに兄を見て、「これをどうするの、織田さんの兄さんに貸すのですか」

「何でもいゝから、只持つてけばいゝんだ」

「だつて私が持つて行くのは變だわ、それに兄さんはよく織田さんにお金を貸すのね、何故織田さんばかり好きなんだらう、あの家よりやいくら私の家の方が貧乏だか知れやしないのに、本當に兄さんは變な人ね」と、妹は反古包をひねくつて、その金目まで覗いて見てゐたが、

「お前にやるよりや、織田にやつた方が、いくらやり榮がするか知れやしない」と、健次は無邪氣に笑つて、當てもなく戸外へ出た。妹は坐つたきり目を据ゑて、「兄さんは何故だらう、お鶴さんに心があるから、あんなに織田さんを大事にするのぢやないか知らん、さう云へば思ひ當ることが幾らもある、屹度さうだ、戀で煩悶してるんだわ」と、自分の身に引くらべて想像に耽つてゐた。

（十）

健次は短い秋の一日を持餘した。上野の公園をぶらつき、或は珈琲店へ入り、或はビアーホールへ入り、それから社の同僚を訪ねて、氣乘りのせぬ話に相槌を打つて、漸く二三時間を空費し、その宅を出て、湯島天神の境内を通り拔けて歸路に就いた。特筆すべき事件は少しもない。忙しい人は仕事に心を奪はれて時の立つを忘れ、歡樂に耽れる人も月日の無い世界に遊ぶのであるが、此頃の健次は絶えず刻々の時と戰つてゐる。酒を飮むのも、散歩をするのも、氣焰を吐くのも、或は午睡をするのも、只持扱つてる時間を費すの爲のみで、外に何も意味はない。そして一月二月を取留めもなく過しては、後から振返つて、下らなく費した歳月の早く流るゝに驚く。

彼れは激烈な刺激に五體の血を沸立たさねば、日に〳〵自分の腐り行くを感じ、青春の身で只時間の蟲に喰はれつゝ生命を繼いでゐる現狀を溜らなく思つた。そして空想を逞うして色々の刺激物を考へた。普通の刺激物は何の效目もない、酒なら燒酎かウヰスキーを更にコンデンスした物、煙草なら阿片、戀なら櫻木のお雪や織田のお鶴のやうな女と、甘つたるい言葉を交換したのでは微醉もする氣遣ひはない。正義も公道も問題ぢやない。自分を微温の世界から救ひ出して、筋肉に熱血を迸らすか、腸まで蕩かすもの、それが自分の唯一の救世主だ。山賊に組して縛首の刑に會はうとも、革命軍に加つて爆裂彈に粉碎されようとも、結果が何であれ、名義が何であれ、自分を刺激する最初のものに身を投げて、長くても短くても、或は即刻に倒れてしまつてもよい。そしてこんな刺激物が自然に自分の前に現はれねば、自分から進んで近づいて行く。渦が捲き込んで呉れねば、自分で渦の中へ飛び込む。鐵藏がゐなければ自分で鐵藏になつて喧嘩を吹かけて行く、戰爭も革命も北極探檢も人間の退屈醒ましの仕事だ。平坦の道には倦むが、險阻を攀上つてゐれば、時をも忘れ欠伸の出る暇もない。

「よし渦へ入るか崖を上るか」と、彼れはステッキを持つた手に力を入れたが、その手は直ぐ弛んでしまふ。社會のため主義のため理想のためと思へばこそ眞面目で險崖上りも出來るが、

初めから退屈屋ましと知つて荊棘の中へ足を踏込めるものか。理由もないのに獨りで血眼になつて大道を馳せ廻れるものか。何故毎日の出來事、四方の境遇、何一つ自分を刺激し誘惑し虜にするものがないのであらう。只日々世界の色は褪せ行き、幾萬の人間の響動は葦や尾花の戰ぐと同じく無意義に聞えるやうになつた。自分の心が老いたのか、地球其自身が老い果てて、何等の清新の氣も宿さなくなつたのであらうか。

彼れは目を移して道の左右を見た。夕日は電信柱の影を金物屋の壁に印してゐる。壁の隅には薄墨で「法樂加持」と書いた大福寺の廣告が貼りつけられ、その片端が剝げかゝりふら／＼動いてゐる。牛乳配達と點燈夫とが前後して走つてる後から、白い帽子を戴き裾の廣い黑衣を着け、腰に長い珠數を垂れた天主敎の尼が二人、口も閉ぢ側見もせず、靴は土を踏まぬが如く、閑雅に音をも立てず歩んで來る。深く澄んだ空を煙突の黑煙が搔亂し、その側を一列の鳥が横切つた。晝間の温かさも急に薄らいで、健次は肌寒く感じた。

彼れは足と心を疲らせて、兎に角家へ歸つた。妹は他所行の大切の紋羽二重の羽織を着たまゝ、茶の間のランプを點火てゐた。

「あら、兄さんお歸り、私も今歸つたところよ」と、マッチを火鉢へ棄てて、艶々しい顏を見せた。

「織田は何をしてた」

「勉強してるわ、でね、お金を渡すと、何だか極り惡さうに受取つて、兄さんにお禮を云つてたわ」

「さうか」と、健次は所在なさに、火鉢の前に片膝立てて坐り、火箸をいぢつてる。妹はその側で羽織を脫いで疊みながら、ちよい／＼兄の顏を見上げては、

「織田さんは二三日中に兄さんに逢ひたいと云つてましたよ、是非話を定めることがあるんだつてね、兄さんも知つてるでせう、どんな話だか、私も織田さんの言振りで荒方推察してるけど」

「さうか」と、健次は氣に留めぬ風なので、妹はわざと調戲ふ氣で、

「當てて見ませうか、屹度あの事だわ」と莞爾した。

「あの事つて鶴さんの緣談だらう」と健次が小憎らしい程平氣なので、妹は、

「兄さんはよく御存じね、同意するんでせう、兄さんも」

「どうかねえ」

「どうかねえつて、それでいゝぢやありませんか、其の事で私兄さんに話があつてよ」と云ひかけた所へ、母が勝手から入つて來たので口を噤み、羽織を簞笥へ收めた。

「さあ御飯だ／＼」と、母は膳立して、汁のこぼれてる鍋を火鉢に掛けた。

健次は「まだ飯は欲しくない」と云つて、自分の居室へ入ると、妹は後から駈けて來て、ランプを點火た。平生に似ず親切に煙草盆まで掃除して持つて來た。

で、健次が机に肱を突いて煙草を吹かし、相手にする風はないのに、その傍に坐り、

「でね、兄さん」と口を切る。「今の話、兄さんも考へてるんでせう、どうなさるの」

「何だい織田の事か、それを聞いて何にする」と、健次は不審さうに妹の顏を凝みた。

「何つて事はないけど」と、目を外して、「私、今日織田さんからも、お鶴さんからもいろんな事を聞いたのよ」

「何を？」

「織田さんの方ぢや、もうちやんと一人で定めてるんだわ、それに向うでは、兄さんも家のお

母さんもお父さんも、屹度承知することと思つてるらしいのよ、お鶴さんも兄さんから聞いたのか今日は樣子が變つてるし、明日お稽古に私の家へ被入しやいと云つても、何時も來たがる癖に厭だつて云ふんですもの」

「おい、下らない話は止せ」

と、机に向つて、經濟書を開いて、ぼんやり讀んでゐたが、妹は尙ほ側に坐つてゐて、

「だつて兄さんも早く結婚なすつた方がいゝでせう、家の爲から云つても、兄さんの身が定つて、お父さんの責任を輕くしなくつちや仕樣がないですもの、それが一番の孝行だと思ふわ、それにお鶴さんは一家の主婦として缺點がないんだから、私からも兄さんに勸めたい位よ」

「お前どうかしたのか、酷く今日は眞面目くさつた事を並べるね」と、健次は笑つて、「お前はよくお鶴さんの惡口を云つて、あれぢや家は持てないなんて云つてたぢやないか、急に變節したね、御馳走にでもなつたんかい」

「あら酷いわ、私織田さんとこで少とも御馳走なんかになりやしないわ」

「でも御馳走になつた顏付をしてるぢやないか、箕浦の家へも寄つたのか」

「えゝ」と妹は曖昧な返事をする。

「お鶴さんと二人で朗讀でもして騷いだのか」

「えゝ、兄さんによろしくと云つてたわ」

「お鶴さんと一緒に行くと、あの男が優待するだらう」

と、健次は何氣なく云つたが、妹の耳にはそれが鋭く響いて、急に考へ込んだ。健次は箕浦から屢々戀愛論を聞かされたのだが、先日或雜誌に載つた彼れの抒情的の美文を讀んだ時、それが彼自身の事を書いてるので、相手は織田の妹だと感付いた。そして自分の妹の竊かに箕浦を思つてるのが可笑しくもあり、可哀さうでもあつた。しかしそれを妹に知らせる氣でもなかつたのだ。で、

「學校の懇親會は何日あるんだ」と、聞きたくもないことを、わざと柔しい聲で問うた。妹は碌に答へもせず、暫らくして浮かぬ面を上げて、

「兄さんは結婚する氣ぢやないんですか」と、さも妹の身の上にも重要問題でもある如く感じてゐる。

「お前はおれを織田の妹と結婚させたいのか、それが何かお前の利益になるんか、變だね」と、健次はお轉婆の妹の生眞面目な態度を怪んだ。

「私の利益なんて酷いわ、兄さんの爲を思つてるから聞いて見てるのに」と、袂の先をひねくつて言葉もはき〴〵しない。

「有難う、しかしおれは近々下宿屋へでも行つちまふんだ」

「本當に？」と、妹は目を丸くして、「何故下宿屋なんかへ」

「何故でもないさ、もうお前方のお喋舌も聞飽いたから」

妹は兄の氣心を知りかねて、只「變な人だわ、お鶴さんを好いてやしないのか知らん、それとも表面ばかりあんなに澄ましてるのではなからうか」と思つてゐたが、末娘のお光が「姉さん、早く被入しやい、御飯だよ」と、驅けて來て、引張つて茶の間へ行つた。

（十一）

四五日はかくて過ぎた。目を醒ますと、屋根には霜を置いて朝日がキラ〳〵と照つてることもある、雲の低く垂れてることもある。培養せぬ菊は蟲に喰はれて自然に萎れて行く。父子は前後して出勤する。健次は每日同じやうなことを考へて、一日の仕事を濟ませて歸ると、相も變らず母は窶れた顏をして待つてゐる。一家

には何の波瀾もない。母は年中奥屋に籠つてゐるのだから、偶に戸外へ出るか、異つた人が訪れて來ると、見たり聞いたりした何でもない事を、物珍らしさうに誇張して問はず語りをするのを樂みにしてゐる。妹の千代は思出しては朗讀の稽古をしてゐるが、平生ほどお喋舌もせず、多少鬱いでる風も見える。織田は忙しいので手紙を送つたきり訪ねて來ない。先月から赤痢が流行して、根岸近傍にも大分患者があるやうだが、菅沼の一家は數年來風邪以上の病人はない。で、父は家族が皆健全で目出度い〳〵と一人で喜んで、自分が少し風邪氣があらうと腹加減がよくなからうと、痩我慢を出して出勤してゐる。しかし今度の寒さ當りは我慢し切れなかつたと見え、或日役所を早退けにして歸り、お定りの晩酌も止して、行火へもぐり込んでしまつた。

　健次は父の代りに海苔を肴に一本ガブ呑みにして、書齋へ入つたが、寢るには早しランプと睨めつくらをしてゐた。すると、その朝桂田夫人の筆で晩餐會招待の葉書の來たことから、桂田に借りた「東西倫理思潮」を本箱の上に置いたまゝ手にも取らず、談話筆記に行くのも忘れてゐたことを思出し、それを取出して飛び〳〵に讀みかけた。

　西風がカタ〳〵と雨戸に當り、隣家の柿の葉の散る音も幽かに聞える。父は時々呻吟いてゐる。

　次第に健次の目は書物を離れ、鋭い神經は風の音と父の呻吟とに煩はされ、火鉢へ俯首いて眉を顰め、煙草の吸口を嚙んでゐると、門の戸がそつと開いた。それが木枯しで自然に開いたやうで、健次は思はず薄氣味惡く感じた。忍びやかに敷石に音がする。誰れかが來たらしく、やがて低い聲で母との話聲がする。

「あゝ織田だな」と、健次は離れ島に人の訪ねた如く、救助の舟でも來た如く望みを掛けて待つてゐた。

　暫らくして織田は「ヤア」と、例の頓間な聲をして入つて來て、火鉢を隔てて坐つた。新調と思はれる綿入を着て、髯も剃つて、髮も綺麗に分け、愉快さうな顏付をしてゐる。

「非常に遲く來たね」

「遲くなくちや君がゐないかと思つて」と、織田は珍らしく敷島を袂から出して火を付け、「僕は今日非常に愉快だ」

「愉快だつて、君からそんな言葉を聞くのは不思議だ、親爺の病氣でもよくなつたのか」

「いや、親爺は變らないがね、今日僕は桂田さんの紹介で新職業に有りついたんだ、神田の本屋で辭書の編纂だが、報酬も非常にいゝんだよ」

「さうか、面倒臭い厭な仕事だね、辛抱出來るかい」

「面倒臭いなんて云つた日にや、いゝ仕事はありやしないぜ、報酬さへよけりや、僕は何でもやる、それに君、僕は長篇を昨日譯してしまつたよ、あの金が入ると、借金を殘らず拂へるし、醫者の方も綺麗に片付くから一安心だ、君にも一杯奢らあ」

　織田は平素健次を無二の親友と思ひ、互ひに喜憂を分つつもりでゐるので、今日も吉報を傳へに來たのだ。

「そりや結構だ」と、健次は口先では云つたが、心ではこの魁偉なる人間が、信州訛の拔けぬ頭の眞中の禿げた老母と、頰の赤いよく肥つた細君のために、年中專念一意脇目も振らず稼いでゐる樣を憐憫に感じた。

「僕も二三年跪き通しだつたが、これからは少しは樂になるだらう、隨分君にも迷惑を掛けたがね、もう大丈夫だ。節儉すりや月末の拂ひに困ることはない、何しろ學校の月給は三十圓だ

から遣切れなかつたが、辭書からは六十圓づつ呉れるんだよ、丁度倍だからね、それに内職に飜譯を續けてやつてけば、小使錢は取れるし」と、織田は自分の現狀を想つて悦しくてならぬ風だ。で、御世帶話を續けて、「家賃は收入の五分の一を超過してはならぬ」とか、「消費組合に入れば幾らづつ經濟になる」とか、終ひには將來の家計の豫算計畫を細く說き出した。

妹共はもう寢たのか、家の内は靜かだが、隣家から赤兒の泣聲が洩れ聞え、柿の葉もカサカサと音を立ててゐる。健次は火箸で炭俵を引寄せ、どつさり添炭した。最早詩の氣もなくなつて寒い。せめて織田が何時ものやうに苦痛を訴へるのなら、聞いても多少張合もあるが、大得意で生活の勝利を談ずるのだから健次は聞いてゐても眠くなるばかり。

「それでね、父の病氣がどうかなり次第、もつといゝ家へ轉宅して新しい生活を始めるつもりだ、それについて妹だけ持て餘し者だが、あれに對する責任さへ免れりや、僕の重荷は卸りてしまふんだよ」と、織田は抑揚緩急のない調子で云つて相手の顏を見て答を促した。

健次は五月蠅い奴だと思つて、何か云はうとした時へ、母が茶盆と菓子皿を持つて來た。「今織田さんに頂いたんだよ」と、母は茶を注いで、中腰で二つ三つ世間話をして行つた。皿にはチョコレート・クリームが黃ろい紙に包まれて並んでゐる。健次はそれを手に取つて、端を前齒で噛んだが、厭な顏をして、喰餘しを机の端へ置き、

「もう君、緣談は止さうぢやないか、僕はもう聞きたくない」と、命令的に云ふ。

織田は壓へ付けられて暫らく默つてゐた。

「だが、君の爲にも結婚する方がいゝと思ふ、今も母堂に話すと母堂も贊成して、さうなると結構だと云つてる、それに何だよ」と、四圍を憚つて聲を低くし、「君のシスターについても僕が考へてる、今度の事は四五日前に鶴にもよく〳〵話したんだがね、その時彼女に聞くと、お千代さんは箕浦を思つてるんださうだ、それだと丁度いゝぢやないか、シスターを箕浦へやつちまつては。何なら僕が周旋する」

「だつて君は箕浦は嫌ひだと云つてたぢやないか」

「しかし君のシスターが好いてりや仕方がないさ、君も早く妹を片付けて、定りをつけて、活動し給へ、君は我々とは異つて才があるんだから幾らでも發展出來る」

「うまく煽動るね、煽動たつて駄目だよ、僕に發展の道がある位なら、君等に云はれなくても疾くに發展してる」と、健次は肱枕で横になつた。

「箕浦の自停家でも君にや感心してるよ、二三日前にも見舞ひだつてやつて來て、何時か君は異彩を放つだらうと云つてた、實はその時妹を君におつ付けたいと彼男にも明したのだ」

「箕浦は何と云つてた」

「彼男かね」と、織田は云ひかけて躊躇して、「別に何も云やしない、丁度いゝだらうと云つてた」

「さうでもなからう、しかし君はいろんな事をするね、千代にも何か話したね」

「いや碌に話しもしないが、妻や妹を通して多少聞いたことはある」

「さうか、彼女が此間、君の家から歸ると、僕に向つて頻りに結婚を勸めるから、變だなと思つたが今分つた、彼女も歲が歲だけに生意氣な事を考へてやがらあ」と、舌打して起上つた。健次は腹の中で、「妹は箕浦に對する競爭者のお鶴を自分に當がつて、箕浦を一人占めにしようと思つてるんだらう」と、妹の腹の底まで小憎らしく感じた。あんな男を珍重して戀とか何と

かゝつてるのを蟲唾の出る程厭に感じた。
織田は健次の目付の鋭くなるを見て、「何を考へてるんだ」と聞く。
「君も餘計な世話を焼くね、自分の事だけで飽き足らなくて」
「餘計な世話ぢやない、友情から考へたんだ、一家の幸福のために僕の云つた通りにし給へ、どうせ通る道なら早く通つた方がいゝぢやないか」
「いゝ仕事に有付いたと思つて馬鹿に大家めいた事を云ふね、しかし僕は君や箕浦とは異つて何處へ行くんか方角が取れんから仕方ないさ」
「ぢや僕の説は用ひないんか、それで君はどうするんだい、責任の重い身體で」
「さあどうするかね」と、他人事のやうに云つたが、急に鬱陶しい色を呈した。
「君は學生時代と同じやうな氣でゐるが、よく家族の事を思はんで浮々してられるね、目の前に君の責任がころがつてるぢやないか」と織田は眞面目な口調を止めぬ。
「だから僕は家が厭だよ」と、健次は又横になつて目を閉ぢて、「君とも長い間交際つてるが、福音も聞かせて呉れんね」と、云つたきり、口を利かなくなつた。
で、織田が母と話して歸つた後、健次は冷い蒲團の中へもぐり込んで、「彼奴も馬鹿野郎だ」と呟いた。しかしこれは他人の間で氣焔を吐いてる時に叫ぶとは異つて、滅入つた絶望の聲だ。

（十二）

翌日は妹娘寵愛の小猫が、晩餐の總菜用の魚を銜へて縁の下へ逃げ込んだので、一家は大騒ぎ。父は褞袍を着たまゝ寢室を出て來る。母は青筋立てて怒鳴り立てる。暫らくして何食はぬ顔の猫は鈴を鳴らして長火鉢の側へ歸り、目を細くして口べたを舐めずつてゐると、皆たに頭を打たれた。母の愚癡が靜まると、家族は煮豆で晩餐を食つた。
健次はかねて頼んで置いた或社員の知せで、日暮前に月島の或下宿屋の空間を檢分した。廊下に立つと、安房上總の山々が夢のやうに、ぼんやり水煙の向うに浮び、強い風が絶え間なく寄せて來る。隣室の話聲も風に淩はれ波の音に沒して聞えぬ。彼れは幼い頃讃岐の濱で恣に鹽風を浴びて遊んだことを朧氣に思出した。その瞬間新生涯を此處で始める、根岸の古屋を去つて腹一杯に鹽氣を吸はうと決し、二三日中に返事をすると約束した。で、家へ歸ると、母や妹に聞かされた一日中の大事件は猫と魚の話であつた。

（十三）

翌日桂田の家で晩餐をかねて小園遊會が開かれ、博士夫妻の親戚の青年男女、箕浦織田等の家族、凡て十數名が招待された。健次もその一人だが、生憎編輯締切の當日なので、原稿の計算やら雜誌の體裁やらの相談を持掛けられ、漸く夜店商人が店を出しかけた時分雜誌社を出て、生温かい空つ風に曝され、千駄木へ向つた。既に來賓は揃つてるらしく、笑聲も賑かで、玄關には綺麗な女下駄や、磨き立てた靴が幾つも並んでゐる。客間へ通されると博士の傍に當る久保田と箕浦とが食卓を隔てて博士と向ひ合つて、盛んに話をしてゐた。
襖を開けると三人は一緒に頭を上げて健次を見た。床の間には大輪の白菊を生けてあり、鴨居には嵐の跡の海波を寫した新しい油繪を掲げてゐる。少尉の軍服を着けた久保田の顔は赤銅色をして、まだ文明に疲れない太古の活氣に漲つてゐる。箕浦の青い寶石入の襟留は、その磨き立てた白い額黒い眼と相照らして光つ

てゐる。

「菅沼さん暫らくですね、相變らず元氣がいゝつてぢやありませんか」と久保田は快活に笑つた。

「どう致して、一寸見渡したところ、元氣は貴下一人で專有してるやうだ」と、健次は久保田の側に坐つた。卓上にはキュラソーの德利が置かれてゐる。

「さあやり給へ、貴下が來なくちや、僕の相手がない」と、久保田は杯を差し、「今日は散々に君の噂をしたんですよ、箕浦君と叔父とでね、頻りに貴下の攻擊を始めるから、僕が一人で辯護しました。ハツ〳〵〳〵」

「さうですか」と、健次は杯を受けて、箕浦の顏を見た。箕浦は少し頰を赤め、

「僕は攻擊したんぢやないよ」と顏を外して、

「久保田さん、今のお話の續きを聞かせて下さい、非常に面白い、貴下の話振りがお上手だから、僕には演習の模樣が目に浮ぶやうです」

「いや、もう止しませう、それより庭へ行つて、娘子軍を襲はうぢやありませんか」と、久保田は立ちかゝつた。

「何を話したんです、去年は貴下の決鬪奨勵談を聞かされたが、今年はもつと痛快な新問題があるんですか」と、健次が問ふ。

「なあに、僕が大演習に行つたから、今もその話をしたんです。しかし下らないさ、演習話なんか。新聞で見てると面白さうだが、實際飯事見たいなものですからな、あんな事をやつたつて、實戰に役に立ちやしない、先づ昔のお鷹狩のやうなものさ」と、久保田は緣側を下りて赤鼻緒の草履を穿き、健次を指招いた。「さあ菅沼さん被入しやい、貴下は我黨の士だから」

「僕は少し休んでから行きます」と、健次は獨りでキュラソーを三四杯傾けた。博士と箕浦とは哲學上の問題を論じ出した。庭には花行燈が二つ三つ點され、燈火の側では蓄音器で喇叭節かが聞え、草花の間を黑い影が動いてゐる。さして廣い庭でもないが、夜目には奥深く、一際すぐれた欅の木は冴えた空を摩してゐる。

「織田は來てゐないか」と、四方を見廻した擧句、箕浦に問うた。

「あゝ仕事が忙しいと云つて、出て來ない」

「彼れの妹は?」

「來てるよ、君の妹と一緒に」

「さうか」

蓄音器が止むと、久保田の陽氣な太い聲が庭一杯に擴がり、やがて小兒等の萬歳の叫びと女共の笑聲が聞える。

「君、彼處へ行かうぢやないか」と、健次は箕浦の躊躇するのを無理に手を執り、庭へ連れ出した。博士は食卓に肱をついたまゝ、二人の後姿を見送つてゐる。

箕浦は久保田が四五人の子供を相手に調練の眞似をしてるのを見て、歩を止め、

「あんな騷ぎの中へ行つても面白くない、何處か外を散歩しようぢやないか、君に話したいこともある」

「さうか」と、健次はどうでもいゝと云つた風で、箕浦の後について植込に添うて、人氣ない方へ向つた。丈長きコスモスが風に搖られて、淡く白い花瓣が肩に觸れる。箕浦はその一輪を手折つて、鼻で嗅いで弄んだ。

「君も此家へ來出してから、もう五六年になるね」と、健次は突如に聞いた。

「うん、君が一番の古參で、織田と僕と、皆なよく來たものだ」

「しかし君や織田はこの家に何か跡を殘してるが、僕は物を壞しただけで、何にも貢献してないね、この草花も大抵君が種を卸したんぢやないか、客間の油繪だつて君が周旋して誰れとかに畫かせたのだし、つまり君の盡力でこ

の家もこの庭も大分色褪がついたが、僕の見た所ぢや肝心の先生夫婦は大分艶氣がなくなつたね、君にやさう思はれんかい」
「だつて二人とも以前と異はんぢやないか、今夜は細君もひどくめかして若々としてる」
「しかし幾ら飾つてても、心の艶は失せてる。僕にや二人が綺麗なお墓の中に埋もつてるやうに見える、あれで細君は獨りで藻掻いてるが、とても拔け出られやしないよ、君なんかにもいろんなことを云ふだらうが、つまり我々の若い息を嗅いで、腹の蟲を慰めてるんだ」と、健次は嘲るやうに云つた。
「馬鹿な事を」と、箕浦は淋しく笑つて、「先生の家には何時來ても穩かな柔かい空氣が漂つてるぢやないか、僕はこんな平穩な生涯を送りたいと思ふ」
…千駄木の哲人に對して、麹町の哲人になるんか、まあそれもいゝが、君は此頃は細君に可愛がられてゐないね、去年は箕浦さんでなくちや夜も日も明けなかつたけれど、もう厭いてゐるらしい、寵愛が僕に移つてる、
「だが、細君は我々の仲間にや、誰れに對しても親切だよ、先日も織田のことを心配してたから、僕がよく話をして置いた」
「そりや細君も暇だから、人の世話を燒いてるが寵愛は別だね、目付が違ふ、言葉の味が違ふ、一人で焦慮て一人でペスミスチックになつてるから面白い、しかし君にや分るまい、一年間寵兒であつた癖に」
「そりや君が主觀的に見るからさう見えるんだ、細君は誰れに對しても平等で、何時も同じ調子ぢやないか」
「君にやさう見えるんだね、ぢやそれでもいゝ」と、健次は無愛想に云つて口を閉ぢた。蟲の音が遠く近く聞える。
「菅沼さん〳〵」と、久保田の呼ぶ聲がして、健次は振向いたが、箕浦は俯首いたまゝ草花の周圍を歩みながら、
「實は過日から君に會ひたかつたのだ、僕の手紙は見て呉れたらう」
「うむ見たよ、用は何だつたか、もう忘れてしまつたが」
「僕は近々に慈善音樂會を企ててるんだが、君も賛成して盡力して呉れ給へな、先生も奥さんも助力して呉れる筈だが、君も助けて呉れ給へ」
「音樂會か、僕にや適任でないが、しかし君がやるなら助けてもいゝ」
「是非頼むよ、何詳しいことは後で話すがね、僕はその會で自分で新作を朗讀するつもりだ」と云つて、箕浦は聲が沈んでゐる。
「此頃は頻りに朗讀が流行る」と、健次は獨言のやうに言つて、「君は大論文を書いてるさうだが、まだ出來ないか」
「あゝ、も少しになつて完成しない、それに此頃はいろんな疑問が湧いて來て、思想が錯亂していかん」
「何故」
「何故つて、考へりや考へる程、自分の立てた理窟が分らなくなる、織田のやうな單純な人間は幸福だね」
「まあ幸でも不幸でもいゝさ、僕はもう腹が減つて來た、彼方へ行つて何か食はうぢやないか、織田の妹やマダムにも會ひたくなつた」と、健次は植込の中を横切り、黄ろい花、白い花を無慈悲に肱で散らした。箕浦は相手の額を見て、低い聲でわざと平氣に、
「君は結婚するのか」
「織田が頻りに運動してる、どうなるかね」
「その方がいゝだらう、定りがついて」
「何が定りがつくもんか、それよりや君こそ早く細君でも情婦でも拵へ給へな、僕にや女て

ものあ肉の塊としてあるから、口先や目つきで慰藉されたり愛を濺がれたりする必要はないが、君はさうはいかない。圓滿平穏なスヰートホームて奴を造らなくちや、君の全身が滿足されまい、僕は君の作物を讀む毎に、凡てが細君を欲する不安の聲を發してるやうに感ずる。織田も君も僕も學校時代にいろんな夢を見て、世の中へ出ると、皆失望したり、考へも變つたが、君は終始一貫してる、君の沈鬱症は戀人の手で電氣を掛けて貰ひさへすれば直ぐ癒る。だから早くさうし給へ、織田のやうに食ふに困るんぢやなし」

「君は故意に不眞面目なことを云ふ。惡い癖だ」と、箕浦は少し顏を赤らめ、「婦人に對しても、戀愛に關しても、もつと眞面目に深い意味を見なくちやならんよ」

「さうかねえ」と、健次は冷かに云つて、「併し僕自身がさう信ずれば仕方がない、人間は寄生蟲、女は肉の塊、昔から聖人がさう云つてる」

「まさかそんな聖人もあるまい、君は己れを欺いて趣味や情熱を蔑視してるんだ」と、空を仰いで、「見給へ、空は冴えて、月も鮮かに出かゝつてる、蟲でも秋の氣を感じて鳴いてる」

「ふゝん」と健次は嘲笑つたが、「しかしね、僕等寄生蟲にも血が流れてるし腦が働くから、餘計なことを考へていかん、僕の拳にも力がある」と、秋風に長い髮を吹かせ、思ひに沈んでる箕浦の手を握つて急いで歩んだ。

月は木の間に洩れて、新しい光を椽側に投げてゐる。今迄庭で戲れてゐた連中も大方は客間に集まり、二つの食卓の上には鮨や柿や栗が盛上げられてゐる。健次は緣側に立つて一座を見渡した。片隅に細君とお鶴とお千代とが鼎形に坐り、鮨を貪りながら、何か話しては笑つてゐる。光を正面に受けて、細君の白い歯と、紅と碧の二つの指環のちら〳〵動くのが目を惹いた。

「菅沼さん、此處へ來給へ、貴下がゐなくちや駄目だ」と、久保田が呼んだ。彼れは顏を熟柿のやうにして、胡坐を搔き、その前には博士が三四歳の男の子を抱へて、獨り笑壺に入つてゐる。

久保田の聲を聞いて、細君もお鶴も箸を置いて健次を見上げた。健次は目禮して、

「お鶴さんにも暫らくだね」と、柿の皮を入れた盆を跨いで、三人の側へ割込む、「箕浦君、來給へ、便でに鮨でも抓んで來て呉れ」と、通路を塞がれて、ぐづ〳〵してる箕浦を指招いた。

「兄さん、久保田さんが呼んで被入しやるぢやありませんか、彼處へ被入しやらなくちや惡いでせう」と、千代は兄をこの平和な群から追出さうとする。

「後で行くから、お前は酒でも取つて來て呉れ」

「彼處で召上ればいゝに」と、千代は不承々々に立つて行つた。

お鶴は片袖を抱くやうにして袴の上に置き、半ばは口を開いて、澄ました顏で正面を見てゐたが、健次が壓制的にその側へ箕浦を引据ゑると、

「兄がよろしく」と會釋した。

「お鶴さんも今日は淑女然としてるね、それより箕浦君に酌をして、うんと飲まして下さい、今日はこの人も憂愁の雲に鎖されてるから」と、健次は妹の手から銚子を奪つて、お鶴の前に置き、箕浦の手に盃を持たせ、

「さあ飲み給へ、君のライフはこれで幸福になる、君の不安の念も消えてしまふ」

「僕は飲みたくない」と、箕浦は不快な顏をして、盃を下へ置いた。

「飲みたくなくても、僕が勸めるんだから飲ん

でもいゝだらう」
「菅沼さんはほんとに壓制的ね」と、細君は眉を顰めて、口元で笑つた。
「ぢや仕方がない、僕が飲まう、さあ注いで下さい」
お鶴は伸び上つて、不恰好な手付で二三度酌をした。
「兄さん、あまり燒上つちやいけなくつてよ、今夜ね、お父さんが話したいことがあるから、早く連れて歸つて吳れつて、私云ひつかつたのよ」と、千代は兄の顏をのぞき込んで小聲で云つた。
健次はそれには答へず、盃に噛りついてガブ呑を續けてゐた。一座は皆食つたり飲んだりして腹を脹らせ顏を赤らめ、次第に賑かになる。久保田の蠻音はます〳〵高く、女共の笑聲を壓倒して響いてゐた。すると幹事役の書生が閾の外に立ち、羽織の紐をひねくつて餘興の報告をした。
第一、菅沼令孃と織田令孃の英語朗讀。來客は座を改めて拍手した。健次はそれと見るや直ちに小皿に盛つた鮨を持つて、書生部屋へ逃げ込み、肱枕で横になり、手掴みで食ひながら、室を見廻してゐた。笠なしの小洋燈の光が細く照らし、片隅には小さい本箱と赤毛布でくるんだ夜具があるのみで、裝飾は外に何にもないが、只机の側の壁に新聞附録と思はれる美人の石版摺が張りつけられてある。朝夕その持主の無聊を慰めてゐるのであらう。
健次は酒氣を發して、うと〳〵してゐた。客間では拍手相ついで、尺八の音が消えるとピアノの音が聞える。
「兄さん被入しやい、もう歸るんですよ」と、千代は戸を開けて聲高く呼んだが、返事がないので側へ寄つて搖り起した。それでも返事がない。
「仕樣がないね」と呟いて去つた。後で健次は目をパッチリ開けた。妹の締切らなかつた戸がギイ〳〵と幽かな音を立てて動いてゐる。久保田の詩吟とドタンバタンの音が流れ込む。
「オヽ騷々しい」と呟いて、細君は手燭を持つて二階から下りて、何氣なく書生部屋の戸口を覗いて、「あら菅沼さん、此處にゐるのですか、どうなすつて」
「又千代なんかの金切聲を聞かされちやならんと思つて逃げて來たんですが、寢ると立つのが面倒臭くつて」と、健次は大儀さうに坐つた。
「隨分無性だわね」と、細君は手燭を吹き消して廊下へ置いた。
「奧さん、貴女の演奏も濟んだんですか」
「貴下聞かなかつたの」と、細君は指先で柱を叩きながら、雪のやうな腕を露はしてゐる。薄光に土耳古模樣の帶がぼんやり浮んでゐる。帶留の金具が光つてゐる。何だつてあゝ何時までも若いんだらうと健次は思つた。
「さうですか、私がうと〳〵してる間に、何だかいゝ音がしたと思つた、まだ皆なゐるんですか」
「子供連れは歸つたけれど、貴下の連中は皆ゐますよ、さあ被入しやいな、これから面白い話があるんだから」
「先生や箕浦の話も黴が生えてるからな」と、健次はひよろ〳〵と立上つた。緩んだ帶を不確な手で引締め前を搔合せて、戸口を出た。オヽ、デコロンの香ひが鼻を突いた。酒臭い息は細君の顏を無遠慮に撫でる。薄暗い廊下を無言で緩く歩いた。
この夏ピアノを洩れ聞きして心に妄想を描いた時が心に浮ぶ。小說の話に何か感じて細君が「人間は獨身の間ですよ」と云つて、露氣のある目を向けたことを思出す。お鶴や千代の前ですら、美に誇つてる樣子が思ひやられて傷々し

くなる。と、直ぐ博士の灰のやうな面が目につく。

彼れは自分が細君の寵兒である、自分は勝利者であると思つた。で、幼稚な空想放縦な妄念が錯亂して湧き上つた。

しかし廊下傳ひは僅かに一分間、火花の如く消えては浮ぶ空想も僅かに一分間に過ぎなかつた。障子を開けると、殘肴を圍んで四人がばらばらに坐つてゐる。

「今日は何だか蒸暑いのね」と、細君はぽーつと紅らんだ顔を顰めた。

「菅沼さん、何處へ雲がくれしてたのです。皆な一つづつ隠藝を出したのだから、貴下も一つやらなくちやならん、箕浦さんもヴァイオリンを弾いたのですよ」と、久保田は健次の手を握つて、「否だと云へばこの手を放さない」と、笑ひながら、グッと力を入れて握り締めた。

「おや何時までも握つて居給へ」

「さあお謡んなさい、謹聽する」

「何をやります、貴下の好きな決闘ですか」

「ハヽヽッ決闘も面白いが、一つ都々一でも端唄でも」

「唄へるか、菅沼さん、貴下は何時も無藝ね」と、細君、[illegible]した。

「何、唄位唄へなくはない」と、健次は自己流に「秋の夜」を胴間聲を張り上げて唄つて、巧くとも拙くとも何うでもよいと云ふ風だ。

「巧い感心々々」と、久保田は怒鳴つて兩手を亂打し、「さあ祝杯を献じよう……それから、一つ僕の愛國の唄を聞かせます、謹聽し給へ」と、腕を突出し、兩手を膝に置き、目を細くして土佐節を唄つた。「死ねや死ね／＼五十年の命、何の惜かろ國のため」と、強い響きが締切つた室の中に擴がり、響きと共に、壁に映つた角張つた肩が動搖する。

唄ひ終ると太い息を吐いて、「どうだ諸君巧いでせう、こんな小さな部屋ぢや調和しないが、荒海の波の音を聞いて唄ふと、百萬の蒙古勢でも退治する氣になる。つまり愛國の精神を唄つたのです、なあにヴァイオリンやピアノは駄目だ」と怒鳴り、ハヽヽ、ぐつたり首を垂れて、「我々青年は太平洋の波の音を三味線にして、この唄を唄はにやならん、それに不服な奴がありや、僕が相手になつて決闘する」と云つて、又飛上るやうな聲で笑ひ、健次に凭れかゝつて、

「貴下は我黨の士だ、國家のために自愛して呉れ給へ、僕は戰爭に行つて死ぬるんです、國家のために死ぬるんです、今二年日露戰爭が遅かつたら、僕は遼東の野に屍を曝すのだつたが、無念だ」と、叫んで、健次の肩から辷り落ちると、そのまゝ逞しい拳を投出して、大の字なりに寝て、正體がなくなつた。

博士は最初からあまり口數を利かず、只座中の話を聞いて微笑々々してゐる。酒も二三杯は付合ひに飲んだが紅味は何處にも見えぬ。お鶴と千代とは遠慮して人形のやうに並んでゐる。箕浦は夢見る如くうつとりしてゐる。一時の騒ぎが大嵐の跡のやうに靜まり、只久保田の荒い鼻息に名殘を留めてゐる。

暫らくは互ひに打見守つたのみで、誰れも口を利かぬ。疲勞の色が人々の顔に現はれかけた。

「もう歸らうか」と、健次は箕浦を見て小さい聲で云つた。

「あゝ、もう遅くなつたね」と、箕浦は金鎖の小さい時計を出して見た。

「まだ早いぢやありませんか」と、細君は慌てて引留めて、お愛想に茶を注いで廻つた。健次は立ちかけて又坐つた。外の連中も容易に立ちさうでない。で、お鶴と千代とが久保田の寝姿を見て、何やら耳語いてる間、健次は膝を崩して煙草を吸ひながら、細君の顔を見詰めた。細君

は淋しく笑つた。健次は何か云はんとしたが、口も心も疲れてしまつたのか、そのまゝ口を噤んだ。

一座はそれ〲に異つたことを思つて、化石のやうに坐つてゐる。健次は張詰めた氣が弛んで誰れかに縋りついて、自分の本音を吐いて泣いて見たくなつた。「世界に取殘された淋しい人が一人ある」と、自分が頼りなく厭になると、細君の顏も同じ思ひを現はしてるやうに見える。で、無意識に殘りの酒を飲んで目を轉ずると、煙草の煙に卷かれた鴨居の額の海波が朧げに淒い色を見せ、床の間には菊の花片が何時の間にか散つてゐて、燈火の薄い光に漂うてゐる。戸外は暫らくは寂としてゐる。

「どうした、大變靜かだね」と、博士は沈默を破つて、力のない目を見張つた。

人々の異つた思ひもぱつと消えて、互ひに目と目で歸りを促し、一同に挨拶して座敷を出た。健次も後から續いて行つた。細君と博士とは玄關に立つて、若い男女の影を見送つてゐた。

戸外へ出ると、健次は四辻に立留まり、箕浦に向つて、

「君はこれから歸るんか、何時だらう」

「もう九時だよ、歸らなくちや仕方がないぢやないか」

「しかし僕あ物足らん、このまゝ歸つちや寢られりやしない」

「ぢや何處へ行く」

「兎に角君はお鶴さんを送つて行くんだから此處で分れよう」

「さうか」と、箕浦は千代に目禮し、「ぢや菅沼君近日訪問するよ」と云つて、お鶴と並んで曲角を曲つた。

健次は箕浦を忘れお鶴を忘れ久保田を忘れ、桂田夫妻があの騷ぎの後で悄然差向ひでゐる樣をのみくつきり思ひ浮べ、夢のやうに薄暗く彼の家を遮つてる立樹を顧みてゐると、

「いゝお月夜ね」と、千代は空を仰いで詠歎の聲を發して、「兄さん何を考へて？」

「おれは最少し散歩して歸るから、お前は先に歸れ」

「だつてお父さんは兄さんを待つて被入しやるんですよ、早く歸らにやいけないわ」

「今日に限つて親爺は何の用があるんだらう、病氣でも惡いんか」と、健次は今朝も朝寢をして父の病床を見舞はずして、社へ行つたことを思出した。この二三日は父と染々話したことはない。

「別に惡くもないの、今日はお晝から起きてる位ですもの」

「さうか、ぢやおれに何の用があるか、お前知らないか」

「何ですか、よく知らないわ、……だけど、今日お隣の諸岡さんがお見舞ひに被入しやると、お父さんは何だか心細いことを話してたやうだわ、兄さんのことも云つて」

「おれのことを？」

「えゝ、……お父さんは一生苦勞したばかりで、ちつとも取柄のない人間で終るんだけど、兄さんを立派に育て上げたのが大事業だと云つてね、自分は今死んでも殘り惜くはない、魂は子供の頭に傳はつてる、健次は男らしい大きな考へを持つてるから何時かはえらい學者とか政治家とかになると云つてたわ」

「諸岡の隱居にそんなことを話したのか、親爺の十八番だ、話の種が盡きるとおれのことを持出す、聞く奴も聞く奴だね」

「でも平生とは話振りが異つて、何だか憐れつぽさうだから、私可笑しかつたわ、それでね、諸岡さんがお交際に兄さんを褒めるとさも悦しさうだつたわ、病氣になつてからは、馬の話は

立消えになつて、私達にまで、どうかすると、兄さんの話ばかりしたがるんだから變だわ」と云つて、間を置いて小聲で、「あんな風だとお父さんももう老耄ちやつたのね、今夜あたり一度兄さんに遺言でもするんだわ」と云つて無邪氣に笑つた。

千代は止切れ〴〵に家庭の話をしかけて、「兄さんどうなさるの」「兄さんが何とか今の中に極りをつけたくちや」と、此頃に珍らしく大人びた口を利いたが、健次は只厭な氣がして、あまり相手にしなかつた。

（十四）

それから二三日して、父は寢床を離れ、綿入の重ね着に襟卷で身を固め、トボ〴〵と出勤するやうになつたが、家の者にも目につく程窶れて、以前の元氣は急に失せたやうだ。そして毎晩健次の歸るまでは目を合はさず、絶えず氣に掛けて待つてるやうになり、たま〴〵顏を見ると、十年も別れた子にでも會つたかのやうに、一分間でも長く側に置きたがり、何とか話をしかける。それが我子の氣分を害ねぬやうに如何にも遠慮勝の態度である。健次には父の心根がよく見え透き、自分が家にゐなければ心許ながつてゐることを知つてゐるが、それが却つて不快で溜らず、大抵は外してしまふ。

次の日曜には朝餐が濟むと、父は健次の意を迎へてか、彼れが雜誌に書いた「社會と文學」と題する間に合せの平凡な議論に對し、馬鹿褒めをした上、自説をも吐きかけたので、健次は苦笑した。「人に褒められたくて書くやうな頓間な眞似をするものか、幇間ぢやあるまいし」と、自分が詮方なく爲てることが、何だか他人から褒めて貰ひたさに勤めてると思はれるのが不愉快だ。自分は名譽の接待に與りたくはない。

で、彼は父の前をそこ〴〵に逃げ出した。足は行場所に迷つて、遂に麹町に向ふ。織田の住んでる町まで來て、訪はうか訪ふまいかと躊躇してゐると、前の三階建の二階の窓には、色の黑い耳に環を嵌めた女と、青い腹掛をした辮髮の男とが頭を並べて、聲高に分らぬ言葉で饒舌つてゐる。路次を隔てて隣の洋服店から、脊の高い色の白い毛皮をぐる〴〵卷きつけた西洋婦人が犬を連れて出て來た。二人の支那人はそれを見ては面白さうに笑つた。その邊に散らばつてた子供等は婦人の前に集まつた。婦人は口笛を吹いたり、何か早口に云つて、犬を綾してゐたが、やがて店から肥滿の男が出て來ると、一緒に勇ましく去つた。支那人も引込んでしまふ。健次は無心に見てゐたが、町が元のやうに淋しくなつて、埃を含んだ風が顏に吹きつけると、身震ひして路次を入つた。すると向うから織田が大きな身體を縮めて、懷手でノソリ〴〵やつて來て、

「大層寒さうな顏をしてるね」と、微笑々々顏で云ふ。

「何處へ行くんだい」

「一寸買物に、今箕浦が來てるから御馳走しようと思つて……君もいゝとこへ來た、まあ上つてゐ給へ、直ぐ歸つて來る」

健次は何時ものやうに緣側から上つた。座敷の眞中に箕浦が坐つてゐて、瀬戸物の火鉢には藁灰の中に、どつさり火が盛つてある。この前來た時よりも部屋の樣子が明るさうだ。織田の母が茶を持つて來て、手短に挨拶をして引込んだきり、細君の顏も見えねば病父の聲もしない。

「靜かだね」と、健次は平生よりは低い聲をして、「君は此頃此家へよく來るさうだね、織田と話が合ふかい」と、箕浦の向うに腰を据ゑて、そのテカ〴〵光つてる顏を見た。

「いや、滅多に來んのだが、今日は織田が葉書で僕を呼びつけたのだ」
「さうか、織田が君に會ひたがるのは不思議だね、何の用事だらう」
「別に用事ていふ程でもない」と、箕浦は澄ましてゐる。
「織田も多少得意になつてるだらう」
「どうだか、餘程忙しさうだよ」
「しかし今日は御馳走するちふんだから珍らしい」
「さうだ」と、箕浦の返事の空々しいのが目につく。
　同じく交際の深い友人であれど、健次は織田に對すると、常に弱者を庇ふと云ふやうな態度を執り、箕浦に對すると、何となく壓へつけるやうな態度を執つてゐる。そして箕浦は彼れの態度を左程厭がりもせず、寧ろ自ら一歩讓つて滿足してゐる。自分の意見の批評も先づ彼れに求め、いろ／＼の感想もその前で吐露する。しかし今日は多く語らぬ。何となく隔てを置いて、何時ものやうに詩的の話もせねば、人生觀染みたことも云はぬ。
　健次も奥の病人に憚つて、元氣のいゝ口も利かず、暫らく默つてゐた。去年のまゝで薄黑くなつてる蚊帳の釣手が、隙間洩る風に緩く動いてゐる。箕浦の呼吸の音もよく聞える。で、互ひに睨み合つてると、次第に縁もない他人臭い色が相手の顏に讀める。
「此奴どうかしてるわい」と、健次は冷笑を洩して、皮肉の一つも云つてやらうかと思つてると、溝板に重い足音がして、やがて織田は歸つて來た。
「馬鹿に畏まつてるね、どうしたい」と、大人振つた音聲で云つて、目尻を下げてジロ／＼二人の顏を見た。織田はこの前とは打つて變り、心に餘裕の出來たのか、後に病人のゐるのも忘れてるやうだ。平生なら箕浦が喋舌るのを默聽するのだが、今日は自分から話題を持出して氣焔も吐く。
「だが、仕事は勤まるかい」と、健次は話半ばに聞くと、
「勤まるとも、それに彼店の主人が僕の家の事情を聞いて、同情して呉れてるしね」と、ますます得意で、仕事の話まで持出して、「僕ももう四五年したら、基礎が堅くなるよ。目算もちやんと立つてる」
「生意氣な口を利きやがる」と、健次は腹で思つた。
　細君は大きな腹をして、青い顏に髪の毛を亂したまゝ、刺身に麥酒を運んで來た。健次はこの寒いのにと思つたが、一二杯呷つて、低い聲で、
「君、お鶴さんはゐないか」
「あゝ朝からゐない」
「妹でもゐないと、君の家は淋びてるね」
「なあに、今に僕の後繼者が生れるから、大いに光彩を放つさ、……君も早く後繼者を作り給へ、空論を吐かないで」
「四五日會はん間に大層先輩になつたね、箕浦君も教訓を聞きに來るんかね、この人に」
「まあ、さうだ」と、箕浦は麥酒で濡れた手をハンケチで拭ひながら、「君と話すこともあるんだが」と言淀んだ。
「何を、音樂會の事か」
「いや、それ許りぢやない」
「ぢや話し給へ」
「まあゆつくりでもいゝ」
「茲でいゝぢやないか」
「歸り途に話さう」
「因循だね」と、健次はもう微醉に目を染めて、思はず聲の高くなるに氣づいて一寸後を顧み、「僕はもう直ぐに歸るんだから、今話し給

へ、どうせ君はお鶴さんの歸るまでゐるんだらうから」と小聲で云つて笑つた。

箕浦は「そんなこと」と云つたばかりで默つてしまつた。織田は無神經な顔で絶えず微笑してゐたが、「今日は僕が話があつて來て貰つたんだ」

「例の事でかい」

「うん」

「でどう極つた、君の重荷はどうなつた」

「君は僕の説を用ひんから仕方がないさ、僕も考へ直さなくちや」

「さうか、君も何時の間にか、箕浦君と意氣投合するやうになつたんだね」

と云つたが、健次は腹の中で、「織田の奴、とうとう箕浦に妹でも賣付けるんだらう」と思ふと、不思議に氣がむしやくしやして、麥酒を二三杯グイ呑みにして、急に立上り、「さあ歸らう」と、二人が引留める間もなく縁側を下りた。

「氣まぐれな男だなあ、何を考へ出したのだらう」と、織田は懐手のまゝ暫らく閾の上に立つてゐた。

健次の足は行場所に迷つた末、遂に千駄木へ向つた。

ダマスクスへ

『冬ごもりの 北山おろし吹く時は 風のたよりに知らせてたべ。筑波の山のかなたには君もゐますと聞く時は……』

信乃と告別の際の濱路のみやびやかな口説は、十歳前後の私の心を蕩かした。爾來わたしの讀書好みはいろ〳〵に變遷した。

今假りに、數十年來の私の銷閑の具ともなり心の糧ともなつた古今東西の數多の書册の中で、どれを一つ撰ぶかといふと、今の私の氣分では、躊躇することなく、ストリンドベリーの『ダマスクスへ』を取上げるのである。私は彼れの物は隨分讀んでゐる。しかし『死の舞踏』や『癡人の懺悔』などは棄ててもいゝ。彼れの一生の道程を描いた『ダマスクスへ』だけで澤山である。これは、今の私に取つては經典のやうに思はれる。これは讀者を喜ばさうとして書いたものではない。多數の見物を喜ばさうとして書かれたのではない。この戲曲が外國で上演されたかどうだかも私は知らないが、こんな戲曲については上演の能不能は問題外としていゝ。寡聞なる私は、戲曲の形式でこんなものを書かれたのは、外に一つも知らない。

口すぎのためには、活動、小説、戲曲などそれ〳〵に人を喜ばすものを書かなければなるまいが、やがて死ぬべき運を背負つて短い生命を生きてゐる我々は、仁者の如く人を喜ばすことばかり考へてゐては詰らないではないかと、私には思はれる。まだしも、喜ばれなくつても、小さな『ダマスクスへ』でも書いてゐた方が、自分の死生の苦に對する鬱憤が晴れていゝやうに思はれる。

『闇はどこから』

『先づそのものから——でなければわたしには分らない』

『それは多分ほんの影であつたのだ。なぜといつて影には光がつきものだからね。しかし闇には光は必要でない』

『もう お止め。いつまでもいつても切りがない』

『左樣なら』

(『白鳥隨筆集』より)

地獄

一

これは今から十四五年前のことである。

中國のある小都會の東の町はづれ、鬱蒼たる山の麓、左右の田地や農家よりは一段高い處に、木造の西洋館が三つ建つてゐる。上手に一つ離れてあるのがB——學院といふ耶蘇教學校。それから斜に半町ばかり下つて二軒並んでゐるのが米國宣教師の家族の住宅。最も眺めに富んで、居ながらにしてガラス窓越しに、市街は云ふに及ばず、それを取圍んだ田野まで、遠く見渡される。春ででもあらうなら、この近所には櫻の樹が多いから、この白塗りの西洋館が花で包まれ、自ら得も云はれぬ風情を添へるのだが。

時は秋の末。寒い風さへ吹き荒んで、木梢が悲しげに音を立てゝゐる。前夜の雨はまだ乾かず、朽葉は泥に塗れたまゝ靴や下駄に踏躙られてゐる。西洋館からはストーブの烟が豐かに舞ひ上つてゐるのみで、午後の二三時頃には乾度小庭で戯れてゐる美しき二女の影も見えず、シーソーといふ遊戯器械の側には鷄が羽搔を縮めてクス〳〵喉を鳴らしてゐる。

學校の小使部屋から、小柄な色の淺黑い四十前後の女が、把手の壞れた扉をガタビシ開けて出て、吹きさらしの廊下で鐘を鳴らすと、やがてドヤ〳〵と學生が入口へ出て離れ〴〵に坂道を下りた。かの女小使は手拭を被り、如露と箒とを持つて空室へ入つて掃除に取掛つたが、ふと窓の側にまだ居殘つてゐる一人の學生を見つけて、

「今日はお寒いぢや御座いませんか」

と、お愛想を云つた。

「さうですか」と、學生は閉ぢてた目を開けて低い聲で云つたが、直ぐに又目を閉ぢて壁に頭をもたせ、兩手を帶に挾んで考へ込む。

小使は一つ〳〵椅子を片寄せては掃いてゐたが、學生は容易に歸らうともせぬ。見知らぬ顏だが様子が變に見えるし邪魔にもなるから、

「貴方、どうかなさいましたか」と、側へ寄つて馴々しく問うた。

「いゝや、どうもしない」と、學生はさも五月蠅いと云はぬばかりに答へて、其處を動かなかつた。

「ぢや、何をしていらつしやるんです、御氣分でも惡いんなら、私の部屋でお休みなさいましな」と親切に云つたが、學生は何とも答へないので、いよ〳〵不思議に感じて、「ねえ、さうなさいまし、火鉢にどつさり火が熾つてますし、お湯も沸いてゐますから」と、顏を覗くやうにして促すと、學生は物をも云はず、ツカ〳〵と出て行つた。教科書のノートブックを置き忘れて行つた。そして小使がそれを氣付いて、窓を開けて呼留めようとした時は、もう影も形も見えなかつた。

「變な人だ、何時入學した人だらう」と、小使は訝りながら、夕刻まで掃除やら戸締りやらを手一つでやつてゐた。

學院は小ぢんまりした二階建である。教室は常に掃除が行屆いて、壁でも床でも汚れ目が少く、机でも腰掛でも普通の私立學校とは比較にならぬほど小綺麗だ。教課日は略々中學程度で、別に神學部があるが、これはほんの四五人の學生が、外人から學資を補助される返禮に學

ぶに過ぎぬ。普通の學生は論理科で耶蘇の講義を聞かされる位が、他の學校と異つてゐるのみで、學科目はさしたる耶蘇臭味はない。そして校規は極めて自由で、英語研究の便利は多い。しかし耶蘇といふ名の忌まれるためか、學生の人數は一年から五年級まで凡てを合はせても、僅か五十人に充たず、その大半は信者の子弟である。

小使はこれ等の學生の顔を大抵記憶してゐる。辨當時に茶を與へたり、着物の綻びを縫つてやつたり、下宿生には自ら進んで洗濯までしてやる。二年三年この學校にゐてこの女の世話にならぬ者は一人もない。當人もそれを樂みとしてゐる。夫には生別れ子供には死別れ、獨りぼつちのこの女はまだ老いもせぬのに世間を離れて尼のやうな生涯に滿足し、忠實に學校の用事を務めた暇には若い者の世話をしたり、孤兒院の子供の衣服を縫つてやつたり、獨り神を念じ聖書を讀んだりして、心寛やかに日を送つてゐる。そして此頃は學生の辨當の喰ひあまりを棄ててしまふのが勿體ないと云つて、二三羽の鷄を飼ひ、その生んだ卵は、恩人たる宣教師P氏に捧げてゐる。

で、今日も掃除が濟むと、鷄を塒屋へ入れ、熱心に感謝して夕飯の茶漬を味さうに食べた。食べてしまふと針差しを出して冬物の仕立に取掛つたが、晝に見たかの變な學生が折々思ひ出される。青い顔をしてゐたが、何處でも惡いんだらうか。書物を忘れて、今時分困つてゐやあしまいか。明日は氣をつけてゐて、あの人が來たならば、早速書物を渡して、何とか氣の慰まるやうな口を利いて上げようと思ひつゞけ、一口の柔しい言葉も、一針の縫物仕事も何んなにか神様の御意に適ふであらうと自ら感に打たれてゐた。

二

女小使がかう思つてゐる頃、かの學生は農家の座敷で、火鉢を抱へて首を縮めてゐた。だだつ廣い不恰好な部屋で、一方は襖戸で仕切り、壁に沿うて長持と古葛籠が並び、床の間には斑點のある天照皇太神宮の掛物がかゝつてゐる、そして古葛籠や長持や掛物は彼れの頭の中に染み込んで、背を向けてゐても目を瞑つてゐても書物を讀んでゐても、この室に居る限りは全くそれを忘れることが出來ぬ。終ひには眞夜中の暗い時にも、ハッキリ見えるやうになつた。或時にはそれが堪へがたい恐怖の種となることもある。まだ幼い頃乳母から心中の話を聞いたことがあるが、その男と女とは親々に妨げられた擧句、物置部屋の長持の中で自殺したのである。血に染んだ有様、死人の顔付。乳母の話のまゝに、今も尚ほ頭に刻まれてゐて、この長持の中にも心中した男女が血塗れになつて居りはせんかと思はれ、そんな馬鹿な事がと打消しながらも、矢張心が其方へ取られて一夜惱んだこともある。しかし今夜彼れが火鉢を抱へて考へてゐるのはその長持の男女ではない。學校の聖書の講義で聞いたソドム、ゴモラの慘狀が目に浮んで離れんのである。一度深く頭に喰入らせたものをば、容易に取去れんのが、彼れの特質であつて、今日はその昔話が彼れの全心を奪つてゐるのだ。市民の腐敗を憤つて、天から焔を下して全市を燒盡したと聖書にも書いてあるし、宣教師のP氏が片言の日本語交りで、尤もらしく説明した。しかし彼れはどうしても理解出來ぬので、P氏と爭つた。それ程人間の不品行が嫌ひなら何故初めから善人ばかりつくらなんだ、一度惡い人間の種を播いて置きながら、それが惡事をしたと云つて罰するのは理に外れてゐる、無茶苦茶だ、と青い頬に赤味を帶びて、片言の英語交りで詰つたが、P氏は例の

悪寒を持出して苦しい經驗をした。で、その時は無宗教は病を云つて誤魔化すものだと思つたが、後に落着いて考へて見ると、或はそれが眞實ぢやないか、理に合つても合はなくても、そんな事が實際有るのぢやないか、と思ふと、その恐ろしい光景が強い刺戟を頭に與へ、目の前にちらつくやうになる。

彼れは一晩それに苦められた。

三

彼れの名は秋浦乙吉、年齢は十八、信者でもなく、又宗教に心を傾けてゐるのでもない。此地の縣立中學を三年級まで經て、成績も群を抜いてゐたのであるが、煩瑣な規定の窮屈なのと、學友の粗暴な擧動、團體的壓制の激しいのに堪へかねて、教師や保護人の留めるのも構はず、獨斷でこのP學院へ轉校したのである。教場の深沈で束縛もなく、悪どい友人のないのが何よりも悦しく、獨り讀書に耽つてゐる。去年の暮から一年越し、毎日曜に病院へ通ひ、絶えず服藥してゐたが、此頃はそれも止めた。初めから醫者の診斷が氣に入らなかつたので、藥の效目は些とも信じてゐない。醫者は慢性胃加答兒が原因で、神經も衰弱してゐるといつて、何時も相變らずの水藥と粉藥とを呉れるが、その病名が乙吉には不服であつた。自分は胃病でも神經衰弱でもない。眞の病源は後腦の一部にあるので、其處に何か有毒物が潜んでゐるに違ひないと確信してゐる。そして二三度醫者に向つて所信を述べ、後腦の凹みを示して、「此處を切開して見て下さい、それでなければ幾ら藥を飲んだつて駄目だと思ひます」と歎願したが、醫者は只笑つて、

「そんな處が切開出來るものか、安心して服藥しとればいゝ。不養生さへしなければ直ぐ癒る」と眞面目に聞いても呉れぬ。

乙吉は、死んでもいゝから切開して呉れと強請して、醫者に叱られたこともある。で、わざと醫者の注意に背いて不消化物を食ふ、夜更かしをする。そして三月たつても四月たつても、病氣が少しもよくならぬので、ます／＼診斷の間違ひを確信し、醫者に對して、「それ見ろ」といつた態度を見せてゐる。

かうして醫者に勝つのは多少の慰めにもなつたが、その中學資も嵩張つて、とても無用の藥代を支出する餘裕はなくなり、自然に病院通ひを怠るやうになつた。どうも自分は後腦の異狀のために斃れるのだ、祖父のやうに發狂するか、叔父のやうに卒倒して死ぬるか、どの道異常の死は免れないのだと、さながら首の座に直つてゐるやうに、觀念の手を合せてゐた。子供の時に縁側から轉んで頭を打ち、一時不省に陷つたこともあり、魚の身が思ふやうに取れぬと云つて、ひた泣きに泣き入り、そのまゝ氣絶したこともあるさうだが、その時から、生命の半ばは消え失せてゐるのかも知れぬと、自分の一生はさも離れがたない悪運に取付かれてゐるやうに感じてゐた。

彼れの郷家は祖父の代から田舍で指折の資産家であつた。そして父銀藏は寒い風にも當らずに人となり、幼少の頃から暇に任せてブラ／＼遊んでゐたが、十五の年にもう茶屋酒を飲み覺え、一二年の間に五六里以内の遊女屋で誰知らぬ者もなかつた。兩親も折檻の手段が盡きて、嫁でも貰つたならば多少身が堅まるだらうと、これ一つを最後の名策として諸方へ口を掛け、銀藏が十八の歳に無理やりに結婚させた。しかし當人は一人の女房位に滿足して、あんな面白い所を見棄てられるものかと、四五年間は身代のあるにまかせて道樂をし、放蕩息子の名は近村に鳴り響いた。そののらくらの間にも三人の子を拵へたが、二人は襁褓の中に死んでしまひ、

中の一人だけがやう／＼に呼吸をつゞけて生立つた。それが卽ち乙吉である。乙吉は父が二十一の遊び盛りに生まれ、物心のついた頃は、先祖傳來の大きな母屋は人手に渡り、離家を建直して、家族は其處に住んでゐた。

乙吉は小學時代から書物に親しみ、又乳母や祖父の側で物語を聞くのを好んでゐたが、戸外の遊戯には少しも興味を持たなかつた。朋輩に接することも嫌ひであつた。「後の山には天狗が棲んで、夕闇に遊んでる子供を攫つて行くことがある」「向うの川には河童が居つて、泳いでる子供の血を吸ふことがある」などと聞くにつけ、山も川も只恐ろしいものとなつて、蕨摘みにも水泳ぎにも行きたくはなかつた。生得記憶がよくて、一度覺えたことは決して忘れず、時々は夢をも長く覺えてゐることがある。度々風邪に罹つて發熱するが、そんな時には屹度幻の中に正體の分らぬ異形の者が現はれて、夜具の前後左右から、自分を壓迫して來るやうに感ぜられる。全癒して後も、幻は頭から拭ひ去られない。成長しても病んで發熱すると、必ずこの幻が熱中に現はれる。そして彼れはその幻に攻められると、看護の者に向つて大きな者が來る大きな者が來ると叫ぶのが癖で、父からは「又大きな者が始まつた、臆病な奴だな」と笑はれてゐた。

或日小學の教師から、天狗も河童も幽靈も皆無智の昔人間の拵へ事で、人は萬物の靈長で、人の道さへ踏めば、世界に恐ろしいものはないと教へられた時は、急に頭が輕くなつたほど悦しかつたが、かの「大きな者」は教師の說明でも消え失せない。中學へ入る頃からは最早「大きな者」を只妄念としてその存在を認めなくなつたが、その代りに更に恐ろしい思ひに苛まれるやうになつた。遺傳の理法、生理上の定則、此等を教師から聞き、書物や雜誌で讀む度に自分は見事なる刑狀持ちで、何時その虜となるかも知れぬ。

そして今彼れの唯一の慰藉は人に見られぬ部屋で一人聖書に耽ることである。

四

彼れはこゝ九月に學校へ入學すると共に、女宣教師から英文の聖書を貰つて、暇々に和譯のと對照して讀み、時々は學校の聖書科へも出席してゐたが、是迄は一度もその教へから深い感じを與へられなかつた。しかし今日のソドム、ゴモラの簡單な話は初めて彼れを刺戟して、色々の空想を起させる。長く／＼火鉢の側にぢつと坐つて、一途に考込んでゐると、ソドムの町燒滅の景が一つの油繪となつて心に浮ぶ。

そして、果しもなく自ら疑ひ自ら恐れてゐる間に、神經は冴える、夜は更ける。溫かい善哉餅を賣歩く「善哉々々」の聲が遙かに耳に震ひつく。

「秋浦さん、御勉強ですかい」と、聲を先立て、帶戸を開け、宿の息子の米松が入つて來た。畑仕事や野菜の出商ひが厭で、四五年前から尾の道の材木問屋へ奉公してゐるのだが、此頃は病氣のため歸省して休養してゐるのだと云つてゐる。しかし兩親との話の樣子では、彼地で何か不首尾な事を出來して解雇されたらしい。退屈だから時々話しに來るが、乙吉はそれが厭でならぬ。で、どうかして一刻も早く撃退しようと思つて、

「明日の下讀をしとるんです」と、わざと机へ捻ぢ向いたが、相手は察しの利く奴ぢやない、ちやんと坐つて煙管を取出し、

「貴方は御勉強が過ぎるから毒ですぜ、過ぎたるは猶及ばざるが如しと孔子樣が謂はれたと云つてゐるぢやありませんか、だから貴方も病氣にや

私とも無學な者とお話をなさるのは業にたちますまあ」と、無邪氣でにこ〳〵。

乙吉は無言で目だけ相手の方へ向けた。如何にも所在なささうだ。

「[illegible]はすつかり貴君に感心してゐますさあ、これまで色んな書生さんをお宿め申したけれど、貴君ぐらゐ御勉強一方の人はないつて、始終蔭でお噂をしてゐますよ。私は又金一方でやつつけるつもりだから、學問と云つちや、手紙一本碌に書けやしませんがね、その代りこの胸にや、六韜三略金儲けの虎の卷と云ふのが、ちやんとしまひ込んであるんですからな。今に運さへ向いて來りや占めたものだ。左樣さ、貴君が大學校をお卒業なさる時分にや、私だつて一身代仕上げると云ふ運びになるでせう。學者になるのも金持ちになるのも、つまりや同じ道なのさ」

「ぢや貴君は何をして儲けるつもりなんです」

「金になることなら何でも」と、目をパチクリさせて、吸殼を吹出すと共に不遠慮に唾を火鉢の中へ吐き、火箸で灰をかけながら、「仕事に好き嫌ひはない、何でもやると決心してるんだけれどね、一度海賊の仲間に入れと云はれた時にやぎよつとしましたよ、何ぼ金が取れたつて海賊ぢやね、一寸二の足を踏みますまあ」と、獨りでゲラ〳〵笑ふ。

乙吉は小氣味が惡く、目を伏せて横見をしてゐた。しかし米松は驚かない。そして自分が讃岐へ材木買占めに行つて、競爭者に一泡吹かせたこと、尾の道の遊廓で遊んだこと、町藝者が幾人ぐらゐ居て、その中の小富といふのは上方にも珍らしい中國切つての美人であること、その美人とも可成深い馴染を重ねたのだが、もう一息で自分の物になる所だつたのを惜しいことをしたとか、女を口說くには色んな手があるんで、から行くとどう御出でなさるかなんて、隙をねらつて掛引をやつてる間が面白い、商賣も同じでさあ、などと自慢さうに話して、

「若い時にや偶にや遊ばなくちやね」と唆かすやうに云ふ。親爺の手助けをして大根拔きをするのも厭だし、市街をぶらついても小遣錢もなければ張合もないし、毎日角帶に前掛をかけて欠伸ばかりしてゐるのも辛氣くさいので、乙吉でも引張出さうと思ひ、度々謎をかけて見るが、乙吉は初めから相手にしない。一寸の散歩にも彼れの目を避けて出る。

「私はどうせ長くこの土地に居りやしません、遲くとも今年中には何處かへ行きます、成るべくなら神戸か大阪へ行きたいものだが、……旅へ出ると、それで面白いことが多い。私にはこれで九州から四國、紀州の方まで散歩しましたぜ」と米松は小止みなく話の種を探つて、倦むことがない。波に洗はれる高松の城、樹木に圍まれた琴平神社、瀬戸内海の眺め、宮島の景。その締りのない聲の中に風情を帶びて現はれて來る。一舟で寢て、苫の中でお月樣を拜むなんて洒落てまさあ、いつそ海賊にでもなつて臺灣の邊へでも乘出した方が面白いかも知れん」と、獨りで笑つて愛想よく暇を告げて行く。乙吉は邪魔者の退散すると、居住ひを直して机に向つたが、不思議にも米松のゐる間は、ソドムの光景も自分の病苦も忘れてゐたので、彼れの去ると共に我れに歸ると、頭の輕くなつてるのを感じた。

五

翌日は風も靜まつて、八時頃には戶外はいゝ氣持に暖かい。乙吉は定刻に遲れぬやうに身支度して學校へ向つた。道で二三の同級生に出會つたが、目禮したばかりで、わざと間を距てゝ步んだ。校門の側には早出の學生が白毛の長く垂れてる狆を抱いて戲れてゐる。其處を通り拔けると、女小使が襷がけで竹垣の側に蹲んで

るのが見える。何をしてゐるのかと、近寄つて、上からソッと覗いて見ると、鶏を膝に抱いて、唐辛水を吞ませようとしてゐる。羽の艶のない鶏冠の朽ちた鶏で、白目を片寄せてゐる。女小使は乙吉を仰ぎ見て、

「貴方お忘れ物をなすつたでせう、唯今出して差上げます」と、笑顔で云つて、「どうもこの鶏がいけませんのでね、今朝から鬱ぎ込んで、どうかしてるやらなんで御座いますよ、貴方失礼ですけれど、この水を吞ませて下さいませんか、一人では自由になりませんのですから」と、鶏の口を両手で開けた。それにつれて自分の口も開ける。乙吉は詮方なしに茶碗を持つて、邪険にサッと唐辛水を注ぎ込んだ。餘沫は女小使の白い前垂を濡らした。鶏は身震ひして胸かに羽を鳴らした、女小使は鶏を憎々しさうに、ソッと朝日の中に置いて、部屋から書物を持つて来て、「貴方、昨日は大變御気分がお悪かつたやうでしたが、もうおよろしいんで御座いますか」と、さも案じるやうに問ふ。

乙吉は目を瞠つて、その顔を見て、「僕は昨日も今日も同じことです」と云つて、何故自分の気分の悪いことを知られたのだらうと心で思つた。

「冷えるのがお毒なんですよ、お休みの時間にや此室へお温りにお出でなさいましな……講堂にねえ、これからストーブのない教場や堪りませんわ」と云つて女小使は始業の鐘を鳴らした。

乙吉は今日の學課に聖書科のないのを遺憾に思つた。若しそれがあつたら、教師に向つて疑問を提出するのだが。

第一、何故神は不公平にも弱い人間と強い人間とを造つたのか。苦しい思ひをしに生れたくもないものを、何故この世の中に生み落して、日々夜々に苦しめるのか。神の有無を知らぬ迄は訴ふべく怨むべき所もなかつたが、若しも有りと信ずるならば、自分に不幸を下した兇首が明かになるのである。自分の病源が後腦の一部にある如く、自分に不幸を植ゑつけたものは全智全能不慈愛の神である。そしてかの宣教師は神の代表者だと云つてゐれば、彼れに向つて自分の疑問を發して疑ひの晴れるまで聞いて見てやる。

と、彼れは机の上に洋紙を置き、ペンを以て與へられたる英作文に取掛りながら、心は外に向つてゐた。受持教師たる宣教師の細君は、口を閉ぢ頬をふくらし目に愛嬌を湛へて、ドシドシと力を入れて室内を行きつ戻りつしてゐる。乙吉はチラチラその方を見ながら、頑丈な身體の機關の整つた人だなと思つた。そして聯想はその女の上に及んだ。彼等の一家族は神を信じてゐて、絶えず喜びに満ちてゐると云つた。して見ると、彼等は一度も苦痛を感じないであらう。不眠の苦み頭腦の惱み、五官の混亂をも感じないのであらう。死の恐れをも知らぬのであらう。夫婦兄弟の軋轢もなく、自分の家の將來の心配もないのであらう。

乙吉は不思議でならぬ。苦痛を知らぬ人、絶えず喜びに満ちてゐる人が、自分と同じ世界に生きてゐるのが不思議でならぬ。この教室には十一人の同級生がゐて、彼等は皆自分より學力は劣つてゐるが、絶えず喜びに満ちて、宣教師と同種類の人間であるらしい。彼等の或者は日曜日に孤兒院へ行つて、贈物で惡兒を喜ばせてゐる子供などを集めて、面白さうに暮してゐるが、それも不思議だ。自分はあんな子供を見ると、見たばかりで恐怖を感じ、自分の身にも傳染して、今にも身體中顫動けて、齒は軋れて、微塵動もならぬやうになりはせぬかと思はれるが、かの孤兒も不幸であるなれば、その保護者も不幸である。

だが、實の父さへ自分とは全然云ふこと爲すことが異つてゐるのだから、縁の遠い耶蘇信者や世間の人の心持で、自分と異つてるのは當然かも知れぬ。

で、鉛筆を手繰る音、ペンの音が、前後の机て入亂れてゐる間に、乙吉のみは一つ處を繰返して、それが濟まされれば、心が其表に向はぬかの如く、ペンは徒らに濡れ又は乾いて、女教師が答案を取上げるまで、一字をも紙上に綴らなかつた。

この日乙吉の隣には佐野といふ顔の青白い近眼の男が席を占めてゐた。この男は漢學や數學では八十點以上の成績を見せ、鉛筆は群を抜いてゐるが、英語は極めて劣つてゐて、又努力して學ばうともしない。そして教師から何か云はれると、腕組みをして頭を突出し、ニヤニヤ笑つて相手を馬鹿にしたやうな風をするのが癖だ。しかも外人は馬鹿にされたとは氣付かず、傍へ寄つて手を執らぬばかりにして教へ、「貴方、懶けること一番いけません」と一日毎に忠告しないことはない。そしてこの男が教師から英語で話しかけられた時に答へる言葉には何時も『I can not』が混らぬことがない。又に現はすべき適當な英語が考へ出せぬ時には器用な日本語でやつてのけるのだが、更に何か『I can not』だけは聞えぬ様にやつて來た。

此日は不思議に鉛筆も執らずに、ペンを走らせてゐたが、教師は傍に來て見ると、洋紙に面に教師自らの[illegible]と一人の學生の名が書いてある。それが如何にも滑稽に出來て頭いつて、教師も自分小言を云はず、苦笑をして、皆なに見せて喝采などとした。

後藤君のが一番いいのじやないかと、衆評が一致して「特色が出てる」と、ジロジロ實物と見比べてる者もある。

乙吉も横合から首を差出して見た。頭が禿く頭の先の、その尖つた先に二三つの疣が點々しく描かれ、上唇へ鼻汁が傳つてゐる。彼れはそれを見ると、青白い頬をポツと赤くして苦笑し、思はず鼻汁を啜つた。外の連中も自分等がポンチにされたのを見て悦しがり、進んで顔を突出して、おれも書いて貰ひ給へ、と求むる者があるが、乙吉は自分の顏の眞相を初めて見たやうに感じて不快でならなかつた。そして次の時間には席を外へ出て、佐野の目を避けるやうにした。彼れはこの時から佐野を嫌つてゐたが、佐野は案外に友人扱ひにして、次第に乙吉にも近づいて來るのに目を附く。

「耶蘇が耶蘇だから[illegible]學校へ入れたのだけれど、乙吉は日本人なのだから耶蘇は嫌だ、耶蘇は耶蘇でない。[illegible]所へ入つたのだい。[illegible]教師の[illegible]、耶蘇教會の儀式を[illegible]的に[illegible]、[illegible]可笑しいので、乙吉も閉惚れることがある。そして彼れに連れられて女小使をも[illegible]るやうになつた。

六

十二月二十日前から學校も冬季休暇となり、下宿から通つてゐる學生も皆故郷へ歸つた。乙吉一人は歸らない。そして休暇の翌日は學僚を誘つて、近所の或る有名な寺まで遠足したが、その結果は豫期に反して、寺にも田舎道にも珍らしい面白味もなく、却つてこのために疲勞して、一日を經たねばならなかつた、で彼れは遠足は一度きりで思ひ止まり、明けても暮れても讀書してゐた。讀書に目的があるのではないが、書物を措くと共に、恐怖の念が身を取卷く。彼れの讀書の際は彼れの念佛で、その聲の止まると共に無間地獄へ墮ちるのである。障子の外は直ぐに田圃で、墓地のある丘が眞向ひに見えるが、彼れはその障子を滅多に開けることをしない。米松の外にこの部屋へ入つて、

読書の稽古をする者はなく、乙吉自身も戸外へ出ることは稀である。所が、或日ふと女小使を訪ねて見たくなつた。

これ迄三四度もあの小使部屋へ行つたのであるが、何時も佐野と一緒であつて一度も一人で行つたことはないので、別に懐かしい思出のあるのでもないが

嘗て佐野に誘はれ英文法の一時間を休んで、小使部屋で火鉢に當り茶を飲んで過ごした時、佐野が道化た眞似をして女小使を笑はせた後で、

「叔母さんは一人ぼつちだから、死んだらどうするだらう、病氣になつても困るだらう、僕が此校にゐる間は一人で引受けて世話をして上げるけれど、僕がゐなくなつたら、誰れも世話の仕手はありやしない。だから叔母さんも死ぬるのは今の内だね、今の内なら安心して、極樂へでも天國へでも行きたい處へ行けるんだが、ぐづ／＼しとると心細いことになるよ、どうせ僕は來年あたりこんな耶蘇學校は止めて、東京へ繪を習ひに行くつもりだから」と云ふと

「まあ呆れた人だ、佐野さん位意地の悪いことを云ふ人はありやしない、私はちつとも心[illegible]いことはないぢやありませんか。Pさんでも、[illegible]さんでも、[illegible]のやうにして下さるんですもの。それに何時死なうと[illegible]、[illegible]して大勢になつて[illegible]れば、ちつとも[illegible]ことは[illegible]いません」と女小使はキッパリした調子で云ふ。

「そんなことを云つたつても駄目だよ、叔母さん、毛唐人のPなんかが當てになるものか。叔母さんは縫物が巧いんだから、こんな[illegible]なところにゐないで食つて行けさうなものだがなあ。その方が餘程一に身體の爲にもいゝ、僕はこれで人相を見ることが巧いんだが、叔母さんは[illegible]に[illegible]が薄くなるやうだ。もつと[illegible]なところへ出なけりや、今に不仕合になるよ、僕なんかお母さんに頼んで、いゝ家へ世話をしてあげてもいいんだが」

「何んでもないことだ。佐野さんは悪魔のやうな事を仰有る。」[illegible]で笑つたが、目付は平常よりも緊と[illegible]だ色を帯びて、一[illegible]は若い時分には、[illegible]の大[illegible]たりと渡り歩いて賑かな處ならそれや見厭いとるんですわ、佐野さんなんかの夢にも御存じないことを見聞いた揚句にPさんのお世話になつて、此處までお伴をして來たんですもの、[illegible]貴方方が手を引張つて町の中へ連れ出さうとなすつたつて、どうしてオイソレとこの山の中から飛んで行けるものですか」

「[illegible]叔母さんは[illegible]ない、尼さんだ」と云つて、佐野は[illegible]したが、女小使は時刻を見て鐘を鳴らしに出て行くと、乙吉に向つて小聲で、「[illegible]、あの女[illegible]色[illegible]な事をやつてたらしいよ、[illegible]にでもなつたのだから知れた[illegible]」と、[illegible]を云つて笑つた。

乙吉はこの時の事を思出したのである。成程佐野の云つたやうに、何んだか曰くのありさうな女だがと、自分の幼い頭で想像を逞うし、さぞ暗い恐ろしい道を通つて來たのであらうと思ひ、この想像にある部屋で何をしてゐるであらうかと、遂に訪ねて見る氣になつた。で校門を入つて行つたが、用もなく話もないのに、突如に[illegible]けるのも變だと[illegible]して、[illegible]四邊をうろ／＼してゐた。手水鉢の堅い氷も音を立てて融けかゝつてゐる。崖下の[illegible]には木の間がくれにP氏の[illegible]二人の[illegible]が見える。外人嫌ひの[illegible]も、[illegible]だけは[illegible]だ。[illegible]に[illegible]に比べると[illegible]は一人もゐないと云つたが、[illegible]それに違ひない。と、彼れは静かな[illegible]かい草原に[illegible]を見てゐたが、氣付

かぬ間に部屋の中から聖書を讀む聲がして、やがて泣くが如き祈りが始まつた。これが乙吉の耳には一語々々凄く響く。で、暫らく突立つたまゝでゐたが、聲が止んでも最早入りかねて、逃げるやうにして歸つた。歸つた後もその聲が染込んでゐて離れない。

その晩は崖下の道を散歩しながら、暗い中に、小使部屋の燈火が一つ薄く光つてゐるのを見て歸つた。

二三日して又行つた。この時は窓が開放されてゐて、かの女の手拭を被り、紙箒を持つた姿が見えた。そして向うから聲を掛けて、「貴方は、お國へお歸りなさらなかつたんですか、さあまあお上りなさいましな」と懐かしさうに云ふ。

乙吉は部屋へ入ると、畏まつて坐つた。話は女小使の方から持出されて、乙吉は只簡單に受答へするのみであつたが、不思議に居心地がよい。學生一人々々の氣風の異つてゐることや、宣教師の家族の皆善人であることも語られた。神樣の不思議な恩寵も語られた。先日孤兒院に糧米の盡きた時、院長が獨りこの後ろの山へ上つて終日斷食して祈禱をしたら、其翌日亞米利加の慈善家からの寄附金が着いたことも語られた。

しかし乙吉の心を動かしたのはこんな話ではない。

女小使は朝食代りに食べた蒸し芋の殘りを、自分にも食べ、乙吉にも勸めながら、「何時か教場へ書物をお忘れになつた時には、大變お顏色が惡いし、御樣子が變だから、どうなすつたのかと思つたので御座いますよ、でも此頃は御丈夫さうで結構ですわ、御勉强最中にお身體が惡くつてはねえ」と、もう氣遣つてゐるらしい口を利いて、「私はあの時から、何だか貴方の事が氣掛りでならなくつてね、始終思出してはお祈りをしてゐたんですわ」

「叔母さんは祈禱が好きかね、晝でも聲を出してやるんだね」

「…お祈りに晝も夜も差別はありませんわ、悲しいことがあつても、悅しい事があつても、屈託があつても、何につけ、忘れないでお祈りをしてさへ居れば、お前の一生は仕合せなんだから、暮れ〴〵もお祈りを忘れなさるなと、名取さんに度々云はれてゐますから、癪くつても痛くつても、直ぐお祈りをする氣になるんで御座います」

「でも叔母さんのお祈りを聞いてると、些とも悅しさうぢやないがね、何だか悲しさうで恐いやうだ」と、乙吉は次第に打解けて胡坐を搔いて云つた。

「お聞きなすつたんですか、私は、さあ神樣の前に手を合せて、お祈りをするとなると、これ迄の事や先々の事が一度に思出されて、一生懸命になるんで御座いますよ」

「一度に思出されるつて、何が思出されるんです、恐いやうな心配事があるんかね、僕は叔母さんが、まだ若いのに、こんな尼寺みたいな處へ五年も六年も籠つてるのは、屹度譯があるんだらうと思つてるがね、もう決して此處を出て行かん方がいゝよ。もう一度結婚したり、子を生んだりしない方がいゝと思ふ。僕はどうせ夭死するに極つてゐるんだが、その代り嫁も取らず子も生まんのだからねえ」と、乙吉は其處に立派な理由でもあるやうに云つた。

女小使は乙吉の眞面目な顏を見て笑つて、「何故そんな詰らんことをお極めなすつたのです。折角學問をしていらつしやるのに」

「だつて人間さへなければ世の中に憂い事もなくなるし、痛い事もなくなるんだ、未來に地獄があると云ふけれど、その地獄は人間を入れるために出來たんぢやないか、人間さへなければ幾ら地獄を拵へたつて何にもなりやしない。僕

は地獄があるとは思はんけれど、その代り年中胸や頭が痛くつて仕方がないんだもの」

「そりや貴方が信者におなりなさらんからですわ、地獄は信者の行く處ぢや御座いませんよ、神様さへ信じてゐれば未來だつてこの世だつて……」

「叔母さんは人がいゝから宣教師に騙されてゐるんだ。僕はどうせ信者にやなれんのだから、ひよつとして未來に地獄があつたら、其處へ投込まれるかも知れん。それだつて構ふもんか、一人でも入つててやらあ」と、感激した調子で云つた。

女小使は驚いたやうに少し口を開けて、乙吉の顔を見詰めてゐた。平生はあまり口を利かぬ乙吉も、この日に限り、ふとした機會で調子づいて、かねて自分一人で思つてることを相手構はずに喋舌つた。女小使は受太刀になつて、詮方なく、「さうで御座いますかねえ」と氣のない返事をしてゐたが、やがて乙吉は目を据ゑて、聲を沈ませ、

「叔母さんは此處を止めさされるか、さうでなくても歳を取つたらどうするつもりかね、天國へ行くにしても、それまで飯を食つて生きてなくちやなるまい。僕はどうせ親爺の生きてる間に死ぬるんだから、生活の心配はないんだけれど」と、氣遣はしさうに聞いた。

「その御心配には及びませんよ」

「さうかね、宣教師は當てにやならんよ」

乙吉は立上つて、三方が板で一方だけ小さい日本室のある、この粗末な部屋をジロジロ見ては考へてゐたが、突如に、左様なら」と云つて戸外へ出た。女小使は暫らく小首を傾けて、呆氣に取られてゐた。そして「あの人は頭が惡いと云つたが少しどうかしてるかも知れん、氣の毒な人だ」と思つた。

やがて小使部屋では祈禱の聲が起つた。學校が休暇になり、仕事も少くなつてからは、女小使は、矢鱈に祈禱に耽つてゐるのである。

七

乙吉は三年間もこの市にゐても、つひぞ一人會ひたくてならぬ人は出來なかつたが、この女小使ばかりは妙に心に叶つた。夜深けて讀書してゐると、ふとその女の祈禱の聲が幽かに哀れげに耳元で響くやうに感ずることもある。蒲團を被つて眠につくと、三方板で圍まれた眞暗な部屋に、白い前垂をした女の、手を合せて祈つてる姿が目の先に浮上つて來ることもある。一新でも祈禱の聲を止めれば、直ぐに思ひ出も止まるのではないかとも思はれる。或夜も夢ともつかず、人の氣もない處で、その女が祈り自分が讀書してゐる有樣が見えた。

そして彼れは遠慮もなく、二三日つゞけて女小使を訪問した。訪問すると多少心が落着いて頭が輕くなる。で、

「僕も此處へ移りたいな、叔母さんのお祈りを聞いてると、安心して書物が讀めるし、夜もよく眠れるだらうから」と云ふと、

「さうですかね、ではもつと家がお綺麗だとお留め申してもいゝんですが、これぢや、貴方のお寝みなさる處もありませんからね」

「いや、僕は寢床なんか何處だつていゝ、留めて呉れませんか。僕はこんなに方々を圍つて隙間のない部屋が好きなんだからね、此處だとごつしやり締めとけば戸外の音が聞えんし、誰れも入つて來ないからいゝ、僕の今居る室は締りが惡いから、色んな者が忍び込んでいけないんだ」

「だつて貴方、こんな窮屈な日の當らん處では身體にお毒ぢやありませんか」

「僕は此頃は身體に毒にならうと藥にならうと、そんな事を考へたことはない。

よふつて、乙吉は弛んだ目をこすつては、粘つこくなる目の中をモガ〳〵させ、果はコロリと横になり、心安けにスヤ〳〵と眠る。一時間もすると、吃驚して跳ね起き、

「叔母さん誰れも來なかつたかね、聲がしたやうだが」と四圍をキョロ〳〵見る。

「誰れも來るもんですか、寢呆けていらつしやる。……今日は温かだから裏の山でも散歩なさいまし、その方がお身體にもよう御座いますよ」と、女小使が勸めると、乙吉は素直にその言葉に從つて出て行く。

後で女小使は讃美歌を唄ひながら、晩餐の支度に取掛つてゐると、乙吉は散歩の歸りに又立寄る。

女小使は親切に話相手になつてゐるものの、次第に不安心を感じ出した。あの人は少し變なのだから、どんな機會で間違ひが起らんとも限らんが、係合つて當惑をしなければよいがと案じるやうになつた。

乙吉は無二の親友を得たつもりで、日に一度は必ず訪ねる。夜でも寒い風を厭はずに行くことがある。行くと何時も後頭部の疼痛を訴へたり、宿の者の冷遇を訴へたりする。或時は眞面目で、「僕は昨夜夜中に目が醒めるとね、變な物が足許に見えたから跳起きて、マッチをつけてね、もちつとであの部屋を焼打ちにしようかと思つた。矢張り頭が惡いから氣が變になるんだね」と云つて女小使を恐ろしく感じさせた。しかし乙吉は外の人に向つては、嘗てこんな話をすることはない。

八

歳は改つたが、この地は一般に陰暦本位であるから、別に新年らしい模様も見えぬ。米松はかねて明けたら何處へか行きますと云つてゐたが、三日が過ぎても、仕事の定まつた風はなく、相變らずの懐手で暮してゐる。次第に乙吉を見限つて、「話せねえ奴だ」と近よらなくなつたがその代りに、夜毎に近所の百姓や小商人の家へころげ込んで、夜更しをするやうになつた。かの女小使とも孤兒院出入の米屋で一二度會つたのを縁に、その部屋へ、獨りで遊びに行くやうになつた。

或夜、例の如く宿の者が早寢の床へ就いた後まで、乙吉は讀書の聲を絶たなかつたが、不意に何物かに息を縊められるやうに感じて、書物を置いて振向いた。脣は乾き喉は粘り、目は眩迷して心臓の鼓動も早い。火鉢に堆い炭火は惡どく顔を照らしてゐる。彼れは頭を抱へて机にもたれた。自分の身に破滅の時が來たやうに感じた。そして暫らくして我知らず立上り、雨戸を開けて田圃道を下りた。足袋跣足で漫ろく歩いてゐたが、自然に小使部屋の方へ向いた。左右の人家には燈火も消えてゐたが、月は冴えて道は明るく、庭に沿うて並んでる藁束が光つて見える。

彼れはゾッと寒氣がして心も少し落着いたが、何となく宿へ歸りたくない。四方は寂として、恐ろしく耳に響いてゐた犬の聲も遠く〳〵消えた。すると丘の方で女小使の祈禱の聲がしてゐるやうに感ぜられる。はてな、四五町も隔つてゐるのに聞える筈はないと首を傾けて耳を澄ましたが、矢張聞える。地の底を傳つて來るらしい。

彼れはその音を踏んで、小使部屋に近づいた。今夜は宿で寢たくない、成るべくなら小使部屋に留めて貰ひたい、彼處なら安心して眠れるし、又自分の身體に何んな事があらうと、あの叔母さんの傍なら、さう恐るゝに足らんと思ひながら、戸口へ行つて聲を掛けようとすると、不意に賑かな笑聲が室内に起つた。彼れは身震ひして思はず耳を蔽うた。そして耳を蔽うた

まゝ校門を出たが、まだ笑聲が耳元に響いて、蔽うた手が離せない。で宿の方へ駈け下つて、藁束の側に蹲つてゐたが空の星もグラ〳〵動いてゐる。

　こんな不穏な世界に皆なが安眠してゐるのは不埒だ。鐘でも鳴らして目を醒まさせてやらうかと思つた。

　でも、何處を通つたか、自分もしかと覺えぬ間に、元の寝床へ歸つて夜明頃まで眠つてゐた。

　翌日は發熱したが、強ひて十分に食事をして、戸外へ出掛けようとすると、米松が戸口に立ちはだかり、氣取つた風で巻莨を吹かしながら、目に冷笑を浮べて、

「やあ、女學校の小使部屋へ、お出でですか」と云ふ。

　乙吉は返事もせず、米松の顔を押しのけるやうにして駈け出した。そしてあの男は何故自分の行先きを知つてるんだらう。不思議な氣味の悪い奴だ。彼奴が來てから、自分の宿は一層不穏になつたのだと思つた。二三町して振返ると彼れは未だ戸口に立つて、此方を見てゐるので、とても怖くなる。彼奴がおれに悪意を持つて探偵してゐるのぢやないかと、道を外らして遠廻りして、後から丘に上つた。町は眼下に[illegible]つて、川は緩かに流れ、平生と變つた所もない。西洋人の庭には五六人が寄りつ離れつ温かい日光の中で遊んでゐる。昨夜の異状を知つてゐる者は世界中で自分一人であらうか。

　かう思つて、彼れはソッと學校の裏手に下りた。蟲を銜へた鶏がチョコ〳〵と小使部屋の方へ逃げて行つて、窓の下で[illegible]。乙吉は[illegible]心[illegible]たが、部屋には[illegible]音もしない。[illegible]たあれが[illegible]てあつたが、何か[illegible]つたのではなからうか。あの女が死骸にでもなつてゐやしないだらうか。

　で、彼れは[illegible]、[illegible]て覗いて見た。女小使は俯背いて丹念に縫物をしてゐる。

　[illegible]安心して内へ入ると、小使は、「お掛けなさいまし」と云つて、少し後退りして席をつくり、乙吉を坐らせたが、[illegible]やうに笑顔も見せねば、柔しい言葉をも掛けぬ。そして縫物をしながら、屢々偸目で乙吉を見る。

　乙吉はそれとも氣がつかずに、「小母さん、昨夜は何ともなかつたかね」と問うた。

「えッ、昨夜……」

「どうもなかつたかね、僕は昨夜[illegible]つた」と乙吉は[illegible]話をしようと思つたが、女小使が[illegible]と感じて、明かにそれとは語らなかつた。そして、

「僕は叔母さんだけは信用しとる。だから何處か[illegible]ない土地に[illegible]と二人で住んでゐたい[illegible]……何處にもそんな處はな[illegible]」と悲しさうな聲で云ふ。

「貴方は何故お國へお歸りなさらないんです。[illegible]つしやるんだから、久振りでお歸りなすつたらいゝぢやありませんか。ねえさうなさいましな」

「僕には[illegible]だよ、二度と國へは歸らんつもりだ」と、[illegible]手で[illegible]を組んで[illegible]つた。

　女小使は[illegible]して[illegible]つてゐると、乙吉は戸[illegible]を[illegible]い目で見て、

「叔母さん、夜になると箪笥にでも錠前を卸しとく方がいゝよ」

「だつて、中には何んにもないんですもの」

「いや、錠前はちやんと卸しとく方がいゝ。今夜からさうしなさい」

「あゝ、よう御座います、貴方がさう仰有るんだから」

「屹度だな」と、乙吉は念を押して、「僕はもう

誰れにも口を利かんつもりだが、叔母さんにだけは何でも話すよ」

九

その日から宿の者は、彼れに近づかず、三度の食膳をも押付けるやうに置いて帯戸をピシャリと締めて行く、夜になると、栓張をもかうて置くらしい。そして二三日の内に珍らしく保證人の伊藤が訪ねて來た。米松は何かヒソヒソ話してゐたが、乙吉に向つては別に用事もなく、只部屋の模様を見て、

「どうです、身體の加減はいゝんですかい」と問うたばかりであつた。そして歸りにコッソリ米松に向つて、

「別に變つたことはないぢやありませんか、平生からあんな人間なんだ」と、氣にも留めなかつたが、米松は、

「しかし留守居の女は、ひどく恐れてて、あの人に來られちや困ると云つてるんですからね、私の家だつて間違ひでもあつちや困りますよ、何なら貴方のお宅へでも引取つて下さいませんか」

「だつて私もどうする譯にも行かんのだから、當分からしといて、いよ／＼變だつたら、國の親戚でも呼んで連れて歸らすさ」と伊藤は係合ひを面倒臭がつて、米松の言葉に身を入れて相手にもならないで、サッサと歸つてしまつた。

後で乙吉は不快でならぬ。伊藤の奴、何を米松と打合せてたんだらう。この夏も自分の轉學の邪魔をしやがつたが、今度も亦何かして自分を陷れようとしてるんぢやないか知らん。しかしさうはさせんぞ。見て居れ／＼と獨り力んだ。そして小使部屋で讀書しようと思ひ、四五冊の書物を抱き締めて傍目もふらずに學校へ行くと、女小使の姿は見えぬ。教員室の窓は開いて、二三の日本人の教師が火鉢を圍んで居り、廊下には五六人の學生が掲示を讀んでゐる。

「うん、明日から授業が始まるんだな」と、乙吉は今初めて思出して、その掲示へ駈け寄つた。で、瞬きもせず掲示を見据ゑて、暫らく身動きもしないでゐると、黒の襟卷で顏の半ばを包んだ佐野が、後から肩を叩いて、「秋浦君、休暇に何か面白いことがあつたかい」と云ふ。

「君の國は何ともなかつたか、此地は餘程變つたよ」

「さうか、僕は昨日歸つて來て聞いたんだが、君の宿の息子は小使の婆あと喰付いたつてねえ」と、佐野は鼻の上に小皺を寄せる。

「嘘だらう、僕あちつとも知らんもの」と云つて、乙吉は心の中で、佐野といふ男、よく／＼寢呆けたやうな事を云ふと思つた。

「誰なものか。これから押かけて見ようかな。あの女は元が元だから、それ位な事ありかねない」

「君も僕をいぢめるつもりだな」と、乙吉は瘦拳を握締めて反抗の態度を示し、

「僕は君等が何と云つても恐れやしない、決心しとる決心しとる」と、尖つた聲で云ふ。

佐野は驚きもせず、「何を決心したんだい」と空呆けて、「休暇の間に大分様子が變つたな、君の顏も妙に歪形になつた」と云つて、罪もなく笑ひ、「どうだ、久振りで其邊を歩かうか。まだ白皙美人にもお目に掛らんが、健在かね」と、乙吉を誘つて西洋館の横手を下り、日當りのよい金柑畠に添うて歩いた。乙吉は油斷をしない。馬鹿め。おれを騙して、何處か陷穽へでも連れて行かうとするんだらうが、その手は喰はんぞ。おれだつてこんな奴等にや負けやしないぞ。恐いもんか、何處へでも行つて見ろ。と、滿身の勇氣を揮つて斜かひに後からついて行つた。

佐野はさも心地よげにフラ〲と歩いて口笛を吹いたり、詩を吟じたりしたが、乙吉は全く口を噤み、充血した目は異様に光つてゐる。

「僕はこの休暇中に、うまく親爺を口說いてね、三月か四月にや、東京へ繪を習ひに行くことになつたよ。君もこんな吝な學校は止して東京へ一緒に行かうぢやないか。僕はね、これからは學校の英語なんか打ちやらかして、繪の稽古をするつもりだ。この邊も記念に畫いとかうと思ふが、此處から崖の上を見渡すといゝ景色ぢやないか、あの樫の木の側へミスPでも立つてるといゝがね」

と、佐野がその方を顧みると、乙吉も無言で顧みた。樫の木には小鳥が群がつてゐる。崖の上には、綱の帶を半纏の上に締めた老婆が、落葉や木片を拾つてゐる。後の山から寒い風につれて異形の薄雲が湧き出て來る。

佐野は歩いては留まり、歩いては留まり、薄寒くなるのも厭はず容易に歸らうともせぬ。乙吉は足も疲れ、張詰めてゐた氣も弛み、佐野をも米松をも、今は忘れたるが如くなつたが、それと共に、かの鬱蒼たる山が、一種異様の光を帶びて來た。風につれて、悲鳴をあげて頭上を壓するものがある。

「そりや來た」と彼れは凄く叫んだ。

「何を云つてるんだ、吃驚するぢやないか」と、佐野はその斜眼をピク〲動かした。

「先日から彼奴がこの邊を徘徊つてるんだ」と乙吉は地べたに蹲んで、頭を壓へたが、やがて、フイと立つて、畠澤田の用捨なく、無我夢中で飛んで、自分の宿へ歸つた。

十

しかし彼れは掲示場で見た授業時間を忘れず、翌日定刻に學校へ行つた。最初の一時間は會話であつて、外人教師は如何にして冬季休暇を過ししかといふ題で、順繰りに答を求めた。佐野は昨日求めた安物の繪具箱を持つて片隅に腰掛け、悅しさうに弄んでゐたが、問答の番が來ると、何時もの「何を云つてるんだい」と云つた調子で、"I can not" の連續を始め、遂に不得要領で終つた。學友はクス〲笑つてゐたが、當人は平氣で、役目が濟むと、又繪具いぢりを始めた。教師から「授業中そんな物を用ひてはなりません」と注意されても、聞入れないで、頻りに洋紙へ繪具を塗つてゐる。そして教師が顏色を變へて、繪具箱を取上げ、「時間中預つて置きます」と持つて行かうとすると、矢庭に立上つて、それを掠取り、「何をする」と叫んだ。教師は首をブル〲慄はせたが、不都合を責めたが、如何ともしがたくて、身體を轉じて次の席に向つて質問をした。その學生は、[illegible]に流暢な英語で聖書の研究や、田舍の會堂へ行つたことを話した。二三人を經て乙吉の番となつた。彼れは佐野と教師との爭を見て心が動搖してゐたので、質問されると、機械仕掛のやうに跳上つて聲に力を籠め、

「私はこの休暇にこの空中に恐ろしい物の存在してゐることを、確かに發見いたしました」と英語で述べ、後は日本語で、

「我々は互ひに警戒してゐなくちやならん。何時この市は踏潰されるかも知れんぞ、何時この市の人間は息の根を絕たれるかも知れんぞ。僕しもう駄目だ。いくら用心しても我々の力に及ばんのだ。最早遠からず、何もかも滅茶苦茶になるんだ。譃吐きの西洋人も、正直な女の小使も皆な一度に目も口も潰れてしまふ」

彼れは俄かに口を閉ぢる。顏の色は急に蒼ざめて、宙にぶら下げた手は次第に縮んで來る。場內は暫らく森として、學生は互ひに顏を見合せてゐた。

「はゝあ、奴狂人になつたな、道理で變だと思

つた」と、佐野はノソ〳〵乙吉の側へ來て、手を拂らうとすると、乙吉は唐突突然にして、「そら來た。逃げろ〳〵」と縁を兩手で押開けて、小使部屋の方へ駈けて行つた。

今まで額見合せてゐた連中も、急に騷ぎ出して、總掛りで取押へて、保證人の家に運び込んだ。

で、翌日佐野が見舞ひに行くと、彼れは書物を讀んでゐて、さしたる異狀も見えぬ。

「君もあんな下らない學校は止して、僕と一緒に遊び給へ。そして春になつたら、東京に行かうぢやないか」と云ふと、

「さうさ」と、乙吉は暫らく考へて、「いや、駄目だよ。東京へ逃げに行つたつて駄目だよ。僕も色々工夫して見たけれど彼奴には敵はんからね」と萎れてしまふ。

散歩の途上

散歩の次手に鳩居堂へ寄つて、黄斐に陳列された歌麿の美人繪を見たことがあつた。美術に對して批判力の乏しい私も、見惚れるほどに美しく思つた。銀座の街上を歩いてゐる今樣に媚態を備へてゐる今樣の美人に比べると、夢幻の美しさがあつた。風俗ばかりでなく、顏面容姿の變遷が面白かつた。しかし今日の女子だつて、優れた美術家が描いたなら、現代らしい藝術美を發揮して、後世の鑑賞家をして大正の美人繪に讃嘆の涙をこぼさせるであらう。我々が過去の美にあこがれ、現代を散文的に感ずるのは一つの迷妄で、後世の人間は、大正の蕪雜の世を顧みて美しい夢を感じるのに違ひない。輕佻浮薄の譏りはあつても、今に多くの女子が洋服を着るやうになるだらう。ダンスが普及するであらう。日本音樂が亡んで西洋樂が田舍の場末にまでも行渡るであらう。男子もこんなイガ栗頭ではゐられなくなつて、頭の髮を分けて、香水やコスメチックで美しくしなければ世間へ出られなくなるだらう。私など幸ひに今の時世に生れたため、服裝や髮形に面倒な思ひをしないでゐられてよかつた。

私は西洋樂に何等の興味がなく、三味線樂にはつねに感動させられてゐるのであるが、數百年の間日本國民を樂ませた三味線も、今はその役目を果して、滅亡に瀕してゐる。亡びに近づいてゐる音樂として聽いてゐると、三味線の音にます〳〵哀れが感ぜられる。歌舞伎芝居だつて同じことだ。先日芝居好きの田舍の老人が市村座の「助六」を中途で見殘して歸つて來て、とても退屈で辛抱が出來なかつた」と云つてゐたが、老人でさへさう感じるやうになつたのだ。やがて、舊劇も舊音樂も少數の物好きに愛翫されるだけのものになつて、時代は動いて行くだらう。新進の作家が既成作家の跋扈を氣にしてヤキモキしてゐるが、さう案じるには及ぶまい。先進者は次第に歳を取つて時世に遲れつゝあるのだから、早晩文壇も變化するだらう。戰爭みたいに一朝一夕に老人を叩潰すことの出來ないのは、文學の性質上如何ともし難いのだ。

（『文藝評論』の「散歩の途上」より）

微光

一

土用太郎——二三日降續いた涼しい雨も上つて、今朝は朝から日が暑く照つた。

お國は昨夕も寢そびれて、明方からやう〳〵淺い眠についた。そして取留めのない不愉快な夢を見てゐた。目の醒めた時はもう九時に近い。急いで部屋の掃除を濟ませて風呂へ行つた。時間を氣にしながらも念入りに磨き立てた。昨夕結つた銀杏返しを自分で取繕うて、顏は臙脂白粉で色取つた。二三の祕密の手紙を机の中から取出して細かく引破つた。一度部屋の内を見廻してから階下へ下りて、神さんに留守中の事を賴んで、若しも留守に旦那が遊びに來るやうだと、氣をつけて上げて下さいと、封筒に包んだ五十錢銀貨をソッと手渡した。

「お早くお歸んなさい。お家へもよろしく」と、神さんは門口まで見送つた。

其處から俥に乘つて、道々土産物を二包み買つて、切通の坂まで行つた。大和屋と看板の出てゐる小さい西洋菓子屋の前で、車夫を呼留めて、店先で下りて、「姉さん」と聲を掛けながら、店へ上つた。

「まあ國ちやん」と、姉は仕事の手を休めて、呆れたやうに云つて、頭から妹を見詰めた。縞縮の羽織に男三重の帯、あの縮緬のやうな着物は絽かも知れんと思ひながら、「此方とも來ないのね。どうしてるの、居所も知らせないんだもの」

「どうせ來月になつたら、引越さうと思つてるから」

お國は狹い板の間を通つて、茶の間へ入つた。箪笥の上の枕時計は丁度三時を指してゐる。四時の汽車にはまだ間があると思つて、少しは心が落着いた。團扇を使ひながら、

「姉さんは何時の汽車で行くの、私四時ので行くのよ、姉さんは一緒に行けないでせうね」

「さう急に行けるものかね。本所の姉さんが明日の朝の汽車で立つといつて來たから、私もその積りでゐるんだよ。國ちやん明日にしたらどう。どうせお妹さんが[illegible]今日でないといふんぢやなからうし、明日なら一緒に行つた方がいゝよ」

「だけど、私、今日でなくちや都合が悪いの。それに本所の姉さんと一緒ぢやいやだわ」

「まだそんな事をいつてるの、お前も執念深いねえ」と、姉は浮世の苦い顏に微笑を浮べて、「本所の姉さんも今は隨分苦勞があるらしいよ。彼處の兄さんも出世してお金が出來たもんだから、道樂をして仕樣がないんだつて、此頃も淺草の藝妓を受出すとかで騒いでるさうだよ」

「だつて、それやあの姉さんが悪いからさ、夫の不身持は大抵女房が仕向けが悪いからですよ」

と、お國は言葉強く云つて、[illegible]小言だよと思つた。「よくあんなに[illegible]にしてゐられるわね、今だつてさうでせう、あんな[illegible]にして御亭主に道樂をされるなんて、姉さんも馬鹿だよ」と嘲つた。二三年前に本所の姉さんに[illegible]かまはれてばかりの金を[illegible]なかつた爲に、自分が嫌な男の妾になつて、それからますます淺間しい境遇に沈んで來たことを思ふと、今も尚口惜しくてならぬ。で、さんざんにその姉の悪口を並べたが、此處の姉は向う贔屓

ばかりして、些とも同意しさうでない。それに忙しく立つたり坐つたりして、落着いて話も出來にくい。三錢五錢のお客にもお世辭を云つてゐる。

「この商賣も煩いものだわね」と、お國は店の方を見て、「もつと氣の利いた商賣をしたらどう？」

「お前が資本でも貸して呉れれば、何でも始めますよ」

「飲食店か何かだと儲けが多いでせう、洋食屋なんかいゝわねえ。……私時々思つてよ。どうせ私は眞面目に働く氣になれやしないんだし、かうして歳を取るばかりで、先の當てもないんだから、いつその事、吉原へでも身を賣つて、その金を姉さんやお母さんに上げようと思ふことがあつてよ」

「馬鹿お云ひでないよ」

「だつて、私本氣でさう思つてよ、どうせお女郎なんか私には勤まりやしないんだけど、さうしてお金だけ取つといて、直ぐに自害して死んでしまふの」

「大變な覺悟ね」姉は笑つたが、「冗談は冗談として、お前も些とは眞面目に考へなさい、姉妹でありながら、居所さへ分らないやうだと、私だつて心配だよ。今度故郷から來た葉書だつて、わざ／＼よしやまで持つてつて、お前の所へ屆けて貰つた位だもの。お母さんもどんなに心配してるか知れやしないよ」と、親身に意見するらしかつた。

「姉さん」と、お國は改つた調子で、「その話もう止して頂戴。そんな事を云はれると、私故郷へ歸りたくなくなるから」

自分の身の上の事は、薄ぼんやりの姉さんなぞに彼此云はれたくはない。眞面目に考へてどうかなるものなら、馬鹿な私ぢやない、疾つくにどうかしてゐる。で、早く姉の側を離れたくなつて、

「私、もう出掛けなくちやならない」と、時計を見て立上つた。

「まだ早いよ、氷でも飲んでからお出でな」

「私澤山。……ぢや、彼地へ行つて、病氣の様子で電報を打ちますよ」と、忙しく暇乞ひして、店先へ出ると、姉は追駈けて來て、小聲で、

「病氣が左程でなくつてもね、スグコイと電報を打つてお呉れよ。さうでないと家を出悔くつて仕様がないから」

「えゝ」

お國は首肯いて俥に乘つた。

二

上野の停車場に着くと車夫に風呂敷包を持たせ、謹ましやかに歩いて二等の待合室へ入つた。時間が早いから、手紙で打合せをして置いた河津さんはまだ來てゐないだらうと思つて、よく捜しもせず、周圍の視線を避けるやうにして、片隅に腰掛けた。そして二年前にその人と人目を忍んで、此處から大宮まで行つたことなど心に浮べて、あの時の樂みを再び繰返したかつた。あの時は淡雪が降つてゐた。寒い風に吹かれながら相合傘で宿屋まで行つた。火鉢に翳した河津さんの手の紅く膨らんでゐるのが、可笑らしくも痛々しくもあつた。

と、お國は背に流れる汗をも、騒々しい物音をも忘れて、懐かしい思出に耽つてゐると、今まで新聞臺に身體を曲げて、据付の新聞雜誌を讀んでゐた男が、不意に頭を持上げて、口元に微笑を湛へて側へ來た。「姉さんは來ないの」と柔しく聲を掛けた。

「アラ」と口の内で云つて、お國は夢から醒めて、「姉さんは明日に延ばすんですつて」

「ぢや、却つて都合がいゝね」

「えゝ」

「切符はまだ買はないの」
「えゝ、まだ」
「ぢや、僕が買つて來よう」と、男は切符口へ行つた。
お國は横から男の姿を見詰めた。此間久振りに出會つて淺草公園を散歩した時には、夜だつた爲か、何となく面窶れて萎れてゐるやうに見えたが、今見ると、元のやうに凛々しくて、顏に歳は取つてゐない。薄い髭を生やしかけてゐるのも却つて愛くるしく見える。新しい麥藁帽子、絞りの兵兒帶、涼しさうな浴衣姿が似合はしかつた。
男は二枚の青切符を持つたまゝ、時間表を見たり、其處等をコツ〳〵歩き廻つたりした。お國は目で男の後ばかり追うてゐた。
やがて雨毛線行の改札口が開いた。男は女から風呂敷包を取つて、先に立つてプラットホームへ出た。人氣のない室を見て乘つたが、其處へは後から老人が一人入つて來たばかりだつた。
お國は直ぐに羽織を脫いで、首筋の汗を拭うた。汽車が動出すと、涼しい風が窓から流込んだ。
「私、やう〳〵落着いてよ」と、今まで壓へてゐた息を吐いた。胸は清々しくなつた。東京が後へ〳〵消えて行くのが氣持がよかつた。かうして何時までも旅をしたいと思つた。
「僕も久振りの旅だよ、此頃は汽車に乘るのも珍らしい」と、男は向合つて窓際に腰掛けて、外を眺めながら、落着いて煙草に火を點けて、「突如にあの手紙を見て、どうしようかと一寸考へたよ。先日きりで會はん方がお互ひのためにいいと思つて、今日は來まいかと思つたんだが、意志が弱くてとう〳〵お伴をするやうになつちやつた」と笑つて、「どうせ姉さん達と一緒なら、他所ながら樣子を見るだけだと思つてたら、誰れも來なかつたんだね。お母さんの病氣はどんなのだい、さう惡くもないだらう」
「どうだか」と、お國はそれには冷淡に答へて、「ぢや、此間きり貴方はもう會はないつもりだつたの」と、これには力を入れて云つた。
「どうせ仕方がないんだもの。國ちやんだつて、もう浮氣は止しちやつて、その何とか云ふ人に眞心を持つてた方が身のためだよ。だから僕は會ひたくても會はんつもりだ。それに僕も學校を出たんだから、これから職業を搜さなくちやならんし、以前のやうにしちやゐられない」
「皆な私が惡かつたんだわね、私のために卒業も一年遲れたんだから……皆な私が惡いん、だから、これから又貴方に御迷惑を掛けて、出世の邪魔をしようとは、夢にも思つてやしないのよ。だけど、今日貴方に來て頂いたのは、この先何時お目に掛れるか分らないやうな氣がして、こんな折にでも緩くり會つて置きたいと思つたからだわ。浮氣々々つて、貴方に會ふのが何故浮氣なんでせう」
お國の氣色ばむのを男は押靜めようとして、情愛を含んだ目を向けた。そして後の窓に肱を突いて、居眠りをしてゐる老人を憚るやうに、チラとその方を顧みた。
「昨日の貴方の手紙だけは破らないでチヤンと持つてるのよ」と、帶の間に小さく疊込んでゐるのを取出して擴げて、「貴方一度讀んで御覽なさい」
「自分の手紙を讀む必要はないさ」と、男は手に取らうともしないのを、
「必要があるから云ふんですよ」と、無理に押付けた。
手紙はペンで書いてあつて、處々爪痕がついてゐる。男は半ばは眞心、半ばは戲談のつもりで、一晩掛つて書いたその手紙を讀返した。

先日の淺草の散歩の樂みから、過ぎし昔の思出を、字面の美しい文字で細かに書いてある。

「本郷座の側にて一時間餘も待ちあぐみて、御身も何かの障礙にて家出もならぬことならんと諦め、失望して歸宿せんとする刹那に、御身の幽かなる聲を耳に致し候。幽かなれどその聲は小生の一生に耳朶を去らざる聲にして、今孤燈の下鮮かに思出され萬感交々至り、一滴の涙なきを得ず候。冴え渡る月光に浴して、湯島天神の境内まで、互ひに語らふ言葉もなく歩みて、其處にて一生の別れを告げ候ひしは、御身も何お忘れならぬ事と存じ候。大宮の雪湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を惱ましもし慰めも致し候。」

「あの時には己が罪をやつてたよ、僕はその繪看板を見ては悲しい思ひをしてたのだ」と、男はその後暫らく生きる瀬もなく暮してゐたことを思つて、「國ちやんは十日もしたら忘れちやつたらう」と、手紙を疊んだ。

「え、、十日どころぢやない、二日も立つたら忘れちやつた。私、薄情だから」お國は早口に云つて、再び手紙を開いて、「貴方よく讀んで、その爪痕の處を」と。

「それがどんなのだい。眞面目に將來の忠告をしてるんぢやないか」

「さう‥‥」

お國は爪先で目印したあたりを注意して讀んだ。其處には情深い、柔しい、涙を誘ふやうな文字が、濃く鮮かに浮んでゐる。――△△とかいふ親切な人を大木の蔭と頼んで、心安く日を送られるならば、小生の絶え間なき心掛りも稍々安んぜらるゝ次第なれば――なんて。

「貴方私が今氣樂に日を送つてると思つてて」と、涙早い目を濡ませた。

「今はそんな話は止さう」

男は湧上る感情を紛らすやうに快活に云つて、手紙をズタ／＼に引裂いて外へ棄てた。一片二片舞戻つて車の中へ落ちた。お國は默つてシホ／＼した目で男の顏を見てゐた。

やがて汽車が大宮に着くと、かの老人は手鞄を下げて下りて、新に子供連れの夫婦が入つて來た。急に賑かになつた。細君は座に落着くと先客の二人の顏を疑ひ深い目で見た。お國も見ぬ風で見返した。

「サイダでも買はうか」男は獨言のやうに云つて、前を通る賣子を呼留めてサイダとお茶とを買つた。

「飮まないか」と、小さい茶碗を出したが、お國は輕く首を振つた。

汽車が動出すと、男は罎を口に當て、生温くて酸ばいサイダを、不味さうに飮んで、手に持つたまゝ膝の上に置いた。お國はふと前に屈んで奪ふやうに罎を取つて、「私も吞みたい」と、甘えるやうに云つて、口吞みにした。

「貴方、まだ吞んで？」

「もう澤山」

「ぢや罎を捨てよう」と、お國は立つて窓に擦寄つた。百姓家の門に立つてゐる子守が此方を見た。重さうに荷物を背負つた男が線路を傳つてゐる。稻の葉は青々と風に戰いでゐる。異樣の雲が空の片隅に卷上つてゐる。踏切の側で汽車の過ぎるのを待つてゐる俥には、厭らしく白粉を塗つた平額の女が乘つてゐる。

幾度か罎を振つたが、お國は氣遲れがして投棄て得なかつた。かの夫婦は笑ひながらその方を見てゐる。思切つて目を瞑つて手から離すと、線路で碎ける音が痛いやうに響いた。胸を轟かせながら座に戻つて、「物を壞すといゝ氣持ね」と、小聲で云つた。

「ぢや、その土瓶も壞すといゝ」男はお國が白い腕を出して物を振上げた姿を、再び見たかつた。

「だつてお茶は飲みたいから……私忙しくつて御飯も食べないの。お土産を開けようかしら。貴方食べたくない？」

「折角買つて來たのに手を付けちや惡いぢやないか」

「ウヽン構はない」

風呂敷包を解いて、菓子箱を開けた。五つ六つ最中を紙に包んで、側の子供にもやつた。

汽車は鐵橋を渡つた。馬を洗つてゐる農夫の赤い顏が直ぐ前に鮮かに見えた。首を振り〳〵男の子が二三人泳いでゐる。白壁を照らしてゐる光も最早暑苦しさうではない。

「瀟洒したいゝ處だね、何といふ川だらう」と、男が訊いた。

「これが思川でせう、私小さい時に兄さんに連れられて來たことがあつてよ。此處では鮎が取れるの」

「ぢや、明日歸りに寄つて見ようかな、東京へは明日の晩歸ればいゝんだから」

「私も一緒に歸つてよ」

「だつて病氣見舞に行つて、さう早くも歸れんだらう」

「さうね……でもどうかして歸つてよ」と、お國は決めてしまつたが、「もう東京へも故郷へも行かないで、ズーッと遠方へ行つちまひたい」と、溜息吐いた。

日光は山にも野にも消えて、黑ずんだ森には淡い水氣が細く棚引いてゐる。夕闇の中にチラホラ火影が見えた。

「あの町らしい處が栃木だね」と、男は窓から覗いて、「廣々として景色のよささうな土地だ」

「えゝ」お國は氣のない返事をした。

停車場から俥で二人は晃陽館に向つた。大通の左右には軒毎に赤い提灯を點火して、人の往來が賑かだ。蓄音機を据ゑた店先にはいろんな人が群がつてゐる。「天王樣のお祭だらう」と、お國は思つた。

三

障子を取りはづして風通しのよい宿屋の二階で、二人は湯上り浴衣を輕く着て、夕餐の膳に向つた。前の縁側を袴を着けた教員らしい人々が往來したが、どれも一度づつ不遠慮に二人を見た。隣には酒盛が始まつて、調子外れのザレ唄も聞える。女中がキャッ〳〵と騷いでゐる。

「煩さいね、もつと靜かな部屋はないのかい」と、男は給仕の女中に訊いた。

「本當にお氣の毒で御座いますが、何處も塞がつて居りまして」と、手首に汗を浮かせてゐる女中が答へた。

「ぢや、隣が靜まるまで、僕は町を散步して來よう。國ちやんはもう家へ行かなくちやなるまい。どうせ今夜は看護して上げるんだらうし」と、男はこれで別れるのを名殘惜しがつたが、お國は、

「私、今夜は家へ行かない」と、平氣で云つた。

「病氣見舞に來たんぢやないんかい」

「だから明日になつたら、一寸行つて見るわ」

「呑氣だねえ」男は勝手な女だと思ひながら、却つてそれを喜んだ。

女中が膳を下けるのを待つて、お國は小聲で、

「私、あの女中を一寸知つてゝよ、小さい時分に叔母の家の子守をしてたの。確かお鶴とかいふのよ」

「ぢや、向うでもお前を覺えてるだらう」

「どうだか。私は樣子が異つてるから知らないでせう、田舍にゐると何時までも同じやうだわね」と、心で田舍者を嘲笑つて、「あの子は一度居眠りしてて背中の子供を落つことした事があるの。打ちどころが惡くつて氣絕してそりや騷

ぎだつたの」と云ひながらその時分を朧に思浮べた。シク〳〵泣出したお鶴の顔や、吃驚して眞蒼になつた、叔母の顔が見えた。あの時からあの子の額には傷跡が殘つてたが、

「子供の折の傷は次第に大きくなるんですつてね、歳を取るほど」と、男に訊いた。

だが、男はそんな話には氣が向かない。生返事して、「もう大分涼しいから、其處等をブラブラしようぢやないか、隣が靜かになるまで」と、身を起したが、お國は知人に會ふのを厭がつて、一足も戸外へ出ようとしない。

男は一人で出て行つた。

お國は階子段まで男を見送つてから、暫らく緣側に立つて、土藏の横から斜に町の方を見た。瓦斯の光で薄明るい店先に、肥つた男が素裸で煙草を吸つてゐる。その前を白い衣服や黑い衣服が續いて通つてゐる。月琴の音が陽氣に近づいた。それを見たり聞いたりしてゐると、お國は今朝から引立つてゐた心が次第に弛んだ。この頃日增しに身體の衰へるにつれて、周圍の物の音物の色が鬱陶しくなつて來たが、チラ〳〵隙見する故鄕の色は一層懶く見えた。

で、部屋へ入つて、檢束なく坐つた。四年前、十六の春に踏出してから、一度も歸つても見ねば、殆んど音信にも接しなかつた故鄕は、流石に懷かしくなつて、知人に他所ながら會つて見たかつた。つひぞ思出したことのない、幼友達の誰彼れが、影のやうに浮んだ。父と姉とに連れられて、勇ましく東京へ行つてからの四年間も、惡い夢に魘はれてゐるやうに、取留めもなく浮んだ。

早く河津さんが歸つて來て側にゐて吳れればと、身を持ちあぐんで其處へ俯伏しになつて目を閉ぢた。

店先に駄菓子を並べた中野の百姓家の疊の上を、お安が涎を垂らしながら、ヨチ〳〵步いてゐる。本鄕座の房州海岸の場では、高田の作兵衞が泣いて貰ひ子の素性を話してゐる。河合の美しい環と、着飾つて實の子を訪ねて行く自分が一つになつた。

「お母さんが抱つこして上げよう」と、梅月で買つた最中を見せても、お安は側へ寄つて來ないで、身體に觸ると、聲を張上げて泣出した。……

お國は膨らんだ手の甲を淚で濡らした。生んだばかりの可愛らしい子供を人手に渡して、泣いて縋付く自分を足蹴にした憎い〳〵鈴木の惡相が、其處へ現はれた。憎いよりも次第に恐ろしくつて溜らなくなつた。

四

「お前は東京へ行つて磨上げたら、何處へ出しても恥かしくない女になるよ」と、別れ際に叔母に煽てられたお國は、十六の秋には、最早垣一つ隔てた隣の家の食客鈴木の甘い言葉に乘せられて、姉の家を飛出して身を隱した。天神下の棟割長屋に貧しい所帶を持つて、男の指圖のまゝに日を送つた。覺束ない手先で縫物をもした。男に手を取つて敎へられて讀み書をも學んだ。戀文はから書くものだと幾度も稽古させられた。「雨の日風の夜もお前樣の面影を忘るゝ暇は御座なく候、柔しいお言葉は今尙耳に響くやうにて、心も空になり申し候」といふやうな文句を諳んじた。「戀する時と悲しみと何れか永き何れか短かき」といふ、或雜誌にあつた新體詩の一節をも說明して聞かされた。

「お前、まだそんな心持は分るまい」と、鈴木は邪氣ない顏を見て訊くと、

「私、分つてよ」と、お國は涼しい目を見張つた。

その頃からこれまで知らなかつた物懷かしい

やうな、何か待遠しいやうな氣持が、絶えず胸に湧いてゐた。教はつた文字を集めては戀文を書いて喜んだり、「戀しき御許へ」と誰れに宛てるともなく書いて見たりした。鈴木に連れられて諸方を散歩する折にも、行違ふ若い男や女が頻りに自分の方へ目を配るやうに思はれ出した。鈴木は定つた仕事もないのに、いろ／＼に無理算段しては香水や白粉や、女の欲しがるものを買つて御機嫌を取つてゐた。「今におれがお前にいゝ服裝をさせて立派な女にさせてやるよ、も少し辛抱しておいで。おれだつて二三年の内には些とは出世するぜ、何時までも貧乏な思ひばかりさせときやしない」と、口癖に云つてゐた。そして晩酌の相手をさせては、面白可笑しく艶いた話をしたり、淫らな事をも云つた。お國は大人しくそんな話を聞いてゐたが、次第に厭な氣がし出した。お酒に醉つて詩を吟じたり薩摩琵琶を唄つたりするのは面白いけれど、何故あんな下品なことを云ふんだらうと、屢々「お止しなさい、そんな下らない話は」と、言葉先を壓へるやうにした。

二月三月。十七の春になつて、身體付も日に日に子供放れして、姿や素振りも品やかになつた。木綿着で水汲をしたり、用足しに行つたりするのを見て、近所の女房達が惜しい女だと噂してゐるのが、お國の耳にも入つた。坂上の麵麭屋の老爺も馴々しい口を利いたり、厭な目付で見たりした。

「あの禿爺さん、氣味の惡い奴だよ、私、もう彼處へは買ひに行かない」と、或日晩餐の食麵麭を買つて來て、お國は憎體にいつて、その老爺の樣子を訴へた。

「彼奴も助平らしい面をしてやがる」と、鈴木は笑ひながら聞いてゐたが、やがて戯談らしく、「どうだその爺さんを騙して、ウンと絞取つちや。おれが甘い方法を教へてやるぜ」と、勸めた。「隨分溜込んでるといふ噂があるから、甘く釣寄せて捲上げるんだ。さうでもしなけりや、當分二人の生活も立ちやしない、それも、おれもお前が可愛いから、もつと小瀟洒した身裝をさせて氣樂にさせて見たいんだが、此處暫らくおれの出世をするまでは駄目だからなあ」と、一杯機嫌で說付けた。

お國は呆れて知らん顏をしてゐたが、二三日引續いて勸められると、終ひには恐ろしくなつて來た。情なくてシク／＼泣出した。同じ家にゐるのが、それから厭になり出して、鈴木の柔しい親切らしい言葉も底氣味惡くなつた。

五

[illegible]になつて、酷い目にも會はされて、手向ひもした事が、今ランプの傍で書き込んでゐるお國の胸に鋭く現はれた。

「どうしたんだい、目を潤ませたりして」と、河津は何時の間にか前に突立つて笑つてゐる。

「貴方、何處を歩いてたの」と、お國は頭を下げて淋しく笑つた。頭も稍々輕くなつた。

「一通り町中歩いて來たよ、優町の角に大きな商問屋があるね、增田新吉といふ瀬戸物の表札が出てるが、あれかい、叔父さんの家は？」

「さう、……明日は彼處へも行かなくちやならんし、私明日が苦になつてよ、お母さんにも會ひたくなくなつたの」と、焦燥した氣持を顏に現はしたが、河津が臨枕して、興ありげに女の顏を見守つて默つてゐるのを見て、「貴方後悔してるんぢやなくつて、今日此處へ來たことを」と詰つた。

「そんなことがあるものか」河津の快活な言葉には深い情愛をも含んでゐるやうだつた。

「さう、本當、後悔しない？」と、お國は念を押して、安心した。

隣の部屋では、酔倒れてゐた客も歸つて、嵐

の後のやうに急にヒッソリした。女中は跡片付をして隔ての襖を開けた。三間突通して風は冷つこく流れた。煙草盆や座蒲團を持運んで、二人は眞中の部屋へ移つた。女中は次の間に蚊帳を釣つて引下つたが、二人は容易に寢床に就かなかつた。

「まあ、いゝ月だ」お國は縁側に差込んで來た月影を見て、身輕に立上つて、手欄に寄つて、明るい光を浴びた。そして男を手招きして側へ立たせて、ウットリ夢見るやうな目付をして、

「何か面白い話を聞かせて頂戴な、哀れつぽい話を聞きたいわね」

「哀れつぽい思ひは二人でサン／＼爲厭いたぢやないか」

「私達の事は厭さ、私達に關係のない哀れつぽい事を聞いて泣きたい」

「よく泣きたがる人だね、剛情つ張りの癖に」

河津は手欄に身を凭らせて、女が苦しい二三年を泣つた今でも、以前のやうに甘い涙を喜んでゐるのを不思議に思つた。以前鈴木の目を忍んで、上野近所で出會つた時分に、男の泣き方が少ないと云つて恨んだことをも思出して、

「僕はもう大人になつたから泣かないよ」と云つて笑つた。

「へえ、學士になると泣かなくなるの、泣かなくて戀が出來て？」

「出來るとも、戀は悲觀すべきものぢやないさ」

「だけど、私そんな經驗はない、戀をして悲しくなかつたこと私一度もないのよ。貴方に會つてた時分だつて、只の一度だつて涙の出ない事はなかつた」

低い聲で止切れ／＼に、言葉少なく話して居る間々に、互ひの心には昔の事が小說のやうに浮んだ。そして男は段落のついた物語を振返つて思出すやうだつたが、女は倚物語の中を小迷つてゐる氣でゐる。

天神下の前の家に二階借りして學校通ひしてゐた河津の制服姿は、今も目の前にあつて心を震ひ動かした。日毎にそれとなく二階を見上げては、せめてもの心遣りとしてゐたが、何が緣になるか知れぬもので、不忍池に花火があつた夜、宿の人に招かれて二階にそれを見に行つてから、互ひに口を利くやうになつちやつた。

「私、本當に不思議だと思つてよ、貴方とは切つても切れない緣があるんだわね、迷信のやうだけど、前世の約束事とか何とか云ふんぢやないかと思はれてよ」お國は深く思込んで、さう云ひながら、男の指先に觸れた。

「さうかも知れん、一生の別れを三度もしてる癖に、矢張この世でかうして會へるんだからね……しかし隨分恐ろしい目もしたよ、當分は平氣で道が歩けなかつた」

「だけど、私、これからだつて、まだ幾度怖い思ひをするか分らしない」

お國は物に驚くやうに息を震はせた。鉋屑や木切の堆い路次を見下して、「私、かうして高い處から下を見てると、誰れかに後から突落されさうな氣がして、ゾッとすることがあつてよ」と、手欄に堅く摑まつて、「私西洋館の三階から飛下りようとした事があつたの、天神樣の近所に黑川といふ大きな家があるのを、貴方知つてるでせう。彼處の書生さんがね、家の中を見せてやらうつて、私を三階まで連れて行つて、出口に錠を下して、私を追廻すの。私夢我夢中で階下へ飛下りようとしたのよ、さうするとその書生さんが怖がつて、戯談だ／＼と云つて、出口の戸を開けて吳れたからよかつたけれど、隨分怖かつてよ」と、ドキ／＼胸騷ぎをさせた。

河津はその話を二三度聞かされてゐるが、一度は男に追廻されるのが自慢らしかつた。一度

は男の厭らしさを嘲るやうだつた。今は只物を恐れるやうに力なく話した。

「眠くなつた」と、河津は欠伸をして寢床へ入つて、廣々と手足を伸したが、お國はまだ暫らく椽側に首垂れてゐた。

六

翌日。昨日よりも暑さが烈しくて、見る物が乾き切つて、戸外は恐ろしく見えた。お國は化粧した顏を汗に浸して、眩しい道を喘いで、宿屋から二町にも足らぬ自分の家へ行つた。麻問屋の前を蝙蝠傘で避けて、角を曲ると其處に有つた筈の下駄屋は見當らなくて、駄菓子屋の側に薄汚い氷店があつた。肌襦袢一つで、見覺えのない神さんが氷を削つてゐる。土間にゐる四五人の目が此方に注がれたので、お國は顏を背けたが、後から見詰められてゐる氣がして、歩き振りをも謹しんだ。

家の軒には町名の入つた祭の提灯がブラ下つてゐる。閾を跨ぐと、襖を外した奥の座敷まで家中が見透かされた。嵩張つた風呂敷包を上り口に置いて、お國は眞先に上の姉の後姿に目を付けた。着物のさう美しく見えぬのが何よりも嬉しかつた。

「まあ、國ちやん」病人の枕許に坐つてゐる二人の姉と叔母とが、足音を聞きつけて振返つた。

「昨日停車場でお金を落しちやつたから、今朝出直して來たの」と、姉に言譯して、「お母さんの病氣はどんなの。私、今度は永くゐるといいんだけど、急用が出來て、正午過には歸らなくちやならない」

この人達の中にゐて、煩さく自分の身の上の事を訊かれたり、世帶染みた話を聞かされるのを好まないで、着くともう一刻も早く此處を離れようとしてゐた。高い枕をして白い敷布の上に黃ろい肌を現はしてゐる母は、首を持上げて、それとは思はれぬほど大人びた娘の顏をヂッと見てゐたが、やがて涙ぐんだ。

「お母さん、撫でて上げようか」と、お國は指環の光つてゐる手を母の肩に當てた。そして叔母や姉が左右から、この頃の事を訊かうとすると、

「私、今日はお母さんの見舞に來たんだから、私の事なんか何にも聞かないで頂戴」と、ツケツケした調子で斥けた。

叔母は皆の揃つたのを喜んで、御馳走拵へに臺所の方へ行つた。母は小聲でお國の氣に障らぬやうな事を云つてゐたが、やがて快く眠入つた。

「暑さに中つたんだよ、歳が歳だから餘程惡いんかと思つたけど、これならまあ安心だ」と、上の姉は先に立つて次の間へ退いて、一人ヂッとして母の寢顏を見守つてゐるお國をも呼んだ。

その室には佛壇があつた。今の姉の手で捧げられた線香の煙が微かに棚曳いてゐる。ほの暗く位牌が並んでゐる。お國は信心の厚い母に導かれて、小さい時分から佛壇に馴染んでゐたが、今その方へ目がつくと、急に妙な氣になつて、その前に跪いた。恭しく線香を上げて、鉦を叩いた。床しい煙と香ひが流れてイラ／＼した心を鎭めるやうだつた。珠數を爪繰つて看經をしてゐた母の姿が懷かしい。「いつそ尼さんにでもなれんものかしら。若い美しい尼姿はどんなに他人の目に見えるだらう」と、髮を卸して袈裟を纏つた自分をウットリ思ひやつた。

「國ちやん、氷をお上んなさい」と、下の姉の聲に、お國は座に加はつた。姉は年中暇のない身體を今日一日は氣樂に休ませた悦ばしさに、歳に似合はずはしやいでゐる。三人並んでゐる中で、見劣りのする顏形をも身裝をも氣に留める風はなく、商賣の掛引や出錢の高を話してゐたが、それをお國は憐憫に感じた。あんな厭な

御亭主に何時までも連添つて色戀もしないで、何が面白いんだらうと、その氣樂さうな樣子を愚かしく思つて、默つてツンとしてゐた。

「此處にも人手が足らんのだから、私、一月も來てゝ介抱して上げたいんだけど今の中はとても駄目」と、姉は氷水二杯を飲干して、浴衣に垂れた滴を拭ひながら、お國を見上げて、「お前がどうかして此處にゐて呉れるといゝんだがね、三人とも側にゐないやうぢやお母さんも心細いよ。どうせ先が短かいんだから誰れかが側にゐて孝行して上げるといゝ。叔母さんの家の世話にばかりなつて、實の子が打放つといちや、義理が立たないと思ふよ」

「さうだとも。お國もこれ迄の事は仕方がないとして、もうそろ／＼身を堅めなくちやならんよ。何も東京で暮す必要はない、田舍で氣樂に暮す方がいくら增しだか分りやしないよ。さうしてお母さんと一緒にゐて上げれば、お母さんも喜ぶだらうしね、私達も安心するのだよ」と、上の姉も說き賺した。

「さう」と、お國はその姉には橫顏を見せて冷淡に答へたが、やがて、「私、お母さん一人ぐらゐ東京へ連れてつて立派に養つて上げるよ。死ぬるまで些とも不自由な思ひなんかさせないで世話をして上げるよ。お母さんの身體を動かしてもいゝ位になつたら彼地から迎へに來てもいい。その積りにさへなりや、私だつて甲斐性なしぢやないんだから」と、力んだ。

「大變な元氣だねえ」と、上の姉は笑つて、「だけど、氣ばかり勝つて無分別な事をおしでないよ。お前だつて何時までも若くはないんだから」と意見らしい口を利きかけたが、お國の面付の小憎らしく說諭しても聞入れさうもないのを見て口を噤んだ。

風は吹通してゐれど生溫くて、目の前に照付けてゐる眞晝の強い光は、眠不足のお國の目を眩ますやうだつた。御輿を舁廻る聲が暑くるしく表通りに聞えた。上の姉は聞立てゝ、それを見がてら、宮詣りに行きたがつて、姉妹を誘つたが、お國は首を振つて、「二人で行つてお出でよ、私、お母さんの側についてゐるから」

「ぢや、留守番して御馳走して待つといで、お晝飯までに一寸お詣りして來よう」

二人は面白さうに出て行つた。叔母は甲斐甲斐しく臺所で胡瓜揉みを拵へたり、魚を煮付けたりしてゐたが、二人が聲を掛けて行くのを目を顰めて見て、「この日盛りに出步かなくたつてよささうなものだに。手傳つて貰はうと思つてたに逃げて行つちやつた」と、獨言のやうに零した。

「叔母さん、手傳はうかね」所在なげに坐つてゐたお國は立つて臺所を覗いて、「水でも汲んで來て上げようか」

「ウゝン。お前さんは珍らしいお客樣だから、デッとしておいでよ」と、叔母はお國の臺所へ入るのを拒むやうに手を振つた。

「だけど、叔母さん、私御飯は欲しくないのよ、それにもうお暇しなくちやならないの。今夜彼地で手を外せない用事があるんですから」と云つて、呆れた顏をした叔母のくどく引留めさうなのを壓へるやうに、早口に眞實しやかに述立てた。人のいゝ感じの鈍い叔母は別れを惜みながらも强ひて引留めもしなかつた。

で、お國は闃閙々々してゐて、親類近所の人の目に觸れて歸りそこなはぬやうにと、身支度をして安心して久振りに快く寢付いた母の寢顏をソッと覗いて、心で別れを告げた。何となくこれで一生會へないんぢやないかと思はれた。親の壽命を氣遣ふよりも、自分の壽命が盡きかゝつてゐるやうな氣がしてならなかつた。

七

急いで宿へ歸ると、河津は下座敷へ引移つてゐた。ビールのコップを前に置いて、目縁を紅くして、お鶴といふ女中を相手に話をしてゐる。

「お歸りなさいまし」と、女中は笑顔をして迎へて、空壜を持つて出て行つた。お國は疑り深い目で見送つて、「あの女は何か私の事を話さなくつて—」

「何故？……何も云つてやしない」

「さう。あの女は元からよく蔭口を利いて仕方がないの」と云ひながら、留守に自分の爲にならぬ噂をされてやしないかと氣遣つた。そして、晝飯を食べながらも、給仕してゐるその女中と、河津との顏を見ては、蔭口の跡を搜らうとした。

「暑い土地だね……こんな土地に長居をする必要はないよ、早く歸らうぢやないか。歸つて涼しい處で息を吐きたい」河津は直ぐにも立ちたい位だつたが、お國は浴衣に着變へて、グッタリ疲れた身體を疊の上に伏せて、頻りに粘い唾を吐いてゐた。

「私、東京も厭」と、子供らしく首を振つて「せめて一週でも知つた人のゐない土地で、ソーッと靜かに寢かして下さい、貴方の側で何にも氣に掛けないで、一日眠りたい」

「おや歸り途だから、大宮へでも寄るといゝんだが、僕は十分に金を持つてゐないよ—」

「私、指環を質に置くわ。一度東京へ行つてお金を拵へて大宮まで來てもいゝ」と、キッとした口調で云つて、お國は延と石入の指環を引拔いて、「二つで二十圓は貸して呉れてよ」と、男の前に置いた。

「だけど、それを無くしちや困るだらう、後で買つて呉れた人に言譯が立たんぢやないか—」

「いゝえ構はない。後はどうなつたつて構はないのよ、私、かうしてお互ひに暑い思ひや厭な思ひをして詰らなく別れたくない」男に少しでも惡い記憶を殘さすのもつらかつた。出る前に樂みにしてゐたこの旅が、飽氣なく終りさうなのも口惜しかつた。

「さうさ、どうせ又何時會ふか分らんのだから、僕だつて別れ際をよくしたいよ、あの時月夜に湯島で別れたのは、後の思出のためには非常によかつたのさ。今度も大宮へ行つて何時かの部屋で松風でも聞かう。かうして田舍の宿屋で汗みどろになつたのが、一生の見收めぢや實際不愉快だからね」

河津はかう云ひながら、今度の旅をも美しく色取りたかつた。一生の別れといふのが、尚更旅に味ひをつけた。だが、お國は男が平氣で口にするその言葉を聞くと、さながら死刑の宣告でも聞くやうな氣がした。この人を離れた後の東京生活は、淋しく懶く張合のないやうな氣がして、最早一日も我慢が出來るだらうかと思はれた。そして男が自分をどんなに思つてるかと、不安心でならなかつた。默つて見てゐると、暑さにもめげぬそのキビ〳〵した顏付と樣子とは頼もしくあつたが、以前のやうに女に氣を兼ねて、その機嫌を害ねぬやうに勤めた、あの幼々しい樣子のなくなつたのが物足らなかつた。

「二年の間に外にどんな情婦が出來たか分りやしない」と、さう思ふと、このまゝ手放す氣にはなれなかつた。

「兎に角この汽車で出かけよう」旅行案内を見てゐた河津は、慌しく手を打つて勘定を急がせた。

やがて俥に乘つた二人は、町の左右に目もくれず、一途に心を停車場の方へ向けた。

八

大宮の萬松樓の二階に二日ほど氣儘に遊ん

で、歸るともなく二人は上野の停車場に着いて、再び會ふ機會を約束して別れた。お國は別れてから澁々電車に乘つて、壽町の宿へ向つたが、自分に關係のある東京の誰彼れが、不斷より一層強く心を壓へるやうに浮んだ。

それに——大宮から金策に一人で歸つて、よいやの主婦に指環の質入を賴みに行つた時、主婦が中野にゐる子供の噂を傳へて、「あの子も此頃は暑さ中りか何かで弱つてるさうだから、一度樣子を見に行つておやりよ」と勸めたことが、絶間なく胸を脅かした。「あんな實の親に懷かない子供に會つたつて仕方がない、死んだつて私もうあの子に會はない」と、あの時元氣よく答へたことも情なく思出された。だが、「いくら自分の生んだ子だつて、懷かないものに會つてやるものか。いくら會ひたくつたつて會はない」と、直ぐに強情に自分の心を叱付けて、遣瀨ない思ひを搔亂しもした。

燈火の見えぬ薄暗い路次を通つて、突當りの二階家の前へ來ると、お國は立留つて、雨戸の締つてゐる二階を見上げてから、玄關の戸を開けた。「只今」と聲を掛けたが返事がない。心を捩込んだランプが薄明るく、赤兒の寢顏を照らしてゐる。「構はない人達だ」と呟いて手搜りに二階へ上つて、燈火を點け雨戸を開けた。噎せるやうな溫氣を拂つて、衣服を着替へながら、部屋の樣子を見た。煙草盆には卷煙草の吸殼が堆い。新聞一枚擴がつてゐる。硯箱の下から一通の手紙が、食出てゐたが、それには「歸り次第端書にて一報これあるべく候」と書いてあつた。今日此處で待ちあぐんで、自棄に煙草を吸つてゐた人の顏が見えるやうだ。彼地から端書の一本も出さなかつたのが、あの人の氣に障らなかつたらうか。

で、お國は氣ぜはしく筆を執つて、申譯やら歸京の知らせやらを書いて、ポストへ入れに行つた。そして風呂へも入つて、路次の角へ來ると、二三間離れた乾物屋の軒下に腕組みして目を凝らして此方を見てゐる男に氣がついた。屢々宿の近所に突立つて、執念深い目を向ける男だ。お國はそれと知ると身慄ひして脇目も振らず路次を通つて、家の中へ驅込んだ。戸口に男の足音がしてゐるやうな氣がする。

「どうしたの姉さん」と、今戸外から歸つて、緣側に腹匐ひになつて涼んでゐる十五六の男が、黑瞳勝の涼しい目を上げた。

「向ひの馬鹿が又追驅けて來たの」と、お國は薄暗い玄關の方を顧みて、「勝ちやん、一寸出て見て頂戴」

「ア、彼奴ぶん毆つてやるといゝんだ」と、勝太は拳に力を入れて跳起きて、格子戸を開けて見廻して、「誰れもゐやしないよ」

「さう、……本當に氣味の惡い奴ね」

お國は一人ぼつちでゐるのに堪へられなくて、二階へは上らなかつた。片手を突いて斜に坐つて、勝太を相手に冗談口など利いた。勝太は物恥かしさうに、お國の顏を見ながら、無邪氣に頓間な調子を合せてゐた。先日お國に教はつた喇叭節を、透通つた聲で唄つた。「ラブに貰うたハンカチフ、紅葉の模樣とは氣にかゝる、……トコトツトツト」唄つてから極り惡さうに、「僕は駄目だ、僕のやうな唄ひ方ぢや三味線に合はんでせう」

「でも勝ちやんの聲はいゝ聲だね、これから何か本式に稽古するといゝよ」

「ぢや、姉さんが教へて吳れるといゝな。さうしたら僕習ふんだけど」

「お安い御用だ、何時でも教へて上げるよ」

「旦那は怒らないかい」勝太は眞面目で訊いた。

「怒るかも知れないね、だけど怒つてもいゝさ」

お國が本氣らしく云ふと、

「旦那を怒らせたら、姉さん困るだらう、旦那のお蔭でかうして生きてられるんだから、御機嫌取つて氣に入る方がいゝよ」
「御機嫌なんか私、取らないよ。若しも旦那に嫌はれたら、勝ちやんどうかして呉れなくつて」と、目元に媚を含んだ。
「どうかしようたつて、僕は駄目だなあ、お金なんか一錢もないもの」
「ぢや、一緒に死んでお呉れよ」
「あゝ」と、勝太は考へてゐたが、「僕、死んぢやつてもいゝなあ」と、口に力を入れた。
「さう、一緒に死んで呉れて。私嬉しい」
お國はさも悦しさうな顔をした。そしてその戯れの言葉を眞實にしたいやうな氣になつた。此方の死にたい時には何時でも死んでやらうと云ふ男のあるのが、何となく心を引立てた。そんな話をするだけでも心の慰めになつた。
「ぢや、勝ちやん、これからお湯を沸してお茶を入れるから、貴方お茶請けを買つて來て頂戴」
お國は「勝ちやんの好きなものを」と、銀貨を渡して、急いで買つて來させた。そして二階の長火鉢に炭を繼いで、埃のかゝつてゐる茶道具を拭ひ、勝太の歸るのを待遠しがつた。

九

その翌日、旦那の朝川からの手紙に、「會ひたいが、會社の用事が忙しく、五六日行くことが出來ぬ」とあつた。怒つてゐる風のないので安心はしたものの、少しの小遣錢もないのが不安心だつた。で、又よしやの女房に頼んで縮緬の羽織を質に入れたが、最早外には質草にするやうなものが一つもない。冬物はすつかり流れてしまつたさうだ。女房に意見されて、無駄費ひを愼むやうに自分でも心付いたが、歸り途に松坂屋の前を通つて、意氣な浴衣地が目につくと、もう素通りは出來なかつた。そして買つて來た反物を仕立屋へやつて、その仕立上るのを待遠しがつた。
朝は日の差込むまで、眠るでもなく寢てゐて、起きると、四疊半の拭掃除と飯事染みた副食物拵へをするのが一日の仕事の凡てになつてゐる。壽町へ來てから滿二月、三日目五日目に朝川が遊びに來る外は、手持無沙汰に日を送つた。過ぎ去つたことを繰返し〳〵考へては氣を腐らせてゐた。その當座こそ鈴木から居所を晦まして、付纏はれなくなつたのに、稍心も輕くなつてゐたが、次第に退屈で溜らなくなつて來た。
三四ヶ月前まで世話になつてゐた品川の質屋の隱居とは異つて、朝川さんは獨身ではあり、氣立も面白いけれど、その代り先々の當ては不確かでならない。歳が若いだけにお金にも不自由してゐるらしいから、何時手切れ話にならんとも限らぬ。と、折々は取越苦勞をもした。品川にゐた時分に始めた三味線の稽古をもつと續けようかとも思つたが、何時まで此家にゐるか分らぬので、そんな氣にもなれなかつた。
半日も火の氣のない長火鉢の側に寄掛つて、音も立てずヂッと坐つてゐると、階下の女房が階子段の中途から、「姉さん、また鬱いでるんですか、お茶でも入れますから、お話に入らつしやい」と、聲を掛けるのが極りになつてゐるが、お國はそれを煩さがつた。二度に一度は階下へ下りて、茶請を奢つて、近所合壁の噂をも聞いて、調子を合せて笑ひ興じもすれど、女房のガラガラした話振りには何時も氣持を惡くした。馴々しく人を見下したやうな口振も厭だつた。
だが、女房のゐない折には、屢々勝太を二階へ呼んで、小聲で流行唄を敎へたり、冗談口も利いたりする。「勝ちやんはどんな女が好き」「私のやうなんぢや厭」などと云つては、勝太の恥かむのを見て悦しがつた。

或夜も胸苦しくて、頻りに苦い唾を吐いてゐると、勝太はその背を擦つて介抱した。そしてお國が首伏になつて何時かウト〳〵してゐる間に、ソッと手を胸元に當てた。生れて初めて柔かい肌に觸れた。

「胸を押へて頂戴、其處が悶へるやうだから」と、お國は氣付いて目を醒して云ふと、勝太は顏を背けて、指先に力を籠めた。

「勝ちやんの手は大層慄へるのね」お國は顏を上げて、冷かすやうな目を向けた。

その翌日、眞晝の暑さ盛りに、朝川が浴衣掛けで遊びに來たが、勝太はその日を避けるやうにした。

荒々しい足音をさせて二階へ上つて、朝川はいきなり、汗の流れてゐる肌を脱いで、「おれもこんなに痩せちやつた」と、浮上つた肋骨を撫でた。お國は濡手拭を絞りながら、

「私も目が窪んだでせう、病氣したから」

「女の夏痩はいゝさ。男の夏痩は見すぼらしいけど」

「でも女だつて、痩せるのはいゝ氣持はしないわね、私、鏡を見る度に心細くなつてよ」

「歳の加減で仕方がないさ。いくらお前だつて今に艶がなくなるぜ」

「いやですよ貴方、そんな心細い事を云つて」

「だつてそれが事實だもの—」

「私、そんな事實なんか聞きたくない」

「ぢや、お前も女だから、矢張お世辭が好きなんだね」

朝川は無造作な口を利いたが、お國はその言葉の裏に彼れの心を讀んだ。あれでも私には思ひを寄せてゐるんだと思つて、心を安めたが、その人の此頃の懷工合や家の事情を竊かに搜りたくて、

「此家は北が塞がつてるから暑いでせう、風通しが惡くて。何處かもつと涼しい家へ越しちやどう？ 先日よしい、やへ貸間を氣をつけて呉れつて頼んどいたの」と訊いた。

「さうか」と、朝川は氣乘りのしない返事をした。

「成るべくなら小さい家を一軒借りた方がいゝのよ。こんな處にゐて洗濯まで人に頼むやうぢや却つて不經濟だわ」

「だけど、洗濯なんかして、その柔かい手を荒らしちや詰らないぢやないか。經濟を考へるやうな柄でもないのに—」

「さうね、私、所帶持が下手だから駄目ね。どうせ人の妻になる資格はないわね」

「其處がお前の値打だよ」

「だから、ほんの一時の玩具にされるばかりなのね。…あゝ〳〵詰らない」と、お國は持前の哀しげな口振で云つた。そして大儀さうに身を起して、朝川を縁側へ追ひやり、手拭を被つて、埃でザラ〳〵してゐる部屋の中を拭掃除した。箒を持つた手には力が入らない。白くなつてゐる机や茶簞笥や縁側を氣の濟むまで拭ふには、幾度か手を休めて溜息を吐かなければならなかつた。

掃除が濟むと、朝川は部屋の眞中に寢そべつて、簾越しに、燃えつきさうな隣の屋根を眺めてゐた。お國は髮を結ひに行つた。そして歸りには魚屋へ廻つて、刺身を誂へて、煙草や水蜜桃をも買つて來た。

「今日は泊らないで歸るよ、明日早く用事があるんだから」と、朝川は座敷焜爐に火を起しかけてゐるお國を尻目に見た。

「歸る〳〵つて、自慢さうに云はないで下さい。私聞くたんびにビク〳〵するから」

強い光は縁側から離れて、部屋の中も涼しげに見え出した。お國は珍らしく身體を働かせて、腹の空くのを覺えた。團扇で風を呼びながら、食卓の前に寛やかに坐つて、一人ぽつち

で御飯食べると心細くつてよ、晩御飯だけでも毎日貴方が食べに入らつしやるといゝ」と、云つて、心でもさう思つた。

「姉さん」と、階下から勝太の呼ぶ聲がした。お國は箒を置いて、階子段から覗いたが、誰れか訪ねて來た者があるらしいので、コツソリ下りて行くと、玄關にはよしやの女房が立つてゐる。その顔が不斷とは異つて、いかにも無愛想らしいのに、胸騒ぎがされて、「何か用事があつて」と、小聲で訊いた。

「今日鈴木さんが來たよ」と、早口に囁いて、「居所は大抵見當がついてゐるから、近日屹度捜し當てるつて」

お國の胸は早鐘のやうに打つた。「そしてどんな身裝をしてて。襤褸を着てるでせう」

「さうでもないよ、洋服を着て新しい麥藁帽子を被つてたよ。此頃は仕事が出來て食ふにも困らないから、貴女も安心して下さいつて、私にさう云つて、氣樂さうな風だつたよ」と云ひながら、女房は帶の間から手紙を出して、「次手があつたら、これをお國に渡して呉れつて、私の家で書いて行つたの、私決して居所を云はないけれど、お前さんも用心して見つからんやうにおしなさい」

女房はそれだけで歸つた、お國は足が地につかぬやうであつた。二階へ上ると、氣が遠くなつて耳が鳴つた。

「どうしたんだ、眞蒼になつて」と朝川が驚いて訊くと、お國はホロ〳〵涙を流した。

「私にはいろ〳〵の祕密があるんですから……貴方にもこれつきりお目に掛れないかも知れない」

「何故？　惡い男でも随いてるんかい」

「さう！　貴方愛想が盡きたでせう」

お國は首を傾げ、頤に手を當てて斜に男の顔を見た。

「今日その男がどうかしたのかい、譯を話して聞かせないか」

「私、譯なんか話したくない」と、封をも切らない手紙を食卓の上に置いて、「私、自分でこの手紙を讀む氣になれないから、貴方讀んで御覽なさい」と云つて、中にどんな事が書いてあらうと構ふものか、どうせこの人とも今日限りの縁だと自棄に思詰めた。

青い封筒に小村お國殿と筆太く力強く書いてある。朝川は初めてその女の本名に氣付いて、暫らくお國の顔と、その封筒とを見比べて、「お春といふのは世を忍ぶ假の名か」と、目元に冷笑を湛へた。

お國は無意識に手を伸してその封筒を奪はうとしたが、もう甲斐のないのに氣付いて、「名前なんかどうだつていゝさ、時と場合で自分の勝手な名を付けますさ」

「だけど、あまり幾つも名前を持つてると、自分の名を呼ばれても他人のやうな氣がするだらう。どうも初めの間は春ちやんと云つても、ぼんやりしてることがあつたよ」

朝川はそれだけでも、この女の前生を透視した氣がして、興を起した。裁判官が證據物件を調べるやうな心持で、封を切つて嵩張つた卷紙に注意の目を向けた。「御身に素氣なく別れてより、雨の日風の夜一日とても面影の忘らるる暇なく、何事も手につかず、打悄れて日を送り居り候。せめて酒でも飲んで鬱を晴さんかとも存じ候へども、御身の嫌ひな酒を口にすると思へば、杯持つ手も心苦しく候」

朝川は聲を出して一息に讀んで、「中々字が巧いね。文章だつてさう拙くはない」と云ひながら、その次の感情を誇張した數節の文句を默讀した。お國は顔を背けながら耳を澄して、折々手紙の方を竊見した。

「……小生も數日前より△△會社へ奉職いた

し、最早衣食の費には窮せざることと相成り候へば、幸に安堵なさるべく候。御身には此迄さま／＼の苦勞を掛け候が、今はその心配も消失せたれば、一日も早く御身と以前の如き睦じき生活に立歸ることをのみ希望いたし居候、御身と小生との關係はとても他人の窺知る所にては無之、幾度か仲違ひをして、放れ／＼の境遇を經來るとも、一朝一夕に相別るゝ如き淺き縁とは覺えず候、されど小生が如何に慕へばとて、御身が小生に對して些しの情愛をも抱かざるに於ては、何とも致し方なく候へど、兎に角一度お目に懸りて、とくと衷情を吐露し、御身の心底をも承りたく候、都合にて只の一二時間或はほんの十分間五分間にても滿足いたし候ゆゑ、是非小生の切なる願を叶へて、面會被下たく、指圖通りに何處へでも罷出で相待ち申べく候。若し御身が再び小生と同居して苦樂を共にするの心毫末も無之とならば、快く別れの杯にても酌みかはして、小生は他の婦人を娶り、御身とは兄となり妹として交際を結びたしとも思居り候。それもこれも厭はしく一切無縁の人となりたしとならば、小生も涙を呑んで諦め申すべく候。逃げ隱れして何時までも決着致さざるやうにては、御身も絶えず心懸りとなるべく、お互ひに寢醒め惡しき次第に候。くれ／＼も今一度面會いたさるゝやう願上候、よしやの細君を面會の座に加へてもよろしく候。――心亂れて思ひの萬分の一も述べがたし、只會ひたしとの一念に迫られてかくこそ、折返して返書賜はりたく候」

「神田の△△會社内とあるぜ」と、朝川は手紙を卷きながら、「から云はれれば、お前も會はない譯に行くまい」

「そんな優しさうな事を書くのが、あの男の何時もの手なんですよ」

お國は今にもその男が來るやうな氣がして、玄關の物音が絶えず耳に障つた。「ひよつと貴方に御迷惑が掛ると惡いから、早く歸つて下さい。私一人だとどうなつたつて構はんから。もう貴方には一生逢へないんだ」と、さう決めてしまつて、食卓の上に突伏した。

朝川は手盛りで緩々飯を食ひながら、根掘り葉掘り訊いて見たが、碌に返事をしない。バケツに水を汲んで縁側へ持つて來た勝太は、二人の樣子を怪しんで、見返り／＼下りて行つた。寄席の鳴物が聞え出した。晝間の風は次第に靜まつて、電車の音は際立つて喧しい。暫らく柱に凭れて、薄暗い中で煙草を吸つてゐた朝川は、身を起してランプを點けた。その光に目醒めたやうに、

「貴方、私を不人情な女だと思はないで頂戴。私誰れにでも不人情な事をした覺えはないんだから」と、お國はその青い顏を上げて、突如に云つた。激動した感情は稍々褪めて、心細く、誰れにでも縋りつきたいやうな氣になつてゐた。「貴方、後で惡くは思はないで頂戴」と、幾度も確めた。

「さう一人で泣いたり騷いだりしてても、おれには些とも分らない。兎に角當分は此處にゐて、自分で方針を考へたらいゝぢやないか、おれは今の事を聞いたつて、今直ぐお前を棄てようとは思はない」

朝川は氣拙い思ひをしてゐたが、わざと泰然として云つた。お國はそれを手頼りありげに見て、何時までもこの人を放したくなくなつた。急に顏の亂れを直して、寂しい微笑を浮べて、

「私、一寸した事で、直ぐ世の中に生きてられんやうな氣になつてしまふの。今も二度ともう貴方にお目に掛れんやうに思はれて、鈴木が怖いよりも、その方が餘程悲しいの、外に誰一人手頼りになる人が、私にはないんですからね」

「ちや、この家でその男に見つかりさうなら、

早く外へ移つたらいゝ」と、朝川は事もなげに云つて、
「手紙の樣子から見ても、鈴木と云ふ奴、さう分らず屋ぢやなささうだ、相當に教育もある男らしいがなあ。お前の方でも弱點があるんだらう、多少不忠實な事もしてるんぢやないか」と、相手の目顏や言葉付に注意して、隱れたる意味を讀まうとした。
「貴方、そんな女と思つてて。私、そりや鈴木のためには盡したのよ」と云つて、お國はその盡した一例をあれかこれかと選出さうとした。「ああ、今思つても情なくなる」と、胴震ひして、「私、鈴木を迎へに吉原へ行つたことがあつてよ、大晦日前で北風がヒユー／＼吹く日に、着物や羽織を質に入れてやう／＼拵へたお金を持つて、方角さへ分らないのに、人に聞き／＼して其處まで行つたの。極りが惡いし、恐ろしいやうな氣がして、その家の前をウロ／＼してる間に、心細くなつて泣出しちやつたの。泣いてる所を其處の人に見つかつて、譯を話して二階へ上ると、花魁や叔母さんが、いろ／＼に勞はつて呉れて、可哀さうだつて、皆なして涙を零したのよ。私、その時十六だつた」
その聲音までも、十六七の娘らしくして話した。そして朝川の心よりもお國自身の心に、幼々しい小娘が粗末な着物を着て、あの華かな世界に男を訪ねて行く樣が哀れに浮んだ。
鈴木から質置く術も學んだ、花を引く術も學んだ。「そんな下等な事はしたくないと思つてる中に、何時の間にか覺えちやつた。だけど、私これから先き生きてる間は、潔白な高尚な日を送りたい。卑しい女になり切つて死にたくはないわ」
「今更高尚な女で澄ましてるよりや、いつそ高橋お傳みたいになつて、毒婦お國の墓と棺桶の上に書かれた方が面白いぢやないか。まだ人殺はしたことはないんだらう、戀しい男のために着物や指環を質に置く位が關の山だらう」朝川は意地惡さうに云つたが、「しかし、おれはお前が好きだよ、當分世話をしてやるから、ビクビクしないで安心しといで」と、親切らしくも云つた。
お國はそれには返事をしなかつたが、稍々あつて、「私、今日貴方をお家まで送つて行く」と、屹とした顏をして云つた。不斷から夜を恐ろしがつてゐるのに似合はず、深く決心して、十時近くに朝川に隨いて戶外へ出た。三丁目の角で電車を下りて、あまり話をしないで二人は靜かに步んだ。涼みがてら散步してゐる人はまだ多い。夜店もまだ並んでゐて、[illegible]賣の高い聲が響いてゐる。薄暗い人氣疎らな處に盲人が尺八を吹いてゐる。お國はその人の顏を顧みて、十錢か二十錢施したい氣がした。
「千駄木までまだ餘程の道だぜ、もう歸つた方がいゝよ」
追分の淋しい通りまで來ると、朝川は命令するやうに云つて、足早に步き出した。
「えゝ」と云ひながら、お國は苦しい息を吐いて、遲れぬやうに足を運ばせた。壽町の宿は忌ましくなつて、今夜は其處に宿りたくなかつた。この知らない道ですげなく別れるのも堪へがたかつた。
次第に道は薄暗く、戶を鎖した家が多い。處處の軒燈の闇を照らすのが却つて寂しかつた。世を狹められた落人のやうに、お國は自分達の事を思つた。二人の下駄の音が耳に響いて、行違ふ人影が何となしに胸を騷がせた。
「此家がおれの家だよ」と、朝川がふと立留まつたのに吃驚して、夢から醒めたやうに其處を見詰めた。竹藪を後にした、門構の住善ささうな音のしない家を見詰めた。「內へ入つちや惡いか知らん、誰れの目にも掛らないで、こんな家

に住みたいとも思ひながら、男の氣を兼ねて、それは口に出さないでゐると、

「おや、お前は俥に乘つてお歸り、俥屋まで連れてつてやる」と、朝川は膠もなく云つた。そして引返して寢鎮まつてゐる俥屋に聲を掛けた。

軒下には澁團扇で蚊を拂つてゐる婆さんと、肌襦袢一つの女房とが立話をしてゐたが、その婆さんが裏口へ廻つて呼起して呉れた。

「ぢや、都合であの家を引越してもいゝよ。鈴木の事件がどうかなつたら知らせてお呉れ」と、言放つて、俥の支度のまだ整はぬ間に朝川は振返りもせずに歸つてしまつた。

「何てあゝ戀を解しない人だらう」お國はグッタリ疲れた身體を俥に靠せ掛けて、さう思つた。大學の前には夜店が疎らになつて、尺八の音は消えてゐる。

十

二三日は玄關の物音を氣にして日を送つた。魚屋や鳥屋へも勝太に賴んで、自分は成るべく外へ出ないやうにした。そして哀れを訴へるやうな手紙を苦心して書いて、居所の分つてゐる諸方の男へ送つた。品川の老人へも、河津へも、朝川へも。厭で〳〵溜らなかつた神田の通番頭へも人懷かしい手紙を遣つたが、待つてゐても、誰れからも返事が來ない。手紙の文句の拙いのかともどかしがりもした。誰れにも顧みられぬかと思ふと、一日が徒らに長くて暮しかねた。

或日階下には天理教の先生が來て、三四人近所の婆さん達をも招いて、講釋を始めた。女房が物知顏に先生の後について御利益を說いてゐる。お國は階子段に腰掛けて、退屈醒ましに皆なの話に耳を傾けた。教祖お光が十三の時發心して、慾も得も棄てて、只管人のため教のために一生を捧げたことが、爽かな口調で述べられてゐる。

「日本の人間は皆天照らす天照皇太神樣の氏子ぢやで、何よりも崇め奉らねばなりません。私の國の伊勢ではお祭にこぼれ松葉に棱折笠で踊るのぢやが、あれも鈿目の命が天の岩戸で踊つたのが基なのぢや。皆な大神樣をお喜ばせ申さうと思ふからで、この教で踊るのもつまりは同じ道理ぢやぞな。なに事も天の理に叶はねばなりません。人間の心の中は、それすつかり天の鏡に映るから隱さうたつて隱されん」と、女房も粘つこい口調で、鹿爪らしく說いた。婆さん達は殊勝に相槌を打つてゐる。

お國は屈んで暗闇からソッと階下を覗いて見た。羽織袴で上座に控へた男は黑さうな目をパチ〳〵させ、頻りに扇子を動かしてゐる。揃ひも揃つて薄汚い婆さんが居並んでゐる。一人の婆さんの頭の眞中がテカ〳〵光つてゐるのが、上から見下された。一人は話に感じたのか、額で拍子を取りながら聞いてゐた。緣側には勝太が行儀よく坐つて、一座の人を見廻してゐたが、お國は竊かに彼れを手招きした。二度三度繰返した。

やう〳〵それと氣付くと、勝太は笑顏をして、足音を忍んで二階へ上つて來た。

「貴方、天理教好き？」お國は小聲で訊いた。

「ウヽン、僕は大嫌ひさ、あんな迷信は無教育な奴のすることだ」

「だけど面白さうね、天理王の歌は。勝ちやんはよく知つてるんでせう。一つ其處で手踊りをやつて御覽なさい」とお國は見覺えの妙な手つきをして、「かうやつて踊るんでせう、私三味線を彈くから、其處で天理王の命をやつて御覽なさい」

「ぢや、僕やつて見ようか」と、勝太は階子段の方を顧みてから、母の身振を眞似て踊りながら口の中で唄つた。階下からは嚴かな拍子が聞え

る。お國は久振りに三味線を卸して出鱈目に彈いた。勝太は面白がつて同じ身振を繰返し繰返ししたが、次第に調子に乘つて歌ふ聲も高くなつた。三味線の音にも勢ひがついた。

　お國は自分の彈くその亂れた音に惹込まれて心も同じやうに亂れた。根の盡きるまで唄つて踊つて、馬鹿騷ぎをして見たい。打つなり殺すなり勝手にしろと、誰れかに向つて啖呵を切つて見たい。

「勝ちやん、お酒を飲まうか、河内屋から二三合取つて來てお呉れよ」と、撥を下に置いて云つた。

「誰れが飲むの、姉さんかい」

「あゝ、私、氣がくさ〳〵するから一人でお酒でも飲むんさ、いゝ子だから買つて來てお呉れよ。私に親切な男は世界に勝ちやん一人だから」

「本當に飲むの」と、勝太は怪しんで目を丸くしたが、それでも否みかねて、素直に言付に從つて出て行つた。

　階下の連中は何時の間にか歸つたらしく、聲も音もしない。長屋から浪花節語の單調な眠を促すやうな稽古聲が、埃と油煙の滲んだ生温い風に吹かれて來る。お國は顏を歪めて自烈體さうに頭を振動かした。そして三味線を手にして、密かな爪彈きで思出し〳〵品川で習ひかけた端唄を口の內で唄つた。手先は覺束なくて幾度か行詰つた。上目を使つて考へ〳〵彈直し彈直したが、思ふ壺に嵌まらない。

「……月は野末に草の露、チチンチチリンツ」と、調子外れの不快な音が響いた。で、自分に愛想を盡かして、三味線を後の方へ荒々しく押しのけて、怠い身體を伸した。「何が何して何とやらあ」と、長屋ではまだ飽きもせずに、同じ事を煩さく繰返してゐる。その屋根に烏のやうな鳥の塒まつてゐるのが、簾越しに見える。何事が起つたのか子供等の鬨の聲がして、路次の彼方へ驅行く足音が騷々しく聞えた。

「姉さん、取つて來たよお酒を」と、勝太は罎詰を前に突付けた。

「私、もう飲みたくなくなつた」と、お國は淡黃ろい酒の色を見詰めただけで、もう逆吐きさうな氣持になつた。「勝ちやん、其處に坐つといでよ、階下へ行つちや厭」

　ろくに話もしないで、二人は日暮頃まで其處にゴロ〳〵してゐた。

十一

二三日、折を見ては勝太を相手に自墮落な話などして日を送つたが、勝太に離れると、俄かに萎れかへる。遣瀨ない思ひに惱まされる。男氣を離れて、尼のやうに一生を淸淨潔白に過さうかと、氣まぐれに思ふこともあつた。

　でも續けざまに、二度三度朝川や河津へ手紙を出した。河津からはよしや、いゝやを經て返事が來たが、これで見ると、その人は故鄕の和歌山へ歸つてゐる。夏を此處で過したらば、一度東京へ上つて、それから九州の會社に奉職するかも知れぬ。緣あらば上京の際お目に懸り申べし。兎に角わが愛する御身のことなれば、日々幸福を祈らぬ日とてはなしと、情のありさうな心細いやうな事を手短かに書いてゐる。そして町名や番地は、封筒にも手紙の端にも記してゐない。

　お國は幾度も繰返して、男の心を讀まうとしたが、「緣あらば」といふ言葉が、考へれば考へるほど、冷淡に感ぜられた。もう會はんつもりか知らんと思ふと、心細いよりは腹立たしい。男に厭がられるよりは、此方から男に愛想づかしの文句でも云つてやつた方が氣が利いてゐると思つて、筆を執つて手を震はせながら、二三行書いて見たが、書いてゐる中に、激した心が緩んでしまつて、手紙など書いてゐられなく

なつた。邪慳に卷紙を丸めて口で噛出めて、其處に俯伏しになつた。

「人を邪魔な、厭なら勝手になさい。貴方の方で世間の口が怖かつたり、私の方でも何も追掛けはしません。貴方は大人しい奥樣でも早く貰つて長生をなさい」と、面と向つて言つてやりたくつて溜らなかつた。世間の義理に迫られて、別れともないのに別れても、互ひに心の中では忘れる暇もないほど思ひ思はれてゐればこそ、せめてもの心遣りとなるのだが、男の心に自分の影が薄くなつてゐると氣付くと、立つても坐つてもゐられぬ氣になつた。

「燈火も點けないでどうしたんだい」と、その晩朝川が出拔けに入つて來た。

「私、氣分が惡いの」と、お國は哀れげに云つてランプを點けて、「貴方はもう來ないのかと思つてよ」

「でも、お前はよく〳〵辛抱出來るね、一人此處にゐて。一人で昔の事なんかを考へるのが、一番好きだと云つてたけれど、もう考へ事にも飽いたらう、勝公を連れて活動寫眞でも見に行からうか」

「いゝえ、私外へは出たくない、芝居だの活動だの些とも見たくないわ、人混みの中は恐ろしいやうで嫌ひ」

「それ程小膽でもなささうだが」と、朝川が笑ふと、

「私、これで祕密の多い女ですからね」と、お國は過去の自分を心の中で燦かせて、さながら重大な祕密でもあるらしく思過して、「だから私、外の人のやうに面白さうな浮いた氣にやなれないのよ、キャツ〳〵云つて笑つてる人を見ると癪に觸つてよ」

「若い癖に妙だね」朝川はお國の神經の額中に動くのを見た。

彼れは、よしやの周旋で、何の氣なしにこの女を此處へ置くやうになつてからも、會社の歸りに氣紛れに立寄るばかりだつた。誰れといふ當てもなく、不意に色町へ寄つて偶然に見た女に對すると同じやうにこの女にも對してゐたが、この二三度はさうばかりでもなくなつた。何かしら心に蟠りを殘され出した。口數の少くぼんやりしてゐた以前とは異つて、身悶えする樣のチラつくのが、彼の心にも響いて來た。その手痛い處を針でつゝいて見たくもなつた。

「だつて鈴木さへゐなくなれば、お前は苦勞はなくなるんだらう。さうすればその男を殺すか殺されるか、何方か極りをつけたらいゝぢやないか。逃げ隱れして心配ばかりしてる中に若い盛りは過ぎてしまふぜ」

と、朝川は煽てるやうに云つたが、お國の心には四五日前とは異つて、鈴木の恐ろしさが、大分薄らいでゐた。一刻も早く此處を逃げねばならぬ程に思つてゐない。

「たとひ鈴木がゐなくなつたつて、私もう駄目」

と、投げ出すやうに云つた。

「この世に愛想が盡きたのかい」と、朝川は茶簞笥の上の罎詰に目をつけて、「酒があるやうだね」

「貴方飲まない？　私、今日は少しぐらゐ飲んでよ。醉つて云ひたい事がある」

お國は銅壺の中に銚子をつけた。男も女もこの部屋で酒を飲んだことがないので、食卓の上の杯洗や猪口を見ても異樣に感じた。酒の香の漂ふのが、下戸の朝川の心をも惹立てた。二人の飾のない淋しい部屋を賑かに見せた。二人の間にこれまでにない親しみをも加へた。酒の道具は品川の老人の晩酌に用ゐたもので、外に間に合せの安物の世帶道具の中では異彩を放つてゐる。猪口は深く見えて底が淺く、底には不思議な女の姿が描かれてゐる。朝川はその繪を

見てから、まだ生温い酒を一息に呑んだ。お國は額を顰めて鼻を押へて、二三杯グイと呑みほした。苦しさうに息を吐いて、身體を崩した。がしかし、顔には色が現はれない。
—强いね、僕よりや强い—と云つて、朝川は直きに眞赤になつて肱枕で横になつた。
—男の癖に弱いのね、貴方は甲斐性がない。私は自分で飲まなくたつて、酒呑の相手ばかりして來たんですからね、自然に傳染したのかも知れない—
お國の音色は酒氣を帶びた。手酌で有りたけを飲んでしまつて、「貴方、私を棄てない？」と、目を据ゑた。
—棄てたらどうするんだい—
—どうもしないさ、私、今夜直ぐ出て行くの。厭だと云はれて、何時までも喰付いてるやうな私ぢやないんですからね」
—ぢや、棄てなかつたら—
—それなら、棄てないといふ證據を見せて下さい。口ばかりぢや不安心だから—
—おや、證文でも書かうかい。何年何月までと期限を極めて。それに血判でも捺さうか—
—血判に血を出すの」お國は血と聞いて氣味を惡がつた。
「それを怖がるやうぢや駄目だね。昔の女は小指を切つたり、血で誓紙を書いたりしたんだよ。あらゆる神樣に誓つて、若しも背いたら如何なる罰を受けて、未來は奈落の底に沈まうともと決心するんだから確かだね—朝川は調子づいて云つた。
—そんな昔風の事は厭だわ」
—ぢや、今風の起請はないもんかね」
お國は眞面目に考へ込んだが、そんなものは容易に思當らなかつた。話は自ら外へそれて、「私、もう誰れの云ふことも信ぜられない。貴方の仰有ることだつて、信じちやゐませんよ」と、力を籠めて云つたが、やがて情を含んだ作り聲をして、「かう思つてよ私、戀した時には、早く二人で思切つて心中でもした方がいゝと思つてよ。何時までも生きてれば、その中に何方かが厭になるんだから、それよりや飽きも飽かれもしない中に、二人で仲よく死んぢやつた方が、いくらいゝか分りやしない。……貴方さう思はない。……私、本當にさう思つてよ。あの時に死ねばよかつたのにと今日もつく〴〵さう思つたの。貴方にこんな話するのは濟まないけれど、私、三四年前に惚れた男が一人ありました。その男も私に惚れて居りました。會つてにはその人の身が立たないやうな破目になつたから、私の方から縁を切つて上げることに極めて、二人で浮世の端を歩きながら、離れ離れをしました。その時その男が離れたつて生きてられんから、いつそ死んで異れつて、私の手を握つて泣いたの—と云つて、その時の事を芝居でも見てるやうに感じた。一生に又とない見せ場は思返す度に、人に話す度に誇張されて樂しさの興を増したが、それと共に技巧も次第に加はつた。自分の心の中でも最早虚僞と眞實との差別のつかぬほどに、事實が潤色されてゐる。
朧月夜に寄りつ離れつ瀬月橋を渡つた。夜汽車で人に知らない遠い山の中へ行つて、生きられるだけ生きてゐて、最後に谷川へでも身を投げよう、煩さい世間の音のしない處に心のまゝの戀を樂んでから、濁り氣のない谷水に二人の死骸を沈めようと、男が云つて、私もさうしたいのは山々だつたけれど、行先永い男を見す〳〵殺すのが痛々しくてならないから、つらい我慢をして、私一人犠牲になつて別れて上げた。
「だけど、男といふものは、三年も立てば前の事なんか忘れちやつてるわね—
—どうだか。それからその男に會はんのかい、

偶にや會つてるんだらう」
「私、此處へ來てからもその人に會つてると貴方思つてて。居所さへ分らないんだわ」
「可哀さうだね」
朝川の聲は皮肉らしく聞えたので、お國は折角興に乘つてゐた話の先を折られた氣がして、
「貴方といふ人も信用出來ない人らしいわね、私、もう誰れをも信じない」と、食卓に品垂れかゝつて、目を細く寄せた。それが馬鹿に色つぽく朝川の目に見えた。
「信ずるも信じないもないさ、かうして今夜此處にゐるんだから。明日からはどうなるか、何方だつて當てになりやしない」
「だから詰らない」お國はよろめいて、男の肱杖の側に頭を垂れて、「貴方はねえ、奧樣を早くお持ちなさい。今の中だといゝ奧樣が貰へますよ」と云つて、酒臭い息を吐いた。「私のやうな卑しい女なんかに關係しないで、いゝ所のお孃さんを貰つて仲よくお暮しなさい、人間はそれが一番幸福なんですよ……貴方さう思はない？」
「さう思はないね。男だつてお前のやうに氣儘勝手に世を渡つた方が面白いさ。その日〱の風次第がいゝぢやないか」
「そりや貴方がまだ夫婦の情愛を知らないからですよ。小さい家で貧乏暮ししてても、世間晴れて夫婦で世帶を持つてれば、言ふに云はれない樂みがあるのだから」
お國は鬱陶しい氣持でさう云ひながら、次第に涙聲になつた。鈴木と世帶を持つてゐた昔が不思議に偲ばれた。近所の神さん達から奧樣と呼ばれてゐたのが懷かしかつた。だが、鈴木の邪慳な態度や厭らしい言葉も、其處に現はれて直ぐにそれを搔亂した。
暫らく二人の話が途切れてゐたが、不意に階子段から聲を掛けて、神さんが稻荷鮨を持つて來て、「今日はお珍らしいんですね」と、醉倒れてゐる男の顏を見た。
お國は吃驚したやうに顏を上げて、「お神さん、私、これまでお酒なんか飲んだことないわね。一度ぐらゐいゝでせう。何も好きで飲むんぢやないけど、お神さん察して下さい。貴女だつて苦勞してるんでせう」と、云ひながら、神さんの方へにじり寄つて、その足にからまつた。
神さんは呆氣に取られた。

十二

その翌日、お國は珍らしく朝川を電車まで見送つて來て、一日重苦しい頭を煩さがつて、寢たり起きたりしてゐた。そして夕方になつて、つい假睡の夢を見てゐたが、ふと目醒めると、疊の上に思掛けない朝川からの手紙が來てゐた。簡單な端書の外には、嘗て音信などあつた例がないので、吉か凶かと、胸騷がせながら急いで開いた。「御身の事念頭に殘りて、今日一日忘れかね候」と、最先に走書きしてある。
お國の顏色は軟いだ。「……僕もこれ迄とは異つて、親身になつて世話も致すべく候間、安心なさるべく候。御身の樣子を見れば、如何にも痛々しげにて氣の毒に存じ候……明晚六時頃行く」と、卷紙の嵩張つてゐるのに似合はず、手短かに書いてある。
お國は悅しくもあれど、稍々飽氣なかつた。世話致すとか氣の毒に思ふとか云ふ言葉は、お國の胸を躍らすだけの力がない。河津の手紙朝川の手紙、蜜のやうな言葉や文字に飢ゑてゐるお國を滿足さすことが出來ない。何故もつと切ない戀の思ひを明ら樣に書かないんだらうと思つて、恐々鈴木の手紙を茶簞笥の引出から取出して讀んだ。柔しい文字はその方に多い。行李に藏めてゐる古手紙の中から、河津のを三四通搜出して見たが、あの頃のには、震ひ付きたい

やうたのがある。人目を憚つてソッと手渡しする鉛筆書きの紙切れにも悦しい文句が溢れてゐる。

お國はあれから長い年月を送つたやうな氣がした。

翌日は髮を結うて化粧して待つてゐたが、朝川は約束の時間に遊びに來た。それから四五日殆んど續け樣に來た。お國は一人で淋しい懶い考へに耽ることも少くなり、食物の味もよくなつた。

「貴方此處へ越して來ちやどう？　一緒に居ちやよくないの」と、或日、座敷煖爐に火を起しながら、振向いて云つた。

「來たいけど、僕にもいろ〳〵事情があるから駄目だよ」

「事情といつて、貴方は貴方だけで勝手にどうにでもなるんでせう。私、これで一軒家を持てばさう不經濟の事はしなくつてよ。臺所にだつて、無駄な費えはしないわ、隨分貧乏世帶の經驗もしたんだから。――一階借なんかしてて、洗濯まで人に頼むのは本當に勿體ないと思つてよ」

「さうだね、まあその中考へとかう」と、朝川は立つて話を避けて、「お前はそんな所帶染みた話はしない方が値打があるよ、男の話でもしてる方が似合つてらあ」と笑つた。

「そんな浮氣者に見えるかしら」と、お國は襷を掛けた自分の姿を見廻した。

「何處か身體が弛んでるさ、もう元のやうにやならないよ」

「私、さう云はれるとゾッとしてよ。貴方だつて、ほんの一時の玩弄物にする積りなんでせう。皆なさうだ」と云ひながら、あの人もあの人も、河津さんだつて、今から思へば、矢張そのつもりだつたのだと、これは心で思つた。

「玩弄物にされたと思はないで、玩弄物にしたと思へばいゝ。僕なんか女に玩弄物にして貰ひたいものだね」

「そんな輕薄な事、私思つても厭だわ」お國は厭さうな風をして氣取つた。

八月一杯はかうして日が送れた。お國は頰が稍々肥えて艶も少しはよくなつた。これ迄厭がつてゐた出歩きもするやうになつて、勝太を誘つて活動寫眞を見にも行つた。朝川に連れて宮戸座の夜芝居をも見た。一番目の妖術遣ひや立廻りは、芝居馴れぬ目には譯が分らなくて馬鹿々々しい氣がしたが、中幕の實録千代萩は見てゐる中に、涙ぐまれる程感に打たれた。自分の實の子に別れるといふことが、人間の哀れの極みと思はれた。

「私、昔の芝居はどれも時代おくれのやうで、見たいとは思はなかつたけれど、この芝居には人情が籠つてる」と、半巾で涙を拭ひながら、舞臺の役者の臺詞や仕草にも一途に感心した。そして翌日は勝太を連れて、その幕だけ立見をした。

十三

三日續けて見て、その芝居にも泣飽いた時分、いゝよしやから使を寄越して、直ぐに來て呉れと云つた。河津にしても鈴木にしても、親姉妹にしても、いゝよしやの關所を經てのみ、お國と消息を通ずるので、お國も自分の關係の深い世間を見るには、その家の閾を跨がねばならぬのである。

暫らくウカ〳〵して忘れてゐた世間を思出して、よかれ惡しかれ樣子を知りたくなつた。

「お前さん、此頃はちつとも來ないね、いゝ事があると見えて」と、其家の神さんは、お國を見ると直ぐ冷かすやうに云つて、「お前さんが三月も一つ所で辛抱するのは不思議だよ、そんなに仲がいゝんかい」

フヽンとお國は鼻の先で笑つて、何とも答へなかつた。

「私、又國さんが厭になる時分だらうと思つて、いゝ口を搜しといたんだよ。急に見付けて呉れつたつて、さうあるもんぢやないからね」

「さう？」と、お國は神さんの垂れた餌に目を向けさうでもなく、「私、もうあの人きりで止さうと思つてるの。あの人と切れたら女中奉公してもいゝから、妾なんかになりたくない」と、手強く云つた。

「あれになるの此れになるのと、お前さんも隨分よく氣が變るね、だけど中野の方へももつと仕送りをしたくちや惡いよ、あの子が可哀さうだ」

「いくら可哀さうだつて、親に懷かない子は仕方がないわ」

「だからお前さんは人情がないと云ふんだよ」と、神さんは笑ひながら、「この人は好きな男さへ側にゐれば、外の事にや頓着しないんだから」

「ぢやどうすればいゝの」と、お國はムッとして、さも手向ひするやうに、「私、これから外の事に頓着するから、お神さん教へて頂戴。私何にも知らないんだから」

「氣が短かくなつたね、お前さんも、もう怒つたのかい」

神さんは冷かしてしまつた。そしてお國の身裝を見ながら、朝川から碌に手當もないんだらうと察して、「涼しくなつても大丈夫なの」と訊いた。此頃入れるばかりで出したことのない質物は通帳に珠數繫ぎになつてゐる。二三年苦勞していろんな男に拵へて貰つたものを、ムザ／＼流してしまふのは勿體ないぢやないかと意見した。

「着物なんか何時だつて出來るさ」と、お國は例になく冷淡に答へた。そして今夜或男に一寸顏を見せてやつて呉れ、近くの洋食屋へ來る筈だから、會ふだけ會つて洋食の御馳走になればいいと、神さんに賴まれるのを、すげなく斷つて、聞きたかつた世間の噂をも聞かないで、サッサと歸つた。

「よしやのお神さん、まだ私を利用しようと思つてるんだよ」と、憎さげに云つて、朝川に向つて有のまゝにその譯を話して、同情を求めるやうに訴へた。

だが、朝川の耳には、それが打明けた親しい言葉としてのみ聞えなかつた。重荷を肩に懸けられるやうな氣もした。神さんの勸めを斥けて機嫌をも害ねて、自分にのみ手頼らうとするお國の心盡しを喜ぶよりも、こんな女の一身を引受けるのが煩さく思はれた。それにこんな女の云ふ事が當てになるものか、何か企んで男の氣を引いて見るのかも知れん、と疑はれもしたが、表面にはそれと顯はさないで、

「だけど、よしやを怒らさない方がいゝよ。あの神さんは、お前を實の娘のやうに可愛がつてるんだし、いろんなお前の祕密もあの人だけは分つてるんだから」と、柔しく諭した。

「さう思へばこそ、私も隨分あの人の御機嫌を取つて來たんだわ、あの人だつて私のためには餘程利益してるのよ。この上利用ばかりされてちや切りがない」

「だけど、意地惡く出てお前を利用しようと思へば、あの神さんどんな事をするか知れないぜ、親切さうだけど當てになりやしない。お前の事をおれに吹聽した時だつて、そりや口先が甘かつたからね」

「凡てがさうよ」と、お國は同意したが、さう思ふと、よしやに自分の生死の鍵を握つてゐられるやうな氣がして恐くなるので、「だけど、あのお神さん、さう惡い人ぢやないの」と、自分の迷ひを打消さうとした。

その夜お國は落着いて眠られなかつたが、目醒時計を枕許に据ゑて、不斷より早い朝川の

出勤時刻に遅れぬやうに、早くから起きて甲斐甲斐しく朝飯の支度をした。そして止められるのに強ひて電車まで見送つた。朝風は浴衣一枚の肌に薄寒く浸みた。正午時分からは小雨さへ降出して羽織でも引掛けたいほど、假綻の足の先は今迄に覺えない冷たさを覺えた。もう秋になつたのだ。秋といへば着物の事が何よりも先づお國の心を奪つた。古物で間に合はすにしても、今の中に質屋から出さなければ、洗張りにやるにも手遅れがする。

「急に涼しくなつて心細く候」と、その夜朝川へ宛てて、手紙の後へ添書した。

朝川は何の氣なしに讀んで、「涼しくなつてその二階も住みよくなるだらう。障子を締める時候となれば、油煙の吹込まぬだけでもいゝ。お前の怖がる隣の馬鹿男に見られぬだけでもいい。家の庭には萩の花を着けた。今度の日曜には百花園へでも行かう」と返事を書いた。

「何を着て百花園へ行くんだらう」と、お國は思つた。

十四

冷しい一日が心細い秋を知らせて、その翌日から又暑さが盛返した。二三日濁つた西風が吹きまくつて、息をするにも苦しかつた。晴れた空も黄ろくて、何處を見ても埃が立迷うてゐる。二階は折々風に搖られた。お國は二階にヂッとしてゐられなくて、階下へ下りて、不斷嫌つてゐる神さんのがさつな話の相手になつた。「私事、この頃の時候に息のつまるやう覺えられ候が、御許樣には御無事にや、今日にも御出あるやう御待申候」と、亂れた文字で朝川へも書送つた。だが、朝川からは音信がない。遊びにも來ない。待遠しがつて追かけて二度も手紙を出した。「幾日も一人でこんな處にゐて日が送れると思はれますか、私にはそんな辛抱氣はありません。階下の神さんの氣の利かたい伊勢訛ばかり聞かされてゐるので、頭が痛くなりました。あの馬鹿が今日も二階へ小石を投げつけました。よしやは怒つてるのかあれから音信がない。あゝ私は淋しくて仕方がありません」と、二度とも同じやうな事を書いた。

「僕は社用にて多忙を極め居れば、當分其處へは行くことかなはず候」朝川の返事は端書で簡單だ。

お國はそれを一目見たばかりで、一途に欺かれたやうに思込んで、顔色も蒼くなつた。忙しいたつて此間まではあれほどせつせと來てゐたものを、一寸も立寄れないほどに毎日用事のあらう筈がない。と直ぐに、「男には忙しいといふ事が、どんな口實にもなるから結構ですね。女にはそんな調法な言譯の道がないから不便ですよ　忙しいあなたは何時までも入らつしやらなくてもよろしい、御勝手になさい」と、ツケツケ書いた。そして夢中でポストへ驅付けてそれを投入れたが、手紙がポストの底へ落ちて幽かな音が強く胸に響いた。もう取返しのつかぬことをしちやつた。よくも考へなかつたから、どんなはしたたい文句を書いたかも知れない。と歸る途々案ぜられた。

二三日掃除を怠けてゐたので、部屋の中は荒れてゐる。外から歸つて見ると、汚れ目が著しく目立つた。だが、お國は身體を使つて其處等を整頓したり雜巾掛をしたりする氣になれなかつた。暫らくザラザラする疊の上に身を横へながら、勢のない目で荒れた部屋を見てゐた。

赤い達磨の模樣のついた湯呑が茶簞笥に伏せてあるが、あの出雲燒は河津さんが下宿屋で使つてゐたものだ。紅い柿の實が青い葉に抱かれてゐる相馬燒の土瓶は、初めてよしやの世話で操を賣つた男の買つて來たものだ、茶簞笥も用簞笥も鏡臺も、それ〴〵の由來を持つてゐる。

淺黄の袋に包まれた三味線は、別けて今お國の心を惹いた。母から下の姉に讓られたのを、三味線など手にする暇もない姉から更に貰受けたのである。姉は小さい時から音曲が好きで、母に手ほどきされて近所の師匠へも通つた。常盤津の稽古本が机の高さぐらゐあつた。「容色がお國さんほどだつたら、藝者になるとい〻」と、米屋の伯父さんが、姉の三味線を聽きながら、竊かに誰れかに話してゐたこともある。

「姉さんほど三味線のお稽古しとけばよかつた」と、お國はふとそれを思出した。

十五

その日午過ぎに、いゝよしやの神さんが訪ねて來た。何時ものやうな柔しいニコ〳〵した顏付して機嫌を害ねてゐる風は見えない。お國が悦しさうに迎へて、「明日あたりお神さんの家へ行かうと思つてたの」と、お世辭を云ふのを耳にも留めず、「お前さんにも驚いたね、そんなに身體を臺なしにして。顏だつて頭だつて見つともないよ」と、坐るが早いか、押かぶせるやうに云つた。「今からさう色氣がなくなつちや賴もしくないね」

「私、そんなに汚くなつて」と、お國は頭に手を當てた。

「此頃は磨きが足りないから、前の國ちやんとは思へんやうになつたよ。本當に氣をおつけな。今からくすんでた日にや、どの位損だか知れやしない」

「私、品川にゐた時分は、毎日のやうに髮結さんへ通つてたけど、此頃は煩さくつて」と、お國は言譯しながら、鏡臺に向つてつく〴〵自分の顏を見た。さう醜くなつたとは思はれない。でも氣に懸つてならぬので、

「これから髮を結つてお湯に入つて來ようかねえ、何だか氣持が惡くなつたから。……お神さん、今夜活動へでも行つちやどう？」と、ふと心を浮つかせて「私、お神さんに話したいこともあるんだから」と云つたが、自分でも何を話さうとするのやら、まだハッキリ極らなかつた。

「今日は愚圖々々しちやゐられないの」と、神さんはもう立ちかけて、「今夜でも都合で遊びにお出でよ。旦那は今日來ないの」

「來ないでせう」

その何氣ないお國の音色が、神さんの耳には不審を起させて、「どうかしたのかい、どちらかに厭な事でもあつたのかい」と問返した。

「さうでもないわ」とお國は曖昧に答へて、「私、今夜行つてよ貴女の家へ」

そして神さんの歸つた後で、髮を結つて湯に入つて、久振りに念入りに化粧した。少しは元氣もついた。部屋の汚れてゐるのが今更のやうに目についた。足袋だけ買立ての新しいのを穿いて、爪立足して階下へ下りた。後でざつと掃除しといて呉れと勝太に賴んで置いて、久振りに俥に乘つてよしやへ行つた。

「珍らしいね、島田に結つて。よく似合ふよその方が」と、神さんは側へ寄つて、横からも後からも見た。

「私、これでまだ價値があつて、お神さんは一目見ただけで女の相場が分るでせう」と、お國はお目見えに來たやうに氣取つて坐つた。

「さうねえ」神さんは長煙管に煙草を詰めながら、横目で見て、「まあ小間使さはりとでも云つた所だらうね、一寸身體が崩れてるけど、少し氣を付けてりや、處女で通れるんだよ」と戲談のつもりで云つた。

「だけど、そんな窮屈な思ひはしたくない」と、お國は飽くまで眞面目に考へて、「それに私、どうしても惡擦れがしないから、幾ら利益にたつたつて、口先で厭な人の御機嫌を取れないのよ。さう薄情な眞似は出來ないしね」

「何時まで經つても腕がないね」と、神さんは笑ひながら、「だけど、本當はそんな腕なんかない方がいゝんさ。お前さんはもういゝ加減で堅氣になつた方がいゝんだよ、私は何時もさう思つてるんだけど、お前さんは直ぐに自棄を起すからよくない」

お國は誰れでもそんな事を云ふと一口にけなした。一時凌ぎだと思へばこそ、どんな男とでも一緒になつてゐられるものの、戀しくもない男と、何で一生の緣を結ばれようぞと、不斷の信仰を力强く述べた。神さんは輕く聞流して、

「ぢや、朝川さんはどちらの方なの。一時凌ぎの方かい、それとも一生の緣の方なのかい」と冷かした。

「どちらでもないわ、あの人は」お國は明ら樣には言兼ねた。神さんに心の中を見透かされたくもない。

「だけど、あの人もいろ〳〵家の事情があつて、何時まであゝしてもゐられないんでせう。此間もそんな話をしてたから。私氣の毒になつてよ、多少でも世話になつた人に迷惑を掛けたくないからね。それに私、壽町のあの家はつく〴〵厭になつたわ、全く壽命が縮まるやうだわ」

「ぢや、どうするの」

神さんはわざと澄ましてゐる。お國はその日顏に注意しながら、何とか云つて呉れるのを心待ちにして默つてゐたがやがて堪へかねて、「どうしたらいゝと思つて、お神さんは」と、答を促した。

「私にもいゝ智慧はないよ、お前さんも隨分我儘だからね」

「我儘かねえ私。これでも隨分並の女よりや苦勞も辛抱もして來たんだけど」

お國は神さんの言葉が皮肉に聞えたので、それを跳ねのけるやうにかう云つたが、俄かに手賴りなくなつて、どうにでもなれと云ふ氣になつて、「いつそ身を賣つちまはうかしら、私は操を立てる男がこの世界に一人だつてあるんぢやなし、好きでもない男一人に喰付いてるのも、もう懲々したし」と、情なさうに云つた。

「それ程に覺悟してるんなら、私もどうかして上げるよ」

「覺悟するもしないも、私には外に仕方がないんだから……私、お安が可愛い。あの子にさもしい思ひをさせたくない」と、お國は獨言のやうに云つた。

その夜は壽町の荒れた宿へ歸りたくもなくて、グツ〳〵してゐる中に夜が更けたので、つひに一夜をよしやで送つた。故郷や妹の噂も朧に聞いた。鈴木が此處へ二三度探りに來たことも聞いた。しかし其等の噂は不斷ほど面白くも恐ろしくもない。「勝手にしろ」と毒口を利いた。

十六

「ぢや、私に一切任せとおなさい、心當りもあるから明日の二時頃までに兎に角此處まで來てお呉れ。時間を間違へないやうに、屹度だよ」と、翌朝神さんに念を押されて、お國は堅く約束した。

暫らく一所に滯つて、汚れて腐りかけてる水の流出すやうな心持になつて家へ歸つた。よかれ惡しかれ、この狹苦しい部屋を出て何處かへ行くのだと思ふと、だらけてゐた心も稍々引立つた。そして雨戶を開けながら、掃除の手傳ひに來た勝太に向つて、「勝ちやん、私近い中に此家を越すかも知れないよ。勝ちやんのやうな人、私好きなんだから、別れたくはないけれどね」と、名殘惜しさうに云つた。

「何處へ行くの」と、勝太は驚いて、詳しい譯を知りたかつたが、それを糺すのも憚られて、

て尋ねもしなかつた。

「人間は情ないものね。貴方さう思はない？」と、お國は障子に片手を掛け、稍々首を傾げて、人懐こい目付して、「一生會へなくても私の事を忘れないで頂戴。折角懇意になつたんだから」と云つて、勝太が萎れて箒持つ手も力なげなのを見てゐた。

誰れにも忘れられたくない。どの男にも惡く思はれたくない。お國は此處を出る時に勝太から記念に文鎮を貰つて行く約束をした。

「あなたはちつとも來て下さらない。私も困つて居りますけれど、あなたも御迷惑の事があるのだらうと察せられます。あなたが明ら樣に仰有らないのをいゝ事にして、何時までもかうしてゐるのは心苦しく候へば、近日分別をきめようと思居り候。私は如何ほど悲しい目に會つても好きな人に迷惑を掛けたくはありません。あゝ私ほど不運な者が又とありませうか、好きな人と末長く添ひとげる資格はないのですよ。何卒お察し下されて、惡く思はないやうに偏にお願ひ申し候。書いてゐる中にも涙が留め度なく出て、筆も運びかね候」實際涙を流しながら朝川への手紙を書いた。

そしてその一日はそは〳〵して暮した。よしいやの神さんの心當りといふのは何の事だかと、多少氣掛りでもあつた。自分で夕餐の支度をするのも懶くて、近所の五錢均一の洋食を取寄せた。

「姉さん、近くにお引越しなさるんですか」と、階下の神さんが階子段から半身を出した。

「さう極まつた譯でもないんです」と、お國はくどく話込まれぬやうに卒氣なく答へて、退屈醒ましに借りて讀んでゐる「をしへ」といふ天理教の經典を返した。神さんはそれを頂いて受取つた。お國は用事ありげに背を向けて、茶箪笥のあたりを索つてゐたが、神さんが階下へ下りると、つと立つて障子際へ寄つて、薄暗い屋根から屋根を眺めた。眺めてゐると氣が遠くなつて來る。隣の庭から例の馬鹿の喉を鳴らす聲のみ聞えた。お國はその夜ランプを點けたまゝ床に就いた。

翌朝は階下の者も寢過してゐたが、氣立たましい郵便の聲にお國は眞先に目を醒まして、玄關へ下りて行つた。朝川からの手紙で、今日午前中に行くから待つて居れと云ふのである。

「矢張會へたのだ」と、思つて、俄かに自分といふものに興味が出來た。長火鉢に火を起して鐵瓶に湯を沸かして、枕時計に絶えず目を注いでゐた。よしいやへ行く時間の迫るのを氣遣ふ心は次第に薄らいで、朝川の足音ばかりが待たれ出した。勝太は折さへあれば二階へ上つて來ては話を仕掛けようとしたが、お國は碌に取合はないで、現はに不愛想な風を見せた。「約束を違へる人ぢやなかつたのに」と、自分が侮られたやうな氣がして、時計の針の動く度に疑ひを增した。正午が過ぎて一時となり、二時近くもなつて、よしいやへ行く時間の來たのに氣はつきながら、身拵へもしないでゐた。

朝川が何の氣もなく入つて來た時は、もう二時を過ぎてゐる。お國は何時もの笑顔をも見せないで、わざと澄まして目を外の方へ向けた。

「お前の分別といふのはどんな事なのだい」朝川はいきなりから云つて、部屋の樣子に何の異狀もないのを、稍々不審がつた。

お國は暫らく返事もしない。朝川は自分で茶を入れて飲みながら、此間來た時よりこの部屋の中も住みよくなつたと思つた。西窓に差した日影も快くなつた。日の下の屋根の照返しに顔を火照らしてゴロゴロしてゐたあの時とは、僅かの間に時節は著く移變つた。

「もうセルでも着なくちやならんね、おれのと一緒に拵へようか」と、朝川は御機嫌を取るや

うに云つた。

お國は尚暫らく默つてゐたが、やがて横へ向いたまゝで、「貴方、此間の私の手紙を讀んだでせう、隨分貴方にも御迷惑を懸けたわねえ」と、言葉付がよそ〳〵しかつた。

「ぢや今日から迷惑を懸けないつもりかい。何かいゝ事が見つかつたのか」

「いゝ事のあらう筈はないわ、私のやうな性質では」

「ぢや、どうするんだ」朝川は手荒く問詰めた。

「聞かないで置いて下さいその事は」と、お國は首垂れて溜息吐いて、「私、貴方にもう一生會へないんですからね」

「一人でさう極めてたつて譯が分らんぢやないか、僕は此間のお前の手紙を冗談だと思つて讀んでた。僕の方でさう不實な事もしないのに、出拔けにあんな事を云へる筈がないから。お爲ごかしで何か企んでるんだらう」

「私、そんな女と見えて」と、お國は顔を上げて正面に男を見た。

「どうだかなあ」と、朝川は空呆けてゐたが、やがて「女といふものは當てにならんものだ、昨日と今日とで直ぐ氣が變つちまふから」と、獨言ふやうに云つて、詰らなさゝうに後に倒れた。兩手を組んでそれに頭を載せて、目を瞑つて考へ込んだ。

お國はぢつと見てゐる中に痛々しくなつた。別れともなさゝうな男の素振を憐れむの心が起つた。「あゝ貴方が可哀さうだ」と、眞心から云つて、好きな女に別れる男の切なさを思遣つた。

「私、一寸したことでも一途に思込んでしまふ性質ですからね、貴方との關係だつて、ひよつともう駄目だと思込んぢやつたから、ぢつとしてゐられなくなつたの。貴方の風を見てると、何だか心配がありさうだし、此頃は滅多に入らつしやりもしないから、それで一人で考へてよしやへも相談に行つたの。どうせ誰れかの世話になるかどうかしなければ、生きてゐられないのですから」

「ぢや、その方は極つたのかい」

「いゝえ、どうだか分りやしない……貴方これからどうして？」

「どうするつて、お前の方で出て行つちまふんなら仕方がないさ。おれは又千駄木のあの寂しい家に一人でくすんでるさ」

「ぢや、私、よしやの方を斷つちまふ、決して好きで行くんぢやないんだから」お國はもう涙聲になつて、「貴方だつてあの家に一人でゐては寂しいでせう、私だつてこんな家に一人でゐたくはない」

「だから計畫通りに何處へでも行くさ。僕はお前の幸福の邪魔をしたくはないよ」

「何が幸福なの」お國は自分の境涯を假りにも幸福と思はれるのが厭だつた。「貴方がそんな事云ふのなら、尚更よしやへは行かれないわ、貴方の仰有る通りにするから、どうにでもして下さい。いくら苦痛な目に會つても構はないのよ」

だが、朝川は進んで將來の指圖もしなければ、賴もしい口を利きもしない。呑氣らしく煙草のみ吹かしてゐる。時計の針は三時を過ぎた。お國は落着いてゐられなかつた。

「私、もう駄目だ」と、凡ての望みの絶えたやうな氣になつて、「今度又時間を遲くしちやもう駄目。これで二度も三度も約束を違へたんだから、よしやでも愛想を盡かしてしまふ」

「ぢや、早くお出でよ僕も電車まで一緒に行かう。用事を繰合はして來たんだから、愚圖々々しちやゐられない」と、朝川は思切りのよささうに立上つて、素早く帽子をも被つた。そして、

「この部屋もこれで見收めかねえ」と云ひながら、部屋の中を歩廻つた。

お國の耳には「見收め」といふ言葉が淋しくも哀れにも響いた。明るい部屋の中も陰氣に見え出した。其處を歩いてゐる男の顏にも鬱陶しい色が見えた。で、自分の心も滅入込みさうだつたが、強ひて氣を張つて、「まあ此處へお坐んなさい、眞面目にお話したいことがあるから」と、朝川を引据ゑるやうにして坐らせて、「私、もう何處へも行きたくないわ、貴方きりもう外の男には會ひたくない。貴方だつて私に別れるのは厭なんでせう。それならいつそ一思ひに死んで呉れなくつて」と、言葉は落着いてゐた。

「馬鹿に死急ぎをする人だね、死なくちやならん場合が來たら、その時に死ぬるさ。その覺悟さへありや少々苦くつたつて生きてられんことはないよ」

「いゝえ、そんな事駄目よ。貴方はまだ經驗がないから、さう思ふんだけど、死にたいと思つた時に直ぐ死なくちや、とても死ねるものぢやないのよ」

「だけど、も少し辛抱して居れ、おれも饑死はささないから」

「えゝ」と、生返事をして、お國は目を伏せてゐたが、明日から先此處に寢起する怖さがしみじみ胸に染んだ。「貴方も五日か七日に一度ぐらゐしか來られないんでせう」

「あゝ、當分それ位しか來られないね」

「ぢや、私どうして後の日を送るんでせう」と、今更のやうに自分の日々の生活があり〳〵と目に見えた。

「まあ、も少し今のやうにして居れ、別れるなら別れるで、一日田舍の景色のいゝ處へ行つて、快く別れよう。お互ひに惡い思ひを殘したくないからね」

「だつてこんな服裝では何處へも行かれないわ、女は男と違ふんですからね」

朝川は女の言葉に恨みがましい調子の際立つたのを認めて、自分がろくに世話をもしなかつたのを恥しめられた氣がしたが、口では「さつきに死ぬなんて云つた人が、服裝を氣にするのは可笑しいね」と笑つた。

「私、死ぬる時だつて、見つともない風なんかしたくないわ、思切り好い着物を着て死んでよ」と、お國は知れ切つた事をといはぬばかりに答へた。

朝川は歸りかけては腰を卸して、不斷のやうな穩やかな平凡な話に耽つてゐる間、西窓も薄暗くなりかけた。「鳥でも燒いて食べるにいゝ時候になつたね」と、夕餐の支度を彼此と云つてゐた。お國は氣の進まぬらしく、直ぐには買物にも出掛けようとしなかつたが、其處へ玄關から威勢のいゝ聲が聞えた。いゝよしやからと云つて、お國の名を呼んだ。

お國は我知らず立上つて辷るやうに階子段を下りた。神さんの甥が自轉車に乘つて來てゐる。「今直ぐ來て呉れ」と用向を傳へた。直ぐ後からとお國は手短かに答へて、胸騷ぎをさせながら二階へ上つた。

善し惡しを考へる餘裕は心になかつた。

「兎に角行つて來てよ」と云つて、イソ〳〵身支度をした。ザッと白粉や臙脂をもつけた。

「ぢや、僕は歸るよ」と、朝川は立上つたが、お國は慌ててそれを押留めて、

「私、二三時間で歸つて來るから、それまで待つてて頂戴。向うの樣子もお話したいし、このまゝ別れるのは厭だから」と繰返しながら、顧み〳〵階下へ下りた。

俥の上では空想が火花のやうに散つた。いゝよしやでは何が待つてるんだらう?

徒勞

一

電車は絶え間なく騒しい音をして、直ぐ下を走つてゐる。冴えた午前の日光が汚れた格子から斜に差込んだ。

押入が突出て、鴨居が曲つて、襖の代りに煤ぶつた障子が嵌つてゐて、二室續きのこの二階の部屋は見るから不恰好だ。廣い方の部屋は何一つ置かれてゐないが、階子段の側の狭い部屋には粗末なテーブルと椅子とが壁際に据ゑられてある。薄い座蒲團と安火とのあるのも部屋に相應はしい。一寸見ると苦學生が室借をしてでもゐる樣に思はれるが、その實此處の主人公はそんな苦しい境涯にゐるのではない。三十四歲のこの年まで、只の一錢だつて自分の腕で儲けたことはない。先々月親の家を離れて此處へ移つてからも、月々十五圓づつ仕送つて貰つてゐる。十五年前に或私立學校の政治科を中途で止してから、碌に書物も讀みもせねば、以前に學んだ事をも大抵は忘れてしまつた。折々テーブルに向つて、何か書散らしたり、天主教に關係した二三の書籍を開けて見ぬでもないが、それが一時間とも續いたことがない。讀んでゐること書いてゐることが明かに頭に入りもしない。毎日戶外へ出て、昔馴染の教師や友人を訪ねて歸ると、押入から夜具を引出して、それに括まつて寢て、強い近視で凹んだ濁つた目を据ゑて、何處ともなく眺めては、電車の音も耳に入らぬほどの深い空想に沈んで行く。そして倦むこともない。飽くこともない。十年一日の如く希望が目の光に燦いてゐる。

彼れは十年前雜司ケ谷の畑の中の一軒家で、神の聲や魔物の聲を聞いてから、世界が全で違つて見え出した。その當時から學課を抛つてしまつた。獨り森の中を散歩したり机の前に正坐したりして、人間離れした聲に耳を傾けては考へた。楢の葉がカサ〳〵音をさせても、その音につれて神の聲が聞える。

「亞米利加へ行け。亞米利加へ行けば手易く巨萬の富が得られるぞ。その金で貧民救護所を建てよ。日本政府の誤つた施政方針を正して、日本の貧しき國民を救ふのが、汝、澤井壯吉の使命である」

その言葉は日に〳〵彼れの心に刻まれて、次第に聞棄てにされなくなつた。經濟學や憲法論を安閑と學んでゐる時ではないと思はれた。で、故郷の父へ手紙を寄せて大抱負を述べ、巨額の旅費を請求したが、その手紙には不穩の文句が多かつた。父は驚いて、東京の親戚に頼んで彼れの樣子を索らせて、いよ〳〵普通外れの行爲を見屆けた擧句、無理強ひに故郷へ引戾した。

それから十年の長日月、壯吉は中國の山間に若い盛りを送つた。數ケ月は精神病院へも入れられて、偏執狂の病名をつけられた。東京の知人とは端書一枚の遣取もせず、この世に亡き者と噂されてゐたが、去年の秋の末ヒョックリ東京から出て來たやうに知人の前に現はれた。

「君にこの世で會はうとは思はなかつた。よく長い間田舍にゐられたね、何をして暮してゐたの」と、昔彼れを新橋に見送つた舊友の日笠は、訝しさに堪へぬやうにその顏付や素振を見たが、壯吉は平氣で、

「彼地では天主教を研究しました。先づ人間の

根柢を究めれば駄目ですからね」と云つて、天主教の有難味を說いた。

「ぢや貧民救護所の方は當分見合せたんですか」

「どうして、見合せる所ぢやない。一日だつて忘れたことはありませんよ」

「しかし、もう十年にもなるぢやありませんか、少しは着手したんですか」

「なに、着手しようと思ふと何時でも出來るんですがね。さう早く吝臭いものをつくるよりは少々遲くなつても大組織にやる方がいゝんですからね、それにはあらゆる方面の知識を吸收して、自分を完全無缺にしてから着々歩を進めなくつちや駄目です。先づ人間は宗教で心を神聖潔白にしなくちやならんと思つて、私は一番高尙な天主教に入つたのですが、この次には、政治を研究します。田舍ででも少しは政治上の活動をやりかけたんですよ。しかし田舍は迫害がひどいですね、私の政治思想は皆も知つてゐられる通り過激な點がありますからね」と、急に聲を潛めて「探偵がつけて五月蠅くて仕樣がありませんでしたよ、だから半歳ばかり私は尼寺に隱れてゐました。東京ではどうでせう、矢張我々に探偵が後をつけるでせうか」

「たに東京ではそんなことはないでせう」

「さうですか、心配は入りませんか」と、くどく訊いて、稍々安心して、「近々政黨に入らうと思ひます、政治研究のためにはそれが便利ですから……さうして四五年政治をやつたら實業界へ入るつもりですよ。日露貿易をやつて、旁ら政治上でも日露の親睦を計らうと思ひます。貧民救護はそれからでさあ」と先の長い計畫を語つた。

彼れは東京に居殘つて居る僅かの知人の住所を日笠に訊いて、順々に廻つては自分の抱負を語つた。その時父が郡長を辭したため、家族を擧つて東京に移轉したので、まだ新宅や荷物の整理がつかないのに、彼れ一人は家の用事に手出しをせず、每日小遣錢を貰つては、忙しさうに知人の訪問をしてゐた。

その中、父の家にゐては自分の業務の妨げと感じて、一人家庭を離れて、この魚屋の二階に住むことにして、父の家へは滅多に出入をもしない。

二

今日も壯吉は朝から、或先輩の哲學者を訪ねて、日露貿易を論じてゐたが、正午近くなるのに氣付いて、盡きぬ話を中途から切つて、歸途に就いた。山高帽を被り五つ紋の木綿羽織を着て、ステッキを持つて江戸川端を歩いた。花は名殘なく散つてをれど、溫かい日曜の今日青葉の下を散歩してゐる人は多い。川の中も賑かだつた。しかし壯吉の目には周圍の鮮かな色が明かに映らない。何の感じもなく素通りしながら、心の中で哲學者との會話を繰返した。將來日露同盟が成立して、世界は屹度日露で統一される。日露大帝國が將來の世界だと、おれが云ふと、彼奴驚いて、そんな馬鹿々々しい空想を抱いとつちや駄目だと云つた。日露貿易もいいが餘り空想に走らないで、手近な所から着々始めたらどうだらうと意見した。君は餘程現代の思想に遲れとる、主義や理想に忠實な所は敬服だが、さう精神が一つ處に停滯して、自由な發達を妨げられては困ると云つた。確かにさう云つた。今は哲學でも抽象原理や形式的理論を繰返しては駄目だ。生活の指南車としての哲學を欲するのだ。レーベンスマハトとしての哲學が必要なんだと、五月蠅い哲學の議論をした。だけど彼奴には我々の遠大な抱負は分りやしない。時代の思想に遲れるの何のと、そんな吝臭い量見で何が出來よう。

あの男もあんな腐れ儒者ではなかつたがと、獨言を云つて、ふと立留つた。そして首に掛けた紐を手繰つて、懐から大きな蟇口を出して、目を凝らして一々中を改めた。僅かの紙貨と銀貨の外に、守本尊ペテロの小さい彫像、マリヤの旗、珠數と印とが紛失もしないで元のまゝに入つてゐる。確めて安心して再び懐に收めて、坂道を急いで上つて、魚屋へ入つた。

「歸りました」と、上り口に腰掛けて子供に乳を飲ませてゐる女房さんに、帽子を取つて會釋した。

「お辨當がそこへ來てゐますよ。端書もあるでせう」女房さんは首を曲げて後を見て不愛想に云つた。

「どうも、お世話樣」と、壯吉は柔しい聲で慇懃に云つて、弱い目で其處等を索つて、黄ろい辨當箱を見つけた。端書をその上へ載せて、柱時計の側に擦寄つて見て、「もう十二時過ぎだ」と驚いたやうに獨言を云つて、忙しさうに二階へ上つた。

羽織を脱いで襖越しに疊んで、押入の中へ入れ、部屋の眞中に胡坐を搔いた。心で神に感謝して辨當の蓋を取つた。嫌な臭ひのするのも構はず、舌鼓打つて隅々までほじくつて食べた。空いた箱は階子段の側へ置いて、茶も飲まないで、コロリと横になつて疲れた足を伸した。そして指先で端書を引寄せて見たが、それは海邊の繪端書だつた。小さい字が繪を取巻いて書かれてある。

「僕は今朝和歌山からこの土地へ來た。霞のやうな春雨に傘も翳さないで、松林の中を歩いて海邊へ出た。砂の上にボートが横つてゐるのみで、左右に人影がない。海は音を立てず穩かだが、遙か彼方を濃い雲に遮られて、その奧の方が物凄く見える。見詰めてゐると、今更のやうに世の淋しさが身に染みた。君を初め東京の知人が懷しくなつた。（濱寺より、日笠生）」

壯吉は二度繰返して讀んだ。やう〳〵その意味を知つた。此處へ移つてから、嘗て一度だつて端書や手紙に接したことはないので、物珍らしさうに暫らく手から離さず、つく〴〵繪を見詰めながら、聲をも出して讀んだ。日笠だけはおれの話を理解してゐる。昔から友人の中で話せるのはあの男ばかりだつたと、その歸京が待遠しい氣もした。

繪葉書の繪は彼れの頭に次第に大きく映り出した。黒い雲に蔽はれた波打際と日笠が長い鐵の杖——學生時代に彼れが日笠に與へたもの——を提げて歩いてゐる。その海には露西亞行の汽船が纜を解いて乘出してゐるらしくも見えた。雲の奧には露西亞の大陸が横つてゐる。

格子の下から聞える電車の響と共に、大海の波音が何處からか湧いて來る。夢のやうな現のやうな二三時間を壯吉は送つてゐたが、不意に「兄さん」と若々しい男の聲がして、障子が開いた。弟の眞造が角帽を被つて袴を穿いて其處に現はれた。壯吉は夢から呼醒されたやうに慌てて起きて、弟の前に座蒲團を押付け、「疊が汚れてゐるからこれをお敷きよ、學校へ穿いて行く袴が汚れちやいけないから」と、柔しく云つて、強ひてそれを敷かせて、「今日は緩くり遊んでおいでよ、もう用事はないんだらう」

眞造はそれに答へず、兄の落着いた顏をジロジロと見ながら、「隨分騷々しい處だね、よく辛抱してゐられるね、僕なんか一日もこんな家で勉强出來やしない」

「さうかい、おれには此處の方がいゝがなあ、家にゐるよりや」

「僕だつて此頃はゐたくないさ、厭な事ばかり

日に付いて仕方がないんだもの」と、眞造は力を籠めて云つた。
「厭な事がありや此處へ來て勉强するといゝ。この隣の部屋も空いてゐるんだから」
「だつて僕は家を出られやしないさ、家の始末は何も彼も僕一人でつけなくつちやならないんだもの。兄さんの方が餘程氣樂だ」
「お前もコセ〳〵せずに氣樂にしてたらいゝぢやないか、おれの事業が極りがつき次第、お前にも多額の收入のある仕事を分けてやるよ、安心して勉强しておいでよ」
「僕一人の事はどうでもいゝけれど、家に財產が無くなつたら、兄さんはどうします、どうして生活します」
「そんな心配は入らんよ。おれは政治研究の手段として新聞社に入るつもりだ。△△新聞の社長に頼んで、この隣にある△△新聞小石川支局へ出勤することにしたんだが、まあ當分見習ひのつもりで通つて、將來主任記者になる準備をしようと思ふ。政治や實業をやるにも一時新聞記者になつとくと、非常に便利な事があるんだつて」
「本當に社長が使つてやると云つたのですか、そして仕事は何をやるの。月給も呉れるんかね」眞造は不審がつた。
「なに、月給なんかどうでもいゝさ」壯吉は僅かの給金など口にするのも厭だと云つた風で、「當分無給で働くつもりさ、昨日は集金掛について方々を廻つたがね、あの新聞は隨分よく賣れるんだよ」
「そんなことは記者のする事ぢやないだらうが」
「だつて新聞に入る以上、何でもやつて見なくちや駄目だよ。配達でも集金でも探訪でも、新聞に關係したあらゆる事をやつてから、立派な主任記者になれるんだらう。お前はさう思はないかい」
「どうだか」
「おれは天主教を十年研究したんだからね、何をやるにも基礎から堅めて行かなくちや」と壯吉は蒼黑い角張つた顏にニヤリと薄氣味惡い笑ひを湛へた。そして「御馳走しようかい」と元氣よく云つて、蟇口を持つて階下へ下りた。
　眞造は眉を顰めて頬杖をついてゐたが、ふと立上つて格子際に添うて戸外を眺めた。兄は電車道を横切つて、向側の紅谷の店先に立つてゐる。頻りに指差しして竹の皮に包ませてゐる。思ひなしか後姿は窶れて見えた。包を持つて穩かな日光の中を歩いて來る顏形は、あの父と母との生んだ子とは思はれない。家族の誰れにも似てはゐない。
　唯一人の兄、唯一人の相談相手が、あの眉を搖ぶつて歩いてゐる男なんだ。蠣のやうな目で自動車の後を見送つてゐる男なんだ。眞造はそれを見てゐると、今更のやうに手頼りない感じが胸に迫つた。崩れかゝつた家を支へて行くのは、自分の纖弱い腕一つである。自分が離れたら四五人の家族は皆慘ましい境涯に陷らねばならぬ。それが今日の前に見えてゐるやうだ。
　眞造はこの二三日家庭の不快な空氣に堪へなくなつて、つい兄に會つて訴へたらばと思つて來たのだが、兄は矢張元のやうな兄で、眞面目な話など出來さうではない。と云つて、緣の遠い親類や友人に打明けて相談されることではない。
　彼れはわざ〳〵此處へ來たために一層心が滅入つた。兄の顏を見たために苦痛が更に增した。
「さあドッサリお上りよ、旨さうなのを選つて來たんだよ」と、壯吉は色の赤い餅菓子を一つ摘んで頬張つた。お茶も階下から貰つて來て弟

の前に置いた。旨さうなのを取つて強ひて弟の手に渡し、その食べるのを悦しさうに見た。

「兄さんは何かして少しでも金の取れる工夫は、ないだらうか」眞造は睦じい兄の素振を見てます／＼兄の行末が案じられた。

「少しぢやない、ドッサリ金儲をするつもりだよ。親爺にもさう云つて安心させといてお呉れ。月々幾らかづつ貰ふのも當分の內だよ。どうせおれは相續權がないんだから、財産も皆お前のものだけれど、當分その中から貸して呉れたつていゝだらう、幾十倍にでもして返すんだからね」

「僕は相續權を讓られて些とも有難くはなかつた。兄さんの思つてるほど財産はありやしないし、あつたつて當てにやしない」

「だつて一萬や二萬はあるつて、お前が云つてたぢやないか」

「だけど、親爺に職はないし、皆た居喰してちや駄目だ。それに親爺は自分だけ別居するつもりでゐるらしいんだ。自分は二十歳位から親の手を離れて、獨りで生活して學問して來たんだから、子供も獨りで好きなやうにやればいゝと云つてるんだもの」

「それでいゝぢやないか、おれも好きなやうにやつて來たんだから」

「兄さんはそれでいゝさ、だけど僕はどうします。まだ學校が二年も掛るし、お種やお母さんの世話も一人でしなくちやならんのだし」

眞造は瘦せた顏の黃ばんだ癇の高ぶつた母と、胡麻鹽頭の肥つた父とが、其處に、兄の側に動いてゐるやうに思つた。だが、兄には立入つて家の樣子を話しかねて暫らくして二階を下りた。

三

戶外へ出て自分の家へ歸りかけたが、ふと此頃懇意になつた兄の友人の日笠を思出して、氣晴しに訪ねて見る氣になつて、引返して目白臺のその家へ行つたが、日笠は旅からまだ歸つてゐなかつた。「あの人も氣樂だ、一人ぼつちで繫累もなくて勝手な事をして」と、その身の上が羨ましくなつた。昨日から誰れに會つても誰れを見ても、皆自分より幸福な人のやうに思はれるので、陽氣な學友に會つて、平生のやうな浮いた話をする氣になれぬから、近くにゐる友人の家へも立寄らないで、ブラ／＼雜司ケ谷から護國寺のあたりを步いて、日暮方に竹早町の家へ歸つた。

父も母も妹も茶の間に揃つてゐて、平生と違つた樣子は見えない。妹の手でランプがつけられた。父は田舍から來た長い手紙を丁寧に卷いて封筒に收めた。

「何を云つて來たんでせう」母は猶さらに首を傾けて尖つた聲で訊いた。

「淸衞が目が惡いのに、平八が重いインフルエンザで、今月になつて些とも仕事が出來んのださうだ」と、父は事もなげに云つて、「平八も若い間に勝手な事をした報いだから仕方がない」

「よくそんなに根氣よく手紙を寄越せるものだ。平生は端書一本呉れない癖に、少し工面が惡いと無心ばかり云つて來て」と、母はツケ／＼云つた。

「お種のことも一寸書いとるけれど、平八の云ふことはうつかり信用が出來まいよ。尾ノ道の材木問屋の息子が是非周旋して呉れつて賴んでるから、次手があつたら寫眞を送つて呉れと云ふんだが……」

「へえ、尾ノ道の人から賴まれたんですつて、そんな遠方では話にもなりやしない」さう云ひながら、母はその男の素性などを父に問糺さうとした。父は手紙にあるだけの事を氣乘りのしない口振りで話した。

眞造は食卓についても、何時ものやうに進んでその日の噂をするのでもなく、兩親の素振にのみ目を留めてゐた。母はキョト／＼皆なの顏に目を配つて忙しさうに食事をする。父は緩くり嚙占めて不味いものを旨さうに食べてゐる。

食事が濟むと、父は用箪笥から帳簿を出して、算盤を彈き出した。貸金か預金か、此頃の父は帳簿の調べが唯一の道樂になつてゐる。田舍では一時凝つてゐた謠曲も、謠はなくなつた。

眞造は算盤に向つてゐる父の目の、次第に險じくなるのを感じて、見てゐるのも厭であつた。

「僕は風呂に入つて來る」と、わざと威勢よく云つて、母から湯錢を貰つて戸外へ出た。珍らしく長湯をして歸ると、二階の書齋にはランプが明るく點いてゐる。父に隱して此頃吸ひ覺えた卷煙草に、火をつけたまゝ袂に隱して、ソッと階子段を上つた。机に寄つてお種が雜誌を讀んでゐる。音のせぬやうに疊の上に腹這ひになつて、煙草を出して吸うてゐると、

「あら兄さん、私些とも知らなかつた」と、お種が胸を轟かせて雜誌を伏せて振向いた。赤く太つた頰には笑窪が見えた。

「何を讀んでるんだい」眞造は横からその雜誌の表紙を見た。

「日笠さんの紀行文は隨分六ケ敷いのね、よう分らんわ、先日新聞に出てゐた「朝」といふ小品文は分つたけれど」先月田舍の女學校を卒業して來たばかりのお種は、覺えかけの東京言葉で云つた。

「お前のやうな田舍ツぺいにや分るまいよ」と眞造は手を伸して雜誌を取つて、二三行讀んだが、面白くないので、其處へ投出して、「學校でもこんな雜誌を讀んでたのかい」

「うゝん」とお種は卑しく首を振つて、「內所で讀んでたのが分つてから、急に嚴しくなつて、一冊も持つてゐられんやうになつたの、東京の女學生はどんなものを讀んでて」

「雜誌屋に出てるものは何でも讀んでるだらうよ。お前もこれからセッセと雜誌勉强でも始めるさ、どうせもう東京の學校へ入れつこはないんだから」

「私、もつと學問したい」お種は兩手を机の上で組んで、無邪氣に身體を動かして、

「兄さん達は自分の好きなだけ學問してるんだから、私だつてもつと學校へ行かなくつちや詰らないわ」

「お前の友達で此地の學校へ入つた人があるのかい」

「あつてよ、二人あるの。今月二人とも女子大學へ入つたの、吉住さんと長濱さん。二人とも私よりや學校の成績が惡かつたのだわ」

「成績なんかどうだつていゝさ、女の學問はどうせ贅澤なんだから。お前も財產家の家に生れてりや、洋行でも出來るんだけど、こんな貧乏な家ぢや、女に贅澤學問をさす餘裕はありやしないよ」

「さう云へば兄さんの學問だつて贅澤でせう。今時大學を卒業したつて、そんなにお金にならないんでせう」

「おれは月給取りになりたくつて學問をするんぢやない、精神的の大事業をするんだぞ」と、眞造は氣取つて云つた。

「ぢや壯兄さんのやうになるのね」と、お種は笑つた。そして近視らしく目を細めて、不器用に十字を切つて、壯吉の眞似をした。

「馬鹿だなあ」と云ひながら、眞造もつい釣込まれて笑つたが、やがて、「おれは責任が重いんだから、お前も浮々してちや駄目だよ」と眞面目になつた。

「私だつて責任が重いわ。女だつて兄さんが思つてゐるほど浮かりしちやゐませんよ」

「そんならいゝが」眞造は妹の苦のなささうな風を見た。そして今の中にこの女一人だけでも片付けたいと思つた。男の家柄や地位はどうであらうと、財產のある家へやりたいと思つた。しかし今それを口に出して云ひかねて「種ちやんはこれからお母さんの世話をしなくちやならんよ、あんなに身體が弱いんだし苦勞性だから」と柔しく云つた。

「えゝ……お母さんはお父さんに對して、もつと權利を主張しないから駄目！」

「女はそれでいゝんさ」何のつもりもなく眞造は云つた。新聞紙に落してゐた煙草の灰を庭へ棄てながら、階下の靜かなのに心を留めて、「お父さんはゐないんか」と訊いた。

「どうだか、私お父さんのことなんか知らない」

その鬱情らしい言葉を眞造は忌々しく思つた。

四

「お母さんもゐないよ」と、妹は階下へ下りて觀察して來た。

眞造は胸をどき／＼させたが、「ちや、お前階下で留守番しといで」と、平氣らしく命じた。

「何處へ行つたのだらう、臺所の障子を開放しにしちやつて」

「だから留守番しといでよ、無用心だから」と、眞造は妹を階下へ追遣つた。そして障子を開けて、心當てに母の行先を眺めた。暗い樹木の中に燈火がチラ／＼見えたが、その近くの一つが母を導いた光だと思はれた。父の通つてる女の家へ後をつけて行つたに違ひない。無分別な外聞の惡い眞似をしなければよいが……彼れは母に同情するよりもその狼狽てた端ない仕業を憎んで、荒立てないで父のなすまゝに打遣つて置けば、世間にも知れないし、父もさう財產を傾けるやうなことはしないだらうにと母の焦々した火花のやうな性分を厭うた。

燈火は動きもせず消えもせず其處を照らしてゐる。空は曇つて、底冷い風が膚に染んだが、眞造は手摺の側を離れないで、厭らしいその場を想像した。――十年前田舍の中學に通つてゐた時分、父が町外れの淋しい家へ若い女を置いて、それと氣付いた母が跣足で驅込んで釣ランプを叩落した騷ぎがあつたが――其處のランプはまだ光つてゐる。それを見詰めた眞造の心には五分か十分の間も長く待遠しかつた。疑ひと恐れが續いて起つた。

「お母さん」妹の周章しい聲が、不意に彼れの心を呼醒した。耳を留めて階下の樣子を窺つてゐると、母は「兄さんは」と、妹に向つて訊いた。「二階で勉強しとる」田舍びた聲で妹は答へた。

間もなく母は階子段を上つた。眞造は怖いものでも來たやうに、ソッと顧みたが母の目付は異樣に光つて小氣味惡く見えた。聞きたくもない事を聞かされるだらうと心で後退りされた。

「今大野のお爺さんに會つて相談して來たんだがね。あの人も身を入れて聞いて呉れさうぢやない。あんな手頼りにならん人でもなかつたのに」母は火鉢を隔てて腰をも落着けない。

「さう他人に立入つた話をしない方がいゝでせう」眞造は大人振つた口の利方をして、「お父さんはどんな場合だつて身代を叩潰すやうな人ぢやない」と云ひながら、十年前にもさうだつたと思つた。

「それにしてもお前、自分のものは子供にも讓らないと云つてるんだからね。これ迄とは違つて役所は止めるし歳も取つたんだから、お金を持つてゐなくちや淋しいつて、大野へ行つても

さう云つてるんださうだよ」
「それ程好きなお金なら、無くさりやしないさ、僅かな月給なんかから拵へた財産だから、惜しいのも無理はないんだ」
「だけど此頃は餘程調子が變なんだから、どうするか分りやしない。昨夕だつてお前、子が子らしくないから、家にゐても面白くないと云つて外へ出て行くんだもの」
「だつて僕もお父さんの金の話ばかり聞いちやゐられないさ。それに兄さんはあゝだし、僕が學校を出るまでは、財産の減るのは覺悟してなくちやならんさ。せめてお種だけでも早く片付けたらいゝんだが、何處か田舍の財産家へ遣つとけば、この先お母さんもまさかの時に手頼りになれていゝ。手頼りになれる親類でも造つとかにや困る時がありますよ」
「だけど親類なんか當てにならないよ。實の親だつてあんなになるんだから」と母は刺立つた調子で、「今の中にお前が確かり勉强して、早く卒業して皆なの世話をしなくちや」
「えゝ」と生返事して、眞造は左右から壓迫されて居るやうに感じた。母をも避けて一人でゐたくなつて、「まあ心配しないでいらつしやい、私もよく考へとくから」
と、机の方へ向つて、書物の頁を繰つた。そして母が遠慮して階下へ下りるを待つて、仰向けに寢て手足を伸した。昂奮した頭には數多の不快な姿が忙しく浮いては消えた。茶の間では母が絶え間なく喋舌つてゐる。何時ものやうに妹をして父に背かすやうな話をしてゐるのだらう。彼れはこの家を飛出て自分一人きりの氣儘の生涯を始めたくなつた。兄のやうな境涯も羨ましい。親には離れ兄弟もなかつた若い時分の父の境涯も不仕合せとは思はれない。
ふと玄關の格子戸が靜かに開いて誰れかの聲がした。
「壯さんかい、此頃ちつとも來ないんだね」と母が云つた。
「私も此頃は忙しいんです、今日眞造が來て呉れましたよ。お母さんも暇があつたら入らつしやい。あの魚屋は三井家へ出入するんだから、いゝ魚があるんです。今度お母さんにも御馳走しませう」
「まあ此方へ上つたらいゝぢやないか、そんな處へ突立つてゐないで」
「今夜は緩くりしちやゐられません。今護國寺まで行つて來たんですが、何だか氣掛りだつたから一寸寄つて見たんです、これから歸つて又仕事があるんですよ」
眞造は兄の歸つて行く下駄の音を聞いてゐた。何を思つて不意に寄つて不意に去つたんだらうかと、晝に見た醜い兄の顏が物凄く思はれた。

五

我知らず吸過ぎた煙草に舌を痛くして、その夜は寢苦しかつたが、明方になつてグッスリ寢入つて、目醒時計の音をも知らずに過ぎた。妹が雨戸を開けて呼醒すのをも夢の中に聞流した。
快く眠足つてやう／＼目を醒すと、枕許の障子が開いてその側には父が胡坐を掻いて、煙管で長閑に煙草を吸ひながら、降灑ぐ雨に烟つた谷向うの高臺を眺めてゐる。父は若い時分から早起きが癖で、役所を止めてからも、日の出る前に目を醒して家の者を呼起すのが例になつてゐて、此頃でも一日も違へたことがない。そして帳簿調べの外に用事もないし娛樂もなければ、煙草盆を提げて二階へ上つて、何處ともなく眺めては三四時間を過すことがある。此頃は眞造が側にゐてもさう話を仕掛けず、靜かに朝な朝なの春景色を眺めながら、何かしら考へてゐる

る。「よく眠つた」と、眞造は欠伸をして起上つたが、父は素知らぬ風をして一方に目を注いでゐる。顏を洗つて朝餐を食べて來たが、父は身動きもしてゐない。口髭を剃落してから一層平たくなつた肉付のいゝ顏は、土氣色をしてゐれど、まだ朽衰へた風はない。煙管を持つた手は骨が太くて濃い毛が生えてゐる。迫つた眉の間には高く皺が寄つて目の邊には凄味があつた。眞造は見るともなくソッと父の樣子を見詰めてゐたが、やがて袴を穿いて風呂敷包を抱いて、「行つて來ます」と言置いて階下へ下りた。

　父は暫らくして不精らしく立上つて、本箱や油繪の額を見ながら、二三度部屋を歩廻つて階下へ下りた。お種は不行儀に腹這ひになつて雜誌を讀んでゐる。

「種も大分東京になれたから、そろ〳〵裁縫の稽古でも始めにやなるまい」と、その側に立ちながら見下して云つた。

「誰れが裁縫を習ふものか」お種は小面憎い口を利いて、尙雜誌を讀續けた。聲を出して讀出した。

「女が裁縫を知らんと、嫁に貰つて呉れる所はないぞ」

「なくつたつて些つとも困らない」

「お前は困らなくつたつて、お父さんが困るぢやないか、女が年頃になつて衣服一つ縫へんやうぢや外聞が惡い。お父さんまで恥かしいぢやないか」

「フウン」と小さい聲で嘲るやうに云つて、「そんなに世間に恥かしいやうな子を生まなけりやいゝ」と、わざと雜誌を持つて横へ向いた。

「さうだ、生まなけりやよかつた。氣狂ひや親不孝ばかり生むつもりはなかつた」と父は自分をも嘲るやうに云つた。そして口を噤んで、淋しさうに坐つてゐた。母がお種を指圖して雜巾掛をしたり、二人で絲卷に絲を卷いたりしてゐるのを、他所の人のやうに見てゐた。臺所の御用聞の外に訪れて來る人もない。表の格子戸の鈴は一度も鳴らなかつた。用事のない父は正午まで一處に坐つてゐた。母は仕事をしながらも、白目を寄せてはチラ〳〵父の方を疑ひ深く見た。

　田舍にゐた時分には、座敷の床の下に小さい瓶を埋めて、その中に月々餘つた銀貨銅貨を收めて、暇な折々取出しては數へて見るのが樂みだつたが、今はその樂みすら得られない。預金帳や貸金帳を檢べるのは、現金を幷べて見るほどの興味もないし、每日では樂みも薄らいだ。それに外に收入の道もないので、帳簿の金高も減つて行くばかりである。月々減つて行くのが身を切るよりもつらい。眞造の學資や、壯吉への無駄な仕送りが、月々心に深く染込むやうになつた。

　で、彼れは屢々高利貸でも始めようかと思つた。大野の老人が自分で片棒擔いで周旋役になつてもいゝと勸めたこともある。今もその氣の起らぬでもない。だが、それに伴つた危險に思ひ及ぶと、容易に手出しをする勇氣はなかつた。

「彼奴が來たのが些つとは家の利益になつたらうか」彼れは弱々しい老込んだ妻を見てはさう思つた。そのキョト〳〵した風をして、落着きもなく始終家の中を動いてゐるのも五月蠅かつた。

　午餐を喰つてからは、每日の例として、一時間ほど晝寢をする。目が醒めると、果物か旨い物を貪つて、徒らに日の暮れるのを待つばかりである。今日は眞造の歸る前に、退屈醒しに近所の大野を訪ねた。其處の老人は昔の私塾友達で、一時は可成りの財産をもつくつたがいろいろの商賣で失敗り續けて、今は横濱の商館に奉公してゐる獨息子からの仕送りで、貧し

い生活を立てゝゐる。澤井吉文が職を失つてから東京へ移つたのも、この老人の手紙の文句に乗せられたからであつた。

「よく降るぢやありませんか、私共は雨だと一足も戸外へは出られませんよ」と、眼鏡を外して、讀掛けの義士傳を押しのけて客を迎へた。

吉文はムッツリして座に就いた。

「貴方は何時も御丈夫で結構だ、私は此二三年根がなくなつてしまひましたよ。第一眼が惡くつてね、眼鏡なしぢや新聞を一行も讀めませんで」と、老人は口を利く度に身體を震はせた。

「お互ひに年寄の仲間入をしたのだからね、心細い譯さ」と、吉文は微かに笑つた。

「しかし貴方は若いよ、懐に餘裕があると歳を取るのも遅いと見えますな」と、冷かすやうに云つた。「どうです、先日お話の旅行は。私も都合がつけばお伴したいんだが、今の所少し實行が六ケ敷いので殘念だ。まあ夏になつたら今年は久振りに温泉へでも行かうと思つて、今から樂みにしてるんです」

「いや、私も當分は旅行は見合せませう、その前に家の事をちやんと極めときたいと思ひます、今のやうだと經費が膨脹するばかりで不安心でならない」

吉文は永く一人で眞面目に思詰めた別居の計畫を話して、老人の同意を得ようとした。最も親しいこの人から眞造にも話して貰はうとした。自分自身が直ぐに話すのは後見たい氣がしたのである。

老人は相手が鹿爪らしく話すのを、竊かに面白がつて聞きながら、「それもさうですな」と輕く首肯いてゐた。

「私も若い時分から苦勞ばかりして來たのだから、これから少しは樂をしなくちやなりませんて。もう先が短いのに、生活の心配ばかりしてゐちや、折角苦勞の仕甲斐がなかつたやうなものだ」と、吉文は沁々と感じて云つた。

「それもさうですな。しかし眞造さんは私の家の小僧とは違つて順當に大學を卒業なさるのだから、將來の確かな當てがついてるんでさあ」

「いや、あれも鈍物らしいからどうなるか分りません。それに私が側についてちやあの子の爲にもならん。學資は寢てゐても自然に湧いて來るやうに思つて艱難辛苦の味ひを知らないから、學問にも身が入らん譯です。私共お互ひに若い時分には生柔しいことで學問したのぢやなかつた」

「火の氣もない處で素袷で我慢してゐましたつけな」

「眠くなると井戸端へ駈付けて、ザブ〳〵釣瓶から水を浴びたこともあつたが」

「いや、あれが螢雪の苦みで本式の學問でせうな。今時ストーブの側で電燈で勉強するのとは譯が違ふ」

二人は互ひに昔を思出してよく話が合つた。暫らくは懐かしい追憶の心が浮んで、目の前の慾も得も忘れてゐた。

「兎に角決心なすつたのなら、少しの間でも望み通りにやつて御覧なさい。私も掛り合ひで仕方がない、御子息にも話ずだけは話して見ませう」

「さうして頂けると私も非常に有難い、無論あれだけの人數で食つて行けるだけのものは付けてやるつもりです。私が離れりやどうせ貴方に監督もして貰はねばならんのだから」

吉文は老人の同意を喜んで、財産の分配に立合つて貰ふ約束をもした。

六

二三日過ぎた、大野老人はまだ訪ねて來ない。

吉文も朝の内の靜坐と帳簿いぢりと、夕方からの家宅行との外に不斷と異つたことはない。澤井の一家に目に見える波は立たなかつた。眞造の不安は自然に薄らいだ。母の事々しい告口さへ避けてゐれば、何事をも掛念しないで日を送られた。で、學校から歸つても、食事の外は二階にのみゐて、滅多に茶の間へ顔出ししなかつた。たまに母が物云ひたげに側へ來ても、外すやうにつとめた。何かに託つけては屢々戸外へ出歩いた。或晩、「兄さん、何處へ行くの」と、遊び友達のないお種は、ステッキを持つてブラブラ出掛けて行く兄を羨ましがつた。「お母さんと私と毎晩留守番ばかりさせられて、本當に詰らないわね」と母に訴へた。

「お前一人何處へでも遊びに行つてお出でよ。電車にさへ乗れば賑かな處へ出るのに造作もないんだから」

「だつて私一人ぢや、知らない町は恐いわ。お母さんも行くといゝんだけど」

「お前、一人で歩くのが恐いの。東京の町は田舍のやうに暗くはないんだよ」と、母は笑つて揶揄ふやうに云つた。

臆病者とでも云はれたやうに、お種は負けぬ氣になつて、「ぢや私、一人で行つて來る」と力んだ。二三度母や兄に連れられて、上野や向島の花を見たばかりで、東京に馴染んでゐないので、氣臆れもしたが、一人氣儘に歩きたい好奇心もあつた。そして母が道筋を彼此教へるのも耳にも入れずに、裏口から垣根の狹い道を傳つて通りへ出た。田舍者らしく見られぬやうにと、傍目も觸らずにスタスタ歩いた。左右は次第に明るくなつて、傳通院前まで來ると電車の響や、夜店を圍んだ人だかりで逆上るやうになつた。賑かな大勢の中に割込んで行くのも一人では心細くなつて、ふと思出して壯吉の家を訪ねた。あの兄を連出して、其處等を散歩しようと企てた。

魚屋の二階には、古新聞を笠にした小さいランプが疊の上に置かれてゐる。氣味の惡いほど薄暗い。明るい外から來ると穴倉へでも入つたやうだ。兄はキチンと坐つて、ランプを隔てて肱枕で横になつてゐる男と、元氣のいゝ聲で話をしてゐた。

「一人で來たのかい、よく來たね」と、壯吉は愛想よく妹を迎へて、前からの話を續けた。

お種は洋語交りの理窟つぽい話が面白くなくて、隅の方で手持不沙汰にしてゐたが、やがて其處にゐる男が、かねて聞いてゐた日笠だと知れた。身裝や顔付も兄に似て書生染みてゐて、日笠は壯吉の議論を言葉少なに聞いてゐたが、やがて生欠伸をして身を起して、

「ぢや、君の大事業が成功して理想の養育院でも建つたら、僕も其處へ入れて貰はうかなあ」と云つて、お種の顔を横目で見た。

「あゝいゝとも、だから安心してゐたまへ。僕一個はどうせ君達のため人類全體のために犧牲になるんだからね」と、壯吉は音樂的に輕快に云つた。犧牲とか人類全體とかいふ言葉は彼自身の耳にも氣持よく響いた。

「令妹は何か用があるんぢやないか」と、日笠は注意した。そしてあまりに迫つて來る壯吉の議論を避けるやうに、立上つて椅子に腰を掛けた。

「種ちやん、用事はないのだらう。まあ樂にしておいでな」と云つて、壯吉も立上つて机の側に寄り、「僕は家の事は弟に任せてるから、家庭的の用事は少しも僕にないんだよ」と、日笠の耳元で聲を強めた。

「長男がそんなに無責任ぢや困るね」日笠は空嘯いて、格子の側へ顔を捻向けて賑かな人通りを見た。

「無責任かね、君……だつて僕は天主教へ入つてから童貞の誓願を立てゝゐるんだよ。一人が童貞の生涯を送れば、その一族は如何なる罪があらうとも、未來永遠に救はれるんだからね。齷齪家庭の事に關係したり、外形的の親孝行をしたり、そんな吝臭い事をしなくつたつて、僕は一族の靈魂を救つたよ」と、さも得意らしく云つた。

「童貞の誓願まで立てたのか」日笠は決心に驚いたやうに振向いて、「君はもう三十四歳だが、一生清淨潔白で送るのかね」

「童貞の一生ほど尊いものはないんだつてね。僕は半歳ほど尼寺に住んでたが、女も尼さんは神聖なものだよ」

「どうだかそれや分らんね。しかし君は婦人を斷つてしまつてから今迄一度も後悔したことはないかね」

「一度誓つた以上は決して破ることは出來ないよ、僕の一族は僕によつて救はれてるのに、それを再び地獄の底へ墜せるものか、その代り僕が清淨でゐる限りは家の者は安心していゝんだ。母や弟がよく家庭の事を苦にするけれど、それは畢竟僕の信仰に手頼つてゐないからなんだよ。さうだらう」

「さうだらうね、僕も一人君のやうな兄弟を持ちたいものだ。さうすれば未來の保證がついてるから、生きてる間は思切り慾望を恣にするんだが」

壯吉はニヤリと笑つて、「僕の一家は幸福だよ」と云ひながら机の引出から、黑い海松のパイプを搜出して、「これは田舎の宣教師に貰つたんだが、僕にや無用だから君に進呈しよう。宣教師が町の店でこれを見付けて、十本ばかり皆な買占めて、僕等に分けて呉れたんだよ」と、手でパイプを小磨つて、日笠に渡した。「其處に置いてある書物も大抵同じ宣教師から貰つたんだが、その中で讀みたいものがあつたら、どれでも持つて行き給へ。僕はもう書物は入らないんだから」と調子に乘つて、其處等にある持物の凡てを日笠の手に押付けさうな勢だつた。

日笠は五月蠅がつて、「もう澤山だ」と、パイプだけ袂に入れて、机の上の鳥打帽子を被つて歸りかけたが、壯吉は强ひて引留めようとした。「もつと遊んで呉れたまへ、君に話したいことがまだ溜つてゐるんだよ。好きな物を何でも奢るから、もつと聞いてて呉れたまへ。ねえ、いゝだらう、此處で燈火をつけないで考へてると色々世間の人の知らん事が考へられるよ、時々不思議な聲が聞えるよ」と、死靈でも乘移つたやうな素振をして、聲をも潛めた。

「さうかね、しかし今夜は二時間ばかり君の議論を聞いたんだから、それで澤山だよ。後は又この次に承りませう」

「どうしても歸るんかねえ」

壯吉は唯一人の徒弟と思つてゐる日笠に離れたくはなかつたが、日笠は容赦なく振放して二階を下りた。そして頭の輕くなつたやうに感じた。

「彼れにまだ詳しく云つときたい事があつたのに」と壯吉は階下まで見送つて來て獨言を言つた。喋舌り疲れてガッカリして、壁に凭れて首垂れて目を瞑つた。

「兄さん、そんな風をしてどうしたの、何か氣味が惡いやうだわ」お種は初めて口を利いて、ランプをテーブルの上に置き、グッと心を繰上げて、出來るだけ明るくした。そして焦付いた笠を取除けて、書汚した半紙で新しい笠をつくつてゐると、壯吉は怪しい夢から醒めたやうキョト〳〵部屋の中を見廻しながら手を振つて、

「ランプは下へ置け〳〵、テーブルの上だと外から見えていかんよ」

「何故見えちやいけないの、ランプは疊の上に置くものぢやないわ」

「馬鹿ッ」と、例にない慳貪な聲を出して、壯吉は妹の手からランプを奪つて下へ置いて心を引込めた。

　お種は呆れて兄の顏を見てゐたが、その顏は次第に怖くなつた。

　壯吉は後退りして元のやうに壁に背を擦付け、首を垂れて口を噤み、傍に人のゐるのも忘れてゐた。

　今朝早くから支局の集金掛のお伴をして、小石川區内を殆んど殘りなく引廻された上に、久振りに逢つた日笠と話込んだため、身體も心も不斷より疲勞して、稍々もすればウト／＼居眠をしさうになつた。だが、今夜はまだ計畫すべきことが殘つてゐるので、自分で心を引立てて、瞼を張つて眠入らぬやうに勉めた。薄暗い中に白い目が開いたり閉ぢたりした。

　突立つて見てゐたお種は、最早小氣味惡くなつて、息を殺してソッと階子段を下りて逃げるやうに戸外へ出た。壯吉はそれと氣付かずに、一處にヂッとしてゐて醒めるでもなく眠るでもなく時を過した。政治運動や露西亞貿易や貧民救護所や、每日繰返して倦まない計畫が、形を備へて其處に現はれて消える。波の向うに雲のやうに横つた陸地が見えた。自分の指圖に從つて黑い人や白い人や、人とも獸ともつかぬものが動いた。次第に數が殖えた。自分を禮讚する聲が聞える。手を合せて禮拜する者もある。

　彼れは夥しいその聲に吃驚して目を開けて、慌ててランプを吹消し、格子の間から密かに外を覗いた。自分の大事業の陰謀を誰れかが妨害しようとして、屋根のあたりに見張つて居りはせんかと思つたからである。

「壯吉寢てるのかい」と、階子段の障子が開いた。が、壯吉は暫らく返事もせず、身動きもしなかつた。

　聲を掛けた人は階下へ下りたが、やがて再び上つて來てマッチを擦つた。

「お前何してるの、こんな暗闇の中で」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

　マッチに照らされた二人の顏は青かつた。母は忙しく息を吐きながらランプを點けて、「種が心配してたから樣子を見に來たんだよ。お前、今夜は家へ歸つてお休みな」と壯吉の手を執らぬばかりにして勸めた。

「いや、僕は歸れませんよ、彼處は眞造の家で私の家ぢやないんだから」

「誰れの家だつていゝぢやないか、今夜だけでもお母さんのいふ通りにおしなさい」と、母は叱るやうにも云つた。賺しても見た。此處五六年落着いて大人しくしてゐるので安心してゐるものの、どんな機會で病院にゐた頃のやうに暴れ出さぬとも限らぬと案じられた。

　しかし壯吉は聞入れない。「今夜は私に取つては大切な晩ですから、一足も此處を出て行きません」と、力を籠めて言放つた。膝に置いた握拳に力を入れた。ビクリとも動かない風を見せた。

　母はその滑稽染みた風を見て眉を顰めて、暫らく默つてゐた。

「どうしたんです、お母さん。私の事はもう心配しないで、早く歸つてお休みなさい。もう夜中近いんでせう」と、稍々あつて壯吉は柔しく母を慰撫つた。

「まだお前宵の口だよ、あんなに外は賑かなんだから、少し散歩でもしたらどう」

「賑かですつて、夜が更けるとあんな騷ぎが起るんですよ。僕は今夜は眠らないで、何時までもかうしてゐるんです」

「ぢや、お母さんも此處に宿らうかしら。家にゐたつてどうせ眠れないんだから」

「お母さんもさうですか。ぢやお宿んなさい。僕が居れば大丈夫です、僕が側に居れば保護して上げます」

「何をお云ひだい。保護するの何のと。それよりもお前自身に確かりしなくちや駄目だよ。お母さんがゐなくなつたら、誰れがお前の世話をして呉れます」

　母は不憫なやうな歯搔いやうな思ひをして向合つてゐた。疊の上は埃でザラ〳〵するほどだつた。風は何處からか忍んでランプを煽つた。壯吉は引立つてゐた心の再び弛んで、口の中で何か呟きながら、居睡をしかけた。そして母が敷いて呉れた蒲團の上に倒れて鼾をかき出した。

「よく眠さへすればいゝんだ」母はランプを差出して、口の端に泡を浮せてゐる壯吉の寢顏をツク〴〵見詰めて後、戸締りをして、ランプを消して階下へ下りた。魚屋の女房さんに氣を付けて呉れるやうに賴んで置いて家へ歸つた。

七

　壯吉は翌朝まで熟睡した。女房さんが辨當を持つて來て戸を開けたのに目を醒して、慌てて飛起きて顏を洗つた。支局へ出て行く時刻の迫つてゐる氣がして、急いで袴を穿き羽織を着て、掃除もせず取亂したまゝの部屋で辨當を食べてゐると、母と弟とが不意に入つて來た。昨夜の母や妹は夢の中の人のやうに頭から消えてゐたので、

「朝早くからお母さんまで、一緒に何處かへ行くんですか」と、不思議さうにその顏にも言葉付にも昨夕のやうな不穩な樣子はなかつた。

「お前こそ何處へ行くの。袴なんか穿いて。昨夕はよく眠つたのかい」母は壯吉の不斷のやうなのに安心したが、眞造は仰山さうに母に嚇されて來たのが馬鹿々々しかつた。で、今更兄の譫言を聞くでもないと思つて、

「ぢや僕だけ先へ歸りますよ」と、スッと立掛けた。

「だつて、まだ學校へは早過ぎるだらう。丁度いゝ折だから兄さんにも家の事を話して、三人で極めるものはちやんと極めといたらいゝと思ふよ」

　何だ、こんな兄に云つたつてと、眞造は厭な顏をして默つてゐる。

「失禮しました」と、壯吉は辨當を食べてしまふと恭しく會釋した。

「大層甘さうね。お母さんも一度馳走になりたいね」と云つて、母は甲斐々々しく其處等を片付けて、夜具を干したり掃除をしたり、押入から汚れ物をも出したりした。二人の子を側に据ゑて、かうして働いてゐるのはさも悅しさうだつた。見違へるほど綺麗になつた部屋に朝日が差込んだ。騷々しい中には雀の晴やかな聲が格子の側に聞えた。母は窓際に突立つて物珍らしさうに賑かな朝景色を見てゐたが、やがて「この邊は陽氣でいゝね、お母さんも此處へ來ようかね」と、子供らしく云つて、凄い目に微笑を湛へて坐つた。明るい光に照らされたその顏は、頰骨が黃ろい皮膚を透かして見えるやうで、目の下には環が出來てゐる。

「お母さん、僕はもう出掛けなくちやなりませんが」と壯吉は氣兼しながら云つて腰を浮かせてゐる。

「新聞の見習ひなんか一日ぐらゐ止したつていいだらう、それ所ぢやないんだから」と、母は浮々して居た今迄の氣分が俄かに變つて、溜息吐いて眉を寄せた。不意に電氣でもかゝつたやうに、口のあたりがピリリと動いた。青い筋が目立つて來る。

　眞造は目を他所へ向けた。母のそんな顏付を見る度に、自分の家の陰鬱な空氣を感じられる

ので、成るべく見ない様にしたが、直ぐ側にそんな顔付をした母がゐると思ふだけで、もう心が重苦しくなつた。母は周圍を憚つて潛めながら、持前の尖つた調子できれ〳〵に父の事を話してゐる。兄に人並の量見のないのを忘れでもしたやうに立入つた話をして、眞面目に相手の智慧を借りたさうである。

「お母さんは忌々しくつて、幾度も家を出て行かうかと思つたのだけど、お母さんには歸つて行く家なんかありやしない。それだつてこの歳になつて、自分で稼いで口過ぎは出來はしないだらうしさ……本當ならお前が惣領だから皆なの世話をしなくちやならんのだよ。歳から云つても、お父さんはもう隱居でもして、お前が家の事を一切引受けて始末するのが本當なんだよ。あんな女にムザ〳〵身代を潰されて、默つて見てるつてことはあるもんぢやない。お前だつて月々仕送つて貰はなくちや困るだらう」

母は相手を强く刺激するやうに云つたが、壯吉はろく〳〵母の言葉に耳を留めず外の事に思ひを馳せてゐた。そして、

「私は僅かな金ぐらゐ念頭にありません。大事業がそろ〳〵始まりさうなんだから」と、平然として云つた。

「ぢや、お母さんが乞食になつても構はないんかい。家の事なんかどうなつたつていゝのかい。人情のないお父さんに好きなやうにさせといて、お前達默つて見てるつもりなの」と、母は疊みかけて云つて激した。目も只ならぬ色をした。

壯吉は却つて落着拂つて、癇の高ぶつてゐる母を不審げに見詰めてゐたが、「そんなに私の家が危險になつたんですか、お母さんまで追出されさうになつたんですか、先日家の前を通つた時も、何だか變な奴がウロ〳〵してゐるやうで氣に掛つて寄つて見たんだが、矢張さうだつたんだ、さうに違ひない」と獨り合點をした。

「何だつて。變な奴がウロ〳〵してたつて」と、母は乘出して訊いた。

「えゝ、この邊へも折々やつて來るんですよ。僕の事業も彼奴のために妨害せられるんです」

「どんな人だい、それは。女かい男かい。女ぢやないの」と、母は氣色ばんだ。眞面目に考へた。

「どちらだかよく分らないが、兎に角いけない奴ですよ。あんな奴を生かしとくと、皆なの迷惑になるんですよ」

壯吉は支局へ見習ひに出掛けることなど忘れてしまつて、心は只管その變な奴の事にのみ凝固まつた。目鼻立は明かに浮ばないが、鋭い非凡な智慧と力とで、自分達に仇をなしてゐると思はれた。自分の計畫もそのために阻礙されさうな氣がした。母や弟妹にまで災を被らさうとしてゐるのだ。

彼れはふと自分と其奴とが世界に睨合つてゐるやうに感じた。

「お母さん、どうかして彼奴を退治しなければなりませんね。何ならお母さんは此處へ寢宿りなさい。私が身に代へても保護して上げます」と、氣を張つて云ひながら、懷から例の蟇口を引出して、珠數やマリヤの旗を見た。それを見ると急に心丈夫にもなつた。

母は先日から是程手頼りになる言葉を聞いたことはなかつた。眞造やお種からも、嘗てこんな情味の籠つた言葉を聞いたことがない。で、壯吉の顏を自分の頰に擦寄せたいくらゐ悅しかつた。睫に淚をさへ浮べた。

「たとひ、二階借して暮したつて、壯さんの側にゐれば、お母さんもそれで安心なんだよ」と、前後を辨へずポーッとなつて云つた。世間に捨てられた親一人子一人が差向つてでもゐるやうな感じを起して、それに醉つてゐた。

眞造は二人の話を聞いてゐると、次第に心が沈んだ。母迄も氣が變になつたのぢやないかと思はれた。振返つて見ると、母の顏が却つて不穩な惡相を帶びてゐる。
「さあ歸らう。お母さんも歸つたらいゝでせう。兄さんも何處かへ行くだらうし」と、强ひて母を引立てて外へ出た。そして傳通院前で母に別れて、本郷行の電車に飛乘つたが、學校へは行かなかつた。湯島天神から池ノ端へ下りて、公園の茶店に腰掛けたりして一二時間を過した。心に殘つた母や兄の影を忘れようとつとめた。僅かの小遣錢で煙草を買つて、淡い煙を吹きながら葉櫻の蔭を歩いた。正午になつても自分の家へは歸りたくなくて、心行くばかり自分を慰めて呉れるものが欲しくなつた。せめて母や父の顏の見えぬ處に住みたかつた。孤兒が却つて羨ましかつた。

八

壯吉は母と弟との歸つた後も、暫らく一つ處に坐つたきり動かなかつた。目を瞑つては十字を切つたり、何かを拂除けるやうに手を振つたりした。正午の辨當が來ても食べようとはせず、心は一點に凝固まつてゐた。母や弟や妹の手首に蛇のやうに絡付いたものがありさうに見える。血の氣を吸盡されたやうな痛ましい顏をした母の救ひを求める聲が聞える。
軒燈の點きかける頃、彼れは晩の辨當をもそのまゝにして竹早町へ行つた。物に驚いたやうに格子を開けて茶の間に上つて、突立つたまま目を据ゑた。
「壯さん、どうしたんだい」と、母は胸を轟かせた。お種も眞造も父も箸を持つたまゝに一緒に目を向けた。
「お母さんこそどうもないんですか」と、壯吉は母を庇ふやうにその側に坐つた。お種は恐ろしさうに身體を斜にして、兄の息を避けた。だが、みんなが氣遣ふやうな變つたことも起らなかつた。十年前のやうに暴れ出しさうでもない。狂態は見えなかつた。
父は眉根を寄せたばかりで、默つて箸を執つた。外の者も再び膳に向つた。
「お前御飯は?」と、母も落着いて、腰を持上げて、茶箪笥から茶碗を出さうとした。
「僕は食べたくないのです」と、壯吉は押止めて、「僕は今夜から此家へ留らうと思ふんですがいゝでせうか」
「あ、さうおしなさい、その方がいくらいゝか知れないよ」
「どうせさうしなくちやならんのだ。何時までもお前一人を氣儘にさせとかりやしない」と父も云つた。だが、眞造一人はこれから又毎日、兄の不快な擧動を見せるのを豫期して、一家揃つてゐるこの茶の間が一層陰鬱に感ぜられた。
その夜壯吉は玄關の三疊に寢床を延べて寢たが、何時までも寢付かないで、目を開け耳を聳てて、絕えず家の中の物音に氣を付けてゐた。そして少しでも物音がすると首を持上げて枕許のマッチを擦る。夜中にも幾度か起上つて豆ランプを點けて部屋々々を見廻つた。
「どうかしたのかい」と、母が不意に夢から醒されて訊くと、
「チッとして寢ていらつしやい、私が夜番をしてるんだから、安心していゝんです」と、聲を潛めて答へた。
朝まで一睡もしなかつた。
そして翌朝眞造に手傳はせて、魚屋の二階から荷物を運んで來て、玄關に置いた。日笠にだけ轉居の通知をして、「至急來て來れ」と書添へた。日笠はその端書を見ると轉居を訝りながら直ぐに訪ねて行つた。變事でも出來たのかと、祕密を索るやうに樣子を見た。

「又此處へ舞戻つたんだね、何故だい」と、締切つた玄關の狹い部屋で、周圍を憚つて訊いた。「大事業も當分見合せとなつたのか」

「なあに、着々と歩を進めてるさ。しかし僕が此家を離れると變な奴が祟つて來るらしいから、當分僕が宿込んでてやるんだ。いざとなると、僕が身を捨てても家の者を救つてやるよ」と、壯吉は手強い決心を示すやうに云つた。眠らない爲か、不斷の落着いた額が焦立つてゐた。

「君當分僕に代つて事業の計畫を進行させといて呉れたまへ、君なら大丈夫だから任せとかれる」

「さうかね」日笠はいゝ加減の返事をした。そして何故この男をこんなに打棄てて置いて、病院へも入れないだらうかと怪んだ。狹い部屋には煙草の煙が滿ちた。壯吉は煙に咽びたがら、

「君は何故あのパイプで吸はない」と、日笠の吸つてる吸口付の煙草に目をつけた。

「あれで吸ふやうないゝ煙草は買へないから」

「一寸臭いね。もつといゝ匂ひのする煙草を吸はなくつちや駄目だよ」と、命令するやうに云つて、「おれが奢つてやるかな」と、蟇口から銀貨を取出して茶の間に行つた。

その間に眞造が外から歸つて玄關へ上つたが、日笠を見ると、急にニコ〳〵して二階の書齋へ誘つた。

「先日から貴方にお目に掛りたかつたんですよ。旅行は面白かつたでせうね」と懷かしさうに云つた。

「えゝ、時候がいゝから、何處へ行つても氣持がいゝです」

「さうでせうね、僕も旅行したくつて堪らないんです、少し貴方の旅行談でもきかせて下さいませんか。僕は自然が好きですからね」と障子を開けて、新綠を掠めて來る風を迎へて自分に座を設けてゐると、其處へ壯吉は「ナイル」を一箱持つて上つて來た。眞造は兄の顏を見ると、湧立つてゐる興を急に醒して、言葉の調子まで鈍つた。

壯吉は「ナイル」を取出して、日笠と弟とに一本づつ渡して、彼等の吐出す烟の渦卷くのを一心に見詰めた。それが盡きると更に他の一本を取出して吸はせた。そして見詰めてゐる中に、何時となく居睡をし始めた。はては横に倒れて熟睡に陷つた。

旅の話を續けてゐる日笠は話を轉じて、「兄さんも此頃は大分弱つたんぢやありませんか」と、壯吉の寢息も以前よりは力がなくなつたと思つた。

「さうです」と云つたきり、眞造は兄の事を彼此話したくなかつた。

「これで、始終神經を使つてたんだから根が盡きたんでせう」と、日笠は歳よりも老いて醜い壯吉の顏を覗いて見て憐んだ。唇を動かして折々口の中で寢言を云つてゐるが、その意味は明かに分らない。

二人は寢た男を前に置いて、暫らく默つてゐた。

九

壯吉の目の醒めた時は二人連立つて散歩に出た後だつた。徒らに寢過したのを悔いて、慌てて二階から下りて、部屋々々を見廻つた。

「兄さん、五月蠅いよ、そんなに歩き廻つて」と、針仕事をしてゐるお種は舌打して毒々しく云つたが、壯吉は耳にも留めない。得心の出來るまで部屋を見廻つた。夜になつて家族が睡に就いてからも、彼れは寢床へ入つては起き〳〵して落着く暇はなかつた。豆ランプを手にして二階や階下を隈なく忍び足で歩いた。母の寢顏や父の寢顏に目を擦寄せては見廻つた。折々立留つ

ては疊の上に搖れてゐる火影を見詰めた。

夜半過ぎて、母はその幽かな足音に驚いて目を醒したが、寢衣を引摺つて、薄明るい火影に白い目を動かしてゐる男が、幻のやうに見えると共に身震して、鋭く叫んで、家中の者を呼起した。

父は壯吉の手からランプを奪つて、壓付けるやうに坐らせたが、壯吉は手向ひもせず首を垂れて、「僕一人が寢ずの番をしてりや大丈夫です。安心してズッと寢ていらつしやい。幾ら戸の外まで來てても入りやしないよ」と素直に云つて、懷からペテロの彫像を出して、恭しく十字を切つた。

「お前こそ氣を落着けて寢ろ」と、父は後から蒲團を掛けてやつた。そしてランプを明るくして、家中揃つて壯吉を取圍んで通夜をした。

「僕は十日でも二十日でも少しも眠らなくつても構ひません」と、壯吉は同じ事を繰返し〳〵した。そして皆なが氣遣はしい顏をしてゐるのを不愍に思つた。

不斷でも話の少ない家族は眠い目を張つて、それ〴〵に思ひに耽つてゐるのみで、互ひに口を利かなかつた。

新聞配達の鈴の音が次第に近づいて、格子戸の外から投込まれた。

「僕があゝして此處へ新聞を投込んだことがあるんですぜ」と、壯吉は今迄忘れてゐたことを不意に思出した。

その樣子が可笑しいので、父も母も笑つた。

「お前が最少し當り前になつてそれ丈け働いてりや、少しはおれの力になつたのに」と父は嘆息した。

壯吉は毎夜々々の寢ずの番で次第に痩衰へて、見るも凄くなつた。その騷ぎに紛れて父の別居の企ても延び〳〵になつた。

「入院させなすつちやどうです」と、大野老人は勸めたが、父はキッパリした決心もしなかつた。長い間自分の血潮を絞取られて育て上げた樹木の、何の效もなくて枯れて行くのを、手を束ねて見ながら、痛ましくも腹立しくも思つてゐた。

小感錄 （『文壇側面』の「小感想」より）

C社氣付で私におくられた英文の書翰が、C社から私の家へ回送された。披いて讀むと、それは Luck Chain Letter であつた。この手紙を寫して九人へ送れ、そして幸運の鎖を切るなと書かれてあつた。最初は米國の一官吏から發せられて、世界を三週すべく豫想され鎖となつた人々はすでに百名に近かつた。なかには日本の公爵も將官も入つてゐる。鎖を切つたものは、九日のうちに災害立ちどころに到ると云はれてゐる。

しかし、私は、かういふものを迷信として笑ふ譯には行かない。かういふことでも大多數の人々が信じれば、それが人生の大眞理として世界に通用されるのである。歐米で十三の數を厭ひ日本で丙午の女を嫌ふのは、愚かなことのやうに思はれるが、さう云へば、キリストの教へだつて釋迦の教へだつて、多數が信じてゐるらしいから我々がそれにかぶれてゐるまでのことである。天文學者や生物學者の學說だつて同じやうなものだ。歷史上の人物の批判などことにさうだ。だから、同人物に對する見解が時代によつて違つたりするのだ。

泥人形

一

守屋重吉は朝から、靜かな小石川の場末の家に靜坐してゐたが、日莫前から何時ものやうに散歩に出た。まだ三月の初めだけれど、春めいた温かさで、重ね着が重苦しく感ぜられた。賑かな下町へ出て懇意な洋食屋で輕い食事を濟ませて有樂座の方へ歩いた。そして、入るともなく其處へ入つて、案内された席に着いて厚ぼつたい外套を脱いで、身も輕くなつて、番組を見ると、加賀太夫の「蘭蝶」呂昇の「柳」など、聽かぬ先から心を唆かすやうな曲目が記されてゐる。

間もなく幕が開くと、蛸足の赤い見臺が強く目を惹いた。番組によつて、見臺に向つた色の淺黒い目付の鈍い男が松尾太夫で、今「釣女」を語るのだと知れた。久振りに聽く三味線の音は重吉の耳にも懐かしかつた。それを聽きながら、自由自在の聯想に心を遊ばせてゐた。七八年前に或音樂會で林中が同じ者を語つたことも想出された。その嗄らびた聲と冴えた音色があり〳〵と浮んだ。疲れた焦立つ心が鎭まつて、うつらうつら夢路に引入れられさうであつた。明るい光と快い音色は、其處等の裝飾を凝らした聽衆の姿を一層美しく見せた。音曲に聽惚れた人々の顔には邪慾の相は消えてゐた。

やがて、幕が下りて絃音の絶えると、彼れは新なる氣持で場内を見渡した。立上つた女の後姿、笑つてゐる女、横向きに白目を寄せてゐる女、いろ〳〵の女を見渡してゐたが、暫らくして、ふと自分の前に坐つてゐる女が目に留つた。見た事のある女のやうな氣がする。あれかと記憶を呼起したが、横顔ではよく〳〵分らなかつた。結立ての丸髷で、襟足の美しさは目の醒めるほどだつた。輕いお召のコートを辷り落すやうに脱いで鶉色の縮緬の羽織を見せた。笹龍膽の紋がついてゐる。側の母らしい人と話してゐたが、やがて振向いた顔は派手で、そして氣高かつた。目が大きくて眉が長くて、色は飽くまで白かつた。重吉は注意しながらも、容易にそれと定めかねたが、次第に疑ふ餘地もなくなつた。去年の春一度、矢澤の家で會つたかね子といふ女に違ひない。女はかうも變るものか……

夫らしい男が早足で歩いて來て、母の隣の空席に腰を掛けた。額が廣くて柔和な目付をしてゐる。重吉はその新夫婦の身の上に想像を走らせながら、自分で自分の眼の鈍さを嘲つた。不斷着に海老茶の袴を着けて、束ね髮の飾らないあの時の女に、これだけの容色が備つてゐようとは知らなかつた。「あの女の姿はいゝし、顔の道具はよく揃つてる。あの位なのはさう手易く得られやしないよ」と、矢澤が勸めたのを、無下に斥けたが、それが今となつては、殘惜しいやうな氣がしてならなかつた。周圍にそれに比べられるやうな女は見當らない。

で、重吉は廊下へ出て、呂昇の繪葉書を買つて、その餘白へ、「一年目で思掛けなく、珍らしいかね子さんに會ひました。有樂座には誂向きの女で、場内に異彩を放つて居ります。私は自分の目の玉を抉り拔きたいと思ひます」と、鉛筆で書いて、矢澤夫人に送ることとした。そして獨り廊下をぶら〳〵したり、東洋軒で紅茶

を飲んだりして、「哥澤」は終りの一つを聽いたばかりだつた。

新内を一段聽き終ると、最早三味線の音にも巧みな肉聲にも倦んで、外の冷い空氣に觸れたくなつたが、さて思切つて座を出ることも出來なかつた。恣に席に身體を凭らせて、呂昇の涼しい目の動き、媚を含んだ口元の動くのを見てゐた。豐かな聲で語りながらも、長い一段に疲れたのか、疲勞の色が遠くからも見えた。重吉は節その物の面白さよりも、白い柔かい顏に苦澁の色の微見えるのに一層の興を寄せた。幾時間も同じ氣持で、靜かにいろ〳〵の音色を樂むことは、彼れには出來なかつた。ふと路傍に立止つて、二階から洩れる尺八の音に耳を傾けたり、稽古三味線に引寄せられたりする時には、催眠歌を聽かされる赤ん坊のやうに、無邪氣な夢心地になるのだが、樂堂で心構へして名人の曲を聽いてゐると、次第に思ひは繁く感情は濫費されて、神經はその重荷に堪へがたくなつて來る。

彼れは外の聽衆に後れて戸外へ出て、ホッと息を吐いた。唄ひ手彈き手の巧拙よりも、どの音色にも潛んでゐる遣瀬ない思ひのみが、暫らく心に響いてゐた。日毎夜毎、幾月も幾年も遣瀬ない思ひにのみ惱まされて來た彼れは、詩からも唄からもその思ひをのみ汲取つた。薩摩琵琶でも、月琴でも、筑摩川や鞍馬山のやうな大薩摩でも、彼れの耳には遣瀬ない思ひを傳ふるに過ぎなかつた……。

日比谷へ出て堀端に沿うて、彼れは歩んだ。電車に乘るのも忘れたやうに、九段まで歩いて來た。左右の人家は皆戸鎖されて、最終に近い電車は慌しく馳せてゐる。彼れは幾臺もそれを遣過した。そして、何時までも自分の家へ歸りたくはなかつた。

二

二三日して、重吉は有樂座で見たかね子の事を話しがてら、牛込の高臺の矢澤の家へ遊びに行つた。舊い友人で、去年の夏頃から殊に繁々出入りしてゐるので、東京中で彼れの懇意な家庭とては矢澤以外にはなかつた。少くも紳士らしい家庭では、外に近付はなかつた。そして、其處では、戲談を云つたり氣儘にゴロ〳〵してゐても、多少言葉も愼しんだり、態度をも眞面目にしてゐた。自分の境遇や、將來の方針や、故郷の事情なども、眞面目に話し眞面目に聞いて貰ふ事があつた。五日も六日も不規律な放縱な日を送つたり、苦しい空想に耽つたりした後では、こんな眞面目な話相手が欲しかつたのだ。純潔な處女と三々九度の盃を取交して新郎新婦の契を結び、世間晴れて美しい家庭をつくると結婚して世間並の着實な生活を經驗せよとの親身な忠告を、折々は聞きたかつたのだ。純潔なる處女と三々九度の盃を取交して新郎新婦の契を結び、世間晴れて美しい家庭をつくるといふ心にも、折々はなりたかつた。自分にはそんな人間普通の樂みの經驗されぬやうに出來てゐると知りながら、將來にそんな望みのありさうに思つて見たいこともあつた。

「おかねさんにお會ひなすつたんですつてね」と、矢澤夫人は重吉を見ると、快い笑ひを湛へて云つた。

「えゝ、會ひましたよ。向うでは忘れたのかどうだか、知らん顏をしてゐました。何處へあの人は嫁いたんでせう？」

「印刷會社の社長の子息だとか云つてましたよ。奧さんまで自用車に乘つて出るんださうですから、隨分お金持なんでせうよ」

「あの位の女なら、何處へ連れてつても幅が利くやうな氣がしましたよ、僕も惜しいことした。これまで貴女の紹介なさつた女で、かねさんが一番立派ですね」

重吉はこの細君に勸められて、五六度眞物や

寫眞で見合ひをしたことを追想した。七年も前に、或女學校の生徒と團子坂へ菊見に行つたこともあつた。

「貴女も私に結婚させなくちや、七年間の骨折が無駄になりますね。若し私が外の人の世話で結婚するとか、何時までも獨身でゐるやうだと、貴女は大事業に失敗したやうなものだ。しかし目出度く成功しさうぢやありませんね」

「私、もう〳〵懲り〳〵しましたよ。自分で馬鹿々々しくつて仕樣がありませんわ。だけど折角お世話しかけたんだから、貴方のだけはどうしても纏めたいと思つてゐますの。二度とも う仲人なんかになりやしないけど」

「しかし貴女の紹介した女は皆な相當に綺麗でしたね」

「それや、私の目で選擇してかゝるんですもの」と、細君は浮いた調子で云つて、「私の方でいくら力を入れてても、肝心な貴方が本氣だか戯談だか分らないんだから、本當に張合ひありませんよ」

「萬更戯談でもないんだけど、矢張緣遠いんですね。しかし、僕は七年前にお八重さんと結婚しとつたら、特異なスヰートな生涯が送れてたかも知れませんね。今でも時々あの人の事を思出しますよ。今も矢張以前の女學校で教師をしてるんですかね」

「えゝ、さうでせうよ。もう子供が二人出來たんでせう」

「早いものですね。僕はあの淋しい顔付が氣に入つてたんだが、今見たら丸で變つてるでせうね」重吉は小さな目の細い肌理細かな女學生を心に浮上らせて、「僕はよくも惡くも、あの時分に結婚しとけばよかつたのにと思ふことがありますよ」と、歎息するやうに再び繰返して、「實際七年の間にいろ〳〵の碌でもない經驗を積んだんですからね。矢澤君なんかの知らん事も出來たけれど、その代りに垢がついてしまつた。初心で素直に人間の一生が送れたかも知れんのが、次第にこんなに變則な頭になつちやつたんですもの。僕はもう成らうことなら平靜に日が送りたいんですよ。身體はいくら働かせたつて、いくら忙しい仕事をしたつて構はないから、頭の中だけ平穩無事でゐたいんだけど、どうしてもそれが出來なくなつたんです。今日も一日机の前に坐つてたんだが、心がぢつと坐つちやゐないんです」

「だつて、今からでも遲いんぢやありませんよ」と、細君は結婚によつて、重吉を暗闇から救ひ出さうと思つた。素行上の世間の不評判をも、寂しくなる顔色をも、片目の老婢と二人きりの、見ても氣の毒げな淋しい生活をも、洗濯して新しい人となるには、結婚するに限ると思はれた。度外れの潔癖さへ奥さんがあつて、僕で氣をつけてゐたら止むことと思つてゐた。

「私、貴方の奥樣になる方はお仕合せだと思ひますよ。氣兼苦勞は入らないし、お國には、どつさり財産はあるし」と、不斷よく云ふ事を繰返した。

「さうでもありません。若し僕に妹があつたら、僕のやうな男とは結婚させませんね」重吉は眞面目に正直にさう云つて、「七年前の僕ならどうか知らんが、今の僕は眞心で女房を可愛がることが出來るか知らん。姑がないの、生活に困らぬのと云つたつて、それよりも女には男の愛情が何より必要なんでせう」と、當然の事を深い意味がありさうに云つた。

「そりや、さうですとも。だけど、夫婦となれば自然に情愛が出來ますよ」と、細君も開古したことを云つた。

で、その日も話の緒のつきかゝつた或女の話をして、二三日中に先方から返事が來る筈だと知らせた。「さうですか」と云つただけで、

重吉は別に深入りして頼みもせず、吉報を待設けるでもなかつた。

向うで承知したら、いよ〳〵結婚するんだらうかと、重吉は我れとわが心を疑つてゐたが、約束通り二三日立つと、矢澤から話したい事があるから、來て呉れといふ端書が來た。吉にしろ凶にしろ、先方の返事を聞くのは、多少の興味があつた。で、彼れはその夜俥で其處へ行つた。返事は二月も前に或男と契約が成立つてゐると云ふことだつた。しかもその男は矢澤の細君などの知人だつた。

「小野瀬さんに訊いて貰つたんですがね、外の人とは違つて、私達の知つてる人に極つたのならもう仕方がありませんわ。もつと早く氣がつけばよかつたんだけど」と、細君は折角重吉が氣乘りがしかけると、かうなつて破れるのを殘念がつた。

「だけど當人は君の方がいゝと云ふんだから、どうかならん事はないがね」と、矢澤は横から口を出した。

「ぢや、文句はないさ」重吉は笑ひ〳〵云つた。

「私、そんな事不賛成！」細君は手強くさう云つて、最早そのことについて話すのを厭がつた。

「しかし貴女も一旦話が、壊れかけたのを私に推薦して、私もそろ〳〵その方に心が傾いてるんだからこのまゝ手を束ねて退きたくない氣がしますね。私が自分で身命を賭して掛つちやどうです」

「そんな無茶を云ふもんぢやありませんよ」と、細君は一言に斥けて、小野瀬さんの奥様もその代りに一生懸命に、足を擂木にしてもいゝのを捜して上げると云つてゐると云つた。

「だが、あれが駄目になるやうぢや、僕はいよいよ縁がないんです。貴女も無論賛成でせうから、もう全然止しちやつてはどうです」

「いゝえ、私、止しませんよ」と、細君は斷言したが、軈て、主人に向つて、「あれを守屋さんに見せませうか」と囁いた。主人は「あゝ」と輕く答へた。で、細君は次の室から、小さい寫眞を袖に掩ふやうにして持つて、「小野瀬さんの遠縁の人ですつて。田舍の人なの。女學校を一番で卒業して、學問でも大變よく出來るんですつて。二十歳ださうですが、寫眞で見てもそりや初心なの」と、前置をしてから、寫眞を机の上に置いた。重吉はその寫眞で、見ぬ先から略々想像はついた。

色氣のない田舍びた娘の半身像はランプの光に照らされた。何時ものやうにいろんな批評が皆なの口から不遠慮に出た。細君の豫期してゐた通り、重吉は少しも讃辭を與へなかつた。

「先方で望むのなら何時か東京へ遊びにでも來た時に、見合ひぐらゐしたつていゝ」と、どうせ無駄とは思ひながらも、頭から斥けもしなかつた。穩かな結婚といふ事に一縷の望みを置いてゐたため、縁談と云へ、絶縁したくはなかつた。一つ破れて又一つと、移り行く間に、せめてもの慰めがあるやうな氣がした。

「おや、何時か花見にでも來た次手に、三越か何處かで、何時か見ることにしませう」細君は多分不首尾に終りさうだから、正式の見合しては先方に氣の毒な思ひをさせるかも知れぬと氣遣つてゐた。

三

去年から定職を失つてゐる重吉には、日曜も祭日も只の日も、少しも區別はなかつた。それに今は時日晝と夜との束縛をも受けなかつた。時を限られた仕事も持つてゐないので、日々の生活はます〳〵亂れてゐた。新聞を見ても、騒々しい記事よりも、寄席や芝居の演藝のたよりに

目をつけて、自然に足を[illegible]
[illegible]も、正午[illegible]を出て[illegible]
て、明治座の一幕見に入つた。「[illegible]」の
刀屋の場が開いた所だつた。[illegible]
した[illegible]のお梶が、店先に[illegible]に[illegible]つて
[illegible]で何やら云つてゐる。[illegible]
が、舞[illegible]から受ける感じはあまりに[illegible]
の役者も[illegible]てゐるやうに[illegible]
は耳をも心をも一途に芝居の方へ向けてはゐな
かつた。[illegible]になつ
て、今でも[illegible]
[illegible]
る事にはなれなかつた。[illegible]
[illegible]芝居らしい[illegible]
を[illegible]してゐた。[illegible]合つた[illegible]入つた
[illegible]
り、[illegible]
その[illegible]木に[illegible]を折つてゐた[illegible]
[illegible]
た。あれはもう[illegible]幾年も前のことであるが、あ
の時分には[illegible]
[illegible]
にすらついた。「お[illegible]に育ちし[illegible]を」と、語尾

を[illegible]
[illegible]
立見場は客が[illegible]なつて、[illegible]
[illegible]
だつた。
「[illegible]」
「[illegible]」
[illegible]
まで素人[illegible]下らない[illegible]
を折つて[illegible]
「しかし[illegible]
[illegible]
しこにもつ[illegible]
[illegible]
や、それ[illegible]

[illegible]
策[illegible]は「そりや、さうだ[illegible]
[illegible]

避けようと工夫して、却つてその報いを受ける人間の運命の恐ろしさ、人間の智慧の淺墓さが、其處の舞臺に片影を見せてゐるやうに思はれた。重吉は電氣で明るい小屋の中を見下しながら、恐ろしい聯想を追うた。最早舞臺も舞臺でなく、役者も役者でなく、彼れ一人の心の目にいろ〳〵の暗い影が徂徠した。

やがて、幕が終ると、重吉は箕水の側へ行つて、「歸らうか」と誘つたが、箕水が時計を出して見て、「まだ少し暇があるから、最一幕見て行かう」と答へた。「ぢや、また何處かの立見で會はうね」と笑ひながら、別れを告げて一人戸外へ出た。

まだ日の暮れたばかりなので、直ぐ家へ歸るにはあまり早過ぎた。再び濱町河岸を通つて兩國橋の上で、寒いながらも柔かい春めいた川風に吹かれながら、左右の灯影を見てゐた。そして今宵一夜でも快い醉心地になれる處はないだらうかと考へた。

―……時子樣御出京相成り明日午後小野瀨宅へお遊びにお出でなさる由なれば、あなた樣も何卒私方へお運び下されたく願上候。お話はお目に掛りて申述ぶべく候」と云ふ手紙が、重吉の許に着いた。そんなに早くと、彼れは不審かりながら、正午前から矢澤を訪ねた。

「どうしたんでせう。あれ程よく言つといたのに、親類中へも前觸れをして、お父さんがわざ〳〵見合ひに連れて來たんですつて」と細君は稍當惑してゐるらしい。

「小野瀨さんの知らせ方が惡かつたんでせう」

「いゝえ、小野瀨さんはそんな事は云つてやらなかつたんださうですよ。青山の伯母さんとかが、當人を東京へ嫁けたがつてるさうですから、その伯母さんが屹度勸めてやつたんでせう」と細君は解釋を下して、「今日見に入らつしやいますか」と訊いた。

「そりや行きますさ、また行かなくちや惡いでせう。見たからつて、遠慮はしませんからね、いけなければ直ぐ止すだけだし」

「それはさうですとも、外の事とは違ひますもの」細君はさう云つて、テーブルに身を屈めて、寫眞を取出して見詰めながら、「惡い容色ぢやないし、田舍の初心なお孃樣だ」と、獨言のやうに云つた。

最早見合ひに對する清新の感じは、微塵も重吉の心に起らなくなつてゐた。十年前春雨の降止んだ夜中頃、友人に誘はれて、初めて或遊廓へ入つて、派手な姿の媚を含んだ女を側で見た時には、流石に心の鼓動を感じたが、三十歳を過ぎた今は初々しい素直な心は更になかつた。それに長い放逸の生涯は婦女子に對する敬慕の念を全く失はさせてしまつた。どんな淑女貴婦人の前に出たつて、心の襟を正す氣にはなれなかつた。

「僕ももう一度處女のやうな心になつて見たい」と彼は歎息した。

これまでの見合ひの話などしながら、午飯の御馳走になつてゐると、小野瀨の家から使が來た。細君は一寸自分だけで樣子を見て來ると云つて箸を置くと、そのまゝ出て行つた。直ぐ近所だが、案外手間取つた。そして歸つて來ると、息をはずませながら、コートを着たまゝ日を据ゑて重吉を見て、「ごく初心いの」と、力を込めて云つて、「氣を付けてよくごらんなさい、そりや初心いの。寫眞の通りなのですよ」

「さうですか」重吉は冷淡に云つた。

「お父さんが可愛がつてゐるんですわね。私は小さい時分に死なれたから、あんなにされるのを見ると羨ましい」と、細君は自分の結婚の當時の手頼りない氣がしたことを追想した。

「ぢや行かうね。髯を剃つて來ればよかつたん

だが」と、笑ひながら云つて、重吉は細君と一緒に出た。「ごく初心いの」を細君は道々繰返した。

彼方へ着くと、重吉は先づ、よく肥つた小野瀬夫人と玄關で初對面の挨拶をしてから、座敷へ案内された。其處には正面に、目の窪んだ頰のこけた、一見して直ぐ田舍の實直な商人と氣付かれる五十恰好の父と、ごく初心で飾氣のない、肩上げのある不斷着のまゝの娘とが坐つてゐた。勝氣な顏付をした老人の伯母が少し離れて控へてゐた。重吉は一目見渡して、何のために自分が此處へ引出されて來たかといふ感じがした。あまり口も利かなかつた。拭掃除も行屆かないやうな薄暗い座敷で、その座には色も香もなかつた。矢澤の細君のみが光つてゐた。座の白けぬやうにといろ〳〵の話を持出したが、その擧動や顏形や話振りが不思議なほど立派に見えた。如何にも灰汁拔けがしてゐると思はれた。

やがて、暇を告げて外へ出ると、「貴方どう思ひました?」と、細君は直ぐ訊いた。

「成程初心いですね」重吉は眞顏で云つて、その上何とも云はなかつた。細君にはかさねがさね面倒をかけた。どうか早く緣談の纏るやうにとはその目顏に讀まれた。先方にしても、わざわざ田舍から親子連れで出て來たのに、それを膠もなく斷るのは如何にも氣の毒な氣がした。で、彼れは一度ぐらゐ見たのでは返事も出來ぬから、若しも東京に滯在してゐるやうなら、その中今一二度會つて見ようと、簡單に答へて、細君に別れた。初手から待設けてはゐなかつたが、その場を見た後は何となく心淋しかつた。で、近所の知人を訪ねて、夜になつて、家へ歸つて、暫らく自分の境涯を考へてゐたが、やがて、故鄕へ宛てて手紙を認めた。…若しも結婚するやうな事があつたら、自分と故鄕の家との關係を定めて貰つて、自分だけ獨立して東京で氣樂な一家を構へたい…と、父に宛てて初めての長い手紙を書いた。

四

翌朝、風がざわ〳〵吹いてゐた。重吉は例のやうに冷い水で身體を洗つて、新聞を讀みながら、牛乳と麵麭で輕い朝餐を濟ますと褞袍を着たまゝ、窓際の小机に向つた。そして側にあつた五六册の支那の詩集を一つ取上げた。無差別に目に觸れるものを讀んだ　歐洲近代の大家の小說や戲曲を讀んで人の世の慘ましい姿をありありと見せつけられるに倦んでゐた彼れは、少年時代に好きだつた詩集や「本朝虞初新誌」などを行李の底から引出して見る事があつた。十餘年の都會暮しで見飽いてゐる汚らしい世間から離れて、樵夫の唄を聞きながら漢籍の輪讀をしてゐた山中の私塾を追想してそれを讀んだ。朧げに記憶に殘つてゐる詩に出會した時は殊に懷しい。夢中で吟じてゐた美しい詩句に、今は新しい感じも添つた。青春の過ぎ易く、歡樂の醒め易きを歎ずるの聲は其處にも此處にも聞かれた。「咸陽市中歎黃犬、何如月下傾金罍、君不見晉朝羊公一片石、龜頭剝落生莓苔……」二十年前漢學教師に何氣なく聞いてゐたのが、今になつてその詩を生かす力となつた。「咸陽市中歎黃犬」重吉はそれを口の中で繰返して、榮華の果敢なさを唄つた聲に耳を傾けてゐた。すると玄關で聞馴れぬ錆びた聲がして、老婢は「志賀さん」だと取次いだ。座敷へ通すと、それは時子の父であつた。慇懃に挨拶して、見ぬ風で座敷の様子など見ながら、俗な商人などとは違つた讀書作文に耽る人の風雅な樂みと、それに伴ふ苦勞とを、かうもあらうかと推察して話した。重吉は何故の訪問かと訝りながら、言葉少なに答へた。

[illegible]に見てゐるやうに[illegible]ないんですもと、[illegible]彼れはこれまで[illegible]、他人や女の欠點を見て自分にケチをつけたことがあつて、その度に[illegible]れもしたが、[illegible]父親に[illegible]されたこともあつた。重吉に厭らしい人と云はれた。

「あれは何時ですから、[illegible]言ふのは、[illegible]何も構ひませんので、[illegible]も何とも思ひませんが[illegible]」と、父は云つた。そして、十分ほかりして、[illegible]をして何何にも頼まなかつたと云つた顔をして眼を背けた。

重吉は直ぐに顔を[illegible]庭に向いた。そして、

「志賀氏來訪。小生の方より未だ何の返答も致さざるに直接の御話は[illegible]目下小生多忙に付數日を經ずれば、[illegible]なす樣[illegible]」と[illegible]ながら、幾度會つたつて仕方がないと思つた。

二三日して、父と母とから、返事が來た。父のには結婚に同意して、當座の費用は通知次第直ぐに送る。後の事は追々に決めるとあつたとけだが、母のには懐むやうに書いてあつた。何處の誰でも思つてゐるやうな事を書いて、母は眞を眠り身體も弱つてゐれば、何時あの世の人となるも知れ[illegible]、[illegible]の中に[illegible]極るのを見ればこそ、[illegible]ないと、[illegible]云つて[illegible]事を[illegible]に[illegible]、彼[illegible]の結婚する[illegible]になつたのを[illegible]は[illegible]、いろ／＼と[illegible]に對して些しも[illegible]かつたが、[illegible]を[illegible]はせたい氣がしないでもなかつた。年[illegible]人と人との關係の手續をないのを見て來て、彼れも、子を[illegible]心は[illegible]ふことが出來なかつた。

彼れは結婚の利益をも考へた。世間の信用、親類の信用や、金の融通にも獨身よりも便[illegible]、[illegible]も思つた。だが、それよりも、心の底では柔かな愛情が欲しかつた。浮いた色戀でない穏かな[illegible]の中に、[illegible]心を[illegible]かつた。結婚を、すれば[illegible]に[illegible]らうとは、夢更思はないけれど、その外に心を休める術はなかつた。

[illegible]思ひながら、[illegible]自分の[illegible]第に老いて來たと氣付いて、云ひやうのない厭な氣がした。

[illegible]心が結婚に傾いてゐながらも、あの女とは極めてゐなかつた。で、何の便りもしないで四[illegible]、[illegible]を[illegible]た。[illegible]直ぐにその話が出た。

「時子さんだけ、伯母さんの家に泊つていらつしやるんですつて、何時お會ひになります？」

[illegible]に[illegible]、年[illegible]よりもお若いし、[illegible]りした方だつてそりや褒めてゐるんですつて」

「どうもさうらしい。僕はよく他所の親達に[illegible]られる」と、重吉は笑ひながら、「だけどあの親達は少し輕率らしいですね、今に後悔の[illegible]を[illegible]くんだらう。僕の事はよく調べたんでせうか」

「それは調べなさつたでせう。いくら輕率でも大事な娘を嫁にやるとなつたら、いゝ加減で済しては[illegible]ませんからね」

それ程大事な娘を自分のやうな心持の男に嫁[illegible]うとするのを、重吉は可笑しく思ひながら、

「おや今日でも會ひませうか。早くどちらかに極めなくちや、先方も困るでせうから」

「さう！　では電話を小野瀬さんに掛けて見ませう」

細君はコートを着ながら、一寸[illegible]しさうに「[illegible]事が濟んでゐるのに」と云つて、自働電話をかけに行つた。

三時頃[illegible]つて來ると[illegible]つてから、[illegible]重吉は[illegible]云ひながら、細君の手助けをして、座敷を片付けたり庭の掃除をしたりした。この座敷では去年の夏も見合ひがあつたのである。重吉はそれを思出しながら明日の[illegible]つのを今更のやうに感じた。

「去年お[illegible]を貴女に[illegible]たんだが、今日は[illegible]を御馳走するんです？」

「今日は何もないのよ」と、細君は下女を[illegible]へ行かせてから、「あれで[illegible]やお[illegible]が東京風になつたら、見違へるやうになるんですよ」と云つた。

「矢澤君は初めてだから、よく氣をつけて見たまへ、[illegible]したまへ。」

[illegible]にはならないで」と、重吉が云ふと、

「ウヽン」と矢澤は薄笑ひをして首肯いた。

門外を通る足音に二三度驚された後、三人連れ[illegible]。時子は[illegible]、[illegible]に隠れるやうにして[illegible]て來た。[illegible]

[illegible]いてゐ[illegible]なかつた[illegible]か、折々大人[illegible]に見せたり、何事[illegible]重吉の[illegible]けたさにいろ〳〵と重吉の歡心を買ふやうに努めた。

「志賀が先日は御無禮いたしましたさうで」と、[illegible]に云つて、「[illegible]八も素手で歸つては、親類中に土産話がないと申しましてお伺ひしたんで御座いますよ。さあ、歸つて來ると御飯も食べないで[illegible]切りで御座いまして、[illegible]どうも[illegible]に机に向いていらしつたが、あれには[illegible]お[illegible]になると直ぐに、[illegible]にならないで御勉強なさるに違ひない。お暇すると[illegible]、[illegible]子を[illegible]にお入りになつた。あゝなくつちやならないつて申しますんで御座いますよ。それは一[illegible]者でゐらつしやる[illegible]」と手眞似をして話した。

「それ程の勉強家でもないんですよ」と、重吉は[illegible]つたが、[illegible]。

[illegible]細君はしろ〳〵と[illegible]時子の顔を見ながら、[illegible]を[illegible]はした。

[illegible]は、[illegible]細君に同意した[illegible]な[illegible]、[illegible]心[illegible]、[illegible]も[illegible]ほんたう[illegible]ただらうが、[illegible]見合ひに[illegible]聞いた。

「[illegible]これで往生しますか」と、つい目を逸らした。女振りがよくても、發明らしくても、いざ結婚となると[illegible]してゐたものが、[illegible]ふことに[illegible]しようとした。「蛸で精進落ち」とはこんな事だらうとも思はれた。

「これでお[illegible]なさるので、では直ぐ小野瀬さんへお知らせして來ますよ」と[illegible]は忙しさうに云つて、さう〳〵安心してゐるやうだつた。七年の[illegible]は水に流さねばならなかつた。

「しかし、これがおとくさんだつたら、[illegible]さんにお[illegible]云つて來[illegible]しますが」と、[illegible]は[illegible]らしく云つた。おとくさんとは先約があると云つて斷つたあの女であつた。

「まあこれから[illegible]も忙しいよ」と、[illegible]はいよ〳〵[illegible]むまでに[illegible]當然の務めを數へた。それよりも重吉の家の準備やら衣裝やら[illegible]具の買入れまで指圖して、何れを見なければならない、[illegible]の役目までも一人で引受けてしなければならぬ。それに[illegible]、[illegible]い仕事に[illegible]だつた。自分が中に立つた上は世間[illegible]に恥かしくないほどの儀式をも踏ませたかつ

た。重吉はどうにでもと細君に何もかも任せて歸つたが、結婚するのは自分ぢやない、他所の男のやうにも思はれた。

五

「おれも近々結婚するんだぜ、家も引越すんだ」と、翌朝老婢に知らせると、

「そりやまあ」と老婢は意外な顔をして、やがて「お目出度いことだ」と獨言のやうに云つた。

儀式や行儀作法は一切踏みつけて來た野育ちの重吉は、矢澤夫人の手引で窮屈な思ひをさゝれさうなのを、今から煩はしく覺えながら、何のためにこんな事をする氣になつたんだらうかと昨日のうつかりした返事を悔いもした。新聞を持つて溫かい緣側に腰掛けて、隣の屋根に遮られた狹い空を仰いで、淡い白雲の靜かに流れてゐるのを、怠い氣持で見てゐたが、ふと目を下へ移すと、開かれた新聞の寫眞版が、自ら目に映つた。一つは見覺えのある顏だつた。取上げて讀むと、或女學校の優等卒業生の顏を並べてゐるので、木村とくもその一人だつた。

「些つとした運で、この人が自分のベターハーフになる所だつた」と、重吉は口惜しくもあり可笑しくもあつた。目隱しして偶然相觸れた男と女とが契を結ぶやうな見合結婚をして、それで一生を樂しく送られるのを不思議に思ひもした。が、一日二日立つと、「どうだつていゝさ」と彼れは意の如くならぬ場合に、何時でも自分に向つて放つ言葉を放つて、最早結婚前といふ特別の考へも起さなかつた。矢澤夫人の見立で牛込の新宅へ移つてからも、その日〳〵を不規律に送つた。先方と打合せて、結納や祝言の日取が極つて羽織袴の禮服をも誂へ、兄弟やら二三の知人やらにも知らせた。

「それは何よりお目出度い、女房ほど調法なものはありやしませんよ、商賣人とは違つて、二人の間の利害關係が一致しますからね。待合へ行きたかつたり、遠出したくなつたりしても、女房を連れて行きや玉も祝儀も入りやしない」と、兜町の店で懇意になつた男は笑ひながら云つた。「どうせ道樂の味を覺えた者は、結婚したつて時々は遊ばないで居れるものぢやないが、しかし外へ宿ることはお止しなさい。それから、女房はよくも惡くも初めので一生辛抱するんですね。私なんか今の女房が三度目のだが、何かにつけて最初のが思出されて仕方ない。決して幾度も取換へるべきものぢやありませんよ」と忠告もした。

「それがいゝでせう。君もそれで生活の意味が新に發見されるかも知れない」と、或先輩が云つた。

「僕もこれまでの癖を止めて、新に生活の意味を發見しますかね」重吉はその先輩の聲音を鸚鵡返しに矢澤夫人に向つて話した。

「此方は氣樂さうに云つてられるけれど、彼方ぢや今時分大騷ぎをしてるでせう。親類へお別れに廻つたり、親兄弟の別れの盃があつたり、それにお支度が大變でせうからね。大抵は東京で拵へなさるんださうですが、着物は何處かしら、同じお金をお掛けなさるんなら、私大彥へお誂へなさつた方がいゝと思ふんですがね。田舍の方はどう云ふのか、よく松屋へ行くさうですよ」

細君は吳服屋行きの相談相手になつて、自分の物馴れた目で反物の見立をしたかつた。小野瀨さんの奥さんは些とも構はん方らしいからと齒痒さうに云つた。

「しかし僕の家にも今度は財産が出來ますね。これまでは質草がなくつて一時の融通も困つたけれど」

重吉はさう云つて、細君が小野瀨から聞いて來ては知らせる花嫁の支度を想像してゐた。

櫻の散らぬ間にと云つてゐたのが、温かい今年は春が早くて、江戸川の花は早半ば散りかゝつた。暦を繰ると仲人の極めた四月七日は、もう二三日となつた。老婢は矢澤夫人の指圖で、障子を張り替へたり汚れ物をほぐしたり、のろい手足を動かして庭の掃除などしてゐた。簞笥や長持や大きな鏡臺やいろ〳〵のものが持込まれて、それを中の間に程よく並べて、「これがお奥樣のお部屋だ、かうすると家に極りがついて來る」と、矢澤夫人は悦しさうに云つたが、重吉もそんな新しい道具の置かれたのを見ると、惡い氣持はしなかつた。自分の物が舊く見窄らしく見え出した。「成程結婚は有難いものですね、默つててこんなものを持つて來て吳れるんだから」

「さうですとも。これから家の中もお綺麗になりますよ」

「奥樣はお幾つでせう」と、老婢は雜巾を持つたまゝ小聲で矢澤夫人に訊いた。

「お二十歲。そりやいゝ奥樣！」

「お二十歲？……今の方なら二十歲でお早過ぎはしませんかね」

「早過ぎるものかね、今の學校を出た人は昔の女とは違ふからね」

細君は茶の間や臺所を隅々まで改めて、足らない世帶道具を數へて、今夜でも買つて來なくちやと重吉を促した。

重吉はその晩、細君に隨いて神樂坂の方へ行つた。「これが奥樣のお茶碗」「これが奥樣のお箸」「奥樣が持つていらつしやるかも知れんけれど」と細君は買ひ物をしながら、店先で頻りに奥樣呼はりをした。重吉にはそれが異樣に響いた。人通りの多い坂を下りて、薄暗い店で祝言用の土器を買つて、元の道へ歸りながら、重吉はふと、

「緣といふものは不思議なものですね、思ふに添はず、思はぬに添ふと、よく云つたものだ」

と云つて、心淋しい遣瀨ない思ひが湧上つた。が、誰れに切ない思ひを寄せてゐるのでもなかつた。以前は、自分の身も心も投込んで愛しもし愛されもする女が、何處かに潛んでゐさうに思はれてならなかつたが、今はそんな幻は消えてゐた。それでゐながら、何思ふに添はずといふ感じは、心の底に殘つて居た。それがまた興もない結婚に多少の味ひを添へるやうだつた。

「世の中は皆なさうしたものですよ」と、細君は意外にも染々した調子で同意した。

「しかし、どんな女とでも二年三年と一緒にゐる中にや、自然に人情が出來るものでせうな」

「そりやさうですとも、だから奥樣は可愛がつてお上げなさいまし、妻となれば夫一人が手賴りなんですから」

「えゝ」

重吉はそんな話に深入りしたくなくなつて、途中で細君に別れて一人電車の方へ步んで下町へ出た。夜更けまで賑かな町から町へと遊んだ。でも、流石に夜宿りはしなかつた。

七日のその日は、空は晴れて風も吹かなかつた。禮服を着けたいろ〳〵の男が處狹きまでに集つた。重吉は矢澤夫人の注意の「お頭つき」で午餐を食べて、風呂に入つて來ると、祝言の時刻は最早迫つてゐた。柔かい新調の衣服を着けて、側にあつた花嫁の鏡臺に自分の姿を映しながら、「かうなると、僕も立派に見えるね。成程馬子にも衣裳だ」と云つて笑つた。綿服のみを着馴れてゐた彼れも、變た氣持はしなかつたが、座中の人の想像してゐるやうな花婿といふ氣持は少しも起らなかつた。そしてせめては花嫁が今日一日だけでも美しく婀娜であつて吳れればと賴み甲斐ない事を賴んだ。

豫定の時刻が遅れて、皆が落ち着いた時は日暮前だつた。中の間に参集して居た人々は皆に殊勝らしく澄した。行き届いた様子の外に、二三人の若い芸者と、サラノート[illegible]の音がした。矢澤夫人は後戻りして、奥座の障子を開けて、花嫁を抱出して緣側で花嫁のお扮装を直させた。

やがて、矢澤夫人と重吉とが呼ばれて座敷へ行くと、花嫁はもう決してそれを取るやうに[illegible]て、白粉に濃い化粧を首筋まで念入りにしてあるやうに座つてゐた。両人に囲まれた小野田夫人は、側に立つて、盃が結式を運んだ。重吉は花嫁と差し向ひに座りながら、心の中に苦笑を禁じ得なかつた。ささやかな三三九度の盃を手に取れながらも、自分の心では二世三世まで契を結ぶ氣は更になかつた。相手の興のない唇に觸れた盃を、自分の唇に觸れるのが厭らしくて、そつと小指の先で縁を拭つた。惚れた女に對してさへ接吻を眞に見ることの出來ぬ彼れは、花嫁の横顔を目で見ることは出來なかつた。

「この方が神々しくつていゝですな」と、席に連つた花嫁の父は、次の間へ來てから得心したやうに云つた。

重吉は緣側で矢澤夫人に耳打ちして、「もつと聲を上げるやうに貴方方云つて聞かせて下さい。[illegible]面倒臭いから」[illegible]。白粉もまだ濃過ぎる」と云つた。

やがて中座の間の時、廊下に立つた近所の人に見送られて、重吉は面座敷へ入つた。二間の座間には、花嫁の親類が揃つてゐた。下座の[illegible]してゐた。若夫婦は正面に並んで坐らせられた。重吉は平常よりもつと固く無遠慮に飲んで、好きな酒をも強ひてよく飲んだ。花嫁の側の人のよささうな柔和な顔や、[illegible]した顔と見比べながら、花嫁の親類の顔に似ずして、間違つて先祖に生寫なのを思ひなどしてゐた。一通り酒が廻つてから、童の[illegible]舞踊があつて、最後に矢澤の[illegible]の「スヰートホーム」の合唱があつた。列席者はそれを珍らしがつて、この會を[illegible]に[illegible]した。

矢澤夫婦が附添つて、若夫婦は家へ歸つた。重吉は寢衣を着替へながら、「私もやう／＼人並の事をやつて來た」と云つた。

「これで私も肩が輕くなつたやうですよ」と、矢澤の細君は息を吐いて、「でもよく私の云ふ通りになすつた」と滿足した。

そして花嫁が一寸座を外した間に、「あの娘さんは貞淑らしくて、あの方が一番でしたね」と、細君に云ふと、

「お前さんまあそんなことを」と、細君は手を振つて小聲で、「其の當座の事はよく暗々までも聲えとるもんですから」

二人の歸つた後で花嫁は初めて花婿に向つて口を開いた。「お前は腹が空かないかい。何も食べないで」

「えゝ空きませんわ」と、却つて案外はつきりしてゐた。

「人間一生懸命くさへなければいゝんだ」重吉は目が冴えて容易に寢付かれさうではないので煙草を吸ひながら、「お前は何故おれの所へ來る氣になつたのだい」と訊いた。

「父がさう申したから」

「只それだけでかい。父がさう云つたから、直ぐ承知したのかい」

「いゝえ。私もいろ／＼考へました。お話の極つてからは、夜も碌々眠らないで考へました。そして此方へまゐるのは私のために幸福だと考へました」

「それは分らないね。幸福だかどうだか」重吉はそれ以上あまり立入つた話はしないで普通花嫁の心に浮んでゐさうな幸福の内容を想像し

なから、淋しい笑を[illegible]つた。

二人は互ひに[illegible]しかつたが、その[illegible]しさの意味は違つてゐた。

六

次の日は小氣味[illegible]晴れて、[illegible]は盛んに埃を吹付けた。時子は明け[illegible]に目[illegible]んだばかりで、老婢の雨戸を繰開ける音を聞くと、慌てて起上つて[illegible]でまごまごしてゐた。重吉も起きて、所在なささうに[illegible]ついていて、淋しい[illegible]の[illegible]を眺めてゐた。昨日[illegible]は[illegible]白くなつてゐる。庭の土も乾き切つてゐる。紅い[illegible]三輪花を着け、[illegible]に[illegible]白い小さい花が咲いてゐるが、どれも色が褪せて見えた。

「[illegible]な天氣になつて、[illegible]のやうに云ふと、[illegible]ゐた。

「寫眞を寫さなくちやならんが」と云ふと、「い[illegible]の[illegible]に[illegible]つたやうに[illegible]出て[illegible]した。その[illegible]に氣のないのが、初めて重吉の目についた。と、

「おれも寫眞なんか寫したかあないよ」と重吉の言葉は自ら尖つた。寄添うた二人の姿を永久に紙の上に[illegible]しなかつた。そして、[illegible]して、[illegible]シャン[illegible]んだよ。[illegible]んでるよ[illegible]したんぢやないから」

「[illegible]違ふつもりはありませんわ。ですけど、[illegible]は持つてゐませんから」

「何故?」

「だつて、木綿物なんか持つてつちやいけないつて、[illegible]んですもの」

時子は[illegible]に[illegible]つたことをポツ[illegible]。重吉は[illegible]大學の教授である。洋行をしたこともある。[illegible]人を[illegible]出入するんだ[illegible]木綿物など[illegible]てゐてはいけないと、輕く云渡したさうである。そして重吉の[illegible]から非常に望んでゐるのだから、是非[illegible]して[illegible]まで行つて[illegible]

「[illegible]ねえ」重吉は[illegible]と思ひながら、「皆な虚言だぜ。教授ではないし、洋行なんかした覺えはないよ。第一[illegible]望んで結婚を申込んだんぢやない。一寸した[illegible]で[illegible]になつた[illegible]。おれ[illegible]でも[illegible]

[illegible]、[illegible]たが、[illegible]の親爺に手紙をやつて事實を知らせてやらう」

「[illegible]眞面目で云つた。

「そんな[illegible]なくたつていゝわ」と、時子は何とも感ぜぬやうだつた。「もう[illegible]だつていゝぢやありませんか」[illegible]

[illegible]

「何故? どうなるつてどう?」

「おれの家が嫌だつたら、何時でも、さつさと[illegible]

[illegible]いて、[illegible]に流した。

冗談かと思つた甲斐もなかつたので、時子はおど〳〵して、夫の心を解するに苦んだ。
「私、貴方の妻ぢやないんでせうか」
「まださうでもないね」
「あら……だつて世間ぢやさう云つて居りますもの」
正午頃から、矢澤だの、田舍から上京した重吉の弟だのと、四五人の客が來て時子は忙しかつた。その翌日は二人連で、式の着物を着て、埃に目も口も開けられぬ練兵場を橫切つて、伯母の家へ行つて、歸り途に仲人の家へも寄つて來た。時子は結婚前からの氣苦勞で身體が疲れ切つてゐた。が、夜は快い眠に就けなかつた。多人數の賑かな家に育つた身には住馴れぬ家の靜かな夜が淋しかつた。一寸目蕩んでも、苦しい夢を見た。まだ親みの出來ぬ夫は眠付くと苦しさうな息を吐いたり、聞取れぬやうに譫言を云つたりしてゐて、それが凄くてならなかつた。で、夜具の中に小さくなつて、夜の早く明けるのを待つてゐることもあつた。そして晝間眠くて堪らなくなると、汚い下女部屋へ入つて、障子に栓張棒をかつて、古椅子に凭れて、假寢をすることもあつた。重吉は妻の姿の見えなくなつても、別に氣に掛けもしないで、自分一人の假寢もつゞけてゐた。
間もなく故鄕の弟からと時子の父からの手紙が前後して着いた。二人も子のある弟は、兄の新家庭を案じたのか、「女房は兎角面倒なものなれば、あまり手荒くなさらぬやう」とか、「獨身時分とは違ふものにて候」とか、穩かな忠告めいた事を書いてゐる。
「……小野瀨さまの申されし事も、この良緣を纏めんためと存ぜられ候へば、當方にては決して惡くは存じ申さず候。……不行屆の點は重々有之候はんが、斟酌なく御指導被下度願上候……」時子の父の手紙はあまりに張合ひがなかつた。重吉は當ての外れたやうな思ひをしてゐたが、ふと襖を開けると、時子は机の上で袖屛風をして、幾つもの手紙を讀んでゐた。
「家から手紙が來たのか」
「はい」時子は讀掛けの手紙を抄上げるやうにして「御覽遊ばせ」とそのまゝ重吉の側へ持つて來た。
父の手紙母の手紙伯母の手紙、どれも皆長かつた。讀まぬ前から察せられたやうな月並な事が書いてあつたが、それでも讀んで行く中、かうまで生みの子は可愛いものかと重吉は不思議なくらゐに思つた。
「母はあれやこれやと心に掛けて、四五日は內の事も手につかず候。お前も年も行かず、人中へは出た事もないから、さぞつらい思ひもするだらうと案ぜられ候が、それを辛抱するのが女の道。矢澤樣の奧樣にもよく〳〵お聞申して、人に後指を差されぬやうに氣をつけらるべく、母は明け暮れ祈り居り候。風を引かぬやうに、生水など矢鱈に飮まぬやうに……」
「母親はこれでいゝが、お前は父親にまで甘やかされたんだね。あんまり大事にされ過ぎてる」と、重吉は父親の手紙を走讀みしながら云つて、更に外のを取上げると、それは彼れの母から時子に送つたのだつた。「……重吉は中々機嫌の取りにくい男にて候へど、何卒御辛抱なし被下度……」一寸見ただけで下へ置いて、
「お前は、親爺の手から、おれの手へ渡されたばかりだから、まだ何にも知るまいけれど、夫の選擇を誤つたならば、一生取返しのつかんことが出來るぜ」
「私だつてその位のことは知つてゐますわ。姉さんが離緣されてつらい思ひをしたのをよく知つてゐますもの」
「あの大人しさうな姉さんは再婚したのかい」
重吉は振返つて、心にある姉の顏と見比べたが

ら、一お前も夜中に時々姉さん〳〵つて、寢言を云ふぜ。餘程姉さんが戀しいんだね。お父さんとも、お母さんとも云つたことはないが」

「あら、私寢言を云つて？」時子は極り惡がつて、「私、姉さんなんか思つてやしませんわ。私とは丸で氣性が違ふんですから」

何故不斷睦じく話すこともなかつた姉さんを夢に見るんだらうと、時子は自ら疑つた。そして、重吉の執念き問に應じて、姉の離緣前後の話をした。恩人の子息の切なる望みを斷り切れなくて、父が無理に嫁がしたのだが、夫は頭に異狀があるのか人並の働きが出來なかつた。その癖女房を側から離さぬやうにして、ニヤ〳〵薄氣味惡く笑つてばかりゐた。で、姉は終ひには病付きさうになつて逃げて歸つた。

「何故歸つて來た？　何故辛抱しなかつた？」と、姉さんは毎日々々お母さんに責められてばかりゐたんですわ。ですから、今度私が彼方を出て來ます時にも、父はどんな事があつても、二度ともう家の閾を跨がせないつて、それは幾度も〳〵申しましたんですわ」

時子はさう云ひながら、姉が泣顏で鬱いでゐた事、人に見られるのを恥かしがつて當分外へへは出なかつた事を思出した。

「だけど、姉さんもお前も親爺の命令通りに結婚したんだから、惡ければ責任は親爺にあるんだ。びく〳〵しなくつたつていゝさ」

「さうは行きませんわ」

折々こんな話はしたけれども、重吉の口から懷かしい甘い言葉は洩れなかつた。散歩にも連れて行かうとは云はなかつた。これまでは父の許しがないので、伯母の家に遊びに來てゐる時でも、芝居へも寄席へも一度も足踏みが出來なかつたが、これからは自由に賑かな處へ行かれる事と時子は思つてゐたのに、連れて行つて呉れさうでなかつた。

「私、櫻の花の散るところが見たい」と、謎を掛けるやうに、獨言のやうに云つた。

「ぢや、江戸川堤へ行けば見られるぢやないか。一人で何時でも行つといでなさい」と、重吉は事もなげに云つた。

「江戸川ぢや詰らないわ。私、夕暮に上野の花の散るのが見たいわ」

「櫻は何處だつて同じ事だよ」

「あら。同じぢやありませんわ。私、咲いた花より、夕暮にヒラ〳〵散るのを見たくつてよ」

時子は散る櫻を見て泣いて見たいやうな氣持になつた。で、夕飯が濟むと一人狹い庭に立つて、リボンを風に嬲らせながら、小聲でローレライを唄つてゐた。すると小犬が木戸を潜つて、鼻を地べたにつけて、周圍を歩き出した。

「白來い〳〵」時子は小犬を側へ引寄せて戲弄つた。

そしてその夜は、母や友達への手紙を書いたり、久しく打ちやつてゐた修養日記を出して、思つた事を書いたりなどした。

七

結婚後一週間ばかりは、毎日一人や二人の客があつた。花嫁を見に來る女達もあつた。一年も顏を見せなかつた古馴染が、「守屋の女房はどんな顏をしてるか見てやらう」と云はぬ許りの風で訪ねて來た。青山の伯母は氣遣はしさうに樣子を見に來て、臺所までも覗いて行つた。矢澤夫婦は散歩の序でなどに屢々立寄つて、快活に世間話をした。男同士で六ケ敷い話をしてゐる間に、細君は家の樣子を見ながら時子に向つて、氣の付いた事を遠慮なく言つて聞かせた。時子はその通りにしなくてはならぬものと、一々心に留めて、自分の思つてゐることをも打明けた。袖の長い衣服の柄の田舍臭い事も、

細君の目についた。「奥様は踊をお稽古なすつたんでせう」と、時子の身のこなしを見て、どうもさうらしいと云つたりした。

重吉は來る客に對して、餘り新婚の話をするを好まなかつた。仕事に手も着けず、詩集など手にしながら、よく假寢をしてゐたが、一週間も立つと、眠足つて疲れも去つたやうなので、ふと思立つて、夕餐を濟して外へ出た。霧雨が細やかに降つてゐた。傘を擔けて、街燈の淡く光つてゐる道端を身輕に歩いた。久し振りで廣々した空氣に觸れたやうで、左右の店を歩いてゐる男女の姿も懐かしく見えた。江戸川まで出ると、そのまゝ引返したくなくて當てもなく電車に乗つた。すると急に明るく人の顔が目についた。乗合した四五人の若い女の目鼻が鮮かに注意を惹いた。結婚前よりも却つて強く心に映つた。「世間には若い女が多い」と、彼れはそれにどれ程の意味があるともなく思つた。

電車は本郷本所行だつた。廣小路で下りて、角のビアホールへ入つて、温かい珈琲を飲みながら、雨に包まれて、何處か深沈な外の騷ぎを見て心をそゝられてゐた。幸福を求むる心情が留度なく起つた。日々に月々に物足らない思ひを忘れて、隨喜の涙にむせびたかつた。だが、何處へ行つたら、どうしたら、と志す當てもなかつた。

で、彼れは其處を出て、その邊をぶら〳〵歩いてゐた。雨は小止みになつて、街の燈が霧の中に滲んだ。電車通りを外れて横道へ入ると、河内屋といふ看板が向うに見えた。知つてゐる家だつたが、別に注意しないで、素通りしかけたが、ふと、格子の外に傘を擴げて立つてゐた黒い影が、二三歩出て來て聲を掛けた。見るとそれは頬骨の尖つた、醜い顔の女中だつた。

二言三言立話をしてから、重吉は表の格子戸を開けて、直ぐに二階へ上つた。去年の二月の或夜、この座敷で新内の流しを呼んで、拙い明烏を一段聞かされて以來、此處へ來たことはなかつた。「もうお前には用はないよ」と云つて別れた小松といふ女は、今はどうしてゐるだらう？

「どうなすつたらうつて、此間もお婆さんとお噂してたの」と女中は懐つこい顔をしてお愛想を云つて、「あの子はもうこの土地にはゐないのよ。貴方御存じ？」

「住替へでもしたかい」

「いゝえ、田舍へ行つたらしいの……あれは去年の暮だつたかしら、貴方に廣小路でお目に掛つたつて」

「さう、黒い眼鏡を掛けて通つたよ。僕は其時急いでゐたから知らん顔をしてたけれど」

「あの女も止し方があんまりよくはなかつたらしいの。逃げるやうにして行つちやつたんでせう。よく稼いだんですけどね」

「あれも去年中に借金を濟して、今年中に看板を借りて氣樂にやつて見るんだなんて云つてたがねえ」

三月の末まで馴染んでゐた女ではあるが、重吉は詳しい消息を聞きたがりもしなかつた。「あれも面白くない女だつたが」と、昔の偲ばれるやうな心にはなれなかつた。

「さうね。傍で見てても、別にお氣に入つたといふ風はなかつたのにね。でも、貴下があれほど一人の藝者にこだはつた事はなかつたわね。何處がよかつたんでせう」

「さうでもないよ。あの時分不用な金があつて始末に困つたから。しかし女の方では僕が惚れてでもゐたやうに自惚れたらう。だから、僕がもう來ないと斷言した時でも、まさかあれ切りとは思つてゐなかつたらしい」

「思切りがいゝわね、貴方は」

「さうばかりではないが、何か異つた事情が出

来なけりや、一人の女をそれ程有難がつて、執着することは出来ないね。あの女に関係したからつて、誰れ一人僕を悪く云ふ者もなけりや羨ましがる者もないし、女も僕も命掛けに惚れるんでもなければ厭で溜らんと云ふんでもないもの。興味の起らう筈はないさ」

「矢張、貴方は変つてゐるわねえ」

女中は誰れをか呼ばうとしたが、重吉は其気にもなれなかつた。が、このまゝ家へ帰る気にもなれない。「寄席へ行かうか」と、女中を誘つたが、外の女中がゐないから、家があけられぬと断られた。一人では行きたくもなかつた。で、重吉はあまり無駄口を利かぬこの女中を相手に見覚えのある二三の芸者の噂や、料理屋や待合の盛衰を聞きながら、欲しくもない酒を二三杯飲んで、横になつた。

繁吹が微かに窓に音を立てた。窓の下の露次では色つぽい声をして女が相呼んでゐる。重吉は此家で過した[illegible]などを思ひ出した。そして早くから一人で床に就いて、珍らしく快く眠つた。

「コーマに[illegible]うてゐたけれど、[illegible]様に[illegible]められて、今日[illegible]元気な

[illegible]云はれて恥かしき心地す。お祝儀に五十銭包んで[illegible]

[illegible]

[illegible]煙草がなくて困つてゐたら、姉やが敷島を持つて来て呉れた。[illegible]

[illegible]した。十一時過ぎると姉やは欠伸ばかりして、[illegible]寝させて一人で起きてゐた。隣の支那人の子供[illegible]し[illegible]最早二時が打ちしゆゑ寝床に就きしに、

時子はその夜ペンで日記をつけてゐた。

翌朝、[illegible]は名残なく晴れた。重吉は[illegible]を提げて午過ぎに家へ帰つたが、時子は気を兼ねて側を遠ざかるやうにした。

[illegible]ゐた。その間にも重吉は毎日外へ出たい日はなかつた。そして家へ帰ると、何時も座敷や台所の汚れてゐるのを黙つて見てゐた。

「[illegible]

[illegible]

「此宅のお嬢様にも困りますよ」と、重吉は眉[illegible]

[illegible]にぞろ〳〵してやがるんだから」

[illegible]

「掃除なんか構はんけれど、僕が見てても、日[illegible]

[illegible]つかんのは、菽麦を辨ぜざる女ですね。先日も寿司屋から手導ひに少女を寄越したんですが、さうすると、御主人様とその女を差向ひに坐らせて、[illegible]」

と、重吉は[illegible]面白さうに云つた。

「へえゝ。二十歳にもなつて、そんな筈はないと思ふんですがね」

「これで僕がもつと[illegible]、向う様がお嬢様[illegible]

なぢやありませんかねー
「いゝえ」と、細君は首を振つて、「あの女はそりや怜悧で、よく氣がつきますよ。見た所お轉婆のやうだけど」
「さうですかね。僕は氣の利かん女は實に嫌ひだ。第一話が出來ませんからね。東京の水を潛つてゐないし、男に對する訓練が少しもないんだから、女の形をした人形に過ぎんのだ。それも安本龜八の丹念の作ならいゝが……」
何時ものやうに、毒々しい言葉を吐出すと、重吉は感興に乘つて來た。細君は其處をキチンと片付けて、「困つたものだ」と云ひさうな顔をして、
「あんまり貴方に遠慮して被在しやるからですよ。貴方がもつと柔しくなさつて、時々は外へ連れて出て、世間をお見せなさるといゝんですよ」
「もうあの聲までも不愉快になつた。そして何か云ふと、どう遊ばせと來るんでせう、どうもあの遊ばせが可笑しい」
「私、奥樣の遊ばせ言葉は、東京へ來てお覺えになつたんだと思ひますわ。どうも調子が變だ」
細君は仔細らしく考へて、注意してやらうと思つてゐた。そこへ、時子は磨立てて歸つて來た。「そらお歸り遊ばした」と、重吉は笑ひながら座敷へ入つた
細君は時子から手頼りない思ひを告げられた。そしてその手を引いて、重吉の側へ連れられて來た。
「さあ仲よくなさいまし」と、手を握らせるやうにした。
「貴女お母さまになつて下さい」と、時子は細君の方へ身を擦寄せて、甘つたるい調子で云つた。
「えゝ〳〵こんな大きな娘が出來まして」と、細君は悦しさうに云つた。
重吉は苦笑した。そして矢澤の細君の前では快活に話してゐられるけれど、細君が歸ると話をする氣にはなれなかつた。
別々の人間が住んでゐるのに過ぎなかつた。つとめて何か云つて見ても心の融け合ふことは一度だつてなかつた。
ともすれば、縁も由所もない娘を預かつてゐるやうに思はれてならぬ。
だが、時子は淋しい悲しい思ひを一度も故郷へ知らせてはやらなかつた。青山の伯母が根掘り葉掘り尋ねても、心の中を明ら樣には打明けなかつた。
「女は一度片付いたら、どんなにつらい思ひをしようとも、其家を死場所と思つて、辛抱しなければなりません。苦勞に負けないで意地を立通すやうでなければ人間ではない。お前さんの家は守屋の家より外はないといふ事を一日も忘れてはなりませんよ。主人が不機嫌であつたらそれは妻としての仕向けが惡いからだと、自分の身を責めて、何事も主人大事とつとめてこそ、お前さんも立派な女となれるんですよ」
と、男まさりの伯母は切口上で云つて聞かせた。
「私、どんな事があつても、志賀の家へは歸りませんわ」
時子は結婚前に、父に云はれ母に云はれ、多年愛讀して居る「淑女の美徳」や「婦人の鑑」に教へられて、自分でもさう思ひ詰めてゐた。「如何に夫が無情なりとも、眞心を以て盡しなば、やがて愛情を以て酬いらるゝことあらん」と、日記に書いて、それからは毎日晴雨を書入れると同じやうに、「今日は主人機嫌よろし」とか、「今日は機嫌あしゝ」とか記した。夫の無情を獨りで極めて、自分がその犠牲となつて盡すと

思ふと、「婦人の鑑」の中の女に自分も成り澄した氣がして、淋しいながらも一種の誇りがあつた。

「お前、行つて見たい處があれば、一人で何處へでも行つたらいゝぢやないか。家にゐたつてどうせ用事はないんだから」と、重吉は或日、次の間で所在なささうにしてゐる時子を見て云つた。その言葉は優しかつた。それに力を得て、時子は、

「あら、用事がない事ないわ。幾らもあつてよ。洗張りもどつさり溜つてるんですもの。私遊んでやしないのよ」と、口を突いてハキ〳〵云つた。遊んでゐると思はれたくはなかつた。

「そんなに忙しさうに働かなくつたつていゝさ」と、重吉は笑ひながら、

「家にぢつとしてばかりゐると、身體のために惡いよ。病氣になつちや困るからね」

「だけど、私、何處にも病氣つてないのよ。……貴方こそ身體が惡かあないの」

「惡いね。結婚してから、尚惡くなつたやうだ」

「あら」と、驚いた目をして、「ぢや困るわ……私、貴方、夜中に寢言云ふのを聞いて、屹度お腹に心配があるからだと思つてゐましたわ」

「おれは寢言を云ふんかい。初めて聞いた」重吉は寢た間も心の鎮まらぬのに氣づいて、「どんな寢言云つてる？」と訊いた。

「何だか苦しさうよ。厭世的ですわ。それに女の名前も云つてよ」

「女の名前つて誰れを？」と、重吉は不思議がりながら問詰めた。その氣色ばむのを見ると時子は氣おくれがして頻りに打消さうとしたが、軈て、

「貴方、すうちやんと云ふ女を知つてて」と微笑を含んで云つた。

「すうちやん？」重吉は思出すのにも手間取つた。ずつと以前思ひを寄せた事はあれど、近年晝間には心に浮びもしなかつたお鈴といふ女の事だらう？　で忘れかゝつた形を呼起しながら、「お前此處へ來る前に、懷かしいと思つた男の一人や二人はあつたらう」と訊いた。

「何故？　私にそんなことがあるものですか」

「だけど、一人もないと云ふのは可笑しいね。當然の人情を備へてる限りは女が二十歳にもなつて、あの人は好きだ位に男を思つてたことが、一度もないといふのは可笑しい。少くも思はれたことはあるだらう。それもなかつたかねえ」

さう云はれると、時子は自分が腑甲斐ない樣にも思はれたので、「だつて、私には男のお友達はないんですもの」と、辯護するやうに云つたが、やがて、ふと一つそれらしいものを思出して、「私、一度袂の中へ手紙を入れられたことがあつてよ。お稽古の歸りに入れられたのよ。私、氣が付いてから餘程父に見せようかと思つたけど、それでは却つて後が怖いやうな氣がして直ぐ破つて棄てちやつたの」と、これで女の資格でも出來たやうに話した。

「ぢや直ぐ棄てちやつて、自分でも見なかつたのかい」

「えゝ。そんな場合には見ない方がいゝんでせう」

「なに、見た方がいゝさ。一生に又と付文されることはないだらうから」

ぢや、見とけばよかつたのにと時子は殘惜くないではなかつた。「付文と云つて、中にどんな事を書いてるんでせう？」

「さあ」重吉は首を傾げて、「そりや、男次第でいろ〳〵違ふだらうね」

「私、男と云ふものはどんな事を思つてるんだか分らなくつてよ」

「おれも女が腹の中で何を考へてるんだか分

らない―
―私、女よりや男の方が輕薄だと思はれてよ。さうぢやないんでせうか。女を弄ぶと云ふ事聞いてるけれど、男を弄ぶと云ふ事は聞いたことがないから」

「どちらだつていゝさ。今にお前だつて男の心が分るやうにならあね―

―私、早く分るやうになりたい―

時子はこの頃になつて、ふと胸に萌した疑を解きたくて堪らなかつた。夫の素振が腑に落ちぬので男といふものの心が暗闇のやうに分らなくなつてしまつた。何を苦しんでゐるのだらう。男は女に對して何と思つてゐるんだらう。底の知れぬ井戸のやうに汲取れさうでなかつた。恐ろしいやうでもあつた。父や伯父や姉婿や或ひは校長さんも男であつたけれど、あの人達は疑はしい人ではなかつたが…「男は強いもの女は弱いもの」「男は外で働くもの、女は内を治めるもの」と、ぼんやり男と女との區別をしてゐて、その外には學校の修身科ででも、「淑女の美德」ででも、立入つて男の心を教へては呉れなかつた。…あゝ男の心が知りたい！

―貴方、何か心配事でもあるんぢやなくつて？」と、折々竊み見して知つてゐる夫の曇つた顏色を思出して意味ありげに訊いた。

重吉は、何故かそんな事を問はれるのを好まなかつた。「月末の拂さへ滿足に出來ればそれでいゝんだよ、たとひおれに心配事があつたからつてお前が立入る必要はないんだ―

「だつて、それで濟ましちやゐられませんわ。それぢや二人が同居してゐると同じことなんですから」

「それでいゝさ。夫婦といふものはそれでいゝんだよ」

重吉が煩ささうにするので、時子はそれきり口を噤んだ。

八

時子の里から、一夜宿りでもいゝから、是非來て呉れと、屢々手紙を寄越した。青山の伯母もわざ〳〵來ては、頼むやうに先方の願ひを傳へた。さうでないと、親類や昵懇な家に義理が立たず、あらぬ噂を立てられるからと氣を揉んでゐた。重吉は四月中にと答へて置いたが、その四月は幾日も餘さなくなつた。

庭には躑躅が赤く咲き、白く咲き、山吹も色付いた。欅の若葉を潜つて來る風は柔かかつた。

重吉は毎年この時分には、郊外を散歩する習ひだつたが、今年も山の手線に乘つて、澁谷目黑代々木のあたりを散歩し出した。青々した田舍へ旅立つのは面白くないでもないが、務めとして行くのは厭だつた。で、確と日は極めないでゐたが、去年丁度若葉の頃その山の中を汽車で素通りしたことが、折々思出された。

あれは善光寺詣での歸り途だつた。諏訪の溫泉に一泊して、翌日、三等列車の窓から左右を眺めながら心淋しく歸京の途に就いたが、其折列車は初鹿野といふ山の底の停車場で、三四十分も停車した。其處のプラットホームで見上げた、青葉に色取られた左右の山は、一年近い月日に飽されて、曖昧な形をしながら、彼れの記憶に浮んだ、笹子の隧道の入口は油煙で汚れてゐた。「あれで長さが三哩ぐらゐあるんです、彼方の口は馬の目ほどに見えますよ」と、隧道の方を指差してゐた人があつた。車の内では草鞋を穿いて、手の裏に濃い毛の生えた男が、風呂敷包の中から尺八を出して吹出した。どんな顏だつたかどんな衣服だつたか忘れたが、その音色は今も彼れの記憶の中に震へてゐる。青葉の谷底で笛吹く男、それを聞いてゐた一人旅の彼れ、彼れはその時を顧みて、いろ〳〵の

連想を自由自在に惹起した。

「厭でも近くにまた彼處を通らなくちやならんのだが、今度はどんな感じがするだらう」と思ひながら、或日の午後、急に思立つて、「明日お前の家へ行くんだぜ」と、時子に知らせた。そして、夕方矢澤の家へも知らせに行つた。

「そりや結構ですわ。お里歸をなされば彼方でも安心なさいますよ」と、細君は云つた。

「どうだか」と、重吉はどうせ自分には、田舍者の要求するやうな煩瑣な儀式は守れやしないんだからと思ひながら、「僕も元は結婚したら、直ぐ旅行するんだと、よく貴女に云つてたけれど、今度いざ旅行するとなると、矢張一人旅の方が面白いやうな氣がしますよ。二人だと自由を束縛されるやうでいけない。僅かの間の汽車の旅でもさうだとすると、人間は矢張一人がいい」

「そんな事はありますまいよ。汽車の中もお樂みでせう」と云つて置いて、細君は、「だけど新婚旅行も詰らないものですわね。私ども箱根へ行つた時も、本當に詰りませんでしたよ」

「でも、新婚旅行は人間の一生で最も面白いものと相場が極つてるんですがね。僕は結婚して見て、何だか欺かれたやうな氣がしますよ。長火鉢の趣味も些ともないしねえ。結婚といふ最後の妙藥も、僕の心に利かなければ、もう匙を投げてもいゝと思ひます」重吉はかう云つて、獨合點の歎息をしながら、まだ何か心を湧立たすものが、待つてゐさうに思はれぬでもなかつた。

間もなく時子も訪ねて來たので二人で一緒に神樂坂の方へ土産物を買入れに行つた。重吉の買物が濟むと、時子は洋品店や罐詰屋などへ寄つて、自分の紙入から札を出して心當りの知人への土産物を買つた。

「お前は明日が樂みだらう」と、重吉は人に見られるを恥ぢるやうに俯首いて離れて歩いてゐる時子を顧みた。

「いゝえ。私歸りたくはありませんわ。屹度煩さいと思ひますから」

「煩さいのはおれの方だ。お前は久振りで皆なに可愛がつて貰へらあね。彼方へ行つたら、親爺やお袋に隱立てしないでよく家の事を話して見ろ」

「いゝえ、何んにも私云ひませんわ」

「お前が云はなくても、おれは遠慮しないで云ふよ」

「何を〳〵」と、時子は氣遣はしさうに訊いた。

重吉はそれには答へなかつた。そして、「お前だけ二等に乘せて、おれは三等で行かうか」と、冗談ともつかず云つた。

「あら、それだけは御免遊ばせ」時子は世間の思惑や、出迎人の手前を氣遣つて、泣顏をして云つた。

「ぢや、お前も三等に乘るんかい。三等も込んでやしないし、二等よりや汽車の中が面白いから。第一經濟だしね」

「だつて、不斷とは違ふから三等では變ですわ。私汽車賃拂ふから、二等に乘つて下さいな、ね」

「お前は金持だからね。隨分持つてるらしいね」と、重吉は流し目に見ながら、先に店先でちらと見た紙入の量から中身を想像したが、時子は掏徒にでも見込まれたやうに、懷を庇つた。

「あら、私お金なんか持つてやしないわ」

「持つてたつて、お前から鐚一文取らうと思つてやしないよ。安心してゐなさい」

家へ歸つてから、荷造りに夜を更した。時子はあれやこれやと考へて、明方まで眠付かれなかつた。

「留守をお頼みしてよ、よく氣をつけてお呉れなね」と、翌朝出掛に老婢に向つて、時子は一家の細君らしく云つた。

牛込から汽車に乘つた。重吉は空氣枕に頭を凭せて、ゴルキーの "A Confession" を讀出した。初めの間は屢々書物を置いては、窓の外を眺めてゐたが、やがて、物語に心が惹かれ出すと、目を外へ散らさなくなつた。何時もこの作者の描くやうな人物で、珍らしくはなかつたが、無智の徒が素手で逆運と戰つて行くのが、何時ものやうに胸に響いた。「神は我敵たり、その石あらば、我それを天に抛ちしならん」と怒號したり、「死は謎なり、我その謎をとかんと欲す」と冥想したりしたかと思ふと、泣いて神の前に平和を求めたりする惱み多き生涯は、讀む人の心に迫つて來た。その人物が妻を得ての喜びと妻を失つての悲みは、殊に重吉の心を惹いた。愛する女を得ては、嘗めるやうに可愛がり、女を失つては、食はず眠らずに鬱ぎ込む、その手强い自然の感情が羨しくもあつた。

時子は離れて腰掛けてゐた。そして、夫が書物を讀んでゐる間、首垂れて行儀よくしてゐた。傍目にも新夫婦と見られるだらうと思つて極りが惡かつた。

幾十の隧道を通越すと、甲州の平野へ出た。重吉は書物を鞄に入れて、衣服を正しながら停車場の石和といふ文字に目を着けた。八犬傳で濱路姫が鷲に掴まれて來た處がたしか石和だつた。丶大和尙の籠つてゐたのが、たしか石和の何とか院だつたと思つて、「此處に古い寺はないかね」と、時子に訊いて、「濱路姫が此處等で鷲に振落されたのだぜ。知つてるだらう。」

「知りませんわ、私」

「それさへ知らんのかい」

汽車は甲府へ着いた。此方を見詰めてゐる時子の弟の顏は、直ぐ重吉の目についた。目鼻立が憎らしく似てゐた。

「町を見ながら一緒に歩いて行かう」と、彼れは小さい信玄袋を提げて、二人並んで歩かうとしたが時子は厭がつた。五六間離れて道の片端を傳ひながら、淋しい通りを選つて歩いて自分の家へ近づくと、潛るやうにして駈込んだ。重吉は前に立つて、家の造りや店の樣子を窺つてから入つた。

伯母や矢澤からの注意もあつて、志賀の一家は重吉にあまり煩さい思ひをさせぬやうにつとめた。夕餐を濟ますと、二階の廣い座敷へ案内して氣儘に疲れを休めさすことにした。重吉は寢ころんで、床の間の虎の掛物や甲冑を電燈の光で見てゐた。新しい疊、柔かい敷物は氣持がよかつた。

「確かりした家だね、間數も多いやうだし。こんなに靜かだと四五日寢て行きたいやうな氣がする。食物も非常に味かつた、あの鯛のケンチン蒸しをもつと食べたい」と、時子に云つた。

「ぢや、幾らでも召上れ。あれは姉の家で拵へるんですから」

「竹川とか云つたね、その家は」

重吉は明日其處へ行くのが樂みだつた。この土地の第一の昔から名代の割烹店だと聞いてゐる。そして小野瀨を始め青山の伯母でも、志賀の身内にそんな家があるのを氣にして、云紛らさうとしたり、昔堅氣で、決して藝者を宿めないと言譯などしてゐたが、重吉にはそれが何でもなかつた。却つて有難かつた。

「おれは今夜一人で其處へ遊びに行きたいね」

「今姉さんに電話を掛けたのよ、私姉さんに會ひたくはないんだけど」

時子は階下へ下りたり上つたりした。父は「奧樣少し馴れたかね」と、笑談らしく訊く位だつたが、母は小蔭へ呼んでは、生活の事や主人の

樣子が訊きたがつた。「老人の下女は使ひにくいものだよ。浮かりすると此方が使ひ立てられるから氣をつけなくちやならんよ」とか、「お客樣が來てから、慌ててお菓子を買ひに行くやうぢやいけない。不斷用意しとかなければ」とか、何とか云つて聞かせたかつたが、時子はそれを煩さがつた。矢澤の細君の教へる事は古新聞の始末まで一々心に留めて、その通りにせねばならぬと思つてゐたが、母の注意は身に染みて聞からとはしなかつた。そして朋輩の消息のみ知りたがつた。

翌日、重吉は袴羽織を着けて、父に連れられて三四軒親戚を廻つた。花婿樣として出入りにジロ〳〵見られたり、緣側の隙間から覗かれたりするのが却つて面白かつた。自分が異つた人間になつたやうで、見てゐる人々よりも自分で自分が珍らしかつた。此方を憚つてあまりに手輕にするのが飽足らなかつた。いつそ初めから本式に婿入姿をして紋付の着物に白足袋を穿いて、出迎への行列でもつくらせ、町の者の目を惹くやうにしたらば興があつたかも知れぬと思はれた。

「この先の大東と云ふのは家内の一番の兄で、漢方醫です。七十以上で目も惡いし、耳も遠いんですが一寸顏出しだけしませう」と、父は細い道を入つた。

其處では普請をしてゐて、大工が鋸の音をさせてゐた。鉋屑の上を踏んで離れて行くと、黒い焙烙頭巾を被り、茶色の羽織を着た老人が緣側に蹲んでゐたが、目を顰めながらそれと氣付くと、口を窄めて「ヤア」と度外れの聲を出して、「さあ上つたり〳〵」と座敷に迎へた。壁に添うた藥箱には「陳皮」「人蔘」「大黄」などの張紙がしてあつた。

「これはへえ、どうも」と、老人は簡單な挨拶を終ると、青筋の浮いた萎びた手に煙管を持つて、「普請を始めたものぢやで、私も氣骨が折れてならんわい」

「しかし後が氣持がいゝから結構です」と、父が云つた。

「いや〳〵氣樂も何もござわせんで。雨が洩りや普請もせざあならん。大工を頼みや時々は一本つけてやつたり、茶請けも出してやらにや、それ、仕事が捗取らんと云ふ譯ぢや。何時まで彼處に住めるこつたか分らんでも、こんな面倒な思ひをすると思へば、この世は苦娑婆ぢや。死ねば極樂、生きとる中は苦娑婆ぢやて」と、皺だらけの顏に薄氣味惡い笑ひを浮べて、「金があれば、泥棒の用心をせざあならん。地所や田地を持つても、何だのかだのと稅ばかり取立てられるのだ。お上からの預り物で、自分のものだか何だか分りやせんで、結局無いのが氣樂だらうかい。お前さんも娘があるんでいろんな苦勞をしなさる。片付けるまでも一苦勞ぢやが、片付けてからも中々安心は出來まいて。それぢやから、私は苦娑婆だと思ふだよ」

「しかし、その代り先になつて樂みもあるでせう」

「うん。それもさうかの。私も定めが生きとりや、今時分婿選びで一苦勞してるだらうて」と、老人は身體を乘出して、重吉の顏を見詰めて、「貴方はお幾つにおなりだ」と訊いた。

「三十三。さうでしたね」と、父が代つて答へた。

「ふん、三十三」と、老人は呟いて、それきり何も云はなかつた。

二人は暇乞ひして外へ出た。「妙な爺さんでせう。何時もあんなお談義をするのが癖になつてるんです。詰らん事から娘に目を突潰されたのですよ」と、父は云つた。

「さうですか」重吉は立入つてその譯を訊かうとはしなかつた。

竹川は三階建の大きな料理屋だつた。名士の書畫がその家の歴史を想像させた。寂そりしてゐて奥の廣い部屋にぢつとしてゐると、寺にでもゐるやうだつた。狭い庭には牡丹が鮮かに浮出てゐた。重吉は此室に小休みして後、父に誘はれて、酒折の宮や信玄の城跡を見に行つた。そして暮近くなつて再び其處へ歸つたが、疲勞は顔にも現はれてゐた。姉は父の側へ來て、その夜の披露會の打合せなどしてゐたが、やがて、

「お風呂の沸くまでお休みなすつたらいゝでせう」と、重吉に云つた。

「あゝ、それがいゝ。私も疲れたから一寸横にならう」と、父も云つた。

で、女中に寝床を延べさせて、二人は枕を並べて横になつた。父は枕につくと、直ぐに高い鼾を搔いて眠入つた。が、重吉には容易に眠られなかつた。仰向けになつて天井を見てゐた。信玄の城跡よりもその遺物を説明した薄汚いヨボ〱の老人や、苦沙婆を說いた大東老人の顔が思出されてゐた。日影は窓から消えてしまつた。と、間もなく、姉が縁側に輕く足音させて入つて來て、浴衣を出しながら、湯殿の方を指差して教へた。そして、「今、お時ちやんも來ましたよ」と云つた。

重吉は浴衣に着替へて、湯殿の方へ廊下を傳つてゐると、白粉を濃くつけた時子が、氣怠さうな顔付をして階子段の下に立つて、姉婿と話をしてゐた。姉婿は料理屋の主人らしくなく、實直な顔立で四十あまりの男だつた。重吉はその人に輕く會釋して、瀟洒した湯殿へ入つた。

出て來た時分には最早、電氣がついてゐる。座敷では父は半ば身を起して、手紙を手から垂れてゐる姉と、ひそ〱囁いてゐる。元の寢床の上に坐つて見るともなく見ると、父の枕許に落ちてゐる封筒の裏には青山の伯母の名が書いてあつた。手紙と二人の顔付、重吉は何か意味ありさうに思つた。

「どうでした」と云ひながら父は起上つて、素早く浴衣に着替へて湯殿へ行つた。

「重吉さん、貴方お時ちやんお厭なの」と、ふと姉の滑かな聲がした。

「重吉さん」といふ言葉は、重吉は自分でも忘れてゐる位久しく聞かなかつた珍らしい言葉だつた。そして、さう呼ばれたのが、何となく快かつた。微笑しながら返事をしないでゐると、「可愛がつてお上げなさい」と、姉は重ねて云つた。片手を疊に突いて、身體を斜にしてゐる。

「えゝ」重吉は伯母から何か云つて來たんだと察した。

「貴方、隨分遊ぶんですつてね。あんまり浮氣しちやいけませんよ」

「中々浮氣も出來ませんよ。……しかしこんな稼業は面白いでせうね」と、重吉は自分の事から話を外さうとした。

「面白いものですか。私の性分に合はないんですもの」と、姉もその商賣の話をするのを好まなかつた。「で東京で暮せれば仕合せですわね」

「いや、僕はこんな廣々とした静かな處でゴロゴロしてたいと思ひます」

「ぢや、何日でも此家へお泊んなさいな。この通りガラ空きなんですよ。さうすれば私、明日の晩お時ちやんをダシに芝居を觀に行かうと思ふの。……いゝでせう。此處の父が八釜敷くて一人ではとても出して呉れないから」

「えゝ。だけど、僕は明日歸りませう。お時ちやんだけは置いといてもいゝけれど」

「そんな事があるものですか。一人々々歸るな

んて―」

父が風呂から歸つたので、話はそれで切れて、姉は廊下へ出て行つた。

披露會の席へは七八人の親戚が集つたが、かの大東老人は眼が惡いと云つて顏を見せなかつた。青山の伯母の注意とかで、藝者が「鶴龜」と「老松」とを踊つた。重吉はあまり口を利かないで、只差される盃を受けてゐたが、次第に結婚の晩と同じやうに氣が鬱いで來た。母に添うて坐つた時子の横顏が味氣なく目に迫つて來た。

で、苦しいほどに醉つた彼れは、座を外して、階下へ下りて、羽織袴のまゝで、以前の部屋に寢倒れた。酒で興奮させられて、何かしら物足らなくて堪らなかつた。いつそ、今宵一夜はこの部屋で獨り靜かに夜を明かしたかつたが、其處へ時子が目の緣を紅くして、苦しさうに息を吐いてやつて來た。

「今夜は此處へ泊るんですつて。私厭だけれど―」

「おれは此處の方がいゝよ。何ならお前だけ歸つて、おれ一人此處へ寢かして來れるといゝんだが、さうはならんだらうね。これで何だね、お前と一生同じ部屋に寢なくつちやならんと思ふと、一生は長いものだね」

重吉は顏で笑ひながら、聲では歎息した。が、時子は何とも感ぜぬらしい。

「私、長生したくはないわ」と、首伏せになつて、額を叩いて、「お祝ひだからついだつていいつて、無理に三杯も飮まされたの……あゝ苦しい」

女中は土瓶を持つて來て、重吉の枕許に置いた。時子はにじり寄つてコツプへ水をうつして飮んだ。そして、よろ〱しながら雨戸を開けて冷い風に觸れた。廊下から電燈の光が小庭へ流れてゐた。石燈籠や植込みが夢のやうに見えて、植込みの奧は恐ろしさうに暗かつた。やがてふと、廊下の片隅に、姉が横向きで何か見てゐるのが目についた。で、若しも姉が振返つて此方を見たらばと、見られるのが厭さに、慌てて雨戸を引寄せたが、その手荒い音に、姉は遠くから振返つて、目を顰めて薄暗い此方を見た。目付が何となしに怖かつた。

「姉さんはどうしたんでせう」と、時子は呟いて、重吉の側に坐つて、「何かしら私に云つちや、プリ〱怒つてるのよ。そんなに急いで歩いちやいけないだの、坐り方が惡いだのと、私を見さへすりや、何か譯の分らない小言を云ふのよ。あんな人ぢやなかつたのに」と云ひながら、如何にも不思議でならなかつた。「今も二階を下りかけると、耳元で、大勢の前へ出てる時はあんな風をするのぢやない、お前さんは本當に氣が利かない、姉さんは知らんよ〱と、早口で云つて、トン〱先へ下りちやつたが何故あんなだらう？」

「さあ」と、重吉は目で笑ひながら、「しかし、つまりは姉さんの方がお前よりや仕合せだよ。これまでは苦勞して來たらうが、此處の主人は穩かないゝ人らしいし、財産も非常にあるさうだから。それに舅もあゝヨボ〱してちや、先は長くはないだらうしね」

「だけど、私、姉さんを幸福な人とは思はれないわ」

「も少したつたら、姉さんを羨ましがるやうにならあ」

「何故？……私、決して姉を羨ましいなんて思ひません―」時子はきつぱり言放つた。

この賑い料理屋には、三味線の音一つ聞えずして、夜は更けた。

翌朝、志賀の家へ歸る途中で、その午後の汽車で出立することに、重吉は獨りで極めた。志

賀の家族や親戚は右左から口を酸くして引留めようとしたが、何の甲斐もなかつた。この土地に心残りのしてゐる時子はせめて今二三日の逗留をと念じてゐたが、望みも仇になりさうたのだ。

「もう一日泊つちやいけないの。私、お友達に貸してるものを取つて來たいんだけど」と思ひあまつて口に出した。親しい友達に會つて、異つた東京暮しの模樣を訊かれもし、話しもしたかつたのだ。

「ぢや、お前一人で、もう二三日御厄介になるさ」と、重吉はむしろそれを望んだが、父はその目顔を見て、

「時もそんな我儘を云つちやいけない。御主人の御都合があるのに」と、叱るやうに云つて、「我儘を云つたら御遠慮なく引ぱたいて下さい」と笑つた。

母は時子を蔭へ呼んで、「外の時とは異ふから、今度は一緒に歸らなくつちやいけないよ」と注意した。そして、菓子や壽司や、竹川から取寄せたケンチン蒸やを、折に詰め出した。そこへ姉が見送りがてら訪ねて來た。

「一度東京へお遊びに入らつしやい」と、重吉はお愛想を云つた。

「それ所ぢやない。此處へだつて滅多に來られやしない」と、姉は誰れに云ふともなく云つて、「ぢや、今夜も芝居へ行く當てが外れちやつた」と零した。

次第に時が迫るので、母は僅かな間でも、二人の娘の傍を離れぬやうにした。座中の人々はそれ〱異つた思ひをしながら、皆な用簞笥の上の置時計の針に目を注いだ。机の上には兩蓋の古風な銀側時計があつた。盛裝した時子の胸には金鎖が燦いてゐた。

「守屋さんは時計をお持ちぢやないのですな」と、父は重吉の帶のあたりを見て、「時計も持つてゐる必要はありませんね」

「えゝ」

「家の老父さんは金時計を幾つも持つてるの。貸金の抵當に預かつてて、そのまゝになつたのがあるんでせう。取換へ引換へ出しては側へ置いて、御飯が食べたくなると、それをギイ〱巻き出すの。まだ早過ぎると思つて、打ちやつとくと、さあ御機嫌が惡くて怖い目をしてブツブツ云つて外へ出て行くの。年を取ると、あんなに御飯が待遠しいものかね」と姉は云つた。

「この頃はあんまり長唄もやらんかね」と、父が訊いた。

「いゝえ些とも、もう食べる一方」

重吉は前夜竹川で見た坊主頭の灰汁抜けのした老人を思出した。

「もうそろ〱出掛けませう」と、父が最先に立つた。時子はふと胸を騒がせて、用もないのに、アタフタ二階へ上つて、自分の居間を見廻して來た。母の目は涙ぐんでゐた。

停車場まで見送つた姉は、「これが私の志だから」と、紙包をそつと時子に手渡して、「身體を大事におしよ。私にも時々手紙を送つてお呉れ」と、しみ〲と云つた。

「えゝ」と、時子は首垂れて、ハンケチを目に押當てて、「姉さんもお手紙をね」

人目がなければ、二人は手に手を取りかはして、思ふさま泣きたいやうな氣がした。そして姉は、汽車の窓から半身を現はした新夫婦の若い着飾つた姿の消え去るまで、プラットホームに悄然と立つてゐた。

九

甲府から持つて來た入籍屆を故郷へ送らうとして、重吉は幾たびか躊躇した。青山の伯母も田舍からの手紙で心配して、樣子を見がてら訪ねて來て、「籍はどうたさいました」と、話次

手に思出したやうに何氣なく訊いた。

「今日あたり返ります」と、重吉は答へて伯母の歸つた後で、届書を開けて見ると彼方の入籍届には、苦娑婆を說いた大東老人が證人になつてゐる。ちやんと印を捺してゐる。

「おれの方では誰れが證人になるんかしらん」と、それらしき人を想像しながら、時子を呼んでそれを見せた。「お前は得心してるんかい。お前の自由も失はれてしまふんだぜ」

「自由つてどんな自由？」時子は届書を手に取つて、注意して見た。

「國家の法律で、お前の一生が縛られるやうなものだ。後悔してない中によく考へて見なさい」

「だつて、もう仕方がないわ」

で、時子は封筒に收めた其届書を、ポストへ入れに行きながら、何となく氣迷ひがされた。證人つきの入籍に心丈夫ではあれど、今まで知らなかつた怖い淋しい手頼りない思ひもされた。「結婚濟んだ」との伯母の電報を、甲府で聞いた時には、囁聲ぎのしながらも浮々して、怖い淋しい中にも、華かな思ひが湧立つたが、今はその華かな色は見えなかつた。そして針箱の前に戻つてからも、縫掛けた切れを持つたまゝ庭の方を見ながら暫らくぼんやりしてゐた。

庭には乾いた土の上に、椿の花が一つ落ちてゐる。落ちたのは盛入の一番綺麗なのだつた。山吹も笹の葉のあたりに花を散らせて、葉のみ左右に繁つて、細い枝に支へられて重さうに垂れてゐる。鮮かな光は青葉に映つてゆらめいた。羽搦の白い蝶はその葉影を掠めて、垣根の外へ飛んで行つた。

重吉も庭の方を見入つてゐた。五月も最早十日過ぎてゐる。梅雨から土用、それから秋となり冬となり、今年も飽氣なく過ぎてしまふのが見え透くやうに思はれた。月日の徒らに過ぎて行くのがまざ〳〵と見え透いた。そして、自分の老い行く姿が影のやうに心を横切つた。

何處か靜かな處へ行つて來ようと、彼れは何時ものやうに着流しで、ふと外へ出た。

重吉の出て行つた後で、時子も外懷かしくて、久振りで家を出た。風呂へ行くか、買物に行くかだけで、此頃一日も遊びに出たことはなかつたのである。

甲府行の手紙を度々入れたポストの側を曲つて、人の視線を避けるやうに俯目勝で刻み足で歩いた。その廣い道を通り拔けたら何處まで行けるだらうと、道の盡きるまで極めたかつたが、一人であまり遠く行くのも氣遣はれた。自動車が通り、騎兵が通り、埃が額に吹きかゝつた。

時子はふと右手に小さい寺らしい門を見つけた。先日髮結ひの中に、近所に「お釋迦様」があつて、參詣人が多いと云つてゐたがこの寺がそれかも知れぬと、つい入つて見たくなつた。向うに幽かにきらめく佛前の燈火を見ながら、敷石を踏んで入ると、お百度石が危げに立つてゐるのが目についた。斜に渡したトタン屋根では五六人の女が數取を手にして行き戻りつお百度を踏んでゐる。その中の一人は二十歳前後の若い女だつた。垢染みて薄白の褪せたメリンスの帯を締め、裸足で土を踏んでゐる。思ひなしか色の黒い肥つた顏にも愁ひの雲がかゝつてゐる。

時子は暫らくその人達の目まぐるしい足取を見てゐたが、次第に自分の心も暗い悲しい空氣に染んだ。そして奧深き佛壇の燈火は神々しく尊げに見えた。で、時子はお賽錢を投げて禮拜した。ふと思ひついたやうに、夫の身體の健かになるやう、自分に對して愛情の増すやうにと祈つた。其處の人達の中に混つてお百度も踏みたくなつた。

その夜十二時過ぎても、夫は歸らなかつた。

時子は老婢の安らかな寢息を聞きながら、電ランプの側に坐つて待つてゐた。日記のある限り書留めた。前の方を開けて讀んで見ると、同じやうなことばかり書いてある。その同じやうな文句を心に積重ねてゐると、何時か涙が頬を傳つた。

「もう日記なんかつけない。つけたつて仕方がない」と、日記帳を机の抽に叩付けた。

十

「如何です」と、矢澤の細君は何時ものやうに訊いた。

「お時ちやんですか」と、重吉はわざと田舍の姉の口吻を眞似て、「この頃は老婢と仲がよくなつて、二人で茶の間で何かしら、よく話してゐますよ」

「へえ。それは結構ですわ……お馴れになつたんでせう？」

「どうですか。……しかし調子が多少變りましたね。甘つたれた風がなくなつたし、言葉付にも厭味が取れたし……」

「だから、次第によくなるんですよ。甲府へ入らつしやる前は、私達隨分氣を揉みましたよ。貴方が詰らなさ さうな顏をしていらつしやるんだもの」

「今だつて詰つた譯ぢやありませんがね」重吉は甘味も厭味も取れた時子は、今の所自分に障りにもならねば、快い刺戟にもならぬやうな氣がした。で、「僕の所は夫婦別ありなんです、支那人もいゝ事を教へて呉れた」と笑つた。

「別々の部屋にお休みになるんですか」と、細君は老婢からそつと聞いたことを思出した。

「さうでもありませんさ。だけど、どうも他所の娘を預つてるやうな氣がしますね」

「今にお子さんが出來たら違ひますよ」

細君は最早以前のやうに、乘出して時子の事を聞きたがりもしなくなつた。矢澤も最早忠告めいたことを云はなくなつて、重吉に知らせなかつた結婚前の内情などを昔話として、心安く話した。「おとくさんが先約があつて、あんな風になつた時分に、その埋合せに製麻會社の娘を見つけたんだがね。先方で君の身持を調べて、頭から斷つて來たんだ。さう云ふ譯だつたから、君も大抵な所で、我慢したらいゝと思つて、あんなに勸めたんだよ」と、重吉のよく知らない製麻會社重役の娘のことをも話した。その娘は一寸綺麗だがいやに鼻が大きかつたさうだ。

「身持がいゝの惡いのと云つて、僕はこれ迄傳で云ふやうな放蕩者ぢやなかつたんだ。なれたかつたんだ。女に現をぬかしたこともないし、第一眞に面白いと思つたことはないんだから。だけど結婚後のこの頃からやう〳〵放蕩の味が多少分つたやうな氣がする。そりや放蕩をするかしないか知らんが、心持が放蕩者になつちやつた」から云つた重吉の調子にも困れた心があらはれてゐた。

「男といふものは隨分勝手ですねえ」と、細君はその量見を解しかねた。

「しかしお時ちやんももう僕を離れられんでせうね。をかしなものだ。煙草臭くつたつて男の息はいゝんでせうね」

この夫婦が仲人になつてからは、以前とは異つて重吉もその前で剝出しにいろ〳〵の事を話すやうになつた。時子を裸體で解剖臺に載せるのに躊躇しなかつた。

「仲人といふものは割の惡い役かと思つてたら、案外面白いものですね。他人の弱點がよく分つて」と、重吉は折々云つた。

時子は「淑女の美德」を遠ざけて、或夜わざわざ神樂坂へ行つて買つて來た「女ばかりの衞生」

を內證で讀出した。今迄些しも知らなかつたいろ／＼の事をそれから教へられた。

「お前も蒼い顏をしてるね」と、或日重吉が云つた。

「えゝ。私何だか痩せたやうですわ」と、時子はさして痩せてもゐない自分の細い手を見て強ひてさう思ひながら、「お隣の下女はよく肥つてゐるわねえ。私羨ましい！」

「だから、運動したり養生して丈夫になるさ。お前の一生はこれからだから。先になつてまたいゝ事があるかも知れないのに、今から弱つちや可哀想だよ」

「私を可哀想だと思つて」時子はそんな言葉に饑ゑてゐた。

「あゝ。そりや可哀想は可哀想だね。だけど、今更お前を處女として家へ送歸すことも出來んからね、こんな破目になつちやつたんだから、お前も仕方がないさ」

「仕方がなかないわ。私、貴方の妻ですわねえ」

時子は念を押すやうに云つた。重吉はその妻、罪のない嘘をつつと見詰めたが、それを「わが妻」の嘘とするのが不思議なやうだつた。で、答へもしなかつた。

話はそれきり切れてしまつた。

時子は夫の外へ出た闇々に、「お釋迦樣」へお詣りするのを樂みにしてゐた。お百度は踏みかねたが、屢々腕をまくつて、タハシで石佛を洗つたりした。そして折々は門外の茶店から駄菓子を買つて來て、おやつにそれを夫の前に出した。

重吉の氣付かぬ間に、「奧樣のお釋迦詣で」が近所の噂となつた。

幽寂の境に觸れた時

數年前獨りで十和田湖畔へ旅行したことがあつた。青森から秋田の方へ廻つてゐた途中ふと思ひついたので、地理をよく調べもせず、驛夫に大略の道順を訊いただけで足を向けたのであつたが、この驛夫が十和田湖の事はよく知つてゐなかつたことがあとで分つた。大館から秋田鐵道に乘換へて毛馬內で下車すれば、あとは自動車か車で湖水の上の發荷峠まで樂に行けるものを、私は大館から小坂鐵道で小坂の鑛山地まで行つた。其處で一泊して、その翌日案內者を雇つて五里の山道を湖水へ向つたが、五月一日であつたのに、その年は雪の多かつた年で、山上には積雪が二三尺もあつて、道が分らなかつた。役にも立たない冒險をすることを後悔しながら、後へ引返す譯にも行かなくなつて、日暮頃までかかつてやう／＼湖畔の茶店へ着いた。そこの圍爐裏で溫まつてから、小舟に乘つて宿屋まで行つたが、その小舟の上でこそ私は、珍らしく「幽寂の境に觸れた」のであつた。

かういふ光景を空想して、昔の詩人は、地獄を離れ淨罪の島へ渡る水路を唄つたのであらうが、詩を缺いてゐる私は、その時の氣持を十分に文字に現はすことが出來ない。山上の湖水と宵月と自分とが融和して一つになつたやうな氣持もした。幽寂の境に徹した時には、歌も句も出るものぢやないやうにも思はれる。

（「文壇照明」の「幽寂の境に觸れた時」より）

毒

（一）

「――明日午後晴雨に關らず、是非お訪ね申すべく候につき、御在宅なさるやう願上候」と云ふ、湯原からの手紙を見ると、香取元一は眉を顰めた。靜かな沼の水に小石一つ投込まれたやうな氣がした。

　春の末頃からの憂鬱症が、夏になつて激しくなつてゐたので、彼れは暫らく懇意な人との往來も絕ち、行馴れた處へも足踏みせず、能ふ限り人を避けて、自分の部屋を修道院のやうにして、心を落着けようとしてゐたが、この手紙一つでそれが最早破れさうに見えた。其處の明るい障子に醜い人影、煩さい世の影が差したやうに思はれた。

　が、その人を避ける譯には行かなかつた。で、「お待ち申してゐます」と、折返して返事を認めたが、ふと思付いて「私の部屋は取散らしてゐますから、近所の××軒へお出で下さい。正午過ぎに行つてお待ち申してゐます」と、書直した。

　彼れはせめて自分の部屋だけは今暫らく濁したくなかつた。蜘蛛の巢や鼠の糞で汚されようとも、繁吹に窓を濡されようとも構はないが、人臭い息で汚したくはなかつた。

　深夜に目醒めると、幾多の鼠が壁を攀ぢ障子を動かし、鋭い聲を立ててゐる。彼れは見えぬ鼠の姿を暗闇の中に描きながら、見えぬ知人の姿を心に浮べる。荒寺に逃籠つた弱武者が經て來た事を思出すやうに思出して見る。と、枕近くキ、ッと鳴聲立てて駈けて來る鼠の足音に驚かされるやうに、深く知合つてゐた或男や或女の不氣味な素振や言葉が、突如に其處へ生々と現はれて心を驚かすこともあつた。

　今その人達は何處に寢て、どんな夢を見てゐるだらう。何を企んでゐるだらう？

　彼れは身に染みる夜の淋しさ不氣味さに慄いて、明るい光に包まれた人の笑顏が慕はしかつたが、さて誰れに會ひたいと云ふ當てはなかつた。分隔てなく交つて、可成りの執着をも持つてゐた男や女も、この頃の夜の思出には、只色の褪せた興のない單調な姿となつて現はれて、何故あんなに執着してゐたのかと怪まれるやうになつてゐた。そして、そんな人達に接してゐたため、自分の目も鼻も皮膚も、疲らされ荒らされて、心の艶を失ふやうになつたのだと思はれた。

　彼れは今までの生活の忌はしくもあり、堪へがたくもなると共に、僅かな報酬のために忙しかつた職業をも不意に止めてしまつた。自分のものとして親から授けられた少しの財產は略々使ひつくしてはゐるものの、半年や一年は遊んでゐても餓死をしさうではない。で、それ一つを手賴りなき世の手賴りとして、心も身體も休ませて、再び新しい力の湧いて來るのを待つてゐた。

　折々は新しい書物をも讀んだ。子供の時分溫かい緣側で夢心で物語を讀耽つてゐたやうに、朝日の流れ込む疊の上で、珍らしい書物を開いて見た。散步するにも、人通りの少ない靜かな町を選んだ。屢々程近い郊外へ出て、木蔭に憩うたり、大根畠や田の畦を矢鱈に歩いたりして、都會の中の人と人との關係をつとめて

頭から拭去らうとすることもあつた。

　日を重ねるにつれて、彼れは佗しさの餘りに、竊かに下町の雜沓場へも出て行つた。芝居や寄席をも覗いて見た。しかし、咎人でもあるやうに、知人には近づかず、その目を避けるやうにしてゐた。下女とも浮世噺一つするではなく、家の中は何時も寂としてゐた。

　彼れは或夜ふとこんなことを思つた。これで二年も三年も何處へも出勤せず、知人の家へも顏出ししないでゐたならば、これまでの香取元一に對する世の人の好惡の念は自ら薄らいで、自分の名さへも忘られるかも知れない。忘られた自分は新に生れた人となつて、二十幾年の間付纏はれてゐた香取と云ふ名に累はされないで、自由自在の心のまゝの生活が出來るかも知れない。願へつきたいやうに懷かしい新しい世界が其處に現はれて來るかも知れぬ。

　さう思ふと、先祖代々の香取と云ふ名が堪へがたい程憎くなつた。この名を包んださまざまの記憶が忌はしくなつた。

　たとひ人間に符牒が必要であつても、一つの名を名乘り通して、窮屈な思ひをしなくてもよい。祖父や父の忌はしい所行や、自分自身の愚かな陳腐な所行を聯想させるやうな香取と云ふ名を棄てて、新しい名をつけて見たい。

　彼れは晴々しい顏立の女の紅い唇から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。晴々しい顏立をした男の口から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。

　TとかSとかの褪せた唇から出る「香取さん」と云ふ聲は、最早血を湧立たす力を失つてゐる。

　だが、湯原の手紙は稍々薄らぎかけた過去を意地惡く呼起させた。その見苦しい失策や、淺間しい行爲や、多くの知人には知られぬことまでも、湯原の頭には鮮かに刻まれてゐる。脇の下の痣でも腰の腫物の痕でも、彼れの目には殘つてゐる。

　で、香取はその手紙を見ながら、自分が古い衣服を脱ぎ棄てようとする場合の一番の強い邪魔物は、彼れ湯原であるやうに思つた。たとひ、自分が聖人君子に豹變しようとも、天一坊に早變りしようとも、昔の汚れ衣を突付けて、化の皮を剝がうとするのは、彼れ湯原であると思はれた。どんなに異つた裝ひを凝らしても、彼れは一目で自分を見現はすことが出來る。

「元一君、あの時はかうだつたねえ」と、彼れが鈍い聲で何氣なく云ふことも、嚇されるやうに聞えて、身が縮こまることもあつた。

　腹の中に惡意のない、むしろお人よしと云つていゝ男だと思ひながら、香取の目には自分の心を曇らすもののやうに見えた。で、久しくその家へは近づかないでゐたのだが、どんな用事があつて、わざわざ訪ねて來るのだらう？　暫らく誰れからも浮世噺を聞かされず、自分の口も啞のやうに堅く噤まれてゐたものを。隱れ家の扉は湯原の手で開かれたくはなかつた。

（二）

　香取は翌日久振りで、××軒の階子段を上つた。

　其處の二階は午後の濁つた日光を眞向に受けて、眩しいほど明るかつた。疊の上に置かれた低いテーブルの白布には處々黄ろい斑點があつた。

　彼れは乾いた口を一杯の苦い珈琲で濕して、そのテーブルに頰杖ついて、湯原を待つ間の退屈醒ましに、持つて來た書物を開いた。左程心を惹かれるでもなく、只白い滑かな紙に浮上つた鮮明な文字を、目先に辷らせてゐるのに過ぎ

なかつたが、ふと、あるページに目が留まつた。心を籠めて同じ處を讀返した。そして、文字の間の人影を濃く心に浮べようとした。

その人はヴェニスの貴婦人だつた。類稀なる美人だつた。或時自分の身を古の名高い女神の彫像のやうに、美しい甲冑で裝ひ、その姿をある名畫工に描かせた。若い美しい盛りに、かうして永久に自分の姿を世に留めて置いて、花の色の褪せるに先んじて、人の目から身を隱してしまつた。一度にてもその面影に接した者に、些しの衰へた樣をも見せたくはなかつた。で、いよ〳〵今日を最後と自分で定めた日には、華美を極めた離別の宴を張つて、扮裝を凝らして其處へ現はれ、その翌日から、二三の召使ひを連れて、壁を廻らした庭園の中の靜かな家に蟄居した。そして、幾年も絶えて人に會ふことなく、只一人で靜かに一生を終るのを待つてゐた。家の内にはどの部屋にも鏡を置くことを許さない。で、次第に自分で自分の顏をさへ忘れるやうになつた。親兄弟でも友人でも一歩も此處の門を潜ることを許されない。

世の人にはこの貴婦人は昔の物語の美女のやうに思はれ出した。朽葉の散つた濕つた狹い道に立つて階上を見上げると、左右の窓は皆鎖され扉は釘付けにされてゐる。只一つ婢僕の通ふ路のみ殘されて、其處から生きた死人への食物が運ばれてゐる。——

香取は永久に美しく生きんとする人間の可憐しい望みを思つた。永久に世の人に讃美されたい強い慾望を其處に見た。その貴婦人は鎖されたる窓の中で、何を思ひ何を描いて、最終の日を待つてゐるだらう。幽かに洩れて來る戸外の馬車の音や人の騷ぎを聞いて、何を感じてゐるだらう。隙間洩る温かい光を見ても、庭の木の間に囀る雀の聲を聞いても、些しも心を動かさないでゐられるだらうか。籠の中に蓄へられて日數を經てゐる林檎が、昔の艷の失せて、日に〳〵萎びても、自ら悲まぬやうに、窓の中の女も次第に衰へる自分を、平氣で見てゐられるだらうか。

"Prisoner of Time" 書物の上の濃い黒い文字が、強く彼れの目に映つた。何處かで見たことのある鎌を手にした西洋の神の姿が、ぼんやり思出された。その貴婦人の窓の側には、時の神が鎌を磨澄して待つてゐる。……彼れは心の中でそんな繪をつくつてゐたが、やがて、書物を閉ぢて、目を上げて煙草を吸ひ出した。壁に掛つてゐる卑しい裸體の寫眞版——おのれの醜い姿を露出しにして恥づる氣もない女の繪を見るともなく見てゐたが、すると、ふと、自分の目で見たある實在の女の姿が記憶から浮出た。その繪の女やあの物語の女とは色合が違つて、生々しく實感を動かすやうに浮んだ。

それは盲目の女だつた。

ある名高い會社の重役の一人娘で、脊丈がすらりとして、色が白くて目鼻立が鮮かで、多人數の中へ出ては際立つて目に付く女だつた。金持の娘らしく贅澤に育つてゐたが、學課の出來榮も人並勝れたほどだつた。所が十八の春一夜の中に、二つの目が一度に物を見る力を失つた。父親の惡疾を受けてゐたためだとかで、名醫に診せても何の甲斐もなかつた。

「從姉の縁談を聞いて焦れて〳〵仕樣がないんですつて。焦れ出すと、いゝ着物でも何でも引裂くんですよ」と、それを見て來た人から聞いたことがある。

白く揃つた前齒を袖口に當ててビリ〳〵と噛裂くさうだ。側に仕へてゐる者も、稍々もすれば、端ない女らしくない擧動に愛想を盡かせて、お傷はしいと思ふ心も無くなるさうだ。

が、その娘も心が落着いて機嫌がよくて、

顏に淋しい微笑を浮べることがある。そんな日にはどうかすると新橋へ行つて見たいと云ひ出す。で、自ら進んで髮を結つて入浴して、家中の者に助けられて盛裝して、ダイヤの指環や金鎖を燦かして馬車に乘る。迂回して日本橋から大通を、周圍の物音に耳を留めながら、停車場まで勇ましく驅けつけさせる。そして付添の女に手を引かれながら、待合室へ入つたり、プラットホームに立つてゐたりして、悦しさうに時を過ごすことがある。

　何が樂しいと云つて、その娘にはお粧飾して人中へ出るくらゐ樂しいことはなささうだと云はれてゐる。

　せめては大勢の人に見られたさに、停車場まで出懸けて行く。「色氣づいてるから困るんですよ」と、噂を傳へた女が付足した。

「おや、早く婿を取つてやつたらいゝでせう。金持だから幾らでも候補者があるでせう」と彼れが答へると、

「でも、誰れでもと云ふ譯には行きませんからね」

「盲人にでも男振のよし惡しが分るでせうか」

「さあ、周圍の者の話で感付くでせうね」

「あゝんな美しい盲人は盲人たるが故に、却つて一種の興味がある。……だけど、情が深過ぎて弱るでせうね」

　彼れは座興のやうに何氣なく話した言葉を思出した。そして、今思ふと、その不具の女に對して、眞面目に心を寄せられさうな氣分になるのを覺えた。世の人の思出にのみ美しい影を殘して、戸鎖された窓の中に生きながらの木乃伊となつてゐる貴婦人の冷たい頰よりも、人臭い息と埃と油煙の間に、自分の醜い眼を曝してゐる女の燃ゆるやうな温かい唇の方が慕はしくなつた。

　で、彼れはその盲目の女を今一度見たいやうな氣がした。

（三）

　食事時を外れてゐるので、客の出入はなかつた。家の中は寂としてゐる。雀が窓近く來て頻りに囀つたり、羽音を立てたりしてゐたが、それが不斷のやうに單調な煩しい聲ではなくて、靜まりかける彼れの空想を搖動かした。一羽は影を映して軒先を飛んで行つた。日光は次第に障子の下へ沈んで、黄ばんだ弱い色を映した。

　香取は約束の時の餘程過ぎてゐるのに、待人の來もせねば、違約の通知をも齎さぬのをさして待遠しがりもせず、不平にも思はず、只快く靜かに暮れて行く秋の日を、茫然見てゐた。このまゝで湯原が來なければいゝやうな氣がした。その煩はしい言葉を聞かされなければと思はれた。今少しして日光が窓を離れたら、一人で食事をして此處を出て行かうと決めてゐたが、やがて、階子段に足音がした。穩かな部屋の空氣を搔亂すやうに慌しい音を立てて上つて來た。香取は夢から醒めたやうに心を取直した。

「非常に遲れて濟まなかつた、和泉町で話が面倒になつたから」と、湯原は息をはずませてテーブルの側に胡坐を搔いて、洋服の上衣を脫ぎながら、「急いだから暑い、今年は暑さが長かつたね」と云つて、部屋を見廻し、「君はよく此處へ來るんかね」

　言葉付も慌しかつた。ポッケットから「ゴールデンバット」を出して、爪の延びた指で吸口を撚めて火を點けた。臭い匂ひが青い煙につれてその口から流れ出た。

　香取に一度この煙草の惡毒い刺激に醉つてからは、その臭氣を嗅いでも逆付きさうな氣持になる。で、自ら煙を避けるやうにして後退りし

て、障子を開けた。早稲田の森の方まで鮮かに見渡された。窓の下では少女が麵麭屑を入れた籠を持つて、茫然往來を眺めてゐる。「何か食べますか」と云つて、香取は窓から首を出してその少女を呼んだ。そして湯原が今にも言出しさうな要談の一刻でも、延びるのを望んでゐた。が、湯原は素振の忙しさうなのに似合はず、直ぐには用向きを口にしないで、この頃の世間の出來事を話したり、相手の近狀を訊いたりした。

「僕はこの頃は新聞も讀んでゐないんです、家に居るか、この近所を散歩するか、その外滅多に人にも會ひません。出來れば今年一杯かうして、何もしないで暮したいと思ひます」と、香取は沈んだ聲で云つた。

「君も可成り忙しい思ひをしてゐたのだから、今年中ぐらゐ遊んでてもいゝさ。それだけの餘裕があるのは、僕等に比べて君は仕合せだよ。僕はこれで二十歳の時から自分の腕で飯を食つて來たんだが、三十五の今日まで、只の十日だつて氣儘に遊んでたことはないからねえ。今年はせめて一晩泊りでもいゝから、君達と一緒に紅葉を見に田舎へ行つたらと思ふんだが、それも一寸六ケ敷さうだ」

「池田に住んで大阪の郵便局へ通つてゐた時分には、休暇毎に箕面へ遊びに出掛けた」と、その溪間の紅葉の美しさを話出したが、香取は湯原の顏のあの時分と少しも違はぬことを思つてゐた。初めて下谷の下宿で會つた十年前に比べてもさしたる相違が見えぬやうだ。浮世の塵を浴びて來てゐながら、その濃い眉と黄ばんだ細い眼と脂切つた無神經らしい肥つた頰とは時の腐蝕を受けてゐない。

「君は病氣と云ふものを知らないでせう」

香取はやがて前に置かれた麵麭を裂きながら羨ましさうに相手を見上げて訊いた。

「さうでもないね、これで生身だから」と、湯原は肌の寒さを感じて上衣を着て、「僕もこの頃はどうかすると頭の痛むことがあるんだよ。身體の調子が少し狂つて來たらしい」と、眉を顰めて首を捻つた。

「君でもさうですか、憎いほど頑健に見えるけど」

「まだ弱つちやならんのだが。これから仕事をしようつてんだから」

湯原はさう云つて目を据ゑて、樣子を索るやうに香取の顏を見て、「そこで君に一つ難題を持出すんだがね」と、微笑しながら言難さうに云つた。

香取は目を上げて默つてゐた。二三ケ月世の煩さい關係を離れてゐたのが、その男の一言で無慙にも破れてしまひさうに思はれた。まだ言出さぬ先から、その厚い脣や黄ろく濁つた白目や、臭い煙草の息が、言はるべき用事の內容を前觸れしてゐた。

で、煩さいこと怖いことの自分の身に振掛かるのを待つてゐると、

「外でもないがね、お多代の一件だがね」と、湯原は輕く切出した。「あれを當分君の家に預つて貰へんだらうか。なに、ほんの一寸の間でいゝんだがね……食料ぐらゐ僕の方から出してもいゝ。君の家にも汚れ物が溜つてるだらうから、その始末でもさすつもりで、少しの間置いて呉れないだらうか」

「えゝ」と、香取は生返事した。そして、お多代の色の白い痩せたヒステリーらしい顏を心に浮べた。

「彼女がゐるとどうも家の中が面白くないんだ。どうせ何處かへ片付けようとは思つてるんだが、今直ぐにと云ふ譯にも行かないし、實は僕も困つてるんだよ。和泉町へもその相談を持掛けたんだが、彼家も大人數だから迷惑らしい

んだ。それは强ひて賴めば置いて吳れんこともないけど、何だか氣の毒なやうでね」

「彼家は駄目でせう、家の人數を減らしたい位に思つてるんだから」

香取は俯首いてナイフとフォークを動かしながら、相手の要求の意味を考へてゐた。上野町の湯原の家の中を思出して、そのゴタついてゐる樣を想像してゐた。そして、自分がその混雜の中へ入つて行く由緣はないやうに思はれた。

沈默が暫らく續いた。湯原は肉を含んでは、口と喉とで音を立ててゐたが、やがて、ナイフを置いて大きな息を吐いた。香取は夢から醒めたやうに目を上げて、

「僕は今一人なんですからね、若い者が一人ゐる處へ多代さんを泊めると云ふのも」と言淀んで、「他人に彼此云はれる位構ひもしないけれど……」

「だけど彼れならそんな心配は入らないよ」と、湯原は擽せるやうに云つて、「素性が分つてるんだもの。湯原の妻の從妹を預つてるんだと云へば何でもないぢやないか。それに君一人と云つたつて、下女もゐるんだしね」

「だけど、少し困りますねえ」と、香取は强ひて口元に笑ひを浮べた。

「さうかなあ。外の事とは違つて無理にとも云へないし、僕も外の方法を考へるかね……なに、田舍へ追返せばいゝんだが、それも可哀想だと思つてね」

湯原は最早思止まつたらしかつたが、さうなると香取は多少氣の毒にもなつた。上京の當座世話になつたこともあり、可成り面倒を掛けてゐるのに、その人の折入つての賴みを卒氣なく斥けたのが、氣の毒になつた。で、その埋合せに、「酒を飲みますか」と、機嫌を取るやうに云つた。この男の酒癖の惡いことはよく知つてゐるので、成るべく酒の相手にはならぬやうにしてゐたが、わざ〳〵來たものをこのまゝで歸すのが變だつた。

「あゝ。先つきからさう思つてたんだよ。折角御馳走になるのに酒の氣がないと、どうも物足らない」と、湯原は急に元氣づいて、「ほんの二三杯おしるしだけでいゝ。七時迄に本鄕へ廻らなくちやならんのだから」と、時計を出して見た。

香取は自分で電氣を點けて、新に食物と酒とを命じた。彼れは永らく酒の香ひさへ嗅いだことがなかつた。いろ〳〵の世の快樂に遠ざかつたことが思出された。

「君はあまりやれん方だね、僕はいくら貧乏してもこの味だけは忘れられんよ。銚子が一本此處へ立つてるだけでも、何だか座が陽氣になるぢやないか」

湯原はこんなことを云ひながら、料理には手を付けず、甘さうに飲出した。そして時々思出したやうに時計を見ては、「まだ早い〳〵」と呟いた。銚子が二本空になつた頃、香取の顏も紅くなつた。で、もうこれ切りと、珈琲を云付けたが、湯原は飽足らぬらしく、

「君にばかり奢らせちや濟まないから僕が麥酒を奢らう」と云つて、止められるも肯かず、蟇口から銀貨を出して、それを數へながら、自分で階下へ下りて、麥酒二本の代を拂つて來た。そして、その二本を兩手でぶら下げて、ニタ〳〵笑ひながら元の座に戾つた。

食卓は酒の雫や料理の汁で見苦しく汚れた。空氣は「ゴールデンバット」の臭ひを含んでその邊に漂うた。湯原はその濁つた空氣の中で次第に生々した顏付になつたが、

「しかし、君はどう思ふね。多代は一寸いゝ女ぢやないか」と突如に訊いた。

「えゝ、惡い容色ぢやないでせうね。色は白い

し、細そりしてて妻はいゝし」と、香取は何氣なく云つた。
「何處かいゝ貰ひ手はないものかね」
「そりやあるでせう。……それよりも看護婦にするとか、呉服屋の店員にするとか云つてたのは、もう止めにしたんですか」
「彼女も我儘だから、中々此方の云ふ通りにゃしないよ」
湯原はふと考へ込んだが、やがて、「僕も今度と云ふ今度は弱切つてるんだ。思案に暮れてると云ふ次第だよ」と、さも心配さうに沈んだ聲で云つた。
「何故です？」
香取はその男が家庭のために弱つてゐるのをさして怪みはしないが、酒に醉ひながら、こんな歎息の聲を洩らすのを不思議に思つた。何時もなら直ぐに酒に醉潰されて、見苦しい眞似をし出すのに、今日は心の底に何處か醉はない所があるやうに見えた。
「どうかしたんですか」と、再び訊いた。
それに直ぐには答へないで、湯原はグビ〳〵麥酒を吞んでゐた。香取は氣が詰るやうになつた。
「彼れを君の家へ置いて貰へなけりゃ、當分僕を置いて呉れないかね」
「君なら構ひませんが、何故です？」
「この頃家を逃出したくてならんのだよ。男が家を逃出すなんて、少し不見識な話だが、止むを得ずんばさうでもしなければ、僕も安心して夜の目も眠れないんだからね。人間として自分の家で寢てゐながら、夜中警戒してゐるのぢや憐れなものだよ」と、湯原は歎息して、「然し可笑しなものだ」と、獨合點をして首肯いた。
「多代さんがその原因なんですか」香取の心にもぼんやりその家の様が浮んだ。
「まあ一度來て見たまへ、僕の妻も晝間は鼻唄なんか唄つて、シャン〳〵働いてるが、夜になると氣が變になつて、隅つこへ行つては蹲んでメソ〳〵泣出すんだよ。先日も夜中にランプを點けてコソ〳〵させてるから、起きて見ると遺書を書いてやがるんだ。……」湯原は話しかけて、ふと厭氣が差して、「まあそんな話は止さうよ」と、口を噤んだ。
香取もさして詳しい事情を聞きたくはなかつた。麥酒も盡きたのを機會に、「もう歸りませうか」と、浮腰になつて促した。
「まあ、も少し僕の對手をして呉れたまへ」
湯原は押付けるやうな手付をして引留めて、また蟇口から銀貨を出して、「まだある〳〵」と云ひながら、ヒョロ〳〵と立上つて、麥酒を取りに階下へ下りた。一本鷲摑みにして上つて來て、香取の側に胡坐を搔いて、コップを押付けた。
「しかし、多代はいゝ女だらう。君はさう思はないか」と、再び同じ事を云つた。が、前よりも言葉に力を入れて目付も底氣味が惡かつた。
「一體赤ん坊の顏は男親に似るものだらうか、君はどう思ふ？」
「さあ。似なけりゃ變でせうね」
「妙なものだね。子供の顏は親に似る……それ所ぢやない、細君の顏が次第に亭主に似て、亭主の顏が次第に細君に似て來ると云ふぢやないか。何時か雜誌で讀んだことがあるよ。人間は何でも傳染力を持つてるんだね」と、鹿爪らしく云つて「二長町の奴なんか皆な沒分曉漢だが、君は僕の味方だらう」と、香取の手を握締めた。二人とも手の平が溫かかつた。香取は立上つて、帽子を被らせて追立てるやうにした。
湯原は追立てられながら、外へ出て、江戸川まで來たが、香取の手を離すと、わざと地べたに蹲んで動かなかつた。「今夜は君の家に泊るよ。置いてけ堀にするのは殘酷だよ」と哀れさ

うに云ふ。

「ぢや、僕が連れてつて上げよう」と、香取は弱り果てて俥を呼んだ。自分も俥に乘つて隨いて行くことにした。

「君の家へでも何處へでもいゝ處へ連れてつて呉れ。今夜はおれの家へは歸らないぞ。君とは古い友達だ」

湯原は俥の上で首垂れて叫んだ。

（四）

醉漢を乘せた車夫は曳難さうにして、振返り振返りのろく駈出した。香取は俥の上で腕組して、紅い顏を冷い風に吹かせてゐた。湯原の云つた言葉を止切れ〳〵に思出しながら、その後を追つてゐると、行先の家がどんなに變つてゐるかと思はれて、不氣味な中に多少の面白さを覺えた。

「何處へおれを連れて行く？」と、醉漢は折々首を上げて叫んだ。

切通を下つて上野町近くなつた時分、香取の醉ひは醒めて、薄着の肌は寒くなつた。泥溝に沿うた湯原の家は軒燈が消えて、雨戸も鎖されてゐた。入口の柳の木の側に俥を卸させて、格子戸を開けると、内から女の足音がして、玄關の障子が細く開いて、ぼんやり白い顏が現はれた。そして怪しさうに薄暗い此方を見詰めた。

「湯原さんが醉拂つたから連れて歸りました」と云つて、閾に倒れてゐる湯原を抱くやうにして玄關へ引摺り上げた。

茶の間からランプの光が流れ出て、立つてゐるお多代の顏を横から照らした。さして窶れてはゐなかつた。後れ毛が白い頰に垂れてゐる。酒臭い息に顏を顰めて、湯原を茶の間へ連れて行かうとした。

「僕は此處で失禮します」と、香取は一寸會釋して歸りかけたが、今まで默つてゐた湯原に俄かに呼留められて、暫らく迷つた。こんな處にゐては、厭なものを見せつけられさうな氣がしたが、それでも最少し踏留まつてゐたくもあつた。で、帽子を被つたまゝ茶の間へ入つて、長火鉢の側で煙草に火を點けた。部屋の中は以前のやうに取亂されてはゐなくて、拭掃除も行屆いてゐる。ランプのほやも綺麗に磨かれて光は明るかつた。

「酒を出せ〳〵」と、湯原は起上つて、付元氣で叫んだ。が、反響はなかつた。お多代はお茶を入れて二人の側に置いて、靜かに次の間へ入つて襖を締めた。

香取は耳を澄してゐたが、次の間には微かに衣摩れの音のするばかりで、外に物音はしなかつた。

「奧樣は……」小聲で訊くと、

「居るだらう」と、湯原も小聲で冷淡さうに答へたが、その聲は泥醉漢の聲ではなかつた。周圍に氣を兼ねてゐるやうだつた。

二人は暫らく默つてゐた。香取は歸るべき機會を失つて、帽子を脫いで、茶箪笥の後の狹苦しい處に坐つた。罅痕の入つた黃ろい壁には、死遅れた弱々しい蚊が幾つも、光を慕つて匐つてゐる。

「久振りで奧樣に會つて行きませう？」と、思切つて云つた。

「あゝ、會つてやりたまへ」と、湯原は答へたが、次の間へ知らせようとはしなかつた。

香取は立上りかけたが、その襖を無斷で開けるのが躊躇された。聲を掛けるのも變だつた。で、「何をしてるんです、寢てるんですか」と、小聲で訊いた。

「どうだか」と、湯原は眉を動かして、壁の方へ向つて、酒臭い息を強く吹出した。

襖一重隔てて怖いものでも住んでゐるさうに

思はれた。香取は自分達の潜々聲をも陰氣に感じた。

ふと次の間でも聲がした。お多代が何とか答へてゐたが、やがて襖が少し開いて、平額の女が首を傾げて覗いて、「まあ元一さん」と薄笑ひをした。そして、おづ／＼茶の間へ入つて來て、閾近く坐つた。落着かぬ目は頻りに目叩きしてゐる。髪はちやんと丸髷に結つて、衣服も見苦くはない。以前よりは小綺麗にしてゐる。

「暫らく御無沙汰しました」と、香取は堅くなつて挨拶した。

「ほんとに暫らくでしたわね。私、是非一度貴下にお目に掛りたかつたのですよ」と、細君は懐かしさうに云つて、早くも眼に涙を浮べた。

「近日中伺つて、國技館の菊見にでもお伴しませう。何時だつたか團子坂へ行つたことがありましたねえ」

「さうでしたねえ。だけど、私もう菊見なんかに行かれはしませんよ。何處かへ奉公にでも出ようかと思つてますの。私なぞ無教育で、何一つ藝は出來ないんですけど、ほんの口過ぎさへ出來ればいゝんですから。……その事で元一さんにも相談したいと思つたのですよ、何處か私のやうな者にでも勤まる處はありませんでせうか？」

「さうですねえ」

香取は答へ樣もなくて微笑してゐた。細君の顔は磨立てられてはゐたが、見てゐる中に次第に鬱陶しくなつた。

「一生のお願ひだから、心當りがあつたら訊いて見て下さいましな。私一人餓死しなければいゝんですの。私もあの時刺繍でも覺えとけばよかつたんですけど、今となつちや後悔してるんですけど、あの時は家の世話をして呉れる者がなくつて、そんな譯に行かなかつたんですからねえ」と、細君はさも心細さうに云つた。

「何故そんな氣になつたんです」香取は眞面目に訊くべき折ではないと思ひながら、打切棒に訊いた。

「でも、私が居ると邪魔になるんですから」

言葉は弱々しかつたが、目は角立つて、飼面の多い額中に神經が通つた。そして、両手で自分の胸を抱き締める樣にした。

「何を云ふんだ、馬鹿！」湯原は聲に力を入れながら低く叫んだ。「誰れが邪魔にしたと云ふんだ？」と眉を顰めて云つて、香取の方へ向いて、「何と云ふ量見だか、この頃懇意な者さへ見れば、今君に云つたやうなことばかり云つてやがるんだよ」と、情なささうに云つた。

香取は相手の顔を見ないやうに首垂れた。細君は口を閉ぢたが、やがて足音を盗んで次の間へ入つて襖を締めた。

「あんな女ぢやなかつたが」と、湯原は溜息吐いて、「しかしこれまで随分貧乏な思ひばかりさせたのだから、僕も成るべく手荒なことはしないんだがね。……君も昔からの知合ひだから、菊見にでも芝居見にでも連れ出して少し保養させてやつて呉れたまへ。若しも馬鹿な眞似でもされた日にや、當人ばかりぢやない僕まで迷惑するからねえ」

「さうですね」

香取は湯原の氣遣つてゐる「馬鹿な眞似」を思出して、不意に可笑しくなつた……

夫婦がまだ公然の結婚をしないで、神田の玩具屋の二階を借りて、人目を忍んでゐた時、細君は姙娠してゐながら、とても添遂げる望みはなささうだと思つて、取逆上せて、剃刀を喉に當てたことがあつた。「なに、あれは狂言だよ」と、和泉町の湯原の義兄が後で笑つてゐたが、その時の香取の目にはさうとは見えなかつたので、側でハラ／＼してゐた。で、

「昔から細君にはそんな傾向があつたんですね」と、それを云出した。湯原はそんな昔を思出したくはなくて、碌にその話に乘つて來なかつたが、でも微笑を浮べて、
「今夜は折角君が來て吳れたのだから愉快に話したいものだね」と、急に調子を和げた。そして、次の間へ入つて、二人に向つて、宥めるやうに何か云つてゐたが、やがて、和服に着替へて、手を執るやうにして細君を連れて來た。
「これから元一君に時々遊びに來て貰ふやうにしたらいゝだらう」と、子供を賺すやうに云つて、明るい長火鉢の側に坐らせて、「何かないかい、お菓子でも」と訊いた。
細君は身輕に立つて、茶簞笥を捜して、銹びたブリキの鑵の中から鹽煎餅を抓み出して、菓子皿へ移してゐたが、その間にお多代は「お湯へ」と、一寸膝をついて、斷つて、臺所の方から出て行つた。その下駄の音が門の外へ消えると、湯原は心が輕くなつたやうに賑かに口を利き出した。細君に汲んで來させたコップの水を一息に飲干して、快く大きな息を吹いた。
「今日は香取君の方へ廻つて御馳走になつたのだが、彼方の方は靜かだから歩いてても氣分が清々するよ。彼方へ移りたいもんだね。狹くてもいゝから、庭のある瀟洒した家へ住みたいよ。そして僕も植木いぢりでもして、呑氣にやつて見たいな」と誰れに云ふともなく云つた。細君は燈火に顏を背けて何とも答へなかつた。
「どうせ二人切りだから、下女も手傳ひも入らないのだし、部屋借りをした時の思ひをすりや、どんな狹い家だつていゝんだからね。全體この家だつて、今の僕にや少し分に過ぎるんだ」
湯原はそれとなくお多代を只の邪魔者扱ひして、夫婦切りの閑靜な住ひを望むやうな口振りを裝うた。
「香取君の近所へ越して、お互ひにまた繁々往來するやうになるのもいゝね。お互ひに氣心を知合つてるから、自然話が合ふからね」と、相槌を打つて貰ひたさうに二人の顏を見た。
「だけど、あんな場末ぢや不便で仕方がありませんよ。奧様は僕の居る邊へ來たことはないでせう、一度遊びに入らつしやい」
香取は二人の間を取做すやうに、何とか氣の利いたことを云はうと思つたが、こんな場合に相應しい言葉が見付からなかつた。
すると、その中細君は臺所の障子を開けて身を隱して、暫らくしても出て來なくなつた。
「おい」と、やがて湯原は聲を掛けた。振返つて耳を澄まして、二三度續け樣に呼んでも手答へがない。「何をしてやがるんだ」と、呟きながら、彼れはランプを持つて臺所を覗いた。
香取も隨いて行つて肩越しに見た。細君は竈の側に蹲んでゐる。そして燈火が顏を射すと、いすつと立上つて、目をショボ／＼させて、奧の間へ入つた。其處には針差の側に緋縮緬の切れなどが周圍に不似合な華美な色をして、ゴチャゴチャ置かれてゐるのがちらと見えた。
湯原は襖を締めて元の座へ歸つて、「どうしたんだか、この頃は矢鱈に着物を拵へたがるんだよ。戶外へは些とも出もしない癖にさ」と苦笑して、「これまで年中粗末な服裝をさせてても苦情は云はなかつたのだから、その埋合せだと思つて僕も無理な工面をして拵へてやることはあるんだが……」
細君はわざとあんな眞似をしてゐるんぢやないかと、香取はふと疑つた。そして、神田の剃刀騷ぎなどを再び思出して、
「君も子供があつたらよかつたんですねえ」と、暫らくして云つた。あの時の腹の兒は生れると直ぐに死んだのである。
「うゝん」と、湯原は冷淡に答へて口を噤んだ。

其處へ、お多代は濡手拭で包んだ石鹸箱を持つて歸つて來た。磨かれた白い額は二人の目の前を掠めた。
「此處へ來て少しお話しなさい」と、香取は聲を掛けた。
「えゝ」と、お多代は躊躇してゐたが、湯原も側から口を添へたので、其處に坐つて、茶を入替へたり、火鉢に炭を繼いだりした。
女と云ふ女には久しく近寄らなかつた香取の目の前に、白い手が動いたり油臭い髪の匂ひがした。すると、我れから忌みて避けるやうにしてゐた以前の女までも連想された。
そして、湯原の祕密がまざ／＼と其處に浮上つたやうな氣がして、何喰はぬ澄ました顏が小憎らしくなつた。「お多代はいゝ女だらう」と、醉拂つて云つた言葉が、今その閉ぢた唇で一層力強く語られてゐるやうに思はれた。
で、心を留めて見てゐると、次第に豫て知つてゐるお多代と同じ人とは思はれぬほどに見直された。短い眉も尖つた鼻も元のまゝだが、何故だか、その顏に魅力があるやうに感ぜられた。細君のよりは見劣りする艶のない衣服を着て、銀杏返しも崩れかけてはゐたが、世帶窶れの影はなくて、淋しい顏立の中に生々した光があつた。潤みのある黒瞳は相手次第でどんな誘惑に富んだ表情をもしさうだつた。
で、香取は湯原を側に置いてこの女を見てゐるのが苦しくなつた。その誘惑に富んだ表情を想像すると、神經が顫へるやうだつた。
何氣なく世間話をしながら、前に並んでゐた二人の祕密の道筋を心當てに描いてゐると、お多代の姿はます／＼彼れを焦躁すやうになつた。そして、どんな目鼻立の揃つた美しい女を此處へ連れて來たつて、それよりもお多代の方へ心が惹かれさうな氣がした。
此家の祕密をも細かに知りたくなつた。
で、香取は何氣ない態で、
「貴女はずつと東京にゐるつもりなんですか」と、訊くと、
「いゝえ」とお多代はきつぱり云つて、「故郷から何とか返事がまゐります筈ですから」
「ぢや、歸ることに極つたんですか。何時だつたか、和泉町の叔母さんに會つたら、どうかして東京で暮らさすんだとか云つてましたが、それも駄目になつたんですか？」
「どうですか。私なぞ東京のやうな處では何も勤まりませんわ」と、お多代の目は光つた。と、
「なに、駄目になつたつて譯ぢやないさ」と、湯原は傍から慌てゝ打消して、「まあいゝ／＼」と、その話を堰き止めるやうにした。そして、
「今日醉つた紛れに何か君に云つたかも知れんが、あれはあの場きりのことにしといて呉れたまへ。僕も少し考へ直さうと思ふから。いづれ今度の日曜あたりゆつくり君に會つて話をしよう」と香取に向つて云つた。
もう歸つて呉れよと云はぬばかりの口振だつた。
で、香取は急に歸り支度した。もつと此家の內情に踏込んで訊きたがりながら、飽氣なく立上つて、「僕も久振りで此方へ出て來ると、あんな淋しい處へ歸りたくなくなりますね」と、戲談らしく云つた。
「さうかねえ。夜具があると泊つたつていゝんだが」
「もう永らく他所の家へは寢ませんよ」
「自分の家で氣樂に寢られゝば、それ程結構なことはないさ」
二人は立ちながらこんなことを云つてゐたが、ふと、細君が襖の側に寄つて首を傾げて此方に氣をつけてゐるのが、隙間から見えた。香取は變な氣持になつて、「奥樣にもよろしく」と云つて、素早く戶外へ出た。

が、このまゝ直ぐ歸る氣にはなれなかつた。まだ宵の口で、左右の狹い町は賑かだつた。彼れは何方の道を取らうかと、門の前で目を迷はせたが、やがて、眞向ひの床屋の明るくて小綺麗なのに氣付くと其處へ入つた。

椅子に凭れて鏡に映る自身の顏を見ると、澁い髯が伸びて薄汚かつたが、頰の色は稍々元氣づいてゐた。虐げられた體力が次第に回復して、若い命の芽をまた吹いてゐるやうにも見えた。

眠くなりさうな快い氣持で髯を剃られながら、側の客の話を聞くともなく聞いてゐると、頻りに町内の噂がされてゐた。酒吞みの筆頭は誰れだとか、女道樂の大關は誰れだとか、町内の美しい女や財産家をも數へ上げて、一々批評を加へてゐた。古着屋の裏の二階家にはこの頃小意氣な女が移つて來たが、どう見てもお妾だ、薬屋横町の突當りの空屋も借人が出來たと見えて貸家札が剝がれたと、手に取るやうに町内の模樣が威勢のいゝ聲で語られてゐた。

その樣子だと、直ぐ側の湯原の家の噂も出はしないかと、香取は待設けてゐたが、遂に一口も出なかつた。が、「古着屋の裏の二階家」は湯原の臺所から直ぐ前に見上げられるので、彼れの心にもその狹い二階の樣が想像されて、話を聞いてゐても面白かつた。

床屋を出ると、湯原の家の前を横目で見ながら通抜けて、廣小路の方へ出た。平生何の氣なしに散歩する時とは異つて、今夜は周圍の人通りや物音が妙に心を動搖させた。陰氣な細君の顏や、誘惑に富んだお多代の顏や、祕密に苦んでゐた湯原の平凡な顏が、頭の中に蟠つてゐて、只見て通る緣のない人の顏をも濁した。あの茶の間の重苦しい空氣に暫らく浸つてゐたためか、最早淡然として其處等の物を見ることが出來なくなつた。

で、彼れは所在なく江戸川行の電車に乘つて、空家のやうな自分の家へ歸つたが、茶の間では小さいランプの心を細めて、下女が居眠をしてゐた。

「誰れも來なかつたかい」と、滅多に訊かないことを訊いた。

下女は其珍らしい聲に驚いた樣にキョト〳〵して、「いゝえ何方も」と答へた。

香取は自分でマッチを擦つて暗い座敷に入つたが、すると、今まで荒廻つてゐた鼠が何處へか逃込んで聲を收めた。早稻田座の打出しの太鼓の音が、何時もよりは際立つて響いて來た。

近所の家はもう寢靜まつてゐるらしい。彼れは机の前に端坐して暫らく煙草を吸ひながら、側に散らかつてゐた書物や着物の元の儘に散らかつてゐるのを見た。

「何故上野町まで隨いて行つたらう。當分あんな家へ近寄りたくはなかつたのに、」

彼れはついした興に乘つて、あの家の閾を跨いだことを悔いた。そして、もう當分は又と出掛けまい、江戸の昔噺の好きな爺さんや婆さんのゐる和泉町の家や、その外の懇意な家へ行つても、湯原の家へは矢張遠ざかつて居ようと思つた。

が、雨戸一つ隔てた外の廣い闇の世界に、あの三人の顏のみが鮮かに浮出て見えて、消さうとしても消し難くなつた。同じ屋根の下に三人が夜を過してゐるのが不思議にもなつた。互ひにどんな夢を見てゐるのだらう？

彼れはその不安な夢の中に引込まれながら、昔話に聞いた苅萱道心の發心の由緣を思出した。假寢をしてゐる妻と愛妾の髮が蛇になつて障子に影を映しながら鬪つたさうだが……

さう思ふと、軒を並べた幾萬の人家が、寂と

して聲も立てずに、安らかに眠つてゐるのが不思議になつた。

耳を澄ますと、遠くでは犬が吠えてゐるばかり、直ぐ障子の側では、庭の樅の葉が囁くやうにサラ〳〵音を立てゝゐる。

彼れは身に染みる淋しさに堪へられなくなつて、懇意だつた二三の男と女とへ珍らしく手紙を書いた。謙遜した文句で、相手の愛情を乞ふやうなことを書いて見た。そしてその中の誰れからでも、自分を思つて呉れる情に燃えた返事の貰へるやうにと望んだ。

（五）

その翌日は平生より遲く目を醒ました。縁側に差込んでゐる冴えた朝日は、彼れの心の底へ染込んで、その寢醒めを快くした。

起きると、暫らく狹い荒れた庭を彼方此方歩くのが、この頃の習慣になつてゐるので、この朝も無心で庭へ下立つて、光を浴びたが、ふと氣付くと、見馴れぬ白つぽい痩せた小犬が目の前に足を伸して日向ぼつこしてゐる。近づいても身動きしないで、懷つこい細い目で此方を見た。

「何處の犬だい、この犬は」と、下女を顧みて訊いた。

「何處の犬ですか、今朝牛乳屋に隨いて來ましたんです。饑じさうで可哀想だから、御飯をやると、悅しさうにしてよく食べましたんですよ」と、下女は縁側へ出て來て、「白々」と舌たるい聲で呼んだ。

「食物なんか遣ると、出て行かなくなるぜ。外へ出してしまへ」

かう命ぜられて、下女は木戸を開けて、勦り勦り追出さうとしたが、小犬は何時かその裾を潛り拔けては、庭の方へ舞戻つた。

香取はその樣を見ながら朝餐を食べてゐたが、食事が濟むと、「ぢや、おれが外へ連出してやらう」と云つて、小犬を誘つて、木戸から出て行つた。小犬は鼻を蠢かし尾を振つて、後になり先になり、さも新に主人を得たのを喜んでゐるやうだつた。

長い垣根を傳つて表通へ出ると、易者の黃ろい看板と、白塗の小さい板に書いたかみゆひの文字が先づ目に付く。香取の頭の曇り加減で、その二つの看板が佗しさうにも、手頼りたささうにも見えることがあつたが、今日はそれが澄んだ空氣の中に懷かしく色取られた。格子から顏を出した男の顏も晴々しかつた。

淋しい夜を塗つた後で、こんな氣持にたれたのが、香取は涙ぐまれるほど悅しくてならない。で、一度は厭がつてゐた和泉町の戸田の家でも、今日は自分を喜んで迎へて呉れさうに思はれたので、直ぐその方へ足を向けた。神樂坂下から、小犬を見返りもしないで電車に乘つた。

和泉橋を渡つて、林檎や柿や秋の果物の並んだ大きな店の側を曲つて、横へ外れると三味線の音が洩れてゐた。切髮の品のいゝ戸田の婆さんが、孫に長唄を敎へてゐるんだと直ぐ氣付いた。格子戸の前に立つと、今客を送出した細君が、「まあ、お珍らしい」と微笑を湛へた。

「上野町へも些とも入らつしやらないつて、何時だつたか、湯原さんが云つてましたよ。どうなすつたんです」

「昨夕彼家へ行きました」

「さう、どんな風でした彼家は？……今日お多代さんが此處へ來る筈ですよ」

その言葉が意味ありげに、香取の耳に響いたが、「さうですか」と何氣なく答へて、奥へ通つた。

湯原の家とは異つて、座敷の裝飾も行屆いて、床の間には白い花瓶に黃白の菊が咲亂れて、掛物の墨繪の前に鮮明な色を浮かせた。張立ての

障子には明るい日が差してゐた。

香取はその光を自分の家よりも冴えてゐるやうに思つた。細君が茶を入れて來る間、中二階の隱居部屋の三味線に耳を傾けてゐると、「うたふ小唄の聲高輪に」と云ふ所を頻りに繰返してゐる。

「大分六ケ敷いものを習ふやうになつたんですね」と、細君を見て云ふと、

「この頃は自分もお稽古が樂みになつたんでせう」と、細君も一寸耳を聳てたが、さして興味もないらしく、其方へは話を持つて行かないで、「貴下は此頃何處へもお勤めにならないんですか」と訊いた。

香取はそれに答へるのが厭だつたが、仕方なしに、「えゝ。私には勤まりさうな仕事が見つからんですから」

「そんな事はありますまいよ。……では、お家で勉强していらつしやるの」

「えゝ」

「貴方はまだお若いんだから、御出世なさるのもこれからですわねえ」

「えゝ」

細君とのこんな話は、香取には少しも面白くなかつた。せめて、隱居が稽古を終つてこの座に加はつて呉れゝばと望んだが、彼方では「チャンチャン」と、合の手が長く續いて、何時果てさうでもない。で、暫らくして、

「多代さんは何しに來るんです」と、香取はふと氣を變へて訊いた。

「一寸面倒な事があるんですの。あの女にも困つてしまふ……」細君は調子に乘つて云ひかけたが、「このまゝで內所で濟ませたいと、私達は思つてるんですがね。どうなりますか」と言葉を濁した。

「そんな大問題があるんですかね」香取は些しも譯を知らぬもののやうに裝つた。

「それも成るべくなら、私一人でそつと始末を付けたいと思つてるんですが、今日あの女が來て何と云ひますか」

細君は湯原の家の事を言出しかけては隱すやうにしてゐたが、その一言々々が次第に香取の胸を曇らせた。昨夕上野町の茶の間にゐた時と同じやうな氣持になつた。そして、お多代が周圍の醜い意地の惡い人間に、汚されて苦められてゐるやうにのみ思はれ出した。この細君だつて口先で情深さうなことを云ふばかりで、その實薄情な人なんだから、どんな間違つた差出口をするかも知れはしない。

すると、どうかして自分の手で助けてやりたくて堪らなくなつた。お多代の胸に收めてゐる心配を打明けさせて力になつてやりたい。一日も湯原のやうな男の側へは、置くに忍びない。

で、香取は竊かにその方法を考込んで、細君が何を話しかけても、空々しい返事ばかりしてゐた。三味線の音までも陰氣になつて來た。

と、やがて玄關に女の聲がして、細君は立つて行つた。座敷へ連れて來るのかと、香取は心構へしてゐたが、お多代は茶の間へ連れて行かれたやうだつた。

で、香取は一人座敷で所在なげに煙草を吹かしながら、次第に單調になつて煩さく聞え出した中二階の稽古三味線の音と、止切れ〳〵に漏れて來る茶の間の話聲とを聞くともなく聞いてゐた。すると、兩方からの物音が、今朝から珍らしく徹透るやうに冴えてゐた心を、次第に濁してしまつた。あの婆さんが興に乘つて樂しさうに彈出す音や、爺さんが微醉ひの上機嫌で話出す夢のやうな昔話は、彼れの耳に快い催眠歌となつて響くので、知人の中でもこの和泉町の老人ばかりは、死んだ祖父や祖母を思出させるほどに懷かしかつたが、今日は和泉町の空氣も不純な波動で亂れてゐるやうだつた。

香取の傷つけられた神經は、永い間茫然して平氣ではゐられなかつた。そして、お多代が此家へ來た用事と云ふのが、さまざまの幻想の種となつて、三味線の音に妨げられて聞取れない茶の間の消々聲が、針のやうに胸に觸れた。上野町で見た顏と、「私のやうな者は東京では何も勤まりません」と、寂しさうに云つた言葉とが、目と耳とに粘付いてゐるやうに思出されて、邪氣のない田舍の女が希望を抱いて來たものを、酷たらしく苦めて傷けて歸すのが、痛々しかつた。自分に關係のない他所事とは思はれなくなつた。

で、今此家の細君がどんな智慧を付けてゐるのか、憐れなる女の運がそれで極まるやうに氣遣はれて、焦躁かしがつてゐたが、暫らくして消々話は止んで、細君は「貴女も此方へ入らつしやい」と云つて座敷の方へ來た。お多代も後から隨いて來た。

「退屈だつたでせう、一人ぽつちで」と、細君は笑顏をして、障子を開放した。

「私はもうお暇します」と、香取は接穗なく云つて、今にも立上りさうな風をした。

「どうしたんです、稀に入らしつたのに」細君は不審さうに顏を見上げた。

「今日一寸行かなくつちやならん家があるんです」と、香取は言濁したが、直ぐに立上りもしなかつた。

「久振りでせいせい御馳走しようと思つてるのですけれど」と、細君は笑ひながら戯談らしく云つて、斜にお多代の方を見て、「これで香取さんも、一時は面白いことがあつたんですよ、隨分お惚氣を聞かされたの」と、蓮葉な聲で云つた。

が、お多代は口元を一寸綻ばせたばかりだつた。香取は詰らぬ事を仰山さうに喋舌られるのを恐れてゐた。細君は相手が興がらうとも厭がらうとも關はない自分許り面白さうに、話を進めようとして、

「何とか云ひましたね、あの女は」と、香取の方へ首を向けて、「湯原さんのお話だと、大變別嬪だつたさうですね。私、一度その人の寫眞でも見たいと思つて、幾度もお賴みしたのに、どうしても見せて下さらないんですね」

「私の家には女の寫眞なんか一枚もありませんよ」と、香取は卒氣なく答へて、細君が湯原から聞いた事に、尾に尾をつけて喋舌り出さぬ先にと、お多代に向つて、「貴女はずつと家へ歸るんですか」と訊いた。

「えゝ、直ぐ歸りますわ」

「僕も上野の方へ行くんです」香取はせめて歸りに道連れになつてでも、女の今の境遇を訊きたかつた。

「まあ、お婆さんに會つてらつしやい、お珍らしいんだから」

から云つて、細君は頻りに引留めようとしたが、香取は浮腰になつて、お多代が立ちもやらず、庭を見ながら愚圖々々してゐるのを焦躁かしがつてゐた。

「貴女はまだゐるんですか、僕はもう出掛けなくちや」と、何時だか時計の鳴り出すと、つと立上つて緣側へ出て、お多代を促すやうに云つた。

お多代もそれを機會に、「では私も」と、細君に暇を告げたが、直ぐには歸らないで、婆さんに挨拶しに中二階へ行つた。細君は香取を見送つて玄關へ出て、

「貴下は今日上野町へはお寄りなさらない？」と、譯ありげに小さい聲で云つた。

「えゝ、今日は寄らないつもりです」と香取は振返つて、「何故です」と、小さい聲で云つた。

「ではいゝんですがね。お多代さんが今日此處へ來たことを、彼處の奥樣に知らせたくないん

ですの、知らせちや一寸都合が惡いの」
「さうですか……そしてあの女の身の上は何とか極りがついたんですか」
「と云ふ譯でもないんですがね、二三日中に何とかしようと思つてますの。……その中お暇な時に入らつしやい、ゆつくり話して聞かせますから。隨分長い間ゴタ〳〵してたんですよ」と細君は相手の好奇心を惹起すやうに云つた。
「私が暫らく引込んでた間に、いろんな事があつたんですね」と、香取は輕く笑つて戸外へ出た。すると、緣側にお多代の足音がしたやうだつたが、また細君に引留められたのか、容易に出て來なかつた。で、待ちあぐんで、果物店の側までフラ〳〵歩いて、その角に立つて、廣い電車通を見渡してゐた。幾臺もの電車の行過ぎるのを目で追うたり、向ひ側のいろ〳〵の店を無心で見てゐた。と、ふと、直ぐ側の牛屋へ學生らしい若い男が多勢入つて行くのに氣がついた。
　彼れは慌しく帶の中から蟇口を取出して見た。そして、幾らも入つてゐないのに失望した。お多代から話を聞くにしても、出來ることなら、打寛いで甘い物でも食べながらにしたいのに、これでは自分一人快く午餐を食べるだけにも足らない……。
　何時の間になくなつたのかと疑ひながら、彼れは自分が唯一の手頼りとしてゐる財産の、次第に蝕減らされてゐるのに强く氣付いた。やがて、飢潰された果には、再び人の中へ出て何かの懶い仕事をしなければならぬが、自分はそれに堪へられるだらうか……。
　で、彼れは半年先一年先の自分の姿を身窄らしい痛ましいものとして見た。耳に騷々しい町の物音を聞きながら、心では今立つてゐる場所をも忘れたやうに淋しい夢に沈んでゐた。目の前を往來してゐる人々は、只幻のやうに見えて、以前彼れが使はれてゐた主人や同僚の顏や、その頃の仕事場が却つて明かに心に浮上つた。
　と、其處へお多代の姿が現はれた。彼れは胸を躍らせて夢から醒めて、その方へ近づいた。
　此處で待つてゐられたのを意外に思つたらしい顏付して、お多代は「どうもお待たせしました」と、足を留めた。
「近いんだから電車に乘らなくつたつていゝでせう、貴女に訊きたいこともあるし」香取は遠慮氣もなく連立つて歩き出した。そして二三町默つてスタ〳〵歩いてから、足を緩めて、
「湯原君は貴女を私の家へ預つて吳れと云つてゐましたよ」と、何氣なく云つて、女の顏へ目を向けた。
　お多代は眩しさうにして、「さうで御座いますか」と冷かに答へた。
　香取は自分の思つてゐることを、遺憾なく相手の胸に傳へようとしながら、相應しい言葉の見つからないのに苦んだ。で、また暫らく默つて歩いてゐたが、强ひて道伴れにされたのを、女が迷惑がつてゐるらしいのが目についた。そして、此方から口を利かなければ、女は何時までも默つてゐさうだつた。
　香取は氣分を變へようと思つて騷がしい大通から、狹い道へ外れて行つたが、浮かりしてゐると、何も話さない間に上野町まで來てしまひさうだつた。で、突如に、「僕は貴女が困つてるんだらうと思つて、非常に氣の毒に思つてるんですよ」と、打切棒に云つたが、ふと感情が高まつて來て、我知らず言葉を續けた。「戸田の伯母さんだつて親身に貴女の事を心配してる風はないんですよ。あんな人の云ふ通りにしちや貴女のためになりませんよ。湯原君も無責任だし、あの細君も氣が變になつてゐるから、貴女はあの家に永くゐられないんでせうが、今の場

合よく考へて身の振方を極めないと取返しのつかないことになりますよ。田舍から東京へ來た女で男に騙されて、酷い目に會つた者は幾らもあるんだから。僕は、貴女を預ることは湯原に斷つたけれど、しかし貴女の今の境遇をよく聞いた上で、都合によつては、出來るだけの助力はしてもいゝと思ひます。金が入るんなら少し位僕が貸して上げたつていゝんです。兎に角遠慮しないで何もかも僕に打明けて呉れませんか。昨夕上野町へ行つた時から、妙に貴女の事が氣になつて仕方がないです」

から云ひながら、彼れは湯原の肥つた額を憎らしく思出してゐた。お多代は稍々呆氣に取られて、直ぐには返事をしなかつた。疑ひ深い目付をして男の方をそつと見てゐたが、やがて、

「私どうなつてもよろしいんですの」と、簡單に答へて、その話に立入りたくなかつた。が、香取は最早打棄てては置けなくて、相手の心にい、い、こびりつくやうな氣になつてゐたので、

「あの伯母さんは貴女にどうしろと云つたんです?」と力を入れて訊いた。

「當分お屋敷へ御奉公に出るやうにと云ふんですけど……私、最少し考へて見ようと思つてますの」

「お屋敷つて何です」

「彼家のお婆さんが昔御奉公してた家ですつて」とお多代は答へたが、直ぐにそれを嘲るやうに、

「どんな家ですか」と言足した。

「其家なら昔阿波守樣とか云つて、老中か何かしてた家でせう。お婆さんが時々其時分の話をしてゐましたよ。今でも年に一二度は御機嫌伺に行くんでせう。貴女ももつと早くなら、そんな家へ奉公するのがよかつたかも知れないけど……」

香取はお多代の口から、湯原との關係を訊きたがつても、流石に露出しにそれを訊くのは憚られた。で、自分が女に信用されて、女の方から打明けて訴へられるやうな機會を空想しながら「どうせ貴女は湯原の家を出て行くんでせうが、その前に一度僕に會つて呉れませんか。僕の家へ來てもいゝし、何處か外で會つてもいいです。僕の家へ來ると云へば、湯原君だつて何とも云やしないんだから」

「えゝ、一度お伺ひ致しませう。お差支へがなければ」と、お多代は輕く答へたが、やがて懷つこい調子で「貴下は當分上野町へは入らつしやらない方がよう御座いますよ」

「何故です」と、香取は訝つたが、女の言ひかねたやうに默つてゐるのを見て、獨りで呑込んで「僕もあの家へは行きたかないんです。昨夕は仕方なしに行つたのだけど、もう行く必要はありませんよ」と、調子づいて云つた。

徒士町の踏切を越すと、最早道は盡きかゝつて、上野町の通は目の前に見えた。香取は一步一步其處に近づくのを惜んで、何氣なく別れる前に何か印象の强い事を云はうと思ひながら、その角まで來た。お多代は立留まつて、

「何方へ入らつしやるんです?」と、別れを告げようとした。香取は一足近づいて、

「公園の方から廻つて歸りませんか、天氣はいいし、もつと步いたつていゝでせう」と、押迫るやうに云つた。

「でも、遲くなると、從姉が心配しますから」と、お多代は丁寧に挨拶して、躊躇せずに行過ぎた。振返りもせず傍見もしないでスタ〳〵步いた。

香取はその姿が消えるまで見送りながら、並んで步いてゐる間に、チラ〳〵目に觸れた目付や口元を一つ〳〵鮮かに思浮べたが、それが、湯原に汚されてゐるかと思ふと、思ふだに堪へがたかつた。自分の肉身の者が惡漢の手にかゝ

つてゐるやうな氣もして、一刻も平氣で見てゐられないやうになつた。そして、今から直ぐに何喰はぬ顏で湯原の家へ遊びに行つて最一度樣子を見たくなつて、その門の前まで行つたが、「當分來るな」と云つたお多代の言葉を思出すと、入る譯にも行かなかつた。

で、暫らく溝渠の橋の上に立つてゐた。昨夕床屋で噂のあつた古着屋の裏の二階には、障子を取拂つて、派手な褞袍や夜具が冴えた日に曝されてゐる。湯原の家の格子戸の前には幾つもの古い足駄や下駄が干されて、其處にも日は流れてゐる。共同水道栓からは水が流れ出て、石崖へ滴つてゐたが、その周圍には人影はなかつた。黑く濁つた溝渠には脂が斑に浮いて、日に蒸されて厭な臭ひを放つてゐた。

廣小路の方の屋上の時計の、最早正午近くなつてゐるのを見ると、香取は急に腹の空つたのに氣付いたので、直ぐ電車の方へ歩いたが、このまゝ家へ歸る氣にはなれなかつた。何となくこの近所を立去りかねた。で、つい近くの洋食兼業のミルクホールへ入つて、牛乳と西洋菓子と、堅いカツレツをも食べた。そして腹が膨れると、差當つて爲すべきことも決せられぬので、知らず〳〵公園の方へ足を向けて、展覽會場前のベンチに身を扱掛けた。櫻の葉末は赤らんで、靜かな風に散つてゐるのもあつた。彼れは花の散る頃、ある友人と此處へ來た時に、ふと一緒に話をしながら歩くのに堪へられなくなつて、わざと友人に別れて、一人谷中の墓地の方へ行つたことがあつたのを思出して、軈て木枯に吹散らされさうな木の葉を眺めながら、過去つた月日を指を折つて數へた。

そして、彼自身、あの頃から長い夜を通つて來たのに氣付いて、思はず心が騷いだ。一歩々々世の人を離れて、自分の描いた幻影に取圍まれて住んでゐたことが、無意味になつた。澄んだ空と穩かな光。このベンチに腰掛けて、誰れかが自分の耳元で柔かな懷かしい言葉を囁いて呉れたらばと思つた。と、直ぐお多代の姿が目に浮んで、心がそれにのみ注がれ出した。

暫らく目を瞑つて苦い取留めのない思ひに沈んでゐたが、ふと側に人の來た氣色がしたので目を開けると、皮膚の黃ばんだ老人が擦れ〳〵に腰を掛けて、怠さうに息を吐いてゐる。その息は香取の顏に觸れさうだつた。

彼れは休息所を亂されたやうに感じて、つと立上つて、池の方へ歩いた。

（六）

歸るともなく家へ歸つたのは、最早軒燈の點く頃だつた。

机の上には昨夕出した手紙の返事が二つ來てゐた。彼れは燈火も點けず夕暮の薄明で讀んだが、只何でもない事が書いてあるばかりで、別に心を惹くやうな文字はなかつた。で、それを反古籠へ投込んで、緣側に出て四邊の夕暮の騷ぎを聞いてゐたが、上野町の今時分の光景が闇の中に見えるやうだつた。

「湯原はあの女をどうするつもりだらう？　お多代は彼家を出てどうするつもりだらう？　今日の約束を守つて、この家へ訪ねて來るだらうか」

それが打棄てられぬ大問題となつて、刻々に彼れの心に迫つて來て、それが極るまでは、靜かに家に落着いてゐられさうでなかつた。で、何處へ行くと云ふ當てもなく、紙入を袂に入れて、夕餐の支度をしてゐる下女の目を忍ぶやうにして、そつと戶外へ辷り出て、思ひを散らすやうに急いで歩いた。

そして賑かな神樂坂の方へ足が向いたが、其

處は緣日らしくて、平生よりも一層雜沓してゐた。

彼れは次第に足を緩めて、夜店などを傍見してゐたが、毘沙門の境內の見世物小屋から、客を呼ぶ皺嗄れた聲が聞えると、何氣なく其處へ近寄つた。

左右に汚れた小屋が向合つてゐる。

左の長い小屋には、鷄のやうな手足を備へた若い女が、さまぐ\の藝をしてゐる繪看板が掛つてゐる。右の小さい小屋には、入口に細長い爺さんが突立つてゐて、幕の內に鐵漿をつけた婆さんが坐つてゐる。そして婆さんの命令に應じて、幕の影から幼い細い聲が洩れて來た。

「一生れましたは下谷竹町三十番地。お手々が四つであんよが四つ……」

「これは新聞にも出ました因果な子供で御座います。今暫らくの壽命ですから、息のある間に御覽を願ひます」と、爺さんが後から付足した。

「これは麴町二丁目鷄屋の娘、親の因果が子に報い……」と、左の方でも木戶番が平氣な顏して叫んでゐる。濃い白粉と濃い臙脂で色取つた女の顏のみが幕の中に見えた。

香取は顏を背けて逃げるやうに其處を出て、濠端へ下りた。靄に包まれた遠い燈火を見詰めて、生溫い夜風に吹かれながら、今朝からのことを考へ出して、

「お多代だつて自分とは何の緣もない人間だ。昨日までは其處等を通つてゐる女と同じやうに、一度も心に掛けたことのない女だ。そんな女のために自分の大切な心を少しでも苦めるのは愚なことだ。どんな境遇に陷らうとも、自分の目で見さへしなければ、會ひさへしなければ、何とも思はなくて事が濟んで行くのだ。また暫らく彼方へ近づきさへしなければそれでいゝのだ」と、自分で自分に言聞せて、何となく心の輕くなるのを覺えた。

そして、濠端に添うて步いてゐたが、一日中諸方を彷徨いてゐたので、足は疲れて身體も懶かつた。何處か氣持のいゝ部屋で快く夕餐を食べて、今朝からの無駄な思ひを消して、快い眠を得たかつた。で、引返して坂を上りながら、左右の飮食店に目を留めてゐたが、やがて雜沓の中を縫うて急いでゐる派手な姿を見ると、この頃嘗て感じなかつた女懷かしい心が激しく起つた。四五年前に年上の友人に連れられて、この土地の待合へもよく來たことがあつたので、二三人の藝者の顏は今でも朧氣に記憶に浮べられた。

と、ふと、その一人がお多代に似てゐたやうに思はれ出した。で、彼れはその名を心の奧から搜出しながら、坂を橫に外れて見覺えの待合の方へ足を向けた。

「やまと」と書いた軒燈が矢張元の家に出てゐる。が、彼れはその格子戶を開けるまでに、幾度も躊躇した。「其處へ入つて行つて何をするんだらう。あの女に會つたつてどんな話をするのだらう。云ひたいことも聞きたいこともありやしない」と、戶に手を掛けながらも、入ると極めかねてゐたが、足音を聞きつけたのか、障子を細く開けて女が顏を出して、「何誰？」と聲をかけた。

香取は最う後退りされかねて、すつと入つて行つた、女は燈火に透かして彼れの顏を見てから微笑して、「西野さんのお友達」と、帳場へ向つて小さい聲で云つた。

「この前を通つたから思出して寄つたんだよ」と、香取は言譯をしながら、導かれるまゝに二階の奧の部屋へ上つた。

女中は彼れの仲間が何時も長居はしないで手早く女を呼んで、直きに歸つてゐたことを知つてゐて、茶を入れると、「誰れをお呼びになりま

す？」と訊いた。そして、彼れが西野と一緒に來た時分の馴染の女の名を思出さうとしても思出せぬらしかつた。

「蔦次と云ふ藝者はゐなかつたかね」と、香取は訊いた。

「蔦次さん？　あの妓はもうゐませんです」女中は冷淡に答へた。

ゐないと聞くと、さも待焦れてゐた當てが外れたやうな氣がして、他の女には會ひたくなくなかつたが、このまゝ歸れもしないので、「おや、誰れでも呼んでお出で」と云つて、それから二三品食べたい物を誂へて、「一飯だけ食べて歸つてもいゝんだから、早くして呉れ」

女中が階下へ下りると、香取は横になつて疲れた足を伸した。階下では電話の音がして女を呼んでゐるらしかつたが、彼れは知らぬ女に會つて話をするのが煩はしく思はれ出して、いつそ獨り此處で靜かに眠りたくなつた。で、近所の寄席の物音を聞きながら、ウト〳〵としてゐたが、やがて驚いて醜い夢から醒めると、女中が西洋料理を持運んでゐた。食卓を拭きながら、

「どうなすつたの」と、怪むやうに香取の顏を見て、「何だかお眠さうだわね」

「どうもいけない。厭な夢を見て」と、香取は獨言のやうに云つて、目を擦つて明るい部屋を見た。張交ぜの屏風には蜀山人の飄逸な字が際立つてゐた。

「どんな夢を御覽なすつて？」と、女中は目に笑ひを含んで何氣なく訊いたが、香取は眞面目になつて、

「此家へ入る時分にうまく忘れたことが、夢に見えたんだよ」

「へえ、不思議ですわね。どんなこと？」

「女のことだがね」と、香取は飽くまで眞面目だつた。

「おや、お惚氣ですか」女中は浮いた調子で云つて、「私何を仰有るのかと思つてたら」

「なに、惚氣なんかぢやないんだ」と、香取は忌々しさうに打消して、前に置かれたナイフとフォークを手に取つたが、何故だかこの女中にでもあの話をして見たかつた。で、料理には手を着けないで、女中の方へ向いて、

「實は僕の知つてる女が、女房のある男に掛合つて困つてるんだよ。今は男の方でも關係を絕つつもりでゐるらしいし、女は尚更別れるつもりでゐるらしいんだが、こんな場合二人とも綺麗に別れてしまへるだらうか。二人とも心殘りがなく一生他人になつてしまへるだらうか。君はどう思ふ？」

「さうですねえ」女中はあまり氣乘りがしないらしく、「お神さんがあつちや、どうせ別れなければなりませんわね」

「だけど、それきりで濟んでしまふものかね」

「どちらかで惚れてれば、容易に切れないでせうよ」

香取は進んで詳しいことを話さうとしたが、階下から女中を呼立てる聲がしたので、自ら話が切れた。

女中が立つて行くと、彼れは皿を引寄せた。そして、知らず〳〵今見た夢を繰返してゐたが、ふと氣付いて恐ろしいほど淺間しく思はれた。お多代を憐むばかりでなくて、心の底は忌はしい執着が根を蔓つてゐる。湯原との關係から、最早あの女には一生正當の色戀が許されぬやうになつてゐると思ふと、尚更意地惡い慕はしさが増して來た……。

彼れはずつと以前、まだ頰の肉の柔かく膨んでゐた頃、ある年上の卑しい女に迷はされて酷い目に會ひかゝつたのを、湯原の取做しで無事に濟んだことがあつたが、その折の光景が今の

心持に照らされて恥かしく浮んで來た。
「二度とあんな眞似はしたくない」彼れは自分の心一杯の思ひを無理に壓潰さうとした。そして長い間、女といふ女に近寄らなかつたために、こんな事で惱むやうになつたのではないかと思つたりした。
食事の終つてナイフを投出した時分に、足音が襖の前に留まつて、藝者の姿が珍らしく彼れの目に映つた。近寄るのを見てゐると、今雜沓の中でチラ〱目についた女のやうな水々しい美しさはなくて、藝者らしくもなかつたが、黑い髮と白い顏とには、流石に若い女らしい艶があつた。
「何故さう顏ばかり見ていらつしやるの」と、女は面羞さうにした。
「よく見てると不思議だよ、今夜からしてお前に會つてるのが僕にや不思議だよ。僕はこの春から女を絕つたんだからね」と香取は眞顏で云つた。そして、この女によつて戒を破つた後が氣遣はれて、このまゝで歸らうかと迷ひながら、
「お前は何時から此地へ出てるんだい」と、訊きたくもないことを訊いた。
「まだ出たばかりですわ。二月ぐらゐでせう」
「些とはお馴染が出來たかい」
「いゝえ、お馴染なんかありませんわ」
「でも二月の間にや、隨分いろんな客に出てるだらう」
日に三人としても百八十人だと、香取は其處まで考へを持つて行つて、側にゐる女の身がいろ〱の男の毒を盛つた器のやうに思はれ出して、藝者と云ふ名や、派手の色合も、快い浮いた連想を起させなくなつた。
「よく厭にならないね」と、笑ひながら云ふと、
「厭だつて仕方がありませんわ」と、女は窮屈さうに答へた。
そこへ女中が襖の外から聲を掛けて、次の間へ案内した。香取は明るい部屋から薄暗い間へ入つた。女は燈火の下で捌けない話をしてゐるよりも、結句氣樂になつたやうな風だつた。
やがて、香取は枕許の細いランプをも消して闇にしてしまつた。そして再び明處へ出るまで、空想の女としてその女に觸れてゐた。お多代の顏や肌が闇の中に描かれてゐた。

（七）

彼れは身體中汚されたやうな氣がして、やがて其處を出ると、急いで家へ歸つて、風呂へ入つて念入りに皮膚を磨いた。
そして机に向つて、所在なげに美しい詩のやうなヴェニス貴婦人の物語を讀續けたが、紙の上には生きた女の影のみ差した。最早戒を破つた僧のやうに、卑しい慾望は以前よりも却つて力強く心に渦卷いて、動もすれば想像がその方へのみ向いた。燈火を消して早く寢床へ入つて、つとめて眠を得ようとしたが、淋しい部屋は平生よりも一層淋しくて、誰れかが側にゐて呉れなければ、安んじて眠れさうでなかつた。で、ふと起上つて、寢卷のまゝ茶の間へ行つて、長火鉢の前に坐つた。そして古足袋を繕つてゐる下女に言付けて、茶を入れさせながら、
「今夜は淋しくて仕方がない」と、同情を求めるやうに沁々と云つた。
下女は不思議さうに主人の顏を見上げて、「今夜は感心にお隣の子供が泣かない」と、それが淋しい原因である樣に云つた。
「お前はよく淋しいと思はないでゐられるね、毎日何を考へてるんだい」
「何も考へることは御座いません。仕事でもしてゐませんと、居睡がついて困りますけれど」
「考へることはないかね。こんなに暇で淋しいと、お前も毎日何か考へてるだらうと思つてた

のに」

「奥様がないと、どうしても家の中は淋しう御座いますよ」と、下女は力を入れて云つて、長火鉢を隔てて差向ひに坐つた。そして何時かのやうに眞面目に結婚を勸めたさうだつた。

「一人ぢや暮せないものかね。おれはどうかして一生一人でゐたいと思つてたけれど、から淋しくつちや、生きてるよりや、死んだ方がいゝと思ふよ。實際夜中に目が醒めた時分にや、明日の朝日を見る前に死んだ方がいゝと思ふことがある」

「えゝ」と、下女は目を丸くして、「あまり御勉强が過ぎるから根が疲れるんでせう」

「勉强なんかしてやしないよ。おれも今にまた働かなくちや食へなくなるのだが……」

「これで奥様がお出來になつたら、何をなさるにも張合があつてよろしいんですよ」

「だけど、おれなんかにや碌な子供は出來ないからね」香取はふと毘沙門で見た不具者を思出して、「手が四つで足が四つの子が生れたらどうするだらう」

「まあ厭な。そんな子が滅多に生れるものですか、何故そんな事を仰有るんでせう？」

「しかし生れんとは限らないさ。おれの知つてる金持の娘で十八で盲目になつた女があるよ、父親の梅毒が傳染つてたのだらう」

「それは親御が悪いんで御座いますよ、普通の者なら貴下……盲目の生んだ子でも、目がちやんと明いてるんですもの」

「さうかねえ。お前なんか何事もさう極めて安心してゐられるかね」

香取は世の中で自分一人がこんな下らん事に惱んでゐるのか知らんと、下女の萎びた顔を羨ましさうに見てゐた。

そして、茶を飲んで煙草を吸つて、暫らく下女と近所の噂などしてゐた。さうしてゐると、幾らか心が鎭まるやうなので、夜の更けるまでもつと茶の間にゐたかつたが、下女が次第に眠たげな顔をするのを見ると、强ひて話相手にするのが氣の毒になつて、自分の居間へ歸つた。

翌朝も穏かな温かい日が照つた。彼れは縁側で日向ぼつこしながら、隣の軒先に羽を光らせてゐる雀を見てゐたが、ふと氣付くと昨日の痩せた小犬が庭の片隅に目を細くして、氣樂さうに前足を伸して蹲つてゐる。何時の間に歸つて來たのかと怪んで、下女に訊くと、下女は些とも氣付かなかつたと云ふ。

「變な犬だね、よくこの家を覺えてたものだ」と、彼れは庭へ下りてその側へ寄つたが、小犬はやがて身を起して、其處等を嗅ぎ歩き出した。

「も一度何處かへ棄てて來てやらう」と、獨言を云つて彼れは身支度した。そして、犬を誘ひながら表通へ出た。後になり前になりして江戸川に沿うてフラ〳〵傳通院近くまで來たが、其處から伴を振捨てて、急に電車に飛乘つた。

何處まで乘つてゐようと云ふ氣もなく、目を瞑つて窓に凭れてゐたが、何時の間にか電車は廣小路へ來て停つた。と、彼れは豫め其處を指して來たやうに慌てて下りて、溝渠の方へ歩いた。

昨日この邊へ來てから僅か一日しか立つてゐないのに、餘程の日數を經てゐるやうに思はれて、上野町の模樣もあれから著しく變つてゐさうな氣がした。

お多代はまだゐるんだらうか。湯原の留守に女同士がどんな風にしてゐるんだらう？　彼れは怖いものに近づくやうにその家の前まで行つた。玄關には明るい日が差込んで、中には人の聲がしない。で、思切つて聲を掛けて入つて行つた。

「はい」と、間を置いてお多代が返事をして、奥

から出て來たが、香取の顏を見ると、驚いた樣な目付をした。そして、後に氣を兼ねながら挨拶して茶の間へ通した。

「奧さんは？」と訊くと、

「居ますよ」と云つて、お多代は身を擦寄せ小聲で、和泉町へ行つてゐたことは祕密にして呉れと賴んだ。

香取は首肯きながら寬かに坐つて、次の間に目を付けてゐると、細君は先日よりも晴々しい顏付をして、襖を開けて、「此方へ入らつしやい、元一さん」と云つて、自分が先に立つて、玄關の脇の座敷へ導いた。

座敷には緣の壞れた柳行李が出してあつて、帶だの襦袢だのと女物がその側に散らかつてゐる。澁紙包も一つ轉がつてゐる。一目見ると香取は略々感付いて胸を轟かせたが、何氣ない風で、

「それはどうしたんです」と、細君に訊くと、

「私もう此方をお暇して神戸へ行くんですよ、今夜の夜汽車で立たうと思つてますの」と、お多代が答へた。

「今夜？…そんなに早く立つんですか」と、香取は驚いて、お多代の顏を見詰めた。これほど心に掛けてゐる自分に一言も告げないで、不意に立つて行かうとするのが恨めしかつた。そして、神戸へ行つてからの事を訊きたかつたが、言出す力もないほどに心が萎れた。どうせいい事があつて行くとは思はれないが、この女の將來はどう落着くものだらう？と、暫らく口を噤んでゐたが、細君は行李を隅へ押除けて坐つて、

「私達もいゝ家があつたら、他處へ引越さうと思つてるんですよ。その中空家搜しを兼ねて元一さんのお家へもお邪魔に上るかも知れませんよ」と、懷つこさうに云つた。

「えゝ、是非入らつしやい」と、香取は素氣ない聲で云つて、最早細君の側にゐるのも厭になつたが、細君は不思議に調子づいて、知人の噂などし出した。香取は氣乘りのしない受答へをしながら、つい相手の口からお多代に關した事が漏れはしないかと待設けてゐたが、それらしい話は只の一言も出なかつた。で、終ひには焦躁しくなつて、座を立つて歸りかけて、

「お多代さんは神戸へ行つて何をするんです？」と、訊くと、

「行つて見なけりや分らないのでせう、何をするんだか」と、細君は簡單に答へた。

「さうですか」と、香取は見送つて出たお多代に向つて、「兎に角もう會へないのですね」と、口元に淋しい笑ひを浮べた。

細君に妨げられて、離別の言葉さへ云へないのを殘念がりながら、其家を出て、昨日のやうに公園の方へ歩いて、昨日のベンチに腰掛けた。

あの行李と澁紙包とを持つて女一人夜汽車で東京を去つて、確かな目的もない土地へ赴く……彼れは心をその一點に凝らして、夜更けてからの停車場や、神戸までの途中の驛々を描き出してゐたが、ふと出立の時刻を聞かなかつたことを悔いた。分つてゐれば人知れず見送つてやるんだが。

暫らくして彼れは、再び上野町の溝渠の側を通つて電車に乘つて、最早明日から此方へは近づかないと決心した。そして、お多代を中心にして湯原夫婦や戸田の細君が、それぞれに祕密を持つてゐるらしいのが心に掛つたが、その祕密はつひに晴れさうではなかつた。

で、二三日、香取は人間の祕密を底氣味惡がつて、動もすれば心を戰かせた。每日空はよく晴れてゐたが、戸外へは出ないで、部屋の中で身動きもしないほどにしてゐた。湯原に誘はれてから、二三日目に觸れた、いろんな人の顏を忘れようとしてゐた。

（八）

三日目の朝珍らしく郵便の聲が聞えた。自分で立つて行つて手に取つて見ると、封筒の裏には所を書かないで、樋口多代とのみ書いてある。胸を轟かせながら、ふと消印に目をつけると、それは本郷であつた。封を切つて慌しく讀んだが、假名が多くて、文句が分り難かつた。

「都合によつて神戸へは行かないで、此處に間借りをして、一人で暮して居ります。お次手もあらばお遊びにお出で下さい。晝間だと何時でもお目にかゝれますから。是非お話し申したいことがありまして、一度お訪ねしたいとは思つて居りますが、人目が憚られて差控へて居ります……私が東京にゐることは、誰にも内所にして下さるやう、呉々もおたのみ申します」

といふ意味の文面が、二三度讀返してから、やうやく判ぜられた。卷紙の端には、追分町八代とら方と窮屈さうな字で書添へてある。

香取は意外なこの手紙を見て、生返つたやうに悦しかつたが、机の前に坐つて落着いて考へてゐると、疑念は留度なく起つた。何が何やら譯が分らなくなつた。

で、直ぐにも様子を見ないではゐられなくなつて、その住所を口の中で繰返しながら戸外へ出た。四邊に目を配らさずに足早に歩いて追分町まで來た。二三度人に尋ねて漸くその家を搜し出したが、表の古ぼけた門の戸は鍵が掛つてゐるのか、引いても押しても開きさうでない。怪んで、竹垣の壊れ目から覗くと、緣側の雨戸は開いてゐる。庭にコスモスの咲いてゐるのも見えた。

聲を掛けるのも憚られて、遠廻りして裏口を搜して見たが、外に出入口はなかつた。他所の二階家が背中合せになつてゐる。で、表へ戻つて試しに二三度輕く門を叩いたが、内から何の手應へもない。留守か知らんと思つて歸りかけたが、後髪を牽かれるやうな氣がして、思はず手強く門を叩いた。すると、「何方？」と聲がして、やがて内から人の近づく氣色がした。その聲と足音とはお多代に違ひなささうだ。

「あら」と、お多代は門を開けて香取の顔を見て驚いて、「貴下とは思ひませんでしたよ。手紙が届きまして？」

「えゝ、僕も何だか氣掛りだから直ぐ來たんです」

「よく來て下さいました」お多代は愼ましやかに云つて、家の中へ連れて這入つた。

今まで晝寝してゐたらしく、座敷には女[illegible]と薄い掛蒲團が出してあつた。お多代はそれを急いで片付けて次の間から小さな汚い座蒲團を持つて來た。

香取は坐るが早いか性急に、「貴女は何故神戸行を止めて此家へ移つたんですか」と問ひ詰めた。

「急に考へ直しましたの。神戸へ行つても目的がないんですもの」と、お多代は言譯して、「だけど從姉や戸田さんには、神戸へ行つてることにしてゐるんですから、何卒何も仰有らないで下さいまし」

「えゝ、その心配は入りませんよ。僕はもう彼方へは行かないんだから。……しかし、貴女は此家で何をしてゐるんです、何もしてゐないんですか。一體此家は何をする家です」と、香取は胸に込上げる疑ひを一時に晴らさうとして、畳掛けて訊いた。そして、部屋の中を見廻した。

お多代は莞爾して、「今ゆつくりお話しいたしますわ」と云つて、次の間へ入つたが、暫らくして茶器と菓子鉢とを持つて出て來た。亂れた髪を梳付けて顔も洗つて來たらしかつた。先日よりも顔に艶があつて生々としてゐる。香取はその紅い唇に目を留めてゐた。

「今日はお留守番をさせられてるんですよ。此處の主人は呉服物の出商ひをしてて、昨日から田舍へ行つてますの。早くても二三日しなければ歸らないんでせう。お神さんはゐるんですけれど、隨分弛慢のない人なんですよ。昨日も主人が出て行くと、直ぐに隣近所へ遊びに出歩くし、今日も留守の間に生命の洗濯をするんだつて、親類の娘を誘つて芝居を觀に行つたんでナよ」

と云つて、お多代は月十圓の食料で、この座敷に置いて貰ふことになつてゐることや、その中自分に相應しい仕事を捜して、一人立ちで東京で暮らすつもりでゐることなど、ポツ〳〵話して、「人の世話になるよりや、その方が餘程氣樂だと思ひますわ。此處へ越して來た日から氣分が清々するやうですわ。お神さんがゐないと話に來る人もないから、私一人の家のやうですよ」と、これまでにない打解けた樣子を見せた。

香取は心を留めて聞いてから、暫らく默つて考へてゐたが、やがて、「だけど今の所困つてもゐないんですか。湯原君が少しは世話をして呉れるんですか」

「いゝえ、義兄が何で貴下」と、女は目に角立て、慌しく打消して、「私もうあの人達の世話になりませんの」と強く云つた。

「しかし湯原君は貴女に對して責任があるんでせう、此處にゐることは知つてるんですか」

「いゝえ、義兄にも知らせませんの。神戶までの旅費を貰つて俥で出て、途中から逃げるやうにして此處へ來たのですわ。私がこんな處にゐることが知れたら、どんな目に會はされるか知れませんわ」と、女は怯えたやうな顏付して、一寸言葉を切つて、「ですから、誰れにも知らせたくないんですけど、差當つて宿の保證人に困つてますの。私前金で食料を入れてるんですから、保證の必要はないだらうと思ふんですけど、此處の主人が舊弊で、四五日中にどうしても宿受を極めて判を捺して出して呉れと云ふんですの……その事で貴下にお願ひしたいんですが、御迷惑ですわね」

「いや、保證ぐらゐ何でもないです、どうせ形式的に過ぎんのだから」と、香取は直ぐに受合つた。そして女が湯原の毒手から離れて自由の身となつたことが、他人事とは思はれぬほど悅しくて、「貴女はいづれ將來の事も考へてるんでせうが、人に騙されんやうになさい。僕は何だか貴女が氣の毒でならんから、出來さへすれば力になつて上げたいんです」と、眞面目で云つて、湯原との事を訊きたさうにした。お多代は後見たいことなど、鵜の毛程もなかつたやうに空呆けてゐたが、やがて、

「私、從姉さんには隨分いぢめられたんですよ」と、口を切つて、訴へるやうに話し出した。

「元を云へば、私の方から無理に賴んで御厄介になつたんぢやないんですからね。此方は無人なのに從姉さんが身體が惡いし、人手を借りるにしても、全くの他人だと氣骨が折れるから私に是非來て呉れ、當分家の手傳ひをするつもりで來て居れば、その中一生東京で暮らされるやうにしてやるつて、それは幾度も〳〵手紙を寄越したんですの。私、餘程迷つたんですけど、終ひには斷れなくなつて、決心して來たんですわ。近所の人にも暇乞ひして、一生東京の人になるつもりで來たんですからね。それに難癖付けられて追返された日にや、私故鄉の人に會はす顏がないやうな氣がしますから、どうしても歸らないつもりでゐますの、持つて來た衣服まで無くして、こんな服裝で歸られはしませんわ」

さう云つてゐる中に、今まで平氣だつた顏を曇らせて、涙をさへ浮べた。

「私彼家へ來てから彼此一年になりますけど、

下女がはりに追使はれてたばかりで、些とも自分のためにはなりませんでしたわ。滅多に戸外へも出られないんですもの。今年の一月でしたか、戸田さんのお婆さんや貴下に新富座へ連れてつて頂いたでせう。あれつきり物見遊山に出たことはありませんわ。それはまあどうでもいいんですがね。東京へ來た位なら何か習つて身に藝をつけたいと思つてるんですけど、そんな事にや些とも構つて呉れなかつたんですの。私焦されたんですわねえ」と云つて、淋しく笑つて、「東京へ來てから手だつてこんなに荒れちやつたの」と、白い華奢な手を出して見た。

が、その手は少しも荒れてはゐなかつた、香取の目にはこれまで自分が觸れたどの手よりも美しく見えた。

「私もう懲り〳〵しましたから、これから誰をも手頼りにはしませんの。どうせこの年齢まで苦勞ばかりして來たんですから、どんな苦勞だつて辛抱出來んことはありませんの」と、暫らくして浮々した調子になつて笑顏をして、「これからも時々お遊びに入らしつて下さい。私の身もその中どうなるか分りませんけど、當分此處を自分の家にしとかうと思つてますから」と云つて、身輕に立つて、障子を開けて、「汚い家だけど、靜かでいゝでせう、庭もあるし。あの壞れかけた門を見ると、私田舍の家を思出すんですよ」

そして、お多代は緣側に立つて、外を見ながら、「本當にいゝお天氣だ」と呟いた。

自分の今の境遇を悲しんでゐるのやら、ゐないのやら、香取は女の心の奥を少しも索りかねて、思案してゐたが、やがて、自分も緣側へ出て、女の目を向けてゐる方へ目を向けてゐると、自ら田舍の家が思出された。

不思議にも、十一二の時分秋の夜、隣家の門の側に熟つてゐる棗を盜みに行つて、脊の高い友人の肩車に乘つて、門に登つたことが思出された。そして、棗は枝が遠くて取れず、門は下り難くて泣き出したことがあつたが……。

「何だか田舍染みてますね、この家は」と、彼れは其處に昔の幻を見ながら、感じを籠めて云つた。そして、眩しさうにして端近く立つてゐる女を見上げて緣側に腰を掛けた。古ぼけた門や色の朽ちた竹垣や、コスモスの淡い花の色や、愁はしげな女の顏の色が、冴えた光の中に浮上つて夢のやうに見えた。珍らしく安らかな夢心地になれた。煩はしい世を逃れたヴェニスの貴婦人の宿へでも來てゐるやうに思つても見た。

そして、女の身の上について、立入つた疑惑は暫らく忘られて、只かうしてゐれば、自ら心が平穩になるやうだつた。で、

「もつと遊んでてもいゝんですか、僕がゐても迷惑にならんのですか」と、何氣なく甘えるやうに云つた。すると、

「何故です」と、女は不快な目付して、「何時までいらしつても些とも迷惑ぢやありませんわ」

香取は自分の言葉が女の顏色を變へさせたのを悔いた。

「私一人ですから、晩まで遊んでいらつしやいな。もうお正午ですから、御飯でも食上つて……」と、女は臺所の方へ行きかけた。

香取はふと思付いて、幾らかの金を強ひて手渡しして、後から追つて行つて、何か近所で出來る甘い物を誂へてこさすことにした。女は黄ろい羽織を引掛けて出て行つたが、暫らく手間取つて來て、「親子丼を云つて來たんですよ、貴下お好き？」と訊いた。

「えゝ好きです」

香取は女が自分の家のやうに食事の支度をしてゐるのを懷しんで見てゐた。そして、一緒に食事しながら、ずつと以前にある女と同じ鍋を突いてゐた以來、今日ほど樂んで箸を執つた

ことのないやうに思はれたので、無邪氣にそれを口に出して云つた。

「御神さんから一度そのお話を聞きました」と云つて、女は可笑しがつて、「今はお會ひなさらないの。その人に」

「もう會ふものですか。もう女なんかに深入りはしませんよ、馬鹿らしいから」

「それはさうですわね」

「だけど、女の友達は一人欲しいと思ひますよ。人の細君でも何でもいゝから、自分の心を撫でて呉れる者があつたらと思ひますよ。湯原君の細君なんか元は何處か母親のやうな氣がしてたけど、此頃は、厭な人間になつちまつた。女つてものは世帶苦勞するとあんなになるものか知らん」

「厭ですわね、あんなになつちや」と、女は眉を顰めたが、それを取消すやうに、「だけど、惡い人ぢやないんですよ。誰れにも惡氣のある人ぢやないんですよ。病氣なんでせう」

「子供がないからかも知れん、一度出來かゝつたんだけど……」

「さう」と、女は輕く云つて、「貴下はお家でどんなものを召上つてるんですの」と、突如に訊いて話を外すやうにした。

「何故です」と、香取は女の問ひ方の變なのを怪んで、「湯原君の家のとさう違つてはゐませんよ、普通の物ばかりです。あの家でも拙い物ばかり食べてるやうですね」

「えゝ」

　女は何か氣に掛つてゐるらしく、ハキ〳〵話を進めなくなつた。香取は氣に留めぬやうに裝ひながら、相手の顏を見詰めて、祕密を持つてるらしいその心の底が、隈なく明るくされないのを焦燥しがつた。が、先方で避けてゐるのに、あまり諄く訊くのも意地惡く取られさうに氣遣はれたので、何時か自然に女の口から明されるのを、氣永に待つてゐようと思つた。宿の受人になるのは、女と自分との關係を付けて置くために却つて都合がよかつた。

　で、彼れは半紙に細く箇條書きにして何か書付けてある證書を女から受取つて、碌に讀みもしないで、「印を捺して直ぐ郵便で送ります」と、疊んで懷に入れようとしたが、女はふと手を伸してそれを取返して、

「隨分勝手な事ばかり書いてあるんですよ」と、拔いて見せて、處々指差しながら、「宿主の都合次第で斷つた時には三日以内に立退いて呉れとか、部屋を汚したら相當な辨償をして呉れとか書いてあるでせう。それに借手の方から一月以内に出て行くと、間代は拂戻さないなんて、隨分勝手過ぎると思ひますよ」

「さうだね」と、香取は一通り輕く目を通して、「こんな事を書いてても、宿料さへ拂つとけば何も面倒なことはないんですよ。宿料を滯らせて逃出しでもすると、受人が責任を負はなくちやならんのだけど……しかし一月分なら、僕が引受けたつていゝ」

「ぢや、私夜逃げをしますよ、此處が厭になつたら」

「えゝ、その時は葉書を送つて下さい。僕が跡片付に來るから」

「それは戲談ですけど」と、女は調子を變へて「此處のお神さんには何か遣らなくちや惡いでせうね」

「そんな事はどうだつていゝさ」

「さうですかしら。だけど私の性分では何か心付けをしなければ氣が濟まんのですよ。それにからして家の者のやうにしてるんですから」

「ぢや、幾らか包んでやつたらいゝでせう」と、香取はそれを機會に紙入から紙幣を取出して、「この中で貴女の氣の濟むだけお遣んなさい。」

澤山遣る必要はないんですよ」と、女に手渡しようとしたが、女は押返して、手を振つて、

「そんな物いゝんですの。私いよ〳〵困つたら、貴下にお願ひしてお借り申しますけど、まだ當分は構ひませんの」

「まあいゝから取つときなさい」香取は紙幣を疊の上に置いて立上つて、「僕はもう歸りますよ。非常に長居をした」と、云つて戸外へ出て行つた。

そして、半日を其家で送つて金をも置いて來たために、先日からの鬱陶しい心が稍輕くなつたやうだつた。

（九）

家へ歸ると、直ぐに證書に捺印して送つたが、それに添へて「あまり屈託して身體を害はぬやうになさるべし」と書いてやつた。折返して女から簡單なお禮の葉書が來た。

女はその用事ばかりで手紙を寄越したのかも知れぬが、香取の心にはその日からお多代の身體が暗く明るく絶えず映つてゐた。氣分のいゝ時には女の姿が晴々しくなつて、今の境涯が却つて安らかなやうに見え、心の沈んだ時には女の姿も憐れげになつて、その日々の生活の前よりも痛ましさうに見えた。或夜も眞夜中に不快な眠からふと目をさますと、女が寢床に坐つて、胸に手を當てて悄然首垂れてゐるやうに思はれたり、青い顏して泣いてゐるやうに思はれたりした。湯原の細君の剃刀騷ぎも思出されて、思詰めると、女は誰れでもあゝなるのかも知れないと、恐ろしくなつた。「夜逃でもしたら」と、先日戯談らしく云つた言葉までも、女の心の底を微めかしてゐるやうに取られ出した。

で、果しない妄想が湧上ると堪へられなくなつて、燈火を點けて机の前に正坐して、煙草を吸ひながら、つとめて心を落着けようとしてゐたが、やがて、卷紙を攤げて、自分の思つてゐることを、遠慮なく細かに書出した。自分の想像に浮んでゐるこれまでの女の所行を責めたり悲んだり、將來を戒めたりした。自分はあの時から憐れなる貴女を一刻も念頭から去つたことはない、思出すと立つても坐つてもゐられぬと書いたり、「貴女は最早純潔な女としては通れぬ身だから、たとひ糊口の道はついたにしても、この先幸福に眞面な生涯は決して送れぬことと思ひます」と、わざと嚇すやうに書いたりした。

「……貴女が田舍から出て來るやうになつた事情や、此方へ來てからの事を考へると、惡運に取付かれてゐるやうに思はれます。一生とてものがれる事の出來ない恐ろしい者に付纏はれてゐるやうな氣がします。貴女ばかりぢやない、私だつてさうだ。私は戸田の細君などのやうな氣樂な人間ではないんです。毎日淋しい手頼りない日を送つてゐます。丁度貴女のやうに……これまでいろ〳〵にして惡運に攫まらぬやうに逃げて來ましたが何時かは酷い目に會はされさうに思はれてならない……」

自分の感想染みたことをも、秩序なく書續けてゐる中に、長い卷紙も盡きてしまつた。それをお多代に宛てて出す氣にはなれなかつたが、只女を目に浮べて、思ふ事を書いてゐると、自ら心が新れた。

で、彼れはそれを一度讀返して、机の上に攤げたまゝ、燈火を消して寢床へ入つた。すると夢ともなく、現ともなく、誰れかが側にゐて、頻りに自分を詰つてゐるやうな氣になつた。

「東京へ來てから幾度もお目に掛つてゐるのに、何故その時早く私を助けて下さらない。あの時分に何故見向きもなさらなかつたのです？」

「今になつて焦慮したつてそれが何になります？」

「あの時貴下が何も云つて下さらないからだ。

私の方で幾ら思つてても、女の方から云出されはしません。もう此上では貴下との縁はないんです」

まだ同じやうなことを云つてゐたが、その人はお多代らしくない惡相を帶びた女だつた。香取は押潰されるやうな苦みを感じて、目を醒まして起上らうとしたが、身體は快く眠つてゐるのか、少しも自由にならなかつた。

朝目を醒ますと、枕許の手紙が昨夕の苦い夢の名殘として先づ目についた。彼れはそれを忌はしいもののやうに力強く引裂いたが、いくら裂いても裂け切れぬものが部屋の中に殘つてゐるやうだつた。

長く續いた秋日和は今日も變りさうではない。暫らく氣付かぬ間に北隣の庭の楓葉の眞紅に染んでゐるのが、隙間からチラ〱目についた。彼れは自分の部屋で呼吸をするのが重苦しいやうで、遠く戸外を見てゐたが、高く低く屋根から屋根が何處までも續いて果しがなかつた。そして、家もない人もゐない野原へ只一人逃げて行つて、心に蟠つてゐる人影を消してしまつて、自由に息をしたいやうな氣がして、表へ出て行つた。

が、彼れは走つてゐる電車を見ると、それに背いて淋しい方へ足を向けられなくなつて、考へる間もなく飛乘つた。上野町へ行つてお多代の出た後の樣子を見て來るか、追分へ行くか、この二つの外に差當つて訪ねたい家はなかつたが、三丁目まで來ると、つと電車を下りて、脇目も觸らず追分まで歩いて、かの床しい古い門を入つて行つた。目の細い肉付のいゝ頬のテカ〱してゐる四十恰好の主婦が庭に立つてゐた。

「お多代さんはゐますか」と訊くと、不思議さうに此方の顔を見て、

「樋口さんですか」と問返して「ゐますよ」と冷淡に答へた。

その聲にお多代は障子を開けて微笑したが、日を浴びたその顔は先日よりも蒼く見えた。香取は縁側から座敷へ上つたが、机の上の藥瓶が先づ目についた。

「何處か惡いんですか」と、氣遣はしさうに訊くと、

「惡いつて程でもないんですけど、胃が少し惡いんですの」と云ふ。

「家にぢつとしてるからでせう、少し散歩でもしちやどうです。こんなに天氣がいゝんだから」

香取は突立つたまゝ、今直ぐにも外へ誘ひ出したさうにしたが、女は懶がつて立たなかつた。そして、二度三度勸めると、さも厭さうな顔をするので、香取も強ひかねて、其處に腰を卸した。女は先日ほどハキ〱しないで、あまり口數も利かなかつた。遊びに來られたのを喜んでゐる風も見えなかつた。が、暫らくして、ふと、

「貴下はあれから下谷の方へ入らつしやらないのですか」と、意味ありげに訊いた。

「一度も行きませんよ、何故です？」

「私が東京にゐることが皆なに感付かれてるやうなんですの。戸田さんでもさうとばかり思つてるらしいんですよ」

「何故？　だつて誰れも知らせる人はないのでせう。僕は寄付きやしないし……」

「それはさうですけど」

香取は自分の所爲ではないと飽くまで辯護して、「此處にゐると知れたら困るんでせう。そしたらどうします？」

「仕方がありませんわ、私も覺悟してますの」と、女は態と平氣らしく云つた。

「覺悟つてどう覺悟してるんです」彼れは自分の上にも危險の近づいてゐるやうに感じて、力を入れて問詰めた。

「貴下どうしたらいゝと思つて？」女はふとこ

れまでにない馴々しい甘えた言葉で、目に媚を浮べて云つた。

「さあ」

香取は眉を顰めて白い歯で脣を噛んで一途に考込んでゐたが、やがて「僕も場合によつちやどんな責任を負うてもいゝです。貴女が神戸へ行かないで東京にゐるのを、僕の所爲にしたつていゝんです。そのために僕が不名譽を得たつて構はない」と言切つた。そして、最早自分とは、正當な戀中にはなり得ない女のために、知人間に名譽を失つて物笑ひの種になるのを心苦しく思ひながら、その苦みは何となく懐かしかつた。二人の間の隔りが取れて、これまでのやうな遠慮氣がなくて、女を見てゐられるやうになつた。

「私が無理に貴女を勸めて引留めたことにしとけばいゝでせう。何處か途中で出會つたとか何とか口實をつけて……僕も責任を以て貴女を一人立ちで暮らして行けるやうにすると受合つてもいゝんです。今度湯原や戸田の細君に會つたら、私の方からさう云ひますよ。その代り貴女もそのつもりで、この後あの人達に非難されないやうに注意しなくちやなりませんよ」

「えゝ」と、女は輕く答へて、「だけど、成るべく貴下からは何も仰有らないで下さい。却つて御迷惑になりますから」

「しかし、貴女も逃隠れして心配してるよりや、いつそ明ら樣にしといた方が氣樂ぢやありませんか。僕も今となつちや、もう自分の迷惑なんか構ひませんよ。それに貴女と私との間には些とも疚しい事はないんだから」と、香取は次第に感情を昂らせて、「僕は先日貴女に會つた時から、毎日いろんな事が考へられて仕方がないんですよ。折角落着きかけてた心がまた痛み出して仕方がない。あの時湯原君を送つて上野町へ行かなければよかつたのに……矢張僕の身にや惡運が取付いてるんだ」と、歎息した。

が、かうなつた上は最早どう云ふ結果にならうともそれを考へてはゐられない。お多代と離れては淋しくて暮らされさうではない。このまゝ身の破滅にならうとも、二日でも三日でも二人で、恣な晝と夜とを送りたかつた。

男の愛情のある哀れげな言葉に感動したのか、女の睫も涙に濡れてゐた。香取もそれを見ると涙ぐんだ。そして二人は暫らく默つてゐた。主婦は庭の方から不思議さうに此方を覗みて聞耳立ててゐる。

「私、何も彼も貴下にお話したい」と、お多代はふと溜息吐いてから云つた。

「何をです」と、香取は胸騒ぎさせて顏を上げて、「何をです？」と強く云つて、恐ろしい言葉を待設けたが、

「今直ぐお話は出來ませんわ」と、女は首垂れた。

「だけど、それを聞かなけりや、僕は安心が出來ませんよ。……今でなければ何時話すつもりなんです」

「何時と云つて」と女は言淀んだが、やがて、「では後で手紙に書いて出しますわ」

「手紙は直ぐ呉れますか。成るべく細く書いて送つて下さい、隱立てをしないで」

「えゝ」

「それから葉書でも毎日の樣子を知らせて貰へるといゝんだが。貴女の方で異つた事情が出來ると、僕は直ぐ來て見ますから」

お多代は眞心を籠めた男の言葉を聞きながら、氣乘りのしない返事をしてゐたが、「では私困つたことが出來たら、貴下にお知らせしてよ。困つた時に人に頼むのは私厭ですけど」と、やがて決心したやうに云つた。

「それは他人にはうつかり依頼しない方がいゝんですよ。だけど、僕を兄妹とでも思つてたら

信用して打明けられるでせう」と云つて、香取は突如に、「貴女は今幾つです？」
「年齢を訊いてどうなさるの。私もう二十二になるんですわ」
「ぢや僕とは五つ違ひだ。矢張僕の方が兄だよ。何だか僕が弟のやうな氣がするけれど」
「私そんなに老けて見えて」と、女は不快らしい顔付をして、「上野町に一年ゐたばかりでこんなになつたんですよ」と怨めしさうに言つた。
「些とも老けちやゐないさ。東京へ來た時よりや若くなつたくらゐですよ、綺麗にもなつたし」と、香取は眞顔で見詰めた。
「綺麗だなんて。眞面目に聞いてれば愚弄つていらつしやるんだわね」と、女は面羞さうにして、口元に微笑を含めた。
「愚弄ふもんですか。僕は本當にさう思つてる。去年初めて見た時分にや、色の白い女とは思つてたけど、何處か田舍臭かつたが……」
「どうせ田舍者ですもの、私なんか」
「だけど、今はあの時の、お多代さんとは思へませんよ。見馴れた人は氣が付かんか知れないが、田舍へ歸りでもしたら、皆なが吃驚しますよ。先日の夜上野町で貴女がお湯から歸つて茶の間へ入つた時には、僕だつて見違へるやうだつたからな」香取は心の震へるやうにその時を思出して、「あの薄暗い處へ貴女の白い艶のいい顔が見えた時は、僕は生返つたやうな氣がしたんですよ」
「貴下もいろんな事を仰有るわね」と、女はわざと澄まして、「幾ら煽てたつて奢りませんよ」と云つたが、目は心の中の悦しさを隱し切れなかつた。
香取は次第に調子づいて、浮付いた口を利き出した。女も面白さうに聞いて、姿勢を崩して蓮葉な素振をもした。
やがて主婦をも座敷へ呼んで、一緒に晝飯を食べて、世間話に耽つた。が、主婦は見かけに依らぬお世辭のない口の重い女で、座興を添へては呉れなかつた。時々は存在な言葉で人を輕んじたやうなことを云つた。「今時の女は學問したつて針一つ碌に持てないし、花を生ける術も知らんのだから困つたものだ。衣服の縞柄の見立さへ出來ないから、變な身裝をして歩いてる女が多い。流行だつて何だつて自分の身體を見てからのことだ」と、高慢らしく次の間にあつた反物を持つて來て見せながら、興もない說明をした。
「あんな事を云つて、反物を賣付けようとするんですよ」と、お多代は主婦が茶の間へ引込んでから小聲で云つて、「町の呉服屋よりやこの家で買ふ方が安い事は餘程安いんですの。貴下が若し衣服をお拵へなさるんなら、此處で買つてお やんなさい。その方が餘程得ですよ」
「えゝ。……」香取は氣の無い返事をした。そして短い日の最早暮れかゝつてゐるのを見て、暇を告げて、立上つた。女は引留めもしなかつた。
歸り際に手紙の事を念を押して戸外へ出て、大學前まで何も考へず脇目もふらず、足早に歩いて來たが、ふと心が冴出した。何氣なく聞いてゐた主婦の話の端に疑ひの種が宿つてゐるやうな氣がした。「この柄は仕立てると貴女にはよく似合ふんですよ。何時か着ていらつしやつた袷が一寸こんなのでしたね。どうなすつてあれは？」と訊いてゐたが、それで見ると、以前からの知合ひであつたかも知れない。お多代に對する素振の他人行儀でなさ過ぎるのも不思議だ。
あんな家と懇意な筈はないんだがと、彼れはその家にもまた解けがたい秘密が潜んでゐるやうに思はれて、自分の家へ歸つてからも暫らく想像を逞くしてゐた。

（十）

約束の手紙は翌日一日心待ちにしてゐたが、つひに來なかつた。で、責めるやうな語調で催促の手紙を出すと、やうやく簡單な返事が來たが、「何もかもお知らせする」と云つた言葉は忘れたやうに、只「たいくつして居りますから遊びにお出で下さい」と、卒氣なく書いてゐる。

あれ程堅く云つて置いたのにと、香取は腹立たしくなつて、「先方が困つて賴んで來るまで、此方から行つてやらない」と決心して、これまでの餘計な心盡しを愚かしく思つた、宿受の印を捺したことをも悔いた。

「他人の傷つけた女を助けるために苦勞して、自分の僅かな財産を減らしたりして、加之に知人から變に疑はれなどしては、此上もない馬鹿を見ねばならぬ。何もかも打明けて向うから歎願するやうでなくては、好意の寄せ甲斐がない」と、冷かに自分のしたことを批評する氣分にもなつた。

そして二三日を過した。忘れるやうにと頻りに心を外の事に注がうとして、久しく跡絶えてゐた或友人を訪ねた日、「やまと」へも二晩續けて足を運んだ。先日は耳に留めなかつた女の名も分つて、少しは無駄口を利いて、長居をするやうにもなつた。女の顔は最初の時よりも次第に立勝つて見えた。話してゐる中に、ふと、この女とでも都を離れて淋しい田舎へ行つて見たくなつて、

「何處か連れて行つてやらうか、泊り掛けで」と突如に云つた。

「えゝ、連れてつて下さい」と、女は半ば疑ひながら悦しさうに云つた。

「何處にしよう」と、香取は考へたが、只の海岸や温泉へ行くよりも、世人の信仰してゐる寺か宮かへお詣りして見たい氣がして、「僕はまだ一度も行つたことがないんだが、成田へ行つて見ようか。お前は知つてるかい」

「いゝえ。私まだお詣りしたことないの。……だけど成田山は厭だわ」

「何故？」

「でも二人で彼處へお詣りすると、縁が切れるんですつて」

「まだ切れるも切れないもないぢやないか」と香取は笑つて、「しかし厭なら外にしたつていい。鎌倉へでも……」

「鎌倉？　だといゝわ。私、大磯へも鎌倉へも行つたことないのよ」

女は急に浮々して、一日も早く行きたさうにした。成るべく貴下に御迷惑を掛けぬ様にすると、祝儀や玉の勘定までし出した。

香取はその中電話で日取を知らせることにして、女の家の名と電話番號とを書留めた。そして、もう三度目の馴染でありながら、矢張泊らうとはしないで、止められるのを振切つて、更けぬ間に其家を出た。北風が吹いて外は寒かつた。先日中の穩かな小春日が崩れて、俄かに冬の近づいたのが薄着の膚に感ぜられた。

今年も程なく暮れんとしてゐる。仕事もしなければ、樂しい思ひ一つしなかつた癡人のやうだつた一年が、間もなく過ぎんとしてゐる。彼れはせめて新しい歳を迎へるといふことだけにでも微かな望みを置いて、早くこの厄年のやうな一年の過ぎて、厭な記憶の消えてしまつたらばと思ひながら、空家のやうに寂とした薄暗い自分の家へ歸つた。

歸ると、直ぐに机の上を見て、葉書の來てゐるのに氣付くと、若しやと心を動かしたが、それはお多代からではなくて、湯原からだつた。明日の午後訪問すると知らせて來たのだ。

前觸をして置くほどなら、只遊びに來るのではあるまい。何か用事があるだらうが、お多代

の事で訊きに來るのではなからうか。若しさうだつたら、詰らぬ疑ひを受けぬやうしなければならない……と、彼れはその場合の辯解の言葉を豫め考へて、女のためにも自分のためにも都合のいゝやうに繕はうと企てた。

そして、湯原の話の様子で、直ぐお多代に會はねばならぬかも知れないと思つて、その夜女に宛てて「……こんな譯だから明晩お訪ねする」と、手紙を送つた。

湯原の言葉次第で、却つて女と自分との間の一層近くなりさうな氣もして、明日の午後を待受けるやうになつた。

で、夜が明けて正午となると、時計の針を見詰めながら、戸外の足音に耳を澄してゐたが、やがて下駄の音が家の前に留まつて、快活な湯原の聲がした。香取は稍極りの悪い思ひをして、縁側へ出て客を迎へた。

湯原は茶の間を覗いて、「相變らず達者で結構だね」などと、下女と近状を話合つてから、緩くり書齋へ入つて來た。平生の通りの顏をしてゐる。

「閑靜でいゝね」と、障子を開けて庭の方を眺めたり、机の側に重ねてある書物を引出して見たりして、急に用事のありさうではなかつた。

でも何か言出すだらうと、香取は心に油斷しないで、やがて、遠廻しに細君の様子など訊出した。

「この頃は兎に角落着いてよく働いてるよ。時々例の癖で何か考へては鬱いでることもあるけれど」と、湯原は眞面目になつて、「お多代は君に迷惑を掛けたつてね。あれもどうか片付けるつもりだが……」

そして、相手のさう云つた心を計りかねて、香取が默つてゐると、

「君も時々訪ねてやつて呉れたまへ。あゝして一人でゐると淋しくつて、碌でもないことを考へんとも限らないから」と、湯原は眞顏で云つた。「僕もあれについちや責任を以て相當の處置は付けるつもりだが、兎に角極りの付いてしまふまでは、誰れにも内緒にしときたいんだよ。自分でも成るべく近づかんやうにしてるんだ。何しろ家内があの風なのに、戸田の家でも親切ごかしに突付きたがるんだから、巧く收まることまで傍から壞されて面倒で仕方がなかつた。自業自得と云へば云ふやうなものの、僕も實際困つたよ。しかし先づ圓く事が濟みさうだからいゝが、萬一の場合には君は僕の味方になつて大いに助力して呉れたまへ」と云つて、調子を變へて、「あのことだけは僕の一生の失策だが、まあ大目に見て呉れるさ。一寸した迷ひだからねえ」と笑つた。

香取は聞いてゐる中に、皆なが連類になつて自分を欺いてゐるとのみ思はれて、身體中の血が頭に上るやうだつた。が、ぢつと心を鎭めて、相手の顏を見ないやうに俯目になつてゐた。

そして無意識に返事をしながら、次第に目の前の事を忘られて、追分の家の中がさま〴〵に想像され出した。

「どうだ、先日のあの洋食屋へでも行つて見ようか」と、湯原は暫らくして云つた。

「えゝ。……しかし僕はこれから神田の方へ出掛けなくちやならんのです、三時頃から」

「おや、もう時刻だね」と、湯原は時計を見て、「其處まで一緒に行かう」

と直ぐに立上つた。

香取は否みかねて、厭な思ひをしながら、連れ立つて外へ出た。が、湯原は途々、「今日は遲くまで君の家で遊んでたことにしといて呉れたまへ」と賴んだ。

そして、別れて電車に乘つて香取は神田まで來たが、何處と云ふ目的はなかつた。で、市街の角に突立つて、夢のやうに周圍の動搖を見て

ゐたが、やがて、立つてゐるのが堪へられなくなつて、手近い牛乳屋へ入つて、倒れるやうに椅子に腰を掛けた。

「湯原は本郷行に乗つたのだから、今追分に行つてゐるかも知れない」と氣付くと、二人の姿が醜い様をして目にちらつき、その顏は自分を嘲つてゐるやうに見えた。心に力を入れて拂ひ退けようとすればするほど、いろんな不様な姿勢をした二人が一層色濃く浮んで、外の人間の顏は影が薄くなつた。

「お牛乳を召上るんですか」と、側で催促する主婦の聲で驚いて顏を上げて、

「あゝ」と、香取は懶さうに返事をした。

そして、再び同じ事を繰返して考へてゐると、根が盡きて、見る／＼壽命が縮まりさうだつた。「明日の朝行つて見る。それからの事だ」と、心を宥めたが、すると又會つてどう云つたらいゝかが果しなく案ぜられ出した。

で、此處にぢつとしてもゐられなくて、一息に牛乳を呑んで、直ぐ外へ出た。氣を散らす樣に周圍を見ながら歩いたが、目に觸れる人間の顏は皆佗しい色をしてゐた。

ふと彼れの顏が店先の鏡に映つて消えたが、それが窶れて死相を帶びてゐるやうに見えたので、彼れは身震ひして、逃げるやうに急いで歩いた。

知らず／＼神樂坂まで來たので、「やまと」へでも寄つて休んだら、幾らか氣が晴れるかと思つたが、興もない遠出の話など、浮いた事を聞いてゐられさうではないので、側まで行つて引返した。

また當てもなくブラ／＼歩いてゐたが、ともすると、先にさつと見た自分の顏が見すぼらしく痛ましく思出されてならなかつた。で、ふと目に付いた洋酒屋へ入つて、舶來の葡萄酒を買つて家へ歸つた。そして、コップへ一杯呷つて、醉ひの出るのに力を得た。朽ちた脣を臙脂で色取つて欺くやうに、自分の肌地を酒で染めて隱してゐるのだと知りながら、紅く勢付いて來る顏を見てゐると幾らか慰められた。

やがて怠くなり眠氣さして來たので、彼れは晩餐も食べないで、毛布を被つて假寢をした。不思議にも平生にない熟睡に陷つて、下女に注意されて寢床へ入つたも夢中だつた。薄ら寒くなつて目の醒めた時は、最早眞夜中を過ぎてゐる。下女の安らかな寢息と枕時計の音とが忌はしい鼠の騷ぎの間に懷かしく聞えた。

次第に晝間からの事を彼れの靜まつた心に浮べて見ると、自分で自分の心根が淺間しくもあり、愚かしくも思はれた。お多代と自分との間には何の關係もないのではないか。手頼りのない可哀想な身の上だと思へばこそ、助けてやる氣にもなつたのだが　湯原の方で引續いて世話をしてゐるのなら、自分は構ひ付けないでも安心してゐられるではないか。どうせ初めから緣のなかつた女のために、大切に庇つてゐる自分の心に傷を付けては取返しのつかぬ事になるのだつたのに……。

で、彼れはそれきりで濟ませて、朝になつても訪ねて行かぬことに極めたが、その代りに最後の手紙を送ることにして、ランプを點けて机に向つた。

「……最早一生お目に掛らず候。貴女の將來は如何に成行くか知れねど、以後如何なる場合にもお手紙をお送りなきやう願上け候、上野町の方へは當分近寄らず候へど、萬一貴女の事から悶着を惹起したる際にも、小生は少しも責任を負申さず候。宿の保證もなるべく取消し下されたし」と、一氣に書き下した。

そして、再び寢床へ入つて、溫かい日が枕許に差込むまで起きなかつた。起きたつて世の中に用事もなければ、樂みもなかつたのである。

「思切つて今日にもあの女と話をして見ようか」と、惘々して起きて、落葉の亂れた庭を見ながら、ふとその氣になつた。

で、あの手紙を自分でポストへ入れに行つた次手に、自動電話へ寄つて、度村家へ電話を掛けた。若しい聲が聞えた。

「小菊といふ女はゐますか」

「私、小菊ですよ。貴下何方？」

「僕は香取。先日約束した處へ今日行かうと思ふんだが」

「今日ですつて」と、驚いたやうな聲をして、「あまり急ぢやありませんか」

「都合が惡いんかい」

「さうねえ」と云つて、電話口を離れて家の者と何か話してゐた。

「ぢや、二三日後にしよう……」

「明後日だといゝんですがね、勝手ですけど」

「ぢや、さうしよう」

香取は相手がまだ何か云はうとしてゐるのを耳に留めずに、直ぐに電話を切つた。

（十一）

折角氣乘りのした鼻先を折られて、詰らない氣がして其處を出た。いつそ一人で旅に出ようかとも思つたが、田舎の宿で悄然して時を過しかねる自分の姿が、今から目に見えるやうなので躊躇された。

彼れは賑い都の何處にも、自分の身を落着ける處がなかつた。そして、只歩いてゐると、一度拂退けた雲がまた湧立つて心を鎖したが、すると、昨日まで念頭に置かなかつた湯原の細君が、不思議に懷かしく思はれ出した。何も知らないのだらうかと氣の毒にもなつて、つい訪ねて見たくなつた。

で、湯島の梅月へ寄つて栗饅頭を買つて、それを手土産に持つて行つた。細君は襷掛けで拭掃除をしてゐた。よく見ると、先日よりもまた元氣のいゝ顏をしてゐる。磨立てた頬には艶が出てゐる。

「お一人だとお忙しいでせう」と、香取がお世辭を云ふと、

「でも忙しい方が私達にはいゝんですよ」と快く答へて、「どうせ働くより外に能がないんですからね。本當に因果な性分だ。一日だつて氣樂に遊ぶ氣にやなれないんですよ」

「その方が結句仕合せかも知れない。遊ばうたつて、さう面白いことはないんですからね」

香取は細君が淺黑い手足を動かして、座敷の隅々まで丹念に掃除するのを、邪魔にならぬやうにして暫らく見て居た。大略片付いてから、細君は襷を取つて一息吐いてから、ふと思出したやうに、

「昨日は湯原がお訪ねしましたつてね、大變御馳走になつたと云つてましたよ」と、笑顏をして云つた。

「えゝ」と、香取はドキマギしながら、「湯原君は何時頃に歸りました？」

「隨分遲かつたんですよ。歸つて來て煙草吸つてる中に十二時が打つたんですよ」

「さうですか」

「お宅を出た時がもう餘程遲かつたんでせう」

「えゝ」

それきりで話は外へ移つたが、香取の頭には昨日の三時から十二時までの事が渦を卷いて細君の仕掛ける世間話など耳に入らなかつた。

「この頃湯原君は毎晩家にゐるんですか」と、やがて何氣ない風で訊いた。

「えゝ、用事のない時は大抵家でごろ／＼してますよ。遊びに出るつたつてお金がないんですもの。昨夕は貴下に御馳走になつて、お酒の香ひをさせてましたけど、この頃滅多に他所で飲んで來ることはありませんの」細君は安らかな

目付をしてゐる。
「家にゐてどんな話をしてるんです？　毎日二人ぎりで、話があるんですかね。僕なんか下女と二人でゐて、何か話したくつても種がありませんがね」
「そりや召使ひと夫婦とは違ひますさ。……でも先日雨の降つた晩、湯原が何か一人で考込んぢやつて、氣が鬱いで仕方がないつて、一緒に鈴本へ落語を聞きに行つたんですよ。私一年目に寄席へ入つたのですの」
「ぢや、この頃は此家も平穩無事なんですね」と、香取は何時かの晩の細君の狂人染みた樣子を思出しながら、皮肉らしく笑つた。
　それが不快に聞えたのか、細君は今まで機嫌のよかつた顔を曇らせて、「何故です？」と詰つた。
「いえ、何でもないんです。湯原君が家に落着いてさへゐればいゝんだが……」と言濁しながら、香取は我知らずお多代の事を打明けたさうになつたが、強ひて心を壓へて、「寄席は面白かつたんですか」と訊きたくもないことを訊いた。
「私落語は義太夫ほどに好かないんですけどね、それでも[illegible]はされました。[illegible]であの馬のやうな長い顔した男がゐるでせう。あの男はよく喋舌るんですねえ。私よくあんなに口が動くかと思つて呆れましたよ。それがこんな話なんですの」
　細君は機嫌を直して、さも珍らしさうに「一軒宅」といふ落語の筋を語りながら獨りで笑つた。香取は聞いてゐるのが次第に慵くなつて、つい受答へをするのを忘れて外見をしながら、外の事を考へてゐたが、話が終ると、
「神戸からは音信がありましたか」と、突如に訊いた。
「無事に着いたつて知らせて寄越したきりですよ」
「さうですか」
「あんな女、東京なんかへ來ない方がいゝんですよ。惡い風を見習ふと碌なものになりやしない。私等とも知らなかつたんですけど、田舎でも皆なに爪彈きされてたんですつてね。隨分男狂ひもしてたらしいんですの」
　細君は氣の置けぬ話相手を得たのを喜んで、手厚く待遇して緩くり遊ばせようとしてゐたが、香取は細君の顔を見てゐると、次第に氣の毒なよりも愚鈍に見え出した。これで湯原の家も無事に治まつて行くのかと思ふと、不思議でならなかつた。そして、話をしてゐるのも窮屈[illegible]なつて、急用でも控へてゐるらしく言譯して、間もなく其處を出た。
　豫期に反して細君が些しも感付いてゐないのが、却つて物足らなかつたので、若しも誰れかが秘密を發いて教へてやつたらどんな結果になるだらうと、その後の騷ぎを想像しながら歩いてゐたが、途々お多代らしい女が頻りに目に付いた。胸騷ぎして見詰めると、どれも皆あの女よりは醜かつた。目許にか口のあたりにか、何處かにあれほどの懷かしさがなかつた。するとお多代を見た男は皆忘れがたい愛着の思ひを寄せてゐるやうに思はれた。二三人連立つた湯歸りの藝者にも出會つたが、その歩振りが妙に卑らしく見えたり、水々した顔立が浮ついた淺墓な女のやうに思はれたりした。
　で、彼れは訪ねて行かうと決心もしないのに、風に逆つて追分の方へ足を向けた。そして只その方へ歩いてゐると云ふことだけでも、心に張合ひがあつた。
　門の前に來ると、耳を澄ましながら、二三度行戻りした。矢張物音がしない。門に觸つて見ると、掛金が掛つてゐた。
　で、怖いものに觸るやうにして、そつと叩く

と、内から大儀さうな返事をして、女が門を開けに來た。香取は相手がどんな顏して迎へるかと、平氣を裝つて見入つてゐたが、其處へ現はれた女の顏は、例に似氣なく陰險に見えた。女は淋しい微笑を浮べて挨拶して、「今日は屹度入らつしやるだらうと思つてたんですよ」と云ひながら、急いで座敷へ駈込んだ。

座敷にはまた枕や掛蒲團が出してあつた。手早くそれを片付けてから、箱火鉢を眞中へ持出して、「今日も私お留守番なの。主婦はまた朝から遊びに出てるんですよ」と、呆れたやうに云ふ。

香取は昨夕其處にゐたらしい湯原の姿を目先にチラつかせながら、暫らく考込んでゐたが、

「どうなすつて？」と、女に訊かれたので我に返つて、

「今朝僕の出した手紙はまだ着かないんですか」と、目を据ゑて問詰めた。

「いゝえ。昨日此家へ入らつしやると云ふお手紙を頂いたきりですわ。……今朝のお手紙つて、どんなこと？」

「今に着いたら分るでせう」と、香取は意味ありげに云つた。

「どんなこと？ 何か大事なお手紙？」と女は氣遣はしげに訊きながら、用心深い目で男の樣子に注意してゐたが、やがて俄かに首垂れて可憐らしい目付をして、「私今日こそ何もかもお話しますわ。默つてちや貴下を騙してたやうだから」と、聲を震はせた。

香取は容易ならぬ恐ろしい言葉がその口から出さうに思はれて、今直ぐ聞かない方がいゝやうにも思はれた。

「私、脅迫されてるんですの、昨夕も脅迫されたんですわ」

「何と云つて？……だけど、昨日會つた時だつて、脅迫なんかする人間とは見えなかつたが……あの人はそんな人ぢやないんだが……」香取は湯原と云ふ名を口にするのさへ不快なので、それを避けるやうにした。

「それは貴下がよく御存じないからですよ。初めからそんな人なんですよ」

「で、どう脅迫するんです。何時までも關係を絶たんと云ふんですか」

「えゝ」と、女は曖昧に答へてから、稍心を落着けて、「私ね、どうされたつて關はないから、姿を隱さうと思つてるんですけど。……思案に餘つてることがありますの」

「……」

「私、もう只の身體ぢやないんですの」

女は案外平氣で云つたが、香取は目に見えるものが皆、女も自分も一緒に、地の底へ沈んで行くやうな氣がした、頭がクラ〳〵した。

「ぢや、嫉妬してるんですか」と思はず云つて、自分で自分の聲を疑つた。

で、二人は暫らく口を噤んでゐた。木枯しが庭に吹付けて、サラ〳〵と落葉の轉がる音がした。火鉢の粉炭は火花を散らしてゐる。

「昨夕もそりや恐ろしいことを勸めますの……藥を飲めつて云ふんですけど……私どうしてもあの人の云ふことなんか聞かないつもりですわ」

やがて女はきれ〴〵に云つた。そして目に涙を浮べてゐたが、言難いことを打明けたので心が稍輕くなつたらしく、「私誰れにも知らせないで、一人で屈託して居たんですから、貴下惡く思はないで下さい、自業自得と思はないで下さい。そりや私が惡いんですけど、皆なに憎まれてばかりゐて、味方つて一人もないんですから……貴下にまで憎まれちや、私立つ瀨がない」

香取は女が手を合せて自分一人に助けを乞う

てゐるやうにのみ思はれて、一時疑ひも憎みも消えて、只手に手を執つて思ふ樣泣いてやりたくなつた。外の世間は次第に心から遠ざかつて、只二人が苦しい夢を見てゐるやうだつた。口に出して互ひの思ひを語らなくとも、唇は觸れなくても、心と心とは最早融合つてゐるやうに香取には感ぜられた。
「で、これからどうするんです？」
「どうするつたつて、外に行く處がありませんから、當分此家にゐようと思ひますわ。身體さへ輕くなれば、またどうにでもなるんですから」
「だけど、貴女の身體はどうしたつて元のやうにはならんのだ」
「それはさう—　どうせもう誰れも相手にしては呉れないでせうから、私一生一人ぽつちで暮らすつもりですの」
「—だけど、女が一人ぽつちで東京で暮らせるものですか—」
　香取は女の幽かな希望をも無體に押潰し〱して、最早何處にも助かる道のないもののやうにのみ思込んだ。たとひ男に傷つけられたにしても、相手が[illegible]でさへなかつたならばと、無慈悲な悪運をも悲んで、一事情が分つたら僕も此家へ遊びに來る譯に行かない」と、萎れて云つた。
「こんなお話したから、もう來て下さらないんですわね。愛想の盡きた女だと思つていらつしやるんでせう—」
　ぢや、これでお別れだからと女は氣を引くやうに云つて、せめて今日一日緩くり遊んで行つて呉れと頼んだ。香取も立ちかねて、膝を崩して坐つたり、肱枕で寢ころんだりして時を過した。何時の間にか話は急所を外れて、田舍の思出や此家の夫婦の噂などに移つて、香取の心は次第に鎭まつた。最早底の底まで知合つた間のやうで、何でもない話にも深沈な味が添つた。
　と、其處へ郵便の聲がした。女は受取つて來て、「貴下からのですよ」と封筒を見てゐると、香取は慌てて起上つて、咄嗟に手紙を奪取つて、寸々に引裂きかけた。女は突立つたまゝ呆氣に取られてゐたが、「何故そんなことなさるの。屹度酷いことが書いてあるんだわ」と、やがて恨めしさうに云つて、手紙の反古を奪はうとした。
　香取は取られまいとして爭つて、終ひにその紙片を火の中に投込んだ。女は煙を咽びながら、肩で息をした。
「何も變つたことは書いてやしないんだけど、僕の面前で僕の手紙を讀まれるのは厭だから」
と、香取は快く笑つて、障子を開けて煙を出した。
「貴下は無法な人ね」と云つて、女は飛散つた灰を箒で掃出しながら、「私貴下に差上げたいと思つて、手紙を書いてるんですよ。だけど貴下が御自分のを破つちやつたから、私も破つちまひますわ」と、口元に笑ひを浮べた。
「今其處にあるんですか」と、香取は目を張つて飛付くやうに云つて、「先日詳しいことを書いて送ると云ふ約束だつたんだから、それは僕に見せる義務があるね」
「だけど見せませんよ」と、女は戲弄ふやうに云つて、「私の目の前で私の手紙を讀まれるのは厭ですもの」
「ぢや、家へ歸つてから讀んだらいゝでせう：：本當に書いてるんですか」
「あら、譃だと思つていらつしやるの」と云つて、女は針箱から手紙を取出して、上書を見せながら、「お歸りになる時お渡ししませうね。私二日もかゝつて一生懸命に書いたんだから、

私の記念と思つて大事にしてて下さい」と云つて、袂へ隱した。

「記念が手紙ぐらゐぢや、あまりお粗末だな」

「だつて私何も持つてゐないんですもの……もうお正月が來るんだけど」

香取は今更のやうに部屋を見廻したが、女の所有物で金目のありさうな物は一つもなかつた。先日と同じい洗晒しらしい瓦斯絣か何かを着て、白い指に嵌めた指環も見窄らしかつた。で見てゐる中に、一時の浮付いた心が沈んで、

「僕もこれまでに二三人の女を思つてたことがあつたんだが、何時も何か知らん障礙が出來ては頭を痛めるばかりだつた。氣持のいゝ思ひをして遊んだことなんか、一度だつてありやしない。僕が親しくする者は、皆な悲慘なやうな氣がする」と、ふと、獨言のやうに云つて、「貴女はさう思ひませんか」と、感じを籠めて相手を見詰めた。

が、女はその言葉の意味を判じかねて「えゝ」と輕く答へて、「世の中の事は障礙の多いものですわね」

「實際さうだ。殊に僕は誰れに交際つてても、直ぐに何か知らん障礙が出來て來る」と、香取は獨りで考へ込んだが、すると、知つてゐる人々は皆毒氣を含んでゐるやうにのみ思はれ出した。

「あんまり脅迫するやうだつたら、仕方がない、貴女も身を隱したらいゝでせう。あんな人の世話にならなくつたつて、身の極りはつきさうなものだが…矢張一人ぢや處分が出來ないんですか」と、やがて問詰めると、女は横を向いて、怠さうに身體を崩して溜息吐いた。

で、再び問詰めたが、女は耳を蔽はぬばかりにして、「もうそのお話は止して下さい」と、懶さうに押止めた。

香取は口を噤んで、半ば身を伏せた女が、さも遣場のないやうにその片手を彼れの膝に乗せるのを、ぢつと見てゐた。

が、彼れはやがて身震ひして立上つた。女の手の温味が傳はると急に怖氣づいて、逃げるやうに暇を告げた。女は何氣ない様子で門の側まで見送つて來て、別れ際にふと思出したやうに、袂の手紙を取出して、男の手に握らせた。

やがて鈎金を掛けて女の家へ入つて行く足音を聞いてから、香取は一度振返つて暫らく門の方を見詰めた。そして、手紙を披きながら、表通へ出た。假名の多い分り難い手紙を當推量で讀んで見ると、今打明けて話したやうたことを微見かせてゐるばかりで、豫期したほどの異つたことも書いてなかつた。が只、「毎日心細くなつた時には、貴下のお顔を思出して居ります。そして、私が若しも氣儘な身であつたならと情なく思ひます」といふ終ひの方の覺束ない文字が、彼れの目を惹起けた。

茫然してゐたものが確められたやうで、こんな文字をも喜んで、彼れは手紙を袂に入れて、家へ歸る氣もなく電車の方へ歩いてゐたが、次第に以前と同じ滅入つた氣持になり出した。

「いつそ湯原の考へ通りにして片をつけたら。薬を飲むかどうかしたら」と、ふとその一點にのみ思ひを籠めた。女の身の危險や、湯原との關係は暫らく忘れられて、新に憎らしい邪魔物が其處に現はれてゐるやうな氣がして、たとひ脅迫しようとも、湯原の手でその邪魔物を取除ける工夫をさせたかつた。

で、電車に乗つてからも、その工夫や結果を思込んで、家へ歸つたが、机の上には男名前で小菊からの手紙が來てゐた。堅苦しい男文字で、今朝の失禮を詫びて、今夜にもお出で下さい、お約束の件でお話をしたいと、明晰に書いてある。代筆である上に前後に捩り文句の添

へてあるのが、彼れは厭だつたので、手紙に引寄せられる氣はしなかつた。

そして、その手紙とお多代のとを大事さうに机の引出に仕舞つて、當分は何方へも顏出すまいと決心した。湯原が始末を付けるまで追分へも近寄らぬことにした。子供の處分がどう極るかと氣遣ひながら、どちらにしてもその經過を見るに堪へられなかつた。

で、彼れは以前のやうに、强ひて書物を讀んだり、冬枯の郊外を散步したりして、二三日淋しい日を送つたが、ともすれば胎兒の姿がさまざまに無殘に想像されてならなかつた。夜中の夢には母親に抱かれた可愛らしい子供が見えたり、手足の捥取られた化物のやうな子供が見えたりした。

或朝も目を醒まして、晴やかな日影を見ながら、若い身空で一刻の平和も得られない自分を憐んだ。寒い風にも當てぬやうに、自分の心を庇つて來た一年の休養も何の甲斐も無かつたことを情なく思つた。

「鎌倉へでも行つて見ようかな」と、彼れは氣が進まぬながら、强いて思立つて、自動電話へ行つた。そして、小菊と打合せをして、正午時分に用意をして「やまと」へ出掛けた。

（十二）

「今小菊さんから電話で知らせて來ましたよ。今日入らつしやるんですつてね」と、其處の女中は顏を見ると云つた。

「さあ。行かなくちやなるまいね」と、香取は詰らなさうに答へて、「あの女は運がいゝね、僕にでも出くはさなかつたら、遠方へ連れてつて吳れる者なんかありやすまい。僕だつて何も彼女と行きたいつて譯ぢやないんだが」

「さうねえ」と、女中は眞面目に同意したが、「でも、あの女ならお連れなすつてさう恥かしくはありませんよ。衣服だつて一通り持つてるんでせう」

「衣服なんか粗末な方が却つていゝよ。僕がこんなんだから」

香取は自分の服裝の書生らしくて、藝者を連れて旅に出る人とは見えぬのに初めて氣付いた。そして、外に收入もなければ手頼るべき人もない身で、こんな事に無駄遣ひをするのが愚しく思はれ出した。戀しいお多代に指環一つ帶一筋買つてやらないで、何の興もない女と贅澤な旅行をする自分の心根が分らなかつた。

が、このまゝ止す氣にもなれなかつた。小菊の方では、客が待遠しがつてゐるだらうと思つたのか、二度も電話を掛けて遲刻の申譯をした。香取は急立てもしないで、一時間あまり寢たり起きたりして待つて居た。

と、やがて女中と話をしながら、小菊は階子段を上つて來て、次の室に姿を見せた。黑い眼鏡を掛けた白い顏と、縮緬の羽織と、丸髷とが、香取の目にも派手に映つた。女は極りの惡さうに躊躇してゐたが、「さあ奧樣をお連れ申しましたよ」と、笑つてゐる女中に引立てられて入つて來た。手にはオペラバックを提げてゐた。

「何が入つてゐるんだい、その中に」

「何も入つてやしないわ。だけど、空手だと變ですから」と云つて、女は坐つて、長襦袢の仕立上るのを待つてゐたために遲くなつたと申譯をした。

香取は時間を量つて、女だけ俥で停車場へ向はせて、自分は後から電車で行くことにした。そして、女が家の者の賑かな聲に見送られて行く後姿を、二階の窓から見下してから、階下へ下りて、

「彼女まだ服裝が揃はないね。衣服はいゝが、コートさへ着てゐないし、手袋も嵌めてゐないやうだね」と笑つた。

一でも丸髷がよく似合ひますわね。女振がよくなつて、見違へるやうだ」と云つて、女中と主婦と小さい娘とか、左右からお土産をドッサリと頼んだ。

「お土産よりも、僕は何處へ行くか、何時歸るか分らないよ。二人で駈落しようかね」と、戯談らしくなく云つて、香取は其處を出た。道を急がうとはしなかつた。

久振りに停車場へ來たので、珍らしさうに騷々しい場内を見上げると、端近く出て待つてゐた小菊の姿が直ぐ目についた。

「鎌倉行は今直ぐ出るんですつて」女は側へ來て急立てるやうに云つた。

「何。遲れたらこの次でもいゝさ」香取は緩くりして切符を買ひに行つた。

汽車は横須賀直行で、軍人が四五人乘つてゐた。香取は斷えず窓の外を眺めて、女に向つてはあまり口を利かなかつた。女も大人しくしてゐて、時々小聲で途中の地名を訊くぐらゐだつた。

鎌倉に着くと、最早燈火が點いてゐた。香取は淋しい處をと選んで、材木座の清光館へと俥夫に命じた。學生時代に試驗後の休養のために四五日其處に泊つて、屢々近所を散歩したのだが、それが今記憶から薄らいで、道の左右が明かに思出せなかつた。二つの俥は只淋しい暗がりを曲りくねつて、波の音のする方へ馳せた。

宿屋の玄關へ着くと、二階の海近い部屋へ案内された。障子を開けると、沖の方に斑に浮いた漁火が見渡された。

「淋しい處だわね、私途中が怖かつたわ」女は珍らしさうに周圍を眺めてから、部屋の中に落着いて、「こんな靜かな處に一人でゐたらどんなでせう」と、深く感じてゐるやうに云つた。

「さあ」香取は氣のない返事をした。そして一人で遠い土地へ來てゐるやうな氣持になつてゐた。

「私今は貴下一人が手頼りよ」と、女は斜に男を見上げた。

「ぢや、僕が今夜中にゐなくなつたらどうする？」

「ゐなくなるつたつて、私一緒に隨いて行くから、何處へでも」

「海の中へでもかい」

「えゝ、海へでも山へでも行つてよ」

さう云つて微笑してゐる女の顏を、香取はぢつと見詰めながら、人里離れた淋しい土地へ女一人連れて來れば、あらゆる媚を男に捧げるもののやうに思つて、若しもお多代を誘ひ出したのだつたらと空想し出した。

女中の持つて來た褞袍を着て一緒に湯殿へ下りて、溫かい鹽湯に浸つてゐると、その空想は一層激しくなつた。湯氣に包まれてゐる女には、少しも男を憚る風は見えなかつた。

部屋へ歸つて、女の化粧の濟むのを待つて夕餐の膳に向つた。土地の者らしい女中が庖爪らしく、女の問に答へながら給仕をしてゐたが、香取は一人默つて空腹に舌鼓打つて皿から皿を漁つた。

やがて膳が下げられると、女は火鉢に寄つて、卷煙草に火を點けて男に渡した。

「あの女中は隨分色が黑いわね。お湯から歸りに見てたら、一人も綺麗な女中はゐないのよ」と、侮蔑むやうに云つた。

「初め此處へ案內した女は一寸可愛らしいぢやないか。馬鹿にいゝ目をしてゐる」香取は心に留めてゐないのに、わざとさう云つた。

「貴下あんな顏がお好きなの。私あの女の顏は曲つてるやうに思つてよ」

その言ひ方があまりに眞面目なので、香取は思はず吹出した。

「さうぢやないかしら」と、女は考へて、「こんな田舍で女中なんかしてて、將來はどうするんでせう?」
「女中だつて、それ〳〵先の當てはあるだらうよ。他人のことよりもお前はどうするんだい」
「私? 私ちやんと考へてるわ。何時までも藝者なんかしてゐないの」と、女は直ぐに勢よく云つて、問返されるのを待つてゐたが、香取が只「さうかね」と冷淡に答へて、進んで訊かうともしないのに拍子拔けがして、「私來年一杯で堅氣になるのよ」と、獨言のやうに呟いた。
其處へ番頭が宿帳を持つて來たので、香取は身體を起して、出鱈目に姓名を書留めて、次手に繪葉書を取寄せた。そして、何處へ送らうかと迷つてゐると、女は氣に入つたのを四五枚選んで、袖屏風をして、コソ〳〵何か書出した。
「何處へ出すんだい、お見せよ」と、香取が手を伸すと、女は筆を持つたまゝ遠くへ遁げて行つて、
「私出したい所がどつさりあるのよ。お母さんの家へも、神田の姉さんの家へも……私一度も繪葉書を出したことはないんだから、こんな折に方々へ出したいわ」と云つて、暫らく覺束ない筆を動かしてゐた。が、書終つて太息吐いて、「貴下幾枚書いて?」
「僕は出したい所がないよ」香取は書きかけた一枚を引裂いてゐた。
女は殘つた繪葉書を見比べながら土地の實景を訊いて、明日を樂んでゐたが、ふと思出して、家へ電話を掛けたいと云つて、男の許しを得て階下へ下りて行つた。
香取は一人になると廊下へ出て、闇の中を透かして、心當てに長谷や江ノ島の方を見てゐた。すると、向ひの部屋から若い男と女とが手拭を持つて出て來て、靜かに廊下を傳つて階下へ下りて行つたが、他人に見られて面羞さうに顏を背けた女の素振で、それが新婚の夫婦ではないかと思はれた。
島田に結つた初々しい顏立は、見えなくなつてからも、暫らく彼れの胸に懷かしい影を留めた。人間の幸福はあの二人の中に宿つてゐるやうに思はれた。そして、闇の中に見付けた燈火のやうに、結婚と云ふ事が彼れの心に燦いた。あゝして夫婦の契りを結んで、都を離れて二人のみで旅をしてゐたらと羨ましかつた。
が、妻として目差す女は彼れにはなかつた。知つた女の顏を思出してゐると、お多代の顏のみが意地惡く目の前に迫つて來て、それを搔消すだけの魅力を持つてゐる顏は何處にもなかつた。
と、其處へ階子段に足音がして、小菊が微笑して現はれた。側へ來ると、
「便利なものだわね、こんな遠方から話が出來て」と云つて、男を連れて部屋へ入つて、「私皆なを羨ませてよ。清子さんも松香さんも家にゐたから、交り〳〵お話して來たのよ」
「ぢや、お前の素性がこの家へ分つてしまつたね」と香取は笑つて、「新婚旅行のつもりだつたのに、化の皮が現はれたね」
「どうせ仕方がないわね。だけど私氣をつけて話してたのよ」
「今時分家に愚圖々々してるやうだと、お前の朋輩は皆な賣れないんだね」
「さうでもないわ」と打消して、女は五六人の名を云つて、それ〳〵の稼高や借金を數へ上げた。
それを聞いてゐると、つまり小菊自身が一番の流行妓らしいので、香取は、心では信じぬながら、「藝者つてそんなに稼げるものかね。ぢや何時までもやつてたらいゝぢやないか」と煽てるやうに云つた。
「でも、私なんか生れ付がこんな稼業に向かな

いんですよ」と、女は眞面目に答へて、「私これで陰氣な性分ですからね。姐さんによくさう云はれるのよ。小菊さんは鬱いでていけないつて」

「さうかね、お前ぐらゐだと、藝者として鬱いでゐる方かね。何か心配があるんかい」

「別に心配つてないわ。どうせ藝者してれば、それは厭な思ひすることは幾度もあつてよ。だけど初めから私覺悟してゐるから、さう苦にはしないのよ。それに姐さんには大事にして貰へるし……只ね」と、云掛けて、女は火鉢に擦寄つた。そして、卷煙草に火を點けて、脣を尖らせて不器用に吹かせながら、無邪氣な口調で、「私副食物に好き嫌ひがあつて仕樣がないの。だけど外の人が食べてるのに私だけ食べない譯に行かないでせう。私我慢して食べてますけど、嫌ひな物を出された時は、本當に情なくなつてよ」

「それだけが今の苦勞なんかい」見た所二十歳にもなつてゐさうな女が、それ位のことを苦勞らしく云ふのを、香取は不思議に思ひながら、「ぢや、早く誰れかに落籍されたらいゝぢやないか。そんなお客様は一人もないんかい」

「だつて、厭な人と一緒にゐたかないわ。厭な人と一緒にゐるよりや、藝者してる方が勝しよ……だから私から思つてるの。借金さへどうかなつたら、老婢を使つて小さい家を持つて、彼家の看板だけ借りて勤めようと思つてるの。さうすれば自分の好きな物が食べられるから」

「それは何時のことだい。さうなつたら僕も時々遊びに行くんだがね」

「え、入らつしやい。御馳走しますから……私來年中にはさうなりたいわ」

「僕も來年はもつといゝ月日を送りたいね」香取は自分の心に向つてさう云つたが、ふと打解けた氣持になつて、「お前は今惚れた男があるのかい。一人や二人はあるだらう。いろんな男に會つてるんだから」と、今までになく力を籠めて訊いた。

「そんなこと訊いてどうなさるの。私惚れたことも惚れられたこともないのよ。可哀想でせう」

「だつて僕が惚れてるぢやないか、惚れてゐなくちやこんな處まで連れて來やしないよ」と、香取は眞顔で云つて、「お前はさう思つてゐないのかい」

「まさか……」と女は笑ひながら、何と答へようかと逡巡つてゐたが、やがて品をつくつて、「こんな稼業をしてる間は惚れたつて詰らないわね。どうせ藝者だからつて、私達の云ふことは眞に受けて貰へないから」

「さうでもないさ」

「それに私、思つたことも口に出せない性分なの」

「ぢや、僕に惚れてても口に出しちや云へんのだね」

「えゝ、さうなの」と、女は戲談らしく言紛らせた。そして、男の樣子の眞面目なのに當惑して、悅しがらせに艶をつけようとしたが、相應しい言葉も見つからなかつた。で「今朝家の姐さんがね、小菊さんはいゝお客様が出來て運がいゝつて、今朝さう云つてよ」と、わざと重々しく云つた。

「僕でもいゝお客様かね」と、香取は擽つたいやうな氣がして、この先女の爲になる氣遣ひはないと、木地を剝出してしまひたくなつたが、折角かうして二人連立つて來て居りながら、互ひの興を醒ますのも愚なことだと思返した。そして、女の小さい自負心を傷つけるやうなことを口に出すよりは、誰にでも親切な口を利くやうに心を決めて、「僕もお前が自由の身だつたら世話をして遣るんだがな。まさか借金を拂

つてもやれないけど」と、眞實らしく云つた。
「見ていらつしやい。今に自分で氣儘な身體になりますから……さうしたら私貴下のお家へ行つてよ。行つてもよくつて」と、女も眞實らしく云つた。
「あゝ」
「東京へ歸つたら、一度貴下のお家へ行つて見たいわ。いゝでせう」
「下檢分かい。そして家が汚かつたら考へ直さうと云ふんだらう」
「あら、家なんかどうだつていゝわ。私いゝ家にゐたいともいゝ衣服を着たいとも思はないわ。只氣樂に暮らせればいゝと思つてよ」
「若い癖に悟つてるんだね。ぢや春着の心配もないだらう」
「えゝ」と女は同意しかけたが、ふと心に雲が掛つて、「でも藝者してる間は、身裝を構はない譯に行かないわ。無理にでもいゝ服裝してる方がつまりは得よ」
「あの土地ぢや、お前なんかいゝ服裝をしてる方ぢやないか」
「さう！　だから何處の宴會へ出てもね、さう恥かしい思ひしたことなくつてよ。……だけど、私今年中に是非揃へたいものがあつてよ。お召のコートとね——セルは持つてるけどあれは厭だわ——それに小ちやい金時計を買ひたいわ。お向ひの山田屋さんが先日からいろんなのを持つて來て見せるの。その中にこの位の」と、指で可愛らしく輪を造つて見詰めて、「そりやいゝのがあるの。私あればつかりは他人に賣らせたくはないわ。どうせ彼處へは一度にお金を拂はなくつてもいゝんだから……」
女の調子づいて喋舌るのを、香取は神妙に聞いてゐた。が、進んで女の喜びさうな返事をも與へなかつた。言葉が切れてからもぢつと耳を澄ませてゐると、汽車の音が靜かな空を破つて幽かに聞えた。長い夜ももう更けたかと思つて、自分の持つて來た銀側の懷中時計を見ると、まだ九時になつたばかりだつた。
「まだ眠くはないね。何か面白い話をして呉れないか。お前の惚氣でも聞いてやるよ」と云つて、彼れは次の間へ床をのべに來た女中に命じて酒を持つて來させた。そして二三杯ガブ呑みしてから女に猪口を差して、面白い話をと迫つた。何かロマンチックな話がその艶のいゝ脣から洩れるやうにと望んだ。
「面白いお話つてどんなこと？」女は迫られるほど退避いて、「面白いことつて些ともないわ」
「ぢや、悲しい話でもいゝさ。泣きたいやうな目に會つたことぐらゐあるだらう」
「えゝ、それは幾度もあつてよ。だけど、そんなお話したつて詰らない」
「ぢや、僕が話して聞かせようか」
香取は素直な聽手に向つて、自分の昔からの戀物語をしたかつた。左程でもない事にも色艶をつけて話して、聽手に自分と同じ感じを傳へたかつた。さうして快い受答へをされゝば、寂しい心を慰められて自ら元氣づく樣に思はれた。で、暫らく心を凝らして過去を呼起しながら、
「かうしてお前と差向ひになつてると、他の女の顏が二つ目につくやうだよ。どうしても僕の頭の底から消えないんだね。何だか其處にゐるやうな氣がするよ」と云ふと、
「何故？　變だわね」と、女は何の氣なしに自分の左右を見た。
「お前は一度思込んでた男でも、別れたら直ぐ忘れられるかい」
「それや忘れやしないわ。本當に思込んだら忘れられるものぢやないわね」
「女もさうかね。女の方が男よりは忘れつぽいやうな氣がするけれど。……僕はこの頃も戀

しい女が一人ゐるんだ。その女よりやお前の方が器量がいゝし、齒並もいゝんだが」と、香取は其處にゐる女の顏と目に見えぬ女の顏とを見比べてゐると、女は顏を背けて、

「厭だわ、そんなに見てゐちや」と、下卑た調子で云つた。

「まあ辛抱して大人しく聞いてて呉れ」と香取は賴むやうに云つて、眞面目で話出さうとしたが、

「お惚氣ならもう澤山よ」と、女は手を振つて、浮薄な笑ひをした。

それを見ると、香取は急に興が醒めて、最早話をする氣もしなかつた。で、殘つた酒を飲干してから、横になつて目を瞑つてゐた。

「貴下の顏は眞赤よ。眠いんでせう、もうお休みなさいな」女は側へ顏を摺寄せて云つた。

香取も寝るより外に仕方がないので、力なく立つて柔かい蒲團の中へ入つた。小菊は女中を呼んで、部屋を片付けさせてから、便所へ行つたやうだつたが、やがて歸つて來ると、「どの部屋も燈火が消えて、もう皆な寝てるわね。東京には今時分寝てる家なんかありやしない」と獨言のやうに云つた。

そして、暫らくすると、「貴下、此方は溫かになつてよ」と、呼醒ます聲が香取の耳に入つた。が、彼れは返事をしないで、酒の氣を吹出しながら、闇の中に動いてゐる自分の心の影を追つてゐた。其處の寝床にゐる小菊の寝姿よりも、追分の家や、今見た向ひの部屋の新夫婦などが、いろ〱に想像に浮んだ。で、彼れは絹夜具に包まれながら、矢張寝苦しかつた。

戸の外では侘しさうに犬が長吠えをしてゐる。

「よく眠てるのね」と、女は獨言を云つて欠伸をした。

（十三）

翌朝女中が火を入れに來るのを待つて、彼れは寝床を離れた。鹽湯で溫まつて二階に戻ると、溫かい日が廊下に差込んで、頬に觸れる鹽風も氣持がよかつた。で、障子を開けたまゝ、磯の茅屋越しに穩かな海を見下しながら、今日の道順を考へてゐると、女は次の間でお化粧をしながら、土地の名所を訊いたり、煩さくお土産の相談をしかけたりした。

「日が短いから、ゆつくり見物は出來ないぜ。肝心な名所だけ見たら、江ノ島へ廻つて、今夜東京へ歸ることにしよう」と、香取は豫定通りに二三日を此處で送る氣にはとてもなれなかつた。

「そんなに早く？」と、女は意外に思つて、折角の旅だから今一日延してはと、二言三言逆つて見たが、逆ふほど男の決心は堅くなるばかりだつた。

さう極ると、一刻も無駄にするのが惜くなつて、女は急いで身裝して、食事をも手早く濟ませた。

そして、向ひの新夫婦が俥を連ねて出て行つた後で、二人は歩いて海岸の方へ向つた。濕つた細い道を通拔けて、浪打際へ出ると、香取は長谷から稻村ケ崎へと、うろ覺えの名所を指差して教へた。女はそれよりも足許の貝殼を珍らしがつて、氣に入つたのが目に付くと、立留つて拾つては手巾に包んだ。そして、駈出しては男に追付いてゐたが、次第に息が苦しくなつて、

「私足が怠くなつて轉びさうよ。少しの間休ませて頂戴な」と、男の手に縋り付いた。

「ぢや、僕が手を牽いてやらうか」と云つて、香取は足を緩めて連立つて陸へ上つたが、ふと氣付いて見てゐると、引摺つて内輪に歩んでゐる女の足取は弛慢がなくて、如何にも卑しい勤めをしてゐる女らしかつた。顏はまだ明るい日に

曝しても艷々しく見えたが、足取は色を賣るに疲れてゐる女としか思はれなかつた。
　すると侮蔑の念がむら／＼と湧上つた。人目に睦じさうに歩いてゐると見られるのも厭だつた。で、通掛りの俥を呼んで、長谷まで急がせることにした。
　大佛と觀音とを見て、直ぐに電車に乘つて江ノ島へ向つたが、彼れの心にはまだ電車のなかつた時分に、草鞋穿きで材木座の宿を出て、歷史で覺えてゐる名所古蹟に殘らず立寄つて、汗みどろで七里ケ濱を歩いたことが、四邊の景色を見るにつれて懷かしく思出された。あの時分は星月夜の井で渴いた喉を潤ほし、力餅で饑を凌いだのだつたがと思ふと、女などに心を累はされなかつた初心な昔が戀しくなつた。一何だ女なんかを連れにやがつて一と、藝者など引張つて見物してゐる男を見ると、竊に嘲つてゐたものだが、今は彼自身が其嘲らるべき一人になつてゐる。
　が、今の彼れにはそれを嘲るよりも、むしろこんな女でも道伴れにしたいほどに心の淋しいのが悲しかつた。
　乘合せた客の中にあつたが、土地の者らしい脚絆をつけた中年增は、小菊の頭の髮から足の爪先までに目を注いで、やがて橫目で男をも見下した。
　電車を下りると、藤澤の方からの電車も着いて、江ノ島行らしい客が四五人下りた。その中の小柄な年增を見ると、小菊は、「私の知つた人がゐてよ。困つちやつた」と、小聲で云つて、道を避けようとしてゐたが、先方が橫目で此方を見てゐるので、急に笑顏をつくつて側へ寄つて「あら、お師匠さん暫らく」と、會釋した。
「おや」と、年增は今氣がついたやうな顏をして、「此頃は何方?」
「ずつと遠方ですの」
　二人は並んで歩きながら、何彼と話出したが、香取は一人離れて先へ進んだ。橋近くなつてから、小菊はやう／＼追付いて「あんな人に會つて厭になつちまふ」と云つて、そつと後を振返つた。
「誰れだい、あれは」
「常磐津の師匠よ。私去年までお稽古に行つてたんですけどね、そりや厭な人なの。後で乾度私のことを連れの人に話してるでせう。いゝ加減なことを云ふ人だから」
「ぢや、お前は何か後目たいことがあるんだらう?」
「あら、さうぢやないわ。私後目たいことなんかなくつてよ」と、女は目に力を籠めて云つた。
　長い橋を渡つて、島へ着いた時分、最早正午を餘程過ぎてゐた。香取は岩屋まで坂道を上下するのが煩はしくて、「お前も疲れたやうだから、晩までこの邊で休んで歸らうぢやないか」と、女を說伏せて、眺めのよささうな宿屋へ入つた。
　女は足の疲れよりも、またあの年增に會ふのが氣になつて、話の種にと思ひながら、强ひて島巡りをしたがりもしなかつた。
　七里ケ濱が眞向うに見渡される二階の一室に落着くと、女は障子を開けて、今來た道を眺めながら、
「名所つてさう面白いものぢやないわね」と云つた。
「さうだとも」と香取も同意して、女の側に立つて、人氣のない小舟が二三艘波に搖れてゐるのを見下しながら、「お前なんか、こんな淋しい處へ來るよりや、東京で芝居でも見てた方がよかつたらう」と云ふと、
「さうでもないわ。氣が清々してよ。誰れにも氣兼をしないで、こんな土地で暮らしてたら、

壽命が延びるだらうと私思つてよ」
だけど、かう云ふ名所へ來てると、誰れかしら知つた人に會ふぜ。日に一人ぐらゐはお前のお客が見物に來るだらう。今もあんな薄氣味の惡い婆さんに會つたし」と、香取は皮肉らしく云つたが、ふと思出したやうに、「お前は三味線が巧いのかい。一度も聞かなかつたが―」
「私些とも彈けないの」と、女に早口に空々しく答へたが、やがて火鉢の側に坐つて、「藝者になる前から、常磐津は隨分習つたのよ。厭で厭で仕樣がなかつたのに、お母さんに責められて、無理にお稽古に行かされてたのよ」
「ぢや、お前を初めから藝者にするつもりだつたのかい?」
「さうでもないわ。だけど、私お稽古しててよかつたの。身に藝がなかつたら、今時分どんなになつてたか分らなかつたのだけど」と、女は獨りで何か感じてゐた。
この女にも祕密があるのかと思ひながら、香取は退屈凌ぎに女の生れた土地や親兄弟のことを訊いてゐたが、少しも興は湧かなかつた。
そして、一日の旅も長く東京を離れてゐるやうで、留守中に異つた事でも起つてゐるさうに思はれてならなかつた。で、食事を濟ますと、直ぐにも歸りたがつて、
「かうしてても話もないし、矢張東京がいゝね。やまとへ行つてお前の三味線でも聞く方がいゝよ」と促すと、
「さう、ぢや今夜は彼家へ泊つていらつしやい」と云つて、女も快く應じて歸支度をした。
宿を出ると、土産にいろんな貝細工を買つたが、その嵩張つた包は香取自身の手に提げた。女は流石に心殘りのされるのか、兎もすれば島の方を振返つて、見殘した處を男に訊いてゐた。
「今度誰れかに連れて來て貰つた時に緩くり見物するさ」と云つて、香取は道を急いで、藤澤から汽車に乘つた。そして、汽車の進むにつれて、今まで見てゐた景色は、次第に頭の中に薄らいで、東京の知人の顏が濃く浮んで來た。
新橋に着くと、最早周圍は夜だつた。底冷い風が頰に染んで温かい飲料と火鉢が戀しかつた。で、彼れは電車で直ぐに歸らうとしたが、女は寒さうに身體を縮めながらも、何かと銀座で買物をしたがつた。「やまとの姉さんに何か買つてやらなくちや惡いわね」と、謎を掛けるやうに云つて、氣の利いた品物を考へ出した。
「其よりお前の手が冷さうだから、手袋でも買つといで」と云つて、香取は仕事なしに女に紙幣を渡して、自分は懷手をしながら、天下堂の前に風に背いて悄然立つてゐた。そして、あまり手間取るので、其處等の店先を覗きながら行戻りしてゐたが、何を見ても自分に買ひたいと思ふ程の慾は起らなかつた。目を凝らして品物を選分けてゐる客の顏付が不思議に見えた。
「お待遠樣」と、待ちあぐんでゐる所へ女は出て來て、悅しさうにして、「此處には何でもあるのね。私迷つちやつた」と云つて、再び貝細工の包を男に持たせながら、「殘つたお金で貴下のお金入れを買つたんですよ。あんまり汚れてて見つともないから」と、出して見せたさうにしたが、香取は押留めて直ぐに電車に乘つた。
女が勢づいた聲をして、いゝ、やまとの格子戸を開けると、驅け出た女中はあまり早いのに驚いて、「面白かつたでせう」と云ひながら、意味ありげに二人の顏を見比べた。
「よく歩いたのよ、休む間は些ともなかつたの」と、小菊はさも疲れたやうに云つて、見た事聞いた事を誇張して、留度なく話出した。「此方はかう云つたの、あゝしたの」と、男の方を目差して、さも睦じかつたらしく、女中の前で噂したが、それは香取の耳には全然他人事のやう

に聞えた。

やがて彼れは其家の風呂に入つたが、その間に小菊は家から持つて來させた黑い襟の懸つた衣服に着替へて、氣樂さうに女中を相手に旅の話をして笑つてゐた。

「鳥でも取つて吳れ。食事して今日は早く歸るんだから」と、香取は風呂から出ると、直ぐに云付けたが、女は睨むやうな目付をして押留めて、「姐さん緩くりでいゝんですよ」と、側の女中に云つた。さうして、自分の家の半玉を二人呼ぶやうにと男に强請んだ。

「ぢや、お前の好きなやうにするさ」香取はどうせこの後滅多に來るのではなしと、さして爭ひもしなかつた。

でも、心置きなく落着いて遊んでゐようとはしないで、見榮えもしない半玉を前に置いて、一緒に食事をしてから、遲くならぬ間に家へ歸つた。

下女は戶締りをして、行火を入れて寢てゐた。長く家を空けてゐたやうな氣がしたので、何か變つたことはなかつたかと、茶の間から座敷を注意したが、家の中は出て行つた時のまゝだつた。座敷の火鉢には煙草の吸殼が汚く亂れてゐる。

「誰れも來なかつたかい」と、火種を持つて來た下女に訊くと、

「いゝえ、誰れも來ません」と、下女は何時ものやうに素氣なく答へて、蒲團を敷いて行つた。

香取はまだ眠くはなかつたが、机の前に坐つてゐても果しがないので、間もなく冷い夜具の中へ藻繰込んだ。そして、目を瞑つて興のなかつた旅中の事を思出してゐたが、すると、一緒にゐた間よりも、やまとから歸つた後の小菊の有樣が一層心に留つた。今時分何處へ行つてゐるだらうと想像されて、厭な氣がし出した。わざ／＼旅へ連れて行つて、氣儘をさせて置きながら、歸つて來ると、その女はその夜から外の客に呼ばれてゐるのに氣付くと忌々しくなつた。これまではやまとの格子戶を出ると、女の身の上などは直ぐに忘れて、些しも心の蟠りにはならなかつたのに、今夜に限つて不思議に枕許に影を差した。

で、「もう二度と彼女は呼ばない」と、心の中で憎むやうに云つて、その姿を搔消すのには可成りの時が掛つた。

（十四）

翌日から香取はまた暫らく沈默の日を續けたが、お多代から幾日も消息のないのが不安心で、日々それぱかりを待設けてゐた。湯原の目に觸れるのが氣になつて、此方からは立入つて手紙も出しかねたが、女の方で自分を輕んじてゐる筈はないのに、何も知らせて來ないのは變だと思はれた。すると女の體に若しや異狀でも起つてゐるのではなからうかと案ぜられて恐ろしくなり出した。湯原の勸めには從はないと云つてゐたが、萬一どうしたか分りやしない‥‥。

で、樣子を見極めて來ようと思ひながら、痛ましい女の身體を見るのがいぢらしくて、一日一日躊躇してゐると、或朝湯原が訪ねて來た。矢張不斷の通りの脂切つた顏をしてゐて、瘦せてもゐなければ、神經を疲らせてゐる風も見えない。

どんな事をしてゐても、心の苛まれず肉體の磨滅らされないこんな男を見ると香取は羨むよりは、小憎らしく思つた。

「この頃追分の家ではどうしてゐます？」と、彼れは相手の言出すのを待ちかねて訊いた。

「相變らずだらうね」と、湯原は冷淡に答へたが、やがて微笑しながら、「一寸寄つて見ようと思つてるんだが、どうだ、君も一緒に行つちや。僕の家よりや彼家の方が氣樂でいゝだらう」

「えゝ」香取は默つて考へてゐたが、たとひ厭な思ひをしようとも、いつそ湯原に隨いて行つて見ようかとも思つて、「行つてもいゝんだが」と曖昧に答へて、「しかし、何時までも彼家に置いとくんですか」

「當分仕方がないが、あれで巧く落着いて行きさうだよ。妙なものだ。こんなに無事に濟むものなら、何も初めから慌てなくつたつてよかつたのさ」

「ぢや、貴下の家ではもう波瀾は起らないんですね」

「波瀾どころぢやない、天下泰平さ。今少ししたら僕の遣口を詳しく話してもいゝが、僕は何をやつても家庭の平和だけは亂したくないからね」と、湯原は誇り顏で云つたが、ふと言難さうにして、「それについて君に折入つて賴みたいんだが今月中幾らか立替へて貰へまいかね。この頃餘分の收入がないから、家内に祕密で融通することが出來んので困るよ。どうせ近に年末賞與があるんだから、決して迷惑を掛ける氣遣ひはないんだが、どうだらう?」

その謙遜した言葉を香取は直ぐには斥けかねた。此方の懷中に多少の餘財のあることを見拔いてゐるし、以前の關係を腹に持つてゐるのだと氣付くと、穩かに賴みを斥ける口實は見付かりさうでなかつた。で、迷惑さうにして、分明した返事をしないでゐると、湯原は只の五圓でも三圓でもと、次第に値下げをして、「實は今日明日と差迫つてるんだが」と、相手の同情を求めるやうに云つた。

「僕は今幾らも持つちやゐないんですよ」と、香取は不承々々に机の引出から、小菊の買つて吳れた蟇口を取出して、湯原の目の前で開けて見せて、その中から欲しいだけ拔取らせた。

「皆借りる譯にも行かないね」と、湯原は照隱しに微笑しながら、中の物をそつと引出して、「酒落れた蟇口だ」と、口金の音をさせて面白さうに眺めてから、机の上に返した。

「高い蟇口だからね」と、香取は呟いたが、湯原はそれを耳にも留めず、

「君も行くかね」と誘つて、もう浮腰になつた。

強ひて勸める風はなかつたが、香取は二人の様子を見たくもあり、自分一人家に取殘されるのも忌々しくて、一緒に家を出た。そして、途中であまり話をせず、二人別々の思ひに耽つてゐたが、追分に近づいた時分、ふと、

「貴下は心から彼の女と分れる氣になつてるんですか」と、香取は眞面目に訊いた。

「さうだとも。何故?」湯原は足を緩めて間へ寄つて來て、「つまりは別れるより外に僕としていゝ方法はないぢやないか。君のやうに獨身ぢやないんだからねえ……僕も今まで獨身だつたらよかつたかも知れないよ」と、笑ひに紛らせて、「僕も可成り道樂をしたけれど、一度も信用を無くするやうなことはしなかつたからね。今でもそれだけは注意してるよ」

「しかし、男女の關係がさう簡單に片付くものでせうか。何方にも傷がつかないで濟むんですかね」

「そりや當人の量見次第さ。だけど大抵は綺麗に收まつて行くらしいね。僕なぞ一體混付くのが嫌ひだから、何時も後先見ずの無分別はしないんだが、人間にはつい魔が差すことがあるんだよ」と云つて、湯原は何か感じたらしく、「最初僕の方でどうしようつて氣は些ともなかつたのに、自然にさうなつたんだからね。決して皆なが邪推してるやうに僕に惡意があつたのぢやないよ。あれは去年の秋のことで、雨が降つてた晩だつたが……」

と、その馴染めの様子を話さうとしかけたので、香取は耳を澄ましたが、湯原は急に心變りして、「そんな話も馬鹿々々しいね」と話を外

した。

　そして暫らくして、「僕は今の女房と關係してた當座は、決して夫婦になる氣ぢやなかつたんだよ。それが相手があんな風だつたから、何時までも離れられなくなつちやつたが、今になつてつく〲後悔するよ。いつそあの時分に思切つて少し手荒なことをやつとけばよかつたんだが、僕はどうも不人情なことの出來ん性分だから困るよ」

「ぢや、これまで貴下の方から女に未練を殘したことはないんですか。何時も女に付纏はれてたんですか」

「何時もつて、僕に付纏つた女は噂より外にありやしない」と、湯原は生眞面目に答へた。そして、酒屋の店先から聲を掛けて、直ぐに例の奴を屆けて呉れと命じた。

　隱れ家の門を入ると、香取は遠慮して少し離れてゐたが、湯原は緣側から上つて、「今日はお前の好きな人を連れて來たよ」と笑つて、自分で火鉢や座蒲團を眞中へ持つて來て座をつくつて、「君は其處へ坐りたまへ」と、突立つてゐる香取を指招いだ。

　お多代は輕く挨拶して、「上野町へ入らしつたんですか」と、不思議さうに二人を見くらべて訊いたが、その顏にも部屋の樣子にも、香取が豫期してゐたやうな異狀は些しもなかつた。

「今日は緩くり香取君と飮むんだから、主婦に相談して何か取つて來て呉れ」

　湯原はかう云ひながら、火鉢に炭を盛つて胡坐を搔いて、落着いて煙草を吸出したが、ふと何か思出して、次の間へお多代の後を追つて行つた。襖の間から後姿を見せて、ヒソ〲立話をした。やがて女を宥めるやうに云つてゐたが、女は「では勝手におしなさい」と、最後に傍へ聞えるやうに云つて、臺所の戶を開けた。不機嫌な顏をして門を出て行くのが座敷から見えた。

　でも、湯原はニコ〲して座敷へ戾つて、「我儘ばかり云つてやあがる」と、呟いて、「これで僕一人で來ると、時々煩さいことを云はれて困るんだが、今日は君が來て呉れて丁度よかつた。久振りで氣樂に飮めるよ。僕の家の方が君も氣が置けなくつていゝだらう」と、左右を顧みながら、獨り悅に入つた。

　そして、其處へ茶を入れて來た主婦を側へ引据ゑて、香取を自分の腹心の子分でもあるやうに吹聽して、「この人も女に掛けちや却々隅に置けないんだよ」などと、次第に浮ついて、ゴールデンバットの臭い煙の中で、洒落を云つたり、主婦を冷かしたりし出した。

　その不斷と異つた燥ぎ振を、香取は珍らしさうに見てゐたが、次第に見苦しさに堪へられなくなつた。と、日頃お多代を相手に湯原がこの部屋で戯れてゐる有樣が、いろ〲に想像され出して、ぢつとしてゐられぬ程に淺間しさ、忌らしさに心が震へた。湯原の骨太い毛の濃い手首や、濁つた白目や、身體中から蒸發してゐる人間らしい臭氣が、毒々しく胸に迫つて來た。

　あらゆる醜いものを寄集めて人間の身體がつくられてゐるやうに思はれた。かうして色慾に浮れて孕ませて、同じやうな醜いものを殖して行く……

　ふと夢を醒すやうに戶の音がして、お多代の姿が次の室に見えた。

「早い事にして頂きたいね。喉が鳴つてるんだぜ」と、湯原は調子づいて云つて、側にゐる主婦にも手傳ひを賴んだ。

　が、騷ぎ立つほどの御馳走もなかつた。剝げかゝつた一閑張の食卓には、刺身の外に菜葉の茹でたのや佃煮が並べてあるばかりだつた。

　でも、湯原は悅しさうに猪口を取つて香取にも

差した。「お前は此處に坐つてお酌をしたくちやいけないよ」と、稍もすれば次の室へ避けたさうにするお多代を引留めては、二人に酌をさせた。

「僕はもういゝんです」と、香取は二三杯飲んでから、猪口を押退けて、手を振ると、

「では、もうお止しなさい。お酒なんか召上らん方がいゝんですよ」と、女は柔しく云つて、「何時までも飲んでる人、私大嫌ひ！」と、眉を蹙めた。

「さう惡く云ひなさるな。まあ氣持よく飲まして呉れ」と云ひながら、湯原はへゝら笑ひをして、「散々おれに心配させやがつて。好きな酒ぐらゐ默つてても飲まして呉れたつて罰は當らないぜ」

「ふゝん」と、女は冷笑して、無愛想に酌をして、「心配々々つて、そんなに心配が自慢なの、貴下は男らしいからね」

「まあ待つて呉れ」と、湯原は滑稽な手付をして押留めて、「人前だから、今日だけはおれの棚卸しは止して呉れ。酒の肴にするにや、お前の口説は些し鹽が辛過ぎるよ」

「一人前だと、和泉町の義姉さんの前でも誰れの前でも、縮上つてるんでせう」

「其處は男の智慧だね。男つてものは世間があるから、さう無法なことは出來ないさ。信用が大事だからな」と、湯原は香取の方を覗いて、「ねえ君、さうだらう」

「えゝ」

香取には二人の言合つてゐる意味が分らなかつたが、機嫌を取るやうな男の言葉を、女が押潰すやうにしてゐるのが小氣味がよかつた。湯原の手に持つた猪口からは、滴が垂れてゐる。

「大した信用だわね」と、お多代は口元に微笑を湛へながら、横へ向いて獨言のやうに云つた。

その拗ねた素振を湯原は宥めかねて、手酌で續飲みをし出した。で、暫らく部屋の中には聲が消えてゐたが、そこへ主婦が銚子の代りを持つて來て座の白けてゐるのを見ると、取做し顔に、「お熱いのを一つ」と、皆なに酌をした。

「主婦も一杯おやりよ」と、湯原は急に勢付いて、「飲食には人數の多いほどがいゝよ。主婦だつて枯木も山の賑ひと云ふからね」と、口輕に云つた。

主婦は湯原の相手になるほど賑かな口は利けなかつたが、酒は可成り飲める方らしく、辭退しながら杯の數を重ねて、肥つた頬を赤くした。そして、隣の官吏の老人の嫁苛めの噂をしてゐると、お多代は話の間にそつと茶の室へ入つて、襖を締めてしまつた。

「僕はもう歸りませう」

先きから居づらくなつてゐた香取は最早辛抱し切れなくなつて、立上つた。

「あんまり早いぢやないか」と云つて、湯原は今まで忘れてゐた香取に目を付けたが、强ひて引留めようとはしなかつた。そして、縁側まで送つて出て、「今日も君の家で遊んでることにしとくから、そのつもりで」と耳打した。

香取は霜融でべたつく庭を急いで横切つた。門を出ると、酒臭い唾を吐きながら鼻紙で下駄の泥を拭つてゐた。すると、ふと、後に足音がして靜かに門が開いた。怖いものでも見るやうに、そつと首を振向けると、目に愛嬌を湛へたお多代が、明るい日光の中に浮出てゐた。

「僕に用事があるんですか」と、香取は聲を潛めて思はず周圍を見た。

「其處までお送りしませう。醉拂ひに取合つてても詰らないから」と云つて、女は自分から男を誘ふやうにして表通へ出て、「あんな家に一日ぢつとしてると氣が腐つちやつてよ。何處へでも行つて、淸々した氣分になつて見たい」と、

溫かい町を遠く目を据ゑて見た。

「だけど、湯原君を放散らかしてちや惡いでせう。斷つて來たんですか」

「それはいゝんですの。私晩まで何處かへ行つてゐたいんですけど」

さう云ひながら、男の側に隨いて來た。香取は相手の顏をも見ないやうにして、暫らく默つて歩いてゐたが、女の下駄の音や衣服の擦れる音が、心を唆すやうに耳に響いて來た。それを避けるやうに、思はず狹い橫道へ曲つたが、女の足音は矢張隨いて來た。で、何時まで默つてゐられなくて、

「あれからどうしたんです？」と、訊く氣もないのに訊いた。そして、女が何か答へてゐる間に、左右の二階家を見上げながら、其處に一緒に上つて行つて、あの日の差した窓際に二人差向ひで坐る……その手順を空想してゐた。

ふと目を下へ移すと、女は柔かい肩から懶さうに手を垂れて、重たげに首を傾げてゐた。思ひなしか今日は帶のあたりが膨れてゐるやうに見えたが、それが香取の心を女から背かせないで、却つて手強い刺激となつて、次第にジタバタする思ひをさせた。

「あゝ、こんな處まで來ちやつた」と呟いて、女は不安らしく今來た道を顧みて、

「何處まで行つても仕方がありませんわね。私もう歸りますわ」と立留まつた。

香取も立留まつて、何か云はうとしたが、思つてゐることが喉に絡まつて言葉に現はせなかつた。女は男から何か利益になる事、手頼りになる事を云はれるのを待設けながら、

「歸つてまた厭なことを聞かされて……」と、獨言のやうに云つて、「貴下ずつとお家へお歸りなさるの」

「えゝ、他方に行く處もないから」

「私貴下に聞いて頂きたいことがどつさりあるんだけど、今日は染々お話も出來ませんわね。でも近にまた來て下さるでせう」と云つて、女は重ねて念を押して、「では左樣なら」と、目に力を入れて男の顏を見てから元の道へ歸つた。

何のために此處まで見送つて來たのやら、女の心持が香取には分らなかつた。が、それはどうあらうと、二人が人目の煩さい都の中で歩いたり話したりしてゐるのが窮屈に感ぜられた。其處等に動いてゐる樣々の人間や、目に見えぬ知人の顏や、明るい日光までも、自分の自由を妨げたもの、幸福を奪つたものとして、憎々しかつた。

都が荒野になつて、世界が闇だつたら……彼れの今の抑へ難い慾望はその外になかつた。で、彼れは牴牾かしい思ひをして、賑かな町を心寂しく通つてゐたが、やがて「やまと」の格子戸を開けた。

此家の二階にも日が斜に差込んでゐた。窪地を隔てて、高臺の西洋館が木の葉の間に白く見えて、淡い烟が靜かに漂うてゐる。

「もう直きお正月ですわね」と、女中は前に坐ると云つた。

それには答へないで、「此處は却々眺望がいゝんだね。僕は今日初めて見るんだよ」と、香取は障子の隙間から、向うの烟の舞上つては消えるのを見てゐた。

「今日は溫かですわね」と、女中も男の見てゐる方へ目を向けてゐたが、暫らくたつても男は身動きもせねば、言葉も掛けないので、「どうなさいます。直ぐ電話を掛けますか」と催促した。

「さうだねえ」と、香取はふと氣付いて此方向いて、「誰れか外の奴を呼ばうかね」と云つて、小菊では物足らぬ思ひがしたが、ふと、先日鎌倉までも連れて行つたのに、あれきりで外の女に移るのは愚なやうな氣もしたので、矢張その女を

と命じた。
「直ぐだよ」と、後から急立てる聲を聞いて、女中は階下へ下りたが、間もなく上つて來て、
「お正午前から出てるんですつて。何處だか出先を云はないんですけど」
「ぢや、些し待つててもいゝから、早く來るやうに云つといてお呉れよ」香取はさうなると外の女を呼ぶ氣はしなくなつた。が、暫らく待つてゐても、何の音信もなかつた。
「出先さへ分つてれば、當人に話をするんですけど、幾ら訊いても、あの家で出先を教へて呉れないんですよ」女中は二三度電話口へ寄つて嚴しい口を利いた後で、二階へ上つて來て言譯をして「もつとお待ちなさいますか。それとも今日だけ外ので御辛抱なさいますか」と、冷淡に訊いた。
「いや、今日はあの女でなくちやいけないよ」と、香取は生眞面目になつて、どうしても呼んで來るやうに女中に言付けた。
例にない執着を女中は不思議がつて階下へ行つた。香取は再び高臺に舞上る烟を夢のやうに眺めてゐたが、その中時間は餘程過ぎたらしく、日光は障子の下へ沈んで、隙間から染込む風は薄寒くなつた。で、障子を締めて、所在なげに寢ころんで、疲れた目を閉ぢてゐたが、すると、姉婿の身體が世にまたとない懷かしいもののやうに現はれて、自分の唇が其處へ吸寄せられるやうだつた。

と、誰れだか側にゐて自分の樂しい空想を覗いてゐるやうな氣がして、そつと薄目に開けて見ると、部屋の中には人影はなくて、煙草の吸殻のみが燻つてゐた。で、また目を閉ぢると、そこへ女中がアタフタ階子段を上つて來て、
「今歸つたつて電話が掛りましたよ。今度こそ間違ひはありませんよ」と、やう〳〵安心したやうに云つた。
「今までどんな家へ藻繰込んで稼いでたんだらう」と云つて、香取は身を起して、今迄の空想から心を移さうとつとめた。

電氣を點けて、火鉢にも添炭して、食卓を拭つて、茶を入替へて、望みの食物を伺つて、女中は階下へ下りた。晝間は殺風景だつた部屋の中が、何となく色めいて來たのを見ると、香取は唄でも聽きたいやうな浮いた氣持になつた。そして自分に心を許した女を待受けてゐるやうで、階下の物音に耳を付けてゐた。

が、間違ひのない小菊の聲のしたのは、障子の外も夜になつて、高臺の西洋館が薄黑く聳えて見える時分だつた。隣の部屋にも客が來て、女中を相手に馴染の藝者の噂をしてゐた。
「こんなにお待たせして、何だか極りが惡いわね」と云つて、小菊は襖の側で躊躇してから入つて來た。

今まで何處へ行つてゐたのか冷かしてやらうと思ひながら、その顏を見ると、香取は相手を厭がらせるやうな酷い事が云へなくなつて、「僕はまだ飯を食べないで待つてたんだぜ」と云つて、女懷かしい心の中を素直に自分の目顏に出して終つた。
「さう。本當に濟みませんでしたわね。私、氣になつて〳〵二三度此家へ電話を掛けたんですけど、どうしたんだか、些とも通じないんですよ」
「……目の縁が紅くなつてるね」と、香取は不斷よりも女の顏を美しく見ながら、「酒を飲んだのかい」
「え、私自棄になつて飲んぢやつたの、……だつて焦躁つたくつて仕樣がないんですもの」と、女は急に無理酒に惱んでるやうな目付をした。
「今夜僕はどうしても一人でゐられないんだから、長くゐるよ。家へさう斷つてお置き。外から呼びに來ないやうに」と云つて、香取はせめて

今宵はこの女を人手に渡さぬやうにと思つてゐた。

「私そのつもりで來たのよ。貴下と分つてれば、家から呼びに來る氣遣ひはないわ」

女は相手が些しも氣拙い思ひをしてゐないのに安心して、馴々しく旅行後の事を訊いたり、年末に迫つたこの頃の色町の樣子を話したりした。香取は話の中味よりも、聞馴れた柔しい聲を喜んで、いゝ加減な返事をしながら、茫然聞惚れてゐた。そして、言葉が切れると、

「もつと何か話しててお吳れ。お前の話聲が切れると、外の事が考へられていけないから」と促して、「話がなくなつたら、三味線でも彈いてお聽かせよ」

「貴下、何か唄つて？」

「僕は何も知らないよ。僕は幾ら遊んでも唄なんか唄はうつて氣持になつたことがないから。……他人の唄つてるのを聽いても些とも分らないんだよ。だけどお前のだけは聽いて見たい氣がする。一心に聽いてるのだから、何でも好きなものを彈いて御覽……」

女に望まれる儘に三味線を引寄せて、調子を合せながら、「貴下も唄つて騷いでたら氣が晴れるんですよ」

「さうかねえ。ぢや敎へてお吳れよ。お前の後に隨いて僕も唄つて見るから」

「え、さうして御覽なさい」

女は都々一のやうなものを二つ三つ唄ひながら、男の口元の微かに動くのを見詰めてゐた。が、何時まで立つても聲が少しも漏れて來ないので、張合がなくて、撥を持つた手を下へ置いて、「一人で唄つても詰らないわね」と、三味線を後へ押退けようとした。

「もつと彈いといで。からやつてればいゝんだから」と、香取は强ひて女に唄はせて、矢張小首を振りながら脣を尖らせ、蚊のやうな聲で眞似をしてゐたが、やがて、ふと女が笑出した。

「どうした？ 何が可笑しいんだい」香取は目を張つて不思議がつた。

「だつて、貴下の樣子が可笑しいんですもの」と、女は聲を出してます〳〵笑つた。

「何故？ そんなに僕が滑稽に見えるかね」と、香取は俯目になつて自分の身體を見廻した。そして、自分の身に附いてつい忘れてゐたことが、急に思出される樣だつた。

「そんな所ぢやないのよ。貴下が唄つてる時の樣子が可笑しいのよ。こんなに顏ばかり振つて」と、女は目を細くして態とお道化て首を振つて、男の眞似をして見せた。が、その樣子は香取の目にはさしていやらしくはなかつた。むしろ愛くるしかつた。で、

「僕に鏡をお見せよ」と、手を伸ばして女の懷鏡を取上げて、自分の顏を映しながら、生眞面目に今女のしたやうな身振をして見た。

「成程いやらしいね」

「何していらつしやるの」と、其處へ入つて來た女中は、それを見て笑つた。

「此方はね、御自分の顏に見惚れてるのよ。唄ひつ振が乙だつて」と、小菊は面白さうに説明した。

香取は鏡を投出して、「男の顏つて醜いものだね。僕は暫らく自分の顏を染々見たことがなかつたが」と、苦笑して皮膚の硬張つた女中の顏を見詰めながら、「でも女の目には男の顏がよく見えるんかね。お前なんかよく客の顏付に目をつけてるんだが、男の顏をどう思つてる？」

「さあ、どうですかね。私達はお顏の鑑別は不得手ですから一向分りませんですよ。これで商賣柄藝者衆の姿のよし惡しなら、道で擦違つても直ぐ目につきますけど、殿方のお顏はど

うだつても構はないんですからね。入らしつて下さる方を不様美男子に思つてるんですよ」

女中は笑ひながら戯談らしく云つて、小菊に向つて、「でも、隨分酷い美男子もあるわね。松香さんのあの人」と云ひかけて、下脣を反らせて、その客の顏付を眞似て、「あの人は此とも此家へ來なくなつたのよ。何處か外の家へ行つてるのかしら」

「さうでせう。……でも、松香さん時々あの人のことを惚けてるのよ。あんな口してる人が情が深いんだつてね」

香取は知人の顏を思浮べながら、彼等がそれぞれに女に愛せられてゐるらしいのを不思議に思つて、「僕は男が女に惚れる譯は分つてるが、女が男に惚れる譯は分らないよ……でも女も男に惚れるんだね」

「それは當然でさあね。ですけど私なら顏で男に惚れようとは思ひませんね」

「私だつてさうよ」

で、女二人は色戀の話に興が乘つたやうに、互ひに勝手な事を喋舌り合つてゐた。それが眞心の聲であつてもなくつても、香取は只部屋の中が色つぽい言葉で賑ふのを喜んで、時々感心したやうな相槌を打ちながら、耳を傾けてゐたが、やがて女中が階下へ行くと、ふと夢から醒めたやうに、眞顏になつて、

「妙なものだね。何と云ふことたしにお前とも懇意になつたね」と、自分ながら不思議に思つて、「しかし、僕はもうお前に會へんかも知れたいよ」

「何故？　遠方へでもいらつしやるの？」

「……僕は呑氣に藝者遊びなんかしてゐられる身分ぢやないんだよ。初めからお前にだつて分つてたらう」

問詰められるので、女は「そんなことはないわ」と、曖昧に答へて、「……偶あに入らつしやることも出來なくつて？」

「あゝ。僕のやうな者でも、もつと生きてゐなくちやならないからね。かうしてると、頭が輕くなつて下らない心配を忘れてるけれど、これが癖になつて毎日此家へ來たくなつても困るからね。だから今夜切りと思つて、お前も外の事を忘れて、精一杯僕を大事にして呉れよ。これで心殘りのしないと云ふぐらゐにして貰ひたいね。僕は只の一度だつて女に可愛がられた例がないんだから情ないよ。男としてせめて一日でも、好きな女に可愛がつて貰ひたいがな」

さう云ひながら、香取は過去を顧みて自分のまだ經驗しない強い快樂が其處に潛んでゐるやうに思つた。あの女も物足らなかつた。あの時分にも物足らなかつた。

（十五）

で、彼れは長い夜を快く眠る間もなく過して、翌朝霜の融けた時分に寢床を離れた。久振りに市街の中で朝を迎へたので、階下を通る物賣の聲や、賑かな足音や、人聲が珍らしかつた。日當りのいゝ障子際に怠い身體を寄掛けて、側に坐つてゐる女の顏を見てゐると、思切つて淋しい自分の家へ歸る氣にはなれなかつた。朝餐を食べてからも、さして話もないのに、半時間一時間と時を延した。

「かうしてても詰らないから、何處かへ遊びに行きませう」女は退屈して、下町の年末の模樣を見に行くやうに誘つた。

「僕は晝間藝者を連れて東京の市街を歩く氣にはなれないよ」と、香取は飽くまで斥けた。「お前は此處にゐたくなくなつたら、何時でもお歸りよ。さうしたら仕樣事なしに僕も出て行くだらうから」と、自分を持扱ひかねたやうに云つて、身動きもしなかつた。そして、只女が自

分の側を離れないでゐて呉れゝばと念じてゐたが、女は相手をしてゐるのに困じ果てたのか、やがて、「では私お湯に入つて來るわ。直ぐ來ますから待つていらつしやい」と、息抜きに立つて行つた。

で、暫らく一人ぼつちで目を瞑つてゐた。すると、そのまゝ暗い谷底へ落ちて行きさうで心が戰いた。目を開けると、明るい障子に自分一人の影が侘しさうに差してゐる。誰れか側にゐて懷かしい聲で催眠歌でも唄つて、快く眠らせて呉れたらばと思つてゐると、其處へ女中が樣子を見に來て、お愛想を言出した。

香取は此部屋に倦んで、「帳場へ行つてゐちや惡いかね」と、出拔けに云つて、「あの女はもう來なくつてもいゝから斷つて呉れ。そして日が暮れたら、お前と寄席へでも行かうぢやないか」と、急に思付いて、懷つこく云つた。

「えゝ、寄席ならお伴したいわね。だけど小菊さんも連れて入らしつた方がいゝでせう。後で知れると惡いから一」

一「いや、あの女と一緒だと、今夜また歸れなくなるから、お前たちの方がいゝよ」と云つて、女中が竊かに笑つてゐるのを見て、「何も隱れてゐるからさうなんぢやないよ。只大勢で出て行つて、僕だけ獨り家へ歸るのが厭なんだよ」と言譯した。

そして、女中に隨いて帳場へ下りて行つて、長火鉢の前の厚い座蒲團に坐つた。主婦は買物に出てゐて、可愛らしい娘が顏に不似合な甲高い聲で喋舌りながら、忙しさうに周圍をうろ〳〵してゐた。お歲暮と書いた紙包が幾つか片隅に重つてゐて、其側には大きな厚ぼつたい羽子板が立つてゐる。鎖帷子を着た百日鬘の凛々しい男が大きな目を開けて睨んでゐる。一「誰れだらう、あれは」と香取は訊いたが、聞えないのか、煩さがつてゐるのか、側に返事がなかつた。で、彼れは自分の記憶を索りながら、羽二重の似顏を見詰めてゐた。さま〴〵の舞臺と役者の顏とが浮んでは消えた。と、その芝居の土間の中に、自分が一人悄然坐つてゐる樣が、今見えるやうだつた。そして、あの芝居を今一度觀たいと、華やかな世界を忍ぶ氣もしなかつた。

最早一生芝居の木戸口を潛らなくても遺憾はない……凡ての感覺の死んでしまつてゐるやうに、世の樂みに些しの未練もなかつた。兄弟であれ友人であれ、誰れにも會ひたくもなければ、その動靜を知りたくもなかつた。世の凡ての男には些しの執着をも持つてゐないのに、何故女に對してのみ愛着の念が絕えないのだらう？

「お退屈樣……もうお風呂が沸きますよ」と、云つて、女中は臺所の方へ消えた。玄關には客の來たらしい氣色がした。

煖火が點いて、電話口で女の名前が呼立てられて、再び色めいた夜になるまで、香取は長火鉢の側を動かなかつた。と、二階からも筋向ひの料理屋からも、陽氣な三味線の音が聞えて來た。前の銅壺には酒の匂ひが舞上つて、娘は立膝で海苔を焙出した。

周圍が慌しく動搖してゐると、香取は自分が其處におつとしてゐるのが邪魔になるやうに思はれたので、近所を一廻りして來ようと思立つて、家の者に斷らないで、そつと外へ出た。

人の目を惹くやうに派手に飾つた店先を見ながら、坂を下りてゐたが、昨日あの家へ入つてから餘程の日數を經てゐるやうな氣がして、賣出の提灯も今初めて目についたやうだつた。坂の左右に並んだ福壽草や萬兩の赤い實を見るにつけても、急に年の迫つてゐることが知られた。そして坂を下盡すと、元の道へ歸つて、「やまと」の前まで來たが、まだ忙しがつてゐるだらうと

思ふと氣臆れがしたので、素通りした。

で、再び大通へ出て、雜沓の中に入つてゐたが、ふと、留守の間の家の樣子を見て來る氣になつて、次第に人通りの薄らぐ方へ足を向けた。心細い思ひをして、町外れの暗い道に入つて行つた。家へ歸ると、何時ものやうに茶の間の障子に微かな燈火が映つてゐる。下女に何か訊くつもりでその障子を開けて覗くと、言葉を掛ける先に、水引のかゝつた紙包が目に付いた。

「誰れか來たのかい」と、彼れは急いで取上げて見た。「お歳暮、湯原」と、菓子折の上に描い女文字で書いてある。

「上野町の奥樣が晝過から、夕方まで待つてゐなさつたんです。折角來たんだから、お目に掛つて行きたいつて、大變殘念がつてゐなさいました」

「別に用事がありさうぢやなかつたかね」

「いゝえ。そんな風にも見えませんでした。別段お言傳もありませんでした」

下女は呆けた返事のみして、要領を得なかつたが、香取は細君の訪問が氣に掛り出した。下女と半日も話してゐる間に、どんな事を感付いたかも知れない。不斷湯原が細君の前で繕つてゐた事が破れたかも知れないと氣遣はれた。

が、何時も此方へ來ると云ふ口實をつくつては追分へ行つて居た湯原の祕密の皮の剝げるのは、香取の心に意地惡い興味を起させぬでもなかつた。で、彼れは机の前に坐つてからも、心をその一點に凝して、事件の成行を今見るやうに描いてゐた。細君の手を借りて湯原を苦めるのが、次第に小氣味よく感ぜられて、萎れてゐた身體が俄かに勢づいた。

お多代がそのためにどれほど苦境に陷らうと、それはあまり念頭に浮ばなかつた。只湯原が氣樂さうにあの女と遊んでゐられなくなるのが、胸の透くやうに悅しかつた。

で、この新なる希望を見付けた彼れは、最早「やまと」の女中を連れて、寄席などへ行く氣はしなくなつた。

（十六）

紅く龜んだ手で傘を差して、吹付ける雨を冒して、香取は和泉町の戶田の家へ急いだ。その朝葉書を見て、俄かに思立つたのである。

葉書には細君の名前で、いろ〳〵話したいことがあるから、年内に一度來て呉れ、前以て知らせて呉れゝば御馳走して待つてゐると書いてあつたが、彼れは早くその話を聞きたいやうな氣がして、出拔けに訪ねて行つた。

細君の注意で、濡れた衣服を脫いで、主人のに着替へて、瀟洒した座敷で、新しい桐の火鉢に寄掛つて、切髮の老婆と向合つてゐると、心が改まつて、何となくゆつたりした氣分になれた。「去年も今時分伺ひましたね。江戶のお正月のお話を老婆に聞きましたね」と、あの時の光景を懷かしさうに顧みる氣にもなつた。

「また一つ年齡を取ります。何時までも娑婆塞げをして。まだ業が盡きませんですかしら」と云つて老婆は笑つた。

そこへ座に加はつた細君も、豫期してゐる話を持出しはしないで、暫らく年末の景氣や、明けてからの計畫を話の種にしてゐた。香取は此方から訊出さうと思ひながら、折角和いでゐる自分の心を、細君の話次第で、亂さねばならぬのが恐ろしかつた。で、時刻を延し〳〵してゐたが、やがて、ふと、

「貴下にお目に掛けたい人があるんですがね」と、細君が云つた。「今日入らつしやると分つてれば、此家へ呼んで置くんでしたのに……寫眞でもあるといゝんだけど」

「誰れのことです」香取は氣付かぬ風をしてゐる

たが、細君の言葉の意味は略分つてゐた。そして、當てが外れたやうだつた。

「いゝ事なんですよ。私一人で極めてゐるんですけど、ぢや、春になつてお話しませう」と細君は些つと匂はせたばかりで、話を引込めて、老婆と謎見たやうなことを言合つてゐた。

香取はその事には興もなくて、冷かに聞流してゐたが、稍あつて、上野町の噂を引出さうとして、「先日湯原君の細君が私の留守に訪ねて來ましたよ」と知らせた。

「へえ……。此方へは暫らく來ませんですよ」

細君の答へは案外だつた。そして、「あの女も一時は騷立つて、始終私に泣言を聞かせた癖に、少し落着くと滅多に顏も見せない」と、不平らしく云つた。

「さう云へばお多代さんは、この頃どうしてるんだらうね。矢張神戸へ行つてるのかしら」と、老婆はそれを疑つてゐるらしい目付をした。

「どうだか分るものですか。あゝ云つた女は直ぐに情夫を拵へるんだから、まだ東京にうろうろしてるんでせうよ。私ちやんとさう睨んでますの。それに夏時分から外に情夫があるらしいと、私一人で思つてたのですがね。どうも素振がさうらしかつたんですよ」細君は眞實しやかに云つて、香取の方を見て、「でも、こんな事は上野町へ入らしつても話さないやうにして下さい。東京にゐると知つたら、夫婦ともいゝ氣持はしますまいから」

「えゝ」香取は擽つたい思ひをした。そして、人間の所行の案外他人に分らないのを不思議がつた。では湯原は何時までもあゝして、祕密の快樂に耽つておられるのだらうかと心の中に嫉ましかつた。

「東京は廣いから何をしてても分らないんですね」と云ふと、

「さうですとも」と、細君は言葉に力を入れた。

他人の素振に氣をつけて、有る事無い事尾に尾をつけて仰山に吹聽したがる細君さへ、少しも湯原の祕密を嗅付けてゐないらしいのが、齒痒くてならなかつた。平生の態度から押して、この人ばかりは感付いてゐることと思つてゐたのに、こんな重大な事件をさへ見逃してゐるとなると、相手の顏が白癡らしく見えた。

で、香取は雨を冒して態々此家まで來た甲斐のなかつたのを悔いてゐたが、でも、容易に暇を告げようとはしないで、午餐の御馳走にもなつて、平和な話を左右から聞かされながら、愚圖々々してゐた。細君は春まで延すと云つた事を隱し了せないで、自分で樂むやうにチラチラ微見かせて相手の意向を索出した。

「決して貴下の爲にならんやうなことはしませんから、大人しく私の云ふことをお聞きなさい。間違ひの起らない中に、極めるものは早く極めた方がいゝんですよ」と、親切な口を利いて、「この頃はお家にばかりいらつしやるんですか」と、意味ありげに訊いた。

「えゝ。今年一杯は保養するつもりで、何處へも出なかつたんですが、來年からはまた働かなきや食へないんです」香取は明年後の自分を信じかねて、とても悠長な人並の結婚など思ひも染めないで、「私なんかにお世話なすつちや、貴女が迷惑なさるばかりですよ」と、少しも話に乘りさうな風を見せなかつた。

「そんな事があるものですか。……どんな人だつて相當の年齡になれば、結婚してるぢやありませんか。一人よりも二人の方が仕事にも身が入つて、結句氣樂に暮らせるんですよ。それに貴下などは些とも將來の御心配がないぢやありませんか」

「さう思はれますかね」香取はまじ〳〵細君の顏を見ながら、さも凡ての人間の代表者に向つ

てゐるやうな氣になつて、「しかし、私が何を考へてるか、今に何をし出すか分らないでせう。私自身にだつて、自分がどうなるんだか分らないくらゐですもの――」

「何故です？　貴下がそんな事を仰有つてた日にや、世間に心配のない人つたらありやしない――」

「だから、僕は不斷不思議に思つてゐます」香取は此處ぞと云つた風に自ら力を入れて、「よく皆な平氣で生きてられるものですね。僕は人中へ出ないで家にぢつとしてても、戰慄するやうなことがあるのに、よく世間の人は平氣でそれぞれ勤めをしてゐられるんですね」

「それは仕方がありませんさ。いくら厭だつて、稼がなければ生きられませんからね。貴下のやうに半年も一年も遊んでゐられる樣な御身分なら結構だけど」

「僕だつてもう駄目だ。せめてもの手頼りにしてた金ももう無くなつたのです」

「お遊びなすつたの。だからお一人だといけないんですよ」

「別に遊んだつて譯ぢやないんです」

香取は辯護するやうに言排けたが、ふと氣付いて、こんな人と眞面目くさつた話をしてゐるのが愚しくなつて、口を噤んで、只相手の云ふがまゝにまかせて置いて、自分は勝手な空想に耽つてゐた。

　で、細君の話は煩はしい雜音に化してしまつたが、まだ降頻つてゐる雨の中へ飛出して、何處へ行くのかと思ふと、温かいこの部屋を離れるのにも躊躇された。

（十七）

春になつたら、お知らせするから、その日に是非遊びに來て下さい、歌留多でも取りますからと、歸り際に細君は外の意味を含めて云つた。香取は細君がそれほどに自分を信用してゐるのを怪みながら、承知して戸外へ出た。

　そして、次手だから、上野町へも寄つて行かうと思つて、お歳暮の返禮に味付海苔を買つて、その方へ足を向けたが、その家の前まで來ると、ふと足を留めた。湯原は最早勤先から歸つてゐて、何か賑かに話してゐる。その間に細君の聲も幽かに聞えた。

　すると不快な秘密に包まれた二人の中へ分入つて、空々しい話をして、兎もすれば湯原に利用されねばならぬのが、厭な氣がされて、どうしても入る氣になれなかつた。差向ひの夫婦の顏が障子越しにまざ〳〵と見えるやうだつた。

　で、逃げるやうに後返りして、寒さに身を縮めながら、刻み足で電車道まで出た。そして、無駄になつた手土産の處分をつける口實を考へて、道分の方へ足を運んだが、世の中の無事平和に過ぎるのが合點が行かなかつた。

　湯原の家庭も何時までも穩かなやうだ。お多代も湯原を厭つてゐながら、何時までもキッパリした處置をつけようとはしない。いやらしい塊と思はれる胎兒は無事に育つてゐるらしい。……で、彼れは、二三ケ月前に湯原に訪ねられてから亂れ出した自分の心は、湯原が死に、胎兒が死に、あるひはお多代が死なければ、とても平和は得られないやうに思はれた。

　いつそ生きたお多代は無くつてもいゝ。湯原に汚され得るお多代はなくつてもいゝ。いやらしい塊に人らしい形を具へさせるお多代はなくつてもいゝ。さうすれば、自然に自分の心も穩かに輕くなるかも知れない。……あの女も自分を思つてゐたのだと云ふ懷かしい思出だけを殘して、外の女に心が傾いて行くかも知れない。……女自身にしても、どうせ將來に望みがないとすれば、一日も早く湯原の目をのがれ、惡運の手をのがれて死んでしまふ方がまし

だ。……痛々しい樣子を傍の人に見せないだけでもいゝ。……

　香取は果しない苦痛の種が其處にあるやうな氣がして、自分の手で湯原を殺し胎兒を殺し、果はお多代をも殺したらと、我知らず恐ろしいやうな樂しいやうな空想に沈んだ。さうすれば世界が晴々しくなつて、自分も生れ變つたやうになれさうだつた。心を腐らせてゐる毒氣が消えてしまひさうに思はれた……。白く光つてゐる匕首やいやらしい塊から流出る惡血があり〳〵と胸に浮んだ。……

　ふと後から怒鳴るやうな聲が耳に入つたので、彼れは驚いて、左右を顧みた。綱引の俥が袂を掠めて、泥を跳掛けて行過ぎた。

　先日湯原が立寄つた酒屋は直ぐ側に見えた。

「こんな鬱陶しい日に、どうして暮らしてゐるだらう？」彼れは足を早め出した。

　手土産を投出して、悴んだ手を溫めながら、香取は針を持つたお多代の手の動くのを見てゐた。女は火影に横顔を見せて俯首いたまゝ、その手を休めなかつた。

「貴下のお家ぢや、もうお正月のお支度が出來て？」

「……僕はこの衣服でお正月だ」

「……春着をお拵へなさいな。私が見立てて上げますから。此家で買へば安いんですよ」

「えゝ」

「……お正月には貴下方は何をしてお遊びなさるの」

　こんな事が途切れ〳〵に話された。女の言葉も顏付も穩かで、縫合はせた絲の跡を扱く音にも、穩かな心が現はれてゐるやうだつた。香取もかうしてゐれば、焦立つた心が柔かい手の平で撫でられてゐるやうなので、何時までもこのまゝでゐたかつた。互ひに痛い感じを惹起すやうな言葉を口にしないで、二人の座をも亂したくなかつた。正面に女の顏を見ないで、その指先や衿足を見ながら、恣に空想に耽つてゐる方が樂しかつた。

「これだけ片付けますから、もう一寸待つて下さい、ね」と、女は目を上げて子供らしい口を利いて、更に仕事に取掛つた。

　戸外には雨足が衰へて、軒の雫も長閑に落ちてゐた。火鉢に掛けた湯沸からは盛んに湯氣を吹出した。香取は自分で茶を入れて、溫かい雫を腸に染込ませながら、お愛想に女の話し掛ける話に、輕い返事を與へてゐたが、女はやがて、ホッと息を吐いて、周圍を片付けて、火鉢の側ににじり寄つて、冷い手を翳した。そして、「お待遠樣」と云ひたさうに媚を含んだ目を動かした。

「今年ももう四五日ですわね。何處も忙しさうでせう。私、些とも市街へ出て見ないんですけど」

「……僕は今朝から和泉町へ行つてたのです。彼處はもうお正月らしかつた」

　香取は話の種を造らうと思つて、何氣なくかう云ふと、

「どんなでした？　彼處は」と、女は力を入れて問返した。

　何と答へていゝかと、香取は迷つて、暫らく口を噤んでゐたが、女は目を放さないで、

「私のことを何か云つてたでせう。屹度」と、答へを迫つた。

「いや、そんな話は些ともしませんよ。何も知らないんでせう」

「さう？……只遊びに入らしつたの」

　女はまだ不安らしかつた。で、香取はそれを打消して、自分が何も口外しなかつたことをも確めさうとして、

「彼處の伯母さんが僕に女房を持たせようと

思つてるんです。用事があると云ふから行つて見たら、その話なんです」

「ぢや、いゝお話だつたのですね」と、女は微笑して、「貴下の奥様は何んな方だらう。私の知つてる人ぢやないんでせうね」

「どんな女だか……どうせあの伯母が見つけたんだから、碌なのぢやないでせう」

香取はこの話に深入りしたくなくて、揉消さうとしたが、女は興がつて、最早極つてゐることにして、何かと頻りに訊出した。「早くお貰ひなさいな、あんまり選好みすると却つてよくないのよ」と、眞顔で勸めたりした。

香取は自分の結婚について、女が少しも心を惱ましてゐないらしいのを、飽氣なく思つた。

そして、今夜は女が浮々して、さも境遇に安んじてゐるらしいのを訝つて、また湯原に言ひくろめられたのではないかと疑ひながら、「あの後湯原君は何か云つてましたか、此間僕が此方へ來てゐた留守の間に、細君が僕の家へ來たさうですよ」と云つた。

女はドキッとして顏色を變へたが、直ぐに冷笑を浮べて、「どうにでも勝手にするがいゝさ」と呟いた。そして、横へ向いて、脣を噛んで暫らく默つてゐた。その血相が怖いやうなので、香取は自分の言葉を悔いて、相手を宥めようとして、

「僕はあの細君に些とも會はないんですよ。久振りに今日寄つて見ようと思つて、門口まで行つたのだけど、厭になつて引返しちやつた。湯原君も大きな聲で面白さうに話をしてゐて、また際捕つてるらしかつたから、摑まつちや大變だと思つて、逃げて歸つたんです」と、勢づいて云つた。

「面白さうな話つて、どんな話をしてました？」と、女は嶮い目付をして慌しく訊いた。

「どんな話だか、よく聞かなかつたのです」

「聞いていらつしやればいゝのに」

女は詰るやうにかう云つて、何か考へてゐたが、俄に打解けた笑ひを見せて、「どんな事でも勝手に云はせとけばいゝわね」

「えゝ」香取は相手の言葉の意味は分りかねたが、只機嫌の直つたのが悦しかつた。で、媚びるやうに、「僕もこの家へお歳暮をやらなくちや惡いでせうね、度々邪魔に來るんだから」と、云ふと、

「いゝんですよ、そんな御心配なさらなくつても」と、女は聲を潛めた。「私主婦が貴下の事をよく思ふやうに〳〵と不斷氣をつけてますの。だから、些とも主婦に氣兼ねしなくつていゝのよ。……今夜も何時までゞも遊んでいらつしやい。貴下さへ構はなきや、かうして夜明ししたつていゝんですわ。主婦も宵つ張りだし、私も夜が更けると、寂しくつて變なことばかり考へられるんだから、夜明しぐらゐ何でもないの」

「僕も徹夜ぐらゐは構はないけど……だけど、貴女は縫物が忙しいんでせう」

「いゝえ。どうせ御年始に行く家はないし、何時まで掛つたつて構ひませんわ……主婦にお茶菓子を買つて來て貰つて、皆なで面白いお話しませう」

女がいそ〳〵して次の間へ行つた後で、香取は知らぬ間に煙草の煙で部屋の濁つてゐるのに氣付いて、縁側の雨戸を開けた。雨は上つて名殘の滴が幽かに慄へてゐる。面に觸れる外の空氣は痛いほどに冷かつた。主婦が門の方へ出て行きながら、此方を顧みた目が、薄明に氣味惡く光つた。そして、その目が此方の心を見てゐるやうで、油斷のならない氣がした。と、不意に、

「貴下近くにまた上野町へ入らつしやるんでせ

う」と、後で聲がした。

　で、振向いて、物思ひに凝つてゐる女の顏を見て、元の座へ戻ると、女は再び同じ事を訊いた。

「年内に一度は行かなくちや悪いかも知れない。……何か用事があるんですか」

「用事なんかあるものですか」と、忌々しさうに男の問ひを押潰して、眉を曇らせて思案してゐた。

「人間は遠慮して小さくなつてちや駄目ね」女は思案の果にかう云つて、口元に憎みを含んだ笑ひを微かに浮べて、「馬鹿にしてやがる」と呟いたが、やがて、男の顏に目を吸付けて、「ぢや貴下はこれから彼家や和泉町へ度々入らつしやるんだわね。そして、此家へは來て下さらないんでせう」

「僕は成るべく來ないやうにするつもりです。あの主婦が氣味が悪いから……貴女が此家を出て自由な身體になつてから訪ねて行かうと何時も思つてるんだけど、外へ出るたびに、つい此家へ足が向いて仕方がない」

　香取は無理に元氣らしく云ふと、女は快く微笑して、[illegible]いた目付をして、「貴下が來て下さらないと、私、本當の一人ぼつちよ。皆なから悪者にされて、味方になつて呉れる人は一人もないんですもの。まだしも此家の主婦は私の最屓をして、いろんな口を利いて呉れるんですよ。初め思つたほど決して悪い人ぢやないの。だから、心配なさらないで、今夜泊つていらつしやい」

「だけど……」と、香取は決しかねた風をしたが、其處を拔出る力はなかつた。かうして女の息に包まれてゐると、これまで味ひ知らなかつた快感が湧きさうだつた。恐ろしいやうな度外れな快感を覺えてゐるやうだつた。逃げようたつて手足は自由に利かなかつた。で、彼れは默つて其處に坐つてゐたが、女の髮の毛から爪先まで、彼れを刺激して、不自然な空想の色を刻々に濃くさせた。

　と、其處へ主婦が歸つて來た。「外は寒いんですよ」と云つて入つて來たが、その目も鼻も、いくら思直さうとしても、香取の目には、意地悪さうに見えた。自分の幸福を遮るやうに思はれてならなかつた。

「どうも御苦勞樣、主婦も此處へ入らつしやい」と、女は陽氣に云つて、座を開けて招いた。

　主婦は肥つた身體を二人の間に据ゑた。そして女同士の呑氣らしい話が夜の更けるまで續いた。

　香取はつひに歸るべき機會もなくて、勸められるまゝに、宿の主人の夜具にくるまつて、火鉢の側で假寢をせねばならなかつたが、その夜具には穢しい老爺の垢や、湯原の肌の脂が染付いてゐるやうな氣がして、安らかに身體を落着けることが出來なかつた。次の室からは主婦の寢息が、靜かな夜の空氣を破つてゐる。彼れは其息を押潰したかつた。……

　夜明前から、女は深い眠に落ちた。香取は主婦が雨戸を開けるのを待つてそつと起上つて襖の外から一言聲を掛けて顏も洗はないで戸外へ出た。最早日は高くて、表は年末らしく賑つてゐた。

　彼れは脇目も觸らず自分の家へ歸つた。机の上には昨日の朝の戸田の葉書がそのまゝに置かれてあつた。

「いろ〳〵お話申上げたきこと有之候へば……」この文句に心惹かされて出て行つたのだがと、彼れはあれから今朝までの事を跡を追つた。

　すると、忌はしい記憶が叢つて來たが、不思議にもその底に嘗て覺えない傲が燦いてゐる

た。命掛けの冒險をして、力強い者を打挫いたやうで、沈んでゐた心が急に魅力を帶びて來た。

で、彼れは毛布にくるまつて横になつて、長い間惱んでゐた心をも身體をも休めた。珍らしく熟睡に陷つて、二三度下女に呼びかけられても目を開けなかつた。そして、名殘なく夢から醒めたのは、部屋の中が薄暗くなつてからだつた。

見ると、床の間には鏡餅が供へられてあつた。三寳に大きな伊勢蝦が垂れてゐる。茶の間の燈火も不斷よりは冴えてゐて、注連飾が其處に投出されてあつた。

「お次手に雜煮箸を買つて來てお呉んなさい」と云つて、下女は獨り量見で春の準備をしてゐたことを知らせた。

「今夜福壽草でも買つて來ようかね。外に入るものがあれば何でもさう云つて御覽」と云つて、香取は下女から盆だの皿だのと、足らない世帶道具の名を訊いて、夕餐が濟むと、直ぐまた外へ出た。

そして、買物をしながら神樂坂まで出て、床屋へも入つた。ストーブに温まつてから、髯を剃られながら、見るともなく自分の顏を見てゐたが、その顏はこれまでのやうに見苦しく萎びてはゐなかつた。目にも口にも彈力があるやうに思はれた。傍の鏡に映つてゐる外の男の顏を見下げるやうな氣にもなつた。あんな並外れの快樂は誰れも知るまい……

其處へ入つて來た二三人の藝者の白い軟かい顏も鏡に映つた。知合らしい客を飜弄つたり飜弄はれたりし出した。と、小菊の顏までも思出されたが、そんな女の仇めいた言葉や甘つたるい言葉は、彼の心を少しも唆しさうではなかつた。

で、「やまと」の近くまで歩いたが、最早その稀薄な空氣に興も起らなくて、引返して家へ歸つた。まだ蕾の閉ぢた福壽草の鉢を床の間に置いて、机の前に落着いて、部屋の中を見廻すと、來る春には何か望みを含んでゐるやうだつた。寂しい陰氣な空氣は彼れの左右から遠ざかつた。……自分だけが他人に與へられない禁制の快樂の底へ藻繰込んでゐるやうで、知人が皆愍しく見えた。最早明日からの生活の事などは、屈託する氣にはなれなかつた。最早誰れにも氣臆れしないで、人中へ出て行かれる。お多代にさへも手強く物が云はれる……

彼れの顏には、憎い者の胸に刃を當てた時のやうな笑ひが微見えた。

「大晦日の晩には是非遊びに行きます、そのつもりで待つてゐて下さい」と、その夜お多代に葉書を送つた。

そして、今年の最後の夜に彼處へ行つて、彼處で除夜の鐘を聞く有樣を濃い色取で芝居のやうに描きながら、眠に就いたが、ふと、あの主婦の鼾を想起させた。

―どうも彼女の目が邪魔だ―彼れはその目が自分の心を睨んでゐるやうに思はれて、次第に不安の念が萠した。で、夢の醒めるたびに不安が増して、果は、主婦の前だけでは自分が萎縮けてゐるやうに思はれ出したので、その目を抉取りたくなつた。

（十八）

一日隔てて次の日は大晦日だつた。が、それまでにお多代から葉書一つ來なかつた。「あの夜から餘程惱んでゐさうなものだが」と、訝りながら、一日を送つて、暮れるのを待つて追分へ急いだ。

庭から扉を掛けて障子を開けると、お多代の姿は見えなくつて、主婦が笑顏で快く迎へた。何か捜出すやうな目付をして部屋の中を見てゐ

ると、
「今し方湯原さんと買物に出掛けました。直き歸んなさるでせう」と云つただけで、主婦は茶の室へ引込んだが、其處には珍らしく主人の聲がしてゐた。

　香取は一人火鉢の側で寢たり起きたりして、待つてゐた。二人が歸つて來たらどんな風をしてどんな口を利くだらうかと豫想しながら、次第に心を興奮さしてゐた。そして、外の足音に耳を澄ませてゐたが、容易にそれらしい音はしなかつた。

　時刻の經つほど、張詰めた香取の神經は疲れて、留度なく想像に浮かんで來る二人の言葉や素振が針の先のやうに鋭く疼いた。で、心を紛らすために、何か讀むものでもないかと、部屋の中を搜したが一枚の新聞すら見當らなかつた。鋭い針の先から逃げるやうに緣側へ出ると、星が目眩しく微動してゐる。通の物音が呻くやうに聞えて來る。

　と、やがて、下駄の音に交つた高い話聲が耳を驚かして、門の戸が開いた。

「やあ、君かい」と、湯原は近寄ると、不斷の通りの聲をした。明るい處へ入つて來て、風呂敷包を其處へ投出して、一切通まで引張つて行かれたよ」と、主婦に向つて襖越しに云つた。お多代は提げて來たよせ袋を置いて、穩かな微笑を浮べて挨拶した。香取はその目を羞明しがつて避けるやうにして、

「貴下の家の用事は片付いたんですか」と、湯原の方を見た。

「今年も苦しい思ひをして、やうやく遣繰りをしたのさ。だけど先づ無事に年が越せるから、お目出度い譯だね」と云つて、湯原はふと氣付いたやうに、

「君に借りたものも拂はなくちやならないね。皆拂ふ譯にも行かないが」と、紙入を出して、考へながら、貸金の半分ばかりを前に置いた。香取はそれを受取つて、そつとお多代の方を見ると、女はよせ袋を開けて、中から簪だの箸箱だのと、色んな物の出て來るのを悅しがつてゐた。

「子供騙し見たいなもんだね」と、湯原は手を伸して取上げて見た。

「でも、割にいゝのが當つたんですよ」と云つて、女は石鹼の箱を取つて、その臭ひを嗅いで、「これもさう惡くないの。見て御覽なさい」と、目の前に出した。

湯原は一寸手に取つて、「これで何もかも揃つたね。……ぢや、これから皆なで年越蕎麥でも食べようぢやないか」

　風呂敷の中には下駄もあつた、肩掛もあつた。お多代は暫らく其等から心を放さなかつた。

　香取には二人の間が何の異狀もないのが案外だつた。お多代は先日來に見なかつた平和な顏をしてゐる。蕎麥が來ると、主人も主婦も招かれて入つて來たが、誰れも此處に並んでゐる男女に對して、邪推の目を向けてはゐない。

　その晴々しい世間話を聞いてゐると、香取はふと、先日の夜自分だけ夢を見てゐたのではないかとも疑はれた。が、それが夢であらうとなからうと、かうして平凡な話を何時迄も聞かされてゐると、刻々に心が苛まれるやうだつた。

「僕は歸らうかね」と訊くと、

「僕も少しして歸るんだから、一緒に行かう」と、湯原は引留めた。

「香取さんは何時までいらしつてもいゝんでせう。また此間のやうに夜明ししませう。元日のお祝ひしていらつしやい」と云つて、お多代は湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや惡いんでせう」と、つけ〳〵云つて、そして、湯

原が人のよささうに笑つてゐるのを見て、「私、明日お家や和泉町へ御年始に行つてもよくつて？」

「来られゝば来たつていゝさ」

「おや、行きますよ、乾度。私、些とも構はたいから」

「おれだつて構はないさ……」

「ふゝん」と、お多代は間かに冷笑を洩らして、勝ち傲つた顏付をした。

それが香取の目には凄かつた。男を侮つたやうな太々しい心の底が見えるやうだつた。自分を憚つてゐないらしいのが憎くなつた。で、祕密を湯原の前で曝し出したらと思つてゐたが、湯原は女を宥め賺しながら、歸りさうにしては、また腰を据ゑた。

「貴下はもつと遊んでて下さいな、淋しいから」と、女は香取の立上りさうにするのを見て、賴むやうに云つた。

「えゝ」と、香取は承知したが、此處に留まつてるのが、自分の身に危かしい氣がして、迷つてゐた。あの太々しい心や刺戟の强い肉感に、自分がへし潰されさうなのが恐ろしかつた。

「さあ一緒に行かう」と、湯原は何氣なく云つて、引立てるやうにして、戸外へ出た。外套の襟を立てて懷手をして、足早に歩みながら、「僕の家も少し雲行が惡いんだからな。君も警戒しといて呉れたまへ。家の奴が君に會ふと、屹度何か訊出すから……」

「しかし、お多代さんは何時までもあゝして置くんですか。子供が出來ても……」と云掛けて、香取はいやらしいその影を浮べて口を噤んだ。

「仕方がないさ。僕もあゝして置いて時期を待つんさ」

香取はそれ以上に訊きやうもなかつた。電車道で別れて、當てもなく電車に乘つたが、「やまと」へでも行く外落着くところはなかつた。

で、其家の二階へ上つて、身體を投出してゐると、太々しいお多代の素振が、自分を取殺すやうに、目の先を離れなかつた。

感想斷片

私の信奉する「小說作法」の第一ページには、『いゝ小說を書くには、美學修辭學あるひは小說作法に拘泥する勿れ、自己を凝視せよ人生によく目を注げよ』と書いてある如く、私の信奉してゐる「戲曲學」の第一ページには「戲曲に於て傑れた作家たらんにはまづ戲曲學など稱するものを拋棄せよ』と書いてあるのである。歌學者と歌人とは昔から違つてゐるのである。

私は先夜ある寄席で、ある若い男が現今の役者の假聲を使ふのを聽いて、そのうまいのに感心した。七八人のが悉く本物そつくりであつた。この男に比べると、圓右のつかふ假聲など甚だ下手だ。いろ〳〵な藝事に於て、今の者必しも昔の者に劣つてゐるのではあるまい。役者だつてさうであらう。たゞ私自身が年齡の加減で、役者といふ者に對して、興味を失つてゐるので、みんなが詰らなく見えるのだらう。

（『白鳥隨筆集』の「感想斷片」より）

命の綱

荒木は夕餐後ランプを點火すには早いし、散歩するのも大儀で、長椅子に身を横たへ、雲の低い雨のまだ霽れ切れぬ空を、ボンヤリ眺めてゐた。すると、廊下で二三の下女の騷々しい笑ひ聲が、バタ〳〵と駈け行く草履の音と混亂になつて聞えたが、その中を縫うて男の冴えた笑ひ聲が通つて、ドシ〳〵と重い跫音が荒木の部屋の前に止まつた。

「居るな」と、宗谷と云ふ小柄な瘦せた男が、隙間から覗いて、それから「失敬」と笑顏で入つて來て、

「何を考へてる？　鬱いでるぢやないか」と、床柱を後に胡坐を搔いた。

「君を待つてたのだ、あの事はどうなつた」と、荒木は椅子の上で細い目を開けて、柔しい聲で問うた。

「いや、又君を煩すんだね、今日も家にゐると五月蠅くてならんから、早速飛び出して來たのだ」

「しかし、もうあの女の所に泊るのは止せよ、君の母堂から苦情を持込まれて、僕まで困るから」

「あゝ、もう行かんよ」

「君のこつたから當てにやならん」

「ハヽヽ、以後は、謹なよ」と輕く云つて、廊下を通つてゐる下女を呼留め、

「おいお村さん、先きの話は内所だよ、……それから一つお茶の濃い奴を飮まして呉れ給へな」

と、締りのない顏を仰向けて、ボンヤリしてゐる。年齡は荒木と同年の二十六だが、誰れの目にも三つや四つは若く見える。

「二三日前だつたが、菅野女史が來て、君の情話を云つたよ。宗谷もあれぢや可哀想だなんて」

「ハヽヽヽ、全く弱るからね」と、宗谷は人事のやうに云つて、「一昨日もこの通り母に引つかかれたんだからね」と、腕をまくつて赤い爪跡を見せて、「あれが怒鳴る時の顏つたらないぜ、それに髮が薄くなつて地頭が赤光りになつてるんだから堪らない」

「老人が醜くなるのは當然だが、美人の方はどうしても元の鞘へ收まらないかね」

と、荒木は眞面目で氣に掛けてゐる。

「先づ六ケ敷からうよ……が、まあいゝさ」

と、宗谷は下女に茶を注がせて、惡洒落を云つて恐悅がつてゐた。

この二人は一昨年同じ學校を出てから、同じ會社に勤め、報酬も同じだが、荒木は下宿暮し、宗谷は兩親と妹二人とあつて、狹い家に住んでゐる。境遇も性質も違ふが、却つて交際は親密だ。で、荒木は宗谷の家庭に何事かあると、相談役ともなり仲裁役ともなり、柄にない大人ぶつた口をも利く。この春に宗谷が勤めを怠けて、宿直の番をも誤魔化したことが分つて、殆んど免職になりかゝつたのを、荒木が社長に歎願して、漸く喰止めたのであるが、この時も當人は平氣で、朝から毛布を被つて寢ころんでゐるので、母親は氣が氣でなく、今にも一家五人が餓ゑ死でもするかの如く心配して、終ひには我が子に向つて手を合せて、「この通り賴むから會社へ出てお呉れよ」と涙ぐんだ。宗

谷は夜具から頭を出して吹出し、

「拜んだだけでは駄目だよ、お賽錢でも投げて呉れにや、お神酒も供へて呉れるといゝね」

と調戯つた。すると、母は、

「この不孝者めが。親を馬鹿にしやがつて」

と、奥歯で噛ひしばつて怒つたが、それも一時で、矢張涙聲で、

「お前が自棄になつちや、皆な路頭に迷はにやならない」

と歎息する。

そして宗谷が幾ら力を添へて、「何處か又いい仕事があらあね」と慰めても、中々承知しないで、自分で荒木の宿を訪ねて、社長へ取なしを賴んだ。何なら自分が社長の前へ出て頭を地べたへつけてお詫をするからと賴んだ。で、お詫が叶ふと、宗谷は元の通りに出社したが、別に以前よりも仕事に身を入れるでもなく、上役の目顔を憚る風もない。却つて荒木の方で心配して、

「僕も君の爲に責任を帶びてるんだから、樣子だけでも眞面目になつて呉れにや困るよ」

と注意する程であつた。

宗谷は元學問嫌ひで、小學校時代から私立大學卒業まで、只の一度も自分で好んで學課に向つたことはなかつた。子供の時分は、小柄でも力があり、小手先が敏捷くて、素人相撲に七人抜きをやつて、筆や紙の賞品を取つたこともある。聲がよくて、聞覺えの都々逸や、端唄を座興に唄つても、捨てがたい江戸前の響きを傳へる。そして自分では學問するよりは、仕事師になるか、舟乘りになるか、いつそ米屋町へでも奉公して、行々は立派な相場師に成立ちたい位の考へを持つてゐたが、兩親は物堅くて、とてもそんな眞似をさせる所ではない。是非學校へやつて官員さんか學校の先生かに仕上げて見たい、借金しても諸道具を賣拂つても、家の者が燒鹽を舐めても、この子一人が學校を卒業さへすれば、後は一家安穩、親々も樂隱居が出來ると定めた。宗谷自身は先々の事は抱負もたないが、兩親がさう定めたのならさうするさと、自然の成行に任せて、朋輩が職工になつたり、年期奉公に出るに引變へて、制服制帽を着ることになつた。

薄給で今の會社に勤めるやうになつても、宗谷自身には左程の希望もない。只母が早くから起きて辨當をも拵へて、時間が來ると、宗谷の夜具を引ぱづして、追立てるやうにするから、詮方なしに出掛けて行く。衣服にも食物にも贅澤を云はず、衞生の法など少しも顧みないが、朝夕牛乳を五勺づつ飲む。これも自分には嫌なのだが、母が牛乳は非常に藥になると聞いて、無理に飲ませるので、仕方なしに飮むのだ。この一家には最早不動産もなく、外に働き手もなく、只私立大學卒業生宗谷眞藏一人が生命の綱となつてゐる。病氣になられて堪るものか。

所がこの宗谷が二三ケ月前に情婦を拵へた。自分から進んで戀ひ焦がれたのではないが或日友人の家で出會つた女學生と懇意になつて時々その宿へも遊びに行つて、無駄話をしてゐる間に、自然に關係がついてしまつたのだ。流石に惡くはない。月給は母の手で捲上げられ、遊びに行く餘裕もなし、さう容易く地色の出來る柄でもなし、それに何事にも註文の少い男だから、相手の女の容貌や氏素性を氣にすることもない。で、始終微笑々々顏で、さも情婦が出來たらしい素振をも見せる。母も薄々感付いても、大目に見てゐたが、或月末宗谷が月給を持つて女の宿へ泊り込んで、朝まで歸らなかつたので血眼になつて急に騷ぎ出し、何處から聞いたのか宿を捜し當てて、二人の寢てる所へ飛び込んで、宗谷の胸倉を攫んで、月給を掻きたくつて歸つた。その擧句が荒木の周旋で、女

を宗谷の家へ同居することとなつたが、狹い家に大勢ゴタ〳〵してゐるんだから、辛抱し切れなくて、十日も經たぬ間に女の方で逃げ出した。

宗谷は濃い茶を甘さうに二三杯呑んでから、コロリと横になり、脊延びをして、

「僕も一生に一月でも下宿生活をして見たいな」と欠伸まじりで云つた。

「それよりや亞米利加行でも復活させたらいゝぢやないか。彼地でうんと儲けて此方へ送つて來るやうにすりや、君の爲にも家の爲にも却つて好都合だらう、劍持なんか彼地でうまくやつてゐるさうだよ」

と、荒木は宗谷がとても會社で永く用ひられる望みのないことを知つてゐるから、今から外の方法を取らさうとする。

「そりや出來ぬ相談だ、親爺やお母は外國へ行きや、もう一生會へない位に思つてるんだから……それ所か、僕あ箱根から先を知らないのだからね、二三日でも僕が姿を隱さうなら、それこそ警察へ捜索願ひでも出すだらうよ、僕の帯にや年中縄がついてて此處へ來てるたつて親爺と母とが家でその縄を引張つてゐるんだよ」

「しかし君あ柔順だからいゝさ。僕等は一人でかうしてても、何だか會社の束縛を感じてるやうで厭でならんのだが」

「さうかい。結句僕の方が安心だらうよ。縄付きで泳いでるんだから浮かうと沈まうと、責任は僕にやないんだ」と云つて、宗谷は喉をころがして笑つて、

「昨日も親爺が母の尻馬に乘つてブツ〳〵怒つてね、貴樣のやうに女に迷つてちや、屹度會社の方も怠けてゐるに違ひない、それぢや、社長さんに相濟まんから、いつそ免職させて頂くやうに、おれが社へお願ひに行くと、大變な權幕さ。僕あ可笑しくつて吹出すと、親を馬鹿にすると云つて、終ひにや刀を出して斬つてしまふなんて怒鳴るから、僕も神妙に手を合せて念佛を唱へて、さあ斬つて下さいと首を突出すと、母が泣くやら妹が留めるやら、そりや滑稽だつたよ。だが要するに、僕は死ねないのだ、幾ら僕の方で望んだつて、死ぬる權利はちやんと取上げられてるんだよ。君なんか個人の自由だの生存の壓迫だのと云ふが、僕は死の自由がないんだからね」

と、べら〳〵饒舌つて、足をバタ〳〵させてゐた。薄い短い眉が垂れ、鼻の先がピク〳〵と動いて、身體に何處となく餘裕がある。聲も上つ調子で氣樂さうだ。荒木は椅子の上からヂッと見下して、相手の話を眞面目で聞いて、その家庭のゴタ〳〵した樣を思ひやつて憐れに感じた。

宗谷は一しきり話すと、スックと立上つて、

「さあグヅ〳〵してると呼びに來るから、僕はもう歸らうよ、君は又勉強するんだらう」と廊下を下りた。

その翌朝荒木が井戸端で顏を洗つてゐると、宗谷の母が不意に前に立つて、挨拶もそこ〳〵に、

「倅は昨夜お伺ひしましたですか、まだ歸つて參りません」

と、目に角立てて云つた。

「そんな筈はないが」と、荒木は落着いて云つて、靜かに手拭を絞つて、冷水摩擦しながら、「まあお上んなさい」と云つたが、老母は氣が氣でなく、

「屹度又彼女の所へ潛り込んだのですよ、貴方

は今度の宿を御存じぢや御座いますまいか」
「僕はよく知りません、それに宗谷君も、もう彼處へは行かんでせう、何處か外へ行つたんぢやないですか」
「いえ、それに違ひないんですよ。昨日も易者に見て貰ひますと、表面は行かん風をしてこつそり行つてるんだから御注意をなさいと申すんですもの、屹度それに違ひありませんよ。一體あれにや電車賃と煙草錢しか渡してないんですから、どうしたつて外へ遊びに行けよう筈は御座いません」と、老母は四圍構はず甲走つた聲で云つて、スタ／＼と通りへ行きかけたが、又舞戻つて、「申しかねますが、會社へお出でなすつたら、社長さんにお願ひして、倅の行先をお調べ下さるやうにして頂きたいんですが」
と云ふ。荒木は勝手な事を云ふ人だと呆れたが、
「はあ承知しました」
と、氣安めを云ふと、老母は多少安心したらしく、
「本當に仕方のない男で御座います」
と云つて、歸つた。
荒木は二階へ上つて、深呼吸をしながら、廊下から見てゐると、老母は四辻に立つて、キョトキョト四方を見て二三度行き迷うてゐた。
宗谷は定刻に出勤して、荒木から事情を聞いたが、只「さうかい」と云つて、別に氣にも留めず、例の如くに仕事をして、定刻に會社を出た。しかし彼れの運命は日一日と縮まつてゐる。「役に立たぬ奴」「無用の長物」だとは公評であつて、當人も認めてゐるのだから、荒木の力で如何ともすることが出來ぬ。
で、その晩も氣掛りで散歩がてら宗谷の家を訪ねたが、二室切りの狹い家はひつそりしてゐる。冷えるとは云へ、まだ秋になつたばかりなのに、老父は袷を襲ね着して、火鉢に當つて指先を揉みながら、クウン／＼と喉を鳴らしてゐる。老母は姉妹に按摩を取らせながら、居眠りをしてゐる。宗谷は座敷の柱に凭れて、玩具の人形を操つて目の玉を飛出させたり、舌を出させたりして遊んでゐる。
「靜かだね」と、荒木が前に坐ると、
「むゝ、嵐の後だからさ」と、宗谷は目尻に可愛い皺を寄せて、倘人形を動かしながら、自分の頤で拍子を取つてゐた。ホ―、二―、と掛聲までする。
「よくそんな馬鹿な眞似をするね」
「面白いぢやないか、昨夕煙草一つ買ふ代りと思つて、夜店で買つて來たんだ」
「さうか、君の家もそれで天下泰平だ。しかし社では動搖があるやうだよ」
「さうかい、僕なんか最先に免めさされるだらうよ」
「さうでもないさ」
「だつてそれが當然だからね、どう思つたつて、僕が社で入用だとは思はれん」
「ぢや、やめたらどうする」と、憚つて小聲で問ふと、
「母に聞いて呉れ給へ、世間ぢや不用の僕でも、母は遊ばせときやしない、何かに任命するだらうよ」
四五日立つて、宗谷の父が荒木の宿を訪ねて來た。宗谷は最早免職されてゐるのだ。そして父は「どうかなりますまいか、貴方のお力で」と、無理強ひに頼んで「今度は六ケ敷いでせう」と云はれても、中々承知しない。
「外でもようがすが、どうかあれだけの月給の所へお世話下さいませんか。でなけりや學資は

使ひ捨てすからな、自分にや車掌にでも土方にでもなるて云ひますが、折角身に付いた寶を棄てるのは惜うがす」

と、少し反身になつて、昔風のノンビリした顔を鹿爪らし、構へ込んで云つて、決して母親のやうに「家の者が食へんから」と、泣き事を云つて賴みはしない。

荒木は「さうですとも」と云つて「いづれ又いい仕事を捜してみませう」と間に合せの安受合をして老人を辭退した。

しかし荒木は自分は他人の職業を周旋する勞力などありやうはなし、世の中はかの老父母の思つてるやうに、宗谷一家と荒木との爲に造られてゐるのではなしと思つて、氣の毒でもあるが、當惑もした。そしてかの老父母が押寄せぬやうに、不意に遠方へ轉居した。

十日も立つて、宗谷からの端書に、

「僕も今は家の者にすら無用扱ひにされてゐる。しかしまだ死の自由は奪はれず、生かして置いて結局を覗かせたいと、[illegible]の思案最中なり」

とあつた。

斷片語

△芭蕉はさすがに傑れた詩人である。西行よりは遙かに詩人的天分に富んでゐる。しかし、私自身は詩作に巧みな芭蕉よりも詩作に拙い西行の氣持に共鳴を感じてゐる。自然に同化し、世俗から隱遁しようとしたところは、二聖相似てゐるやうであるが、非常に違つたところもあるのだ。

「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり。しかも風雅に於ける、造化に從ひて四時を友とす。見るところ花に有らずと云ふことなし。思ふ所月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に齊し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化に從ひ、造化に歸れとなり」と、芭蕉はその「卯辰紀行」に於て云つてゐる。彼れの心境はかうであつたのだらう。花に徹し月に徹してゐたのである。少くも徹しようとし、また徹したつもりであつた。西行も、彼れが生きてゐた時代の歌人の常套を脱しないで、月と花とを謳歌し、「願はくば花の下にて春死なむ」とか、「佛にはさくらの花をたてまつれ、わがのちの世を人とぶらはゞ」とか歌つてゐたが、彼れの心には、「風雅に從ひ造化に從ひ四時を友と」しただけでは安んぜられない懷疑の餘燼が燃えてゐた。芭蕉の如き風流的樂天家ではなかつたのだ。

△「無常」を題として作歌をしても、西行には、貫之や定家とは違つた深みをもつてゐた。云ひ廻しの巧さだけではない、實感が出てゐる。「まぼろしの夢をうつつに見る人は、目もあはさでやよをあかすらむ」の如き、技巧によつてつくられた歌ではない。天眞素朴の萬葉歌人などとは心境がまるで違つてゐる。風雅を主とした後世の歌人の歌ひ得られるものでもない。「おどろかむと思ふ心のあらばやは、長き眠りの夢も覺むべく」など、彼れは、屢々驚かんことを望んでゐる。國木田獨歩が、「人生の不思議に驚かん」としたことが思出される。

（文藝[illegible]の「斷片語」より）

入江のほとり

一

長兄の榮一が奈良から出した繪葉書は三人の弟と二人の妹の手から手へ渡つた。が、勝代の外には誰も興を寄せて見る者はなかつた。

「何處へ行つても枯野で寂しい。二三日大阪で遊んで、十日ごろに歸省するつもりだ」と筆でぞんざいに書いてある文字を、鐵縁の近眼鏡を掛けた勝代は、目を凝らして判じ讀みしながら、

「十日と云へば明後日だ。良さんはもう一日二日延して、榮さんに會うてから學校へ行くとええのに」

「會つたつて何にもならんさ」良吉は卒氣なく云つて、「今時分は奈良も寒くつて駄目だらうな。わしが行つた時は暑くつて弱つたが、今度は花盛りに一度大和巡りをしたいな。初瀬から多武の峰へ廻つて、それから山越しで吉野へ出て、高野山へも登つて見たいよ。足の丈夫な間は歩けるだけ方々歩いとかなきや損だ」

「勝は何處も見物などしたうない。東京へ行つても寄宿舍の内にぢつとしてゐて、休日にも外へは出まいと思うとるの」勝代はわざと哀れを籠めた聲音でかう云つて、先きから一言も口を利かないで、炬燵に頬杖突いてゐる辰男に向つて、「辰さんは今年の暑中休暇にでも遠方へ旅行して來なさいな。家の者は男は皆な東京や大阪や、名所見物をしとるし、溫泉へも行つたりしとるのに、辰さんばかりは些とも旅行しとらんのぢやから、氣の毒に思はれる。自分では東京へ行つて見たいとも思はんのかな」

「行けりや行つてもいゝけど……」辰男は低い錆びた聲で不明瞭な返事をして、口端を舐めずつた。

「わしが東京に居る間に來りやよかつたのに。下宿屋に泊つてて電車で見物すりや幾らも金は入らないんだから」

「勝と辰さんは電車を見たことがないのぢやから、兄弟中で一番時代遅れの田舍者だ。勝は岡山まで汽車に乘つてさへ頭痛がするのに、東京まで何百里も乘つたら卒倒するかも知れんから、心配でならんがな。その代り東京へ行つたら、三年でも四年でも家へは戻らんつもりだ」

「わしの春休みの間に行くやうにすりや、連れてつてやらあ。さうしたら歸りに大和巡りも出來るし丁度都合がいゝんだよ」

「いや〳〵、勝は一人で行かう。それくらゐの甲斐性がなければ、自分の目的を遂げられませんもの」

「口でこそ元氣のいゝことを云つてゐても、途中で腹が痛んだり、汽車に醉つたりしたらどうするんだい。自分の村でさへ出歩けない者が、方角も分らない東京へ行つてマゴ〳〵すると思ふと心細くなるだらう。東京のいゝ家では、つい近所へでも若い女一人外へ出しやしないよ。榮さんが歸つて來たらよく聞いて見るといい」

「死んだつて關はん覺悟をしとるんだもの……」

勝代は負けぬ氣でさう云つて口を噤んだが、ふと不安の思ひが萠して顏が曇つて來た。良吉も話を外して、小さい弟を綾しなどした。

そこへ晩餐の報知が階下から聞えたので、皆なドヤ〳〵と下りて行つたが、勝代は一人後へ

殘つて、二三度母の呼立てる聲を聞いてから、やう〳〵炬燵を離れた。机の上の繪葉書帖に兄の繪葉書を插んだ。そして、目を顰めて、夕月の寒さうに冴えてゐる空を仰ぎながら、雨戸を鎖して階下へ下りた。吊ランプを取圍んで、老幼取まぜて十人もの家族が騒々しく食事をしてゐた。勝代は空いた席へ割込んで、獨り生冷たい煮返しに柔かい菜漬を添へて、不味い思ひをして箸を執つた。

外の者の膳には酢味噌の飯蛸や海鼠などが付けられてゐて、大きな飯櫃の山が見る〳〵崩されてゐた。

隣村まで來てゐる電燈が、いよ〳〵月末にはこの村へも引かれることに極つたといふ噂が誰かの口から出て、一燈の使用料や石油との經費の相違などが話の種になつてゐた。電燈を見た事のない子供達は、いろ〳〵に想像しては喜んでゐた。良吉はメートルとかスヰッチとかタングステンとか洋語を持出して電燈の講釋をし出した。

「僕は東京の下宿にゐた時には、電燈の球を外して、二十燭のを使つてたよ。さうすると晝のやうに明るかつた。此方でもさうするといい。一つで家中明るくならあ。そして長い線で八方へ引張るさ—」

「—そんなことが出來るんかい。電燈も村へ來りや丸で斷る譯にや行くまいから、まあ義理に一つだけは付けることにしようが、畢竟無用の事ぢや」と、老父は云つた。

「しかし、皆な電燈にすると、手數が掛らんし、火事の危險も少うなつてよう御座いますぜ」と次男の才次はさう云つて、少くも二つは引かなきやなるまいと言張つた。そして、博覽會見物に行つた際に見た東京のイルミネーションの美しさを話つた。良吉もそれに相槌打つた。

「夜も晝のやうだ」

平凡で簡單なこの言葉ほど、都會を知らぬ者の心に都會の美しい光景を活々と描かす言葉はなかつた。

が、辰男はこんな話に些しも心を唆られないで、例の通り默々としてゐたが、只竊かに「イルミネーション」といふ洋語の綴りや譯語を考へ出した。そして、食事が終ると、直ぐに二階へ上つて、自分のテーブルに寄つて、頻りに英和辭書の頁をめくつた。かの字を索り當てるまでには餘程の時間を費した。

「あゝ、これか」と獨言を云つて、搜し當てた英字の綴りを記憶に深く刻んだ。次手にスヰッチとかタングステンとかいふ文字を搜したが、それはつひに見付からなかつた。

廣い机の上には、小學校の教師用の教科書が二三册あつて、その他には「英語世界」や英文の世界歴史や、英文典など、英語研究の書籍が亂雜に置かれてある。洋紙のノートブックも手許に備へられてゐる。彼れは夕方學校から歸ると、夜の更けるまで、滅多に机の側を離れないで、英語の獨學に耽るか、考へ事に沈んで、四年五年の月日を送つて來た。手足が冷えると二階から階下の炬燵の空いた座を見付けて、そつと温まりに行くが、曾て家族に向つて話を仕掛けたことがなかつた。直ぐ下の弟の良吉とは、一時隣國の山間の小學校で一緒に教鞭を執つたことがあつたので、多少打融けた話もしてゐたのだつたが、それさへ年を經ると共に、隔たりが増して、この冬の休暇には親身な話は只一度もしないで過した。

でも、良吉が傍で洗濯物や乾魚を小さい行李に收めて明日の出立の用意をしかけると、辰男も書物を措いて屢々その方を顧みた。

七八年前の冬休みに、兎を一匹當めて、弟と交互に擔いで、勤先から歸宿したことが、ふと彼れの心に浮んだ。

二

階下では、老父母も才次夫婦も子供達も、彼方此方の部屋に早くから眠りに就いて、階子段の下の行燈が、深い闇の中に微かな光を放つてゐた。二階では良吉と勝代とが炬燵に當つて、一しきり東京話を聞いたり訊かれたりしてゐたが、やがて別々の部屋に別れて寢支度をした。

「良さんには當分會へんかも知れんな。來年高等學校を卒業したら、成るべくなら東京の大學に入れるやうな方法を取りなさいよ」と、勝代は兄の寢床を延べながら云つた。そして、自分は寒さに傷まぬやうにと、懷爐を腹に當てて眠つた。

弟と妹の安らかな寢息を耳に留めながら、辰男はまだ椅子に腰を掛けて、雜誌に出てゐる和文英譯の宿題をいろ〳〵に工夫してゐた。アルハベットの讀方から、滿足に教師によつて手ほどきされたのではないので、全くの獨稽古を積んで來たのだから、發音も意味の取り方も自己流で世間には通用しさうでない。二年間東京の英語學校で正則に仕上げて來た良吉に屢々「田舍で語學を勉强したつて骨折損だ、それより早く正教員の試驗を受けた方がいゝぜ」と忠告されて、父や兄からもそれを最も賢い方法として說勸められたが、彼れは馬の耳に風で聞流して、否か應かの返事をさへしなかつた。で、家の者は彼れの心を量りかねて、涼み臺や炬燵の側での茶呑み話の折々、眞面目の問題として持出されたことは二度や三度ではなかつた。

「最初ヴァヰオリンを習つて音樂家になりたいと云つたのを聞いてやらないんだから、それであんな風になつたのぢやないかと思ふ」と、ある時父が思當つたやうに云つた。

「そればかりぢやない。鼻がまだ直り切らんのでせう。一寸見ると拗ねて居るやうぢやが、五年も六年も拗ね通されるものぢやない。身體に故障があるからでさあ」と、才次は云つた。

「あれぢや商人にもなれんし、百姓にもなれまいし、まあ粥でも啜れるくらゐの田地を分けてやるつもりで、抛つて置くか」

とどのつまり、かう解決をつけて、最早彼れの身の上を誰れも問題にはしなくなつた。見馴れた目には、彼れの行爲もさして不思議には映らなくなつた。

十一時が鳴ると、辰男は椅子を離れて押入から夜具を取出した。そして、便所へ行つた歸りに、階下の炬燵の殘り火を搔起して、半身をすり込ませて、氣儘に温まつた。自ら睡氣の萌すまで、かうして過してゐる二三十分間が、彼れには一日中の最も樂しい時間であつた。今日新に習ひ覺えた英語を口の中で繰返してゐたが、ふと弟の明日の出立が思出されて、自分が眠つてゐる間に出掛けられては殘念な氣がしたので、何よりも早目に炬燵を出た。

閾で仕切られてゐるだけで、嘗て襖の立てられたことのない自分の居間で、短い敷蒲團に足を縮めて横になつて目を閉ぢた。何時もならば、目を閉ぢると直ぐに睡眠に落ちるのだが、今夜は慣例を破つて、まだ睡氣の催さぬ前に炬燵を離れたためか、頭が冴えて眠付が惡かつた。

何處かの障子を破つてゐる猫の爪音が煩さく耳に付いた。辰男は「シッ〳〵」と云ひながら疊をバタ〳〵と叩いたが、やがてランプを點けて音のする方へ行つて見ると、猫は最早障子の破れ目から緣側へ飛下りて喧嘩を立ててゐた。雨戸を少し開けて猫を屋根の方へ追出しながら、辰男は久振りに自分の村の夜景色を眺めた。

十數町を隔てた小學校へ往來する外には、春にも秋にも殆ど一歩も門を出たことがないのみ

か、家の周圍にどんな騷ぎがしてゐようとも、滅多に窓の外へ顏出したことがなかつたので、平生雨戸一枚隔てた外の景色とは馴染が薄いのだつた。

夕月が既に落ちて、幾百もの松明が入江の一方に縞のやうに光つてゐる。耳を澄ますと小波の音が幽かに聞えたが、空も海も死んだやうに鎭まつてゐる。宮を圍んだ老松は陰氣な影を映してゐる。彼れは他鄕から歸省した者のやうに、今夜は少年時代の自分の姿を闇の中の彼方此方に見詰めた。……もつと快活で元氣のよかつた昔の事が未生前の時代のやうに心に浮んだ。

冬でも藺の笠を被つて濱へ出て、餌を拾つて、埠頭場に立つたり幸神潟の岩から岩を傳つたりして、一人ぼつちでよく釣魚をしてゐた。釣れても釣れなくても、兄弟や近所の友達と遊ぶよりは面白かつた。潮が滿ちて潟が隱れると衣服を胸までまくし揚げて、陸へ上るので、衣服は何時も潮臭かつた。あの時分は川尻に蘆が生えてゐた。潟からは淺蜊や蜆や蛤がよく獲れて、綺麗な模様をした貝殼も多かつた。が、今は入江に魚が減つて、岩のあたりで釣魚をしたつて、雜魚一匹引にかゝつて來ないらしい。山や海の景色もあの時分は今よりも餘程美しかつたやうに思はれる。向ひの小島へ落ちる夕日は極樂の光のやうに空を染めてゐた。漁夫の身體付からして昔は巖のやうだつたり枯木のやうだつたりして面白かつた。

お宮の松には梟が棲んでゐたのぢやがと、その不氣味な鳴聲を思出しながら、暗い梢を見上げてゐると、その木蔭から一羽の鳥が羽叩きして空を横切つてゐるやうな氣がした。

辰男は雨戸を閉めて寢間へ戻つてからも何となく物哀れな氣持がした。側の壁に懸けて置きながら日頃忘れ果ててゐたヴァヰオリンに目がついて、久振りで彈いて見たくなつた。樂器を包んだ黃ろい袋は夜目にも目立つほど汚れてゐた。

山間の寂しい小學校にゐた間、俸給の餘剩を積んで購つて、獨稽古で勝手な音を出して、夜毎にこれを弄んでゐたことが、涙ぐまるゝやうな追憶となつて、乾いた彼れの心を潤はした。

「明日の晩には是非彈いて見よう。春高樓を彈いて見よう」……彼れは新しい英字の變則な發音よりも、昔馴染のヴァヰオリンの變則な音色に、一層強く自分の魂が打込まれさうに思はれた。

三

辰男の明方の夢には、蕨の萌える學校裏の山が現はれて、其處には可愛らしい山家乙女が眞白な手を露出して草を刈りなどしてゐた。……と、誰かに呼立てられたやうな氣がして目を開けたが、左右の室には誰もゐなかつた。良吉は最早出立したのか知らんと、急いで階下へ下りると、弟は竹の手のついた煙草盆を膝に載せてゐる父親の前に不恰好なお辭儀をして、これから出掛けようとするところだつた。皆なが上り框に突立つて見送つてゐた。

辰男はそつと皆なの後に寄つて、默つて弟の出て行くのを見てゐたが、直ぐに二階へ引返して、弟を乘せた俥が濱通を過ぎるのを見下した。俥の音の消えるまで窓際を離れなかつた。

「良さんも行つてしまうた」何時の間にか勝代が傍に來てゐた。「これで勝が出て行からものなら、辰さんは二階に一人法師で淋しうなるぞな」

「……」辰男は默つて茫然してゐた。

「早う嫁さんを娶りなさいな。小串に丁度よさ

ようなのがあつて、東京の叔父さんが話を持つて來たから、もう一度よく問糺して、成るべくならあれにでも纏めたいと、お父さんが云うて居つた。少々氣に入らんところがあつても我慢して、その人を嫁さんに貰うたらえゝにな。儂の考が皆な相談だと思うたら、兄さんも強ひて否とは云はんでせう」時代は母親の命令で、何氣ない風で兄の顏の中を索つて見た

「……そんなことはお前が訊かいでもえゝ」長男は鬱陶しい聲でさう云つて、自分の居間から齒磨粉と手拭を持つて來て、靜かに廊下へ下りて井戸端へ出た。大きな酒樽にだゞをり大根が漬けられてあつて、大蒜な饐味噌の臭ひが鼻を襲つて嘔吐をさうになつた。

「時代は、何であゝ僻人なつてあらう。家中で私だけが同情してやつてゐるのぢやないか」と忌々しく感じた。が、しかし、後で直ぐに心を和げて、自分がからして一緒にゐるのも今暫らくの間だから、出來るだけ大切にして上げて惡く思はれないやうにしたいと思ひ返した……外の兄弟は皆な好きな學問をしてゐるのに、長さんばかりは一生こんな汚い村の先生をして暮らすんだもの、可哀さうだ。お父さんが不公平だと、兄の身の上を不仕合せな人として憫んだ。

そして、紙幣を持つて兄の机の上の與書を挿むながら、書物の間に挿んである洋紙を覗いて、細い鉛筆で根氣よく英字を書留めてゐるのに、感心もし、冷笑を浮べもした。その中には、同窓の誰にも劣らなかつた英語自慢の時代にも解き得ない文句が多かつた。

"Nonsense." といふ言葉には鉛筆を當けて、ノンセンスと假名をも振つてある事さうに記してゐる。

「貴女の云ふことはノンセンスよ」などと、時離の間で云ひ合つたことを時代は思出して獨り笑ひをした。そして、兄さんはこの英語の意味を理解して居るのか知らんと訊きたかつた。

と、そこへ、長男は梅干で茶漬の朝飯を濟まして、齒を吸ひ〳〵上つて來たので、時代は挪人から洋服を取出してやつて、

一遍まで膝にこのテーブルを貸してお呉れた。腰を掛けて勉強したら、お腹がよう減つて氣持がよくなるかも知れんから」

「……」長男は自分の机や椅子を他人に——たとひ妹であつても——使はれるのが厭であつたが、他人に向つて——たとひ妹であつても——否と斷言することは出來なかつた。無論快い承諾を與へる氣にもなれないのだが……

「使うてもよからう！　本はちやんとこのまゝにして置くがな」

「フーン」と長男は僅かな返事をした。カラアもネクタイも附けない洋服の上に古いトンビを着て、帽子を冠けて裏口から家を出て、狹い畔道を通つて學校へ向つた。

子供達も立つて出て行くと、廣々とした家の中は大風の跡のやうに靜かになつた。母や兄嫁は立つたり坐つたり、何となしに家事に忙しかつたが、時代はざつと二階の掃除をして、時間外れの朝餐を一人で食べると、下女に吩咐けて、二階の書齋に火を入れさせて閉籠つた。良吉の歸つてゐる間、入學試驗の準備を怠つてゐたので、最早小説など讀み耽つてはゐられなかつた。上京までの日數を數へると心が焦燥しかつた。……若しも落第をしようものなら、一年前に入學してゐる朋輩に對しても家の者や村の者に對しても、おめ〳〵顏は合はされない、とても生きてゐられないと、神經を昂らせながら、英語讀本を披いた。

が、鉛筆を片手に精一杯研究してゐながら、心は動もすると書物から離れて、外の思ひに疲れた。深夜も白晝のやうな東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒藥を飲んで自殺する悲

しい有様を空に描いたり、西洋の婦人と自在に會話を取かはしてゐる得意な有様に胸を躍らせたりして徒らに時を過した。運動不足のために、柔かい食物も消化が惡くて、勉強に取掛ると、腹の重苦しいのが一層氣になつた。

　辰さんのやうに一心不亂に勉強するつもりで、炬燵を離れて兄のテーブルに向つたが、裾の方が寒くて、手の先も冷えて、とても長い辛抱は出來なかつた。で、再び炬燵の側へ戻つて、額を櫓の縁に押當てて、取留めのない空想に耽り出した。好きな蜜柑を母親が籠に入れて持つて來て呉れると、胃に惡いと知りつゝ手を付けて二つ三つ甘い汁を吸つた。

　辰男は極つた時刻に學校から歸つて、テーブルの位置も書物の配置も亂されてゐないのに安心した。衣服を着替へて椅子に腰を掛けると、昨夕ヴァヰオリンの音を戀しがつたことを思出し、壁の方へ目を向けたが、感興は何時の間にか消えてゐて、そんな物を手に執るのさへ懶かつた。矢張英語修業に心が惹かれた。

　今日は障子の破れ目から、英文典の上に細い光を投げてゐる。下女はランプに油を注いで、部屋々々へ持廻つてゐる

四

　十日には旨い魚を買溜めて待設けてゐたのに、榮一は歸つて來なかつた。「もう四五日遊んで歸る」と、大阪の市街を寫した繪葉書を寄越した。

　誰よりも勝代が一番長兄の歸省を待ちかねて、母親に向つて頻りに噂をしてゐた。「榮一さんが春まで家に居つて呉れると、勝も東京へ隨いて行けるのぢやけれどな、戻つたと思ふと、直ぐにまた行つてしまふんでせう。東京で暮すよりや田舍に住んで居る方が仕合せだと、よく手紙に書いて來るけれど、自分だつて、一月も田舍にはぢつとして居られんのだもの。……學問した者は、こんな下等な人間ばつかり住んで居る村へ戻つて來たつて話相手はないし、見るもの聞くものが嫌になつて仕樣があるまい。……勝には榮さんの心持がよう分つとるがな。……勝も今の間にせつせとお姉さんや祖母さんのお墓へ詣つて置かうと思うとるけど、途中で人に顏を見られるのが氣味が惡いから、どうしても出て行かれん。勝は外を通つてる人の聲を聞いても時々氣疎いことがありますぞた。ようあんな下卑たことを大きな聲で喋舌つてげら〳〵笑つて居られると愛想が盡きてしまふ。こんな人間ばかりのゐる村で一生を暮らすとすりや聾になりたいと勝は思ふがな」

　無口な母親は、娘の言葉に輕く雷同するだけだつたが、才次が傍で聞いてゐるものなら、默つて妹に話を續けさせて置かなかつた。兄弟中では稍常識に富んだ穩かな彼れは、決して烈しい口は利かないが、小間癪れた妹の言語態度が女學生めいてゐるのが氣に觸つて、揶揄ふか冷かすかしなければ蟲が收まらなかつた。

　ある夜も勝代が、上京心得と云つたやうな事を書いてある東京の友達の手紙を母に讀んで聞かせて、母子が炬燵に差向ひで話込んでゐるところへ、筒袖を着た才次が、兩手を細い兵兒帶に突込んだまゝ、のそ〳〵傍へやつて來た。

「お前の友達は皆なペンで手紙を書くんかい」と、四角な桃色の封筒を手に取つた。

「昔風の候づくめの手紙なら卷紙に筆で書くのがよう似合うとるけど、言文一致にや西洋紙にペンを使うた方がえゝ。第一一枚の紙にも仰山に字が書けて、お父さんの口癖の經濟的にもなるんぢやもの」勝代は皮肉をまぜて答へた。

「まだ友達同士英語で手紙のやり取りは出來ん

かい」才次は差出人の名前を見て封筒を下へ置いて、
「この女も東京言葉を勉強しに、高い資本を費うて東京の學校へ入つとるのかい」
「そないな惡口は勝等には何ともないがな。此方に居る者でも、手紙にはお互ひに東京言葉を使うとるんぢやもの」
「……東京の女子も變挺な言葉を使ふぜ。一寸道を訊いても、べら／＼と云うて何やら譯が分らん」
「東京の人は、體口が早いんぢやらうか」勝代はふと眞面目に尋ねた。そして、卑しい田舍訛を朋輩に嗤はれはしないかと氣遣つた。
「口が早いばかりぢやない、何か知らん忙しさうでゴタ／＼した處ぢや。若い間はあんな町で好きなことをして暮らすのもよからうが、歳を取つたら居れる處ぢやない。田地まで賣つて大阪や神戸へ行つた者が、よく見い、大抵は失敗つてヒヨコ／＼戻つて來るぢやないか。儲けて他所の錢を持つて戻る者は十人に一人もありやせん。大抵はこの貧乏村の錢を持出して都會へ捨てに行くんぢやから、村はます／＼貧乏になるばかりぢや。近い話が寺の坊主からして、わざ／＼損をしに神戸へ投機をやりに行くといふ有樣だもの」
「來月の祖母さんの十三回忌までには、お住持さんは戻つて來るのぢやらうか」と母親が口を出した。
「法事よりも村に葬式があつたらどうするつもりでせう。坊主は寺の物を賣飛ばして他所へ行つてもよからうが、さう荒して出られちや、後ではこの寺へ來て呉れ手がないから檀家が迷惑ぢや」
「耶蘇教で葬式をすると、却つて輕便で神聖でえゝがな。勝はお經も嫌ひだし黒住のお祓ひも嫌ひぢや」
才次は宗旨などどうでもいゝので、妹が友達の耶蘇信者が女學校で死んだ時の儀式の樣子を話すのを難癖をつけずに聞いてゐたが、やがて、先き云はうとしたことに話を戻して、
「一家の者も東京なり神戸なり、出て行く以上は、その土地々々に一生落着くことにして、生活が六ヶ敷うなつて生家へ轉がり込まんやうにきつぱり極りをつけとかにやならんと思ふ。都會住ひをした者に田舍を手頼りにせられちや、此方で質素な生活をしとる者は迷惑するし、第一割に合はん話ぢやから、兄弟だからまさかた時にや世話になりやえゝといふ量見で居られちや共倒れぢや」
「それは利己主義ぢやがな……」
「どうせ皆なが利己主義ぢやから、初めからさう極めとくに限るんぢや。辰男だけはこの村で別家さすにしても、此處とは少し離れて家を建ててやるとえゝ。直ぐ側に親類が並んでると、よけりやよし、惡けりや惡しで、嫉んだりけなしたりし合つて煩さいものぢや」
「昔は兄弟は近い處に居るのがえゝと云うて、高松の伯父さんなぞは直ぐ裏の地續きに、自分の家と間取りから柱の數まで同じい家を弟に建ててやつたのぢやが、今時はさうは行かんぢやらう」と、母親は反對もしなかつた。
「兄弟同士嫉むことまで考へとかいでもえゝがな。家の兄弟にはそんな下等な人間はありやすまいに」
勝代は細い眉の間に皺を寄せて、「辰さんはあないな風なのに、誰も構うてやらにや可哀さうぢやがな。勝は貧乏しても何處で暮らしとつても、辰さんの力になつて上げにやならん」と、昂奮した調子で云つた。
「他人のことよりや、勝は自分の身の間違ひのないやうに考へとれ。女子が愚圖々々して歳を取つて、英語を喋舌つて學校の先生になつたつ

て、何が面白いことがあらうぞい」才次は、眼鏡を掛けた妹の平たい顔を憐憫な思ひをして見入つた。

「才さんに學資を出して貰やあせず……」勝代は兄が動もすると、自分の樂しい理想を破らうとするのが口惜しくて、から言放つて、顔を見られぬやうに炬燵の上に俯伏した。

才次は澁い顔をして口を噤んだ。

「女子で月給取りになるのも、容易なことぢやあるまいて」と、母親は感じのない聲で獨言のやうに云つた。

皆なが暫らく默つてゐるところへ、辰男は階子段を軋ませて、のつそり下りて來て炬燵の空いた處へ足を入れた。

「辰さんはテーブルの下へ火鉢を置きなさいな。辰さん一人火の氣のない處に居つちや割に合はんぞな」勝代は今氣づいたやうに云つた。

「ランプを點けつ放しにしといちや危いぜ」才次は二階から差して來る燈火を見上げて云つた。

五

勝代は腹がちく／＼痛みかけると、懐爐だけでは心許なくて、熱湯を注込んだ大きな徳利を夜具の中へ入れて眠ることにしてゐたが、ある夜、徳利の效目がなくつて眞夜中頃に暫らく忘れてゐた激しい痛みを感じ出した。階下へ下りて母親や兄嫁を驚かすのは氣の毒であるし、それよりも自分の腸胃のまだ癒つてゐないことを家の者に知られて、東京行を引止められるかも知れないのが恐ろしくて、腹を壓へて呻きながら我慢してゐた。が、疼痛は容易に收まらなくつて、呻き聲は自然に高くなつた。

次の室に寢てゐる辰男の耳にも入つた。彼れはふと目を醒まして、それと氣がつきながら、妹の樣子を見に行かうともせねば、聲を掛けもしなかつた。寢返りを打つて再び眠りに就かうとした。が、呻吟が次第に耳障りになつて仕樣がない。猫を追出すやうにこの睡眠の邪魔物を遠ざける譯には行かない。……で、彼れはランプを點けて、そつと自分の寢床を、先日までは良吉のゐた次の室へ持つて行つた。其處では呻吟聲が大分遠くなつた。

「辰さん……」と、勝代は襖を洩れる燈火に目をつけて、術なげな聲を出した。

辰男は返事をしない。夜半の寒さに身震ひして、寢床の中へ藻繰込んで、燈火を消した。

勝代は再び兄を呼んだが、返事がないので、寢床から匍出して襖を開けて更に呼んだ。「お父さんの机の上にある藥を取つて來て呉れんかな」と頼んだ。藥嫌ひで醫者が呉れた藥さへ二度に一度は祕密で棄てたほどなのに、今の場合父の常用の消化藥をさへ手頼りにする氣になつた。

確かに兄は起きてゐたのにと訝りながら、勝代は手索りでマッチを搜して、ランプを點けて見ると、兄は例の處に寢てゐなかつた。近眼を顰めてやう／＼その寢床を見付けると、腹を壓へながら側へ寄つて耳許で聲を掛けた。誰にも知らさないで、そつと取つて來て呉れと頼んだ。

辰男は物をも云はず、突如に起上つた。そして、裾の短い寢衣のまゝランプを持つて階下へ下りて行つた。行燈の火は今にも消えさうに搖めいてゐた。彼れは父の部屋や兄の部屋には年に一度足を入れることがあるかないかで、部屋の樣子がどうなつてゐるか知らなかつた。

音のせぬやうに襖を開けて入ると、子供の時分から見馴れてゐた赤毛氈を掛けた机が、以前の通りに壁際に据ゑられてあつた。机の上には大きな硯や厚い帳簿や筆立や算盤がごた／＼

と一緒に置かれてあつた。新聞に蔽はれてゐる苦い藥瓶を捜出しながら、彼れはふと大谷圖三と云ふ封筒の文字に目を留めた。母が先日問はず語りに云つてゐた縁談の周旋者の名前が大谷だつたので、彼れは封筒を取上げて覗いたが、手紙を引出して讀まうとはしないで、元の處に置いた。そして、柱に掛つた寒暖計を見て、二三十五度か、寒い譯だ、と思ひながら部屋を出た。どの室からも安らかな寢息が洩れてゐて一人も目醒めてゐなかつた。ガランとした家の中には寒い風が流れてゐる。

勝代は待ちかねた藥瓶を兄から渡されると、直ぐに手の平に藥を移して、「このくらゐの分量で利くぢやらうか」と兄に訊いた。

「そんな藥は毒にもならん代り利きやせん」と、辰男はぶる／＼慄へながら、顏を蹙めた妹の苦しげな樣を見下してゐた。

「水を持つて來て呉れなんだのかな」

「……徳利の湯で飲んだらよからう」

勿體振つた兄の言葉を妹は可笑しく感じた。教へられた通りに、徳利の栓を拔いて口移しに湯を吸つた。太息を吐いて、いくらか安らかな氣持になつて、

「階下では皆な眠とつたかな。勝は心細いから、も少し其處で起きとつてお呉れな」

さう云はれると、辰男は自分の寢床へ退くことが出來なかつた。

「勝はこないに身體が弱うちや困るがな。外の兄弟は丈夫なのに勝一人だけは……」

「……運動せんからぢや」

「この村にや厭らしい人間ばつかり居るから外へ出るのが恐ろしいもの。……辰さんは身體が強いからえゝなあ。家ぢや姉さんが早う死んだし、勝も長生せんやうに思はれるけれど、女子は婆さんになるまで生きて居らん方が結句仕合せなやうに思はれる。お姉さんは家で皆なに介抱されて死んだのぢやけれど、勝は他所の土地で一人で死ぬのぢや」勝代は疼痛が和ぐのにつれて、こんなことを云つて涙を浮べた。

辰男は幾度も嚔をした。寒さに堪へられなくなるし、妹の愚な言草に興も起らないので、言葉の切れ目にその側を離れて、自分の寢床へ入つた。夜具の中へ首をすつ込めて足を縮めて、冷えた身體の暖まるので、いゝ氣持になつてゐたが、すると今見た手紙の内容がいろ／＼に想像され出して、自分に女房の出來るのが不思議でならなかつた。……學校の小さい生徒か母か妹かの外には、女と口を利いたこともなければ、染々女の顏を見たこともないので、思出にも若い女の影ははつきり浮ばない。山間の學校にゐた時分には、土地の若い女に逢ふと、極りの惡い思ひをして顏を外らせてゐたのだつたが、今は平氣でゐて自然に目がつかぬやうになつてゐる。……彼れは自分の縁談から、どんな男にも、女房のあることに思ひ及んで、妙な氣がした。そして、勝代が出て行つた後で、まだ見たこともない女と自分とが、この二階に住ふことを、夢のやうに感じながら、ぐつすり睡眠に陷つた。

翌日學校の往歸りの途中でも、彼れは屢々結婚について珍らしげに考へた。擦違ふ女の姿形を無心に見過せなくて、穢しい田舍女の一人々々が頭の中に浸込んだ。テーブルに向ふには向つたが、今日は英字の解釋に早く根氣が疲れて、所在なさに屢々机を離れては障子を開けて外を眺めた。

西風の凪いだ後の入江は鏡のやうで、漁船や肥舟は眠りを促すやうな艪の音を立てた。海向ひの村へ通ふ渡船は、四五人の客を乘せてゐたが、四角な荷物を背負うた草鞋脚絆の商人が駈けて來て飛乘ると、頰被りした船頭は水棹で岸を突いて船を辷らせた。辰男は暫らく船の行

方を見入つてゐたが、乘客の笑ひ話は靜かな空氣を傳つて彼れの耳にも入つた。入江の海や野天の風呂場をも彼れは久振りに見下した。夜は例よりも長く爐燵に當つて過した。

六

榮一が歸つて來たのは、豫報の日取よりも遲れ遲れて、最早誰も忘れたやうに、噂にさへ上さなくなつた頃であつた。夕餐の膳が片付いて、皆なが彼方此方へ別れてゐるところへ、車夫の提灯を先に、突如に暗い土間へ入つて來た。散らばつてゐた家の者はまたぞろ〳〵出て來て一ところに集まつた。勝代も物音でそれと知ると、書物を措いて二階から下りて來た。

が、長男一人は椅子から身動きもしなかつた。二三日前から作り始めた英文に心を打込んでゐた。眠つた海に無用な行爲ながら、自ら選んだ事業であつた。大谷が間に立つて取做しかけた縁談は、疎に話し進まぬ中に立消えになつて、その日から明ら樣に彼れに背けて意向を確める必要もなくて濟んだが、彼れは二三日妄想に惱んだだけで、元の彼れに返つて、テーブルに釘付のやうになつてゐられた。……

風が吹けば浪が騒ぎ、潮が滿ちれば潟が隱れる。漁船は年々殖えて魚類は年々減りつゝある。川から泥が流れ出て海は次第に淺くなる。幾百年の後にはこの小さな海は干乾びて、魚の棲家には草が生えるであらう。……」こんな自作の文章を、辭書を繰つては、一々英字で埋めて行つた。

以前二三度英語雜誌へ宿題を投書したことがあつたが、一度も掲載されなかつたので、今は全くそんな望みを絶つて、只自作の英文は綴絲で綴ぢた洋紙の帳簿に綺麗に書留めて置くに止めてゐる。自分ながら初めの方のに比べると、文章は次第に巧みになつてゐるやうな氣がする。熟語なども折々使はれるやうになつた。

階下が賑つてゐるので、爐燵に當りに行くのを遠慮してゐたが、末の妹が息をせか〳〵吐きながら上つて來て、「榮さんのお土産」と云つて、栗饅頭を二つ机の上に置いて行つた。長男はインキに汚れた骨太い指で抓んで大口に食べた。そして、冷くなつてゐる手を内懷に入れて温めながら暫らく息休めをした。

妹と母とは、階下から夜具を運んで、次の室へ兄の寢床をのべた。と、間もなく榮一が上つて來たが、長男の方を一寸振返つたばかりで、次の室へ入つて襖を締めた。直ぐには寢ないで、手紙を書いたり雜誌を讀んだり、良吉が殘して行つた書物を手に取つたりしてゐた。矢鱈に吸つてゐる煙草の煙は、襖の隙間から洩出て、長男の鼻のあたりにも漂つた。

階下が寢靜まつてから暫らく立つて、榮一は部屋に籠つた煙を外へ出して、燈火も消して寢床に就いた。平生寢付の惡いのが癖なのに、堅い寢床が身體に馴染まなくて、ます〳〵寢づらかつた。

「兄はまだ寢ないのか。燈火が邪魔になつていけないな」

四年目で耳に觸れた兄の聲は、相變らず尖つてゐた。長男はその聲を聞くと同時に、ペンを筆箱に收めてインキ壺に蓋をした。ランプをも吹消した。

翌日は日曜なので、長男は目醒めても容易に起上らないで、寢床の中で書物を讀んでゐた。お土産の栗饅頭を一つ母が枕許に置いて行つて呉れた。風もないし、障子に差した朝日は春のやうに麗かだつた。

榮一は早く起きて海岸を散歩して來たが、朝餐後に一時間ばかり讀書すると、また外へ出ようとして階子段の方へ行きかけたが、ふと振返

つて、「辰。……山へ登つて見んか」と誘つた。そして、二三歩辰男の居間へ踏込んで、テーブルの上に目を据ゑた。
　辰男は立上りざま初めて兄の顏を熟視した。……四年前よりも父の顏に著しく似通つてゐた。兄が身體を屈めて、英作文を一二行見てゐる間に、辰男は帽子を被りトンビを着て直立してゐた。
　一人はステッキを持ち草履を穿き、一人は日和下駄を穿いて、藪蔭を通り墓地を拔けて、小松の繁つてゐる後の山へ登つた。息休めもしないで一氣に登つたので、二人の額からは汗がぼた／＼落ちた。頂上近い處にある小祠まで來て、その側の石に腰を卸した。小祠は田舍の郵便箱のやうな形をしてゐる。扉は壞れて中には枯松葉が散つてゐるだけで、神體はなかつた。其處からは曲りくねつた海を越し山を越して、四國の屋島や五劍山が微かに見えるのだが、今日は光が爛つて海の向うは模糊してゐた。
　草履を穿いてゐる兄の方は却つて足が疲れ息切れがしてゐたが、冷々した山上の風に汗を乾かして爽かな氣持になると、今までの沈默を破つて、弟に向つていろ／＼の話を仕掛けた。彼方此方に見える島の名を訊いたり、近くの山の裾の村々の有樣を訊いたりしたが、はつきりした答へは得られなかつた。
　辰男は全で他郷を見渡してゐるやうで方角も取れなかつた。萬國史で見た西洋の天子の冠のやうな形をした小さい島が入江から眞近い處にあるのに今初めて氣がついた。入江に出入りして來る漁船は皆その側を通つてゐるのに、彼れは嘗て其處迄も行つたことがなかつた。
「あれが鍋島だ。樹がよく茂つてるから、あの周圍にはよく魚が寄つてると云ふぢやないか」と、却つて兄に敎へられたが、さう聞けば島の名前は子供の時から聞馴れてゐるのだつた。
「しかし鍋よりも王冠によく似てゐる」と思つて、冠島といふ課題で英文を作らうと思ひついた。目の下の墓地も、海を渡つてゐる島の群れも、辰男には皆英文の課題としてのみ目に觸れ心に映つた。飛んでゐる五六羽の鳥は鳶だか雁だか彼れの知識では識別けられなかつたが、「ブラックバード」と名づけただけで彼れは滿足した。
「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的があるのかい」冬枯の山々を見渡してゐた榮一はふと弟を顧みて訊いた。
　ブラックバードの後を目送しながら、「飛ぶ」に相當する動詞を案じてゐた辰男は、どんよりした目を瞬きさせた。直ぐには返事が出來なかつた。
「中學教師の檢定試驗でも受けるつもりなのか。……英語は面白いのかい」と、兄は疊みかけて訊いた。
「面白うないこともない……」辰男はやがて曖昧な返事をしたが、自分自身でも面白いとも面白くないとも感じたことはないのだつた。
「獨學で何年やつたつて檢定試驗なんか受けられやしないぜ。外の學問とは違つて語學は多少教師について稽古しなければ、役に立たないね」
「……」辰男は默つて目を伏せた。
「それよりやそれだけの熱心で小學教員の試驗課目を勉強して、早く正教員の資格を取つた方がいゝぢやないか。三十近い年齡でそれつぱかりの月給ぢや仕方がないね」
「……」足許で椚の朽葉の風に飜つてゐるのが辰男の目についてゐた。いやに侘しい氣持になつた。
「今お前の書いた英文を一寸見たが、全で無茶苦茶で些とも意味が通つてゐないよ。あれぢやいろんな字を並べてるのに過ぎないね。三年も

五年も一生懸命で頭を使つて、あんなことをやつてるのは愚の極だよ。發音の方は尚更間違ひだらけだらう。獨案内の假名なんか當てにしてゐちや駄目だぜ」

「……」

「娯樂にやるのなら何でもいゝ譯だが、それにしても、和歌とか發句とか田舍にゐてもやれて、下手なら下手なりに人に見せられるやうなものをやつた方が面白からうぢやないか。他人には全で分らない英文を作つたつて何にもならんと思ふが、お前はあれが他人に通用するとでも思つてるのかい」

かう云つた榮一の語勢は鋭かつた。弟の愚を憐むよりも罵り嘲るやうな調子であつた。

「……」辰男は黒ずんだ唇を堅く閉ぢてゐたが、目には涙が浮んだ。無論他人に教へるつもりで讀んでゐるのではないし、他人に見せるために作つてゐるのではないし、正格でないことは當に承知してゐるが、全然無價値だとこの兄に極められると、つくゞ情なかつた。

「まあ、歸らうか」と云つて、榮一は裾の塵を拂つて、同じ道を下つた。墓地近くなつて、のろのろ下りて來る弟を待合せて、妹の墓と祖母の墓とへ詣つた。日が陰んで息の臭かつた。妹の死んだ妹の醜い姿は、辰男の記憶にはまざ/\と刻まれてゐて、妹といふと直ぐ思出したが、今墓場に立つてゐると、×子の墓と彫つた新しい石碑に對して追慕の感じは起らないで、石の下の棺の中で蛆に喰はれてゐる死骸の醜さが胸に浮んだ。

僧侶が投機に凝り出してからは、寺は雨戸を鎖して空屋のやうに汚れて、墓場の道は草が生え木の葉の散るにまかせてゐた。兄弟は朽葉を踏んで墓地を下つた。

「辰は家で許したら、學校へ入つて眞劍に英語の稽古をしようといふ氣があるのかい」榮一は前とは異つて穩かに話しかけた。

が、辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしようとはしなかつた。「別段學校へ入りたいといふことはありません」と、干乾びた切口上で答へた。

「せめて、もう四年も早く決心して、強硬に親爺に説付けたなら、東京に英語研究に行けんことはなかつたらうのに。勝代さへ行くやうになつたのだもの。……しかし、お前は今からぢやあまり遲過ぎるね」

家へ歸ると、辰男は外に自分の置く處がないやうにテーブルの前に腰を掛けたが、作りかけの文章に目を向けるのが[illegible]た氣がした。

午過ぎになると、所在なさに、文典など讀みだしたが、今までのやうに傍ら人無きが如き態度ではゐられなくて、兄の足音が聞えると書物を脇へ片寄せた。

七

階下で兩親や才次などが一家の雜務に取掛つてゐる間に、二階では三人が各自の部屋に籠つて、それ/″\に讀んだり書いたりしてゐた。一人も他の部屋へ入つて無駄口を利くこともあまりなかつたが、階下から才次などが上つて來て勉強を亂すことは尚更稀だつた。良吉のゐた時分のやうな賑かな笑ひ聲や打解けた雜談は二階では跡を絶つてゐて、榮一の歸省は勝代が豫期したやうな明るさを家の中へ齎さなかつた。

榮一は自分を憚つてゐる辰男に向つて強ひて話を仕掛ける氣はなかつたが、でも折々辰男に對しては神經を凝してゐた。ランプの下で難解な英字に青春の根氣を疲らせてゐる弟の青黑い顏の筋肉の微動をも、襖越しに見遁してゐるやうに感ずることもあつた。しかし自分に親しみを寄せたがつてゐる勝代をば、極めて淡く見

過してゐた。妹の聞きたがつてゐる東京の女學校や女學生の氣風について話をしてやるでもなく、妹の東京行について一口も明ら樣に可否の意見を述べなかつた。二十未滿の女が小說で知つてゐる東京に憧れて、東京の何とか云ふ英語學校へ入つて、學問で身を立てて、一生獨身で通すといふやうな乳臭い言葉を眞面目に聞いて、兎や角と無用な陳腐な意見を述べる氣にはなれないのだつた。そして、竊かに、「女の子にまで高等な學問をさせるやうになつたとすると、家の身代にも大分餘裕が出來たな」と思つた。

大勢炬燵を圍んで居る時、

「わしが初めて東京から歸つて來た年に大病に罹つて座敷で寢てると、勝が蚊帳の側へ匍つて來ちや惡戲をしたり小便を垂れたりして煩さくつて困つたよ。それが一人で東京へ行くやうになつたのだから、わしも知らない間に歳を取つたのだね」と、榮一は幾年か隔てて會ふたびに不思議なほど異つてゐる妹の顏を見入つた。

「榮さんよりや才さんの方が老けて見えるがな。才さんの頭にや白髮が仰山生えてる。もう若白髮ぢやないなあ」勝代がさう云つて、兄達の顏を見比べると、外の者も知らず〳〵相互の顏や頭に目を留め出した。よく見ると、離れてゐた間の年月は誰の顏にも刻まれてゐた。發育盛りの妹ばかり違つてゐるのではなかつた。

「何と云つても四十近くなると、人間はそろそろ衰へ出すんだね」榮一は弟に向つて云つて、「おれ達が一生にやりたいと思ふ好きなことをやつて見るのは今の中だぜ、金を活かして使ふのも今の中のやうな氣がするよ」

「その事はわしの方が一層本氣で考へてる」と、才次は話に乘つて來て、「少し資本が續けば、この土地でも隨分利益の上る事業があるんぢやが、資本を自由に出してわしに任せて吳れる者がないから些とも實行が出來ん」と云つて、老父が何時まで立つても、財產の一部も彼等に手渡ししない不平を微見かせた。

「おれは事業をやらうとは思はないが、今の中に少くも氣儘な旅行をして見たいな、十分の路用を持つて、二三年西洋へ行つて來られゝばそれに越したことはないが、支那とか朝鮮とかあるひは日本の內地だけでも端から端までゆつくり旅行して見たいよ。も少し歳が老けると、足が弱つたり不精になつたりして長旅が臆劫になるし、旅行の樂みといふものが減つて來るからね。內地なら旅行費なんか幾らもかゝりやしない。千圓もあれば半年ぐらゐ方々で氣樂に遊んでられらあ」

旅行費に千圓とは、贅澤の極のやうに勝代は思つて、「東京で暮らすとすれば、見る物聞く物が何でも揃うとつて、旅行なぞせいでもよからうにな。東京でさへ年中居ると單調になるぢやらうか。勝は去年の春から家の門の閾から外へ出たことは數へるほどしかないのぢやもの」

「わしは旅行しようとも學問しようとも思はんが、自分の計畫を一度は成功しても失敗しても實地にやつて見にや寢覺めが惡い。この歳までたつた一度も自分量見でやつたことはないんぢやから」と、才次は云つた。

「何か面白いことがあるのかい」

「それは一寸今云ふ譯に行かんのぢやが、自分の得にもならんのに漁夫等の世話を燒いてやつても詰らんからなあ」

「しかし、この村の漁場をよくして村を繁昌させるのは面白い事業ぢやないか。食ふに困らないで、さういふ公共的の仕事をやつてるのは愉快ぢやないかなあ」

「いや他人のことだと思ふと張合ひがない。漁夫の方から云うても、組長には相當な人間を他

所からでも頼んで來てそれで食へるだけの月給をやつて働かせた方が得なのぢや。月給を取らにや食へん人間なら、自然一生懸命に働いて、他村との懸合ひでも漁場の見廻りでも、行屆くだらうし、漁夫等の望みなら無理なことでもやつて呉れるだらうが、名譽職の組長にやそんな眞似は出來ん。無理な註文をおいそれと聞いて飛廻る氣にやなれんからなあ」

「さうかも知れんね」榮一は輕く弟に同意した。

「紀州の沖や土佐の沖ぢや、一網に何萬と鰯が入つたの鰤が捕れたのと云ふけれどこの灘の內海ぢや魚の種が年々盡きるばかりだから、次第に村同士で漁場の悶着が激しうなるんぢや。漁夫もこの頃は將來の望みのないことに多少氣がついて來て、思切つて百姓になる者が出來て來たが、百姓だと米の飯に魚を添へて食ふ譯に行かんし、こんな村ぢや海でも陸でもえゝことはない」

かう云つた才次の言葉には力が籠つてゐた。

「しかし、此處いらの奴は皆な身體は強いし、隨分辛澁な勞働には堪へるんだから、智慧と資本のある者が先へ立つて使つてやれば役に立つんだが……」

「そりや何處でもさうだ」

榮一は深入りして弟の計畫の底を叩かうとはしなかつたが、才次は平生胸の中にもだ〳〵してゐる不滿な思ひを兄にこそ洩らし榮がするやうに感じて、何かと問はず語りをした。可成りの財產のある家から良吉を養子に欲しいと申込んで來てゐるのだから、早くその話を極めて家の負擔を減らした方がいゝ、僅かな財產の分配をされるよりは當人のためにもいゝと云つたり、若しも夫婦養子の口があれば、才次自身大抵な家なら我慢して行つてやるつもりだ、こんなに愚圖々々して歲を取つてゐるよりはましだからと云つたりした。弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそ〳〵勉強してゐるのを彼れはさも目障りでならぬと云つたやうな口調で話した。

暫らく默つて聞いてゐた榮一は、「だけど、展男が英語を樂みにして、一生通せるのなら、好きなやうにさせといたらいゝぢやないか。傍の者へ迷惑を掛けないのだから」と辯護するやうに云つた。

「差當つて迷惑は掛けんが、しかし、家族の一人として每月同じ飯櫃の飯を食うとると、自然に傍の者の氣を惡うすることがあるんぢや。白癡でも狂人でもないんぢやから、外の兄弟並に扱はにやならんし、尙更始末に困るが、どうも不思議な人間ぢや」

「おれの子供の時分の氣持に似てやしないかと思ふ。おれも家にぢつとしてゐたらあゝなつたかも知れないよ」

榮一は微笑しながらかう云つて、弟の話を外した。

勝代は疾くに炬燵を離れて、小さい弟を連れて座敷の緣側へ出て日向ぼつこをしてゐた。落葉や鷄の糞で汚れた小庭へ下りて久振りで築山へも登つたが、昔の庭下駄は步きつけない足にも重くつて、直きに息苦しくなつた。

八

榮一は每日の日課として後の山へ上つて沖を見渡した。瀨戸通ひの汽船が島々の彼方にはつきり見えて、春めいた麗かな日光の讃岐の山々に煙つてゐることもあれば、西風が吹荒れて、海には漁船の影もなくつて、北國のやうな暗澹たる色を現はしてゐることも偶にはあつた。そんな風の強い日には、大きな家の中がさながら野原のやうで、いくら襖や帯戸を閉切つても、何處からか風が吹込んで、寒さを防ぐ術もなかつた。

「これでは冬籠りも出來ないね。早く東京へ歸ることにしようか」と、榮一は故郷の樣子を見ただけで滿足して、再び都の小さい借家へ歸らうとした。不漁つゞきで、海鼠や飯鮹などの名産もあまり口へ入らないし、落着いて勉強も出來ないし、殊に家族の中に交つてゐると、急に歳を取つたやうな氣持になるのが厭だつた。

「明日の中に立たう」と、榮一は急に決めたが、竊かにそれを喜んだのは、辰男だつた。明日の晩から、何時までランプを點けてゐようとも、最早苦情を云ふ者はなくなるのである。彼れの英語の發音を試驗したり、彼れの英文について無慈悲な批評を下したりしたがる素振を見せて驚かす者がなくなるのだ。……辰男はこの頃英字に親しめなくなつて、動もすると心が外へ散つて、寂しい詰らない氣持がし出したのを、兄の所爲と思つてゐた。

「この書物を讀んでしまつたからお前にやらう、荷物は成るべく輕くしときたいから」と、出立の前の夜、榮一は弟のテーブルの上に英書を二冊置いて行つた。

辰男は表題と著者の名前とを見詰めたが、讀方をも意味をも判じかねた。そして知らない文字に攻められるのが恐ろしさに、內部をば開けて見ないで、手馴れてゐる自分の書物で蔽うて机の片隅へ押遣つた。

今夜一晩と極つたため、階下の炬燵には皆なが集まつた。珍らしく親爺も加はつて何かしら話が賑つてゐたが、辰男一人は相變らず、二階にぢつとしてゐる。書きかけの英作文にも取留めのない疑ひのみ頻りに起つて容易に書續けられなかつたので、懷手をしてぼんやり、風に唸いてゐる障子を見てゐた。すると心が弛んで、われ知らず机に頭を垂れて假寢をし出した。

やがて、夢の中の物音に驚いてふと目を醒ますと、ランプは机の向うへ押落されて、火は障子に燃移つてゐた。……辰男は氣拔けがしたやうな顏をして突立ちながら、聲も立てず、直ぐには手出しもしなかつた。……外では風がザワ〱音を立てゝゐる。疊は石油に浸つて青い焔を吐いてゐる。……「この家は燒ける」と思ふと共に、灰燼になつた屋敷跡が彼れの心に浮んだ。

やがて、彼れは兩手に力を入れて、何年も動かしたことのないテーブルを書物の載つてるまゝ、次の室へ移した。そして、座蒲團を丸めて、火を叩消さうとしてゐるところへ、階子段に氣立たましい足音がした。

「火事だ……」と、榮一の慌てた叫聲が階下にゐる人々の耳を劈いた。外を通つてゐた者をも驚かした。

大勢がどや〱駈寄つて、口々に荒い言葉で指圖し合つて、燃付いてゐる障子を屋根から外へ抛出したり、バケツや手桶で水甕の水を掬つて來たりした。父の目も血走つた。妹も息を切らして素足で井戸端へ駈けた。皆なが騷出すと、辰男は後退りをして薄暗い處に突立つてゐた。石油が燃盡きると共に火の手は見る〱衰へたが、彼れのテーブルも書物もづぶ濡れになつてしまつた。轉げ落ちたノートは半ば灰になつてひら〱してゐた。

先きから辰男の不注意を罵つてゐた父や兄は、火が消えて心が落着いてから、一樣に彼れの方へ目を向けて問詰つたが、石のやうに身動きもしないで、堅く口を閉ぢてゐるのに呆れて、次第に相手にしなくなつた。

疊を上げて汚れ物を片付けて、念のために二階の部屋々々を見廻つて、階下へ下りたが、誰も皆睡氣を醒ましてゐて、子供まで中々寢床へは入らなかつた。

見舞に來た隣近所の者が歸つて、表の戶を卸した後、草臥休めの茶を淹して駄菓子を食ひなどして、互ひに無事を祝して夜を更した。

「電氣にしとけばこんな危險はないのだがね」と、榮一が云ふと、父は、

「電氣は不經濟なばかりぢやない、柱や鴨居へ穴を明けて家を臺なしにするから考へ物ぢや。今夜のやうなことがあるとすると保險はつけといた方がえゝかも知れんが」

「辰の奴、何か碌でもないことを爲出かしやせんかと思うとつた。これからは夜遲くまでランプを點けて置かせんやうにしませう。膝も他所へ行つて辰一人が二階に居ることになると不用心で仕樣がないから」と、才次は眉根を顰めた。

「しかし、こんなことは滅多にあるまいが、兎に角今年中には嫁を取らせて、別家させて、自分の始末は自分でやらせることにしたら、些とは普通になるだらう

「さあ」才次は父の言葉は空々しく受けて、「一軒の家の災難はどんなことで湧いて來んとも限らん、今夜にしても、もう十分遲う氣がついたら取返しのつかないことだつたのぢや」

皆な言葉が杜切れたところへ、時計が一時を打つた。表さうに風が音を立ててゐる。父は手燭を點けて部屋々々を見廻つて自分の寢室へ入つた。

膝代は燒跡の隣で眠るのが厭さに、何時までも炬燵の側にて假睡をし出した。兄二人が最後まで話に耽つてゐたが、其處へ辰男は忍足で下りて來て、便所へ行くが早いか直ぐに階子段を上つた。

「まだ起きとるんか」と、才次は聲を掛けた。氣にかゝつたので、手燭を點けて見に行つたが、辰男は燒跡の隅つこの疊に夜着を被つて寢てゐた。

「榮さんの室に一緒に寢たらいゝぢやないか」と柔しく說いたが、

「わしは此處でえゝ」と云つて、辰男は枕を直して目を閉ぢた。

闇の中に目を閉ぢてゐても、辰男は絶えず周圍の汚れた燒跡を頭に描き鼻で嗅いでゐた。ぐちや／＼になつてゐる書物や帳面を日に乾さねばならぬと思つたり、何と何とが燒失せたか檢べて見なければならぬと思つたりしたが、このまゝ塵屑にしてしまひたい氣もした。……机上に安んじてゐた彼れの堅固な心が、長兄の歸省前後から破れかけてゐたのに、今夜の災難は最後に下された槌のやうだつた。

すると、學校から歸つた後の毎夜々々の長い時間を何もしないで持てあましてゐる自分の姿が見窄らしく目先にちらついた。……以前ふとヴァイオリンが厭になつた頃には、語學に興味が起つて、心がその方へ吸寄せられたが、今度は新しい道は開かれさうでなかつた。

陰鬱な氣懶い氣持が夜が更けるにつれて刻々に骨の髓まで喰込んだ。そして、いつそ今夜の火事が擴がつて、机も書物も家も、自分自身も焰の中に包まれて、燃えてしまへばよかつたやうに思はれ出した。

家から家へ火が移つて、村一面に焰の海となつて、見覺えのあるあの村の者共が顏や手足を燒焦がして泣叫んでゐる光景を彼れは夢みた。

九

翌朝辰男は火事話を避けるために、起きると直ぐに家を出た。始業時間までには餘程の暇があつたので、所在なさに、先日兄に隨いて上つた山の方へ足を向けた。墓地を拔けると、一歩一歩眼界が擴がつて、冴えた朝日は滑かな海を明るく照らしてゐたが、昨夕の不快な記憶が彼れの頭から消えなかつた。先日のやうに目前の眺めが英文の新な材料として目に映らず、永の

年月自分を押籠めた牢屋の壁か何かのやうに佗しく見えた。……この先五年十年この土地にどうして生きてゐられるか生きる術が見つからなかつた。

白い雲の漂つてゐる海の向うへ出て、何處ともなく旅から旅を續けたらと、ふと家出を考へたが、それも一瞬間の妄想に止まつて、旅費なしには一日か二日も他鄕へ出掛ける無謀な勇氣を彼れは持つてゐなかつた。「見ず知らずの人は一椀の麥飯も食はしては呉れない。只では汽車にも汽船にも乘せて呉れはしない」といふことを彼れは今更しみ〴〵と考へたが、それにつけても、今まで無用な書物を買込んで月々の俸給を浪費したことが後悔された。で、これまでの俸給の總てを貯蓄してゐたらば、幾らか〴〵になつてゐたのにと、許算をしながら、山を下つて學校へ行つた。

授業を終へて歸つて見ると、兄は昨夕の騷ぎのために、出立を一日延してゐた。火事の跡始末がついてゐて、障子が新に張替へられ、テーブルも久振りで綺麗に拭はれてあつたが、濡れた書物は西日の差した緣側へ亂雜に拋り出されてあつた。乾いて皺をつくつてゐた。

辰男はそれ等を本箱に收めて、紙切一つ置かれてゐないテーブルの前に腰を掛けた。"Fire." "Conflagration" "Nonsense" などいろ〳〵の英語が頭腦の中に黑く綴られながら現はれた。

新に買つた二分心のランプを小さい妹が持つて來たが、辰男は日が暮れても燈火を點けなかつた。記憶に刻まれてゐる英語を闇の中で果もなく綴つては崩し、崩しては綴りしてゐた。兄が既に整へてゐる旅の荷物を亂すのが厭さに、終日何もしないで退屈醒ましに、勝代に英語を讀ませたり、不審な字句を解いてやつたりしてゐるのが、襖越しに彼れの耳へも入つた。

「辰は其處にゐるのかい、ランプも點けないで」榮一は襖を細目に開けて暗がりを透かし見して、「此處へ來い、此處へ」と、無理强ひに空いた座へ招いた。

妹の机には靑い机掛けが掛つて、その上には木彫の奈良人形と、亡妹の寫眞を插んだ寫眞立があつた。毛繻のランプ敷に据ゑられたランプの明るい光は、差向ひで炬燵に當つてゐる兄弟の手に持つた英書を照らしてゐた。辰男は燈光の邪魔にならぬやうな處に坐つた。

「わしも學校にゐた時分には、會話に身を入れて、西洋人の夜學校へも通つたりして、一時は大抵の事は自由に話が出來たものだ。しかし今は丸で駄目だね。一寸した挨拶さへよく考へなくちや英語で云へなくなつたよ。日本にゐりや外國人と話をする機會はないし、會話の研究こそ全くの無駄骨だつた」

榮一は妹の「實用會話集」に出てゐる日常の用語を久振りで口ずさんだが、勝代は兄の脣の微動を見入つた。自分も二三年したらあんな風に巧みに操れるだらうかと廣々とした氣持になつて、

「……田舍者よりや東京生れの人の方が英語の發音が早く上手になるんでせう」

「何故? 同じことぢやないか」

「……田舍者は日本語の發音でも下等で頑固ぢやから、それが癖になつてしまつて英語でもすら〳〵と音が出し難いんぢやないかと思ふがな」

「そんな馬鹿なことがあるものか。……勝も東京へ行つて三月もすると、東京言葉を使つて田舍者を馬鹿にするやうになるだらうな」榮一はさう云つてから、辰男に向つて、「お前は今から學問したつて追付かんから、農業か何か實業をやつて見い、そんな頑丈な身體をしてゐるし、辛抱强いのに、机の前で惹けてるのは詰ら

ないぢやないか。先日山から見た島を借りて桃を栽ゑても、後の泥山を拓いても何か出來さうぢやないか。兄弟の眞似をしないで、お前一人は泥まみれになつて本當の田舍者になつちまふさ」

「そんなことは出來やせんなあ、辰さん」と勝代は代つて答へた。「去年二百圓も出して、青年會の人が松を山へ栽ゑたんぢやけど、直きに枯れて了うたのぢやもの、桃もつく處へは何處へでも栽ゑてるし、この邊の土地は衰微するとも今よりようなりやせんと勝は思ふがな。この先の島は漁夫が巡査に見付けられん樣に賭博を打ちに行く處になつとるんぢやもの」

「へえ。あれが漁夫の賭博場かい。さう思つて見ると面白いね」榮一は一廉のいゝ思付のつもりで云つたことを、妹のために容易く打消された照れ隱しにから云つて、

「しかし、自分で鋤鍬を持つて働くつもりなら何かやれんことはないさ」

「それはやれないことはありません」と、辰男は意外にはつきりした返事をした。

「ぢや、田地を分けて貰つて、百姓になり切つちやどうだい」

「さう云ふ氣にもなるんけど…百姓をして米や麥をつくつても面白うないから」

「面白くなくつても、田圃に麥や、米が出來なきや困るぢやないか。…西洋の草花でも造りや綺麗で面白いかも知れないが」

「花なら自然に生えてるのが好きぢや。山に居つた時分に植物の標本を些とは集めたことがありました」

「植物の採集もこの邊にや珍らしいものはあるまいが、作州の山には高山植物があるんだらう」

「へえ。いろ〳〵珍らしいものがありました。二三百は異つたのを集めて蔭干にして取つといたのぢやけど、彼方の學校を止めた時に皆な燒いて來ました」

「そりや惜いね。學校へ寄附しとけば植物學の教授に役に立つのだらう」

「名が分らんから教へる時には役に立ちません。私にだけにしか誰にも分らんでせう」辰男は雜草でも木の葉でも手あたり次第に採集して、出鱈目な名前を付けてゐたのだつた。

「それで滿足出來るかね。世間で極めた名前を知らずに集めてばかりゐても樂みになるのかい」

「へえ。あの時分は樂みにしとつたんでせう」

今夜は何故だか珍らしくテキパキと話すのを聞いてゐると、榮一は弟の辰男を、永年家族が極めてゐるやうな低能兒とも變人とも思はれない氣がした。が、顏を見ると、光のない鈍い眼、小鼻の廣い平たい鼻、硬さうな黒い皮膚が、どうしても愚ものらしく彼れを見させた。他人から慈愛を寄せられさうな潤みや光は、身體の何處にも持つてゐない。

「何か望みや不平があるのなら明ら樣に云つたらいゝぢやないか。おれが立つ前に聞いといたら、多少お前の爲になる樣な事があるかも知れないぜ」と、榮一は優しく訊いて弟の心の底を索らうとしたが、

「そんなことは他人に云うたつて仕方がありません」と、辰男は冷かに答へた。押返して訊いても執念く口を噤んで、他所目には意地惡く見えるやうな表情を口端に漂はせた。

「仕方がないつて、お前なんかつまりは兄弟の世話にならにや生きてられない時が來るんだよ。兩親の達者な間に方法を立てて貰つとかなきや駄目ぢやないか、無駄な事ばかり氣儘に勉強してゐても、食ふ道は些ともついてゐないのだから」

兄の聲が尖つて來ると、辰男は目を伏せて心

な外へそらせた。

「今は學校を出て お金を取れるやうになつたら、辰さんに上げるつもりや、勝は利己主義は嫌ひぢやから」勝代は氣取つた口を利いた。

これで話を止めて、榮一は横になつて、挽春の響きを聞きながらうつら〳〵假睡の夢に落ちた。勝代は溫か過ぎる炬燵で逆上せて頭痛がしてゐたが、それでも座を立たうとはしないで、

「口が粘つて氣持が惡いから蜜柑を食べたいがな。辰さんは奢つて吳れんかな」とねだつた。

「お前が自分で買ひに行きや奢つてやらあ」

「勝は物を買ひになぞ行つたことはないのに。およしでも使にやりやえゝがな」

「自分で行かんのならわしは錢を出さんぜ」辰男は頑なに云つた。

「辰さんは時々意地の惡いことを云ふんぢやな」

勝代は階下へ行つて母にねだつて貰つて來た蜜柑の一つを兄の前に置いたが、辰男は手に取らなかつた。

十

榮一は翌朝俥で村を離れると、のび〳〵した氣持になつた。二里も隔つた停車場までの途すがら俥夫は頻りに村の話をして聞かせたが、それによると、隣縣の者が近い中に乘合馬車をこの近所の國道へ通さうと企てゝゐるさうである。

「さうしたらお前達は困るだらう」と訊くと、

「馬車なぞは永續きはしますまい。何でもその金主は、性の惡いことをして監獄へ入つとつて、この頃出て來たばかりぢやさうですから」と俥夫は答へて、「若旦那は澤山金を儲けてお歸んなさつたんぢやと皆なが云うとりますがな」

俥夫の話が自分のことや家族のことに關係し出すと、榮一は相手にならなかつた。そして、汽車に乘ると勝代の顏も辰男の顏も心に薄らいで、只入江のほとりの古めかしい大きな家の二階にあんな弟妹の住んでゐるのが、憎みも愛もなく顧みられた。

「辰はおれが遣つた○○の英文小說を讀むか知らん」と、ふと、思つたが、それも瞬く間に消えてしまつた。

辰男は二三日テーブルの前に懷手をして腰を掛けたまゝ夜を過した。妹の頁をめくる音を聞きながら……。

讀書餘錄

「アメリカの映畫は、伊佛獨などの歐洲物に比べると、卑俗であるやうに云はれてゐる。アメリカ文學が平俗であることは、日本の文壇でも定評のやうになつてゐる。アメリカの宗教は俗惡だといふことも、内村鑑三氏などによつて屢々說かれてゐる。しかし、私は餘程前から、將來アメリカから新しい偉大な文學が現出するのではないかと空想してゐる。米國には歐洲のやうに、古くさい傳統的の垢がついてゐない。物質文明科學文明の盛んな國には秀れた藝術が起らないといふ理窟は、必ずしも全面を現はしてゐないのではあるまいか。

「晩秋のこの頃、私は、「菊の香や、奈良には古き佛達」と詠じた古詩人の心境を追想するとともに、若くして死んだ異國の詩人シェリイの「西風に寄せた」詩の激情にも心が動かされるのである。「枯れつ葉を吹拂ふやうに死んだ思想を追拂へ。……冬來りなば春遠からじ……」（「文藝評論」の「讀書餘錄」より）

牛部屋の臭ひ

一

稼業から潮の干滿に關係の深い漁夫どもは、季節の變化や年中行事の何事にでも陰暦を標準とした。伊勢の太神宮のお札と一緒に頒られる國定の暦には除かれようとも、村役場などでいくら陽暦の採用を奬勵しようとも、隣近所の村々が次第に新の年月を迎へるやうにならうとも、この小さい漁夫村の一區劃だけは、迭はないで昔通りに歳を送り歳を迎へてゐる。海で生計を立てる者に取つては、陰暦に依つて區切りをつけた方が自然の道に適つてゐた。

今年もその舊の正月が來た。大晦日までには、不斷は淋しい濱邊にも小さい船や大きな船やが景氣よく並んだ。××丸と染出したり墨で書いたりした旗を立てたのは、多くは遠海を乘廻して遠方から歸つて來たのである。陸の家はどんなに穢くしてても、舟といふ舟は皆綺麗に掃除されて、飾藁を垂れ蜜柑や串柿などを供へられてゐる。潮が滿ちると遠く舟端に搏たれ、潮が退くと牡蠣殼が模樣のやうにところ／＼色取つてゐる潟の柔かい泥が舟底に吸付いた。海が淺いのに、小川からは絶えず汚い水を吐出してゐるため、干潮時の海岸には一種の臭氣が漂つた。村の者が無頓着に流す洗濯水の臭ひ、腐敗した食物の臭ひ、魚の臭ひや藻の臭ひや、糞尿の臭ひさへその中に交つてゐるのである。潮の差退きの激しい海邊のやうに柔かい白沙はこの灣内の何處にも見られないが、その代りに袋の中のやうな此處の入江の魚は内海の中では殊に旨味に富んでゐる。濁つた泥海は魚の餌を豐かにするし、靜かな水は魚の疲勞を少くした。そして、沖で勞れた魚などは體を休めるために、樹木の繁つた島蔭に集まつて來た。

海鼠や飯蛸の漁の盛りは年内に一先づ終つて、此處暫らくは松明の光が闇の海を照らさなくなつた。網曳の掛聲も舟唄も聞えなくなつた。が、海がひつそりとして來る代りに、陸は俄かに騷々しくなつた。餅搗のために村中の井戸水が濁れて、全村の飲料水となつてゐる山の藪蔭の「清水」さへ涸れかけた。

元日から毎日隣村の牛肉賣りが入つて來た。漁夫どもは注連飾をした船魂の前で車座になつて、この牛肉を喰つて酒を飲んで唄ひ囃して新玉の春を祝つた。澁紙のやうな顏色をしてゐても猥雜な唄を怒鳴つてゐても、年中潮風で鍛へた彼等の喉から出る唄聲は凛々として周圍に響いた。太鼓にでも合はすとその聲が一層よく調和してゐた。七草まで毎夜濱の集會所で催される藝人の浪花節よりも、漁夫自身の無心のざれ唄の方がどれほど快い音を含んでゐるか知れなかつた。

浪花節は毎夜客止の賑ひで、中日から寄席をも企てられた。藝人と名のつくものがこの狹い貧乏村へ只の三日でも足を留めることは年に一二度あるかないかなのだから、村の浮氣な娘だの、寡婦だの、あるひは亭主持までも、白粉を鏝塗りにしてめかし込んで、浪花節語りの宿へ押かけた。夜は集會所の樂屋口に立つて彼等が出て來るのを待受けた。

その中でも取分けて噂に上つたのはお村といふ三十近い女だつた。何時も笑つてゐるやうな顏をしてゐる大柄な女で、これまでに三度も四度もこの土地の漁夫や隣村の百姓の家などへ

緣付いたのだが、何時も自分で逃出すか先方から追出されるかして、半歳も尻の落着いてゐたことはなかつた。今は誰と極つた一人の亭主は持たないで、母親と二人家内で、蜜柑だの干物だの季節々々の物を籠で背負つて、近村を賣廻つてゐる。そして、盆とか祭とかの田舍の休日には、年下の男女の中に交つて浮かれ騷いで、惡遊びには人に遲れを取らなかつた。青葉の頃にこの村へ廻つて來る伊勢神樂の一座や、偶然に流れ込む祭文語りなどといろんな噂を立てられたこともあつた。

「またお村さんが……」と、朋輩の菊代は眉を顰めて蔑んだが、この女は正月が來ても、沖から若い漁夫どもが歸つて來ても、お村のやうに臙脂白粉をつけるどころではなかつた。同い歳で幼い時分からの遊び友達で、今も同じやうに背負籠を背負つて物賣をしてゐるのだが、菊代には八十を越してゐる祖母がまだ生きてゐる。母親は兩眼とも潰れてゐる。そして父親とか兄弟とか手頼りになる男切れは身内の中に一人もなくなつて、たつた一人の姉は、菊代が十二三の頃播州室津の飲食店へ身賣りして、惣嫁とかになつて、それきり音信不通になつてゐる。菊代にも二度ばかり確かに夫と名のつけられるものが出來たのであつたが、一人は兵役に服してゐる中幾度も脫營してつひに死刑に處せられ、後の夫は業果の多いのを厭つて朝鮮へ出稼ぎに行つたきり、五年六年葉書一本の音信さへしないので、自然に緣は切れてゐる。

で、正月になつても、菊代には心待ちにする舟はなかつた。隣近所共同の一つ春で餠を搗くにも、菊代は人前の恥かしい思ひをしたが、それでも僅ばかりの餠は工面して拵へたが、餠の外には正月の支度とて、金のかゝることは何一つ出來なかつた。何かの手傳ひに始終出入りしてゐる家主の家の仕舞湯へ入つて、其處の下女と髮の結ひ合ひをして、注連飾は其處の作男に殘りの藁で一摑み、神棚へ垂れるものだけ造つて貰つた。祖母は何十年面影に變化のない枯木のやうな身體で、他家の飲み水汲みや使歩きをしてゐたのだが、年末に水桶を擔つたまま蹴躓いて、向う脛を擦剝いてからは、戶外の便所へ出て行くのをさへ術ながつて、晝も夜も炬燵に臥せつて、をり〳〵心細いことを云つちや唸つてゐる。壁や塀を手索りに傳つて近まはりへだけ獨りでも出掛けられる母親は、質屋使ひを稼業のやうにして、一錢二錢の使ひ賃を貰つてゐるので、節季には菊代と一緒の餠米搗きとこの質屋使ひとで盲目相應の役があつて忙しかつたが、一夜明けると用もないので、炬燵の中で眠飽きると、隣近所の女達を相手に、持前の高聲でげら〳〵と笑ひ話をして興じてゐる。

一つ春で餠搗きをする仲間内は、便所も共同で、小川の裾の方に貧しい一區劃をつくつてゐるのであるが、菊代の家は先日まで、この村では可成りな大地主の濱屋の牛小屋であつたのを、新しい小屋が上の地面に建てられたので、その跡の不用になつたのを、無家賃同樣で借りてゐるのである。小川の緣に堆くなつてゐる芥の臭ひやこの界隈の家々から洩れ出るさま〴〵の臭氣は、不潔な臭ひに馴れてゐるこの村の者の鼻にさへ、一種異樣な刺激を與へたが、菊代の家には、その上に牛部屋らしい臭ひがまだ漂つてゐる。二枚の莚を敷いた板の間に寢起してゐるが、土間は元のまゝで、牛の五體から出た汚い物は日當りや風通しの惡いためか、まだ乾き切らないのである。冬の間はまだしも、梅雨時や暑中には、蠅と蚊と臭い溫氣とでとても家の中にぢつとしてはゐられないのである。

でも、祖母や母親は寒い冬よりも夏を戀しがつた。腰卷一つで埠頭場で涼んでゐられる夏の

方が、腹の減つて手足に皸が出來て身體の凍える冬よりもどれほど暮しいゝか知れなかつた。旨い南瓜や瓜が鱈腹食べられるし、旨い水が夏は錢入らずで飲まれた。

「おらに一合だけ神酒を飲ませて呉れ。それでいゝ、おらも有難い正月が祝はれるんぢやから、祭には强請みやせんから、三ケ日の中にたんだ一合だけ買うて來て呉れい」

祖母のおみちは三日の朝向ひの家の老爺の酒臭い息を嗅いでから、矢も楯も溜らないやうな氣になつて、わざと哀れげな聲をして菊代に賴んだ。

「お婆がとう〳〵お極りを云ひ出したなあ」

菊代は鼻で笑つて、「その間に新田の酒屋へ蜜柑を持つて行くんぢやから、その時に酒の糟を貰うて來て上げらあ」

「阿呆吐かせ。酒の糟でお正月が祝へるか。……去年の秋にお上から盃とお金を五十錢頂戴した時に、これも長生したお蔭だから、早速神樣に神酒を供へて、そのお餘りをあの盃で頂かうと思うたら、われは何と云うた。もう寒うなるからこのお金でお母の半纏を出しとくことにして、お酒は正月まで辛抱しなさいと云うたぢやないか。おらあよう覺えとるがな」

「お婆も勝手なことはよう覺えとるなあ。おらいゝあ何もかも忘れてしまふから苦がないと先日も云うとつた癖に」

菊代が笑つて相手にもしないので、おみちは泣寢入りに寢入つた。其處へ長刀草履を引摺つて何處かで貰つた飴菓子を舐りながら歸つて來た母親のお夏は、菊代に譯を聞いて、

「そないに飲みたがつとるのなら買うて上げたらえゝがの、われは知るまいが、お婆は昔は寢酒の一合ぐらゐ缺かしたことはなかつたものぢや。お初が重たい德利を抱へてよう買ひに行きよつた。あの時のことを思ふと、お婆に酒の氣のない正月をさすのは不憫ぢやから一舐めでも買うて來て上げい」

お夏は薄々物の黑白の見えてゐた遠い昔を夢のやうに思出した。その時分には、亭主もまだ生きてゐて三度の食事には不自由しなかつたので、婆さんは婆さんで自分の稼いで取つた金は、皆な自分の飲食に費つてゐたのだつた。……母親に生寫しといはれた姉娘のお初の目の大きな背の高い姿や、貰ひ乳して育てた菊代の幼姿は、目の開いてゐた時代の懷かしい記念として、をり〳〵お夏の胸に浮んでゐた。今も炬燵に當つて、口をもぐ〳〵させながら白眼を天井へ向けて、過去つた影を捉へてゐると、先きから炬燵の上で誰憚らず鏡にわが影を映して獨りで樂んでゐた菊代は、ふと顏を上げて、

「お母はにや〳〵笑つて、何か可笑しいことがあるんかな、口の端に飴の汁を垂らして……」

「お母は泣きも笑ひもしとりやせん、われの目にやさう見えるんか」お夏は例になく突慳貪に云つて、手の甲で口端を拭つて、「……お姉が今ひよつと戾つて來たらわれはどないな氣がするだらう」と出拔けに云つて、聰い耳を戶外の足音に留めた。

「お母にも呆れるがの、突拍子もないことを云ひ出すんだもの。盆なら幽靈になつて精靈棚へでも出て來るかも知れんけれど、お正月にどうしてお姉が戾つて來るものか」

「われは何時でもさう云つて、お母の腹の中の樂みを腐らしてしまふ。お姉が死んだといふ確かな報知があつたのぢやなし、今の今でもどないえゝ身裝をして、お母もお婆も大丈夫で居つたかなというて此處へ入つて來んとも限りやせん。おしも婆さん處の喜左を見い。紀州沖で難船して七年も音沙汰がなかつたから、位牌まで拵へてお線香を上げたりしとつたのに、一昨年の秋祭にひよつくり戾つて來たぢやないか。八

丈島へ流れ着いて生命が助かつた上に、その島は暮らしえゝ土地ぢやというて七年も其處で漁をして氣散しに暮らしとつたさうぢやないか。そなたもの、われ、お姉にしても何處ぞえゝ島で不自由のない月日を送つとるかも知れやせん。喜左も他國の者に親切にされても、つい家の事が思出されてぢつとして居れん氣になつたから、皆なに留められるのを逃げるやうにして、夜晝通して此方へ戻つたといふから、お姉も何時身内が戀しうなつて戻つて來まいものでもないがの。どんな遠方に居つても、この頃は汽車や蒸汽船があるから、造作もないこつちやがな」

「何ぼ便利でも冥途からは汽車も蒸汽も通つとらんからの」

菊代は欠伸まじりで云つて、炬燵の上へ額を當てて目を瞑つた。狭い道一つ隔てて向ひの家からは醉ひどれ聲の浪花節が聞えて來た。牛肉の焼けつく臭ひや酒の匂ひはます／＼烈しく窓から入つて來た。窓には疎い格子が嵌つてゐるだけで障子がないので、夜は舟板の壞れで風を防ぎ、晝間は開けつ放しのまゝで明りを取つてゐる。

「菊は居らんのかい」と、ふと窓の上の、地主の庭の方から聲がした。

「へえ、居ります」お夏は代つて返事をして、

「何ぞ御用で御座りますか」

「午餐のお茶にするんぢやから、魚を捜して來て呉れんか。何でもえゝから生かして持つとる處があつたら頒けて貰うて來て呉れいな」

「えゝ、承知しました。……お松が去んどる間はお事多う御座いませう」

お夏は窓の上の足音が消えてから、言附かつた用向を繰返して、菊代を促したが、菊代は夢現で返事しながら容易に立上らなかつた。平生過度な働きをしてゐたのが生中二三日骨休めをしたために、手足がだるくて、坐つたが最後、身動きもしたくなかつた。それに、初日から二日つゞけて浪花節を聞いて夜更しをしたので、今はどやされても起きたくなかつた。

「用事だけして來てから眠りやえゝのに」と、母親はやきもきしたが、菊代はわれ知らず快い夢に落ちた。

「どの舟にも今魚なんぞあるものか」と菊代はふと目を開けて、寢言見たいに呆けた口を利いたが、直ぐにまた寢息を洩らし出した。

二三度背を揺つても手應へがないと、お夏はその上娘を急立てることは出來なくなつて、炬燵の中の孱細い足を掴んで、「お婆／＼」と呼立てた。

「お婆一寸起きて下んせ。……大儀ぢやらうが、お前でも濱屋の魚を買ひに往て上げにやなるまいがの」

「おらがかい。……おらに酒の一合も飲まして呉れりや往てもえゝが、只ぢや一足も歩く氣にやなれん」と、婆さんは片手で支へて身體を少し持上げて子供染みた口調で云つた。

「そないな無理を云うてうちを困らせるもんぢやない。足が疼うても濱まで往て來て下んせ。神酒は屹度うちが飲まして上げらあな」

「ほんまにか。この頃は世間が皆なおらを欺してどもならん。今度はわれも嘘をこくと承知せんぞ」

婆さんは自分で疼い／＼と思過してゐた足を動して、二三度呻いてから起上つた。そして引摺り／＼戸外へ出たが、盲目のお夏と同じやうに杖は手にしなかつた。

頭巾代りに汚い手拭で頭を包んで、縞目も分らぬやうな單衣の上に綿の食出た猿子を着てゐるだけで、足袋さへ穿いてゐなかつた。魚桶を濱屋から持つて來て、心當りの漁夫の家を訊いて歩いたが、彼處此處に見覺えのない若い漁夫どもが五人十人寄り集まつて、飲んだり喰

つたり、面白さうな話をしてゐたりした。

一誰かと思うたらおみつ婆さんか。お婆はまだ生きとつたのかいと、遠海へ出稼ぎに行つてゐた漁夫が道で擦違ひざま、興醒めたやうな顔して婆さんを見詰めた。

「へえ。……今年の寒は温うておらのやうな老人には何よりおぢやがの一」

「まあ大事にして長生をしなさい」

漁夫は何気なく云つて、にこつともせずに行過ぎた。婆さんはその男は誰だつたかと考へ考へ歩いてゐると、菊代の二度目の夫と仲よしだつた何とか云ふ男らしくも思はれ出した。さうならば訊ねることもあつたのにと残惜しさうに振返つたが、最早彼の影も見えなかつた。一まだ生きて居らいでかーと、婆さんは口の内で独言を云つた。

二

正午前には静かだつた空も、季節から、午餐の煙が家々の煙筒から噴出される時分には、西風が濱の松林に烈しい音を立てて、鏡のやうな入江もうね〳〵と皺をつくつた。菊代の家では風避けに雨戸を窓へ立掛けたので、家の内は昼間でも薄暗くなつて、竈の煙が何時までも漂つてゐた。三人は餅を入れて温かい雑炊を食べてからまた蚊帳の中へ潜り込んで、話もなく互ひ〳〵の思ひを恣にしてゐた。

やう〳〵寝足つた菊代は、昨夕の浪花節の続きを想像してゐた。鳴物などの藝事には子供の折から現を脱かす質で、祭文や阿呆陀羅経でも語り手の後に随いて聞惚れてゐたので、歳を取つてからも村に興行物のあるたびに工面のつく限りは滅多に欠かしたことはないのだつた。

しかし、今度は二日とも濱屋で不用な入場切符を呉れたので、無銭で聞きに行かれたものの、三日目の今夜からはさうは行かなかつた。正月の三ケ日が済んだら、明日からは厭でも問屋で品物を借りて出賣をしたければ、芋粥も啜れないくらゐなのに、八銭の聞賃で耳の保養なぞは迂闊に出来なかつた。……二つの燭臺の明りで左右の頬を照らされながら、目を細くして唄つてゐる實若の姿が目にちらついたが、それよりも菊代の心を唆かしてゐたのは、膝と膝との擦れ〳〵に込合つてゐる場内の賑ひであつた。若い百姓や若い女どもが薄暗い席に矢鱈に入雑つて、息と息とを交互に通はせながら、語り手の聲に浮かされてゐる有様であつた。……不断は相手の得られない菊代も、其處では色めいた仲間入が出来るやうな気がした。昨夕は誰と誰とが前後に坐つて足を抓つたり膝頭でどうしたりしてゐたとか、誰と誰とが終ひの一席を聴かないで早く帰つたとか、いろんた噂が翌日の若い同士の口に上つてゐた。そして菊代自身は願つても噂の種になるどころではなかつたが、女房も情人もない若い漁夫と並んでゐると、今にも何事か起りさうで心がどきめきするのだつた。

マッチの空箱に入れて神棚にそつと載せてある自分達の總財産を浚つて行けば、木戸銭が拂へた上に、中入に捩菓子の二三本は買喰ひも出来ないことはないのだが、菊代はさう思つても直ぐにさうすることは出来なかつた。そして人寄せの太鼓がどん〳〵鳴り出すとそは〳〵して、やゝもすると手が神棚の方へ伸びて行きさうだつた。

朝から、行方不明の姉娘の上を楽みに思ひ続けてゐた母親は、ふと菊代の方へ顔を向けながら、「わいは遊びに行きたいのか、遊びに往てもえゝけれど、お村さんのやうにならんやうにせい。わいは一度ならず業曝し奴に騙されてどえらい目に會うたんぢやから、若い男の居る處へは寄付かんやうにせい。何を云はれても本當

にしちやならんぞ」

「阿呆云はんすな。お母がまた入らん心配をし出した」

「われが先きから尻をもぞ〳〵させて遊びに行きたさうにしとるのが、お母にはちやんと分つとるがの。萬が一われが斯にならうといふ者があつても、お母によく相談してからにせい、お母には目は見えいでも男の腹の中はよう分るんぢやから、隱さずに何でも打明けるのがわれが身のためぢや、遠方から戻つて來た漁夫の居る間は若い女子は危いこつちや」

母親は周圍かまはずに聲高にさう云つたが、菊代が取合はないので、元の沈默に返つて、姉娘の事をまた思續けた。西風はます〳〵吹募つて舟板の隙間からぴう〳〵吹込んで白髪まじりのお夏の髪を亂した。火の消えかゝつた炬燵の中へ菊代が粉炭を一摑み入れると、ばち〳〵火花が散つて、長く突出してゐる婆さんの足の裏へも頻りにとんだ。が、垢や何かで皮膚の硬ばつてゐる婆さんは、火の子の熱さぐらゐには怯えなかつた。そして一杯の酒が自分の目の前で注がれる時を夢まぼろしに見續けてゐた。

「菊さん……寒いなあ。どがいしとなんさる?」

戸の外から聲を掛けて行過ぎたものがあつた。菊代は思はず伸上つて返事をしようとしたが、聲の主の急ぎ足には追ひつきさうでなかつたので、返事は喉で留つた。

「およしぢやないか、あの聲は。今朝橋の側で會うたらえゝ匂ひをさせとつた。あれが香水と云ふものか知らんが高い錢を出して身體に匂ひをつけたつて、何の得にもならんこつちや。勿體ないのに」

母親がさう云つても菊代は默つてゐたが、やがてそつと炬燵をすざり出て上り框の方へ行つた。「遊びに行くんなら行先をお母に云うといて行けい」と聲を掛けられると、「直きに戻つて來るがの」と答へて、表の戸を開けて横つ面を寒い風に曝した。一足閾を跨いで神棚の金入を顧みたが、そのまゝ戸の外へ出て行つた。小走りに小川の縁へ出て、袂を搔合せて首を縮めながら、何處といふ當てもなく爪先で輕く歩いてゐたが、やがて、その足はお村の家の裏口に留つた。よく若い者の足溜りとなつてゐる家なのに、今はひつそりとしてゐた。戸の節穴から覗くと、竈の火に照らされた母親の顏が先づ目についた。炬燵は何時ものやうに若い男の顏が動いてゐないで、お村が手枕して横になつてゐた。

樣子を見定めてから菊代は戸を開けて、「寒うなつたなあ、叔母さん」と懷かしさうに聲を掛けた。

「あ、吃驚した」

火箸を持つたまゝ、思はず立ちかけたお村の母親は、相手の顏を見て安心して、竈へ薪をくべながら、お愛想など云つた。菊代は上り框に腰を掛けて、土間の莚に置いてある鹽魚や、板の間の背負籠に入つてゐる蜜柑やネープルの量の多いのを羨ましげに見廻しながら商賣話を持出した。

「お正月なんぞ早う去んだ方がえゝ。菊さんは何時から商賣に出掛けなさる?」

「うちはもう二三日休んどりたいと思うとるけど、さうしちや居られまいなあ」

菊代は半ば自分に向つて云つた。お村のやうにちやんと用意が出來てゐるのではないし、今夜の中に問屋から品物を借りて置かねばならぬので、急に安閑としてはゐられない氣がし出した。

「せつせと稼ぎなされ。家のお村も三ケ日が濟んだら商賣に出て呉れんと困るがの」母親はさう云つてから聲を潜めて、「今の先きにも音松か茂平が耳の饐えるやうな聲を出して、やち

もない話ばかりして、その擧句にや、本氣だか戲談だか掴合ひをし出したのぢや。うちもこれまでに皆なのすることを大目に見て默つとつたけれど、今日はあんまりのことで業が煮えてならんから、わい等は人の家を何と思うとると叔父さん／＼に怒鳴りつけて、擔棒を振廻して追出してやつたところぢやがな」

「叔母さんがそんないに怒るのはよく／＼のこつちやな」

「お前さんの家にはあんなやんちや者が寄付かんからえゝ。あの連中の機嫌を害ねても後が氣疎いし、したいまゝにさせとくと方圖がないし、うちも困つて居るがな」

「叔母さんは人がえゝから……」

　だから娘がだらしのない好いた眞似をするのだと、菊代は他人事でも歯痒く思ひながら、お村の寢様を睨みてゐたが、ぐつすり睡入つてゐるらしかつたお村は、意外にも晴々した顏をしてむく／＼と起上つて、

「叔母は餘計なことを云はんすな」と叱つて、

「菊さん、まあ上つて當りんさい。面白いことを聞かせて上げるから」

「……」菊代はどうせ朋輩の色話だらうと、聞きたいやうな聞きたくないやうな氣持になつて、にや／＼笑ひながら炬燵の側へよると、お村は相手の耳許へ大きな口を持つて行つて、

「……」と笑ひ／＼囁いた。

「よう聞えんから、笑はいでぼつ／＼云うとくれな」

「ぢや一寸待つとくれ」

　お村は笑ひを鎭めてから、菊代の福々した耳を抓んで引寄せて、再び囁いた。……それはおよしといふまだ十八九の不器量な女とある男との密會を覗きに行かうではないかといふことだつた。今夜家の者が浪花節を聽きに行つた留守に出會ふ約束をしてゐたのを、立聞きしてすつかり知つてゐるので、初心なおよしの様はさぞ面白からうと、さも面白さうに戲言まじりで話した。

「お前さんは阿呆臭いことばかり云うて」と、菊代は取合はぬ振りをしながらも胸をわく／＼させてゐた。炬燵のほとりには今まで遊んでゐた漁夫共が喰荒らした蜜柑の皮や駄菓子の端切れの散らかつてゐるのが、夕暮の薄明りで目についたが、そんな物を見るにつけても、この家には若い者の出入が多いために、餘分な利得のあることを菊代は考へないでゐられなかつた。そして、この朋輩に負けんやうに商賣をしたいと發作的に氣張つてゐた。

　お村は相手が生眞面目になるのも構はずおよしを冷かしたり、浪花節の口眞似をしたりしてゐたが、その間に母親が膳立して、ランプも點けると、炬燵から匐出て、親子差向ひで茶漬を掻込んだ。

　西風は雨戸に音を立ててゐたが、自分の家に比べると、温かで陽氣で、身分違ひの人の住居のやうなのが菊代は殊更今日は妬ましかつた。どんな仕事をしたつて、お村などに引けを取るんぢやないのにと、娘の手助けをしてゐる此處の母親と、邪魔をしてゐる自分の母親や祖母とを引比べた。若い者が寄つて來ないのも、盲目やよぼ／＼の婆さんがゐて穢らしい思ひをさせるからだと、何もかもの不幸の元を二人に塗りつけるのが、考へ事した最後の行詰りだつた。

「うちも去んでお夕飯を食べようかい」と座を立つた。

「御馳走があると饗んで上げるのにな」と母親は憐れみを含んで見上げた。

「今のことは別として、今夜は一緒に遊ばうではないか。お前さんが出て來にや、此方から誘ひに行くぞな」

　お村の押付がましい聲を後に聞きながら、菊

代は裏口から飛出した。三日月は研ぎ澄ましたが、空に震へてゐた。何處でも戸を鎖してゐたが、ところ／＼に賑かな聲はしてゐた。菊代は祖母や母親の傍へ歸りたくはないので、遊ぶ道さへあれば夜遲くまで遊んでゐる氣だつたが、それには先づ空腹を癒さなければならなかつた。浪花節を聽くにしても、何かの遊び事をしてゐる人溜りへ出掛けるにしても、一文無しでは仕方がなかつた。で、足許の暗い川端を傳つて自分の家へ戻ると、豆ランプが神棚で幽かに光つてゐた。盲目のお夏は、娘の留守の間は自分達老人には不用としてランプは消して置くのだが、お正月にはお燈明として神棚に載せてゐた。

菊代はランプの心を捻上げてから、取下さうとしながら、神棚をよく見ると、出掛けには確かに其處にあつた金入が見つからなかつたので、頻りに搜してゐると、

「金入ならお母が持つとる」と、お夏は訊かれぬ先に、袂から財布を出した。「今お婆に一合だけ買うて來て上げたのぢや。見い、お婆はいゝ氣持に醉つて寢とらうがな」

「まあ呆れた……」菊代は浮かりすると、踏付けさうな祖母の頭をランプを持つて見下したが、さう思つて見ると皺くちやの顏にも稍人間らしい紅味が差してゐた。微かに吐く息にも酒の香が混つてゐた。

「何ぼせがまれても酒なんぞ買うてやるといふことがあるものか、いゝ、うちが明日草履買ふ錢に殘しといたのに、裸足で三里も五里もの道を歩いて商賣に出られるか、よう考へて見るがえゝ」

菊代は輕くなつた金入を母の手から取るが早いか、恨めしさうに炬燵の上へぶつ付けたが、お夏は氣にも留めないで笑顏をして、「われは戸外から戻ると、何ぞれかぞれ苦情を云うてお母を困らせ居る。草履の穿代へが入りやお母のでも持つて行けいよ。お母は裸足でも構やせんがの。いゝ、うちはお婆に正月の祝ひ酒を呑ましたのが何よりも悦しうてならんのぢや。これでもう死んでも殘り惜しらないちうて、お婆は上機嫌で、お飯も食べないで眠入つたがの。われ、いゝ、よう見い、お婆の寢顏も今夜は佛樣のやうぢやらうがな」

「……」菊代は返事もしないで膳を引寄せたが、蓋を取ると、意外にも汁掛け飯の山盛りにされた丼が入つてゐた。濱屋のお情とは聞かずとも分つてゐた。

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雜炊の殘りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しうないがの」

丼からの温かい米の飯の香ひや鳥の香が菊代の鼻を擽つた。お夏は娘の箸の運びを快げに耳に留めながら、正月三ケ日が案じたほどでもなく、穩かに過ぎたことを獨りで喜んで、神棚の金毘羅樣のお札を心で拜んでゐた。

「今年こそお初の音信が聞かれますやうに……菊代の心に魔が差さぬやうに」と、明日の糧を祈つた上に、今夜はそれを附加へた。

夢中で鳥汁飯を平げた菊代は、箸を擱くと、急に元氣づいて、約束したお村の訪れを待構へて何處へでも浮れ出す氣になつてゐたが、誰一人聲を掛けて呉れるものもなかつた。で、また今夜も興もなく家内三人炬燵を圍んでごろ寢をした。晝寢をし過ぎたせゐか、菊代は浪花節歸りの騷々しい足音に目を醒ましてからは、暫らく眠つかれなかつた。眠れないと、窓の隙間から吹込む風が身に染みて堪へられないので、母親の掛けてゐる蒲團の中へ藻繰込んで、頭まで埋めて抱付くやうにした。夫に逃げられてから久しく忘れてゐた人肌の温味を、菊代は今垢臭い母親の身體で思出した。

永年寒さに暑さに鍛へて來た祖母のおみちは、肩が凍るやうに冷えてゐても、夢は少しも

亂されなかつた。

三

三ケ日が過ぎ寒が明けてから、厚い氷が張つたり雪が降つたりする日が續いた。菊代は毎日薄暗い間に起きて、商品を滿載した籠を背負つて、東西の村々へ出掛けて、日暮前にはほゞ賣盡して歸るのだつたが、家に休んでゐた日よりも却つて屈託がないだけでもよかつた。たまに顏馴染の出來た家へ寄つて、火鉢か焚火で龜んだ手を温めながら世間話をしたり、お茶を貰つて辨當をつかつたりすることもあつたが、大抵は一日歩き通しで、日當りのいゝ處で小休みして、川水や井戸水で喉の乾きを留めるのに過ぎなかつた。をり〳〵道連れになるお村などが、饂飩屋や駄菓子屋へ寄つても、自分だけは誘はれないで素通りした。その癖菊代は風付の惡いせゐか、お世辭がないせゐか、お村などよりも安物を持つてゐながら品物の捌けがのろいのだつた。

七草が過ぎ寒卸しも過ぎると、處々の村々で村祭などがあつて、不景氣ながらも魚の値がよくて、骨惜みをしない漁夫や賣子は春早々可成り暖かな收入があつた。怠けてゐた漁夫も自分の村の恵比須神社の祭を濟ますと、纜を解いて漁場々々へ向つた。

船の出入のあるたびに質屋通ひの用事で忙しい盲目のお夏は、今度もいくらか儲けた。年末の使賃は凡て菊代に渡して借金拂ひなどの役に立てたのであつたが、年が明けて後のは、半ば自分の懷中にして置くやうにした。村の者が少くも一生に一度は參詣するといふ讃岐の金毘羅へ、お夏もかねて詣りたいと念じてゐたので、五年十年も前からその路用に當てるつもりで、零細な貯蓄をしてゐたのだが、何時の間にか貯蓄は一文無しに消えるのが例になつてゐた。でも思出しては一錢二錢と祕密で溜置くのだつた。

昔は此處の濱から屢々金毘羅詣りの船が出た。今は汽車や汽船の便利があるので、わざわざ和船を仕立てて行く者は殆んどなくなつたが、それでも花の咲く季節には、たまには近村の老若男女が團體をつくつて、旅費の廉いのを取得に、時日のかゝるのも構はず、のろ〳〵と和船で港々へ寄つて四國渡りをすることもあつた。お夏はその船の出るたびに、御利益のあらたかな象頭山の御社を憧憬れた。

「菊よ、いゝわれも一度金毘羅樣へお詣りしとくと運が向いて來るぜ。お母もわれと一緒なら船へ乘せて貰うてお詣りの出來んこともあるまいと思うとるけいどな」と、旅費の足らぬのを歎息した。

「目の見えんものがそないな遠方へ行かうなんて、お母もなか〳〵大望を持つとるんぢやな、うちは何も願を掛けることはないし、金毘羅樣へも大師樣へもお詣りしようとは思やせんがな」

「さう信心氣がないと、いゝわれもこの先えゝことはあるまい。家のお婆を見い。若い時から飮食にばかり身を入れて、神詣りも佛信心もせなんだから、歳を取つても樂な日は送れんぢやないか。今でもお婆はお宮の前を通つても頭を下げることはあるまいがな」

お夏は今年こそ來年こそと望みをかけながら、いざ船の出る場合になつて、自分に何の準備も出來てゐないのを知ると、落膽して、せめての氣休めに、參詣仲間の知合ひの老人に銅貨一つのお賽錢を託したり、お札や護符を買つて來て貰つたりした。土産に貰つた堅い板飴を有難さうにしやぶつた。

この正月にも炬燵でうと〳〵してゐる間に、またも金毘羅詣でを思詰めて、例の貯蓄を志したので、質屋の使ひが並々ならぬ樂みになつた。菊代の商賣も正月は可成りに儲けがある

ので、さして母親に求むる所はなかつた。が、漁船が出てしまつて濱が淋しくなると、お夏の用事も暇になつた。木搗仕事も精米所に奪はれて、滅多に依頼者はなくなつた。で、菊代の留守中には、日一日炬燵で暮らすことが多かつたが、側で寢てゐる老婆には餘り口は利かなかつた。何年もかうしてゐるので二人の間には話の種が盡きたといふ有樣で、たまに話をしても同じ事の繰返しに過ぎなかつた。殊に傷をしてからの老婆はそれを氣病にして、傍の世間話などに耳を留める氣持にはなつてゐなかつた。芋でも麥飯でも與へられたものを食つては、木枕に白髪頭をのせて眠入つて、目が醒めると口の内で譯の分らぬ獨言を云つてゐた。その突拍子もない獨言がたまに耳に入ると、お夏は聲を擧げて笑つた。

　ところがある日、老婆はむく〳〵と身體を起して、

「おらは今奇體な夢を見たがの」と、きつぱりした聲音で云つた。

「極樂へでも行つた夢を見たのかな」と、お夏は冷かすやうに云つた。

「おらは極樂や地獄の夢は一ぺんも見たことがないがな、われ。……おらは今菊が目の醒めるやうな綺麗な着物を着て船へ乘つとる夢を見た。濱は一杯の人だかりぢやつた。われにも菊の綺麗な身裝を一目見せたかつたがの」

「呆けたことを云はんすな、……お前が夢に見たのは、菊ぢやない、お初ぢやらうがな。お初が綺麗な身裝をして戻つて來ることなら、うちは夢でなうて起きてる時にでも見ることがあるんぢやもの」

「うんにや、おらは今確かに菊の夢を見たんぢや。何ぼ歳がよつても菊とお初との顏は見違へりやせん」と、老婆は力んで云つて「われはどう思ふか知らんが、おらはな、菊がお初のやうに惣嫁にでもなつたら、擔ぎ歩きするよりやどれほど面白い目が見られるか知れんと思うとるぜ。永年見たことのないお金が一時に取れて、われやおらも好きなことして氣樂に暮らせらあ。あの女にしても碌でなしの亭主を持つて難儀するよりはどれほどましか知れやせん。われは菊の機嫌のえゝ時にさう云うて見い」

「お前はこの頃もまださう言ふことを考へとるんぢやな。興醒めたこつちや。もうそがいなことは云はんすな。聞きともないから」お夏は腹立しげに云つた。娘がひよんな噂の立てられるのさへ厭うて、休みの日にはその出先を氣遣つてゐるほどなのにと、老婆の根性を憎々しく思つた。

「よしかあの女の身を賣つて、菊の身體と同じ重量の錢が手に入つたつて、代りのない菊に遠方へ行かれたら、うちやお前はどうして生きとれると思うとるのかいな。氣が狂うてもそないなことは云へたものぢやあるまいにな」

「……お初のやうに遠方へ行かさいで近所の町で勤め奉公をさせりやえゝぢやないか、菊がうんといやあ、世間にも祕密でおらが奉公口を搜して來てやるがな」

「阿呆云ひなさんな、お前が襤褸を垂れて町へ行からもんなら、それこそ乞食かと思はれらあ。誰が相手になつて呉れるものか。お前の足が長途が踏めるくらゐなら、菊に恥を掻かせに町へ行くよりや、水汲みでも使ひでもして、お前の好きな酒を買うて飲むとえゝのに」

「われはようさう云ふけいど、おらの儲けた錢は取るが早いか菊に渡しとるぢやないか。一文でも隱立てして自分の榮耀をしたことはないがの。われこそ菊に祕密で自分の使賃を隱しときながら、われ一人菊を可愛がつとるやうなことを吐し腐つて」

　老婆は久振りにこんな毒口を叩いた。そし

て、自分や孫娘の幸福を、お夏が何時も妨げてゐるやうに一途に思詰めた。菊代が惣嫁にでもなれば、今夢に見たやうな美しい衣服が着られて、第一當人のために仕合せだ。老婆自身も米の飯に魚を添へて鱈腹食べられるし、寢酒の養も盡せるのだ。……おらは本眞の乞食になつても苦とは思はない。菊代が仕合せになるためなら、椀を持つて物貰ひしたつて自分一人の口過ぎは屹度して見せる。結句その方が氣樂かも知れん。たゞこんな盲人が何時までも生きてゐるために、何かにつけて手足纏ひになつて、菊や自分の心まかせにならんのだ。と老婆は思つてゐた。で、われといふ邪魔物が死んで、おら達がもつと樂が出來るまでは、おらはどうしても死にやせん、と腹の中で意氣込んで相手の顏を見た。

が、お夏は最早取合はないで笑つてゐた。

「お前は今日は仰山な元氣ぢやな。そないに元氣があるんなら、これから先も天子様からたびたびお杯を頂戴出來らあな」と、話を外したが、老婆は先きからの一つ事に暫らくこだはつて、お夏に突掛つた。

そこへ、菊代が何時ものやうに腹をぴよこぴよこに減らせて歸つて來ると、老婆は、「おらの云うたことを今直ぐ菊に話すぢやないぞ」とお夏に囁いて、「われのことも祕密にしといてやる」と、きよと〳〵した目付をした。そして、菊代が背負籠に殘つてゐる蜜柑を一つ炬燵の上に投げて呉れると、急いで摑取つて寢ながら食べた。

四

窓の上の濱屋の庭先には、蕗が芽を萌出した。日に〳〵彼方此方の地べたを割つて青い芽が開いて、濱屋の子供が珍らしがつて「今日はいくつ出た」と數へてゐるのがお夏の耳にも入つた。濱屋に飼つてある可愛らしい牝猫を追廻してゐる幾匹もの牡猫のいやらしい鳴聲も二三日前から日ましに盛んになつた。

風のない日には周圍がすつかり春景色になつたのを、お夏は總身に感じて、用がなくつても、炬燵から匍出して、近所の女房達と立話をしたり、時としては素り足で埠頭場近くへ行つたりした。岸端に蹲んで小波の音や櫓の音を聞いてゐると氣持がせい〳〵した。そして、今年も四月の末か五月の初めにはこの埠頭場から出ると云ふ噂のある金毘羅船に乘れたら、さぞ面白からうと、何十年の昔向ひの島へ柴刈に行つて以來嘗て乘つたことのない船の乘心地をさまざまに思ひやつた。……元結がはりの藁で髮を茶筅のやうに結つた、蒼黑い顏したお夏の盲ひた目の前には、麗かな日光が波に碎けてゐる。鳶が輪を描いて舞つてゐる。爪の延びた足許には寄居蟲が石垣傳ひにうよ〳〵してゐる。……冬の間に蟄踞した虱までも温かい日に誘はれて、彼女の肌着から匍出してゐる。

「南無、金毘羅大權現樣」と、お夏はふと海の彼方を仰いで、手を合せて拜んだ。「……」と、一心に祈願を籠めたが、差當つて痛切に何を願ふといふことはなかつた。只五體に觸れる春らしい柔かい風や日光に心が蕩かされて、神や佛が懷かしく思はれたのだつた。

「そこで何をし居りんさる?」と、たまに聲を掛けて呉れるものもあつた。

「家で寢てばかり居ると身體に毒ぢやから」と答へて、聲の主に向つて、前に湛へてゐる海の上の光景を訊いた。運送船が何艘沖に繋つてゐるとか、誰某が肥船を漕いでゐるとか教へられると、夢見るやうに穩かな春の海面を胸に描いて樂んだが、をり〳〵は教へられもしないお初の姿を海の上に浮べた。渡舟に乘つて向ひの村から直ぐそこまで戻つて來てゐるやうに思つて見たりした。……「菊は笑うて相手にせんけ

れど、お初が無事で戻つて來まいものでもない」と、自分の腹に問ひ胸に答へた。神佛の御利益で自分の兩眼が開くといふことは信じないけれど、お初が生身を運んで、生れ故郷の母親の膝へ戻つて來るといふ不思議は待設けられないではなかつた。

親類は一軒もないし、上り込んで番茶の一杯も飮んで親身な話の出來る家は村中に何處にもないので、お夏は海邊への往歸りにたまさか誰かに呼留められて立寄つても、自分の汚い身裝を憚つて、閾の外に立つて話をするか、せい／＼上り框に腰を掛けるかするくらゐで、いくら親切に云はれても疊の上へ這上るやうな不遠慮な眞似はしなかつた。

「菊代が毎度御厄介になります」と、人の家へ寄ると、高い聲で、挨拶がはりにそれを云つた。

お夏が濱邊の潮風に吹かれて、牛小屋での永い間の籠り居の退屈を忘れてゐる時分に、菊代は籠を背負つて、雲雀の鳴いてゐる田圃道を辿つてゐた。

藪陰の泉の水もやゝ温んで、渇を醫し汗を拭ふのに快くなつた。日が永くなつたので、歸りが遲れても暗い道を通る恐れがなくなつた。朋輩と道伴れになることは稀でも、他村の者や旅の者に向ふから話掛けられて一緒に歩くことはよくあつたが、見知らぬ人と取留めのないことを言合つてゐる方が、自分の身の上をよく知つてゐる人達と話してゐるよりも、菊代には却つて氣晴しになつた。……初大師詣りの連中の巫山戲ながら歩いてゐる間に交つて羨ましい思ひをしたこともあつたが、殊に彼女の心を惹いたのは、古ぼけた笈摺に何か黑い字の書いてある巡禮姿の女であつた。

四十あまりの頑丈な女で、脚絆甲掛の足許も輕げに歩いてゐた。巡禮には大抵連れがあるものなのに、この女は一人ぼつちであつた。

「××へまだ餘程遠う御座いますか」と尋ねられたのが緣となつて、峠を下りるまで道連れとなつた。

「何處へお詣りなさるんです」と、菊代が訊くと、

「名所見物がてら西國廻りしようと思うとります。去年は四國を八十八ケ所無事にお詣りを濟ましましたから、今年は××まで出て汽車に乘つて、一月がかりぐらゐで彼處の札所々々を打つて來ようと思うとりますのぢや」

「お一人ぢや淋しいでせうのに」

「獨りの方が結句氣散じですがな。歩きたいところを歩いて、疲れゝば汽車に乘るし、早く宿へ泊らうと自分の氣儘が出來ますもの。……路用は不用心だから些とばかり手許に持つとつて、行先のお寺宛で爲替を家から送らせることにしとります。本眞に世の中は便利になりましたわいな。さうしとけば、途中でお詣りがいやになつても無性氣を出して取返す譯に行きませんからの」

「でも隨分費用がかゝるんでせう」

「そりや心掛一つでどうにでもなりますわな。かういふ服裝をしてお精進物ばかり食べるのですから、宿錢だつて並の人よりやずつと安うて濟まされます。處によつて無錢で泊めて吳れるところもありますし」巡禮はさう云ひながら、ふと菊代の籠に目をつけて、三つ四つの蜜柑を買つて、直ぐ樣それを剝いて食べながら、三十三ケ所の寺々の名前など語つた。

菊代は峠の裾で別れてからも、夕日を浴びた笈摺姿が蜜柑の皮を投散らしながら足早に歩いてゐるのを顧みてゐたが、すると、盂蘭盆の夜など、母親はじめ近所合壁の老婆たちが鉦を叩いて、哀れな聲で唄ふ御詠歌が久振りに思出された。そして、一つ二つ口の内で唄つて見ると、自分も背負籠のかはりに笈摺を掛けて、知

らぬ他の國へ行つて見たくなつた。

溫かくなるにつれて、菊代は自分の家にますます厭氣が差して來た。お末やお鶴のやうに岡山の紡績へ女工になつて行かうとも、あるひは下女奉公に出ようとも、どんなつらい仕事をしてもいゝから、自分の村と家とから遠ざかりたかつた。

「こんなことを何時までしてゐたつて、面白いことはない」と、母親の側に蠶籠を抛却して當付けるやうに云ふこともあつたが、

「商賣が大儀になつたら一日や二日草臥休めをすりやえゝがの。おまへもさう云うとつたが、われは商賣に焦り過ぎるのが惡いんぢや。外の者に負けちや口惜しいなぞと思はいで、氣を長う持つて居れよ」と、母親は慰めて、そんな時に、菊代に働いて力を付けてやるつもりでかねての貯蓄の一部を、五錢でも十錢でも抛出すのだつた。

「お母はお金持ぢやな」菊代はさうされると惡い氣持はしなかつた。それに、自分の手足を働かさないで、儲けなかつた錢が、たとひ一厘でも一錢でも入ると、心の躍るやうな嬉しさが感ぜられた。

「お母が普通の人のやうで、いゝおれと二人で精一杯稼いだら面白からうのにな」

「もうさういふことを云うて呉れるな」

母親は手を振つた。

五

「菊さん〳〵……」と幾度も呼ぶ低い聲が、親子が早寢の床に就かうとしてゐるところへ聞えた。眞先に聞付けた母親は、不審げに、「異な聲ぢやな」と菊代に囁いて、「入らんせい、誰かいな」と表へ向つて叫んだ。が、返事もしないで、荒々しい足音が小川の方へ消えた。

「誰か知らん。われには分つとるんか」母親は胸をどきつかせた。

「うちはよう聞かなんだ」

「あれは通り掛けに呼んだ聲ぢやないぜ、祕密でわれを呼びに來たんぢや。用心せいよ」

「またお母が妙なことを云ひ出した」

さう云つて笑ひながらも、菊代は母親の言葉に心を動かされて、ふと眠氣を醒まして戸を開けて見た。其處には誰もゐないし、周圍を見廻しても眞暗で分らなかつた。が、先きの聲がただの聲ではないやうな氣もしたので、疑念晴らしに川端まで出て行つた。海の方から吹寄せる溫かい南風がいゝ氣持に頰や鼻に觸れた。

「降るかと思うたらお星樣が出て居る」と、拾ひものをしたやうに喜んで空を見上げてゐると、

「おい、菊さん」と呼ぶと共に、男の手が肩に觸つた。

菊代は吃驚して飛退いて、相手を見詰めた。幽靈ではなくつて、五年前と同じ顏した繁松が、にや〳〵と笑つて立つてゐた。

「お主はうちをどがいしようと思うて此處へ來た？」聲は潜めたが、目は尖らせて體を震はせた。男の顏を搔きむしりたいほど怒りに燃えてゐた。

「まあそがい怒らずにわしの云ふことを聞いて呉れい。譯をよう話すから。此處ぢや人に見られるからお地藏樣のところへ行かんか、わしが先へ行つとるから後から來い。えゝか。……若し來なんだら、われが家へ行くぞ」

繁松は柔しく云ひながらも、脅すことを忘れなかつた。そしてすた〳〵と行過ぎた。「誰が行くものか」と、菊代は腹の中で罵つてゐたが、「われが家へ行く〳〵」と云はれたのが薄氣味が惡かつた。以前彼のあつたことで、母親へ酷く當るだらうし母親の方でもこの男を憎んでゐるから、大喧嘩が始まるかも知れないと思はれた。

それは兎に角、自分でも云つてやりたいことは溜つてゐるんだから、と、直ぐに後を追つた。

地藏樣は村はづれの小高い處にあつて、後は小さい叢で、左右には松などが疎らに生えてゐる。五六年前に二人が最初に出會つたのは此處だつたので、お地藏樣と聞いてさへ菊代は妙な興味を與へられるのだつた。

少し逆上せて醉つたやうだつたが、知つた人に會はぬ用心して、淋しい小道を選つて石地藏の側まで來たが、男の方は何處をまごついてゐるのか、まだ來てゐなかつた。菊代は一刻も待ちあぐんで、きよと／＼左右を見廻しながら立つたり蹲んだりしてゐた。沖には蛸釣船の篝火が闇の中にちらほら光つてゐて、岸に寄せる波は不斷よりもやゝ高かつた。

「菊……もう來とつたか。早かつたな。わしは藤屋で飯米を買うて船へ積込んどいて來たんぢや」

下脣の曲つた目の爛れた人相のよくない男松は松の蔭から忍び足で近づいてさう云つた。

「うちはこないな處に愚圖々々しとらりやせん。聞くことは聞いて早う往なにやならんのぢや」菊代は突慳貪にさう云つたが、最早氣が濟んでゐた。「お前は船で戻つたのかな。自分の船に乘つとらんかな」と訊ねた。

「なあに、臨太爺の船に乘せて貰うてやう／＼戻つて來たんぢや。……わしはあれから博奕をしたぜ。二次の船で朝鮮へ行つたのはえゝが、ひよんなことから彼奴と喧嘩をして陸へ上つてから、いろ／＼な稼業をやつとつたのぢやが、何方向いても知らん人間ばかりの中で稼ぐんぢやから此方の海で漁をしとるやうに氣儘は出來やせん。そりやまだえゝが、わしは何か祟つたのか、人遊びで牢へ打込まれて去年の盆時分まで丸三年といふものは半死半生の目に會うとつた。やう／＼本眞の罪人が知れてから牢を出るにや出たが、着のみ着のまゝの一文なしぢやからの」

「また博奕でも打つたんぢやないかな。朝鮮から戻つた人に訊ねても、お前が牢へ入つとると云ふことは一度も聞かなんだのに。陰でえゝ仕事をして儲けとるといふ話だつたがの」

「博奕どころか、わしは狐に化されたやうな氣持で牢へ連れて行かれたのぢや。しかし、わしが牢へ入つとつたことは秘密にしとるんぢやから誰にも云ふな。無實の罪にしても體裁が惡いから」

「そんなことを人に云ふものか」菊代は肩と肩と摺合つてゐる男の顏を星明りで見つめたが、思ひなしか、以前よりは窶れてゐるやうに思はれた。「今夜から、お前は叔父さんの家に泊るのかな」

「泊めちや呉れるけんど、彼處は子供が大勢居つて窮屈だからの。わしは獨りで船へ寢てやらあ」

「これからは近所で漁をするつもりなのかい、お前。直ぐにまた朝鮮へでも行くのかな」

「わしはもう遠方は懲りた。お爺にでも使うて貰うて手繰網でも曳かうと思うとる」男は石地藏の蔭に蹲んで、懐の財布を弄んで銅貨の音をさせながら「われはこの頃は誰と一緒に居るんだい」

「極つとるぢやないか、お婆とお母と……」

「それつきりか」男はにやりと笑つて、「二人とも何時まで丈夫で生きとるなう。お母は今でもわしのことを惡う思うとらうがな」

「そりや極つとらあ、あないに老人を酷い目に會はしたんぢやもの」

この男が母親を打つたり蹴つたりしたことはまざ／＼と菊代の記憶に浮んだ。老人二人を抛散らかして、他所へ行かうとまでして、男の不人情を怨つたことも思出された。

「お母にもよう謝つといて吳れい。さうすりやわしも明日お母の好きな物を買うて謝りに行かあ」

「……」この男が村へ戻つたことが明日になつて母親に知れて騷ぎ出されるのが菊代には恐ろしかつたが、「來るな」と斥ける力は出なかつた。そして、五年前のお地藏樣の界隈はもつと樹木が茂つてゐて、月夜にでも人目を避けるに都合がよかつたことが氣についた。吹く風に竹藪はざわついて、野良犬の聲が間近く聞えた。

「わしは久振りで陸の家の中で思ふ存分足を踏ん伸ばして寢たいぜ」

暫らく經つて繁松は手に付いた泥を拂ひながら云つた。殊に風の吹いてゐる日に、搖られながら船で眠るのは、漁夫稼業をしてゐても辛氣なものだつた。

「い、うちはまたあの家で寢るよりや船にでも寢たいと思ふことがあるがの」

い、「われ、そんなことを思ふやうになつたか。わしの船だつたら連れてて寢させてやるのに」

二人は明日の晩の約束などして石地藏の濱通りへ下りた。菊代は男が指差した船の在所を些つと見やつただけで、男を振切つて一散に驅けて、自分の家の戸口まで歸つた。戸は自分が明けたまゝだつたので、母親などの寢姿が豆ランプの光で微かに見えた。

靜かに戸を締めて、氣取られぬやうにそつと枕に就いたが、すると母親は頭を持上げて出先を訊ねた。

「一寸用があつて行つとつたんぢやがの。そないに煩さう訊いて下んすな。うちは眠たうてならんのぢやから」

がみがみ叱りつけて置いて、菊代は直ぐに鼾をかいた。そして、夜明け前に呼起されても容易に枕を離れないで、窓の上で雀の囀り出すまでぐつすり眠入つてゐた。

「菊は今日は休むんか、大儀なら休めばえゝがの」と母親に云はれると、

「こんな天氣のえゝ日に休んで溜るものか」と、菊代は威勢よく云つて、大急ぎで食事を濟まして籠を背負つて出た。近所の者に顏を見られるのが厭さにすたすたと傍目も觸らずに道を急いだ。しかし村を離れると足が次第に進まなくなつた。母親の思惑や村の人々の口の端や繁松の今後の所行がかはるがはる彼女の胸を驚かして、商賣のことなどに身が入らなかつた。で、負けと云はれるだけ負けて殆ど捨賣同樣にして、田の畔ででも屢々荷物を卸して足を休めて、時の經つのも忘れて考へ込んだ。……獨笑ひをして浮立つやうになるかと思ふと、自分は矢張自分一人を賴りにしてゐる盲人や老耄を大事にしてやつて、かねての覺悟通りに男に掛合はないで通さうかと思つたりした。

面白い目には會はずに、徒らに年を取つて來た菊代は、村に男の數は多うても、繁松の外には自分などを相手にして吳れる者のないことをしみじみ感じてゐるので、脣の曲つた爛れ目のこの男でも、取逃がす諦めはつかなかつた。以前の男の仕打に柔しいところや手賴りになるところの些ともなかつたことはよく知つてゐるのだけれど、菊代には最早男に對して選好みをする氣は些ともなくなつてゐて、相手が男の身體を具へてさへゐれば、二度でも三度でも石地藏の側で會ふだけ得だといふ氣持になつた。

それにしても石地藏の側だけでは物足らなかつた。……祖母はゐてもゐなくても同じやうなものだが、盲目で耳の敏い怜悧な母親が家に尻を据ゑてゐるのが、どれほど邪魔になるか知れなかつた。……「お夏が可哀想ぢやから無賃で貸してやると、濱屋では牛小屋をお母に貸して吳れたのぢやから、お母は不都合のないやうにと義理を思うて、一晩博奕宿に貸して吳れと賴ま

れた時にも、われがとうしたけりや、濱屋へ斷つてからにせいと堅意地なことを云うて承知せなんだ。男を連込むのも承知する筈はない

これやあれやで胸を惱ますものの、菊代は平生に比べると、今日は村へ歸るのに張合ひがあつた。行地藏の裏藪に咲きこぼれてゐる紅い椿に目がついたり、行地藏の上に鳥の留つてゐるのか可笑しく思はれたりした。夕潮は岸を浸して、船端で米を磨いでゐる漁夫もあつた。

繁松の不意に歸つて來たために村の樣子が異つて、其處等の人々の話聲はみんなその噂かと案ぜられたが、道で擦合つた人の誰もが菊代に向つて變つた口を利かなかつた。例つやうに、「温うなつたなあ」とか、「今日はよう賣れたかな」とか、たまに聲を掛けられるばかりであつた。

六

「待つとるお初は戻つて來ず、戻らいでもいゝものは戻つて來るし、お婆、いゝ、うち等はまた酷い目に會はされるぞな」

お夏は關太爺に救はれて朝鮮から着の身着のまゝで戻つて來たといふ繁松の名を聞いた時に溜息を吐いた。

「おらはどがいでも構はんがの、繁が來て吳れりや結句賑かでよからうわい」おみち婆さんは口先で毒づかれようとも、繁松の飲み餘しが一杯でも飲めて、たまには魚の頭ぐらゐ食べられる樂みがありさうに思はれた。

「彼奴が居ると菊が今のやうに一心に働いて吳れんぞ、うちはあがいな獄道奴に食ふや食はずの目に會はされると思ふと、細引の一本は用意しとかにやならん。繁も朝鮮で牢へ入つとつたといふから最後の果にや十作のやうになるんぢやらうから、うちは氣疎うてどうもならんがの。菊までも卷添になつて見んさい」

お夏はその有樣が目に見えるやうで身震ひした。繁松とは違つて菊代のちやんとした亭主であつた十作が、脫營の罪科で死刑に會つたことはお夏の骨身に深く染んでゐて、菊代に男の出來るといふと、直ぐにかの死刑が聯想されて恐ろしかつた。……他村から流れて來た繁松の顏は、目の開いてゐた時分に一度も見たことはないので、最初娘の入婿の格で會つた時からして、獄門に懸る顏のやうにお夏の心には映つてゐたのだつた。そして、半年ばかり養はれてゐながらも、睦まじく打解ける氣になれなかつた。

「氣疎や〳〵。男といふ者は何時お上に殺されるかも知れない」と、ある日隣の主人に話したことがあつた。

「緣起の惡いことを云ひなさんな。惡いことさへせにや咎めらるゝ心配はないよな」

「そりやその通ぢやけれどの、うちはどうも氣に落ちんがの」

「男は殺さるにしても、お前の家には女子ばかりぢやから安心だ」隣の主人はさう云つて笑つた。

男の子を生まいで結句仕合せかと、お夏は自分の幸福をさういふ事にでも求めようとした。

今にも恐ろしい繁松がやつて來るかと待構へて、油斷しないでゐたが、夕方まで音沙汰はなかつた。戸を開けて入つて來た足音は菊代に違ひなかつた。

「戸はちやんと締めて置けい」

「こんな温い日は、開けとく方が明るうて陽氣でえゝのに」菊代は開けたまゝ家へ入つて、不斷よりも口數を餘計に利いた。滅多に云つたことのない商賣の話をもした。

「お母、××の畝には桃の花が一面に咲いとるぞな。お母に一目見せたいとうちは思うた。もうお彼岸が來るから、今年はお母もお婆も久振

りでお墓詣りをするとえゝにな。……お彼岸といへば、濱屋でお接待の手傳ひを一日して上げにやなるまいな。

「われが連れて來て吳れりや、お墓詣りにでも行かあ」と、お夏は大聲で云つて、「わいは今日何か樂しいことがあるんか。桃の花の咲いとるんかそないに面白かつたんか」

……菊代は母親の顏を顧みると、急に陰氣になつた。

お母はん先きからわれが不機嫌でならんが、お母はお菊に辛い目をさせてもえゝから、惡い奴に負かされんやうにせいよ」

そんな大きな聲を出して下んすな。人が聞いたら何事かと思はあ

菊代は母親に背を向けて窓の側に立つた。濱屋の子供達は門先で縄なひをして遊んでゐた。まだ見えないけれど、濱屋の姉娘の彈いてゐる琴の音が二階の方から落ちて來た。夕日は長閑に土藏の壁を照らしてゐる。

「何にもこともないし居るんならえゝ」と、臨先にゐる小さい子がふと身を屈めて窓を見上げて笑顏をした。

「一度は片でさんの漁りを見て居ります

われも此處で小僕をしようか。それ迄で居くぜ」と、子供は身體を突出して前をまくつた。すると、他の子供も寄つて來て、

「わいだつて負きやせん、見て居れ」と、身體を力ませた。臭い水の迸沫が窓の格子にまでも降りかゝつた。

菊代は驚いて首を引込めて、默つて晩餐の支度に取掛つたが、賣殘りの鰺の干物を惜氣もなく焼つた。生臭い煙が小屋の中から流れ出た。

「問屋の物を矢鱈に口へ入れると、儲けた錢を差引かれるんぢやから恐ろしい。向う見ずはやれしてはならんぞ」

「干物を一枚ぐらゐ、たまにや食べたつて大事ないがな、うちはとないに辛抱したつて長者になれるんぢやなし……」

「今日はわれもどえらい厭い氣になつたな」

お夏は娘の氣に障つて爭ひの起るのが氣遣はしさに、兼松の名を容易に口に出さなかつた。そして娘が焼いて吳れた干物には手をつけないで、麥飯に茶を振掛けた湯漬を食べた。

「問屋へ行つて、戻りに濱屋で風呂へ入れて貰はう」

菊代は溜息と獨言のやうに言つたが、先きから隣の家の話聲に耳を傾めてゐたお夏は、「とうとうやつて來やがつた」と、突嗟に叫んだ。「來るのなら、門口で穏當に呼出したりせいで、うち等の居る前で話を纏めい」と云ふに云ふともなく云つた。

菊代は呆氣に取られてゐたが、ふと隣の家の女房と一緒に入つて來たのは、褞袍を着た兼松であつた。

「兼さんもこれからは此村で身を入れて稼ぐんぢやといな。よう話を聞いて元々通りにして上げなさい」と、女房は仲人氣取りで云つて、夕闇を透して皆なの顏を見廻した。

暫らくは皆な默つてゐたが、お夏が躍り出して何か口を利かうとする前に、菊代は土間へ素下りるが早いか、すた／＼川端の方へ駈け出した。そして、濱邊を傳つて昨夕教へられた兼松の船の繋つてゐる處まで行つた。四五艘の漁船の中で稍大きいのが、備前屋の團太郎さんの持船だといふことは直ぐに知れた。との船にも人のゐる氣色はしなかつた。

菊代はどうなつたかと自分の身に關つた話の決着を氣遣ひながら、岩の上に佇んで、船縁を洗つてゐる小波の音を聞いてゐた。後を振向くと、ところ／＼に火がついて、海際の家でも障子を開けて夕風の吹入るにまかせてゐる。菊

代はそれ等の家々の娘や主婦の賤しい品行を思出しては、間にもつかぬ自分に力をつけた。

「オー、わいわれは此處へ來とつたのか、問屋へ行つとるのかと思つたのに」

繁松は德利をぶら提げて、突出た石垣の端から船へ飛乘つて、誰も居らぬからわいわれを乘せてやらう、と、端の上へ步板を掛けて、招いた。手を伸して搆まらせた。

伊勢屋の船玉樣を正面に据ゑて、その前に莚を敷いてゐた。萬代は男が點けたカンテラの光でよく〳〵船の中を見廻したが、舟板は綺麗に拭き淸かれて、食物の道具もちやんと揃つてゐた。

「わいわれはよう あないな汚い家で辛抱しとつたな。臭うて〳〵わしは一時もぢつとして居られなんだ。何ぼ陸で寢たうても、あないな家には賴まれても泊る氣にやならんぜ」

「そんな無理を云はんすな。女子一人の腕で稼いどるんぢやもの、家賃の出る家に居れるものか」

「あの家からこの船へ來らなら氣がせい〳〵しようがな。わしはお嬶に劍らうと思うたけれど、家の樣を見てやめにしたぜ」繁松は長い間慕つてゐた陸の家の住み甲斐のないのに失望してゐた。五年前に愛想を盡かして捨て來た盲人や老婆は一層見苦しくて、同じ部屋に起臥するのも氣味が惡いやうであつた。

「わしは當分船住ひぢや。わいわれも夜は此處へ來て泊れ。問屋の大爺さんももう四五日休まにや船を出しやせんから、當分は夜の間はわし一人が留守番ぢや。夜遊らやつて來いよ。萬が一他人に見つけられたつて構やせんぢやないか」

……萬代はにや〳〵笑つた。綺麗な船の中に人目を避けて、男と差向ひでゐるなんて、何年の間夢にも見たことのない氣保養であつた。男は買つて來た酒を溫めたり、魚を煮たりした。舟板をめくると、水槽には淸水が湛へられて、米櫃には白い米が入つてゐた。

「船乘りは陸に居るものに比べるとお大盡樣ぢやぞな」と羨ましさうに云ふと、

「わいわれはさう思ふか。さう思や船に乘せて連れて行つてやらうか、四國へでも朝鮮へでも渡らうか」

「ふゝん……」萬代は男の言葉が夢のやうなので眞に受けなかつた。

「わいわれのお嬶は容色よしぢやつたさうだが、われだつて些とばお粧飾したら綺麗になるのに、わいわれは稼いでばかり居つて身體を粗末にするのは惡いんぢや」

繁松は昨夕の闇ではよく見なかつた女の顏形を見詰めて、いとど深み染みて、五年前よりも更に醜くなつてゐるのに興醒めながら、出鱈目の挽しがらせを云つたりした。そして、溫まつた酒を女に酌をさせて茶碗でぐい飮みして、女にも強ひた。萬代は興に乘つて、鼻を抓みながら一口だけ呑んだ。

「繁公……」煮えた小魚を箸の先でつゝいてゐるところへ、岸の方から呼立てる聲がした。

「問屋の大爺さんだ。……構やせん、一寸の間隠れとれ」繁松は慌ててゐる萬代を船底の水槽の側へ忍ばせて、舟板を嵌めて、自分は何喰はぬ顏でその上に胡坐を搔いてゐた。

「貴樣はまた祕密で酒を喰つてゐるな。おいらにも一杯呉れい」と、赤銅色した爺さんは既に酒臭い息をさせながら入つて來た。

「たつた一合ぢやもの、もう飮んぢまつた」繁松はさう云つて、女の飮み殘した茶碗へ德利の餘瀝を振落した。

「貴樣の飮滓を頂戴するのか」爺さんは腰を据ゑて茶碗を手にし、ちび〳〵やりながら女の持つてゐた箸で小魚を攫つた。

萬代は生臭い男に惱まされて、先き飮んだ

一口の酒をも吐出した、爺さんの威勢のいゝ聲のみはとぎれ〳〵に耳に入つたが、繁松の聲は殆んど聞取れぬほど低かつた。

「貴様は甲斐性なしぢやぜ。えゝ歳をして居りながら、女房一人よう持たいで。……牢へぶち込まれるやうな間抜けた眞似をして可笑しな奴ぢや。貴様なぞは親はなし子はなし、何時何處でくたばらうと構はんのぢやから、命懸けのどえらいことをやつて見い。おらは貴様に米の飯を食はせて一兩二兩の酒手をやるくらゐ苦にやしとらんがの。おらの前でそがいになく〳〵しとるやうぢや駄目ぢや」爺さんは、不機嫌で高口を叩いたが、目には柔しい微笑を浮べてゐた。

「お前がかういふことを云はれた云ふやあ、わしは何でもやつて見らあ……」

「ようか。そいぢや貴様、今から濱屋の茶園へ行つて、分銀を一握り盗んで来い。家の子供が貝を拾つて来とるから、あれを隠し場にして一杯やらうぜ、今夜は闇夜だから知れりやせん、塀を乗越えて入つて見い」

「阿呆ぬかすな。分銀ぐらゐで盗人にはなりたうないわい」

「高慢なことを吐すな。……茶園物で物足らにや、土藏の錠前でも切つて金庫でも盗んで来い」

「そんなことよりや、もつと氣の利いたことをして、お前を吃驚させて見せらあな」

繁松は爺さんが容易に座を立ちさうにしないので當惑して塞ぎ込んだ。酒はないし喰ふものはないし、じり〳〵する氣持を紛らす術はなかつた。そして、菊代の身體を動かす微かな音も耳についた。いつそ破れかぶれで舟板をめくつて、女を爺さんの鼻の先へ引摺出して見ようかとも思つたが、さうすると、明日から自分の食扶持にも泊り場所にも離れなければならないのが恐ろしかつた。「貴様、おらの大事な船を穢しやがつたな」と、爺さんがその目に角を立てて怒出すのが目に見えるやうだつた。

「お爺、今夜だけお前家に泊めて下んせ。四五日すりやまた沖へ出るのに、一晩も陸で寝んと、船を着けた甲斐がないもの」

「貴様は昨日高慢な口を叩いた癖に、もう陸が戀しうなつたか。貴様も不憫な奴ぢや、女子の子が待つとるんぢやないしの」爺さんはさう云つたが、今急に思出したやうに、「たしか貴様は盲人の娘の家へ入込んどつたんぢやな」

「あれや些つとした悪戯ぢやがの」

「いや、貴様にや丁度えゝ女房かも知れんぜ。乞食見たいな様をしとるから誰も相手にすりやせん。あがいな女子を女房にしときや何年沖へ出とつても、留守に間違ひの出来る心配がないから、漁業に身が入つて結句仕合せぢやらうかい」

「そないに腐して下んすな」繁松はむつとした。

「まあ腹を立てるない。……おらの先の女房は、おらの留守に眞桑瓜二つで角の野郎と抱寝をしやがつた。痢病で死んだ後で知らせて呉れたものがあつたから、おらは何ぼ腹が立つてもどうすることも出来やせん。せめてもの腹癒せに、お墓を打倒して踏付けてやつたがの……それ、漁夫の女房は眞桑瓜二つぢや。えいか」

爺さんは獨りで喋舌つて獨りで面白がつてゐたが、やがてひよろ〳〵起上つて、

「酒もないのに些と面白くもない。もう歸るから、貴様は後片付をして、火の氣のないやうにして後から泊りに来いや」と云残して、掛聲かけて岸の上へ飛んだ。

繁松は生返つたやうな氣持で、急いで舟板を取つて、菊代を呼んだ。が、菊代は泣吃逆して身を持上げなかつた。そして、繁松が引出さう

として伸した手を力強く突きのけた。

七

「朝鮮へでも四國へでもお前の好きなところへ連れて行つて下んせ。うちは何處へでも行くがな。今直ぐに—」

やがて船底から引張り出された菊代は、陸へ上らうとはしないで、涙ながらに氣色ばんで男に迫つた。「お前は先き何處へでも連れて行つてやると、うちに約束したぢやないか。船にやお米もあるし、水もあるし、今夜夜中に出掛ける氣にやなれんのかの。人がうちを捜しに來りや夜中でも船の下へ隠れて居らあ」

「われ、氣が狂うたんか。この船はわしの船ぢやないのに勝手に出せるものか、よう考へて見い。われが遠方へ行きたいんなら、四五日中にわしが手筈を極めて、えゝ鹽梅に行けるやうにしてやるから、それまで待つて居れ。急ぐことあないぢやないか—」

「思ひ立つた時に直ぐに行かにや、愚圖々々してる間にや家が出られんやうになるもの。うちはこれまでに何度も一人で他所へ行つてしまはうかと思うたことはあつたけいど、お母や祖母のことが氣に掛つてどうしても行けなんだ。ぢやけど今夜なら覺悟がついたのぢや。この船が出せにや、傳馬にでも乘せて連れて行つて下んせ」

「路用も持たいで何處へ行けるか—」

繁松は嘲笑つてゐたが、最早女と差向ひでゐるのが煩さいばかりで何の興もなくなつた。女は男の膝を搖ぶつたり腕を小突いたりして、船が駄目なら徒歩で村を逃げようと言出して止まなかつた。

「歩いて何處へ行たつて、御馳走してわし等を待つとるところはないぜ。わしは貧乏してもまだ乞食をした覺えがないからの」男の言葉はますます冷かだつた。「われは些たあ錢を溜めとるのか」

「……」そんな馬鹿げた問ひには答へないで、菊代は、「お前さへ約束を間違へにや、今夜中にうちが路用を拵へて來るぞな」と、目を見据ゑて云つた。

「えらいなあ、誰かに借つて來るんか」繁松は眞に受けなかつた。

「誰に借るものか、誰が貸して呉れるものか。皆なしてうちを蔑視つとりやがつて」菊代は船底で洩れ聞いた圓太爺さんの言葉を憎んで、村の人々にも憎みの刃を向けてゐたが、それにつけて、濱屋の土藏だの、金庫だの、と云つた爺さんの言葉も頭の中に響いてゐた。……濱屋の土藏や物置へは、年末の煤掃の手傳ひをした時や、平生でも屢々出入りして、その様子を彼女はよう知つてゐるのだ。

で、菊代は薄暗い船の中に坐つてゐながら、濱屋の母屋から離座敷、土藏や物置部屋の隅々まで、あり〱と目の前に浮べた。欲しい物は何でも心まかせに奪つて來られさうに思はれた。

「繁さん。その時になつてうち抛たらかしちや承知せんぞ。厭ぢやと云うても以前のやうに默つてお前を逃しやあせん。えゝ事でも惡い事でもお前は卷添になる覺悟になつて居らんせ—」

菊代はさう云つて、寢ころんでゐる繁松に夜着を被せて、後刻を期して、突出てゐる岸の上へ飛んだ。空はどんより曇つて生温い風が吹いてゐる。波に搖られてゐる一艘の傳馬船は彼女の目を惹いた。

時刻を忘れてゐたが、まだ宵の口なのか戸を鎖した家は少かつた。提灯を持つた老和尚や、浪花節を唄つてゐる三人連れの若漁夫などに擦違つたが、菊代から途を避けるほどの遠慮もしなかつた。皆なを敵として引受けるやうな氣持

になつてゐた。

「オ！　菊さんか。お母がお前を捜し居つたぞな。何處へ行つとつたならえ」と、ふとお今婆さんの聲がした。

「何處へ行かうとうちの儘ぢやがな」

菊代は濱通から脇道へ外れて、ところ〲に野菜を作つてゐる空地へ入つた。よく見廻しても周圍に人影は見えなかつた。自分の家の裏手へ廻つて、窓の側から石垣を攀ぢて濱屋の庭先へ飛上つた。母屋の廊下の雨戸は皆締つてゐたが、二階の障子にはまだ燈火が映つてゐた。

まだ時刻は早いし、何處へどうして忍入るのやら見當がついてゐなかつたので、菊代は半ば夢中で石段の脇の塵箱の中へ身を潜めた。

「お婆今そこから濱屋の庭へ誰か入つたやうぢやな」と、窓の側で物案じてゐたお夏が云つた。

「猫か犬かが通つたんぢやらうがな」

「うんにや、確かに人が入つたんぢや。そらまだ音がして居らあ」

お夏はさう云つて、直ぐに濱屋へ知らせようとして出掛けた

母親が下女のお松に話してゐる聲は、塵溜の中でもぞ〲してゐる菊代の耳へも幽かに入つた。はつきり聞取れはしなかつたが、菊代は水を浴せかけられるやうに吃驚して、慌てて其處を飛出した。母屋の潜戸が開いて、お松の持つた提灯の光は庭先を照らした。險しい石垣を無闇に飛下りかねてまご〲してゐる菊代の姿は、お松の寝呆眼にも見逃されなかつた。

「まあ、菊さんかな。そこでどないし居るのなら」お松はたゞ不思議に思ひながら、

「伯母さん、菊さんぢやないか。うちは今時分盗人が入る譯はないと思うとつたのに。伯母さんは寝呆けとるんぢやな」と、戸口を顧みて叫んだ。

「呆れたこつちや……」お夏はぞつとしながら庭に立竦まつた。

「菊はどうしたのぢや」濱屋の人達は皆な戸口に集つて、お松に手を執られた菊代の蒼褪めた顔を訝しげに見詰めた。

「狐にでも憑かれたんでせうぞいな」

お夏はさう言濁して、菊代の手を攫んで「さあ家へ戻れ」と引張りながら、とぼ〲と素足で川端を傳つて、自分の家へ入つた。家には豆ランプさへ點いてゐなかつた。

「お母はもう何にも聞きともない。氣疎や氣疎や……」

お夏は明日の日からのわが世の恐ろしさに戰いてゐた。この時にふと心に浮んだ姉娘のお初の影は、昨日までの思出にあつたやうな娑婆の何處かに生きてゐる姿ではなかつた。お墓の彼方から手招ぎしてゐるのだつた。背負籠の縄切や、上り口の上にある横木や、炬燵の踏臺やが、自分のために用意されてゐるやうに、彼女の心に浮んだ。

「菊は何を泣いとるんぢや、繁と喧嘩でもしたのか。明日仲直りをして、家へ連れて來て一杯飲ましやえゝがの」老婆はさう云つて、身を起して「おいらがランプを點けてやらう。眞闇ぢや仕様がない」とマッチを索つた。

窓の外では、濱屋の主人が提灯を持つて石垣の側を彼方此方検分してゐた。そして時々窓の方へも目をつけた。

死者生者

騒々しくつて埃もよく立つてゐるこの電車筋も、街燈の點く頃からは、外目には小瀟洒した涼しげな住みよささうな町として見られた。鬱陶しく繁つてしかも埃に汚れてゐる並木の櫻が、白い燈火を浴びて夕風にそよぐと、葉があをあをした色を帶びた。薄暖簾を垂れた碁會所には、團扇を弄びながら片膝を立てたりなど氣儘な身構へして、二三組四組の客が黒白を戰はしてゐる。その隣の玉突場には無駄口で賑はしながら紅白の玉を轉がせてゐる。筋肉の逞しい男達が汗みどろになつて、激しい柔道の稽古をやつてゐるのが鐵格子の間から覗かれた。こんなさまざまな勝負事を立見しながら散歩するのも夏の夕の一興であつた。見馴れない人々も親しげに思はれた。

玉突屋から二三軒隔てて理髪店があつて、その直ぐ隣が八百屋だつた。土間を二つに仕切つた斜面に並べられた野菜や果物は、夜目には殊に色取が美しい。バナヽだの枇杷だの夏蜜柑だのの甘酸ぱい匂ひが店先に漂つてゐた。魚屋や牛肉屋の汚い臭ひには自ら顔を背けても、果物の色や香りには食慾がそそられた。

仲通の方を本店にして此方は支店として、仕事は職人任せで、自分は監督役でをりをり見廻つてゐる床屋の隠居は、蒸暑い晩などには、使ひ古しの籐椅子を運んで表へ出して、隣近所の様子を見ながら、時々は寄つて来る近所の知人と世間話をしながら、風通しのない夕涼みを樂んでゐることもあつた。自分はペンキの臭ひが嫌だけれど、仕事場を塗換へたり、氣持の悪い風をおくる煽風機を備へつけたり、本店に劣らぬやうに支店をも綺麗に飾つて繁昌させて、次男が兵役から歸つて來ると、自慢して引渡すのを、今から思浮べては樂んでゐた。

床屋が綺麗になるにつれて、八百屋も次第に面目を改めた。際立つて變ることがないやうでも絶え間なき榮枯盛衰は此處等の商家にも現はれてゐて、何時も店先にくはへ煙管で頑張つてゐた胡麻鹽頭で厳い顔した藥屋の老人は、忌中と書いた札が出た後は、つひに姿を見せなくなつた。八百屋の看板の、八百清といふ屋號も何時の間にか、八百信と變つてゐるのに、ふと目につく散歩客もたまにはあるだらう。新しい棚が出來ていろいろな罐詰や壜詰が置かれた。以前よりも色艷のいい旨さうな上等物の水菓子が置かれてゐるやうだつた。代が變つたことと思ふと、家にゐる人間は以前から見馴れた顔だつた。薄い髪を櫛卷にしてゐる顔の割に身體の横幅の廣い主婦が田舎訛りで何か云つてゐた。ひどい反つ歯で色の赭黒い小柄な下女が以前のやうに其處で働いてゐるのが殊に目についた。二十を少し過ぎたくらゐな女盛りで、派手な浴衣に紅い襷を掛けて、笑つてゐるやうな顔してゐても、生地の醜さは隠されなかつた。で、通りすがりの縁のない人からでも、をりをりは侮蔑の目を向けられた。

「でも一生懸命に働くと見えて前とは綺麗になつた。初めて見た時にはまるでお化見たいだつたが」と、床屋の隠居も獨りでさう思つてゐた。

一

八百屋の下女のおてつは影日向の差別なく素

直によく働いてゐた。妹は食堂のあるお屋敷に奉公してゐるのだが、姉の方はさういふ處では勤まりさうにないといふ標緻の考へから手足を働かせさへすれば事の足りるやうな處ばかりを渡つて來た。が、おてつは何處へ行つても居たゝまれぬほどの不平を抱いたことはなかつた。怒鳴りつけられても打たれても涙の出るやうな思ひをしたことはなかつた。この八百屋ででも最早一年あまりも安い給金で激しい仕事を辛抱した。家で下女の勤めをする外に御用聞にまでやられた。雲南坂の奥の方にたつた一軒離れた得意先の勝手口へも毎日御用聞しなければならなかつたので、雨の降る日には足を踏折つて籠を抱へて、傘の重みに難儀することがあつた。見掛けは頑丈な體格をしてゐても、よく酸つぱい汁を吐いたり腹下しをしたりするので、そんな時には力が拔けて歩きづらかつたが、自分から一日でも休むことはなかつた。

「親方の御機嫌が悪いんだから、私が代りに一人で廻つて來るのよ」と云つてゐた。去年おてつが來た時から前の主人は高い熱を出して兎もすると床に就き勝ちだつた、買出しに行つて來ると、おつ傍でせい／＼息を切らしてゐた。一晩、さだけやう／＼帰つて、これから商賣が自分のものになると思つてゐると、こんな目に會ふだもの譯はないと、主婦のおきくは寄しながら、いろ／＼な賣藥を買つて來て、お粥の外に厭がる牛乳をも飲ませてゐた。

「こいつを飲むと逆ついて氣持が悪い」

亭主の清吉は何を食べても腹に障るのにじれて、時としては女房にも當り散らした。近所の醫者に掛つてもはか／＼しい利目は見えなかつた。

「東京の醫者は薬代ばかり高く取りやがつていゝ加減な薬を呉れるんだから、幾ら飲んだつて役に立たねえ。おれはこんなものより大村さんの煎じ藥の方が利くやうな氣がするぜ」清吉は若い時分の腹痛が一度の煎じ藥で直ぐに癒つたことをふと思出して、矢も楯も溜らぬやうに、「あれはよく利いた。こんな西洋の藥つぱい水藥や何かよりや、あの苦い煎じ藥の方が腹の底へ滲込むから效能も早いんだ。お前が信濃に手紙をやつて至急に送らせるやうにして呉れ」

「東京から田舎へ、藥を頼むなんて逆さまごとだ」と、おきくは亭主の氣迷ひを笑ひながらも自分もその氣になつて、甲府在の亭主の従弟に宛てゝ葉書を出した。亭主よりもおきくの方が又字をよく知つてゐるので、平生よく信用してゐるのだつた。

「大村さんの煎じ藥が利かんやうなら、おれの病氣は當分直る見込みはないかも知れん。直らないとすりや、おれもいつそこの商賣を思切つて、綺麗に讓渡して、田舎でゆつくり養生して、死ぬにしても生れ故郷で死にたいと思ふよ」

清吉がやゝもすると故郷の家と人とを話に出して、あれほど熱心であつた今の商賣を厭ふやうになつたのを、おきくは不甲斐なく思つて、默つて聞流してばかりはゐないで、時としては手嚴しく叱りつけた。

「田舎に歸つて用事があるわけでなし、誰もお前を待ち焦れて私達を待つてゐやしないよ。彼地へ歸つたつて、その身體では仕事が出來やしまいしね。第一出て來た時の事を考へると、見窄らしい樣をして私は歸る氣にやなれないやね。村雨傘を背負つて、隣近所へ大きな顏でも出來るやうになつたら、そりや私だつて甲州の山の中へ引込む氣にならうけれど」

「おれの辛い苦しいが分らんから、お前は勝手なことばかり吐かしやがる。こんな商賣を何時やつたつてお大盡になれるんぢやなしさ。おれ

はこの身體ぢや大い事は持てない。張の湯を吸つても御先祖の土地で安樂に暮らしたいぜ。おれが足腰が立たなくなりや、お前だつて氣樂なことを云つちや居られまいがな」

「なあに、お前さんが一月や二月休んでゐても、私一人で結構やつて見せるわな。自分で買出しにも行くし、車でも曳いて來らあね。どんなことになつてもこのまゝで凹みやしないよ。意地づくでもやり通さなければ私にや寢醒めが惡いだでた」

「おれは懶けるんぢやない」

清吉はつけ〳〵といふ女房の言葉を聞倦んで、自分の苦しいのが相手には分らぬらしいのを抵牾かしく思つてゐた。もつと優しくいたはつて呉れて、自分が痛みを感じた時には女房の方でも痛いやうな目顔をして呉れるのが至當だと思つてゐるのに、自分の側でさも旨さうに味噌汁を啜つたり、舌鼓を打つて四杯も五杯も溫かい飯を食べたりしてゐるので、清吉は忌々しくなつてならなかつた。

「お前さんほど耐へ性のない人はないよ」と、これほどの病氣を無造作に思つてゐるらしい女房の心を憤つて、側の茶碗を取つて庭へ投げたこともあつた。

二

おてつは此處へ來てから間もなく、病人の不意の差込に手當をするため、主婦の命令で夜遲く隣の床屋へ湯を貰ひに行つた。最早店を仕舞はうとしてゐるところで、職人どもは訝しげにおてつを見入つた。

「どうも濟みませんですけど」と譯を話すと、

「へえ〳〵幾らでも持つてらつしやい、殘りものだから」と脊の高いのが茶化すやうに云つて、麥酒の空罎へ一杯鐵砲風呂の湯を詰めて呉れながら、

「昨夕夜中にも親方の加減が惡かつたのですかい。私が便所へ起きた時分にお隣ぢや燈火を點けて起きてゐたやうだつたね。主婦の聲も聞えとつた」

「私は二階に一人で寢るから些とも知らなかつたのよ」

「ぢやおれ達とお隣同士だね。一昨年だつたか、占ひの爺さんが室借しとつた時には、夏の中は兩方で窓を開放して、よく話をして居つたよ」と、脊の高いのが脊の低い職人に向つて云つた。

「僕は先日の朝一寸覗いて見ただけだが、隣の二階には疊も敷いてなささうだね」おてつが出て行つてから、脊の低いのが云つた。

「あゝ。易者の爺さんは面白い人で、慾無しで賭なんかよくやつたものだ。角力が好きでね。なに見に行きやしないんだがね。夏場所十日間は毎晩商賣から歸ると、翌日の取組の賭が始まるんさ。此方が先へ寢てると、あくる朝屹度店へやつて來て、十日間一日も賭を缺かしたことはなかつたね。易者だつて駄目だ。始終見込を外してゐるんだから」

「どんな上手な易者でも自分の事は分らないものだとさ。……さう云へば、お隣の病人は長くは持たないぜ。胃だらうつて豊さんが云つてたよ」

「不斷粗い物ばかり喰つてるから病氣になるのさ。易者の爺さんがさう云つてたが、そりや酷いんだつてよ。あの主婦は慾にかけちや恥も外聞も構はないのだからね」

「他人事ぢやない、誰しも不斷の食物が肝心だあね」

二人が戸締りをして仕事場の火を消して、野猿梯子を踏んで、二階へ上ると、小僧の邦太は隅つこに小さい頭を出して眠つてゐた。微かな鼾をかいてゐた。

「僕等の床をのべてるから感心だよ」

「邦公、おべつかをつかつてやがるな。今から根性がませてゐていけない。君が拳固を喰はせかけたから、御機嫌を取るつもりでこんな眞似するんだよ」

「でも可愛いぢやないか」

二人は毎晩の話の種にしても話し飽かぬほど樂みにしてゐる愛宕下の馴染の賣女のことも、今夜は口に出さず、親方の蔭口を利かないで、寢床に就くと正體もなく眠入つてしまつた。

おてつは湯の入つた麥酒罎を主婦に渡して、ふら〳〵と介抱の手傳ひをした。が、病人の疼みは薄らがなかつた。先日から飲みつゞけてゐる田舍の漢法醫の煎じ藥は一時は病人の氣休めになつてゐたが、今夜は何の利目も見せなかつた。

「上田さんに來て貰はうかね」と、主婦は止切れ止切れに診せてゐる近所の醫者を呼ばうとしたが、

「遲いから、明日まで我慢しよう」と、病人は冷汗の滲出てゐる身體に力を入れて、齒を噛ひしばつた。

「我慢が出來りや、上田さんなんか呼ばない方がいゝよ。あの人は一時のがれの誤魔化しだから。それよりやその中に評判のいゝ病院へ行つてよく診て貰つて緩くり治療することにしたらいゝだらう」

夜中に醫者を叩起してはいゝ顏をしないだらうし、往診料だの何だのと無駄な入費がかゝるのだしと、主婦のみか病人自身でも念頭に置いてゐた。

「折角煎じたのだから、もう一口飲んで御覽な」

「苦くつてとても飲めない」病人は苦い汁を髯の延びた顎へだら〳〵と滴らしてゐた。そして、右へ左へぬたうちながら呻いてゐたが、やがて、

「おれは二階に寢たいから蒲團を持つて行つて呉れ」と身體を持上げた。

「何を云ひ出すんだね。動いちや惡いだらうによ」

「寢床が變つたらいくらか氣持がよくなるかも知れない」

「そんなことがあらすか」と、おきくはふと甲州訛りを出して叱つたが、病人が強ひて望むので、おてつに夜着を持たせて、自分は病人を介抱しながら二階へ連れて行つた。天井は低いし、掃除など行屆かないので、黴臭ひ臭ひがして氣持が惡いだらうのに、病人は其處に寢倒れて暫らく呻いてゐた。

おてつは壁際へ自分の寢床をのべて眠つた。

「お前も寢ろよ。もう大分よくなつたから」と、病人は女房にも二階へ夜具を持つて來るやうに勸めた。

「氣が利かなくつても、おてつが來てくれてから、おれは餘程氣丈になつたぜ。どう云ふものだか、おれはこの頃は夜中に目が醒めた時に、誰と云ふことはない知つた人間を思出すんだ。三人でも四人でも知つた者が側に寢てゐてくれゝばいゝと思ふことがあるよ」

「病氣のせゐだか、お前さんも次第に妙なことばかり考へ出すよ」おきくは怠い笑ひを浮べて、「それで二階に寢る氣になつたのかい。おてつの側に寢るのがいゝの。病氣するとそんな好奇なことが考へられるのかね」と冷かすやうに云つた。

「それはさうぢやない」病人は眞面目に打消して、不斷望んでゐることを口には出さないで、竊かに思ひやつてゐた。……一日も早く稼業を止めて、親類縁者の住んでゐる田舍へ歸つたなら、身體にもいゝし、どれほど心丈夫になるか知れないと、日ましに思慕つてゐるのだつた。

幾らも命は持つて居れまい。……こんなに患つて生れ故郷を懐かしんで歸つて行く自分を、古馴染の人達が見殺しにすりやしない、昔なじみに親切にいたはつてくれさうなものだ。女房だつて實家に氣を取られてゐるから、おれの看病を十分に勵んでくれないのだ……

おきくは不承々々に夜具を運んで來て、病人と下女との間に横はつて、今まで我慢し切つてゐた眼を閉ぢると、おつつけ二人揃つて合はせて暗い燈をかき消した。清吉は獨り目を醒ましてゐながらも、二人の寝息を手頼りとしてゐた。が、痛みが薄らいで來ると、自分の手だの足だのの目に立つほどの衰へが涙ぐまれるほど悲しくなつた。一度々々の激しい痛みに左程、肉の削がれて行くのを自分で撫でて見ながら、傍の二人の女の憎いほど肥つてゐるのを羨ましがつてゐた。そして、女房が田舎行を承知しないとすると、信造をあの男の望み通り此方へ呼寄せて、自分の代りにこの商賣をやらせようかと心が折れて來た。先日からおきくも頻りに望んでゐて、親切ごかしに話を持出してゐるのを、自分の手傳ひをさせてゐる間に、横取りせられはしないかと氣を廻して、何時も話を遮つてゐたのだつたが、今夜のやうな心細い思ひをする時には、信造でも誰でもこの家にゐてくれる方がよかつた。人手があればおきくももつと自分の介抱に身を入れて呉れるかも知れない。……

さう決心がつくと、直ぐにさう云つて女房を喜ばせたくて、「きく、きく、」と聲を掛けたから、足を伸して女房の腰を突いた。が、熟睡に落ちてゐるおきくは何とも感じなかつた。幾度も強く突くと、足を避けて口の内で何やら寝言を云つた。「同じ食物を食つてゐながら、おれが次第に痩せるのとあべこべに、此奴はどうしてかう身體の何處から何處までもぶく〳〵と肥るのだらう」と、足の指先で相手の皮膚を撫でて樂んでゐたが、すると、田舎で子供の時分に、おきくが女だてらに川で泳いでゐたことが思出された、男の子に負けないやうに泳ぎも上手だつた。

「あゝ吃驚した。何をするんだね」おきくはふと夢を破られて頓興な聲を出した。薄ぶつたランプの淡い光は病人の青褪めた微笑を照らしてゐた。

「お巫山戯でないよ、明日も早く起きなけやならないんだからね」と云つて、おきくはくるりと背を向けて、頭を枕に落した。

「お前に聞かせることがあるんだ。……些との間起きとれよ」

「もう遺言なんか聞かないよ。私は明日の朝の仕事があるんだから、お前さんの遺言道樂のお相手にばかりなつちやゐられないよ」

「馬鹿。お前にもつと樂をさせようと思つてるんぢやないか。おれもどちらつかずで愚圖々々しとつても仕様がないから、信造を呼寄せようかと思つてゐるのだ」

「本當にその氣になつたのかい」

おきくは振返つて寝呆眼で病人をちらつと見たが、そのまゝ目を瞑つて快い眠りをつゞけた。清吉は飽氣ない思ひをして、今自分が云つたことを考へ直してゐたが、人手を借りないで二人で汗水滴らして稼いで、日々の上り高を計へては讀み合つてゐた昔の夜が懐かしくなつて涙が流れた。

三

信造は一月も立たぬ間に、肥桶の臭ひを落して、角刈頭のきび〳〵した目鼻立ちの、八百屋の御用聞などには惜しいほどの若者となつた。主婦に熱心に仕込まれて獨りで買出しにも行けるやうになつた。自轉車の稽古もはじめた。た

まには骨休めに近所の活動写真や浪花節にも出掛けたが、そんな時には主婦かおてつかが案内に立つた。

「今日は信ちやんと葵館へ行くのよ」なとと吹聴して、おてつはよく床屋の職人に揶揄はれた。

「羨ましいね。あんまり見せつけるものぢやないよ」

「私ね、活動は飽き〳〵するほど見てるんだからさう面白くはないのだけど、信ちやんは田舎から来たばかりだから、そりや面白がつて見てるのよ。私ね、寝る前にはいろんなことを話して聞かせるの」

「今に二人で世帯を持つて別に商売でもはじめるんだらう。僕等も信ちやんにあやかりたいものだね」

「人を馬鹿にしてるよ」

おてつは揶揄はれたいために、時々職人の手の空いてゐる時には、戸口に立つて笑顔を見せたりもした。

床屋と懇意になると、おてつは色の青白い目のはつきりした可愛らしい[illegible]か、手足[illegible]しこき使はれてゐるのを[illegible]に思ふやうになつた。[illegible]に白い清潔な[illegible]

仕事の手傳ひをやつてゐる邦太は、二人の職人から不斷荒い言葉をかけられるばかりでなく、兎もすると、首筋を摑まへて小突き廻されたり、頰ぺたを殴られたりした。

「バリカンは齒で消毒だけしときやいゝよ。お前なんかが下手にいぢるとまた壞れるぜ」客の耳の穴をほじくつてゐた一人はさう云つて、横目で邦太の方を見てゐたが、やがて、「そうら云はないこつちやない」と云ふが早いか、耳搔を持つたまゝ邦太の側へ寄つて、バリカンを取つて、「高木さん、また齒を壞したよ。……螺旋を狂はせてしまふ。幾度云つても聞かないんだな」

邦太は頭の天邊を拳骨で一つ二つ突かれた。が、彼れは目蓋に涙を湛へて、器械の先を見入つてゐた。

そこへ、親方が秋草を生けた花瓶を持つて奥から出て來ると、かの職人は口を尖らせて大袈裟に知らせた。「邦、親方に謝らないか。戯談ぢやないぜ」

「どうも濟みません」邦太は指圖通りに云つて頭を垂れた。

「此奴は少し生ちやんだからね」親方は花瓶の置場に迷ひながら輕く云つた。

「本當に強情だよ。何が面白くつて[illegible]りをするんだね。お前達に器械は有りやしないよ」

「本店にゐた時にも吉の奴と二人で電氣の球の中の針金を壞したことがあつたよ」親方はそんなことを云つて職人に跋を合はせてゐたが、やがて手を洗つて奥へ入つた。

高木と呼ばれた脊の高い職人は先きから默つて顏剃りをやつてゐたが、仕事が濟むと、鏡臺に置かれたバリカンの齒を意地惡い目付で眺めてから、突如に邦太の頰を平手で二つ三つ續け打ちにした。先きの拳骨とは異つてピシャッと勢ひのいゝ音を響かした。

「馬鹿ッ。惡戯をさせに連れて來たのぢやないぞ」言葉は後から出た。

邦太は首を縮めて目をぱち〳〵させた。涙が目蓋に浸出た、が、疼みが去ると元の通りけろりとして、表を通る自動車を[illegible]に眺めてゐた。

おてつは通りすがりにちらとこの打擲の様を隙見したのだつた。そして、暫らく立留つて呆氣に取られてゐた。何故あんな可愛い兒を惨い目に合はすのだらう。家の主婦でさへ私を打つたり罵つたりしたことは一度もないのにと、

自分の弟の虐げられるのを見たやうな腹立たしさを、脊の高い職人に向つて感じた。

で、あくる日の午過ぎに、本店から親方が連れて來た子供を乳母車に載せて遊ばせてゐる邦太に會ふと、

「昨日はどうしたの。痛かつたらう、あんなに打たれちや」と慰めてやつた。

「……」邦太は小鼻をぴくつかせて、ふゝんと笑つて答へなかつた。

「あんなに邪慳にされて、お前さんは辛抱がいゝわね」

邦太はこの女の言葉や乳母車の子供の泣聲には氣を留めないで、電車や自動車の街上の騷々しい物音に心を取られて、のろ〳〵櫻の木蔭を歩いてゐた。自轉車に乘りたいと彼れはかねて望んでゐたので、自轉車を輕妙に馳せてゐる人間を屢々羨ましさうに見送つた。八百屋の御用聞にでも牛肉屋の小僧にでも、自轉車に乘れる家に使はれた方が、床屋で働いてゐるよりやどれほど仕合せであるか知れないと、彼れの子供心にもそれ一つが儘にならぬ浮世として、時々思出されたのである。

何氣なしに琴平の宮の前まで乳母車を押して行つた。嬰兒の泣聲があんまり烈しくなると、邦太は手で口を蔽うて叱りつけたりした。薄い毛を頂いたこの嬰兒が顏をくしや〳〵させて泣く有樣は、醜い厭らしいものとして彼れの目に映つた。で、賺して泣止まらせようといふ氣にはなれないで、自分が高木などに打たれるやうに自分もこの子をピシャ〳〵打据ゑたいやうな氣がした。柔かい耳朶を引張つたり、鼻をいぢつたり、頬ぺたを抓つたり、嬰兒を玩具みたいにしてゐると、犬や猫を弄んだり、機械いぢりをしたりする時よりも、餘程いゝ氣持であつた。

で、往きにはあたりをきよろ〳〵見ながら機械的に乳母車を押してゐた彼れも、歸りには屢々珍らしさうに嬰兒のふは〳〵した肉付に指を觸れて樂んだ。弄ばれると、嬰兒も何時かへら〳〵微笑を洩らした。都の埃は立つてゐても、爽かな初秋の風は二人の頬に觸れてゐて、邦太は久振りにいゝ氣持で店へ歸つた。

「邦ちやん」と、その後おてつが會ふたびに親しげに聲を掛けるのを、邦太は一度も返事をしないで訝しげに見てゐた。そして、側へ寄りつかれると、女臭い臭ひが鼻を衝くのが厭さに、直ぐに避けるやうにした。が、時々嬰兒の守をさされる時には、今まで知らなかつた愉快を感じ出した。涕や涎を滴れた顏は汚いけれど、柔かい肉の塊りであるこの子の手でも耳朶でも頬ぺたでも、恣にいぢり廻し小突き廻すのが、次第に彼れに不思議な快感を與へた。で、乳母車で近所を曳き歩くよりも、抱いたり負つたり、二階などへ連れて行つたりして、玩具にしてゐることもあつた。

「守をさせに來させたのぢやないぜ」職人は忙しい時には忍び音で怒鳴つた。

四

「矢張信造に來て貰つてよかつた」清吉は、絞りの三尺を締めて、矢立と烟草入とを腰の左右に差して、出て行く信造の後姿を見入つて、賴もしげに云つた。

「さうとも。あの人はもう田舍なんぞへ歸る氣は些ともない。どうしても東京で仕上げて家を持ちたいと云つてるんだから、こんな商ひでも身を入れてやつてらあね。お前さんさへ元のやうに丈夫になりや、どし〳〵面白い商賣が出來るんだよ。おてつなぞに廻らせといたんぢやいゝお得意は取れつこはありやしない。尾張屋ぢや先月には店の商ひを別にしても、千圓から入つたといふぢやないかね。値が高くつても店

が立派だとあゝ盛つて行くんだもの――尾張屋にてつ張らうたつておれ達には及びもつかないや」清吉は興もなささうに云つた。稼業が可成りに榮えて日々の生活に障りのないのは元より有難いことだが、それよりも信造が實の弟も及ばぬやうに大切にして呉れるのが悅しかつた。「信造にしろおてつにしろ、些とも惡氣のない人間だからいゝよ」

「おてつも使ふには重寶だけれど、この頃は妙だよ」おきくは冷笑を洩らして、小唄か何か口ずさみながら洗濯をしてゐるおてつを横目で見ながら、小聲で、「お前さんは氣がつかないのかい。あの女がいやに身のまはりを構ふやうになつたよ」

「さうかい。歳が歳だから無理はないさ」

清吉は寢床の上に胡坐を搔いて、窪んだ目でおてつの方を顧みたが、信造が來てからおてつの樣子が變だと譯ありげに云はれると噴出した。

「まさか。……お前はそんなことに氣を廻す女ぢやなかつたがなあ」

「さうでないにしても、若い者二人を二階に寢かすのはよくないと思ふよ」

「だつて外に寢かすところはないぢやないか。おれ達が二階に寢て、あの二人を階下へ寢かしたつて同じことだしさ」

「お前さんは目敏いんだから、夜中にでもよく氣をつけといでな」

おきくがまことしやかに云ふのを、清吉はうんうんと素直に聞いてゐたが、さういふ色つぽいことに思ひを馳せると自分の息までが臭いやうな氣がした。

「いくら物好きでもあの女ぢやあね」と力のない笑ひに紛らせて、寢床に横はつた。

が、おきくは初めの中は心に掛けなかつた夜の二階から、この二三日は頻りに面白くない思ひをさゝれることがあつた。夜中にふと變な夢などから目醒めた時に、鼠の音だの寢言だのに胸騷ぎさゝれることがあつた。いくらお化見たいな顏をしてゐたつても、若い女と男とを一つ部屋に寢かしといては、どんな間違ひが起らないとも限らないと案ぜられ出した。おてつが湯上りなどに白粉や香油をつけたりするのは厭らしくて、つい冷かしたくなつたが、おきく自身、亭主の長患ひにかまけて汚れ次第に身裝ふりを構はないでゐるのが省みられた。

おてつとは僅か五つしか歳が違はないのに、頭の髮をたゞの一度も滿足に結はないで、手足を荒らしてばかりゐるのが多少氣に掛らないではなかつた。鏡に映る自分の顏が歳よりも老けてゐるらしいのが、今更のやうに目立つた。

で、三日置きぐらゐに風呂屋へ行つたものが、隔日かあるひはつゞけて通ふやうになつた。久振りで薄い髮を洗つて髮結ひの手を借りた。

「主婦、私は一度島田に結つて見たいわ」と、おてつは主婦の頭を見詰めて、ひそかに髮の毛の濃い自分を誇つて、島田に結つたならと、自分の影を幸福に描いてゐた。

「島田にでも女優卷にでも好きなやうに結ふがいゝさ、お前さんにはよく似合ふだらうから」

おきくは揶揄つたが、おてつの髮を結ふ餘裕など與へるどころか、自分のしてゐた臺所仕事も大方はおてつに働かせた。病人の肌着でも下帶でも自分のまでも、おてつに洗濯させるやうにした。汚らしいくらゐ何でもなかつたけれど、主婦が身仕舞に氣を取られ出してから、前よりも仕事が忙しくなるのがおてつにはつらかつた。

「そんなに働いてゐて、お給金がたつた一圓五十錢なの。もつと上げて貰つたらいゝぢやないかね。お前さんのやうな人を私の家でも搜してゐるんだから。正直でよく働いて呉れる女中

はなか〳〵見つからないのだよ」と、下女に出られて困つてゐる川瀨さんの奧さんが唆かすやうに云つた。
「何處へ行つたとて同じことだから、馴れた處に居ついてるのがいゝつて、お母さんが云ふんですよ」
「お給金を溜めてお嫁入の支度をしてゐるのだらうね」
「私なぞ無器量だから誰も貰つて呉れやしませんよ。一生獨りで通すつもりなのよ。その方が結句氣樂でよ御座んすわ」と云つて、おてつはへゝゝと笑つて迷ひもしなかつた。
　二階に信造と寢床を並べてからは、おてつののろい神經もいくらか鋭敏になつて、今まで氣に留めなかつた周圍のことが、多少痒くも痛くも感ぜられ出した。そして、時々は信造に向つて話した。
「家の親方は病院へ入院したらいゝだらうにね。少々お金がかゝつても、早く直して稼いだ方が得だらうと思ふよ。信ちやんがさう云つて勸めるといゝわ。私でさへたまにはお腹の疼むことがあるんだから、親方はあゝ痩せるまでには隨分疼みが酷いんだらうと思ふと氣の毒でならないのよ」と、他人の疼さを感じたりした。
「なに、また直る時が來たら直らあ」信造は卒氣なく云つた。日が經つにつれて、おてつなぞと親しく口を利きたくなくなつてゐた。二階へ上るや否や、寢床へ入つて直ぐにぐつすり眠るやうにしてゐた。
「でも出來るだけのことはして上げたらいゝだらう。親方はこの先き長かあないやうに私には思はれるよ。親方が死んだらこの家はどうなるのか知らん」
「どうなるのかなあ。おい等にや分らないが、死ぬるなんて緣起でもないことを云ふなよ」
「さうしたら信ちやんがこの店を貰つて商賣をするんだらう。親方が先日主婦にさう云つとつたもの。信造に此家を讓つてお前は田舍へ歸れつて、先日遺言見たいなことを云つてゐたよ」
「おい等は一生八百屋稼業をやるために東京へ來たのぢやないや。へゝんだ」と、信造は相手を見下げたやうな目付口付をして、戲れに威張つて見せた。
　凜々しい口調や體格はおてつを刺戟して昂奮させた。「本當だわ。お前さんは八百屋の御用聞なんかにや勿體ないわ」と、心からさう思つて云つた。「ぢや、何になるつもりなの」
「藥屋や質屋の番頭さんも坐つてばかりゐるんぢや氣づまりで厭だし。……おらあ先日から自分に似合つた東京の商賣を氣をつけて見てゐるのだが、自動車の運轉手になりたいなあ」
「だつて危いぢやないの。人でも殺して御覽なね」
「おいらあ自分で自動車に乘れる身分にやなれつこはないんだから、せめて運轉手になつて東京中乘廻して見たいなあ。俥夫は御免だし、自轉車もあんまり面白いものぢやないや」
「信ちやんも醉狂な人だよ。もつと地道な商賣をしようとは思はないのかね」
　ふと興に乘つて二人の聲が高くなつたが、すると、階子段の方から尖つた聲が聞えた。
「騷々しいぢやないかね。階下には病人が寢てゐるんだよ、分らないのかい」
　階子段を中途まで上つてから叫んだおきくは、それだけでは飽足らなくて、階上まで上つて行つた。二人は寢衣のまゝ立竦んでゐた。おきくは迂散臭い目付で男女を見比べたが、おてつのにや〳〵笑つてゐる顏付は小癪に觸つて溜らなくつて、
「さつさと寢たらいゝぢやないかね。朝いくら呼んでも早く起きもしない癖に」と、つつけんど

んに云つた。

「ぢや目醒し時計を私の枕許に置いといて下さいな。主婦より早く起きますから」

「生意氣お云でないよ。……お前は餘計なお喋舌なんかしないで、自分のすべきことをちやんとしさへすればいゝんだよ」

おきくは相手が自分の前で恐入つてゐないのが、この時無闇に腹立たしくて、「默つて寢ろつたらお寢よ」と、おてつの肩に手を當てゝ押倒すやうにした。先きから夜具を被つて目を閉ぢてゐた信造は、おてつがどんと寢倒れる音に薄目を開けて顧みたが、すると、主婦が此方へ怖い目を向けてゐたので、慌てて寢返りをした。

「階下には病人がゐるんだから、些とは遠慮してをれ」と、おきくは念を押して階下へ下りた。

夜が更けたと云つてもまだ終電車の通るには餘程間があつた。隣の床屋の職人は二人で俄かに思立つて、[illegible]に言含めて置いて家を忍び出た。「少しの間だから成るべく起きとれよ」と言附けて、八百屋のと向ひ合つた二階の窓を開けさせてゐた。

市中であつても蟲の音が彼方此方に聞えた。[illegible]は窓に凭れて居睡りをしながら、月に一度か二度は吩附けられる厭な役目を守つてゐたが、隣の二階の物音には何となしに聞耳を立てた。

「喧嘩をしてゐるんだな」と面白がつたが、後はひそ／＼話になつて靜まつてしまつた。

五

晝間はさうでもないけれども、夜になつて亭主の側に寢てゐるのを、おきくは日に／＼味氣なく思詰めた。惡いと云ひながらも時々起きて店先へ出たり、信造などに指圖したりして、商賣に氣を紛らせてゐた頃は、その中には全快して、働き手揃ひで稼いで店も擴げる話などして、まだしも賴もしかつたが、寢床に就きつきりになつたこの頃の亭主の窶れた顏からは、將來の望みは何一つ得られなかつた。醫者も首を傾けてゐたが、とても助かる見込みがないとすると、東京へ死にに來たやうな亭主の不運が可哀想でならなかつた。せめて生きてゐる間だけは好きなやうにさせて大事にしようと思つてゐたが、眞夜中など譯の分らぬことをくど／＼云はれるのにはつく／＼悩まされて、早くこんな思ひから逃げられたらと、死ぬるものなら早く死ねと、むごい思ひが頭を掠めることがあつた。

胸が締めつけられるやうで、吃逆上げる苦しさを覺えた時には、病人はよく「南無阿彌陀佛」を續けざまに口にした。それが不明瞭な力のない聲で呟かれた。

「かう云つてゐると、いくらか氣が紛れる」と云つてゐた。

「何か外の事を云つたらいゝぢやないか。陰氣でいけないよ」と、おきくが顏を顰めると、

「外の事を云ふ氣にはならないよ。南無阿彌陀佛だと御利益があるかも知れないぢやないか。お前も神佛を拜んで呉れ。女でお前のやうに信心氣のないものはないぜ」

「家にや神棚もお佛壇もないから拜まうたつて拜めないよ。南無阿彌陀佛なんか聞いてても哀れでいけないから、何糞こんな病氣ぐらゐと元氣を出して御覽な。その方が餘程いゝよ。お前さんは病氣に負けるからいけないのだよ」

「お前は病氣をしたことがないからそんな思遣りのないことが云へるのだ」

泥色をした亭主の恨めしさうな目遣りはおきくにも凄かつた。その長くのびた爪で此方の胸へ飛びついて來さうに思はれて身震ひした。

「お前さんが望むのなら金毘羅樣へお百度でも踏むわよ。水垢離でも取らあね」

「さうして呉れるかい。明日の日にでも金毘羅樣へお詣りして呉れ」

「あゝ」おきくは氣休めに受合つたものの、眞面目に神佛へ祈願するやうなしをらしい心になれなかつた。東京へ來た當座一度遊びがてらに羽田のお稲荷樣へ詣つて、商賣繁昌を祈つて御供物を頂いた時には、何となしに御利益があるらしく思はれたが、かうも衰へた死相を帶びた亭主の病氣が、神佛の力で癒らうとはどうしても信ぜられなかつた。

「おれは後一年でもいゝから丈夫な身體になりたいぜ。おれの壽命が盡きとるのならお前の壽命を一年取つておれの壽命に足しをして呉れ。お前は長生をするだらうから、一年ぐらゐおれに讓るやうに金毘羅樣にお願立てをして呉れ」

「あゝいゝとも、二年でも三年でも」

「おれの云ふことを戯談にするんか」女房がいゝ加減にあしらつてゐるのを知ると、病人は心細くもあり腹立たしくもなつた。

「だつて困るぢやないかね。私の壽命を切取る譯にや行かないしさ」

「お前に親切氣がないからだ」

「そんな無茶を云ふもんぢやないよ。私は一日働いて眠くつてならないのに、かうして夜中に起きてるんぢやないか」

おきくも我慢しかねて荒々しく云つたが、すると、病人の窪んだ目には涙が溜つた。

「眠いくらゐが何だ。おれは今夜にも死ぬるかも知れんのに、お前は眠いくらゐがそんなにつらいのか」

「……」

おきくは例のやうに御機嫌を取らないで、頑なに口を噤んで目を背けてゐた。そして、病人が殊更めいた術ない聲して煮切らぬことを言出すのを聞いてゐられなくて、ふと寢床を離れて寢衣に細帶を締めたまゝ、臺所口から廻つて表へ出た。終電車も餘程前に通つた後で、周圍は寂靜まつてゐた。

薄着には冷た過ぎる夜風に吹かれてゐると、胸の蟠りが融けて生返つたやうな氣持がした。月は東京のやうな市街にでも照つてゐるといふことを今初めて感じたやうに空を見上げて不思議に思つた。……おきくは病人の臭い息のしないところでのび／＼と手足を伸ばして心まかせに休息したかつた。

「主婦、どうしたんです」蹲んでゐるおきくの後から、突如に聲がした。

「おや、今時分何方へ？」

「へゝゝ。……御病人は些とはよくなりましたかい」

「相變らずで困るんですよ」

「そりやいけませんね」

床屋の職人は二階を仰いで邦太を呼んだ。雨戸は開いてゐるのだが、寢込んでゐるのか返事がなかつた。例なら一人が連れの肩車に乘つて隣の廂へ飛びついて、窓から二階へ入るのだが、今夜は主婦に見られてゐるので、さうも出來なかつた。

「仕樣がないなあ」と呟いて、「邦、……邦公ッ」と聲に底力を入れて呼んだ。

女の所へ遊びに行つたのだなと、おきくは興がつて見詰めてゐたが、「私が二階から呼んで見ませうよ」と云つた。

「お氣の毒ですがさう願ひませうか」

「どういたしまして」おきくは笑ひ／＼云つて、「でも、朝まで家を空けないでちやんと歸つて來なさるから感心ですね。引留めたでせうに、さぞ」と些つと揶揄つた。

「そんなんぢやありませんよ」

「お二人とも色男だからね。油斷は出來ないよ。……ちよんの間の隱れ遊びつて面白いもの

ですつてね」

「主婦も口が惡いや」

おきくは珍らしく戯談口を叩いたのでいゝ氣持になつて自分の家へ入つた。そして、病人が何か云つてゐるのを見向きもしないで、いそいそ二階へ上つて雨戸を開けて、「邦さん」と二三度呼立てた。はては、屋根へ踏出して隣の窓の障子を開けて呼んだ。

「落ちたら大變だ。泥棒見たいだね」と、二人を見下して云つた。

邦太は眠呆眼をこすりながら窓から顔を出した。おきくは、「左樣なら」を云つて、雨戸を鎖したが、眠氣が去つて頭は冴えてゐた。先きからの物音にも夢を破られないで、おてつや信造は正體なく眠つてゐた。階下からは「おきくおきく」と呼んでゐたが、その聲を聞くと、おきくは階子段を下りるのが厭で溜らなかつた。階下の電氣の光を受けて、上り口が明るいばかりで、二人の寢姿はよく見えなかつたが、信造の男らしい深い息を聞いてゐると、そのきびきびした逞しい身體が闇の中にも描き出された。

おきくは素足で二階を彼方此方と歩いてゐた。二人の寢床の中へ割込んで眠りたかつた。

「おきく、お前は何をしてるんだよ」階下の聲におきくは眉を顰めて舌打ちした。返事をしないでゐると、暫らくしてふと上り口に亭主の顔が現はれた。階子段に足音の前觸れもしなくつて出拔けだつたので、おきくはぎよつとした。見馴れた亭主の顔がまるで亡者のやうだつた。

「先きから何をして騷いでゐたんだ」

病人はのそのそ上つて來たが、おきくが何か云はうとしても言葉が口から出ない前に、信造の足に蹴躓いてばつたり倒れた。

「危い……」

おきくは思はず叫んで、病人を擁抱いて、「ぢつと寢てればいゝのに。私は夜遊びから歸つた床屋の若い衆に賴まれて小僧さんを起しに來ただけだよ」と、邪慳に云つた。

「そりや餘計なおせつかいだ。外へ出たり二階へ來たり、おれが物を云つても返事もせんおぢやないか。おれが疼い目をしても、今に今死んでも、お前は何とも思はんのだな」

「もう澤山だよ」

おきくはこの瞬間、亭主でも何でもない只の亡者に取付かれてゐるやうな不氣味さを覺えて、持つてゐた手を離したが、すると、病人は齒嚙みついて、髮の毛をも握つて、「出て行きたきや出て行け」と怒鳴つた。

「何をするんだよ、この人は」

おきくは我武者に相手を突放した。寢床の間の騷ぎにやうやく目を醒ました信造は、譯が分らないので夢を見てゐるやうな氣で、マッチを擦つてランプを付けた。胸をはだけて裾も露はな大姉のしどけない樣は滑稽だつた。おきくから譯を聞いて、病人を慰めながら階下へ連れて下りたが、おきく自身容易に下りて行かなかつた。

「吃驚したよ。おいらの腹の上へ打倒れたのだもの」

信造は思出すと可笑しくつて溜らないやうに、おきくに向つて云つて、元の寢床へ潜り込んで、「姉さんも早く階下へお出でよ」と急立てた。

「さう追立てなくつてもいゝぢやないか」おきくは不承々々に階下へ下りた。そして、物をも云はずに夜具を引被つて、直ぐに鼾をかいてゐた。

六

「今日は」と、床屋の職人に朝夕の挨拶するたびに、おきくは意味ありげた笑みを送つてゐた

が、先方ではあまり取合はなかつた。そして、職人達は、いけ好かない主婦として蔭口を利いてゐたが、おてつから夜中の取組合ひの話を聞くと、それを誇張して考へて、寄つて來る近所の若い者に笑ひ話の種として吹聽した。

「主婦は毎晩二階へ匐つて來るのかも知れないぜ。お前さんは用心してゐないと信ちやんを取られるかも知れないぜ」と、職人はおてつを揶揄つたりした。

「いやな事云ふもんぢやないよ。信ちやんが聞いたら怒るよ」

おてつは眞に受けなかつたけれど、いゝ氣持はしなかつた。先日の晩夢現で見てゐた騒ぎも、さう云はれて見ると、疑ひを容れられないでもなかつた。信ちやんに聞く譯には行かないが、これから寢たふりをしてそつと樣子を見てゐようと企てた。

で、例は目を瞑りさへすれば直ぐに眠入られるのに、その夜は思詰めた一心から、夜明け前まで齒を喰縮めて起きてゐた。かうして起きてゐると、夜の長いことがおてつにもつく〴〵感ぜられて、信造の前後不覺に寢てゐるのが不思議でならなかつた。階下も靜かで何時まで立つても人の來る氣色はしなかつた。天井で鼠の荒れる音や、彼方此方で吠える犬の聲を聞きながら、夜中といふものはこんなにも寂しいものかと思つて、耳を澄まして退屈な時を過した。

あくる日おてつは居睡をしつゞけた。午過ぎに靈南坂のお得意へ品物を屆けて來た歸りには、どうにも我慢出來なくて、道傍のお寺の石段に腰を卸して、一しきりぐつすり寢入つた。搖起されて目を醒すと、巡査が前に立つてゐた。たゞ注意されただけで叱られもしなかつたが、頭を下げてお詫びをして家へ急いだ。

「何處をまご〳〵してたんだよ」主婦に劍突を喰はされたので、時計を見ると、短い針が最早四時を廻つてゐた。

二晩つゞけておてつは眞夜中まで睡を我慢したが、つひに堪へられなくなつた。病人の苦しさうな聲は時々聞えても、何時もよく眠る信造の側には別に異常はなかつた。で、安心して平生の通りに快い眠を樂んだが、しかし、以前よりは多少目敏くなつたのか、眞夜中にふと何かに脅かされたやうに目の開くことがあつた。

「信ちやんや主婦に暗いことは些ともないこと、」おてつは床屋の職人に向つて、一度躍起となつて辯護した。

「戲談だよ、そんな事のある譯はないやね」と、職人は笑ひ〳〵謝つた。

が、この戲談半分の噂も何時となしに、信造の耳に入つたので、信造は驚いた。根も葉もないことを云はれるのも口惜しかつたし、殊に病人に對して氣の毒でならなかつた。

で、「相談がある」と云つて、おきくを二階へ呼んで、

「姉さん、おいらは暇を貰うて故郷へ歸らうかと思つてるけんど」と少し顏を赧くして云つた。

「甲州の方に急用でも出來たのかい」

「おいらは矢張田舍で働いてゐるんが氣樂でいいと思ふよ。東京は口が煩さいでな」

「お前さんのことを誰か惡く云つたといふのかい。何だね、そのくらゐのことでさ」おきくはぼんやりある事を思つて笑つた。

「姉さん知つてゐるんですか。他の事とは異つて厭なこつたからな」

「お前さんも氣が弱過ぎるよ。おてつとどうかうつて、誰かに揶揄はれたのだらう」

「あの女なんざ」信造は吐出すやうに云つた。

「姉さんだつて知つたら厭になるに違ひないや」

信造が遠廻しに微見かすのを、おきくは興ありげに聞いてゐた。「馬鹿にしてるよ」とにつたり笑つて、

「あまり馬鹿げて怒られもしないぢやないかね。そんな詰らないことを氣にして田舍へ行つちまふつてことがあるものかね。却つて變に思はれるわね」

「おらあ大將の病氣を心配して、御利益がありや鹽斷ちでも穀斷ちでもするくらゐに思つてるのに」

信造は昂奮して云つたが、相手が噂などにさして驚いてゐないのを見ると、彼れの若い心にも多少の安易が得られた。

「初めから來て呉れなきや兎に角、今になつてお前さんに出て行かれちや、この商賣は今日が日から止めつちまはにやならないよ。それに、私でさへ見窄らしい樣をして故鄕へ歸るのは死んでも厭だと思つてるのに、お前さんは此方で何も出かさないで、のこ〳〵歸つて行く氣になれるのかい」

さう云はれると、信造は自分が輕はずみに過ぎたことや意氣地なしに見られることが恥かしくなつた。そして、主婦と差向ひでゐるのが極まり惡くなつて目を外した。今まで夢にも思つてゐなかつたことで心が濁らされた。

「本當に力になつてお呉れな。私はどうしてもやり通すつもりだから、信ちやんに味方になつて貰はにや困るよ」おきくは含羞んでゐる信造を見守つて、「病人は無理ばかり云つて私をいぢめるし、信ちやんにまで愛想をつかされちややり切れないよ。……他人がどんな噂を立てようと關はないぢやないかね」

「……」信造は話を外すために、病人は東京の評判の醫者に診せて、入院したのがよければさうしたらいゝぢやないかと、生眞面目に注意した。

「私も以前よくさう云つてゐたのだけど、當人が病院へは行きたがらないんさ。上田さんの見立てぢや、どうしたつて助からないらしいから、當人の云ふやうにして樂に息を引取らせたいと私は思つてるんだよ。あの身體ぢや俥にも乘れりやしないし、ぢつと寢かしとくのが何より藥なのさ」

「癒る見込みはないのかね」

平生をり〳〵話合つてゐる病人の容體話は、つまり同じ言葉の繰返しであつて、何方にも以前ほどの熱心は消えてゐた。

「私は半歳の餘も介抱してゐるんだもの。根も盡きちやつたよ。こんなお役目はもうそろ〳〵切上げて貰ひたいものだね」

「主婦、親方が呼んでゐますよ」

おてつの聲におきくは又かと憎々座を立つたが、信造は居づらい席から救ひ出されたやうな氣がした。

が、頭に雲が懸つたやうで、それからは病人や主婦の顏を平氣で見てゐる譯に行かなくなつた。二十二のこの歳まで女といふものを知らなかつた信造には、噂を立てられただけでも啻ならぬ身の上の事件だつた。

七

主婦と一つ膳で食事をしてゐる時でも、病人の看護をしてゐる時でも、信造は日に〳〵無邪氣さを失つてゐた。そして病人の窶れた姿を見てゐると、理由のない恐ろしさが感ぜられた。窪んだ鈍い眼で見られるのが凄かつた。病人は、

「おれは頭を剃りたいから床屋へ連れて行つて呉れ」と、信造を招いて云つた。

「動いても惡くなけりや連れてつて上げるけれど」

「なに、惡くなつても構はん。おれはくる〳〵

坊主になりたいよ」
「さう伸びてゐちや氣持が惡いだらうな。一分刈りにしたらいゝだらう」
「いや、おれは髮が伸びて煩さいから刈りたいのぢやない。坊主になりたいんだよ。佛樣のお弟子になつたつもりで居りたい」
胸苦しいをり／＼南無阿彌陀佛を呟いてゐたためかと、信造は可笑しく思つて、頭を剃つて氣が晴れるものならそれもよからうと同意して、肩を貸して土間まで連れて來た。店先には明るい日が差してゐて、そこらに並んだ色さま／＼の水菓子や野菜物は、病人の目にくら／＼と映つた。
「大丈夫かい」
信造はさう云つて、下駄を穿かせようとしたが、骨と皮になつた足は下駄の重みにさへ堪へられなかつた。表を通りながら此方を顧みて額を顰めた者もあつたが、そこへ歸つて來たおきくは、
「何處へ行くんだね」と血相變へて叫んだ。そして信造から譯を聞くと、「お前さんにも呆れるよ。病人が何と云つたつておいそれと外へ連れ出すつてことがあるものか。轉んで怪我でもしたらどうするんだよ」と、二人を叱りつけて、病人を抱へて元の寢床へ運んだ。
「床屋なぞへ行つて病氣が惡くなつて御覽なね、私の所爲にされるよ。これだけ氣をつけてるのに、お前さんを粗末にしたやうに思はれちや割に合はないからね」
「ぢや、お前がおれの髮を剃つて呉れんか」
「私に剃れるものかね。何を云ふんだよ。坊主になるなんて緣起でもない。もつと氣分がよくなつた時に床屋の若い衆に來て貰つて刈つて貰へばいゝぢやないか」
「どう云ふ譯だか自分でも分らないが、おれは坊主になつたら氣が安まるやうに思はれ出したのだ」
病人は今結つて來たらしい女房の髮を見入つて、「お前に親切があるんなら、おれと一緒に頭を剃れ。お前が尼になつて其處にゐて珠數をつまぐつて呉れゝば、今にでもおれは安心して死ねるのだぜ」
「私が尼になつたらよく似合ふだらうね」おきくは危く噴出さうとしたが、白目を寄せて見上げてゐる相手の額を見ると、自ら笑ひは留つた。「坊主頭ぢや店へも出らりやしないよ。人が狂人だと思ふよ」
「狂人と思はれるのが何だ」
病人は恨めしさうに云つた。自分の心持がどうしても女房に呑込まれないのが口惜しくて、手も額も足もぶる／＼震はせた。……狂人と思はれるのが何だ。髮を切るのが何だ。……自分のこの術ない手頼りのない氣持は長年連れ添ふ女房にも分らないのだ。
「お前は髮を結つたりして、それが面白いのか」
執念く詰られるのに答へやうもないので、おきくは店の方へ出て行つた。そして、來合はせた客に向つてお世辭などを云つてゐたが、病人はその快活な聲を聞きながら、先き久振りに出て見たいろ／＼に色取られた店の樣子を思起してゐると、ます／＼心が焦立つた。昔見馴れた自分の店でも遠い處にある珍らしい世の中のやうで、其處に立働いてゐる女房や信造やおてつが妬ましかつた。枕許の障子の裾の方に差してゐる光のしよんぼりしてゐるのに引替へて、表通の秋は眩いくらゐに燦いてゐたやうに彼れには思はれた。
で、病人はひとり憐れむやうに殊更に呻いてゐたが、ふと箪笥の側の剪刀が目につくと、寢床から匐出して取つて來て、耳朶の上までも延びてゐる髮の毛を滅茶々々に切り散らした。

「主婦、大變だよ」臺所から覗いて見たおてつの叫び聲に、おきくは驅けて來て剪刀を奪取つた。氣が狂つたのかと見てゐたが、病人は頻りに髪の毛を攫んで、もつと切つて呉れと強請んだ。

「仕樣がないね。おや、床屋に來て貰はうよ」

と、おきくはおてつに吩咐けた。

脊の高い方の職人が道具箱を提げて來るまでに、寢床のまはりは大急ぎで掃除され、散らかつたものも片付けられ、病人の寢衣も取替へられてゐた。得度の式でも始まるやうに、信造も寢床の側に鹿爪らしく控へてゐた。

職人は病氣見舞の無駄口を暫らく利いてから、皆なで評議の上で、一分刈りにすることにした。信造は病人の身體を支へたが、垢臭い、脂臭い、齒屎臭い臭ひに鼻を外した。

冷たいバリカンが頭の皮に觸れるのはいゝ氣持であつた。前に振り落される長い髪を見てゐると、長患ひの自分の惱みをまざ／＼と見せられてゐるやうに病人は感じて涙をこぼした。

「私はまたこのくらゐ髪の延びるまで生きちやゐまいよ」

「なあに髪なんざ直きに延びますぜ」職人は大急ぎに片付けながら、年の内に店の普請をする話などをしてゐた。

「これで薩張りしたらうね」と、女房の持つて來た鏡に自分の映るのを、病人はちらと見たが、怖いやうに鏡を押退けて横になつた。

「綺麗な坊さん」と、おきくは笑つて店の方へ出た。

「南無阿彌陀佛々々々々々」と、今は苦痛を紛らすためでなくて心から念佛を唱へてゐると、清吉の胸にも少しの間俗縁を離れた安らかな諦めが得られた。そして暫らくはすや／＼と眠入つた。

「あんなことを云ふやうだと、もう死に時が來たのだよ」と、おきくは火鉢の側で一服吸つてゐる信造に云つた。

「大將は幾つだね」

「丁度だよ。こんなに早く弱るのは働き過ぎたからだらうよ。露月町に奉公してゐた時分には、其處の主人が肺病で寢たつ切りだつたので獨りで何もかもやつてゐたのだつて。さういふ譯で店が潰れたのだから、碌にお給金も貰へないで、手ぶらで甲州へ歸つたのだらう。あの病氣は露月町で傳染つたのかも知れないと私は思ふよ」

「だつて、肺の病氣が腹に傳染るつてことはあるまい」信造は主婦の無智を腹の中で笑ひながら、「姉さんは大將と一つ違ひだつたね」と、來た時よりは小瀟洒して女振りが上つたと思つて見てゐた。

「私なんかもうお婆さんだわよ。身體一つを資本であがいてゐるんだもの」と、おきくは甘つたれた聲を出した。

「なあに歳よりは若いよ」

「信ちやんもお世辭が旨いよ」

だけど、身裝ふりなんざどうでもいゝ。うんと稼がなければならない。私はさう思つてゐるから、信ちやんも若い女なぞに目を移さないで、お金を儲けることに一心になつてお呉れと、おきくはとろけかゝつた心を引締めて眞顏で云つた。

「東京の若い女はなか／＼油斷がならないから浮かり迷はないやうにおしよ」

「おいらもそんな馬鹿ぢやない」

信造は先日から主婦の目顏や言葉付やいろんなもので、絶えず好奇心を刺戟されながら、何事もなく過ぎてしまふのを殘惜しく感じてゐた。そして、眞心から病人の介抱をしてゐるらしいのを見ると、一寸厭な氣がした。

「南無阿彌陀佛」

病人の幽かな寢言に、二人は目を見合せて微笑した。

八

信造は最早おてつを優しく扱はなかつた。下女見たやうに指圖して時々は荒つぽく叱り飛ばしたりした。おてつはそれを氣にしないで云はれた通りに働いて、「信ちやん」と呼掛けて遠慮のない話を仕向けたが、快い返事は得られなかつた。活動寫眞や寄席などへも信造一人で出掛けることはあつても、一緒に連れて行かれることはなくなつたので、おてつは何よりの樂みを失つた。それどころか、主婦が言付けたのか、當人が望んだのか、信造は階下へ夜具を持つて下りて、二階では寢なくなつた。

「親方が何時死ぬるかも知れないからだらう」

と、おてつは獨合點をしてゐた。

「若い者を同じ部屋に寢かしとくのは爲にならんとお前が云つたから、信ちやんに階下へ寢て貰ふことにしたのだよ」と、おきくは病人に言譯した。病人はそんなことを云つたかどうか覺えてはゐなかつた。信造が傍に付いてゐて呉れるのは一時心丈夫であつたが、若い者の太い寢息が衰へた神經の煩らひになることが多かつた。

「おれが夜中にでも急に息を引取るやうな事があるかと思つて、用心に信造を此處へ寢かしとくのだらう。それならさうとはつきり知らせて呉れ。おれも覺悟をしなきやならんから」

「さうぢやないと、よく譯を云つてるぢやないか」

「……おれは當分靜かな處にゐたいよ。夜中に目を開けて見てると、信造の大きな身體が目障りになつて仕樣がない」と、病人は目の前を手で拂退けるやうな眞似をした。

「ぢや、見なければいゝぢやないか。電氣を消しといたらいゝだらう」

「消したつて駄目だ。元の通り信造を二階で寢させて呉れ。側にゐなくてもあれが二階にゐると思へばおれは手頼りにしてゐられるのだ」

「そんなに人間が邪魔になるのなら、私だつて此處にゐちやいけないだらう。私も二階の隅つこででも寢てゐようかね」

さう云つて笑つてゐるおきくの顏を、病人はぢつと見入つて默つてゐた。（女房のがつしりした身體や荒つぽい寢息が目に觸れ耳に觸れてゐればこそ、淋しい夜中でも怖い物に魂を浚つて行かれないのだつた。疼痛が激しくて念佛の效目もない時には女房の五體を唯一つの身の置き場所ででもあるやうに、その膝に身體を投げかけ、その腕に縋り、その肩に縋りついて呻くのだつた）

以前のやうにむづかつて無理を云つて、物を投げつけでもしさうな氣振を見せる勢ひが最早なくなつてゐて、昨日今日はやゝともすると、憐れを乞ふやうに相手を見据ゑるのだつたが、おきくには默つてゐる夫の心の中などはどうでもよかつた。今生の義務として時刻が來れば無理にも藥を飮ませたり、背を撫でさすつたりしてゐたが、相手が默つてさへゐれば、その苦痛は何とも感ぜられなかつた。そして、信造をおてつの部屋から離して自分達の側に置いてゐるといふことは、病人のためよりもおきく自身のためにどれほどの心の安易が得られたか知れなかつた。

「信ちやん、お前さんは眠づらいのかい」おきくはある夜夜具の中でごそ〳〵音を立ててゐる信造に聲を掛けた。

「あゝ。……」

「どうしたのだい、お前さんは毆つても起きないくらゐの寢坊だつたのに」

「どうもしないけど、……」

「矢張おてつの側の方が寝工合がいゝのかい」

と、おきくは一寸揶揄ひながら笑つた。

「馬鹿云ふなよ」

信造は怒つたやうに云つて主婦に背を向けた。そして空鼾を掻いてゐたが、一捻りで倒れさうな骨と皮との病人を汚いとも思はないで、看護してゐる主婦の様子を見てゐると、自分が穢い物になつてゐるやうな氣がしないではなかつた。病人の寝床の惡臭は實際以上に彼れの鼻を衝いた。……六本木の活動寫眞で見た怪談の光景が夢ともなく現ともなく彼れの頭に浮んだ。

「お前さん手を貸して呉れ」……ぐつと喉佛を壓へると手應へもなかつた。

ふと薄目を明けると、明るい電氣の下で主婦は病人の側にすや／＼と眠つてゐた。何だか聲がしたやうだなと思つたのは病人の聲だつた。

「信造……」

「苦しいのかい」

「おれは今まで思つてゐたのだが、おれが死んだら、おきくが何と云つてもお前は故郷へ歸れ。……」

静かな聲で云つてゐるのがこれだけは聞取れた、がその後はよく耳へ入らなかつた。

「あゝ、おれも田舎の方が呑氣でいゝと思つてるよ」

信造は相手の顔を見ないで答へた。

八百屋の看板の書替へられたのは春になつてからだつたが、自轉車の赤い文字の「清」が消されて「信」となつたのは去年の秋の末頃だつた。

信造がどうしても階下では寝ないで、おてつ一人が階下に寝るやうになつたことを、おてつ自身床屋へ來て話した。「信ちやん」といふ馴々しい言葉は彼女の口から出なくなつた。

「お前さんはまだ此方に奉公してゐるつもりかい」と職人が訊くと、

「何處へ行つたつて同じことだから居馴れたところにゐるつもりなのよ」と、おてつは答へた。

そして、おてつは御用聞やら臺所仕事やらで相變らず忙しかつた。二人の汚れ物の洗濯までしてゐた。

農民藝術

私は地方語を好まない。しかして、私は地方語を驅使して地方人の生活を深刻に描寫し得る自信はないので、企てもしないが、日本にその國民の過半を占めてゐる農民の生活の眞相を描いた文學の出て來ないのは不思議に思つてゐる。長塚節氏の「土」はいゝものらしいが、その外には、大したものがなささうである。

この泥臭い氣の利かない感じの惡い地方語でも、大天才の手にかゝつたら、生々として來て、我々の心が捉へられるやうに響くのであらうが、時々目に觸れる田園小説の田舎言葉の陳列の如きは、たゞ薄汚いばかりのやうで讀むに堪へない。

（「文藝評論」の「感想片々」より）

心中未遂

一

いよ〳〵今日となつた。

おすゑは最早うつかりしてはゐられない。昨日までは、何か急にいゝ事が湧いて來て、奉公話も自然立消えになりはしないかと當てにして、神や佛を一心に念じてゐたのであるが、それも空頼みになつてしまつた。いよ〳〵今日からは、子供の顔も見ないで日を送らなければならぬ。知らぬ人の間に交つて馴れない勤めをしなければならぬ。

おすゑは辨當を抱いて勸工場へ出掛けて行く妹を見送つてから、暫らく火鉢の側に首垂れて憩いでゐた。平生なら容易に行火を離れない母親も、今朝は早く起きて、何をするともなく、一室きりの家を彼方此方覺り廻つてゐる。壁一重の隣の家で子供の暴れてゐるのが、床に響いてゐる。

「長島町へは一寸顔出ししといた方がいゝだらう。默つてゐて、後で知れると、彼處でも氣を惡くするだらうから」と、母親は勸めたが、おすゑは、

「私、もう彼處へは行きたくないよ」と、角立つた言葉で答へた。

おすゑは母親の言葉を煩さがつて、返事をしないでゐた。長島町の旦那の世話でミシンの術を習つたのだけれど、今から思ふと、それが身の仇になつてゐるかも知れない、苦勞してあんな事を覺えなければよかつた。と、おすゑは今その旦那に對して恩を感ずるよりも、むしろ忌々しく思つた。「身に一つ藝があれば、一生喰外れはないものだ」と、旦那はよく云ひ〳〵してゐたけれど、當てになりやしない。いくら男に負けぬやうに稼いだつて、こんな羽目になつちまつて」

おすゑはこれまでの自分の苦勞を顧みると、自分で自分が傷はしかつた。世間にこれほど苦勞した女が外にあらうかと思はれた。夫婦共稼ぎで身代を仕上げるつもりで、身粧も闘はなければ、碌に物見遊山に行つたこともなかつた。

寒くつても暑くつても、洋館へ生地を取りに行つたり、筒袖で夜業をしたりしてゐた。……それが何になることか、夫が辨天町の女狐に誑かされに行く資本になつたばかり。食べるものも食べないで買つたミシンの機械さへ、何時の間にか無くされて。……

おすゑは一年この方姿も見せたい夫の事を思出してゐると、神經が高ぶつて、心が燃立つやうだつたので、ふと今日の場合を忘れて、恐ろしい夢を見ながら、齒軋りしてゐたが、その中隣の家の時計が九時か十時かを打つたので、夢から醒めたやうに周圍を見た。

「もう叔母さんが迎ひに來る時分ぢやないかね」と、母親が云つたが、その言葉はおすゑの胸には釘を打たれたやうに響いた。

「もう浮かりしてられない」と、おすゑは身を起して、「ぢや、私が湯に入つて來るよ」と、大人しく母親に告げた。

見ると、よく眠つてゐると思つてゐた朝吉は、パッチリ目を開けてゐる。「お母さん、朝は先きから起きてるんぢやないの」と、不平らしく云ひながら、急いで抱起して、乳を與へた。

そして、「お前もお湯に連れてつて上げようね」と背負うて出た。朝吉はウ、〳〵と喉を鳴

らしながら、素直に母の背に縋付いて、大きな澄んだ目を瞠つてゐた。その目もその口も可愛らしくて、譯を知らぬ人には、人形のやうだと褒められたこともあるが、さう云はれるたびに、おすゑは穴へでも入りたいやうな氣になつた。

朝吉は人形のやうに魂がないのである。口一つ利けないのである。去年の春腦膜炎で死に掛つたのを、注射の力でやう／＼命拾ひをしたものの、この先き五六年の壽命も六ケ敷いと、醫者から無慈悲な申渡しをされてゐる。どうせ人並になれぬ身體なら、强ひて長生をさせたいとも望まない。たとひ五年が三年に縮まらうとも、それは諦めてゐる。殘惜しいとは思ひはしない。だけど、どうせ短い命なら、息のある間は見窄らしい服裝をさせたくない。粗末な物を食べさせたくない。そして、母の懷で靜かに息を引取れるやうにしたいものだ。明日から預つて吳れる筈の里親が、いくら親切であらうとも、子煩惱であらうとも、他人の側で死なせたくない。……

おすゑはさう思詰めると、いつそこのまゝ朝吉を連れて、人の氣づかぬ遠い處へ逃げて行つて、淵へでも海へでも飛込みたいやうな氣になつた。うか／＼湯屋の前を通過ぎて、一二町當てもなく步いた。そして、去年の夏の晩、ふとした事から變な氣になつて、子供を背負つて、淚に塞れながら海岸通を行きつ戾りつしてゐる中、巡査に見咎められ、驚いて家へ駈戾つたことなど思出してゐた。

ふと、目の前に始終病兒の藥を買ひに行く藥屋の看板が見えたので、おすゑは思はず足を留めた。何だか其處を通つて店の者に見られるのが厭だつた。それに、薄着の肌と素足とに觸れる風が急に寒く感ぜられて、頻りに嚏が出さうになつた。首を捻向けると、思ひなしか、朝吉の顏も寒さに慄へてゐるやうであつた。

と見ると、おすゑは急いで後戾りして湯屋へ入つた。知人も來てゐないし、子供連れも來てゐないのに安心して、ゆる／＼二人の身體を洗つた。朝吉が兩手で湯桶を叩きながら喉を鳴らしてゐる間に、おすゑは取留めのない考へに耽りながらも、身體中殘る隈なく磨上げた。頰は次第に紅味がさして、胸にも手にも暖かい血がめぐつた。鏡に映つた姿は自分の影ではないやうに見えた。

ふと、入口から母親が顏を出した。「先きから叔母さんが來て待つてるよ。此處にゐるんならいゝけど、外へ廻つてるんぢやないかと思つて」と身體に似合はぬ大きな聲を出した。何時にない長湯を怪んで迎へに來たのだつた。

「さう？　直ぐ歸るよ」

おすゑは歸つて叔母の顏を見るまでに、よく自分の量見を極めて置かねばならぬと思つたが、さて異つた考へも浮ばなかつた。只胸がわく／＼するばかりだつた。

歸ると口數の多い陽氣な叔母に急立てられて、化粧をして衣服を着替へた。里親の來るのを待つことさへ許されないので、朝吉を母に渡して、後髮を牽かれるやうな思ひをして汽車に乘つた。

「用事があつたら、何時でも私の家へ電話を掛けな。今度のことは私が引受けたのだから、決して心配おしでないよ。この先決してお前さんを困らせるやうなことはしないんさ」と云つて、叔母は茶屋奉公の心得などを話した。

が、おすゑは身を入れて聞いてはゐなかつた。大森まで連れて行かれて、梅の花や南天の實で白く赤く色取られた繪のやうな高樓を仰いで、「彼處だよ」と叔母に敎へられた時は、「まあ綺麗な家だわね」と、思はず云つて、夢見るやうにうつとりした。あんな家で自分のやうな者が勤ま

るだらかと氣遲れもした。

二

からしておすゑは、自分では確と覺悟をしたとも覺えぬのに、何時の間にか梅屋の女中の一人となつた。日當りの惡い陰氣臭い賑町の路次裏で、手足を黑くして根限り稼いでゐた先日までの事を思ふと、自分でも不思議であつた。見るもの聞くものが珍らしくて、此處にゐる人や遊びに來る人の心の中が分らなかつた。皆な苦勞がなくつて、お金の自由になるのが不思議に思はれた。そして、おすゑはお祝儀を頂くたびに極り惡い思ひをした。

　廊下に立つと、遙かに海の方までが廣々と見下されて、煙を曳いて見えつ隱れつする汽車の響きが強く聞えた。あの汽車に乗りさへすれば、間もなく濱へ歸れるけれど、とおすゑは屢々汽車の行方を心で追つて、煙や音が消えると、淋しい思ひをしながら、騷々しい周圍を顧みた。庭の枝に釣した鈴は微かに動いてゐて快い匂ひは鼻を掠めた。美しい顏の男がしどけなく醉つて、藝者の肩に縋つて、笑話をしながら向ひの廊下を通つた。咲盛つた梅の花を隔ててその様を見てゐると、さながら芝居を見てゐるやうだつた。

「おすゑどん、新二號でお呼びですよ」と、下の廊下から、丸顏の女子が仰向いて、金切聲で叫んだので、おすゑはやうやく、我れに返つた。小聲で返事をしてバタ／＼と駈付けて、小高い新二號の障子を細めに開けて、御用を伺つた。

　無骨な顏した若い男と、年増女と差向ひで澄してゐたが、女の方が輕く首を曲げて、「ちよいと横になりますから、お床を伸べて下さいな」と、事もなげに云つた。

　が、おすゑはその意を呑込みかねて、「お床を伸べるので御座いますか」と問返して、もじ／＼してゐた。

「さうですよ」と、女は流し目に見て、險しい調子で簡單に命令した。

　おすゑは思はず顏を赤らめた。そして、極りの惡い思ひをして、客から顏を背けて、恐る／＼寢床を敷いて障子を締めた。逃げるやうに階段を下りて、何處へ行くともなく廊下を傳つてゐると、長逗留をしてゐた二人の支那人の一人を今送り出して來たおのぶが、擦違ひさま酒臭い息を苦しさうに吐きながら、「貴女に電話よ。牛込からだつて。早く行つてらつしやい」と促した。

　電話は牛込のさのやといふ待合にゐる叔母からであつた。自分の家に變事でもあつたのかと氣を廻して、胸騷ぎをしながら急いで聞いたが、叔母の聲とは思はれぬやうな聲で、不明瞭な話が繰返された。幾度聞直してもよく分らないので、側にゐた朋輩に代つて聞いて貰ふと、その用向は何でもなかつた。「……明日叔母の家のお客様が二三人連れで遊びに行くから、いゝ座敷へ御案内して大切に扱つて呉れ」と云つて、「よく辛抱おしよ」と附足したさうである。

「承知しました」と、おすゑは自分で電話口へ出て答へて、「叔母さんどうぞ來て下さいな」と懷かしさうに云つたが、その答へは聞えなくて電話は切れてしまつた。

　朋輩にはそれ／＼懇意な客があるらしいのに、おすゑにはまだ一人として顏馴染がないのだから、叔母の話のお客でも自分の名を差して來るのが悅しいやうだつた。で、帳場へ通して、いゝ座敷を空けて置くことを頼んだ。

　一つ用事が濟んでも、次の勤めには氣が付かないので、やゝもすれば廊下に立つて、ぼんやり何處ともなく見詰めてゐた。そして、朋輩に呼立てられては、俄かに慌て出した。まだ番號さへ覺え切れない座敷へ迷ひ／＼顏を出しては、

不器用な相手して、自分の持場の五六組を大方送り出してしまふ頃には、ランプが部屋々々に配られて、花の色も見分けがたくなつた。客を見送つて行く提灯が、後の薄暗い丘の方へ小さく動いた。晝間の混雑も大風の跡のやうに靜まつて、今朝から酒びたりで暴れてゐた梅の間の客も、ばた〳〵醉倒れて、鼾ばかりが洩れてゐる。

最初からひつそりしてゐて、あまり女中の手を煩はさなかつた新二號の二人連れも、そろそろ歸支度をした。おすゑは賑かな座敷よりも、靜かなこの二人に一層心を惹かれて、近くの廊下を通る折には、わざと足音を忍ばせて、耳を澄ましてゐたのだつたが、今前後して廊下へ出て來る二人の樣子を、薄暗い處から見ぬ振りで見詰めてゐると、女の顏は初め見た時よりも、もつと醜くて厭味に思はれた。そして、男の顏は凛々しくて賴もしさうに見えて、今日此處へ來たどの客よりも、心に適つたやうに思はれた。で、女の方が遠慮氣もなくて、何だか横柄らしいのが小面憎かつたが、それよりも、何故この男がこんな厭な年上の女なんぞと一緒に來たのかと、歯痒くなつた。この男になら、どんないゝ女だつて思付くだらうに、何處かよくつて、こんな女なんぞに……と、おすゑはこれまでにない多額の祝儀を女の手から貰つて、石段の下まで見送つた後も、俥の音の消えるまで、その方へ心を留めてゐた。

「あのお客樣は何でせう、變だわね」と、廊下の柱に凭れて小聲で何か唄ひながら醉を醒ましてゐるおのぶに訊くと、

「先月の末だつたかね、雨の降る寒い日に一度來たことがあるの。その時は私の番だつたの。中々調子のいゝ人でせう」

「でも、隨分氣六ケ敷さうな人ね」

「さうでもないよ。顏は何だけど、薩張りした面白い人だよ。この前は私も暇だつたから、お酒のお相手なんぞして、いろんな話をして笑つて、隨分面白かつたわ」

おのぶはさう云ひながら、おすゑを相手にせぬやうに、背を向けて歩き出した。おすゑは立入つて二人の身の上を訊きたかつたけれど、輕く口を利きかねた。

三

雨戸は鎖されて夜は更けた。微かに震へてゐる木の葉の音や、風鈴の音が、おすゑの耳には淋しく浸入つて、便所へ行くのさへ恐かつた、寢床に就く前に、貰つた祝儀を勘定して、財布の中へ收めたが、思ひの外に金高は多かつた。これでは月五圓の里扶持や母と妹の暮らしの足しぐらゐ造作なく仕送れるらしい。矢張叔母さんの云つた通り、割のいゝ稼業に違ひない。かうと知つたら、もつと早く奉公に出ればよかつた。あんな苦勞ばかりしないで濟んだのに……と、獨り思耽つて元氣づいてゐたが、すると、母や妹にも此方の事情を知らせて、安心させたくなつた。

で、朋輩が梅の間の藝者の惡口や、明日の附込の噂などしながら、寢床へ入つた後で、おすゑは一人寢衣のまゝ枕許で、眠い目を張つて、覺束ない筆を運んでゐたが、暫らくして不意に手紙の上に打伏して、吃逆泣きをし出した。

「どうしたの、おすゑさん」と、直ぐ側に寢てゐるおきよが、頭を持上げて訊いた。「どうしたのさ。何處か加減が惡いの」

おすゑは胸を押へたまゝ、はつきりした返事をしなかつた。

おのぶもおとくも、眠入らうとした目を開けて、樣子を見ると起上つた。そして左右から「どうしたの〳〵」と、次第に側へ擦寄つて、氣

遣はしさうに柔しく訊いた。が、おすゑは極り悪くて、容易に打明けないで、泣聲を我慢してゐたが、涙のみ湧出て頰を傳つた。

「本當にどうしたのさ。云はなくちや分らないぢやないの、人にばかり氣を揉ませて」おのぶはやがて慳貪な口を利いた。側を離れて寢衣の袖を掻合せ、首を縮め眉を顰めて見下した。

「お腹が痛いんだらう」と、おとくは欠伸を噛みながら云つた。

「濟みません〳〵。私、乳が張つて來て仕様がないんですの」

おすゑはかう言譯して、目を拭つて顔を上げた。目の縁は赤くなつて、萎れた顔は誰れの目にも痛々しく見えた。

「乳が張るつてどうなるの」と、おのぶは不思議さうに相手の胸のあたりに目をつけたが、年上のおとくは、自分でそんな覺えがあつたやうに、乳の張つた時の氣持の悪さを言葉を强めて話して聞かせた。そしておすゑに勸めて、茶碗の中へ絞り出させた。

「乳呑兒を他人に預けてゐちや、氣に掛るだらうね」

「でも、よく思切つて打遣つて來られたのね」

「おすゑさんの陰氣にしてるのも無理はないわね」

互ひにこんな事を言合つて、その兒の事やおすゑの身の上を、根掘り葉掘り訊出した。おすゑは自分の恥を曝すやうな氣がして當惑した。で、明ら様に語るまいとしたけれど、親切づくで問はれるのに默つてもゐられなくて、止切れ止切れに、目の悪い老母や人並でない朝吉や、づぼらな前の夫の話をした。朝吉が啞で白癡であることだけは隱して、夫の病氣を受けて、生れながらに目を病んでゐると話した。「いくらお金が入つても、今の中にいゝお醫者に見せて、目だけは療治させようと思つてゐます。若しか潰れでもしたら、一生難澁しますからね」と云ひながら、自分の話を憐れつぽく感じて、新に涙を濺いだ。

その素振と話の事柄は、手易く女達を動かして、聽手は皆貰ひ泣きをした。おのぶは襦袢の袖を濡らすほど泣いた。同情の言葉は一時小止みなくみんなの口に上つた。

「だから、私は一生結婚なんぞしないわ」とおのぶは深く感じたやうに云つた。「そんな目に會はされるよりや、一人でゐる方が幾らましだか知れないわね」

「私も本當にさう思つてよ」と、おきよも相槌を打つた。

「私、朝ちやんとかに會つて見たいわ。も少ししして暇になつたら、一日此家に連れてらつしやいな。皆なして大事にして可愛がつて上げるわ」

「おすゑさんのことを思ふと、私達は罰が當るわね。自分で稼いだだけ自分の好きなことに遣つて。……私、これからもう無駄なお錢は費はないよ」誰れかが殊勝らしく云つた。

「おすゑさんは大人し過ぎるからいけないんさ。御亭主がそんな不始末をするんなら、思切り仕返しをしてやればいゝのに。私だつたら默つて勝手な眞似をさせときやしないよ」誰れかがつけ〳〵云つた。

一しきり、皆ながそれ〴〵に喋舌つてゐたかと思ふと、やがて欠伸まじりで物云ふ力も衰へて、誰れからともなく、何時の間にか皆な寢床へ入つてしまつた。

おすゑも後から、冷たい夜具の中へ入つて身を縮めた。暫らく朋輩の寢言や齒軋りの音に累はされて、眠もやらず術なさうにしてゐたが、すると、浴室の後の篠の中に捨てられた犬の子が、コソ〳〵音をさせては、泣聲を立ててゐるのが、氣味惡く耳についた。

四

その翌日は穩かに冷たい春雨が降つた。折角の日曜も雨のために振りの客は少かつたが、廣間では日本橋の銀行の連中六十人からの大宴會があるので、朝から可成り忙しかつた。義太夫の師匠まで襷掛けで膳立の手傳ひをした。おするも氣を詰めて立働いた。そして、二時頃やうやく配膳の濟んだ時分、帳場から氣立たましい聲でおするの名が呼立てられた。昨日の電話の人達が俥を連らねて來てゐるのである。

今までの混雜に紛れて忘れてゐた叔母の知らせを思出して、慌てて玄關の方へ下りて行つた。洋服や和服の四人連れが賑かな話をしながら、其處に立つてゐて、皆なの目がおするの顏に向けられた。

おするはこんな場合に相應しい言葉が口から出なくつて、ドギマギしてゐたが、折よく傍にゐたおきよに「新五號へ御案內したらいゝでせう」と指圖をされたので、默つてその方へ導いた。

「一昨日君の叔母だといふ人から、君のことをよく聞いたよ。勤まるだらうかつて叔母さんは心配してたよ。……どんなだい」と、客の一人が、坐るが早いか、顏を見詰めて訊いた。

「些とも馴れませんから」と、おするは低い聲で答へた。廊下へ出たが、今聞いた言葉は、この頃嘗て聞いたことのない愛情のある懷かしい調子を帶びて耳に殘つた。そして、姿形も四人の中でその男が際立つて勝れてゐるやうに思はれた。

で、叔母の樣子をよく訊いたり、叔母への言傳をしたり、この人になら打解けた話も出來さうだつたが、外の人達が憚られた。「あの人一人遊びに來たのならよかつたのに……」

二度目に、お誂へを伺ひに行くと、皆なが恣に打寬いで、高聲で議論めいたことを言合つてゐた。おするは自分が顏を出すと、皆なが自分の方ばかり目を付けるやうな氣がして、窮屈だつた。そして、自分の目の向け處に困つたが、かの柔しさうな男が乘出して、穩かに口を利いて呉れたので、その人に向つて、お好みを訊いた。特別の註文をする人は外になかつた。名前を三浦といふらしいこの人が、一座の兄分で、何もかもこの人まかせといふ風に見えた。

「お酒は成るべく早く」と、三浦は後から聲を掛けた。

おするは廣間の側を通りながら、そつと覗くと、其處には最早酒が廻つてゐて、座も入亂れ、騷がしい間に三味線の音もしてゐる。大勢の客の顏付や服裝が、それ〴〵に異つてゐるのを見比べてゐると、中々に面白いので、暫らく立つて見てゐたが、すると、盃の取次をしてゐるおとくが、ふと振返つて、意地惡い目付で此方を見た。

おするは慌てて行過ぎた。後で小言を云はれさうなのが氣になつた。「貴女は成るべく廣間の方を手傳つてお呉れよ」と、おのぶに云はれても、「えゝ」と返事したばかりで、其處へは寄付かなかつた。自分の持場だけでも忙しくて暇がないやうな風をして、何處へ行くにも廣間の側を避けて遠廻りした。

酒が出て料理が揃つても、新五號の客は惡巫山戲もしないし、皆な穩かだつた。客同士で議論めいたことを言合つたり、女話をしたりしても、女中に向つてはさして戲談を云はなかつた。

おするは勤めよかつた。そして、默つてお酌をしながら、客の話に耳を留めてゐた。三浦、倉賀、大井、田川、四人の名前も自ら分つた。

「今だから話すけれど、それに違ひないんだ」

と、口髭の濃い顔の角張つた大井が、紅くなつた目元に笑ひを含んで、勢ひのいゝ聲で云つた。「今あの女は庄司と一緒にゐるんだよ。先日庄司のお袋が來て、譯を話して、貴下に申譯がないから別れさすやうにするつて云つてたけど、僕は初めから庄司に對して何とも思つてやしない。あんな奴に付纏はれて馬鹿な奴だと思つてる……」

「いくら君が呑氣だつて、まさかさうでもあるまい」と、三浦が話を遮つた。「そして、庄司の事件は何時頃のことなんだい」

「一昨年の暮時分だよ。その時は彼奴が自分の給料ぢや、とても下宿屋の拂ひも出來ないから、おれの家に同居しとつたんだが、おれは富士見町へばかり行つてて、滅多に家にゐなかつたしね。庄司は只の一晩だつて遊びにや出ないで、家にばかり寢てるんだから。……どうも火事のあつた晩に出來たらしいよ。あれは十二月の五日だつたよ。おれは相變らず留守だつたが、夜中に近所に火事があつたんだ。あの時二人が目を醒まして騷いだに違ひないが、屹度その時に關係が出來たんだ」

「それはどうだか。君も中々空想を逞しうするね」

「あの細君は廻覽文庫か何かに入つて、よく小說を讀んでたから、小說で感情を刺激されたのかも知れない。僕等にも時々小說の批評を聞かせたりしてゐたよ。だけど庄司はよく平氣で君の家にゐられたね」

「彼奴は愚圖だからさ」と、大井はさも卑むやうに云つて、「二人が續いて家を出て行つたからおれも氣が付いたのだがね。……最初に嚊が氣分が惡いから、大崎の姉の家で二三日保養して來ると云つて出て行つたきり、二三日立つても歸らなかつたが、さうすると、一週間ほどして、庄司の奴も荷物を持つて芝の下宿屋へ引越して行つたんだよ。大晦日前だし、金に困つてることが分つてるのに、變だなと、その時どきつと胸に轟いたね」

「で、君は庄司に向つて何とか云つてやつたかい」

「いや、何も云やあしない。彼奴が出て行きや、話相手はないし、おれ一人家にゐたつて詰らないから、戶を締めて出ちやつたよ。そのまゝ拂ひも何も打ちやつて、三ケ日が濟むまで方々うろついてゐたんだが、その時だよ、泥棒にやられたのは、……金目のある物は一つもなかつたけど、茶碗だの丼だの、臺所道具を一切毛布にくるんで持つて行きやがつた。おれも一寸情ない氣がしたよ。女房はゐないし、飯を食はうにも茶碗はないし、どうしようかと獨りで考へてたが、仕方がないから、思切つて、その日に空つぽの簞笥や火鉢や、ありつたけの物を捨賣りにして、表札ももぎ取つて、宿無しになつちやつた。……結句その方が氣樂だつたね」

「どうだか」と、今まで口を噤んで、矢鱈に肴を突ついてゐた倉賀が首を上げて、「あの時は君も影が薄いやうだつたぜ。庄司の話は今初めて聞くんだが、その爲だね」

「なあに」と、大井は力んで相手の言葉を跳返して、「おれも持餘してゐたんだから、丁度よかつたのさ。……ところで、仲人が來て別れ話が極まると、おれは質に入れてゐた彼女の衣服をすつかり出して、姉の家へ送返してやつたからね。えらいだらう」

「君にしちや感心だね。だけど、今一緒にゐる女よりや、前の細君の方が戀しくはならんかね」と、三浦が眞面目で訊いた。

「さうでもないさ」大井は事もなげに答へたが、ふと口を噤んで、飲みさしの盃を執つた。

「何でもあの頃、君が指ケ谷町の結婚媒介所へ女房の候補者を捜しに行つたといふ噂があつたが、本當かい」

「なあに、あれは惡戯さ、いろんな女が來てゐて面白いちふから、愚弄ひ半分で行つたんだよ」

「ぢや、本當に行つたんだね。まさかさうぢやあるまいと思つてたのに」

皆なが冷かすやうに笑ふと、大井は悄げた目を屡叩きながら、頻りに酒を飲出した。

おすゑは彼方此方と酌をしながら、一座の話に聞惚れて、大井といふ男の身の上を、さも珍らしいことのやうに興を覺えてゐたが、「おすゑさん、ちよいと」と、障子の蔭から呼立てられたので、詮方なく座を外して行つた。

「竹の間で先きから呼んでよ。もうお立ちになるんだらう」と云つて、おのぶは擦寄つて歩きながら、「忙しい日には、一つのお座敷へさう長く付いてゐなくたつていゝんだよ。構はないから打ちやつといて、外へもちよい／＼廻つてお呉れよ。四人もゐるのなら、藝者でも呼んだらいゝだらうにね。……あの人達は何をする人？見たところ皆な頑固な人らしいわね」

「さうねえ」おすゑはかの四人の樣子が、家にゐた頃の知合ひの保險會社の社員に、何處か似てゐるやうな氣がしてゐたのだが、若し見當違ひをしておのぶに笑はれはしないかと思つて、口に出しては云はなかつた。

竹の間の御用を濟まして、直ぐに前の座敷へ行つて見ると、もつと續いて聞きたかつた大井の身の上話は止んでゐた。大井は手枕をして足を投出して寢入つてゐる。おすゑは枕を出して寬かに頭を安めさせた。足許へは掻卷を掛けてやつた。

「この男も顏に似合はん罪のない奴だよ」と、三浦は寢顏を見下してから、おすゑを見上げて、「一寸その男の首筋を見て御覽。今でも屹度痣がついてるよ。女に嚙付かれた大事な形見なんだよ」

「へえゝ」と、おすゑは呆れたやうに首の方を顧みたが、傍へは近寄れなかつた。

すると、倉賀と田川とが左右から大井の襟を寬めて、首筋を覗いたが、痣の跡は最早見付からなかつた。

「色男の勳章もなくなつてるよ」

皆なが笑ふのに誘はれて、おすゑも面白さうに笑つた。そしてふと打解けた氣分になつて、

「貴下方はさのやへよく入らつしやるんですか」と訊いた。

「なに、よく行くこともないんだがね。少し譯があつて、僕はあの家とは懇意にしてゐるんだよ」と、三浦が答へた。「叔母さんには隨分世話になつたよ。一昨日の晩も氣晴しに、二三時間話しに行つたのだが、その折一日梅見にでも行きたいと云ふことから、つい君の話が出てね。是非この家へ遊びに行けと云はれて、皆なを誘つて來ることにしたのさ」

「折角入らつしやつたのに、雨天で生憎でしたわね」と、おすゑは態々しく云つたが、氣の利いたお世辭は口から出なかつた。叔母に向つて、自分の事をよく傳へて貰ひたい、待遇が惡かつたと云はれたくないと思ひながら、客を快く遊ばせる術は分らなかつた。

燈火のつく前に四人連れは俥にも乘らないで、冷たい雨の中を出て行つた。門の外で大井は「握手しよう」と云つておすゑの手を握締めた。

五

晝間は絕え間なく動いてゐるのと、さま／＼の客の話を聞いたり、樣子を見たりしてゐる

のが珍らしいのとで、心が紛れてゐるけれど、夜になつて部屋々々が靜かになると、手頼りのない思ひに沈んだ。そして、賑かな朋輩同士の中へは入れなくて、一人除物のやうになつてゐた。

足が棒のやうになつて、根の疲れた身體を溫泉に浸すのは、此處にゐる一つの役德で、外のお湯とは違つて身體の心までも溫まるので、叔母の云つた通り、弱つてゐる身體には何よりも藥になるやうだが、朋輩と一緒に入るのは氣が引けた。おきよなど口の端たない手合ひに愚弄はれるのが厭だつた。

母屋から隔たつた湯殿では、皆なが遠慮氣もなく勝手な口を利き合つてゐるので、おすゑは一人暗い處へ寄つて、默つてそれを聞いてゐた。首を振つて小さい聲で義太夫を語る者もあつた。

「私、今年は夏まで此處にゐて、お師匠さんにみつしり復習つて貰はうかしら。どうせ習ひかけたくらゐなら、人中へ出て語れるやうになりたいよ」と、おさだは語り止めてから云つた。

「お前さんは聲がいゝからだからね」と、酒臭い息を吐きながら、湯氣の中にだらしなく橫はつてゐるおきよが冷かすやうに云つた。「私なんぞ、今月一杯ぐらゐでこんな家は御免だよ。早く東京へ歸りたいよ。……どうせ奉公するにしたつて、東京の方がいくら勝しだか知りやしない。……今年こそ止さうと思つたのに、花の間だけ助けて呉れつて、無理に連れて來やがつて。……思切つて赤坂へ行けばよかつたのに、お母さんが義理立てしたために、いゝ口をふいにしちやつたよ」と云つて、「あゝ口惜しい」と、頓興な聲で叫んだ。

「誰れだよ。狂人のやうな聲を出してさ」と、新に入つて來た一人が、湯氣の中を透かして見ながら嚔をした。

浴槽の中で眠さうに欠伸をしてゐるものもある。互ひに耳打ちしてクス／＼笑つてゐるものもある。皆なの聲が止切れると、寂とした夜の空に、犬の聲が響渡つた。

「おや、おすゑさん其處にゐたの。ゐないのかと思つたら」と、ある一人が振向いて聲を掛けた。「そんな隅つこにゐなくつたつていゝだらうにね。默つてて人の内所話を聞いてるなんて、餘程人が惡いよ。……默つてる人が一人でもゐると、何だか氣が差して厭なものだよ。……さあ此方へ入らつしやい。お湯を汲んで上げるから」

「えゝ、有難う。私、もう上がるんです」おすゑは身體を縮めて、逃げるやうに朋輩の側を滑つて、手早く着物を着けて、湯殿の外へ出た。

が、直ぐには女中部屋へ入らないで、吹きさらしの渡廊下に立つて、雨の霽れかけた暗い外を見てゐた。そして、皆なが湯から出て、女中部屋へ入るのを待つて、後から隨いて入つた。

次の室の柱時計が一時を打つた。今まで喋舌つてゐたのが、早くも寢息を吐き出した。口の中で音をさせたり、聞取れぬ譫言を云つたりした。起きてゐるのは、昨夕書き殘した手紙を書きつゞけてゐるおすゑと、他所行の羽織を縫つてゐるおよしとばかりであつた。おすゑは昨夕までは長く勤めるつもりで、母や妹へ安心させるやうな手紙を書かうとしてゐたのだが、今夜はどうしてもそんな氣になれなかつた。むしろ勤まりさうでない不安を訴へたくなつた。

「今時分東京へ電話が掛るでせうか」と、出拔けにおよしに訊くと、

「あゝ、掛けられるでせう」と云つて、およしは針を止めて、「何處へ掛けるの。叔母さんの家？」

「いゝえ、私、今何處へも掛けるのぢやない

の。「一寸訊いただけなの」

が、叔母とは何時でも電話で話が出來るといふことが、多少力になるやうに思はれた。東京は此處から近いんだから、その中一日暇を貰つて、叔母のゐるさのやといふ家へは遊びに行きたい。……どうせ他人の中で氣兼苦勞をするほどなら、東京へ行けばよかつた。……

おすゑは叔母に相談して、朝吉を東京で里子にやつて、自分も東京で奉公したらと、これまでつひぞ思付きもしなかつたことを考へ出した。で、さうなつた後を夢のやうに考へてゐると、氣が迷つて、今夜も落着いて細かい手紙は書けなかつた。

六

空が晴れると、目の屆くかぎり最早春景色であつた。枝を渡つてゐる雀の聲も陽氣に響いた。雜巾掛けをしてゐる冷たい手も、冴えた日に柔しく溫められた。穴のやうな路次裏に住んでゐたおすゑの目には、廣い畠の中に働いてゐる農夫の姿も非常に違つた生活をしてゐる人のやうに見えてゐたが、その農夫の野良仕事が晴れた日には羨ましいほど愉快げに見えた。

「あんなにして誰れに氣兼ねもしないで働いてゐたら、氣が清々してい丶だらうに」と思つたりした。

空高く凧が舞つてゐて、子供が畦道を駈けてゐる。

おすゑは拭掃除を濟ませると、朋輩と代り合つて髮を結つて、身裝した。最早正午近くなつて、チラホラ客の姿も見えた。電話も東京から掛つてゐたが、暫らくしておすゑの名が呼ばれた。

「叔母さんかしら」と云つて、急いで行つて見ると、「誰れだか男の人だよ」と、おきよは受話器を渡した。

ぢや、あの客だらうと、おすゑは三浦や大井の顏を思出しながら、受答へしたが、先方の聲を聞くと變な氣がした。二三度聞返して、それと知ると、おすゑは目が眩んで耳が鳴つた。

「ぢや、さうします。私の方から行きます」と、おど〱しながら丁寧な言葉で答へて、直ぐに電話の側を離れた。朋輩が此方を不審げに見てゐるのが面羞くて、逃場所を求めて便所へ入つた。

「この頃おれも東京へ來て、い丶仕事にありついてるんだ。お前の方で忙しくて出られなければ、おれの方から其處へ訪ねて行かう。……」と、から夫の聲がしてゐたのに異ひなかつた。穩かな調子だつたし、會つた上でよく譯を話すと、これまでの事を詫びるやうに云つてゐた。そして四谷の何處とか、今の居所をも敎へた。

おすゑは逆上せた耳でぼんやり聞取つたことを、ぢつと思出してゐたが、夫に會ふにしても此處へ來させたくはなかつた。若しも今日か明日、不意に妙な服裝をして來られでもしたらどうしようと思つてゐると、落着いてはゐられない。

で、叔母に電話を掛けてよく相談したかつたけれど、さうすれば明ら樣に家の者に知られるのが恐ろしかつた。何とか用事を拵へて半日でも暇を貰ひたいと考へながら、とても主人の前に出て云ひ出せさうではなかつた。手紙で叔母に訴へるにしても、手紙を書く暇はないし、急の間には合はない。

おすゑはその日自分の名を呼立てられるたびに、夫が來たのではないかとビク〱した。そして、客の前に出てゐても、客の話などに氣をつけてはゐられなかつた。どうかして、電話のあたりに人のゐない折に叔母と話をしたいと思つて、隙を見てゐたが、憎らしくもその側には屹度誰れかがゐた。おすゑはその人達を自分

の敵でもあるやうに心の中で睨んだ。
　この日の客の中には、若い書生さんがあつた。角帽を冠つて木綿袴を着けてゐる。一人で池上の方を散歩して來たと云つて、座敷へ案内したおすゑに向つて、懷つこく本門寺の話などした。
「君はよく知つてるだらう、近くだから」
「いゝえ、まだ一度もお詣りをしないんで御座いますよ」
「直ぐ其處に見えてるのに。……一日少し早く起きて行つて御覽よ。いゝお寺だよ」
　書生は頻りに話の種を造らうとして、絶え間なくいろんなことを喋舌つた。女中の名を訊いたり、おすゑの身元調を始めたりした。去年此處で仲間の宴會をしたことがあると云つて、
「おきよさんといふ人はまだこの家にゐるかね」と、やうやく知合ひの女中の名を考へ出して訊いた。
「え、居りますです」
「ぢや、手が隙いたら一寸此處へ遊びに來るやうに云つとくれよ。僕は去年醉つぱらつて、大變あの人に迷惑を掛けたんだよ」
　おすゑは座を立たうとしながら、口數の多いこの客の言葉の容易に切れないために、立つ機會がなくて、愚圖々々してゐたが、
「今おきよさんを寄越しますから」と云棄てて、やうやく出て行つた。そして、馬鹿正直にわざわざおきよを搜して、湯殿の側でお客の言葉を傳へた。
「へえ。私そんな人は知らないよ」と云つて、おきよは直ぐに行く風はなかつたが、暫らくして、おすゑが膳を持つて行くと、おきよは何時の間にか廊下に立つて、梅を見てゐる書生さんと、べちや〳〵話をしてゐた。
「御酒を召上がるんですつて」と、おきよは指圖した。
「僕は飲むといけないんだが、おきよさんが勸めて仕方がないんだよ」と、書生さんは此方を顧みた。
「持つてまゐりませうですか」と、おすゑは迷つて、生眞面目に訊いた。
「私に任せてお置きなさいな。いくら貴下が醉つたつて、私がちやんとお家へ送つて上げますよ」と、おきよは書生さんに向つて云つて、自分で階下へ下りて行つた。
　おすゑも二三度お銚子の取次をしたが、おきよは屢々その座敷へ顏を出して、酒の相手をしては長く側に坐つてゐた。義太夫を唸つたり、戲談を云つたりしてゐた。
「この方は貴女を大變褒めて入らつしやつてよ。大人しくつて容色がいゝからつて。……その上にまだいゝ事があるんですつて」と、笑ひながらおすゑに向つて、「だから、私貴女に奢らせようと思つてるの」
「本當にさう云つてゐたんだよ」と云つて、客は何を思つたのか、袂を索つて名刺を取出して、おすゑに渡した。
　おすゑは恭しく頂いたが、名刺の表をよく見もしないで、帶の間に挾んだ。そして、引留められるまゝにおきよの後の方に坐つてゐたが、おきよは馴々しく客の煙草を取つて吸ひながら、微醉ひの上機嫌で、自分の惚氣話をしてゐるのだつた。小石川の華族樣のお屋敷に奉公してゐた時分に、其處の若樣に付纏はれて困つたといふ話をして、客は身を入れて聞いてゐる。
「君もその人が好きだつたのなら、いゝぢやないか。何も逃げるには及ばないだらう」
「今になると、さう思ふんですけれどね。……だけど、私その方が可哀想で、とても決心が出來なかつたんですの。いつそ私がお暇を貰つて

姿をかくした方が、後々のお爲になるだらうと思つて、その方が學校へ行つて入らつしやる留守に急にお屋敷を出たのですわ。…それつきりお目にも掛れないし、手紙を一度差上げることも出來ないんですもの。情ないでせう。私、初めの間は人に隱れて泣いてばかりゐましたよ。泣いて〳〵泣飽いた擧句に、自棄になつて、どうでもなれつて勝手放題に日を暮らす氣になりましたの。甘しくもないお酒でも、その時分から無理に飮むやうになつたのですわ」

目顏に感情を籠めてさう云つてから、おすゐを顧みて、「私が女の癖によく飮むからおすゐさんは呆れてるわね」

「そんなことはないわ。私もお酒が頂ければいゝと思ふわ」おすゐは幽かに答へた。そして二人が面白さうに盃の取りやりをしてゐるのを見てゐた。書生さんの醉つた目元はます〳〵可愛らしくなつた、英語まじりで何か分らぬことを云つては、獨りで快活に笑つたり、おきよと二人で唄つたりした。

「僕は今夜此處へ泊らうかね、さう極まれば安心して飮めるから」と、興に乘つて云つた。

おすゐは二人に指圖されて、お銚子の通ひをしてゐたが、自分が座を外してゐる間には、話聲が靜かになつてゐるのに氣を留め出した。廊下に立つて、夕日が障子の裾を匐つてゐるその座敷を、遠く見詰めてゐると、いろ〳〵のことが空想されて、おきよの素振が忌はしくなつた。

暫らくして燈火が點いてから行つて見ると、書生さんは一人倒れて眠つてゐた。おすゐは火を直しながら、その寢顏を見守つてゐた。ふと思出して、貰つた名刺を出して見ると、入江といふ名前だつた。

入江さんと名を呼んで搖起したかつたけれど、それだけの碎けた氣持になるのさへ躊躇された。で、自ら目醒めるのを待ちながら、膳を片付け酒の雫を拭ひ、座敷の中を綺麗にした。客はます〳〵心地よささうに深い寢息を吐いてゐる。

「泊るつもりか知らん」と思ふと、おきよの今までの樣子が變に氣になつて厭だつた。で、階下へ下りがけにおきよの方に目を付けたが、おきよは謹み深い顏をして、嚴しい新客を離れの方へ案内してゐた。

「おすゐさん、お話に入らつしやい」と、ふと後から呼掛けられたので、振向くと、長逗留の支那人が褞袍を着て、手拭を持つて、湯殿へ行くところであつた。

「張さんはお一人でお退屈でせう」と云ふと、

「私明日東京へ遊びに行きます。貴女は行きませんか」

「一緒に連れてつて下すつて。…本當に連れてつて下さいな」おすゐは周圍に朋輩のゐないのを見て、甘えるやうな樣子をした。

「私、二三日東京に泊つて來ます。貴女は泊ること出來ますか」と、支那人は微笑して側に寄つた。

「えゝ、泊つて關ひませんとも。東京になら幾日でもゐたいんですわ。だから連れてつて下さいな。張さんのやうな親切な方に連れてつて貰ひたいんですよ」

おすゐは例にない蓮葉な調子で云つたが、やがて自分が言過ぎたのに氣附いて、笑顏で支那人に挨拶して側を離れた。

慌しく鳴る呼鈴に答へて、行つて見ると、書生さんは夢から醒めて欠伸をしてゐた。「遲くなつた。直ぐ歸るよ」と、懷の時計を出して見て云つた。

「お泊りぢやないんですか」と、おすゐは訝しげに訊いた。

「いや、泊らない方がいゝよ」と眞面目で云つて、「近々に、も一度緩くり來るよ。今度來る時には何か土産を持つて來ようね。君は何が好き？」

おすゑは只笑ひに紛らせて答へなかつた。そして、帳場へ下りて、勘定書を持つて來ると、書生さんは衣服を締直して、袴を着けて待つてゐた。

「おきよさんは何をしてる？　一寸呼んで貰へないかね」と、拂ひを濟ませてから云つた。

おすゑは承知して座敷を出たが、おきよの居所を搜さうとはしなかつた。多分離れにゐるのだらうと思ひながら、それを幸ひに會はさないで歸してやらうと思つた。そして、受取を持つて座敷へ出ると、

「何處にゐますのか、幾ら搜しても見付からないんですよ」と、誠しやかに云つた。

「變だね、外へは出りやしないだらうにね」と、客は物足らなさうだつたが、押して會はうとも云ひかねて歸りかけた。

おすゑは庭中の小祠の側まで見送つて別れを告げようとしたが、書生さんは別れともなささうにして、

「せめて、その大通まで送つてお呉れよ。急に淋しくなつて いけないから」と、賴むやうに云つた。

おすゑは否みかねて、素直に並んで歩いた。左右は畑で道は薄暗かつた。後を見上げると、小高い梅屋の部屋々々の燈火が闇の中に光つてゐる。おすゑはこのまゝ汽車まで行つてしまひたい氣がした。

路傍の小溝を縁取つた小笹が淋しさうに幽かな音を立ててゐる。ふと二臺の俥が掛聲をして來て、二人の間を分けて梅屋の方へ進んだ。

「これから彼處へ泊りに行くんだね」と、書生さんは羨ましさうに云つて、「僕は其處から停車場まで驅足で行かう。寒くなつたから」

「でも汽車にお乘りになれば、お宅まで直ぐですわね」

「あゝ。新橋へ着いたら、また一杯やつて、銀座をうろついて家へ歸るんさ。東京はまだ宵の口で賑かだよ」

大通へ出ると、活潑に別れを告げて、書生さんは足早に歩き出した。おすゑは暫らく立留つてその足音を見送つてゐた。

上りか下りか、汽車の音が闇を破つて耳に響いた。おすゑは人氣のない路傍に一人で立つてゐると、今に横濱へでも東京へでも行きたかつた。騷々しい明るみの中へ入つて、寢苦しい夜を送るよりも、今夜一晩でも親しい身内の側で、氣樂に眠りたかつた。電話で驚かされた夫に對する恐怖は次第に消えてゐて、今ひよつと此處へ會ひに來て呉れゝばいゝにと、知人の戀しさに堪へられなかつた。

二臺の俥は客を送り込んで歸りかけた。おすゑはそれに乘つて停車場へ行かうかと幾度も心が迷つた。

七

翌日の正午近くなつて、かの支那人は東京行の支度をして、わざ〳〵おすゑを呼んで、「貴女は一緒に行きますか」と、眞面目に訊いた。

「行かれたら後から參りますわ」と、おすゑは小聲で答へて、相手の柔しい目付が自分の顏に注がれてゐるのを見てゐた。髪を綺麗に梳つて、顏もよく磨いて油臭くなくて、支那人らしい厭らしさは感ぜられない。外套を後から掛けてやると、支那人はポッケットから名刺入を取出して、名刺の裏に自分の泊る東京の旅館の名を書いておすゑに渡した。

おすゑはそれを昨日貰つた書生さんの名刺と一緒に大切に仕舞つた。そして、出た後の支那

人の部屋の掃除に取掛つたが、ふと浮いた氣持になつて、聞覺えの奈坂のサハリを口の内で唄つた。

三浦だの入江だの、あの支那人だの、いろ〳〵の若い男に自分が柔しくされることを思ふと、鬱陶しかつた心も一時晴々した。……緣のない人にでもあんなに親切にして貰へると、おするは今初めて自分の身に價値がついたやうに思つて、萎けてゐた身體も伸々した。

が、すると、自分を粗末にして酷い目に會はせた夫に對する怨みが、これまでに增して激しく胸に込上つた。身分のいゝ男前も立派な人にさへこんなに可愛がられる私を、今更取返しのつかない憐れの者にしやがつてと、口惜涙を浮べた。そして、會ひさへしたら、かうもあゝも云つてやると、今までの自分の苦勞を心の中で數へ立てた。

さう思ひながら、再び紙箒を執つて、梅の枝の影の映つた障子を拂つてゐたが、やがて、差込む日を受けて輝いてゐる机の上の鏡立に目がつくと、その前に屈んで、自分の顔を見詰めた。わざと笑つて見たり、乾いた下唇を反して見たりした。こんなに窶苦が多かつたか知らんと、今初めて氣がついたやうに氣にかけた。

庭では離れの客が寫眞器械を持出して、彼方此方寫してゐた。女中や男衆を呼んでさまざまの姿勢をさせて寫しなどしてゐて、おするが廊下へ出ると、手招きして、仲間に加はらせようとした。が、一度も寫眞を撮つたことのないおするは、自分の姿がどんなに映るかと危まれて、いくら勸められても、思切つて前へ出て行くことが出來なかつた。そして朋輩の樣子を羨ましさうに見てゐた。

やがて、寫眞騷ぎが濟んで、庭に集まつてゐた大勢もばら〳〵に散つた。「貴女も寫しとけばいゝのに」と朋輩に云はれて、おするは後悔しながら、一人後から食事に行きかけると、飯炊きのおしまが側へ來て、「先き貴女に電話が掛つたよ。寫眞を撮つてると云つたら、また後で掛けると云つてたよ」と知らせた。

「さう？」と輕く云つて、おするはおしまから顔を背けた。取次いで貰つた禮をも云はないで、無愛想な顔付をして行過ぎた。

待つてゐた電話は夕方まで掛つて來なかつたが、その間におするの心は絶え間なく動搖した。どうしていゝのか、確かりした決心は何時までもつかなかつた。只此處で夫に會ふ氣にはどうしてもなれなかつた。ふと其處へ夫の姿が現はれて、主人や朋輩の目に觸れたらばと、思つただけでも恥かしくて、ぢつとしてゐられなかつた。ともすれば、胸騷ぎがして身體が慄へた。

おするは夕方までに、何の考へもなしに屢々女中部屋へ入つた。そして、行李を開けて自分の持物を改めた。財布を帶の間に挾んで座敷へ出たかと思ふと、また元の處へ仕舞つたりした。

日が暮れると、幾度も隙を見て裏門の坂道へ出てゐたが、おとくは「今日いやにぼんやりしてるのね。どうかしたの」と訊いた。

「いゝえ」と事もなげに答へたが、おするは惡い企てを見破られでもしたやうに相手の目が眩しかつた。

八

晩の混雜も一先づ片付いて、女中共も氣樂に息の吐ける時分、おするは夢中で裏門から大通へ出た。逃出す決心をしたのではなかつたが、家の中に落着いてはゐられなかつた。そして、通で俥を見つけると、考へる間もなくそれに乘つて、停車場へ向つた。時々後を顧みては

俥を急がせた。

切符を買つて上り列車に乘込むまでは、大罪を犯したもののやうに恐ろしくて、行先も不安だつたが、列車が動き出すと、温かい思ひが胸に湧いた。兎に角叔母にさへ會へば始末は付けて吳れるだらうし、東京でなら誰れに遠慮もしないで、夫に會ふことが出來る。東京でなら朋輩を憚らないで勇吉に會ふことも出來る。東京には自分に柔しいあの支那人なども行つてゐる。……

で、おすゑは手賴りになる人々の中へ入つて行くやうな氣持で東京の市街へ踏込んだ。牛込のさのやといふ家を尋ねて行く途々、叔母に告けるべき體裁のいゝ言譯を思案しながら歩いた。

「その石垣の横手を上つて行つた突當りの家です」と敎へられたので、指差された石垣に沿つて行くと、さのやの軒燈は直ぐ目に映つた。

狹い道の左右には、同じやうな小さい家が並んで、梅屋のやうな構への大きな家は一つもなかつた。おすゑは叔母のゐる家が思つたより見窄らしいのに驚いた。これなら、いくら田舍でも梅屋などに勤めてゐた方が幅が利くと思ひながら、暫らく勝手口に立つて、家の樣子に耳を止めた後に、隙間から言葉を掛けた。

「何方？」と答へて、戸を開けて額を出したのは叔母のおきくであつた。戸の蔭に身を寄せてゐるのを、軒燈の光で覺束なく見分けて、

「まあ、お前どうしたのさ。どんなに心配してゐたか知れないよ。先き梅屋から電話が掛つて、私吃驚しちやつたよ」と、聲に力を入れた。

先を越されたので、おすゑはおど〳〵して、言譯も口から出なかつた。叔母は一足外へ出て來て、おすゑの顏を見詰めたが、「兎に角家へお入りよ。こんな處で立話も出來ないから」と、愚圖々々するおすゑを家へ引入れて、玄關脇の、子供が一人でゐる部屋へ連れて行つた。

「彼處に居づらければ、手紙で一應私に知らせて吳れゝばいゝのに。出拔けで吃驚しちやつたよ。一體どうしたの？」

問詰められると、おすゑは涙ぐんだ。自分の淺薄な仕業が恥かしくなつたが、外に尤もらしい口實は思付かないので、夫の電話の事を、さも嚇文句を聞かされたかのやうに大袈裟に話した。……「勇吉があの家へ來て若しも無法なことでも云出したら、私は構はないけれど、主人にも濟まないし、叔母さんの御迷惑にもなりやしないかと思つて、私心配で仕方がなかつたんですの」

「何て氣が小さいんだらう、お前さんも」と叔母は笑つて、「それつぱかりのこと何でもないぢやないかね。あの男だつて、自分から勝手に別れてて、今更文句をつける譯もなからうしさ。此方からこそ話をつけて子供の養育料ぐらゐ取つてやつていゝんだもの。……居所が分つてれば、私が出掛けて、幾らでも出させるやうにして上げるよ……」

兎に角今から梅屋へ歸れはすまいから、今夜は此處へ泊つて、明日の朝の内に歸ることにすればいゝ、一人で歸るのが厭なら、私が隨いて行つて言譯をして上げる、今先方へ電話で知らせとくから、安心して茶の間で家の老婆さんと話でもしといでと、叔母は獨合點で極めた。そして、茶の間へ誘つて行つて、主人の老婆に引合はせて、一夜の宿を賴んだ。僅か四五日の間にも汚れ目が脫けて、持前の容色が引立つたおすゑを、自分の姪として人中へ出すのが嬉しかつた。

が、おすゑは老婆に向つてはき〳〵口は利けなくて、容易に火鉢の側へも寄れなかつた。叔母が電話で梅屋の主人に丁寧に言譯をしてゐる

のを洩聞きしながら、最早再び彼處へ行けるものかと思つてゐた。たとひ、叔母が連れて行つて呉れるにしろ、そんなづう〳〵しい眞似は私には出來やしない。……と、自分の處置を案じて萎れてゐた。

「さう怒つてやしないよ。只ね、家が忙しいんだから、明日早く歸つて呉れつて」と、叔母は安心したやうに云つて、「お前も一言斷つて來ればいゝのに。私はまた屹度濱が戀しくつて歸つたことと思つたから、電報を打たうかと思つてゐたんだよ」

「どうも濟みませんでした」と、おすゑは畏つて頭を下げた。その樣子が叔母の目には子供染みてゐて可笑しかつた。

「でも居づらくはないんだらうね。濱にゐて、荒仕事をしてるよりや餘程氣樂だらう」と、力を付けたが、

「えゝ」と、おすゑは曖昧に答へた。

「まあ二三ケ月辛抱しといで、その中には私にも考へがあるから」

叔母は家の者に少しも遠慮する風はなかつた。そして座敷はひつそりして、さして客が來てるさうには思はれないのに、二階へ上つたり電話口へ立つたり、緩くり話をしてはゐなかつた。「一寸手傳つて貰はうかね」と云つて、持込まれた丼を膳に載せて、おすゑに渡した。

おすゑは窮屈に坐つてゐるよりは、手助けでもする方が却つて氣樂だつた。指圖された通り階子段を上つて、話聲のしてゐる右手の部屋へ入つた。瘦せこけた貧相な男と、鼻の低い藝者とが、不審さうに此方を見た。おすゑは額に愛嬌を浮べて、恭しく膳を置いて、直ぐに引下つたが、襖の外へ出ると竊かに冷笑した。

よく見ると、まだ二つ三つ部屋があるらしいけれど、どれも狹い粗末な部屋としか思はれない。こんなだとても梅屋ほどのいゝ客は來ないだらうにと、叔母が何時までも此處に勤めてゐるのを怪んだ。そして、周圍の客の氣色に耳を留めながら、階下へ下りかけると其處へ叔母が忙しさうに上つて來て、小聲で用事を言付けた。

おすゑは叔母の後に隨いて、奥の室へ入つて寢床を伸べたり、方々の戸締りをした。どの部屋にも一人の男と一人の女とがゐた。

「この近所の家は皆なこんな稼業をしてゐるんでせうね」と、階段を下りながら訊いた。

「あ、この通は皆な待合だよ」

「隨分どつさりあるんだわね」

茶の間には目の大きな小娘と若い女中とが、戸外から歸つてゐて、夜食の支度をしてゐた。おすゑは食事の仲間入を勸められるのを斷つて、叔母の情で、一人先へ寢床に就いた。

夜は更けてゐるし、身體は疲れてゐるし、床に就くと、張詰めた氣が一時に弛んで深い睡に陷つた。誰れかに呼起されたやうな氣がして目を醒ますと、最早薄明るくなつてゐた。側には叔母と、も一人の女中とが、正體なく眠つてゐる。おすゑは異つた人と寢てゐるのを不思議さうに見廻して、昨夕梅屋を拔出てからの事を夢のやうに思出した。裏門を出て淋しい野徑を辿つて、ふと目に付いた俥に乘つたことを思ふと、自分が狐に抓まれてゐたやうな氣がした。

で、あれほどの家を譯もなく出て來た輕卒が後悔されたが、「……だけど、もう彼處へは行かれない」と溜息吐いて、叔母が何と云つて勸めようとも、足を向けまいと覺悟をした。東京にゐたつて、五圓の里扶持ぐらゐ稼げないことはないと、自ら恃む氣にもなつた。

戸外には物賣りの聲がし出した。次第に人通りも繁くなつた。冴えた朝日がいゝ氣持に隙間を洩れた。すると間もなく、次の間から老婆が聲を掛けて皆なを呼起さうとした。おすゑはそ

れに答へて、叔母を搖起して、自分も起上つた。雨戸を繰開けると、縁に觸れる朝風は底冷たかつたが、空はよく晴れて、何方を見ても春めいてゐた。

おすゑは田舎の梅の散りかけてゐる話などしながら、甲斐々々しく朝の用事を手傳つた。客は皆歸つて、座敷の障子は開放された。夜具や座蒲團は縁側に持出されて日に干された。其處らが片付くと、叔母は、温かい窓際に寄つて息休めをしてゐるおすゑに向つて、今思出したやうに、

「さあ、これからお湯へ入つて、直ぐに出掛けることにしようね。愚圖々々してるともう正午だよ」と促した。

「さうねえ……」おすゑは浮かぬ顏をしてゐたが、やがて、「叔母さんにお氣の毒だから、私一人で行きますわ」

「一人で？」叔母は意外に感じた。「今日はお天氣がいゝし、私も梅見がてら一日遊んで來たいんだよ」

「でも、何だか濟みませんわね」

「何故？……私は些とも構はないよ。お前さんのことは私が引受けて來てるんだから、これから、よくなつて呉れさへすれば、私は些とも骨惜みはしないよ。……せめて梅の間だけ彼處で辛抱しといでな。外へ行かうたつて、さう急にいゝ家があるもんぢやないからね」

から柔しく云はれると、おすゑはます／＼叔母に逆ひかねた。自分の望んでゐることは一言も口に出せなかつた。そして、叔母の手で引摺られて、梅屋の閾を跨ぐことを思浮べると心は滅入つてしまつた。

「來月になつたら、一日お暇を貰つて、一緒に濱へ行くことにするから、それまで我慢しといでな。朝吉のことは些とも心配することはありやしない」と、叔母は相手の滅入つた影を見つけたやうに云つた。

「……私ね。折角東京へ來たんですから、次手に買物をして行かうと思ふんですがね。……それに一二軒寄つて行きたい家もあるんですけど……」

「そんなことは今度にして、今日は早くお歸りよ」叔母は口早に打消して、急立てて湯屋へ連出した。

そして、途すがら、若し前の夫が會ひに來てどんな甘いことを云はうとも決してその言葉を眞に受けるな、浮かりして馬鹿な目を見ないやうに氣をつけよ、と、染々と說聞かせて、

「またあの人に掛り合つちや、これまでの苦勞が何にもなりやしない。お前さんにもよく分つてるだらうね」と念を押した。

「えゝ」と、おすゑは首肯いた。

「お前さんは若いんだもの。賑町の裏長屋で燻つてゐるには及ばないんさ」と、叔母は橫濱へ來るたびに唆かすやうに云つてゐたことを繰返した。

湯屋には幾人も藝者が行つてゐたが、叔母の顏を見ると、左右から皆親しさうに言葉を掛けた。

九

叔母は身支度を濟ますと、一度梅屋へ電話を掛けて置いて出掛けた。通へ出ると手土産の菓子折を調へた。おすゑは後に隨いて電車に乘ることは乘つたが、素直に向うへ行く氣にはなつてゐなかつた。そして、電車が意地惡く駛せるにつれて、心は目眩しくして焦立つた。

ふと思切つて、叔母に打明けようとしたが、叔母の平氣な目顏を見ると、今更ら云出す機會はなかつた。で、新橋に着いて、切符を買つて、待合室に休んでゐる間も、さして口は利かないで、話をし向けられても卒氣ない返事をするば

かりだつたが、不斷の氣性を知つてゐる叔母は深く怪みもしなかつた。

發車時間も迫つて來た。おするは最早一刻も躊躇されなくなつた。自分の生死の別れる瀨戸際に立つてゐるやうに、只恐ろしさ厭はしさに戰いたが、すると、ふと智慧がついて、

「私、一寸便所へ行つて來ますわ」と云つて、慌しく待合室を出た。叔母が何か云つたけれどそれは耳に入らなかつた。

混雜の中を分けて、後をも見ずに、ひた走りに走つた。息を切らし／＼餘程の道を逃延びたと思ふ頃立留つた。そして周圍を見ると、幸ひに叔母の姿は見當らなかつた。が、往來の人は不思議さうに此方を見てゐた。おするは思はず首垂れて、胸を鎭めて當てもない道を靜かに歩んだ。

方角も分らないし、これから自分が行くべき處も分らない。……おするは思ひあぐんだ果に、電話で聞いた夫の居所を、唯一の手頼りにして、思出さうと一念を凝らしたが、あの時狼狽へてゐたので、四谷と覺えてゐるばかりで、詳しいことは記憶に殘つてゐない。訪ねるには手蔓がない。

でも、差當つて身の置場はないので、おするは四谷を目當てにして道を取つた。歩き疲れると電車に乘つた。此處が四谷だと敎へられて、見付で電車を下りて、あたりを見廻し／＼歩き出した。すると、橫顏や後姿の夫に似通つた男が頻りに目に付いたが、よく見ると、どれも赤の他人だつた。

ほか／＼と溫かい日の中を、いろ／＼の人間がごた／＼通つてゐる。おするは若しも夫に行會はないかと當てもなく歩いてゐる中、身體は汗ばんで心はぼんやりして來た。そして、暫らくの間は只機械のやうに足を動かしてゐた。どの町を通つたのか氣付かぬ中に、再び堀端に出た。見覺えのある神樂坂の方が直ぐ目の前に見えた。おするはわれとわが心を強ひて落着けて、路傍に足を休めて、この後の處置をよく考へようとしたが、何處も人目が繁くて、相應しい休み場所は見當らない。

で、誰れかに急立てられるやうな氣持で更に歩み出した。公園ぐらゐありさうなものと、目の屆く限りを搜したが、そんなものは何方にもないらしくて、行つても／＼只電車や俥や雜多な人間が、絕え間もなく通つてゐる。

おするは泣出したくなつた。……叔母には一生會はす顏はないし、外に知人のゐない東京では、差當つた奉公口の世話を頼む處もありはしない。……おするは朝吉の里扶持の出道も杜切れてしまつて、最早浮ぶ瀨のない身になつたと思ひ詰めてゐたが、すると、この上一刻も東京などにゐる氣はしなくなつた。こんな土地に一人でゐるのが心細くなつて、「生きるも死ぬるも朝吉の側へ歸つてからのこと」と、極めると、今までどうかして東京で手頼りを求めようとした幽かな心の力も弛んで、一途に橫濱の家へと急がれた。

新橋へ來て切符を買ふ前に、朝吉への土産に飴でも買つて行かうと思つて、金入の中を檢べると、中には名刺が二枚疊み込んであつた。入江といふ書生さんのと、張といふ支那人のと。

おするはふとこの二人の顏立や、柔しい言葉を思出して、廣い東京を顧みた。

＋

汽車を下りた時は、長い日も暮れてゐたので、おするは家へ歸るのに都合がよかつた。路次近くなると、近所に氣を配つて、薄暗い處を選んで通つた。足音さへも忍んだ。そして、自分の家の前まで來ると、戸の側に擦寄つて内の樣子を伺つた。母の聲も妹の聲もしてゐない。母

に甘えてゐる子供の聲が隣の家から洩れて來るばかりである。

　妹はまだ勸工場から歸つてゐないのか知らんと疑ひながら、結句妹のゐないのを喜んで、そつと戸を開けて入ると、意外にも親子の姿が直ぐ目についた。

「あゝ、姉さんが」と叫んで、妹は呆れた顏して立上つた。その聲に驚かされて、行火に頭を押付けてゐる母も顏を上げて、目を蹙めて此方を見た。

「どうしたの、姉さん。さつき叔母さんが來て、そりや大變だつたよ。私達もどんなに心配したか知りやしない」と、妹は忙しく言葉を續けた。

　おすゑは叔母といふ言葉を聞くとぎよつとした。「そして、叔母さんはどうして？」と、やうやく問返した。

「東京へ電話を掛けとくつて、今し方郵便局まで行つたところなの。……姉さんが今夜此方へ歸つて來なければ、警察へ願つて搜して貰ふなんて、叔母さんも大變心配してゐたよ。……でも、まあよかつたわね」

　母親も行火から匍ひ出て、娘の前に躙り寄つてくど／＼譯を訊き出した。が、おすゑは自分の仕業について、母や妹も安心さすやうな詳しい話はしなかつた。

「叔母さんは怒つてゐるだらうね」と、訊いて、最早何處へ行つても、叔母の手をのがれられぬのを覺悟した。

「いゝえ、些とも怒つてやしないよ。只姉さんが無分別なことをしなければいゝがと、そればかり心配してゐたよ」

「私、叔母さんには本當に濟まないことをしちやつた」

　おすゑは悲しさうな聲でから云つたが、叔母がさして怒つてはゐないのを知ると、心が稍鎭まつた。で、火鉢の側へ寄つて、消えかゝつた火を熾して、冷たい手を翳した。あたりをよく見ると僅か四五日の間に家の中が一層汚れてゐるのが目に立つた。こんなだつたかと疑はれるほど、疊は赤茶けて、壁には斷隙が出來てゐる。そして物の饐えるやうな厭な臭ひが鼻を襲つた。おすゑは夫に離れてから一年あまりこんな家で暮らしてゐたことを思ひ浮べ出したが、すると、

「そら、叔母さんだ」と、妹が悦しさうに叫んで、上り口へ駈けて行つたので、おすゑも思はず振返つた。

　叔母は些しも邪慳な顏付をしてゐなかつた。

「お前さんも隨分人困らせをするぢやないかね」と、一言怨みがましいことを云つただけだつた。

　差向いて坐つて、新橋で吃驚したことから、今までの道筋を口輕に話した。そして穩かにおすゑの腹の中を尋ねた。茶屋奉公が厭なら厭で、この先どうするつもりか、確かりした量見がついてゐるのかと問詰めた。

「私、奉公が厭ぢやないんですけれどね」と、おすゑは涙ぐんで、「梅屋へだけはどうしても行く氣になれませんの。……」

「ぢや、早くさう云へばいゝのに」と、叔母は事もなげに云つて、「外の家なら勤める氣はあるんだね。……お前さんは陰氣だから、あんな騷々しい家には性が合はないかも知れないよ。馴れてれば何でもないんだけどね」と、暫らく考へてゐた。それを機會におすゑは、

「私、同じことなら東京で奉公したいと思ふんですがね」と云つて、叔母に見棄てられまいとして、そのいゝ返事を待焦れた。

　が、叔母はすぐに快く引受けては呉れなかつた。相手の心を危むやうな口振であつた。どうせ今夜の終列車で歸ればいゝのだからと、緩

くり話を極めることにした。そして、皆なに蕎麥を奢つて、笑ひ興じながら箸を執つた。

「お前はあれから何處へ行つてたい。活動でも見てゐたの？」

叔母の言葉は冷語のやうにおするゑの耳に響いた。で、

「いくら私が馬鹿だつて、そんな氣樂な眞似が出來るものですか。どうして叔母さんにお詫びをしようかと思つて、そればかり考へたんですわ」と、眞面目に言譯した。

「さうだらうね、お前のことだから。……だけど、今の若さでそんなに物を苦にしてゐちや壽命が縮まつてしまふよ。あんまりづう〳〵しい女になつても困るけれど、くよ〳〵してゐたつて、何處からも御褒美が出りやしないんだからね。若い内に些とは面白い目をしなきや詰らないと思ふよ。それも人によりけりだけど、お前なんぞ氣の持ちやう一つでこれからいくらもいい月日を送れるんさ。……梅屋へも彼處の主人と牛込の家とが懇意だから、私が無理に頼んで上げたのに、お前のやうだと私も張合が拔けちやつたよ」

叔母は調子に綾をつけてこんなに云つてゐたが、何となしに東京の戀しくなつてゐるおするゑの心には、それが一々強く響いた。梅屋で默つて聞いてゐた朋輩の身の上話や、いろ〳〵の東京の客の浮いた話を思出してゐると、その方へ心は惹寄せられた。何時までも此處で暮らして、長島町の伊豆屋へ僅かな給金でその日稼に出て行くのは、甲斐性がなさ過ぎるやうに思はれた。それにこの前彼處の旦那に相談もしないで、梅屋へ行つたのだから、旦那も屹度氣を惡くしてゐるだらうと案ぜられた。

で、叔母の方から勸めるのを心待ちにしてゐたが、叔母は母や妹を相手にして、外の世間話をし出した。櫻が咲いたら一日花見に出掛けるやうにと、妹と約束したり、この秋の父親の法事には是非此方へ來て立派にしたいと云つたり、獨りで座を賑はせた。おするゑの顏にはちら〳〵目をつけながら、肝心な話は持出さないで、やがて時刻を見計つて、歸支度に取掛つた。

「梅屋へは私が二三日中に行つて、譯を云つて、荷物は直ぐに此方へ屆けることにしよう。おするゑさんもよく考へてお置き」と云置いて、煙草入を收めて立上つた。

おするゑは物足らぬ思ひをして、停車場まで見送つた。

「今度東京へ來るやうだつたら、よく覺悟をしてお出でよ。迂濶に出て來ちやお互ひに困るからね」と、別れ際に意味ありげに云つた。

十一

翌日朝早く、おするゑは土産物を持つて朝吉に會ひに行つて、久振りに乳を呑ませたり抱いてやつたりした。午後の半日は、隣近所の人から隱れるやうにして、陰氣な家の中で行火に當つて、寢てばかり暮らした。母親に云はれても、つい角立つた返事をした。碌々食事をもしなかつた。そして、うと〳〵しながら夢とも付かず、三浦だの入江だのの顏形を空に描いてゐた。すると、これまで覺えなかつた異樣な快感が肉體にも傳はつた。最初夫に唆かされた折の有樣さへまざ〳〵と浮んで心に迫つた。

目を瞑つてゐれば、果もなく快い心持が續いて、いろ〳〵の男に可愛がられ、いろ〳〵の男と自由に好きな話をしてゐられるのであれば、目を開けて汚れた部屋で手足を動かす氣にはなれなかつた。

おするゑは假寢から昏睡に陷つた。そして不氣味な夢を見つゞけてゐた。獸のやうな顏をした胸毛の濃い荒くれ男に追廻されて手籠にされさ

うになつて藻掻いてゐたが、母親に聲を掛けられて、ふと目を醒ました。

「やつぱり身體の加減が惡いのかね。大變魘されて」と、母親は行火越しに覗いた。

「うゝん。私何處も惡くないの」

「さうかい。……だけど、お茶屋奉公は隨分氣骨が折れることだらうな。おきくもいろ〳〵と世話をして呉れるけれど、お前はもうそんな處は斷つたらいゝだらう。長島町の旦那にお賴みすれば生活は立たんことはなからうから」

「私もう伊豆屋へ賴みに行かないよ」おすゑは拗ねたやうにさう云つて、母親から顏を背けて寢返りした。折々術なさゝうに溜息を吐いてゐた。

日が暮れて妹も歸つて來たが、おすゑは食事拵へをも母や妹に任せて、自分は手出しをしなかつた。そして、早く戸締りをして、三人枕を並べて寢床に就いた。妹は昨夕の夜更しと一日の疲れのために直ぐと眠入つたが、おすゑの目は却つて夜になつてから冴えてゐた。

と、ふと郵便の聲がして、戸の隙間から手紙が投込まれた。おすゑはランプを點けて枕許に蹲んで披いて見た。それは嚴い男文字で書かれた叔母の手紙であつた。

「……梅屋の主人にはやうやく申譯相立ち候へば御安心なされたく候。さてお前樣の考へはいかが相成候や。若しも再び當地にて勤めたしと望み居り候はば、とくと決心して末永く勤めるつもりにてお出であるやう呉々も注意申し候。さすれば荷物は當家にて預り置き申すべく、若し何時までも御地にて暮らさるゝことに極り居らば、二三日中にお屆け申すべく候へば、至急御返事下されたく候、尙只今よろしき勤め口は無之候へども、お前樣の覺悟次第にて、當分當家にて手助けをなし下さらば好都合と存じ候。主人も左樣申し居り候。兎に角よく御考への上御返事相成たく待居り候……」

おすゑはこれを讀むと俄かに浮立つた。母親を呼び起して、手紙の文句にいゝ、おまけをつけて話して、明日の朝直ぐに出て行くことに決めた。そして、母親が氣遣はしがるのを頭から打消して、

「私、これから氣を持直して、二三年せつせと稼いで、彼方で世帶を持つて、お母さんや朝吉を皆な連れて行くことにしようと思ふよ」と、勢ひづいて云つた。

夜中に幾度もランプを點けては起上つて、する事もないのに家の中をまご〳〵してゐた。

十二

翌日さいゝやの閾を跨ぐと、叔母はあまりの早さに驚いた。

「懲りもしないでまた來たんだね。もうとても來ないだらうと思つてゐたのに」と笑つて、機嫌よく迎へた。

「此方に置いて頂けるんでせうか」と云つて、おすゑは自分の堅い決心を微見かした。

「當分手傳つてゐてお呉れな」と、叔母はおすゑに耳打ちして、も一人の女中は都合で暇を出すことになつてゐるから、當分その代りになつて勤めて呉れと云つた。

おすゑは叔母と二人で働くのが悅しかつた。で、見たところ人のよささうな老人の主婦に挨拶をして、事が極まると、直ぐに叔母の指圖を受けて甲斐々々しく立働いた。

此家の內輪の樣子も時々話して聞かされた。養子夫婦は此頃京橋で鳥屋を出してゐて、老婆は何もしなくつてもいゝのだけれど、住み馴れたこの土地を離れたくないと云つて、この稼業を續けてゐることや、今のところ殆んど叔母一人で切り廻してゐることなどが分つて來た。お光と云ふ小娘がよく京橋から遊びに來ては、金切聲を出して小間しやくれたことを喋舌つた。

そして、老婆の前で常磐津を浚つたり、女中を誘つてお汁粉を食べに行つたりした。おすゑも來た翌日お作を云付けられて御馳走になつた。

梅屋のやうに坐り込んで客のお相手をすることがないのは氣樂だつたが、その代り面白い浮いた話を聞くこともないし、朋輩のない代りに、老婆やお光に一層餘計に氣兼ねをせねばならなかつた。實入りだつてとても梅屋と比べものになりさうではなかつた。

「今階下にゐた女中はこの頃此處へ來たのかい。一寸いゝ女だね。……あの女はどうかならんかい」と、ある老人の客が云つてゐるのが、おすゑの耳に入つた。

「さうですねえ。貴下ならいゝでせうよ。まあ當人に當つて御覽なさいな」と、叔母は笑ひながら答へてゐた。

「人を馬鹿にしてゐるよ。禿頭の癖に」と、おすゑは心で嘲つて、その座敷へ行くと、わざと無愛想にした。

二三日と立つ間に、藝者に顏馴染も出來て、偶々客の名前をも覺えた。一寸ぐらゐ叔母が家にゐなくてもさうまごつかなくなつた。

ある日叔母が勘定の滯つてゐる客の家を二三軒催促に廻つてゐる留守の間、おすゑは老婆に灸を据ゑてやつてゐた。小さな艾では利かないと云はれて、思切つて大きくしたが、火が背筋を灼くのを見てゐると、自分の方が却つて身體が慄へた。

「熱いでせうねえ」と、同情して訊くと、

「熱くなくつちや利かないよ。私の身體なぞは馬鹿になつてるから、灸が中々應へないんだよ」と、云ひながら、老婆は齒を噛締めて我慢してゐた。

身柱にも三里にも据ゑてしまふと、老婆はさも快ささうに息を吐いて、「お前も時々灸を据ゑるといゝよ。私が點を下して上げるから」と、今にもさうしさうだつたので、おすゑは恐れて逃出した。

と、そつと格子戸が開いて、靜かな聲がした。叔母の留守に變な客に來られてはと案じながら出て見ると、客は梅屋で見たことのある人だつた。

「君は此方へ來てるんかね」と、客も氣がついた。

おすゑは二階へ案内して、奧の座敷へ通すまでに、やう／＼客の名前を思出した。「貴下は確か倉賀さんでしたわね」と、馴々しく言葉を掛けた。

「君が此處にゐようとは思はなかつた。三浦はこの頃此處へ來ないかい？」

「どうですか。私四五日前に來たばかりですから、何方にもまだお目に掛りませんのですよ」

おすゑは梅屋で會つた四人連れを思出した。一座の中で一番大人びて男前も立派だつた三浦や、皆なに揶揄はれてゐた大井の顏付や話聲はよく心に殘つてゐたが、この人の事はぼんやり思出されるばかりだつた。でも、顏を知られてゐるだけに心が解けて、梅屋のあの日の話などしてゐると何となく懷かしかつた。「お馴染は？」と訊いて、藝者を呼ばうとしても、叔母さんが歸つてからでいゝと云つて、倉賀は縁側近く寢そべつた。そして、座を立たうとするおすゑを引留めて、彼處を出て來た譯を訊いたり、三浦や大井の身の上を話して聞かせたりした。

「叔母さんのコレは來るかい」と、ふと拇指を突出したり、鼻を指差したりして變に笑ふので、

「コレつて何です」と、おすゑは怪んだ。

「何だ白ばくれて。……落語家の情夫さ。來るだらう」

「あんな事云つていらつしやる」

おすゑは戯談として聞流したが、倉賀は「ちや、種はまだ知らないんだね。よく気をつけといで、今に遊びに来るから」と、誠しやかに云つた。

が、そんなことがあるものかと、おすゑは些しの疑ひも起さなかつた。最早日影も縁側から退いて、そろそろ晩の支度をせねばならぬ頃となつたので階下へ下りて行つた。倉賀は緩くり遊んで行くつもりで、食物を誂へて酒をも言付けた。

叔母は丁度帰つて来たところで、衣服を着替へてゐた。倉賀の名を聞くと、「三浦さんの連中ではこの人が一番確かなんだよ」と云つて、「とん子さんを掛けて？」と訊いた。そして、忙しさうにおすゑに晩の指図をしてから、二階へ上つて行つた。

お光は島の土産を持つて、泊りがけで遊びに来て、老婆の顔を見るや、「私、お腹が空いて空いて仕様がないの。紀ノ國のお壽司を御馳走して下さいな」と強請んだ。

おすゑは叔母の留守の間に楽をしただけ、何かしら身體が忙しいのに、傍でお光がはしやぎ廻るので、忌々しく思つた。少し窘めたらよささうに思ふのに、老婆は煩いほど甘かつた。

「こんなに我儘で、贅澤で、末はどうするんだらう」と、自分がこのくらゐの年頃から、苦勞ばかりして誰れにも大事にされたことのないのを思合はせて、妬ましかつた。そして、壽司の殘りを小皿に取つて呉れても、心で逆ふつもりで、手を付けなかつた。

「遠慮深いわね。遠慮してちや人間は損よ。……おすゑさんは叔母さんとは丸で性分が異ふわね」と、お光は小間しやくれた口を利いた。それがおすゑの耳には痛く響いた。

灯が入ると、一度に三組も客が来て、座敷は塞がつてしまつた。おすゑは戸惑ひして、屢々叔母の小言を喰つた。倉賀は馴染のとん子を歸した後も、まだ愚圖々々してゐたが、おすゑの姿を見るたびに呼入れて、さも話したいことが溜つてゐるやうな口吻で話した。

「まだ手があかないんかね。何時もこんなに忙しんかい」

「いゝえ、さうでもないんですよ。今夜のやうなことは私が来て初めてですの」

「……僕は一つあの後の大井の話を緩くり君にして聞かせたいんだけど」と云掛けて、「も少し待つてるから、手が空いたら僕を神楽坂まで送つて行つて呉れないか。今夜は縁日だから賑かだよ」

「中々遊びに出しては呉れないでせう。とん子さんを連れて入らつしやればいゝのに」

「いや、彼奴と歩くのは御免だよ。家鴨のやうな態をして歩きやがるからね」と、倉賀はさも厭さうに眉を顰めて、「叔母さんに聞いて御覧。僕となら、いゝつて云ふから」

「えゝ……」

おすゑは隣座敷で鳴つた手の音に答へて出て行つた。そしてその客を送り出して、ふと外を見ると、淡い月が道を照らしてゐる。横町の抜道をぞろぞろ通つてゐる人の姿は見えないで、足音や話聲のみ聞えた。おすゑも倉賀に付いて皆なの行く方へ出て見たかつたので、邪気ない気持でそつと叔母に許しを乞うたが、叔母は首を振つて、「今夜はいけないよ」と、沒義道に斥けた。

意地悪く今夜は忙しかつた。倉賀の側へ行つて断つて、二言三言話して来ると、帳場には坊主頭で額のテカテカ光つた愛嬌のある男が、煙管を指先で器用に廻しながら、老婆を相手にべらべら饒舌つてゐる。

「一寸大急ぎで行つとくれ」と、叔母はおすゑに囁いた。

「あの人は誰れ？」と訊くと、
「幇間だよ」と答へて、叔母は考へ〱二三人藝者の名を並して、
「あの人は決して同じ女を二度呼ばないんだから……」
「まあ厭だ」おすゑは呆れたやうに云つて、輕薄なその男を蔑らしさうに見やつた。そんな男に買はれる藝者を憐んだり卑んだりしながら、二三軒廻つて歸ると、幇間はお光を前に置いて、爪彈きで「縁かいな」を唄つて聞かせてゐる。首で拍子を取り〱巫山戯て唄つてゐれど、その聲は食ひつきたいほどによかつた。
幇間は間もなく歸つた。おすゑは例にない氣忙しい思ひに疲れて、ガッカリした。夜食が濟むと、老婆もお光も寢床へ入つた。叔母は手早く跡始末をして、長火鉢で煙草を喫ひながら、眠たさうなおすゑを見詰めて、
「お前も何時までこんな事をしてもゐられまいね。もう厭になつたらう」と、相手の心を索るやうに云つた。
「私共とも厭だなんて思つてやしないわ。さう見えて？」
おすゑは[illegible]て自分の辛抱振を見せて喜ばせようとしたが、叔母は意外にも、「こんな家に永くゐたつて仕方がないよ」と呟いた。そして、
「一度よくお前に話したいことがあるんだがね」
と、意味ありげに云つた。
「話したいつてどんなこと？」
「さう急ぐことでもないよ」
おすゑはそれを聞きたがつて焦れたが、叔母は進んで何も云はないで、話を客の噂に移しながら、寢支度をした。
「でも、倉賀さんは隨分惡口言ひだわね。叔母さんには落語家の情夫があるんだなんて、酷いことを云ふのよ」と、おすゑは笑ひ〱何の氣なしに云つたが、すると、叔母は厭な顏をした。
「乞食にも私の情夫があるんだよ。どうだらうと大きなお世話さ」と、角立つた卑しい口調で云つて、枕に就いて背を向けて口を噤んだ。
おすゑは變な氣がしたが、やがて、忌はしい疑ひが萌すと共に、云はでものことを口に出した自分の方が極りが惡くなつた。
叔母さんも倉賀さんの云つた通りなのだらうか。四十にもなつてゐるこの叔母でさへさうなのだらうか。……おすゑは只一人手頼りにしてゐる人が手頼りにならない樣に思はれた。
「皆なさうなのだ……」おすゑは燈火を消して、叔母の側に敷かれた夜具の中へ息を殺して入つた。更け行く夜に堪へがたい淋しさを覺えて獨り涙ぐんでゐた。
夜が明けると、叔母の樣子は不斷と少しも異つてはゐなかつたが、それでもおすゑの心には妙に隔てが出來た。以前よりも一層素直に指圖通りに働いてゐても、弾んだ口は決して利かなかつた。
横濱からは妹が覺束ない筆で音信を寄越したので、皆なが無事に暮らしてゐることは知れたが、此方から月末までにどれほどの金を送られるかと、自分ながら不安心だつた。里親へは成るべく十分の心付けをして置きたいのだけれど、浮かりすると、極めただけの仕送りも危まれた。
三月も最早片手で數へられるほどの日數を殘してゐるばかり。おすゑは櫻の咲く町へ着て出られるやうな衣服一つ持つてゐなかつた。
叔母は一度云掛けて止めたことを、ここ二三日立つてもハッキリ話さなかつた。只永くこの家に勤めてゐても先の見込はないらしいことを折に觸れては微めかした。だが、叔母が他所行の衣服を幾枚も持つてゐないことはおすゑの目に留つてゐる。幾年も此處に勤めてゐるために、隨分お金も溜めてゐるらしいと、横濱の親類で

噂してゐたのに。……

十三

二日置いて倉賀がまた遊びに來た。靜かに雨が降つて薄ら寒い晩であつた。おすゑはこの人にならば氣兼をしないで、いろ／＼の噂の聞かれるのを喜んだ。方々の土地を浮かれ歩いてゐるこの人達の氣樂な暮らしは、言葉の端々から美しい夢のやうに描かれた。「今夜は暇らしいから、おれが叔母さんに斷つて、君を寄席へ連れて行かう」と、倉賀は云つた。

「私、東京の寄席へまだ一度も行かないんですよ」

さう云つておすゑは、此方の寄席で今どんな事をしてゐるのかと、乘氣になつて訊いてゐたが、ふと叔母が小聲で呼んでゐるのに氣付いた。で、叔母が立つてゐる小暗い處へ出て行くと、

「今勇吉さんが來たから、お前さん階下へ下りちやいけないよ。――此處にはゐないことにしてるんだからね」と、顏を擦寄せて囁いた。

「さう？」と、おすゑは言葉は落着けたが、身體は顫へた。

「お前さんは會はない方がいゝの。私がよく話をしとくから」と、叔母は獨りで呑込んで、「私が呼ぶまで來ちやいけないよ」と念を押して階下へ行つた。

おすゑはおど／＼しながら、階子段の側へ來て、耳を澄ました。物音に紛れて話は少しも聞取れないけれど、折々男の聲が聞えた。何を云つてゐるのか、どんな風をして來てゐるのか、自分も其處へ出て行つて、長い間胸に溜つてゐる事を思ふさま云つてしまひたくなつたが、叔母に遮られてゐるので下りる譯に行かなかつた。叔母の上手な口先で夫が說伏せられゝば、最早一生夫に會ふ道は絕えてしまひさうな氣がして、叔母の勝手な仕打が恨めしかつた。……

と、やがて襖が開いて、臺所の障子が開いて、男の出て行く氣色がした。おすゑは階子段の側の障子を細目に開けて、見えない夫の姿を雨の中に見送りながら、懷かしい思ひを寄せてゐた。

「素直に歸つたよ」と、叔母は急いで上つて來て知らせた。「お前さんが見付からなくつてよかつたよ。幾度も來られちや煩さいからね」

「今何をしてゐるんでせう？」

「なんにもしてゐないらしいよ。此方にゐても思はしくないから、二三日中に濱に歸るんだつて。……私、うんと窘めてやりたかつたけど、汚い服裝をして窶れてゐるから可哀想でね、あんまり酷い口も利けなかつたよ。おすゑの居所を敎へて呉れつて云ふから、自分が棄てて出た女の居所を聞いてどうするんだと云つてやつたら、只一言おすゑに會つて謝りたいんだつて……」

叔母はさう云つて笑つた。おすゑはもつと立入つて訊かうとしたが、そこへ倉賀が出て來て、「何をこそ／＼立話をしてるんだい」と近寄つたので、叔母一人を殘して、自分は階下へ下りた。

玄關脇の自分達の部屋には煙草盆と茶盆とが出してあつた。それを片付けながら、ふと見ると、字を書いた小さい紙片が落ちてゐる。「四谷左門町×番地久本たね方」勇吉の名がその下へ書かれてゐる。おすゑは拾上げて慌てて袂の中へ入れた。梅屋の電話口で聞いた住所が確かに此處だつたと、今やうやく思出された。

「寄席へ行きたきや行つといで、少し早目に歸りさへすればいゝから」と、叔母は二階から下りて來ると勸めた。

「私、さう行きたくはないの」と、おすゑは素氣なく答へた。

「何故さ。今日のやうな暇な晩に行つといた方がいゝだらう。折角連れてつてやらうつて人があるんだし。……」叔母は頻さゝ勸めて、「面白い話を聽いて少し笑つといで。氣が清々していい保養になるよ。今夜はお前さんによく話したいことがあるんだけど、それは歸つてからでいいから」と口早に云つた。

おすゑは氣乗りがしなかつたが、皆なに勸められるのを拒むことが出來なくて、倉賀に隨いて行くことにした。

倉賀は戸外へ出ると、「寄席も詰らないから、何か食べに行かうぢやないか」と、相手の氣を惹いたが、おすゑにはそんな後目たいことをする元氣はなかつた。倉賀が傘を並べて歩きながら絶えず親しい話を仕掛けるのを閑外しては、言少く寂しい返事をした。

「君はいやにぼんやりしてるね、どうかしたのかい」と、倉賀に怪まれた。

「さうでもないんですけど」と、おすゑは言淀んで、ふと目を上げて今通つてゐる途の左右に心を留めて、「私、近々にあの家を出ようと思つてますの」

「そして何處へ行くんだい」

「……」

「外へ行つたら僕に知らしとくれよ。僕は其處へ遊びに行くから」と、倉賀は笑つて、「叔母さんに仕込まれると、おすゑさんも人間が異つて來るだらうね」

二人の姿は屡々往來の人に瞥みられた。おすゑは若い男と連立つて歩くのは珍らしいので、人目が眩しかつた。寄席へ入つても隅の方を選んで席を占めたが、知合ひの藝者が此方を見て會釋した。

高座では上方辯の落語家が、不人情な女郎といゝ男の話をし出した。女の心を試さうとして男がある約束をして橋の袂まで連出したが、女は巧い言葉を拵へた。「同じ場所から一緒に身投げしたらあの世で添へぬと聞いてゐる、同じ時刻に場所を違へて死なうではないか、南無阿彌陀佛の聲を合圖に、私はあちらの岸から身を投げます」と、女は後をも見ずに駈出した。

そして、闇を隔てゝ男にこの世の別れを告げながら、念佛の聲と共に大きな石を自分の身代りに投込んだ。

聽手は腹を抱へて笑つてゐたが、おすゑは可笑しいよりも、女が憎らしくて男が可哀さうに思はれた。落語家の巧みな言葉や身振で、其男が女郎に迷つて騙されてゐる樣子がまざまざと見せつけられた。そして、ふいと話が切れて、相手の男と女との中に落語家が引下つてからも、その男と女の生活の成行が眞面目に考へられた。

引續いて支那人の曲藝や、白粉を塗立てた小娘の手踊りなどがあつたが、倉賀はさして興もないらしく、「もう歸らうか。君はまだ聽いてゐたいのかい」と訊いた。

「私もう澤山」と、おすゑは高座のお道化た身振りに最後の目を向けて立上つた。

倉賀は直ぐにさいのやへ歸らうとはしないで、勸工場へ入つたり、ビヤホールへ入つたりした。おすゑは素直に引廻されてゐたが、やがて醉心地になつた倉賀は、手を執つて寄掛つて、さいのやが近くなると、「今夜僕は獨りで泊るから、夜中に僕の處へお出でよ。いゝかい待つてるよ」と囁いて、女の肩を搖つた。

おすゑは戲談としては聞けなくて、顏を紅くした。男の手をすり拔けて家へ駈込むと、叔母は機嫌のいゝ顏をして迎へて、

「面白かつたかい」

「えゝ」と、曖昧に答へて、おすゑは冷たい手を火鉢に翳した。倉賀の世話は叔母に任せて、自分は二階の座敷へ姿を見せなかつた。

倉賀は獨りで泊ることになつたらしい。とん

子は貰ひが利かないし、外の女を呼ぶ様子も見えなかつた。おすゑは外で聞かれた言葉を思ひ出しては、胸を躍かせてゐた。叔母の合図で仕方なしに茶を持つて上つたが、相手の顔は見ないやうにして置いて来た。

雨は降るし客は少いし、早目に寝ることにして、叔母と二人女中部屋へ入つた。が、叔母は直ぐに寝ようとはしないで、おすゑを前に引据ゑて、「私はお前さんのためを思つて云ふんだから、そのつもりで聞いてお呉れよ」と、改まつた口調で、かねて云はうとしてゐた話の緒口を披いた。

「勇吉さんとはとても見込みはないんだし、若い女が一人ぢや世は渡れないんだからね。それにお前さんは厄介者を背負つてるんだから、誰れか確かりした後立てがなくちや、何かにつけて心細いよ」と云つて、暫らく言葉を切つてから、「私の話したのぢやないけれども、老婆さんにでも聞いたのだらうよ、お前さんの身の上をよく知つてゐる、そんな女なら世話をしてやらうつて云ふ人があるんだがね。……さうすればちやんとした家を一軒持たせて貰へて、お前さんの望み次第で親吉を側に置きたければ連れて来たつて構はないんだよ、こんな家に奉公してるよりや、その方がどの位楽したか知れないと思ふがね。私にしても時々遊びに行ける家が出来て嬉しいんだし、お前さんも好きな處へ遊びに行かれるしさ」

まあ緩くり考へて返事をせよと、叔母は口では云ひながら、眼を離さないで、相手の顔を見詰めた。目付で返事を迫つてゐた。

が、おすゑはこの意外の話に驚いてゐて、どちらとも答へる力はなかつた。

「その人は田舎の人だから、年中此方にゐるんぢやないが、只ね、此方に来てゐる間宿屋暮らしは窮屈だから、気立のいゝ女があつたら、一軒を借りて置きたいつて、かねてさう云つてゐるの」

叔母がから話を続けたので、おすゑの心にもその男の姿形が浮んで来た。それは一度この家に泊つたことのある上州の商人で、大抵の藝者では納らないと叔母の案じて帰た、五十近い老客であつた。するとおすゑはこんな男の世話になれよと、平気で勧めてゐる叔母の顔が怖く見えた。で、耳を塞ぎとて詫しをせねばかりに、

「私はとても人様の御世話は取れないんですから」と云はれて、顔を出すと、

「お嬢さんも男で苦労してゐる譯に、何時までも子供のやうだねえ」と、叔母は笑つて、「叱責を取るも取らぬも、その人は滅多に此方に来ないんだよ。不断はお前さん一人で、好きなやうにして暮らされるぢやないかね。これで親吉でもなければ、また相當な處へ片付いて、所帯を持たうつて事もあらうけれど、あの子があつちや一寸ケ敷からうよ。それに、もう生娘ぢやなし、道楽に世を渡つて苦労してゐたつて始らないぢやないかね」

生娘ぢやなしと云つた叔母の言葉は、おすゑの耳に笑ひ気のやうに聴へた。「私なんぞ生きてゐたつて仕方がないんだわ」と、ホロ／＼落ちる涙を袂で拭うた。

「何だよ、気の弱い」と、叔母は笑ひ／＼叱つて、「面白い目を見るのも、嫌な思ひをして日を暮らすのも、人間は気の持ちやう一つだよ……いゝお嬢さんのやうに何時も引込思案をして、いゝ運が向いて来かけても躊躇してばかりゐちや、後で後悔しても追付かないよ」

「……ですけど、世間の人の真似は私には出来ないの。こんな性分ですから」

「損な性分だねえ」と、叔母は、嘲るやうに云つたが、直ぐに気を取直して、「そんな事はどちら

でもいゝとして、二三日中には彼方へお金を送らなくちやなるまいよ。朝吉の方へもお母さんの方へも……」

「私此間からその事ばかり考へてゐるの」と云ひかけて、おするはふと叔母に助けを乞ふのが厭な氣がしたので、「だけど、私一人でどうかしようと思つてるわ」と、言葉強く云ひ切つた。

話はそれで杜絶えた。叔母は明日の日もあると、おするを促して寢床に就いた。

おするの高ぶつた神經には、いた／＼しい朝吉の姿や、田舍の商人や、夫の姿が今其處にゐるやうにまざ／＼と思出されてゐた。「もうかうしてはゐられない」と、ふと首を持上げては、きよろ／＼闇の中を見廻した。

帳場の柱時計は一時を打つた。便所へ行くのか、階子段に客の足音が響いた。その音を聞くと共に、おするの心に薄らいでゐた倉賀の言葉が、再び生々と浮上つた。力強く胸に迫つて來た。……あの足音は倉賀の足音で、一度云つた言葉を戲談にしないで、宵から眠らずに待つてゐるのではなからうか。……自分に思ひを寄せてゐる男を待呆けさせて夜を明かさせては濟まない。……と、おするは溜息吐いた。

正體なく眠つてゐる叔母の側を拔出て、階子段を傳つて、廊下の電燈を消して、奧の座敷へ入つて行く。……おするはその有樣を空に描きして、快い胸の鼓動を覺えてゐた。倉賀の手に縋りさへすれば何でも聞いて貰へる。皆なに意地められて術ない思ひをしてゐる私を庇つて貰へる。……

おするは眠苦しいこの暗い部屋を出ようとして、ふら／＼と身を持上げたが、足は進まなかつた。そして、暫らくして、薄明るい燈火の側で膝と膝とを擦寄せて、倉賀の顏を仰ぎ見ながら、身を震はせて何か訴へてゐたが、氣がつくと、それはふと目蕩んだ間の夢であつた。夜は容易に明けさうではない。氣立たましい音をさせて猫は鼠を追掛けてゐる。

おするは氣が疲れ果てて、最早物を考へ込んで苦んだり樂んだりする力は失せた。今は只夜の明けるのを待遠しがつて、いら／＼するばかりだつた。

牛乳配達の俥の音が通つて、老婆の咳拂ひが聞え出すと、おするは早くも雨戸を開けて、雨雲の消えた朧かな鼠色に面を觸れてゐた。薄目を開けて此方を見た叔母は、何かブツ／＼云つてゐたが、再び枕を仕直して眠つた。おするは叔母の寢顏を顧みて、世にも忌はしい小憎らしい人であるやうに蔑視んだ。

雀は庭先に囀つて、朝日は障子に映えた光を投げた。おするは叔母の手助けなぞして働く氣はなかつたが、老婆に言を掛けられると不斷の通り襷掛けで、甲斐々々しく身體を動かした。

と、そこへ倉賀が二階から顏を洗ひに下りて來た。氣持よげにニコ／＼して、「一人の方が却つてよく眠れるよ」と、誰れに云ふともなく云つた。そして、おするが後で茶を入れて二階へ持つて行つても、昨夕の事は忘れたやうに何とも云出さなかつた。

おするには倉賀の心の底が分りかねた。いろいろに考へ直してゐたが、さうする中に、倉賀は色も香もなく歸つてしまつた。頼みになる言葉一つ後へ殘さなかつた。

十四

朝の用事が片付くと、叔母は一人で湯へ行つた。おするは叔母の留守の間にこそ、自分の量見を定めねばならぬやうに心が急かれた。で、前後をとくと考へる暇もなく、「一寸其處

まで買物に行つてまゐります」と老婆に斷つて、羽織を引掛けて出た。夢中で坂下まで歩いて、其處から電車に乘つた。夫の居所は書殘して呉れた紙切を出して見なくても、空でよく覺えてゐる。

車掌に訊いて下りた處は、先日歩き廻つた處だつた。幾度も人に訊いてその家を搜してゐる中にも、若しや叔母が後から追駈けて來はしないかと氣が氣でなかつた。分り難い路次裏をまご／＼して、やうやく「久本」といふ表札を見當てた時には、悅しさに聲が震へた。何となしに安心して、夫に會つた後のことなぞ碌に心に浮ばなかつた。

「二階にゐますよ」と、子供に添乳をしてゐる主婦が存在な聲を出して顧みた。

垢の付いた古い着物や、さま／＼の古道具が上り口を塞いでゐる。おすゑはそれを避けて通つて、階子段に足を掛けたが、上り切るまでには可成りの時がかゝつた。隅へ身を潛ませて、そつと覗くと、毛布にくるまつて寢ころんでゐた男は、窶れた顏を持上げて此方に目を据ゑてゐた。

目と目とを見合すと、おすゑは思はず顏を背けて、上り口に坐つた。

「お前も大層變つたぢやないか。今は何處にゐるんだい」暫らくしてから云つた男の聲は哀れつぽく響いた。

おすゑは直ぐには答へないで、顏を背けたまま涙ぐんでゐた。

「東京へ出て來てからは、お前も些とは氣樂になつたらう」と、男は續いて云つたが、それが皮肉に聞えたので、おすゑは顏を上げて正面に男を見て、

「何が氣樂なの。……氣樂だなんて、私一日だつて氣樂な思ひしたことはありやしない」と涙聲で云つた。そして、かねて胸にまつはつてゐた恨み言が一時に込上つて來たが、氣强かつたあの頃の影もない弱々しい男の有樣を見てゐると、つけ／＼と云ひたい事も云へなかつた。自分の所行を詫びてゐるやうに男の目はしを／＼してゐる。

「私、東京へ來たくつて來たんぢやないわ、一日もこんな處にゐたいとは思つてやしないわ」

「それはさうだらうが、今は何處に奉公してゐるんだい。おれはお前が梅屋に奉公してるつて此間伊勢崎町の兼公に聞いたから、電話を掛けたんだぜ。その時來ると云つときたがら、何時まで待つてても來ないから、わざ／＼訪ねて行くと、もうゐないんだもの」

「だつて、私、不意だから吃驚しちやつて、電話の話がよく聞えないだもの。……だけど、四谷と云ふことだけはうろ覺えに覺えたから、東京へ來ると、幾度この邊を搜したか知りやしないわ」

「おれはまたお前がおれを怖がつて會はないんだらうと思つた」男は淋しい笑ひを浮べてさう云つて、毛布と枕とを隅の方へ投げやつた。

おすゑは箒を入れたこともなささうに埃の積つた部屋を見廻して、こんな處にごろ／＼してゐて何をしてゐるんだらうと怪みながら、別れて後の話が男の口から出るのを待つてゐた。

この人にしてもあれからいゝ事はなかつたのに違ひない。自分達を困らせた報いがない筈はない。「この頃になつて私の有難味が分つたらう」と思ふと、いくらか胸が透くやうだつた。

男は押入から煙草の袋を搜出して、粉煙草を煙管に詰めながら、「お前はさのやにゐるんぢやないんか。叔母さんの話だと、お前は東京にはゐないつて云ふことだつたが、屹度あの人の指金で、身體の極りを付けようとしてゐるんだなと、おれは感付いたよ。……どうせおれは

自分の勝手な事ばかりしといて、今になつてお前と元のやうにならうなんて、そんな圖々しい事は云へた義理ぢやないんだからね。云つたからつて誰れも信用すりやすまいしさ。だから、何處かいゝ處があつて、お前が仕合せな身になるやうなら、それに越したことはないと思つてるんだ。……叔母さんの口振りが何だかそんな風に取れたが、さうぢやないんかい」と、落着いてポツリ〳〵云つた。

「あんな人の云ふ事が何で當てになるものかね。私あの人のためにどれほど迷惑したか知れないわ。騙して東京へ連れて來といて、私些ともいゝ事はないの」

おすゑはさう云ひながら、ふと叔母が今にも跡を追つて來るかも知れぬと案ぜられ出した。

「私、今日も叔母さんが行つちやいけないと云ふのに、隱れて來たんだから、此處で緩くりしちやゐられないよ。屹度搜しに來るから」

「なに、構はないさ。おれの處へ來たつて叔母が愚圖々々云ふ譯がないぢやないか。おれの方でこそ文句を云つてやらあ」

さつきとは打つて變つて、男の聲には力が籠つてゐて、おすゑも氣丈夫に感じたが、叔母を離れたその後の身の始末を思ふと、流石に心細かつた。

「私ね、自分は死なうと生きようと、どうなつても構はないけれど、朝吉だけは饑じい思ひをさせたくないの。滿足な身體はしてゐないし、長くつて二年か三年の壽命だと云ふから、その代り生きてゐる間、心殘りのないやうに大切に育ててやりたいと思つてゐるの。あの子を打遣らかしとくやうな不人情な心になれたら、私東京なんぞへ來てまご〳〵してゐやしないよ」

「さう云はれると、おれも面目ないが、しかし、おれも遠方へ行つてさん〴〵苦勞して來たんだぜ。この一月に東京へ來てからは、性根を入れて眞面目に稼いで、先の見込みが立ち次第、ちやんとした服裝でもして、久振りに濱へ歸らうと思つてゐたのさ。一年の餘も立つてるんだから、お前達の身もどうなつてることやら分らないし、浮かり手紙をやつても吃驚させるばかりだと思つて、おれが自分で會ひに行くまで居所も知らさないつもりだつたよ。……ミシンの方ぢや仕事の口が見付からなくて、當座の口過ぎに、此處の主人の手助けをして古道具の賣買をやつてゐたんだが、運が惡くなつちや仕方がないもんだ。上方で病付いた脚氣がこの頃またぶり返して毎日ごろ〳〵してるんだ。……久振りでお前に會ふのにこんな樣で會ひたかあなかつた」

「ぢや、今は丸つきり遊んでるんだわね。病氣は醫者に診て貰つてるの」おすゑは次第に他人の事として平氣ではゐられなくなつた。

「さう心配するほどでもないんだ」と男は云紛らせたが、「しかし、働かないで他人の家にゐるのはつらいものだぜ。厭な顏もされんけれど氣が引けて、病氣よりもその方が餘程つらいよ」

そこへ、主婦が上り口から、顏を出して、茶盆を置いて、女の後姿を竊見した。勇吉は主婦を呼んで、馴々しい口調でおすゑに引合せた後、階子段の側へ出て、誰れか來ても留守を使はせるやうに主婦に耳打した。そして女下駄をも隱させた。主婦は首肯きながら勇吉と顏を見合せて微笑した。

最早飯時になつてゐるので、勇吉は何か御馳走をしようと云出したが、おすゑはそれを遮つて、自分で使ひに立つた。手近の蕎麥屋へ行つて、主婦の分をも誂へて、代は拂つて來た。次手に敷島を一つ買つて來て男に與へた。亂れた部屋を片付けて、一年あまり手一つで暮らして

来た自分の苦勞話をしたから、久振りで差向ひの食事をした。男が一々身を入れて聞いて呉れるので、おすゑは話しても話しても倦まなかつた。
「だけど、お前も此方へ来てから隨分違ひたと見えて、見違へるほど綺麗になつたぜ」と、男はふと話を遮つて、眞顔で云つた。
「厭だよ、冷かしたりして、私本氣で話をしてゐるのに」と、おすゑは目を鋭てたが、口元には微かな笑ひを洩らした。
男は肱枕で横になつて、息の通ふほどに膝を進めてゐる女の顔を見詰めて、「おれだつて本氣だね。……で、何かい。もうあの家へ歸らないつもりなのかい」
「歸らうたつて歸れりやしないよ。二度と叔母さんの顔は見ないつもりで出て来たのだもの。私何だかあの人が恐いよ」
「ぢや、これからお前はどうしようと云ふんだい」
「だから相談しようと思つてるんだわ。……どうしたらいゝと思つて？ 今日にも横濱の方へ幾らか送らなきやならんのだし」
さう云つておすゑは、男の口から洩れる答へで、自分の運が極まるやうに、只管待構へてゐたが、男は「さうだなあ」と空々しく云つただけで、さして考へてゐる風もなく、一途に煙草の煙を吐いてゐた。
「私、濱へ歸つても、また伊豆屋の仕事をさして貰へるかどうだか分らないのよ」と、おすゑは心細げに云つたが、男は、
「さうか。彼處の老爺も口先ばかり巧いけど、腹は強慾だからね」と、だるい聲で答へただけで、口を噤んだ。
おすゑは張合ひがなかつた。男の様子が如何にも氣力が盡きてゐるやうに思はれたが、すると自分の心も滅入り込んだ。思ひの外に男の方から折れて出て、昔の邪慳な影もないのに長い間の恨みも忘れて、我れから懐つこい話に耽つてゐたけれど、よく思ひ直すと話した甲斐はなかつた。……で、おすゑも口を噤んだ。
部屋の中は森とした。日當りは悪いが、顔に觸れる風は温かくて柔かい。直ぐ窓の下でザブザブ洗濯をしてゐる主婦が、隣の家へ向つて高聲で話を仕掛けてゐるのがはつきり聞えた。他所の猫に魚を取られた話だつた。おすゑはその話を聞くともなく聞いてゐたが、すると、男は不意に身を起した。
「おや、叔母の世話にならないで、も一度奉公に出たらどうだい」男の見据ゑた目にも底に力が入つてゐた。「譯を云つて頼めば此處の主婦がいゝ奉公口を見つけて呉れるよ。お前もわざわざ思立つて東京へ来たほどなら、一つ辛抱する氣になつたらどうだい。お前も運が悪くて、おれのためには隨分苦勞をさせれたのだが、いつそ苦勞の爲次手に、親爺やお袋のために、もう一苦勞する氣にやなれないかい。おれも何時までこんなおやぢやないよ。身體の加減が少しよくなりさへすれば、今度こそ死身になつて稼いで、お前達にも樂をさせたいと思つてるんだ。今まで困らせた埋合せをしなけりや、おれも寝覺めが悪いやな。……だから、もう少しの間だから、お前は目を瞑つて、他所で勤めるといふ氣になつて呉れんかね」
情愛を含んだ口調でかう説かれると、おすゑの心には悲しいやうな嬉しいやうな感情が波打つた。親達を助けるためになら、自分の手足を捥がれたつて厭はないと、夢心地で思ひながら、「そりや身内の者のためになれば、私どんな辛抱でもするよ。梅屋だつて何處だつて、私決して我儘で逃出したんぢやないの」
「お前にその決心がありさへすりや、主婦にも相談して見るがね」と云つて、男は何か考へた

がらも、女から目を放さないで、「しかし、今月も後二三日だからね。奉公の日があつたつて、當前ぢや前借りは出來ないしね。……お前いくらか持つてるんかい」

「持つてる譯がないわ。彼處から貰へるものも叔母さんが預つてるんだし」と云つて、おすゑは、「矢張駄目だわね。……せめて今月一杯梅屋にゐればよかつたけど」と、溜息吐いた。

「さう氣を落さなくつてもいゝよ。おれがよく〳〵主婦に相談して見らあ。……兎に角話が極まるまでは此處へ泊つてゐればいゝんだから、自分の家へ歸つたつもりでゐるがいゝ」

「……この家で變に思ふだらうね」

「何故？　他人を引張り込んだのぢやあるまいし」

「だけど……」おすゑは自分で變な氣がした。夫と二人で東京の他人の二階で、かうして打明け話をしてゐるのは夢のやうだつた。夢にも見なかつた事だつた。

十五

おすゑは此處へ泊ることに極めると、押入を開けて、汚れたシャツや襦袢を出して洗濯したり、[illegible]子供にまで前掛を掛けたりした。馴々しい話を仕掛ける主婦に答へながら、目を醒ました赤ん坊を抱いて、綾したりした。「赤ちやんに何を買つて上げてもよう御座んすか」と云つて、表へ出て、勇吉に食べさせるやうな白い飴を買つて、自分の歯で嚙碎いて與へた。

勇吉はおすゑが側を離れてゐる間に、主婦に向つて女の身の振方をひそ〳〵相談してゐた。

來るかと氣にしてゐた叔母は、短い日が暮れるまでつひに姿を見せなかつた。「今度は後見があるから、叔母さんも諦めてるんだわね」と、おすゑは男に云つた。

晩餐も階下で家の者と一緒に食べるのをおすゑは厭がつたので、二人だけ二階で別に食べることにした。

「お前さんは食料を拂つてるの」と、おすゑは[illegible]つてから訊いた。

「そんな心配をしなくてもいゝよ」

「でも、私まで御馳走になつて濟まないわね。かうしてお膳立をして貰つて食べるのは勿體ないわね」

おすゑは鹽辛い燒魚をも快く味つた。成らう事なら、何處へも行かないで、こんな家にでも何時までも住んでゐたいと思ひながら、あゝ嬉しかつた。私、こんな時は御飯炊きが上手になつてよ。明日から御飯を炊いて上げてやらう？」と、媚びるやうに云つた。

そして、ランプの側でシャツのボタンをつけたり、綻びを縫つたりしてゐると、男は壁に凭れて足を投出して、暫らく行つてゐた上方の話を面白さうにして聞かせた。巧みに訛を眞似ては笑はせた。おすゑも世智辛い話から心を遠ざけて、何か男を笑はせるやうな面白い話をと考へたが、自分の貧窮での暮らしには何も話の種がないので、僅かな間梅屋やさのやで見た客の遊び振りを大袈裟に話し出した。が、話してゐる中に、倉賀や入江や、自分に親切だつた客の顏付が名殘惜く浮んで、ともすれば心が沈み勝ちになつた。

階下では寢靜まつて夜は更けた。おすゑは夫の言付けるまゝに寢床を延べた。自分の枕には夫が出して呉れた古道具入れの小さい箱を手拭を掛けて用ひた。そして、窮屈な寢床の中にゐても、夫の息の音を聞いてゐると、何となく心が安まつて、この頃に珍らしくすや〳〵と無邪氣な眠りに落ちた。

[illegible]誰れかに呼起されたやうな氣がして、目

を醒ましたが、夫はまだ眠入つてゐる。おするは半ば夢心地で男の寢顏を見ながら、今日からの身の上を考へ出した。此處にゐたいにはゐたいけれども、食料をも收めないで二人が厄介になつてゐると思ふと、今朝の朝餐さへ平氣で食べられさうではなかつた。宿代も食料もちやんと拂つて、心置きなくしたいにも、自分の財布には横濱までの汽車賃ぐらゐしか殘つてゐない。……濱へ歸つたところでいゝ當てもなければ、幾度も逃げて歸つては母親の手前が恥かしい。

おするは獨りでそんな事を考へてゐるのが堪へがたくなつて、男を搖起した。

「私ぼんやりしちやゐられないわ。どうしたらいゝだらうね」と、何かに脅かされてゐるやうに云つて男の憐みを求めた。そして、當てになりさうでない昨夕の話を頼む氣になつた。

「此處の主婦が世話をして呉れるつてどんな處?」

「一寸相談はして見たがね。おれはあまり望ましくもないんだ。五十や六十の金は直ぐ貸して呉れるといふんだけど……」と、男はさも氣乘りのしないやうに云つた。

「そんなに貸して呉れて?」おするは信じかねて、「ぢや、厭な商賣をするんぢやないの?」

「なにさうぢやない」と、男は力強く打消して、「そんな心配はないが、何しろ田舍へ行くんだからね。……實は主婦の從弟が上州の何處かで料理屋を出してるんでね、其處なら、主婦が口を利けば少しの無理は聞いて貰へるんだ。幸ひその從弟といふのが今東京へ奉公人を捜しに來てるさうだから、話を付けようと思へば、今日に今日でも事が運ばないことはないんだがね。……しかし、お前も田舍へ行く氣にはなれないだらう。上州なら汽車で僅か二三時間で行かれるんだけど」

男は遠慮勝ちに、勸めるやうな勸めないやうな口吻でかう云ひながら、物思はしげな女の素振から目を放さないで、「念のために、お前が直かに主婦からよく聞いて見るといゝよ」

「だつて、私そんな事は訊きたくないわ」と、おするは萎れて、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知人のゐない心細い田舍へ行く氣にはとてもなれなかつた。

「おれも無理に勸めたかないよ。しかし、今の場合だから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く身體をよくして、都合の付次第迎ひに行つてやるぜ。田舍だと不自由な代り東京から行きや幅が利くし、それにお前は只の一月でも此方のお茶屋に奉公をして手心を知つてゐるんだから、さう勤めづらくはないだらう。兎に角主婦によく聞いて御覽」

さう云つて、男は今直ぐにも主婦を呼んで來ようと立上つたが、おするは慌てて引留めた。

「まあ待つて頂戴。私もつとよく考へて見たいから……」

目を潤ませて首垂れた女と、坐り直して腕組みして乾いた脣を舐めずつてゐる男との間には、暫らく言葉が杜切れてゐた。が、やがて、男の方から口を開いた。

「おれも久振りで會つてこんな話はしたかないよ」

歎息して云つた男の言葉が悲しく耳に響くと、おするは追ひ詰められてゐた物思ひから放たれた。「お前さんが其處へ行けつて云ふのだから私行つてよ。だけど……」と、言淀んで、「私ね、かう思ふの。どうせ私達は運が惡いんだから、この先だつてとても樂な思ひは出來やしないよ。二人が久振りで會つたつて、朝吉やお母さんの側へ行つて皆な揃つて暮らす譯には行かないし、……また別れ〳〵になるんなら、私生きてても詰まらないと思つてよ」

袂を額に當てて吃逆上げながら、「お前さんさう思はないの？」と、男に迫つた。

男は相應しい返事の爲樣もなくつて、輕く女の背を撫でて顏を上げさせた。「ぢや、今の話を止めにすればいゝぢやないか。おれが何とか考へて、朝吉の世話をすることにしよう」と宥めると、

「そんなことが出來て？　氣安めを云つたつて駄目よ」と、おすゑは甘えるやうに云つた。

「しかし今のおれの身になつて見て呉れ。お前はまだ心の持ちやう一つで稼げんこともないが、おれは今に今稼がうたつて稼げやうはないし、一人ぼつちでこんな處に居候になつてるんぢやないか。どうかしてお前達に安心させる身分になつて、これまでの罪ほろぼしをしようと思へばこそ。そんな氣もなければ、おれはとつくに首でもくゝつて死んぢまつてらあ」

「お前さんも死にたい氣になる事があつて？」と、おすゑは、男の言葉に縋りついた。……「死ぬる氣があるんなら、一緒に死んで呉れなくつて」と落付いた調子で云つた。

「おれこそ皆なに迷惑ばかり掛けて來たんだから、何時死んだつていゝけれど、お前は苦勞ばかりして、今死んぢや詰らないぢやないか」

「いゝえ、私死ぬのは厭とは思はないの。田舍へ行つて奉公したり、知らない人の中へ出て意地められてるよりや、死ぬる方が餘程氣樂だと思つてゐてよ。お前さんが一緒に死んで呉れるなら、今直ぐにでも死んでよ。些とも怖かあないの」

「屹度だね。その時になつて氣遲れはしないだらうね」

おすゑは男の膝の上に顏を伏せたまゝ首背いた。そして、このまゝぐつと刄を突刺されても搆はないと覺悟をしてゐた。息が絶えたなら、何處か綺麗な處へ飛んで行けさうな氣になつて、うつとり夢見心地になつてゐた。

「おい、こんな所を主婦に見られたら變に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを抱起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ねりやしないさ。晩まで待つて居れ、おれが藥を買つて來るから。……いよ／＼死ぬと極まれば、おれもこの世の心殘りのないやうに始末をつけときたいし、お前だつて家の者に書置きくらゐはしなきやなるまい」

おすゑは默つてゐたが、得心したやうな顏付で男を見た。「ぢや、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた部屋のまはりに心を向けた。煤けた低い天井も赤茶けた疊も、見馴れない不思議なもののやうに見えた。二人が此處に向合つて坐つてゐるのも不思議に思はれた。そして、子供の泣聲や賑かな物音を聞くにつけても、世間に變つた事が出來てゐるやうに感ぜられた。

階子段からは煙が舞上つて、部屋の中に淡く渦巻いた。男は吸ひかけの煙草を置いて、帶を締直して階下へ行きかけたが、すると其處へ主婦が手紙を投込んだ。見ると、牛込の叔母からおすゑに宛てた手紙だつたので、男は後戻りして、

「何を云つて來たんだらう、おれが讀んでもいいかい」と訊いて、女の答へをも待たずに、封を切つた。「訪ねて來ても會へないだらうと思つて、手紙で呼寄せようと思つてるんだ」と獨言で笑つて、手紙を投出して階下へ下りた。

おすゑはそれを拾つて目をつけた。「……兎に角この手紙着次第一度お出で下されたく呉々も賴み上げ候。決してお前樣の爲にならぬことは申し上げず候間、安心してお出で下されたく候。お前樣の望み通りのよろしき話も數々これあり候へば、至急お目にかゝりたく待居り候……」と書いてあつた。

「だけど、もうあの人には會ひたくない」と、おするは最早知人の誰れにも會ふまいと思つた。湯錢にも顏を見られないやうに、言葉を掛けられぬやうにと避けて、階下へ下りるにも拔足した。

財布をそのまゝ男の手に渡して、食事は外から取寄せることにした。一刻も男の側を離れるのが心細くて、男が立上るたびに慌てて縋付きさうにしたが、男は毒藥を買つて來ると云つて出て行つた。

おするは母親や叔母に宛てた遺書をつくらうとして、紙片を前に置いた。が、どう書かうかと思つてゐる間に、心は外へ逸れて、書馴れぬ六ケ敷い文字などとても書けなかつた。只誰れにも會はないで、今夜死に果てる自分の身の上を思詰めてはうつとりしてゐた。

男は容易に歸つて來なかつた。おするは待ちあぐんで居ても立つてもゐられない氣がした。賑かな窓の外へ、顏を出すのが怖いやうなので、そつと障子を細目に開けて覗いたが、見ても見ても夫の姿は現はれなかつた。打ちやつて逃げたのかとも疑はれたが、夫の窶れた顏付や元氣のない言葉を思浮べると、疑ひは直ぐに打消された。「あの人にしても、生きてゐたつて仕方がないのだ。死にたいのに違ひない」と、男の心も自分と同じやうにのみ思はれた。

一刻々々時の立つほど今夜の迫つてゐるのが身に染みて、外から聞える物音も次第に淒いやうに耳に響いた。

午砲が鳴つて間もなく男は歸つて來た。手には小さい藥罎を持つてゐた。「何處の藥屋でも變に思つて賣つて吳れないから、懇意な醫學書生の處へ行つて、騙して貰つて來た」と云つて、女の前に置いた。

「これで死なれて？」と、女は怖々藥罎を手に取つて、水のやうに透通つた藥を不思議さうに見詰めた。これを口に入れゝば直ぐに舌が爛れさうに思はれて、見ても口の內が痺れるやうだつた。が、

「私ぐつと吞むよ」と、強い決心を見せて、「これで二人分だわね」

「さうだとも。半分づつ吞むんだ。……覺悟してゐるんだらうな」男は藥罎に目をつけながら、底氣味惡い聲で念を押した。

「何故そんなことを訊くの」と、おするは責めるやうに云つた。が、ふと恐ろしいものに襲はれたやうな氣がしたので、縋付かぬばかりに男の方を見据ゑて、心に力を付けた。

「おれは結句死んだ方が氣樂だけれど、お前は奉公しようと思へば、前借もどつさり出來るし、身內の者も安心させて自分もいゝ月日が送れないことはないんだから。……」と、男が云掛けると、

「私もうそんな事は聞きたくないのよ」と、おするは耳を蔽うて首を振つた。そして、男の口から、絶え間なく情愛の籠つた哀れな話を聞かされて、日の暮れるまで泣きつゞけてゐたかつた。

溫かい靜かな春の日は容易に暮れさうではない。おするは意地惡く目につく藥罎を見まい見まいとつとめた。

男は寢そべつて、吞氣らしく煙草を吸ひながら、默つて何か考へてゐた。

毒婦のやうな女

一

その翌日は雨が降頻つたので、事によつたらと座輿半分に云つて息込んでゐた七面山登りどころではなく、見殘してゐる名所舊蹟の參拜をも止めて、陸路を俥や乘合馬車で歸ることにした。

「なんなら、もう一晩此處へ泊つて行つたつて構はないんだがね。外を出歩かなくつても、按摩でも取らせて休んでりやいゝぢやないか、近所が靜かだから緩くり寢てゐられるだらう」と、新七は宿の勘定を濟ませて歸支度をしながら、まだ氣迷をしてさう云つたが、おかつは同意しなかつた。

「一度極めたんだから、迷はないで早く立つことにしませう。迷ふと決して後がよかないんですから。」と云つて、自分で出立の催促をした。

雨を冒した俥の幌の中に一人で身を置いてゐると、おかつは何となく氣樂になつて、むしろ雨天を喜ばしく思つた。……富士川下りの乘合船や、紅葉の色づいてゐる鷹取山や、癩病患者の療養所になつてゐるといふ深敬病院など、昨日鰍澤を出てから一日がかりで見て來たさまざまな事物が旅馴れない彼女には、みんな珍らしかつたのであつたが、身延山での記念として何にも優つて鮮かに心の中に殘つてゐるのは、仁王門の構内で見たある若僧であつた。

昨夕は食後の腹こなしと土産物の買入れのために、新七に誘はれて、山の夜風の身に染みる寒い淋しい町を散歩して、仁王門のほとりまで行つたのであつたが、信心氣のないおかつも、雲の往來が繁くて三日月が忙しさうに出たり隱れたりしてゐる山の端を仰いで、晝間案内者に聞かされた祖師の開山の縁起を思出してゐると、この世ならぬ靈場へ來てゐるやうで、この頃ひそかに思ひつゞけてゐる濁つた思ひも、一時淸められて、あの狂人じみた團扇太鼓の響きも笑へないやうな氣持がした。

仁王門の内は參詣人の捧げる蠟燭の光で明るくて、一心に手を合せて一心に太鼓を叩いたり拍子木を叩いたりしてゐる婆さんや爺さんの顏がハッキリと見られた。どれも皆な田舍くさい頑丈な人たちで、振動かしてゐる手にも力が籠つてゐた。口々に唱へる七字のお題目も彼女の母親などがよく口にしてゐる南無阿彌陀佛の聲に比べると遙かに勢ひがよかつた。見てゐる間に、二十をあまり越してはゐないらしい、若い僧侶が入つて來て、取澄ました音聲で事々しい說教をしだした。彼女の立つてゐるところとは距離が遠かつたのでよくは聞取れなかつたが、お宗旨の有難さを說いてゐるには違ひなかつた。

おかつは、あの若さで鹿爪らしいお說教なんかをしてと、人柄に不似合なやうに思ひながら、風にゆらめく蠟燭の火影に照らされて、夢のやうに浮出てゐる若僧の袈裟姿を見てゐたが、その柔和な蒼白い顏は次第に彼女の心を蕩けさせた。あのまゝ木か石に彫つたら、佛樣が出來ると思つたりして見詰めてゐたが、あのまま珠數を持つて、若い盛りを佛樣への御奉公をのみ勤めて、淋しい山の中で過させるのは惜しいやうにも思はれた。可愛らしく動いてゐる脣で、婆さんや爺さんの垢の溜つた耳へ、佛の御利益なんかを說かせるのが惜しかつた。

「寒くなつたからもう歸らう」と、新七に云はれ

て、ふと振返ると、新七の下びた顔がこの時は際立つて彼女の目に映つた。何だつてから頬が尖つてゐて、それにゲヂ〳〵のやうな眉をしてゐるのであらう？

おかつは俥の中で、かの若僧の柔和な地蔵眉や潤んだ眼を思出した。未來は極樂へ行けるにしても、あんな山奥で不味い物を食べてゐるのでは詰らないといふ氣にはならないのであらうかと思ふにつれて、自分が甲府のやうな田舎町で、怠けてゐられるだけの取柄で、いゝ當てのなささうな日を續けてゐるのが、いよ〳〵溜らなくなりだした。今に財産を頒けて貰つたら、自分の一存で店が出せるやうになるのだから、それまでの不自由や退屈は辛抱してゐて呉れ、兩親は心が弱けてゐるんだから、その中いゝ機會を見てお前に會ひたいとさへ思つてゐると、昨夕も新七は云つてゐたが、おかつは最早さういふ事を有難がらなくなつてゐた。今更男の父親や母親に會つて見たつてはじまらないし、こんな田舎町の商店の主婦になつて齷齪働いたつて何が面白からうぞと思ふやうになつてゐた。理窟もない分別もない、新七と一緒にゐるのが一途にいやになつた。このまゝ一人で東京の方へ向つて俥を駛らせたら、さぞ清々した氣持になるだらうと、慾も得も棄てた自儘な空想に耽つたりしてゐたが、後の俥の音は、何處までも彼女の跡を追つてゐるやうに、意地惡く耳に響いた。

飯富のある神社の前で俥から下りると、丁度乘合馬車が出掛かつてゐるところであつた。座席も空いてゐたので、二人は樂々と並んで腰を掛けることが出來たが、先客の目が無遠慮におかつの方へ注がれるのを、おかつは煩さがつて、茶代の返しに貰つた身延案内記を開けて、何となしに文字の上に目を落してゐた。雨避けの被蓋に妨げられて外は見えず、車體はやゝもすると激しい動搖を續けるので、兩岸の秋景色を眺めながら川を下つた時のやうな樂みは得られなかつた。

新七は向う側の客の相手になつて、世間の景氣を話合つたり、途中の村々の舊家の盛衰や新出來の富豪を話題にしたりしてゐたから、心はおかつの方から暫らくも離してはゐなかつた。女の息の淺さ深さをも絶えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本をお見せよ」と云つて、女の手から案内記を取つて、昨日見た寺院や石段の寫眞のある處を開けて見て、

「この本は後でお母さんへ遣つて上げるといゝね。お宗旨違ひだけど、何時か身延の事を聞いてゐなさつたから」

「お母さんには極の節でも贈つた方がいゝわ。この本は私がお詣りした記念に取つて置きませう」

「それもよからう。餘程の決心でやつて來たんだからな。おれの親爺なぞも無信心の方だが、それでも身延の事といふと、よくれをも有難がつてるよ。外の土地へ遊びに行くよりも今度のやうなお詣りを喜んでるだらうから、途中が面倒でも來甲斐があつた譯なのさ」

「今日は舟だの馬車だのと、まどろこしい思ひをしてお詣りしたんだから、餘程の御利益がなければ割に合はないわね」

おかつは何氣なく御者臺の方を覗いたが、すると、富士川の流れと、險しい高い崖がちらと見えた。邪慳に鞭打たれてゐる馬は、その崖の方へ向つて驅けてゐるのであつた。乘客を跳飛ばしさうに車臺は動搖した。

「隨分危い處ですわね」と云つて、胸を轟かしてゐると、向ひの客は、前年大雨の後に、この近所で乘合馬車が顚覆して、大勢の怪我人が出來たことを話した。

「この頃はこの街道を重いものを積んだ車力がよく通るから、道がえらく壞れてゐる」と、他の客も調子を合せて、「若い衆さん、氣をつけておくんな。ひつくり返されでもしちや溜んねえからな」と、高い聲で云つて笑つた。

「あんまり馬を責めるのもよくねえだ。馬にだつて癖があるから、どんな拍子であばれ出さんとも限らねえ」

左右の人たちのそんな話を聞いてゐると、おかつはます／＼恐ろしくなつた。運が惡くて崖から落されでもしたらどうしよう。自分はこの頃惡い運に見込まれてゐるやうでならないから尙更危かしいと、不安な思ひに胸を騷がせてゐた。

ある立場で長いこと馬車が留つてゐた間に、おかつは廁を借りるために側の茶店へ寄つた。そこは川に臨んだ見晴しのいゝところで、向うから來る渡舟に雨の濺いでゐるのが廁の中からでも見えた。嬰兒を背負つて番傘を傾げてゐる田舍女が激しい雨にも激しい流れにもめげないで、呆けたやうな平氣な樣しでゐるのを見て、おかつは哀れな自分の心を顧みた。廁から出ると、貸馬車の間から顏を突出して茶店の方を見詰めてゐた新七が、手招きしながら「早く／＼」と聲を掛けたが、彼女はわざと落着き拂つて、髮を撫付けたり化粧紙で顏を磨いたりしてゐた。

渡舟が着くと、客が込合ふからと氣遣つて、わざ／＼茶店の中まで迎へに來た新七に急立てられて、彼女は不承々々に窮屈な馬車の中へ戻つたが、やがて渡舟から上つて來た新な客に割込まれて、身動きのならないほどに乘り苦しくなつた上に、濡れた汚い衣服や傘の雫で彼女の晴衣をも足袋をも汚された。激しく馬車が搖れるたびに頭の髮をも亂されさうになつた。

さういふことから、おかつの神經の惱むのを、新七は小聲で宥めてゐたが、宥められたりすると、なほ更こんな餘計ないやな思ひをするのも男のせゐであるやうに、おかつには思はれた。

二

鰍澤で名物の鰻でも食べて、緩くりして行かうと、新七は相手の心を唆つたが、おかつは譯もなく歸りを急いで、馬車を下りると直ぐに乘合自動車へ移つた。ところが、運が惡くも、途中で自動車に故障が起つて、一時間あまりも泥濘の中で雨に濡れて待つてゐなければならなかつた。修復の見込みがないので、泣出したい思ひをして野道を横切つて、鐵道馬車の停留所まで辿りついた時には、下駄も足袋も泥まみれになつてゐた。洗ふ暇もないので、泥足のまゝで乘つたが、からだはもう自棄見たいになつて、頭も衣裝も構はなくなつて、べた／＼した腰掛へドカと腰を据ゑて衆人の注視に不樣な姿を曝して憚らなくなつた。

「日蓮樣のお氣に障つたことがあつたと見えて、ひどい罰を當てられた」と呟くと、

「だから、もう一日彼處にゐればよかつたのだ。せめて鰍澤でも晩まで遊んで來ればよかつたのに、お前があんまり急ぐからいけないのさ。早く歸つたつて仕方がないぢやないか」

新七はよく／＼の思ひで出て來た旅行が、雨のために不首尾に終つたのを恨めしく思ひながら、愚痴つぽい口を利くと、

「一日延したつて明日の天氣が當てになりやしませんからね。それに昨夕は變な夢を見たもんだから、一時も早く歸りたくなつたんですの」

「どんな夢？」

「夢の話なんぞ止しませう」

おかつは先きとは打つて變つた快活な口調で、身延の山の秋景色や宿の女中の白粉くさい

厭味たらしい顔や、乗合舟にゐた繭商人の事などを話して男を喜ばせたが、この旅を最後として自分だけで永久に甲州の土地を離れようと、ひそかに決心を强めてゐると、何にも氣づかないでゐる男の樣子が愚しく見られた。傍の者の反對にもめげないで自分を庇つて、寵愛を續けて來て呉れた男に對しては、いくらおかつのやうな女だつて、深い事情もないのに俄かに不實な考へを起すのを、自分ながら快く思つてはゐなかつたが、すでにさうなつたのをどうすることも出來なかつた。今まで氣づかなかつた醜さが男の鼻にも口にも現はれだした。

よぼ〳〵の老婢が留守居をしてゐる假住ひへ着くと、おかつも流石に安易を覺えた。近所の風呂へ入つて來て、坐り馴れた長火鉢の側に坐つて、鳥鍋で夕餐の箸を執つてゐると、生活の安樂に未練が殘つて、明日の日にも此處を立たうとした意氣込みが衰へだした。緣があつてこんな土地へでも來ることになつたのだから、迷はないで甲府の人になつて宮部の妻として一生を終らうかと氣を取直して、男の心を突つくやうな口は利かなかつた。

「昨夕お前の見た變な夢つて、一體どんなのだい?」と、新七が氣にかけて訊ねると、

「一人の夢なんぞ執念深く訊くもんぢやありませんよ。歸つて來ると何事もなかつたんだから、私すつかり安心しちやつたの」

「お前は時々出拔けに脅かすからいけない」

新七も安心した。そして、宵の間に兩親や兄のゐる櫻町通の店へ顏出しして來ることにして、食事が濟むと滿腹の腹を撫でながら、「別段用事はあるまいから、今夜は早く歸るよ」と云つて座を立つた。

おかつは獨りでゐる間には退屈醒ましに絽刺をしたり手習をしたりしてゐるのであつたが、今夜は疲れてゐるので、長火鉢の側へ枕を持つて來て横になつてゐた。すると、隣の二階から聞馴れた蓄音機の琵琶唄がガヤ〳〵と響いて來た。川中島の合戰に引續いてお極りの石童丸が唄はれた。

「あれにも倦き〳〵したよ。彼處でやる蓄音機には氣の利いたものは一つもありやしない。それにあんまり使ひ過ぎるから機械が壞れたと見えて、いやな音を出すぢやないの。たまには新しいのを仕入れて來たらいゝだらうにね」と、鐵瓶に水を差しに來た老婢の方へ目をやつて云つたが、老婢は何の感じもなささうに、

「左樣ですね」と卒氣なく答へた。

「あんたは昨夕一人でゐても淋しかなかつたの、おつるさんも遊びに來なかつたの」

「いゝえね、誰れも來りやしません。宵に早くから戸を締めて寢ました」老婢はさう云つて、臺所の方へ行きかけたが、ふと後戻りして思出したやうに、

「さう云へば今朝旦那の兄さんがこの家の前を通つてゐなさつた」と、聲を潛めて云つて、「私が御掃除してゐる時に、家の前に立つて此方を見てる人があつたから、誰れか知らんと出て行つて見ると、もうゐなくなつたんですけれど、どうも櫻町の若旦那のやうで御座んした。朝早く何處へお出でなさつたのか……」

「老婢さんは櫻町の方をよく知らないと云つてゐたぢやないの。どうしてそれが分つたの」

「先日おつるさんと一緒にお使に出た時、途中で櫻町の若旦那に會ひましたんです。おつるさんが指差して、あの人が此方の旦那の兄さんだよと敎へて呉れましたから、一心に見ときました」

「さう? どんな人なの。此方の旦那樣によく似てるんですか」

「そりや御兄弟だから似ていらつしやるんでせう。御立派な方ですよ。色の白い目の大きな、

それで此方の旦那樣よりも脊が高いやうに思はれました」

　老婢の言葉が例になく熱を帶びてゐたのを、おかつは不思議に思ひながら、

「そんなに立派な人なの？　だけど、あんたは目が薄いから、ちよつと見たくらゐぢやよく分らないでせう。なんだか當てにならないわね」

「ぢや、おつるさんに聞いて御覽なされ。私の目がいくら惡くつても、闇夜でもなければ、人樣の顏ぐらゐよく分りますさ。それを疑ひなさるんなら、姉さん御自身に櫻町のお店の前を通つてよく見ていらつしやればいゝ」

「さういきり立たなくつてもいゝわよ。……御立派でも貧相でも、お色が白くつても黑くつても、どちらでもいゝことなんだからね」

「でも、おつるさんはあの若旦那のことを褒めちぎつてゐますよ。主婦と連なつて歩いてゐなさる所を見ると、若旦那がいとほしくなるなんて云つてゐますよ。私は主婦は一度も見たこと御座いませんけど、あの若旦那に釣合ふやうな女は、こんな土地にや一人もないだらうと思つてゐますんです」

「また老婢さんの惡口がはじまつた。あんたの口にかゝつちや甲府も臺無しだけれど、この近所にもいゝ女がゐないこともないわね。佐渡屋の主婦もあか拔けがして意氣な姿をしてゐるし、角の洋品店の娘さんも齒はみそつ齒だけど目が何時も笑つてるやうで愛らしいぢやないの」

「なんだな、あのくらゐな容色が」と、老婢はせせら笑つて、「あのくらゐな女は、東京なら軒並みにゐますさ」

「まさか」と、おかつは口では云つたが、腹の中では老婢の言葉に同感してゐた。そして、「あんたはこの土地にずうつとゐる氣になつてるんでせう。たび／＼惡口は云つてゐても」と訊くと、

「それは姉さんがゐなさるのなら、何時までも御厄介になつてゐたいと思つてゐますけどな。……成らうことなら、まだ足腰の自由が利くうちに東京へ歸りたいと思つてゐますのです。あなたはまだ御存じないけど、甲府の冬の寒さつたらそれは格別なんで御座いますよ。私のやうな瘦せつぽちの老人には隨分に應へます」

「さうでせうね。四方が山ばかりなんだから」

　よぼ／＼の老婢でさへ都を戀しがつてゐるのが、おかつには可笑しかつた。で、一しきり二人で東京の話を何といふことなしにしてゐたが、暫らくして老婢が臺所の方へ行くと、おかつはふと思立つて、手習机を火鉢の側へ持つて來て、東京の母親へ宛てた手紙を書きだした。いろ／＼な譯から親子の仲はいゝ方ぢやなかつたけれど、久しく別れてゐると、流石に懷かしいこともあつたので、筆を採ると、あれもこれもと書きたいことが胸の中に叢がつた。手習を勵んで字が上手になつたところを見せてやりたいといふ氣にもなつた。先づ身延詣でをしたことから、山々の秋景色の美しかつたことを書いて、それから最近の自分たちの生活の平穩無事なことを書いて、「喜んで下さい」と、浮かと書續けたが、

「喜んで下さいも變だ」と、自分の筆の跡を見詰めて馬鹿々々しい氣がした。お母さんの方でもそれほど氣樂な生活をしてゐるのならもつと小遣錢を寄越したらいゝぢやないかと云ふだらうが此方のお寺詣りだつて、人に羨ましがられるほどの面白いことぢやないのだもの。

「東京が戀しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舍の町に小さくなつてゐるのは心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勸めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、

自分も母親や兄弟に弱々しい心を見せたくはなかつた。
　で、いろ〳〵に書惱んだ擧句に、おかつは、書きかけの手紙は反古にして、新に、簡單な時候見舞を述べて、椎の飴を贈屆ける次第だけを書いた。椎の飴は小包にした。そして、風呂へ出掛ける老婢に託して、郵便局へ持つて行かせた。

三

　横になつて默つてゐると、次第に疲れが出て來て、このまゝグッスリ眠入つてしまひたくなつた。せめて今夜だけでも新七が櫻町の本宅の方に泊つて此方へ歸つて來ないで、自由な獨り寢をさせて吳れゝばいゝがと、おかつはそれを差當つての肝心な望みとしながら、ウト〳〵してゐた。降頻る雨の音が彼女を眠りに誘ふばかりで、外には物の音はしなかつた。老婢は何時ものやうに長湯をして容易に歸つて來なかつた。
　戸の開く音がしたやうだつたので、おかつはふと假睡から醒めて、頭を持上げたが、誰れも入つては來なかつた。「老婢さん」と聲を掛けたが返事がなかつた。夢だつたのかと思直して再び枕に就いたが、何だか氣になるので、戸口へ出て見ると、老婢が軒先に立つて誰れかと話をしてゐた。おかつが顏を出すと同時に、その影のやうな人間は、「左樣なら。お大事に」と、四十を過ぎた女のやうな聲を出して、傘を傾げて行つてしまつた。
「あの人は誰れなの。御近所の人？」と訊ねると、老婢は口の內で曖昧な返事をして、茶の間の方へ急いだ。そして火鉢の側へ坐つてから、譯ありげな忍び聲で、
「あの人は元八日町の塚本さんのお店で御飯炊きをしてゐたんだけど、この頃は娘がいゝ所へ緣付いたから、其處へ手傳ひがてら掛人になつて行つてるんでせう。お湯屋の前で行會つて久振りに話をして見ると、此方樣の事もよく知つてゐるのに驚いちやつたんです」
「立話が隨分長かつたのね」おかつは老婢の方からこそ餘計なお喋舌をしたのであらうと察して、皮肉な目を向けたが、老婢は氣にもしないで、
「塚本さんでも臺所の方の人手が足りなくて困つてるんださうですよ」
「それで、あなたに助けに來て吳れと云つたんぢやないの」
「いんね。さういふ譯ぢやありませんです」
　老婢の言譯は暗かつたが、おかつはどうでもしろといふ氣になつて追窮はしなかつた。いかにも大儀なので、今夜は寢床をも老婢に延べさせて、新七に構はないで枕に就いたが、すると、老婢も湯上りのいゝ氣持でコクリ〳〵居眠をしだした。
　そこへ、雨を冒して歸つて來た新七は、重苦しい思ひに屈託して、冴えない顏をしてゐた。おかつは早寢の言譯をしながら枕を離れなかつたが、新七が直ぐに寢室へは來ないで、長火鉢に寄りかゝつて煙管をいぢりながら默つてゐるのを、不斷と違つたこととして變に思つて、
「あなたはどうかなすつたの。櫻町で變つたことでもあつたんですか」と訊ねた。
「さうでもない」
「ぢや何を考へていらつしやるの」
　おかつは打遣つて置く譯にも行かなかつたので、寢衣の上へ羽織を引掛けて火鉢の側へ寄つた。そして、茶を入れて、濃いのを自分でも飮んで、たるんだ目蓋に力を入れた。
「私の事でまた六ケ敷いお話があつたんでせう」とおかつはわざと微笑を浮べて輕く云つた。
「格別六ケ敷い話つてこともないが、親類の奴

がみんな舊弊な分らず屋なんだからね。この土地の習慣で親類が巾を利かせて餘計な差出口をしていけないんだ」

「そのことはたび〳〵あなたから承つてよく分つてゐますさ。今夜のお話を隱さないで聞かせて下さいな。驚きやしませんよ」

女が平氣でゐるのに新七は力を得て、「傍で愚圖々々云へばまた東京へ出掛けるまでのことさ。……だけど、折角親爺の方で預けてやるつていふ身代を棒に振つて他國へ行くのも辛抱氣がなさ過ぎるからね。どうせもう少しの間の辛抱だから、蟲を殺して待つてるんだね。そのかはり此方の物になつちまへば、大つぴらで何をしようと勝手な譯さ」と、自分で慰めるやうに云つて、「それで明日の日にでも親爺がお前に會ひたいと云つてるんだから、お前もそのつもりでゐてお呉れよ。おれが店へ出てる間に、自分だけこの家へ來て會はうと思つてるらしいから、何時來られても構はないやうに、油斷しないでゐてお呉れよ。不斷云つてる通り、親爺は極端な質素好きで、今風な贅澤は非常に嫌つてゐるんだから、そのつもりで身づくりをしてゐてお呉れよ。質素な風をして家の中をキチンと整頓させて、働くことには骨を惜まないつていふ樣子を見せれば、親爺はそれで滿足するんだ。六ケ敷い註文はない、至極簡單なものなんだ」

「でも私には大役ね」

「なに、親爺やお袋はおれの云ふことを信用してるんだから大丈夫さ。親類の奴が誤解してるからいけないんだが、此方で眞心さへ持つてれば、親爺だつてさう世間態ばかり苦にすりやすまいよ」

身を堅めてこの土地で店を出すことに極まりさへすれば、相當の資本を出して貰へるし、二人しかない兄弟の一人として、財産の分前も少くはないことを、新七は何時ものやうに女の心を引立てるために話した。一人だけあつた娘が年頃になつて死んでからは、一層二人の子供に執着して、弟の新七を膝下から離して他郷で何時までも學問などさせて置くには堪へられなくなつた父親の氣休めのために、新七も一先づ小さな商人にでもなる氣になつてはゐるものの、末永くこの田舍町で過す覺悟をしてゐるのではなかつた。

「今のやうに兄貴の下で働くんぢや張合ひがないが、自分が主になつてやる日にや商賣もなかなか面白いもんだよ」

今更珍らしいことではないが、新七の説明を聞いてゐると、おかつも財産家の妻になつて、兄妹や知人に對して肩身の廣くなることに心が動かないことはなかつたが、一心を纏めてこの幸運を取逃さないやうに努める氣にもなれなかつた。

長い一生新七に連れ添ふことの憶さが感ぜられるのをどうすることも出來なかつた。靜かな茶の間で男と差向ひで、將來のいゝ事を聞いたり聞かされたりしてゐながら、樂しい夢心地にはなれないで、しまひには返事をするのも大儀になつてしまつた。

「今日はいろんな目に會つた。そのせゐだか、一日が大變長かつたやうに思はれてよ」

おかつがさう云つて欠伸をすると、新七もそれに誘はれて欠伸をした。

翌日新七は、前夜注意したことを、も一度繰返して、日々の勤務としてゐる櫻町の本宅(印傳の大問屋)へ出掛けた。初めの間おかつは角帶に前垂の商人姿を外套で包んで、古い鳥打帽子を被つて出て行く男を見送るたびに、いたいたしく思つたり可笑しく思つたりしてゐたのだつたが、この頃は男の樣子がスッカリ田舍商人らしくなり切つたのが不愉快に見えだした。

一本當に櫻町のお父さんが訪ねて來るのか知らん」と思ふと、自分の境涯が顧みられて心が引締つて來たが、素直に男の指圖に從つて、父親を待つてゐるのが馬鹿らしい氣がして、田舍の頑固親爺の御機嫌なんか取るには當らないと、譯の分らぬ不平の端くれをそんなことに對してでも洩らすつもりで、わざと身裝をつくろつて待つてゐることにした。

空が綺麗に晴れて山々の眺めは美しかつた。

おかつは無駄足を厭はないで藝者町の風呂屋まで行つて朝湯に入つて來て、丹念に化粧に取掛つた。此方へ來てからも時々結つて、彼女には似合つてゐるとおつるから云はれてゐる女優髷にわざと結つた。

「姉さん、申兼ねますが、ちよつとお時の家へ行かせてお吳んなさい。午餐前に屹度歸つてまゐりますから」と、老婢は賴んだ。

「あゝいゝとも」

おかつは快く許したが、老婢が昨夕の立話に釣られて給金のいゝ處へ行かうとしてゐるのを察して、「よぼ〳〵の癖に何て慾が深いんだらう。此處を止めたら東京へ行きたいと云つてゐた口の下から直ぐあゝだから呆れてしまふよ」と、鏡に映る自分の顏に向つて呟いた。

鐵瓶に湯を沸らせて、茶や菓子の用意をもして待つてゐたが、時が立つにつれて、新七の云つたことを眞に受けて、訪ねて來る譯のない人を待つ氣でゐたことが馬鹿らしくなつた。こんな時におつるさんでも遊びに來れば、折角おつくりした甲斐があるのだがと思ひながら、退屈晴しに格子の間から表通を見てゐた。往來の人々に目をつけて、服裝や顏形をひそかに批評してゐたが、暫らくして、ふと格子戸が開いて「御免」といふ聲がした。

さては父親が來たのかと驚いて、おかつは氣取つた返事をして愼ましやかに障子を開けたが、土間に立つてゐたのは老人ではなかつた。新七の兄の幸吉であることは一目で察せられた。

「櫻町から來たんですが、上つてもいゝですか」

幸吉は極りの惡さうな顏して云つた。

「さあ、どうぞ」

おかつは茶の間を通つて奥の座敷へ客を導きながら、弟とは似もつかぬ兄の水際立つた目鼻立をウットリ目の先へ浮べてゐた。

「いろ〳〵お世話になりまして」と小聲で挨拶して、お茶や菓子器を運ぶのに手間取つてから、閾の側に小さくなつて首垂れてゐたが、生れてはじめてかういふ男に近づいたといふ意識は、彼女の胸を湧立たせてゐた。

「あんたにはもつと早くお會ひせにやならん筈だつたのだが、出拔けに此方へ上つてもどうだらうかと思つて、御無沙汰してゐました。……東京からこんな田舍へ來て暮らすのは不自由でせう」

「いゝえ、別段不自由な思ひはいたしません。……ですけれど、毎日何もしないで遊んでゐちや冥利が盡きるやうに思はれてならないんで御座いますわ。老婢さんなぞお斷りして自分で家の事をしたいと始終思つてゐますのですけど」

「あんた一人で留守番してゐちや淋しいでせうから」

幸吉は彼女の母親の住所や兄妹の身の上について訊ねたが、それは通り一片の話題としたばかりで、深い意味を含んだ質問ではなささうだつた。おかつの方でもいゝ加減に跋を合せてゐた。そして、相手の方で肝心なことを云ひ出しさうにしては控へ〳〵してゐるのに氣を留めながら、肝心な話を待ちあぐんでゐたが、やがて、

「私はたとひこの土地で一生を葬らすことになつてもよろしいんですけれど、私が此方へまゐつたために、お宅の皆さんに御迷惑を掛けちや濟みませんから、何時でも東京へ歸らせて頂くやうに新七さんにお願ひしてるんで御座いますよ」と自分の方から切出した。

「あんたの方からさう云はれると話がしよいんだが、私の家にはいろ〳〵込入つたことがあつて、結婚どころではない些細なことでも當人の一存は容易に通らないことになつてゐるんです。何もあなたに難癖をつけて彼此云つてるんぢやないから、その點は誤解しないやうにして頂きたいんだが、たゞ最初に親の許しを得ないでこんなことになつたのが、一概に新七の不始末になつてるんです。普通の家たら何でもなしに收まつて行くんでせうが、私の家は例外に面倒なんで困るんですよ。……無論落度は新七の方にあるんだから、あんたの考へはよく承つて、私どもの方であんたに對して盡すだけのことは十分に盡す氣でゐるんです。だから腹藏なく、あんたのお考へを私に明して下さい。私が責任をもつてあんたの面目を潰さないやうにしたいと思つてるんですから」

幸吉が言憎さうに云ふのを、おかつは遊び半分に聞いてゐた。今から一月も前であつたら、そして相手が幸吉でなかつたたら、持前の負けん氣を出して、「手切金でも出せばいゝと思つてゐるのか、金づくでどうでもなる私ぢやない。田舎者のくせに人を見くびるな」と、芝居染みた啖呵を切るか、それとも泣崩れてこの色戀に執着するところなのだが、今の彼女はそれほどには心を取亂さなかつた。

「新七さんはあなた方にどう云つていらつしやるんでせうか」

おかつは落着いてさう云つて、顏を上げて相手を見詰めた。濃い眉や高い鼻が凜々しい男らしさを現はしてゐたが、近づきがたいやうな怖い男でないことは先きからの話振りによつて分つてゐた。少し含羞んだ眼差は弟とよく似てゐながら、見てゐると身震ひされるやうな色氣をもつてゐた。

「新七の心はあなたにはよく分つてるでせう。あれは噓を吐く男ぢやない。あれが兩親や兄や親類の者の信用を得ようと思つて、毎日店へ出て來て仕事に身を入れてゐるのを見てゐると、私も兄として不憫でならないんです。兩親だつて新七の心は酌んでゐるんだが、表立つてあなたと結婚させることはどうしても出來ない譯になつてゐるんです。あれはまだ店の事はよく知らないから、自分の家が可成りの財産家ででもあるやうに思つてるんだらうが、私どもの商賣は見掛けばかりで、財産なんぞあるものぢやない。この家で別世帶を今まで持續けて來るために、あれも隨分苦しい算段をしてゐるやうです」

幸吉はさう云つた後で、ふと調子を變へて、

「それとも、あんたはどんな貧乏暮らしをしようとも、大びらに新七の妻として世間が通れなくつても、一生弟に別れないといふ覺悟をしてゐなさるんですか」

「兄さんは何故そんなことを仰有るんですの」

と、おかつはふと氣色ばんで、「私が慾得づくで新七さんに附纏つてゐると、お宅の皆さんは思つていらつしやるんですわね。私はそんなさもしい量見を持つてやしませんから、それだけはハッキリ申上げて置きます」

「それはあんたの誤解だ」幸吉は慌てて打消した。「私が今日出拔けに此方へ上つたのも、兩親や新七には内所なんで、私の一量見であんたの考へをよく知つときたいと思つたためなんだから、氣を惡くしないやうにして下さい」と云つて、座を立ちさうにした。

「私なんだか腑に落ちませんから、もつとハッキリしたお話を承りたいと思ひますの。私がこれつきり新七さんにお目に掛らないで、今日の中にでも東京へ歸ることにしましたら、それでお宅の皆さんは御安心なさるんでせうか。新七さんも私も將來を樂みにして、かうして仲よく暮らして居りますのに、藪から棒に、お前たちは添遂ける望みはないんだからさつさと東京へ歸れと仰有るのは、あんまり酷過ぎるやうに、私には思はれるんで御座いますが。私はとに角、新七さんがそんなにお手輕に戀仲を裂かれて平氣でいらつしやれるやうな方だつたら、これまで皆さんに御心配を掛ける譯がなかつたぢやありませんか」

おかつは、幸吉といふ人は若い男と女との仲についてはちつとも察しのない人、こんな役目を以て來るには不似合な人、商賣にかけては腕があるのか知らないけれど、色戀の道には暗いに極つてる人、人のいゝ人に違ひないと獨り極めにしてゐた。しかし、損害賠償として相當な金を取つて東京へ歸るにはこんな人を相手にした方がいゝかも知れないと、今の男に厭いた果に頻りに萌してゐた冷酷な慾念も持上らないではなかつたが、幸吉の顔を見てゐると、甲府といふ土地にも俄かに愛着の思ひが起つて、慾得を棄ててもつと辛抱してゐたくなつた。

幸吉は烈しい事を云つて弟の氣を挫かないやうに兩親が遠慮してゐることや、身延詣りを快く許したのも、それを最後にこの家を疊ませるやうにと思つたためであることなどを話したが、そんな話もおかつの心を脅かすよりも、彼女の氣だるい身體を刺戟して、生々と今日の日を見させた。幸吉の聲音は、言葉の意味が何であらうとも、彼女の耳に色つぽく聞えだした。

……兩親に同意して二人の仲を裂く下心をもつて來たのやら、弟思ひで二人の仲を憫んで來たのやら、どちらだつておかつは關はなかつた。そして、却つて自分の方から、

「新七さんに自棄を出させないやうに氣をつけて下さいましな。今日兄さんのいらしつたことも内所にして置きますから」と云つて、「後々のことは私後でよく考へて、あなたに御返事いたしますわ」と、淡白に云つて相手を喜ばせた。

四

昨夕の寢醒めに思出したりしてゐた、身延の若僧の青褪めた品のいゝ浮世離れのした顔は、幸吉の俗人らしい生々した顔に蹴押されて、おかつの胸の中から淡く消えてしまつた。長い間戀焦れてゐた男にめぐり會つたやうな氣持で、おかつは幸吉の顔形を何時までも目の前に浮べては弄んでゐた。二人きりの兄弟でありながら、何故あゝも違つてゐるのであらう。氣が弱くて人がよくて、物分りのよくなささうなところは兄弟よく似てゐるらしいのに肝心な顔形は何故あんなに雪と墨とほどに違つてゐるのであらう。若しかすると腹違ひなのかも知れない。

おかつは自分が東京でふとした事から馴染んだ男が、兄の方でなくつて弟の方であつたことを忌々しく思つた。籤の引損ひか、博奕の賽の目の出損ひのために、長い間の樂みをふいにしたやうな口惜しさが感ぜられた。

幸吉が行つてから間もなく、歸つて來た老婢は遲くなつた言譯をクド〳〵としてゐたが、おかつは取合はないでゐた。

「今日はどなたかお客樣でも入らつしやつたんでせうか」と、老婢は訊ねた。

「誰れも來るものかね」と、おかつは無愛想に答へて、自分一人の夢を見てゐた。

「でも、姉さんの御樣子が違つてゐますもの」

老婢は、何時もながら自分が外から歸つて來る

と、さも待受けたやうに迎へて外の樣子を訊ねたがるおかつが、今日はちつとも取合はないのを變に思ひながら、「かう申しちやお諂ひのやうに思ひなさるでせうけれど、頭髪をそんな風にしていらつしやるのが今日は特別によくお似合ひなさるんですよ。それに何かいゝ事の前觸れでもあつたやうに日本晴れの顏してゐなさるんですもの」

「さう、老つてもいゝわね」と、おかつは悦しさうに云つて、「老婢さんは目が薄い〳〵と云つてゐながら、人の事にはよく目が利くから油斷が出來ないのね。お客樣は來なかつたけど、いい音信があつたんですよ」

「それ御覧なさい。……東京から郵便がまゐりましたのですか。東京からだとお手紙でも珍らしう御座いますね」

「さうね」おかつは快い笑ひを洩らして、「私今日は綺麗になつて？　不斷よりはちつとはいい女に見えて？」と甘えた口を利いた。そして、「何時も美しいのに、今日はこと更美しく見えると、老婢にお世辭を云はれるのが、例のお世辭と思ひながらも悦しかつた。

　おかつは午餐後の常例となつてゐる午睡もしなかつた。退屈凌ぎと修養のために、新七からも勸められて日々少しづつでも努めてゐる手習や絽刺にも、今日は手をつけないで、長火鉢の側や、冴えた日の差してゐる縁側で、ボンヤリしてゐた。新七と親しくなつた時分の有樣や、その前に掛り合つてゐた男のことが、目の前に浮いたり消えたりした。手輕に掛り合つて左程の思ひを殘さないで別れて來た二三の男については、今思出しても悔いも恨みも懷かしみも殆んど感ぜられなかつたが、最初ある知合ひの惡婆に易々と騙されて、頭の禿げた豚見たいな男に僅かな金のために、無垢の身體を汚されたことだけは、思出すと口惜しくてならなかつた。

「勿體ないことをした」と、自分の美しい肌を粗末に取扱つたことが、悔いても〳〵足らないのであつたが、いよ〳〵窮した時には、豚のやうな爺さんを訪ねたら助けて貰へさうな氣がして、知らず〳〵心の底では手頼りにしてゐるのであつた。

「あのお爺さんは私を猫か犬かのやうに寵愛して、いろ〳〵の事を教へて呉れた」おかつはそれを思ふにつけて、新七の無邪氣な戀の次第を連想したが、弟と性質は似てゐるらしい幸吉をも、同じ手順で馴染を深くして行かれさうに思はれた。

　美しい女として自分の顏が幸吉の目に映つたに違ひないと思はれて悦しかつた。

「老婢さん、櫻町の若旦那の主婦さんといふのはどんな方なんでせうね」と出拔けに訊ねた。昨夕ちよつと聞いたのであつたが、あれだけでは物足らなかつた。

「おつるさんのお話では、主婦さんは御器量人ぢやないさうですよ。何しろ在所の方ですからね」

「在所といつて何方だらう」おかつは、身延詣りの途中の村々を思出した。雨の中を嬰兒を背負つて渡舟に乘つてゐた健氣な田舍女を思出して、それを幸吉の主婦でもあるやうに、幸吉と並べて見たが、さうしてゐると、田舍女の主婦が嫉ましかつた。さういふ田舍女に滿足して睦じく暮らしてゐる幸吉の心根が歯痒かつた。……いくら身代を延ばしたつて、その主婦を有難がつて色戀も知らずに若い時を過して、何がいゝことがあるのであらう。

　日暮近くなつて、隣家では例の蓄音機を鳴らしだしたが、今度は聞飽いた琵琶歌や勸進帳の外に、「行こか戻ろかオーロラの下を、ロシャは北國果て知らず」といふ哀れつぽい流行唄が唄は

れたり、陽氣な馬鹿囃子が鳴つたりした。おかつはそれ等の唄に調子を合せて唄つてゐたが、哀れつぽい唄には涙のこぼれるほどに哀れになり、陽氣な唄には踊りだしたいほどに陽氣になつた。

「老婢さん、今夜は御酒を取つて來て下さいな。それから蒲燒の三人前も誂へて置いてね」と、勢よく云ふと、

「御酒を召上るんですか、お珍らしい」と云つて、老婢も悦しさうな顔した。

「みんなして飲みませうよ、旦那樣も時々は醉つた顔でもした方がいゝのよ。あんただつて時々は甘酒の欲しさうな顔してゐるぢやないの」

「姉さんは口が惡い。……此間は煮物のお酒の殘りを、勿體ないから頂いただけなんで御座いますよ」

「老婢さんは正直ね。……私のお母さんが寢酒を飲みたがるんですよ。だから、私もちつとは御酒が頂けるんでせう」

老婢が使に出た後で、おかつは夕化粧をしてゐたが、そこへ、新七は靜かな足音をさせて歸つて來た。

「お歸んなさい」と云つて、おかつは振返つたが、新七は昨夕と同じやうに屈託に曇つた顔をしてゐた。本宅で何事か彼れの氣に掛かることを云はれてゐるに違ひないと、おかつは察してゐたが、兄の訪問については、彼れの方から言出さないかぎりは默つてゐることにした。

「お前は今日は氣持がよささうだね」と、一層見まさつた女の顔に、新な愛着を感じながら云つた。

「毎日鬱いでゐたつてはじまらないんですもの」と、おかつは甘つたれた聲音で云つたが、彼女の機嫌がいゝのは新七には何よりも悦しかつた。

「本當にさうだね」と、彼れは曇りの拭はれたやうな目をした。

「お夕飯には久振りにお酒をつけることにしたのよ。いゝでせう」

おかつはいゝ匂ひのするクリームや練白粉や香油などを手の平で撫でたり、鼻だの頬だのと彼方此方の皮膚につけたりするのに、云ひ知れぬ樂みを覺えてゐたので、暇にまかせて鏡臺の前を長い間離れないでゐた。すると何時の間にか新七は鏡臺近く躙り寄つて鏡の中を覗きだした。「あなたにもつけて上げませうか」と、一度男の顔を化粧してやつたことがあつたので、新七が今もさう云はれたさうにしてゐるのをおかつは察しながら、今はそんな戯れを樂しむ氣にはなれなかつた。

鏡に映つた男の顔は愚らしく淫らしかつた。

「私今夜おつるさんを誘つて町を散歩して來ようと思つてゐるの」と、わざと云ふと、

「約束してゐるのかい」と云つて、新七は直ぐに不快な目をして、「お前はあの女とうまが合ふんだね」

「だつて私にはこの土地に女のお友だちは一人もないぢやありませんか」

「それはさうだが……」新七は自分は今親しい友人の一人もないのを苦にしてゐないのにと思ひながら、「僕はいつそ東京へ行つちまはうかな」と云つた。男の言葉は呻いてゐるやうにおかつの耳に響いた。

「あなたの辛抱氣のないのには呆れてしまふ。昨夕あんなに云つてゐなすつたのに。私そんな氣まぐれは大嫌ひさ」

「だつて、昨夕と今日とは僕の境遇が違ふんだからな」と、新七は聲を落して、「親爺の仕向け樣次第で、僕はどんな酷い決心をするかも知れないよ」

「ちや、何時まで經つても私はお宅の方の信用が得られないから駄目なのね。私さへ此處にゐなければ、あなたは御大家の御次男で文句はないんでせう」

おかつは他人事のやうにさう云つて、それよりも白粉の乘加減に一層興味を惹かれてゐるやうであつた。

「おれは明日から店へは出勤しないよ。早く自分の店が出せないくらゐなら、この頃やつてゐることは無駄骨なんだから。……兄貴や兄嫁に侮辱されたかないからね……」

「兄さんと喧嘩したんですか。詰らないぢやないの。あなたは素直にさへしてゐれば、ひとりで財産が頒けて貰はれるんぢやありませんか」

たび／＼繰返してゐる財産の話が出ても、一月前のやうに、あるひは四五日前ほどにも、おかつの方で熱心に話に乘つて來ないのが、新七には齒痒しくてならなかつたが、相手の冷淡さを責めるのは躊躇された。「三分一でも四分一でも、お父さんの丈夫な内に頒けて貰はにや損よ」と、以前のやうにおかつに嗾けられなくなつたんで張合ひが拔けた。

老婢が知らせで、二人は支度が出來てゐる食卓の前へ寄つたが、新七は二ヶ月あまりを過したこの隱家をやがて立退くための別れの酒宴のつもりで盃を手にした。側にゐる女の晴々した顏を見るにつけても、今日の午後本宅の奧座敷で兩親や兄が顏を揃へて評議した時の有樣を明らさまには話されなかつた。

「何をさう思案してるんですよ。店を分けて貰へないことなの」おかつは揶揄ふやうに云つたが、今朝幸吉が此處を訪れたことがどれほどの利目があつたのかひそかに知りたく思つてゐた。幸吉が訪問を隱してゐるらしいのも不思議であつた。

「お前さへ覺悟すれば僕は何處へでも行くよ。さうなりや外の思案は入りやしないんだ」と、新七はふいと眞面目になつたが、かう眞面目になられたのに、おかつはゾッとした。何處へでも行くよなんて云ふのが、甲府に來る前の新七の言葉を、おかつの記憶に呼起させた。一緒になら死んでもいゝと、どうかすると思つてゐるらしいのが恐ろしくつて、揶揄つてなどゐられなかつた。話を外して、老婢をも呼んで酒を振舞つたりして氣樂な世間話をして紛らせてゐた。

五

新七を煙たがつて、彼れが家にゐる時には、成るべく遊びに來ないやうにしてゐるおつるが、格子窓の外から「今晩は」と聲を掛けると、おかつはそれをいゝ機會にして、座を立つて、家の中へ招いて、買物を兼ねて遊びに出掛ける道連れに誘つた。

「あなたはいらつしやらないでせう」と云つて、新七を家に殘して、おかつは不斷着に縮緬の羽織だけ引掛けて、おつるとともに外へ出ると、

「私、今夜は櫻町の方へ行つて見たいの。連れてつて頂戴な」と云つて新七の本宅をはじめて、外からでも見ようとした。

「あなたはお店の皆さんをよく御存じなんでせう」おかつは相手が平生遠慮して本宅の内輪の話に觸れないやうにしてゐるのを察してゐたがらさう云つた。

「お顏だけなら皆さんを知つてますわ。」

「ぢや、あなたと一緒にお店へ寄りでもしたら、私つてことが皆さんに分るわね」

「だつて、彼方では姉さんを知つてらつしやるんでせう。大旦那だつて若旦那だつて、疾くから姉さんを知つていらつしやるんでせう」

「ほんとに。私迂闊だつたわね。……どなたにもお目に掛つたことがないから、知らん顏してお店へ買物に行かうと思つてゐたのに、當て

が外れちやつた」
狭い町で顔を知られてゐるのは意外であつたが、それにつけても、甲府といふ土地が、一層狭苦しくなつたやうにおかつは感じた。「此方では知らないのに、先方にだけ知られてゐるのはいやなものね」
「でも、姉さんはお店の若旦那にはお會ひになつたんでせう」
「……」おかつは、「いゝえ」と答へかけたのを危く思ひ直して、「おつるさんはどうしてそれを知つてらつしやるの？」と、事もなげに云つた。
「だつて今朝お宅へお入りになつた方の後姿が幸吉さんのやうでしたから」
「私あの方に叱られたのよ。彼處の人はみんな堅苦しさうね」
「さうでせうか」
おつるは信じない口吻であつた。櫻町の本宅の方へ足を向けてゐながらも、おかつは最早間が悪くつて、はじめの興味は殺がれてゐた。彼女の住居の近所とは違つて、櫻町あたりは都會らしく明るくて賑かで、いろ／＼な夜店も出てゐた。おかつは久振りで雑沓の中へ足を踏込むと、東京の夜が戀しくて溜らなくなつて、新七一人が男でもあるやうに自分の身體を彼れにまかせてこんな土地へ來たことの間の悪さが、新な悔いとなつて胸に浮んだ。町の左右の商店や飲食店や見せ物などについて、おつるが知つてゐるかぎりの説明を絶えず聞きながら歩いてゐたが、おつるに對して何となく打解けられなくなつて、その言葉の端々をも邪まに聞きがちになつた。
「宮部さんのお店はそこですよ」と教へられると、足を留めて、電信柱に身を隠して其方を見詰めた。間口の廣い立派な、見るから身代の豊からしい店であつた。額の廣い老人が眼鏡を掛けて書付を讀んでゐた。
「さあ行きませう」と、おかつは詰らなさうに云つて後へ戻つた。
「何時も若旦那がお店へ出てゐるのに、今夜はどうしたんでせう」とおつるが云つたが、おかつの耳には冷かしのやうに聞かれた。で、平生なら、蕎麦でも汁粉でも奢るところなのだが、今夜は何處へも寄らないで、買物もしないで眞直ぐに家へ向つた。
「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覺えた。
おつるの家の前でおつるに別れると、おかつは自分の家を目の前に見ながら、薄暗い通へ道を外して、暫らく當てもなく歩いてゐた。明日から出勤しないと云つてゐる新七に、寝ても醒めても附纏はれるのは、思つても氣味が悪かつた。
よく知らない町を歩いてゐるうちに、ふと先き通つた賑かな處へ出て來たので、おかつは再び宮部の店の方へ行つて、横目でソッと店の中を覗きながら通過ぎた。すると、老人の坐つてゐたところへ、幸吉が代つて坐つてゐて、小僧を相手に話しながら笑顔をしてゐたのが、おかつの目に留まつた。此方へ氣がついたら、幸吉がどんな顔をするであらうかと、おかつはだらけた好奇心に驅られて、も一度店の前を通つた。幸吉も今度は此方を見たに違ひなかつた。通過ぎて電信柱の蔭から見ると、幸吉の樣子は先きとは違つてゐた。口を噤んで澁つた顔付をしてゐた。
澁い顔をして見せたつて怖かない、顔や姿こそ違つてゐても性分は弟と同じことなのだらうからと、おかつは可笑しく思つて、親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は足早く家へ歸つた。

新七はまだ醉ひの醒めきらない顔して、火鉢の側で仰向けに寢てゐた。

「たゞ今」と、氣取つた聲で云つて、おかつは櫻町の本宅を見て來たことを話した。

「なんだつてそんな處へ行つたの？」

「だつて、おつるさんが連れて行つたんですもの。あの人はお腹の中にいけないところのある人ね。私これから成るべく懇意にしますまいよ。とんだ迷惑を掛けられるかも知れないから」

「だから僕が不斷さう云つてゐたのに」

しかし新七は、今の場合おつるの事などはどうでもよかつたので、重ねて訊返しはしないで、今まで獨りで考へてゐたことを、粘つこい口調で話しだした。今夜中に必要な物を纏めて置いて、明日早く何處かへ行つて姿を隱さうといふのが、彼れのつまりの企てであつたが、おかつは、

「私さへ辛抱してゐれば此處にゐたつていゝぢやないの。私があなたを唆かして他所へ連出したと思はれるのはいやですからね」と、熱心を装つて、眉根に皺を寄せて云つた。

「誰れの口から知れたのか新聞にまで出されたから、なほいけなくなつたんだよ」

「新聞に？　どんなことが出たのか讀んで見たいわね。あなたはその新聞を持つていらつしやらないの」おかつは自分の事が生れてはじめて新聞に出されたのに興味を感じたが、新七は明らさまにはその記事を語らなかつた。

「僕は家の者や世間の奴から馬鹿者にされたつて構やしないが、お前は僕が零落したつて愛想を盡かしやすまいね。お前のお母さんにももつと氣樂な生活が出來るやうにして上げると約束してあるんだけれど、當分約束を果す見込みはなささうだ」

「そんな不景氣な話はお止しなさいよ。氣が滅入つちまふわ」

おかつは男の煮えきらないクド／＼した話のお相手になつてゐると息苦しくなるので、露骨に、

「私の情愛が薄くなつて、はじめの間ほどにあなたを大事にしなくなつたと思つて、いろ／＼に氣を廻して心配していらしやるんでせうけれど、私は現在あなた一人を手頼りにしてるんぢやありませんか。あなたの外に私の掛り合つてる男が一人も半人もある譯ぢやないし、こつちへ來てからは外の男の人とは口を利くことさへもないんですからね。念のために老婢にでも訊いて御覧なさい」

「僕はそんないやなことを思つてお前を疑つてやしない」と、新七は口を尖らせた。

「ぢや、それでいゝぢやないの」

それ以上に、自分から何を欲しがつてゐるのかと、おかつはこの男の物足らないらしい口吻を奇怪に思つた。最初に馴染んだ姐さんに仕込まれた色慾の手管に新七の滿足しないのが不思議であつた。

「いやねえ、あなたは。涙を落したりして」

「お前は泣くことなんかないだらう」

「だつて、泣く譯がないのに泣けやしないわ。……口惜しくつて夜つぴて泣いたこともありますさ。あなたはまだそんな思ひをしたことないでせう。……私とあなたとが、浮世の義理かなんかで別れなければならない時が來たら、その時こそお互ひに思ふ存分に泣きませうよ。今から泣いて見たりなんぞしないでさ。見つともないから」

子供を綾すやうに云つて、おかつは手巾で男の目を拭つてやつた。新七は默つて綾されてゐたが、次の室でほどき物をしてゐた老婢が入つて來ると、つと起上つて、生眞面目に坐つた。

そして、

「老婢はお時の家へ行くのなら、今から行つて

泊つて來た方がいゝだらう。明日の朝早く起きられちや騷々しくつて却つていけないから」と云つて、おかつに向つて、先き老婢に急用があるといつてお時が迎へに來たことを話した。

「でも、泊りがけで行くほどのことはないんでせう」

おかつは今夜は二人きりで夜を過すのが何となく不安に思はれたので、老婢を離すまいとしたが、老婢は新七の勸めを幸ひに、泊りがけで行くやうに願つて手早く支度をした。

よぼ／＼の老婢でもゐなくなると、俄かに家の中が寂しくなつた。身延の宿で二人差向ひで川の音を聞きながら過した先日の宵の寂しさよりも、一層氣味の惡い寂しさがおかつの心を震はせた。新七とはその前に掛り合つた二三人の男と別れた時のやうに、手輕に別れる譯には行かないのは、今はじめて氣のついたことではないが、今夜は相手の顏を見てゐると、早晩自分の身にふりかゝつて來る災難が、豫め彼女の神經に傳はつて來るやうであつた。「この人は死ぬるまで私を離さない氣でゐる」と思ふと、男の執念に自分の今後の幸福が暗闇にされさうで、櫻町の兩親などの計らひで穩かに別れの道がつきさへすれば、自分に惡い名をつけられることなんか、どちらでも構はない氣になつた。

寢床に就くと熟睡を裝つてゐたが、不思議に目は冴えて容易に眠つかれなかつた。時雨の音さへ聞えて、人里離れた遠い處にゐるやうであつたが、すると、自分でも譯の分らない寂しさ詰らなさから、涙が枕に傳はつた。……をり夜半の寢醒めに、どうかすると涙のこぼれることがあるのを、晝間は思出しても馬鹿らしくて、誰れにも話したことはなかつたので、寢返り一つしても氣がつくほどの新七も、いまだに氣づかないでゐるのであつた。

六

「本當に今日は櫻町へいらつしやらないの」

翌朝おかつは非難するやうにさう云つて、雨戸を開けて澄んだ秋空を見上げた。老婢のかはりに拭掃除から朝餐の支度までも自分一人の手でしなければならないのが煩はしかつたが、新七は缺勤の覺悟は堅く動かさないで、そのかはりに臺所まはりの用事を自分から先に立つてしだした。今日にも立退くと云つてゐた家の土間を掃いたり、四つ匐ひになつて緣側に雜巾を掛けたりした。

が、何時もの出勤時刻が來ると、新七も落着かなくなつた。暫らく引續いて勤めてゐたのに、無斷で一日でも休んだなら、角立つた話しのあつた昨夕の後ではあるし、本宅の方で打遣つて置く譯はない、樣子を見に誰れかを寄越すに違ひないと案ぜられたので、病氣にかこつけて缺勤を屆けることにした。その使には近所のおつるを頼むことにして、おかつが流し元で食器を洗つてゐる間に、無斷で裏口から出ておつるの家へ行つた。

「オヤ、珍らしい。おつるが何時もお世話になりまして」と、家の側の溝で大根を洗つてゐたおつるの母親は、慌てて衣服を掻合せて、洗ひ物は打遣らかして、家の中へ入つておつるを呼んだ。

新七は用事だけを云つて、直ぐに歸らうとしたが、親子に頻りに引留められて、せめてお茶の一杯でもと歎願されたので、上り框に腰を卸した。

おつるがお茶を入れてゐる間に、母親は細身の煙管と煙草の袋とを持つて來て新七に勸めて、「老婢さん」と「姉さん」との名を先づ持出して、穩かな氣樂な三人暮らしを羨ましさうに褒立てた。

「あなたのお世話であんな手ごろないゝ家が借りられたのだが、近々にあの家を出るかも知れませんよ」と、新七は話の行きがかりで、うかと云はずともいゝことを云つた。

「それはまあ」母親は迂散くさい目をして、「櫻町のお宅の御近所へでもお引越しになるんで御座りますか」

「いや、さうぢやないです。……僕なんかは一寸先きは闇見たいなもんです」と、新七はまたうかと云はずともいゝことを云つた。

「あなた樣がそんなことを御存つてなるもんですか。お兄さんもこの頃はあなた樣のお宅へ入らつしやるやうぢや御座いませんか。ハンデお會ひになつて此方の姉さんの御氣性が分りさへすれば、お兄さんのお心も解けるに極つてゐると、私どももさう申してゐるんで御座ります」

「兄貴は一度もこつちへ來たことはない筈だが……」新七は獨言のやうに云つて、おつるの方を顧みた。

おつるは頼まれた使に出掛けようとして、土間へ下りたところであつたが、新七の險しい目付を氣遣ひながら、「お姉さんは當推量でいろんなことを云ふからいけないよ」と言つて、急ぎ足で外へ出た。

母親は娘の注意に氣づかないのか、そんなことには頓着しないのか、「此間中からたび／＼お兄さんをこの邊でお見掛けしてるんで御座います。お二人きりの御兄弟だから、お案じなすつてお出でになるんだらうと思つてゐましたんです」

「さうですか」

新七は不愉快な思ひを顏に現はさないやうに努めながら、口輕く暇を告げて家を出た。兄が此方の家の閾を跨いだことは一度もない筈なのだが、しかしおつるの母親が根も葉もない拵へ事を云ふ筈もないと、彼れは判斷に迷ひながら、裏口からそつと自分の家へ入つた。

おかつは手紙を書いてゐたが、知らぬ間に歸つてゐる新七の屈託した顏を見つけると、「吃驚しちやつた。……あなたは默つて出て行つて默つて歸つて來るからいけない。何か旨い物を買ひに行つてゐたんですか」と云ひながら書きかけの手紙を靜かに疊んだ。

新七は自分の煩悶のためよりも、むしろ迂闊な問ひを出して女の感情を害ねるのを氣遣つて、ちよつと躊躇したが、默つて濟ます譯には行かなかつたので、「この頃兄貴が訪ねて來たことがあるのかい」と訊ねた。

「え、入らしつてよ、昨日の朝」と、おかつは事も無げに答へて、何故今になつて言出したのかと、突然の問ひを訝りながらも、空呆けてゐると、

「矢張本當だつたのか」と、新七は呟いた。そして、おつるの母親から聞いたことをそのまゝに話した。

「あなたは何だつて不斷いやがつてたおつるさんの家へいらつしやるの？ 櫻町へのお使ひたら俥屋でも誰れでも私が頼んで上げますのに」と、おかつは忌々しさうに、ツケ／＼と云つた。おつる親子に對する昨日までの親しみを根こそぎ無くしてしまつて、「あんな人の云ふことを信用するやうぢやあなたも駄目。輕薄なお喋舌家だから、時の拍子でどんな出鱈目を言出すか分つたもんぢやない。……第一、兄さんは昨日の朝ちよつと顏出しなすつただけぢやありませんか」

「兄が來たら來たで、お前もおれに隱さなくつてもいゝだらうに。兄貴も昨日そんな話はしなかつたよ。……ぢや、親爺のかはりになつて兄貴がお前に會ひに來たんだね。お前は兄貴の氣に障るやうなことは何も云はなかつたらうね」

「私、餘計なお喋舌はしませんよ」
「來るのなら親爺が來て呉れゝばよかつたのに、兄貴が會ひに來たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につゝかれたりして、はじめからおれたちに好意を有つてやしないんだから」
新七は、夫婦の間の世間話の種にするつもりで、兄がわざ／＼此處の樣子を見に來たのだらうと云つて、兄の訪問の秘密にされてゐたことについての不平を、おかつの方へは向けないで、兄の方へのみ怨みを寄せた。心の中に多少疚しかつたおかつは、煩さい詰問を受けないのを喜んだが、幸吉夫婦が寢物語に自分の噂をしてゐると思ふといゝ氣持はしなかつた。
せめて甲府から、二里ほど距つた積翠寺温泉へでも行つて、當分身を隱してゐようと新七が云ふのを、おかつは上の空で聞きながら、今日明日に迫つたやうに思はれる自分の身の處置を考へてゐたが、考へてゐると、分別くさい身の處置どころか、わざ／＼甲府三界まで鬼か佛かに引張られて來たのを緣に、思ふ存分の事を仕遂げて見なければ、腹の蟲が收まらないやうに慾念が燃え立つた。「身延へお詣りして來ると、直ぐに新七さんと別れを急ぐ氣持になつたり、幸吉さんに會へたりしたのも、佛樣のお導きかも知れない。そんなに人の思惑を苦にしてお導きを袖にしちや、佛樣の罰が當るだらう」など と、おかつは調子づいて自分の慾念に媚びてゐた。
「積翠寺とかへはあなた一人でいらつしやつちやどう？　私は身延で懲々してゐるんだから旅は御免ですよ」と云つて微塵動ぎもしない氣振りを見せた。
そこへ、櫻町から歸つて來たおつるが姿を見せて、賴まれた事を果した返事をすると、おかつは「お使賃に何かお奢んなさいよ」と新七に云つて、自分は奥の室の机に向つて書きかけの手紙を書きつゞけた。
それは幸吉へ宛てた手紙であつた。「……御親切なお言葉はおろそかにはいたしません。昨日一日いろ／＼に考へまして、お宅の皆さまのお計らひに背かぬやうに、私の身の極りをつける決心をいたしました。緣のある者緣のない者、人間わざではどうともいたし方のない定まり事と思はれますから、私は皆さまのお計らひにおとなしくおまかせして、自分の強情は張り通さないことに決心いたしました。つきましてはあなた樣にお目に懸つて、最後のお指圖を頂きたいと存じますから、おいそがしいでせうけれど、至急にお目にかゝれるやうにして下さいまし。新七さまには內しよにして置きますから、左樣御承知の上よろしく、お取計らひ下さいませ」
おかつはかう書いて封筒へ收めて袂へ入れたが、胸の鼓動を禁じ得なかつた。乘合馬車の窓から覗いて見た富士川の岨際のやうな危い處を動いてゐるやうな氣がした。自分の夢のやうな望みが遂げられないで、手紙の文面通りにスゴスゴこの土地を立退かされるやうになつても變なものだがと、おかつは何方向いても不安な影が身に迫るのを覺えたが、そんな甲斐性のないことでどうなるものかと自ら勵ました。「ビクビクして尻込みしたつて災難が落ちて來る時にや來るんだから、思ふ存分やつて見なければ嘘さ。一目見た時から、この人になら命かけてもと思つたのだもの」
おかつはかう思ひながら、新七が自分で茶を入れて、珍らしくおつるを持成してゐるのを見てゐたが、ふと、
「私これから郵便を出しに行くから、次手に旨しいお茶受けを買つて來ますよ、お二人でゆつくりお話をしていらつしやい」と云つて座を立つた。

手紙を直ぐにポストへ入れるのは流石に躊躇されたので、俥夫か誰れかを使にやらうと考へたが、傍の目に觸れないで、幸吉に手渡しするのは六ケ敷さうだつた。たとひ手紙がうまく届いたにしても、新七に知られないやうにして幸吉に會はうとするのは手順が困難であつた。幸吉の方で氣を利かせて呉れゝばいゝが、手紙の文面を上べだけで讀んで頓間なことをして呉れたら、折角の心を籠めた思付きも妙なことになつてしまはうと氣遣はれたが、さう氣遣つてゐても果しがないので、思切つて運まかせで、手紙をポストへ抛込んだ。

　こんな時に老婢やおつる親子が心から自分の味方になつてゐないことが不便に思はれた。

　おかつが遠り道して、風月堂で西洋菓子を買込んで家へ歸つた時には、火鉢の側に新七一人例の屈託した顏をしてゐて、おつるの姿は見えなかつた。

「あなたは大變仲がよささうに話をしていらしつたのね。不思議ですわね」と云ふと、

「あの女の顏を見てると滑稽だよ。横からだとさうでもないが、正面に見てると隨分しやくれてるからね」

「今日はじめて氣がついたの？」

　おかつは空々しくさう云つて、火鉢の側を避けて奥の間へ入つた。心が咎めるといふほどではないが、男の顏を見たり言葉を聞いたりしたいでゐたかつた。

　幸ひに新七が散髪に出掛けたので、彼女は一念を籠めて手紙の成行を見詰めてゐることが出來た。冴えた日の差してゐる緣側には隣の白猫が遊びに來て、細い目をして此方を見てゐた。

　今のおかつには、幸吉といふ美しい面影を他所にしては、この甲府の土地に一刻もゐる氣はなくなつてゐたのだつたが、燃立つてゐる一念に冷たい水をぶつかけるやうな物があたりにウヂャ〳〵してゐるのが小憎らしかつた。老婢でもおつる親子でも迂散くさい目を此方へ向けてゐるのが、おかつの大望に取つては、今から小煩さい邪魔物になつてゐた。……白猫は媚びを含んだ目をして柔しい鳴聲を立てた。おかつはその聲に惹かされて知らず〳〵緣側へ出て、白猫を抱上げて綾してゐたが、さうしてゐる間に誰れもゐないといふ感じが、これまでとは違つて彼女を誘惑しだした。

　おかつはふと猫の子を抛出して、自分の持物の中の大切なものを撰出して一つの行李に纏めたりしてゐたが、するとそこへ歸つて來た老婢は、改つた挨拶をして、「申上げにくいんで御座いますが」と、今日中に暇を呉れと言出した。

「爲方がないわ」と云つて、おかつはそれ見たことかと、自分の豫想の中つたのをひそかに誇つて、「あんたは塚本さんへ行く氣なんでせう」

「あんな忙しいお家へは行きたかないんで御座いますけれど、おまきさんが自分のかはりに、せめて十日でもお店の臺所を助けて上げて呉れ、自分がお引受けして奉公人を搜してゐるんだけれど、どうしても見つからないからと、手を合せて頼まれますので、斷り切れないんで御座いますよ」

「そんなら行つてお上げなさいな。私の方はどちらでもいゝんですから」

　おかつは、くだ〳〵しい言譯を續ける老婢の方を見向きもしないで、持物の整理をしてゐた。老婢も自分の押入を開けて、いろんな物を風呂敷や行李の中へ搔集めてゐた。おかつはあらまし片付けてしまふと、突立つたまゝ皮肉な目で老婢を見ながら、

「あんたは旦那樣のお許しがなくつても出て行くつもりなの？」

「姉さんにお願ひして置けば宜しいぢや御座いますまいか。どうせ旦那樣にも御挨拶してから、お暇はいたしますけれど―
「でも、老婢さんは旦那樣が連れてらつしつたんぢやないの。私にはこの土地の樣子がちつとも分らないからつて。あんたに出て行かれちやこんな小ぼけな世帶でも、私のやうな無性者には持ち切れないかも知れないけど、それでも旦那樣はいゝと仰有るでせうかしら」おかつは揶揄ふ氣で云つた。
「こちら樣では私のやうな者はゐてもゐなくても同じことぢや御座いませんか」
「でも、老婢さんがゐなくなると、後が淋しくなるわね」
おかつはわざと哀れつぽい口調で云つた。下女をかねて隱し目付のつもりで雇つてゐながら、新七の方で給金以外の心付をすることもないし、おかつ自身も、はじめから老婢を好いてゐないので、屢々物惜しさうな謎を掛けられても知らん顏して、餘分な施しをしたことはなかつたのだが、暇を願ひ出た今の場合になつて、おかつはこの老婢でも自分の味方に引込んで置きたいやうな氣持になつた。よぼ〳〵のくせに、少しでも給金のいゝ方へと目がくれて、寒い時節をひかへて忙しい家へ奉公しようとするやうな慾の深い老婆を手懷けるのは造作もないことのやうに思はれた。
「あんたは東京へ歸りたいと、先日の晩云つてゐたぢやないの。歸るのはお止めにして此方に長くゐつく氣になつたの？ 私は都合によつたら近い中に東京へ歸らうかと思つてるんですがね」
「姉さんお一人で？」
「私一人だか、旦那樣も御一緒だか、それはまだ決らないんだけど、どちらにしてもあんたには一緒に行つて貰ひたいと思つてたんですの。だけどあんたが塚本さんへ御奉公することになつたのなら爲方がないわね。私の當てが外れちやつた」
「東京へ連れて歸つて頂ければ、私何よりなんで御座いますがね、姉さんは急にお立ちになるんですか」
「何時立つことになるか、日取りはまだハッキリ決つてやしないけれど」
「私の方では塚本さんにお義理がある譯ぢや御座いませんから」
老婢は東京へ行けるのなら、何時でも塚本の家から暇を貰つて來るからお伴をさせて吳れと熱心に賴んだ。おかつはこのよぼ〳〵の老婆の氣迷ひを可笑しく感じながら、相手の心を惹くやうな返事をしてゐた。

七

老婢は新七が歸り次第、兎に角暇を貰つて直ぐに出て行くつもりで、身支度をして待つてゐたが、新七が歸つて來ない先に、幸吉が入つて來たのには、老婢もおかつも驚かされた。手紙がそんなに早く屆かうとは思はれなかつたが、しかし、あの手紙の文面を胸に持つて幸吉が訪ねて來たやうにおかつには思はれてならなかつた。
「新七は加減が惡いんですか」と、幸吉は二人の何方に訊ねるともなく訊ねて、上り框に腰を掛けた。
「床屋へまゐりました」と、おかつは明らさまに答へて、「もう歸つて來ますでせうから、お上んなさいまし」
「いや病氣でなけりやいゝんです」
幸吉は家の中を見廻した後で、おかつの顏に目を落したが、間が惡さうに直ぐに目を外して、
「親爺が來ると面倒だから、私が代りに樣子を

見に來たんですが、大した病氣でないのなら安心です。今日一日は休んで明日は店へ出勤するやうに云つて下さい」

「承知いたしました」おかつは愼しやかに通り一片の受答へをしたが、ふと、ウッカリして大切な時を取逃してはならないと胸を波打たせながら、「新七さんはお勤めにいらつしやるかどうか分りませんわ。私が勸めたつて無駄ですから兄さんが御自身でお勸めなすつて下さい」と云つて、老婢に向つて、「御苦勞だけど、あんた一走り床屋へ行つて旦那さんにさう云つて下さいな」

「いや、呼びに行かなくつてもよろしい。唯私が來てさう云つとつたと新七に傳へて下されば、それでいゝんです」

幸吉がさう云つて、直ぐにも歸りさうに腰を浮かせたので、おかつは焦立つたが、手足ののろい老婢は成るべく使歩きを免れたい算段をしてゐるのか、幸吉の顏を見ながらぢつとしてゐた。

「早く行つて頂戴ね」と、おかつに急立てられて、老婢はやうやく土間へ下りたが、迂散くさい目で二人を見かへつた。それがおかつにはいやに煙つたかつた。

「一昨日あれからよく考へまして、先きあなたに宛てて郵便でお手紙を差上げました。私のやうなものでも一心籠めて書いたのですから、兄さんお一人でよく讀んで頂きたいんで御座いますが。兄さんの御返事次第で、私が甲府にゐるもゐないも、一生の事が決るんですわ」

おかつは老婢が閾の外へ出ると、さう云ひながら心の中では神や佛の加勢を祈つてゐた。白々しい顏して煙草なんか吸つてゐても、これ程に思つてゐる私の事を何とか思つてゐるに違ひないと、獨り極めにして惡びれないで、

「櫻町のお父さんや御親類の方にはどう思はれても構ひませんけれど、兄さんにだけは私のお腹の中を聞いて頂きたいんです。何處へでもお伴いたしますから、あなたの御都合のよろしい處へ私を連れて行つて、私が申上げたいことを十分に云はせて下さいましな」と調子に艷をつけて云つた。

「昨日であなたの心持は私にはよく分つてるんです。世間でどんな噂を立ててゐても、私はあなたが新七を騙したといふことは信じはしません。どう決りがつかうとも、あなたの顏を潰すやうなことは私が受合つてしないから、その點だけは安心しといて下さい」

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の量見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を頂いてから、この土地にゐるともゐないとも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ」

「どんな手紙かしら。私の一存で御返事の出來るやうなことなんですか」

幸吉が不安な好奇心に動かされてゐるのを、おかつはいゝことにして、

「私の申上げることは兄さんは十分に聞いて下さるでせうけれど、私にしては生命定めなんですから、こんな處でお話する譯にはまゐりませんわ。何時に何處へ來いと仰有れば私間違ひなく其處へまゐります。仰有つて下さい。私のためにいろ〳〵御心配を掛けたんですから、御迷惑でもこのお願ひも聞いて頂きたいんですの」

「しかし、ちよつと困つたなあ。……手紙で返事しちやいけないですか」

「新七さんに添はれなければ死ぬるの何のといふやうな馬鹿なこと云つて、あなたを困らしやしないかと心配していらつしやるんですか。そんなことを考へてゐるほどなら、兄さんに御

相談なんぞいたしやしませんわ。無教育な女の私が皆さんに悪く云はれながら、默つてこの土地を立たうと決心してゐるほどなんですもの。兄さんも私が是非とも申上げたいと思つてることを聞くだけでも聞いて下すつても、お人柄に障ることはあるまいと思つてゐますのですが」

「……よろしい。ぢや、晩餐後鷹匠町の幾造の家へ行つとつて下さい。私が歸りにさう云つて置きますから」

「でも私お宅のお知合ひの家はいやで御座いますわ」

「だつて知らない人の家であなたに會ふのも困るからね」

「ぢや道を歩きながらお話してもよろしいんです。ハッキリ時間を極めて下されば、私太田町の公園へ行つて、日朝様のお堂の前でお待ちして居りますわ」

おかつは日朝様のお堂の前で願掛けをしてゐる風をして待つてゐようと空想したが、幸吉を説きつけると、幸吉は躊躇しながらもやうやく納得した。

「あゝ悦しい」おかつは思はずはしたない聲を洩らして、「ぢや、その時何もかもお話しますわ」

と云つて、時間の打合せをした。幸吉の方でも此方を何とか思つてゐればこそこんな賴み事を承知したのだと獨り極めにして、夢心地で相手の顔を見てゐたが、此處へ新七に歸つて來られて、兄弟の間に面倒な話の取りかはされるのを、傍で聞かされるのを豫想すると、ふといやな氣がしたので、

「兄さん、今夜私に會つて下さるのなら、今は新七さんにお會ひにならないで歸つて下さいませんか。昨夕お宅でどんなことがあつたのか存じませんが、新七さんはあれから不機嫌で爲樣がありませんの。兄さんには何を言出すか分りませんから、今日はこのまゝ知らん顔で歸つて下さいまし。後で私がいゝやうに言つて置きますから」と、先き自分で引留めたことは忘れたやうに云つた。

幸吉も此處で弟に會ひたくはなかつたので、短氣を起さないで今日一日はゆつくり休息するやうにとの言傳を賴んで忙しげに出て行つた。

おかつは身延詣での御利益があつたのか知らんと、まことしやかに佛樣を崇める氣になつたが、男を惹く力が自分に備つてゐるのを誇るやうな氣持もした。あの人は新七に會ふよりも自分に會ひたさに來たのぢやないか、それに違ひないとふと思當つて獨りで微笑まれた。

「お客樣はどうなさいました」歸つて來ると、さう云つて怪んだ老婢の問ひには答へないで、

「老婢さん、私今どんな人相をしてゐて？　運が向いて來さうに見えて？」と、出拔けに訊ねた。

「いゝお話をお聞きなすつたの。姉さんは昔からいゝ運にばかりお會ひになつてるぢや御座いませんか」

「戲談お云ひなさい。今こんなにして暮してるのはちつともいゝことないぢやないの。だけど明日の日にも私に幸福が向いて來たら、あなたにもお裾分けして上げますよ。縁があつたらばこそ、見ず知らずのあなたとこんな土地で二月も三月も一緒に暮らすことになつたんだから、これから先も懇意に附合つて頂戴な」

おかつは老婢に對して頻りに別れを惜むやうな口を利いた。そして、「旦那樣には秘密よ」と云つて、紙幣を包んでやつて、洗ひざらしの足袋をも添へてやつた。――もつと見榮えのする物をやりたかつたのだが、持物の豐かでない彼女には、外によささうな物が見つからなかつた。――でも、老婢は意外な賜物として頂いて喜んだ。

やがて床屋から歸つて來た新七は、兄のゐないのに拍子拔けがしたが、結句それをいゝ事にした。老婢が暇を乞ふのを快く許してやつて、「此方から出すとなりや、相當の事をしてやらなけりやならないんだが、婆さんの方から出て行くといふんなら丁度いゝよ」と後で云つた。

「あなたも商人の子だから勘定高いのね」と、おかつは冷かして、「誰れとでも別れたいと御自分で思つた時には、先方からさう云つてくれた方が、あなたのために都合がいゝんでせう」と、冷かに云ふと、新七は顏を赧らめて、

「さういふ譯ぢやないよ……」と、自分が吝嗇でない言譯をしだした。

「でも、あなただつて私だつて、金持になつたら吝嗇になるかも知れないわね。遣ふためのお金だから、惜まないでドシ〳〵遣つたらよささうに思はれるけれど、持つて見ると、出惜みをするやうになるんでせうね」

おかつは努めて相手の話に相槌を打たうとしながら、日の暮までの待遠しさにいら〳〵して時々はトンチンカンな返事をした。

「口では手強いことを云つてゐても、まさかおれたちを見殺しにすることも出來ないんだね」

と、新七は兄の時間をも自分の都合のいゝやうに解いて一時の氣休めにして、昨夕のやうに昂奮はしなかつた。かねての希望通りに財産の分配をされる時を空想して、さうなつた時には惜しげもなく遣つて見せるやうな口を利いて得意た色を見せたりした。

「あなたが財産家になつたら、おつるさんに帶の一筋も買つてお上げなさい。物を欲しがつてる人に物をやるのは張合ひがありますからね」

おかつは自分の平生の贅澤な望みなどは口に出さないで、淡泊にこんな返事をしてゐた。

「老婢でもゐなくなると淋しいわね」おかつはやゝもすると返事もしないで、空に物を思ひながら口を噤んでゐる言譯にさう云つたが、新七も何となく淋しかつた。

「さう云へばさうかも知れないね。……今度下女を置くやうだつたら、もつと小綺麗なのを雇ふんだね」

その日は夕餐を早目に濟ました。そしておかつは食後風呂へ行くと云つて家を出掛けたが、出がけに何の氣なしに振返ると、新七は淋しさうに立上つて此方を見入つてゐた。その顏が暫らく彼女の目先にちらついて無氣味であつたが、湯屋の戸を開けるまでには目から消えてしまつた。

約束の時間のことを考へながら身體を洗つてゐたおかつは、餘裕があつても心が急かれたので、不斷の長湯に似ず、今夜は慌しく切上げて、火照つた顏を夜風にさらした。公園へ着くまでには、星が見えだして、細い月も冴えた空に照つた。身延の山の夜がふと彼女の胸に浮んだ。公園の片隅にある二階建の料理屋には賑かな人影が見えて三味線の音もしてゐたが、日朝樣の方は薄暗くて燈火も點いてゐないで、たゞ蟲が鳴いてゐるばかりであつた。

おかつは周圍に人のゐないのを幸ひにして、薄暗い方へ道を採りながら、湯屋で貰つた釣錢を賽錢として投げるつもりで手に握つてゐた。が、お堂の前へ着かない前に、木蔭から出拔けに人影の現はれたのに驚かされた。黑い帽子を目深に被つて外套をも着てゐたので分らなかつたが、近寄つてからよく見ると、それは幸吉であつた。おかつは既に心を許し合つてゐる戀人に會つたやうな氣持がして、打解けた微笑を洩らした。幸吉はわざと生眞面目な態度を持して、

「私はあなたと約束したから來ることは來たんですが、こんな處に長くまごついてゐる譯には

行かないから、用事だけを早く云つて下さい」と云つて、あたりに目を注いだ。

「用事を云へ、と仰有られちや私困りますわ。……私の手紙はお讀み下すつたんでせうか―

「見ました。……」幸吉は池の方へ向つて歩きながら、「手紙には私の指圖によつてどうとも決めるといふやうなことが書いてあつたが、私も横紙づくの指圖は出來かねるんです。成るべくならあなたにも新七にも傷がつかんやうにして纏りをつけたいと思つてるんだから」

「お互ひに何時までも煮え切らんことを云つてゐてもはじまりませんわね。私は兄さんの權柄づくのお指圖を受けたいんですの―

おかつは池のほとりのベンチを見つけると、自分から先きに腰を卸した。そして、手に握つてゐた賽錢は池の中へ抛込んだ。私を嫌つてゐなければこそ此處まで來たのであらうのにと擽つたく思ひながら、

―でも、私に會ひによく此處まで來て下すつたわね。私の願ひが叶つたんですわ。昨日兄さんにお目に掛つた時から、私は今までのおかつぢやありませんの、生命を棄てても、義理も人情も棄てても、といふ氣になりましたの。あなたも今朝訪ねて來て下すつた時から、さういふ私の心を、ちやんと察していらつしやるんぢやありませんか―

「私にはあなたのいふ事がよく吞込めないが」と、幸吉は慌てながら、女の方から目を外して、「新七を棄てるといふことなんですか―

―新七さんに關係したお話は、今夜は一口も仰有らないで下さいね。命に掛けて焦れた私の思ひを察して會つて下すつたんだから、今夜といふ今夜死んでも滿足だと私思つてゐますの。私、今は甲府といふ詰らない土地にゐるやうな氣はいたしませんの。……私、兄さんのお指圖で地獄へでも監獄へでも行けと仰有れば喜んでまゐりますわ。どうにでもして下さい―

さう云つた女の熱い息に驚いたやうに幸吉はつとベンチから立上つた。

―全體あなたは私をどうしようと云ふんだね。此方ぢや眞面目に聞いてゐるのに戲談を云つちやいけないね―

昂奮してさう云つた幸吉の胸の鼓動は、おかつの神經にはよく響いた。

―戲談ですつて？ 戲談が戲談でないか、兄さんのお腹の中ではよく分つていらつしやる癖に。私のやうな馬鹿な女にでも、これだけの事を云はせといて、恥を掻かせないやうにして下さい。兄さん、後生ですから」

「私は新七の兄だからね。そんなあなたの話を聞いとる譯には行かない―

「新七さんとは別れゝば赤の他人ですわ―

おかつが追驅けるやうにさう云つた時には、幸吉は足早く池のほとりを離れてゐた。おかつは待つて呉れと聲を掛けようとしながら脣を閉ぢた。そして、幸吉の姿が闇の中に消えるまで、ぢつとして見送つてゐた。

「なんて卑怯な人だらう」

おかつは相手を憐むやうに心の中でかう叫んだ。折角心を籠めて待設けてゐたこの最初の密會が色も香もなく卒氣なく終つたのが口惜しかつたが、幸吉の心の底は見透かされるやうだつたので絶望の惱みは感じなかつた。眞直ぐに家へ急ぐ氣にはなれなかつたので、彼方此方の町を歩いてから、おつるの家の前へ出ると、外から聲を掛けた。

―私の家へ遊びにいらつしやらない？ 私、今一人で公園まで散歩して來たところなの―

「お一人で？」と、おつるは障子の間から顏を出して、「老婢さんは急にお暇を頂いたんですつてね。お困りぢや御座いませんの……

「老婢はお宅へお寄りしたんですか」

「いゝえ。私、先きお宅の前を通りかけに聲を掛けましたの。あなたのお歸りが遲いつて新七さんは心配していらつしやいました」

「さう？」

おかつは、何時かのやうに湯屋へ迎へに行つてゐやしないかと思つて、今さらのやうに煩さく感じた。うるさく待つてゐられるところへ歸つて行つて機嫌を取つたりするのがいやだつたので、無理におつるを誘出して、一緒に家へ連れて行つた。

夜の公園の寂しい有様を語つたり、日朝樣へ願を掛けたことを語つたりして、自分の後暗い所行を言紛らせて、おつるを相手に賑かに宵の內を過した。そして、今夜はどうしても新七と二人きりで夜を過すのが厭だつたので、いろいろに說勸めて、おつるを泊らせることにした。新七だけを奥の室へやつて、自分とおつるとは茶の間に寢床を並べることにした。若しも幸吉が今夜の事を彼れの妻や兩親や、あるひは新七にまでも明らさまに知らせたならばと、ふと氣遣はれて、眠りかけた目も醒まされたが、それは彼女に取つては時間の違ひに過ぎなかつた。……弟によく似てゐる兄ではないか。不意打ちに吃驚したやうに一度は氣強くあゝ云つたものゝ、どうせ腹の中は分つてゐるのではないか。

おかつは幸吉がその妻と添寢しながら、今夜の事を思出しては眠りかねてゐる有樣を想像して、「私を跳ねつけて見たつて、今夜いゝ夢は見られやしないだらう」と、目の前に描出した男に向つて冷かすやうに云つたが、おかつ自身も夜つぴていゝ夢は見られなかつた。

八

翌日の午過ぎまで櫻町から何の音沙汰もなかつたので、あの事については幸吉の胸一つに收められてゐることを察して、おかつは意を安んじた。そして、自分の不所存の詫言をして、氣持よくこの地を立ちたいから是非會つて呉れと書いてやつて、も一度幸吉を何處かへ引出さうかと企ててゐた。

「今日はちよつとでもお店へ顏出ししていらつしやいな」と、時々思出したやうに新七に出勤を勸めてゐたが、新七は出勤どころか、自分一人だけでは一歩も外へ出まいとしてゐた。おかつの方で不平らしいことさへ一言も云はなくなつたのが、彼れには却つて氣掛りになつてゐた。早晩別れなければならぬやうな破目になりかゝつてゐるといふ豫感は頻りに彼れを脅かしてゐた。

「家でボンヤリしてゐても詰らないぢやないの。ちよつとでも出ていらつしやいよ。お父さんの氣に入るやうにしといた方が、あなたのためにも私のためにもいゝんですからね」と、おかつは唆かしても新七が動かないのがもどかしくて、

「ぢや、どうでもなさい。末を樂みにしてどんな辛抱でもすると、あなたが不斷云つてゐたのは噓だつたのね」と拗ねて見せたが、女に拗ねられるのに張合ひを覺えた新七は、その言葉に縋つて、いろ〳〵の口說をはじめた。

何時もと同じやうな詰らない愚癡として、おかつの耳は惱まされた。男は何故こんな詰らない愚癡ばかり並べるのが面白いのか知らんと、無理にも悅しがらせの一言も云へなくなつて、欠伸の出かゝるのをやうやく嚙殺してゐたが、そこへ櫻町の小僧が新七を呼びに來たので、彼女も油斷してゐられなくなつた。

「まだ加減が惡いからもう一日休むと云つといて呉れ」と、新七は小僧を歸して、「また兄貴でもやつて來るだらう」と皮肉のつもりで云つたが、

おかつは受答へをしないで奥へ入つて夜具を出して横になつた。傍所目には不貞腐れと見えるやうな態度で、新七の云ふ事する事の相手にならないで、強情に自分一人の思ひに耽つてゐた。若し幸吉が愚にも卑怯にも裏切りでもしようなら、その時こそ負けてはゐない、此方から身を投出して宮部の一家に小つぴどく恥をかゝせてやる。碌でもない男に長い間自分の身を任せた果に、ケチをつけられて、スゴ／＼この土地を去るやうでは甲斐性がなさ過ぎる。腹が癒えない。新七の實意や情愛が何の足しにもなるものか。

家の中は静かであつたが、ふと首を曲げてそつと目を開けて見ると、新七は茶の間で肱枕して足を曲げて假睡をしてゐた。寒さうで寢息も微かであつた。

おかつは喉が乾いてゐたので、新七の眠つてゐるのを幸ひに起上つて、鐵瓶の湯を呑んだが、湯は生温くて、長火鉢には火の氣もなかつた。

そこへ、櫻町からの使が再びやつて來たが、するとおかつは新七には知らせないで、自分で土間へ下りて、小僧を裏手の庭先へ連れて行つて本宅の様子を訊ねた。

「今直ぐに一緒に連れて來いと大旦那が仰有つたんですから、此方の旦那にさう仰有つて下さい」と小僧は手強く云つた。

「ぢや、今起しますから待つていらつしやい。……お宅の若旦那は昨夕もお店へ出ていらしつたの？」

「えゝ。昨夕はおそく歸つて來ました」

小僧が好奇心に驅られた目でおかつの顏を見ながら、氣輕な返事をするので、おかつは老人夫婦や若主人夫婦の氣風やこれ等の人々に對する店員の氣受けなどについていろ／＼と訊ねた。主婦と若旦那とは仲がいゝかと訊ねると、小僧はニヤ／＼笑つた。

「待つていらつしやい」と云つて、おかつはふと思出したやうに家へ入つて、小紙幣を鼻紙に包んで來て、使賃として小僧の手に握らせた。この小僧にしろ老婢にしろ、僅かな金を悦しさうにして受けるのを、おかつは見るにつけて、もつと金が自由になつたら、かういふ人たちの手に播いてやつて、自分の思ふやうに皆なを使つて見たいと考へたりした。

「あなたに頼みたいことがあるんだけど聞いて下すつて？」と、懷つこさうに云ふと、

「へゝえ」と、小僧は無邪氣な笑ひを浮べた。

「ぢや、待つてゐて下さいな」

おかつはふと思ひついて、家へ入ると急いで机に向つて、「昨夜は申譯のないことをいたしました。お許し下さいませ。もはや皆さまにお目にかゝるも恥かしく、いつそ自殺しようかと存じましたが、一言あなたさまにお詫びして、許すとのお言葉を頂きませんと、この世に思ひが殘つて死ぬにも死なれぬやうに思はれます。おしつけがましく何とも申譯は御座いませんが、昨夜と同じ時刻に同じ處へお出で下されて、私に會つて下さいませ。一分間でもよろしいのです。私の一生の望みはこれ一つで御座いますから、人ひとりのあの世の迷ひを救つてやるとおぼしめして是非聞きとゞけて下さいませ」と書いた。

これだけ書くにも案外手間取つたので心が焦立つたが、幸ひに新七の眠りは醒めなかつた。おかつは針の先で小指の先を突いて、自分の名前の下を血汐で染めた。

「これを祕密で若旦那に上げて下さいな。たゞ默つて渡せばいゝんですから、誰れにも見せないやうにね」と、手紙を小僧の内懷へしつかりと挾んで、「あなたのお名前は何と云ふの？」と訊ねた。

それから新七を揺り起すと、新七も不承々々に行く氣になつたが、おかつは不斷の出勤の時とは違つた他所行の晴着を出してやつて、「今日は度胸を据ゑて確かりした口を利かなきや駄目ですよ」と力を添へた。

「僕は大丈夫だ。直きに歸つて來るから、お前は何處へも出ないで、火でも熾して待つといで」

新七は寢呆氣顔しながら快活にさう云つて、小僧と一緒に出掛けた。

いよ〳〵こんな家に退屈して安閑としてはゐられない時が迫つて來たのを感じて、新七が歸つて來るまでに覺悟を極めなければならないと、おかつは昂奮して頻りに心が急かれたが、しかし昨夕の所行についての悔悟の念はちつとも起らなかつた。むしろ、破滅なら破滅でよかつた。どうせ一度は免れることの出來ない新七との別れ際の爭ひをも表立つて爭ふのも結句いゝ氣持のやうであつた。獨角力は取れないために、焦つて煮切らないで、面白くもない愚圖ついた生活のお附合をしてゐるよりは、掴み合ひの喧嘩別れでもした方がよささうであつた。

幸吉は昨夕おそく歸つて來たと、使ひの小僧の云つた言葉も、彼女には自分の都合のいゝやうに解いて、「私の云つたことが氣になつて、夢中で方々を歩いてゐたのだらう」と頼もしく思つてゐた。

立つてゐるおかつの頭の上にふと電氣が點いた。時計は止つてゐたが、日の暮れかゝつてゐるのに氣づくと、おかつは昨夕のやうに外へ出る身支度をした。どんな破目にならうとも世を憚つて腑甲斐なくコソソリ逃げだす氣は最早なくなつてゐたので、自分の持物を新七の留守の間に持出したりなどしなかつたが、自分の手許にある金は財布に袂へ込んで表の戸を引寄せただけで外へ出た。

おつるの家の外には遊びに行く處のない彼女は、また風呂へ入つて時を過した。新七の前へどういふ話が持出されてゐるかと自分が櫻町の次の室に忍込んで立聞きでもしてゐるやうな氣で、石鹸を片手に、茫然とした樣子をして耳を澄ましたりしてゐたが、「入らつしやいまし」と、直ぐ側で聲を掛けられたのに驚いて目を据ゑると、櫻町の家族の顔は湯氣の中へ散つて、おつるの母親のダブ〳〵した身體が彼女の鼻先で場所を取つてゐた。

「オヤ、ちつとも存じませんで」

おかつは惡い人に見つかつたと、いゝ幸先でもないと思ひながら、一しきり愛想のいゝ受答へをして、母親よりも先へ湯から上つた。

公園の入口まで行くと、おかつも流石に危かしいやうな恐しいやうな氣がして、ふと足が留つて進みかねたが、でも、スゴ〳〵家の方へ後戻りして、新七の歸るのを待つてゐたつても、別にいゝことのあらう筈がなかつたので、ふとした氣おくれを振拂つて昨夕のところへ押進んだ。昨夕此方の魔力にかゝつて來た幸吉が今夜あの手紙に牽かれて來ないつてことはないと、おかつは疑はなかつた。

昨夕詣りそこねた日朝樣のお堂の前へ行つて、蹲んで見上げたが、お堂の中には燈火一つ點いてゐないで、陰氣で薄汚さうであつた。身延の仁王門の側で見た時のやうに此處では佛樣も尊げには見えなかつた。おかつは賽錢を闇がりの中へ抛込みながら、參詣人のないかういふお堂の中こそ、媾曳に都合のいゝ處だと不意にさう思つたが、さうすると、薄汚い陰氣なお堂の中も懷かしく見られ出した。昨夕のやうに星が冴えて、弱々しい蟲の音も足下から聞えた。

昨夕と同じ時刻になつたことはあたりの樣子で知られた。おかつは階段の側に蹲んだり立つ

たりしてゐる間に、知らず〳〵佛樣に向つて熱心に祈願を籠める氣になつた。佛の御利益を說いてゐた身延の若僧の姿も、彼女の祈願に力を添へるやうに目の前に浮上つた。待焦れてゐる自分の思ひが佛の助けによつて新吉の心に通つて、此處へ寄つて來るやうにと口の中で祈つてゐた。珍らしくも兩手を合せて目を瞑つて額づいたりした。

闇に包まれて本尊の御姿は見えなかつたが、暫らく瞑つてゐた目を開いて見据ゑると、お堂の正面には新吉の姿が、まざ〳〵と現はれた。驚く間もなく直ぐに消え失せたが、おかつはそれを佛の示現のやうに感じて、改めて眞心から合掌禮拜した。燈火も人影も見えないお堂のあたりが、色つぽい不思議な靈場となつて彼女の心を蕩けさせた。風は動かないで冷々した空氣は彼女の湯上りの肌の温みをさました。料理屋の方からは木の間を潛つて三味線の音が微かに聞えて來た。

おかつはいくたびか足音の近づくのを耳にしては欺かれてゐたが、やがて、人影が間違ひなく此方へ近づくのを見つけて夢から醒めたやうに口を見張つた。人影は屢々立留つたり、あるひは横道へ外れたりするので、おかつは半信半疑で、正體を見つけるつもりで、自分から歩出して、木蔭に身をかくしながら星の光で相手の顏形の分るところまで近寄つた。

正體を一目見たおかつは、足下に蛇を見つけたやうに驚いて思はず後退りした。ボンヤリしてゐる薄暗い人影も、血眼になつて彼女を搜してゐる新七の面相を彼女の心に呼起させた。

おかつは後退りして、違つた道を求めて急いで公園を出た。後を氣にしてたび〳〵振返りながら、暫らく當てもなく歩いてゐたが、心が次第に鎭まるにつれて、新吉が手紙の祕密を弟に告げたのぢやないかと疑はれて、その卑怯な所行は憎々しく思はれた。

佛樣の御利益も何も滅茶々々になつたので、おかつはガッカリした。眞心を籠めたつもりの戀の邪慳に壞されたことが一途に悲しくなつて、誰れとも爭はうとする力が拔けて、こんな土地に一日もゐたゝまらないやうな氣になつてしまつた。

「どうにでもなるがいゝ」とおかつは弱々しく自分の心に向つてさう云つた。そして、新七の歸つて來るのを待つて、彼れの心まかせに最後の處置をつけて、自分一人で今夜にでも東京へ立てるものなら立つことにしようと考へながら、フラ〳〵と家へ歸つた。表の戸は開けつ放しになつてゐた。

火の氣のない火鉢の前にぢつと坐つて待つてゐると、新七の思惑などはどちらでもよくなつて口惜し淚が留度なく流れた。

新七が歸つて來たのは暫らく立つてからであつたが、先き出て行つた時とは見違へるやうな消褪めた力のない顏をしてゐた。「お前は何處へ行つてゐた?」と、咎めるやうに云つたが、女の身に異常がなかつたのに安心してゐることは言葉にも顏付にも現はれた。

「私、此處にぢつとしてゐたつて詰りませんからね」と、おかつは當てつけるやうに云つて、相手の鞭の下りるのを待つてゐると、

「僕は何が何やら分らなくなつたよ。親爺や兄貴には相變らず眞綿で首を絞められるやうな意見をされた上に、今日は變な事を云はれたのだが、それは別の話として、家へ戾つて來ると、お前はゐないしね。一人でゐると、あれやこれやと考へられて氣持が惡くなつたから、昨夕お前が公園に行つたとおつるに話してたことを思出して、僕も氣晴らしに公園の方へ散步に出掛けたのだ」と、新七は努めて靜かに云つて、おかつの方へ目を注ぎながら口を噤んだが、おか

つは沒表情のまゝで聢かりした受答へもしなかつた。

「さうすると公園で僕が誰れに會つたと思ふ？……僕は吃驚したよ。……」

「へえゝ……」ふとおかつの目はきらめいた。思はず訊返さうとしながら、言葉を嚙殺して、相手の問はず語りを待設けてゐた。

「日朝様のお堂の側をまご／＼してゐる男があつたから、何の氣なしに側へ寄つて見ると、それが兄貴だつたよ……少し前に氣持のよくない事を聞かされた後で、思ひも染めんところでまた出會つたんだから、僕は變でならなかつたが、兄貴の方でも吃驚しとつたよ。……お前は何とも思はないのかい」

「それが私にどういふ關係があつて？」

「僕には今日の事がみんな腑に落ちないんだよ。兄貴も氣が鬱してならないから散歩してるんだと云つて、僕を誘つて田圃の方を歩いて、歸りには汁粉を奢つて呉れたんだが、その間に僕の腑に落ちないやうなことをいろ／＼話してゐたよ。この間中とは人が違つたやうに、兄貴は親身にいろ／＼な事を云つて呉れたが、途中で別れてから考へ直すと、親身な話でも以前のやうにそのまゝにや受取れなくなつた。二人きりの兄弟で、子供の時分から大した仲たがひをしたことなしに大きくなつて來たんだが、この頃はどういふものか一人しかない兄が本當の兄のやうに思へなくなつたんだよ。兄貴の事を考へるといやあな氣がするんだ。今日に限らず不斷でも僕の爲を思つていろんな事を云つて呉れてるんだらうが、……」

新七はつゞいて云はうとしたことを直ぐには云出しかねて、澁い顏して口を噤んだが、おかつも浮かりした口を利いて藪蛇になるのを恐れて默つてゐた。火の氣のない火鉢の側に差向ひで默つてゐる間の鬱陶しさつたらなかつた。新七さへ公園へ行かなかつたら、望通りに幸吉に會はれたのだと思ふと、おかつは新七に對してどうかしなければ腹が癒えないやうに焦立つたが、我慢して目を伏せてゐると、

「兄貴はこの頃僕等に對して嫉妬心をもつてゐるんだ」と、やがて新七は言ひづらさうに云つた。

「さう？　可笑しいわねー」

「そんなことは思つても不愉快だから思ひたかないんだけれど、どうもそれに違ひないよ。お前は感づいてやしないのか。二三度兄貴に會つたんだから、話の中に自然に思ひ當ることがありさうなもんだがなあ」

「分らないわ、あなたの仰有ることは。嫉妬と云つて何を嫉妬するんです」

「そんなことを立入つて口に出して云ふのはいやだ。考へるのもいやだ」ふと氣色ばんでさう云つた新七の聲は震へてゐた。そして、努めて心を鎭めながら、

「おれは今夜の中にでもこの土地を立ちたくなつたよ。お前もどうせ此處にゐる氣はなくなつてるんだらう。後の始末は後で考へりやいゝんだから、一刻も早く他所へ出て行かうぢやないか。此處にかうして居つちや先が恐ろしいやうに思はれてならないんだ」

「私と一緒にゐると恐ろしいことがあるんですからねえ」と、おかつは無感興た返事をして、「ぢや、私がゐなければいゝんでせう」卒氣なく云つて、長いこと坐つてゐた火鉢の側から立上つたが、すると、新七は今まで壓へ／＼してゐた疑惑の惱み忿懣の思ひを最早、自分の心一つに收めかねて、われ知らず立上つて、おかつの後に立つた。

「お前は僕に苦痛を與へるつもりなんだな。僕を苦めといていゝ氣になつてゐるんだな。……それなら僕は云ふぞ。お前は利益のためには僕

等の家庭を亂してもいゝと思つてるんだらう。僕と一緒にゐたつて得になる見込みがないと分つたら、どんな手段でも取る氣になつてるんだらう。僕は傍で何といはれても、今まではお前を些とも疑つてなんかゐなかつたのだが、先きからのお前の樣子で自分が馬鹿だつたことが分つて來たんだ」

新七の目に涙の溜つてゐるのをおかつはふと瞶みたが、直ぐに顏を背けて、

「何とでも仰有いよ。私が得をするためにどんなことをしたんですかねえ」と空々しく云つた。そして、かねて別にして置いた風呂敷包を開けて、他所行の衣服を出して着替へようとしながら、まかり間違へば、打つたり蹴つたりぐらゐされるかも知れないと覺悟して待つてゐたが、それつきり荒い言葉も聞かれなくなつたのを却つて無氣味に感じて、そつと振返ると、新七は後に突立つたまゝ目を据ゑて此方を見入つてゐた。それが、怒つてゐるといふよりも、見惚れてゐるといふやうにおかつには思はれたので、これならいゝと安心して、手早く衣服を着替へて、

「私、これから母の處へ行つてよく相談して來ますからね。留めないで下さいね」と、輕く云つて部屋を出かけた。夜行で東京へ行くかどうするか、まだ極つてゐなかつたのだが、とに角それを口實にするのが穩當だと思つたからであつた。

「此間から僕が誘つた時には、母親なんかに會ふのも詰らんやうに云つてたぢやないか。一人で東京へ行く氣になつたのか」と、新七は前を遮つて云つた。

「だつて、私は母にでも相談するより外は誰れも親身な話相手はないんですからね。私に邪魔をしないやうにして下さい」

「おや。どうでもしろ。……こんないやな思ひを殘して別れてもお前は何ともないんだね」

新七が惡夢に襲はれてゐるやうで、藻掻きながら手出しはしかねて、ぼんやりした目で女の動作を見てゐる間に、おかつは心忙しく出て行つた。後から追駈けられるのを氣にしながら、横町から横町へ外れて、暫らくして後を顧みて、新七らしい影の見えないのにやうやく安心した。

案外無事に濟んでよかつた。こんなことなら、今まで詰らない我慢をしてゐるには及ばなかつたと、おかつは縛めから解かれたやうで晴々した。それに、幸吉の心の中さへ疑ふ餘地のないやうに知れて來たのに、空手で東京へ歸れる筈はなかつたので、足は無意味に停車場の方へ向ひながらも、幸吉を呼出す工夫を凝らしてゐた。

老婢がこの土地へ來たはじめに足がかりにした義理の姪にあたるお時の家は、停車場の近くにあつた。おかつは罐詰や果物などを僅かばかり店先へ置いてあるその家の前に立つた。そして嬰兒を抱へて店先へ出てゐるお時に向つて、急用があつて塚本さんの家にゐる老婢にちよつと會ひたいんだが呼んで來て貰へまいかと頼んだ。「東京へ歸るかも知れないんですからね。さう云つて下さいね。老婢さんと約束してることがあるんだから」と言添へた。

お時はじろ／＼おかつの樣子を見たが、嬰兒を背負つて、奥にゐる誰れかに店番を頼んで出て行つた。おかつは明るい處を避けて片蔭に身を潛めて、旨く事の運ぶやうにと念じながら、表の人通りを見てゐた。停車場の近所であつても人影はまばらで、この頃明るい賑かな町にあこがれてゐた彼女は、何處へ行つてもこの市中には自分の心を牽くやうな處のないのを今更のやうに感じて、どんないゝことがあるつもりで、新七なんぞに誘はれてこんな土地へ來

たんだらうと、出京間際の自分の氣まぐれな考へを思出したりしてゐたが、ふと新七に遊びない若い男の影が目の前を横切つたのに驚かされた。脇目も觸らずに足早に歩いてゐた。

―何といふ娘さい人だらう。私を迎つて停車場へ行つてるんだ。男のくせに見つともない」おかつは自分が直ぐに停車場へ行かなかつたことを喜んで、用心のために表から見えない處へ身を潜めた

平生の新七の暴動から推して、彼れがあわてて狂人見たいに彼女の行方を搜廻ることはおかつには明かに分つてゐたが、今はそれを苦に病むほどに恐ろしくはなかつた……もう私の身體をあんた男の自由にさせることぢやない。あの人の親切くらゐは、私ほどの女が二月あまりもこんな土地で、彼の物になつてゐたので、十分過ぎるほどに返禮してゐる。

自分ゆゑにこの田舎の町に一騒ぎの起ることも、むしろいゝ氣持で想像された。そして、大きな騷ぎか小さな騷ぎか、騷ぎの起るのを覺悟してゐると、實に譯り出來て、人には無理無體と思はれさうな行爲も難なく遂げられさうに思はれた。

「老婢さん、お氣の毒でしたわね」と、潜んでゐた暗い處から立上ると、忙しい息を吐いてゐた老婢は、

―何時お立ちになるんですか。今夜のことぢや御座いますまいね―

―都合で今夜立つかも知れないわ。それについて、あなたにお頼みしたいことがあるんですがね―

おかつは低い聲でさう云つた。そして、お時に硯箱などを借りて急いで手紙を書いて老婢に渡しながら、喜吉を宮部家の代表者として會つて置く必要のあることを呟いて言譯をした。

―成るべくお時の人に日立たないやうに、あなたが若旦那に直かに會つて、これを渡して御返事を聞いて來て下さいね―

「はい」

老婢は力のない返事をした。下女として雇はれてゐた間でさへ使歩きは大儀だつたのに、わざ〳〵呼びつけられて可成り遠い處へ使にやられるのは不平であつたが、その大儀さうな風に氣づいたおかつは、

―成るべく急いで行つて頂戴な。そのかはりお禮は十分にしますよ。……東京へ行つたら屹度あなたを呼んで上げてよ。……塚本さんとこは仕事が樂ぢやないでせう」と、人情のありさうな口を利いた。

―お禮なぞどちらでもよう御座いますが、東京へは連れて行つて下さいましよ」と、老婢は俄かに悦しさうな顔をした。

―歩くのが大儀なら近所まで俥に乗つていらつしやいな」と、おかつは無理にいくらかの金を押付けた。そして、老婢が急ぎ足で行くのを見えなくなるまで見送つてゐたが、お時に勸められて、家の者の寢室になつてゐる二階へ上つて休んでゐることにした。すでに敷かれてゐる寢床をわざ〳〵片付けられたりするのを、おかつは氣の毒に思ひながら、新七と住む前に東京のある家のこんな二階である男と出會つてゐたことを遠い昔のことのやうに思出したりしてゐたが、一人になつて薄つぺらな座蒲團にキチンと坐つて待つてゐると、一刻々々が長く待遠しくて堪へられなかつた。

お時は澁茶を入れて來て、お愛想に世間話を持出したが、話が新七の事に觸れるので、おかつは返事をするのに苦しんだ。老婢を雇入れたのもお時の世話だつたので、お時の亭主は以前宮部家へ出入りしたこともあつたのだから、おかつは油斷してはゐられなかつた。

「櫻町の大旦那はそりや堅いんですからね。新七さんにもお氣の毒で御座いますよ」と、お時は的の外れた同情をしておかつが一人で東京へ歸るやうな破目になつたのを憐むやうな口を利いた。

私もこんな見窄らしい田舍の主婦に氣の毒がられるやうになつたのか知らんと、おかつは擽つたい氣持がした。

餘程立つてから戻つて來た老婢は、階子段を上るや否や、先方の返事を傳へる先きに、「姉さん今其處でお宅の旦那様にお會ひしましたよ。私、何も申上げませんでしたけれど」と、さもおかつの心を呑込んでゐるやうにキョト／＼してソッと云つた。

「さう？　何處へ行つたんでせう」おかつは空呆けてさう云つたが、驚きをかくす譯には行かなかつた。

「お前は何處へ行くとお訊きなすつたから、ちよつとお時の家へ、とお答へすると、歸りに寄つて行けと仰有いました」

「へえ。……」おかつは煩ささうに云つて、「それで櫻町の方はどうだつたの？」と、老婢ののろさを齒痒がつて訊ねると、

「若旦那様はお店の火鉢の側で青い顔して俯向いていらつしやいました。お手紙を差上げると吃驚しなすつて、今夜はおそいから、話があるのなら明日にでもして呉れといふ御返事でした。そして大變慌てていらつしやいました」

「明日にしろつたつて、私はもうこの土地には家がないぢやないかね」おかつは、老婢の所爲ででもあるやうに思はず氣色ばんで突つかゝつたが、「あなたが出て行つた後で、私もあの家にはゐられないことに極めてるのよ」と後で顔を和げて云つた。

「こんな穢しい處でもおよろしければお泊んなさいましな。私がお時にさう申して置きますから。……姉さんもこのまゝ東京へ歸んなすつちや詰らないでせうから、櫻町のお家で道をつけて下さるまではこの家にでも泊つて待つていらつしやいましな。私もお役に立たなくつても御用があれば何でもいたしますよ」と、老婢は意外にも焚付けるやうに云つた。

「えゝ、有難う」おかつは老婢の心は見え透いてゐながら、何となく心許なくなつてゐる今の場合さう云はれるのは有難かつた。「あなたにはまたお頼みしたいことがあるんですけど、今夜はもう歸つて下さいな。遲くなつたらお家へ惡いでせうから。私もお暇しませうよ」と、座を立ちかけると、

「姉さんは御遠慮なさらないでこちらへお泊んなさい。その方がよう御座いますよ。姉さんは今夜からお時の家にいらつしやるつて、櫻町の若旦那にさう申上げといたのですから。若旦那にお會ひになつて話がつくまで此處をお動きにならない方がよろしいと思ひますよ。……私はおつるさんにも塚本さんの方にも、どなたにもあなたが此方にいらつしやることを話しませんから。東京へお立ちになるまで、安心して何日でも此處にいらつしやいましよ」

「ぢや、老婢さんは若旦那にいろんなことをお話したのね」

「私の方から申上げた譯ぢや御座いませんけれど、若旦那がお店の角まで私に随いていらしつていろんなことをお訊きなさいますから。……それは姉さんのことばかりお訊きになつたんぢや御座いませんです。實はおつるさんが櫻町の若旦那には大變な執心なんで御座いますから」

老婢は自分の餘計なお喋舌を言紛らすために、おつるのことまで持出したが、おかつはおつるなどに對して嫉妬を起すにはあまりに自ら恃むところがあつた。むしろ嘲笑ふやうな氣持で聽

いてゐた。

度胸を据ゑて此處に泊ることに極めて老婢を歸してから、おかつは階下でお時や初對面のお時の亭主を相手に、就眠前の暫らくの時間を過したが、幸吉夫婦の話が出ると、疼いやうな刺戟を感じた。幸吉の妻の平たい肥つた赭ら顏が、自分が何處かで見たことがあるやうに明かにおかつの胸に映つた。そして、その女に對して嫉妬の思ひのむら〳〵と起るのをどうすることも出來なかつた。……今夜は自分のところへ來る筈の幸吉が、自分の事を忘れてはゐないに極つてゐるのに、氣臆れして、そんな配偶のところに今まで通りに添寢するのを情無く思つてゐた。

卑怯な人、腑甲斐のない人と、おかつは男つてものみんなそんなのか知らんと、勝手に蔑視みながら、直ぐにも達せられさうな望みの容易に達せられないことの牴牾しくて、幸吉に對する戀しさは、夜の明けるまでどうしてぢつとしてゐられるかと思はれるほどに燃立つた。

二階へ上つて煎餅蒲團に横はつて枕に就いた時には、表の戸も鎖されて、外の足音にも夜の更けたことが知られた。汽車の音が耳近く聞えてから次第に遠くへ消えてしまふのが、おかつの心を何となく哀れつぽくさせて涙をさへ浮べさせた。無理にでもこの戀を遂げなければと荒れてゐる彼女の心もふと鎭められて、かの豚ぶとりの老爺のことが思出された。無垢な自分を最初に弄んだ憎い爺さんだけれど、親切なことは親切なのだから、此方から泣きついて助けを乞うたら見殺しにはすりやすまい。一どうせ滿足に世が渡られる身ではないし一無理な色戀には諦めをつけて、お爺さんの處へ行つて、あの後の身の上話でもして、思ふさま泣いて見ようかと、おかつはふと心弱くなつたりした。涙に濡れた枕紙に額を押付けて寢苦しい思ひをしてゐる間に知らず〳〵眠入つたが、彼女の夢の中に忍込んで來たのは、幸吉でも新七でもなくつて、豚のやうに肥つた頭の禿げた老爺であつた。お爺さんはニコ〳〵した顏してやつて來た。

老爺に枕を投げると同時に、おかつは目を醒ましたが、夢の中でいやらしかつた爺さんの擧動は、醒めてからも目の前にちらついて、おかつは寢衣を脱いで振捨きたいやうな氣持がした。眞夜中過ぎになると、俄かに冬が來たやうに、寒い空氣が薄い夜具の隙間から彼女の膚を冷やした。

九

一番の汽車に乘る客が外を通つてゐる頃であつた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを醒まされたおかつは、自分に關係したことで、誰れかが訪ねて來たのに違ひないと思はれたので、胸を轟かせながら聞耳を立ててゐた。雨戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢呆けた返事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませてゐたが、やがてお時と話しだした客の聲には見當がつかなかつた。自分に會ひに來たのぢやないと思直すと寒いのに早くから起きてゐたつて仕方がないので、再び寢床へ入りかけたが、すると、話聲が切れて、お時が梯子段を上つて來たので、おかつは先きよりも一層はげしく胸騷ぎをさせた。

「宮部さんの御親戚の方が、あなたにお目に掛りたいつて入らしつたんですが、お通し申してもよろしいでせうか」と、お時は側へ寄つて小聲で云つた。

「御親戚の方ですつて？」おかつは氣拔けがしたやうにさう云つて、ちよつと間を置いて、「私、宮部さんの御親戚の方にはお會ひしたくないん

ですから、お斷りして下さいなと、キッパリ言放つた。
「若旦那の叔父さんに當る方なんでせう。ちよつとでもお會ひになつてお話をお極めになつたらいかがでせう」
「いゝえ、私その方にはお會ひしたくないんですの。お氣の毒ですけど、斷つて下さいな」
「さうで御座いますか」
お時は不機嫌な顏をして下りて行つた。おかつは張合がなかつた。寢衣に着替へて寢床へ入つて、日が差すまで、も一眠入りするつもりになつてゐたが、階下では朝の支度やら子供の泣聲やらで騷々しくなつた。鐵道馬車の音も聞えだした。ふと壁一重の隣の二階から、拍子木の音に和して南無妙法蓮華經の聲がかしましく聞えだしたので、おかつは自棄見たいな朝寢が出來なくなつて、夜具を片付けて階下へ下りて顏を洗つた。化粧道具さへ持つてゐないのが不自由であつたが、自分の荷物を取りに行く譯には行かないので、お時の鏡を借りて頭髮だけ梳きつけてゐた。眠不足のためか、いやな夢に惱まされたためか、疲勞が目顏にあらはれてゐるのが、おかつ自身にもよく分つた。
「主婦さん、老婢さんの緣で此方の御厄介になつたのですけど、御迷惑なら直ぐにお暇しますよ」と、後から此方を見てゐるお時に云つた。昨夕は一晩泊るのさへ多少氣がひけてゐたのであつたが、最早さういふ些細なことに神經を病むには及ばないと度胸を据ゑて、自分の力一ぱい幸吉の家に取付いて離れない覺悟を極めて、どうかなるまで此處に寢起をしてゐようとした。
「主婦さん、私、櫻町の若旦那の幸吉さんにお目に掛つて、私の顏の立つやうにして頂いて綺麗にお別れすることに約束がしてあるんですからね。幸吉さんの外の方がいらしつたら、お斷りして下さいね。若しも新七さんが訪ねて來ても私は此方にゐないつて云つて下さいな。お世話になり次手に、それだけは堅くお賴みしますわ」
「承知いたしました」お時は相手の手強い言葉に呆れて、押して忠言めいた口は利きかねた。
「私のやうな者をかくまつて置いては宮部さんのお家に濟まないと思ひなさるのなら、さう云つて下されば何時でもお暇しますよ」
「姉さんをお泊めしたつて、宮部さんの方で私どもにお小言を仰有る氣遣ひは御座いませんよ」
お時が卑下してさう云ふので、おかつは思上つて、自分が彼等の目上の者で、些少の金でもやつて彼等を自由に指圖するのが當然なやうに思つたりした。
「新七さんが來たら私は他所へ行つちまつたと云つて下さいな。大事なお願ひなのよ」と、おかつは念を押して、お時が一も二もなく命令に從ふのを見て、ひとりでに自分の部屋と決つた二階へ上つて身を潜めた。そして、幸吉に宛てて同じやうな呼出しの手紙を書いた。――……明日といふ日は待遠しくてなりません。今日の中に私の身もあなたのお身の上もどうなるか分りませんのですから、一ときも早くお目にかゝれるやうにお願ひいたします。人間はいつ何時じゆ命が切れるか分らないですもの。私は心がせかれてなりません――と、今の今心底から思はれて仕方がないことを書添へたが以前の手紙とは違つて、今度のは上べも底もない露骨な色文みたいになつてしまつた。
おかつは躊躇しないで、お時に賴んでその手紙をポストへ入れさせた。一日を待暮らすのは容易ならぬ辛抱の入る譯だつたが、おかつの昂奮した心は、退屈する暇のないやうに忙しかつた。新七の屈託してゐる顏や、血眼になつて

搜廻つてゐる顏なども、彼女の目の前に渦を巻いた。

おつるが訪ねて來たのを、知らないと云つて歸したと、お時は二階へ知らせに來て、「何だか言ひにくう御座んしたけれど」と、嘘を吐くことの苦しさを洩らした。

「おつるさんにはなほ更會ひたくなかつたんですの。よく斷つて吳れましたわね」

おかつはお時の手柄を褒めそやすやうにさう云つて、おつるの言つた事を訊糺した。新七が外に手頃な相談相手がないから、據なくおつる親子に縋つたことが、おかつにはよく察せられた。

時々窓を開けて富士を眺めたり汽車の煙を眺めたりしたが、午過ぎまで一歩も外へは踏出さないでゐたおかつは、お時一人が內職のやうにやつてゐる商賣のあまりに暇過ぎるのに氣づいて自分が店へ出て看板になつてやらうか、さうしたらもつと繁昌するだらうと醉興な空想を起してお時にその考へを洩らして、この商ひのことを訊ねた。

「品物がよく賣れゝば商賣は面白いものらしいわね。私もこの土地にゐて何か商賣をはじめようかしら」と云つたりして價値のあるもののなささうな見窄らしい商品棚を覗き見などしてゐたが、鐵道馬車の煽り立てた埃風に包まれて店頭に立つた客は、ふと見ると、勢のない顏した幸吉であつた。

「オヤ入らつしやいまし」と、お時は悅しさうに云つて迎へて、「汚いですけれどもお二階へお上んなすつて」と、おかつに代つて案內した。

お時が無沙汰のお詫などしてゐる間に、おかつは幸吉の落着かない素振や落着かない返事に注意してゐたが、お時に行かれた後で何と云つて口を切つていゝかと氣迷ひされて、一人でゐた間の決心も鈍つて、明るい光が眩しかつた。

「なにか御用で御座んしたらお呼びなすつて下さいまし」と、お時が座を外した後で、底深い沈默が二人の間に澱んでゐたが、

「私は緩くりしちやゐられないんだから、あなたの望みだけ早く云つて貰ひませう。あなたが此處にゐなさることは新七にも祕密にしてあるんだが、私に宛ててあゝいふ手紙をたび〳〵寄越されちや非常に迷惑するんです。親戚の者を代りに來させても會つて貰へないから、私が責任を持つて來にくい所を無理に此方に來たんだから、そのつもりで話をして下さい」

「なぜそんなことを仰有るの？……私の心の中は分つていらつしやるくせに」おかつは相手の角張つた造り文句がいやになつて、笑ひをこぼしながら馴々しく云つて、「此間の晩公園でお目に掛つた時には、大層お怒りなすつたけれど、私はあなたのお心の中はよく分つてゐますから、そんなに失望はいたしませんでしたの。本當に失望したなら、今まで生きてゐてこんな土地にウロ〳〵してはゐませんわ。……でも、よく訪ねて來て下すつたわね。煩さく申上げた甲斐があつたと思つて悅しくつてなりませんの。……早く望みを云へと仰有つたつて、かうしてお目に掛ると口へ出してはなんにも云へないんですから勘忍して下さいましな。お互ひに心の中が分つてゐればそれでよろしいぢやありませんか」

おかつの媚びを含んだ眼差は幸吉を戰かした。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして、「あなたのやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、聲を震はせて云つた。顏にも血の氣を失つた。「こんなことは自分一人で穩便に始末しようと思つて、誰れにも云はないで、昨夕は一晩中考へたくらゐなんだが、あなたの方で無理強情に私の家庭を亂さうと思つてるんですか。

私は家の者や世間に對しても迷惑するから、お時を呼んで立會つて貰つて、自分の潔白を明して置かう」と云つて座を立ちかけた。

おかつは引留めもしないで、夢でも見てゐるやうな目をしてぢつと見上げてゐた。

「お時さんなんかを證人にして、それであなたの潔白が通つて、この先何時までも安心してゐられるんでせうか」と、やがて、彼女でない誰かが彼女の口を借りて云つてゐるやうな聲で、おかつは氣拔けのした顏して云つた。

立ちかけながら暫らく立上りもしないでゐた幸吉は、「私はもうこれきりあなたに會はないからさう思つてゐて下さい。あなたは無論新七には會ひなさるんだらうが、あなたのためにもなるやうに、相當な人を入れて話をつけることは承知しといて下さい」と云つたが、その言葉には力がなかつた。手應へがないので梯子段の方へ向ひながら躊躇してゐたが、おかつは夢から醒めたやうな目を向けて、

「それで事が濟んだと思つていらつしやるの？　これからも、お家の中が穩かで日が送れると思つてらつしやるの？　男の人は卑怯にしてれば世の中が仕合せになるんですかねえ。あなたは何が怖くてピク〳〵していらつしやるのか知れないけど、私に會はないと仰有るのなら、私これきりお目に掛りやしません」

「それであなたはこれからどうするんです？　此處にゐるんですか」

「私はこれから新七さんの家へ歸りますわ。私の荷物も置いてあるんですもの。新七さんは私が歸つて行きさへすれば、昨夕からの心配は忘れて生返つたやうに喜ぶに極つてゐますわ」

おかつは愚圖々々してゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、梯子段から下を覗いて、「主婦さん、若旦那はお歸りになるんですつて」と叫んだ。

幸吉は逃げるやうに出て行つた。

おかつは暗くなつてから、二度と足踏みすまいと思つてゐた新七の假宅へ歸ることにしてゐたが、幸吉が行つた後間もなく、老婢が姿を見せて、せか〳〵息を吐きながらその後の新七の事を慌しく知らせた。

「私と姉さんと相談づくでお家を出たやうに、若旦那は思つていらつしやるんです。だから私が姉さんの行先を知つてゐるに違ひないつて、私をお責めなさるんですよ。云はなければ私をどんな酷い目にでも會はせて白狀させると思つていらつしやるんだから怖くつてなりません」

「ぢや、正直にさう云つたらいゝぢやないの」と、おかつは事もなげに云つて、「私これから家へ歸るところなんですからね。心配しなくつてもいゝの」

老婢は呆氣に取られてゐた。やがて、新七の氣の立つてゐる所へ不用意に歸つて行く危險を說いたりしたが、「大丈夫ですよ」と云つて、おかつは取上げなかつた。見たところは雪と墨とほどに美醜の差別はあつても、氣心は同じい幸吉と新七との顏を彼女は目の先に浮べて見詰めてゐた。

人さま〲

　秋の末から春先きまで、眺望のいゝ貸別莊に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機會に、一先づ大磯へ引上げることにした。

　實際には、家主の狡猾と因業とをまざ〱見せつけられたので、大磯といふ土地全體について不快な感じを起させられた。天氣も惡いし、荷物の整理にも豫想以外に手間取るので、一日延ばして、翌朝緩くり出立したいと考へ直した私たちは、何の氣なしに家主に向つてさう云つて許しを乞うたのであつたが、家主は「それは困ります」と頭から拒絶した。他の借手に契約をしてゐるので、その人が明日にも東京から來るかも知れないから、それまでに家の掃除をしたり、破損したところを修繕したりして置かなければならないと云ふのであつた。明日の一番で立つと云つても愚図々々云つて聞入れなかつた。

「一日でも期限が延びれば半月分家賃を取るのが土地のきまりだと、此間家主が云つてゐました」と、まつ子が云つた。

　さうなると、彼等は一刻もその家にゐるのがいやになつたので、とに角大急ぎで荷づくりをすることにして、偶然來合せた知合ひの土地の女にも手助けを頼んだ。運送屋の人夫をも雇つて來て、やうやく日暮前に停車場へ荷物を送り出した。後片付は手傳ひの女に頼んで、彼等は心當てにしてゐる發車時間に遲れぬやうに急いで出掛けてゐると、家主は手傳ひの女を通じて、まつ子に疊の修繕費を要求した。炬燵の火で燒焦がしたところがあるので、辨償しなければなるまいと、まつ子も思つて居たのであつたが、數日前家主に知らせた時には、「まあ仕方がありません」と、家主自身寛大な口を利いてゐたのであつた。

　忙しい間際に爭つてはゐられないので、高山は要求された一枚分の疊代を拂つたが、あまりに忌々しかつたので、「そのかはり疊替へをしたら、今の疊は手傳ひの人にやつて下さい。それから、井戸の樋だの物干竿だの、私が買つた物は一切あの人にやることにしときますから」と云つて手傳ひの女にも後で持つて行くやうに云つて置いて停車場へ急いだ。

　食卓とか、洗ひ物の臺とか、その他大工に頼んでわざ〱拵へさせた揃つた物は、打遣つて置くのも惜いし、預け場所を搜す暇もなかつたので、方法のつくまで假りに運送屋に置いて行くことにした。

　汽車に乘ると、夫婦は一安心した。

「大磯の宿へ泊つて、明日の朝ゆつくり立つてもいゝんだが、大磯といふ土地はつく〲いやになつたから、一刻も早く離れた方が氣持がいい。二度とこんな土地へは來ないよ」

　高山はさう云つて、細雨のしめやかに降つてゐる窓外を眺めて、滯在中彼れの散歩の目あてになつてゐた小千疊や海岸の松林に別れを告げた。まつ子は身心の疲勞でガツクリして殆んど口を利かなかつた。根を据ゑて落着ける家がなくなつて、あちらこちらと轉々としてゐる浮草のやうな生活は、彼女には詰らなく思はれた。二人とも、朝牛乳を飲んだばかりで、午餐も食べてゐないので、汽車に乘ると頻りに空腹を感じだして大船へ來るのを待ちかねて鯛飯を買つたが、さて箸を採ると、まつ子の方はむかつい

て十分に腹を滿たすことが出來なかつた。

　彼等はつまりは、東京へ出て空家搜しをしなければならぬと思つてゐたが、今はとに角まつ子の故郷であるK市へ行つて、彼女の父母の家に寄寓することにしてゐた。彼等は近年其家を旅から旅を渡る際の中繼ぎのやうにしてゐて、雜多な書籍や衣類や世帶道具などを預けてゐるので、季節の移りかはりには、衣類の預けかへをして來なければならなかつた。で、まつ子は云ふまでもなく、高山も一年に一度くらゐは其家へ立寄つて、數日あるひは數週を過すのを例としてゐた。其家を根城として、近傍の山河溪谷を見て歩いたり、あるひは溫泉に浴したりすることもあつたが、海岸に生れながら（あるひはそのためにか海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲州の山地に親むたびに清新な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな氣持がした。輕井澤の高原に住んでゐた間に屢々そんな氣持がした。富士の晩秋の裾野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時、寂寞の靈氣が周圍の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、瞋恚焦躁の煩惱も一時掻消されるやうな氣持がした。鰍澤から富士川を下つて身延の靈域に辿り着いて、獨り御草菴の遺跡に立つて、蓊鬱たる樹間から、暮れかゝる空を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如きものを好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊いものの前に跪きたいやうな氣持がした。（常住の住家である里へ下ると、直ぐに昏亂して、一日の安き心もなく、心に何の光をも見られないのが不斷の彼れの習ひではあるが）

　彼れは、半年足らずの固定した大磯の住居に飽果てて、春の光の差す頃となつた山の色を見たくなつて、荷物の整理をかねて、K市へ向ふのを喜んでゐたのであつたが、今度はその外の俗用をも有つてゐた。それは、數年來行惱んでゐたまつ子の弟の縁談が纏つて、三月中には結婚式を擧げるといふ知らせに接してゐたので、彼等夫婦もその席に列しようと志してゐたのであつた。高山は數年前止むを得ない譯で、妹の結婚のために柄にない世間的の斡旋をして、堅めの盃の席へも披露の席へも、親代りに出て行つたことがあつたが、その他には、幾人かの弟の結婚の時にも、親戚の結婚の時にも、顏を出したことは一度もなかつた。葬式にはたび〳〵列席しても婚禮の式場へ行くことを彼れは好まなかつた。しかし、まつ子の弟の良三には荷物の處分などについてたび〳〵面倒を掛けてゐるのであるし、世間並の習慣を何よりも大事に思つてゐる良三の父親は、嗣子の婚禮には、親戚一同の列席を切望してゐるらしくもあつたので、高山の豫定の日程には、良三結婚式出席と、大きく書記されてゐたのであつた。まつ子は先日東京へ日歸りで行つて來た時に、三越へ寄つて祝ひの品を買調へて來た。話の種の少い夫婦の間には、今度の縁談の決るまでのイキサツや、結婚後の青木家の變化の豫想などが屢々話題に上つてゐた。

「今度こそあなたともお別れ見たいなものだ。これから後は、今までのやうな詰らない戲談を書いた手紙の遣取りは出來なくなります」と、まつ子は感傷的な氣持で書いた葉書を良三に宛てて送つたりした。

一氣樂にN市へ遊びに行けるのも、これが最後見たいなものだぜ。今度も式の前は何日泊つてゐてもいゝが、式が濟んだら直ぐにお暇にしなければならないよ」と、高山が云ふと

「さうですとも。私もこれからは今までのやうに浮かり親の家へ行けなくなりますよ。良三の家になつてしまふのですから」と、まつ子も云つた。

「おれたちの荷物だつて、何時までもあの家へ厄介を掛けとく譯には行くまい。第一書物なんかおれにはどうでもいゝんだからな。今度の機會にどうかして始末をつけたいものだ」

「諸道具が邪魔なら、簞笥なんかはおれの方で買つてもいゝつて、お父さんは云つてゐるのだけれど、それもちよつと變ね」

「親爺さんがお前のために自分で選擇して買つて呉れた物を、自分の方へ買取るといふのも變だが、おれが邪魔物あつかひして、いくらにでも賣飛ばすといふから、勿體ないと思つてゐるのだらう」

「世帶道具が邪魔だなんて、私の家にはいくらの道具があるものぢやない。大抵の家にはもつといろんな物がありますよ。あなたが女の身になつて、家の用を足してゐたら、道具のない不自由さが分るのだけど」

「おれは昔自炊してたことがあつたが箸と茶碗と土鍋と七輪とくらゐで簡單なものだつた。今でもどこかの山へ入つて自炊して見たいと思ふこともあるよ。こゝらが親に似てゐるのであらうが、おれは煎餅蒲團にくるまつて寢てゐようとそんなことは平氣だ。先日もAさんが訪ねた時に、行李の上に鞄を載せて机代りにしてゐるのを見て、どうも簡單なものですなあと、驚いてゐたつけが、おれには紫檀の机なんかは無用な長物だよ」

「そんなことは自慢になりやしないわ。生活は豐富に氣持よくしようと心掛けなければ働く張合ひがないぢやありませんか。文明の利器を利用して、無駄な勞力や費用ははぶいて、氣持よく暮らすのが賢い人のすることなのよ」

「それはさうだが、おれはも一度生れかはつて、はじめからやり直さなければ生活を愉快にすることは出來ない。K市の親爺さんなぞには、古い因習だか何だかが、佛か鬼かのやうに頭の中に取付いてゐるのだが、おれにはそれと違つた佛か魂かが、頭の底に巢をくんでるから、もうどうしようもないよ」

「形容はどんなにもつけられるでせうけれど、生きてゐる間は今からでも生甲斐のあるやうに暮らさなければ損ですよ。……私だつて、もつと、いろんなことを知りたい。あなただつてまだ老い朽ちた歲ぢやなし、もつと世の中のいろんなことを知らなきや損ぢやありませんか。……私のお父さんはあんな風に、良三なんかのことばかり考へて、二十五にもなつた男が、ちよつと散歩に出るとか、活動寫眞を見に行くとかするのさへ、心配して、容易に許さないくらゐなのですけど、それが子供のための幸福だか何だか分りやしません。私だつて、女學校を卒業した時に、學校の成績もまあ〳〵惡い方ぢやなかつたから、先生にも勸められるし、自分ももつと學問したいつていふ氣になつて、女子高等師範へ――その時は、女子大學とか英學塾とかいふやうな學校はお友達の中で評判になつてゐなかつたの――入りたいと思つてお母さんに賴んで、お父さんに云つて貰つたことがあつたの。さうすると、お父さんは私を呼寄せて、何といふ不量見だと血相變へて怒つたんです。親に逆ふつて氣は微塵も持つてゐなかつた時分だから、泣寢入に諦めて、裁縫でも習ふ氣になつたのだけれど、今になつて考へると、女だつて出來ることなら、學問をした方がよかつたの。今更後悔したつてはじまらないけれど、女も獨立して生活して行けるだけの藝は、身にそなへてゐなければ、安心して世が渡れないとしみ〴〵思はれることがありますよ。親や兄弟の人情を手賴りにするのは心許ないことだと私も思ふやうになつたんです。良三だつてお嫁さんが出來たり、子供が出來たりすると、次第に人間が變つて來るでせうし、それがまた

本當なんでせう

「おれだつて何時死ぬるか分らないしね」と、高山は云つた。

子供の無い上に世間の狭い彼等は、ことにまつ子は、日常心を紛らすすべがなかつた。そして、睡眠時以外には、生きてゐる人間として絶えず動いてゐる彼女の心は、自然と夫の一言一行の上に注がれた。日に月にさうしてゐるうちに、夫の人となりについて、彼女自身の解釋が、自らつくやうになつてゐた。世間の人は何と云つてゐようとも、當人が自分をどう吹聽してゐようとも、夫は手賴りにならない人、詰らない人、お坊つちやんで利己的な人、何かしら祕密を持つてゐる人、こんな人、あんな人と、彼女の心では思はれるやうになつてゐた。夫が以前云つてゐたこととこの頃云つたこととと矛盾してゐるのに氣がついたり、夫が知つたか振りで豫言したこと——たとへば、××なんかは將來見込みのない人間だと、夫がひとり極めにしてゐたことが外れて、その××なんかが盛んな人氣を取るやうになるのを見たりすると、夫の言葉にも信用が置けなかつた。夫がをり〳〵常識外れの不思議な事をするのも、彼女に取つては面白く感ぜられなかつた。

子供の無い上に世間の狭い彼等の心や目や耳は、互ひに探偵のやうに相手の上に注がれてゐた。

東神奈川から八王子行の汽車に乘替へると、その薄暗い粗末な列車にはスチームが通つてゐないので寒かつた。二等車には、彼等の外に色の白い官吏風の男と、古いトンビを着た、髯は荒いが、眉の薄い、靑肥りのした田舍くさい老人とが入つて來た。汽車が動きだすと、老人は誰れに云ふともなく、此間中から寒氣がぶり返したことを歎息したり、不景氣がひどいのに旅費の減じないことを訴へたりしてゐたが、やがて若い男に向つて、

「あなたはどちらまでお出でになります」と、馴々しく訊ねた。

「八王子までです」と、若い男は簡單に答へた。

「八王子も生絲がいけなくなつたので、町を通つても、一二年前のやうな活氣は見えなくなりましたね」

「さうでせう」

「失禮ですがあなたは、横濱の會社へでもお勤めになつていらつしやるんですか」

老人があまりに馴々しいので、若い男は額を曇らせて、「まあさうです」と答へたが、老人は相手の無愛想なんぞは氣にも留めない風で、

「私は倅が今度濱の××會社へ奉職することになりましたので、今日樣子を見てまゐりました。あなたも御存じでせうが、櫻木町の停留所の近くに新築されて、なか〳〵立派な會社になりました。社長さんにもちよつとお目に掛りました。百萬といふ資本を運轉する人はちがつたものだ。自然と威嚴が具はつてゐますな。倅は昨年××大學を卒業してから暫らく東京の辯護士の家に勤めてゐましたが、法律いぢりはいやだつて當人が申しますから、昨年きりで暇を貰つて今度のところへ出ることにいたしました」と、話は續けたが、若い男はもう返事をもしたくなつた。老人は煙草を出して火を點けた。そして、相手欲しさに高山の方へ目を向けて、一二言問ひを掛けた。

高山は、煙草を持つた老人の左の指が曲つて自由な働きを缺いてゐるのに目をつけて、その顏付をも思合せて、癩病患者ぢやないかしらと疑ひだした。申譯だけの受答へをしながらよく見てゐると、薄明りに映つてゐるその皮膚の色は無氣味であつた。

「夜汽車ぢゃお困りでせう。それに八王子からは込合つて居りますで、緩くりお休みなさる譯にやまゐりますまい」

「さうですとも」

高山は身延の深敬病院で見た患者の顔や、杳掛で見た草津行の患者の馬上の姿を、疲れた頭の中に思起した。紅葉のあざやかな山に圍まれた病院の廊下では、むくれた顔のくづれかけたやうな患者が賑しく聲を立てて、互ひに笑ひ戯れてゐた。女の唄ふ聲も洩れてゐた。

「汽車には乗せて貰へないのです」と、人の話すのを聞いて、雇ひ馬に乗つてゐる醜い患者を見た時に、高山はその患者に同情するよりも先づ、どんな日に會つても生きられるだけ生きて行かねばならない人間のいたましさを感じた。呪ひたいやうな氣がした。さうして、患者同士で笑ひ戯れてゐる病院の廊下こそ、人生の眞の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さま／＼な人間の平素の饒舌も、病院の廊下の氣晴らしの戯れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出來事であるのに關はらず、劇場の舞臺の席よりも、あるひは花嫁花聟の相並んだ美しい姿よりも、裏馬に跨つた草津行の患者の狀態に、一層多くの人生の眞實が現はれてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

「八王子から先きは景色がようがすが、この邊は晝間でも眺めの面白い處は御座いません」老人は聞き手の無愛想に頓着しないで、何かしら口を利いてゐたが、町田といふ處で、皆なに挨拶して汽車を下りた。

高山は向う側に腰を掛けてゐた老人から受ける不快な刺戟から免れたのに一安心して、大きな合財袋に寄掛つて目を閉ぢた。

八王子で乗替を待つ間は、待合室のストーブにあたつて、いろ／＼な男女のいろ／＼な話に耳を傾けてゐたが、久振りで異つた社會の話を聞くのは、彼れにも興味があつた。

「僕は此間東京へ行つた歸りに、上野の近所の洋食屋で、ひとりでウヰスキーを一本飲んで、新宿までの切符を買つて電車に乗つたら、どうにも溜らなくなつて眠込んぢやつて、上野から東京驛の間を三度行つたり來たりしたよ。車掌に起されて目を開けると、今度こそ失敗らないやうにと、一心になるのだが、どうにも頭が云ふことを聞かない。直ぐに夢になつちまふんでね。しまひには車掌に大小言を喰つちやつた」

緒肥りのした中老の田舍紳士が、さう云つて大笑ひをすると、あたりの人もどつと笑つた。

「寒いと思つたら、雪になつた」と、ある男が云つたので、皆なの目がガラス窓の外へ注がれた。

高山は外へ出て闇の中に降頻る雪を見て來て、「一日延さなくつて却つてよかつたよ」と、まつ子に向つて囁いた。因業な家主に對する不快な感じも自ら消失せた。

やがて彼等は、かの酒好きの紳士と一緒に夜行列車に乗つた。窮屈な寢様をしてゐる先客の中へ割り込んだ彼等は、スチームの過度な温かみや人いきれのために、疲れてゐる頭に痛みを覺えるほどであつたが、かの紳士は二三驛を過ぎる間に口を開けたまゝコクリ／＼居睡りをしだした。山を登るにつれて雪はます／＼繁くたつてゐた。をり／＼息拔きに窓を開けると、雪を伴つた冷たい風が吹入つたが、それが高山には氣持がよかつた。

「これで向うへ着きさへすれば、安心して眠られる家があるからいゝやうなものの、こんな寒い時に、當てにするところがなかつたら心細いだらうな。どんな窮屈なところでも、屈託したいで熟睡の出來るやうになつたらいゝのだが、

おれはどうしても眠れない」高山はだるい欠伸を漏らしながら、まつ子に囁いた。半ば眠りに落ちてゐるまつ子に云つたつて效のないことだつたが、一口でも術ない思ひを口に出して見なければ、退屈の遣り場がなかつた。

彼れは窮屈な寢様をしてゐる一人々々の顏を見て夜を過してゐたが、室内の顏の一つから記憶を呼起されたのか、ふと東京の尾越夫妻へ宛てて音信をすることにして、鞄の中から封緘葉書と萬年筆とを取出した。尾越夫婦とは去年の夏輕井澤で知合ひになつたので、年末に東京へ行つた次手に、その家を一度訪ねたこともあつた。

「お二人で大磯へお出でになるといふお話があつたので、心待ちにしてゐましたが、そのうち小生等は土地に飽いて來ましたから、今日大磯を引上げて、今中央線の夜汽車に乘つて居ります。近日また東京へ出掛けますから、その際にはまたお邪魔に上るかも知れません。今雪が降つて居ます。離れ山の麓の我々の小さな家は、今時分凍つてゐるでせうが……」高山は不眠の退屈から、感慨を籠めた筆を運ばせかけたが、ふと自制して、少し詳しい轉居の報告だけにして、暫らく滯在する筈のK市の住居を明かに書き添へて、葉書は車掌に賴んだ。

交友の乏しい彼れに取つては、尾越夫婦の如きは珍らしい知人になつてゐるので、輕井澤の生活を記憶から呼起すたびに、その夫妻のことを思出さないではゐられなかつた。秋風が吹き出して、避暑客は日に〳〵歸つて行つて、月見草の咲誇つてゐた高原も尾花の野となつた時分に、周圍の燈火の消えた闇の中に、尾越の家の一點の燈火のみが幽かに光つてゐるのを、彼れは懷かしい思ひをして見てゐたのであつた。夫妻の間は睦じさうであつたが、あたり前の夫婦とは思はれないやうなところがあつた。第一、細君が、派手なつくりをしてゐるのに關はらず、尾越と釣合はぬくらゐに歳を取過ぎてゐた。二人とも遊惰な生活をしてゐた。

高山は、尾越の單純な話振りや、遊惰であつても惡氣のなささうな人柄を好んでゐたが、それよりも細君の色つぽい素振りに知らず〳〵心を牽かれてゐた。

十月に入るまで踏留つてゐた高山夫婦は、その少し前に歸京することになつた尾越夫妻に誘はれて、告別の散歩を共にした。

「どちらが先きに退却するかと思つてたら、私の方が負けましたね。しかし、あなたもいゝ加減でお歸りなさい。野中の一軒家は怖いですよ」と、尾越は云つた。

「僕も大分東京が戀しくはなつてゐるんですが、しかし、東京へ行つて見たつて、面白いこともなささうですからね」

「私にだつて、東京がいゝ事を持つて待つてゐてくれるのぢやありません。むしろ煩さい思ひをしなきやならないでせうが、でも、東京はうまい物が食べられるだけでも有難いですね」

「尾越はこの頃食氣づいて、やれビステキが食べたいの、テンプラが食べたいのと食物の事ばかり云つてゐるので御座いますよ」と、細君は横から嘴を入れて、「辛抱氣がないつたらひどいですからね。最初のうちは、私こんな淋しいところには十日とも居られないだらうと思つてゐたのですけれど、住んで見ると、結句安心してゐられると、覺悟をいたしましたの。それに尾越ははじめはこんな涼しい空氣のいゝところはないつて、夢中で喜んでゐたくせに、餘程前からこの土地に厭いてしまつたらしいんです。男の方が女よりは物に厭きやすいんで御座いますかね」

「さあ、どうですかね。……人によつてさま〴〵でせうが、大體男の方が物事に執着が深いん

ぢやないでせうか」
　物事と云つても、高山は男女間の情事を念頭に置いて、さう云つたのであつた。それについて、尾越も細君も頻りにめい〳〵の意見を述べた。四人は山腹の四阿に憩うて、暫らく秋晴れの野を見廻した。此處で溫かいコーヒーでも飲めたらいゝと、誰れかが云つた。
　その言葉を思出すとともに、高山は、續けざまの喫煙で荒らされた喉を潤して、だるい頭に力をつけるために、一杯の溫かいコーヒーを飲みたくなつた。
　夜明け前にK市に着いた時には、雪が可成り積つてゐた。湘南地方とはちがつた底冷たい、殺氣を含んだ風が彼れの頰に觸れた。どちら向いても春は萌してゐなかつた。
　市を取圍んだ遠近の山嶽の雪晴の景色は美しかつた。高山は市の眞中にある青木家の二階の窓から、富士を中心にした連山が、碧空の下に鮮明に聳えてゐるのを新奇な思ひを寄せて、朝となく晩となく眺めてゐた。雪解道を荒川土手や古城のあたりまで散歩したりしたが、季節がまだ早いので、山奥を差して足を進めることは出來なかつた。
　婚禮を前に控へた一家の人々の動靜をも彼れは、新奇な思ひを寄せて、日に夜に眺めてゐた。高山自身の婚禮も、彼れが斡旋した妹の婚禮も、極めて手輕に取運ばれたのであるし、從來冠婚葬祭の世間的の儀式に親しくたづさはつたことはなかつたのだから、純日本の傳統的慣例や、この地方の習慣を巨細に渡つて守らうとしてゐる今度の婚禮の手順を見てゐると、事々に興味があつた。外目には結婚する當人同士の事はそつちのけにして、儀式のための儀式をしてゐるやうに見えるのが、奇怪不思議にも思はれた。
「結納の日取りがまだ極まらないのです」と、青木家の老主人は牴牾しさうに云つて、いろいろと臆測をしてゐた。去年の夏仲人の手を經て話が極まると、間もなく相手の田村家へ此方から親子連れで出掛けて、酒が入つたので、その儀式は土地の風習として、結納の取交し以上に緣談の成立を保證するものであつたが、その後、先方からいろ〳〵な口實の下に、輿入れの期日を延し〳〵するので、青木家では心許なく思はれてゐた。氣拙い思ひをさせられるやうな噂も世間の口から時々傳へられもした。
「良三さんは當世の若い者には珍らしい堅いおとなしい方だし、稼業は繁昌するし、あなたはお仕合せですよ」と、親戚の者に云はれると、
「いや、嫁を娶つてしまふまでは、安心して眠れませんよ。重い荷物を背負つてるやうでね」
と、老主人はこぼした。
「お嫁さんの選好みに苦勞するぐらゐ、親として樂みな苦勞ぢやありませんか。此方のお嫁さんになら候補者はいくらでもあるのでせうから」
「傍で思ふやうにやいかないものでさ」
　老主人は、おれの苦勞はおれでなきや分らないのだと、これほどの一家の重大事を、傍の者が輕く見てゐるのを不平に思つてゐた。四五年以來、時々持込まれる緣談を一々根掘り葉掘り調べて、些少の瑕瑾をも嫌つて拒絕して、自分で市中を物色して早くから目星をつけてゐた一人にのみ拘泥してゐた彼れは、自分の胸に描かれてゐる良緣に傍から水をかけられるのを好まなかつた。故障が起つたのぢやないかと疑はれるたびに心が萎れた。
　當人の良三はすべてを父に任せて冷然と構へてゐた。「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、

さういふ時にも、老主人は眞面目な顏をして辯じた。

「おれは自分の道樂で勝手に嫁を極めるのぢやない。容色でも育ちでも、氣風でも、これなら青木家の嫁として、世間へ出して恥かしくない、世帶をまかせて大丈夫だと思へばこそ、お前たちにも相談して、こゝまで話を運んで來たのだ。だからお前たちももつと眞劍になつてくれなきや困るよ。誰れでもいゝ、當人の氣に入つた者なら誰れでも連れて來いといふやうな手輕にや行かないぢやないか。藝者や女郎を引張つて來られても困るからね。相續者は何事も家のためといふことを第一に考へてゐなければならんのだ」

高山も老主人から屢々かういふことを聞かされて、それが世間の親の普通云ひさうなことだとは思ひながら、固定した家といふものを持つて居ない彼れは、そんなことは身に染みて感ぜられなかつた。

「私は早く世を繼いで、若い時から今までしみじみ湯治や見物の旅をしたことがありませんよ。今度の事の片がついたら、後は若い者にお讓り申して、時候のいゝ時には十日なり二十日なり、緩くり何處かへ行つて見たいと樂みにして居ります」

老主人はたび〳〵から云つたが、ある時良三は、

「何時だつて行けたのぢやありませんか。今までに行けないやうなら、これからだつて駄目ですよ」と苦笑して云放つた。老主人は笑つて默つてゐた。

若い健かな良三は、稼業の暇には、せめて市中の散歩でも存分にして見たかつたが、それさへ自由にならなかつた。で、湯に入つて來るのさへ、馬鹿にならない享樂の一つになつてゐた。自分が二十年來住んで來た町でありながら、この市中が何時も珍らしく彼れの目を牽いてゐた。

「今夜は久振りで活動を見て來たいんですが」と云つても、活動寫眞の見物さへ、快く許されない場合が多かつた。

「若い者はそんなに活動が見たいものかな」と、珈琲店だの活動小屋だのと、餘計な娛樂場の出來るのを、父親は歎息した。

「お父さんの若い時分には、何が樂みだつたのでせう」良三の言葉には不平が籠つてゐたが、父親は笑つて默つてゐた。

子供の外出を喜ばない老主人も、自分で終日家の中に蟄居してゐると、頭が鬱陶しくなるので、何かに假託けてはちよつとでも外を歩いて來たがつた。暫らく寄寓することになつた高山が、日々の散歩に出掛ける時に、道案內として一緒に出掛けることもあつた。さういふ時には、世事に暗い高山をも、時に取つての相談相手として緣談に關はつた疑問やら意見やらを、隔意なく口に出した。

「祝儀事もこれからの時世では、成るべく質素にした方がいゝでせうな。當人同士の心掛けがよくつて、內輪が圓滿に收まりさへすればいいので、肝心なことはそれ一つですからね。しかし、先方はなか〳〵手が込んでゐて、手輕に濟みさうぢやありませんよ。仲人も財產家で、私のために一はだ脫いで骨を折つてくれてるんですが、のつけに、今度は青木さんお氣張りたすつてと切込んで來る有樣で、此間も先方の支度は大變ですぜといふ觸込たんですよ。……弱つてしまふ」

「それは構はないぢやありませんか、先方は先方、此方は此方だから」

「それでいゝものでせうか。……私の方は昔からの家風で、家の中も御存じの通りに昔のままで何處にも飾りつ氣がないんですが、先方は

一體に派手なやうです……尤も私の家の生活もあんまり控へ目過ぎるやうですから、これからは若い者次第で、少しは人前のいゝやうに華やかにした方がいゝかもしれませんね」

「さうでせう。財産の餘裕があるのに、强ひて質素に暮らすには及ばないでせう。自分の力で得られるだけの樂みは樂んで今日を愉快に暮らしたいと、當節は誰れでも思つてるやうですから」

「ぢや、まあ、後々までの家の事なんかはどうでもいゝ、自分のしたいことを勝手にすればいいつていふ譯なんですね」

「さう。……しかし、世の中はどう變つて、金持の財産も何時叩潰されるか分らないつていふ時代ですから、自由に費へる間に費つとくのが利口かも知れませんね。一寸先は闇の世ですからね」

「私どもは無理をしてまで儲けようといふ慾はなかつたものです。だから、お蔭で世間の信用も續いて來たし、親戚にも何かと云ふと、相談相手にされるつていふ風ですが、この先はどうなりますか」

「お嫁さんが來たら、家風も變つて來るでせう。何處の家でも、女房といふものは隱然非常に勢力を持つてゐるやうですから」と云つて、高山は一二の例を擧げたりしたが、眞面目に聞かれるのをいゝことにして、年長者に向つて世態人情を說くのが、少し氣恥かしくなつたので、結婚の儀式も儀式だが、一つ新婚旅行をおさせになつちやどうです？ 人間の一生に一番樂しいことらしいですから。それに一度機會を取外したらあとではしようたつて出來ないことなのですから」と、半ば座興に云ふと、

「え、それはいゝでせう。結婚當時は家の中がごたつきますから、旅行にでも出てくれゝば、家の者の手數が掛らなくつて、結句便利かも知れませんよ」

老主人が家の事、子供の事に、老いの心を碎いてゐるのを感じるにつけて、高山は自分の父親の事を思出した。自分の故鄕の家と青木家との氣風の相違をも思比べた。親の側へ置いて親の稼業をそのまゝに繼がせて、わが子の一擧一動、目顏の晴れ曇りにも、言葉のはしばしにも心を配つてゐる一人の父親と、子供の勝手氣儘な行動を大抵は見過して、古い廣い家に獨りで產を守つてゐてあまり苦にも思つてゐない一人の父親との、二つの老いた姿を彼れは心の中に描いて、ぢつとそれを見てゐた。……高山は自分の妻を選ぶに當つても、事後承諾と些少の費用を求むる以外に、父親の頭をも手足をも煩はさなかつた。彼れの二三の弟の結婚もさうであつた。一人の妹でさへ自分で夫を選んだ。

「どちらが子供のために幸福なのだらう？ どちらが親自身に取つても幸福なのであらう？」

高山は、若し自分が良三の親のやうな親を有つてゐたら、自分の生涯はどう變つてゐたであらうかと、想像をめぐらしたりしたが、それはとに角、一人の子供もない、將來生む望みもない彼れには、親心といふものは些とも分つてゐなかつた。生物學者の說くところから考慮したり、日常見聞してゐるところから推察したりして、親心の概念は心得てゐても、身に染みて生々と感ずることはどうしても出來なかつた。世界の親々の心は、彼れの力では味ひ知ることの出來ない神秘不可思議の何物かであつた。

「おれの親爺は、いくらやりつ放しであつても、大勢の子供を育てて來たのだから、隨分苦勞したのであらうが、親心といふ不思議な物を味ひ知つてゐるのだから、おれよりは幸福だ」

彼れは、故鄕の家の奧座敷の炬燵に當つて、

算盤か帳簿かと睨めつくらをしてゐるか何かしてゐる今の親爺を想像するにつれて、彼れが幼かつた時分の父親を追想した。……彼れが物覺えのいゝのを自慢してゐたらしい父親は、眞夏の休暇に、日本外史や、十八史略の素讀を授けようとしてゐたが、强ひて學ばせられる彼れに取つては、それが苦役のやうに感ぜられてゐた。滿潮時を見計らつて水遊びに出掛ける近所の仲間から誘ひの聲を掛けられたりする時には、自己流の節をつけて朗々と讀立てゝゐる父親の聲が憎くなつた。で、時々は父が敎へたがつてゐる時刻を豫感しては、そつと家を出て遊んで來ることがあつた。……あの時分の父親は、今のおれよりも若かつたのだと思つてゐると、自分の身のまはりが淋しいやうに、高山には思はれた。

支度は略出來上つたから、結納の日取りも式の日取りもそちらで極めて吳れと、先方から仲人を通じて云つて來たので、此方では俄かに勢ひづいて、暦を取出して吉日の穿鑿をはじめた。九星暦の外に日蓮宗の暦をも參考にしたのであつたが、二つの暦の所說が一致してゐないので迷はされた。

結納として送るために、京都へ染めにやつた花嫁の式服が着くと、家の者も寄寓者も目を欹てた。式服には孔雀が翅をひろげてゐた。

「成るほどよく染め上げてゐる」と、皆なが云つた。まだ見ぬ女がこの式服を着けた華美な花嫁姿を高山は想像しながら「先方のお好みださうですが、孔雀の模樣は奇拔なのでせうね」

「孔雀は虛榮の鳥だといふぢやありませんか」老主人はそれを氣にしてゐるやうだつた。

「孔雀は蛇を喰ふさうですよ。孔雀明王の有名な佛畫を見たことがありますが、昔は呪ひをかける時に、僧侶がその前で祈つたのださうです」

兩親や花聟の式服も、すでに新調されてゐたのであつたが、まつ子の式服は華美な場所に相應しいのがなかつた。持合せの物は着る機會のないうちに、自ら世におくれて見窄らしくなつてゐた。老主婦は頻りにそれを氣にした。先方の親戚は富家ばかりで、誰れとかさんは一萬圓のダイヤの指環を嵌めてゐるなんて、大袈裟な噂を聞いてゐるのに、さういふ人達の中へ、自分の娘をこんな見窄らしい物を着せて交はらせるのは、どうしても忍びられなかつた。

「これでいゝんですよ、どうせ一度お役目に着るきりなんですもの」と、まつ子は諦めてゐるやうに云つた。

「でも、年寄の私たちでさへ新調してゐるんだもの」

「着物のことなぞどうでもいゝの」まつ子は何となく哀れを感じて、「それよりもね、……私は子供はないし、落着くところがないやうな氣がしてならないの。高山に死なれでもしたら、私の行き場所がないんですから、それを思ふと、淋しい野原を一人で歩いてゐるやうな氣がすることがよくあるんです」と、何時になくしみ〴〵と母親に訴へた。

「だつて、親もまだ生きてゐるのだし姉弟もあるのだから、あなた一人で心細い思ひをしてゐなくてもいゝぢやないか」

さう云つた母親の目には淚が浮んだ。まつ子が何故淋しい野原を歩いてゐるやうに思つてゐるのやら母親にはよく呑込めなかつたが、雨露の凌げるだけの小やかな家でも、まつ子のために建ててやつて置かなければ、安心してこの世を去ることが出來ないやうな氣がして、父親にその話をした。父親は笑つて聞いてゐた。

「お父さんは他所から來るお嫁さんのことばか

り心配して、自分の娘のことは考へてくれないから仕様がない」と、母親はこぼしたりした。

皆なが忙しかつた。邪魔物の取片付や汚れ物の洗濯や、新しい調度家財の整理などにまつ子も母親を助けて働いてゐた。自分たちが旅で汚した衣類の始末にも骨が折れた。仲人をはじめ、人の出入りも多かつた。

用事のないのは高山一人であつた。毎日御馳走になつて、市中から近郊へかけて散歩をして、午睡をして、時々は、婚禮の準備を傍觀してゐた。此處を立退いたら何處に住居を定めるかと考へて、まつ子などに相談することもあつたが、その場合が來たらどうにかならうと、輕く見做してゐた。

東京の知人との手紙の遣取りは殆んど絶えてゐたが、ある日計らずも、尾越の音信に接した。

「拜啓、小生先月末より郷里福島へ歸省いたし、昨夜上京仕候。お手紙の趣きによれば、最早大磯を御退去相成りし由、御訪問致さざりしを殘念に存じ候。小生は一身上の都合により、東京に住みがたく相成り候故、近々家を片付けて郷里へ隱退いたすことに決定いたし居候。他日拜眉の機會も有之候はんが、をり／＼の御音信願上候。輕井澤の閑寂なる風色夢の如く思出され候。奥様へもよろしく」

高山はこの手紙を讀むと、九段の中坂のほとりにある尾越の今の住居を目に浮べた。小さな家であつたが、二階が一室あるし、日當りがよささうで、借家としては手綺麗に出來てゐた。空家の拂底してゐるこの頃、あのくらゐな家が借りられゝばいゝと、ふと思ひついたので、まつ子にさう話した。

「式の日まではまだ大分間があるから、ちよつと東京へ行つて來よう。尾越の後が借りられるかも知れないし、あれがいけなかつたら外を搜して見てもいゝよ」

「こんなゴタ／＼した家にゐたつて詰らないでせうから、明日でも行つて入らつしやい」

「東京で借家がうまく行かなかつたら、思切つて南九州の方へでも行つて見るんだね」

高山は退屈さましに二階で地圖を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はとつくに行詰りになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して來た彼れは、身邊の事がもつと自由になつたら、未見の土地を巡遊して殘生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地圖をも屡々注視してゐた。長崎島原などを經て、薩南の湯の町指宿に暫らく居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ケ原の孤兒院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤兒院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を單純平明な言葉で傳へた昔の田舍牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に會ひたいと思つてゐた。

「二十何年先生にも御無沙汰をして世の中を渡つて來ましたが、肝心な事はつまり何も分らないで、分らないじまひで私も一生を終りさうです」と云ひたかつた。昔でさへ頭髮が薄くつて瘦せさらばうてゐたかの牧師の今の有樣はどんなであらうか。額に似合はない鳩のやうな柔和な目付は、高山の記憶に今も懷かしみをもつてハッキリ殘つてゐる。……都會から隔絶した薄倖な小兒の教養などに從事してゐるのこそ、人間としての最も尊い生活であつて、現世と天國とをつなぐ梯子はさういふ處にかゝつてゐるのかも知れないが、それでは彼自身かの牧師等の下に隨いて安んじて働き得られるかと考

へて見ると、考へるさへ可笑しかつた。一人を殺して心が安んじてゐられないのなら、人を助けたつて、わが心は安んじられないのだ。どちらにしたつて同じことだ」

階下へ下りると、仲人が結納取りかはしのために來てゐた。二三の親戚も座に加はつてゐた。緣起を祝ふための茂久錄の用語も字配りも、人々に頭腦を絞らせて六ケ敷かつた。いくつかの進物臺に載せられた結納の品々は、翁の面や松に日の出などの模樣のある風呂敷をかけられて、仲人の宰領で持出された。同じ家の中も、不斷の夜とは違つて、奥床しく見られた。仲人が目出度く納めて歸つて來ると、祝ひの膳が並べられた。盃をやり取りしながら枝から枝へとうつつて行く世間噺も、たえず歡喜の色に照つてゐた。

「良主さんも荷が重くなりなすつたから、これからまた一奮發なさるんですね」と、仲人が云ふと、

「これで身が極まると、働くにも張合がつきますよ」と、老主人が應じた。

高山は翌朝東京へ行つた。

飯田町の宿屋に着いて、茶を一杯飲むと直ぐに外へ出た。田舍から出て來るたびに、こんな空氣の濁つた騷々しい處で、よく人は生きてゐられることだと感じるのであるが、それとともに自分の故鄕へ歸つたやうな氣持もした。女の美しさも彼れの目を牽いた。筋肉の引締つた赭い顏した、天眞の生氣が身體に漲つてゐる大磯などの女よりも、虛弱な肉體を脂粉で色取つてゐる都會の女の方が美しく見えるのを如何ともしがたかつた。

神保町あたりまで行つて、醫藥など二三の買物をした後で、中坂の尾越の家を訪ねるつもりで、九段下まで來ると、數人の若い男女が電信柱へ大きな紙を貼りつけてゐた。立留つて見ると、××會主催の婦人問題講演會の廣告であつた。講演者には高山の知人もあつた。知名な社會主義者もまじつてゐた。

貼終つたところへ、巡査が急ぎ足でやつて來た。

「これは屆けてあるのかね」と訊ねた。

「いえ、別に屆をしてはゐないです」と、髮を長く延した袴を着けた學生らしい男が答へた。

「ぢや、いけない。剝いで下さい」巡査は凜として迫つた。

「剝がなくともいゝと思ひます」

「いけない、剝ぎたまへ」

二人は顏を紅らめて二三の押問答をしてゐたが、やがて巡査は警察署までの同行を命じた。先きから後の方に立つてゐた、髮を七分三分に分けて束ねてゐる仲間の女は、微笑しながら、

「警察署へ行くんだつて。行け〳〵」と、小聲で云つて隨いて行つた。

街上のさういふ光景は、高山には珍らしかつたので面白かつた。

尾越は家にゐたが、家を片付けてゐる樣子は見えなかつた。

「お移りになるのなら、後を讓つて頂きたいと思つてゐるのですが」と、高山は玄關へ上りながら云ふと、

「實は故鄕へ引込む日取りは、まだハッキリ極まつてゐないのですよ」と、尾越は面羞さうに云つた。

二階へ通されてから、高山は成るべく東京へ住みたくなつた自分の心持を話して、相手の鄕里隱退の理由をも訊ねたが、尾越は暫らくその答へに躊躇してゐた。

「どうも思はしい職業が見つかりませんから、一二年田舍で親爺の手傳ひをしようかなんて思

つてゐんですが、私の故鄕はちよつと歸つて見てもいゝ處ぢやありませんからね。……まだ當分は此方で遊んでゐたつて餓ゑ死する心配はないのですが、懷手をして暮らすのは社會に對して濟まないやうに思はれますよ」

「しかし、あせらないで、此方でゆつくり方針を立てたらいゝぢやありませんか。資産家の御子息が田舍でブラ〲してゐるのは、尙更傍の者の目について遊惰な人間と思はれるでせう」

「いや、今歸つたら、一生懸命に汗を出して働くつもりなのです。遊んで暮らすのも傍で思ふほどに氣樂ぢやありませんからね」

尾越はふと昂奮した口を利いたかと思ふと、相手の言葉も耳に入らぬやうな風で、落着かない目をしてゐた。

これには何か譯があるのであらうと、高山は感付いたので、長座を遠慮して、間もなく暇を告げた。細君の顏を見ないのが物足らなかつたが、この夫婦の間に何か變つたことでも出來てゐるのではないかと危まれたので、細君のことは訊かなかつた。

去年の末に訪ねて來た時には、夫婦は他の中年增と三人で晝間からトランプを取つてゐた。輕井澤で退屈のあまり、はじめてこんな物を手にしたのだと、細君は言譯をしてゐた。

「大晦日を目の前に控へてゐるのに、お宅は天下泰平ですね」と、高山は冷かして、

「僕なぞは勝負事には興味がありませんよ。どちらが勝つても負けてもいゝつて思つてゐるから」と、悟つてゐるやうに云ふと、

「でも、詰らない遊び事にも負けるつてことはいやなものですわ。損得の關係がなくつても、負けるつてことは本當にいやなものだと、私思つてますの」

「お前が今日は負けてばかりゐるからだらう」と尾越が横から言葉を挾んだ。

「あんなことを。まだはじめたばかりぢやありませんか。先の勝は糞勝ですよ。昨夕だつて御覽なさいな。あなたが泣顏して燒芋買ひにいらつしやつたくせに」

「買つて來たのは僕だつたけど、食べたのは誰だつたらう」

「私かも知れないわね。勝つた方が御馳走になるのは當り前ですもの」細君は無邪氣にさう云つたが、ふと眞面目な顏を高山の方へ向けて、

「いゝ歲をして馬鹿なことを云つてるとお思ひになるでせう。……私どもも遊び次手に今年一杯は怠けて暮らしても、年が明けたら、心を入替へて一働きしようと思つてゐますのです。尾越は氣に入つた職業がなければないで、語學の稽古にでも行つたらいゝだらうつて、私勸めてゐるのですけれど、相變らずの無性者で仕樣が御座いませんの」

「だけど尾越君は語學は一通り修業濟みなんでせう。輕井澤で外國人と何か話してゐたぢやありませんか。僕なぞは日常の挨拶も英語では云へないんですよ」

「毛唐と話したつて詰りませんね」尾越は氣取つた口調でさう云つて、「私の從弟は横濱のSN商會へ出て、何時も外人を相手にしてゐるのですが、その從弟は學生時代から語學が特別によく出來て英語の外に佛蘭西語も相當に話せるんです。此間うち四五日横濱へ遊びに行つてた間に、家内は從弟の話振りを聞いて非常に感心して、それから、私を鞭撻しだしたのですが、語學ばかりが學問ぢやありませんからね」

「學問のことはどうだか、私にはよく分りませんけど、英作さん(從弟)は働き者ぢやありませんか」と、細君の言葉には棘を帶びてゐた。

が、高山の手前、話は外へ轉じた。細君は部屋を出て客あしらひの準備に取掛つた。高山は尾越から芝居や寄席や活動寫眞などの事を

聞かされたが、それ等についての彼れの批評や説明はすべて平凡であつた。
「暇だから、見に行つてるやうなものの、大分飽いて來ましたよ。それで從弟のゐる商館へ勤めようかと思つて、略話がついてゐたんですが詰らないことから中止になつて惜しいことをしました。私は俸給の多少に關はらず働いて見たくなつてるのですけど、運が惡くつて私の決心の鼻先がいつも挫かれるんです。しかし、來年は京橋のある貿易商の會社へ出られるやうに昨今話がつきかゝつてゐるんです」と、尾越はしみ／＼と云つた。
　細君は再び入つて來た時には、服裝を變へて顏をも飾つてゐた。
　高山は二人の話相手として引留められるのを振切つて、夕餐の饗應は受けないで暇を告げたが、同じ夫妻だけの生活であつても、尾越の家には艶があつて、彼れの家のやうに、落寞としてゐないやうに思はれた。
「しかし、夫婦水入らずの生活も、はたの者の云ふほどに氣樂なものぢやないからな」と、彼れは簡單な批評を下した。
　毎日、朝餐を濟ますと、直ぐに飯田町の宿を出て、就眠時刻まで何處かで遊び暮らすのを、彼れは例としてゐた。故郷へ歸つて來たやうな氣持と、獨りで旅へ出てゐるやうな氣持とを一しよに持つて、都會の人臭ひ臭ひに身體を浸して彼方此方を歩いた。一度は講釋場の講席へ行つて、日本人の心にまだこびりついてゐる古風な犧牲獻身の殘影を見て、彼れの如きものの心にさへ、日本の國土に育つて來たため、講釋の英雄に感動する分子が微かながらもあるのを感じて、不思議に思つたりした。
　知人に會ふたびに訊ねても、空家は絶對になささうなので、結婚式にはまだ間があつたが、兎に角K市へ後戻りすることにした。
　ところが、出立の前夜に、尾越から電話が掛つて來た。一度お訪ねしたいのだが、時刻は何時頃がいゝのだらうと云ふのであつた。
「今からお出でになつても構ひません。……ぢや、待つてゐます」と、高山は返事をした。
　女中に客の案内を頼んで置いて、風呂に入つて來ると、尾越はすでに火鉢の側に坐つて、珍らしくも葉卷を吸つてゐた。
「なか／＼寒いですね」高山は褞袍のまゝ火鉢の側に坐つて、「先日のお話のヴェリタスといふ活動寫眞を見ましたよ。活動のうちでは見應へのある方なのでせうね。獨逸物だけあつて神祕的な理窟が映畫のうちに染徹つてゐるやうなところがありますね。三たび現はれ三たび消え、眞理は最後の勝利を占むと云つて、艱難を押切つて眞實を守れ、一時の情に負けて譃を吐くなと云ふ全體の趣向は、近代劇や小說の中にはありさうなことで、いかにも西洋人の好きさうな理窟ですね」
「理窟に深みがあるし、指環が壁の中から出たり、漁夫の網にかゝつたりして、指環で筋が運ばれるのも面白いぢやありませんか。西洋人は思付がいゝんですね」
「そりや日本の講談なんかの趣向よりは巧い。……だけどあなた方はあんな活動や、イブセンの社會劇なぞを見て、眞實さへ云へば安心してゐられる氣になるんでせうか。……あの活動だつて、本當は、眞理が最後の勝利を占めたのぢやない、作者が眞理といふ世界の人氣者を持つて來て、お座興に勝たせるやうにしたのですね。……譃と眞實だつて、眞劍に取組ませたら、どちらが勝つか分つたものぢやない」
「だけど、本で讀んでも、興行物で見ても、眞實が負けたでお仕舞ひになると、いゝ氣持はしないですからね。世の中の實際の事件についてもさういふ氣持がしますよ。あなたはさう思ひ

ませんか」

「それはさうです……」

高山は、それから先きは、自分の智慧の行詰りで、考へたつて話したつて、果しがないので、さういふ茫漠たる疑ひの世界へ、尾越と一緒に進んで行く氣になれなかつた。

「空家は見つかりませんが、僕は明日あたりK市へ歸らうかと思つてゐるんです。親類の婚禮に出席しなければなりませんから。……田舍の結婚式は舊弊でいやに仰々しいがあなたのお國の方だつてさうでせうね」

「私は田舍の結婚式にしみ〴〵出たことはないのですよ。姉の結婚の時には隨分大袈裟だつたやうですが、私は東京にゐて、身體の加減も少し惡い時だつたから出席しなかつたのです」

「あなたの御結婚の時には、此方で式をお擧げになつたのですか」と、高山は何の氣なしに訊ねたが、すると、尾越は苦しさうな顏をして、

「まあさうです」と、勢のない聲で答へた。そして、何か見てゐるやうに、上目を空間に据ゑてゐたが、やがて、

「私は當分あの家で獨り住ひをすることにしました」と云つて、その譯を高山が訊返すまでもなく、

「ワイフは私が福島へ歸つてゐる間に無斷で家出をして、行先を私に知らせないやうにしてゐたのです。いくら居所を晦ましたつて、略見當はついてゐたのですが、出て行つたものを追掛ける氣にはなれませんから、私は打ちやつとくつもりにしたのです。今度故郷へ歸るについちや、ワイフの事が問題になつてゐたのですが、——實はまだ正式に籍に入つてゐなかつたので——當人は私の兩親の許しを得る望みはないと堅く信じてゐたやうでした。それが家出の原因と云へば云へますので、遺書にもその點に重きを置いてゐるのですが、本當はさうぢやないのでせう。入籍するしないは我々の考へぢや第二第三の問題なのですからね。……一體私の方でも別れて、當分一人でゐた方が、自分のためにいゝんぢやないかと思つたこともたび〳〵あつたのでした。世間ぢや妻を娶ると生活に張合ひが出來て、仕事にも身が入ると云つてゐますが、私は例外な人間なのか、ワイフと一緒に住んでからは、生活の進路が止まつてしまつたやうなのですよ。それで、獨りでゐたら、何か相當な職業が得られて人並に働けるだらうと思はれてならなかつたのでした。京橋の會社の口も、私が獨身だつたら、俸給は薄くつても取逃さないで勤めてゐたのでせうが、ワイフがゐたために此方から駄目にしたのでした。故郷ぢや、はじめのうちは苦情を云つてゐましたが、この頃は默許の形で、私たちが定職でも出來て眞面目に暮らしてゐたなら、早晩籍も入れて呉れるのでせうが、兩親に會つてその話をした時に、私の方でどうも熱心に頼む氣になれなかつたのです。當分アヤフヤにしといてもいゝっていふ氣で、ワイフに對する言譯を考へながら歸つて來たのですが、ワイフの奴、見透してゐるやうなのだから遺書を見た時にはちよつと驚きましたよ。だけど、私の心ぢや、二三時間も經たぬうちに今後の方針が定つてしまつたから大丈夫だつたのです」

細君が外に男をこしらへたのでもなければ、退屈醒ましに隱れんぼでもやつてるのだらうと思ひながら、高山はお座なりの受答へをして聞いてゐた。

「ワイフは、年末にあなたがいらつしやつた時にトランプの仲間になつてゐた女か、あるひはワイフの弟の家に多分隱れてるか、さうでなくつても、この二人は居所を知つてゐるに極つてると思つてゐましたが、私はわざとこの二人の處へは寄りつかないで、葉書で訊合はすこと

さへ控へてゐたのです。無斷で出て行つた女を追掛けると思はれるのはいやですからね。……

ところが、高山さん、聞いて下さい。妙なことがあるんですよ。あなたが年末にお會ひになつたあの女が――石本さつと云つてワイフとは子供の時からの知合ひだつてことですが――あれが一昨日の午過ぎに、顏色を變へて不意に私んところへやつて來て、奧樣は本當にお宅にいらつしやらないのですかと訊ねるのです。白ばくれてゐるんだらうと思つて、

あなたは家の奴のゐないことを誰れにお聞きになりました？ と、私は荒つぽく訊返しました。

それであなたは奧樣の今いらつしやる處を御存じなのですか。

知つてる筈もないし、强ひて知りたいと思つてもゐません。

御存じないんですつて？ よくそれで平氣でいらつしやるのね。

あの女は呆れたやうに云つて、それから譯を話したのですが、ワイフは使に手紙を持たせてあの女の處へやつて、ある事情でかういふ處へ來て、今九死一生の場合なのだから、××圓くらゐの金を工面して屆けるやうにしてくれ、着換への衣服も何でもいゝから貸してくれつて賴んで來たと云ふのでした。九死一生と云つて何事が起つたのだらうと、私も吃驚しましたが、さう聞くと打遣つて置けませんから、あの女と相談して、必要な金と着物とを持つて、一緒に出掛けたのです、氣はあせつても大崎まで行くのだから途中が隨分手間取りました。大崎の家にワイフの掛り合ひがあることは、これまで聞いたことがないので、電車の中で二人していろいろに考へて見たのですが、新宿で乘換へを待つてる間に、あの女が不意に思ひついたやうに、これは自分だけで先きへ行つて樣子を見た方がいゝと思はれるから、あなたは大崎の停車場か何處かで待つてゐてくれと、かう云ひだしたのです。九死一生と云ふ場合に安閑と待つてられる筈がないので、私は飽くまでも反對して、一しよに行くと言張つたのですが、

おくめさんは出拔けにあなたに來られちや、面目のない思ひをするかも知れませんよ。御主人のお留守に家を出たことを、今は良心が咎めてるでせうから、出拔けにあなたをお連れして脅かしたら、却つて穩かに事が濟まないだらうと、心配でなりません。ですから、私を信用なすつてお任せ下さいましな。おくめさんのためにもあなたのおためにも、決して惡いやうにいたしませんと、あの女は、どうしても私を連れて行くまいとするのです。ワイフに後日たいことでもあるのなら、尙更早くその家へ行つて見なければ承知出來ない譯なのですが、――

ぢや、直ぐに私があなたを迎へに來るか、使を寄越すかするから、十分か五分でも待つてゐてくれつて、あの女は、いかにも當惑したやうな顏をして云つて、先方の家の名も番地もハツキリ敎へてくれましたので、私も讓歩して、停車場で少しの間待つてゐることにしたのです。

ところが、十分經つても二十分經つてもあの女からの音信がない。三十分を過ぎると、私はもうぢつとしてゐられなくなつて、慌ててその家を訪ねて行きました。番地が解りにくかつたので、大分手間取りましたが、家のあることは確かにあつたのです。宿屋でもなし料理屋でもなし、新築の普通の家でしたが、ひつそり閑として、人の聲は聞えないのです。入つて聲を掛けると、下女だか主婦だかハッキリしないやうな五十がらみの女が出て來ました。そして、私がかういふ女が今訪ねて來てる筈だから、その人に通じてくれと賴むと、さういふ方は先き入

らしつたけれど、お訪ねになる方が此家にいらつしやらないので、家が間違つたのかも知れないから外を捜して見ると仰有つてゐましたと、親切に教へてくれました。

私は仕樣事なしにまた停車場へ引返して、暫らく待つてゐましたが、果しがないので、三番町のあの女の家へ急いで行つて見たのですが、無論家へは歸つてゐませんでした。置手紙をして一先づ自分の家へ歸りましたが、どうも腑に落ちないので、悄氣てしまひました。があの女が詐欺をした譯ではあるまいが、一生に、はじめて出くはした不思議な事なのですからね、私は手を組んで一心に考へて見ました」

尾越はこゝでちよつと話を切つて茶を飲んだ。話してゐるうちにも、胸に蟠りのないやうな明るい顏をしてゐるので、高山は氣持よく聞くことが出來た。何よりも細君の素性を詳しく聞きたかつたのであつたが、露骨にそれを訊ねるのは氣おくれがされたので、

「その石本何とかいふ女の人は、どういふ素性の人なのです？」と訊ねると

「亭主は質屋の通ひ番頭ださうですが大した收入はなささうです。女の方は私のワイフなんかとはちがつて口數の少い落着いた女ですが、ワイフは誰れよりも惡意にしてるくせに、あんまりよく云つてはゐないのです。弄花が好きで、そのために方々へ不義理なことをしてるつて云つたこともありました。……今度の事も、さういふ勝負事に關係してあの女が、私から金を引出すために企んだのぢやないか、事によつたら、私の留守中にワイフまでも勝負事の仲間に捲込まれてるのぢやないかと、私も疑つて見ました。晩になつてあの女の家を訪ねて見ると、まだ歸つてゐない。いよ〳〵私を騙したのにちがひないと思つて、復讐の手段を考へてゐたのですが、すると、昨日の夕方になつて、奧樣の居所をやうやく捜し當てたから御安心なさい、それについてお話したいことがあるから私の家へ來てくれといふあの女の手紙が速達で來たのです。私は直ぐに支度をして出掛けましたが、此處でいゝ氣になつて訪ねて行つたら、私はまた元の通りの生活を續けなければならんことになるだらうと、一生の岐れ目のやうな氣がしましたから、道を變へて、他の方へ行つちやつたのです。停車場で待呆けを喰はされたかはりに、私は他所へ行つて行方を晦ましてゐるんです。先きもある友人にこの話をすると、今時分細君は君の家へ歸つて待つてるだらうつて、笑ひ事にするのですが、私は思切つて笑顏で歸つて行く氣にやなれないんです。……私は忍耐力のない人間なのでせうが、自分のワイフに、競馬馬扱ひされて、矢鱈に競走させられるやうにされちや溜りませんからね。いくら勝負事が好きだからつて、女つてものは自分の夫までも勝負の道具に使ひたいものですかね」

「あなたの奧さんはどうだか知りませんが、當世の女はみな負けん氣になつたんですね。今に我々は女のお指圖を受けて生きて行くやうになるんでせう」

高山は、世間の男女關係の常例から推して、尾越は今夜にでも細君と妥協するだらうと堅く信じてゐて、彼れの強がつてゐる一時の決心などには殆んど價値を置かなかつたが、細君の家出や石本の企みについては、尾越の打明話以外の隱れた眞相を知りたかつた。

翌日、高山は前觸れはしないで、K市の青木家へ歸つて行つた。結婚式まではまだ數日の餘裕があつたが、家の人たちは寸暇もないやうに忙しさうであつた。

「東京では面白いことがありましたか」と、老

主人に訊かれると、
「東京の宿屋へ泊ると、夜眠れなくつて困りま
す」と、高山は答へた。
「商人でも東京の人はやり口が烈しいですね。私なぞもたまに東京へ行つて見ると彈みがついていゝやうです。しかし、この頃は店員がみな東京へ出たがるので、油斷がなりませんよ。先きへ行つてるものが、手紙を寄越して唆かしたり、たまに歸つて來ると、洒落た服裝なんぞして見せびらかしに來るんだから始末が惡い。東京へ行つたからつて、取つた給金は右から左へ消えて行くだけで、金を殘す者は、十人に一人もないのですが、若い者はみんな腹の中がうはついてゐるから、ちよつとしたうまい口にも直ぐに乘せられてしまふのですな」
「他所の子息の使ひにくいのは當り前でせう」
　高山は人を使つて仕事をした經驗は殆んど無かつたので、空々しい返事をした。
「以前は十年の年季に五年のお禮奉公をするやうな者もあつて、店員が落着いて働いてくれましたが、これからはやりにくくなりますよ、商賣を止めて小さい家で内輪だけの生活をすりや、氣骨が折れなくて至極安穩に日が送れる譯ですが、何もしないで遊んで暮らすといふのも、若い者のためによくないでせうかな」
「さあ。…何もしないで生きてるのも案外苦しいかも知れませんね。どつちにしてもいゝ事ばかりはないとすると、働けるだけ働いた方がいゝんでせうね」
　高山は自分の身についてもふとさう思つた。自分が長い年月やつて來た仕事が、たとひ無意味の事であつたにしろ、手を拱いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりは精一杯働いた方が、まだしもましなのだと自ら力をつけた。さう思ひついた時の彼れの氣持は、老主人の氣持とさして相違してゐなかつた。家業を讓るべき男子を持つてゐる老主人も、子供の無い彼れも、所有慾や世間慾に支配されて、生命を生きて行かうとするのに差別はなかつた。彼等の腦裡に差してゐる光や影は同じやうな色をして同じやうに動いてゐた。相手の話すことが互ひの耳によく滲つた。
　今日までに店を仕上げた苦心談や今日までに社會的地位を得た苦心談が、二人の口から出て、炬燵の側の一夕の話が榮えた。老主婦の見立てたお茶菓子が持込まれた。側で縫物をしてゐるまつ子も、世の家庭團欒の悅樂をこの晩にこそ感じてゐた、彼女の式服も間に合つてゐた。
　まつ子は一日、良三や店員の助けを借りて、預け物の整理をしたが、瀬戸物の食器が壞れてゐるのを見たり、桐の火鉢が紛失してゐるのに氣がついたりすると、住所不定の生活に氣を腐らせた。何時でも容易に運び出されるやうに荷造りをして土藏の一隅へ積重ねてから、土藏の入口で埃を拂ひながら、良三と肩を並べて一休みした。狹い空地に置かれた石燈籠の側には、春らしい光が笑つてゐるやうに搖いでゐた。
「もう直きに櫻が咲くんだわね」まつ子は歸つてからも見たことのなかつた故鄕の澄んだ青空を仰いで、「あなたは今どんな氣持がしてゐて？」
「別に變つたこともないさ」
「だつて、あなたの一生の大切な時ぢやないの」
　まつ子は揶揄つて見たい氣がしたが、十年前の自分の結婚前後の事を考へると、弟を揶揄ふ餘裕のないやうに、ある感じが胸に喰入つた。夫との關係や夫の身内との關係など、自分の十年の間に經驗させられて來たことが、棘をもつて一時に彼女の神經に觸つた。そして、男女の別はあつても、良三も今に知らないではゐられまいと、思はれた。

「お父さんはお嫁さんさへ來れば、家の中がいい事づくめになるやうに云つてゐるけれど、あなただつてこれから、痛い思ひをすることもあるわよ」

「そりや、何時までも獨身でゐる方が氣樂だらうね」良三は屋根の端で羽を光らせてゐる小鳥の愉快な運動に目を注いだ。

「あなたは責任が重いんだから、獨身でゐられるものかね。お父さんは家といふことばかり考へてるから、どの子供よりも相續者のあなたを重んじてるのだよ」

「家を大切にするのはいゝが、少しでも新奇なことをすると、危かしがつて御機嫌が惡いんだ。去年の暮にも、×町の長屋の井戸が壞れたから、この機會に水道を引いたら、借家人も喜ぶし、新奇に井戸を掘るよりや經費もずつと廉くて上ると云つたのだけど、昔からあつた井戸を潰すのは縁起が惡いと云つてお父さんは聞かないんだ。それで手數を掛けて掘直すと、いい水が溢れるほどに湧き出したものだから、お父さんはいよ／＼御自慢なのさ……萬事がさういふ風なのでね」

「しかし、商賣の方はいぢけてゐないで、勢一杯にやつて御覽よ。自分が見込みをつけてはじめたことが失敗したつて、それは諦めがつくぢやないの」

「僕の家は不景氣の打撃は受けないからいゝやうなものの、商賣も傍で云ふほどにや儲らないものだよ。それに何だのかだのと出錢が多くつてね」

「さうだらうね。大所には大きな風が吹くつて云ふから」まつ子は戲談のやうに笑ひ／＼云つたが、「でも、あなたは道樂をしないからいゝさ。今度の事には隨分無駄なお錢がかゝつてゐるやうだけれど、道樂をして使ふ人のことを思へば何でもないからね」

まつ子自身の昔は云ふまでもないのだが、良三の結婚までの身體も純潔に保たれてゐるのを、彼女は結構な事として考へた。……若い時は慌しく過ぎてしまふ。良三も二十五歳の今までをこの鬱陶しい家の中で過してしまつた。……何が結構だか幸福だか分らないやうにも思はれた。

「あなたは丈夫だからいゝね。私はこれつぱかり身體を使つても、足腰が挫けるやうに疲れるのよ。昔はさうぢやなかつたのだけど、一度惡くなつた身體はどうしても元のやうにはならないものよ」

良三なぞに話したつて甲斐がないと思ひながら、ふと起きて來た體内の疼みを口に洩らした。それにつれて、自分と同年輩の近所の知人が病んでゐるといふ噂を思ひ出して、病氣の經過を良三に訊ねてゐると、女のやうな聲をした男の唄が、塀越しに聞えて來た。「春は／＼。春は花咲く向島。オール持つ手に花が散る。ヤートセー／＼」

「どうしました？　荷物は片付きましたか」と、老主婦がニコ／＼して寄つて來た。

「おちかさんの病氣はどうしても癒らないんですかねえ」と、まつ子が訊くと、

「寢てばかりゐるんだつて。捗々しく癒り目が見えないから、病人も癇が起るんだらうよ。若い人の長患ひは本當に氣の毒だよ」

「若い時を患つて暮らすのは因果ですよ。病氣なら烈しくつても、癒るか癒らないか、早く極りがついた方がいゝのよ。嬲殺しにされるのはいやですからね」

母子が話をはじめた間に、良三は二人の間を通拔けて店の方へ行つた。

春雨が音のせぬほどに降つた晩、花嫁持參の

品々が大勢の人夫によつて運び込まれた。通りがかりにふと立留つて傘を傾けて此方を見ては行過ぎる男女の様子が、高山には面白く見られた。路傍に差してゐる潤んだ光の中に現はれて來る一人々々がそれ〴〵の目付を店の内へ注いでは、やがて闇の中へ消えた。

昔ながらの座敷の中に、簞笥や夜具戸棚や、いろ〳〵な調度が坐るところもないほどに收められて、新しい光を放つた。人夫をねぎらつてから、内輪の祝ひの酒宴が別席で開かれたが、一點の非難も打ちどころのない行屆いた支度について、みんなの話が賑つた。價額の評價もされた。幾棹のかういふ簞笥の中へ收められてゐる衣類の美を盡してゐることも豫想されたが、かういふ品物によつて花嫁其者のねうちも數層の重みを加へたやうであつた。これぢや花嫁さんも家へ來て、家の中の汚らしいのに驚くかも知れないと、老主人は喜びのうちにも氣遣つたりした。

三十近い下女のおきくは、薄暗い臺所で店員の食事拵へなど、自分の受持の仕事にいそしみながらも、婚禮の話にはかねて耳を留めてゐたが、荷物が來てからは、彼女の神經も緊張した。簞笥や調度を覗き見して驚いたり、平生は酒の氣のないこの家に、毎日贅澤な料理の匂ひや酒の匂ひのするのに心を唆かされたりした。家の中に自然に漂つてゐる華やかな空氣は、臺所の片隅に蹲つてゐる彼女をも包むことを忘れなかつたのであつたが、彼女は店員よりも誰れよりも烈しい刺戟を受けてゐた。結婚といふものが、衣類や調度やさま〴〵な儀式に裝はれないで、「結婚その者」として、あるがまゝの正體を彼女の目前に鮮かに浮べてゐた。

「私だつて相手さへありや、まだ子供の一人や二人は生んで見せるよ」とおきくは先日笑顔をして云つてゐたが、彼女は一度子供を生んだこともあるし、戸籍面でも認められてゐる夫と名のつく男を有つてゐたのであつた。その男はノラクラして當り前の稼ぎをしない上に兇暴なところがあつたので、彼女自身もつひに愛想を盡かして、屢々兩親の注意をも受けた擧句に、人を間に立てて、離別の話をつけたのであつた。別れてからは、農事をもすれば女中奉公をもした。何處ででも働き者として通つて來た。夫と一緒にゐた間は、絶えず生活に苦しんでゐたが、獨り者になつてからは、立派に自分の口を糊した上に、兩親へも貢ぐことが出來た。「あの男にはもう會つちやならんぞ」と兩親に云はれるたびに、「會ふもんか、恐ろしい」と答へてゐた。

口ばかりでなくつて、堅く決心して獨り稼ぎの氣樂さを喜んでゐたのだが、日に月に以前の苦しかつた記憶が薄らぐにつれて、懷かしい記憶のみが心の中に澱んで來た。ある時ある處で、店の若い人に戲談口を聞いてゐると、戲れに肩を叩かれたことがあつたが、それが何とも云へないいゝ氣持がした。もつと強くどやしてくれゝばいゝと思はれた。別れた夫にどやされた時には、もつと強い手答へがした。その夫にをり〳〵打たれた時の、全身に響渡つた疼みが、今は怨み憎みの種になるどころか、戀しい懷かしい思出になつてしまつた。

で、年末のある夜、風呂の歸りに、別れた夫に久振りで行會つた時にも、さして恐れなかつた。卒氣ない素振りをされないで、取合つて貰へるのが悦しかつた。そして、誘はれるまゝに木賃宿で一泊した。その後、外出の機會をつくつては二三度媾曳した。

おきくは周圍に渦巻いてゐる婚禮の潮に自分も浸されて、別れた夫の面影を頻りに思出してゐた。お金が殘つても人の家に奉公して人の家で寢起をしてゐるよりは、貧しい思ひをして

も自分の家にあの夫と一しよに住んでゐた方がはるかに仕合せであるやうに思はれた。貧乏するといつても餓ゑるのでもないし凍えるのでもないのだもの、……

此方の思ひが先方へも通つたのか、別れた夫はふと店先へ姿を見せた。しかもそれが、結婚式の當日のことであつた。蓬頭垢面の男が、塵一つ留めてゐない土間へ泥下駄で入つて來るのを見ると、家の者は眉を顰めた。目出たい席へ不吉の影が差したやうであつた。

「おきくに會はせて下され。是非話さねばならん大事な用事があるんです」と、その男は頻りに首を垂れた。

「今日は忙しいんだから困る」と、家の者は一度は斷つたが、その男は動かなかつた。若し無理な拒絶をして、こんな男を怒らせて怨みを買つたら、今日の大事な日に傷のつくやうな不愉快なことが起らないとも限らないと、氣遣はれたので、とに角おきくに云つてその意志にまかせた。

おきくはニヤ〳〵笑ひながら、平然としてその男を自分の部屋へ連れて行つた。男は「お宅ぢや今夜目出たい式があるんだつてな。おら、此間の晩お嫁さんの荷が入るのを、電信柱の蔭に隱れて見とつた。豪勢なもんだな」と云つて、部屋の中に手足を伸した。

「私も忙しいんだよ」

「だからセツセと働くがいゝや、おらあお前の邪魔をしに來たんぢやねえ。疲れたから一休みさせて貰ひさへすればいゝんだ」

男はおきくが掛けてくれた夜具にくるまつて、いゝ氣持で眠りに就いた。おきくは臺所へ出てセツセと働いたが、今までよりも仕事に張合ひがついて來た。そして、酒の殘りや肴の殘りを、寢てゐる男の枕許へ運んで行つた。家の者は混雜に取紛れて、その男のことは忘れてゐた。

女たちが化粧や着衣に手間取つてゐる間に、寄集つた親戚の男同士は、久振りで顏を合せたものもあるので、お互ひの近狀について賑かに話合つた。稼業がらで、經濟界の景氣不景氣や、金儲けのことが、何よりも興味のある問題になつてゐた。醫師の一人も、最近百日咳の注射藥の新發見をしたので、××製藥會社から廣く賣出すことにしたと云つて、その效果や莫大な年收の豫想の說明をした。

「この土地には實業家が多いやうですが、學問や新發見をして有名になつた人はあまりないやうですね」と、高山が訊くと、

「この縣内には本當の實業家も少いんです。多いのは相場師と賭博者だけです」と醫師は答へた。

前觸れによつて一同は店先へ居並んで、兩親や親戚に護られて到着した花嫁を出迎へた。……

下女部屋で殘肴冷酒に舌鼓を打つて、いゝ氣持で寢そべつてゐたかの男は、どよめいた家の樣子に耳を留めると、あたりが暗くなつて人もゐないのを幸ひに、障子の隙間から、顏を出して、狹長い土間の向うを見やつた。明るい光の中を立派に着飾つた男女が、ごた〳〵と入つて來てゐる。おきくも小綺麗なのに着替へて、片隅に立つて愼しやかに出迎へてゐる。

「金持のすることはちがつたものだ。だけど、詰りは同じこつた」と呟いて、彼れはまたも安樂なごろ寢をした。

偕老同穴の堅めの盃や、兄弟親戚の盃事や、兩家の親戚引合せの式が型の如く運んだ後、自動車で新婚披露の式場へ出掛けた時には、夜が可成り更けてゐた。

おきくは皆なが出て行つたあとで、下女部屋へ入つて來た。

「お嫁さんは綺麗だつたらうな」と訊かれると、

「お前にも見せたかつたよ。だけど、花嫁さんは何處で見ても俯向いてゐるから變でねえかの」
「お前だつてもおらと盃事した時にや俯向いとつたでねえか」
「空云ふでねえよ」おきくは無邪氣な笑ひを洩らして、「盃事といへば、今夜は何處かの女中さんが二人も三々九度のお酌をしに來てゐたよ」
「おらは手酌で頂戴した。……もうけえらざなるめいな。お蔭樣で御馳走になつた」
　披露の宴が首尾よく終つた時には、十二時が過ぎてゐた。高山夫妻は、まつ子の姉婿の注意でその家に一泊することになつた。離れの新しい座敷で絹夜具に包まれた。が、高山は夜更けての飲食のために胃腸を惱まされ、場馴れない窮屈な宴席で行儀を守つてゐたために神經を疲らされてゐたので、快く眠られなかつた。まつ子も饗宴の席で絶え間なく受けてゐたいろいろな印象や、青木家の今後の變化に關する想像などによつて刺戟されて、屢々熟睡を妨げられた。
　彼岸は過ぎてゐたが山國の夜はまだ寒かつた。高山は屢々夜着を掻合せては腹匐ひになつて煙草を吸つた。氣を紛らす書物は傍にないのだから、雜念の虜になつてゐるより外はなかつた。平生やゝともすると眠づらい夜を送つてゐる彼れには、今更珍らしいことではないが、深夜に連續して湧上る雜念ほど心を疲らせて、しかも何の役にも立たないものはなかつた。……何時どんな酷い病氣に罹るか、どんな酷い災難に會ふかして、苦しい死樣をするか分らないのだから、どうせ免れがたい死を偶然の運に任せきりにしてゐないで、自分の意志で、最も苦痛の尠い方法を採つて死を早めた方がいゝのぢやないか。人間の眞の幸福はつまりこれ一つで、他の種々雜多な幸福は畢竟水の上の泡沫同樣なものではないかと、彼れは自分に取つての最大な眞理はそれであると思込むことがあつた。動脈を切つて滴る血潮を見ながら快く死に就いたといふ「クオ・ヴァヂス」の中のペトロニウスや、蠍に胸を吸はせて眠るが如くこの世を去つたといふクレオパトラの物語が思出された。さま〳〵な自殺の方法が繪となり文字となつて闇中に浮んだ。……しかし、かういふ類の妄想や雜念は、明日の日になると、彼れの身に何等の效果をも與へないで、水上の泡沫同樣に消えてしまふのであつた。
「君は自殺の出來る人ぢやないよ」と、彼れは若い時分でさへ、ある友人に云はれたことがあつた。情熱が乏しくなつて理性に富んでゐる人には自殺は出來ないと云はれてゐた。
　友人の評語の當否は兎に角、彼れは露國の文學に接觸しだしてから、情婦と心中したり主君のために切腹したりするやうな、彼自身の共鳴しがたいやうな自殺とは、根本の異つてゐる自殺がたまに書かれてゐるのを見て、大いに心を動かされた。……アルツイバーセフ(?)の「死」といふ短篇に書かれてゐる見習士官は、姑息な感情の支配を受けないで、理性のみによつて、自己の採るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所說を實行した。
「しかし、小說の筋をそのまゝに信ずるのは間違つてゐるかも知れない。どんな作者だつて思付を誇張して書くやうだから」
　彼れはたび〳〵心を動かされた露國の文學からも、實際上の感化は受けることがなくつて今日に至つた。それ等の文學は深夜の妄想雜念を助けるだけの力を彼れの上に揮ふに過ぎなかつた。

「今日歸つて見たら、樣子がまるきり變つてゐるだらうな」と、高山は夜が明けてから云つた。

「私たちは明日のうちには立たなきやなりません。お父さんもさうした方がいゝだらうつて云つてゐました。私たちに見られてゐちやお嫁さんが居づらいだらうからつて」と云つて、まつ子は今日から自分の生れた家にも安んじて身を託する譯に行かなくなつたことを、痛切に感じた。

「東京へ行くと、差當り宿屋住ひをするんだが、厄介だな」

「普通の女で宿屋暮らしなんかしてゐる人は滅多にないでせう」

「安い賣家でもあつたら買つて見るんだね」

先日、青木家と取引のある東京のある商店の店員が、芝に住みいゝ格安な賣家のあることをわざ〳〵知らせて呉れてゐるので、夫妻は東京へ行つたら、先づその家を見に行くことに話を極めた。

夫婦は家族と一しよに、炬燵の上でパンと牛乳の朝餐を運ばれただけで、匆々に暇を告げた。青木家ではすでに朝の支度を濟まして、珍らしく風呂も沸されてゐた。老主人や花嫁や、附添の老女などは、座敷に落着いて、茶器や菓子皿を前に置いて、話してゐたが、老主婦のみは落着かぬ顏して、何となしに忙しさうにしてゐた。まつ子は昨日までのやうに、勝手にどの室へでも入る譯には行かなくなつたやうに思はれた。

老主人に招かれて、二人は座敷へ入つて話の中に加はつた。花嫁のたね子は、重くるしかつた昨夕の島田を崩して、輕快な束髮にしてゐた。その方がよく似合つた。「昨夕は久振りでグッスリ眠りましたよ。これで重荷を卸して安心しました。花嫁さんとも、今朝家の氣風なんかを、掛値なしにお話ししたら、異存はない結構だといふことで、私は何よりも喜んでゐますよ。私の家も今までは殺風景でしたが、若い人が一人殖えたので、これからは陽氣になるでせう」老主人は、風呂の中で思出した古歌を例に引いて、寂しい庭の梅の木に來て留つた鶯を、花嫁に喩へたりして、自分の喜びを、高山夫婦にも配たうとした。

花嫁は愼みながらも、可成り快活に話をした。まつ子は明日の出立の準備をするために、奥の間へ行つて、荷造りには母の手や良三の手を借りた。

「明日はどうしても歸るの？　何だか急に追立てるやうでいけないねえ」と、母親は氣が濟まぬやうな顏をして嘆いた。

明日の晩には、三ツ目とか云つて花嫁が實家へ歸つて泊つて來るのであるが、その時の慣例や祝物送りの方法などについて、みんなの意見が鬪はされた。花嫁も一つ處に坐つてゐるのは苦しかつたので、機會を見ては座を立つて、胸に溜つた鬱氣を洩らした。濕つたものを乾かしに物干臺へ行つたまつ子の後を追つて、「姉さん」と、懷つこい聲を掛けたりした。まつ子ははじめてさう呼ばれたので、座敷の中で他所々々しい口を利いてゐた時とは違つた親しみを覺えて、「入らつしやいな」と招いた。そして、木蓮のはびこつてゐる隣家の中庭を見下ろしたりしながら、打解けた話に耽つて笑ひ聲をも立ててゐたが、その聲を聞きつけた附添の老女は、「たね子樣、階下へいらつしやいまし」と、階段の下から呼立てた。

島田は重くつて頭痛がするから、明日の里歸りには束髮に結つて行きたいと、花嫁は望んだが、老女は許さなかつた。明日の朝まつ子の出立の際には是非停車場まで見送つて行きたいといふ望みをも、老女は頑なに斥けた。花嫁さんは首尾よく里歸りを濟ますまでは一歩も外へ

出るものではない、氣儘にさういふことをさせては、自分が側に随いてゐる甲斐がないと云ふのであつた。

翌朝は雪がちらついてゐた。旅立には相應しい日ではなかつたが、高山夫妻は豫定通りに青木家に別れを告げた。何時ものやうに良三は停車場へ見送つて荷物の世話などをした。

汽車が出ると、高山は、平穏無事で終始した他家の婚禮の事などは念頭から遠ざけて、今後の自分の方針を考へたり、窓外の雪景色を眺めたりした。隧道を潜るにつれて雪は薄くなつて、武藏の平野へ下つた時には、柔かい光があまねく照つてゐた。吉祥寺中野あたりに、粗雜な家が建ちかゝつてゐるのが、住宅のない彼等の目を牽いた。

芝の實家は早速見ることは見たが、問題にするに足らなかつた。彼等は、駿河臺の旅館から赤坂の宿へ、部屋は薄汚くつても閑靜なのを取得にして移轉した。そして、四五日は市中の見物がてら、貸家を搜したり賣家の檢分をしたり、建築會社を訪ねたりした。面倒な思ひまでして家を持つには及ばないといふ腹があるので、住宅を求めるに熱心が足らなかつた。折角知人が知らせて呉れた二三の家をも、缺點を見つけては斥けた。まつ子にしても、汚い小さな不便な家を無理に求めてまで、東京住ひをする必要はないと考へるやうになつてゐた。

「あなたも洋行なさるのなら今のうちですね、あんまり歳を取過ぎたら行けなくなるでせう」

と、ある日、思詰めたやうに云つた。

「そりや行つてもいゝ。日本の内地を見て歩くよりや異つてていゝに違ひない」

高山はかねてボンヤリ心に描いてゐたことを眞面目に考へた。しかし、それにも煩しさばかりが目先にちらついて、熱心が加はつて來なかつた。歐洲人をも歐米の文化をも今は崇拜して居ない彼れは長い航海の苦痛を凌ぎ、言語の不自由を忍び、外人に媚び外人の生活と妥協するの煩ひに耐へることを、想像してゐると、自ら決心がひるんだ。歐米人に對等に親しく附合つて貰つたことを、この上もない光榮のやうに感じて、お茶に饗ばれたの、どういふ話があつたのと、自分が日本人以上になつたやうに誇りがに書いてゐる洋行者の記事文を讀むたびに、無自覺の標本のやうに感じてゐた彼れは、自分も洋行したら、あんな風になるのぢやないかと思ふと、可笑しかつた。

「自分が外國へ行つたからつて、えらくなる譯ぢやないが、異つた景色や異つた生活を見るのは面白いだらう。巴里や倫敦でなくつても、知らない土地なら何處だつていゝのだよ。おれは輕便に行ける方法があればペルシャか土耳古見たいな處へ行つて見たい。それも、一年とか二年とか云ふのでなしに、ゐられさへすりや一生でも住通す氣で行つて見たい」と、彼れはまつ子に向つて述懷した。

まつ子は高山の空想が若しも實現される場合には、自分の身の振り方をどうつけていゝかと迷つて、日夜思ひ煩ひだした。弟が結婚した後の實家へは最早安んじて身を寄せる譯に行かなかつた。女一人で東京の下宿屋に住む譯には行かなかつた。高山の故郷へも自分一人だけでは手頼つて行かれなかつた。東京で知人の家に寄寓するとしても、相應しい家が思當らなかつた。

宿の近くの山王臺の櫻が咲きかけた。K市の家族は花時には、用事をかねて東京へ遊びに來るのを毎年の例としてゐるのだが、今年はどうだらうと、まつ子は結婚後の實家の樣子を知りたさに、誰れかが出て來るのを心待ちにして、

誘ひの手紙を出したが、それと行違ひに、老主人から高山へ宛てた端書が屆いた。

「……御出立後拙宅にも種々の事あり候へども、ゆる／＼善後策を講じ居候」と、簡單に書かれてゐるのを見た高山は、ふと心に浮んだことがあつたが、不吉な臆測をするのを躊躇して、

「下女がゐなくなりでもしたのぢやないかな」と輕く見做した。そんなことぐらゐだらうと、まつ子も思つてゐた。

ところが、その次の郵便で、良三からまつ子に宛てた手紙が屆いたが、何氣なくそれを讀みかけたまつ子は、中途からおびえた顏して、一字一句を穴のあくほど見詰めた。

「お嫁さんは三ツ日に里歸りをしたつきり戻つて來ないんですつて」と云つて、重苦しい息を吐いた。

「どういふ譯で、……」高山は、縁談のはじまつてからの長い間の老主人の容易ならぬ心遣ひや、結婚前後の煩瑣な動搖を、親しく耳目に觸れてゐるために、世間に有りがちのこととして見過すことが出來なかつた。

「理由がハッキリ分らないから困ると、手紙に書いてあるのです。里歸りの晩には兩親も招かれて、大變御馳走になつて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして來たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寢たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるので、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も樣子を見に行つたのだけれど、良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。……多分駄目らしいつて良三が書いて來てゐますよ」

「一家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神經を痛めたのだらう。おみき（高山の妹）のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ驅込んで來て、上へ上らないうちから、聲を出して泣いて、一日寢て居たぢやないか。處女から人の妻になるのは一生の大事件なんだからね。……多分そのうちには收まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な支度をして寄越したものを輕率に引取るつてことはあるまい」

高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思ひを進めた。

「だけど、お父さんはどんなに心配してゐるでせう。何よりも先きに世間體を氣にしてゐる人が、世間體の惡い目に會つたのですもの。良三だつて、この結果が圓く行かなかつたら、人間が變つてしまひますよ」

今度の結婚は世間の注意を惹いてゐたために却つて始末が惡いと、二人は話合つてゐた。

引續いて葉書や手紙で情報が來た。どれも良三からまつ子に宛てたものばかりであつた。良三が例になく昂奮して筆を執つた有樣が文字の上に現はれてゐた。事件の經過は、高山が樂觀してゐるやうなものではないらしかつた。

―仲人を煩はしても要領を得ない。……當人は以前から病氣してゐるので、從來靜養をつとめてゐたのだが、結婚のためにまた氣分が惡くなつたやうだから、今後引續いて養生をさせたいと云つてゐる。……云ふことに腑に落ちない點があるから、此方から押して訪ねて行くと、先方の父親は、お宅へは申譯がないと云つて兩眼に淚をためてゐる。……結果は覺悟してゐるが、考へてゐると頭が痛んで來てならぬ。往來の人が變な目付で店の方を覗いて通るので、帳場へ坐つてゐると、曝し物になつてゐるやうだ

二人は良三の手紙の文句を種にして敷衍し

て、青木家の昨今の鬱陶しい狀態を互ひの心に描いてゐた。まつ子は慰めの手紙をなが〱と書いて良三へ贈つた。

「あまり立入り過ぎたことは書かない方がいゝぜ。からいふ問題で迂濶に差出たことを云ふと、後で怨まれることがないとも限らないから……男女關係になると、兄弟にだつて遠慮のない意見なぞしない方がいゝよ」と、高山は注意した。他に心を許して交つてゐる人のないまつ子は、良三とだけは何時までも、親しみを續けて、何か事があつた時には力になつて貰つた方がいゝと、高山は彼女のために思つてゐたのであつた。

「私が行つてお嫁さんに會つて、よく事情を訊いたらどうでせう。女同士だから、こちらの出樣によつちや、案外打解けた話をするかも知れませんよ」

まつ子は手紙の遣取りだけでは、痒いところへ手の屆かぬやうな牴牾しさを感じてゐた。そこへ、季節の變り目で、衣類を取りに行く必要もあつたので、急に思立つてK市へ出掛けることにした。

高山は電車の停留場まで一緒に行つた。まつ子に別れた後で、赤坂見附から三宅坂あたりまで散歩して、滿開の櫻を見て、宿の方へ歸りかけたが、ふと、見附の側で、橋田といふ知人に會つた。橋田は高山の故鄕の隣村の生れで、時々來訪してゐたので、高山の住宅についても氣をつけてゐたのであつた。

「今お訪ねしたのですよ。お家はまだ極らないのですか。……瀧の川に賣地があるんですが、一度見にお出でになりませんか。××建築會社の所有で、建築も便利な方法で引受けることになつてゐるのです」と云つて、橋田はポケットから圖面を出して説明した。

高山は氣乘りがしなかつたが、暇な折だつたから、遊びのつもりで見に行くことにして、橋田が案内に立つた。途中で故鄕の話が互ひの口から出た。

「さういへば、此間故鄕へ歸つた時に、私を乘せた俥夫があなたの噂をしてゐました。あのくらゐな人物になつても、東京で生活を立てるのは六ケ敷いと見えて、毎月お家から仕送りをしてゐるんだと云つてゐましたよ。まさか、さうぢやあるまいと私は云つときましたが、本當ですか」と、橋田は訊ねた。

「それは無根の事でもないよ。仕送りで生きてるつていふ譯ではないがね」と、高山は立入つた話は避けて、「昔僕の名前が出掛つた時分には、僕が月々二百圓づつ故鄕へ送つてゐるといふ噂があつたさうだよ。……この頃は僕の信用は故鄕の方ぢや形無しだらう」

「私も今度は、死んだ親爺の跡始末をして、持物は一切競賣にして來ましたが、これで私にはもう故鄕といふものがなくなつたやうなものです」

「せい〱していゝだらう。氣樂に食へる道さへありや、君のやうな一人ぼつちの寺住ひがいいのかも知れないね」

「しかし三度々々辨當飯を食つて生きてるのはあき〱しますよ」と云つて、橋田はふと思出したやうに、「財産が殖えれば殖えるで、それだけでは滿足出來ないと見えて、星野の銀助さんが東京へ學問しに來てるさうです」

「へえ、今から學問しようと云ふのかね」高山は奇異な感じに打たれた。星野は小學時代の彼れの同級生で、首席を占めた時が多かつた。さして學才があつたのでも學問が好きなのでもなく、一番になりたいために全力を盡してゐたので、一度その地位から落ちた時には、昂奮して首席の男を目の敵にしてゐた。小學卒業後間もなく結婚して、利殖の途に進んで、浮沈の多

かつた數十年を過して、最近では早くから買占めてゐた朝鮮の土地の價格が暴騰したために、百萬長者になつたと噂されてゐる。

「神田の法律學校へ入つてゐるんださうですが、住所は祕密にして、知人には誰れにも會はないんださうです」

「金が出來たから、代議士にでもなりたくなつたんぢやないかね。今の政黨は頻りに地方の金持を誘惑してゐるらしいから」

「さあ。……しかし銀助さんは甘い口にうつかり乘りさうな人ぢやありませんからね。……朝鮮なぞで土地を持つてると、いろんな面倒な法律問題が起つて來るらしいから、辯護士まかせにしとくのが不安心なので、自分で法律を心得て置かうと思つたのぢやないでせうか」

「成程、星野の性分から見て、あるひはさうかも知れないね。財産家になると、氣骨が折れるものだね」

二人は駒込橋で降りて、程近いところにある賣地を見た。二三軒新築が落成しかけてゐた。地所の賣買などにはまるで經驗のない高山は、ところどころに杭を打つて區切つてある地面を見てゐると、こんな土塊に莫大な價格があるといふのが不思議でならなかつた。そして、其處に居合せてゐた肥滿した會社員が、鼻聲でこの地所の價値の說明をするのを、空々しい受答へをして聞流してゐた。

「偶然の力で人間は左右されるんだね。僕の故鄕の家は、菜園や貸小屋や物干場なんかを合せると、持つてる地所が隨分廣い。邊鄙な土地だから、地代なんか無代價同樣らしいが、あれくらゐな地面を都會の近くに持つてゐたら、莫大なものだね。僕の親爺に手腕がなくつて、こゝの土地の地主が理財の手腕の優れてゐた譯ぢやない。偶然なんだよ」と云つて、彼れは莫大な價値を持つてゐるといふ空地の彼方此方を踏んで見た。

高山は橋田に別れて、獨りで上野へ出た。埃の立たない靜かな日だつたので、公園の花を見て、それから馴染の深い江戸川の花を久振りで見に行つた。電車が敷設されてからは其處は蕪雜な騷々しい處となつてゐた。

次手だつたから、中坂の尾越の家へ寄つて見たが、尾越は不在であつた。下女に向つて、奧樣はゐるのかと訊ねると、

「いらつしやいません。旦那樣お一人です」と下女は答へた。

「旦那樣は每日お勤めにでも行つてゐるのですか」

「いかゞですか。每日外へお出掛けにはなりますけれど」

高山は自分の今の住所を書置いた。尾越の細君が今まで歸つて來てゐないことが、彼れには不思議であつた。女の方で、尾越のやうな資産家の子息と輕々しく緣を切る筈はないだらうし、男の方でも、あのくらゐな容色のいゝ女とたやすく離別しよう筈はないと思はれてゐた。

彼れは銀座へ出て食事をして宿へ歸つたが、朝から動き通しに動いてゐたため、足が邪魔になるほどに疲れてゐた。身體が羸弱であるとはいへ、まだ五官が人並の役目をしてゐて、手足も自由に動いて、自分の始末は自分でして出來ないことがないのだからいゝやうなものの、もう幾年かしたら人手を煩はさなければ生きてゐられなくなるであらうが、われも人の如く、老衰するまでも餘生を貪つてゐる外はないのかと思ふと、心底に捕捉しがたい不安が感ぜられた。

彼れは自分で寢床を延べて、疲れてゐる足を伸した。

が、まだ本當の眠りに落ちないでゐるところへ、電話が掛つて來たので、寢衣のまゝで出て行つた。掛けたのは尾越で、近日下宿へ移轉する筈だから、お望みなら家を讓つてもいゝと云ふのであつた。

高山は即答しかねた。一兩日中に御返事すると答へて置いて、「相變らずおひとりなのですか」と訊くと、

「えゝさうです。ちよつと面倒なこともありましたが、當分一人でゐることにしました。元の下宿暮らしが私にはいゝやうですよ。四五日前から鍛冶橋の側の××會社へ出勤してゐるんです」と、尾越は快活な音聲で答へた。

その音聲は、斷じて胸に憐みをもつてゐる人の聲ではなかつた。歳が若くつて氣性も大人しさうなのに、あの綺麗な細君に未練を殘さないで離れることが出來たのかと、高山はいゝ氣持がした。人といふ人の殆んどすべてが（高山自身もあるひはその一人として）何事につけても執念臭いのを常としてゐる世の中に愛人との離別をさへ造作なくやつてゐる人が假りにも存在してゐると思ふのはいゝ氣持であつた。

一日花見をしただけで、翌朝からは、當分部屋に閉籠つて、机に向ふことにした。世人を喜ばせるやうな才料をも手腕をも持つてゐない彼れも、十數年筆の上の修練を積んで來てゐるために、書きかければ何とか辻褄を合せて相當な物が書けないことはなかつたが、心と筆とピッタリ合つたものの書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつたと云つていゝ。そして、自分の技術の不足も感ぜられたが、それよりも、文字によつて自分の心が存分に現はされるものであらうかと疑はれることが多かつた。

「あなたがもつと〳〵眞實のことをお書きになると、お作が面白く拜見出來るんですがね」と、批評家でない老夫人にある時云はれると、

「眞實の事を大切にするのなら、書かないのが一番いゝのかも知れません」と、彼れは答へた。

虛僞か眞實か、彼れは三四日の間、机の前に坐つて筆にのみ親しんで暮らした。そして住宅の事は忘れたやうに、尾越に對する返事さへ出さないでゐたが、すると、頭腦の倦怠した日暮頃に、ふと尾越の來訪に接した。部屋へ入つて來ると、尾越はあたりの薄暗くつて陰氣なのに驚いたやうであつた。高山は仕立卸しらしい新しい背廣を着けた珍らしい尾越の洋服姿に、意味ありげな目を注ぎながら、

「この頃は家内がゐませんから、まだ御返事をしなかつたのです」と言譯した。

「かういふ處でよく御勉强が出來ますね」と云つて、尾越は珍らしい物を見付けたやうに、机の上の書き物に目を注いだ。

「僕の仕事は何處にゐたつて捗取らないのですが、あなたの方はどうです？」

「二三日前から受持が極つて、正式に出勤してゐるんですが、生活が規則的になつて身體のためにもいゝやうです」

「さうでせうね。僕なども或る時間から時間までの間を、いやでも働かなければならんやうにした方が却つて自分のためにもいゝのぢやないかと思ふこともありますよ」と云つて高山は會社の仕事の有樣を訊ねて、「それで、あの石本とかいふ女の事はどうなりました？ いけない魂膽があつたのですか」

「大した企みはなかつたのでせう。あの金はちやんとワイフの手に渡つてるんですから」と云つて、尾越はあの話の續きを話すのが義務であるやうに話しだしたが、言葉に熱心は添はなかつた。

「あれから石本に會ひましたが、あの女は笑ひ事で濟まして、ワイフを私の家へ收めて元の通りしようと極めてかゝつてるんです。亭主の留

守に勝手に遊び歩くらゐは、私たちのこれまでの生活から云へば何でもないことなので、書置きまでして出たのも、一時の氣紛れに過ぎないと云へば云はれるので、私も世間の習慣を楯に取つていきり立つて爭ふ氣はなくなつてゐたのですが、この先何時までも彼奴と一しよにゐるのぢや、私の精神が死んでしまひさうに思はれますから、今が天の與へた時機だと思つて頑張つて見たのですよ。無論私がいくら頑張つて見たつても、ワイフがヅカ／＼歸つて來ようなら、私が負けてへこ垂れてしまふでせうが、彼奴意地つ張りな上に、私を離れたつて廢れ者になる女ぢやないですから。石本の手を經て私に掛つて來るばかりで、直接に私に打突かつて來ないから、私も助かつてゐるんです。……ワイフには親戚が二三人東京にあるんですが、そんな處へは寄りつかないで、石本の家に同居してるやうです。……特別に憎み合ふ事情があつた譯ぢやないから、會社の歸り途なんかには、ふつと會つて見ようかつて氣になることがありますが、見てゐて下さい、私がワイフに會つて愚圖々々で一しよになるやうだつたら、私といふ人間はそれでもうおしまひなのですから」

—だけど、一度細君を持つたことのある男が、獨身で下宿住ひなんかしてゐられるものでせうか」

「私は女が嫌ひになつて、一生女を絶たうと思つてるんぢやありませんよ。……それに、私のことだから、外の女にでも關係すると、ぢきにまた捲込まれるかも知れないんですがね」

臆面のない尾越の言葉に、高山は不快な反感を起した。細君の素性の卑しくないことや怜悧なことや、遊び事にかけても敏捷なことなどを、尾越は平然と話してゐたが、やがて、「御飯前なら、晩餐を附合つて下さいませんか。この頃は晩餐は大抵友人と一しよに食べることにしてゐるんです」と云つて、高山を誘ひ出した。

尾越は有名な飲食店の所在を可成りよく知つてゐた。そして、一二度來たことがあるといつて、お座敷天ぷらの出來る山王下のある家へ入つて行つた。料理の支度の出來る間に電話で、ある友人を呼び出して、明晩の會食の約束をした。

まつ子が、宿屋では思ふやうに出來ない汚れ物の洗濯をしたり、差迫つて入用な衣服を取出したりして、Ｋ市から歸つて來た時には、高山の取掛つてゐる机上の小さな仕事が終りに近づいてゐた。

「もう一日か二日でこれが片付くんだから、それまでは面倒な話は聞かないことにしよう」と云つて、彼れは筆の運びの妨げられるのを恐れた。神經の少しの動搖でも直ぐに筆の上に影響して、書きかけた物を引裂いたり反古にしたりすることが、たび／＼あつたが、彼れのさういふ癖がまつ子には可笑しかつた。そして、時々は、裂かれた物を貼合せたり棄てられた物を拾集めたりして机の上に載せとくこともあつた。そんな廢物も何時か高山の手で利用された。

「私も汽車で疲れて、話をするのも大儀だわ」と云つて、まつ子は横になつて休息したが、こんないゝ季節に、埃つぽい宿で徒らに日を過してゐるのが、腹立たしいほど詰らなく思はれた。

「あなたが早く方針を極めなければ、私の方針も極りませんよ」まつ子は焦躁の感じに堪へられなくつて口走つた。今度見て來た實家の內情よりも、自分たちの境涯が一層痛切に胸に迫つて來たのであつた。

「まあ、も少し待つてろ」

高山は、今の仕事が終りさへしたら、自分たちの身の處分について、いゝ考へが浮んで來さうに思はれてゐた。（自分が工夫して書いてゐる拵へ事から、却つて反射的に刺戟を受けて、鈍つてゐる心が磨かれて、自分の實生活についてもいゝ分別が出て來さうに思はれてゐた）

いよ〳〵筆を擱いて一息吐く間もなく、意外にも青木家の老主人が訪ねて來た。顏や態度には心の屈託が少しも現はれてゐなかつたので、高山もさしていた〳〵しい思ひをしないで、その後の經過を訊ねることが出來た。

「とに角親類廻りだけはさせて、祝つて呉れた家へも返禮をすましたから一安心です。身體が惡いと云ふのだから、先方の氣儘にさせて、當分養生をさせることにして置きました」と、老主人は答へた。

「しかし、急に身體が惡くなつたつていふのも變ですね」

「私の方でも、はじめのうちは先方の仕打がいかにも誠意がないと思つてゐましたが、先方の兩親の腹が多少分つて見ると、強いことは云へなくなりますよ」

機嫌よく實家へ行つた花嫁が、歸つて來るべき時に歸つて來ないので青木家の人々は寢耳に水のやうに驚いた。口ではあゝ云つてゐたものの、家の中が穢しくて舊式なのが、若い女の氣に入らなかつたのであらうと、老主人はかねて氣遣つてゐたことを思寄せて獨り極めにした。仲人が先方の意を通じて來るのも空々しかつたし、譯を糺しに良三を先方へやつても、當人には會はれなかつた。花嫁持參の華美な調度を絶えず見せつけられながら、親子で善後の方法を講じてゐるのは苦しかつたが、何かにつけて出入する親戚や知人に返答のしようのないのが何更苦しかつた。老主人はかつて經驗しなかつた世間の狹い思ひに惱まされなければならなかつた。

「いつそ、道具を一切送返した方が綺麗サッパリになつていゝかも知れないのだが」と、老主人は歎息してその氣になつたが、此處まで運んで來た結婚の道筋や、そのために消費した勞力や金の事を考へると、纏められるものなら平穩に收めたかつた。

「どうせいけないのなら、早く見切をつけた方がいゝぢやありませんか。長引かすだけ此方が馬鹿を見るんですからね」と、親戚の一人で冷靜な差出口を利くものもあつた。

鬱陶しい日が何日か續いた後、先方の父親が訪ねて來た時には、老主人もわれ知らず、昂奮した。

「あなたの仰有ることには誠意がない。仲人からいろ〳〵承つてはゐますが、どれがあなたの本心やら分らないのだから困るぢやありませんか。お預りしてる物を何時お引取りになつてもいゝやうに、私の方では覺悟はして居ります」

「誠意がないとお腹立ちになつても、私の方では一言も御座いません。自分の注意が行屆かなかつたことをお詫びする外はないのですが」と云つて、田村の老人は目を伏せたが、一二滴の雫が膝の上に落ちた。「しかし、青木さん、私は一人の娘を戯談に結婚させたのぢやないですから、私の心もお察しを願ひたい。長い目で見てゐて下さればお分りになることですが、此方との御縁に不平のあらう筈がないぢやありませんか」

「それでどうなさるおつもりなんです」老主人は相手の涙を見ると、強いことは云はれなかつた。

「何しろ身體が弱いのですから、閑靜な處へやつてみつしり養生させたいと思つてゐますのです。子供の持つてゐる壽命を見す〳〵縮めさせ

るのは、私も親として忍ばれませんので、申上げにくいことも申上げる次第なのです。世間體の惡いことも萬々承知しては居りますが、子供の壽命には替へられません」

田村の老人は、一二年前からの娘の健康狀態について話して、そのために此方との縁談を喜びながらも延ばし〳〵して來たことを打明けた。

さう云はれて見ると、老主人は誰れを相手に爭ふことも憤ることも出來なかつた。せめて重なる家へだけでも花嫁に顏出しして貰つて、あとは向ふまかせにする外に、執るべき手段はなかつた。

老主人の話振が概括的なので、高山はこまかい陰影を知ることは出來なかつた。かういふ場合の處置について意見を訊かれても、確信のある返辭をすることが出來なかつた。

老主人が用足しに出てゐる間に、まつ子は高山に向つて、

「私が行つてる時に、たね子さんは一度お父さんに連れられて話しに來ましたよ。その時良三に、お腹の中をよく打明けて話したのでせう。……そのまゝ落着くのかと思つたら、お父さんが急立てて連れて歸つたんですがね。金紗に櫻の花を散らした衣服を着て帶を高々と結んだ花嫁さんが、店員が差掛けた薄緑の派手な模樣のついた雨傘を持つて店先を出て行つた時には、誰れの目にも綺麗な花嫁さんに見えましたよ。良三には尙更さう思はれたのにちがひありませんよ。……だからこれからはお父さんの一存では行けなくなるでせう。良三も此間までの良三とは違ひますからね」

まつ子は田村の老人のやうな父親を有つた花嫁の心强さに思及んで、「世間體よりも娘の生命を大事にするんですもの」と、ある感じを籠めて云つた。

その夜、高山は老主人を誘つて、有樂座の名人會へ出掛けた。寺子屋を語つた呂昇の聲はまだ昔ながらの艷を有つてゐた。演藝には多少の興味をもつてゐる老人は、久振りで聽く名手の音曲に感歎しながらも、此間うちの心勞が出て來たやうに、屢々目を閉ぢては假睡の寢息を洩らした。一仕事終つた後で心の弛んでゐる高山も、呂昇の聲に誘はれて、をり〳〵首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。淨瑠璃の中の喜怒哀樂の聲々が、遠い浮世の騷ぎのやうに幽かに彼れの耳に響いた。そして、

"Anywhere, anywhere, out of the world"といつた誰れかの聲が、彼れの力のない心の底で聞かれた。

いろはおくりの半ば頃にふと目を開いた二人は、座を立つて歸りを急いだが、その夜は、古人が美しと見た朧月が春の都會の空を照らしてゐた。

宿へ歸つて、狹い部屋に二人が枕を並べて寢床に就く前に、

「私の家も當分二階がみんな空いて居りますから、御都合で何時でもいらつしやい」と、老主人は云つた。

生まざりしならば

牛島夫婦は、芝の家を出ると直ぐに、小田原へ電報を打つて置いて、銀座でビスケットや餡パンや牛肉の佃煮や甘栗や、それに繪本だの玩具だのをドッサリ買込んで、豫定の時刻に新橋から汽車に乘つた。四五日續いた餘寒のあとで、今日は急に春になつたやうに温かつたので、重ね着した肌は汗ばんで、スチームで温められた車室にぢつとしてゐるのが氣持が惡いくらゐであつた。おそではセルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。成るべく氣に留めないやうにと心掛けてゐるのに關はらず、汽車に乘るたびに、人々の風俗が目についてならないのであつたが、今日は土曜日で、箱根へでも行くらしい客と、丸髷に結つた藝者とが彼女の眞向ひに乘合せてゐたので、ことに無關心ではゐられなくなつた。さほどの容色ではないが、歳が若くつて身裝がいゝから美しく見られると思はれるにつけて、自分が浮世を棄てた氣で身じまひをかまはなくなつたことが顧みられた。いやに取澄ましてゐるその女の目が絶えず此方へ注がれてゐるらしいのが次第に煩さく思はれだした。「なんだい、鼻の下の長い豬つ面の、口の中の臭さうな男にねだつて、たまに遠出をするのに、金滿家の奥様にでもなつた氣でゐるから、チャンチャラ可笑しい」と、反抗的な氣持にさへなつた。

「から温かいと小田原は梅が咲いてるだらう」と、夫の長吉が窓外の春めいた景色を眺めて云つたが、おそでは返事をしなかつた。

横濱から乘つた客の中にも、藝者連れの一組がまじつてゐた。この方は大勢で、誰れも様子ぶらないで、惡巫山戯をし合つては騒ぎだした。おそでは眞向ひの藝者によつて、焦立たしい思ひをさせられてゐたのを忘れて、新たな客の騒ぎを見ては、自分もその仲間に加はつてゐるやうな思ひをして笑つた。停車場で買つたサンドキッチや蜜柑なども、駄洒落を言ひ合つていろいろに戯れながら食べてゐるのを見ると、いかにも旨さうに思はれた。男の一人が甘納豆を手玉に取つて、口を空へ向けてその一粒々々を巧みに受けては自慢すると、他の男も藝者どももその眞似をした。若い藝者が紙撚をつくつてそつと男の襟に插むのを見ると、おそでは自分たちが昔してゐた惡戯を思出して可笑しくなつた。一人の男が緣起結びにした紙を老妓に貰つて、それを額に載せて顏を仰向けにして、額の紙を鼻の下まで辷り落して、突出した脣で受留めると、他の男も女も熱心にその藝當を眞似た。老いたる顏の長い男は、目をパチクリさせて紙を辷らせながら、「おれは長つ面だから前途遼遠だ」と云ふと、おそでもみんなと一しよに聲を出して笑つた。

「馬鹿なことをしてる」と、長吉は小聲で云つて、年甲斐もない老人の所行を苦々しく思つてゐたが、

「あんな人、氣さくでいゝぢやないの」と、おそでは云つた。この頃は次第に氣六かしくなつて來た夫も、昔はあんな馬鹿遊びをして日を暮らしたこともあつたのだと、昔を懷かしがつてゐたが、

「俊一は停車場へ迎へに來てるだらうか」と、夫が話掛けると、周圍の騒ぎは他所事となつてしまつて、心は俊一の上にのみ集まつた。

「氣分が惡くさへ なければ 迎へに出てゐます

さ。上田さんにもこの前さう云つてあるんだから、樂みにして出掛けてるでせうよ。あの子の氣が向いたら明日は自動車で箱根へ遊びに行かうぢやありませんか。あの綺麗な湖水を一度見せてやりたいと思つてゐますの。嘸喜びますよ。湖水なんてまだ見たことないんでせうから」

「お前は時々妙なことを云ふね」と、長吉は柔和な切れの長い目に微笑を浮べて、「俊一が湖水を見たことがあるかないか、誰れよりもお前が一番よく知つてる筈ぢやないか」

「本當にさうでしたわね。上田さんが私たちに祕密で俊一を箱根なんぞへ連れて行きやしまいし、外にあの子をかまつて呉れる者はないんですから」と、おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの羸弱い一人子の手頼りになるものは一人も半人もないことを、今更のやうに思ひ詰めながら、「でも、私、時々はかう思ふんですよ。……あなたは笑ひなさるかも知れないけれど。……俊一は私たちが氣がつかない間に、いろ〳〵な變つた事を見たり聞いたりしてゐるんぢやないかと思はれるんです。あの子は突拍子もないことを云ふつて、あなたは笑ひなさるけれど、俊一にはさういふことを云ふ譯があるのかも知れませんよ。私たちに分らないからつて、一概に笑つて濟ましちやいけないでせう。……上田さんの不斷の事だつて、なか〳〵よく知つてゐるんですもの。學校へ行けないから、讀書は十分に出來ないけど、智慧は人一倍にあるんです。あなたは小さいものだと、誰れでも見くびつていらつしやるからいけないの」

「智慧はどうでもいゝから、身體がもつと丈夫になつて呉れゝばいゝんだがね」

「それは、身體だつて丈夫になりますさ。身體がよくならないのなら、なんであの子一人を小田原なんぞへ打ちやらかして置けるものですか。五年しか壽命のない子は、何處にゐても五年しか生きられないと極つたなら、私は一日だつて、あの子を私の側から手放しすりやしませんよ」

「それはおれだつてさうさ」

長吉も今日は、今までに例のないほどに俊一の身の上を案じてゐて、それに關聯した自分たち夫婦の將來についてもおそでよりはもつと深刻に思ひ惱んでゐたので、默つて獨りで考へてゐるのは堪へがたかつたが、俊一の事に深入りした話を觸れると、今日はおそでが人前をも憚らないで、非常識なことを云つたり、泣聲をしたりする恐れがあるので、蟲を殺して彼女に逆はないやうにして、わざとニコ〳〵したりしてゐた。

おそでは例の藝者連れの一組の方へまた目を注いだ。そちらでは魔法罎やポケットウヰスキーが取出されて、酒盛をはじめられてゐた。

さつき泣きだしさうにしてゐたのに、もうあんなものを面白がつて見てゐると、長吉は妻の氣まぐれを淺間しく思つたが、その方が昨夕のやうな狂態を見せられるよりは無事でよかつた。小田原通ひも既に一年あまりになるのであつたが、彼れは今度ほど暗い氣持で汽車に乘つたことはなかつた。部屋借りなぞして俊一に不自由な思ひをさせるのが痛々しさに、無理な工面をして、小さいながらも去年の夏に別莊を建ててからは、月に二三度夫婦連れで俊一を見舞に行くのは何よりもの樂みになつてゐて、「あの子のためにならどんな苦勞でも厭はない。衣服なぞどんな流行おくれの物を着てゐてもいい。たとひ借金に責められても、あの子だけは出來る限りの贅澤をさせてやりたい」と、夫婦は心を一つにして話合つてゐたくらゐであつたが、今日は別莊を建てたことをも長吉は後悔してゐた。自分が死んだあとまで俊一が生殘

つてゐたなら、どんなに悲慘であらうかと思ふと身の毛も彌立つやうで、いつそ今のうちに、自分たちに看護されながら穩かな往生を遂げて呉れればいゝと、かつて思ひもそめなかつたことを望んだりしてゐた。

國府津あたりまで來ると、俊一が出迎へに來てゐるかどうかと、二人は頻りに氣にしだした。が、小田原へ着いて見ると、看護婦の上田も來てゐなかつた。

「今日は加減が惡いのかしら」と、おそでは心淋しくなつた。

「電報がおくれたのかも知れないね」と、長吉は氣休めを云つた。雜沓してゐる電車に乘るよりも今日は歩いて行かうと云つて、土産物を兩手に提げて停車場を出た。そして、電車には乘れない俊一が、歩くか、俥に乘るかして此方へ來かゝつてはゐないかと、それを待設けながら向うへ目をつけてゐた。

おそでは藝者連れの一組を乘せた自動車が、自分の側を威勢よく行過ぎるのを見送りながら、ちよつと眉を顰めた。

「あなたもたまには、あんな風に陽氣に遊びたいと思ひなさらない？」

「そんなことを思つたつて爲様がないぢやないか。いつになつても餘分な金は出來やしないのに」

「お金のあるなしに關はらないでさ。あなたは全くあゝいふ氣持になれなくなつたのかしら。人間の性分も歳を取ると變つちまふことがあるんですかね」

「おれは別段性質が變つたやうにも思はれないがな。變つたのは顏付ぐらゐなものだ」

「顏の變つたのは私ですよ。女は若くなくちや駄目ね。私たちの前にゐた丸髷に結つてた藝者は若いから艷があつて綺麗だつたわね。あなただつて始終横目を使つて見てゐたぢやないの」

「何だ、馬鹿な。前にゐる女を見るのに横目を使つてどうするんだい」

長吉は苦笑した。彼れは若い時分の不身持のむくいで、生れながらに病毒を宿してゐる俊一を生んだことを、この頃は果しなく悔いるとともに、さういふ因果な子を自分のために生んだ田舍藝者の小千代に對して、やゝもすると憎惡の念を抱くやうにさへなつてゐたが、小千代ばかりではない、藝者といふすべての藝者を詛ふやうな氣持にさへなつてゐた。藝者の出る宴會をば成るべく避けるやうにして、たまにさういふ處へ行つても不快な感じに苦しむのを例としてゐるほどで、さつきも、汽車の中でいろんな藝者連れの客と乘合せて、自分の愚な昔を見せられるやうなのに惱んでゐたのであつた。

おそでは、夫が若い美しい女を見ても、以前のやうに心を動かさなくなつたらしいのが、本當だとして、喜ぶよりも、男としての衰へとしてむしろ物足らなく思ふのであつたが、さうして氣取つて上べだけ裝つてゐるのだと思はれて小憎らしかつた。

「でもあの藝者はちよつといゝ女ね。あなただつてさう思ふでせう。高慢ちきなところがあるからいやだけど、騷いでた藝者とはまるで人柄がちがふぢやないの」

「それはさうだ……」長吉は、おそでが何時になつても、藝者といふ者を女の中の花でもあるやうに思極めてゐるのを卑んだが、自分が骨の髓までも藝者ぎらひになつてゐることは、おそでの痛い處に觸れる譯なのだから決して口へは出さなかつた。

「あのくらゐの藝者を自分のものにして大威張で旦那顏をしようとするには大抵ぢやないわね」

—それはさうだ—

—あなたは四十にはまだ大分間があるのに、お爺さんじみちやつたんですね。男は陽氣たことが好きなやうでなくつちや出世しないのぢやないでせうか」

「お前は時々は陽氣になつてはしやぎだすから仕合せだよ、尤も昨夕のやうに陽氣になり過ぎて取組合ひをやつたりしちや困るけれどな」と、良吉が笑ふと、おそでも笑つて、

—あの時は私の蟲の居所が悪かつたの。およねの奴もいやに突掛つて來るんですもの。……それは昨夕のやうな見つともない姉妹喧嘩なぞ止した方がいゝんですけれどね。でも、私時々は陽氣な遊びをしたいと思ふことがあるんだから、今夜は俊一の處で、皆なで何か賑かなことをして遊ばうぢやありませんか、俊一だつて喜ぶでせうよ」

—それもいゝだらう。だが、俊一の喜びさうな遊びは何だらう?　あの子が心から嬉しさうな顔するのを、おれは一度でも見たいと思つてるんだけれど、駄目だな—

「さう思ふのはあなたの氣のせゐなのよ。俊一の身體はいくら不自由だつても、他人が面白いと思つてることはあの子にも面白いんです。嬉しくつてたまらないつていふやうにニコ〳〵してることがあるのに、あなたは感じないんですかね。あなたよりも私の方が俊一の氣持をよく知つてるんですよ」

ブラ〳〵歩いてゐるうちに、土産物の重みで手がだるくなつた。電車の線路を横切つて狹い道を濱の方へ進むと、松葉杖をついた俊一の後姿がふと二人の目に映つた。

—俊ちやん—と、おそではあたりを憚らず、大きな聲で呼掛けた。

まん丸い顔した看護婦の上田が、足を留めて振返つて會釋すると、俊一も重い足を留めてニヤリと笑つた。

—今病院へ行つて來ましたのよ—と、上田は夫婦の近づくのを待つて云つて、一しよに家の方へ向つた。

—今日は元氣がよさゝうね。血色もいくらかよくなつたし—と、おそではいつも會ふたびに云ふやうなことを云つて俊一に寄添つて、鼻の尖つた目のドンヨリした瘦せた顔を覗いて見ながら、彼れの身體中を舐盡したいやうな情火に燃えてゐた。彼れの腰のまはりには、骨膜炎のために蜂の巣のやうに穴があいてゐて、そこには、一日として醫者の手當てを怠つてはゐられないほどに多量の膿が流れるのであつたが、おそでは出來るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせてゐるさういふ膿を、自分の脣で吸取つてやりたかつた。

夫婦は俊一を中に挾んで何か話しながらトボトボと歩いた。

僅かに三室しかない小さな別莊で、間に合せの安普請なのだが、蒲弱な子供を本位として造られてゐて、風通しも日當りもよかつた。寢臺を据付けて、そこから寢ながらガラス越しに庭や松林が見えるやうになつてゐた。庭には小さな池がつくられて、夏は金魚などを飼つたり水遊びが出來るやうになつてゐた。庭木戸から出ると、海は直ぐ近くなので、波の音はよく聞えて來たが、俊一は毎日の病院通ひ以外には、戸外へ出ることを好まなかつた。退屈な思ひをしてゐる看護婦が、自分が遊びに行きたいために、屢々俊一を唆かすので、彼れは子供心にも斷つてばかりゐては惡いやうな氣がして、三度に一度は誘ひに應じてゐたが、自分から進んで、活動寫眞を見たいとも海を見たいとも言ひ出したことはなかつた。庭にブランコが備へつ

けられてあつたが、それは近所の子供に利用されるか、時としては、看護婦と近所にゐる若い學生との遊び道具に用ひられるばかりであつた。彼れは寢臺に横はつてゐない時には、日當りのいゝ障子の側に、火箸のやうに細い、青白い足を投出して、冬になつても殘つてゐる蠅の動くのを見たり、木立の多い隣の庭へ朝から晩まで來ては鳴いてゐるいろ／＼な小鳥の聲を聞いたりした。あるひは繪本を見ることもあつた。看護婦がをり／＼聽かせて呉れる昔噺や怪談や人情話にも耳を傾けた。學校へは一度も行つたことのない彼れも、いつとなしに文字を習ひたくなつて、此方へ來てからは、看護婦が新聞や雜誌などによつて教へて呉れる文字を熱心に覺えようとした。

　ある時、彼れは母親が送つてくれた子供の雜誌を開けて見てゐるうちに、「ねてゐてころんだためしはない」といふ文句を、自分ひとりで讀み得たのが嬉しくつて、屢々それを口に出した。

「うまいことを云つてるわね。全くその通りだわ。俊ちやんのやうに何もしないで、家の中で寢てばかりゐるのが、間違ひがなくつていゝんですね」と云つて、看護婦は欠伸凌ぎに小唄を唄ふのと同じ調子で「ねてゐてころんだ」を繰返した。をり／＼遊びに來る分松葉の抱への三子にも「俊ちやんの名言」として吹聽した。

　上田にでも三子にでもをり／＼揶揄はれるのが、腰部の痛みと同じやうに俊一の心に痛く響くのであつた。彼れは聲を揚げて泣くことはなかつたが、どうかすると、うな垂れて萎れてゐることがあつた。ふと癇癪を起して繪本を破つたり玩具を壞したりすることもあつたが、元氣な子供のやうにあばれだす力はないのだし、顏付も薄弱に出來てゐるのだから、その癇癪も傍の者を驚かすには足らなかつた。

　今日は日が温かかつたし、醫者の手當てを受けたあとだつたので、俊一の機嫌もよかつた。土產の玩具のうちでは、天狗の面を喜んで、それを自分の寢臺のそばに懸けた。「買つた時にはこんなものは仕樣があるまいと思つたのだが、かうやつて見ると、成るほど面白いね。しかしお前は夜こんなものを見ても怖くはならないか」と、長吉が訊くと、

「怖いものか。僕はこんな眞赤い顏が好きだ」と、俊一は答へた。

「へえ、お前は赤いものが好きなの？　はじめて聞いたわね」と、おそでは俊一の好みの一つをはじめて發見したやうに喜んだ。

　彼女は東京の家にゐる時とはちがつて、此方では、氣持よく臺所働きをして、新しい魚を材料に二三品の料理を注意して拵へて、四人で食卓を圍んだ。銚子もつけて、彼女自身も久振りで猪口を手にした。酒をうまいとは思はないのだが、昔自棄飲みをした癖が殘つてゐるので、飲むとなると隨分飲めた。「お母さんの顏はあの天狗樣のやうになつたらう。女が眞ツ赤い顏しちや見つともないけれどね」と云つたりして、醉ふほどに飲んだ。長吉も不斷より快く餘分に飲んで、上田にも勸めて、無理强に二三杯猪口を重ねさせた。たゞ一人青白い顏してゐる俊一は、みんなの顏が紅味を帶びて來るのを不思議に思ひながら見廻してゐた。

「此間うちは寒う御座いましたから俊ちやんは何處へもいらつしやらなかつたのです」と云つて、上田は公園の梅が咲きかけたといふ噂を傳へた。

「ぢや、明日はみんなで梅見にでも出掛けませうね」と、おそでは調子づいて云つたが、するとふと片足の短い俊一の松葉杖突いた姿に衆人の意地悪い目が注がれる有樣が思出されたので、人目の多い處へ遊びに出掛ける興味は薄

らいでしまつた。親子だけで、人通りの少い淋しい濱邊か野良の方を選んで散歩したかつた。それよりも今夜のやうに家中に閉籠つて、傍に氣兼ねしないで遊んでゐる方が却つてましなのかも知れないと思はれたりした。

「俊一は今何處か行つて見たいと思つてる處があるの？　公園へは行きたいの？　箱根の山へでも登つて見たかあないの？」と訊くと、俊一は首を振つた。

「僕は船に乘つて見たいた。櫓が押せるといゝんだけれど、僕は駄目だらうな」

「だつて海は危いぢやないの。この邊の海は荒いから船がひつくり返つたら助かりやしないよ。お前は船に乘つたことがないから、珍らしいもののやうに思ふんだね。それなら、もつと身體がよくなつてから汽船に乘せて上げようよ。みんなで房州へでも行きませう　。ねえ、お父さん」と云つて、おそでは、長吉が悲しさうな眼付で俊一を見詰めてゐるのを顧みて、「この頃、お父さんはお酒を召上ると、却つて沈んぢやつていけない、今夜は羽目を外して賑かに遊ばうつて、あなたも約束しなすつたぢやないの。俊一の氣に入りさうな遊びつて何だらうね」と云つて、看護婦の方へ向いて、「上田さんは、いろ〳〵な流行唄を知つてらつしやるから、唄つて聞かせて頂戴ね。私なぞ、忌いこと、寄席へも淺草へも行つたことがないから、當節の唄は些とも知らないのよ。いつだつたか、雨がショボ〳〵降つてゐた日に、あなたは井戸端で洗物しながら唄つてらしつたわね。雨は降る降る城ケ島の磯にって。聲がいゝから、私聞惚れてゐたんですよ。私など喉が干涸びちやつて駄目なんだけど、あなたは稽古したことがないし、歳も若いから、聲もいゝんですね」

「唄でも何でも、上田さんに隱し藝があるんだから、一つやつて貰ひたいもんだね」長吉はいくら醉つても、今夜は妻子の顏を見るにつけて起つて來る鬱陶しい思ひを、掻散らさうとして、お世辭でなしにさう云つた。

「私は無藝大食だから駄目ですわ。奥さんのを一度聽かせて頂きたいつて、三子さんによくさう云つてゐるんですよ」

「私は何をしてもカラッ下手なの。若い時分には逆立歩きはちよつと上手だつたのだけど、この歳でそんな眞似は出來ないわね」

おそではふと興に乘つて、汽車で見た瓢軽な道化の眞似をした。紙捻をつくつて額に載せて、仰向けた平顏をゆすぶり〳〵唇のところまで辷らせて、「うまく行つたわね。あなたもやつて御覽なさい」と左右を見た。俊一は面白がつてニヤリと笑つたが、長吉は何を馬鹿なと云つたやうな苦笑ひした。

「サア、やつて御覽なさい」と、おそでが上田の額へ紙捻を押付けると、上田は半ばお義理に眞似て見たが、自分で笑つてばかりゐて熱心が足らなかつたので、二三度やり直しても、いつも鼻のところから横へ落ちた。同じ平顏でも、艶のある頬の肉を微動させながら、紅い下唇を突出して、接吻をでも待受けてゐるやうな上田の動作は、長吉の目についた。俊一は上田のしくじりを更に面白がつて笑つた。

「サア、あなたもやつて御覽なさいな。俊一が面白がつてるぢやありませんか」

おそでは夫にも迫つた。長吉は妻や看護婦の頬で撫でられ、唇で濡らされた紙捻を額に載せて、同じやうに道化た眞似をした。俊一はます〳〵面白さうに、聲を立てて笑つたが、「お前もやつて御覽」と母親に勸められると、いやだと首を振つて後退した。

「極りが悪いの？　だつて、此處にはお父さんとお母さんとみんなお前の好きな人ばかりゐるのぢやないの。遠慮することはありやしないよ。

どんた惡戯をしてもいゝんだよ。思ひ切り暴れて御覽なさい。誰れも叱りやしないから。……お母さんは俊ちやんと一しよに暴れてもいゝんです」
「お前に暴れられちや堪らないね」と、長吉は戯談らしく云つたが、心の中では本當にさう思つてゐた。喜怒哀樂の昂進した時のおそでの暴動の物狂ほしさを、彼れは危かしがつてゐたのであつた。「俊一はお父さんの髪を梳いてお吳れ。以前は髪梳きが好きだつたのに、この頃はいやになつたのかい」と云つて、綺麗に分けてある自分の長い髪をわざと手で搔亂して、頭を前へ突出したが、俊一は母親の渡した櫛を手に取ることさへしなかつた。
「床屋さんはもう廢業したのね。お父さんの髪の毛は長くつて煩さいから、鋏でチョキ〳〵と切つて上げればいゝのに。俊ちやんが切るのなら、お父さんだつて怒んなさりやしないよ」とおそでは、不斷看護婦が繃帶や膏藥など切るのに用ひてゐた剪刀を引寄せて、自分で毛を切る眞似をして見せた。
「そいつは御免だ」と、長吉が頭を引込めると、
「いゝぢやないの。俊ちやんの慰みに切らせておやんなさい」と云つて、おそでは俊一を嗾しかけた。
「切らせたきやお前の髪でも切らせるさ」
「よ御座んすとも。罪ほろぼしにいつか切らうと思つてたこともあるんだから」
「俊一はお父さんやお母さんの髪を切つたつても、首を斬つたつても、幸福にも樂みにもなりやしないね。サアお父さんのところへお出で。長吉繪本を讀んで聞かせてやらう」と云つて、危險な剪刀は妻の手から取つて、後の方へやつて、俊一を招いたが、俊一は萎れた顏して大儀さうにして、坐つた處を動かなかつた。
夫婦が戯れるにしても爭ふにしても、上田は傍で見てゐるのを快しとしないで、湯に行くと云つて出支度をした。
「どうせ明日はお風呂を立てさせるよ」とおそでは云つたが、上田は買物をして來ると云つて外へ出た。
「あの人はよく辛抱して吳れるけれど、他人は他人だから、やはり氣が置けていけない。親子三人でかうして暮らしてゐられたら、私迷はないでゐるんだけど、駄目ねえ」と、おそでは眞面目になつて歎息した。
「だからお前が思切つて此方に居つくことにしたらいゝぢやないか。おれは下宿住ひでも我慢すると云つてるんだから。さうすれば看護婦の高い給金だけでも助かるんだから、お前の收入がなくなつても、どうにかやつて行けんことはないだらう」と、長吉も眞面目に云つた。
「そりや、私にだつて、繃帶の掛け方ぐらゐは分らないことないから、看護婦まかせにして置くよりは、私が終始側についてゐた方が、俊一の身體のためにもいゝに違ひないんです。だけど、私は一錢の稼ぎも出來なくなつてあなたの收入ばかりを當てにするやうになつちや、心細いんですもの。あなただつて下宿生活を平氣だなんて今こそ云つていらつしやるけど、長くは辛抱が出來やしませんよ」
「なに、おれは辛抱して見せるよ。それにおれ一人だつたら、一週に二度ぐらゐは此方へ泊りに來られるだらう」
「私を俊一の側へつけといて、あなたは東京で一人で暮らしてた方がいゝと思つていらつしやるの？　此間からの話の樣子ではどうもさうらしいわね」
おそでは、一刻も俊一を離れてはゐられないと思詰めるたびに、自分の職業などは拋出して小田原に定住する氣になるのであつたが、

自分の目の届かなくなつたあとの夫の身持が疑はれるので、さうも極めかねた。近年夫はどんな女とも關係ひをつけてはゐないらしいけれど、機會さへあつたら誰れにでも手を出しさうな様子が見えてゐるのだから、少しでも油斷は出來やしないと、彼女の猜疑の目は、留守番と臺所の手傳ひのために同居してゐる妹のおよねの上にさへ及んでゐた。

「お前が此方へ來たいのなら、さうしようと云つたまでぢやないか」と、長吉は話を外さうとしたが、おそではこの頃の癖で、いやにこだはつて來だした。

「俊ちやん、お父さんはね、お前やお母さんを何時棄てて、他所へ行つちまふかも知れないんだよ。だけど、心配しないでおいで。お母さんは大丈夫、俊ちやんを離れやしないよ。どんなに貧乏しても、二人で仲よく暮らしませうね」

おそではさう云つて、俊一を抱締めて頬擦りしたが、俊一が悲しさうな顔すると、彼女も涙を落して、夫に棄てられたあとの母子の境涯を想像しては悲みに沈つた。

「下らないことを云ふものぢやないよ」長吉は妻のいやみな泣つ面を見ると、酒の醉ひも醒めるやうに感じながら、「俊一は此方へおいで。お父さんが面白いお話を聞かせて上げようね」と、兩手を差延べて、俊一の細つこい身體をぐつと引寄せようとしたが、おそでは、取られまいとしてます〳〵抱き締めるので、俊一は出抜けに「いたいよ〳〵」と叫んで泣き出した。そして驚いた二人が手を離すと、彼れは力もなく横に倒れた。

やがて俊一が機嫌を直したころには、さつき嶮しくなりかゝつてゐた夫婦の心も和いで、二人は火鉢を圍んで、甘栗など食べながら罪氣のない笑ひ話に耽つた。昨日は何をたべたか一昨日は何をたべたか、この頃は夜よく眠られるかといふやうなことを、おそでは俊一に訊ねたが、上田が側にゐないのを幸ひに、彼女の日常の行爲をも彼れから訊かうとした。

「上田さんは笠間さんと箱根へ行く約束をしとつたよ」と、俊一は先日耳に留めたことを話した。

「××にゐる書生さんとかい……。今度の人は親切でよく辛抱して呉れると思つてゐたけれど、ぢや、あの人もそろ〳〵いや氣がさして來たのだね」

「上田と笠間といふ人との仲が怪しいのかい」と、長吉は横から口を出した。

「それは極まつてゐますさ。私は大分前から感づいてゐたんです。そんなことはどうでもいゝんだけど、あの人が行つちまふと、また代りを探さなければならないから、苦になるんです」

「どうでもいゝつてことはないよ。お前は何とも思つてゐないやうだけれど、若い男と女とが巫山戯た話なぞしてゐるのを俊一に聞かせるのはよくないよ」

「それは構はないぢやないの。この前の人もああだつたし、どうせ若い人を頼めば、そのくらゐなことは大目に見てゐなきや駄目ですよ。看護婦が色男をこしらへたからつて、あたしが嫉妬やかなくつてもいゝのよ」おそではツケツケ夫をやつつけて、俊一には柔しく、「それで笠間さんはこの頃は毎日やつて來るの？」

「時々遊びに來るの。縁側へ腰を掛けて話をするんだけど、僕は側へ行かんやうにしてるんだ。昨日はお菓子を持つて來て、僕にもたべろつて云つたけれどね、僕行かなかつたの」

「なぜ？　笠間さんは活潑ないゝ人ぢやないの」

「でも、僕はあの人好きぢやないよ」

「笠間さんがお前の氣に入らないことを云つたのかい。お前は何でもよく〳〵分るからね」

　俊一は自分の病氣について侮辱的な言葉を笠間が云つたことをよく覺えてゐたが、それを兩親の前に打明けては惡いやうな氣がしたので默つてゐた。
「俊ちゃんは此頃も上田さんは好きなのだらう。あの人のすることで氣に入らないことがあつて？　かういふところがいけないと思つてることがあるのなら隱さないでお母さんに仰有いよ」
「そんなことない」
「お前は上田さんが好きなのね。この前の人よりも」
　俊一が首肯くのを見て、長吉が、
「ぢや、少々給料を増してもいゝから、もつとゐて貰ふやうにするんだな」と云ふと、
「六十圓だつて特別なんですもの。この上出してたまるものですか」と、おそでは、はじめ高い謝禮を出澁つた夫が、無造作にさう云ふのを怪しんだ。
「でも、俊一の氣に入つてるのなら、少々の金は惜まないで、引留めといたらいゝぢやないか」
「それはさうだけど、お金さへ出しやゐてくれるとは限らないわ」おそではさう云つて、置時計を見て、「俊ちゃんはもう寝んねしなきゃならないでせう。今夜はお母さんが寝かして上げようね」と、俊一に寝支度をさせて、十歳にもなる男の子としては痩せ過ぎる身體を横抱きにして、寝臺の上へ運んだ。柔かい夜具をふはりと掛けてやつて、おとなしく目を閉ぢた俊一の細そりした顔を暫らく見下ろした。
　言葉が止切れると、東京とはちがつた周圍の寂しさが二人の心にしみ入つた。長吉は食卓の上に頰杖を突いて煙草を吸ひながら、寝臺の方へ目をやつてゐたが、おそでの身體が邪魔になつて、俊一の寝姿は見られなかつた。都會の濁つた空氣の中にゐては健康が長く保たれないといふ醫師の注意によつて、一人子をこの海岸に住はせることになつたのも、今になつて見れば、一時の氣休めに過ぎなかつたことが分るにつけて、自分たち親子三人の身は暗い圍に鎖されてゐるやうに思はれてならなかつた。そして、近年夫婦が、こんな不具な兒を生んだ罪亡ぼしのために心を合せてゐたのが、昨今はお互ひの心に隙間が出來て來たので、大切な一人子の始末が長吉には言ひやうのない煩ひになつて來た。
―俊一さへ生まれてゐなかつたら、こんな愚な女とはとつくの昔に離れてゐる。三十を過ぎたばかりで生氣を失つて末枯れた顔や肉體をしてゐるやうな女を、男盛りの自分が、後生大事に守つてゐるにはあたらなかつたのだ。それも俊一が人並に健かになる望みがあるのなら、それだけを樂みにして、外の事には目を瞑つてゐてもいゝのだが、どうせ望みはないに極まつてゐると思ふと、いろんな苦勞に堪へる張合ひがなかつた。
　彼れは寝臺の側に立つてゐるおそでの後姿を見ながら、せめて彼女を此方に定住させて、自分一人東京で氣儘な下宿生活をするやうにでもなつたらと望んでゐた。上田が俊一の氣に入つてゐるのなら、おそではどうならうとも、さういふ女に俊一の短い一生の介抱を頼むことにしたらいゝと、おそでの亡くなつたあとを空想したりした。そんなことを空想するにつれて、若い學生と上田との關係が不快に感ぜられだした。
「俊一はもう寝つきましたよ」と、おそでが火鉢の側へ戻つて坐つたところへ、看護婦も歸つて來た。湯上りで一層艶々してゐる上田の若い顔は、今度は不思議に長吉の目を惹いた。
―あなたも毎晩淋しいでせうね。波の音ばかり

聞えて」と、おそでが云ふと、

「さうでも御座いませんわ。この頃は私もスッカリ小田原に馴れたんですね」と、上田は爽かな聲で應へて、「今三子さんに會ひましたのよ。出拔けに後から私の目を塞へてお酒臭い息を吹き掛けるから、私吃驚しました。あの人は氣さくでいつも面白さうですのね。明日は此方へお伺ひすると云つてました」

長吉は、妻が若い藝者など相手にして、得意になつて自分の昔を語つたりするのを好まなかつたが、でも、三子の快活な氣質、太り肉の健かな若い身體に對しては不快な感じを寄せる譯に行かなかつた。

翌日もあたゝかい日であつた。俊一は誰れよりも早く目をさまして、雨戸の隙間から差して來る朝の光で天狗の面を見たり、窓際へ來て鳴いてゐる小鳥の聲を聞いたりしてゐたが、昨夕は不斷よりもよく疲れたために何が嬉しいともなく、ひとりで微笑まれた。先日上田さんが笠間さんに、「あの子はいくら手を掛けたつてどうせ駄目なんです。一度風邪を引いても、それでおしまひなんです。何も知らないんだから可哀さうですよ」と小聲で云つてゐたのを、自分のことを話してゐるのだと、俊一は耳に留めてゐて、今もその言葉を思出したが、その言葉は少しも彼れを悲しませはしなかつた。父や母が傍にゐて呉れるのは何よりも嬉しくつて、時々來て呉れるのが待たれてはゐたが自分が兩親に隨いて東京へ歸りたいとも思つてゐなかつた。

炊事でも洗濯でも、すべての雜用を足して呉れる農家の主婦が、臺所口から聲を掛けると、おそでは目を醒まして、「今日は朝からお風呂を立てますから水を汲んで下さいね」と、寢床から云つた。

東京のゴミ〳〵した處で働いてゐる夫妻は、雨戸を開けて田舍の朝の空氣に觸れると、日頃の疲れが拭はれてしまふほどの快さを覺えた。長吉は朝餐の支度の出來る間濱邊を散歩することにした。日はよく照つて風もないので、沙の上に蹲んで大海を見渡してゐたが、すると、そこへ笠間がやつて來て、顏を見合せると、先方から挨拶した。

「お散歩ですか」と云つて、相手の顏をよく見ると、以前と違つて血色がよくなつて頰に肉もついてゐるので、「大變お丈夫になりましたね」と云ふと、

「えゝ、身體はスッカリよくなりました。月が變つて溫かになつたら、此方を引上げようと思つてゐます」と、笠間は元氣よく云つて、目禮して行過ぎた。

「俊奴、おそでや上田にはよくお喋舌してゐるくせに、おれを嫌たがつてあんまり話をしたがらない」

長吉はさう思ひながら、笠間の方を見やつてゐたが、健かになつて東京へ歸つて行く笠間の幸福を思ふにつけて俊一の事が新にいたましく胸に迫つて來た。そして、同じ人間の形を具へて生れて來ながら、俊一のみが悲慘な生存を續けねばならないのを、考へれば考へるほど諦めかねた。

で、家へ歸つて、

「笠間さんは肺病が根治したのだらうか。見たとこは、大變達者さうになつてるね」と、誰れに云ふともなく云ふと、

「海岸でお會ひになつて？」と、上田は訊ねて、「あの方はこの頃は、病氣しない前よりも強くなつたから寒い日にでも海岸を運動していらつしやるんですつて」と、手拭を姉樣かぶりにして、障子に掃塵をかけながら云つた。

「難病が癒つたあとは格別に悦しいものでせうね。肺病のやうな病氣でも養生次第で完全に癒るんですかね」

「あの方も一時は絶望していらしつたんですつて。だから、これからは生命びろひをした氣で勉強するのだと云つていらつしやるんですよ」

笠間の生國や通つてゐた學校について、二人が訊ねたり答へたりしてゐる間、おそでは側にゐたから口出しないで浮かない顔をしてゐたので、長吉が氣にして、言葉を掛けると、

「さつき上田さんのお手傳ひをして、俊一の繃帶を取替へたのですけどね。それはひどくなつてるの……」と、おそでは萎れて云つたが、その顔は不斷よりも一層婆さん染みてゐた。「以前よりももつとひどいんです。五つも六つもの穴がべつたり膿でふさがつてゐて、ガーゼを通すと、穴の中は横の方まで空虚になつてゐて、此方からあつちへガーゼが通るんですもの。まるで田舍のお竈見たいに、口は別々になつてても、奥は一しよに穴が開いてるんぢやありませんか。あなたも一度よく見ておやんなさい」

「それはおれも醫者からよく聞いてゐるよ」

長吉は、今更云はなくつてもいゝことを妻が口に出すのを苦々しく思ひながら顔を顰めた。

「聞いただけでは駄目ですよ。病氣の本元をよく見たければ―」

「おれは醫者ぢやないし、見たつて爲方がないぢやないか―」

「顔だけ見てると、俊一も次第に丈夫さうになつてゐるから、あなたは平氣でゐられるんです―」

さう云つて夫の冷淡を攻めだしたおそでも、平生は俊一の患部を熟視することを恐れて、看護婦の手傳ひをする時でも、成るべく目を外らすやうにしてゐたのであつたが、今朝は、事によつたら今後自分一人で病兒の世話をしなければならぬと覺悟して、勇氣を出して、日々の手當ての仕方を看護婦に教はつた。そして、地獄をのぞいたやうな戰慄を覺えたのであつた。

掃除を濟まして、不斷は亂雜になつてゐる家の中を綺麗に取片付けて、四人揃つて遲い朝餐の膳に向つたが、夫妻は氣持よく食物を味ふことが出來なかつた。風呂が沸くと、長吉が入つたあとで、おそでは俊一の身體を拭つてやつて、障りのない處を丹念に磨いてやつた。手の指先や手首などを、石鹼や垢磨を用ひていぢり廻してゐると、俊一はおとなしく、愛撫に依つて受ける快感を樂んでゐるやうにニコついた。

湯の温かみで彼れの青い皮膚にも、人間らしい艶が出て、頬にも紅味が差した。

「俊ちやんの身體にはこれだけの元氣があるんだから、いゝ空氣を吸つておいしい物をたべて養生してみれば、次第に丈夫になるんですよ。さう心配することないの」と云つて、おそでは急にまた希望を回復して、自分の心を慰めた。

夫婦が案じてゐたやうに、看護婦が暇を與れよと申出はしなかつたし、隣家の主婦の給金や家の費用も滯りなく支拂ふことが出來たし、子供を相手に一日遊び暮らして、夜の汽車で二人一しよに歸りさへすれば、例の通りなのであつたが、午過ぎに留守居のおよねから、盜難に會つたといふ意外な電報が來たので、二人は吃驚して顔の色を變へた。

「戸締りをよくしなかつたんだらう。家を空けて遊びに出てゐたのかも知れない」と、おそでは妹の不注意を憤つて、側にゐたら毆りつけてでもやりたいやうに昂奮したが、衣類持物のすべてを盜まれてしまつたやうな氣がするとともにドンヨリした萎れた兩眼に涙が浮んだ。

「大切な物をみんな盜まれてしまつたら、これからどうするんですよ。今日が日から着のみ着のまゝで路頭に迷はなきやならないぢやありま

せんか」

「さう慌てなくってもいゝよ……しかし、電報が來たのだから直ぐ歸らなきやなるまいな」長吉は努めて落着いて云つたが、この頃自分の心の内や外に微見えかゝつてゐた悪運のおとづれが、この電報を最初として續々起つて來るのではないかと恐ろしく感じた。

「なに、家ぢう探したつて碌な物はないんですよ」と、強ひて笑ひを浮べて、看護婦の慰問に答へて、おそでを促して歸支度に取掛つた。いくら急いだつて、汽車の中で二時間あまりもぢつとしてゐなければならないと思ふと、二人はもどかしくてならなかつた。

「お母さんは四五日したらまた來ますからね。上田さんの云ふことをよく聞いて、おとなしくしていらつしやいよ」と、おそでは俊一に別れを告げたが、俊一はいつもの通りで、ちよつと寂しい顏をしたばかりで、さして別れづらい樣子を見せなかつた。

「俊ちやんをお賴みしますよ」

「ぢや、お大事に」

上田は、戸口でいつもの通りの挨拶を取りかはして、二人がアタフタと出て行くのを見送つたあとで、家の中へ戻つたが、急報の話を聞かされたために、病兒と自分との二人生活が俄かに心細く思はれだした。

「俊ちやん、あなた怖かない？　東京のお家のやうに此處へ泥棒が入つたら困るわね」と云ふと、

「さうしたら何でも持つて行かせればいゝでせう」と、俊一は事もなげに云つた。

「泥棒つて、たゞ物を取つて行くばかりぢやないのよ」

「ぢや、どうするの？」

「刃物で斬つたり突いたりするかも知れないの。刃物を振廻されたりしたら、あなただつて怖いでせう。私今夜から此處で寢るのが怖くなつてよ」

「ぢや、あなたも東京へ歸つちまふの？」

「歸りたくつても、あなたを一人此處へ打ちやらかしといて歸りやしないわ」上田は、ふとこの病兒を不憫に思つてさう云つて、「俊ちやんはこの頃は東京へ歸りたかないですか。たまにはお母さんに隨いて歸んなさればいゝのに」

「歸りたい時にはいつでもさう云つてやればお母さんが迎へに來て吳れるんだからいゝ」

「お母さんが大事なひとり息子を田舍へ打ちやらかして置くのも不思議だけれど、あなたが孤兒見たいにこんな處に一人ぽつちにされて、さう淋しいとも思はないのは私、不思議でならないわ。親子の仲はそんな筈ないと思ふんだけど。……」

さう云はれると、俊一も母親の懷かしい思ひが胸に迫つて來たが、口へは出さなかつた。そして、自分で寢臺の方へ行つて横になつた。仰向けに寢たまゝ目をパッチリ開けて、低い天井を見ながら、窓外の物音に耳を留めてゐたが、其處では近所の子供が喧しい聲を立てて遊んでゐた。俊一には言葉がよく聞き取れなかつたが、時々は煩さく感ぜられる子供等の騷ぎも、今日は心の慰みとなつた。彼れは障子を開けて、彼等の活潑な擧動を見下したりした。四人も五人もの子供が、向ひの危かしい石垣の上に登つて、互ひに他を突き落さうとし合つてゐた。拍子を取つて勢よく飛下りる者もあつたが、飛びおりて平氣で地上に立つのが、俊一の目には不思議なこととして映つた。彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを不思議がつた。さういふ騷ぎの間に、小鳥が隣の樹木から自由に此方へ飛んで來るのを、彼れの目は見のがさなかつた。

俊一が外へ心を惹かれてゐる間に、上田は

縁側で日向ぼつこをしながら、朝のうち讀みそこなつた新聞を讀んでゐたが、そこへ三子が湯屋の歸り途に立寄つた。髪をハイカラに結つてゐて、面長な引締つた顔立も、中流の奥様らしいがベタ／＼したやうな歩きつ振りが、どうしても田舍の藝者か酌婦見たいで本性をあらはしてゐた。

「あの人は顔ばつかりお上品らしくしようとしてゐるけど、胴から下がだらしがない」と、おそでが上田に云つたことがあつた。

上田はいゝ話相手として迎へて、夫婦が例よりも早目に歸京した譯を話した。姉さんには是非聞いて貰ひたいことがあつたのに惜いことをしたへと、三子は大袈裟に云つて、

「此方の御別莊へ、有りつたけのお金をつぎ込んで、簞笥の中も金庫の中も空つぽだなんて云つてたけれど、泥棒に取られるやうな物が有るんですかね」と、冷かすやうな口調で云つたが、「でも、お氣の毒ね。たまに俊ちやんに會ひに來なすつたのに」と、同情した表情をして、寢臺の方を覗いて、「俊ちやん、寢ていらつしやるの？」と聲を掛けた。

俊一は振返つて微笑したが、直ぐに寢床に横はつて、二人の方から顔を背向けた。「あなたのお母さんはあなたの生まれる前には三子さんのやうだつたのよ」と、かねて上田から聞かされてゐたのだが、彼れはそのために却つて三子に親しみがなくなつてゐた。

「私この頃思ひ餘つてることがあつて、姉さんの智慧を借りたいと思つてゐたのよ。姉さんがゐないから上田さんに聞いて頂からかしら」三子は馴々しくさう云つて、温まつてゐた肌の冷たくなるのをふと氣遣つて、障子を締めて火鉢の側へ寄つて「かういふ家にゐて、氣儘に寢たり起きたりしてゐたらいゝでせうね」と、何かを考へてゐるやうな目をしてあたりを見廻してゐた。

「淋しくつて爲樣がないわ。それに大切な病人を預かつてるんだから油斷は出來ないんですもの。私さつきから考へてゐたのよ。俊ちやんの身體に極まりがついたら、私の白衣生活もおしまひにしようと思つてゐたのですけれど、それまで待つてゐられさうでないの」

「でも、もう少しの間でせうから、勤めてお上げなさいな。あなたならこそ、牛島さんも安心して俊ちやんを任せてゐられるのよ」

これまでにもをり／＼話合つてゐたやうに、おそでが病兒を打ちやつて置いて、夫の側に喰付いてゐるのを二人で非難して、口では何と云つてゐても、子供よりは御亭主の方が大切なのであらうかと、さういふ實感を持つてゐない二人は、いろ／＼に當推量をし合つたが、話がそつちへ外れて、いやに眞面目になりだすと、三子は最初話しかけた話を進めるのが後日たくなつた。

「此方の主婦さんは嫉妬深いのね。今度なぞ側で見てるといやになるんですよ」と、上田が云つたので、

「それは燒餅やきですとも。だから、私牛島さんには成るべく口を利かないやうにしてゐるのよ。あなたも氣をつけてらつしやい。詰らない疑ひを受けちやいけないから」と、三子は應へて、「でも、上田さん、何よ」と調子づいて、「男でも女でも、あんまり燒かなさ過ぎるのも張合ひのないものよ。私の知つてる人の奥さんは、御主人が何をしてゐても、本當に平氣でゐるらしいの」

「ケーさんて方でせう。主婦さんに聞いてよく知つてますわよ」

「ケーさんでもコーさんでもいゝから、上田さん親身で聞いて下さいね。……私、その人に月に三度ともしみ／″＼會やしないのよ。一年の餘

も喧嘩一つしないで照降なしに續いて來てゐるのだけど、その人のお腹の中が、私にはどうもよく呑込めないの。私の身をどうして吳れるんですよと、改まって一つ訊けばいゝのだけど、それを口に出すのが怖いやうで、何時會っても云はれないのよ。……私は前から氣をつけてゐたから、大した借金は殘ってゐないのでせう。年末にも、濱の××屋だの此處の××からいろいろな反物を持って見せに來るし、家の姉さんが傍から勸めるし、私も去年ので間に合はせるのは氣が利かないから、浮かり手を出しかけたの。下着も欲しい、長襦袢も欲しい、帶も欲しい、今年は山繭が流行ってるなんて、私だって、お正月には切立ての新しい物を身體につけたいには極まってゐまつさ。だけどこゝが大事な所だと、私は考へちゃったの。まだ二年や三年稼がうと思へば稼げなかないし、ちっとやそっとの借金でこの先が暗くなるってことはないのだけど、若しもあの人に心から私の身を引取って吳れる氣があるのなら、私の方でも今のうちにその覺悟をして、あの人に成るべく餘計な迷惑を掛けないやうにしなきゃならないと思って衣服のことなんぞ目を瞑って我慢したのよ。御覽なさい。私は指環さへ一つ持ってゐないのぢゃないの。私だって以前は負けること嫌ひな見榮坊だったから、頭のものだって、手足につけるものだって、何處へ出ても恥かしくない物を、一身上持ってゐたのだけど、ある事のために、さういふものはみんな無くしたのです。……年末にあの人に會った時に、お前はお正月の支度は出來たかと訊かれたから、そんなものはどうでもいゝんですと、負惜みを云ふと、さうかって、それっきりだったの。見榮坊の私が物はよくっても去年のお古を着てまがひ珊瑚の簪なんぞ差して、見榮も外聞もかまはないで、お座敷へ出てゐるのは誰れのためだか何のためだか、あの人はよく知ってるくせに、とゞの詰りの肝心なことを私の前で言ひ出さないのだから、私じれったくて仕樣がない。先方でも私の方から言ひ出すのを待ってるのかも知れないけど、私どうしても思切って口には出せないのよ。家の事情でお前の一生を見てやる望みはないから、これまでの緣だと思ってくれと云はれはしないかと、詰らないことが氣になってならないの」三子はふと聲に力を入れて、「全體あの人の奥さんが燒餅をやかないからいけないんだわ。騷いでくれゝば、いゝか惡いか、どちらかにキッパリ道がつくのだけれど、奥さんがおとなしいから、張合ひがないったらない」と云って、「上田さん、あなたはどうお思ひになって？」

「私には分らないわ」上田は相手の手放しの惚氣を座興として聞いてゐたのであったが、ふと自分の胸に思ひ當るところがあった。「それで、その方があなたの一生を見てやると仰有ったらあなたはすぐにも今の稼業をお止めになるの？」

「さうよ。私今が丁度廢業にいゝ汐時だと思ってゐるの。看板の空いたのがあるからって、私の氣を引いて見る人もあるけれど、私氣乘りがしないの」

「あなたの稼業は傍で思ふほど面白かないんですかね」

「私別段稼業をいやだって思やしないんですけどね。でも、好き好んで藝者なぞになるものぢゃないわね。あなた方の御商賣の方が偉いのよ」

「さうでもありませんよ。私もはじめは白衣生活にあこがれてゐたのですけれど、內輪に入って見るといやなことばかりなのですよ」上田はかねて見聞してゐる內輪のいやな事を話さうとしたが、相手に蔑視まれるのが氣になったの

で、話を轉じて、「ケーさんとかはいくつにおなりなさるの？」

「牛島さんよりも一つか二つ上なんですよ。もう御爺さん」

「さう」

「變に思つていらつしやるのね。でも、男で本當に手頼りになるのは四十くらゐな人なのよ。あなたは二十代の若い方がお好きなんでせう」

三子は平氣でさう云つたが、上田はドギマギして返事をしないで目を伏せた。笠間のことを三子に知られてゐるのではないかと思ふと、顔が火照つて來て、向ひ合つてゐるのが堪へられなくなつた。

「俊ちやんは私たちの話を聞いてゐたのね」と、三子は目をパッチリ開けて此方を見詰めてゐる俊一の方を顧みて云つたので、上田はそれを幸ひに

「俊ちやんはお醫者さんへ行かなきやなりませんね」と云つて座を立つた。

上田は三子よりは却つて三つ四つ年上であつたが、色戀についての經驗や知識は三子に及ばないと思つてゐたので、をり〳〵此處へ來ておそでや自分に向つて、無遠慮にしやべり立てる彼女の話をいつも好奇心をもつて面白く聽いてゐたのであつた。今日は三子が歸つたあとで俊一を連れて病院へ往來する間に、三子の云つたことを思出してゐると、笠間に對する自分の氣持がそれによく似てゐるのぢやないかと思はれだした。お互ひに心の中で思ひ合つてゐても、どちらかが口へ出して云はないかぎりは、煮え切らない日がいつまでもつゞくのだと、上田は笠間と自分との仲をさういふことに極めてしまつた。「でも、あの女はケーさんに一生を見て貰へるか貰へないかが分らないだけで、一年の餘も關係は續いてゐるのだけれど、そこへ行くと、私たちの間は綺麗なものだ」と、自分の肉體の潔白を誇る氣にもなつたが、それをひそかに誇つたあとでは直ぐに、三子などのやうに自由に自分の肉體をあつかひ得られる境涯の人々の羨ましさが力強く胸にわき立つた。今までに二三度誘惑を斥けて自分の潔白を守つて來たことも、おそでなどに向つて口でこそ自慢げに吹聽したものの、眞實は幸福を取逃した口惜しさが感ぜられてゐた。……そして、今差當つて自分をかまつて呉れさうな男は、笠間の外には無いのに、その笠間も月が變つたら東京へ歸つてしまふのだと思ふと、上田は悒々としてゐられない氣がした。

夜になると、平生の夜にまして淋しかつた。退屈まぎれに、俊一に童話を一つ二つ讀んで聞かせたが、氣乘りがしなかつたので、いつものやうな親切な説明は附加へないで、書物を押やつた。どうせ笠間は、近所の噂を憚つて夜は遊びに來ないに極つてゐる、誰れか話應へのある人が訪ねて呉れゝばいゝと、頻りと心待ちにされた。三子などは今時分、唄つたり喋舌つたり、いろんな男に巫山戲られたりしてゐるのであらうと想像すると妬ましくなつた。いくらか報酬がよくつて氣樂であるために、病兒を相手に浮々と幾ケ月も過したことが後悔された。

「泥棒が來たらどうしようね、俊ちやん」と、默つてばかりゐるのが堪へられなくなつて、獨言でも云ふ氣で、ふと話をしかけたが俊一が返事をしないので、「泥棒だつて、あなたをどうもしないだらうけれど、私はひどい目に會はされるかも知れないから、氣味が惡いわ。笠間さんにでも泊つて貰ふといゝんだけれどね」

「さうしたらいゝでせう。僕、笠間さんが來たつて構やしないよ」

「あの人は本當にいゝ人よ。あなたはさう思はない？」

俊一はあの人は嫌ひだと云ひかねて、ニヤリと笑つただけであつたが、上田は獨言を續ける氣で、

「私笠間さんがこの家へ毎晩泊りに來てくれるといゝと思ふのよ。あの人だつてあんな汚らしい貸間に一人ぽつちで寢てるよりや、此處へ泊りに來た方がいゝにちがひないのだけど、世の中は面倒くさいものね。俊ちやんも身體が丈夫でもつと歳を取つたら、乾度好きな女の人が出來るに違ひないわ。あなたは今どんな女の人がいゝと思つてゐて？　三子さんのやうな人？　私のやうな人？」などと云ひながら、俊一の側へ寄つて、自分の顔を押出して見せたが、俊一は返事はしないで微笑してゐた。三子や上田の若い艶のいゝ顔は、母親の顔とはちがつた味ひをもつて、彼れにも感ぜられてゐたのであつた。

「あなたはお父さんに似て、顔立は惡かないのよ。病氣のために血色が惡いから何だけれど、本當はいゝ男なの。鼻筋が通つて面長でちよつと品がいゝのね。鼻の恰好が笠間さんにも似てゐるのね」

上田はさう云つて俊一の鼻を抓んでいぢくつて、彼れが後退すると抱きかゝへて頬ぺたをおつつけた。「私の鼻はあなたのとはちがつてペタンコでせう」と、俊一の手を執つて強ひて彼女の鼻をいぢらせた。毎日大小便の世話までしてゐるので、俊一の肉體のどこに觸れるのも珍らしいことではないし、いつも臭氣のある汚い肉塊のやうに彼れを見做してゐたのだつたが、今夜はかつて感じなかつた快感が感じられた。……空想の昂奮した今夜の彼女は鼻ばかりではなくつて、俊一の肉體のどこをでも笠間の肉體であるやうに夢見た。俊一自身も、彼女のくどい愛撫を避けるやうに身體を動かしながらも、彼女に手放されたくない氣持になつてゐた。

「さあお休みなさい」と、やがて、上田は俊一を寢臺の上へそつと置いた。そして、火鉢の上で滾つてゐた鐵瓶の湯を金盥にうつして、脣を拭ひ手を洗ひ、戸締りに氣をつけて寢床に就いた。

今度牛島夫妻が來たら、何とか口實をつくつて暇を貰ふことにしようと、略極めて、上田は四五日の間ウハ／＼して過した。その間に一二度笠間が緣側へ立寄つてくれたのだが、折惡く、隣の主婦が庭の垣際に來てゐたので、通り一ぺんの笑ひ話を取りかはしただけであつた。

「今月一杯でいよ／＼此方をお立ちになるの？」と訊くと、

「えゝ、もういつでも立てるやうに準備が出來てるんです。僕のために送別會でもやつて呉れませんか」と、笠間は云つた。

「こんな土地にでも永くいらしつたんだから、いよ／＼お別れとなると、思ひ殘ることもあるでせうね」

「そりやあるかも知れませんね」

「私も少し事情が出來て近々に東京へ歸ることになるかも知れないんです」

「ぢや、僕と一しよに歸つちやどうです」

「御迷惑ぢやなくつて？」

それから互ひに揶揄ふやうな口を利き合つたのであつたが、上田はあとでの思出に、笠間の心の底がまだ見極められないので牴牾しかつた。牴牾しさのあまりに、あたりが靜まつて、隣の主婦も來てゐない夜には、病兒を側へ引寄せては、惜氣もなく、若い女の熱の籠つたキッスを、病兒の肉體のあちらこちらへ與へた。か

うして、病兒が笊間と化してそこに寢てゐると思ふと、泥棒の恐怖も自ら忘られた。
「×時の汽車で行く」といふ牛島夫妻の電報を見ると、上田は四五日以來の事を考へて、稍後目たい氣持がした。早速鏡に向つて粉飾をして、俊一の顏をもよく洗つてやつて、時刻が來ると、外出をいやがる俊一を宥め賺して、停車場へ連れて行つた。途中で、「お母さんにいろんなお喋舌しちやいけませんよ。よ御座んすか」と、いく度も言ひ聞かせたが、そのたびに、俊一は首肯いた。
　窓から顏を出してプラットホームを見てゐた牛島夫妻は、汽車を下りると直ぐに、俊一のそばへ寄つて行つたが、彼れの顏が、この前よりも著しく窶れて色が青褪めて、目元や口端に漏らした笑ひさへ凄いやうなのに驚いた。二人はこもごも上田に訊糺したが、上田は、
「別段お惡いつてことないんです」と云つて、「暫らく家にばかりいらしつたのに、久振りで此處までお歩きになつたのでお疲れなすつたのでせう」
「ぢや、お迎へに來て貰はなきやよかつたのにね」と云つて、おそでは俊一を衆人の目から庇ひながら停車場を出て、俥を連ねて家へ行つた。
　いつものやうに土產は多かつたが、俊一は嬉しい顏もしなかつた。
「先日あんな風に慌てて歸つたから、氣になつて、今度は早く樣子を見に來たのよ」と云つておそでは、上田の問ひに應じて盜難の話をした。……盜まれた物は二三點の衣類に過ぎなかつたので、留守居のおよねの身にも怪我はなかつたのだから、夫妻は歸つて見て安心したのだけれど、およねが恐れて、この後の留守居番を堅く斷つたのに困つた。で、いつそのこと、これを機會に、おそではある商店への通勤をよして、芝の家を片付けて、小田原に定住することにして、長吉は下宿住ひをしようかと、夫妻の間に話が略纏まりかけてゐるのであつた。
「さうなつたら俊ちやんのためにもよろしいんですね」と、上田が云ふと、
「盜難も、弱い子供を打遣らかしといた天罰かも知れないのね。以後氣をつけろつて、何處かの神樣か佛樣かが泥棒になつて私たちを戒めて下すつたのかも知れませんよ」と、おそでは此間から殊勝らしく感じてゐたことを云つた。
　盜難を神佛のお諭しのやうにまで、おそでが祭上げるのは、長吉には可笑しかつたが、それを緣に生活變更の覺悟を妻がしだしたのは、彼れの思ふ壺に嵌つた譯なので、何よりも嬉しかつた。それで、妻のその覺悟を弛めさせないやうにと、此間から自分も眞顏で盜難をあがめ奉つてゐた。
「お前が俊一の看護に一心になつてゐてくれれば、おれも安心して一生懸命に働かれるよ」と、屢々云つて、母親の愛情によつて子供の難病のよくなることを空想するとともに、彼自身の自由な生活の道が久振りで新に開かれるのを空想してゐた。今來て見ると、俊一は意外に衰へてゐたが、上田はこれまでよりも艷かしいやうに、彼れには思はれた。
　其後の病兒の食事や睡眠などについて、夫妻は上田に訊糺して、變りはないと聞いて一時安心はしたが、俊一が例になく不機嫌に振舞つて、取つてやつた土產の西洋菓子を疊の上へ拋出したりするのを見ると、それが病氣の重くなつた爲ではないかと疑はれた。「氣持が惡いのかい」と、左右から訊ねたが、俊一は返事をしなかつた。
　で、不斷のやうな陽氣な遊びやお喋舌は自ら遠慮されて、しめやかな夜を過した。上田自身の希望でもあり、おそでも覺悟してゐたので、看護婦解雇の打合せもされた。

「私だつて二三日身を入れて上田さんに教はつたら、俊ちやんの看護や手當てが、間違ひなしに出來ないことはありません。長い間人まかせにしていゝ氣になつてゐたのがいけなかつたのです」と、おそでは決心を强めて云つた。そしてその夜は病兒の眠りを守るやうに、寢臺の直ぐ側へ自分の寢床をのべた。

俊一は寢支度をしてゐる上田の方を見やつて、彼女が昨夜や一昨日の夜とはちがつて、きつい顏をしてゐるのを不思議に思つた。留守中の上田の所行ををり〳〵母親に向つて打明けてゐる彼れも、先日來の彼女の不思議な所行は誰れにも云つてはならないやうな氣がしてゐたが、上田が東京へ歸りさうな話をさつき傍で聞いてからは、彼女に別れることが何となく悲しくつて、母親が代りに來てくれることもさして悅しくは思はれなかつた。それに上田が笠間と一しよに歸るらしいことを考へると、不斷から何となく好きでなかつた笠間が憎らしくさへ思はれ出した。

「俊ちやんは眠れないの？」眞夜中にふと目を醒ましたおそでが、電氣を點けて、寢臺を覗いて云ふと、俊一は目を瞑つて夜具の中へ顏を引込めた。

「氣分が惡かないの？　背が痛かないの？」

「どこも痛かないよ」と、俊一は力を入れて答へた。

「それだといゝけれど、夜中にでも氣持が惡かつたら、お母さんを起しなさいよ」

「ハイ」

俊一はキッパリ答へたが、母親が電氣を消して寢床に就くと、再び目を開いて闇の中を見詰めた。遊び友達と云つては一人ももたないで育つて來た彼れは、この土地へ來てから知合ひになつた隣の主婦やその子供や、三子や笠間や、病院の醫師や看護婦などの言語動作を耳目に觸れて、わづかに世の中を知つてゐたのであつたが、みんなが彼れを、「死にかゝつてゐる人間」「可哀さうな人間」として取扱つたり噂をしたりしてゐるのを、彼れはつねに胸に留めてゐて、自分は足が惡くつて外の人のやうに飛んだり跳ねたりが出來ないのに、夢の中では屢々外の人にもまさつて飛べもし驅けられもされるのを不思議に思つてゐた。そして、闇の中で目を開けてゐると、誰れかが寢臺の上へやつて來て、自分を捉へて何處か遠い處へ連れて行きはしないかと思はれて、多少恐ろしかつたが、連れられて行つて見たい氣もした。兩親には平生離れてゐるし、隣の主婦や三子や醫師など、彼れの世の中のすべての人々の言語動作に懷かしみも親しみも寄せられないでゐる彼れは、知らない誰れかに連れられて、遠い處へ行つても構ふことはないと、ひとりで覺悟を極めてゐた。むしろさうなることを待設けることさへあつた。今夜は闇の中で目を開けてゐると、ことにさう思はれた。……波の音は不斷よりも强く響いて來た。風が吹いて雨戸が音をたてた。今にも誰れかが寢臺の側の窓の戸を開けて入つて來さうな氣がして、俊一は顏をそつちへ向けたが、そのまゝで知らず〳〵淺い眠りに落ちた……再び目が醒めた時には、音のしてゐた雨戸の隙間は明るくなつてゐて、自分が同じ處に寢てゐるのを、彼れは知つた。

寒い風が吹いて日差しも鈍かつたので、夫妻は朝から火鉢に親しんで、內輪の暮らし向きの話に耽つて、外へ出ようとはしなかつたが、正午過ぎに三子の訪ねて來る前觸れがあると、長吉は彼女に會ふことを嫌つて、一人で寒さを冒して公園の梅を見に出掛けた。

おそでは三子の此間の話を上田から聞かされてゐたが、今日はさういふ浮ついた他人の事に關はり合つて笑ひ興ずる氣にはなれなかつた。

で、「姉さん」と三子が威勢のいゝ聲で呼び掛けて入つて來ても、いつものやうに調子を合せて迎へはしなかつた。盜難の事や夫婦別居の事など一通り話が運んだあとで、三子は、

「姉さんが小田原へ越していらつしやれば、私は相談相手が出來て心强くなるわね」と、喜んで、「それで、牛島さんは一週に一度づつくらゐ此方へ泊りにいらつしやるの？」

「えゝ、さう、……毎日一しよにゐて喧嘩ばかりしてるよりや、その方が二人のためにもいいんですよ」

「姉さんも變つたわね」

「變つたつて？　何が變つたのさ。私が何年經つても亭主一人を後生大事に守つて、一日だつて放さないやうにしてるつて、あなた達は笑つたことがあつたわね」

「……でも姉さんは可愛い俊ちやんのために、旦那樣と別々に暮らさうといふのだから、結構なことだけれど、私を御覽なさいな。あの人に奥さんがあるために、いつまでも一しよになれないで愚圖々々してるぢやありませんか」三子は忌々しさうに云つた。

「……私は本當の事は知らないけど、話にだけ聞いてゐると、あなたは全く愚圖々々ね、成つちやゐないわよ。早くどちらかに極めたらいゝぢやないの？　あなたに腕があるのなら、ケーさんとかをうまく抱き込んで、奥さまでも何さまでも、さつさと追拂出させるやうにしたらいいぢやないの？　どうせ藝者稼業をしてゐるのに、お上品ぶつて、世間の人に遠慮や斟酌をするには當らないのさ」おそでは自分の昔を顧みて、三子のやうな場合を想像しながら、ふと昂奮して云つた。

「だけど、あの人のお腹の中が私には分らないんですもの」三子は甘えた口調で、「それは私を可愛がつて呉れるのですけど、私の一生の手頼りになつて呉れるのだか呉れないのだか、それがハッキリ分らないの。姉さんだつたらあのくらゐな年輩の男の人の心がよく分るでせうけど、私には見當がつかないのよ」

「歳を取つた男はずるいからね。家の人だつてさうですよ。……三ちやんはケーさんにお金の迷惑も掛けないやうにして慾も得も棄ててかゝつてるのに、その實意が先方へ通じなくつちや馬鹿らしいぢやないの？　いゝ加減あなたを釣つといて、いざとなつたら背中を向けようつていふ腹なのかも知れないよ。當てにしないで用心しなきやいけないね」

「ケーさんは決してずるかないのよ。餘計な嬉しがらせなんかは云はないのよ。……姉さん一度ケーさんに會つて下さらない？」

「いやなことだね。お溫かい所を見せつけられて溜るものぢやない」

「あら私眞面目なのよ。……ケーさんの樣子を通りがかりにでも、姉さんに見て貰ひたいの。姉さんなら、私なんぞとはちがつて、一目見たら、あの人の價値が分るでせう」

さう云はれると、おそでもうかと得意になつて、「一體ケーさんて云ふ人は何處の誰れだか、正體を明かして御覽な」

「姉さんが會つて呉れゝば明かしてもいゝわ」と云つて、三子はおそでが首肯くのを見ると、次の室にゐて此方の話を耳に留めてゐるらしい上田に遠慮しながら、疊の上に書いて見せた。そんなことではおそでがよく呑み込まないので、硯箱を持つて來て鼻紙に書いて、その人の家の道筋の圖取りまでもした。

「小綺麗ないゝ家なのよ。奥さんが實家へ行つてゐた時に、私夜おそく庭木戸から忍んで行つて、夜明頃まで泊つたことが一度あつたの。夜中に私が鼾をかくと、ケーさんは私の耳を引張つちや起し〳〵するの」

「戯談ぢやないよ」おそでは睨みつける眞似をした。鼻紙に書かれてゐる名前は見るか聞くかしてゐるやうな氣がした。

「私姉さんにはまだ秘密で話したいことがあるのよ。姉さんに後楯になつて貰つて一仕事して見たいことがあるんですよ。一日箱根へでも行つてゆつくり相談したいんだけど、姉さんは一人ぢや出られないかしら。旅費は私の分は私が出してもいゝわ」

「箱根へでも何處へでもそのうち行つてもいゝけれど、當分は駄目らしいの。それよりも私一度この土地のお茶屋で遊んで見たいよ。お金が出來たら、三ちやんの家の人をみんな××へでも呼んで御馳走したいと思つてるんだけれど、こんなに貧乏ばかりしてゐちや駄目ね」

「お止しなさいよ、そんな無駄なことは。……それよりも、姉さんは此方へ越していらつしやることに極まつたら、此方で一商賣はじめなすつちやどう？ 私いゝことを思ひついてるのよ」

「相談つてそのことなの？ あなたの思つてること大抵は察しがついてるさ」

おそでは意味ありげな笑ひを浮べた。上田を憚つて明らさまに口へは出さなかつたが、三子がかねて[illegible]事のやうに話してゐたことを思出して、「叔父さんのお店のやうな爺むさい商賣のお手傳ひは、私の性には合はないのだからね。俊一に手が掛らなければ、もつと面白い稼ぎをして見たいのさ」と、ふと心が浮き〳〵した。色氣のある社會には、牛島が好まないために、長い間遠ざかつてゐるし、藝者屋だの料理屋だのを營むには、いゝ手蔓もないし、資本も得られさうではなかつたが、三子から聞いてゐる曖昧屋なるものは、自分の力ででもやつてやれないことはなささうに思はれた。地道な稼業ではうまい儲けの得られないことを長い間知つて來た彼女は、昔通つて來た社會が利益の多いところだつたやうに慾の上から思はれたし、第一いろ〳〵な男をあやつつたり、いろ〳〵な男に揶揄はれたりする樂みは、ともすると思出されてならなかつた。

「私には私の望みがあるのだしさ。姉さんは智慧もあるし腕もあるのに、面白い稼ぎもしないで、陰氣な顏してボンヤリしてちや損ぢやないの」

三子がおそでを唆かして歸つたあとで、おそでは上田を顧みて、今日は自分が俊一を病院へ連れて行かうと云つたが、

「俊ちやんは少し熱があるやうです。風邪をお引きになつたのでせう」と云つて、上田は檢溫器を病兒の腋の下へ挾んだ。

長吉が公園から市街の方を散歩して、コーヒー店へ寄つたりなどして歸つた時には、病院の代診が上田に呼び迎へられて、病兒の腰部を洗滌をして、浣腸に類する注意をもして歸つて行つたあとであつた。おそでは代診に聞いたことを話して、

「昨日寒いのに停車場まで迎へに出たのがいけなかつたんです」と、昂奮して上田の不注意をもなじつた。

「さうばかりでもあるまいよ。昨日停車場で見た時に非常に窶れてると思つた。醫者は別段變つたことも云はなかつたのだね」

「變つたことつて何も云はなかつたわ、上田さん」

「えゝ、何も仰有いませんでした」

長吉は寢臺の側へ寄つて、窶れて老人らしい相をしてゐる病兒の顏を見入つて、

「氣分が惡いのかい。身體の何處が痛いなら痛い、氣持が惡いなら惡いと云つて御覧」と訊ねたが、

「僕はどうもないんだ」と云つて、俊一は額を顰めて目を瞑つた。

「それならいゝが默つてゐちや駄目だぞ。」上田さんでもお父さんでもお母さんでも、お前のために此處についてるんだから、安心して元氣を出さなきやいけないよ」

俊一は目を開けてうなづいたが、父の顏を見るのが煩さかつたので、再び目を瞑つた。……發熱とそれに伴ふ五體の疲勞によつて惱まされたためか、平生茫然として人の顏を見たり人の話聲を聞いたりしてゐた彼れも、今は見馴れた人間の顏も自分を苦しめるもののやうに思はれだした。父母の顏でも繪本で見た赤鬼や青鬼のやうに見えだした。彼れはふと手を伸して、寢臺の側の柱に懸つてゐる天狗の面を引つたくつて疊の上へ拋出した。夫妻はそれを見て呆氣に取られた。

そこへ、隣の主婦が冷し氷と病院の藥とを持つて來たので、上田は早速病兒に服藥させたが、俊一は顏や手を動かせて彼女の接近を避けるやうに努めた。笹間や三子の顏も目の前にちらつくやうで氣持が惡かつた。

「お藥はにがくつて？」と、上田が訊ねると、

「いゝえ、にがかない」

「お藥を飲んで溫かくしてれば直ぐに直りますよ。お母さんは、今夜は此處に泊るんだから安心していらつしやい」と、おそでが云ふと、

「みんなが默つてゐて呉れるといゝんだけれどな」と、俊一はこの別莊へ來て以來はじめてさう云つた。

夫妻は聲を潛めた。俊一は氷袋が額に載せられてゐるのも關はないで、額を夜具の中へ引込めるやうにした。そして周圍の聲は暫らく聞えなくなつたが、これまでに耳に觸れてゐる人々の言葉が棘をもつて一つ〱浮んで來た。さつき聞いてゐた三子と母親との話だつてハッキリ耳に覺えてゐたのだが、その話の意味がいくらか分ると、彼れの羸弱い頭には痛かつた。

「風邪を引いてもあの子の身體は危い」と、上田がある日笹間に話してゐたことを思出して、お醫者さんや上田が云つてゐるやうに、僕が今風邪を引いてゐるのなら、僕は死ぬるかも知れないと、ひとりで考へられた。

「お前はとに角當分此方に泊ることにして、おれだけ歸つて行かう。俊一の病氣が若しも惡いやうだつたら、電報でも打てば直ぐにやつて來るよ」と、長吉はおそでに云つて、こま〲した家の用事を互ひにさゝやいたが、今日は病兒をうしろに夫婦の別居生活に關はつた話をヒソ〱としてゐるのが、おそでには手頼りなく淋しく思はれて、しまひには妻子を此處へ置いて自分一人東京で暮らさうとする夫の心根を無慈悲の至りのやうに言ひだした。

「だつて、お前がさうしようと云つたのぢやないか。おれがこちらから毎日東京へ出勤する譯には行かないのだから、止むを得ないよ」と、長吉が穩かに云つても、おそではさういふ條理の立つた言葉にも耳を貸さないで、ブル〱首を振つた。

「今日の俊一は不斷とはちがふんです。いつか悲しい思ひをしなければならないと、何年もの長い間私たちが恐れてゐた日が來たのに、あなたは一人で東京へ行つて勝手な眞似をしようとしてるんぢやありませんか。あなたの顏を見ればあなたがお腹の中で何を企んでるか、私にはちやんと分るんですからね」と、いきり立つて、妹のおよねの事まで持出して聲を荒らげた。

「ぢや、おれが店を止めて此處で何もしないでボンヤリ暮らすのがお前の本望なのかい。俊一の治療代にも差閊へるやうになつてもいゝつて云ふのかい」

「私は今のやうな陰氣な貧乏暮らしをするために、あなたの處へ來たのぢやないんですよ。若いうちを面白い目もさせないでこき使つて、俊一の身體に萬一事があつたら、それをいゝ機會に私を追出さうと、あなたは思つてるにちがひないんだ」

二人の爭ひが募つてくると、上田は傍にゐるのがゐづらくなつて、そつと座を外して、隣の家へ行つたが、他人がゐなくなると、おそでは夫の身體にむしやぶりついて惡態を吐きだした。殆んど一夜も離れないやうに同棲してゐながら、妻の肉體に嫌惡を覺えて疎々しくしてゐる長吉は、その代りに妻の惡態や取組合ひに苦しめられるのを我慢してゐたのであつたが、今夜は少しの理由もないのに、爭ひを起されたのをつい憤つて、拳をかためておそでの頰ぺたを毆りつけた。……十年の間お互ひに自分の望みを殺して同棲してゐた鬱憤を相手に對して一度期に晴らし合つてゐるやうに、二人は次第に五體にある力を盡して爭つた。火鉢を引くり返したり、障子を倒すまでも止めなかつた。

上田や隣の主婦が音を聞きつけて、そつと樣子を見に庭先へ來た時には、おそでは青褪めた顏をして、ヒッ〳〵と泣入つてゐた。そして物心ついて以來、はじめてかういふ男女の爭ひを見せつけられた俊一が、ひとり寢床を出て松葉杖突いて、寒い風の吹いてゐる戸外へ出ようとして、玄關先に倒れたのを、夫妻は知らないでゐた。

オペラ

私は、この頃、ラムの「エリア隨筆」を机上に置いて愛讀してゐる。この人は趣味性に富んだ人であるが、音樂だけは分らなかつたらしい。

「私は天性音響について敏感だ。温かい初夏の眞晝に響く大工の槌の音でさへ、物狂はしいくらゐに私をいら立たせる。しかし、さういふ意味のない音は、音樂の如く一定の目的をもつた雜音に比べると何でもないのだ。我々の耳は物を打つ音などには受け身であるからいゝが、音樂に對しては受け身になつてはゐられない。……私はある日伊太利オペラを聽いてゐたが、次第に云ひやうのない苦痛に堪へられなくなつたので、最も騷々しい街上へ竄込んで、意味のない音響の中に身を沒して、今までの果のない役にも立たない乾燥無味の注意に苦まされた心を慰めた。平和な日常生活の音響のする、氣取らない集合の中に隱れ場所を求めた」

彼れはかう書いてゐる。私は先夜帝劇で伊太利オペラ「お蝶夫人」を聽いたあとで、ラムのこの感想を讀んで、大いに同感した、ラムの聽いたのは、多分帝劇のよりもいゝオペラであつたのだらう。それでさへ彼れはさう感じた。

序幕の終りの、お蝶夫人の米國士官との掛合ひの唄など、まるで、さかりのついた牡猫牝猫が屋根の上で鳴合つてゐるのを聞いてゐるやうな氣がした。

かう云つても、私はラムのやうな音樂嫌ひではない。たゞ、時々日本へ來る程度の外國のオペラを好まないだけだ。

（「白鳥隨筆集」より）

人生の幸福

人物

安城豐次郎
水島喜多雄（弟）
かよ子（異母妹）
寺島茱（學者）
別莊番藤七

一

初夏の頃の夜明け前。芝生の庭園。その一端にある日本建の別莊の雨戸はまだ鎖されてゐる。庭園の一方は山の方へ接してゐる。豐次郎（四十近い風采のよろしき男。寝衣の上に羽織を着てゐる）山を下りて、何か考へてゐる態で、ブラ〳〵庭へ入つて來る。やがて、ステッキの先きで雨戸を叩きながら聲を掛ける。返事がない。彼れは部屋の方へ耳を留めて、再び山の方へ行かうとしてゐるところへ、喜多雄（三十餘歳で、兄よりも健康らしい。同じやうに羽織を着てゐる）が入つて來る。

豐次郎は、弟を見て、驚いた表情をして見詰める。

喜多雄（努めて懷つこさうに）兄さんは朝が早いと聞いてゐたが、こんなに早いとは思はなかつた。

豐次郎　お前はいつ此方へ來たのだ？（詰問するやうに云ふ）

喜多雄　昨夕遲く來たのさ。あんまり遲かつたから此方へ知らせなかつたのだ。來ると直ぐに、一人でビール二本ばかり飲んで寝たら、熟睡したものだから、今朝は馬鹿に早く目が醒めてね。寝床でもぐ〳〵してゐるにも詰らないから、久振りに大磯の朝景色を見ようと思つて出て來たのだが、田舍はいゝね。

豐次郎　朝景色を見るにやまだ早過ぎらあ。あの通り月が照つてゐて、まだ夜のうちぢやないか。……お前は朝景色を見るよりおれの樣子を見に來たのだらう。おれが狂人にでもなつてゐるかと思つて。

喜多雄　いやさういふ譯ぢやないよ。（努めて何氣ない顏をして）今朝兄さんがこんなに早く起きてゐようとは思ひも染めなかつたんだからね。（雨戸の方を見て）かよ子はまだよく眠つてるんだらうな。

豐次郎　あゝ。朝早く目を醒ますのはおればかりだ。今朝はあいつに夜明け前の田舍の靜寂な景色を見せようと思つて、さつき聲を掛けたのだが、なか〳〵目を開けない。しかし、眠れるうちは眠らせといた方がいゝのだらうよ。

喜多雄　かよ子も此方へ來てから丈夫になつたんだらう。此間僕に寄越した手紙には、大變元氣のいゝ快活なことを書いてたよ。兄さんだつてこの前よりも血色がよくなつてゐるぢやないか。

豐次郎　血色なんぞどうだつていゝさ。……おれはお前にだけ話したいと思つたことがあるんだから丁度よかつた。家の者が起きるまで、此處で、夜明けの景色を見ながら話すことにしようか。

豐次郎が芝生の上に無造作に腰をおろすと、喜多雄も同じやうに腰をおろす。

喜多雄　僕は煙草を持つて來ればよかつたのに、忘れたよ。兄さん持つてゐないのかい。

豐次郎　（笑）おれは一週間ばかり酒も煙草も止めてるんだ。コーヒーや茶も成るべく飲まないことにしてゐる。飲食物や外界の刺戟なんかでおれの心を濁らされないやうに用心してるんだ。さうして、本當のおれの心を磨ぎ澄まして考へてることをお前に話すのだから、お前も煙草なぞを吸はないで聽いて呉れろよ。……おれが何を云はうと、眞面目に聽かなきやいけないぜ。

喜多雄　それは眞面目に聽くがね。（强ひて笑ひを洩らして）しかし、畏つて聽くには及ぶまい。芝生の上に兩手を突いて寢ころんでゐても、心が眞面目ならいゝだらう。（芝生の上へ足を伸して）さつき家を出た時にや頭がボンヤリしてたが、冷つこいスガ〳〵した空氣を吸つたために、頭のドン底までハッキリして來たよ。かういふ時には何だかいゝ話が聞かされさうだね。

豐次郎　（暫らく瞑想的な表情をしたあと）お前はかよ子のことをどう思ふ？

喜多雄　かよ子のこと？

豐次郎　僕は花が咲いてゐた時分に此處へ來て、一ケ月あまりもかよ子と一しよに暮らしてゐるんだが、かよ子は今のうちに死んだ方が、當人のためにも幸福だし、社會のためにもいゝと思はれるんだがね。お前はさうは思はないか。

喜多雄　（吃驚して）出抜けにそんなことを云はれちや、僕も面喰つちまふ。かよがどうかしたのかい。脅かさないで、詳しく譯を聞かせてお呉れよ。

豐次郎　あいつは丙午の生れだからね。俗に丙午の女は男を喰ふといふぢやないか。

喜多雄　何だい。眞面目な話つてそんなことなのか。（安心したやうに）お母さんがかよにケチをつけるために、時々そんなことを云つてたが、そんな舊弊なケチのつけ方ぢや、われわれに反感を起させるばかりだからね。

豐次郎　そりや、母親はかよ子に難癖をつけるためのいゝ口實にさう云つたのだらうが、おれの云ふ丙午の意味はさうぢやないよ。……おれやお前は、かよ子がたとひ死んだ父親の罪惡の記念だつたにしても、たつた一人の妹として可愛がつて來たので、かよ子もおれたちを手頼りにしてゐるんだが、あの子はこの先き生きてゐても幸福ぢやあるまいよ。

喜多雄　そんなことはないさ。容貌は惡かないし、人間も馬鹿ぢやないし、相當な家へ緣づかせれば、幸福に世が渡れるだらう。寺濱さんも、此間いゝ緣談の口があるやうなことを云つてゐたよ。僕たちは、一人の妹のために、理想的の男子を捜して花々しく結婚させるんだね。しかし、僕等が傍からおせつかいをするまでもない。かよ子は、ちやんとした當てがあるんぢやないかな。まだ子供だと思つてるうちに、案外なことがあるものだからね。……兄さんは此方へ來てから、何か感付いたことがあつて、さつきのやうなことを云つたのぢやないか知らん。

豐次郎　お前はいつものやうに世間的のことを云つてる。百人のうち九十九人までが云ひさうなことを云つてる。女が年頃になりや結婚させる。結婚させれば幸福になる。それに、十九にもなつたら、自分の好きな男のことを考へてるかも知れないなんて。さういふ風に手輕く事を極めてしまつていゝのなら、おれも頭を痛めて物を考へたりなんかしないよ。……かよ子の胸の中には、まだ戀の芽は少しも萌してゐないね。それはおれが斷言するよ。

喜多雄　いくら兄さんが烱眼でも、その點はどうだかな。僕には信じられないからね。しかし、かよの胸中が白紙のやうに純白で、まだ男子の影で汚れてゐないといふのなら結構ぢやないか。

豐次郎　今日の日までは、あれの胸の中が純白でも、明日の日何處で誰れを見つけて、俄かに戀の芽が萌えださんとも限らないのをおれは恐れてるが、おれの恐れてるのはそればかりぢやないんだ。かよ子は一人前の女になるとともに、おれやお前にも復讐しようとするのに違ひないよ。生みの母親の靈魂があれの腹の中には完全に宿つてるんだが、それが今はまだ眠つてゐても、いつ目を醒ますかも知れない。いや、今目を醒ましかけてゐるやうにおれには思はれるんだ。

喜多雄　何のための復讐？　死んだ親爺に對する怨みを僕等にむくいるだらうと云ふのかい。女つて執念深いから、かよの母親は死ぬる間際に、どんな恐ろしい遺言をしたかも知れないが、あの子は、怨みや憎みはどんなものだか、皆目分らないやうな女に生れついてるんだからね。時々お母さんに邪慳な仕打をされても、いつも無邪氣に受けてるぢやないか。（ふと氣づいたやうに調子を變へて）こんな下らない話はもう止さうよ。僕は久振りで此方へ來たのだから今日は三人で愉快に遊ぶことにしようぢやないか。僕はこゝで朝餐を御馳走になるから、飯を食つたら三人で千疊敷へでも登つて見ようぢやないか。僕は土産に苺のいゝのを持つて來てるから、あとで屆けよう。

豐次郎　お前は悠長な顏をしておれに氣休めを云つてる。かよ子が手紙で何か云つてやつたために、お前はおれの身體を氣遣つて來たのに違ひない。隱さなくつてもいゝよ。……おれの頭は狂つてやしないから安心しろ。不斷よりも頭の中がハッキリしてる位だよ。ただ、かよ子は早く死んだ方が、當人のためにも、傍の者のためにも幸福だと、おれが思つてるのを、あの子が多少感付いて、お前にそんな手紙を送つたのだらう。

喜多雄　たに、かよが此間寄越した手紙には、無邪氣な事が書いてあつただけだよ。あんまり退屈だから、兄さんに五目並べを敎はつたとか、朝早く起きて、曳網を見に行つて、鰺を買つて來て、自分で料理をして食べたが、まだピク〳〵動いてゐる魚に庖丁を當てるのは氣味が惡いから、一度で懲り〳〵したとか、その時兄さんが鰒を一尾漁夫に貰つて來たけれど、食べずじまひで打遣つたとか、さういふやうなことが書いてあつただけだ。

豐次郎　それだよ。かよ子もいくらか感付いてるんだな。（獨言のやうに云ふ）

喜多雄はふと、兄に對して不安な感じを起して、思はず後退りをする。藤七（水島家の別莊番、五十歳ぐらゐ）が裏木戸の側へ現はれ、此方を覗く。夜は明けかゝる。

豐次郎　何のためにおれがかよ子を連れて曳網を見に行つたと思ふ？　何のために鰒を貰つて來たと思ふ？

喜多雄　何のためだか、僕はそんなことまで硏究しやしないがね。（立上つて）さあ、もう家の中へ入らうぢやないか。東の方が薄明るくなつた。何處かで雨戸の開く音がしてる。

豐次郎　まあ、もつと其處にゐて、おれの話すことを聞け。まだ誰れも起きやしないよ。おれの眞面目な考へを打明けられるのはお前一人なんだから。……かよ子を生かして置けば、あれのためにもおれ達のためにも決してよくないんだよ。おれは長い間考へ拔いた擧句にさう思つてる。（重々しく云ふ）

喜多雄　（笑ひ〳〵）だつて殺す譯にや行かないでせう。

二人は足音を聞きつけて、そちらへ目を向けると、藤七が入つて來る。豐次郎は吃驚する。

喜多雄　（怪訝な顏して）おれに急用でも出來たのかい。

藤七　いえ、別段用事があつて參つたのぢや御座いません。少し氣にかゝることが出來まして、旦那樣はどちらへいらつしやつたのかと思ひまして。

喜多雄　氣にかゝることつて何だい。おれが家を出た時にや、お前はまだよく眠つてたやうだが、急に何か異つたことがあつたのかい。

藤七　戸倉さんの御別莊の裏で、若い女が殺されてゐるんで御座いますよ。隣の婆さんが、御嶽さんへ朝詣りに出掛ける途中で見つけて、近所で大騷ぎになつてゐるんです。喉を締められたらしいんですが、女は土地の人ぢや御座いません。東京か濱の可成りに身分のいゝ人らしいんですよ。

喜多雄　それは大變だな。しかし、その人殺しがおれと關係がある譯ぢやあるまい。（口輕く云つたが不愉快を顏に現はす）

藤七　それは旦那樣の御存じのことぢや御座いませんが、……その婦人の方が男の人と一しよに、昨夕夜汽車で東京の方から來たのを見たといふ者が御座いますから、若しも旦那樣もその人たちと同じ汽車にお乘りになつて、顏を知つていらつしやるのぢやないかと思ひまして。

喜多雄　知らないね。お前はいゝ加減なことを人に話しちやいけないよ。（叱るやうに云ふ）

藤七　はい。……私も久振りに死人の顏を見ましたが、死人なぞ見るものぢや御座いません。怨めしさうな目をして、鼻汁を滴らして。……旦那樣はあんな者を御覽にならない方がよろしう御座いますよ。

喜多雄　誰れが死人なぞ見に行くものか。……あゝさうだ。お前は、昨夕おれが持つて來た苺の籠を直ぐに此處へ屆けて吳れ。

藤七　承知いたしました。（會釋して出て行く）

喜多雄　あいつは、慾に掛けちやすばしこいくせに、人間が少し拔けてるから、馬鹿なことを云つていけないよ。

豐次郎　藤七はおれたちの話を立聞きしてゐたのだよ。油斷が出來ないよ。

喜多雄　聞かれて惡いことを云つてやしなかつたから、それは關はないがね。

豐次郎　いや、さうでない。おれ達はこゝで、大切な祕密を話してゐたのだから。

喜多雄　（はじめの快活さを失つた人間らしく）兄さんは獨りでいやなことばかり考へて、それを僕に押付けるからいけないよ。僕には誰れに對しても祕密なんかありやしない。

豐次郎　おれはこの頃、頭のなかが澄んでるから、いろんなことが分るんだ。かよ子の身に附纏つてる運命も、おれには分つてる。お前が藤七の云つた死人の話を氣に掛けてることも、おれにはちやんと分つてる。

喜多雄　僕は氣に掛けてやしないよ。僕が夜汽車で大磯へ來たことや、今朝早く山の方を散步したといふことが、ちつとも死人と關係があるんぢやないからね。

豐次郎　それはさうさ。おれはお前よりもつと早くから山の方を散步してゐたんだよ。御嶽さんの側の暗い森の中も確かに步いた筈だ。……しかし、喜多雄、お前は、ある女を殺さうと思つたことはなかつたか。（弟を見詰める）

喜多雄　ないねえ。男だつて女だつて、人間を

殺さうなんてことは、僕は一度も思つたことはないよ。そんな質問をされるのは今がはじめてだよ。兄さんは、なぜ、眞面目らしくそんな不愉快な事に拘るんだね……（空を見上げて）僕は久振りに夜明けの景色を見るんだが、兄さんも詰らない考へに凝らないで、このよく澄んだ空でも見るといゝ。

豐次郎　お前に教へられなくつたつて、澄んだ空なら、おれは毎日よく見てるよ。日の出も日の入りも、此方へ來てからよく見てるよ。……だけど空を見たつて、朝日を見たつて、おれの考へが變る譯ぢやない。……お前は本當に、女でも男でも殺さうと思つたことはなかつたか。憎いから殺したくなるばかりぢやない、その人間の幸福のためにも殺したいと思つたことはなかつたのか。

喜多雄　ないよ。僕は蟲けらだつて殺すのは嫌ひだ。

豐次郎　臆病だねえ。……おれは藤七が知らせに來た女殺しが、お前の所爲だと極つても、そんなに驚きやしないよ。

喜多雄　（顏を顰めて）馬鹿云つちやいけない。（兄の側を離れて）兎に角家の中へ入ることにしよう。

喜多雄は雨戸の側へ寄つて、かよ子に聲を掛ける。その間に、豐次郎は庭から外へ出て行く。

喜多雄　ぢや、此方へ出ておいでよ。散歩したきや一しよに散歩してもいゝから。

喜多雄は兄のゐないのに氣づいて、あたりを見廻す。そして、却つてそれをいゝこととしたやうな態度で、空を見上げたり口笛を吹いたりする。そこへ、かよ子（十九歳の可愛らしい女、不斷着のまゝ）が、横手から入つてくる。

かよ子　豐兄さんはゐないの？（不思議さうに見廻す）

喜多雄　あゝ。

かよ子　さつき、何だか、二人で面白さうな話をしてゐたわね。わたし、話聲を聞いて喜い兄さんにちがひないと思ふと、直ぐに出て來て、お話の仲間に入れて貰ひたかつたのだけど、髮が壞れてゐたから、大急ぎで直してゐたのよ。わたし、寢相が惡いから、毎晩頭をぐちやぐちやにしてしまふの。

喜多雄　ぢや、お前はさつきから起きてて、おれたちの話を聞いてたのか。

かよ子　えゝ、よく聞取れなかつたけれど、今日は三人で箱根へ遊びに行かうつて、そんな相談をしてゐたでせう。わたし昨夕の夢見がよかつたと喜んでゐたのよ。

喜多雄　（笑つて）うまいことを云つてらあ。眞顏でそんなことを云つて。かよもずるくなつたなあ。

かよ子　では、わたしの聞きちがひだつたかしら。若し聞きちがひだつたと分つたら、わたし大變に失望してよ。

喜多雄　そりや、事によつたら、箱根へでも修善寺へでも連れてつてやらないこともないがね。お前は身體の加減はいゝのかい。

かよ子　えゝ。わたし東京にゐた時よりも太つたでせう。千疊敷くらゐなら一息で登れるわ。

喜多雄　えらいなあ。……此方へ來てからは、氣を使ふやうなことはないんだらうね。兄さんと仲よく暮らしてゐんだらうね。

かよ子　えゝ、それは。……豐兄さんと喧嘩を一度したこともないわ。わたしの養生にもよく氣をつけて吳れるのよ。

喜多雄　さうか……（腑に落ちぬやうな態度をする。そしてあたりを顧みて）此間のお前の手紙に、兄さんは暗いうちに家を出て外を

歩廻つたり、六ケ敷い顔して獨りで考へ込んだりしてゐると書いてあつたが、それだけのことで、兄さんの不斷の樣子に格別變つたところはないんだらうね。

かよ子　えゝ。（曖昧な調子で答へて）死んだ義姉さんのことでも思出してるんぢやないかと、わたしには思はれるんだけど、訊いて見たことないのよ。それで、兄さんが鬱いでる時には、わたし側へ寄付かないでソッとして置くのよ。……義姉さんがいくらいゝ人だつたにしても、死んだ人のことを考へるのは詰らないぢやないの。（はじめの無邪氣に似合はない皮肉な調子で云ふ）わたしも、豐兄さんの氣持が傳染したのか、此方へ來てからは、どうかすると、死んだ人のことが考へられたりするんですけど、それはいけないことだと思つて、成るべく忘れるやうにしてゐるのよ。

喜多雄　かよちやんも死人のことを思出すのかい。いやだねえ。お前のやうな、これから世の中の幸福ばかり味つて行ける女が、死人のことなぞ思出して、大切な純潔な心を濁らすつてことがあるものか。

かよ子　誰にでもさう云つて、力をつけて貰へると、わたしうれしいわ。豐兄さんと喜い兄さんとは云ふことが反對なのね。

喜多雄　なあに、兄弟だから性分はよく似てるんだよ。上べは違つてゐるやうに見えても、腹の底は同じことなんだよ。（感慨を籠めて云ふ）おれはね、他家の家の人間になつてゐて、偶にしか會はないから、お前にもよく分らないのだらうが、おれは兄貴と同じやうに鬱ぎ込んでることもあるんだよ。

かよ子　いやなことねえ。……ぢや、喜い兄さんも死んだ人のことを考へてるの？　でも、水島の義姉さんは丈夫で生きてゐるんだし、兄さんのお友だちで死んだ方もないやうだし、誰れのことを考へ出すのかしら。

喜多雄　おれが物を考へて鬱ぎ込むと云つたつて、死人のことと極めなくつてもいゝよ。お前も今朝は少し變だ。（ふと嚴かな顔付をして、稍聲を潜めて）それよりも、兄貴の精神狀態はどうも調子が外れてるやうだから、お前は氣をつけなきやいけないぜ。兄貴の云ふことや擧動に變なところがあつたら、一々おれに知らせるやうにして呉れ。

かよ子　豐兄さんの精神狀態がどうかしてるの？　今朝此處で會つた時の樣子が變だつたの？（物に驚いたやうに）それで、豐兄さんは今何處へ行つたんでせう。

喜多雄　御嶽さんの近くで、女が締殺されてるさうだから、それでも見に行つたのだらうよ。

かよ子　女が殺されてる？……譃でせう。兄さんはわたしを脅かさうと思つて。

喜多雄　本當だよ。疑ふのなら見て來るといい。

かよ子　本當なら、わたし恐ろしい。（恐怖に震へながら空間を見て）……それは誰れが殺したんでせうか。殺した男は誰れだか分つたんでせうか。

喜多雄　加害者は誰れだかよく分らないだらうが、お前はなぜそんなに怖がるんだ。お前やおれに關係がある譯ぢやあるまいし。

かよ子　でも、わたし、急に恐ろしい氣がしてたらないの。……殺された女の人の顔が見えるやうだわ。首を絞められるのはつらいでせうね。同じ殺されるにしても、首を絞められるのと、刃物で喉を突かれるのと、どちらが苦しいんでせう。

喜多雄　おれはまだ殺された經驗がないから分らないよ。……そんな役にも立たないいやな

ことを考へる必要はないね。‥‥あの車の音は牛乳屋だらう。おれの持つて來た苺に牛乳をかけて直ぐに食べることにしようぢやないか。‥‥穩かないゝ朝だ。

喜多雄は努めて快活を裝つてさう云ひながらも、不安な思ひが、隱しきれないやうに微見えてゐる。藤七、風呂敷で包んだ苺の箱を提げて入つて來る。

喜多雄　御苦勞だつたな。そこへ置いて行けばいゝよ。

藤七　（苺の箱を下へ置く。そして、かよ子に目をつけて挨拶して）お孃樣は今度は一ぺんも爺やの處へお遊びにいらつしやいませんね。此方の旦那樣も寄つて下さらないし、何かお氣に障つたことがあるのぢやないかと、爺やは心配してゐたので御座いますよ。

かよ子　（返事するのが懶いやうに）わたし、この頃は滅多に外へ出掛けなかつたのよ。

藤七　爺やは此間、太田の御隱居樣が東京へお引上げになる時、緋鯉や金魚を頂いてお池へ放しときましたから、今日でも御一しよに見にいらつしやいまし。お氣に召したのがあつたら買つて頂きたいと思つてるので御座いますよ。

喜多雄　金魚は食べられないから、賣つて金にして一杯やらうと思つてゐるのかい。かよちやんは用心してゐないと、詰らない金魚を爺やから高く賣付けられるかも知れないよ。

藤七　へゝ。旦那樣は直ぐにわたくしの申上げることをケナしておしまひなさると思ひましたから、旦那樣にはお願ひしないで、お孃樣に高く買つて頂かうと思つてるんで御座います。あの金魚は、御覽になつたら、屹度お孃樣のお氣に召すだらうと思はれます。

喜多雄　爺やも商賣の時機が惡かつたよ。もつと早かつたら買つて貰へただらうが、かよちやんは、今は金魚なんぞ見たかあないんだ。

藤七　どうかなすつたので御座いますか。（かよ子を見詰めて）さう云へば、お顏の色もお惡いやうだ。

かよ子　（煩ささうに、顏を外して）わたし、どうもないのよ。そのうち爺やの金魚でも緋鯉でも見せて貰ふわ。

藤七　どうぞ御覽なすつて下さいまし。（歸りかけてまた後戻りして、喜多雄に向つて）さつきの女殺しの話で御座いますがね。伊豆屋の平吉が怪しい男を見たと云つて居ります。顏はよく見なかつたけれど、變な男が御嶽さんの方から下りて來るのを見たさうで御座います。どうも譯がありさうに思はれたから、突立つてあとを見てると、も一人の男が同じ道を驅けて來たさうです。それで、殺し手は一人ぢやあるまい、二人でやつた仕事だらうと、平吉は申して居ります。物取りぢやあるまいし、意恨があつてやつたことで御座いませうが、若い女一人を、男が二人がかりで絞殺すなんてあんまりむご過ぎるやうに、わたくしは思はれます。

喜多雄　さうだね。（空々しく云ふ）‥‥お前は早く歸つて庭をよく掃除しといて呉れ。今日はみんなを誘つて行くから。

藤七は出て行く。

かよ子　爺やは何だつてあんないやなことをわたしたちに話して行くんでせう。

喜多雄　人殺しの話なんか、誰れでも話したがるものなんだよ。本當に、いゝ加減な想像なんだよ。平吉といふ男が見たつて云ふのも當てにやなりやしないさ。

かよ子　わたし、此間豐兄さんに誘はれて、御嶽さんの裏山へ登つたのだから、あの邊のことよく知つてるわ。山の上からは松原越しに

海が見えて、そりや眺めがいゝのよ。……殺された人は、御嶽さんへ行くまでは、自分がどんな目に會はされるか、ちつとも知らなかつたでせうのに。わたし、殺された人が殺した人に隨いて何も知らないで、あの坂を上つてつた樣子が、今目の前に見えるやうなの。邪慳に絞殺されるくらゐなら、自分で海へ身を投げるとか、汽車の線路へ飛込むかして、早く死んぢやつた方がよかつたでせうのに、その女の人はなんにも氣がつかなかつたのね。

喜多雄　それは極まつてるさ。殺されると知つて誰れが隨いて行くものか。（また不安な思ひに襲はれたやうに）折角暇をこしらへて保養に來たのに、朝から縁喜が惡いよ。兄貴ばかりぢやない、かよまでもどうかしてゐる。（雨戸の方を見て）おきよはまだ寢てるのか。もう起したらいゝぢやないか。早く雨戸でも開けたらいゝだらうに。いつまで庭に立つてても爲樣がないから、家の中へ入つて、氣分を變へて、その苺でも食べることにしようぢやないか。

かよ子　（兄に促されても家の中へ行かうとはしないで）此方にはお母さんがいらつしやらないから、下女も寢たいだけ寢かせるんです。

喜多雄　此方にはお母さんがゐないから、お前も氣が樂なんだらうね。（ふと柔しく云ふ）

かよ子　えゝ。（邪氣なく云つて）それは、時々は退屈して東京の戀しくなることもあるし、何かしら詰らない氣持のする時もあつたのだけど、大抵はスーッとしたやうな氣持で毎日日を暮らしてゐたのだわ。……でも、それは今朝までのことなの。兄さんに呼ばれて此處へ出て來てから、わたしはじめて氣がついたの。今までわたし無智だつたのね。豐兄さんは死んだ義姉さんの事を考へて鬱いでるのだとばかり思つてゐたんですもの。

喜多雄　それは、兄貴の樣子はちよつと變なやうにおれには思はれるんだが、おれがさう云つたからつて、お前は兄貴を怖がらなくつてもいゝよ。おれが餘計なことを云つたために、お前に心配をさせて濟まなかつたね。

かよ子　いゝえ。餘計なことぢやないの。（あたりを見廻して）わたし默つてゐられないから思つたこと云つちまふわ。豐兄さんの知つてる女の人がこの土地にゐるらしいのよ。暗いうちに外へ出て行くのは、その人に會ふためなんでせう。それで、しよつちうわたしに何か隱してるやうに氣兼ねをしてゐたのは、そのためだつたの。わたしに悟られやしないかと、豐兄さんがビク／＼してゐる譯が今やうやく分つたんです。……だから、わたし怖くなつたの。爺やの話を聞いて、恐ろしいことが考へられてならないの。わたしの思違ひならいゝんだけれど。……喜い兄さんも、豐兄さんの精神狀態が今朝は變だつて、さつきさう云つたわね。

喜多雄　兄貴にそんな祕密があるつてことは、おれは今まで知らなかつた。（信じかねる風）

二人は陰鬱な顔をして、めい／＼の思ひに沈む。やがて、

喜多雄　しかし、平吉が見たつていふ男は、兄貴ぢやあるまいよ。……おれも詰らない心配をしてゐた。……いくら兄貴の頭が變になつても、そんな馬鹿なことがあるものぢやない。

かよ子　男が二人通つたのを見たといつたわね。

喜多雄　偶然其處を通つたために嫌疑を受けちやたまらないね。

豐次郎が入つて來る。二人に對して疑惑の

目を放つ）

喜多雄　何處へ行つてゐたの？

豐次郎　戸倉の別莊の傍まで行つて來た。死體には菰が掛つてたから顏がよく見えなかつた。

喜多雄　何だつてそんなものを見に行つたのだい。かよは非常に心配してゐたよ。

豐次郎　お前が何か餘計なことを喋舌つたんぢやないか。（詰問するやうに）

喜多雄　僕は餘計なことなんぞ云やしないよ。

（ドギマギしながら）

豐次郎　だつて、かよ子はあの通り震へてるぢやないか。あんなに熟睡してゐたものが、三日も眠らなかつた人間のやうな元氣のない顏をしてゐるのに、おれが氣がつかないと思つてゐるのか。（怒りを含んだ聲で云ふ）

喜多雄　それは僕の所爲ぢやないよ。

豐次郎　ぢや、おれがちよつと出て行つた間に、お前の外の誰れかがやつて來て、かよ子に何か云つたのか。

かよ子　わたしどうもしてやしないの。兄さんこそ氣を鎭めて確りしてゐて下さい。

豐次郎　おれこそどうもしてゐやしないよ。喜多雄が何か云つたか知らないが、誤解しちやいけない。

かよ子　（外の方を氣にして）こんな處にいつまでも立つてゐちやいけないから、家の中に入りませう。わたし、今雨戸を開けるわ。

かよ子は顧み勝ちに、豐次郎の方を氣にかけながら出て行く。

豐次郎　（弟に向ひ顏を和げて）お前は本當にかよ子に何も云はなかつたのか。おれはあの子の生きてるうちは、無駄な心配はさせまいと思つて、此方へ來てからも、おれの思つてゐることは微塵も外へ現はさないやうにしてゐたのだ。それに、無邪氣な相が消えてしまつた。一日でも一刻でも時を延してゐるうちに、人間の心は不意に邪念が芽を吹いて來るものだが、一度芽を吹いたが最後、この頃の草や木のやうに、どし／＼蔓つて繁つて行くのだ。昨日までは、苦しみの種から生れてゐながら、苦しみを感じなかつたかよ子も、今はそれを感じだしたのだ。あれの母親はおれたちの母親に虐殺されたやうなものだからな。

喜多雄　虐殺だなんて考へるのは、兄さんの頭がどうかしてるんだよ。親爺のしたくらゐなことは世間に有りがちのことなのだからね。……かよは兄さんが、死んだ義姉さんの事か何か考へて毎日鬱いでると云つて心配してゐたのだ。

豐次郎　おれはかよ子だけには、おまきのやうな苦勞をして死なせたくないよ。おれやお前の敵にしときたくはないよ。……おれは今、氣にかゝつたから死人を見に行つたのだが、加害者は昨夕のおそい汽車で大磯へ來たのだと、みんなが噂をしてゐる。

喜多雄　それが僕にでも關係があるのかね。

（反抗するやうに云ふ）

豐次郎　御嶽さんの邊は、人殺しをやるのにいい處だ。おれはさう思つて、毎朝散步してゐたのだ。

喜多雄　兄さんはどう思はうとも、僕はあすこが眺望がいゝから、行つて見ただけだ。かよもさつきあそこは眺めがいゝと云つてゐたよ。……しかし、朝からこんないやな話をしてゐても爲方がないから、僕は一先づ家に歸つて出直して來ることにしよう。

喜多雄が行きかけると、豐次郎はふと手をのばして引留める。喜多雄はその手を振放して行かうとする。そのはずみに、二人は芝生の上にころぶ。

二

二三十分後、前の幕の別莊の一室。食卓を圍んで、兄妹三人が苺を食べてゐる。かよ子の居室らしく、鏡臺や箪笥などあり、西洋畫の額が掛つてゐるが、それは、觀客の目には見えない。

かよ子　この苺は隨分おいしい苺ね。(匙を持つたまゝ、喜多雄の方を見る)

喜多雄　(夢から醒めたやうに)うん。うまいだらう。和泉屋へ賴んで特別にいゝのを選擇させたんだ。

豐次郎　この土地にはろくな果物がないんでね。(平靜な態度で云つて、皿の苺を見てゐる)

かよ子　水島の義姉さんでもおたまちやんでも、誰れか東京から遊びに來てくれゝばいいと、わたし此間うち獨言のやうに云つてゐたのよ。だから、今朝喜い兄さんの聲を聞いた時、飛上るやうに悦しかつたのだけれど、間拔けに骨をきたてつたので、スッカリ悄げたの。藤七がいけないのよ。いけ好かない奴やだわ。死人があらうと人殺しがあらうと、係合ひもないわたし達の處へ、朝つぱらから知らせに來なくつてもいゝぢやないかね。

喜多雄　さうだとも。あいつ他所へ行つても餘計なおしやべりをしてゐるに違ひない。(それを氣遣つてゐるらしく忌々しさうに云ふ)

豐次郎　藤七のおしやべりくらゐは構はないが、お前は後暗いことはないのか。(聲を稍低めて)おれ達の前ではもう祕密にするには及ばないよ。さつき草原に轉んでた時に、おれはお前の心臟に觸つて、激しく鼓動してゐるのを知つたのだ。お前の胸の底には、何か異常な事を實行したあとのやうな震へが殘つてゐるのを、おれはちやんと感じてるのだ。お前はおれだけには隱せないよ。二人は幼い時から一しよに育つて來た人間だもの、おれにお前の心の中が讀めないでどうする?……昨日までのかよ子になら、世間の者の恐ろしがるやうなことは決して聞かせたかないのだけれど、今はかよ子も、恐ろしいことが自分の周圍に起つてることを感付いてるのだから、今更おれ達がかよ子の目に蓋をしてゐようとしたつてもう遲いんだ。だから、お前も、遠慮しないで正直に打明けて見ろ。おれは決してお前を非難しようとは思つてゐない。輕蔑もしない。都合によつたら、おれが責任を背負つてお前の身代りになつてやつてもいゝと思つてるのだ。

喜多雄　僕の身代りになると云つて、何のために身代りになるんだね。(自分の胸をおさへながら)僕はさつき芝生に轉んでた時、柔かい草が身體に觸つていゝ氣持だつたよ。あの上をいつまでもコロ／＼と轉んでゐたかつたくらゐだ。動悸も打つてやしないし、手も震へてやしないよ。

豐次郎　お前はまだおれのこの目を眩ましてゐようと思つてるんだな。(詰責する語調)ぢや、かよ子に訊いて見ろ。

喜多雄　(强ひて笑ひを浮べて)おれの顏付が不斷に比べてそんなに違つて見えるか。かよの目でよく見て、公平に判斷して吳れないか。

かよ子　(よく見て)さう云へば、喜い兄さんも今朝は變ね。目付が凄いぢやないの。

かよ子は、喜多雄を見た目を轉じて豐次郎の方をぬすみ見して、それから、額を見上げて、ひそかにおびえる。

豐次郎　かよもいよ／＼氣がついたのだな。お前があの親爺の肖像がよく出來てると云つて

此處へ掛けた時から、おれは氣遣ひでならなかつたのだ。親爺は一生のうち二人も三人もの人間を殺してゐるのだよ。そのうちの一人は、西南戰爭で殺したので、親爺自身も自慢をして人に話してゐたのだが、生物を殺したのは何のためだつて同じことだ。殺す生すは戰爭の時に限つたことはない。（嚴然として）喜多雄、お前は、戰爭でもない時に親爺と同じことをやつたな。他所の人間はどうか知らないが、親爺の一族は、一生に一度は親爺と同じことをやらなければ生きてゐられないと、おれは此間から考へてゐたよ。

喜多雄　親爺と同じことをやつたのならやつたでいゝから、兄さんは心を鎭めて下さい。

豐次郎　馬鹿、おれを狂人とでも思つてゐるのか。おれはこの通り落着いてゐるぢやないか。おれが狂人なら、親爺も狂人だつたのだ。お前も狂人だ。……かよ子でも喜多雄でも、おれに何事でも訊ねて見ろ。それで、おれの返答が間違つてゐるかゐないか試驗をして見ろ。この頃のやうに澄んでゐるおれの頭には、分り過ぎるぐらゐ何でも分つてるつもりだ。

かよ子　お父さんはいゝ方だつたのよ。だから、わたしもお父さんの肖像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてゐるから、安心してよく眠られるやうにと思つて。

豐次郎　親爺の肖像が魔除けになると思つてゐたのか。人間にいろ〳〵な苦しみを與へた根本の神樣を、人間が崇拜してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみの種を授けてくれた親爺を有難い神樣にして奉つてゐるのか。……馬鹿だなあ。

豐次郎、ふと立つて、肖像畫を取りおろす。そこへ、姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞えて來る。

藤七　旦那樣、至急の御用がある方がいらつしやいました。此方へ御案内いたしましたが、此處へお通し申しませうか。旦那樣は直ぐにお家へお歸りになるでせうか。

三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てて立上つて、「ぢや、ちよつと行つて來よう」と獨言のやうに云つて出て行く。

豐次郎　（肖像畫を下に置いて）彼奴はおれよりも先きに實行したのだ。（歎息する）

かよ子　喜い兄さんは何を實行したのよ。

豐次郎　何を實行したか、お前も分つてゐるだらう。この莓はおれのところへ手土産に持つて來て呉れたのか、外の者と一しよに食べた筈だか分らないのだ。

かよ子　ぢや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。

豐次郎　あいつ今は、その事で調べられるのだが、言逃げるすべはあるまいよ。……あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。（次第にかよ子を見詰める）

かよ子　（おど〳〵しながら）だつて、喜い兄さんのやうな快活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水島の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。

豐次郎　世間の出來事の譯が一々お前なぞに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は日を送つてゐるんぢやないぜ。……お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならないね。

かよ子　わたし、兄さんが怖い。（座を立つて庭へ下りようとする）

豐次郎　いよ〳〵おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。

庭へ下りようとするかよ子を、豐次郎は手を伸して引留める。

かよ子　兄さんは、わたしをどうするの？……勘忍して頂戴。

豐次郎　お前はまだ誰れに對しても惡事をしたことのない女だ。あやまるには及ばないよ。

かよ子　だから、兄さんは私を虐めないで下さい。

豐次郎　おれが虐めるものか。まあ、此處へ坐れよ。

かよ子は手を執られてゐるので、逃げようとしても逃げられないで、おど〱しながら、肖像畫の側に坐る。

かよ子　わたしお父さんの側に坐つてゐてよ。

豐次郎　おれたち三人は、その親爺に生みつけられたのだからな。よくその肖像を見るといい。人間が猿に似てるやうに、三人が親爺にどれだけよく似てるかを見るといゝ。

かよ子　わたし今から海へ行つて見たいのだけれど、兄さんは行きたくない？（隙間を見てゐるやうに目を左右に向ける）

豐次郎　まあ、も少し此處に坐つてゐろ。おれを恐れなくてもいゝよ。おれはたつた一人の妹の眞實の幸福を考へてゐるのだ。

豐次郎はやさしくさう云ひながら、出拔けにかよ子を後から抱へて、喉を締めようとする。かよ子は微かに聲をたてゝ藻掻きながら抵抗する。豐次郎は女の苦しさうな顏面を見ると、知らず〱手をゆるめる。すると、かよ子は猛烈な抵抗をはじめて、兄の手から脫出するや否や、鬼女の如く兄の咽佛を壓へ付ける。豐次郎は脆くも氣絶する。かよ子はよろ〱と食卓に凭れて俯伏しになる。そこへ、喜多雄が入つて來る。二人の樣子を怪しんで、かよ子の肩を叩いて、

喜多雄　おい、どうしたのだ？

かよ子　（目を見上げて）わたし、兄さんに殺されかけたの。何の罪もないのに兄さんに喉を締められかけたのです。わたしどうもしたのぢやないの。兄さんがどうなつてゐてもわたしの所爲ぢやないの。兄さんは氣が狂つてゐるんです。（昂奮した調子で、しかしあたりを憚つてゐるやうに云ふ）

喜多雄　お前はよくそれで無事だつたな。兄貴は頭が變だと、今朝から思つてゐたのだ。

かよ子　兄さんの氣の狂つてゐることを、あなたはよく知つてゐるんでせう。

喜多雄は氣絶してゐる豐次郎の樣子を側へ寄つて薄氣味惡さうに見る。

喜多雄　兄さんは狂人だかどうだか、おれには分らない……。兎に角、早く醫者を呼んで來なきやならないよ。

かよ子　若しも豐兄さんが息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にゐられないわ。

喜多雄　だつて、おれ達が打遣つといて逃出す譯には行かないよ。

かよ子　ぢや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豐兄さんがあばれだしたら、取鎭めて貰はなきや恐いわよ。それに、喜い兄さんは、豐兄さんの狂人だつてことを、よく證明して下さいね。

喜多雄　おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで來させよう。

喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豐次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを檢査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。脆くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髮を直しにかかる。喜多雄が入つて來る。

喜多雄　兄貴は寝てるんぢやないか。氣が變になつたからつて氣絶する譯はあるまいよ。

かよ子　さうかも知れないわ。兄さん、側へ寄つてよく見て御覧なさい。わたしは怖くつて寄りつけないわ。

喜多雄　（兄の側へ寄つて、その死相を注意して）變だなあ。昂奮して心臓痲痺でも起したのかしら。

かよ子　さうかも知れないわね。（落着いた顔して振向いて）豐兄さんはもういやなことを考へてゐないで幸福ね。あんなことばかり考へて日を暮らしてるよりは、氣絶でもしてゐる方が幸福だつてことが、わたし今やうやく分つてよ。

喜多雄　お前はどうしてそんな呑氣なことが云つて居れる？

かよ子　さつき、急用があつて兄さんに會ひに來た人は誰れだつたの？

喜多雄　おれはスッカリ忘れてゐた。お前も知つてゐる琴平の寺濱さんが、偶然此方へ來てゐて、おれを訪ねて來たのだ。兄貴の様子があたりまへなら、此處へ通さうと思つて、外に待たしてゐるんだが、こんな風ぢや駄目だな。

かよ子　お通ししたらいゝぢやないの。わたし、異つた人に會ひたくつてたまらないのよ。

喜多雄　かういふ時だ、寺濱さんの意見でも訊いて見るんだな。

喜多雄が奥へ入つて行くと、かよ子は鏡面を見入つてクリームなどで顔の磨きに取り掛る。庭の方から藤七が入つて來て、「旦那様」と聲を掛ける。かよ子、聞耳を立てて、不安な態度で座を立つ。外を覗いて、

かよ子　爺やだつたの？　まあいゝ所へ來て呉れたわね。此方の旦那様はさつき不意に目を廻してお倒れになつたのよ。上へ上つて御様子を見ておくれな。

藤七　それは大變だ。お顔へ水でもぶつかけたら、息をぶつ返しなさるかも知れない。（上へ上つて、豐次郎の側へ寄つて）こりや、あたりまへの氣絶ぢやねえな。

かよ子　たゞの氣絶ぢやないつて。（驚いたやうに云ふ）

藤七　お醫者様に見て貰ふまでもない。わたくしが一目見てさへ分りまさあ。全體旦那様はいつの間にこんなにおなんなさつたんでせう。お嬢様は御存じないんで御座いますか。

かよ子　わたしはちつとも知らないわ。晝御飯の支度に臺所の方へ行つてる間に、兄さんはそんなになつたのよ。……早くお醫者さんが來て下さればいゝのに。

藤七　晝間に外から人が入つて來て、御主人を絞殺して行くつてことはない譯だ。まさか、昨夕の女殺しぢやあるまいし。（獨言のやうに云つて）お嬢様、こりや、お醫者様を呼ぶさきに、警察へ届けなきやなりますまいよ。

かよ子　爺やは自分で警察へ届けに行からつて云ふの？（咎めるやうに云ふ）

藤七　わたくしは家の旦那様のお指圖次第でどうにでもいたします。

かよ子　それで、御嶽さんの人殺しの殺し手は誰れだか分つたのかい。

藤七　いゝえ、まだハッキリ分らないやうですよ。殺された女を連れて停車場を下りた男があつたらしいので、警察では昨夕のおそい汽車で來たお客を調べると云つてゐます。殺した男が、いつまでも、この土地に愚圖々々してやしまいと云つてゐますが、御嶽さんの死人も絞殺されてゐるし、此方の旦那様もこんなになつていらつしやるし、……

かよ子　わたし、此處にゐるのが怖いわ。

藤七　爺やも氣味が惡う御座いますよ。こりや、たゞ事ぢやない。

かよ子　喜い兄さんも氣が變になつてるやうだから、わたし怖いわ。

藤七　わたくしも今朝此方へお伺ひした時からさう思つてゐました。（耳を澄まして）旦那樣の聲がする。不斷のお聲とはまるで違つてる。お孃樣も御用心なさいませ。

藤七は事があつたら庭の方へ飛出せるやうに身構へをする。

三

ある田舍町の街上。夜。電柱につけられた街燈が暗い道をかすかに照らしてゐる。今様の耳かくしに髮を結つて、派手な浴衣を着たかよ子が、一方から入つて來る。向うから寺濱某（四十餘歲、體格逞しき男）が入つて來る。行きちがひさま、

寺濱　かよ子さんぢやないか。

かよ子　あら。……先生が此方へ來ていらつしやるとは、ちつとも存じませんでした。

二人は留つて、顏を向合つて立つ。しかし、かよ子の顏のみハッキリ電燈の光を受けて、寺濱の顏は光の外にあつて、絶えずボンヤリしてよく分らない。

寺濱　避暑をかねてあなたに會ひたいと思つて、夕方此方へ來たんです。明日の朝はお訪ねしようと思つてゐたのだが、此處で會つてよかつた。どうです、身體の工合は？

かよ子　おかげで大變よくなりまして、この頃はお薬も頂かないので御座いますわ。

寺濱　それは何よりだ。

かよ子　先生は最近に兄にお會ひ下さいまして？

寺濱　それについてあなたをお訪ねしたいと思つてゐたのだ。兄さんはこの頃は精神狀態がよつぽどよくなつてゐますよ。もう大丈夫でせう。此間會ひに行つた時には、あの時のことを夢のやうに思出して話してゐましたよ。それから、あなたのことも云つてゐました。安城家の血統はかよ子一人に殘つてるんだから、結婚をさせるやうに骨を折つてくれと、わたしに賴んでゐました。わたしは以前、自分から緣談を持出したことがあるくらゐだから、お受合ひはして置きましたがね。

かよ子　わたしの結婚のことなぞ仰有らないやうにして下さいましな。二人の兄が一度期にあんな恐ろしいことになつたのですもの。

寺濱　しかし、あの時の記憶を消すためにも、あなたは結婚なすつた方がいゝでせう。わたしのためにもいゝんですよ。わたしもあの時には關り合ひがあつたので、あの時の氣持が今でも頭の中に殘つてゐていけない。

かよ子　それで、若しも兄の精神狀態が完全に回復しても、罪人になるやうなことはないので御座いませうか。

寺濱　そのことは心配なさらなくつてもいゝでせうがね。……わたしはあの後、心の落着いた時分に時々思出しては、不思議でならないんですがね。あなたによくお訊ねしたいと思ふこともあるんですよ。かういふことをお訊ねしちや、あなたがいやに思ひなさるか知れないが、……わたしが門の外で會つた時には、不斷とそれほど變つてもゐなかつた喜多華君が、その前から發狂してゐてあゝいふ恐ろしい犯罪をしたといふのも解らないことだし、ことに、御嶽さんの前の殺人が喜多華君の所爲だと極つたのも、僕にはよく呑込めないんです、警官や檢事の訊問に對しては、わたしは批評がましいことを口へ出すのは遠慮して、藤七の云つた通りに同意したのだつた

が、警官や檢事の解決した問題が、わたしにけどうも得心の行くまでに解決されてゐないのです。

かよ子　ぢや、先生は、兄の罪は寃罪だと思つていらつしやるんでせうか。

寺濱　わたしは疑つてゐる。……人間以外に、魔物とか何とかいふやうな物があつて、豐次郎君に仇をして生命を取つて、御嶽さんの側でも女の生命を取つたのだと信じられゝば、至極都合がいゝのだが、我々はさういふことを信じられなくなつたので、都合が惡い。喜多雄君は、御嶽さんの側の殺人も自分のしたことだと思つてゐるやうだが、わたしには、どうしてもさう思はれませんな。

かよ子　でも、上の兄なぞは、上べは何ともないやうでも、精神に異狀があつたのですから。

寺濱　喜多雄君の精神が何かの刺戟で突然狂つたにしても、理由のないのに、兄さんの喉を締めにかゝつたのは、不思議でならない。二人は不斷仲のいゝ兄弟だつたのだから。それに、豐次郎君が抵抗もしないで、たやすく息を引取つたのも、わたしには理解の出來ない問題なのです。……喜多雄君自身は、精神が鎭まつて來ると、自分が續けて二度も殺人をしたつてことを認めてゐるやうな口を利くので、常人さへさう認めてゐることを、わたし一人が疑ふのは變だが、かよ子さんはどう思ひます？　あなたはあの時側にゐたことだし、ことにあなたのやうな無邪氣な女の方の觀察は參考に訊いて置きたいと、わたしは思つてゐるんです。これはわたしとあなただけの間の話にして、決して外に洩らすやうなことはしないから、腹藏なく聞かせて貰ひたいんですがね。

かよ子　それでは、兄は自分を罪人として認めるので御座いませうか。（氣色ばんで云ふ）

寺濱　さうです。喜多雄君のやうな不斷快活だつた青年が、自分が犯したかどうか分らないやうな罪を自分で認めてゐるのが、わたしには、一層不憫に思はれるんです。むしろ狂人になり切つてる方が、兄さんのためには幸福なんでせう。なまなかに、ボンヤリした自意識があるのがみじめです。

かよ子　先生のやうな方がさう仰有れば、わたくしもさういふ氣がいたしますわ。死んだ兄は、兄弟に殺されたにしても、魔物とか何かの手で殺されたにしても、結局幸福なのぢや御座いますまいか。ですから兄は自分を手に掛けた者に逆ひはしなかつたので、恨んでもゐないのだらうと思はれますわ。

寺濱　ホウ、かよ子さんはあの事件をそんな風に考へてゐるんですか。（不愉快さうに云ふ）

かよ子　さう思つてゐちやいけないんで御座いませうか。

寺濱　いけないこともないだらうが、あなたは二人の兄さんのたつた一人の妹さんだ。兄さんがあんな死方をしたのを幸福だといふのはあんまり無邪氣過ぎますね。

かよ子　わたし、先生にだけ、打明けてお話しいたしますわ。……精神に異狀があつた兄さんが、わたしを幸福にしてやるつて、わたしの喉を絞めようとしましたから、わたし、怖くなつて逃出さうとして、思はず知らず、兄さんの喉を壓へつけてやつたのです。御嶽さんの女殺しは誰れの所爲か知りませんけれど、兄さんの死んだのは、喜多雄兄さんの所爲ぢやないんですわ。わたしのしたことです。

寺濱　かよ子さんはなぜそんなことを云ふんです？　あなたがあんなことをする筈もないし、第一あなたのか細い手で、何で大の男の生命を取ることが出來るものですか。わたし

が、心安立てで、出拔けに變な事を訊いたのがいけなかつたか知れないが、昂奮しないで心を落着けて下さい。

かよ子　檢事も巡査も、誰れもわたしに疑ひをかけないから、何も知らなかつたと云つて、藤七の云ふ通りに、喜多雄兄さんの所爲にしてすましたのですけれど、本當はわたくしのこの手が兄の喉を壓へつけたのです。それを喜多雄兄さんは御自分の所爲のやうに、今思つてゐるのなら、わたし怖う御座いますわ。喜多雄兄さんが、無實の罪だつたことも知らないで青い顏して、狂人らしい目をして御自分の手を兄殺しの手としてボンヤリ見てゐることを思ふと、わたしぢつとしてゐられなくなりました。（自分の手を出して電燈の光で見ながら物狂はしい態度をする）

寺濱　そんな華奢な手で人間の生命が取れるものですか。（かよ子の手を執つて）あなたは安城家のたつた一人の相續者なんだから自重しなければいけませんよ。……わたしがこれからあなたの宿までお送りしませう。

　二三人の人間が薄暗いところを、影の如く通り過ぎる。一人の男、片端に立留つて此方を見てゐる。その男の顏は分らない。寺濱はかよ子の手を執つて歸りを促しても、

　かよ子は動かない。

かよ子　わたしはあの時幸次郎兄さんにおとなしく絞殺されてゐたら、却つて幸福だつたかも知れませんわ。逃げようと思つたばつかりにあんな恐ろしいことをして。……先生、わたしはこれからどうしたらよろしいのでせう。

寺濱　……あなたも兄さんのやうになつたんだな。（歎息する）

　立つて見てゐた男、野卑な嘲笑を洩らして行く。寺濱驚いてその後姿を顧る。

私に取つては死の恐れを減さない限りは、社會がどんな風にならうとも、眞正の幸福は得られないだらうと思はれる。冤罪で死刑に處せられようとも、正義のために犧牲的の死を遂げようとも、あるひは近親知友に看護され名醫の診察投藥を受けた果に温かい病床で眠るが如く死なうとも、死はつまり同じだらうと思つてゐる。

人間の煩惱、執着、愛と憎み、生と死、私は懷手して食を得ながら、十年二十年の昔と同じやうに今なほさういふ事を考へては心を暗くしてゐる。當今の喧しい問題でもさういふ人心の現はれとしてのみ私の興味を惹いてゐる。

（『文藝評論』の「田園雜記」より）

安土の春（三幕）

時代

天正九年三月十日頃

人物

織田信長
柴田勝家
村瀨新八
堀內三郎
四郎兵衞
小姓源吾
同　七之丞
侍女夕月
同　花野
同　若菜
老僧

（一）

湖水に近い街道。路傍に松や柳が植ゑられてゐる。桃や櫻も咲いてゐる。旅人の裝ひをした四郎兵衞（三十歲前後）、荷物をおろして、大きな松の木に凭れて居眠りをしてゐる。

安土城內の侍女、夕月（二十歲あまり）、花野（二十歲以下）、あたりの春景色に見惚れながら、うか〳〵と出て來る。

花野　（ふと氣づいたやうに、不安らしく）こんなに遠くまで遊びに出てもよろしいのでせうか。お天氣はよし、あなたのお話があんまり面白いので、ついうか〳〵とこんなところまで來てしまつて。わたし、何だか恐ろしいやうに思はれますわ。

夕月　（お轉婆らしい身振り）まあ、花野さんのお氣の小さいこと。大丈夫で御座いますよ。上樣が御參詣になつた竹生島は、こゝからは陸と海とで片道十五里もの遠いところぢや御座いませんか。たとひ、上樣が韋駄天のやうにお驅け遊ばしても、日のうちにお歸りなさる氣遣ひはありませんよ。それに、羽柴樣がお待受けなされて、賑かなお持做しがあるに極つて居りますから、今夜は、御小姓衆も御一しよに長濱に御逗留遊ばすだらうと思はれますわ。

花野　皆樣はさう仰有つて、大勢で御安心なすつて、桑實寺のお藥師樣へもお詣りになつたりしたのですけれど、留守のうちは氣をつけろと、お殿樣がお出掛けの時に、大きな聲で岩淵樣にお吩咐けになつた、あのお聲が、わたしには氣になつてなりません。

夕月　それは、あなたが御城內の生活にお馴れなさらないからですよ。わたしなぞもはじめのうちは、お上のお聲を襖の外で聞いてさへ身震ひしたこともあつたのですけれど、馴れるとそれほどでも御座いませんわ。今の時世では、この御城內に住まつてゐるほど安心なことはないのださうです。わたしの叔母は朝倉樣に御奉公してゐたために、敗軍の飛ばつちりを受けて亡くなつたのださうですわ。今の時世では御威勢のつよい信長公のお側にゐるほど、氣丈夫なことはないと、父がさう申してゐました。あなたもお迷ひにならないで、此方に御辛抱なさいましな。

花野　さうは思つて居りますけれど、…・

夕月　それに、上様は、先日京でお馬揃へを遊ばしてから、大變に御機嫌がよろしいんです。竹生島からお歸りになつたら、幸若太夫をお召しになつて舞を御覽になる手筈になつて、わたしどもまでも見せて頂けるのですから、樂みで御座いますわ。

花野　（ふと元氣づいて）わたしはまだ世間で評判の幸若太夫の舞を一度も見たことは御座いませんの。

夕月　同じ太夫の舞でも、外で舞ふ時と、信長公の御前で舞ふ時とは、舞振りがまるで違ふと、お侍衆がよく申して居ります。上様もお氣が向いた時には、御自分で小鼓をお打ちになつたり、女踊りをお踊りになることもありますのですよ。

花野　（微笑して）あのお殿様が……

夕月　（向うを見上げて）此處から見たお城の眺めの立派なこと、御覽なさい。高欄の擬寶珠が春の日できらめいて。……キリシタンのお說法で聞いた天國とかは、あんなところぢや御座いますまいか。

花野　はじめて父に連れられて此地へまゐりました時に、丁度この邊からお城を見上げて、あのやうな立派な處に御奉公が出來たならと、わたし、どんなに喜んだか知れませんでした。

夕月　同じ町人でも、このお城下の町人ほど仕合せなものは御座いませんの。（ふと旅人に目をつけて、面白さうに）花野さま、御覽なさい。この旅商人がいゝ氣持で眠てゐますこと。……わたしたちも此處で休んで、往來の旅の人でも見て、ゆつくり歸ることにいたしませう。まだ日は高いし、今日を過ぎたら、いつまた外へ自由に出られるか分らないのですから。

二人は松の木蔭に腰をおろす。旅人は薄目を開けて二人を見る。

そこへ眉目美しき村瀨新八（二十歲あまりの青年）瀟洒たる身裝をして現はれる。考へ事をしてゐる。

夕月　新八さま、何方へいらつしやいました？

新八、足を留めて訝しげに二人を見る。

新八　あなたこそ、此處で何をしてゐなさる？

夕月　風は吹かず、花は眞盛りで、ホカ〳〵と溫かくつて、こんないゝ日和は、一年のうちに、今日の外にまたとあるもので御座いませうか。

新八　それで、お前さまたちは、鬼のゐぬ間に生命の洗濯に出なすつたのか。鬼でも、今日のやうな長閑な春風に誘はれると、氣保養がてらの神詣でをする氣になるのだから。

夕月　鬼とは？……新八さまは何故そんなことを仰有る？

夕月が顏色を變へると花野はおびえた顏をする。

新八　あなたがさう思ひなさらなければ仕合せだ。（口調を變へて）わたしは、今日は愛智川べりをひとりで歩いてゐました。花も花だが、堤には若草が萌出て、空には雲雀が鳴いてゐました。わたしは、堤の上に寢ころんで元氣のいゝ雲雀の聲を聞きながら、目を開けて面白い夢を見てゐたのです。

夕月　面白い夢と仰有るのは？……あなたは岐阜の若殿樣のお供をして、甲州征伐にお出掛けなさる筈ぢや御座いませんか。目醒ましいお手柄をなさるやうに、戰場の夢を見ていらつしやつたの？

新八　ハヽヽ。さう思ひたければさう思つてゐなさるがいゝ。……わたしが、城之助樣にお願ひして安土へ來たのは、この頃、寢ては夢み醒めては思つてゐることを爲し遂げたいと思つたからなんです。ローマとかリスボアと

かは、同じ下界の都でも、安土や岐阜とは違つて、人といふ人は神の子らしく睦じく暮らしてゐるさうな。

夕月　あなたも物好きな。南蠻へお渡りになりたいと思つていらつしやるの？　オルガンチノ和尚樣にしろ、フラテン破天連にしろ、鬼か獸のやうな身體してゐるぢや御座いませんか。あんな人ばかり住んでゐるところへ、あなたのやうな美しい方がいらつしやつたら、頭から食はれてしまひますわ。異人の女子はまだ見たことはありませんけれど、さぞ雲をつくやうな大きな身體をしてゐるので御座いませう。

花野　夕月さま、いつまでもこんな處にゐて、人に見られてはいけませんから、もう歸りませう。(旅人の方を氣にする)

夕月　えゝ、もう行きませう。眞晝間、街道の眞中で新八さまとお話なんぞして。(ふと、氣にしだして立上つて)さう云へば、先日、上樣は、新八が岐阜から來たら直ぐに呼べと、岩淵樣に仰付けになつてゐました。

新八　上樣がわたしを？(顏を曇らせて)わたしのことは、誰れにも云はないやうにして下さい。

二女出て行く。新八も物を考へながら行きかけたが、ふと、旅人に目を留めて、

新八　お前さんは何處から來なすつた？

旅人　(訊かれるのを待受けてゐたやうに)わたくしは甲州から漆桶をかついで京へ商ひにまゐりまして、これから歸るところなので御座います。

新八　甲州者だなどと、大きな聲で云ふものぢやないよ。お前も生命知らずだな。遠州の武田方の高天神の城も德川勢に攻めまくられて今日にでも落城してゐるかも知れないのだ。甲州征伐の用意は大つぴらに出來上つてゐるのだ。勝頼どのがいくらジタバタしても、今となつては、籠の中の鳥も同然なのだ。お前はそんなところへ歸つたつて爲樣がないぢやないか。第一甲州境は、四方八方道といふ道は塞がつてしまつて、歸りたくも無事に歸られまいよ。

旅人　(氣樂さらに)いや、それはわたくしもよう存じて居ります。先日、京の町で此方のお殿樣のお馬揃へを拜見して居りますと、側にゐて世間話をしてゐた男が、甲州言葉で物を云つてゐましたので、わたくしは懷かしくなつて、故郷の樣子をよく訊ねました。その男は信玄公御在世の頃の御威勢が影も形もなくなつたのに諦めをつけて、御奉公先から出奔して、いゝ御主人を捜しに京へ來たと申して居りました。わたくしは、親も子も女房もないので御座いますから、世の亂れた危かしい山奥へ、わざ〳〵歸つて行かうと思つては居りません。今の世に住めば安土と、世間の人の申してゐますやうに、わたくしは、成らうことなら、このお城下で生活を立てて行きたいので御座います。……から申してはあまりに不しつけでお叱りになるかも知れませんが、あなた樣のお屋敷ででも使つて頂く譯にはまゐりますまいか。どんな御用を仰付けになつても、骨身を惜まないで御奉公をいたします。

新八　おれなどを主人と頼んでは出世する見込みはないよ。上樣にお仕へ申したらよからう。お前は身體構へもしつかりして一くせありさうだ。戰場へ出ても役に立ちさうだな。

(相手をよく見る)

旅人　御威勢の強い此方のお殿樣にお目通りいたすのは恐れ多う御座います。お馬揃への折のお姿を一目拜見しただけで、目がつぶれさうに思はれました。

新八　ハヽヽ。皆さんが衣服で脅かされるのだ。……前代未聞の馬揃への儀式だつて、大きな虎が綾や錦で着飾つて、小さな虎を引連れて驅廻るだけのことだ。(獨言のやうにさう云つてから、親しみをもつた口調で)世間では何と云つてゐるか知らんが、上樣は氣さくな方だ。お前の面つきを一目御覽になつたら、こいつ役に立つ奴だと、餘計な穿鑿をなさらないで直ぐにお召抱へになるかも知れない。さうしたら、お前も羽柴筑前どのぐらゐに出世しないとも限らないな。ハヽヽヽ。

旅人　何ぼわたくしが世間知らずの山家猿でも、そんな癡人の夢見たやうな大それたことを考へるもので御座いませうか。さつき、ホカ〴〵した天道樣のお光を浴びて、いゝ氣持で夢を見て居りますと、お女中樣のお話のうちに、あなた樣は、岐阜のお殿樣のお供をなすつて、甲州征伐へお出ましなさるとか承りましたが、若しもそれが本當で御座りますなら、わたくしをあなたのお伴になされて下さいませ。お草履を持つなり、馬の轡を取るなり、何なりと生命をかけて御奉公をいたします。

新八　さうして、虎の威を借りて、自分の生れ故鄕を荒らさうと云ふのか。(相手が氣にするのを見て)、なに、おれはお前を咎めるんぢやないよ。昨日まで莫大な知行を頒けて呉れた主人に、今日は自分の都合で弓を引くのは、當世有りうちのことなのだ。それはそれでいいのかも知れないな。……しかし、旅の人。武家奉公は、まあ止しにした方がよからうぜ。御主君から相應にお目を掛けられてゐるおれでさへ、「この大小の人斬刀は抛出して、戰爭騷ぎのないところで暮らしたいと思つてゐるのだよ。土百姓や素町人から、一國一城のあるじと成上つた人を、傍で見てゐると、あれこそ人の中の人だと羨ましく思はれるであらうが、さて成上つて見ると、さま〴〵な苦勞があるのだ。あの陽氣な羽柴どのも戰場で、水攻火攻の掛引に智慧を絞るよりは、お上の御機嫌を害ねまいと、その屈託に骨身を削つてゐられるのだ。德川どのも、虎狼の牙齒を退けるためには、惣領の信康どのに無理往生に腹を切らせた。お前も武家奉公なんぞ思立たないで、何處か安穩な土地を見つけて、こつそり生活を立てることにしろ。あの山に光つてゐる七重のお城も、いつまであのまゝ立つてゐることやら。四日市の濱で見える程のわたり(蜃氣樓)見たいなものだ。

旅人　安穩な土地を見つけろと仰有つても、安土の町の外に、何處に安穩な土地が御座いませうか。

新八　小田原か山口はまだ榮えてゐるさうだが、それとてもいつまでも安穩ぢやあるまいよ。大きな虎や小さな虎があばれてゐる世の中だ。おれも安穩な土地を搜さうと思つてゐるのだが、ロームかリスボアか……(夢見るやうに天の一方を見る)

旅人　さつきからあなた樣の仰有るやうなことを承つたことは御座いませんので何とも合點がまゐりません。……わたくしのお願ひをお聞屆け下さらぬのなら、外の奉公口を搜しませうが、戰場へ出て氣おくれのするやうなわたくしぢや御座いません。わたくしの祖父も父も、名もないもので御座いましたが、武田家御先代のお伴をして、人並の働きはいたしました。

新八　(微笑して)それはえらいな。それなら、信長公の竹生島參詣のお歸りを此處でお待受けして、直々にお願ひするといゝ。

そこへ堀内三郎、新八と同年輩で、彼れよりは質素な服裝をしてゐるが入つて來る。

三郎　新八どのは此方に來てゐられたのですか。キリシタンの學校の建築も大分捗取つてゐるから、それを見にお出でなされたのですか。建築が落成したら、あなたは御入學なさるのであらうと噂をいたして居りました。

新八　安土にセミナリオが建つたなら、早速入學して異國の學問を修業したいと思つて、城之助様にお願ひしてゐたのだが、それはもう止めにした。わたしは大望を胸に持つて、岐阜から出て來たのだが。……そんなことをあなたに話しても爲方がないな。……それよりも、此處にゐる旅の人は奉公口を捜してゐるのだが、あなたは、お世話しておやりなさらぬか。

三郎　いや、この頃は諸國からいろ〳〵な奴がやつて來る。今に安土から八幡へかけて、野にも山にも、人間がウジャ〳〵するやうになるであらう。（旅人を見詰めて）しかし新八どの、この男はたゞの商人ではありますまい。油斷のならない面をしてゐる。

新八　たゞの商人でも、何處かの落武者でも、どちらでもいゝではないか。

三郎　淺井か朝倉の殘黨が、旅商人に姿を變して、信長公を附狙つてゐると思つて見ると一興だが、（刀を拔いて、旅人の前へつきつけて）貴様は亡君の恨みを晴らさうと企んでゐるのか。

旅人　これは飛んでもないことを仰せられます。（警戒しながら）こちらの旦那様は、わたくしの身の上をよく御存じなんで御座います。

新八　（笑つて）心配するな。戲れだよ。……豫讓や景清のやうな男は昔噺の中の人物ぢやないか。しかし、それだから、上様もお仕合せだ。死んだ主人の恨みを返したい男があちらにも此方にもあつた日にや、信長公が首を百も持つてゐらせられても足りないくらゐだ。……三郎どの、脅かしはもうお止しなさい。

三郎　わたしはこの土地にすつ込んでゐたため、暫らく血のにほひを嗅がなくつて退屈してゐたのです。春の日をノラリクラリ遊び暮らしただけで、このまゝ屋敷へ歸つちや興がないと思つてゐたのだが。（刀を鞘に收めて）新八どののお言葉がなかつたら、斬り榮えのする此奴を、見のがしてなるものぢやない。

旅人　わたくしは決して迂散な者ぢや御座いません。どうぞお許しなすつて下さいまし。

旅人は二人に向つて恭しく挨拶して、荷物を背負つて急ぎ足で出て行く。

新八　可哀想に。（旅人の後を見送つてゐたが、何かを見つけたやうに當惑する）

三郎　春の日長に毎日因循としてゐちや退屈でなりませんよ。武田征伐には是非ともお供しようと思つて居ります。

そこへ、侍女若菜（二十歳ばかり）が道を急いで入つて來て、二人の青年と顏を見合せる。

新八　若菜どのはお一人で、どこへ行つてゐなすつた？　今日は若い女が供をも連れないで、よく出歩いてゐるから驚く。

三郎　天下泰平の目出度いしるしでせう。それに、今日はお上の御不在をいゝ汐時にして御城内も奥御殿はガラ空きで、御女房たちも山をお下りなさらぬまでも、二の丸までお出でなされて、春の日を樂んで居られます。

若菜　わたくしは、皆様と御一しよに桑實寺へお詣りしてゐました。只今、長老様が皆様のために御說法をなすつていらつしやいます。わたし、何だか聞きづらく思はれましたから一人でそつと聽聞の座を脫出してまゐりました。

新八　それでは、あの梅干坊主が、黴臭い佛の道を說いて、廻らぬ舌でキリシタンの毒口を利いてゐたのだな。若菜どのもなぜ桑實寺などへお詣りなされた？　先日のおたよりでは、オルガンチノ樣のお導きで、まことの道が朧に分りかけたと云つてゐられるではないか。それを、わたしはどれほど喜んでゐたか知れないのに。

若菜　わたくしの心が弱う御座いました。……わたくし、外の方のやうに、氣保養にお寺まゐりをいたしたのでは御座いませんの。新八さまは若殿樣が御供連れになつて、甲州の征伐にお出でなされると、皆さまがさう仰有つてゐましたから、お身體にお怪我のないやうに、人に優れたお手柄をおあげ遊ばすやうにと、一心にお祈りしたので御座います。

新八　（にが／＼しげに）若菜どのは何を云はれる？　古い木の株や石ころで作つた佛に祈つて御利益があると思つてゐられるのか。愚なことだ。

　三郎は二人の睦じい樣子を羨ましげに見てゐる。

若菜　長老樣のお說法を承つてゐるうちに、ふとわたくしの迷ひに氣がついて、急いで逃げてまゐりました。どうぞ勘忍して下さいまし。

新八　それに、わたしは、戰場へは行くまいと思つてゐるんです。春の光のやうにまことの神の光に包まれてゐる國をたづねて行きたいと思つてゐるんです。

若菜　それはどこで御座いますの？

新八　……ローム、リスボア、ヴェネチヤ。（あこがれてゐるやうに云ひ）高麗大明天竺よりも遠いところで、女子などの行けるところぢやないんです。

若菜　（悲しさうに）なぜ、さういふところへいらつしやいますの？

三郎　新八どのは南蠻へお渡りにならうと思つてゐられるんですか。上樣の天下統一の大事業を見ようとはなさらないで……

　そこへ、織田信長（四十八歲。黑い南蠻笠をかぶり、唐錦の服裝にて虎の皮の向はぎを腰に當つ）駿馬にまたがつて氣をせはしく入つて來て、若菜と新八とを見ると、馬を留める、三人は愕然として、匐ひつくばふ。

信長　（眉を顰めて）女郎は此處へ何しに來た？　新八、うぬも、おれの目通り許さぬさきに、どんな面してこの街道をほつついてゐた？……どいつも面を上げろ。

　三人は恐る／\顏を持上げる。

新八　今朝參着いたしましたが、上樣は御他出と承りまして。

信長　それで女郎を引張出して、氣儘な遊びをしてゐるのか。

　彼れはつか／\と新八の側へ寄つて、鞭を上げて、その顏を打つ。

新八　（痛みを忍びながら）若菜どのは桑實寺へ參詣せられて、只今偶然此處で行合ひましたので御座います。

信長　なに、桑實寺へ？

三郎　大奧の方々がお揃ひで桑實寺へお詣りになつて居ります。

信長　不埒至極だ。三郎、其方はこれから桑實寺へ行つて、一人殘らずふん縛つて來い。坊主どもが留立てしても容赦するな。急いで行け。……此奴等二人はおれが此處で成敗する。

　三郎は、ハッと答へる間もなく、一さんに、後をも見ずに驅けて行く。

　信長は馬から飛下りるや否や、刀を拔いて、すでに半ば死んだやうな若菜をさきに、新八をも、大根でも切るやうに斬倒す。

斬られると同時に、「ジェス、キリスト」と呼ぶ新八の哀切な聲が聞える。信長その聲に耳を留めてあたりを見廻す。そして、刀にしたゝる血汐を振つてゐるところへ、かの旅人が、松の木蔭から恐る／＼近づいて、死骸の上衣を取つて刀を拭はうとする。

信長（聲に心惹かれてゐた彼れも、ふと旅人に氣づいて）誰れだ？

旅人　御奉公いたしたいと存じまして、上様の御歸城をお待受申して居りました。

信長　さうか。……死骸を片付けて後から隨いて來い。

そこへ、二三人の小姓、馬に跨つてへと／＼になつて入つて來る。

信長　オヽ、源吾、七之丞、急いでおれより先へ歸つて、城外へ遊びに出てゐる女子どもをふん摑まへて、珠數つなぎにくゝつて置け。……（獨言のやうに）こんなことがあらうと思つて、長濱の饗應を打ちやつて、馬を飛ばして戻つて來たのだ。

（二）

安土城內。信長の居室。襖には瓢簞から駒の出た繪が描かれてゐる。銀燭まばゆきなかに信長は寬いだ服裝にて、夕餐の膳に向つて、盃を取つてゐる。小姓、源吾、七之丞など傍に侍す。

信長　其方たちも今日はくたびれたであらうな。

源吾　ヘイ。……上様のお姿を見失つてはならないと思ひまして、無我夢中で驅けました。

信長　おれもやがて五十になる筈だが、まだ若い時分と異はないよ。今日は一つ根氣だめしと思つて、十里の道を一息にやつつけたが、左程に疲勞もしなかつた。二十年前に桶狹間へ驅けつけた時のことが思ひだされる。……思ひだすと云へば、今日の歸り道に街道で遊んでゐた百姓の子を二人ばかり踏潰したやうに思ふが、其方たちは氣がつかなかつたか。

七之丞　わたくしも無我夢中で驅けましたから、何處の村であつたか、見分けはつかないので御座いますが、百姓共が大勢で、血みどろになつた子供を抱へて騷いで居りました。それでは、あの子が上様の御乘馬の蹄をお汚し申したので御座いませうか。

信長　人間は脆いものだな。（ちよつと感慨に打たれたやうに云つて、小姓に酌をさせて）おれが長濱泊りを止したために、其方たちに御馳走を食べ損つて殘念であらうな。秀吉のことだから、氣の利いた料理を拵へて待つてゐたであらうのに。……そのかはり、このおれの膳の物を頒けてやらう。

信長は箸を取つて、皿の肴をはさんで、源吾に突きつける。源吾は、恐縮してゐる。

七之丞　わたくしどもは、後ほど御膳部のお餘りを頂戴いたしたら存じます。

信長　馬鹿な奴だ。さあ手を出せ。小笠原流とかの禮儀作法を心得てゐるつもりか。馬鹿め。人間が食ひたくつて食ふのに儀式も作法もあつたものか。おれが許す。肴を摑んで食へ。

恐る／＼差出した二人の手へ、肴を與へる。二人は謹しやかに食べる。

信長　將軍らしく、公卿らしくと、酒を飲むにも氣取つてゐた奴等は、おれの馬の蹄にかけると、今日長濱街道で踏潰した餓鬼見たいなものだ。

そこへ、三郎が入つて來て平伏する。

三郎　仰せつけ通りに、桑實寺詣りの御女房たちを、召捕つて御城內へ連れて、歸りました。

信長　中庭へ出して、一人殘らず首を打て。

三郎　かしこまりました。……あの、桑實寺の長老樣が、お願ひの筋があつてお目通りいたしたいと、お次の間に控へて居りますが、いかゞ取計ひませう。

信長　枯木のやうな坊主に會ひたくはないが、來てゐるのなら、ちよつと會つてやらう。そこへ顏を出せと云へ。

三郎　ハイ。

三郎が行きかけると、

信長　坊主にはかまはずに、其方は早速女郎どもの成敗に取りかゝれ。一刻も猶豫はならんぞ。

三郎　仰せつけ通りにいたします。

三郎、出て行く。

信長　（小姓達に向ひ）其方どもも腕試しがしたければ、三郎の手助けをして、罪人の首を斬つて來い。

源吾
七之丞　ハイ（答へただけで座を立たない）

そこへ、老僧が珠數を手にして入つて來ようとする。

信長　そこでよい。用事を聞かう。

老僧、襖の外で平伏する。

老僧　上樣のお慈悲をお願ひ申したう存じます。

信長　それはならぬ。重ねて申すな。

老僧　せめて、皆樣のお生命だけはお助け下さいますやう、愚僧の身にかへてもお願ひ申します。

信長　くどく云ふな。

老僧　皆さまは、上樣の御武運を佛に祈願してゐられました。その心根をお酌取り遊ばして。

信長　タハケたことを申すな。おれの武運が木や石に刻んだ佛と何の關係がある？　おれはおれの力で、手向ふ奴を片つぱしから征伐して來たのだ。其方たちに現世の勝利や死後の冥福を祈つて貰はうとは、夢にも思つてゐないのが、其方にはまだ分らぬのか。うつけ者め。

老僧　愚僧の身につきましては兎に角。……上樣も竹生島へ御參詣遊ばした當日で御座いますから、か弱い女性の方々を御成敗遊ばすのはいかゞかと存ぜられます。

信長　何だ〳〵。おれに意見するのか。おれは怒りたければ怒り、斬りたければ斬るのだ。それがどうしたといふのだ。

老僧　左樣なれば、罪をお恕しなさりたく思召してお恕し遊ばしますやうに。

信長　くどい。……それほど女郎どもを庇ひたければ、其方も一しよに冥土へ行つて、極樂へでも淨土へでも、勝手なところへ連れて行け。……源吾、この坊主を引立てて、三郎の手に渡して首を打たせろ。おれの目ざはりだ。早く引立てろ。

源吾、直ちに立つて行つて、老僧を捉へる。

源吾　御上意だ。お立ちなされ。

邪慳に老僧を引張つて出て行く。

信長　（ふと耳を留めて）七之丞、あれを聞け。中庭から泣喚く女子の聲が聞えて來るではないか。……人間は脆いものだ。（盃を口にしたが前へ抛出して）酒がぬるくなつた。温めて來い。

七之丞、出て行く。信長、何かの聲を拂ひのけるやうな態度をする。

信長　（獨言）新八ももうこの世にはゐないのだな。……人間は脆いものだ。

そこへ源吾、入つて來る。

信長　坊主は三郎へ渡したか。

源吾　たしかに三郎どのへお手渡し申しました。

信長　あんな枯木のやうな坊主は、斬つても血

は出まいな。

源吾　柴田修理亮様が只今參着いたされました。明朝お目通りがかなひませうかとお訊ねになつて居ります。

信長　（喜んで）修理亮が來たか。丁度いゝところだ。直ぐに呼べ、……それから膳部は一先づ次の室へ下げて、其方達はおれが呼ぶまでそちらで休息しろ。

源吾、膳部を持つて出て行く。信長、長押から槍を取下して、幾たびかしごく。

そこへ、柴田勝家、五十二歲、無骨な身裝）が小姓に導かれて入つて來て、槍の手なみに感心しながら座に就く。

信長　よく來た。（槍を收めて）近う寄れ。今まで京で遊んでゐたのか。

勝家　上樣の御威光をもちまして、京の町も靜謐になりましたので、此たびは、罷出ました次手に、神社佛閣名所古跡が見物をいたしました。それよりも御馬揃へのお催しは前代未聞言語に絕した御盛況で、老後の思出、これに過ぎたことは御座いません。上樣の御威光によつて、天下がかやうに泰平に相成りましては、わたくし如きは、もはや御馬前の御奉公をいたす場合もなくなりました。先日拜領いたしました姥口の釜に湯を滾らして、北國の遲櫻でも眺めて、この年までの手柄話でも若武士に聞かせることにいたしませう。

信長　ハヽヽ。其方は愚直だから、そんなことを云つてゐられて氣が樂だ。何が天下が治まつてゐる？

勝家　高天神はまだ開城いたしませぬか。

信長　いや、昨日家康から早打を寄越して、あの手強い城も今日か明日かの生命だと知らせて來た。あの城が潰れたなら武田四郎も羽をもがれた小鳥同樣だ。あの武田の小伜なぞ、おれは最初からさして心に掛けてはゐないのだが、中國の毛利勢には一骨折らされさうだ。四國には長曾我部がゐる。九州には島津が居る。腹に一物ある高野の坊主どもの始末も何とかしなければならない。（焦込むやうに云つて）北國の景勝などは其方に任せてゐても安心だが……

勝家　上樣もお心弱うおなり遊ばしましたな。

（微笑する）

信長　何だと。

勝家　今日の上樣の御威勢では、毛利如きは春の日に照らされる殘雪のやうなものでは御座りませぬか。（獨言のやうに）羽柴め、幸福な男だ。中國征伐を一手に引受けやがつて。

信長　筑前には筑前の役目があるのだ。其方はおれに代つて北國を押へてゐて呉れ。（勝家の顏を見詰めて）つい忘れたが、修理亮は今年幾歲になる？

勝家　五十二歲に相成ります。

信長　さうだつたな。おれも人間の定命が近くなつたのだ。

勝家　でも、上樣は十年の昔と今日と少しもお變りにならないぢや御座いませんか。わたくしなどはこの通り頭が白くなりました。……でも、元氣だけは昔と變らないつもりで御座いますが。

信長　おれも元氣だけは、今時の若い奴等には負けないつもりだが、年齡は年齡だ。おれも夢幻の世の中に、五十間近まで無事に生きて來たのだが、年齡のことを考へると、何となく氣が焦かれる。毛利や長曾我部をわが膝の前に匐ひつくばはせるのは、あと一年か二年か。おのれが定命に達するまでには日本統一の大業も略目鼻がつくと、おれは信じてゐる。……しかし、修理亮、このことは今日

はじめて其方に話すのだが、おれは日本統一だけで滿足は出來なくなつてゐるのだ。高麗や大明に馬を駈けてゐる夢を、おれは毎夜のやうにこの頃見てゐるのだ。

勝家　（驚いて）では上様は、御馬揃へを異國の都で御催しなされたいので御座いますか。

信長　異國と云つても、高麗だけではない、明だけではない。先日も愛智川べりへ鷹狩に行つた歸りに南蠻の寺へ寄つて、伴天連どもの異國話を聞いたので、ひどく面白い思ひをしたのだが、その時から、南蠻の國々をも殘らず、おれの手のうちに收めたくなつたのだよ。

勝家　（呆れて）わたくしには、南蠻の國々は、佛者の説かれる十萬億土と同樣な遠い處にあるやうに思はれます。

信長　遠くも近くも下界の中にあるのぢやないか。

勝家　わたくしども雪の中に埋つてゐる田舍武士は、異國のお宗旨は薄氣味が惡いやうに思はれますが、上様には御信心遊ばすので御座いますか。

信長　日本の佛も異國の神も、おれに信心が出來ると思ふのか。しかし其方も明日にも伴天連に會つて聞いて見ろ。南蠻の坊主どもの話は、日本の坊主どもの古くさい話よりや、どれほど面白いか知れやしないぜ。

勝家　城之助様や三七様をはじめ、當地の若い方たちは、伴天連のお宗旨に凝つてゐらせられると承りましたが、それは本當で御座いますか。

信長　若い奴等は直ぐに珍らしいものにかぶれるが、淺はかなものだ。……おれは伴天連の説法はたび〳〵聞いた。……聞いてゐると、おれはそのジュースといふ異國の神と角力を取つて見たくなつたのだ。異國の神の前に匍ひつくばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。

勝家　それはわたくしも御同意申上げます。角力なら、わたくしとても異國の神と取組んで負けることぢや御座いません。（快げに笑ふ）

信長　（快げに笑ひ）おれも今日はうかと夢話をしてしまつたな。……さうだ。明日は其方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走しよう。温かい春の宵だ。誰れかに舞はせて見せようか。

信長は手をたゝく。源吾、入つて來る。

信長　膳部を調へて來い。修理亮にも相伴をさせるのだから、その用意を申附けて來い。それから酒興を助けるやうに囃子をも呼べ。三郎はどうした？　死骸の後片付は他の者にまかせて、直ぐに此方へまゐれと云へ。骨折賃に鬼柴田の酒の相手をさせて武勇にあやからせてやると申傳へよ。

源吾、出て行く。

勝家　御城内に何か變事があつたので御座いますか。

信長　なに、些細なことだ。其方などに話すほどのことでもないよ。

勝家　今日は御城内は何となくお淋しいやうでは御座いませんか。

信長　この頃の京の町の賑ひを見た目には、安土の町はいくらか淋しく見えるのかも知れないな。淋しいと云へば、おれは何ぼ歳を取つても、樂隱居して公家衆のやうに歌でも作つて、泰平を樂しむ氣持にはなれないよ。一日でもぢつとしてると氣が滅入つて來る。今日も長濱から竹生島まで五里の海上が退屈でたまらなかつた。小波も立たない鏡のやうな湖水は、見てゐて退屈なものだぜ。龍卷でも起ればいゝと思はれたよ。だから、南蠻の坊主どもが、世界のはてから萬里の波濤を凌いで

來た話を聞くと、おれの心が湧立つのだ。

勝家　上樣にお目通りいたすたびに、勝家の全身にも活氣が湧いてまゐります。

そこへ、三郎が入つて來る。

信長　罪人どもの首は刎ねたか。

三郎　仰せの通りいたしまして御座います。死體は右近どののお計ひで、御新參の四郎兵衞どのなどに運ばせて、桑實寺へ埋葬いたすことにいたしました。

信長　左樣か。（輕く首づいて）さつきから其方に訊ねたいと思つてゐたが、新八と若菜とは云ひかはした仲ででもあるのか。隱さずに云つて見ろ。

三郎　わたくしはよく存じませんが、今日の二人の話を傍で聞いて居りますと、二人の間には何か譯があるやうにも思はれました。

信長　おれもあの時、咄嗟にさう睨んだのだ。二人はどんなことを云つてゐたか、修理亮への御馳走に話して聞かせたらどうだ。今時の若い男女の戀話は、おれや修理にも皆目見當がつかないのだよ。

勝家　新八とは村瀨左門の遺子のことで御座いますか。

信長　さうだ。城之助がおれにないしよで引立てゝゐた奴だ。

勝家　文武兩道に勝れてゐると承りましたが。……その若者は御城内へまゐつてゐるので御座いますか。

信長　おれが城之助に命じて新八を呼寄せたのは、戰場へ引連れるためではなかつたのだ。あれ新八には敦盛の舞を舞はせたかつたのだ。あれが舞つたなら、おれが鼓を打つてつかはしたのに。幸若太夫や清洲の友閑は、いつ舞はせても莫はうまいが、新八なら、敦盛が生れかはつて眼前に現はれたやうであらうな。

勝家　新八どのは舞も堪能なので御座いますか。

信長　知らなければ習はせる。敦盛の舞なら太夫の手をかるまでもない、おれが傳授してやる。……三郎、其方のまづい面では、牛若にも敦盛にもなれまいな。人の戀話を指をくはへて立聞きしてゐるのが相應してゐる。（嘲笑をもらす）

勝家　武士たるものは雛形などどうでもよろしいでは御座いませんか。三郎どのも、上樣へさうお答へなさい。

信長　修理は自分の身に引くらべて、左樣なことを云つてゐる。其方も大勢の美女や少人を弄んで來たのであらうが、當世の若い男女のやうな、まことの戀の情は知らないだらう。

勝家　これは異た事を仰せられる。勝家とても戀の口說は身に染みて心得て居ります。

信長　これは面白い。話して見ろ。鬼柴田の戀物語は面白い。

そこへ、小姓たちが酒肴を運ぶ。

信長　皆な聞けよ。殿軍にかけては天下に雙のない鬼柴田が、戀物語を聞かせてくれるぞ。

信長、小姓をして勝家に酒をすゝめさせる。勝家、鯨飮す。

勝家　（生眞面目で）まだ三郎どののくらゐの若さで御座いました。はじめて上洛いたしました時、供をも連れず、吉田山あたりを遊び歩いてゐましたところ、上﨟とは思はれませぬ女房が、白綾の肌着に平絹の袴を裾短くつけて、薄色の短冊をさげて、小童を一人連れて宮司の家へまゐるのを見つけました。あまり床しく思はれたので、その女房のあとを隨けてまゐりますと、女子の方でも氣附いた目でわたくしの方を見返りました。わたくしは目はまばゆく胸は騷いで、心も空になりました。流石は京の町だ、那古野や清洲の田舍

町とは違ふと思ひましたが、その女房の姿は今でもまざ／＼と、わたくしの目さきにちらつくので御座います。

信長　女子は京の女子に限るのだ。それから其方はいかゞいたした。その女房と戀仲にでもなつたのか。

勝家　いや、それは勝家一生の心殘りのある思出となりました。その日はうか／＼と宿へ歸り、あくる日から毎日、吉田山あたりを夢心地でうろつきましたが、再び行會ふことは御座いませんでした。

信長　權六も腑甲斐ない奴だな。掟も法度もない市街にゐて、何の遠慮が入るものか。なぜその女房を引かついで戻らなかつた？

勝家　恐入りました。

信長　權六と云つてゐたその頃の勝家は、おれの弟の信行に加擔して、おれを殺さうとしたのではないか。どんな身分の女であらうとも、女の子の一人や二人、奪つて來るのを遠慮するには及ぶまい。……三郎などは知るまいな、この勝家も、三十年の昔にはおれに手向つて、おれを十死一生の危い目に會はしたのだ。おれは負けなかつた。おれが勝つたからこそ、勝家も頭を剃つて詫びに來た。母上のお取做しで罪を許して、おれの臣下に加へてやつた。それが今では織田家第一の忠臣になつてゐるのだから不思議ではないか。……三郎、其方たちはまだ若いから知るまいが、これが世の中だ。おれが强かつたからだ。おれに力があつたからだ。おれの力にヒヾが入つたら、おれも最後だ。おれの足許からでも敵が飛出して來るのだ。

勝家　若い昔のことを仰せられてはわたくしの身體にも冷汗が流れます。大罪はお許し下された上に、三十年の間、須彌大海にもたとへられぬ御高恩を蒙つたわたくし、未來永々、弓矢八幡、日本はおろか、南蠻の神にまで誓をかけ、上樣に忠勤を怠ることは御座いませぬ。この勝家を筑前などと御同樣に御覽遊ばされては、勝家も御恨みに存じまする。

信長　舊弊な臺詞は止めにしろ、おれは誓言はきらひだ。たつて誓ひたければ、織田信長にかけて誓へ。佛も神も踏みにじつた信長の力にかけて誓へ。力のあるうちは神と角力の取れる信長だ。力の衰へた信長は、藁人形の内大臣だ。鳥おどしにしきやなりやしないよ。ハヽヽ。室町の案山子將軍の喜びさうな臺詞は止して、今夜はうんと飲め、おれが酌をしてやらう。醉つて槍踊りでも踊つて見せろ。

信長、勝家に酌をする。勝家、感謝して受けて快く飲干す。

勝家　冥加にあまるお持成しのお禮として、わたくしが無樣な舞の手振を御覽に入れませう。踊り子たちの支度の出來るまでのお座興として御覽下され。

信長　修理亮の舞は珍らしい。舞つて見せろ。

勝家　ハツ。

勝家、立つて謠ひながら舞ふ。

「この世はつねの住家にあらず、草葉に置く白露。水に宿る月よりなほあやし。……人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を受け滅せぬもののあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは口惜かりき次第ぞと……」

信長、感に堪へ恍惚として見てゐたが、ふと、

信長　そこで止めろ。それで十分だ。

勝家、舞を止めて平伏す。

勝家　見苦しきものを御覽に入れました。

信長　いや面白かつた。其方がかやうな隱し藝を有つてゐるとは思ひもつかなかつた。

勝家　上樣の敦盛の舞を見やう見眞似に覺えましたので御座います。

信長　（恍惚として）人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり――（と舞つて）一たび旗を上げると、百萬の人馬を集めることの出來るおれも、明日とも云はず、今夜のうちに誰れかに寢首を搔かれないともかぎらないのだ。（と云つて、座中をじろりと見渡して、三郎に目を留め、）三郎、其方たちは修理亮の敦盛の舞を見てゐたのであらうが、おれは新八の敦盛の舞を見てゐたつもりだ。其方はあの時、なぜ新八と若菜とをおれの目から遮らなかつた。新八は其方を恨んでゐるぞ。人の寢首でも搔きさうな面をしてゐやあがつて。

信長は、さう云ふや否や、つと立つて、長押の槍を取りおろし、

信長　この鋒先を、除けられるなら除けて見ろ。其方生死の境だ。

三郎、突きつけられる槍の穗先を外して、

三郎　御免遊ばせ。上樣の御馬前で討死いたすまで、三郎の生命を三郎にお預け下さいまし。

信長　よく云つた。今夜は許してやるから、勝家にあやかつて、戰場で功名をしろ。

勝家　（不思議さうに）新八どのはどうかしたので御座いますか。

信長　あの男はもうこの世にはゐないのだ。……人間は脆いものだな。

勝家　（合點の行かぬらしく）御意に御座います。

信長　（小姓たちに向ひ）今夜は踊りは止めにするから、さう云つて來い。勝家の舞だけで澤山だ。

（三）

その翌日の早朝。

城内の庭園の一部。

四郎兵衞、仲間男らしい新しい服裝をして、庭を掃いてゐる。

そこへ、三郎が出て來る。

四郎兵衞　お早う御座います。

三郎　お前こそ馬鹿に早く起きて働くぢやないか。忠實な働き振りが上樣のお目に留つて、今に出世するだらうよ。

四郎兵衞　わたくしなんぞ、大した望みは持つてゐやしません。寒い思ひ、ひもじい思ひをしないで、今日がおくれゝば、それで滿足して居ります。

三郎　口先ではそんなへり下つたことを云つてゐても、腹の中では、天下を望んでゐるんだらう。しかし、お前は運がよかつた。昨日いいところで上樣のお目にかゝつて。

四郎兵衞　さう思つて喜んでは居りましたが、何だか寢醒めが惡う御座いますよ。あの時新八さまとかは、わたくしに親切に御意見を聞かせて下すつた上に、わたくしがすんでのことにあなた樣に生命を取られかけたところを助けて下すつたのですから、わたくしに取つてはあの方は大恩人なので御座います。その大恩人が、どういふ罪があるのか存じませんが、上樣のお手打になつたのぢや御座いませんか。……

三郎　本心からさう云つてゐるのか。どうも眞に受けられないよ。おれが刀を突付けて脅かした時に、お前は上べだけは驚いた風をしてゐたが、腹の中は泰然自若としてゐた。おれはお前の度胸を見屆けたつもりだ。

四郎兵衞　ハヽヽ。それは、今の時世に、刀や槍の光に目が眩むやうぢや生きてゐられませんからな。……しかし、今後はあんな怖い脅かしは、眞平御免蒙りますよ。

三郎　昨日の無禮は謝るよ。おれも街道でお前

に會つた時には、血のにほひに饑ゑてゐたのだが、天滿顔面、いやな首斬役を仰付かつた上に、自分の土手つ腹まで、槍の穂先で抉られようとしたのだ。それで、昨夕は變な夢に襲はれ通しだつたが、朝の冷つこい風に當ると、おれの頭もやうやく自分の頭のやうになつた。……あ、何處かで鶯が鳴いてゐる。

四郎兵衛　今日もいゝお天氣で御座いますな。此處から湖水を眺めますと、繪のやうに思はれます。

三郎　たとひ繪のやうでも、おれたちは此處の生活には厭いてしまつた。あいたのは今日にはじまつたことぢやないが、今日は格別お城仕ひがいやになつたよ。

焦れてさう云つてゐるところへ、花野が入つて來る。

花野　三郎さま、上樣がお召しで御座います。

三郎　え。上樣はもうお目醒めになつたのですか。

花野　三郎を呼べと、お寢間のうちで仰せられたさうです。

三郎　早朝わたくしに御用のあつた例はなかつたが……（訝しげに思ひながら入つて行く）

花野　（四郎兵衛に近づいて）あなたは昨日街道で荷物をおろして居眠りをしてゐた方ぢやありませんか。

四郎兵衛　左樣です。あなたが今一人のお方とお話をなすつていらつしやるのを、居眠りをしながら、いゝ氣持で承つて居りました。

花野　あの時の旅の方が御城内に御奉公をなさらうとは思ひませんでした。

四郎兵衛　昨日のお連れの方も此方にいらつしやるんで御座いませうな。

花野　（親しさうに）それが、わたしたち二人ともに仕合せだつたのですわ。皆樣と御一しよに桑實寺にお詣りしないまでも、あの街道で、もう少し長く休息してゐたなら、若菜さまと同樣な、恐ろしい目に會つたのに違ひありませんの。

四郎兵衛　ほんたうにあなたはお仕合せで御座いました。若菜さまとかはあんなにお美しくつて、お歳も若くつていらつしやつたのに、おいたはしい目にお會ひなされたが、でも、戀しい方と御一しよにお手打になつたのですからお心殘りは御座いますまいよ。

花野　それでは、ほんたうに新八さまは若菜さまと睦じいお話をしていらつしやつたんでせうか。夕月さまはじめ、お知合ひの方は、それはまことか空言かと、疑つていらつしやるんですけれど。

四郎兵衛　いや、わたくしは松の木蔭で、すつかり立聞きをいたしましたから、よく存じて居ります。（興に乗つて）天が裂け地がわれても、二人の仲は變らないと云つてゐました。眞晝間街道の眞中であゝいふやうなお睦じい樣をお見せになつては、上樣が御立腹遊ばすのは御無理も御座いますまい。

花野　（昂奮して）そんなはしたないことを云つて、何方かのお耳に入つちや大變ですわ。あなたのためにならないからお愼みなさいよ。

四郎兵衛　恐入りました。……でも、新八さまはわたくしどもでさへ惚々するやうなお美しい方で御座いましたな。お姿がお美しいばかりではなくつて、お氣立ては優しくつて武藝もお出來になるに違ひない。上樣のなされ方もあんまり無慈悲ぢや御座いませんか。

花野　さう思ひなさるのなら、あなたは何故この御城内に御奉公をなすつたのです。

四郎兵衛　食へないからでさあ。（投付けるやうに云つて）明日の日お上の氣紛れで、首が

胴から離れようとも、今日食へなきや困りますからな。いや、危い綱渡りだ。

花野　たゞ御飯を頂くためだけの御奉公なら、こんな恐ろしいところにゐなくつても、よささうに思はれますけれど。……あなたがほんたうにその氣でゐなさるなら、今夜にでもわたしを連れて兩親の家へ送屆けて下さいませんか。兩親は京の町外れで豐かに暮らしてゐるのですから、あなたに相當のお禮はいたしますわ。

四郎兵衛　飛んでもないことを仰有る？　わたくしばかりではない、あなたやあなたの御兩親がどんなお咎めを受けるか分りません。

彼れは、あたりに目を注いで、花野には取合はないやうにして掃除に取りかゝる。

そこへ、夕月が入つて來る。

夕月　花野さまはそこで何をボンヤリ考へていらつしやるの？

花野　何も考へてやしませんわ。

夕月　危い生命を助かつたらばこそ、今日一日でも、こんな美しい春景色が見られるのぢやありませんか。……三郎さまも昨日のお手柄の御褒美に、上様から何か拜領なさるのですつて。

花野　三郎さまはどんなお手柄をなすつたのでせうか。

夕月　それは本國寺參詣の方をお召取にいらつしやつて、首斬役までも首尾よくお勤めなすつたからぢやありませんか。

花野　武士衆の上様への御奉公は、そんなことなので御座いませうか。昨夕中庭から聞えて來たあの氣味の惡いうなり聲が、三郎さまのお手柄になつたのでせうか。不斷は陽氣だつた桂木さまや朝霧さまの、今際のお聲は、わたしの耳に染みついて、何時までも離れませんわ。……夕月さま、どうぞあなたから岩淵樣へお願ひなすつて、わたしがお暇を頂いて、兩親の家へ無事に歸られますやうにして下さいまし。（歎願する）

夕月　（呆れたやうに）お氣の弱いにも程がある、……あなたがお手打になるのぢやなし、取越苦勞をなさらなくつてもいゝぢやありませんか。今の時世では、あなたの御兩親のお家よりも、この御城内にゐた方がどれほど安穩であるか知れないんですわ。日本の内でも、信長公のお城だけは、敵に攻められる氣遣ひはないんですから。

花野　あなたは御親切にわたしに力をつけて下さいますけれど、わたしはどうしても恐ろしくつて、よく晴れた春の日も暗闇のやうに思はれますの。そこで鳴いてゐる鶯の聲も昨夕の中庭から聞えた氣味の惡い聲のやうに思はれますの。（恐怖に震へる）

夕月　あなたはそんな聲を正直にお聞きになるからいけないの。わたしなんぞ、兩手で耳を壓へて、いやな聲を耳に入れないやうにしてゐるんです。さうすれば、大風の吹通つたあとも同樣になるんですもの。

四郎兵衛、さつきから箒の手を休めて、二人の方を見てゐたが、

四郎兵衛　昨夕は御奉公はじめに、大勢様の死骸の跡片付をさされましたが、これぢや武家奉公も隱亡のやうで御座いますな。新八さまの仰有つたこともほんたうだ。

夕月　新八さまはどんなことを仰有つたの？

四郎兵衛が何か答へようとしてゐるところへ、三郎、前とかはつた立派な身づくりして、馬を牽いて出て來る。

三郎　（得意らしく）おれは、岐阜のお城へお使者として出立するのだ。大切な御用を承つてゐるのだ。

これ見よと云はぬばかりに、所謂武士らし

い氣取つた態度をして、馬に乘つて、

三郎　上樣御寵愛のお馬に跨つて、春の街道を岐阜まで驅付けるのだ。おれが使者の役目を果すと、天下にいかなる騷ぎが起るか、四郎兵衞、よく見て居れ。（芝居の武士らしく氣取つて云ふ）

四郎兵衞　無事に行つていらつしやい。（手輕く云つて挨拶する）

三郎、わざと庭の中を一廻りしてから、馬に鞭打つて驅出す。

四郎兵衞　三郎さまはうまくやりましたな。（羨ましさうに見送る）

花野　また戰がはじまりますの？

夕月　だからこの御城內にゐるのがまだしも安心なんですわ。

四郎兵衞　大戰がおつぱじまつたら、おれも、どうかして自分の手で死骸の山を築きたいものだ。他人の拵つた死骸の跡片付だけぢや詰らない。（獨言のやうに云ふ）

鶯鳴く。

私は織田信長の一生やその時代について興味を感じてゐる。それに關する書類を可成り讀んでゐる。それで、信長の一生を題材として長篇の小說か戲曲かを書かうと、かねて企ててゐたのであつたが、それは手つ取り早く運ばないので、ふと思ひついて、短いものを書くことにした。

三月十日、信長御小姓衆五六人召しつれられ、竹生島御參詣、長濱羽柴筑前の所まで、御馬にめされ、これより、海上五里、御舟にて御社參、海陸共に片道十五里の所を、日の內に上下三十里の道、御歸城なされ希代の題目也。しかし御機力も餘人にかはり、御達者に御座候の處、諸人奉感候也。

遠路に候へば、今日は長濱に御逗留候はんと、何れも存知の處、御歸り候て、御覽候へば、御女房達、或は二丸まで出られ、或は桑實寺藥師參りも有、御城內は行きあたり、もだえ焦れ、仰天、無限、則ちくくり縛り、桑實寺へ女房共出し候と、御使を遣はされ候へば、御慈悲に御助け候へと長老詫事申上られ候へば、其長老をも、同時に御成敗候也。

蘇峰氏の「近世國民史」によつて教へられた、信長の最も正確なる生活記錄である太田牛一の「信長公記」中の一節を種子として空想を逞しうしたのであつた。空想劇であると云つても、私は當時の時世や信長の一生については、可成り知つてゐるのだから、自ら歷史の片影がそこに現はれてゐるだらうと思ふ。

信長が無造作に人を斬るのを、私の好みから恣にさうさせたやうに、新潮合評會で云つてゐた人があつたが、信長は時として、蘇峰氏の所謂「血に渇した厲鬼」の如くやたらに人を斬つたものだ。小山內薰氏の「吉利支丹信長」にも出てゐるやうに、安土城新築の際には、信長自身白刃を提げて監督して、仕事をなまける人夫を斬らうと目を配つてゐたのだ。

しかし、これまでと同樣に、「安土の春」だつて書きつ放しである。筆を採りはじめた時に、結末がどうなるかさへ分つてゐなかつた。戲曲や長篇小說について、豫め立案構圖を微細に定めてかゝることは、私には出來ない。だから實際の上演に際しては、隨分差支へが起るだらうと思ふ。

（『文藝評論』の「人形芝居など」より）

歡迎されぬ男

人物

染井　久三（三十歳前後）
伊東　秀雄（三十餘歳）
大山　明三（六十五六歳）
大山　治助（明三の次男、二十五六歳）
夏　　江（久三の妻、二十六七歳）
く　に　子（秀雄の妻、三十歳くらゐ）
お　ち　か（二十四五歳）
その他數人

初夏の頃

（一）

本郷彌生町大山明三宅の應接室。以前醫師の家だつたので、患者の待合室であつた部屋が應接室になつてゐる。疊の上にテーブルが置かれて、椅子が二三脚。壁に添つて、青いクションのついた長いベンチが置かれてある。大地震のための破壞の跟がまだ殘つてゐる。

染井久三（三十歳前後、風采の揚らない貧弱な男で、質素な洋服を着てゐる）ベンチに横はつて新聞を讀んでゐたが、退屈したらしく、欠伸をしながら起上つて、部屋の中をうろついてゐると、上手から、おちか（二十四五歳、大山の緣者だが、貧しいために、此家に寄寓して下女同様に働いてゐる）が、風呂敷をもつて買物に行かうとして庭へ出て來る。

久三はおちかの顏を見ると、微笑して庭の方へ寄つて、

久三　何處へ行くの？

おちか　牛肉屋まで。

久三　もうそろ〳〵お午飯支度か。僕も大分腹が減つたが、牛肉の御馳走になれるかしら。

おちか　さあ、どうですかね。（卒氣なく云つて行過ぎようとする）

久三　ちよつとお待ちよ。（おちかを呼留めて）僕は聞きたいことがあるんだよ。

おちかが足を留めると、久三は端近く乘出して、相手をも側へ寄せて、

久三　（あたりを憚るやうに）治助さんの結婚問題が大分進んでるさうだが、どうなつてゐるんだね。伯父さんは今度は望みを囑して、纏めようとしてゐるさうだが、どうなつてるのかしら。治助さん自身はどんな考へでゐるのかしら。

おちか　（不愉快さうに）あなたはそれを聞いてどうなさるの？　どうだつていゝぢやありませんか。あなたには御自分の御用がいろいろおありなさるでせうのに。

久三　いくら僕が忙しくつても、人の結婚の噂を聞くぐらゐの餘裕はあらあね。おちかさんがさうツケ〳〵邪慳な返事をするのは少し可笑しいね。……僕がこの頃一家團欒の茶の間へ入れて貰へないで、こんな殺風景な應接室でボンヤリ待たされてゐるのを、おちかさんだけは同情して吳れてもよささうなものだが。

おちか　（少し機嫌を直して）でも、こゝの家では、一家團欒の樂みなんか、影もありやしませんわ。それはあなたも御存じなんだけれど、

この頃はことに乾燥無味なんです。“dry”“icy”あるひは氷の如き生活……久三さんこそ、室借り生活をしていらつしやつても、一家團欒のお溫かい家庭を樂んでらつしやる譯ぢやありませんか。

久三　お世辭にでもそんなことを聞かされるのははじめてだな。だけど、一家團欒でも、お溫かい家庭でも、金がなくちや駄目だね。僕の求めてゐる金錢は、極めて僅少なものなんだけれど。

おちか　今日も、そのお金のことでいらしつたの？

久三　「今日も」とはひどいね。僕はこの前來た時にも、金錢の無心なんか一言も云やあしなかつた。今日だつて、借金をしに來たのぢやない。僕の貧相な顏はいつも無心顏や乞食面に見えるのかな。

おちか　へえ。それは不思議ですわね。伯父さんも伯母さんも、久三が金を借りに來る〳〵とたび〳〵云つてらつしやつたから、わたしもさうとばかり思つてゐました。……それにあなたもお金の御用でもなければ、こんな家へいらつしやる必要はないぢやありませんか。

久三　成るほどね。金でも借りるためでなければ、僕がこんな家へ何しに來るのかと、おちかさんが思ふのも無理はないね。（大いに感じたらしく）僕は此處の伯父さんから金を借りようなんて、そんな不可能なことは思はなくなつてるつもりだが、腹の中で金が欲しい金が欲しいと思つてゐるから、その思ひが自ら顏付や言葉の端々に現はれるのかも知れないね。

おちか　でも、あなたなんか男だから、いくらでもお金の取れる仕事が見つかるでせうのに。

久三　僕の家の奴がよくさう云ひますよ。男のくせにと云つて、我々男子をケナスのが女の常識なのかも知れないが、僕から云はせると、當節は女の方が金の蔓を摑まへることが手易いんぢやないだらうか。おちかさんほどの婦人がこんな家で牛肉買ひなんかに使はれてくすぶつた生活をしてゐるのを、僕は不思議に思つてるんだ。

おちか　でも、わたしたちに適當したいゝ仕事が何處にあるんでせう。あなたが御存じなら敎へて下さいね。

久三　さうだなあ。戲談にも僕に職業の相談をしてくれる人は、あなたくらゐなものだ。……人間の職業はいくらでもありさうで、さて考へて見ると無いものだね。やつぱりこの家で辛抱してるのが一番いゝんだらうな。

おちか　……こんな天氣のいゝ日曜に、お午餐のお惣菜の買出しに出掛けるなんか、こんな詰らないことつたらありやしない。

久三　ハヽヽ。治助さんの結婚話を聞かうと思つたのに、あなたが云はないものだから、所帶染みた詰らない話になつてしまつた。……まあ、早くお使に行つていらつしやい。僕に好意を持つてるおちかさんには、もつと面白い話を聞かせたいんだが、僕にはそんな面白い話の持合せは全くないんでね。

おちか　ほんとに愚圖々々しちやゐられない。（ふと我に返つたやうに云つて、久三の側を離れて）御ゆつくりしていらつしやいと云ひたいけれど、あなたは、此處の家では、歡迎せられないお客様なんですからね。

久三　それはあなたに注意されるまでもないことだ。何處へ行つてもあまり歡迎される男子ぢやないことは、御當人が百も千も承知してゐるよ。兩親がかういふ風に僕を生みつけたのだから、今更ジタバタしたつて爲方

がない譯さ。

おちか　あなたが其處にさうしていらつしやるのを見ると、病人がお醫者の家へ來て御診察の順番を待つてゐるやうに見えますよ。（笑ひながら云つて行きかける）

久三　らまいいやがらせを云つたね。（淋しく笑ふ）

おちか、下手へ入つて行く。久三、何か呟きながら、ベンチに腰を掛ける。と、そこへ明三（六十五六歳、體格は逞しいが、リューマチスを病んで弱つてゐる）が足を引摺るやうに歩いて、訪問者島田榮（四十歳くらゐの立派な男）を見送つて出て來る。久三立上つて、二人に向つて一しよにお辭儀をする。

島田　オヽ、染井さんでしたか。（立留つて挨拶して）この頃はどちらへお勤めになつていらつしやる？

久三　お聞きに入れるほどのところぢや御座いません。

明三　（島田に向つて）染井は丸ノ内の信託會社に出てゐます。今度は落着いて勤まりさうです。

島田　それは結構です。……ちと、お遊びにいらつしやい。

島田、沓脱ぎへ下りる。明三は足のだるさを忍んで玄關先に立つて、客が靴の紐を結ぶのを待つてゐる。久三は疊の上に坐つて丁寧に見送る。

島田が出て行くと、明三は、苦痛を感じてゐるやうな顏付をして、椅子に腰をおろす。久三、明三の樣子に氣を留めながら、

久三　伯父さんはこの頃氣分がよくないんですか。

明三　ウヽン。陽氣の加減で持病が出ていけない。去年まではこんなぢやなかつたのだが。

久三　陽氣の加減と云つても、この頃は晴天續きで溫かくて、一年中の一番いゝ時節ぢやありませんか。

明三　お前たちにはよくつても、おれの身體にはよくないよ。

久三　それは病氣をもつてる人には、いゝ時候といふものはないんでせう。金に不自由してゐる人間にもいゝ時候はないんでせうがね。

明三　（相手の言葉には耳を留めず、外を見ながら、少しの間默つてゐたが）おれは今朝から二三人の來客に攻められて話疲れをしてゐるんだが、お前は何か急な用事でもあるのかい。

久三　（少しドギマギして）いや、差當つて用事があつてお伺ひした譯ぢやありません。……東京では身内は伯父さんのお宅だけだから、時々お伺ひしろと、故郷の母がいつも云つて來まして、時々は此方の御樣子を、手紙で知らせてやらないと、叱られますので。

明三　それで、ちよい〳〵おれの家の樣子を覗きに來るのかい。何のことだ。（不快な顏して）しかし、これからは、わざ〳〵來てくれるには及ばないよ。おれが死んだ時には、死亡通知を送らせるから、それでいゝぢやないか。

久三　わたくしがお伺ひすることが、そんなに伯父さんのお氣に障るのなら、御遠慮してもよろしいんですが。

明三　（少し言葉を軟げて）絕對に來ちやいけないとは云はないがね。……しかし、あゝいふ同棲者が出來た以上、おれの家とは家風が合はないんだから、そのつもりでゐて吳れなきや困るよ。

久三　でも、故郷の兩親の許可を得てるんですから、伯父さんも認めて下さらなければ……

明三　だから、おれはお前がどんなことをしようとも妨害はしなかつた。そのかはり、お前もおれの家へ害を加へないやうにして呉れなきやいけないね。

久三　害を加へる？……へえゝ。わたくしは伯父さんの身内だつてことを、誰れにも云やしません。こんなヤクザな甥が東京で生きてゐることは、伯父さんの御名譽にもならないでせうが、別段不名譽にもならないだらうと思はれます。治助さんの緣談だつて、身内にわたくしのやうな奴がゐちや困ると、先方で肱鐵砲を喰はしたりなんかしないでせう。

明三　治助の緣談のことを、お前は誰れから聞いた？

久三　さういふ話は、誰れの口から出たともなく、直ぐに知れるものですね。（ふと氣がついたやうに）さう云へば、今歸つて行つた島田さんは、緣談のことでやつて來たんですね。あの人は仲人稼業をよくやつてゐるやうだから。……伯父さん、わたくしの身についてもたまには考へて見て下さい。わたくしには島田さんのやうに緣談の世話をして呉れる者があるぢやなし、この年齡になつて獨身ではゐられないし、あなた方のお氣に入らないやうな同棲者でも拵へなければ爲方がないぢやありませんか。

明三　身勝手なことを云つてる。お前はあの事でまだおれを恨んでゐるのか。（不意に神經を尖らせる）

久三　あのこと？（考へて、ふと氣づいたが、詰らなささうに）ハ、ア。あのことと云つてくに子さんのことですか。隨分以前のことですね。今やうやく思出したくらゐで、平生わたくしの頭からは消えてしまつてゐたんですよ。あんなことは根に持つても葉に持つてもゐませんよ。伯父さんはお年寄のくせによく覺えていらつしやる。

明三　おれがあの事と云つたのは、くに子のことぢやないよ。

久三　ハテナ。……しかし、何事についても、伯父さんを恨んでなんかゐませんから、安心していらつしやい。身内の者に恨まれてゐると思つたら、御病氣にも障るでせうから。

明三　おれは椅子に腰を掛けてゐると、足がだるくてたまらない。これで御免を蒙らう。（椅子を離れて）お前も用事がないのなら歸つたらよからう。

久三　（咄嗟に言葉に力を入れて）伯父さんにお願ひしたいことがあります。

明三　（驚いた顏をして振返つて）何だ？

久三　金を貸して下さいとは申しません。さう思つて心配していらつしやるかも知れないけれど。

明三　おれの家に有り餘る金がある譯ぢやなし、たとひ、貸してくれと云つたつて貸せるものか。

久三　わたくしは、伯父さんのお心をよく存じて居りますから、今日の米櫃が空になつてゐても、決して御無心は申しませんが、今お願ひしたいことは、全く別なことなんです。（首垂れて思詰めてゐるやうに）わたくしはこの應接室を拜借したいんです。

明三　この部屋を貸して呉れつて？　妙な無心だね。それでどうしようと云ふんだ？　誰れかに此處で會はうと思つてゐるのか。

久三　……誰れに會ふ必要があるものですか。わたくしは、この應接室の、あのクションの上に横になつて、永久に眠つてしまひたいんです。この世にお暇を告げたいんです。

明三　（噓とも思へないやうな相手の顏付を見入つて）戲談もいゝ加減にしろ。おれを揶揄ふつもりか、脅かすつもりか。

久三　どちらでもありません。今から何分間かの間、あのベンチを貸して頂ければよろしいんです。今生にわたくしが伯父さんから求めるところは、たつたそれだけなんです。

明三　馬鹿を云へ。自殺でもする奴が、豫め人に斷るつてことがあるものか。それに、死ぬと極まつたら、適當な死場所はどこにでもあるぢやないか。

久三　いえ、わたくしにはあのベンチの上が何處よりもいゝ死場所なんです。（と云つて、ベンチの方へ近寄つて）このベンチには、以前いろ〳〵な患者が腰を掛けてゐたのですね。この家の前の持主だつた醫師は山師で、いゝ加減な注射治療を賣物にして、一本の注射で二三十圓づつも儲けたといふことですが、役に立たない治療を受けて、金ばかり取られて死んだ人間が隨分あるんでせう。……さういふ不幸なる患者の思ひの殘つてゐる椅子だ。（と、意味ありげな目をベンチに向けて腰をおろす）

明三　この家にケチをつけるものぢやないよ。以前はどうだらうと、買取つた今は、ベンチ一つでも椅子一つでも、おれの所有なんだから。……お前はさういふいやがらせを云つて、おれを脅かして、いくらかの金をまた持つて行かうと云ふんだね。……オイ。そこへ腰を掛けちやいけないよ。早く歸んなさい。

彼れは久三の腕を提へて立たせようとする。しかし、久三は動かない。

久三　「また」と仰有つても、わたくしは、伯父さんから何も頂いた覺えはありませんよ。誰れにでも物をやることのお嫌ひな伯父さんも、眠つてる間には、わたくしなんかに金を下さる夢を御覽になることもあるんですね。さつき申上げた通り、わたくしは、今日お金を惠んで貰はうなんて、毛頭そんな考へをもつて參つたのぢやありません。

明三　ぢや、はじめからおれの家で自殺しようと企んで來たとでも云ふのか。馬鹿な奴だ。

久三　いえ、必ずしもさうぢやありません。（まだ彼れの腕を提へてゐる伯父の顏をぢつと見上げて）伯父さんがわたくしの申上げることを聞きたいと思つていらつしやるんならお話ししますが、……

明三　事によつたら、話を聞くだけは聞いてやつてもいゝが、おれの病氣に障るやうな話なら御免蒙るよ。

久三　（相手にかまはない獨言のやうに）昨夜から今朝まで、たまらない不愉快なことがあつて、わたくしは朝餐も食はないで家を飛出したのです。天氣がいゝので、いくらか氣が紛れましたが、誰れかの處へ行つて、親身な話でも聞きたくつてたまらなくなつて、うか〳〵と此方へまゐりました。伯父さんか伯母さんか、春雄さんか、治助さんか、此方のどなたかに會つたら、元氣がつくだらうと、當てにもならないことを考へてやつて來たんですが、その結果はアベコベだつたんです。

明三　（そんな話には興味を感じないらしく）生きてる人間に愉快なことばかりあるものか。たまには不愉快なことのあるのは當り前だ。

久三　（目を空間へ注ぎながら、なほ獨言のやうな言葉を續ける）頑丈だつた伯父さんが病み疲れて、この前お目に掛つた時に比べてさへ見違へるやうになつていらつしやるのを見て、わたくしは、スッカリ無常を感じました。金があつても、子供が人並みに育つて嫁入り嫁取りをするやうになつても、かうなつちや、何の生きてる樂みがあるものか。……

明三、相手の話に心を惹かれた態度をする。

久三　年齢と病氣の重石に壓されて、ウン〳〵呻きながら、辛うじて生きてゐるといふだけで、何の樂みがあるものか。わたくしなぞは、親の遺産が手に入る望みがあるぢやなし、自分で出世もしさうでないのに、伯父さん見たいになつちやたまらない。と、さう思ふと、昨夕からの不愉快なことが胸に一杯になつて、此處らで浮世におさらばをした方が結局自分に取つて得策ぢやないかと思はれるんです。

彼れはさう云つて、今まで外へ向けてゐた目を明三の方へ落すと、明三は彼れの側を離れて、疊の上にへたばる。

明三　そんな氣味の惡い目で、おれの顏を見て呉れるな。

久三　伯父さんの顏こそ、死相を帶びてゐるぢやありませんか。わたくしの顏なんか平凡ですよ。みんなに馬鹿にされて來た顏だ。

明三　餘計なことを云はないで早く歸れ。……今日は澤田がおれの家の爲になる話を聞かせて呉れたと喜んでる矢先きへ、お前のやうな奴がやつて來て、おれの頭を臺なしにしやがる。……早く歸んなさい。……たつて死にたいのなら、上野の森で首をくゝるか、不忍池へ身を投げるがいゝ。おれの家に迷惑を掛けるな。……お前はおれを脅かさうと思つてそんなことを云ふが、自殺の用意に刃物でもピストルでも持つて來てるのか。

久三　此處にこんなものを持つてゐます。（ポケツトから布片に包んだ小さな藥瓶を取出して見せる）

明三　（その藥瓶を見上げて）それを魔藥だといふのか。變な色をしてゐるぢやないか。消化藥か何かだらう。

久三　ぢや、さう思つていらつしやればいゝ。わたくしは、この消化藥を飲んで、このベンチを拜借して、一眠入りさせて貰ひますから、伯父さんはわたくしに關はないで、奧へいらつしやつてお休みなすつて下さい。わたくしは誰れにも遺言することはないんです……（と云つて、自分の心に向つて云ふやうに）遺言？　そんなものを殘す必要があるものか。

そして、彼れは、もはや明三には關はないやうな態度で、何事かを思詰めながら、部屋を歩き廻つたあと、直に藥瓶の藥を飲んで、ベンチに横はる。

明三は不安らしく〳〵、側へ寄つて久三の寢顏を見詰める。そこへ、次男の治助（二十五、六歲の、可成り立派な容姿をした男）が歸つて來る。

明三　オヽ、いゝ所へ歸つて來た。今、久三が自殺をすると云つて、變な藥を飲んで此處に寢てるのだ。何か目算があつて狂言を打つたのかも知れないよ。此處へ來て樣子を見て呉れ。

治助　呆れたものだ。久三さんが狂言をやるなんて。人間て分らないものだな。（驚いた風もなく、好奇心をもつてベンチに近づく）

明三　まさか、本當に毒を飲んだんぢやあるまい。

治助　さあ、どうですかね。（久三の顏をソッと見下して）オイ、君。（と、久三を搖動かす）

久三、薄目を開ける。

治助　戲談ぢやないよ、君。

久三　治助さんか。僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。

明三　爲樣のない奴だ。（稍安心したが、急に足腰の苦痛を覺えたらしく）おれは腰つ骨が挫けさうに痛みだした。あちらへ行つて休んでるから、お前が久三によく譯を訊いて、早く家へ歸すやうにして呉れ。……こいつ、一文にもならないのに、おれの胸にこたへるや

うな不吉なことをべちやあがつて。（獨言のやうに云ふ）

そして、彼れは、足を引摺つて入つて行く。久三は目を閉ぢ兩手を胸の上で組合せてぢつとしてゐる。

治助　君も滑稽な眞似をしたものだね。身體は何ともないんだらう。サア、起きたまへ。僕の部屋へ行つてユックリ話をしようぢやないか。

久三　僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。薬の利目が出かゝつて、僕は今死と闘つてゐるんだから。

治助　君のその變挺な目付や口付が、死と闘つてる意識なのか。そんな風ぢや、生と死の爭ひも、莊嚴でも凄慘でもないね。道化た眞似はいゝ加減で止したらどうだ。……全體君の狂言自殺の原因はどんなことなんだい。僕の親爺に要求したことが入れられなかつたためなのか。……僕が紅茶でも入れるから、起きて話したまへ……サア、僕が今生に加勢して、死を追拂つてやるぞ。

治助が元氣よくさう云つて、久三の手を提へて、勢ひ強く引起すと、久三は、それと爭つたはずみにベンチから轉げ落ちたが、立上つて、憤怒を顏に現はす。

久三　君は殘酷な人だ。僕に無用な口を利かせようとするんだね。……僕は伯父さんなんかに何も要求すりやしないよ。親類のよしみで、君の家で、僕の死骸の跡片付をして呉れればいゝと思つてゐるだけなんだ。僕の死生の問題に立入つて貰はなくてもいゝよ。

治助　君は氣が狂つてゐるやうにも見えないが、妙だね。まあ椅子にでも腰を掛けて、落着いて見たまへ。君がそんなに怒つた顏したのを見るのは、今がはじめてだが、不思議なものだ。

そこへ、おちかが、久三の内緣の妻夏江（二十六七歳、世摩れのしたらしい卑しい女）と、一しよに入つて來る。

おちか　アゝよかつた。久三さんはまだいらしつた。（と、夏江に向つて云ふ）

久三は夏江を見て驚く。

おちか　（久三に向つて）今そこであなたの奥さんにお目に掛りましたの。此方の家をお搜しになつてゐて、偶然わたしにお訊ねになつたのです。（夏江に向つて）さあ、お上んなさいましな。

おちかは、買物の風呂敷を持つたまゝ上り口に腰を掛ける。

夏江は應接室へ上つて、恭しく治助に挨拶する。治助は訝しげな顏して會釋する。今まで憤つてゐた久三は俄かに打萎れてマゴ／＼する。

久三　お前はこんなところへ何しに來たのだ？（力なく云ふ）

夏江　あなたこそ何しに此方へいらつしやつたの？　あたし、どんなに心配して方々を搜したか知りやしない。（ふと、ベンチの側に置かれた薬瓶に目をつけて訝しげに）あなた、そのお薬を召上つたの？

久三　今日になつて飲む時が來たのだ。（感慨を籠めたやうに云つて、よろけるやうにベンチに腰をおろす）

夏江　なぜ、そんなお薬を飲む時が來たんです？……今朝あなたが出ていらしつてから、ふつと氣がつくと、その薬瓶がいつも置いてあつたところに見つからないんでせう。ぢや、あなたが持つて行つたに違ひないと思ふと、こりや、打ちやつて置けないと、あたし慌てだしたんですよ。（袂の中から、同じ形をした小さな薬瓶を出して）でも、よかつた。かういふことがあらうと思つて、中味をすり變

へて置いて。……あなたがお飲みになつたのは、あたしが松下先生から頂いた持藥なんですよ。……あなたは、また何だつて此方のお家でそんなものを召上つたんです？

久三　おや、さつき僕が飲んだのは、婦人病の藥だつたのか。（苦笑を洩らして唾を吐出す）

治助、聲を立てて笑ふ。夏江は侮蔑した笑ひを洩らす。おちかも何となしに笑ふ。

久三　僕にあんな藥を飲まして、僕を笑ひ物にしようとしたのか。

夏江　でも、あたしがお藥をすり變へたお蔭で、あなたの生命は助かつたんぢやありませんか。此方のお宅にも御迷惑が掛らなくて濟んだのぢやありませんか。

治助　それはさうです。此方で本氣で自殺なんかされて溜つたものぢやない。……しかし、この家は元來醫者の家だつたのだから、藥の間違ひぐらゐは有りさうのことなんですよ。

夏江　（馴々しい態度して）あたし、このお宅へ今日お伺ひしたのもいゝ機會に、あたしたちの内輪の事を、此方のお家の方に聞いて頂きますわ。（治助に向つて）失敬ですが、あなた様はどなたでいらつしやいますか。

治助　（相手を見下した態度で）僕は此處の家族の一人です。

夏江　ぢや、あなたに聞いて頂いてもよろしいんです。お身内の方に立合つて頂いて、わたくしたちの間の最後の解決をつけたいんで御座いますから。

治助　さういふ面倒な話には、僕なんかが關係しちやいけないでせう。

夏江　たゞお身内の方に聞いて頂きさへすれば、あたし、氣がすみますのよ。

久三　お前が持つて廻つた口を利くにや及ばない。僕が簡單に云つちまはう。簡單なことなんだから。

夏江　（慌てて遮つて）いゝえ、あなたはどうかすると根も葉もないことを仰有るからいけないわ。あたしに云はせて下さい。（口調に重味をつけて）あたしは自分の身體を引當てに、五百圓の借金をしてゐるんです。久三さんが保證に立つてゐて、そのお金は二人の生活に費つたのですから、期限までにどうにか極りをつけて貰はなきや困るんで御座います。

久三　それで、その借金を拂つちまふまで、僕に毒藥を飲ませないやうに警戒してゐるんだね。御親切さまだ。

夏江　（悠然として）あなたは死にさへすりや責任がのがれるやうに思つていらつしやるんでせうけれど、若しもあなたが、今自棄な死方をなすつたら、お國の御兩親をはじめ、誰を知らない方は、みんなあたしの所爲になさるに極まつてるぢやありませんか。あなたが御自分でどうしても死にたいのなら、それは御勝手なんだけれど、あとの事はちやんとして置いて下さらなきやいけませんよ。

久三　それで、僕を掴まへにこんな處までやつて來たのか。……お前の借金拂ひが出來るくらゐに、金の工面がついたなら、僕だつて死ぬ氣にならなかつたかも知れないよ。（おちかに向つて）おちかさん、お茶を一杯汲んで下さい。水でもよろしい。あんな藥を飲んだので、胸の中がむか〳〵して來ていけない。

おちか入つて行く。

治助　兎に角、君は物騷な男だね。出鱈目に自殺なんか企てるやうなヒステリックな男には、婦人病の藥が利目があるかも知れないね。細君と二人でその藥を持藥にしたらいゝかも知れない。

久三（前と違つて元氣づいて）僕はさつき伯

父さんの顔を見てゐるうちに、ふつと死にたくなつたんだが、自分でも變だな。……しかし、もう大丈夫、もう決して死なない。人が僕を殺さうとしたつて殺さりやしない。（自分に力をつけるやうに云つて）治助さん、僕はね……昨夕いく度、これを（夏江を指差して）殺さうとしたか知れないんだよ。いや殺さうとしたのぢやない、殺した方がいゝと昨夕いく度思つたか知れないんだよ。……ところが、敵をでも、悪人をでも一思ひに殺せるやうな昂奮状態が、僕の心にはどうしても起つて來ないんでね。

治助、久三の言語と態度とを研究的に見聞してゐる。夏江は、何を云つてゐるのだと思つてゐるやうな冷笑を洩らす。

久三　僕が柄にない過激なことを云つたのを變に思つてゐるんだらう。（誰れに云ふともなく云つて）こいつが戀人をほかに拵へてゐるとか、僕を欺いて僕を蹴付けるやうなことを企んでゐるかしてゐるのなら、僕だつてムカムカとして極端なことが出來るんだが、さうぢやないんだからね。

夏江　何を詰らないことを仰有るの？

久三　そりや詰らないことさ。……だけど、昨夕から今晩へかけて、二人であんたいやらしい喧嘩をしつゞけたことを考へて見るがいい。色男でも出來かゝつてゐるやうなことを云つて、僕の氣をひいて見たり、僕の側を離れたら、世間がちやんとお膳立をして、お前を待つてゐるやうな蟲のいゝことを云つたりしてゐるのを、お前は淺間しく思はなかつたのか。僕がお前の借金を綺麗に拂つてやつたにしたところが、拂はないで死んだにしたところが、お前の落行くさきは大抵分つてらあね。

夏江　（腹立たしげに）それは大きにお世話よ。そんなことを他人の前で云つて、事情を知らない人は、あたしといふ女をどんなに誤解するか知れないぢやありませんか。

久三　だつて、お前の方から望んで云ひだしたことぢやないか。……お前は僕を離れさへすりやどうかなると、さきを樂みにしてるか知れないが、僕は、……

夏江　（相手の言葉を慌しく遮つて）何をくどくどと寢言見たいなことを云ふんです？　あなたの身内のお家に來たからつて、急にえらさうな口を利いて。……あたしは當然取るべきお金は取らなきやなりませんよ。えらさうな口を利いて、人前であたしに恥を掻かせたきや、出すべきお金を出したあとでなさい。

夏江は久三を小突きまはす。久三はそれに抵抗して相手を突飛ばす。

久三　昨夕のやうにお前に負けてばかりはゐないぞ。おれが能無しで小汚い男なら、お前だつて薄つ汚い女だ。

夏江、昂奮して、身を起して、無我夢中になつて武者ぶりつく。

おちかは奥からお茶を運んで來て、さつきから二人の様子を、呆氣に取られて見てゐる。

治助は、おちかを見て、ニヤ〱笑つて、久三夫婦の醜態を見ろと目顔で知らせる。そして、打遣つても置けないので、二人を引分けて、

治助　僕の家へ來て夫婦喧嘩のおさらひなんかされちや迷惑だよ。

久三　いや、どうも濟まなかつた。（頭を下げて面目ないと云つた表情をする）

夏江はテーブルに寄りすがつて泣く。

明三、足を引摺りながら奥から出て來る。

明三　（威厳を見せて）お前たちは直ぐに歸つてくれ。……人の家へ來て自殺の眞似したり、

夫婦喧嘩の眞似したり、恥知らずにも程があると云ふものだ。おれから金を引出すための狂言だらう。馬鹿め。それがおれに分らないと思つてゐるのか。……さあ、早く歸つてくれ。（久三の背を突く）

久三　これは驚いた。……わたくしは芝居氣なんかちつとも持つてゐない人間だから、そんなことは夢にも思ひつかなかつたのですが、伯父さんにさう云はれて見ると、喧嘩狂言のやうでした。わたくしも生れてはじめて、人の前で芝居をしたのですね。

明三　それに氣がついたのなら、今日は大人しく歸つて呉れ。

久三　歸りますとも。（キッパリ云つて）大變御迷惑を掛けて申譯がありません。……しかし、伯父さん、わたくしは今日此方へお伺ひした時とはまるで違つた人間になつてお暇することが出來さうですよ。だから、狂言もわたくし自身に取つちや無駄でなかつた譯です。……（夏江の肩を叩いて）オイ、兎に角歸らう。伯父さんがあゝ仰有るんだ。

夏江は、さつきから、自分の顔を明三に見られまいとしてゐる。明三は夏江の顔を見ぬ振りをしながら、コツソリ見ようとしてゐる。

久三　小さくなつてゐるなんて、不斷のお前にも似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶して行け。一生にまたと伯父さんにお目に掛ることはないだらうから。（夏江を引張つて、明三の方へ無理に顔を向けさせて）これが不斷お噂をしてゐた伯父さんだ。（明三に向つて）これが、かねてあなたの噂をしていらつしやつた女です。

夏江は羞れに顔して挨拶する。明三は苦い顔して會釋をする。

その時をいゝ機會として、おちかは、夏江と久三とにお茶を出す。

久三　（茶を飲んで）おかみさん、面白かつたでせう。あなたは結婚してもこんな馬鹿な眞似はしないやうに、今から氣をつけていらつしやい。（明三などに向つて）御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。……我々二人のほんたうの芝居はこちらの門を出てからなんですよ。……左樣なら。

久三は元氣でさう云つて出て行く。夏江は、藥瓶をベンチの隅に置いたまゝ、それに氣がつかないで、コソ〳〵と出て行く。

明三　二人ともあつかましい奴だ。これからあんな奴は寄せつけちやいけない。（我れともなく、ベンチに腰をおろして、治助を見て、機嫌を直して）さう云へば、さつき山田が來ていろ〳〵話をして行つたよ。

治助　（冷淡に）さうですか。

明三　先方では非常に氣乘りがして、一日も早く話を極めたいと云つてゐるさうだよ。此方でもあんまり迷はないで、早く極りをつけた方がいゝだらうね。

治助　さうです。（冷淡に云つて）お母さんは何處かへ出掛けたんですか。（おちかの方を見て）兄さんの家へ行つたのかい。

おちか　えゝ。何だか急に思立つてお出でになりました。

彼女はさつきから、奥へ行かうとしながら、父子の話に心殘りがしてゐるらしく躊躇してゐる。

明三　お母さんがゐなくつてよかつたのだ。あれがゐたら、久三やあの女の不しだらな樣を見てどんなにいやな思ひをしたことか。目をまはしたかも知れないよ。（おちかの方を見て）お前は早く午餐の支度をしなきやいけないよ。おれも腹がへつた。

おちか、不承々々に奥へ入る。

治助　お父さんもお疲れになつてるやうだから、あちらでお休みになつちやどうです？

明三　ウン。……おれも今日はひどく疲れたよ。心の疲れが顔にまで現はれてゐるのだらうな。久三がおれの顔を見ていやなことを云つた。おれの顔に死人の相でも現はれてゐるやうなことを云つた。それに、あいつ、おれの胸にギックリ應へるやうな氣持の惡いことを云つた。

治助　どんなことを云ひました？

明三　どんなことつて、別段珍らしいことぢやないんだが。……珍らしくないことでも、時と場合でひどく胸に響くこともあるものだ。

治助　あの人は無能で金もないんだから、自棄な口を利くやうになつたんでせう。信託會社の方も免職になつたらしいのですね。

明三　さうだらうとおれも思つてゐたよ。身内にあんな男がゐると、おれたちの信用に關はつて困るんだが……

治助　さうですね。（冷淡に云つて、ふと調子を變へて）わたしは今朝、木村さんの家へ寄つて頼まれたんですが、あすこでは、この頃手不足で困つてゐるから、少しの間、おちかさんを貸してくれないかと云つてゐました。貸して上げる譯に行きませんか。

明三　いや、それは困るよ。家では一日でもおちかに出て行かれちや困るよ。あれがゐなくなつちや、おれも飯も食へなくなるぢやないか。

治助　他所から手頼つて來てるおちかさんがゐなくなつてさへ、お父さんの日常生活に差支へがあるのなら、なぜ兄さん夫婦を外へ出して置くんです？　この家に住はせて家の用事をさせたらいゝぢやありませんか。（責めるやうに云ふ）

明三　理窟はさうだが、春雄はこの家にゐたくないのだから、どうも爲方がないよ。

治助　ゐたくないのは、兄さんばかりぢやないでせうね。

明三　お前も結婚したら、直ぐに別居するつもりだらう。それはおれも覺悟してゐるんだよ。

治助　結婚の話はまあ待つて下さい。……それよりも、たび／＼わたしが云ふやうに、この家は人に賣るか貸すかして、郊外にでも住みいゝ家を新築したらいゝぢやありませんか。……この家がいけないんですよ。お父さんの身體の加減の惡くなつたのも、一つはこの家の所爲なんですよ。舊弊な言草だが、この家が祟るのかも知れませんね。……山師の惡德醫者のために治療法をあやまつて死んだ者の怨みが、この家に殘つてるのかも知れませんよ。我々がこの家に移つてから、碌なことはないんだから。……今日だつて久三さんを喰ひ物にしてすんだやうなものの、危いところだつた。この後またどんな不吉なことがないとも限りませんよ。

明三　久三もお前の云ふやうなことを云つてゐたつけ。……お前たち若い者がそんな迷信を有つてゐるから不思議だ。この年齡で新奇に家を建てたりなんか、そんな面倒くさいことが出來るものか。此處は廉い價で買つて、あの大地震にも燒けなかつたやうな運のいゝ家ぢやないか。お前たちがどこへ行かうとも、おれはこの家の空氣を吸つて、生きてゐられるだけ生きてゐるつもりだ。新奇な家を建てたつて珍らしいのは當座ばかりだよ。……いや、から身體が惡くなつちや、家の新しいか古いかよりも柔しい人間の手が欲しいよ。だから、おちかのやうな柔しい氣の利いた女に、出て行かれりやしないかと、おれは氣遣つてゐるのだ。お前たちもあの女に邪慳なことは

しないやうにして呉れ。一日でも長くゐて貰はにや、第一おれが不自由な思ひをするんだから。

治助　お父さんは、そんなにおちかさんがお好きなんですか。

明三　あれが明日でも出て行きやしないかと、氣遣はれるのだが、お前はどう思ふ。

治助　（面羞げに）何をです？

明三　（あたりを憚るやうに）おちかにもこの頃は、心に思つてる男があるのぢやなからうか。急におめかしに身を入れだしたりして。様子がどうも變だ。……年齢が年齢だから無理もないが。

そこへ、坂本茱（二十代の男）が訪ねて來る。

坂本　伊東さんの奥様は、お宅へいらつしやらなかつたでせうか。

明三　いえ、來てゐません。くに子はこちらへ來ると云つたのですか。（足を引摺つて訪問者の方へ行く）

坂本　奥様は今朝からお家にいらつしやらないので、何處へお出ましになつたのかと、旦那様がさつきから心配していらつしやいます。

明三　どうしたんでせう。何か事があつたのですか。

坂本　わたくしはよく存じませんが。

治助　（ふと、奥の方を見て微笑を洩らして）姉さんが此方へ來たら直ぐお知らせしますから、あなたは外の心當りを捜して下さい。

坂本　ぢや、さういたしませう。

治助　抛つといても心配なことはありませんよ。迷ひ兒にはなりやしないでせう。

坂本は、心配してゐる明三の顔を見上げて、挨拶して出て行く。

くに子（伊東秀雄の妻、三十くらゐ。神經性の女）奥から出て來る。

明三　（安心して）くには其處にゐたのか、いつの間に來てゐたのだ？

くに子　あたしさつきから、あしこに立つてゐて、立聞をしてゐました。こちらにはお客様がいらつしやるやうだつたから、裏からソッと家の中へ入つたんです。久三さんが女の人と一しよに歸つて行くのを、氣の毒な思ひして見てゐましたのよ。（と云つたあとで、直ぐに侮蔑したやうに）あんな人なんですかね、久三さんが同棲してゐるといふ人は。

明三　人の事よりも、お前はどうして無斷で家を飛出して來たのだ？

くに子　それがお父さんにはお分りにならないの。……治助はよく察してくれるわね。

治助　僕にも分りやしないさ。

くに子　さう？　あたしには……あたしだけには、治助が島田さんの持つて來た縁談に不同意なことはよく分つてゐるのに。

くに子は不平らしくさう云つて、ベンチに腰をおろして、夏江の置いて行つた雜誌を何氣なく手に取つて、指の先でいぢくりながら、

くに子　あたし、此處へ來たら慰めて貰へるだらうと思つて、家を飛出して來たのだけれど、お父さんの顔を見たら、とても望みの叶ふ見込みのないことがよく分つたの。治助が云つた通り、この家がいけないんですよ。改築するか、移轉するかしたらいゝでせうのに。

明三　どいつも勝手なことを云つてる。……それよりもお前が此處に來てゐることを、早く伊東へ知らせなきやなるまいな。

くに子　打ちやつといていゝのよ。

おちか、奥から顔を出して、

おちか　お膳立が出來ました。くに子さんも召上るんでせう。

くに子　あたしはよろしいのよ。……おちかさ

んは相變らず一人で臺所仕事をして、お忙しいでせうね。お母さんは今日の日曜にもまた兄さんのお家へ行つてるらしいのね。煩さがられに行かなくつてもいゝでせうにね。

治助　やうやく飯が食へるんだな。

明三　くにも一しよに來い。食べながら話をしよう。

くに子　ほんたうにあたしは何も食べたくありませんの。……皆さんの御飯のすむまで、あたしはこゝで玄關番をしてゐますわ。

明三と治助とが奧へ入る。今まで快活な口を利いたくに子も、俄かに萎れた樣子をして、ベンチから立上つて椅子に腰をおろし、物を思つてゐるやうに空間を見詰める。

そこへ、伊東秀雄（三十餘歲、不斷着で着こなしが亂れてゐる）下手からアタフタと出て來る。くに子を見つけると、悅しさが胸から込上げる樣にして上へあがる。

秀雄　やはり此方へ來てゐたのか。……坂本はお前を捜しに來なかつたか。（くに子の側に腰を掛ける）

くに子　（顏を上げて）どうですか。……それよりもあなたは何しにいらつしやつたの？　あたしに何か御用がおありなさるの？

秀雄　空呆けてゐるね。……昨夕お前がヒステリーを起して、絕望的なことを云つてはゐたが、まさか世間の物笑ひになるやうなことはしないだらうと思つてゐた。

くに子　あたしはいくらあなたに侮辱されても、どうもしないで、泣寢入りに寢てしまふ女だと思つていらつしやるの？

秀雄　まだそんなことを云つてるのか。おれはお前を侮辱した覺えはないよ。……此處のお父さんやお母さんに訊いて頂かうか。おれは、たゞつゆ子といふ不仕合せな女を庇つてやつただけなんだ。それでもお前の氣に障るのなら、今後絕對にあの女を家へ入れないやうにしてもいゝのだ。つゆ子はおれが世話をしてやらうとやるまいと、どつち道不幸に落ちる女なんだから、此方で世話をするのも無駄骨折見たいなものなんだよ。これから知らん顏してゐてもいゝんだね。

くに子　此處へ來てまで、そんな言譯なんぞ、聞かして貰はなくつてもいゝのよ。……今にお父さんが出て來て、あなたと一しよになつて、黴臭いお說法を聞かせるのだと思ふと、あたしたまらないんです。（相手を脅かすやうな目をして、言葉に力を籠めて）あたしは、親兄弟に愚痴をこぼしたくつて、今日此處へ來たんぢやありません。あなたが、勝手でさう極めないやうにして下さい。……あたしの死體は、伊東家の世話にならないで、兩親の手で跡片付をして貰ひたいと思つて、今日此處へ來たんです。……あなたはそつちへ行つていらつしやい。

彼女はヒステリックにさう云つて、秀雄を押退けるやうな手付をして、椅子を離れてベンチに橫はつて、かの藥瓶を取上げて飮む。

くに子　これは、この家の前の持主だつたお醫者から、兄さんが貰つたモルヒネなんです。眠りながらいゝ氣持で死ねるやうに調合してあるんですわ。あたし、兄さんの机の引出から盜んで、死にたくなつた時にいゝ氣持で死ねるやうに、しよつちう自分の身につけてゐました。今丁度このお藥を役に立てる時が來たんです。（感傷的な口調で）あたし、こんな冷酷な人生に生きてゐるよりは、早く夢の世界へ行つた方が幸福なんです。……あたし、今いゝ夢を見かけてゐるんだから、誰れもあたしの側へ來て、あたしの夢を擾亂さないや

うにして下さい。

秀雄　戯談もいゝ加減にしろよ。（氣遣はしげに傍へ寄つて）まさかモルヒネぢやあるまいな。芝居の眞似をして脅かすなよ。（くに子の身體に手を觸れる）

くに子　芝居なら、さう思つて棧敷に坐つて觀ていらつしやるといゝ。……それはいゝ夢をあたし見かけてゐるの。

彼女は目をつぶつてさう云つてゐるうちに、ふと苦痛を感じたらしく、

くに子　あたし變だわ。どうしたのだらう。オヽ苦しい。

胸を押へて藻掻きながら、ベンチからすべり落ちる。

秀雄　馬鹿な眞似をするからだ。（と、小言を云つてから、奥の方を覗いて、大聲で慌しく）誰れか來て下さい。早く。（と叫んで、くに子を抱上げる）

くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。治助を先きに、明三とおちかが奥から出て來る。

秀雄　くにが今變な藥を飮んだのです。早くお醫者を呼んで來て下さい。

治助　（藥瓶に目をつけて）それは、久三さんの細君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どうして、そんなものを飮んだのだい。……おちかさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で。……どうしてそんなものを。……今日はどうも變な日だ。

明三　早く醫者を。早く。

おちか奥へ入る。

明三、痛む足を引摺りながらウロ／＼する。

くに子　（ます／＼苦みながら）あたし、お父さんの不斷の持藥かと思つて、戯談に飮んだんです。……あたし、死ぬ氣ぢやないんです。……ア、苦しい。……早くお醫者を呼んで來て下さい。あたし、今死ぬのはいや。……助けて下さい。

治助　指を喉へ突込んで、腹のものを吐出したらいゝでせう。

治助と秀雄と力を合せて、くに子を部屋の端へ抱へて行つて、飮んだものを吐かせようとする。

明三　何といふことだ。（溜息を吐いて）お母さんがゐたら目をまはすだらう。

足を引摺りながら、皆なの側へ寄つて行く。

くに子、うめき續ける。

（二）

バラック建の伊東秀雄の住宅の客室。前の幕の大山明三の應接室よりも粗雜であるが、現代風で明るみがある。油繪の額が掛つてゐて、蓄音器も置かれてある。

秀雄は獨りで蓄音器の側に坐つて、陽氣な西洋樂を聽いてゐる。そこへ、くに子が衰弱した樣子をして入つて來る。顏の面に現實離れのした、稍凄味のある、普通人でないやうな粉飾を施してゐる。

くに子　今日はお天氣がいゝのに、何處へもいらつしやらないの？

秀雄　今朝からさう極めてゐるぢやないか。

くに子　でも、一週に一度の休日に家にばかりいらつしつちや、身體のためによくないぢやありませんか。

秀雄　ハヽヽ。今日に限つてそんなことを云つてる。……お前が外出したい氣持になつたのなら、外方から一しよに散歩に出てもいゝんだがね。

くに子　あたしに遠慮なさらなくつてもいゝのよ。……どうせ、あたしはもう人の中へは出

て行けなくなつたんですから。

秀雄　下らないことを氣に病む必要はないぢやないか。新聞に出された譯ぢやないし、一時の戯談としてもう濟んでしまつてゐるぢやないか。

くに子　あなたがそんな空々しいことを仰有つたつて駄目よ。あたしにはちやんと分つてますわ。あたしが自殺なんか出來る人間ぢやないつてことを、あれ以來、あなたは見破つて安心していらつしやるんでせう。

秀雄　そんなことはどうだつていゝぢやないか。自殺の出來る人間がえらいつてことはないんだし。

くに子　あなたの思惑は兎に角、あたし自身、自殺の出來ない人間だつてことが自分によく分つて、急に世の中が淋しくなりました。

秀雄　馬鹿なことを云つてゐる。自殺の出來ない人間こそ、世の中が面白く暮らせるんぢやないか。……あの日のことは、もう忘れてしまひよ。

くに子　忘れようとしても忘れられるものですか。あたし、身體がよくなればなるほど、あの時のことがハッキリ思出されますわ。お父さんも治助もあなたも、おちかさんでさへ、みんな蔑視んだ目であたしを見てゐましたわね。

秀雄　蔑視んだのぢやない、心配して見てゐたのだよ。

くに子　本當は、あの時あたしはあのまゝで死んでた方がよかつたの。

秀雄　ぢや、以前のお前はあの時死んだことにして、新しいくに子が生れ出たことにしたらいゝぢやないか。

くに子　新しいくに子？　こんな頭の中に塵屑の詰つてる樣な氣持をしてゐて、新しいくに子も何もあつたものですか。

蓄音器はまだ響いてゐる。

そこへ、下女が名刺を持つて入つて來る。

秀雄、その名刺を見て眉を顰める。

秀雄　兎に角此處へ通してくれ。

下女、出て行く。

くに子　どなたが訪ねていらつしたの？

秀雄　あんまり會ひたくもない人間なんだが、斷る譯にも行くまい。お前はあちらへ行つてゐたらいゝだらう。

くに子　あたしが會つちや　いけないの？　（言葉を尖らせて）それ御覽なさい。あなただつて、あたしをお客樣の前へ出すことをいやがるやうになつたぢやありませんか。あたしを劣等な人間扱ひして。

秀雄　（不快を忍んで）ぢや、此處にゐてもいいよ、……染井久三が來たんだよ。あいつ何の用事があるのか。

くに子　（不快らしく）久三さんが？　何しに來たんでせう。

そこへ、久三が入つて來る。服裝は序幕と同じなのだが、顏面に現實離れのした、普通の人間でないらしい印象を與へるやうな粉飾を施してゐる。

久三　今日はよく御在宅でしたね。（と、秀雄に挨拶してから、微笑を浮べてくに子の方を見上げて）くに子さんは身體がスッカリよくなつたの？　二三日前に、往來で治助さんに會つて、藥遊ひの話を聞いて大笑ひをしたんですよ。

くに子　（不機嫌らしく）あなたはあたしを揶揄ひにいらしつたの？

久三　飛んでもないことだ。大笑ひしたことがくに子さんのお氣に障るのかね。僕の獨り心中のしそこなひも大笑ひなんだから、お互ひさまです。

秀雄　（ます〱不機嫌らしく）君は滅多に僕の家に來たことのない人だが、今日は何か用

事があるんですか。

久三　特別に用事がある譯ぢやありませんがね。一應くに子さんにお詫びをして置かうと思つて。……あんな藥をうつかり置忘れたために、飛んだ御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。

くに子　治助が餘計なお喋舌をするからいけない。自分の同胞のことを面白づくで人に話すなんてひどい奴ね。……(昂奮して) 頑固なお父さんでさへ、あれから神經を病んで、一刻も早く家を讓りたいと云つてるんぢやありませんか。兄は兩親を嫌つて外へ出てゐるし、治助はおちかさんに誘惑されて兩親の勸める縁談を嫌つてゐるし、あたしの實家は早晩破滅するでせうよ。

久三　なに、彌生町のあの家屋は破滅してもしなくつても、大山家は大丈夫だ。第一資産があるんだからな。

くに子　僅かな資産なぞ、手頼りになるものですか。

久三　ところが、僕は今、その僅かな金のためにも、百圓足らずの金のために苦勞してるんです。……僕はね、自殺をしそこねてから、生れ變つた人になつて、世間に對して威張つてゐたつもりだが、やつぱり駄目だつた。空威張をしたつて、Aといふ人間は何時までもAといふ人間で、AがBに變ることはないのかな。……(醉漢のクダ見たいに) いや、しかし、僕はあの時、藥の間違ひで、生命が助かつたと思つたのは間違ひで、本當は死んで、異つた世界に入つてるんぢやないかと、時々思はれることもあるんだ。……僕の飲んだのが眞實の毒藥で、くにさんの飲んだのが、婦人藥だつたのかも知れないて。ハヽヽヽ。

秀雄は不機嫌だつた顔に笑ひを浮べる。くに子も機嫌を直して淋しく笑ふ。久三、自分が何處に來てゐるのかを見定めるやうに室内を見廻す。

くに子　さう云へば、久三さんは、今日は人が違つたやうに陽氣になつてゐるね。お金に不自由してるやうなところはちつとも見えないぢやないの。

久三　さう思はれるだけでも有難い譯だね。でも、生れ變つたにしても、異つた世界に入つてゐるにしても、僕といふ人間はなさけない譯だ。……あの後は、僕が戸外へ出るたびに、僕のあとに、影が形に添ふ如くに僕にくつついて來る者があるんですよ、危險人物が刑事運動に尾行されてるやうなものでせうな。

秀雄　(生眞面目に) 君が警察の注意人物になつてる譯ぢやないんでせう。

くに子　あたしには分つてるわ。あなたの影も此處へ連れていらつしやるといゝわ。あなたの影には、あたし一度お目に掛つたことがあるのよ。

秀雄　それは何のことだ。

久三　僕は自分の身を亡ぼさうとしたことはあつても、まだ殺人も強盗もしたことはないのだから、警察に御厄介は掛けないでせう。その點は安心して下さい。

くに子　その影はどこにゐるんでせう。(入口に目を注ぐ)

秀雄　二人で謎見たいなことを云つて、どうしたのだ。(呆れたやうに二人を見詰めて、二人の現實離れのした顔にギクッと胸を轟かす)

久三　(くに子を注視して) 不思議だ。自分の本當の影を眼前に見てゐるやうだ。(獨言のやうな感慨を洩らす)

くに子　(胸に應へたらしく) そんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。(顔を外らしたが、すると、秀雄の注意深い目にぶつつかつたの

で、あなたもそんな目で人の顏を見るもんぢやないわ。

久三　僕はやはりあの時死んでゐたので、今地獄に住んでゐるのかも知れない。

くに子　（強ひて戲談らしく）地獄に住んでゐる人間に訪問されちやたまらないわね。

そこへ、下女が入つて來たので、三人の緊張した態度が破れる。

下女　お客樣のお連れ樣がいらつしやいました。

久三　（夢から醒めたやうに、そして當惑してゐるらしく）僕の云つたのは本當だつたでせう。

くに子　こちらへお通ししてお呉れ。

下女、出て行く。

久三　御迷惑でも爲方がありませんね。

秀雄　さつきから態々と云つてゐたのは、君の細君のことですか。僕はまだお目に掛つたことはないんだが、君は細君と此處で落合ふやうに打合せをしてゐたんですね。それなら早くさうと云つて呉れゝばよかつたのに。

久三　打合せなんかしてゐた譯ぢやないんですが、

くに子　あたし、此間彌生町で、奥さんの後姿をちよつと覗いて見たつもりで、どんな方だか、よくは知りませんのよ。

久三　僕に取つて、名譽なことぢやない。（獨言のやうに云ふ）

三人がそれぞれの思ひを注いで入口を見てゐるところへ、夏江が前よりももつと見窄らしい服裝をして入つて來る。しかし、來馴れてゐるところへ來たやうに、含羞んではゐない。

くに子　さあ、此方へいらつしやい。

夏江、挨拶する。秀雄は侮蔑を含んだ目を向けて答禮する。

久三　お前の住みたい家はこんな家なんだらう。……よく見て置くがいゝ、……だけど、お前はおれに喰つついてゐようとも、おれの側を離れて行かうとも、こんな當世の文化的な家で、現代的の華やかな生活の出來る見込みはないだらうぜ。

夏江　あなたは人樣の前であたしに恥を搔かせようと思つて、こんなところへ連れていらつしやつたの？（強い微笑を浮べながら云ふ）

久三　誰れが随いて來いと云つた？　お前が勝手に随いて來たのぢやないか。

夏江　譃を仰有い。……あなたはあたしが随いて來なければ、一人歩きは出來ないぢやありませんか。今日此方へ來る途中でも、何度往來で倒れたか知れない。あたしが、抱起して介抱したからこそ、此處まで無事に來られたのぢやありませんか。

久三　お前こそ譃つ吐きだ。

夏江　あなたは伯父さんのお家で死にそこねた時から、記憶力が惡くなつて、御自分のしたことや言つたことさへ忘れるやうになつたんです。……今日はお前の望み通りに、身内の者に立合つて貰つて、最後の解決をつけてやると仰有つたぢやありませんか。……彌生町から曙町に、曙町から天神町に、あちらこちらと、あなたのお身内の家へ一軒々々引張り廻されて、此方のお家であなたの御親類が品切れになるぢやありませんか。

久三　最後の解決は金のことか、金なら何處へ行つても、おれのために出してくれる處はなささうだよ。此處には蓄音器もあるし本棚もあるし、油繪の額もあるし、いづれ、金庫には金が一杯詰つてるのだらうが、それはお前やおれには何の關係もないのだ。諦めるがいゝ。（秀雄やくに子に向つて）この女の身

の代金が五百兩になつてるんださうですがね。全體それくらゐの値段がこの女にあるんでせうか。

くに子　久三さんの言葉はまるで無頼漢のやうね。自分のことでなくつても、あたし聞きづらくつてならない。何だか怖いやうだから、もう歸つて下さい。

久三　あなたの怖がるのは、僕よりも、僕の連れのこの女のことなんでせう。でも、怖がるには及びませんよ。こんなに見えても、この女はあなたに敵意を有つてはゐやしませんよ。

秀華　用事がなければ、今日はこれで歸つて下さい。

久三　何處へ行つても歡迎されない僕だ。叩きだされないさきに歸りますがね。僕は強請に來たのぢやありませんよ。……本當は僕に執拗く附き纏つてゐるこの女から綺麗に離れようとしてまご〱してゐるんですよ。自分の家にゐる間は、二人がてんでに勝手な獨言を云ひ合つて、お互ひに相手がゐなかつたかと思つてゐるくせに、僕が他所へ出ると、此奴は何度もあとから附いて來るんだから不思議だ。そして、さつき云つたやうに、僕が往來で轉んだの辷つたのと、僕の歩き振りにまで仔細なおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。……どうも最後の決算が金錢だけで付きさうぢやありませんよ。

夏江　付くか付かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るといゝ。人のことよりも、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生きてゐるぢやありませんか。

くに子　煩さいね。……影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。……あたし、この人の置いて行つたあの藥を飲んだのかと思ふと、今でも胸が苦しくつてならないんです。この人、あたしに飲ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で樣子を見に來たのかも知れないんだわ。（身ぶるひする。そして、秀華に向つて）あなた、この人たちを歸して下さい。怖くつて、あたしの頭が變になりさうだから。

秀華　早く出て行つて下さい。

　彼れは座を立つて、久三に手を掛ける。

夏江　あなた、また彌生町のお家のやうに追出されるの？（久三を勵ますやうに云つて）あなたはあつちでもこつちでも追出されて、しまひには、地球の外へでも追出されなければ收まりがつかない人なのね。……意氣地がないつたらありやしない。

久三　此處もおれの家ぢやないから仕方がないさ。

　久三は座を立ちかけたが、その際、冷笑を含んだ目付をする。秀華はふとその現實離れのした相手の顏に恐れを感じたらしく、我知らず久三の傍を離れて、逃げるやうに奥へ入る。くに子も同じやうな態度で隨いて行く。

久三　どうしたのだ？　可笑しな人だ。追出さうとした人の方が逃げて行つたぢやないか。

夏江　あなたが彌生町の伯父さんの顏を見て死にたくなつたやうに、あの人たちはあなたを恐れたのよ。（ふと、惡辣な目を光らせて）さあ、この隙間に金庫のお金をさらつていらつしやい。（權威をもつて命令するやうに云ふ）

久三　金庫なんか何處にも見えないぢやないか。

夏江　あなたは目まで役に立たなくなつたの？

金庫はそこにあるぢやないの？

一方を指差すと、久三は小さな皮文庫を見て、そちらへ寄つて行く。

夏江　それを持つて、早く庭から逃げていらつしやい。

久三　おれはまだ泥棒をしたことはないよ。：：お前はおれに泥棒までさせなければ承知が出来ないんだな。：：地球の外へ追出される人間だと、お前に云はれたおれだ。泥棒を遠慮するには及ぶまい。

そこに、くに子があたりを憚りながら顔を出して、

くに子　久三さん、これを貸して上げますから、おとなしく歸つて下さいね。（情味をもつて云ふ）

同時に紙包を抛出して引込む。

久三　金か。

紙包の方へ寄つて覗込む。夏江も不思議さうに覗込む。

久三　おれは泥棒の代りに乞食にされたのか。：：お前が欲しいのなら、それを持つて歸れ。

夏江（喜んで）持つて行つてもよくつて？：：あなたも早くお歸んなさい。途中で轉ばないやうに。

彼女はスッと出て行く。久三はさつき開けかけた皮文庫をソッと開けて、中を覗いて合點の行かない顔付をして、それを閉ぢる。

くに子入つて來る。

くに子　あなたはなぜお歸りにならないの？

久三　僕も物欲しさうな目をして、あつちこつちの身内を訪ねて行くものだから、乞食か掏摸のやうに思はれて：：僕も落ぶれたものだね。（くに子の顔を見上げて）だけど、あなただつて隨分憔悴したやうだな。治助さんは何でもないやうに云つて笑つてゐたつけが、毒がまだ抜け切らないんぢやないかしら。不斷のくに子さんとは思はれないほどに窶れてゐる。：：大山家の一族のうちでは、類のないほど美しかつたくに子さんとは思はれないが、僕の目がどうかなつたのかな。

くに子　あたしのことよりも、あなたこそ、何といふみじめな顔していらつしやるの？　秀雄は、人間離れのしたあなたの顔を薄氣味惡く思つてるのよ。

久三　男の僕は鏡を見ないから、自分の顔がよく分らないのだけれど、女のあなたに自分の顔が分らないのは變だね。僕の連れの女も顔が蒼んで來たのだけれど、あなたのやうぢやない。

くに子　あたし、そんなに窶れてゐるんですかねえ。あの方よりも見つともなく窶れてゐるんでせうか。（しみじみと云つて）秀雄はあたしの心を引立てようと思つて、あの後は毎日あたしに口當りのいゝことを云つて呉れるのですけれど、あたしもう秋口になつてゐるのね。あの後一週間ばかりの間に、あたし十年も歳を取つたやうな氣持がしますのよ。：：あたしがどうなつても、秀雄はちやんと候補者があるんだから、結句幸ひだと思つてるらしいんです。

久三　それは秀雄さんは仕合せだ。僕には、あの女が行つちまつても、僕の道連れになる候補者は一人もないんだ。そして、あの女は、僕の體力でも過去の記憶でも、みんな奪つてしまつたのだから、新に外の女に捧げる力は、僕には何も殘つてゐないんだよ。

くに子　ぢや、あの方をまだ思つていらつしやるのね。

久三　あの女には未練は殘つてやしないつもりだが、僕のいやな記憶はありつたけを持つて

外の男に行かれるのは、僕のやうな男でも不愉快に思はれるね。

くに子　あたしだつて、自分の身はどうなつてもいゝとしても、秀雄と秀雄の思つてる女とが一しよになつて、あたしを嗤ひ話の種にすることが、いま〳〵しくつてならないの。

二人は釘付けになつたやうに、相對して坐つて、相手の顔を見詰めながら、取りすまして話をしてゐる。

久三　くにさんと差向ひで話をするのは、何年振りだらうな。

くに子　さうね。……でも、そんなことはどちらでもいゝぢやありませんか。

久三　成程、それはどちらでもいゝ譯だ。僕は昔から、誰れにも歡迎されない男だつたのだから。他人に、思出の夢を描かせる力もありやしない。……それで、今くにさんが僕に話しかけてたことは何だつたかな。……あゝ、さうか。（取りすました調子にかへつて）秀雄さんは品行方正だと聞いてゐたが、あなたの外にも、愛してゐる女があるんですか。

くに子　どうもさうらしいの。こなひだまであたしの家へよく出入りしてゐた若い女もあつたのよ。その現代的な女も少し怪しいんだけれど、それよりも、あたしの知らない女で、誰れか譯のある女が、外にありさうに思はれるの。

久三　それはあなたの邪推ぢやあるまいか。僕の女なぞは、外に手頼りになる男は、はしくれもありやしないのに、さもありさうなことを云つてるんだよ。

くに子　あなたの奥さんはさうかも知れないけれど、あたしの家の秀雄は、それとは違ふわよ。

久三　そりや、秀雄さんは御立派だからね。（皮肉らしく素直に云つて）それで、秀雄さんの女といふのは、何處の何方だね。あなたが自分だけでそんな夢見たいなことを云つてヤキモキしてゐるんぢやないとすると。

くに子　秀雄のところへ、その女の手紙がいくつも來てゐるらしいの。そこの皮文庫を開けて見て御覽なさい。あなたはさつき覗いて見てゐたぢやないの？

久三　僕の女は、あれを金庫だと云つてゐたつけが、おや、秀雄さんの秘密の手紙があの中にしまつてあるのか。……ラブレターなんて、僕はかつて見たことがないが、後學のために、一つ讀ませて貰はうか。

くに子　御覽なさいな。その手紙を見たあとで、あなたにお頼みしたいことがあるのよ。

久三　何を？

くに子　その女の居所を突留めて貰ひたいんです。

久三　乞食同樣の僕だ。暇にまかせて探しますよ。

彼れは座を立つて、皮文庫を開けて、中の手紙をいくつか取出して、どれが所謂ラブレターであるかと云つた態度で選り分ける。そして、そのうちの一つを取上げる。

久三　どうもこれらしいな。……讀んでもいゝんだな。（と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら）なる程、女の文章だ。

くに子　（不思議さうに）女の文章ですつて？　かまはないから、あたしに聞えるやうに讀上げて御覽なさい。

くに子、手紙の方を覗くと、さつきからそつと顔を出してゐた秀雄が足早に出て來る。

秀雄　何を馬鹿な眞似をするんだ。それはおちかさんの寄越した見舞の手紙ぢやないか。（久三に向つて）君は早くお歸んなさい。奥さんが門の外で、さつきから君を呼んでゐますよ。

久三　さうですか。あいつ、まだそこらをウロウロしてゐるのか。

久三、詰らなさうに出て行く。秀雄、笑ふ。くに子も、今まで堪へてゐた笑ひを洩らす。

くに子　あんな人たちに恐れて逃出すなんて、あなたも意氣地がないのね。あたし揶揄つて見たのよ。反古籠同樣な皮文庫を、金庫とか秘密の手紙入れとか思つて、頻りに目をつけるんだから、滑稽でならないわ。

秀雄　あの人は貧乏ばかりしてゐても、不斷物を考へてるやうな男だから、突詰めて氣でも狂つたのかと思つてゐたら、何のこつた。元來が骨までも愚鈍な人間だつたのだね。（笑ふ）

くに子　はじめからそのつもりで、もつと揶揄つてゐればよかつたのに、あんな人たちの云ふことを生眞面目に聞いて、いゝ加減、頭を痛めたことぢやない。（笑ふ）

秀雄　でも、お前、あの人に金をやつたのぢやないか。

くに子　五圓のお札をたつた一枚。……あの人たちはあの紙幣を百圓札とでも思つてゐたんでせう。（笑つたが、ふと氣になつたやうに）でも、あの人、あたしの顏を侮辱したやうな口を利いてゐたけれど、あたし、そんなに見つともなく窶れてるんでせうか。

秀雄　そんなことはないよ。もう四五日も休養してゐたら元のやうになるんだから、安心しておいでよ。

くに子　さうかしら。

そこへ、治助が案內も乞はず、帽子を被つたまゝ、突如として入つて來る。

秀雄　君はそこで染井に會つたらう。

治助　染井？　久三さんにか。いや、會はなかつた。どうしたのだ？

秀雄　今まで此處にゐて、今家を出たばかりなんだが。

治助　あの人が君の家なんかへ遊びに來るのは變だね。（それには興味を感じないらしく輕く云つて、それからくに子に向つて）それよりも、今夜姉さんに、彌生町へ來て貰へまいか。……お父さんが、われ／＼四人の兄弟を集めて、遺言見たいなことを云ひたがつてゐるんだよ。

くに子　遺言？　お父さんはそんなに病氣がいけないの？

治助　なに、遺言の必要があるほど惡かあないんだがね。われ／＼兄弟が親の言ふことを聞かなかつたり、いろ／＼親困らせをしたりするものだから、親爺も失望してゐるんだらう。

くに子　だつて、あたしは親困らせなんかしないわ。結婚だつて親の命令に違はなかつたのぢやないか。

治助　ぢや、遺產は姉さんに全部やると遺言するか知れないよ。

くに子　まさか。

治助　ところで、兄貴なんかとも相談してるんだが、親爺が若し財產配けの話でもしだしたら、みんなが口を揃へて、財產なんか入りませんと返答したいんだよ。衆議一決してゐるんだから、姉さんもさう云つてお呉れよ。

くに子　（不思議さうに）なぜそんな詰らない相談をしたの？

治助　親爺が舊弊な頭でわれ／＼を見くびつてゐるから、皆なでさう云つて思ひ知らせるのだ。……第一、姉さんは金なんか入らないだらうし。

くに子　あたしだつて、使ひ切れないほどのお金を持つてやしないよ。……それよりも、お前は、結婚でも何でも、自分の事は自分の勝手に

していゝだらうけれど、あたしのことを、面白づくで久三さんなんかに言觸らしちや困るよ。あたしが馬鹿にされるやうで。……

秀雄　そんなことはまあ、どうでもいゝぢやないか。そして、彌生町へはお前も今夜出掛けることにしたらいゝだらう。

くに子　彌生町の應接室のことを思ふと、あたしゾッとするわ。當分あしこへは行きたかありませんよ。

秀雄　だつて、お父さんの遺言を聞きに行かない譯には行くまい。

くに子　あたし、まだ家の外へ一歩も出る氣にはなれないの。

治助　ぢや、姉さんはまだ身體が回復しないから來られないと云つて置かうか。

くに子　何とでもいゝやうに云つといておくれた。

治助　それぢや、用事は用濟みだ。今日は急ぐから、これで失敬しよう。

（治助は突立つたまゝそんなことを云つて、秀雄に會釋して出て行く。）

秀雄　あの男も不斷とは違つて、いやにそはそはしてゐる。今日は來る[illegible]から變な顏だよ。……おれも何だか氣が疲れて來たから、氣晴らしに、そこらを散歩して來ようか。いゝだらう。（くに子の同意を乞ふやうに云ふ）

くに子　あたし、今日は一人でゐるのが、何だか淋しくなつた。

秀雄　ぢやお前も一しよに散歩するさ。

彼がさう云ひ棄てゝ奥へ入つて行くと、くに子も後から入つて行く。

間もなく、久三が庭の裏手から入つて來て、疲れた態度で、部屋の上り口に腰を掛ける。「誰れもゐないのか」と、獨言を洩らす。そしてふと、蓄音器に目を留めて、上へ上つて蓄音器をかける。偶然選んだのは悲調を含んだ音樂であつた。それに耳を傾けながら、彼はその前に寢そべる。

と、そこへ、くに子が顏を出す。

くに子　（吃驚して）あなたはまだお歸りにならなかつたの？　いつの間に何處から此處へいらしつたの？……そこにゐるのは、眞實の久三さんなのかしら。（夢に魘されてゐるやうに云ふ）

久三　僕も、自分で本當の久三のやうに思はれないのだよ。本當の久三はやはり、あの時に死んだのだね。さつき秀雄さんの話だと、僕の連れの女が、僕を門の外で待つてるといふことだから、そのつもりで出て見ると、何處にもゐないんだ。それで、家のまはりをウロウロ搜してゐるうちに、またこの部屋へ入り込んだ譯なんだが、……

くに子　早く歸つて下さい。

久三　（泰然として）さういふくにさんも、本當のくにさんかい。あの時、彌生町の家で二人は同じ藥を分け合つて飲んだのだ。昔の久三とくに子の拔け殼が此處にゐるんだね。拔け殼同士が並んで昔の夢を見てるんだよ。

くに子　あたし、あのお藥はあなたのために飲んだのぢやないわ。

久三　僕だつて、あの藥をくにさんのために飲んだのぢやなかつた。……でも、自然にそんなことになつたのだよ。この蓄音器は、二人の夢を弔ふのに相應しい音樂だ。

くに子は骸骨が倒れるやうに、久三の側に倒れて、非現實な顏を並べる。

蓄音器は鳴りつゞける。

光秀と紹巴

人物

明智光秀
紹巴
明智左馬助
同 次右衛門尉
齋藤内藏助
藤田傳五
溝尾勝兵衛
野武士三人
侍者、飛脚など

(一)ノ一

時は、五月二十八日夜。
所は、愛宕山の西の坊。
晝間の連歌興行に用ひた文臺が、書類筆硯などを載せたまゝ置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寢てゐる二人の姿をかすかに照らしてゐる。一人は明智光秀(五十五歳)で、一人は連歌師里村紹巴(五十歳くらゐ)である。

光秀、ふと何ものかに脅かされたやうに起上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を持上げて、迂散くさい目で光秀の方を見る。光秀、何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に坐る。

紹巴、起上る。

紹巴　殿樣は御氣分がお惡いので御座いますか。

光秀　いや、氣分は惡くはない。(慌てて打消して)おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴　面白い句と仰有るのは？(光秀の顏を見守つて)今日の百韻の連歌のうちでも、殿樣のお作りなされた發句はことの外凜然としてゐるのに驚きましたが、それに飽足りないで、もつと奇拔な面白い句をお考へ遊ばしてゐるので御座いますか。

光秀　いや、年甲斐もなくあんな血氣に逸つたやうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方などの氣にも入らないに違ひない。

紹巴　(感慨を籠めて)わたくしどもの守つてゐる連歌の道はもう末で御座います。誰れも彼れも、前人の模倣ばかりをして、千篇一律無味乾燥になりましたから、近年ます〳〵連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の開いた俳諧の道に志す者を、一概に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀　其方がそんなことを云ふのは不思議だよ。應安の新式目とか、宗祇や兼良卿の新式追加とか、舊來の連歌道の講釋を後生大事に聽かせて呉れてゐた紹巴先生が、今日の卑俗な流行を是認するのは可笑しいぢやないか。

紹巴　さう仰せられると一言も御座いません。……わたくしも今夜は眠つてゐながら、いろいろと物を考へて居りました。

光秀　其方はさつきまでよく鼾を掻いてゐたよ。

紹巴　でも、あなた樣がをり〳〵溜息をお吐き遊ばすのを、夢のうちに耳に入れて居りました。

光秀　おれが溜息を吐いたかしら。それは其方の夢ぢやないか。……おれは今日、連歌を終へたあとで、直ぐに丹波へ歸城すればよかつたのに、皆なの風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに歸りそこねてしまつた。こんな靜かな處で考へ事をしてると、却つて頭の疲れるものだな。其方などは氣樂で羨ましいよ。

紹巴　それはあなた樣は中國御出陣の日が迫つて居りますから、何かとお心遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀　おれも長い年月、戰場では艱難辛苦して來たのだ。今度の門出に格別に心を惱ます譯はないのだが、この頃の蒸暑い鬱陶しい空模樣がおれの頭を壓しつけるやうで爲樣がないよ。今も外の爽かな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだつたが、今夜は外の風もじめ〳〵していけない。……かういふ時には氣持のいゝ晴々とした句は思浮ばないものだな。

紹巴　左樣で御座いませうか。でも、「時は今天が下知る五月哉」……御元氣過ぎるほどのいき〳〵とした名句では御座いませんか。

光秀　あゝな句が何で名句なことがあるものか。徒らに文字を並べただけのものだ。西の坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨りでその句の意味を考へてゐた。……「花落つる流れの末を關とめて」

紹巴　（慌てて打消すやうに）わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀　いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か云つてるやうに思はれてならなかつた。不斷は剽輕な風流人の其方の顏がおれには眩しくつてならないのだ。

紹巴　どうか左樣なことを仰せられないやうに。（恐怖に打たれたやうに）わたくしには、今日はあなた樣のお眼力が胸に響いて怖う御座います。

光秀　いや、其方の眼力が恐ろしいよ。耳を留めて聞いて見ろ、何處かで梟が鳴いてるだらう。

紹巴　（耳を澄まして）なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音がまた微かに聞えだしました。

光秀　外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の惡い眞暗な闇の夜だ。その闇の中に梟が鳴いてゐるが、其方の目が梟の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴　どうか左樣なことは仰せられないで、お心を鎮めておやすみ遊ばしませ。夏の短夜は明けるに間も御座いますまいから。

光秀　おれはさつきは、夜の明けるのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顏を見てゐると、もつと夜が續けばいゝと思はれるのだ。

紹巴　あなた樣の仰有ることが、わたくしにはどうも合點がまゐりません。

光秀　おれも合點が行かない。（燈火の方を見て）そこの弱々しい燈火を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにまけない闇の夜になるのだ。おれと其方との二人きり、闇の世の中に差向ひでゐることになるのだ。

紹巴　どうか燈火はお消しなさらないやうにお願ひ申します。

　ふと、窓から洩れ來る風で燈火が消える。

　舞臺眞暗になる。

紹巴　（震へ聲で）殿樣、どうなされました？

光秀　おれはどうもしない。燈火は自ら消えたのだ。……其方とおれとは暗闇の中に向ひ

合つてゐるのだが、梟のやうな其方の目では光秀の心が見えるのか。

紹巴　わたくしはあなた樣の御贔屓に預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた樣のお心の中が分りませう。……わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀　まあ待て。……其方は晝間、連歌興行の最中に、おれが本能寺の溝の深さ淺さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が增したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？

紹巴、答へず。

光秀　オイ、紹巴、返事をしろ。……おれの心に疑ひを掛けてゐる者は、天下に其方一人だ。……おれが句作に心を取られて、粽を包葉のまゝ嚙つたのを、其方はうろんな目付で見てゐた。……おれの溜息の數までも數へてゐたのだらう。

紹巴、答へず。直ぐ側で梟が鳴く。

光秀　貴樣は聲までも梟の眞似をしておれを脅かすつもりか。

そこへ、ふと、小姓吉之丞が手燭を持つて入つて來る。光秀一人が端坐してゐて、紹巴の姿は見えない。

光秀　紹巴は何處へ行つた？

小姓　わたくしどもの臥所へまゐつて居ります。

光秀　紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明け前に出立するから、其方どもも今から支度に取掛れ。

小姓　はい。……まだ眞夜中で御座いますが。

小姓は燈火を點ける。

光秀　晴ければ松明の用意をさせろ。闇にも雨にも構はないで急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓　お供の衆に左樣申傳へます。

小姓、次の間に入る。

光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懷紙に向つて、發句を書きつける。

紹巴は恐る〳〵入つて來る。

光秀　これを讀め。

紹巴、懷紙を受取つて讀みながら、光秀の顏色をぬすみ見する。

光秀　「時は今天が下知る五月哉」（凜然と言放つて）……おれは闇を冒して雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

紹巴　（當惑して）わたくしに龜山までお供しろと仰有るので御座いますか。

光秀　いやとは云ふまいな。

紹巴　御仰せ付けは有難う御座いますが、旅の用意はいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上で。

光秀　それはいかんよ。用意も何も入るものか。……其方の目付顏つき言葉つきの一つ一つが、おれの心を脅かしてゐるのだ。梟のやうな其方の口がおれの心を突ついてゐる。おれは其方を離す譯には行かない、龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働くか、其方のその目でよく見るやうにしろ。

紹巴　臆病者のわたくしは、戰場は恐ろしう御座います。

光秀　今日のおれの心の動きをいろ〳〵に監視してゐた其方だ。これから先きも、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといゝ。（脇差を手に執つて）おれはお前と寢床を並べて、連歌の話をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐろ。

紹巴　（おど／＼しながら）お殿樣は何故今日に限つてわた／＼しをお憎み遊ばすので御座いませうか。

光秀　安心しろ。只今は決して其方を憎んでゐないよ。躊躇逡巡してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させて呉れたやうなものだ。今書いた發句と、晝間書いて神前に收めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現はれが違ふのが、其方に分らないことはあるまい。……晝間はまだ文字に遊びがあつた。

紹巴　何の御決心で御座いますか。

光秀　空呆けるな。……其方の首を出陣の血祭りに備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を驅廻るのだ。おれの發句がおれの出陣の鬨であるしだ。……さつき其方に云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、生命懸けの戰場を往來したなら、少しは活氣のある句が作れるやうになるだらう。

紹巴　いえ、わたくしどもは、師匠讓りの連歌の眞似事さへいたして居ればよろしいので御座います。大それた望みを持つては居りません。

光秀　自分で望まなくつても、其方はおれと一しよに行くところまで行かなければなるまい。其方はおれの目の屆くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしろ。

紹巴　（やうやく決心したやうに）ハイ。……では、何處まででもお伴いたしませう。

光秀　おれは馴染の深い其方を決して苦しめようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初疑ひを挾んだ其方を打ちやる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白い句でもつくつて、おれを慰めて呉れ。

そこへ、小姓入つて來る。

小姓　御出立の用意が調ひました。

光秀　さうか。……紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。（紹巴に向ひ）さあ、行かう。一しよに闇の中をつゝ走らう。

光秀、紹巴の腕を取つて引立てる。

（一）ノ二

闇の中を松明で道を照らして、四五騎が駛せてゐる。そのうちの一人は光秀で、一人は紹巴である。紹巴は半死人の如く喘ぎ喘ぎ隨いて行く。

光秀　鬱陶しかつたおれの頭も次第に晴々しくなりかけたよ。東の空もいくらか白んで來たではないか。今日は久振りで五月晴のうららかな空が見られさうだな。

紹巴　御意に御座います。（苦しげに云ふ）

光秀　光秀はもう、昨夕のやうに溜息ばかり吐いてはゐないぞ。（ふと、向うを見つけて馬を留める）みんな馬を留めろ。向うから怪しい奴がやつて來る。……紹巴、其方の目ではあれが何だと思はれる？

紹巴　さあ、何で御座いませうか。

光秀　百姓か。先見の明のある其方に分らないのか。……燈火を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運に關はりがありさうだ。

紹巴　御殿樣の御運に關はりのあるかないかは分りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞものでは御座いますまい。……さう云へば、わたくしも、何のために殿樣にお隨き申して、こんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が分らなくなりました。（泣言のやうに云ふ）

光秀　歌詠みといふ者はよく／＼意氣地がないものだ。（笑ふ）

そこへ、飛脚某が急足で入つて來て、ふ

と、光秀の一行を見て驚く。會釋して道を避けようとする。

光秀　オイ、待て。其方は何者だ？

飛脚　龜山のお城へまゐる者で御座います。

光秀　龜山の城へ？……おれはさつきからさうだらうと思つて見てゐた。……其方はいゝところでおれに會つたのだ。龜山まで行くには及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。

飛脚（相手の顔を注視して）あなた樣は龜山のお殿樣でいらつしやいますか。

光秀　おれが光秀だ。おれの顔も知らないやうな雜兵を使者に寄越したのか。……そんなことは兎に角、早く用事を云へ。

飛脚　森お亂所樣からの御書狀を持參いたしました。

光秀　何、蘭丸からの手紙？（昂奮して云つて）見せろ。

飛脚、背負つた包の中から文箱を取出す。從者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それを開けて、從者の差出した松明の光にて讀む。

光秀　承知した。

讀終ると、さう云つて、ふと、手紙を松明の火にて燃す。

飛脚（それに驚きながら）お亂所樣への御返事は承らせて頂く譯にはまゐりますまいか。お殿樣へ確かにお屆申上げた證據を頂きたら存じます。

光秀　おれの返事が欲しいといふのか。欲しければ返事をしてやらう。

光秀、咄嗟に飛脚を斬殺す。紹巴、その他の從者驚く。

光秀　信長公の御上意に、中國出陣の用意が出來たなら、人數のたきつき、家中の馬などの樣子を見たいから、早速引連れて京へ上れと仰せられたと、蘭丸からおれに知らせて來たのだ。主君の御寵愛を笠に着て、權柄づくでおれに物を云ふ森の小倅の手紙を燒いて、使者を斬つた。（泰然として云つて）紹巴にはおれの心が分つてゐるだらうな。

紹巴　虚弱なわたくしは、疲勞して夢のやうでございます。

光秀　もう一走りだ。みんな急げ。

光秀馬を走らす。

（一）ノ三

龜山城外の廣場。六月朔日の夕暮。

明智光秀、小姓吉之丞を連れて出て來る。

光秀　紹巴は城内の何處にもゐないと云ふのだな。

小姓　午の刻までは、あの方は死人のやうな顔して寢てばかり居りましたが、暫らく立つて部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つかりません。

光秀　出陣の準備に取りまぎれて、あの男のことは忘れてゐたのだ。……あの臆病者、逃げたつてどうもしないだらうが、念のため、も一度搜して見ろ。

小姓出て行く。光秀床几に腰を掛けて、五月晴れの夕空を仰ぐ。そこへ、明智左馬助、四天王但馬守、齋藤内藏助、藤田傳五、溝尾勝兵衞が入つて來る。

左馬助　皆なを召連れてまゐりました。

光秀（ふと元氣づいて）かうして五人の揃つたのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。

左馬助　殿には人拂ひをなされて、我々五人の者に、火急な御談合があると云ふのだ。（他の仲間に向つて云ふ）

光秀　おれ一人でくよくよ物を思つてゐるよりも、早く其方たちに相談すればよかつた。長い間おれと艱難を共にして呉れた其方たちに、おれの心中を打明けるのを躊躇したのは

愚なことであつた。

内藏助　殿には先日來、ひどく物を案じていらせられたやうに思はれました。愛宕山御參籠を終へて御歸城なされた時には、殿の御顔色はひどくお窶れなされたやうに拜察いたしました。

光秀　愛宕山中の一夜は、おれも氣が狂つたかと思はれるほどの苦勞をしたよ。一夜のうちに頭の髮も白くなつたかと思はれる。（苦笑を洩らして、ふと調子を變へて）さつきこの廣場で人數調べをした時に、内藏助は、大丈夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが間違ひはあるまいな。

内藏助　それに相違は御座いません。皆なよく食つて十分に休息してゐる元氣者ばかりで御座いますから、中國へ押出しても、戰の稼ぎは、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣ひは御座いますまい。

光秀　それは頼もしいな。（喜色を浮べて向うを見る）

次右衛門尉　（もどかしさうに）我々五人の者への内密の御談合は何事で御座いませうか。出陣の手配りはすでに出來上つてゐるので御座いますが。

光秀　……まあ、おれの申すことを心を落着けてよく聞いて呉れ。……おれも上樣のお取立てで、三千石の小身から、俄かに二十五萬石も拜領いたすやうになつたのだが、岐阜表で三月三日の節句には、大名高家列座の前で、面の皮を剝がれるやうな目に會はされたし、その後、信州上諏訪の御本陣では、欄干に頭を押付けられて蹴り飛ばされて、衆人稠座の中で恥を搔かされた。今度は今度で、徳川殿御饗應のことから、無殘なお叱りを受けて、俄かな西國出陣を仰せつけられた。こんな有樣では、この次には、どんな我身の大事に及ぶかも知れないと、おれは案ぜられるよ。

次右衛門尉　殿の御胸中は御推察申上げて居ります。

傳五　わたくしども、人知れず無念の涙を吞んだことも御座いました。

光秀　この年齢になつて、子供か何ぞのやうに、打擲されてゐるのを見た者は、さぞ腑甲斐ない奴だとおれを嘲るだらうな。

勝兵衞　上樣はかやうな御氣性だとお思ひになつて、御忍耐遊ばしたらよろしからうと存ぜられます。上樣は特別に殿に對しておにくしみを持つていらせられるのでは御座いますまい。

光秀　勝兵衞はおれを忍耐力の薄弱な男とでも思つてゐるのか。

勝兵衞　決して左樣のことは。……

光秀　いや、今はくど〳〵と愚痴をこぼすために、其方どもを寄集めたのではないよ。おれは非常な決心をしてゐる。

五人は目を凝らして光秀を見上げる。光秀は床几を下りて、敷皮の上に居直り、五人の者に近く接す。五人は光秀の言葉を待設けてゐる。

光秀　……老後の思出に、一夜なりとも天下をおれのものにしたいと決心をしてゐる。（獨言のやうに云ふ）

五人の者驚いて言葉を發せず。

光秀　有爲轉變、榮枯盛衰の世の習ひだ。一日たりとも望みを遂げればそれでいゝと覺悟を極めた。……其方たちが同意して呉れなければ、おれ一人で本能寺へ斬込んで、腹を搔切るまでのことだ。……其方たちは何と思ふ。

少時沈默の後、

左馬助　殿御一人の御胸中で左樣思召された上は、天知る地知る我知ると申すたとへの通り、そのまゝでは濟みますまい。まして、五

人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあるまいと思はれます。

内藏助　これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。

次右衛門尉　お目出たう存じます。わたくしども、多年の胸のつかへが下つたやうに存ぜられます。

傳五　わたくしも雙手を擧げて御同意申上げます。

光秀　（勝兵衛を見て）其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しろと申すか。

勝兵衛　どういたしまして。……明日から、わが殿を上樣として仰ぎ奉られるやうに相成りました。こんな喜ばしいことは御座いません。……この上の御談合は御無用かと存ぜられます。

光秀　五人が五人とも同意してくれて、おれも滿足だ。こんな時には、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諫言立てをしたがるものだが、皆なが符節を合はせたやうに意見が一致したのは愉快だ。

左馬助　この頃は夜が短う御座いますから、これから直ぐに發足いたしませう。ほの〴〵と夜の明ける頃に本能寺をひた〳〵と取卷いて、成るべくなら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大將を討果すやうに手順をつけることにいたしたう御座います。

光秀　おれもさう思つてゐた。……人數の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。

左馬助　その御心配は御無用で御座います。右へ向はうと左へ向はうと、士卒どもの出陣の氣持にかはりは御座いません。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも彼等の氣持に差別は御座いません。……京近くなつてから、殿が天下樣にお成り遊ばすと觸れ廻らせませう。下々の者草履取以下にいたるまで、手柄次第で知行を與へると觸れましたら、皆な揃つて喜び勇むに相違御座いません。

内藏助　から極つたら一刻も時を遲らせてはならない。速刻出陣のお觸れを廻さなければならん。

皆々立上る。

光秀　氣おくれをするな。

あとから立上る。

（二）ノ一

六月十日の日暮頃。

下鳥羽の陣屋。

光秀、入浴後の輕裝にて、例の陰鬱な顏して獨酌でチビ〳〵やつてゐる。

そこへ、侍者が入つて來る。

侍者　紹巴どのがお目通りを願つて居りますが、いかゞいたしませうか。

光秀　紹巴が來ようとは思ひも掛けぬことだ。

侍者　上樣は御多用でお疲れ遊ばしてゐるからと、一應は斷りましたが、たつてお目通りいたしたいと申しますので。

光秀　會つてやるから直ぐに此方へ通せ。

侍者　ハイ。

出て行くと、光秀、また、物を考へながら盃を舐める。をり〳〵團扇をも使ふ。紹巴、恐る〳〵入つて來て、恭しく平伏する。

光秀　其方にまた會へるとは思はなかつたが、あの後何處で何をしてゐた?

紹巴　戰場を見せてやらうとの仰せに背きまして、お許しをも乞はないで、龜山のお城を退

去しまして、申譯のいたしやうも御座いません。

光秀　それはもうすんだことだよ。……しかし、今度の事には、其方も關係があるのだから、時々は其方のことを思出してゐたよ。

紹巴　恐れ入ります。（やゝ安心して）上様がわたくしを憎んでいらつしやるやうに思はれましたので、お城を拔出して、丹波の山中に二三日潜んで居りました。路用の金は持つてゐませんので、食ふや食はずのひどい思ひをいたしました。

光秀　馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を奧へようと思つてゐたのに。

紹巴　上様の御大業に何一つお役に立たなかつたわたくしにまで、御勝利をお裾分けをして下さるので御座いますか。天下様におなり遊ばしたお噂を、山中で承りまして、それでは、お膝下に上らなければならないと思ひまして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛中の辻々に御寛恕の有難い御高札を拝見いたしまして、御仁政に感涙を催しました。

光秀　[illegible]のやうな目をした其方も、おれの側に附いてゐなかつたから、眞相にはなんにも分らないのだな。……まあ一杯やれ。……愛宕山の西ノ坊の一夜のことが、おれには遠い昔の夢のやうに思はれるよ。

光秀の差す盃を紹巴は受ける。

紹巴　上様お手づからのお酌は勿體なう御座います。それに、あまり御酒をお嗜みにならない上様が、今夜はお一人で召上るのは不思議に思はれますが。

光秀　成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連歌をつくる氣持にはなれず、外に鬱憤晴らしの手段がないから、酒でも飲むことにしたのだよ。

紹巴　さすがは風雅の道を辨へていらせられるので、尊い御身分で、お手酌を樂んでいらせられるのは恐入ります。

光秀　ところが、からしてゐても、なかなか風流な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人の心を浮立たせるものと極つてゐるので、その名前に惚れて無理に飲んではゐるものの、ちつともうまくないよ。心が浮立ちもしない。……酒と云へば、おれは七杯入りの大杯を内府殿に押付けられたことがあつたのだ、御辭退すると、酒を飲まんのなら、これを飲めと、鼻先へ白刃を指しつけられたので、おれは夢心地で大杯を飲干したが、内府殿は、さては生命は惜しいものなんだなと冷笑なされたよ。

紹巴　内府様は殘忍な方で御座いました。

光秀　最早おれに、飲めない大杯を押付けるものは、天下に一人もなくなつた譯なんだが、それがおれに取つていゝことだか悪いことだか、おれにサッパリ分らなくなつた。

紹巴　それはお身分が尊くお成り遊ばすほど、お心遣ひも多う御座いませう。わたくしどもは、上様御仁政の下に安穏に日が過されますれば、それで滿足いたすので御座います。

光秀　其方はおれの力で天下がをさまると思つて訪ねて來たのか。愛宕の山の闇の中を突拔けて來たおれの名が天下に轟きだしたのを慕つてやつて來たのか。

紹巴　もはやわたくしに對するお疑ひは解けたことと存じまして。

光秀　其方があの時おれの事を本能寺へ注進するか知れないと氣遣つてゐたのだが、それはもう濟んだことだ。……これからおれの側にゐて呉れ。決して無慈悲な取扱ひはしないよ。……たとひ、まだ連歌の遊びをする氣にはなれなくつても、其方のやうな男が側にゐて呉れると、おれは好きでもない酒をチビチ

と飲むよりは、氣晴らしになつていゝのだ。

紹巴　上樣のお側に置いて頂ければ、これほど仕合せなことは御座いませんが、戰場のお役に立たないわたくしが、お側でまご〳〵してゐましては、却つてお目障りになりさうに思はれます。

光秀　いや、其方も知つてる通り、おれは、內府殿や以前の肝癪とは好みが違つて、女子共を側に置いて酒宴を催すことには、あんまり興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな男と、とぼけた話でもしてゐる方が、おれの柄に合つてゐるのだらうな。……ところで、紹巴、おれはひどく人氣の惡い男だよ。大望を遂げた今日、しみ〴〵それに氣がついたよ。松永彈正でもおれほどには世間から毛嫌ひされてはゐなかつたらうな。

紹巴　わたくしには左樣存ぜられませんが。……

光秀　其方は愛宕の山でおれの心を見破つた最初の男だが、今日以後のおれの運勢をどう思つてゐる？（相手を注視する）

紹巴　わたくしはたゞの連歌師で御座います。上樣の御運勢のよろしいやうにと願つて居りますばかりで、世上の事は何事も分りません。

光秀　今まで神隱しに隱されてゐたやうな其方が、今日出拔けにやつて來たのは、何か深い譯がありさうにおれには思はれるのだが。……兎に角、今夜から、おれの陣所へ留めて置くから、その覺悟をしてゐて呉れ。荒武者ばかりに取りまかれてゐるので、おれの息が詰りさうなのだ。

紹巴、當惑してゐる。そこへ、內藏助が入つて來る。

內藏助　紹巴殿か。悠長らしく酒のお相手などして。……早くお立ちなさい。

光秀　さう六ケ敷く云ふな。この男は陣屋に留めて置いて呉れ。この男はおれの運を左右する魔力を持つてゐるさうに思はれてならないのだから。……今日出拔けに訪ねて來たのが、おれの仕事に關係がありさうに思はれてならないのだよ。この男を歸さないで留めて置いて呉れ。……紹巴、其方は暫らく次の間に控へてゐろ。

紹巴、おど〳〵して入つて行く。

內藏助　あんな坊主をなぜお相手になさいます。（不機嫌に云つて）……只今、郡山から使の者が歸りましたが、筒井順慶はお味方に加はる望みは全くなくなりました。郡山の城內に兵糧を貯へて、我々に手向ふ準備をしてゐるさうで御座います。其方から申出した有利な條件さへ受入れる見込みはなささうで御座います。

光秀　あの打算的の男がさう思つたのは、いよいよわが軍勢に勝目がないと見込んだのだな。

內藏助　どうせ他人は頼みになりません。われわれだけでやれる所までやるより外致し方が御座いますまい。

光秀　婿の忠興にさへ憎まれたおれだが、かうまで四方八方から愛想を盡かされようとは思はなかつた。……しかし、內藏助、其方たちはまだおれに背かうとはしないか。

內藏助　何を仰せられます。衣服に火のついたやうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐられません。

光秀　それもさうだ。速刻皆なを集めて置け。今後の方針を極めよう。……どうせ、龜山出立の際のやうに、衆議一決といふ譯には行くまいな。

內藏助　しかし、仲間內は主君と生死を一つにする覺悟がついて居りますから、それだけは御安心遊ばしませ。

光秀　ウヽン。(氣乘りのしない返事をする)

内藏助、出て行く。光秀はなほ盃を舐めてゐる。顏には憂鬱の色が加はる。ふと側の團扇を取つて煽ぐ。やがて、隣室から唸り聲が聞える。光秀、不思議さうに耳を傾けて座を立ちかける。

光秀　誰れだ? 唸つてゐるのは。

紹巴　わたくしで御座います。紹巴で御座います。

光秀　どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴　只今内藏助樣に手足を縛られました。

光秀　(微笑して) 内藏助に縛られたのか。なぜそんな目に會はされた?

紹巴　生死の瀬戸の場合に邪魔つけだ、不吉な奴だとお思ひになつて、あの栄螺のやうな拳でわたくしの横面をお擲りになりました。それでわたくしを柱に縛りつけて、此處を動くなと仰有つて行かれました。

光秀　内藏助は素早い奴だ。……途中ではおれに其方の身體を自由にさせて置いたから逃げられたら、とさうして置けば大丈夫なんだ。

紹巴　どうかお揶揄ひ遊ばさないで、お小姓衆でもお呼びになつて、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし。

光秀　連歌興行の折、おれの旗上げの心を最初に讀んだ其方だ。おれが、ドン詰りまで行つて腹でも切る時には、辭世の發句を詠むから、其方が脇をつけて呉れ。……連歌師は花見月見の句は詠めても、死生の境にはそれどころでないと云ふのか。……しかし、無意味に苦しめては可哀さうだ。おれが縛めを解いてやらう。

光秀、座を立たうとしてゐるところへ、侍者某アタフタと入つて來て、跪くや否や、

侍者　羽柴筑前殿の數萬の人數が、攝州境に近づいたとの御注進が御座いました。

光秀　なに、秀吉が、……秀吉がもう此方へ向つたのか。

光秀、慌しく立上る。

他の侍者某入つて來る。平伏して、

侍者　上樣には速く御評定の席にいらせられるやうにと、内藏助樣がお願ひ申して居ります。

光秀　只今出掛けるところだ。

光秀、出て行く。

「どうぞ、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし」と、紹巴の聲。

「それどころではないのだ」と、光秀の聲。

(二)ノ二

陣屋の一室。あたりは薄暗い。

紹巴、紐で縛られてゐる。齋藤内藏助、溝尾勝兵衛と一しよに評定の室から出て來る。

内藏助　(昂奮して) 此方が堅まつてゐないところへ、かう早く秀吉に乘込んで來られちや、味方に勝目はないよ。一先づ坂本へ退却して籠城して工夫を凝らすのが差當つての良策だが、おれの說を用ひないと、大將もあとになつて思ひ當るだらう。

勝兵衛　しかし、秀吉に恐れて退却したやうで、味方の意氣が沮喪するかも知れないよ。どうせ此方には世間の人望もないのだから、破れかぶれでやつつけるより外仕方があるまい。上樣も腹の中はさうなんだらう。お前も我慢して、多數の意見に從つて、やれるまでやつて見て呉れ。

内藏助　どうせ、おれ一人で退却する譯には行かないからな。

二人はまた話しながら、ふと、紹巴の方を見る。

紹巴　内藏助樣、お蔭樣で御座います。この縛

お許しなすつて下さいまし。

内藏助 坊主、まだそこにゐたのか。

勝兵衛 紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。

内藏助 こいつ、大將のところへ胡麻を擂りに來やがつた。それで憎々しいからおれが縛つたのだ。

勝兵衛 可哀さうに。

内藏助 連歌師だの、茶坊主だの、今日の時勢に無益な奴だ。大將もこんな奴に取合つてゐるから、勇氣が鈍つて氣が違つていけないのだ。

勝兵衛 しかし可哀さうだな。風流といふ名は聞えたが、最後の旦那がなければ生きてゐられないのだから。

内藏助 此奴の大將が天下を取つたから御機嫌伺ひに來たのだらうが、今に、秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴のお髭の塵を拂ひに出掛けることだらう。

さう云ひながら行過ぎる。勝兵衛も一しよに出て行く。紹巴、恨めしさうに見送つて、自分で縛めを解かうとして藻掻く。

そこへ光秀が考へ事をしながら入つて來て、紹巴に氣付かないで行過ぎようとする。

紹巴 上樣、お無事で御座います。

光秀、ふとその方に氣がつく。

光秀 其方はまだそこにゐたのか。

紹巴 どなたにお願ひしても繩をほどいては下さいません。

光秀 其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場に連れて行つてやらう。

紹巴 さつき、上樣は縛めをほどいてやらうと仰有つたのをお忘れになつたのです。……さつきお手づから繩をして下すつたやうに、恐れながら、お手づから縛めをほどいて下さいまし。

光秀 さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穗先きが突きつけられたのだ。其方の縛られた身體はおれの身體見たいだ。

紹巴 わたくしの目の前にも白刃が突きつけられてゐるやうに見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。

光秀 なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間者になつておれの軍の準備を探りに來たのぢやあるまいし。

紹巴 わたくしは上樣の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。

光秀 上樣だの、御勝利だのといふ其方の言葉は、冷かしのやうにおれには聞えるよ。……其處に坐つてゐて、おれのために辭世の句の用意でもしてゐろ。

光秀、行過ぎる。紹巴、恨めしさうに見送つてゐる。

鎧武者幾人も通過ぎる。怪訝、輕蔑、さま／＼な表情をして紹巴を見ながら行く。

紹巴 わたくしも戰場へお伴いたします。縛めを解いて下さい。

皆去つて行く。あたりは暗くなる。暫らくして、覆面した野武士三人忍んで來る。

甲 大丈夫、この陣屋は空つぽだ。（次の室へ入つて行く）

乙 オイ、誰れか縛られてゐるぜ。（紹巴の方を見る）

紹巴 助けて呉れ。

乙 お前は誰人か。

紹巴 お前たちは野伏か。それなら、この紐をほどいて呉れ。おれが案内して一儲けさせてやらう。

丙 そんなことを云つて、この男を信用出來るだらうか。

乙 刃物を持つてゐないから大丈夫だらう。古

ぼけた弱さうな奴だ。
紹巴　おれは歌詠みだ。安心して縛めを解いて呉れ。
甲　待て〱。今の時世に人間の云ふことが信用出來るか。此處の大將は大恩のある信長公を暗打に會はせたのだ。さういふ世の中に迂濶に他人の云ふことが信用出來るか。
紹巴　なに、羽柴筑前どのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處の大將の壽命はもう知れたものだよ。
甲　どちらが勝たうと、おれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の落武者どもの物の具を剝取るのが目のつけどころだ。
丙　全體お前は何をして縛られたのだ？
紹巴　（氣取つた口調で）此處の大將を打取るつもりで、頭を剃つて連歌師になつて入込んだのだ。
乙　それがばれて縛られたのか。誰れに頼まれてそんな危いことをやる氣になつたのだ？
紹巴　信長公のお身内の方のお吩咐だよ。
甲　お前は見掛けによらない太い奴だな。信長公の仇討を一人でやらうとしたのか。
紹巴　おれを助けて呉れ。あとで御主君に御褒美を貰つてやらう。
乙　そんな方なら、兎に角お助け申さう。
乙は手早く紹巴の縛めを解く。
甲　さあ、おれたちを案内しろ。
紹巴　おれに隨いて來い。
紹巴、あわたゞしく駈出す。

（二）ノ三

十三日の夜、深更。
小栗栖の田舍道。
野武士三人。紹巴、疲勞した樣子で一しよに歩いて來る。

甲　おれたちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身内の家來だと云つたのが、譃でもまことでも、光秀公の御陣所へ突出すことにしよう。大罪人を引捕へたのだから、いくらかの御褒美が貰へるだらうよ。
乙　いくらの御褒美になるもんぢやあるまいが、二三日騙されてゐた腹癒せに突出してやらう。此處でぶち殺したところで一文にもなるもんぢやなしさ。
丙　何か由緒のありさうな男だが、おれたちの仲間に入らせる譯には行かないし。
紹巴　お仲間にでも何にでも入りますから、どうぞ生命はお助けなすつて下さいまし。
甲　天下樣を暗打に會はさうとした奴が弱い音を吐きあがる。
紹巴　本當はわたくしは、詰らない連歌師で御座います。
甲　さう云つて、おれたちを誤魔化さうとするのか。お陣所へ連れて行つて調べて貰つたら分ることだ。……おれたちもこの頃はいゝ目に會はなかつた。
乙　何處かへ御奉公しようとしたつて、今日の時世ぢや、何處の大名が勝つか負けるか分らんのだから。
丙　いや、強い方を選つて行つたたつて、戰場へ出て殺されちや三文にもならないからな。どうせ生命がけなら、追ひつかはれないで、隙間を見て野稼ぎをした方が氣が利いてゐる。
乙　それにしても、この頃のやうに不漁が續いちや仕樣がない。
甲　まあ、こんな坊主でも飯の種にして見るか。
丙　しかし、此奴は本當に、磔刑になるほどの大罪人だらうか。空巣ねらひのコソ〱泥棒だつたら、陣所へ連れて行つたつて、三文にもなりやしない。
乙　この面魂はどうしてもたゞの者ぢやない

よ。……さあ、行かう。
紹巴を引立てて行かうとしてゐるところへ、馬の音聞ゆ。

甲　オイ。こんな夜更けに馬の音のするのは變ぢやないか。

乙　落武者だな。……占めた。隠れろ。（紹巴を引連れて、皆なが藪蔭に隠れる）

光秀、二三の從者と、疲れた馬に乗つて、トボ〳〵としてやつて來る。藪の中から槍の穂先きが現はれて、グサと光秀の脇腹を突く。紹巴、月光にて藪の隙間から苦悶してゐる光秀の顔を見て驚く。光秀もそちらを見て驚きながら、トボ〳〵と行過ぎる。

その行過ぎたあとで、野武士と紹巴現はれる。

甲　たしかに一人だけはやつつけた筈だが。（と、あたりを見まはす）

乙　血が滴れてゐるぢやないか。おれが見て來よう。（入つて行く）

紹巴　今のはたしかに日向守どのだ。

丙　お前が暗討に會はさうとした光秀公か。いい加減なことを云ふな。

紹巴　たしかにさうだ。おれは、あの方の謀反のはじめからしまひまで見せつけられた。おれだけが見たやうなものだ。おれも恐ろしい世を見せつけられたものだ。あの方もおれの方を見てゐられた。（震へてゐる）

甲　あれが大將なら、占めた。……さあ行つて見よう。

丙　用心しろ。あれが天下様なら、お供の者も相當の腕利きだらうぜ。

甲　なに、落武者に大將も草履取も差別があるものか。へと〳〵になつて、半死人も同様だ。おれが行つて見る。お前、この男の番をしてゐろ。

丙　あれが天下様なら、天下様を暗討にしかけたこの男なぞ何處へ連れて行つたつて、もう賣物にならないぢやないか。召取つても御褒美の種になりやしない。

甲　成程さうだ。……この坊主、三文の値打もなくなつた。どこへでも行きあがれ。

紹巴、悲しいやうな悦しいやうな顔して、トボ〳〵と出て行く。

劇場の芝居は劇中劇と云つてもいゝ。地球を劇場として、我々は各々一役づつ演ずべく生まれて來たやうなものだ。善人も悪人も馬鹿も狂人も、それ〳〵に役をふられて、死の幕が下りるまで何かやらされるのだ。勘平の候補者が多いやうに、どうせ舞臺へ引摺り出されたかぎりは、誰れしも立者になりたいのだが、天がさう命じてゐなければじたばたしたつて爲方がない。まづい脚本を書くべく役づけられたものは、一生まづい脚本を書きつゞけるだらう。

（『白鳥随筆集』の「演劇雑感」より）

人生五十

一

暗黒の死の洞門へ一歩々々足を進めてゐる我我人間に何の眞の幸福があらうぞと私はつねに思つてゐる。居所の羊に異らない身でありながら、幸福を夢みるのは不思議なことだと思つてゐる。それにも關はらず、生きてゐるうちは幸と不幸、快と不快の感じに動かされない時は無い。

十幾年目で再び手に取つた「即興詩人」を讀み終つた今夜、昔馴染の如くに懷かしいアヌンチヤタやアントニオの面影を偲んで、珍らしく感傷的になつた私は誰れかに向つてこの氣持を洩らさうとしても相手がないので、微かな波の音をのみ聞きながら自分ひとりの思ひに耽つてゐた。自分の通つて來たやうな生涯と、アントニオの經て來たやうな生涯とを比べたりした。

「自分が幸福を感じたのは、一生のうちで何時であつたらう、どういふ場合であつたらう」と、すでに一生を終つて將來に何等の期待を有つてゐない人のやうな氣持で、私は過去を顧みて自問自答してゐたが、私のやうな幼い頃から萬事に用心深かつた人間でも、詰りは運命の波に漂はされ、流れ流れて今日に達したので、幸も不幸も偶然に起つて偶然に消えた泡沫に過ぎないのであつた。アヌンチヤタなどある特種の人々の身の上のみが浮草に似てゐるのではなくつて、老若男女の、人といふ人のすべてが、よく考へて見ると、浮草のやうに世を生きてゐるのである。

私は十歳にも滿たぬ頃から、新古の小說類を手に入るかぎり讀んでゐたため、色戀の興味は早くから朧げにでも感じるやうになつてゐたが、故郷にゐた間は現實の女には思ひを寄せたことはなかつた。むしろ、知つてゐる村の女を老若ともに卑しんでゐた。これは、書物を讀んで空想に浮べる女は、美しくて、言語擧動も奥床しいのに、私の故郷である小さな漁村の女どもは、みんな醜くつて、言ふことなすことが汚らしく私に思はれてゐたためかも知れなかつた。幼い私を揶揄ふやうな態度をする女はあつたが、そのたびに私はいやらしい氣持がしてゐた。

十六の春岡山の宣教師の經營してゐる私塾へ入學した時には、傍ら病院通ひをしなければならないやうな虛弱な身體になつてゐたが、寂しい田舍からはじめて都會へ出た悅しさに、心も身體ものび〱とした。半年足らずの間にぐつと脊が高くなつたと云はれたほどであつた。發育盛りの少年期で急速に心に一轉化の起るときであつたが、かねて小說などの耽讀によつて肥料をかけられてゐた私には色情の芽も早く萌したのであつた。目に觸れる女の美醜が氣にかかりだした。丘の上の小さな洋館に住んでゐる宣教師の娘が、ことに私の目を惹いた。そこには二人の娘がゐて、妹の方は瘦せてギス〱して意地の惡さうな顏をしてゐたが、姉の方は紅味を帶びた豐かな頰をしてゐて愛嬌があつた。金髮碧眼が却つて女の美を增してゐるやうにさへ思はれた。聖母や天使やその他聖書の中に現はれてゐる女を、私はこの姉娘によつて想像するやうになつた。これを初戀と名づけるのは少し不穩當に思はれるが、私はその時生れては

じめて敬愛の念を寄せて異性を眺めたのであつた。後年外國の小説を讀んで、アヌンチヤタなど美しい若い女に接する時にも、屢々岡山で見た宣教師の姉娘を思出すほどに、彼女は深く私の幼い胸に刻まれた。

しかし、私は在學中一度も彼女に接して彼女の言葉をハッキリ聞くことが出來なかつた。私たちが教へを受けた會話の教師は、鼻ばかり高い赭顔の極めて醜い老嬢であつた。「西洋人にもいろ〳〵あるんだなあ」と、私は二人の女を比較してゐた。

學校は傳道を目的としてつくられてゐたので、學生は五年級を合して三十人に足らなかつた。半ば信者の子弟であつたが、その他は官立の中學へ入れないやうな少年であつた。大抵の學生は自宅から通學してゐたが、私は素人下宿に泊つてゐた。一年間の在學中私は四五度も轉居した。そして一度は轉居によつて危いところを免れたのであつた。

二

はじめは軍人の未亡人の家に下宿してゐた私は、同宿の二人の醫學生が屢々酒を飲んでは騒ぐのに惱まされたので、同宿者のない家を捜して轉居することにした。其家には口數の多い主婦と、平生はムッツリしてゐて時々は癇癪を起す亭主とが、二人の娘と住んでゐた。その頃の私の目には、姉娘は餘程歳を取つてゐるやうに思はれたが、その實二十を左程過ぎてはゐなかつたのであらう。

私は物置部屋の側の半分は板敷で、疊は二疊しか敷かれてゐない處を借りたのであつた。自炊する筈であつたが主婦が、「當分は此方で一しよに御飯をお上んなさい」と云つて呉れたので、さうすることにした。前の宿にゐた醫學生はよく、「米が十錢すりや唐米は臭い。ノウちよさん」といふ流行唄を唄つてゐたが、まだ諸式の廉い頃だつたので、賄付で宿料が一ケ月二圓であつたと覺えてゐる。尤も食物は粗惡で、朝晩の副食物は鹽つ辛い漬物きりのことが多く、晝飯にだけ野菜か豆腐くらゐがついてゐた。（前の宿にゐた時も同樣だつたことを思ふと、その頃日本人の生活程度がいかに低かつたかが察せられる）ある日、亭主は晝餐の副食物を燒豆腐にしろと命じて置いたのに。たゞの豆腐を用ひたといつて、主婦を叱りつけたが、主婦はそんなことを聞いた覺えはないと強辯して、恐ろしい夫婦喧嘩がはじまつた。側で食事をしてゐた私は迷惑しながら腹の中でこの夫婦を侮蔑してゐたが、今三十年目にその夫婦喧嘩の有樣を思出すと、必ずしも笑ひ事ではないやうに思はれる。（大抵の人間の家庭生活にはこの夫婦の言合ひ見たいなことがつねにあるのであらう）

私は暑中休暇に郷里へ歸つたら新鮮な魚がウンと食べられると期待してゐたので宿の食物の良否に心を惱ますことはなかつた。それに學校の歸り途に、しば〳〵饂飩屋や汁粉屋へ獨りで立寄ることもあつた。机の引出へは寶來豆や氷砂糖をよく貯へてゐた。さういふ物をポリ〳〵嚙みながら、教科書その他の書物を讀んだ。

その家の者は何によつて生計を立ててゐたのか分らなかつたが、亭主は大抵半日ぐらゐは畑を耕してゐた。二人の娘は、宣教師の娘とは人種が違つてゐる如くに容貌風姿も違つて醜かつた。私は彼女等と滅多に話を交へることはなかつたが、同窓の丸尾――この宿の紹介者――は、遊びに來るたびに娘たちと面白さうに話をしてゐた。私の部屋へ連れて來て、私の煩さがるのを構はないで、讃美歌を教へてやつたり、指角力を取つたり、あるひは自分の首へ紐

を纏はつて小さい娘に引張らせるやうな滑稽な遊戯をしては、みんなでキャッキャッ笑つたりすることもあつた。

丸尾は私よりも三つほどの年上で、學課の出來は惡かつたが、快活で人がいゝので、私は入學當時から親しくしてゐた。丸尾自身には信仰はなくつても基督信徒の家庭に育つた爲めか、男女關係の話は決して口へ出さなかつたが、彼れが無邪氣だか有邪氣だか、二人の娘に戲れてゐる有樣は無言のうちに私の官能を刺戟した。宣教師の娘が姉妹で、庭に設けられてあるシーソーとかいふ遊戯機械に乘つて、冴えた聲で何か喋りながら遊んでゐるのを見ると、天國の天使の戲れのやうに思はれたが、丸尾が私の宿の娘たちと戲れてゐるのを見ると、下等ないやらしいもののやうに思はれた。けれど、私は一しよになつて笑ふやうな氣になつて目を注がないではゐられなかつた。初夏の頃で薄着をした娘たちは遊戯に興じると、自然に肉體のあちらこちらを露出した。

私は滅多に打解けた口を利かなかつた姉妹とも、丸尾の動作によつて自然に親しまされるやうになつた。「丸尾さんは今日は來なさらんのか知らん」と、姉娘のおきよは時々待受けてゐるやうに云つてゐたが、ある日珍らしく一人で私の部屋へ入つて來て、

「貴方は今夜××のお祭を見に行きませんか。丸尾さんが來たら連れて行つて貰ふことにして居るんですけれど」と云つた。××は宿から半里ほど離れた田舍であつた。

「行つてもよろしい」と、私はこの時に躊躇しないで答へた。

三

待つてゐた丸尾は夜になつても來なかつたが、私は姉妹と連立つて祭見に出掛けた。蛙の鳴いてゐる田圃を渡る初夏の夕風は、太鼓の音を幽かに傳へて來た。神社の森から洩れる燈火が遠く見られた。田舍育ちの私にも、その夜の田舍景色が何とも云へず面白かつた。姉妹の顏までも不斷になく美しく見られた。私は打解けた話を仕掛けることは出來なかつたので、讃美歌を唄つたり、半歳ばかり田舍の漢學塾にゐた間に習ひ覺えた詩吟をやつたりして、獨りで浮れてゐた。

「丸尾さんよりもお上手ぢや」と、姉娘は感心してゐた。

神社に近づくにつれて、參詣の人々で小徑も雜沓してゐた。通りがかりの若い女に戲れかかる醉拂ひの若い衆にも會つたが、姉娘はさういふ者に對しても怖ぢなかつた。神社の境内には覗機關などの見世物や駄菓子などの露店があつたが、私たちは何を見るでもなく、何を買ふでもなく、たゞ參詣人にはたゞで飮ましてくれる薄い甘酒を小さな土器で一杯饗ばれただけで歸途に就いた。でも私ばかりでなく、娘たちも大變に面白いことをしたやうに喜んで、あくる日訪ねて來た丸尾にも大袈裟に吹聽した。

そして、姉娘は一度の散歩によつて急に私との親しみが增したやうに、遠慮なく頻繁に私の部屋へやつて來だした。貧しい無教育な娘だから、無遠慮になると、（私を子供のやうに思つてゐたためもあつて）隨分檢束のない話をもするのであつた。大川の側にある遊廓の話をしてさういふ處へ行つて見ろと私を唆かしたこともあつた。私はこの姉娘によつて生れてはじめて、小説本や空想だけでは得られなかつた智慧をつけられたのであつたが、一概にそれを擯斥しなかつたので、丸尾に向つても彼女の事をさう惡くは云はなかつた。彼女も丸尾が來てゐる時には、外觀は彼れを相手に無遠慮に戲れてゐても、私一人の時とは話振りが非常に

ちがつてゐた。

私の心身にも、異性に對するある拘りが出來かゝつた。丁度その頃市中を散歩してゐるうちに、ふと思ひついて、父の知合ひで私の保證人になつてゐる人の家へ寄ると、其家の近所に、おとなしい學生を置きたいといふ家があるから、移つて來ないかと勸められた。連れられて行つて見ると、家の中は靜かで部屋は小綺麗であつた。私は轉居したくはなかつたのだが、保證人の熱心な勸めを斥ける理由はなかつたので、われにもなく轉居することになつてしまつた。

「私の家に何かお氣に入らんことがあるんですか」と、姉娘は不平らしく云つた。

「××さんの言ふことを聞かん譯には行かんのぢやから仕樣がない」

私は言譯をしてその宿を出た。それつきりその娘には會はなかつたし、さして思ひの殘ることはなかつたが、もう十日か二十日でもその宿を動かないでゐたなら、私の一生は變つてゐたに違ひないと今回顧すると痛切に感ぜられる。

男女關係について思慮が出來たのは、その後二三年經つてからであつた。私は宣教師の私塾には一年ほど學んだだけで退學して、あと一年ばかりの間は、病氣のために、また故郷でブラブラして目的のない日を送ることになつたが、その間は絶えず陰鬱であつた。目に觸れ耳に觸れるものがみんな呪はしかつた。二十前の發育盛りに病患に傷つけられたものは、人間の有つて生れた幸福の芽も、後で取返しのつかないほどに萎けてしまふやうに思はれる。十五六歳までは晴々としてゐた私の頭が、その後は絶えず曇つてゐるやうに思はれる。爲方なしに宗教の方へ入つて行つたのであるが、私の宗教には明るい幸福はなかつた。いつも曇つてゐた。

不治の病氣に罹つたものが、急に宗教心を起して、病氣は神の惠みであるとか、あるひは神を見たとか云つて、自ら慰めてゐるのはいたいたしくはあるが、私は早くから自己の經驗によつて、さういふ自己欺瞞をやつてゐる人たちに對しては寸毫の敬意も寄せられなくなつてゐる。……他人のことは兎に角、私は次第に素直に伸びかゝつてゐた異性に對する情念が、病氣と暗い宗教とのために、行手の路を杜絶されてしまつた。

四

近年流行してゐる新進作家の自傳體の長篇小說を讀むと、どれも極つて功名心と戀愛との交錯が一篇の筋立となつてゐる。ある青年は貧家に生れて學資に苦み早くから生活難を經驗し、ある青年は富家に生れて順路を通つて世間へ出てゐるといふやうな差別はあつても、誰れもみな文學その他の事業で、自己の天分を發揮しようとあせつてゐる。それとともに必ず、殆んど例外なしに異性との交渉をつくつて喜憂してゐる。それ等の異性は小間使であつたり、女學生であつたり、あるひは下宿屋の娘であつたり、さまざまであるが、彼等はそれ等の異性のために若い心を左右されてゐて、しかも自己の戀愛の妨害になる周圍の人々や事件に對しては必ず怨恨の目を注いでゐる。……時世がいくら變つても、昔の世でも人間の心は同じことなので、斬新なことはなささうである。

しかし、かういふ長篇小說を讀んだあとで自分の過去を顧みるに、青年期の私は學問慾や功名心こそ人並に有つてゐたのであらうが、面白いエピソードとなるべき戀愛沙汰には少しも拘らないで通り過ぎたのであつた。少年時代には萌してゐた異性に對する好奇心も、二十前後には却つて衰へてゐたらしい。清教徒を理想として、情慾を擯斥し、色戀の話など耳に觸

れるのも穢はしく思はうと努めてゐた。それが私の一生から見て幸福であつたか不幸であつたかよく分らないが、私の心は少くも異性に對して柔しい素直な感じを寄せることの出來ないやうになつてしまつた。新進作家の自傳體の戀物語にあるやうな、心の蕩けるやうな甘い戀の醍醐味を味ふ力は私にだつて具はつてゐたであらうのに、二十前後に自分で努力して、それを壓し潰してしまつた。學窓を出た後、自繩自縛の苦みを解いて、自由に五慾の動くに任せるやうになつても、まだ二十代の若い時分でさへ、私は永久に春を失つた人間のやうであつた。

「即興詩人」を讀んで、アヌンチヤタを戀したアントニオの柔しい心持に涙ぐむ思ひして惹入れられながらも私には美しいアヌンチヤタも、醜いアヌンチヤタもなかつた。現實の女に對して私が敬愛の念を寄せて仰ぎ見たのは、少年時代に見た宣教師の姉娘ぐらゐなものであつた。さう思ふと、あの頃が私の一生の中で最も心が清くて純であつたのかも知れない。世間へ出て自分で働いて口を糊するやうになつて、女性に接する機會も多くなつた時分の私は、婦人を尊ぶといふ氣持は、どこかへか置き忘れたやうに失つてゐた。かういふ心を持つてゐる作家の書いた小説が若い婦女子に喜ばれないのは當然である。男子を天國へ導くのは婦人の愛であるとか、日本の社會を救ふのは婦人の力によらなければならぬとか、歐洲の大詩人や日本の流行作家の云つてゐるやうな數々のやさしい文句は、私の腸からはいくら捻つても出て來ないのであつた。

婦人といふものは、邪推深くつて譃つ吐きで、お喋りで空世辭だけが上手で、いやに涙脆くつて、云ふまでもなく虛榮心が強くつて……女の何處に尊いところがあるのであらうと私は思つてゐた。大智大能の神が人間を造つたと假定したら、男子を地球上の男子のやうに造つたのが間違ひであつたよりも、女子を現實の女子のやうに造つたのが一層多く間違ひであつたのだと、私は思つてゐた。シェークスピアの書いた女性や、ダンテの書いた女性の尊いのは、大詩人の空想に描かれた造り物であるためなので、この點ではエホバよりも彼等詩人の方が一層すぐれた創造者なのである。神は現實に生きてゐる碌でもない女を濫造した。詩人は尊い美しい女を造つた。論より證據で、シェークスピアは舞臺の上では、オフェリアだのロザリンだのヴィオラだのを活躍させてゐても、現實の彼れの細君は厭ふべき人間であつたらしい。ダンテは幼いころ一目見た女を一生戀しつゞけて、永遠の空想を託したが、幾人も子を生ませた現實の彼れの細君については、一篇の小詩をさへ作つてゐたいではないか。

五

「いやな浮世ならサッサと棄ててしまふがいい」

と思つても、生身の人間は、容易なことでは自分で自分が亡ぼせない。容貌の醜い性質の卑しい女なぞに懸り合はなければいゝと思ひながらも、男として生きてゐる限りは、いやな女でも無くつちや日が送れないやうに極められてゐるのだから因果だ。彼方でも此方でも醜男醜女が手に手を執合つて幸福を囁いてゐる。

私は青年期から壯年期にかけての、自分と異性との關係を追懷すると、幾つもの斷片的な醜惡な場景に惱まされなければならない。「即興詩人」のうちに漂つてゐるやうな情調や、新進作家の長篇の主人公が經驗してゐるやうな柔しい悲喜愛歡は私には絕對に浮んで來ないのである。あの時分の知合ひの女の誰れにも

會ひたいと思つたことはない。私の知つてゐる女は、特別にヤクザな女ばかりだつたためであらうか。舊知の現實の婦人よりも少年時代の愛讀書中の人間の方がどれほど懷かしいか知れない。

私は、一つの仕事にかじりついて何年も續けて來たためと、時の廻り合せがよかつたためとで、豫想外の名聲が得られたので、時々は思ひ上つた量見を起すこともあつたが、常人に傑れた素質を有つてゐるのぢやないと、日常反省してゐる。容貌や言語動作に婦女子の心を惹くところのないことは、なほ更早くから知つてゐたので、賣色の女以外に、戀の口說はまるで知らないで通つたのであつた。

ところが、さう謙遜するには當らないのであつた。成るほどこの頃の若い者が、世の風潮が寛大になつたのに乘じて、人間の本性を露はして頻りに色を稼いでゐるのはそれが賢いのかも知れない。私に思ひを寄せてゐた女が二人や三人はあつたことは、後になつて、私の鬚に白毛が出來てから、自ら知れて來たのである。

何年か前秋雨の降つてゐた日、私は腹こなしに飯倉の通をブラ〱歩いて、次手にある雜誌店へ寄つたが、そこで買物をしてゐた色の白い細そりした三十代の女が私の方を顧みると、ふと微笑した。何だか見たことのあるやうな女だとは思つたが、頭を絞つて思出すほどの價値のある女でもなささうなので、それに拘らないで公園を一周した。そして再び飯倉の通へ出たが、すると再びその婦人が向うから來るのに出會つた。彼女は微笑して足を留めて會釋した。私もお辭儀をして、そちらを見詰めたが、すると、彼女は、

「私は××にゐました辰子で御座います」と云つた。

「あ、さうでしたね」

私は十數年前の彼女の顏を思出しながら、その後の事を二三言訊ねたきり行過ぎた。その後どういふ生活をしてゐたのか、もつと詳しく訊きたかつたが、自分から進んで近所のカッフェーなどへ誘ふのは變だつたので、簡單に別れたのであつた。以前はフックラと肥つてゐて顏立が愛くるしかつたのに、かうも變るものかと、私は薄ら寒い雨の中を興もなく歩きながら、女の容色のはかなさを考へた。辰子といふ人とは昔も碌に話をしたことはなかつたのだが、顏は始終見てゐて、女人間の戲談まじりの噂に上せてゐた。

「君があの女が好きなら、僕から××さんに話して周旋をして貰ひたまへ」と、眞面で云つた友人もあつた。

しかし、一人の女に對して熱情を寄せられなかつたその頃の私はかういふ話にはいつも身を入れないで通り過してゐた。そして、殆んど記憶にも留まつてゐなかつたのであつたが、久振りに行會つたあと、二三日して意外にも辰子から私へ手紙を寄越した。

懷かしさうなことを書いて、自分の住所をも知らせて、「お通りがかりの際にはお寄り下さい」なんて書いてあつた。それに對して私は葉書で簡單な返事をした。彼女に夫があるのかないのかさへ私は知らなかつた。

六

それから年賀狀が來たり、旅先から繪葉書が來たりした。私に職業の周旋でも賴まうとする下心があるのか知らんと思つてゐたが、すると、ある日彼女からの厚ぼつたい手紙が届いた。それには、色つぽいことが遠慮會釋なく書流されてあつた。十年前の私であつたら、こんな手紙に接したら、多少ドギマギしたかも知れなか

つた。今はたゞ笑つて讀むことが出來た。原稿執筆以外には文字を書くことの嫌ひな私は、返事をさへ出さなかつた。

　四十にもなつてこんな色文を書く女はいやらしいやうにも思はれたが、しかし、他の女だつて他所行の白粉を落して、心の中をさらけ出したなら、大抵同じことなのぢやないかと思はれた。兎に角若い時分に私の方から一歩踏出しさへすれば戀を得る機會はあつたことが知れて、自分があまりに用心ぶかくつて、青春の幸福を取逃したことが後悔された。

　私は學校を卒業しても家庭などつくる氣はなかつたし、自分のやうなものには、妻子を十分に養へないだらうと思つてゐた。そしてどちらを向いても、一軒の家には夫があり妻があり子供があるのを變な事のやうに感じてゐた。多くの男子は妻子を養ふために營々として働いてゐる。碌な容色でなくつても女房といふものは可愛いものなのだらうか、子供といふものは可愛いものなのだらうかと、社會人類の常識にさへ、私は疑ひを插んでゐた。一人の男一人の女と、相手を固定してしまつた生活が幸福なのだらうかと疑つてゐた。

　二十代の私がさう疑つてゐたのは、他の青年のやうに眞實の戀愛を經驗しなかつたためかも知れない。

　私が、新聞社へ入つて、辛うじて下宿料を拂へるくらゐな月給の得られるやうになつてから間もなく、故郷へ歸ると、兩親の知人の大村といふ老人が、私に向つて頻りに結婚を勸めた。「獨りで食つて行ける收入がありや、夫婦の生活が立たんことはない。困つたらお父さんに助けて貰ひなさりやいゝぢやありませんか」と云つて、彼れの縁續きのある女を、適當な候補者として話した。その女は倉敷の可成りな資産家の長女なのだが、繼母と折合ひが惡くつて、この頃は大阪へ行つて從兄の家に寄寓してゐるといふことだつた。

「私が手紙でさう云つてやりますから、東京へお歸んなさる時に大阪へ寄つて當人を御覽になつちやどうです？　あの女なら苦勞してゐるから家持は至極よろしいに違ひありません」

大村はそのことを私の兩親によく話した。

「お前の氣に入つたら嫁に貰へばいゝ」と父は私に向つて簡單に云つた。深く考へもしないやうだつた。

「ぢや、次手だから大阪へ寄つて見ようか」

　私は輕い興味をもつてさう極めた。大村は私の事を褒め先方へ吹聽して訪問の日取りをも打合はせてくれた。暦の上の吉日が選ばれたらしかつた。

　その時は年末であつた。私は豫定された日に故郷を出立して、大阪で下車すると、停車場の前の宿屋へ寄つて晩餐を食べた。そして食後の散歩として暮の街上を見物しながら大村から聞いてゐる玉造の北島といふ家を訪ねて行つた。

　この見合ひと云ふことについて、私は嚴肅な考へも抱いてゐなかつたし、色つぽい空想をも描いてはゐなかつた。たゞ通り掛りにある女の顏を瞥見するといふ安易な氣持で訪ねたのであつたが、其家へ入つて二階へ導かれて部屋の中の樣子が目につくと、少し驚いた。先方では私の訪問を重く見てゐたのであつた。狹くつても整頓された部屋の眞中には、綺麗な炭火の盛られた丸い桐の火鉢と絹の座蒲團が置かれてあつた。私は不斷着のまゝで着流しだつたが階下から上つて來た主人は羽織袴の改つた服裝をしてゐた。主人が大村の手紙を見て非常に喜んでゐたことを改つた口調で述べ立てるのが私には擽つたく思はれた。

　やがて盛裝した主婦が酒肴を持込んで、夫婦は左右から私に向つて從妹の身の上を話した

り、私の東京の生活について訊ねたりした。强ひられるので、下戸の私も知らず〳〵杯を重ねて、苦しいくらゐに醉つたところへ、女が靜かに階子段を上つて來た。

七

笠のやうな大きな廂髮、白粉を塗りこくつた平たい顏、ガッシリした逞しい體格の女が目の前に現はれたが、はじめから多くの期待を寄せてゐなかつた私は、失望もしなかつた。

「ようお出でんさつた」と女は平然として挨拶した。

「田舍よりや大阪の方が面白いでせう」と私が云ふと、

「此方へ來ても滅多に外へ出ませんから」と、女は答へて口元に微笑を湛へた。

私はいゝ加減で暇を告げようとして、意外な御馳走になつたお禮を云つて、座を立ちかけたが、すると、急に胸が苦しくなつた。便所を借りようとしたが、階子段を下りる間の辛抱も出來さうでなかつたので、二階の障子を開けて、屋根の上へ食べた物を吐出した。皆なが側へ來て介抱して吳れた。女は主婦の指圖によつて、階下から金盥と嗽ひ水を持つて來て吳れた。

私は初對面の人々に迷惑を掛けたので恐縮して、一少しお横になりなさい」と枕を持出されたのを斥けて、慌しく挨拶して其家を出た。

吐きたいものを吐きつくした後で、戶外の寒い風に觸れると、スッカリ醉ひが醒めて元氣が回復した。で、道頓堀の側まで俥に乘つて、俥を下りると、そこの表通や裏通を足に任せて步いた。……裏通の變な家へも立寄つた。

この見合ひの光景が、今夜は久振りに思出された。そして、北島といふ家の人たちに對して氣の毒な感じがした。私は東京へ歸ると、故鄕の大村老人へ宛てて、「都合により結婚は見合せ申し候」といふ簡單な葉書を出しただけで事を濟ましたのであつた。見ず知らずの私に酒を飮ませたり、嘔吐の後始末までさせられたりしたかの人々の心境を、私はこの頃になつて推察することが出來るのであつた。

それから間もなく大村老人が死んだので、私は大阪で瞥見した女の成行について何も聞かされなかつたのだが、その時分の私は、別に理想の女を頭の中に持つてゐたのではないから、兩親などが熱心に勸めて生活の保證をして吳れたなら、その女とでも結婚したかも知れなかつた。

新聞記者になつて日々熱心に勤めてゐた私は、僅かな俸給に有りつくのも容易なことではないと痛感してゐたのであつた。同僚の樣子を見てゐると、容易に妻子なぞ持つべきものではないと敎へられてゐるやうな氣がした。「獨身ならどうでもなる。いよ〳〵困れば故鄕へ歸ればいゝ。妻子のために恥を忍んで勤めに服するのはいやなことだ」と極めてゐた。が、それはすぐれた考へであるといふよりも、あまりに生活難を恐れ過ぎた卑怯な考へであつたのかも知れない。

私は本鄕の下宿屋で五六たびも正月を迎へた。その間に日露戰爭があつたが、私は自分の「死生の問題」といつたやうなことにのみ心を凝してゐて、每日、新聞社で聽かされてゐる戰爭話に何の感じをももつてゐなかつた。旅順陷落の祝賀會が、社の前の牛肉屋で開かれた時にも私は飮食の外に何の意味をも感じなかつた。たゞ一度戰爭否定論を書いて紙上へ出さうとしたのを主筆に咎められて沒書にされたことがあつた。

「あなたの御意見はどうであらうとも、現在出征軍人は國家のために艱苦を嘗めてゐるのだから、その意氣を削ぐやうなことを新聞へ出すの

はよろしくないと思ふ」と戰爭好きの主筆は、私を說諭した。

私は不心得を詫びた。自分でも戰爭の是非に拘泥してゐたのではなかつたが、輜重輸卒として出征してゐた弟の手紙に接したので、それを讀んでふと戰爭を呪ふ氣になつたのかも知れなかつた。

日比谷で講和反對の大會があつた夜、早くから寢床に就いてゐると、下宿の主婦が慌てて二階のある客を起しに來た。燒打がはじまつたと聞いて私は跳起きて雨戸を開けると、盛んな火の手が上つてゐた。私は其頃讀んでゐた「クオヴアデス」のローマの燒打を想像しながら、「かういふ時には獨りものは氣樂だ」と、思つてゐた。

「人間は、作者が好みのまゝ作つた戲曲を演ずべき一俳優たるに過ぎない。我々は貧民となるも不具者となるも、支配者となるも素町人となるも、それは作者に極められた通りに扮しなければならない。極められた役をよく演ずることだけが、我々の爲すべき勤めであつて、役の選り好みは出來ないのだ」

ローマの賢帝マーカス・オーレリアスの人生觀の根柢はかうであつた。ネロの廷臣の一人に附隨してゐたエピクテタスの人生觀もかうであつた。びつこで、羸弱で、貧乏で、日蔭者として一生を過した奴隸の人生觀も、榮華の頂上にあつた帝王の人生觀も同樣であつたのは不思議だが、一つの哲學に徹底したこの奴隸は、役不足を云はないで、甘んじて戲曲を終始一貫して演じた。

しかし、私は思ふ、極められた役をよく演じるのが、我々の義務であると信じて柔順に勤めようとも、それに不平を起してじたばた暴れ廻らうとも、どちらにしたつて、人間は、ある作られたる戲曲の一俳優たるに過ぎないのではあるまいか。割當てられた役を演じないつもりの者も、その生涯を後から顧みるとそれ〴〵に自分の役を演じてゐるのだ。

現在だけでは、明瞭に分らないが、歷史を讀むと、人間がそれ〴〵に割當てられた役を演じてゐたことがよく分る。誰れがえらかつたとか、誰れがやりしくじつたとか云ふよりも、皆なが作者の傀儡となつて活動してゐたといふ感じがする。さう感じて、私は人類史を淋しく思ふが、私がそれを淋しく思ふのは、すなはち、私自身が「淋しく思ふ人」といふ役を振當てられてゐるためである。

（『文壇觀測』の「日記抄」より）

東京

私は大磯に蟄居してから、すでに二年の歳月を過した。此處から東京へは汽車で略二時間の距離があるので、出掛けるのはちよつと億劫であるが、それでも月に三度か四度は用事を兼ねて出向くことにしてゐる。七八年前の私なら、さう長く都會を離れてはゐられない譯なのだが、年齢のせゐと、一生の仕事を盡したといふ感じがしてゐるためとで、都會に對する執着が今は極めて薄くなつてゐる。殘生を過すのに何か心を紛らす方法が、田舍にでもありさへすれば、今後都會生活はしなくつてもいゝと思つてゐる。

東京へ行つても、雜誌社や新聞社へをり／＼立寄つて、文壇その他の社會の噂を聞くことはあるが、知人の私宅を訪問することは殆んどないと云つていゝ。簡單な用事を果したあとでは、當てもなくブラ／＼歩くとか、食事をするとか、興行物を見るとか、何とかかとかして、半日か一日を過して、疲勞した身體を汽車に載せて歸つて來るのである。

東京に定住してゐた時よりも、時々覗いて見るこの頃、東京といふものが私の頭にハッキリ浮ぶやうな氣がする。品川から新橋までの間に、汚らしい粗末な家が線路に沿うて並んでゐるのを見て、東京驛で下車して、外へ出ると大磯では鮮明であつた太陽の光が鈍くつて薄暗いやうなのに氣がつく。だけど、都會の濁つた空氣や騷音は私の神經を刺戟して、生存の力を感じさせるのである。二十餘年も東京に住みつづけて、自然美や田園の雜事よりも人間美や人間臭に興味を持ち、野趣よりも人工を好んでゐた私は、停車場から踏出すと、その瞬間は本當の故郷へ歸つて來たやうな氣がする。海邊の色の黑い頑健な人々は蒼白い都人よりも生物として勝れてゐるのだらうが、私はどの點からもさういふ人々に伍して、共に樂み共に喜ぶことが出來なくなつてゐる。先方でも私たちを都會人視して、上べは尊敬して内實は私利を計らうとしてゐるので、眞實の親みは我々の間に成立つてゐないのである。私は田舍生れで、生れた家は儼として存在してゐるのであるが、その生れた故郷へ歸つても、郷人と親むことは出來ないのである。一つは私の性癖によるのであるが、都會生活で得た教養は我々をして田舍人と融和しがたくしてゐるのである。私は農村の疲弊をこの頃はしみ／＼と感じてゐる。このまゝに放任してゐては日本國家の前途が危いと思つてゐる。つねに田舍人の生活を氣の毒には思つてゐるが、しかし、私は個々の田舍人に對しては好感を持つてゐない。たまに田舍を旅行して地方人に接するとか、机の上で筆を執つてゐる時には、自分の空想によつて田舍生活や地方人を讃美することが出來るが、私の如く田舍生れで田舍者をよく知つてゐるものは、空想によつて、純朴誠實な田舍者を造り上げることなど、馬鹿らしくて出來ないのである。かつて幸田露伴氏の「新浦島」といふ小說の一部を讀んで、都會生れの文學者は、こんなに突飛な空想をもつて漁夫生活を書くものかと呆れたことがあつた。「春は霞が棚曳いて蓬萊の島も何だとか」「雁めが飛んで磯の苫屋へ月が洩れて」王公の樂みもおれたちの境涯に及ぶものかと、長々と綺麗な文字で書立ててあつたが、歌詠みのお公卿樣が夢に漁夫になつたのなら知らず、

道樂に釣魚でもする人なら兎に角、諸式の高い世に腕二本で稼いで生命を繫いでゐる眞實の漁夫に、蓬萊の島も礒の苫屋もあるものかと、その時の私には思はれた。

私は釣魚の樂みも知らない。土いぢりの樂みも知らない。田舍人と一しよに浪花節を喜んで聞くことも出來ない、居酒屋で會飲することも出來ない、時々小學校の教室などで催される××中將や××子爵などの講演を聽く氣にもなれない。と云つて、先覺者氣取りで地方人を指導しようとするやうな大それた考へは毛頭持つてゐないし、煩さい思ひを我慢して地方の青年などに調子を合せて人氣を得ようとする虛榮心をも持つてゐない。

で、私は、讀書や執筆や海邊や田圃道の散歩だけでは、頭が堪へられなくなると、「東京へでも行つて來ようか」と云ふ氣になるのである。鬱積した息を吐きに出掛ける氣になるのである。

電車の運轉の系統が屢々變更されるので、たびたびまごつくことがあるが、電車の中で都會人の顏や、身なりや動作を見てゐると、さまぐ\な人間の標本を見てゐるやうで面白い。野良に働いてゐる農夫や地曳漁などしてゐる漁夫の十人一樣なのとは違つてゐて、私をして人間生活に對するいろ／＼な想像を起さしめる。さういふ私自身も田舍の水に染んで、四十時代相應の慾の深い田舍の小金持の標本にでも見えるやうになつたのか、古い手提カバンを抱へて、兜町の取引所のあたりを、先日の朝ブラ／＼歩いてゐると、仲買店の客引が次から次へと私に挨拶して話をしかける。

「今日は少し高さうです。……私の店は直ぐそこですからお立寄り下さい」などと云つて、私の風態をじろ／＼見る奴もある。

日暮頃雷門で電車を下りて、中清ででも晚餐を食べようと思つて、中店の雜沓から橫へ外れてブラ／＼歩いてゐると、宿屋の番頭が屹度聲を掛ける。後から追掛けて來たりする。田舍にゐると都人士あつかひされ、都會へ行くと田舍者あつかひされる。そのどちらつかずの中ブラリンの人種に屬することは、今の多くの文學者が、プロレタリアとブルジョアとのどちらつかずのアヤフヤな階級に屬してゐると同樣なのである。

私は足休めのためや、夜芝居の開幕を待つ間の時間つぶしのために、講釋場の末席へ寄ることがあるが、此處で舊弊な顏した男の讀立てる軍記などを聽いたあとで、ヂンバリストのヴァイオリンを聽いたり、アンナ某女の踊りを觀たりすると、藝術の鑑賞にも頭の轉換の忙しさが感ぜられる。私は必ずしも外來の藝術に隨喜渴仰する氣になれないし、日本の舊藝術を樂むことも出來ないが、肉體の衰弱によつて食色の慾も衰へてゐる私は、かういふものによつてでも日々の單調な生活から來る倦怠を紛らさうとするのである。そして、私自身は帝劇の廊下をブラついて外國の音樂や舞踊を六ケ敷い言葉で批判し合つてゐる新進氣鋭の鑑賞家よりも末席の定連の方に心持が似てゐるやうに思はれる。古めかしい講釋にでも、藝の巧拙はあるものだ、時代の反映があるものだと、私は文學の現狀に比べて感じることがある。典山の枯れた讀み口はうまいが、伯山の藝は油が乘つてゐて、詰らない事柄を喋舌つてゐると思ひながら、私もふと聽き耳を立てることがある、藝の光に打たれることがある。さういふ時の感動は、ヂンバリストやパーロワの音樂の妙味を感じた時の氣持と、差別があるのであらうかと私は疑ふ。三十錢で聽かれる安來節と、十圓近い入場料を要するヂンバリストと、どちらにしても、曲の音に恍惚とした時の氣持は同じこと

ぢやないのだらうか。伯龍といふ若い講釋師が、死んだ落語家の小せん見たいに、新聞雜誌で學んだやうな當世の流行語を頻りに使つて、獨創のお喋舌をして人氣を持つてゐるところに、今の文界や美術界の現狀に似てゐるところがあつて、私はひとりで微笑まれる。講釋の寄席のやうな都會の一隅にも、日本現代の影は、ちやんと宿つてゐるのである。

私は田舍に住むやうになつてからは東京へ出るたびに都會の風呂へ入るのを樂みにするやうになつた。都會に定住してゐた頃、田舍の溫泉を渴望してゐたやうに、この頃は、東京の風呂へ入つて來たい—と思ふことがある。市中を歩いて、汗と埃に汚れたあとの入浴の快樂を、私はこの頃ほど感じることはない。

私は都會を歩いてゐて、勞働者の汗の惱みを見る。そして田舍で見るよりも、もつと痛切に生存の苦みを見てゐるやうに感じる。ある日、久振りに川蒸汽に乘つて百花園の秋草を見に行つたが、その時牛島神社の大祭で、町々の山車が續いてゐた。大勢の若い衆は炎天に汗みどろになつて騷いでゐて、通り掛りの私でさへ、汗の臭ひに逆吐くほどであつた。自ら好んで自分の汗に浸つて喜んでゐる彼等、その汗の臭ひを嗅いで喜んでゐる大勢の見物。私は人間生活の眞相がさういふ所にもあるやうに思つて見てゐたが、すると、ふと、前の夜見たアンナ某一座の舞踊が思出された。一座のうちの若い踊り子どもの豐麗な背中に汗がにじみ出て、電氣の光つてゐるのが艶かしくて何とも云へず快く見られたのであつた。「この汗わいの—と、博多小女郞が云つてゐる。私は勞働者の汗、祭に興ずる若い衆の汗、アンナ一座の汗と、都會の彼方此方で流される汗について考へた。

私は退屈の氣晴らしをさせてくれる東京といふ大都會に對して好意を寄せてゐる。古今東西の種々雜多なものが、統一もなくそこに現はれるのが、傍觀者には面白い。整頓した文明國や文化社會が出來上らないでゴタ〱してゐるところが面白い。舊幕時代のやうに一般の思想や道德が一致してゐないで、みんなが我は顏して勝手な事を云ひ合つてゐる今の精神的狀態が、今日の東京市街の外觀によく現はれてゐるのが面白い。

たまに街上や電車の中や劇場などでいろ〱な知人に出會ふことがあるが、時によつて、その人は資本主義撲滅論者であつたり、非愛國者であつたり、あるひは勤儉貯蓄家であつたり、遊蕩兒であつたりする。人間の標本を見てゐるやうで面白い。

＊

—今に大地震か何かの大災難があつて一坪が千圓も一萬圓もするといふ東京の市街が無價値な灰燼になる時はないだらうか—と丸の內や日本橋あたりの七層八層の大建築を仰ぎ見ては、杞憂を感じながら、私は大磯の巢へ向つて飛んで歸るのである。

クリスマスとお正月

去年の暮、私が偶然東京へ遊びに出掛けると、その日はクリスマスであつた。京橋際の七階で午餐を食べると、平生の定食よりも皿數が多くつて、七面鳥だの、クリスマスケーキだのと、おいしい變つた料理が出た。食後餘興場へ行くと、福引があつて、私は玩具の馬を抽當てた。手品や物眞似や、落語の餘興があつたので、私は子供達の中に交つて、暫らくさういふものに耳目を觸れて心を遊ばせてゐた。

其處を出ると、いやに嵩張つた玩具を提げて、クリスマス氣分が從來よりも濃厚になつてゐる銀座通を歩いた。家へ持つて歸つても、玩具の土産を喜んで吳れる子供があるのではなし、散歩の邪魔にもなるのだが……と云つて、棄てる氣にもなれなかつた。クリスマスツリーだのサンタクロースだのと、西洋の今日の祭を思出させる裝飾を見たり、祭にちなんだ品物を若い男女が買つてゐるのを見たりすると、日本人の趣味がます〳〵西洋くさくなることが感ぜられた。昔は生死の問題に關はつてゐた宗教が、肝心の信仰はそつちのけにされて、たゞ生活を色取る方便、娛樂の道具として用ひられるやうになつてしまつたことも感ぜられた。佛教だつてどの宗教だつて、大抵はさうなので、今更珍らしさうに感じるにはあたらない譯だが、私自身、キリストの降誕については、何等の感じをも起さないで、その祭の御馳走だけを食つたことが、人の心の變遷を思ふ所緣となつて、去年や一昨年のクリスマスの時とは違つた感慨に打たれたのであつた。私は二十餘年前にキリスト教に歸依して教會に加はつてゐた頃には、讃美歌や祈禱や說教や、日曜學校の生徒の唱歌や諳誦演說などの催しのある祝賀會に列して、儀式的に主の降誕を祝した上に、自分一人瞑想裡に於て、この尊い記念日を祝したのであつたが、しかし御馳走と云つては、蜜柑に煎餅ぐらゐで、幾年かの信者生活の間に、今日の料理のやうな料理の一皿をも、祝日に味ひながら、神の惠みを讃美したことはなかつた。私ばかりではない、あの教會の兄弟姉妹のうちには、あの頃七面鳥の料理なぞ食べてクリスマスを祝つたものは一人もなかつたであらう。七面鳥などの料理を、たゞうまいからと云つて食べるよりは、クリスマスの御馳走だと云つて食べる方が、今日七階の食堂に一杯になつてゐた客人には興味があらうと思ふと可笑しかつた。

私は日暮頃まであちらこちら散歩してゐるうちに、帝國ホテルでも每年の例として、クリスマス祝賀の催しがあることを思出して、晩餐をそこへ食べに行くことにした。まだ胃の腑に飽滿を感じてゐたので、入浴したり書店へ寄つたりして時間を過してから行つたが、導かれて餘興場へ入つた時は、踊りの「戾橋」の幕の下りる一瞬間前だつた。鬼女の顏は分らなかつたが、語り收めた太夫の顏を見ると、それは落語家の小さんであつた。小さんの常磐津を聽いてキリストの降誕を祝するなんて、世の中も變つたものだと可笑しかつた。三味線を惡魔の音樂のやうに思つてゐた昔のＴ先生にでも聽かせたら、さぞ舊約の豫言者張りの憤慨をするであらうと思ふと、なほ更可笑しかつた。

私は時間が遲れたために、小さんの美音の聽けなかつたのを殘念に思ひながら、家とともに

食堂へ入つた。食事中絶えず管絃樂が奏せられたり、ハイカラに盛裝した男女がこの夜を樂んでゐるやうな顏してゐるのを見たり、うまさうな料理が運ばれるのを見たりしてゐると、質素な生活に馴れてゐる私には、贅澤至極のことのやうに思はれた。……しかし、煎餅と蜜柑とを食ひながら神の國などを空想してゐた昔の私と、この盛宴に列しながら、信仰の餘燼をも起さないでゐる私と、どちらが幸福なのであらうか。

　私の前には、鼻眼鏡をかけた赭顏の中老の紳士がゐた。多年歐米に滯在してゐたらしく、かの地のクリスマスの話を私にして聞かせた。料理の說明をもした。

「クリスマスの料理として立派なものです。アメリカだつたら十弗以上のものですよ。このメニューにゲーム――とあるのは、今獵で取つて來たばかりといふ意味で、鴨か何かの料理ですな。……彼地では、會ふ人ごとに、メーリークリスマス、メーリークリスマスと云つてお互ひに祝ふのです」などと云つて、その紳士は、外國の風習を私に見せようとでもするやうに、外人が側を通るたびに、腰を浮かせたり、立上つたり、手を差出したりして、「メーリークリスマス、メーリークリスマス」と、表情入りで頻りに叫んだ。

　しかし、私は午餐に滿腹したあとなので、此處の料理が十分に味はられなかつた。側にあつた角の包紙を破つて、辻占見たいなものを開けて見ると、「お前とならば何處までも」といふやうな色つぽい唄が英字で書かれてあつた。

　食事を終へると、私は再び餘興場へ行つて、さま〴〵な奇術を見た。踊り場をも覗いた。この頃流行してゐる社交ダンスといふものは、輕井澤のホテルでちよつと見た外に、私は見たことはなかつたので、珍らしかつたが、さして面白いものとも思はれなかつた。かういふ踊りにも種類はいろ〳〵あるのであらうが、私の見たのは、ことに日本人の踊り振りはノロ〳〵してゐて歯痒いやうであつた。

「おはじめになつちやいかゞです。二三週間で覺えられますよ」と、ダンス好きの洋服屋のＹ君は、會ふたびに私たち夫妻に勸めてゐるが、私は社交的に陽氣に世を樂むやうな氣分を失つてゐるのである。私でも子供の時分には、盆踊りの仲間に入つたことがあつた。唄や踊りは子供の時分から好きであつた。が、さういふ遊藝の嗜好を、二十歲前後にキリスト敎によつて壓迫されたのであつた。

　終列車に乘遲れないやうに、私は踊り場を出ると、急いで停車場へ向つた。玩具の馬は無事に家へ持つて歸つた。

　年が押詰つても、私の家では迎春の準備は入らなかつた。庭には多少の樹木があるが、私のものになつてからは一度も手入れをしないで、散髮をやらない頭髮のやうに、松などがボウボウと葉が茂つてゐた。知合ひの植木屋は來るたびにそれを氣にした。

「松の綠は取つた方がよう御座んすよ。打ちやつといちや木が惡くなります。このくらゐな松は今時は安か買へません。此家をお拂ひになるにしても、植木の手入れをして綺麗にして置くと、それだけ高く賣れる譯合ですからね。なに、私が大あばれに働いたら、三日もかゝりやちやんと片付けてしまひます。手入れをしとけば、葉が落ちないから、掃除にも骨が折れませんよ」と云つたが、私たちは他所の家のことのやうに思つて取合はなかつた。葉が落ちたつて松の形が惡くなつたつて、いゝぢやないかと思つてゐた。

　この頃世間が不景氣なため、植木屋の仕事も暇で、遊んでゐる日が多いのに困つて、些細な

儲けにも有りつからとあせつてゐる彼れの目には、私の家の荒れた植木の一本々々が、紙幣か銀貨ででもあるやうに見えてゐるらしかつた。

「ぢや、あの人に門松を立てて貰ふことにしませう」と、私の妻は云つた。

門松も〆飾も私の家には無用なものなのだが、家が大通に面してゐるのに、一軒だけ松を立てないのは町内の者に變に思はれる恐れがあつたので、世間の慣例に習ふことにした。別莊ばかりある山の手の方に住んでゐるのなら兎に角、私たちのやうに町家にまじつて家を持つてゐると、周圍の噂は實際にうるさいので、私は滅多に接しないからいゝが、妻の方では神經に觸ることが絶えずあるらしかつた。此方へ越して來た當時、私が帽子も被らないで不斷着のまゝ汽車の三等へ乘つたと云つて、近所へ報告に來た女があつたと云ふのを一例としても、噂のうるさいことが察せられるであらう。門松を立てるについても、そのことを誰れかに話すと、その噂を聞きつけて、一安くするから是非立てさしてくれ」と、近所の者が早速申込んで來た。が、私たちは義理を守つて、知合ひの植木屋に頼むことにした。

すると、植木屋は早速大きな丸太を二本持込んで來た。

「そんな大きなものを何にするんだね。家では門松はおしるしだけの小ちやいものでいゝんだよ」と、妻が云ふと、

「これを門松の杭にしとけば、あとで垣根を直す時に役に立ちます」と、植木屋は崩れかけてゐる垣根の修繕に目をつけて云つた。

松に添へる竹は、庭の竹を用ひさせた。略出來上つた時分に、近所の人は迂散くさい目を此方に向けてゐたが、さうしてゐるうちに、八百屋の主婦が妻を手招きして道の向うへ呼んだ。事ありげな樣子たのを、妻は不審に思つてゐたが、主婦は、小聲で、

「あの竹は女竹ですよ。女竹はお葬ひの時に使ふもので、お目出たい時に使ふものぢや御座いません」と教へてくれた。

妻は極りの悪い思ひをして、早速植木屋に云つて、既に結ひつけてある竹を取はづさせた。

「女竹だつていゝぢやないか。冥途の旅の一里塚だから、葬ひに使ふ竹でいゝぢやないか」と、私は笑つた。

植木屋が仕事を濟まして歸つたあとで、八百屋の主婦は野菜を屆けに來た次手に、

「私も餘計なことを申上げなければよかつたんですよ。植木屋があとで、無駄な手間をかけやがつてと私に當てつけました。主人が使へといやあ、女竹だつて何だつていゝぢやねえか。おテンタラ婆あが餘計なおせつかいをしやがる、自分で手間を一錢も出しやしまいしと、サン〳〵云はれましたよ」と、興がつて云つて笑つた。

成程、外へ出た時に氣をつけて見てゐると、何處の門松にも、私とこの庭にあるやうな竹は用ひられてゐなかつた。萬事世間の習慣に從つて、家の内外を正月らしく裝つてもいゝので、強ひて異を樹てるには及ばないと思つても見たが、人手のたい私の家では、さういふことをしてはゐられなかつた。門松以外には平生と異つたところもなくつて、新年を迎へた。

ある新聞に、ロシアの政府ではキリスト教に對する人民の盲信を打破するために、クリスマスのいろ〳〵な習慣的の催しを止めさせるやうにしてゐるといふ記事が小さく出てゐたが、さういふことが徹底的に實行されたら、世の生活はさぞ淋しくなるだらうと思はれた。盆も正月も、氏神の祭禮も、惠方詣りも、いろんな祝日や祭日がみんな廢止たつたら、人間の樂みはそれだけ無くなるので、さういふ世は

何時までも續かないだらうと思はれる。一つの迷信を破れば他の迷信がそれに代つて現はれるに極つてゐる。人間が何千年も何萬年もかゝつて造り出した神や佛が、消えてなくなることはないに違ひない。「ジタバタして考へて見たつてはてしがない。成るべく世間の多數の人のするやうにして世を渡ればいゝ」といふのが、縁側で日向ぼつこしながら、私の考へた年頭の感であつた。

近所の貧しき家の娘が、新調の春衣を着て髪を島田に結つて、毛絲のショールを長く垂れて、歩きつ振りまでも氣取つて通つてゐるのが、垣根越しに見られた。それを見つけた妻が庭へ下りて、「××さん」と聲を掛けたが、娘は不斷のやうに馴々しく近づいては來ないで、勿體ぶつた會釋をして行過ぎた。

「あの衣服を拵へるのが大變だつたんですよ。年頃だから、今年は銘仙でも一そろひ拵へてやりたいつてお母さんが意氣込んでゐたんですつて。年末に反物を呉服屋から持つて來ると、あの娘は直ぐに八百屋へ見せに來たんです。あのお母さんも女の手で三人も四人もの子供を育ててゐるんだから、私不思議でならない」と、妻は云つた。

この近所にはどの家にも、子供の三人や五人ゐない家はなかつた。どうして生活を立ててゐるのか、私たちにはいつも不思議に思はれてゐた。

「八百屋の娘がこのごろ金主がついたので、せつせといゝ衣服を拵へるから、隣の娘も羨ましくて溜らなくなつたんでせう。だけど八百屋にはかなやしないの。八百屋ではまた別莊の奥さんやお孃さんの服裝を見ては、その眞似をしようとしてるんだから、金を出す人の身になつたら、大抵ぢやないでせう」

裏通を通つてゐる町の人々の正月姿を見ながら、私たちは噂をしてゐたが、やがて、私は年賀狀を出さうとして玄關を下りて、ふと見ると、隣との界の垣根には、小便くさい蒲團や襁褓のはみ出た座蒲團がズッシリ掛けられて、元日の麗かな日に曝されてゐた。古くなつた垣根は、蒲團の重みでます／＼崩れかけるので、私の方では、隣の物干場になるのを免れようとしたが、口で譯を云つたつて駄目なことは分つてゐるから、年末に植木屋に頼んで、垣根の上に針金を張らしたのであつた。ところが、今見ると、針金の上に莚を掛けて、その上に蒲團を掛けてゐた。以前よりも莚だけ重みが餘分に加はつた譯だ。二軒つゞいてゐる隣家の右手の家には、ことに子供が多くて赤ん坊もゐるのだから、毎日汚れた蒲團や襁褓を干さねばならないのだらう。そして、私の家の垣根が壞れるのは隣家に取つては微塵も損になることではない。

追憶記

「抱月死す」といふ電報に接して驚いたのは、五年前の晩秋の頃で、その頃私は麻布の我善坊に住んでゐた。死者S氏の演劇事業について關係の極めて薄かつた私は、氏の近狀を知らなかつたので、その死因についていろ／＼に疑ひを起した。あるひは自殺ではなからうかとさへ考へた。

私は急いで横寺町の藝術倶樂部へ行つたが、そこの階上には、すでに大勢の先輩や知友が集まつてゐた。跡始末について何か話してゐられたT博士の顏面は、私がかつて見たことのないほどに峻嚴であつた。他の人々の顏にも不意の死に動かされてゐるやうな感じが現はれてゐた。私はソと一隅へ寄つて、話し易い人に向つて死因や臨終の樣子を訊ねた。流行感冒から肺炎を起したのださうだが、S氏がかねて心臓が弱いといつてゐたことを、私は思出した。そのために飲酒を愼しんでゐるとある宴會の席で氏はいつてゐた。榛名山で出會つた時にも、心臓が弱いから上り道だけ駕籠に乘つてゐるといつてゐた。

私は、文壇へ出掛けた當時は、氏の最初の門弟の一人といつてもいゝやうな關係で、氏には隨分引立てられてゐたのであるが、近年は疎遠になつてゐたし、ことに先輩が數多ひかへてゐるのだから、死後の處置について喙を入れられはしないので、人々の意見を聞くともなく聞きながら、そこらをマゴ／＼してゐた。氏が病氣に對して我儘強かつたこと、演劇の開演中だつたので、當時氏の情人として盛んに世に唄はれてゐたM女も氏の死に目に會はなかつたことなどを、私は傍人から聞かされたが、氏の遺骸に接して今生の別れを告げようとも、靈前に線香の一本を捧げようとも考へてゐなかつた。……電報で驚かされた心が鎭まるにつれて、私はこの一事件について自ら興味を覺えてゐるのに氣づいた。死を悼む思ひがいかに強くつても、それは卓上へ運ばれた鮨の味ひをまづくするほどではなかつた。藝術座の將來やM女の將來について囁いてゐる人々も、腹の中では興味を感じてゐるやうに、私には思はれた。酒色の慾や榮華の誇りのみが人を樂ませるのではない。恐怖でも悲哀でも、それが身を破るほどに度が強くさへなければ樂みになるのである。

「あちらへ御案内しませうか」と、ある人がいつて呉れたので、私は隨いて行つたが、そこはS氏の不斷の部屋であるらしかつた。遺骸は横へられてゐて、M女は上り口の部屋に坐つて涙に濡れて客に接してゐた。私はM女に目禮して遺骸の側へ寄つて、恭しく顏の覆ひを取つて死者を一瞥したが、何ともいへない無氣味な感じがした。泥色をした小さな顏であつた。私は直ぐに側を離れたが、「××さん察して下さいよ」と、相手の女客に訴へて嗚咽してゐるM女の聲が、ふと私の耳を穿つたので、私は思はずそちらを顧みたが、M女の顏は、いくら悲みに歪まされてゐても美しかつた。

私は溺死人や縊死者を通りがかりに見たことはあつたが、知人の死面を見たのは此の時がはじめてであつた。そして生死の差の激しいのを身に沁みて感じた。聰明であつて柔和な目をして居た生前のS氏と、あの小さな泥色をした醜い顏とが同じ人であらうとは思はれなかつた。

人間は一たび息が絶えたらそれつきりで、靈魂も何もあつたものぢやないと、私は不斷考へて居ることを、S氏の死面の一瞥によつて確めたやうな氣がした。一億年前に死んだ生物も、今死んだS氏ももはや同じことなのである。

みんなが葬式その他のことで騒いでゐるのも、「S氏のため」ではない。自分々々の心に殘つてゐるSといふ人の影を捉へて騒いでゐるのである。

「Sさんは頭がいゝんだね。差向ひで話をしてゐると、此方の腹の底までも見破られるやうな氣がするよ」と、私は昔未明君にいつたことがあつた。その時物に感動し易い未明君は、「さうかねえ」と同意して、こういふやうな、思詰めた表情を見せたが、近年になつてM女のことなどがあつてから、ある時、同君は私に向つて、「君はいつかS氏は相手の腹の底まで見破るなんていつてゐたが、そんなえらい人でもないぢやないか」といつて笑つた。

私も笑つた。輕々しく人を崇拜する癖のあつた自分の昔を思出して擽つたく感じた。しかし、私がS氏から眞に學ぶところのあつたのはその晩年の行爲からであつた。

氏が育英の職を執ることとなつた時に、最初に教へを受けたのは私たちであつた。支那文學史と美學とが氏の受持の教課目であつたが、氏が教師としてまだ不馴れであつたのと、今から思ふとさういふ方面の學殖が深くはなかつたためとで、私はさして氏の講義によつて得るところはなかつた。同窓の先輩であつて文名も高いといふのに免じて、我々はまだるいのを我慢して、不平もいはず反抗もしないで教授を受けてゐたやうなものであつた。氏は下しらべを怠つてゐたのか、屢々時間の半ばも過ぎないうちに講義を止めた。

しかし、私がはじめて文章を世に公けにするやうになつたのはS氏の誘導によつたのであつた。それまで、私は懸賞金が欲しさに、一萬朝報へ二度短篇小說――どちらも非常に苦んで、無骨な筆でコツ／＼と實感を書並べたもの――を寄せて落選した外には、同窓の回覽雜誌へも書かず、文筆で口を糊する氣にはなつてゐなかつたのであつた。ところが、その頃名士訪問をよくやつてゐた德田秋江君が、ある日教室でひそかに私を招いて、一昨日S氏を訪ねたら、「讀賣」の月曜附錄がこの頃振はないので、どうかして賑はせるやうにしてくれと主筆に賴まれてゐるから、合評會でも拵へようと思つてるといつてゐた」といつて、同級生のうちから、四五人の人選をしたことを話した。私は文章は書けなくつても、學課の成績がよかつたので、その一人に選ばれたのであらう。私は氣おくれがしたが、兎に角出席することにした。

合評の最初は泉鏡花氏の「汁文帳」であつた。私は非常に熱讀したので、今でも懷かしみをもつてよく覺えてゐる。チュウ／＼タコカイナのチュといふ言葉が分らないので、宿の主婦に訊ねた。伊豫紋といふ下谷の料理屋の名前をこの小說によつて覺えて、あとでそこへ行つたりした。その時は鏡花氏が賣出した當時で、T博士も、湯島詣」を教室で推稱された。S氏も、紅葉門下では非凡な作家だといつてゐた。私は、いくら讀んでも、何處がいゝのやらどこが惡いのやら、サッハリ見當がつかなかつたが、とに角何か理窟を捏ね廻して批評を書いた。S氏の筆で添削されて紙上に揭げられた。

一二年間、月曜附錄への寄稿がつゞけられた。その間に田山花袋氏に反駁されたり、讀んでもゐないウォーターペーターのことを書いて、千葉鑛藏氏に酷く罵られたりした。さうして人に揉まれてゐるうちに、私もやうやく文壇の一人として認められるやうになつたのであつた。

やがてS氏は歐洲へ行つた。氏の不在の間に私は新聞社へ入つて、記者として氏の歸朝を迎へたのであつた。氏は家庭の生活狀態においても文壇の方面においても、舊套を脫して清新なる自己を發揮しようと意氣込んでゐたやうであつた。世間の期待も大きかつたし、早稻田の人々はことに氏を擁して事をなさうと思つてゐたらしかつた。久しく休刊してゐた「早稻田文學」が、氏を主筆として再興されて、雜誌の少かつたその頃では重きを置かれてゐたが、氏の一時の意氣も次第に衰へて倦怠の色が顏にも現はれだした。花袋氏などが熱烈に唱へだした自然主義に和して、それに理窟をつけだしたのも、氏の內心の生命に觸れたためであつたにちがひない。西洋で學んだ事はむしろ皮相なことだつたので、日本で起りかけた新しい思潮は氏の內心の生きた要求を動かしたのである。沈滯した日常生活から脫して新しい生命を得ようと渴望してゐたのにちがひない。「敎師の生活は詰らないよ」と、私に向つてもをり／＼洩らしてゐた。氏の如く公人としては多數の子弟に關繞され、家庭においては多數の兒女を有つてゐる人は、生活の面目を改めるのは容易ではあるまいと、私は思つてゐた。しかし氏はいつとなしに新しい生活に向つて進んだ。世間の冷笑や罵聲を冒して進んだ。私が氏によつて敎へられる所のあつたのは、それからであつた。藝術座の仕事が劇界にどれだけの效果を奏したか知らないが、それは私に取つてはどちらでもいゝのである。生前の氏も、芝居のことなどは眞實はどちらでもよかつたのかも知れない。私は氏が謹直な學者として、やがて文學博士に推薦されて、醜骸を上品な上衣に包んで、鹿爪らしく尊敬されて一生を終つたよりも、あゝした生々した喜びと惱みとを經驗されたことによつて、一層深刻な敎へを受けた譯なのである。……衆人環視のうちの情事は心がひけるものなのであらうが、氏は意外にも圖太いところがあつた。

私は――秋江君もさうらしいが――先輩の信賴を受けるやうな人間ではなかつたので、あとから出たK君とかS君とかいふ人たちのやうに、氏の內面生活に立入つた相談を受けたり、仕事を共にしたりするやうなことはなかつた。私の方から氏の宅へ伺候することも次第に稀になつたが、氏の方から、私を訪ねて來ることは一度もなかつた。

ところが、ある秋の末頃、天神町の私の家へ氏が訪ねて來たので私は意外な感じがした。何か特別な用事があるのであらうかと思つてゐたら、「高田さんの所へ行つたら留守だつたから……」といつて、その歸りを待つ間、私の家へ寄つたらしい口吻であつた。

その後、間もなく、氏は再び私の家へ立寄つた。私の妻は挨拶に出て、「先生はお痩せなすつた」と、何氣なくいふと、氏は、「さうですか」と淋しく笑つた。そして、何か御馳走をしようとすると、氏は押留めて、「水を一杯頂きませう」といつた。

二度とも氏は十分も經たぬうちに歸つた。私は何だか變な氣がした。間もなく氏が奈良から京都の方へ旅行して、年末には湯河原まで歸つてゐることを、新聞の記事で私は知つた。氏の紀行文が「讀賣」に出てゐたが、そのなかには、大和の三山を例にして戀の三角關係が論ぜられてあつた。かつて、「マグダ」が演ぜられた時、協會員の一人が、「Mのマグダには S の魂が入つてゐるんだよ。稽古の時にでも、マグダを見詰めてるSの目付はあたりまへぢやないね」といつてゐたことを私は思出してゐた。耳に觸れるMとSとの噂は次第に激しかつた。

私は年末も押詰つてから二三日小田原へ行つ

てゐたが、その間に一夜泊りで湯河原へ出掛けた。若しもM女でも來てゐたなら厄介だと氣遣つたが、幸ひに氏は一人で火鉢に寄つてぼつとしてゐた。食事を共にして、二人で火鉢を挾んで斜めに背を並したが、お互ひに話ははずまなかつた。

「紀行文はあれで中止になつたのですか」と訊くと、

「あれは旅費にするつもりで書いたのだが、原稿料がよくないので、それなり書きたくもないから止めたのです」と、氏は答へた。机の上には何かの洋書があつたが、氏はそれを讀んでゐるやうではなかつた。「横山君は熱海に來てゐるから電話で呼ばうか」と、氏は欠伸まじりにいつた。私は玉突場へ行つて長い夜の退屈をまぎらして、別の部屋で寢床に就いたが、翌日樣子を見ると、氏は火鉢の側に正坐して、上べは何もしないでゐた。

氏は正坐して苦んでゐたのである。泡鳴氏のやうではなかつた。しかし、そのS氏が、話甲斐のない私に向つてさへ、一度くど〳〵と愚痴をいつたので、私は呆氣に取られたのであつた。それは藝術座創立前のことでM女を中心の問題にして、早稻田の一部の人々が騷いでゐた頃であつたが、私がふと、郊外の氏の宅を訪ねて行くと、氏は例になく昂奮した樣子して、T博士の主宰してゐる協會の墮落を慨歎した。「思ひ出」のやうな通俗劇を演じたことが慨歎の一つの理由になつてゐるらしかつたが、その劇は通俗であつても面白い芝居であつた。氏自身も以前「歌舞伎」誌上で、日本向きの面白い芝居として推薦したことさへあつた。

「T博士に宛てて僕は手紙を出して置いた。僕は責任を帶びて書いたのだから、後で問題になつた時の用意にと思つて、手紙の下書は保存してゐる」といつたが、外交問題か裁判事件見たいに、T博士とS氏との間に手紙の控へを必要とするのは、私には變に思はれた。協會の仲間に陰謀のあることをも氏は洩らした。その他その他。……師弟水魚の交はりも、一婦人のために打碎かれるのを、この時痛感した。親子の間、兄弟の間、朋友の間も、婦人のために造作なく反目されるのである。主義の爭ひ見たいにいつてゐたあの時の早稻田の人々の心持は可笑しい。

泡鳴君はその點で露骨で正直であつた。K女史と親しくなつた時に、彼女を輕い口で非難してゐたらしい柴田采庵君と、精養軒であつたある會で椅子を並べると、いきなり突つ掛つた。

「君は婦人のいふことばかり聞いて、一途に人を罵倒するのはいけないぢやないか」と、柴田君が青い顏していふと、

「いや、女は弱いから、僕が辯護してやるんだ。君のいつてることはみんな出鱈目なんだ」と、泡鳴君は赤い顏して鼻を鳴らした。

私は側で聞いてゐて、女が弱いのか泡鳴が弱いのかを疑つてゐた。

藝術座が組織されて盛に勢づいてからのS氏の行動は、新聞の記事や知人の話によつて、私には間接ではあつたが、つねに心に留めて、あるひは悲しみあるひは喜びあるひは淋しい思ひに打たれた。藝術座の芝居よりも、氏の行動によつて、人生の本體を見せられてゐるやうに思つてゐた。

「先日伊勢の山田へ行つてゐた男が、藝術座の乘込みがあつて、S氏が廣告旗をたてた俥に乘つて町を引廻されてゐるのを見て、氣の毒な思ひをしたといつてゐたよ」と、ある知友が私に話した時には、私は、感慨のあつた昔の氏と、今の氏とを思ひ比べてちよつと暗い思ひがしたが、それは皮相な同情ではないかと直ぐ

ぐに思ひ返した。早稲田の講壇で美學などの講義をするよりも、M女の一先生として、廣告旗を飜して町廻りをした方が、S氏自身に取つては遙かに生存の興味が豐かだつたかも知れない。

私は打たれても毆られてもへたばりさうでなかつた泡鳴君の死顔は見ることは出來なかつたが、S氏の死顔は、今なほ明かに覺えてゐる。

私は梅雨降り頻る今夜、故郷の家の二階で、薄暗いランプの下で、S氏の死面を目の前に浮べながらこの原稿を書いてゐる。この廣い舊屋には老父母が二人住んでゐるだけなので、家の中には勢のいゝ聲一つ聞えず、淋しさは身に泌むやうである。舊知は近年相ついで倒れて、昔から少かつた私の知友はます／＼少くなつた。私の壽命も餘すところ幾干もないことは分つてゐる。私はしば／＼筆を擱いては、さういふことを考へてゐる。

私は藝術至上主義を信奉したことはなかつた。書きはじめの頃島村氏に向つて、「私は物を書きだすと、頭が痛くなつて、夜はよく眠れないし、壽命が縮まるやうに思はれます」と云ふと、「いゝぢやないか、いゝぢやないか、倒れるまでやつたらいゝぢやないか」と、氏は云つた。氏は見掛けによらない熱烈な所があつた。岩野泡鳴は、「物が書けなくなつた、頭が役に立たなくなつたら舌を噛んで死ぬるさ」と、云つてハッ／＼と苦もなげに笑つた。

私は、一つは思ふやうに筆が運ばないためでもあらうが、さういふ熱情を文學に對して持つたことはなかつた、何かの因縁で道連れになつた女を、振切ることも出來ず、不承々々に一生の旅をしてゐるやうなもので、有島武郎氏の如く女に殉じるやうな氣持には、私はつひになれないのである。

四十になつたら止めようと空想してゐたので、その頃東京の家を引拂つて故郷へ歸つたのであつたが、自分の思ふやうにはならなかつた。自分の筆の稼ぎで巨萬の富を蓄積してゐたのなら、安んじて氣儘に暮らせるのだが、祖先の財産が、たとひ殘つてゐたにしても、それに縋つて生きようとするのはいゝ氣持はしない。それに、兄弟の多い私の家では、自分だけが祖先の餘澤にあづかることは出來ないし、第一、私の名前が新聞や雜誌に出て何とか云はれてゐればこそ、兄として立てられるのだが、文筆稼業を止めてしまへば、外に能はないし、家のために何の役にも立たない厄介者とされるのだ。

それで廢業を思ひ留まつて、再び鬪れたことに努力することになつた。私の文學は才氣や感興によつて生れるのではなくつて、すべて、努力によつて現はれるのである。石や土を運んでゐる勞働者の如く文字を運んでゐる勞働者である。

處女作以來三十年、私が同じ道を努力して進んだり退いたりしてゐる間に、文學の風潮はいくたびも變つた。私はいつの間にか、年齡に於ても作風に於ても、老いたる作家の一人となつた。

（「白鳥[illegible]」[illegible]の文[illegible]」より）

影

推敲を重ねた作品よりも、手輕に書かれた手紙や日記に於て、作家の本性はよく現はれるのである。ある優れた作品を理解するためには、批評家の說明によるよりも、作家自身の手紙や日記によつた方が確かで、明瞭だと思はれることが多い。私はこの頃、ツルゲネーフが佛蘭西の友人に與へた書翰文集や、フロウベルがジョルジサンに與へた手紙を讀んで、さう感じてゐる。この二大文豪の日常生活がありありと分つて面白く思はれるのみならず、彼等の創作の根柢までも見徹されたやうで面白い。

ツルゲネーフの晩年は故國を離れて巴里で過されたので、自然主義系統の文人とつねに親しい友情を保つてゐたと云はれてゐるが、異鄉の人として、佛人に對しては氣兼してゐたやうなところが書翰集に微見えてゐる。ツルゲネーフの死後に、彼れが生前故國のある知人に寄せてゐた感想文や、筐底に藏してゐる記錄が發表された時に、ドーデーなどはツルゲネーフに墓の中からおれたちを鞭打つと云つて憤慨し、兄弟同樣に親しくしてゐたことを忌々しく思つてゐたらしいが、私はこれによつて、異鄉生活の不自由さを痛感した。ツルゲネーフもトルストイやドストエフスキーなどを率直に批評したやうには、ドーデーやゾラを批評し得なかつたのである。日本に住んでゐる朝鮮人や亞米利加に住んでゐる日本人が、精神上の不自由を感ずるのは云ふまでもなく、毛色の同じい文明の程度の同じい國人でも、他鄉に居を定めると、周圍との妥協に心をつかはねばならぬのであらう。

私は一語をも人とまじへることなくして一週を過すことがある。そして、一週の終りにその週間の經過を回顧すると、取立てて云ふべき事件の一つもないのに氣付くことが多い。私は日曜毎に母と姪とに會ふだけである。屋根裏の鼠の群だけが私の社會である。雨や風の荒れない時には鼠どもが私の頭の上で氣味の惡い音を立てる。夜といふ夜は炭よりも黑く、私の周圍は沈默のみである。沙漠に於ける如く無限にさうだ。人間の感覺はかゝる境界に於ては、驚くべく鋭くなるもので、私の心は些少の音にも鼓動する。」これは、フロウベルの手紙の中の數節だ。

「私が人生に於て求めるものは、筆で汚すための幾重ねかの紙片のみである。私は果しのない沙漠を當てもなくさまようてゐるやうに感ぜられる。しかも、私は旅人でもあり駱駝でもあり、あるひは沙漠でもある。……私が支へてゐるただ一つの希望は、やがてこの世に別れを告げることであるが、私はあの世の存在は無いと信じてゐる。有れば一層苦しい世界なのであらうが。……否、否。悲慘はこの世だけで十分だ」これもフロウベルの手紙の中の文句である。

私は優れた藝術を後世へ殘して世界に名を知られてゐる此等の文豪の心にも、屢々不安の暗い影が差してゐたことを、あたり前のやうにも思ひ、不思議なやうにも思つた。迷妄に捉はれない聰明鋭利な彼等の眼には、常套的な宗教觀などで姑息な安心は得られなかつたであらうが、しかし、自己が安んじて動じない所を、老の到るまでに見出し得なかつたのは淋しい。

ツルゲネーフはフロウベルに宛てて病苦を訴へ、「自分はつひに犬の如く死ぬるのであらうか」と歎じてゐる。フロウベルは死の近きを豫

感じて、「影が予を包みつゝあり」と悲んでゐる。かうなると、その二偉人の歎聲が凡人の愚癡と同じやうに思はれる。私の少年時代に知つてゐた田舍のある耶蘇信者は、神の御許へ赴くといふ確信を有つてゐたためであらうか、死に際して、歡喜を面に湛へて最後の息を吐いた。永遠の生命を信じた田舍者の心は迷妄の巣で、かの二偉人の如き心持が人世の眞相を捉へてゐるのであらうかと、私は考へ直して、解けがたい謎に暫らく惱まされた。そして、際立つた事業は何もしなくつても、絶えず平和な心を有つてゐて、笑つて死生の溝をも飛越えた田舍信者のN氏の方へ、いつか私の心は惹かれて行つた。

少年時代の私の目には、餘程の老人として映つてゐたN氏も、その頃五十にまだ間があつたので、今の私の年齡とさう違つてゐなかつたのであつた。若い時分からの努力で可成りの身代を造り上げて、雜穀商として近鄕に顏を知られてゐて、田舍の小さな教會では中心人物の一人になつてゐた。私は日曜ごとに會堂通ひをした時分に、たび〳〵N氏の宅で午餐を饗ばれた。暑い日には夕方まで其處で休んだこともあつた。時々は教に關した話も聞かされた。元來單純た信仰をもつてゐるだけで、學問は辛うじて聖書を讀み得るくらゐに過ぎなかつたN氏の話には、その頃の私は、あまり重きを置いてゐなかつた。ジョンソンといふ米國の宣教師が說教に來た時、N氏などが〝ソン〟といふのは日本の尊と同じ意味だと云つて有難がつてゐるのを聞いて、私は噴きだした。

私が東京に留學して、はじめて、歸省した夏であつた。久振りで會堂へ行くと、N氏が病氣してゐて日曜の集まりにも暫らく出て來ないといふ噂を聞いたので、歸りがけに見舞に寄つたが、その時の彼れは、最早一ときも寢床を離れてはゐられないほどに病が重くなつてゐたのであつた。多分脊髓の病氣であつたやうに記憶してゐるが、氏は少しでも身體を動かすと疼みを覺えると云つてゐた。

「私も丈夫な時にや、商賣のことや家の用事に氣が散つて、基督のお惠みを一心に考へることが出來なんだが、この頃は聖書を讀んで聞かせて貰うても、讃美歌を唄つて貰うても、身に沁みてお有難いことが分るやうになりました。……私は僅かな身代でも親から讓つて貰うたのぢやなし、誰れのお世話になつたのぢやない、自分の腕一本で稼いだのぢやから、威張つて居れると自慢したこともありましたが、ようも身の程知らん僭上なことを考へて居つたものぢや、と、この頃になつて氣がつきました。御覽なされ。私は御飯を食べることから、大小便の始末まで、みんな人に厄介を掛けて居りますのぢや。人の情のお有難いことがこの頃はよう分りました。家內や娘の介抱を受けるのは當然のことぢやと、誰れしも云うて居りますが、家內にでも娘にでも情深い心が自然に備つて居るのはどういふ譯ぢやとお思ひなさる？　神樣がさういふ情深い心の種を人の心にお植ゑになつたからぢやありませんか。播かん種は生えはしません。……それぢやで、私は家內にでも娘にでも、この頃は頭を下げてお禮を云ひます。笑ひ事ぢや御座いませんぞな。娘や家內の心に映つてる神樣の惠深いお姿に私はお禮を申上げて居りますのぢや。……私の病氣がよくなりますれば御恩報じに教會の方へ身を入れて、永い間皆樣も考へてゐなすつた會堂の新築が出來上るやうな運びにしたいと思うて居りますが、神樣が早く私をお側へお招きになるのなら、私はとやかうこの世の事に心を痛めますまい。……私は時々夢の中で美しいあちらの世界を見ることがありますのぢや」

N氏は仰向きに寢たまゝ、落着いた調子でさ

う云つてゐたが、元氣のよかつた時分のN氏の田舍くさい信仰話よりも、どれほど深く私を感動させたか知れなかつた。私は病床の傍に恭しく坐つて默つて耳を傾けてゐた。

「私も身體の骨節が疼んでならん時にや、苦い顏もするし、家の者につらく當りもしますのぢやが、神様は私に辛抱氣のないことをお叱りにはなりません。神様が見てお出でになるのに、體裁つくつて居るには及びますまい。泣きたい時にや泣いたらいゝぢやありませんかな」

やがて、東京の事を聞かれたので、私は取留めなく學生生活の有様なとを話すと、

「私は貧乏な家に生れましたで、讀み書きも碌に出來んやうな人間で歳を取つた譯ですが、これからの若い人は學問せにやなりますまい。學問がありや、詰らんことに迷はされないで濟みますから。……」と云つて、N氏は牧師に説明されたヨブ記の話を持出した。ヨブの如き正しい者が苦しい試みに會はされたことが、多少腑に落ちない暗い影を彼れの心に印してゐたのであつた。

「僕にもよく分りません。あれには神學上の六ケ敷い理窟があるんでせうね」と、私は答へた。

「私も丈夫な時には、上の空で聖書を聽いて居りましたが、私のやうな無學な者には分りかねるところもあります」と、N氏はちよつと憂ひの眉を顰めたが、それは一時の雲として掻消されたやうに、「しかし、神様のお側へ行けば、何もかも分るこつてせうから、詮索するには當りますまい」と安んじて、聖書のうちの有難い文句を彼れ此れと口に上した。

その年、夏季休暇の終りに近づいて、上京の支度に取掛つてゐる時分に、N氏逝去の知らせがあつたので、私は追悼の心を寄せるためにわざ／＼訪ねて行つたのであつたが、その時に私の目に映つた氏の死相には、苦しい病氣の果とは思はれないやうな平和が宿つてゐた。無智の平和と輕んじることは出來ないやうな氣がした。

爾後數十年間に得た私の書物の上の知識も、ヨブ記の謎を解くことが出來ないが、さういふ煩はしい疑問に多くの惱みを浪費しないで、平和な心をもつて死の扉を開けて行つたN氏の單純な信仰が羨ましい。

フロウベルの淋しい懷疑や、ツルゲネーフの不安な心境に共鳴する自分の濁つた心を私は憐む。……しかし私は今更どうすることも出來ない。

根本の憂ひを拭はれて、暗夜に光を得るのは、宗教心に縋るより外にないであらう。亂世の人々が淨土宗に歸依したことや、中世記に、修道院の榮えたことが私にはよく思出される。文藝復興後の世界よりも、あの頃に本當の安心があつたのではないかと思はれる。歴史家は中世紀を暗黒時代と稱して、いろ／＼にケチをつけてゐるが、永遠に生命を確信してゐた人には、他の瑣末な日常生活の不足はどうでもよかつたのではないか。

私は深夜に目醒めた時、すべての事について信念がない、風に吹かれる木の葉の如く、水に漂ふ浮草の如き、自分の生存について、悄然として心の消え入るやうな思ひのされることがある。神とか佛とかいふ時代の垢のついた、既成の言葉で現はされるものを信じる信じないの問題ではない。自分を永遠の自分として信じ得る境涯を望んでゐるのである。

（白鳥[illegible]集[illegible]の「あの夜の感想」より）

泉のほとり

私は日の出前に起きて、顔を洗ひに山麓の泉まで出掛けるのを毎朝の例としてゐる。水質の悪い井戸水を用ひるのは氣持が惡いからでもあるし、朝食前の散歩が健康上に必要なためでもあつた。

人家の間の汚らしい道を急いで通り拔けて、小川の橋を渡り、大根畑の側を横切り、墓地への通ひ路から別れて、石ころ道を數十歩も上ると、苔の蒸した石に圍まれた清洌な泉が目の前に現はれるのである。古い石地藏が傍に安置されてゐて、後は繁つた竹藪が奥深く續いてゐる。共用の大柄杓で淨く澄んだ清水を汲んで、口を漱ぎ顔を洗ひ、あるひは全身を拭つたりしてゐると、爽かな微風が身に沁みて氣持がいゝ。空を仰ぐと、殘月が竹の葉越しに見えたり、少し時刻の遲れた時には、向ひの山の端が仄紅くなつてゐたりしてゐる。

少しぐらゐ雨が降つてゐようとも、霜が置くほど冷たい朝であらうとも、私はまだこの習慣を怠らないでゐる。たまに水汲み女に出會ふこともあるが、出稼ぎの漁夫の揃つて歸村してゐる時節とは違つて、早朝の泉に人影を見ることは甚だ稀れだ。

はじめの間は、私の顔が珍らしさうに見詰められて、「何方へお出でなさる？」と、途中で誰れ彼れから訊ねられることもあつたが、この頃は事情が沿道一帶の人々に分つたので、顧みるものもなくなつた。私は歸鄕するたびに、日毎に山へ上り濱へ出るのであるが、村の人々と打解けて話をしたことは殆んど無かつた。自分の家以外の家の閾を跨いだことも殆んど無いと云つていゝ。

したがつて、村の誰れからも懷かしげに話し掛けられることはなかつたが、たゞ一人仙太といふ男は、何處ででも私を見つけると、いかにも懷かしさうに大きな聲で呼び留めて、傍へ寄つて來るのを例としてゐた。彼れの家の前を通るたびに、「お寄んなさい」と私を招かない事はなかつた。彼れの方で私の住んでゐる離れ座敷の側を通る時にも、をり／＼は塀越しに話を仕掛けた。それなのに、今度は歸鄕して以來暫らく彼れの聲を耳にしない。私が歸つて來た事は村中の噂になつてゐて、無論彼れの耳にも入つてゐるだらうのにと、私は怪しんでゐた。泉へ行く途中から見上げられるところに彼れの家があるので、私は時々[illegible]の[illegible]を通してその方を見やつたが、彼れの姿は一度も見られなかつた。

しかし、私の方では強ひて會ひたくはないのだから、この男の動靜を家の者に訊ねることもなかつた。十九の年に親分を殺害して北海道の監獄へ十六年三ケ月も入つてゐた彼れは、七年前に放免されて歸鄕して以來、薄資本で魚類や穀類の荷ひ賣りをしてゐたのであつたが、若い時に苦勞を掛けた兩親には入牢中に死なれ、僅か十七の年齡に娶つた最初の女房も、入牢中に行方知れずになつてゐるし、村の中からはやゝもすると除外され勝ちだつたので、二十代三十代の若い盛りを監獄の中で苦しみながら、ひそかに戀焦れてゐた生れ故鄕も、彼れに住みよき感じは與へなかつた。彼れの兩親や幼い頃の彼れには家事を手傳はせて、昔風の主從のやうな關係で生活の保護をしてやつてゐた私の家でも、出獄後の彼れには關り合はないやうにし

てゐた。

「己れでさへ、何年振りかに故郷へ歸るたびに、村の樣子の變つたのに氣がつくが、お前は尚更さう思ふだらう。十六年も世間の風に吹かれないでゐると、世間はすつかり變つて居るんだから、生れた土地へ歸つて來ても狐に抓まれたやうな氣がするだらう」と、數年前、彼れとの話の間に云ふと、

「さうですなあ。……昔は皆なが親切だつたやうに思はれます」と、彼れは細い目をパチ〳〵させながら、腑に落ちぬやうな顏して云つた。

「今時の十六年は昔の百年よりも世の變りやうが烈しいんだから」

「しかし、若旦那、この村は昔の方がよう御座いましたなあ。あの時分には私一人が惡人で、他の人はみんなえゝ人であつたやうに思はれますが、今はみんなが意地が惡うなつたやうに思はれますがな」と彼れは感慨を籠めて云つた。

彼れはその後獨り住みに堪へられなくなつて、二度も三度も他村から女房を連れて來たが、どれも長くは居つかないで、徒らに村人の物笑ひとなつて居た。

歸郷後彼れの消息をはじめて私の耳に入れたのは、山の泉のほとりで手足を洗つてゐる時であつた。珍らしく早目に水汲みに來てゐる男は、私の側に立つて擔桶に水を入れながら、

「どこのお人かと思ひました。あなたも歳をお取んなさつた」と話しかけた。

「君は誰れだつたね。忘れちやつた」

「私は藤吉で御座います。この頃は西谷の方に家を持つとります」

「あゝ、さうか」私は相手の顏を見上げるとともに、彼れが子供の時分に仙太に庖丁で額を深く傷つけられたことを先づ思出した。額の傷は薄く痕を殘してゐた。で「仙太はこの頃どうしてる?」と、咄嗟に訊ねた。

「あれは今年の四月からまた牢へ入つとります。巡査さんの主婦さんの肩を斬つたんで、三年の懲役にやられました」

「相變らず無茶をやるぢやないか、巡査の内を斬つちや罪が重いだらう」

幼い時から感情を壓へ得ない彼れの所行としては不思議とも思はれなかつた。

「去年の暮に、備後から二人も連れ子のある四十くらゐな女を連れて來とつたんですが、その女もはじめから永う辛抱する氣ぢやなかつたらしいんです。仙太の方ぢや今度逃げられちやかなはんと思つたと見えて、わしの居らん間に逃げでもしたら、何處までも追かけて見つけ次第叩き殺してやる、そのつもりで居ると、商賣に出掛けるたんびに脅しとつたさうですが、そんなことを云はれるから、猶のこと氣味が惡うなつたと見えて、その女は巡査さんの家に手助けに行つてる間に、主婦さんに頼んで×村へ姿を隱したんでさあ。また女が逃げたと、仙太の奴、前後見ずに巡査さんの家へ怒鳴り込んで、主婦さんが言譯するのを碌に聞きもせんで、側にあつたサーベルを拔いて斬りつけたんださうです。その時巡査さんは便所に入つとつたんださうですが、大變な騷ぎでした」

「そして、その女や連れ子はどうしてる?」

「それつきりこの村へ姿を見せません」

「以前米造を殺した時には、盥に乘つて逃出したさうだが、今度はさうは行かなかつたらうね。今時分仙太の奴、あの細い目をパチ〳〵させて後悔してるんだらう」

「何しろ、五人の女房に逃げられたんですからな。一度は女の方で亭主と馴合ひで仙太の女房になつて、折角資本に借りて來とる金をみんな持つて、逃げたことがありました」

さう云つてる間に、藤吉は擔桶へ水を滿たして、坂道を下りて行つた。私も隨いて下りた

が、話は續けられなかつた。

幼い頃、仙太と私とは屢々寢床を並べて眠つたことがあつた。

「月はあんなに小さく見えても大きいんだ。周圍が何百里もあるんだ」と私が教へると、

「阿呆云ひたさい。本にはさう書いてあるか知らんけれど、わしの目でどう見ても、そないに大きいもんとは思へん」と、彼れは例の細い目で澄んだ大空を見上げた。

仙太がゐないとすると、他に私を懐かしがつて聲を掛けて呉れるものはこの故郷に一人もゐないのだ。私は道すがら仙太のゐた家の方を見詰めた。其處の軒先からは蚊遣の煙が洩れてゐた。

生存競爭

文壇に緣のないある知人が、私を訪問して半日を過した間に、無聊に倦んだ果ての暇潰しに、座側の新刊雜誌を見てゐたが、「新潮」をことに興味ありげに繙いて、その讀後感として、「文學者もなかなか煩さいものだね」と云つた。それは通り一遍の感想に過ぎなかつたのだが、私はその言葉を緣として、不斷自分が文壇の渦に浸つてゐるために、ともすると氣づかないでゐることを、新に感じた。「新潮」といふ雜誌は、文壇の一面を窺ふには最も便利なものであるが、その十二月號を手に取つて見ると、文學者とても、決して閑日月を樂んではゐられないことがよく感ぜられるのである。

私なども、自己の生涯を顧みると、文壇の風波を凌いでよく今日に至つたものだと、感傷的な氣持にさへ襲はれる。自分で、も一度かういふ生涯を繰返さうと思はないばかりでなく、年少の徒が文學の社會に身を投じることを、危なかしく、いぢらしく思つてゐる。人間は生きてゐる限りは、何處にゐても、運命に翻弄されて生存競爭に惱まなければならないのだが、文學藝術の社會だつて、決して風流平和の別天地ではないのだ。

「新潮」十二月號の文藝時評欄に於いて、宇野浩二氏は、宮地嘉六氏の近作「累」を激賞してゐる。室生犀星氏も推讃してゐた小說であつて、私もそれを佳作として認めるに躊躇しないのである。私は數年前に、宮地氏のある、可成り長い小說を讀んだ時から、作家としていゝ素質を持つてゐることを知つてゐた。しかし「累」を室生、宇野氏などの云つてゐるほどの傑作であるとは、私は信じ得ない。……

私が、この小說のことを持出したのは、過分の好評に反對しようとするためでなくて、文學藝術の鑑賞は、傍から見たら分に過ぎると思はれるほどに惚込むやうでなければ面白くないと感じたためである。過去の藝術品が時代によつて毀譽褒貶に動搖の生じると同樣に、今日の作品も、時と場合と人とによつて、高く買はれ過ぎたり、低く値踏みされたりすることを常としてゐる。そこが、藝術家に運不運のある所以であり、他の窺ひ知られない苦みと喜びとのある所以である。

（[illegible]）

わが文學小觀

我々は馴れつこになつてあまり感じなくなつてゐるが、毎日の新聞の廣告の大部面が、雜誌と著書の廣告で埋められてゐることは、驚嘆に價ひするのである。一つ〳〵の賣高は僅少なのであらうが、兎に角こんなに頻繁に發刊されるのに由つて見ると、購讀者の數は、全體に於ては非常な數に達してゐることが察せられる。古文學の豫約出版が近年續出して留るところを知らないやうな有樣であるのも、私には不思議な現象と思はれる。萬葉源氏の類も、過去千年の間に流布してゐた數よりも、最近五年か十年の間に印刷された數の方が、遙かに勝つてゐるかも知れない。神祕の珍本扱ひされ、むしろ神聖視されてゐた古典も、古ぼけた姿を明るみに持出された。そのためにいよ〳〵眞價を發揮するものもあるだらうが、少數者が愛玩してゐた骨董品の箔が剝げて有難味の失せるものもあるであらう。

私なども、新聞の廣告面を見ると、絶えず購讀慾を唆られるのであるが、讀みたいと思ふものを一々讀んでゐたら際限がないので、成るべく讀まない分別をしてゐる。森鷗外氏のやうに、三時間の睡眠で滿足して、讀書三昧で一生を過したにしても、その讀破した分量は、古今東西の書籍に對しては、九牛の一毛にも當らないであらう。私は、この頃夏目漱石氏の作品を、暇々に讀んでゐるが、鷗外氏と同樣の多讀家であつた彼れは、その「文學論」の序文に於て、青年の學生に告げて、「春秋に富めるうちは、自己が專門の學業に於て、何者をか貢獻せんとする時、先づ全般に通ずるのを必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば、白頭に至るも、遂に全般に通ずるの期はあるべからず、余の如きものは、未だ英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも、依然として通ぜざるべしと思ふ」と云つてゐる。

書物が容易に手に入る時代になつたのも、學者に取つて必ずしも幸福とは云はれない。落着いて、少數の書物を十分に味ふ昔の學者の心境には達せられなくなるかも知れない。塵芥のやうな書物まで搜し集めて印刷するやうな世の中になつた。明治初年以來の新聞雜誌を全部蒐集し保存する計畫も出來たさうだが、世の中も煩しくなつたものだ。

徒らに讀書するのも精神の浪費である。いろいろな物識りになるだけでは詰らない。私などはどちらかと云へば、直接に人生に接觸するよりは、書物を通して人生を知ることが多かつた。作家としてはいゝ傾向であるまい。鷗外漱石の大才にしても、その作品が書齋臭を帶びてゐるらしく感ぜられるが、私などは殊更さうであらうと思はれる。先頃の時事新報(?)に德田秋聲氏が、文學者と小説家の區別を論じてゐたのを、東京滯在中に一回だけ讀んだ。續けて讀む機會を失つたので、氏の論旨が十分に分らなかつたが、さながらの實人生を寫した小説と、學者の頭から割出した小説とを區別したのではあるまいか。論據をそこに置いて、一を是とし一を非としてゐるのなら、私も大體に於ては同感である。しかし氏の論中、漱石や鷗外よりも紅葉の方が優れた作家であるらしい意見が微見かされてあつたが、その説には、私は同意をすることを躊躇する。鷗外の小説がいかに

書齋臭で濁つてゐても、その晩年の傳記小說「澁江抽齋」「北條霞亭」の如きは、[illegible]に於ても深さに於ても、とても紅葉などの及びもつかないものであると確信してゐる。

書物を通じて世相人間を見ることの多かつた私などは、小說の材料を取扱ふに當つても、ある觀念でそれを片付けてしまふことが多かつた。自分の過去の作品が溌剌たる生氣を缺いでゐる所以である。

讀書に於ても、私はある一つの事を徹底的に研究する根氣を缺いでゐるが、人生に觸れるにしても、底の底まで入つて行くやうな氣力を私は有つてゐない。戀愛その他さまざまの人情でも、身を挺ですまでに突詰めて行つたら、そこに慘憺たる光景が出現するであらうが、それは今までの私には遂げ得られることではなかつた。

しかし、性癖はいかんともし難い。私は人生の渦中に身を投ずることは嫌ひである。歳を取るにつれて、ますますさうなつて行く。方丈記や徒然草の作者や芭蕉など、日本の文學者の心には傳統的に潜んでゐる東洋的厭世觀、彼岸的無常觀に、私の心は浸つて行くばかりらしい。

私は、水火に鍛へられた實際生活を直寫した小說戲曲の類を好む。海邊の砂丘に坐つて激浪怒濤を見るのを好む[illegible]好んでゐる。しかし、自分がその激浪の中に突進しようとは思はない。幾十尺の海底に潜り込まなければ眞珠は摑んで來られないのだが、藝術の眞珠も、そのくらゐの苦艱を經なければ手に入れることは出來ないのであらう。數十年の作家生活を經驗した今日、いくら多讀に目を曝かせても、傍觀的態度だけを保存してゐる作家の作品は、體驗をぶちまけた作家の作品に及ばないところのあることを、私は痛感してゐる。いろいろな作家があつて色彩がそれぞれに異つてゐるから面白いのだが、悲喜哀歡の體驗が作中に漂つてゐないものは、讀者を捉へる力が乏しいに極つてゐる。他人の話を書くにしても、史上の人物を取扱ふにしても、自分がそれ等の人物と心を一つにしてゐるのでなければなるまい。それは分りきつたことなのだが、私は、自作に不滿を感ずるたびに、そのことを考へてゐる。實人生について經驗の乏しい私は、作中の人物の心に入つて行くことが出來ないため、つねに自分の書齋的空想で潤色するやうになり、從つて作品に生氣を失ふやうになるのだ。

私は更に一歩を進めて、藝術と實行について考へることがある。藝術至上主義などを唱へる人もあるが、藝術は實行の影見たいなもので、實行に沒頭してゐる間こそ人間は全心的に生きてゐるので、さういふ人には、藝術なんかどうでもいゝものではあるまいか。戀愛に惑溺してゐる人、戰鬪に從事してゐる人に取つては、いかなる戀愛小說も、いかなる戰爭記も、稀薄な影に過ぎないのである。いかによく眞實を寫したと云つても、寫された眞實は眞實に含まれてゐる奇妙な生命の[illegible]見たいなものではあるまいか。私はそこまで考へて行くと、體驗を文字によつてぶちまけた作品だつて、畢竟それは體驗の影法師に過ぎないので文字にうつす瞬間に、眞生命は逃げて行くのではないかと疑はれる。他の優れたる作家は、自己の體驗を遺憾なく現はしてゐるのかも知れないが、と自身は、時として自分の平凡な體驗を作品のうちに現はさうとしてさへ、思ふやうに現はし得られない惱みを何時も感じてゐる。文學上の技巧の不足もその一つの原因になつてゐるのだが、文學といふものは本來さう云ふもので、現實に對して畢竟、「繪そら言」たるに過ぎぬのではあるまいか。歌舞伎劇ばかりがそらぞらしいのではない。近代劇だつて、文學上の遊戲と思はれない

ことはない。我々はいろ〳〵な作家の描く幻影を見、人生の影法師を見て、それを弄び、それを銷閑の具としてゐるのである。

讀書を續けて來た私は、自分の頭をさまざまな作家の影法師の巣にしてしまつた。それ等のものが、人生の眞相を知るにどれだけ役に立つたかと疑つてゐる。

強盜詩人

共同生活をする人類には、古來自ら道徳といふものが出來てゐて、それに反することをすると他人に斥けられるし、自分でも遺傳的に良心の苦悶を感ずるやうになつてゐる。その苦悶が詩や小說や戯曲の重要な題材になるのであるが、道徳と云つても、時代により國によつて異るのみならず、同じ時代の同じ國に於ても、職業によつて寛嚴の差があるから面白い。政治社會教育社會文學社會など、それ〴〵に道徳律の働き方が違ふ。乞食には乞食社會の道徳があり、賭博者にはその仲間特有の道徳があるらしい。

文學者の仲間では、世間の常識道徳の束縛があまり嚴しくはないやうで、教育界であつたら、直ぐに免職になり世間に顏向けもならんやうなことを、作者が得々と書立てて、却つて世上の喝采を博したりするやうなこともあるが、しかし、文學者間にも、誰れが極めたともなく一種の微妙な道徳はあるらしい。現在のどの國の文壇でも、盜賊は排斥されるやうである。強盜文學者も盜賊文士も存在しないやうである。泥棒の告白文學には私は、まだ接したことがない。

ところが、昔はさういふものもあつた。この頃西洋文學大系を讀むと、中世紀の終りに François Villon といふ泥棒詩人のあつたことが出てゐる。その肖像はなか〳〵いゝ顏をしてゐて、私の知人に肖てゐる。彼れは佛蘭西人で、千四百三十一年に生れた。巴里の醜窟で世を過し屢々強盜をもし殺人をもした。入牢したが、奇蹟的に死刑を免れ最後には誰れにも分らないとこへ身を隱してしまつた。それで死んだ時が分らないし、墓所も分らない。

彼れは、古代の佛蘭西の詩の形を取つてそれに新生命と新らしい美とを與へた。その詩には憂鬱がみなぎつてゐる。彼れは人生を嘲笑し、自己の罪を誇つてゐる。しかし、常に絞首臺の側で筆を執り、絶えず死の恐怖を感じてゐた。

評者が彼れの詩を評して、ダンテの詩が中世紀の莊嚴美と大理想を具體化してゐる如く、またチョーサーが中世紀の幸福なる笑ひを現はしてゐる如く、彼れの詩は中世紀の苦痛と恐怖とを具體化してゐると云つてゐるのは、私には甚だ面白く思はれる。この強盜詩人は、ダンテ、チョーサーの如き詩人と文學史上に鼎立してゐる譯だからえらい。

スキンバーンは、その美しき詩に於てその強盜詩人を讃美してゐるからます〳〵面白い。「涙と火から作られし懷かしい唄の王よ。娼婦は汝の乳母にして、神は汝の祖先なり」などと。

日本には、まだ泥棒からえらい詩人は出ないらしい、出ない方が仕合せである。

（『文壇觀測』より）

ダンテについて

一

聖書は面白い書物である。基督教の神を信ぜず、基督教の教理に心服しない私も、一部の新舊全書を、一生座側に具へ置くべき愛讀書の一つとしてゐる。私はそれを古代史として、人生記錄として、素朴なる小説として、純新なる詩歌として、愛讀してゐるので、イザヤ、エレミヤたどの慷慨悲憤の豫言書や、ポーロの傳道的書翰などには、左程の興味を寄せてゐない。エバがアダムを誘惑し、カインが嫉妬のために弟アベルを殺し、エサウが一杯の羹物のために弟に家督の權を讓り、ヨセフが自分を挑んだ主人の妻に肘鐵砲をくはしたために寃罪を背負つたことなど、創世紀の古代人の物語は、さながら現代人の生活を映してゐるやうに私には思はれる。出埃及記、列王記など、人類の集團的生活を寫した寫實小説のやうに思はれる。

しかし、私は、近來、しみじみと古書に心を潜めたことがなかつた。毎日々々、目に觸れてゐる文章は多く新聞のそれである、雜誌のそれである、新刊書のそれである。世に遲れまいとして現代の雜駁な知識をそれ等から得るのに急がしい。自然速讀の習慣がついた。一卷の書物を手にしても、汽車の窓から外を見るやうな態度で讀むやうになつてゐる。山を下り谷を渡り、一歩々々移り行く光景を靜かに眺め靜かに味ふやうなことは稀になつた。

私は、時としては印刷術の幼稚だつた昔を羨ましく思ふ。歐洲の中世紀、日本の德川期以前には、多數者は殆んど文字を解しないのであつたが、その頃少數の讀書力を具へてゐた人々は、自分の趣味に適した書卷を一字一句反復熟讀して、そこに含まれた滋味を殘るところなく味得したのであつた。私なども幼少の時分には、一篇の小説一卷の史傳を珍重して、殆んど暗誦するほどに耽讀したことがあつた。種々雜多の書物の目まぐるしく出版される今日は、書物の有難さ尊さが薄らいだ。

書物の尊さを云へば、少年の頃、まだ都會の地を踏まない前に、僻陬の郷里の、古ぼけた二階の一室で、東京から取り寄せた雜誌や新刊書を讀んでゐるうちに、西洋では、ホーマー、ダンテ、シェークスピア、ゲーテといふ人々を、古今を貫いた大詩人として尊崇してゐることを知つた。それは、團菊左の三人が、當時の東京の劇壇での三大名優であることを知つたのと同樣であつて、東京へ行つたら、それ等三名優の芝居を觀なければならない、東京へ行つたら、早く英語に熟達して、それ等西洋の四大詩人の傑作を讀まなければならないと、前途に樂しい希望を描いた。

私は今、薄葉に印刷された、携帶に便利な、ケリー英譯の「神曲」を座右に置いてゐる。韋編三たび絶つと云ふほどでなくつても、方々が手垢に汚れてゐる。"Dog-eared Virgil" といふ言葉を學窓でマコーレーのミルトン論譯讀の際に學んだことを覺えてゐるが、私の所持してゐる「神曲」は、私の "dog-eared Dante" である。扉に、鉛筆で小さく、三十八年六月十九日といふ、丸善で買つた時の日附が記されてゐる。沙翁全集や近松全集すら持つてゐないほどに、藏書に乏しい私も、二十餘年間、この英譯「神曲」は手離さないで、旅中にもたびたびこれ

を懐に入れて、あちらこちらの一曲あるひは一章を、恣に讀誦してゐたのである。外國の書籍のうち、私がこれほどに親しんだものは他に一つもないと云つていゝ。……それに關はらず、私はまだダンテを十分に理解したとは云はれない。英譯「神曲」を一通り讀みこなしたと云ふのも躊躇されるくらゐである。

少年の頃すでに名前だけを知つてゐたダンテに關して具體的の知識を最初に與へて呉れたものは、例のマコーレーのミルトン論であつた。（それには、「失樂園」と「神曲」との比較論がされてあつた。ダンテの地獄の描寫は繪の如く、惡魔の身の丈を物差しで計つてゐるやうに筆が具體的であるといふ風に說いてあつたと記憶してゐる）それから、カーライルの「英雄崇拜論」であつた。内村鑑三氏の「文學講演」であつた。内村氏は、例の不敬事件に基いた迫害を誇張して考へ、自己を「國人に棄てられし」人としてしまつて、ひそかにおのれをダンテに比べてゐたらしく　峻銳の語調は、年少にして感じ易い、思慮の單純な私の心胸を、少からず刺戟したのであつたが、それにもまして、私をして、六百年前の外國の詩人に對して、正體を見ぬさきから、隨喜渇仰の掌を合させたものは、例の「英雄崇拜論」中の、詩人としての英雄の一章であつた。今日はどうだか知らないが、この論文は、以前は諸方の學校の英語の教科書とされてゐて、カーライルの著作中最も廣く讀まれたものであつた。「サルトルレザルタス」とか「フランス革命」とか云ふやうな難解な著書に比べると、遙かに讀易いためでもあつたが、第一、「英雄崇拜」といふ題目が、内容の如何に關はらず、日本の青年の心を動かしたのであらう。文學鑑賞の幼稚であつたその頃の讀者は、スコットを讀むにしても、まづ「湖上の佳人」を選んだ。「英雄と英雄崇拜について」の講演は、當時の聽衆であつた鈍重な英人をも昂奮させたであらうと思はれるやうな、言々風霜を含んだ峻烈な調子のものである。カーライルが自己の不平の鬱憤晴らしをしてゐるやうで鋒芒を現はし過ぎてゐる感じがあるが、兎に角、今でも、一氣に讀通されるほどの興味に富んだものである。「詩人としての英雄」の章下には、シェークスピアとダンテとを並せ論じて、例の「印度帝國を失ふとも我々はシェークスピアを失ふ能はず」などと叫んでゐるのだが、ダンテについても「十世紀間默してゐた歲月がダンテによつてはじめて聲を放つた」と云つてゐる。「ダンテの神曲は、中世紀千年間の沈默の聲なり」と云つたカーライルらしい評語は、はじめてそれを聞いて以來、數十年後の今日まで、神曲を讀むたびに、私は思出すのである。私は、基督教を信奉してゐた二十歲前後の當時から、基督教とその信者とを嫌忌してゐる今日まで、——矛盾してゐるやうだが——歐洲の中世紀に對してある憧憬を寄せてゐる。早くから中世紀千年の人生を具體化した神曲の前に拜跪する心を起したのは當然であつた。

信者であつた青年の私は、教理の繪解きのやうなバンヤンの「天路歷程」を面白く讀んだ。無學者の筆になつたこの書物は、通俗ではあるが、話上手が浮世噺を話してゐるやうな劇的筆致に富んだ傑れた宗教文學であつた。しかし、ダンテは六ケしかつた。六ケしいのが當り前なので、伊太利人でさへ、ダンテ歿後間もなく、神曲を讀むのに註解を必要としたほどなのであつた。

開卷第一の長詩の一聯、「われ正路を失ひ、人生の羇旅半ばにありて、とある暗き林のなかにありき」云々は、ファウスト開卷の獨白と同樣に、續いて起る物語の意味の深さを豫想させて、先づ私の心を緊張させた。それから、地

獄の門の頂に、「我れを過ぐれば、憂ひの都あり。我れを過ぐれば永遠の苦患あり。我れを過ぐれば滅亡の民あり。……永遠の物の外物として我れよりさきに造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、汝等此處に入るもの一切の望みを棄てよ」と黒く記されてゐる言葉を讀むあたりまでは、兎に角喘ぎ〳〵隨いて行けたのだが、そこから私はへこたれて讀惱んだ。シェークスピアのハムレットなんかに隨喜渇仰したゲーテは、ダンテの「地獄篇は嫌惡すべく、煉獄篇は茫漠たり、天國篇は倦怠を齎す」と云つてゐるさうである。近代思想の權化であつたゲーテには、中世紀の陰氣な思想や感情が厭はしく思はれたのであらうが、ゲーテをも黴の生えた前代人として取扱ふやうになつてゐる日本の現代には、尚更ダンテなどの迎へられよう筈はない。全體彼れは、西洋の文學者のうちでも、最も日本向きでない一人なのだ。

しかし、私自身は、中世の煩瑣なスコラ哲學には何等の興味をも感ぜず、ダンテの人生觀にも必ずしも共鳴してゐるのではないが、中世紀に對して ある種の羨望を寄せてゐる。「神曲」をも今なほ、棄て難い良書としてゐる。……日本も文運隆盛の結果日本向きでない、ダンテに關しても、その飜譯や研究書が可成り出版されるやうになつた。「神曲」の全譯も二つ世に出てゐるが、私は山川丙三郎氏のそれを購讀した。譯者は多分カトリックの信者であるらしく、文學上の名譽心よりも宗教上の信仰を動機として、この神聖なる喜劇の飜譯に着手したのであらうが、譯文の態度は甚だ忠實である。原詩に含まれてゐると云はれる音樂の響きや詞句の風韻が缺けてゐるとしても、あんな難解な長詩を、日本文でこれだけに譯しこなすことは大事業である。近代小説の出鱈目な飜譯とはその難易同一視すべきものでない。私は、ケリーの英譯本では曖昧模糊の感じのしたところを、山川氏の日本譯によつて明かにした。ことに、首尾を通じて精細な註釋が附せられてあるのは、譯者の誠意を推察することが出來る。ダンテばかりは註解に依らなくつては、いかなる人も讀みこなし得られないのである。山川氏は、宗教以外に文學上の名譽心はないのか、これほど丹念に仕上げた譯書に於て飜譯の苦心談、あるひは自己のダンテ觀などを一言一句も述べず、ダンテの略傳さへも添へないで、たゞ氏の師である新井先生の、村學究然たる面白くない感想録を、毎卷の卷頭に有難さうに掲げてゐるのは、今日の文學者氣質とは、全く類を異にしてゐる。私は蔭ながら、氏の飜譯の勞を感謝しながら、その浮世離れのした氏の人となりを想望してゐる。山川氏の外に、中山昌樹氏は、「神曲」をはじめ、ダンテの著作全部を譯述してゐる。氏は、その上「ダンテ傳」と「神曲研究」の二書を著してゐる。日本のダンテ學者の隨一人は、多分中山氏であらうと思はれる。氏の感想は隨所に現はれてゐるが、それによつて見ると、氏も宗教信者であるらしい。そして、西洋の多くのダンテ學者の如く、氏も、神曲を以て、人類所産の最高の作品であると極言して、禮讃してゐる。

私が寄せ集めた日本のダンテ書類は、以上二氏の譯著の外に、黒田正利氏の「ダンテと其の時代」と、阿部次郎氏の「ダンテの神曲とニイチェのツァラツストラ」及び「ダンテ雜話」（評論集「地獄の征服」中に編入されたもの）などがある。黒田氏のは、今まで日本に現はれたダンテ傳中、最も浩瀚なもので、一通りダンテの生涯について知らうとするには、これで澤山なのである。西洋では、ダンテに關する書類の夥しきこと、むしろシェークスピアをも凌ぐほどで、最近に至つてダンテ研究は、ます〳〵旺盛

で、新著が續々と現はれるさうだが、ダンテ自身は著作の數は少く、その實生活についても、調べ得られる限りは大體知り盡されてゐるのだから、さう新しい發見のあらう筈はないと私は讀まないで推察してゐる。しかし、この中世紀の詩人に關する硏究が旺盛で、新著が頻繁になるのによつて見ると、西洋でも、中世紀を夢想し憧憬する人々の尠くないことが推察されて、私は人生の歸趨について考へさされるのである。「現世を苦の世界とし假りの住ひとして、修道院に籠つて、天の一方を夢む中世紀氣質は、いかに强烈な近代の力、文明の光を以てしても人心から消亡させ得られないのである。私は歷史の表面では陰慘であつたらしい中世紀の人々を、羨望の目をもつて見詰めることがある。

　阿部氏の「神曲とツァラツストラ」論は、氏の哲學的知識と聰明な批判力とを示した大論文である。私はこれによつて、はじめて、ダンテに對する日本人の獨創の見解に接したので、學ぶところが尠くなかつた。飜譯して歐米のダンテ學者に示すに足るものである。……しかし、私は必ずしも氏の所說に贊同してゐるのではない。英國のダンテ學者の中、最も深遠らしい哲學的考察を試みたムーアの所論と同樣に、それに暗示されて出立した阿部氏の、ダンテの罪惡觀についての批判にも、左程の興味を感じ得ないのである。

　私が、年少にしてケリーの譯本を手にして以來、ところ〴〵拾ひ讀みしながら、感動した詞句には鉛筆やインキで線を引いたが、今その二三を選出して見ると、

　淨火篇の第十一曲、傲慢罪を淨めつゝある畫家オデリジと、ダンテとの會話が、その一つである。

「あゝ、君はグッビオの譽れと云はれた人で、巴里で色彩畫として持囃す繪の名人のオデリジさんではないか」

「いや、兄弟よ。ボローニア人フランコの描いた繪の方が、僕のよりは華やかで勝つてゐる。今はあの人が名聲を一人占めにして、僕の名譽はほんの一部分に過ぎないのだ。……僕も生きてゐた間は、頻りに人を凌がうとして、心がその方にばかり向つてゐたから、今のやうにこんなに人に讓る氣にはなれなかつたが、……あゝ、人間の力は空しい。先輩を凌駕する者の出て來ないやうな衰へた世なら兎に角、さうでない限りは、靑々と茂つた名聲の頂上も、直ちに枯れつ葉になるのだ。……昨日までチマーブエが繪畫界で覇を唱へてゐたと思ふのに、今はジョットの呼聲が高くなつて、あの男の名譽は微かになつた。……それと同樣に、一人のグィードが、他のグィードから文章の名譽を奪つたが、間もなくこの二人を巢から逐出す者が生れて來るだらう。……浮世の名聞は、此方へ吹き、彼方へ吹いて、處次第で名前までも變るやうな風の一息に過ぎないのだ。……」

　分り易い現代語に譯したから、こんなに冗漫になつたが、ケリーの飜文によつても、實に簡潔に含蓄のある文辭で言現はされてゐる。西鶴の文章が思出される。ストリンドベリーの「ダマスクスへ」にも、畫家を例に擧げて、浮世の毀譽襃貶の頼み難いことが詳しく述べられてゐるが、さう云へば、「ダマスクスへ」はストリンドベリーの神曲であり、神曲はダンテの「ダマスクスへ」である。一人は中世紀の末期に生れたためにあゝいふ形に於て、おのが心の記錄を留め、一人は十九世紀末期に生きてゐたためにああいふ形に於て、おのれの心靈の經驗を記したのである。古今の文人の中でも類を絕してゐたと云はれほどに高貴な相をして、沈鬱と思慮とが面に現はれてゐたダンテと、山猫のやうな顏

して世を睨んでゐたストリンドベリーとは、容貌からして非常に違つてゐる。それで私は、この二人の肖像を並べて見て、中世紀と近代と二つの時代の象徴の如くに感じてゐるのだが、この二人は、根本に於てはそんなに相違してゐないのだ。ストリンドベリーは、世評で極められてゐるほどの憎人家でも女嫌ひでもないし、ダンテもダンテ學者によつて理想化されてゐるほどの愛の權化ではないのだ。そして、かの北歐の近代詩人も、近代らしい形に於て、地獄と煉獄とを通過して自己の心魂を鍛へてから、つまりはカソリックの宗教的恍惚境に老後の平安を求めたのであつた。

私は、また、「わが血は嫉妬のために湧きたり、われ若し人の幸福を見たらんには、汝はわれの憎惡の色に被はるゝを見たりしなるべし」（淨火篇第十四曲、グイード、デル、ヅーカの言葉）といふ詞句に線を引いてゐる。「不幸な境遇にゐて、幸福だつた昔を思出すほど大いなる悲みはなし」と云つたフランチェスカの有名な歎息に圏點をつけたのは云ふまでもない。

「いと深く愛する物をば汝悉く棄て去らん。これすなはち流罪の弓の第一に射放つ矢なり。……他人の麵麭のいかばかり苦く、他人の家の階子段の昇り下りのいかばかりつらきかを汝自ら驗すならん」（天堂篇第十七曲）

これは、ダンテが天上で出會つた自分の祖先のカチャグイダから、ダンテ自身の將來の不幸なる生涯を豫告されるところであるが、云ふまでもなく、祖先の豫言に託して、ダンテ自身の流竄の艱苦の一端を微見させたのだ。「他所の家の飯には骨がある」と日本でも寄食者の苦みが云はれてゐる。二階借りの苦しさは東西古今同じことである。

かういふ風にダンテを拾ひ讀みしても、現實の世相現實の人生の描寫が、至るところにきらめいてゐるのだ。たゞ、ダンテは中世紀らしい表現法を用ひ、ストリンドベリーなどは近代らしい表現法を用ひた相違があるだけだが、しかし、あれほど強烈な主觀的詩人であつたダンテが、自己の心魂の苦闘と解脱の經路――すなはち自敍傳を筆にしながら、なぜストリンドベリーなどとは違つて、自己の生活の直寫を試みなかつたか。彼れが二十年間の流離の生涯を何處でどうして過したかについては、斷片的に知られてゐるばかりで、後世のダンテ學者をしてその穿鑿に苦心させてゐるのだが、彼れは何故に、自己の實生活については自ら語るに躊躇したのであらうか。

私はそれについて考へた。そして、中世紀の詩人氣質について大いなる興味を覺えてゐる。

二

「我々が今日實世界と云ひ事實と云ふものも、中世紀の人々から見ると、それらは人智で窺測し得られない神の眞智の深淵が象徴されたものに過ぎない。現實の世界、それがすでにアレゴリーである」實生活は影であり幻であつて、眞の事實の天の彼方にあると確信してゐた中世紀の人の考へに私の心は惹かれてゐる。さういふ夢想を羨望してゐる。

ダンテは、その自傳的「神曲」に於て、自分の子供や妻や兄弟については一言半句も記してゐない。兩親についても、彼等がイタリー語を用ひたことを記してゐるばかりである。彼れには姉妹が二人あつたが、そのうちの一人について「新生」のある條下に、一度ボンヤリした事を書留めてゐるに過ぎない。彼れの肉親について云つてゐることはこれつきりである。彼自身の行爲にも殆んど筆を觸れてゐない。さういふことを敢てするのを恐れてゐるやうな態度を執つてゐる。何故であるか。

この頃讀んだ、グランドゼントの「ダンテの威力」といふ講演集のうちに、「中世紀に於て最も尊敬された修辭學の權威はアリストートルとシセロであつた。十三世紀では、修辭學ばかりでなく、辯論術と論理學とが、大學で重んぜられた。そして、その修辭學は文章を沒個性たらしめるやうに教へたので、ダンテのやうな強烈な個性を持つた作家でもそれに感化されるを免れなかつた。彼れが修辭學を學ばなかつたならば、「新生」と「神曲」との心靈的自敍傳に於ても、自分の物質的實際生活についてもつと何かを書留めたに違ひないだらう。誰れでも必要がないのに自分について語ることは、修辭學者に許されてゐないと、彼れは云つてゐる……」と說いてあつたが、かういふ修辭學が信奉されたのは、中世紀の人生觀に深い關係があるのである。人間の實生活、すなはち外形的生活は、さして重んずべきものではないので、重んずべきはたゞ心靈の生活だけであつた。だから、今日の日本の小說のやうに、自分の煩瑣な日常生活をゴタ〳〵と書く必要はなかつたのである。自分の個人的行爲を喋々と語ることは恥とされてゐたのだ。

「ダマスクスへ」が私戲曲である如く「神曲」も私戲曲である。しかし、それは、自己日常の行動をゴタ〳〵と書並べた日本の私小說などとは、正反對の文學である。それで、今日の雜誌文學を讀厭いた私は、屢々目を「神曲」などに注ぐやうになつた。

それでは、ダンテは、人間を描くこと亡靈のやうであつたかと思ふと、決してさうではなかつた。ケリーの英譯本には「ダンテの幻相」と題してゐるが、この幻相が寫實を極めてゐることは、地獄篇の幾曲かを熟讀すれば、誰れにでもよく解るのだ。天性の洞察力と寫實の才とは、地獄を描いても、天堂を描いても、人間を描いても天使を描いても、それ等を讀者の眼前に浮上らせるほどの妙境に自ら徹してゐたのだ。彼れの寫實の手腕は、シェークスピアなどの及ぶところでないと、私は確信してゐる。有名なフランチェスカの情話やウゴリノ伯の慘話は云ふまでもなく、火氣や焦土を手で拂ひながらも、それ〳〵に頸に懸けた財布を見て目を喜ばしてゐる高利貸でも、雨や雹や濁水で惡臭を放つてゐる地上を轉つてゐる貪食家でも、作者の主觀と場景とが融和して、繪の如く描かれてゐる。神曲がダンテの存命中すでに、イタリーの有力な貴族達に興味をもつて愛讀され、また一般人民も街上でその一部を愛唱したと云はれるのは、さもあるべきことと思はれる。辛辣な寫實の筆が面白かつたのだ。時としては他を怒らせたであらうと思はれるくらゐに無遠慮に、辛辣に、當時の人々の知つてゐる人間や事件を描いたのだから、我々が時處を隔てて今日此處で讀んでゐるよりも、當時のイタリー人には遙かに興味が多かつたに違ひない。……現在の大臣や代議士や陸軍大將や大學教授など知名の人物を「神曲」の地獄中の罪人どものやうに取扱つた演劇が今日實演されたとしたらどうであらう。

驚くべきことは、ダンテがこの書の發表を決行した以上、彼れが書中の地獄へ追込んで恐ろしい刑罰を受けさせた人々の子や弟妹や妻などが、その父や兄や夫の虐遇を如何に感じたかと云ふことである。その上、驚くべきことは、ダンテによつて地獄圈内の極刑に處せられた人は、死者ばかりではなかつたので、たとへば、地獄篇の第三十三曲に現はれてゐるアルベリゴやブランカ(殺人者で、千三百年頃には二人ともまだ生きてゐた)は、地獄でダンテに會つたことになつてゐるが、肉體はまだこの世に殘つてゐたのだ。……また、フローレンスの樂器製造

家のペラッカは、かつて戸口に坐つて、膝に肱を當て頭を手で支へて懶けてゐたのを、ダンテに見られて笑はれたことがあつたために、まだ生きてゐるのに、ダンテのために、その作中の淨罪山の麓に、膝や頭をあのまゝで坐らせられ、懶けものだから山へ登れないことを現はされねばならなかつた。

かくて、ダンテは自己の生活の直寫は試みなかつたが、その幻想には人生の諸相が織込まれてゐるのであつた、寫實味に富んでゐるのであつた。ところが、この人生觀察を、中世紀の神學によつて錬磨されたダンテ自身の主觀で如何に取扱つたかといふことが、ムーアや阿部氏などのダンテ學者の重大な問題になつてゐるのである。前に云つた如く、阿部氏の哲學的倫理考察は面白い。地獄の前界から最後の第九獄までの罪人に對するダンテの態度について、細かに批判し、高貴なる道德を說いてゐるところは、哲學にも神學にも暗く、聖書をもたゞ、古代史として人生記錄として鑑賞してゐる私には、物珍らしく感ぜられたのであつた。

「我々は哀憐エレオス、と同類感フィラントローピア、との差別を何處に置くべきであるか。哀憐は對者の價値に同感することを條件とする同情である。同情感は對者が凡そ我々の同類であることを條件とする同情であつて、必ずしも彼れに人間としての價値があるかないかを問はない。たとひ彼れが極惡非道の者であつても、苟も彼れが劇痛に襲はれて輾轉するのを見れば、我々の心にはフィラントローピアの感情なきを得ないが、この感情には對者を是認する心境が缺けてゐるが故に、それはエレオスと呼ばれることが出來ない　エレオスは唯價値ある者の苦惱に對してのみ可能である。アリストートルの有名な悲劇論に從へば、それは唯、當然以上に苦惱する者、價値ありてしかも罪過ある者に對してのみ可能である。哀憐と同類感とは其のうちに價値の――人格價値の――見地を含むか含まないかによつて、明瞭な差別を持つてゐるのである。…：ピエタに對する詩人ダンテの態度は、神曲のある個所に於て甚しく註釋家を惱ました。しかし、ピエタの中には哀憐と同類感との二つの意味が含まれてゐることを悟れば、彼れがピエタを是認する場合と非認する場合との差別は、必ずしも戸惑ひを要するほど混雜してゐるのではないのである。大體から云へば、ダンテは罪人に對するエレオスを是認してフィラントローピアを非認する。これは我々の間に高貴の道德を奉ずるダンテに取つては當然のことであるが、それだけに、我々は益々この視點を見失はぬやうにしなければならない」

阿部氏はかういふ倫理觀を抱持して、ダンテに隨つて地獄の門へ入つて、詩人の行動について注意深き研鑽を試みた。

私は敢て氏の見解に反對しようと思はないのみならず、さういふ見解も自己修養のよすがとなるのであらうと思つてゐるが、しかし、私は、超人を說いたニイチェの倫理觀を具體化したやうな人間の見本としてダンテを見ることを好まない。彼れは彼れの心に地獄と煉獄との修業を積んでやうやく天堂に達したのではないか。道案內にヴァジルを賴んでおど〳〵しながら暗黑裡の旅をした彼れではないか。煉獄は他人のことよりも彼自身の心の鍛錬の道場であつた。前に「神曲」から引用した言葉でも、「自分が幸福であることよりも他人が不幸であることを喜んだ」と云ふ嫉妬深い貴婦人サピアの懺悔の言葉でも、ダンテ自身にさういふ感じを經驗してゐればこそ、他の心が洞察されたのだ。地獄旅行最初の用意として、「われは唯ひとり、旅路と同情と二つのいくさに、兼ねて堪ふべく身裝ひ

しつゝ」と心構へをしたのは當然であつても、恐怖の世界を辿るにつれて、同情」或はある飜譯語の恐れ」の念に動かされて、用意の亂れるのも當然であつた。中世の神學に基いて、それ／＼の罪人をそれ／＼の適所に置きながらも、知人としての個人的感情から心の亂れるのも當然であつた。ダンテならぬ者もさうではあるまいか。男色の徒の群の中に、舊師ブルネットを見て、その罪に對する憎みを忘れて、思はず優しい感情を起すのも當然であるし、一人の女を一生思ひ詰めたほど戀に徹してゐたダンテが、フランチェスカなど所縁の二人に哀憐の感じを寄せるのも當然であつて、殊更高貴の心として批判するほどのことではないのではあるまいか。ダンテは神經過敏で感情の激しい皮肉な男であつたらしい。今日では創作中の人物となり切つて分らなくなつてゐたが當時は、モデルに對する作者の愛憎の感じが讀者に認められてゐたであらうと察せられる。政爭のために故國を放逐されて、二十年間の艱苦を嘗めたダンテだもの、背信の裏切り者に對して憤激して、その髮の毛を引拔くぐらゐ當然であつて、强ひて倫理問題を云爲するには及ばないのである。彼れが流竄の生を送つてゐる間、夜半の寢醒めに、いくたびか、政敵や賣國奴に對して憎みを覺えて、彼等の髮の毛でも引つこ拔かうと空想したか知れなかつたと、私には察せられる。それが地獄の幻想となつて現はれたと見てはいけないのだらうか。ウゴリノ伯の慘事は、ダンテが二十餘歳の頃に起つたのだから、多感な彼れは、ピサから傳はつて來た報告を耳にして、若き心に戰慄を覺えたであらうと察せられる。悽慘な詞句の響きが、無緣の私などの心にも脈々として傳はる譯である。

私は神學の規定によつて罪人を配置しながら、七情を備へたダンテの心がいろ／＼に動搖したところに、彼れの心の自敍傳を見てゐる。そして、そこに共鳴を感じてゐる。

三

放浪してゐたダンテは、巴里へも行つたと傳へられてゐる。その途上、ある僧院に宿を求めると、そこの僧侶は、旅人の誰れにでも訊ねる通りに、「お前さんは何を求めに此方へ來たのか」と訊いた。ダンテが返事をしなかつたので、僧侶は驚いて、同じ問ひを再び發した。すると、ダンテは、たゞ一言「平和」と答へたさうである。

この逸話によつて私は、早くからダンテの心境を想望してゐた。

彼れは、聖フランチェスコの教團のある人々の如く、絶對の平和に安住し得られる聖人ではなかつた。辛辣な皮肉や、機智や、痛快な激語が、彼れの逸話として殘つてゐる如く、彼れは浮世の事相、周圍の人間の言行から超然としてゐられる人ではなかつた。……彼れは彼れの政治的見解から望みを囑してゐたハインリッヒの死によつてイタリー統一の平和の夢が消えてしまつたので、俗界に斷念して、ある山腹の修道院に隱退して心を安んじようとしたさうである。その修道院の光景らしいものが、天堂篇の第二十二曲に、他人から聞かされた話に託して書かれてゐる。

「伊太利の二つの岸の間、汝の郷土よりいと遠くはあらざる處に、雷の音遙かに下に聞ゆるばかり高く聳ゆる岩ありて、一つの峰を成す。この峰カートリアと呼ばれ、これが下にはたゞ禮拜のために用ゐる習ひなりし一つの庵淸めらる。……かしこにてわれひたすらに神に事へ、默想に心を足はしつゝ、橄欖の液の食物のみにて、輕く暑さ寒さを過せり」といふのは、ダンテ自身の經驗であつたかも知れないのだが、彼れ

は、その聖境で神を讃美し永遠を瞑想し、あるひは詩作に耽つてゐるだけでは堪へられないで間もなく里へ下つて、あちらこちらの貴族の家などに寄寓して「他人のパンの如何に辛きか」を味つたのであつた。あるひは冷嘲の目を向けられ、あるひは尊敬を寄せられたりする境地へ、進んで身を置いたのであつた。「おゝ惠まれし孤獨よ、おゝたゞ一つの祝福よ」といふ、僧院の閾に立つた修道僧の囁きは、六百年後の今日、なほ私の耳底に響いて、思はず首を垂れさせられるのであるが、ダンテはその修道院の神聖なる孤獨と祝福とに心身を埋沒してはゐられなかつた。

さういふダンテなればこそ、九歳の幼時に見染めたベアトリチェを、五十を過ぎた老境に達してまでも思ひ詰めて、「久遠の女性」に仕上げたのであつた。世に戀物語多しと雖も、この大詩人の不變の戀ほど世に名高いものはない。……ベアトリチェに關するダンテ學者の解釋や批評のうるささよ。戀愛の神祕境を私が窺ひ得ないためであるか知らないが、彼等がわれ劣らじと持出す勿體ぶつた見解に、私はをりをり噴飯するのである。……そして、簡潔鋭利にさまぐ\な人間を描いたダンテも、肝心なベアトリチェだけはよく書けてゐないと、私は思つてゐる。私は彼女よりも地上樂園のマチルダの方に懷かしみを有つてゐる。このマチルダを點景人物とした地上樂園の描寫は、詩の極致のやうな感じがされるのであるが、肝心の天上界は、時世の相違してゐるためでもあらうが、私には甚しく興味索然として感ぜられる。

J、A、サイモンズも云つてゐる如く、淨罪界の終りに近いところの、ヴィルジリオとベアトリチェとのパセチックな對立ほど、讀者の心を傷ましめるところはない。地獄煉獄の苦艱の忠實な案内者であつた彼れも、天堂の女王である彼女の前では、曉の光によつて影の薄らぐ月しろの如くなるのである。……ダンテに別れて、永へに救はれないリンボの世界へ落ちて行く彼れヴィルジリオの悄然たる孤影を眺めて、サイモンズは一掬の涙を灑いだのである。サイモンズはまた「新生」では、最も若い天使のやうに美しい少女であつたベアトリチェが、ダンテに對して、氣取つた說教師か乾凋びた自動人形のやうに行動するのを難じてゐる。

人間はヴィルジリオによつて表象されてゐるやうな理智によつては救はれないで、ベアトリチェによつて表象されてゐるやうな愛によつて救はれることが、誰れでも云つてゐる如く「神曲」一篇の眼目なのであらうが、此處に現はれてゐる天堂の光景は、我々には甚しく無味乾燥である。それは時代の相違上止むを得ないとして、ベアトリチェの愛の光が私などには痛切に感ぜられないのはどういふ譯であらうか。……愛を得たり救ひを得たりした人生至上の恍惚境は、文字をもつて傳ふるに困難なのではあるまいか。艱苦哀傷の事相は、詩に唱へ文字に現はして他に傳へ得られても、自足した境地は文字では現はせないのかも知れない。

近年「ヒステリーの研究」をはじめ、さまぐ\な精神分析の新研究を發表し、舊套を脫した所說によつて世を驚かしたフロイドの性慾觀に據つて批判すると、「神曲」の天堂も、畢竟ベアトリチェに對するダンテの壓迫された性慾の變形と見られるのである。シェークスピアは萬人を描き得てもディヴァインな人間だけは描き得なかつたとか、ダンテの肖像にあつてゲーテの肖像に缺けてゐるものはディヴァインな相だとか、ダンテと云へば“divine”高貴、神聖の形容を附するのが、古來の常例になつてゐるので、フロイド流の解釋は、大いにその神聖を

害する譯であるが、しかし、「久遠の女性」といふものは、男子が婦人に對して充されない思ひをしてゐる結果として現はれる迷妄ではあるまいか。……ダンテは實生活に於てはゼンマといふ女を妻としてゐたのであつたが、ボッカチオの傳ふる所によると、ゼンマは猜疑深くつて、ダンテは妻の前では溜息一つ自由に出來なかつたくらゐで、結婚後は良友との交際をも斷つやうになつたさうである。晩年のトルストイの妻、ストリンドベリーの妻、盲詩人ミルトンの妻の事など思出される。この傳説の眞否は疑はれるにしても、現實の妻に飽き足りない思ひを、空想裡のベアトリチェによつて充たす事は、ダンテならぬ今日の男子にても、常に經驗することではあるまいか。そして、ダンテが流竄の日夜の淋しさをベアトリチェの追想によつて慰められたことは推察される。日常の喜憂を分つた實在の妻や情婦を理想化して天上に奉ることは困難であるが、少年期の空想の女をエンジェルとすることはさう困難ではあるまい。その代りさういふ空想の女には生氣が缺けてゐる。

私は「神曲」に親しんでゐる。しかし、六百餘年前の伊太利の小都會で短い生涯を送つた一少女子に久遠の救ひを求めるためではない。

昔高山樗牛は、中世紀の神學に對して、人間がいかに馬鹿なことに頭を使つたかといふことを現はしてゐるに過ぎないといふ意味の評語を放つた。今日は誰れしもさう思ふだらう。私なども神學には何の興味も有つてゐない。しかし中世紀の人々の心境を羨望してゐる。憧憬さへもしてゐる。そこには現代文明人のとても味ひ得られない靜寂な恍惚境が出現してゐたのに違ひない。「靈魂は地上に於ける巡禮」であつた。「この世は一夜の假りの宿で故郷は彼方にあつた」すべてを棄てて修道院へ行け。そこにて「橄欖の液の食物のみにて、輕く暑さ寒さを過したり」

表面的歴史の記述によると、中世紀は所謂暗黒時代なるもので、僧侶や帝王の橫暴な專制政治の下に、一般人民は悲慘な生活をしてゐたことになつてゐるのであるが、しかし、その暗黒專制の世は、徳川專制治下の陰鬱な泰平の世とは違つてゐたやうに思はれる。壓迫の下に徒らに蠢動してゐた賤民ではなくつて、蜉蝣の生涯のうちに、美しい夢を見てゐたやうに思はれる。煩瑣な哲學も、その夢を夢ませる藥として役立つてゐたのだから、彼等には無用でなかつたのだ。……「どうせ一夜の假りの宿ではないか」地球が圓からうとも平からうとも、自轉してゐようとゐまいと、そんなことはどうでもいいではないか。……彼等は不安な思ひをしておどおどしてゐないで、地上の巡禮の終るを待つてゐた。……私は思ふ、人間はさうなり切ればそれでいゝのではあるまいか。

歐洲でも大戰後は、中世紀渇仰者が殖えたさうである。從つてダンテ研究がます／＼盛んになつたさうである。私も、馴染深いダンテを、新に讀み直さうと思つてゐる。

跋

私は長篇らしいものは稀れにしか書いてゐない。「深淵」は、私の作中では最も長いものと云つてもいゝのだが、作者自身でも好感を持ち得ないのでこの集には收めなかつた。

私は可成り努力する方だが、根氣に乏しいためか、長いものに取りかゝると中途でいやになつて、筆力の鈍るのを常とする。

この集中に收めた多くの短篇（あるひは中篇）は、比較的世評のよかつたものである。作者自身はどれを好むかといふと、作家臭のない淡々たる作品を好むのだ。

「玉突屋」は、初期の好小品と云つていゝ。「地獄」と「徒勞」とには、ある時期の作者の心境が現はれてゐると思ふ。「微笑」「泥人形」などは、どうして評判がよかつたかと疑はれる。

私は隨筆とも小說とも論文ともつかぬやうな、十枚內外の短い雜文を何百篇となく書いてゐる筈だが、つまりは、かういふ片々たる雜文のうちに、私の作品としてのいゝものがあるのではないかと思はれる。

私は同じやうな小說を書きつゞけるのに飽いて、大地震後、しきりに戲曲を書いたが、この方面でも、同じ事の繰返しになりさうである。

人物評論には、近來、自分も可成り興味を感じて筆が執れた。

藝術的評價は別として、自分の書いたものには、いかなる種類の作品にも、自分の影が映つてゐるにちがひない。個々の作品をよく見る人に對しては、作家は自己を自己以上にも自己以下にも現はし得ないのである。

正宗白鳥

私は小說に於てチエホフを尊重してゐる如く、脚本に於ても、イプセンのよりもストリンドベルヒのよりも、この人のを愛誦してゐる。しかしそれをお手本にする氣はさらにないのである。先頃ダンセニーの戲曲集を讀んで、非常に面白く感じたのであつたが、しかしこのくらゐなものなら、日本人にでも書けさうに思はれた。彼れの戲曲ははじめ讀んだ時ほどには二度目には面白くないのである。チエホフの如く、讀むたびに新な面白味の出て來るものとは違つてゐる。小說でもアンドレーフのやうな作風のものは、讀んで飽き易く、書いても書き易く、チエホフやトルストイの作のやうなものは、いつ讀んでも感歎させられ、書かうとしても眞似られないのである。私は今日までチエホフの小說のやうなものは、つひに一篇も書き得なかつた。脚本に於てもさうだらうと思はれる。それで、私は、自分の心に映る快不快な空影空想を、筆の動くにまかせて、脚本の形を借りて書きなぐるつもりである。

（『文藝評論』の「脚本について」より）

年譜

明治十二年

三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に、正宗浦二の長男として生る。本名忠夫。

幼少の頃、癇強し。

明治十六年

村内の梶島尋常小學校に入る。「絲、犬、猫」の編入讀本によつてはじめて文字を學ぶ。同讀本には「神は天地主宰にして人は萬物の靈長なり」といふ六ケ敷い文章が編入されてゐて、それを諳誦させられた。

明治二十一年

隣村片上村の小學校高等科へ入學。成績よきも、圖畫、算術、體操を厭ふこと甚し。

明治二十五年

春、卒業す。それより近隣の私塾「閑谷黌」に入學す。池田光政時代よりの藩校なり。漢籍を主とせり。二年未滿にて退學。

在學中、近松物、『水滸傳』などを讀み、最も民友社の出版物に親む。

明治二十七年

身體衰弱、胃殊に惡し。近村香登村の基督教講義所に行きその教を聽く。岡山市に寄宿して病院に通ひ、傍ら、米國宣教師の經營せる薇陽學院にて英語を學ぶ。在學約半歲。この學校の校長は安部磯雄氏なりし。

明治二十八年

故郷に蟄居して文學書類を亂讀す。

明治二十九年

二月下旬上京。牛込横寺町に下宿した。早稻田大學の前身たる東京專門學校英語專修科に入學。

夏、大患に罹り臥蓐二ケ月餘。

明治三十年

植村正久氏によつて洗禮を授けられ、市ケ谷の日本基督教會の會員となつた。内村鑑三氏の著書や講演によつて感化せられしこと尠からず。

明治三十一年

東京專門學校に史學科新設せられ、入學。

明治三十二年

史學科廢止のために文學科へ轉じた。

明治三十四年

島村抱月氏の指導の下に、數名の同級生とともに「讀賣新聞月曜附錄」へ批評文を寄稿した。最初の批評の題目は鏡花氏の『註文帳』であつた。

文學部卒業。學校附屬の出版部に奉職し、文學科講義錄を編輯す。

この年、基督教を棄つ。

明治三十五年

出版部辭職。

明治三十八年
六月、讀賣新聞社に入社。美術、文藝、教育に關した記事を擔當した。

明治三十七年
劇評をはじむ。『寂寞』と題する小説を「新小說」紙上に載す。處女作と云ふべし。この原稿料一枚五十錢。全額二十餘圓の半ばを割いて蒲團を新調した。

明治三十九年
文壇の風潮大いに變化せんとす。「讀賣新聞」の文藝欄は新時代を代表してゐた。「早稻田文學」へ『二階の窓』と題する小品を寄せ、「新小說」に『舊友』を寄す。稍長きものなり。漱石の『草枕』と同時に掲載された。

明治四十年
『塵埃』を「趣味」へ寄す。世評大いによし。この短篇によつて新進作家として囑目せられた。

明治四十一年
『何處へ』、『玉突屋』、『五月幟』、『世間並』、『二家族』などを相次いで發表して大いに認められる。
この年九月、長い間の下宿生活から轉じて、老婢を雇ひ一家を構へた。

明治四十三年
六月、讀賣新聞社退社。在職七年間、胃弱と不眠症に苦められた。
『徒勞』、『微光』を出す。後者は非常な評判を得た。

明治四十四年
四月、甲府市清水德兵衛次女つね子と結婚す。
年末より長篇『毒』を「國民新聞」に掲ぐ。
この年、『泥人形』など短篇十數の作あり。

明治四十五年（大正元年）
「朝日新聞」へ『生靈』を寄せた。脚本『白壁』などの作あり。

大正三年
脚本『秘密』、短篇小說『初旅』外十數篇。

大正四年
百日間、胃腸病院に通ふ。
『入江のほとり』外十數篇の作あり。

大正五年
『牛部屋の臭ひ』『死者生者』等評判よきものを出す。「朝日新聞」に長篇『波の上』を掲ぐ。

大正六年
肛門病院に入院。

大正七年
近年次第に執筆難を感じ、且つ人生に對する倦怠を覺ゆること甚し。

大正八年
十月十五日、當時借家住ひしてゐた麻布我善坊町を離れ、夫妻相携へて伊香保に赴き、中仙道を經て京阪に遊び、十一月中旬、歸鄕した。出來ることなら文學を棄て、都會生活を止めようと思ふ。

大正九年
鄕里の生活にも堪へられなくなり、五月出

立、伊香保と輕井澤にて四五ヶ月を過す。
『毒婦のやうな女』『尾花の蔭』など執筆。
十一月、大磯へ轉居。

大正十年

三月、大磯を離れ、六月、再び大磯に來る。東京にいゝ借家が見つからなかつた爲である。
「人さま〴〵」「冷淚」など執筆。

大正十一年

『稚妻』を「婦人世界」に掲ぐ。

大正十二年

「生まざりしならば」など短篇十數篇。
大地震には家は半ば壞されたが、危く生命を免れた。

大正十三年

二月、戲曲『影法師』を「中央公論」に掲げしより、數年間専ら戲曲を草す。『人生の幸福』『光秀と紹巴』最も世評高し。
この年、痔疾治療のため東京の病院へ四十日間入院した。

大正十四年

長篇『人を殺したが……』を「週刊朝日」に掲げはじむ。

大正十五年（昭和元年）

引きつゞき文學や演劇やその他の事について評論の筆を揮ふ。評判よろし。
小說にも戲曲にも評論にも長大なるものは殆んどなし、長篇はいづれも出來榮え惡し。

昭和三年

十一月二十三日、横濱出發、夫妻相伴うて世界漫遊の途につく。

自分にも兩親があり弟妹があるのだと思ふと、不思議に感ぜられることがある。しかし、私自身が老境に入つた今日、なほ兩親が生きてゐて多數の弟妹も生きてゐることを幸福に感ずる時もある。私のやうな他人に親しみがない人間が、一人の肉親もなくつて世に生きてゐたら、世の中は淋しくつてたまらないだらう。この頃は、私は心にも歲を取つて氣が弱くなつたためか、兩親の長生や、弟妹の無事息災を願ふやうな氣持になつた。

（『白鳥隨筆集』の「兩親の印象」より）

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行

現代日本文學全集　第二十一篇

著者　正宗白鳥

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二二番
電話芝(4)一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

株式會社秀英舍印刷

改造社